WWⅡウィッチーズ

ロンメルマムート

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次世界大戦、人類史上最も破滅的かつ破壊的な戦争。推定６５００万もの人命が失われ、その後世界が二つに分かれる要因となった戦争。

この戦争では多くの若い人命が失われた。その中にはパイロットや航空機搭乗員も多く含まれていた。これはそんな彼ら、時に祖国とは違う国の旗の元で、時に祖国の敵と翼を並べて戦い死んでいったはずの英雄たちの話である。

注：第二次世界大戦がテーマなんでタブーに切り込みまくります。具体的に同性愛への偏見、清廉潔白な国防軍伝説という虚像、ホロコースト、ポグロム、連合軍の戦争犯罪、イデオロギーの対立、ジェノサイド、コミッサール指令ｅｔｃ

あとガチの残虐な描写あり。

目次

設定：ストライクウィッチーズ編 ―― 1
設定：ブレイブウィッチーズ編 ―― 6
設定：ストライクウィッチーズ２編 ―― 17
設定：劇場版・ＯＶＡ編 ―― 22
設定：ノーブルウィッチーズ編 ―― 28
第１章：大国に挟まれて
プロローグ：第二次世界大戦 ―― 46
第１話：ドッグファイト ―― 50
第２話：出会い ―― 54
第３話：違う世界 ―― 61
第４話：新たな仲間 ―― 68
第５話：新人さんとユニットと武器と ―― 74
第６話：航空兵よ飛翔せよ ―― 80
第７話：実戦 ―― 90
第８話：布石 ―― 95
第９話：チート野郎参上 ―― 104
第１０話：新入り ―― 108
第１１話：新人達の初陣 ―― 114
第１２話：亡国の軍人 ―― 129
第１３話：亡国の悲哀 ―― 139
第１４話：或る軍人の話 ―― 152
第１５話：内陸国は辛いよ ―― 166
第１６話：３４０ｍ／ｓ・内陸国出身者にとって最も遠いところ・

男のロマン ―― 174
第１７話：兎、口を滑らす又はいつのまにかリア充の仲間入りしていた犬 ―― 185
第１８話：ナイトストーカー ―― 190
第１９話：明るい夜間飛行 ―― 198
第２０話：お調子者の戦争 ―― 206
第２１話：軍人とはメリハリをつける生き物 ―― 217
第２２話：事案発生（冤罪です） ―― 226
第２３話：軍歌と規則 ―― 236
第２４話：２１時５７分、ベオグラード放送 ―― 245
第２５話：Ｃａｒｐｅ ｄｉｅｍ ―― 255
第２６話：大騒乱への序章／嵐の前の静けさ ―― 261
第２７話：悪魔の来襲 ―― 271
第２８話：理想は平和だが現実は残酷だ ―― 281
第２９話：終わりの始まり ―― 288
第３０話：戦争への道 ―― 298
第３１話：足の生えた大戦の亡霊たち ―― 310
第３２話：時として分かれたものはまたすぐに一つになることもある ―― 325
第３３話：反逆者の末路 ―― 342
第３４話：始まりの終わり ―― 358
第２章：ステイツ・ソビエト・リパブリック・インペリアル・キングダム
プロローグ１：戦闘機乗りは二度死ぬ ―― 369
プロローグ２：戦後より愛をこめて ―― 377

第１話：戦闘機乗りは魔法使いの夢を見るか？ ――― 383
第２話：寒い国に来たパイロット ――― 391
第３話：ペテルブルク作戦軍司令部を迎えて（別題：プラウダ）
397
第４話：勉強の時間（別題：オラーシャ製ウォッカに連合軍がエントリー） ――― 409
第５話：戦闘機パイロットの準備体操の時間 ――― 419
第６話：魁!!？ウィッチ塾 ――― 430
第７話：偽装入隊した扶桑の平均以下のウィッチが部隊の負担となることを防ぎ、部隊の有益なる存在たらしめるための穏当なる提案
443
第８話：ウィッチーズ・ワールド（別題：雁淵の武勇伝） ― 453
第９話：スノーウォーズ：エピソードⅠ：ファントム・メナス
464
第１０話：スノーウォーズ：エピソードⅡ：ネウロイの攻撃
473
第１１話：レオニード・イリイチ／スノーウォーズストーリー
483
第１２話：スノーウォーズ：エピソードⅢ：ウィッチの復讐
493
第１３話：ペテルブルクの片隅に ――― 502
第１４話：踊る大捜索線／ペテルブルクを封鎖せよ！ ――― 514
第１５話：ペテルブルク／ネウロイと戦闘隊長に隠された秘密
524
第１６話：太平洋の嵐 ――― 534

第１７話：サトゥルヌス・キャロル ―― 551
第１８話：世界のクリスマス ―― 560
第１９話：サトゥルヌスの奇跡 ―― 571
第２０話：戦場のメリークリスマス ―― 582
第２１話：ペテルブルクの休日 ―― 590
第２２話：コンボイ　バレンツ海の戦い ―― 600
第２３話：思い出はディナーの後で ―― 610
第２４話：１９４５年北極圏の旅 ―― 622
第２５話：ネウロイの高跳びウィッチの餌食 ―― 630
第２６話：Ｍｒジャベールと壊し屋なウィッチ達 ―― 642
第２７話：ペトロザボーツク上空 ―― 651
第２８話：ウィッチ　あるいは（無謀がもたらす予期せぬ奇跡） 660
第２９話：ヘルシンキ会議 ―― 670
第３０話：連合軍北方軍総司令官を迎えて（別題：フレイア） 681
第３１話：姉の異常な愛情　または如何にして心配しすぎて妹に冷たく当たるのか ―― 693
第３２話：偽装入隊した扶桑の平均以下のウィッチが姉及び部隊の負担となることを防ぎ、部隊の有益なる存在たらしめるための穏当なる提案 ―― 702
第３３話：ペテルブルクのいちばん長い日 ―― 711
第３４話：血、破壊、死、戦争、そしてネウロイ（別題：ブイレブ・ズーチッィウ） ―― 719
第３５話：グリゴーリはどっちだ?! ―― 728

第３６話：遠くから異なるコアを見分ける方法 ―― 738
第３７話：空飛ぶブレイブウィッチーズ ―― 749
第３章：血と土
プロローグ：知られざる英雄 ―― 758
第１話：あの男の亡霊たち ―― 767
第２話：アドリア海の空 ―― 775
第３話：偉大なる５０１ ―― 786
第４話：問題だらけの始動 ―― 795
第５話：特訓 ―― 804
第６話：〝最終的解決〟と砂漠の狐（注：ショッキングなシーンあり） ―― 815
第７話：祖国に裏切られた狐の目覚め ―― 824
第８話：ジェットの騒音 ―― 835
第９話：駄っ作ユニット ―― 845
第１０話：ジェット機狂想曲 ―― 854
第１１話：陰謀と治安維持 ―― 866
第１２話：ローマへの道 ―― 875
第１３話：偶然の連鎖 ―― 884
第１４話：ローマ ―― 894
第１５話：ローマは一日にして ―― 903
第１６話：騒動の後始末／大人の宴 ―― 914
第１７話：『空より高く』 ―― 926
第１８話：世界初へのチケット ―― 938
第１９話：エンタープライズ／未知への飛行 ―― 951
第２０話：平凡な日常 ―― 962

第２１話：トラブル ―― 970
第２２話：新たな翼（強奪） ―― 979
第２３話：宝探し ―― 992
第２４話：オペレーションＣ３ ―― 1003
第２５話：アフリカの星と砂漠のキツネと天才パイロット ―― 1014
第２６話：天才パイロットとアフリカの星 ―― 1024
第２７話：天才パイロットの過去 ―― 1034
第２８話：Ｃ３発動 ―― 1047
第２９話：マルタの戦い ―― 1059
第３０話：崩壊の始まり ―― 1069
第３１話：戦神と十字路 ―― 1080
第３２話：約束されし失敗 ―― 1090
第３３話：戦神のよろめき ―― 1100
第３４話：Ａｔ ｔｈｅ ｅｎｄ ｏｆ ｔｈｅ ｈｅｒ ｗａｒ ―― 1111
第３５話：ｂｅｇｉｎ ｎｅｗ ｗａｒ ―― 1122
第４．１章：サンダーボルト ―― 1131
第１話：混迷のガリア ―― 1140
第２話：再会 ―― 1150
第３話：新兵器の時代 ―― 1159
第４話：攻勢の予兆 ―― 1159
第４．２章：タイフーン ―― 1170
第１話：デロス島沖 ―― 1170
第４．３章：Ａ Ｂｒｉｄｇｅ Ｔｏｏ Ｆａｒ ―― 1181
第１話：猟犬の墜落 ―― 1181

第２話：戦争の惨禍 ―― 1
第３話：ウィッチ嫌い ―― 11
第４話：プライベート・ユリウス ―― 21
第５話：１９４５ネーデルラント戦線 ―― 32
第６話：バトル・オブ・アルンヘム ―― 45
第５章：Ａｆｔｅｒ　ｔｈｅ　ＷＷⅡ
第１話：アルデンヌの森 ―― 61
第２話：国家への一撃 ―― 66
第３話：リソルジメント ―― 76
第４話：バトル・オブ・ヴェネチア ―― 85
第５話：激動の月 ―― 94
第６話：海兵隊員 ―― 105
第７話：英雄的行為 ―― 113
第８話：決戦への序曲 ―― 124
第９話：予兆と推定 ―― 132
第１０話：英雄と愛 ―― 133
第１１話：かの世界の戦争（残虐なシーンあり） ――
第１２話：決戦 ――
第６章：Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈｅａｒ　ｔｈｅ　ｐｅｏｐｌｅ　ｓｉｎｇ？――法と秩序――
プロローグ：翼の折れた英雄 ―― 1
第１話：序章の始まり ―― 3
第２話：熊猫とリベリアン ―― 8
第３話：かの世界と機密文章 ―― 13
第４話：フェルニゲシュ ―― 14

第５話：事実は小説より…　1
第６話：闇夜の戦い　14
第７話：夜明け　31
第８話：嵐の前の平穏　44
第９話：テロの魔の手　46
第１０話：模擬戦　47
第１１話：招かれざる客　48
第１２話：親の心子知らず　51
第１３話：演劇の訳　52
第１４話：故郷　53
第１５話：幕は上がり、役者は揃った　54
第１６話：敵とお礼参り　55
第１７話：夜と霧　56
第１８話：カーチェイス・イン・パリス　57
第１９話：シークレット・ミッション　58
第２０話：崩壊の序章　59
第２１話：汚れ仕事　60
第２２話：マルセイユ港の戦い　62
第２３話：Ｕボートを追え　63
第２４話：信頼　64
第２５話：始まりの終わり、そして…　65
第２６話：新たなる陰謀の始まり　66
第２７話：新機材　67
第２８話：ジェニファー・デ・ブランク　68

第２９話：護衛任務 ―― 17021691
第３０話：還るべき場所 ――

設定：ストライクウィッチーズ編

（設定）

名前：アレクサンデル・ノヴァク

階級：中尉

所属：英国空軍義勇第３１７スコードロン

出身：ポーランド共和国グディニャ

生年月日：１９２０年９月１７日

使用火器：ブローニングハイパワー、ｗｚ．１９２８

使用機材：スーパーマリンスピットファイアＭｋⅨｅ

←

ウルトラマリンスピットファイアＭｋⅨｅ

使い魔：コウノトリ

固有魔法：加速

パーソナルマーク：キャベツをついばむコウノトリ

（解説：キャベツ（ドイツ）をついばむコウノトリ（ポーランド））

ポーランドの港町グディニャ出身。

ポーランド降伏後に難民に紛れてルーマニアからユーゴスラビアなどを経由して英国空軍に参加。

初めは地中海戦域でハリケーン、Ｐ４０を飛ばしていたが４３年に移動になり機材をスピットファイアに替える。

ノルマンディー後は対地攻撃が主任務。

総スコア７機と戦車２両、車両１２両、被撃墜３回、出撃回数１６９回

その撃墜スコアの大半は北アフリカで稼いだもの。

４５年４月にドイツ軍陣地を攻撃中に対空砲火で撃墜され、ストパン世界に飛ばされる。

大のドイツ嫌いで撃墜したドイツ機のパイロットを撃ち殺すのは序の口。

また大のソ連嫌い。

実は敬虔なカトリック教徒。

兄をドイツのポーランド侵攻で、母と妹をタンネンベルク作戦で、父をカチンの森事件で、姉と義理の兄をワルシャワ蜂起で失っている。

ポーランド空軍の訓練生時代にバードストライクで死にかけたことがある。

誕生日は自主管理労働組合「連帯」の結成日から。

服装は一般的な英空軍の軍服にアーヴィンジャケット。

熱帯地域はイギリス空軍の熱帯地域軍服に熱帯地域用制帽。

見た目は若い頃のコリン・ファース

名前：ハインツ・ヴァレンシュタイン

階級：少佐

所属：ドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセル

出身：チェコスロバキア共和国ツナイム

生年月日：１９１６年５月５日

使用火器：ルガーＰ０８、ＭＧ１５１／２０

使用機材：メッサーシュミットＭｅ４１０Ａ１／Ｕ２

←

メッサーシャルフＭｅ４１０Ｂ２／Ｕ２

使い魔：ボヘミアン・シェパード・ドッグ

固有魔法：ハイパーセンサー（感知系魔法をすべて使える）

パーソナルマーク：赤と白のチェック柄の塔とその下でクロスさせた槍

（解説：ツナイム（現ズノイモ）のタウン・ホール付属塔とアルブレヒト・フォン・ヴァレンシュタインを表す槍）

旧チェコスロバキアのズデーテン地方ニーダードナウ大管区ツナイム出身。

それなりのベテラン。

バトルオブブリテン後半でＢｆ１１０に乗り始め、その後４３年にＭｅ４１０に機種転換。

バトルオブブリテン、バルバロッサ作戦、タイフーン作戦、クリミア攻防戦、スターリングラード攻防戦、ツィタデレ作戦に参加後独本土防空戦に参加する。
総スコア３１機、戦車１８両。被撃墜５回、出撃回数３４６回
４４年５月に米軍の空襲を迎撃中に護衛のＰ５１に撃墜され飛ばされる。
信仰はルター派のプロテスタント。
賭け事に関してはやたら強い。そのせいで何度も憲兵にお世話になってる。
コーラが好き。書類処理能力は高い。
料理の腕は宮藤レベル。ただしやる気がある時か自分のため以外には作らない。
女好きの酒好き。ただしモテない（と思ってる）
実はフルネームはハインツ・エアハルト・ヴァレンシュタインだが父親とイニシャルが被るので使ってない。
服装はドイツ空軍のトゥーフロックにクラッシュキャップに改造した制帽。
熱帯地域はドイツ空軍の夏季用白色チュニックに熱帯地域用長ズボンに白い夏季用制帽。
操縦時は海峡ヤッケの上に革製の独自で仕立てたフリーガーヤッケ。
授与された勲章
・騎士鉄十字賞
・２級・１級鉄十字賞
・ドイツ十字章
・パイロット章
・パイロット兼観測員章
・黄金空軍前線飛行賞
・１９４１年／４２年東部戦線冬季戦記章
・戦傷賞銅賞
・クリミア盾章

・空軍名誉杯
・クレタ従軍袖章
名前の由来は終戦直前に起きたプラハ蜂起の鎮圧部隊のコードネーム「ヴァレンシュタイン」の元となったアルブレヒト・フォン・ヴァレンシュタインから。
誕生日はプラハ蜂起があった日から。
見た目はスターリングラード（９３年版）に出てた頃のトーマス・クレッチマン

名前：アドルフ・ミラー
階級：少尉
所属：ドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセル
出身：オーストリア共和国ザルツブルク
生年月日：１９２０年８月１９日
使用火器：ルガーＰ０８、ＢＫ―５
使用機材：メッサーシュミットＭｅ４１０Ａ１／Ｕ２
←
メッサーシャルフＭｅ４１０Ｂ２／Ｕ４
使い魔：オーストリアン・ショートヘアード・ピンシャー
パーソナルマーク：上が黒、下が黄色、中に城が描かれたシールド（解説：黄色と黒はハプスブルク家の旗の色、城はザルツブルクのホーエンザルツブルク城）
オーストリアのザルツブルク出身。両親は音楽学校の教師で自身もバイオリンとピアノが使える。
射撃が上手く、ヴァレンシュタイン少佐とは４２年からコンビを組んでいる。
軍歴は４２年にスターリングラード、ツィタデレ作戦に参加後、独本土防空戦に参加。

出撃回数２１０回、被撃墜２回
４４年５月に米軍の空襲を迎撃中に護衛のＰ５１に撃墜される。
実はカトリック
熱烈なハプスブルク家支持者で大オーストリア主義者、ドナウ連邦構想の支持者。
オーストリアをオストマルクを呼ばれるとキレる。
子供のころにいたずらで家に忍び込んで番犬に襲われ入院したことがある。
犬は苦手。イタリア語と英語ができる。
元々警備部隊の将校だったがなりゆきで今の状況に。
コーラが好き。
実はオーストリア大公ジークムントの庶子からなると言われる名家の出身。
女性の扱いが得意で女性相手には紳士的。
誕生日は汎ヨーロッパピクニックがあった日から
服装はフリーガーブルーゼに規格帽。飛行中は海峡ヤッケ。
熱帯地域はドイツ空軍の熱帯地域用熱帯服と熱帯シャツに長ズボンにカーキの熱帯地域用規格帽。
見た目はエディ・レッドメイン

設定・ブレイブウィッチーズ編

（設定）

名前：ポール・〝ポー〟・アンティリーズ

階級：大尉

所属：アメリカ海軍空母サン・ジャシント所属第４５戦闘飛行隊（ＶＦ―４５）

出身：アメリカ合衆国テキサス州サンアントニオ

生年月日：１９１７年５月１４日

使用火器：Ｓ＆Ｗ　Ｍ２７レジスタード・マグナム、Ｍ２

使用機材：グラマンＦ６Ｆ―５ヘルキャット

←

グラマーＦ６Ｆ―５ヘルキャット

使い魔：アメリカンショートヘア

固有魔法：複製

テキサス州出身。実家は大農場主で町の名士。父親は一時は州議会議員をしたこともある。

子供の頃から銃と飛行機に触れて育ったため早撃ちが得意で戦前から農業機を飛ばし、たまにショーでアクロバット飛行を披露していた。

テキサスＡ＆Ｍ大学予備役将校訓練課程出身。大学では理論物理学を学ぶ。

そのため数学と物理学が大得意。ナショナルジオグラフィックの愛読者。

４０年に海軍に入りパイロットに。開戦時には空母レキシントン乗り組み。

珊瑚海海戦で日本機を初撃墜するが撃墜され味方潜水艦に助けられ、今度はヨークタウンに乗り込み日本機１機を撃墜するがヨークタウンが撃沈され駆逐艦に救出される。

その後ホーネットへ移動して南太平洋海戦で日本機２機を撃墜するがホーネットが撃沈されまたもや駆逐に拾われる。

その後負傷の治療を兼ねて本国へ帰還するがそこでジフテリアに感染、さらにＦ６Ｆに機種転換時に着陸した際主脚を折炎上、かろうじて脱出するが結局４４年４月まで病院送りとなった。

療養中に空母サン・ジャシント乗り組みが決定、サン・ジャシントに乗りマリアナ戦などに参加、撃墜スコアを9に。またこの間にＴＢＦ乗りのジョージと知り合い親友に。彼が父島で撃墜された時には上空から彼を捕まえようとする船に機銃掃射して援護した。

その後沖縄戦などに参加、大和撃沈の際には空から最後を目撃し、野中隊の撃墜にも関与。

４５年5月初めに間違えて空母ベロー・ウッドに誤着艦した翌日に特攻機の迎撃中にエンジントラブルを起こしそのまま墜落して飛ばされる。

総スコア１１機。

料理好きで食べるのも作るのも好き。

銃の早撃ちが得意。拳銃は戦前に買った品。

仲間内での愛称はポー。

とてつもない酒飲みで酒に強い。大学時代に大学近くの居酒屋の酒を一人で飲みつくした。なのに船の上では禁酒の海軍に入った理由は謎。

タバコはラッキーストライクを吸うが気晴らし程度。

猫好き。

実家では農場労働者に日系人や中国系、ヒスパニック、黒人が多かったので人種差別思想は全くない。それどころか非常に嫌っている。

服装は操縦時は米海軍の夏季用カーキドレスの上からパイロットの装備。

通常時は米海軍の冬季用グリーン作業服の上からトップガンでトム・クルーズが着てたジャケット。

冬季はダッフルコートとシーツを改造した偽装。

帽子は支給品ではないカウボーイハット。冬季はロシア帽。

名前の由来はスターウォーズの旧三部作のエースウェッジ・アン

ティリーズと続三部作のポー・ダメロン。
見た目はペドロ・パスカル。

名前：パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール
階級：大尉
所属：自由フランス空軍第ＩＩ戦闘航空群第５飛行隊ラファイエット
出身：フランス共和国パリ
生年月日：１９１７年６月７日
使用火器：Ｓ＆Ｗ　Ｍ１０（．３８スペシャルビクトリーモデル）、Ｍ２
使用機材：リパブリックＰ４７Ｄサンダーボルト
←
リパブリカンＰ４７Ｄサンダーボルト
使い魔：カワラバト
固有魔法：誤認
自由フランス所属のパイロット。
愛称はパット。
父親は戦前はフランス破毀院の裁判官、祖父は裁判長を務めたこともある。
兄も弁護士資格を持ち本人も司法試験に合格した経歴を持つ。
パリ第１大学法学部を卒業後ハーバード大学ロースクールに留学、そこで飛行機の操縦免許を取得。
ハーバート大学ロースクール在学中に第二次世界大戦が始まりフランスに帰国しようとするが家族から危険といわれたため卒業までアメリカにいたが卒業直後の４０年５月にフランスが降伏したため自由フランス軍に参加。
自由フランス参加後はスピットファイア、その後Ｐ４７に転換する。
自由フランス軍ではマルタの戦いの末期とトーチ作戦、さらにイタ

リア戦からドラグーン作戦に参加後、Ｐ４７に転換し対地攻撃で戦果を挙げる。その後は終戦までバルジの戦いやノルトヴィント作戦、ポーデンプラッテ作戦、ヴァーシティー作戦、プランダー作戦などに参加、終戦直前の４５年５月８日の午前中にチェコスロバキア上空でソ連機にＦｗ１９０と間違われ撃墜される。

総スコア７機、戦車８台、車両３４台、列車２本、航空機２１機地上撃破、火砲２１門。

司法試験に現役一発合格するほどなので司法系の知識に豊富。

正義感が非常に強くあらゆる犯罪は法の名の下において生きて裁かれるべきという持論がある。

一方で努力をしない天才より努力家の方を好み尊敬している。

なお腕っ節はかなりの模様。

また弁術に長けている。

射撃の腕は悪くない。

ヘビースモーカー。キャメルをダース単位で買ってる。そのため普段からジッポーとマッチ箱二つを携帯している。

料理はできないが美食家。食事に一家言ある。酒はシャンパンが好み。

特に好きなのがアマダイのシャンパン煮。

名前の由来はレ・ミゼラブルのジャベール警部。

誕生日は小説内でジャベール警部が自殺した日から。

服装はフランス空軍の軍服に米陸軍航空隊のＢ―３ジャケットに制帽。

冬季はその上からアメリカ陸軍のマッキーノコートとその上からシーツを改造した偽装。

見た目のイメージはジャン・ギャバン。

名前：アルバート・〝バーティ〟・クロンカイト

階級：王立空軍中尉

所属：イギリス空軍第３３スコードロン

出身：アイルランド共和国コーク
生年月日：１９１５年６月１４日
使用火器：Ｓ＆Ｗ　Ｍ１０（．３８―２００弾仕様）、イスパノ・スイザＨＳ４０４
使用機材：ホーカーテンペストＭｋＶ
←
ホークテンペストＭｋＶ
使い魔：カササギ
固有魔法：火力強化
パーソナルマーク：背中合わせにシージャントエレクト（座って上半身を上げた獅子）とワイバーンが描かれたシールド。
クロンカイト男爵家の長男。
父親は元々アイルランド貴族だったが１９１６年のイースター蜂起に当時英国陸軍中尉として参加した際に衝撃を受けＩＲＡに協力、軍の情報をＩＲＡに流し始めそのことがバレると軍を脱走してＩＲＡに参加したアイルランド独立運動の英雄。
また所領がコーク近郊だったので父親を説得して協力した。
アイルランド独立後はアイルランド陸軍に参加した人物。母親はスコットランドの名門貴族家の出。
そのためアイルランド独立後はアイルランドと英国の二重国籍だったが２９年に父親が離婚、英国の実家に戻った母に付いていったためアイルランド国籍を放棄している。
戦前は大学でヨーロッパ史について学び教員資格を持つ。
開戦後はイギリス空軍に志願、訓練後ハリケーンを飛ばす。
ダンケルク撤退で初陣を飾り、バトルオブブリテンなどで戦果を伸ばすが撃墜され負傷、回復後はしばらくは教官をしていたが４２年からはホーカータイフーンに機種転換してノルマンディー戦などに参加。
その後４５年の初めにテンペストに機種転換。
終戦後、鹵獲機を輸送するため飛行中にハルツ山系で墜落、飛ばされる。

総スコア１２機、戦車５両、車両３５台、航空機１３機地上撃破。
人種差別主義者ではない。やたら名言を引用するクセがある。
貴族の嗜みとしてヴァイオリンとピアノとアコーディオンができる。
趣味は釣り。今までで最大の獲物は海釣りで釣った１．３ｍのヨシキリザメ。
オカルト大好き。幽霊とか見てみたい。
食事に関しては典型的イギリス人。食事に拘るのは無駄とかジェントルマンらしくないとかどうとか。
貴族出身なので礼儀作法は板についてる。
タバコは葉巻が好み。普段からキューバ産のロブストサイズのモンテクリストを吸ってる。なので普段からシガーケースとシガーカッターを持ってる。
スコッチウイスキーが好き。
パワーこそすべて。意外と不器用。紅茶キチ。
犬好き。猫も好き。
反共主義者。共産主義者には人権は必要ない、人類のゴミらしい。
服装は通常の英国空軍の軍服の上からドイツ軍のフリーガーヤッケに略帽
冬季はその上から私費で買ったトレンチコートとその上からシーツを改造した偽装。
スコットランドに婚約者がいて銀髪で背が低い。ロスマンに似てる。
名前の由来はウォルター・クロンカイトとジョージ６世から。
見た目のイメージは映画ダンケルク（２０１７年版）のファリア。

名前：ヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル
階級：予備役中尉
所属：ドイツ空軍第３０１戦闘航空団

出身：ポーランド共和国ポズナン（ポーゼン）
生年月日：１９１２年１１月９日
使用火器：アストラＭ６００、Ｓ１８／１０００
使用機材：フォッケウルフＴａ１５２
←
フラックウルフＦｗ１９０Ｄ―９
使い魔：トラケナー
固有魔法：筋力強化
パーソナルマーク：ゴールデンイエローの跳ねる馬
（解説：ゴールデンイエローはドイツ軍での騎兵科の兵科色）

ドイツ化したポーランド系貴族家で生まれ、生後すぐにユンカーのマントイフェル伯爵家に養子に出された貴族士官。

実家がポーゼン周辺に所領を持っていたためそこで生まれたが育ちは養子に出されたマントイフェル家の所領のある東プロイセンのドムノヴォ。そのため話すドイツ語は若干東プロシア訛りがある。

親から厳しい教育を受けて英語、ロシア語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポーランド語、日本語、ラテン語が出来る。

戦前から飛行機を飛ばしていて再軍備前の３４年に騎兵将校として陸軍に入営、翌年の再軍備でパイロット資格を持っていたため３６年末に空軍に移籍、コンドル軍団に参加してガーランドの下で戦うが戦闘で負傷、左目を失い予備役となる。

開戦からしばらくして招集、ドイツ空軍第５２戦闘航空団が編成された際に予備役少尉として配属、バトルオブブリテンで撃墜され負傷する。

独ソ戦開戦時にはＪＧ５４に移動、そこでソ連機相手に合計３８機を撃墜するが重傷を負い本国へ帰還、機体を新型機Ｆｗ１９０に機種転換しフランスへ移動しスコアを伸ばす。

その後４３年までＪＧ２６にいたがＪＧ３０１が編成された際に移動、アメリカ軍相手に戦うが４４年１月に撃墜され重傷を負う。

回復後の４４年１２月に機種を新型のＴａ１５２に転換するがＪＧ３０１の首席参謀になったため実戦機会がなかったりそもそも燃

料不足などで出撃できないなどの理由で全く戦果を挙げず。
終戦後、クロンカイトと乗機を交換してテンペストに乗って移動中にハルツ山系に墜落、飛ばされる。
総スコア４９機内スペイン内戦３機。騎士鉄十字章受勲者。
騎兵将校だったため騎馬やサーベルの扱いに慣れてるが作法がどうしても騎兵将校時代のクセが抜けない。
オカルト嫌い。幽霊とか聞くだけで嫌。
運動能力は高く、近代５種・馬術・フェンシング・射撃ではオリンピックドイツ代表になり損ねた事がある腕前。
そのためフェンシング、射撃、馬術、水泳、ランニングが得意。
射撃の腕はトップクラス。見越し射撃の名手。
また貴族の嗜みとしてピアノとヴァイオリンとトランペットが使える。
料理は全く作れない。作れないのを自覚しているので作ろうともしない。
タバコはアツテカが好み。トルコ葉の独特のにおいが好きらしい。
拳銃はこの時スペイン軍から供与されたものを使ってる。降伏した際にクロンカイトにあげた。
貴族のくせしてビール党。
貴族出身なので礼儀作法は完璧。基本は紳士的。
愛犬家。猫は苦手。
反共主義者。
戦闘での負傷で左目を失明しているため普段は眼帯をつけてる。
服装は操縦時は海峡ヤッケにアーヴィンジャケット。
地上ではヴァッフェンフロックにシープスキンの毛皮帽。
冬季はその上からドイツ空軍のキルティング防寒服（ドラゴ〇のゲルリッヒ砲のキットについてる降下猟兵や第1空軍野戦師団の兵士のフィギュアが着てるやつ）かシープスキンコートとシーツを改造した偽装。
東プロイセンに妻がいたがソ連軍から逃げる際に乗った貨物線ゴヤが撃沈され行方不明。

その妻はクルピンスキーにそっくり。

〈受勲勲章〉

・軍事メダル（スペイン）
・従軍メダル（１９３６～１９３９）（スペイン）
・剣付スペイン十字章金章
・１級／２級鉄十字章
・ドイツ十字章金章
・騎士鉄十字章
・戦傷章銀章
・１９４１年／１９４２年東部戦線冬季戦記章
・パイロット章
・パイロット兼観測員章
・黄金空軍前線飛行章
・航空機乗組員章
・空軍名誉鑑章
・４等国防軍勤続章
・国家スポ―ツ章金章

名前の由来は第１２軍司令官ヴァルター・ヴェンク大将とワルシャワ蜂起鎮圧時の実質的指揮官ハインツ・ライネファルトＳＳ中将と第３装甲軍司令官ハッソ・フォン・マントイフェル大将とエーリヒ・フォン・デム・バッハ＝ツェレウスキーＳＳ大将。

誕生日はドイツ史における特異日から。

名前：レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ
階級：上級大尉
所属：赤色空軍
出身：ソビエトロシア共和国レニングラード州レニングラード
生年月日：１９１７年１１月７日
使用火器：トカレフＴＴ３３、ＳｈＶＡｋ
使用機材：ヤコブレフＹａｋ―９Ｍ

←

Ｙａｋ―９Ｍ

使い魔：ゴシキヒワ

固有魔法：治癒魔法

パーソナルマーク：ソ連空軍のマークのプロペラが杖に巻きついた蛇になったものとその下に描かれた金色の星

（解説：蛇の巻きついた杖はローマ神話のアスクレピオスの杖、金色の星はソ連邦英雄）

レニングラード出身の共産党員。ソ連邦英雄。１０月革命の日に生まれた。

レニングラード大学医学部卒で内科医の資格を持つ。愛称はリョーニャ。

また大学在学前からパイロットを志し、操縦訓練を受けていた。

開戦時にはレニングラード近郊の空軍部隊所属の軍医でレニングラード包囲時には包囲陣内で医者として勤務した。

包囲の一部が解かれた４２年の春にパイロット不足から戦闘機パイロットになり第２６戦闘機連隊（のちの第２６親衛戦闘機連隊）に配属。

最初に搭乗したのは北極海ルートで送られたホーカーハリケーンでそれで４３年までに１０機撃墜。

４３年から４４年まではやたら余っていたスピットファイアに搭乗。さらにスコアを伸ばして１８機に。

４５年からは別の部隊に移動しＹａｋ９Ｍに機種転換。東プロイセン侵攻に参加後上官とトラブルを起こしたため満州侵攻に参加、戦争終結の日に僚機と空中衝突し飛ばされる。

総スコア２１機。

操縦技量は非常に高く、多くのソ連パイロットから嫌われたスピットファイアを苦も無く操縦できるぐらいには高い。また内科医で仲間からは非常時の応急手当などで頼られていた。

医者らしく字は同業者じゃないと読めないぐらいヘタクソ。というかまずロシア語の筆記体が同じ人種じゃないと読めない。

食事についてはこだわりがないというより「食えるだけマシ」という意識が強い。

体に悪いと言うことでタバコはしないが酒は飲む。朝からクワズを常飲し夜にはウォッカを嗜む。

病院で子供に見せると喜ぶので手品が得意。実は歌うのが好き。

共産党員なので共産主義者で無神論者。

実は子供の頃から熊を飼うという（トチ狂った）夢がある。

服装はソ連軍の４３年型ルパシカに将校用制帽。冬季はチュラグレイカとシーツを改造した偽装とウシャンカ帽。

見た目は若いころのプーチン。

〈受勲勲章〉

・ソ連邦英雄
・レーニン勲章
・赤旗勲章
・赤星勲章
・アレクサンドル・ネフスキー勲章
・３級クトゥーゾフ勲章
・３級ボグダン・フメリニツキー勲章
・２級祖国戦争勲章
・レニングラード防衛メダル
・１９４１―１９４５年大祖国戦争における対独戦勝メダル
・ケーニヒスベルク占領メダル
・勇敢メダル
・戦功メダル

名前の由来はレオニード・ブレジネフとミハイル・クトゥーゾフ。

誕生日は１０月革命のあった日から。

設定・ストライクウィッチーズ２編

名前：ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト
階級：中尉→大尉
所属：ドイツ空軍第１夜間戦闘航空団
出身：ドイツ国ヴュルテンベルク＝ホーエンツォレルン大管区タウバービショフスハイム
生年月日：１９１５年１０月１６日
使用火器：ワルサーＰ３８、ＭＧ１５１／２０
使用機材：ユンカースＪｕ８８Ｒ―１
←
ユングフラウＪｕ８８Ｒ―１
使い魔：ヨーロッパミミズク
固有魔法：固有魔法コピー
パーソナルマーク：爆弾を持ち急降下する猫
（解説：猫はフェリックス・ザ・キャット。名前繋がりのネタ）
爆撃機の機関士あがりのベテランのドイツ空軍所属のパイロット。
ヴェルテンヴェルク北部のタウバービショフスハイム出身。５人兄妹の長男坊。
親が地元の名士でグライダークラブを開いていたため子供の頃から参加していた。
戦前はルフトハンザで航空機関士をしていて開戦後ドイツ空軍に志願、爆撃機パイロットとして訓練を受ける。
大型機の操縦に慣れていたことから第１教導航空団（ＬＧ１）に所属しクレタ戦やアフリカ戦に参加するが突如４２年末になぜかフランスの第４０爆撃航空団（ＫＧ４０）第Ⅴ飛行隊に配属される。
ＫＧ４０では主にビスケー湾上空の防空任務に参加、４３年１０月にⅤ．／ＫＧ４０がⅠ．／ＺＧ１になった際に第２夜間戦闘航空団（ＮＪＧ２）に配属されそこで４４年２月に重傷を負い４４年６月まで入院した。

退院後は第１夜間戦闘航空団（ＮＪＧ１）に配属されるが夜間迎撃中にモスキートに追われ被弾、不時着した際に一人だけ頭部を強打、飛ばされる。

総スコア１８機（内ランカスター８機、ハリファックス７機、モスキート１機、ボーフォート１機、Ｂ２４リベレーター１機）、船舶３隻１万トン（共同）、出撃回数７２１回（合計）

実は母方の親族が反ナチ運動に関わっていてそのためいろんな部隊をたらい回しにされた。

非常に危険な戦闘をいくつも生き抜いて来た猛者。

対地対艦対空戦闘の全てに習熟している。

料理含めた家事などは大得意。子供の面倒見るのが好き。

普段からサバイバル時用にショカコーラを一缶持ち歩いてる。

酒はとんでもない下戸。タバコも吸えない。

戦争でのトラウマで夜尿症と不眠症を抱えてる。どちらかというと夜型。

５人兄妹だが下は全部妹。

若干のシスコン。天然ジゴロ。

アフリカ時代にロンメルから騎士鉄十字賞を貰い尊敬している。

愛称はニコ。

音痴。

趣味は骨董品集め。

なぜか泳げる。

（受勲勲章）

・１級／２級鉄十字章
・空軍名誉賞
・ドイツ黄金十字章
・騎士鉄十字賞
・柏葉付騎士鉄十字賞
・ペナント付き黄金空軍前戦飛行賞（７００ミッション）
・パイロット兼観測員章
・クレタタイトル

・アフリカタイトル
・戦傷章銀賞
・剣・柏葉付騎士鉄十字賞
・レジオンドヌール勲章シュバリエ
・殊勲十字章
・メリット勲章

服装は普段はフリーガーブルーゼに略帽、熱帯地域は空軍用熱帯服と熱帯地域用長ズボンに熱帯用略帽。

名前のモデルはニコルッシ・レックＳＳ大尉とフェリックス・シュタイナーＳＳ大将とアレクサンダー・レーア大将とアレクサンダー・フォン・ハルトマン大将とニコラウス・フォン・ファルケンホルスト大将から。

誕生日はニュルンベルク裁判で死刑判決を受けたナチス幹部１０名の死刑が執行された日から。

見た目はスコット・イーストウッド。

名前：ヤン・オーラ・ハンマルフェルド
階級：中尉
所属：フィンランド空軍第２４戦隊
出身：ドイツ国ベルリン
生年月日：１９１８年６月１７日
使用火器：ラハティＬ３５、ＭＧ４２
使用機材：メッサーシュミットＢｆ１０９Ｇ―２
←
メッサーシャルフＢｆ１０９Ｋ―４
使い魔：ケワタガモ
固有魔法：計算
パーソナルマーク：立ち上がったベルリン熊
スウェーデン系フィンランド人でドイツ人とのハーフのフィンランド空軍のエース。

別名ミラクルヤン、魔術師ヤン

父親は第1次大戦時にフィンランド義勇兵からなるプロイセン第27猟兵大隊の兵士で元々はドイツにいたビジネスマン。

一次大戦中に現地のドイツ人と結婚してできたが父親はフィンランド内戦で戦死した。

そのためフィンランド語のほかに英語とドイツ語に堪能。

生まれこそベルリンだがフィンランド独立後は父親の故郷のヴィープリ（現ヴィボルグ）で祖父母に育てられた。

高校卒業後フィンランド空軍に入隊、パイロット訓練生として冬戦争を迎える。

冬戦争では初期はグロスターグラディエーターを、途中からＧ５０を操縦していた。

冬戦争後はＩ１５、ＭＳ４０６、ホーカーハリケーンと乗り継ぎ冬戦争開戦時にはブルーステルを飛ばしていた。

継続戦争開戦後はブルーステルだったが数か月後にはドイツから供与されたホーク７５Ａ（元フランス機）を飛ばし、その後フィンランドがＢｆ１０９を購入する際の訓練パイロットの第一陣にドイツ語などが堪能なことから選ばれドイツで訓練を受け、第一陣として帰国した。

帰国後第２４戦隊に配備、継続戦争終結後まで第２４戦隊で従軍した。

戦争中は奇跡的な生還を何度も繰り返した腕を持ち、敵地の後方４０キロに真冬に墜落したのにそこからソ連軍のオートバイを強奪して味方の前線まで逃げたり(なのでオートバイ使える)、敵機３０機に包囲されたのに無傷で逃げた挙句半分をマニューバキル(スコア扱いにはならないしそもそも知ったのが数か月後に味方部隊が見つけた)、Ｂｆ１０９の訓練中にスイス領空に迷い込みスイス空軍機にインターセプトされるが何故かスイス空軍機と誤認され見逃された、敵機と空中衝突するが何故か無事、滑走路をオーバーランしても無傷(機体も無傷)、ポーカーで２１０連勝、競馬で5連勝、カタヤイネンがついてないのはこいつのせい（酒の席のネタ)、ケンカで負けなし

（相手は9割屈強な陸軍兵士）
その後のラップランド戦争中の４５年2月に芬ソ国境付近で着氷による失速で墜落。
総スコア１４機（内2機冬戦争、１2機継続戦争）
子供のころから銃器に慣れ射撃は得意。
操縦に関しては多くの機種に乗り継いできた経験からすぐに他の機材に慣れるなど素質はある。
暑いのはダメ。
サウナは男女で入るもの。
サルミアッキも平気で食う。
酒ももちろん飲む（普通に酒豪レベル）
楽器は弾けないが歌はうまい。猟兵行進曲が好き。
毎年寒中水泳していたので普通に泳げる。
味覚はアレ（世界で2番目に不味い料理であるフィンランド料理に慣れてるからね）
タバコも吸うがそんなに吸わない。
歴史好きで歴史本を読むのが好き。
服装はフィンランド空軍のＭ３６軍服に略帽。
名前はフィンランド人唯一の黄金ドイツ十字章受勲者オーラ・オリンＳＳ中尉と国連事務総長ダグ・ハマーショルドから。
誕生日はフィンランド総督ニコライ・ボブリコフが暗殺された日から。
見た目はエストニアの俳優カスパー・ヴェルボルグ。

設定：劇場版・ＯＶＡ編

名前：ユニオ・ヴァレリオ・レート
階級：大尉（ＲＳＩ）、少尉（エジプト空軍）
所属：イタリア社会共和国第Ｉ戦闘飛行隊「アッソ・ディ・バストーニ」、エジプト空軍第２飛行隊
出身：イタリア王国エミリア・ロマーニャ州モデナ県カステルフランコ・エミーリア
生年月日：１９１５年９月１１日
使用火器：ウェブリーリボルバー、
使用機材：マッキＭＣ２０５Ｖベルトロ最終生産型
使い魔：ボロニーズ
固有魔法：治癒・自己治癒魔法
パーソナルマーク：棍棒（アッソ・ディ・バストーニ（棍棒のエース）のマーク）

元イタリア王国空軍、イタリア社会共和国空軍（ＡＮＲ）のエースパイロット、４９年以降はエジプト王国空軍第２飛行隊でＭＣ２０５ベルトロを飛ばしていた。
実家はオルシーニ家とマキャベリ家の血を引き、代々教皇に仕えてきた歴史ある貴族の末裔だが傍流で単なるエミリア・ロマーニャ州の地主。

父親は元アルディーティ（突撃兵）でフィウメ進軍やローマ進軍にも参加、ＲＳＩにも参加した古参ファシストで他に母親、ＳＡＦに所属した妹がいた。
代々貴族の家ということもあり１９３６年に空軍士官学校に入学、ＲＥＸコースに入り同期のアドリアーノ・ヴィスコンティと親友になり３９年に卒業後パレルモの戦闘航空団「アクィラ」第６独立飛行隊に所属しＭＣ２００サエッタを飛ばしていた時に開戦を迎えた。
その後マルタ島攻撃などに参加しニコと親交を持った後４１年末にＭＣ２０２フォルゴーレに機種転換、４２年の春からリビアでの戦闘に参加、スコアを重ねてエースとなった。

その後第７６飛行隊に移り親友のヴィスコンティの部下としてチュニジア戦に参加するが４３年に入ってすぐに空戦で重傷を負い本国に帰還、退院した時にはチュニジア戦が終結、シチリア戦が始まっていた。

退院後はＭＣ２０５ベルトロに機種転換、ヴィスコンティが指揮していたサルデーニャ島の第３１０戦闘飛行隊に配属が決まるが移動前にイタリアが休戦、混乱する中ヴィスコンティがＲＳＩについたと聞きＲＳＩに参加、第Ｉ戦闘航空群「アッソ・ディ・バストーニ」に配属、その後４４年の７月に第１０１戦闘航空団に補充として移動したが移動直後に第１０１戦闘航空団が解隊、そのまま同戦闘航空団の残存兵を中心とした第１突撃大隊フォルリに所属し４５年１月までイタリア戦線で地上戦に従事した。

年が明けてすぐに損害補充のため大尉に昇進後フォルリ大隊からアッソ・ディ・バストーニに移動、終戦までまたＭＣ２０５ベルトロを飛ばす。

降伏時にはミラノのマルペンサ空港にいたがそこで目の前でヴィスコンティと副官が射殺されるのを目撃、更に包囲された共産パルチザンにリンチにされ多くの同僚を目の前で失った。

その後辛くも生き残り英軍に引き渡される前に同僚と共に逃亡、故郷を目指したが途中で数回に渡り襲撃を受け最終的に故郷にたどり着いた時には一人きりだった。

カステルフランコ・エミーリアに帰り着いたがそこで家族がリンチにされた挙句に殺害されたのを知り、更にまた共産パルチザンに捕まり拷問と暴行の末瀕死の状態で放置されるがそこを通りがかった英軍部隊に救出され治療を受けた後捕虜収容所に移送された。

そこで警備のエジプト出身の英空軍将校と仲良くなり解放後彼の伝手を頼り未だＲＳＩ将兵への逆風の強い北イタリアからエジプトに移住した。

そこで平穏に暮らしていたが４８年に第一次中東戦争が勃発、その際にエジプト空軍がマッキＭＣ２０５ベルトロを輸入、ＭＣ２０５での戦闘経験が豊富な彼にお声がかかり教官、その後実戦に参加するが

イスラエル空軍のＰ―５１に撃墜され飛ばされる。
最終スコア１１機（スーパーマリンスピットファイア３機、Ｐ―４０　３機、ホーカーハリケーン２機、Ｂ―１７　１機、Ｐ―３８　１機、Ａ―２０　１機）
共産パルチザンの暴行による後遺症で左腕が肩より上にあげられず、両腕共に後ろにも回せない。
妹がいたが妹も共産パルチザンに殺害された。
エジプトでは一時レストランのコックをやっていたため料理が得意。
なんだかんだでいつも自分ばかり生き残ってしまうことに罪悪感を感じている。
ヴィスコンティとは大親友。
イタリア人だが北部出身なので真面目。
趣味が読書で多くの本を読破した。
子供の頃に家庭教師から特殊な記憶法を教えられた結果天才的な記憶力を持つ。
イタリア語の他に片言のドイツ語と流暢なフランス語、ラテン語、英語、アラビア語ができる。
フォルリ大隊で地上戦に従事していたこともあり陸戦の素養がある。
ペリーヌに一目惚れしてしまったが今まで親しくした人全員が死んでいるので悩んでる。
見た目は若い頃（オーストリア＝ハンガリー帝国軍時代）のアルトゥール・フレプス
名前のモデルはユニオ・ヴァレリオ・ボルゲーゼと第二代ＯＶＲＡ長官グイード・レート。
誕生日はダンヌンツィオがフィウメ進軍を開始した日から。

名前：フランシス・ジェイコブ・〝フランク〟・サレンバーガー
階級：大尉

所属：アメリカ合衆国海兵隊第２１４戦闘飛行隊ブラックシープ（ＶＦＭ―２１４）
出身：アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ
生年月日：１９２０年１０月７日
使用火器：コルトＭ１９１１
使用機材：チャンスボートＦ４Ｕ―４Ｂコルセア〝トレインデストロイヤーⅡ〟
パーソナルマーク：爆発する列車
アメリカ軍の精鋭合衆国海兵隊の海兵隊員。
父親はノルウェー系アメリカ人、母親はアイルランド系、祖母の一人はイタリア系で祖父の一人はドイツ系。
家としてはスルーパーとしてアメリカに移住した。
５歳年上の兄ボブと弟ジョンがおり兄は海兵隊中尉で沖縄戦で日本軍の夜襲を受けた際、他の味方が次々と負傷、戦死する中負傷兵の撤退援護のため３人の部下と共に陣地に残り陣地に据え付けられたＭ１９１９を弾が尽きるまで撃つと続いて陣地を飛び出し傍にあった破壊された別の陣地に移りそこからさらに銃撃を浴びせ、更には敵が打ち捨てた擲弾筒を見つけるとそれを使い日本軍を攻撃し続け味方の阻止砲撃が始まるまで日本軍を撃退し続けた。
その翌日、奪われた味方陣地を奪還する戦闘の際に日本軍のスナイパーに撃たれ戦死するもその功績から名誉勲章を受勲された。
弟は第１０１空挺師団「スクリーミング・イーグルス」第５０６歩兵連隊第２大隊Ｅ中隊に所属しノルマンディー上陸作戦やマーケット・ガーデン作戦、バストーニュの戦い、ヴァーシティー作戦などに参加した。
海兵隊には４２年にイリノイ大学シカゴ校政治学を学び卒業後に海兵隊士官候補生学校に入隊、士官としての教育とパイロットとしての訓練を受けた後、Ｆ４Ｕコルセアを操縦し第２１２戦闘飛行隊に所属しソロモン、フィリピン、沖縄と転戦し終戦まで従軍し列車８本と敵機８機（零戦１機、白菊１機、九九式艦爆３機、九九式襲撃１機、九九式双軽爆２機　全て特攻機）を撃墜、地上撃破２５機を記録、対地

攻撃のエースとして名をはせた。
　特に列車攻撃の腕に秀で得意としたのは沿岸部を走る列車にプロペラが海面を叩きつける程低空を飛びながら接近し肉薄しロケット弾を撃ち込んだ後、急上昇して機銃掃射をする戦術で大戦果を挙げ「トレインデストロイヤー」の異名を持ち、その綽名を気に入り自機のニックネームにもしている。
　またある時には交差しようとした列車２本を纏めて撃破、戦車を積載した軍用列車を単独で襲撃し撃破、ある飛行場を襲撃した際には燃料補給中の重爆撃機に機銃掃射し燃料補給車ごと爆破、更にその火が飛行場の他の機に燃え移り翌日また襲撃しようとしたら全部灰になっていた。
　終戦後も海兵隊に残り４８年まで日本に駐留した後、４８年からは大尉に昇進後教官として５０年まで本国で勤務、その間にコルセアだけでなく多発機や練習機も頻繁に飛ばした。
　その後朝鮮戦争開戦後本人の強い希望で前線に移動、第２１４戦闘飛行隊ブラックシープに所属、ここでは主に対地攻撃に精を出し多くの北朝鮮の補給列車や戦車、車列を破壊した。
　またたまに北朝鮮機を撃墜(Ｌａ―１１　２機、Ｌａ―９　３機)し朝鮮戦争でもエースになった。
　１９５２年の冬に対地攻撃中にバードストライクを起こして墜落、飛ばされる。
　海兵隊員という事もあり射撃に秀でている。
　大の野球好きで熱心なシカゴ・カブスファン。
　野球の試合を見るためだけに基地を抜け出し懲罰を受けた事がある。
　教官時代には「近くの球場でカブスの試合があるフランクが仕事の日は警備が２倍に増える」、「フランクが抜け出そうとすると警備がフランクしか探さない」、「フランクが警備を振り切って球場に行くか捕まって仕事を押し付けられるかで賭けができる」、「基地の司令も賭けをやってる」、「もし逃げられたらその日の警備責任者はフランクに酒を奢る、捕まえたらフランクに酒を奢られる」、「捕まえた奴はフラン

クの代わりに試合に行ける」等々の話が基地中で囁かれた程。
セントルイス・カージナルスとの試合がある日は問答無用で休んでるかラジオに食いついて野球中継を聞いているので仕事してない。
カブスが勝った翌日は仕事の効率が2倍になるが負けると半分になる。
アメフトではシカゴ・ベアーズ、ホッケーはシカゴ・ブラックホークスのファン。
実は大学には2年飛び級で入ったが野球の試合を見すぎた結果単位が足りなくなり一度留年してる。
名前のモデルはチェズレイ・〝サリー〟・サレンバーガー（ＵＳエアウェイズ１５４９便の機長）

設定：ノーブルウィッチーズ編

名前：大野貫二郎
階級：少尉
出身：日本国東京府
所属：日本陸軍飛行第２４４戦隊
生年月日：１９２２年２月２６日
使用火器：南部十四年式拳銃、ホ１０３、日本刀
使用機材：川崎五式戦闘機
←
川滝三式戦闘脚Ⅱ型
使い魔：狸
固有魔法：超聴力
学徒出陣により陸軍特別操縦見習士官となった元東京音楽大学生徒で華族の次男。
大野家は北条氏康の四男北条氏規から始まる狭山藩の重臣で後北条家に早雲の代から仕える重臣であり仁明平氏と後北条氏の血を引いた名門武家であった。
明治維新後は男爵の爵位を貰い受け大野男爵家を創設、建築資材の販売問屋を開始すると西洋建築ブームに乗り大儲け、海外製建築資材も取り扱い江田島の海軍兵学校建築時の資材の一部の輸入も手掛けたり財閥の各種施設建設にも参加するなどして大儲けした。
父親は元陸軍軍人で士官学校卒（１８期）で阿南惟幾や山下奉文とは同期で友人、特に阿南惟幾とは家族ぐるみの付き合いがあった。
だが出世せず戸山学校の体育教官などを歴任した後少佐で退役、退役後は実家の商売を継ぎ元陸軍軍人のコネを生かして戦争が始まると軍の施設への資材を売り戦中は南方各地で建築資材の取引を行い大儲けした。
また父親が相当な音楽好きであったため子供を音楽家にしたがったので東京音大に入学、その後学徒動員により特別操縦見習士官一期生で戦闘機パイロットとなった後三式戦を駆り飛行第５６戦隊、その

後飛行第２４４戦隊に移動、本土防空戦に従事しＢ―２９を含む６機を撃墜、Ｂ―２９　２機を撃破した。
２４４戦隊で三式戦闘機から五式に機種転換、終戦直前の８月初頭に米海軍のＦ６Ｆの奇襲を受け戦死、飛ばされる。
音大生だったため絶対音感とピアノの演奏技術を持つ。
父親の影響から戸山流居合術をマスターしているほか剣道の柳生流の免許皆伝者。（使う機会無し）
趣味は音楽と登山、登山に関しては相当な手慣れで駒ケ岳の登頂経験あり。
操縦テクニックに関しては促成訓練であるためそれほど上手くはないが何故か高高度では向かうところ敵なし。
射撃はヘタクソで敵機のボルトが見えるぐらい近づかないと当たらないので基本的戦闘スタイルは肉薄して攻撃。
実家は非常に裕福であったためお坊ちゃん気質で楽天的、あらゆる面で一流の感覚を持つ。
猫好き。
納豆と漬物が苦手。
音大では作曲課程を学んでいたため作曲の才がある。
兄は海軍主計学校に入り終戦時には海軍主計少尉で佐世保鎮守府勤務だった。
煙草は駄目だが酒好き、特にウィスキー派。
料理は陸軍時代に多少は習った。
服装は昭五式軍服。
名前は大野竹二海軍少将。
見た目は若い頃の三船敏郎。

名前：エーリヒ・ルドルフ・テオドール・フォン・ホスバッハ
階級：大隊指導者（少佐相当）、中尉（空軍）
出身：イギリス領タンガーニカ　ダルエスサラーム
所属：武装親衛隊第２２ＳＳ騎兵師団第２２ＳＳ工兵大隊臨時大隊

長

生年月日：１９１４年7月２８日

使用火器：Ｓｔｇ４４、Ｐ３８、パンツァーファウスト

使用機材：メッサーシャルフＢｆ１０９Ｋ―４

使い魔：ジャーマンシェパード

固有魔法：爆破（物を爆発物に変える）

パーソナルマーク：ヤグルマギク（第２２ＳＳ騎兵師団の師団マーク）

元空軍パイロットでスペイン内戦で復帰不能レベルの重傷を負い、当時部隊を拡張中だった武装ＳＳに移籍したポーランド戦以来の大ベテラン工兵参謀士官。

実家はヴォンブジェジノの大貴族で叔父はドイツ帝国の将軍、父親はドイツ領東アフリカの官吏という典型的ユンカーだったが第一次世界大戦で父親はレットウ＝フォルベルク大佐のドイツ軍に入り戦死、一家もイギリス軍の捕虜となり第一次大戦後には無一文で祖国に帰され、その上実家の領地も全て略奪され母方の家を頼らざるを得なかった。

幼少期はイギリス軍の捕虜となり過酷な環境で育ち、ドイツに帰ってからも貧乏で大ドイツ主義者の叔父に感化、母方の家がナチス党のスポンサーでそこからナチス党との接点を持ち青年組織に入り、そこでパイロットやグライダー訓練を受け再軍備後に空軍に入隊、花形の戦闘機パイロットになりスペインに送られるがそこで敵のＩ―１６に撃墜され重傷を負い空軍から退役、当時拡大していた武装ＳＳに移動しＳＳＶＴ連隊ドイッチュラントに所属、その後ダス・ライヒに改編された際に工兵士官になりフランス、ユーゴ、ギリシャ、ロシアを戦った後４２年の夏に編成中だったＳＳ騎兵師団の工兵参謀士官として配属された。

ＳＳ騎兵師団時代はルジェフやブリャンスクでの防衛線などに参加するが４３年には師団の訓練大隊で教育指導中にワルシャワ・ゲットー蜂起に巻き込まれ鎮圧に参加、ゲットーを焦土にしユダヤ人の虐殺を行った。

鎮圧後に師団に戻ると昇進、師団司令部工兵参謀となり東部戦線に従軍、ドニエプル川で防衛線を行うがその最中に工兵大隊長が負傷したため代理大隊長に、師団が休養と再編の為クロアチアに移動後正式に工兵大隊長に短期間なった後４月に新たに編成された第２２ＳＳ騎兵師団の師団司令部所属となり移動、９月にはルーマニアでの戦闘に従軍するがデブレツェンの戦闘でソ連軍に包囲されるが戦闘団残余と収容した敗残兵を指揮し何とか友軍戦線にまで到達、騎士鉄十字賞を受勲した。

その後すぐにパンツァーファウスト作戦に参加、師団の編成が完了した直後にブダペスト包囲戦に参加し包囲され数か月間戦い続けた。

その中で脱走兵や犯罪を犯した兵士の処刑を行うなど苛烈な手段で規律を保ち続けるが工兵大隊長が戦死したため臨時で第２２ＳＳ工兵大隊長となった。

ブダペスト包囲戦では大隊長自らパンツァーファウストを使い敵戦車を撃破するなど活躍するが追い詰められ、２月１３日の最後の脱出作戦に大隊残余を率いて参加するがソ連軍の攻撃で散り散りになり一人ハンガリーの平原を彷徨うがそこでソ連軍に撃墜されたヤーノシュと出会い二人で逃避行を続けるも疲れ切ってある家でソ連軍に襲撃され戦死、飛ばされる。

スペインでの負傷で視力が低下し両目が０．０５程度しかない。

爆破大好き。爆発大好き。ただ割と勘でやるタイプ。

過激な性格で民間人を殺害することに関しては何の躊躇いもない。

ナチス党員としては２０歳になった３４年に入党したので親衛隊名誉リングを持っている。

料理はできない。

大の反共主義者でイギリス嫌い。

大ドイツ主義者で国家社会主義者。

ヘビースモーカー。

参謀将校の経験があるため情報管理や作戦立案に関する素養もある。

陸軍部隊の指揮も可能。

叔父は親衛隊員で最終的にヴァルテラント帝国大管区警察指導者代理となったが戦後逮捕されポーランド人の虐殺・ユダヤ人追放・ホロコーストへの関与から死刑に処された。

（受勲勲章）

・騎士鉄十字賞
・１級／２級鉄十字賞
・１９４１東部戦線従軍記章
・剣付きスペイン十字賞銀賞
・一般突撃賞
・戦車撃破章銀賞（３つ）
・戦車撃破章金賞（１つ）
・白兵戦章銀賞
・戦傷章銀賞
・パイロット章
・パイロット兼観測員章
・パルチザン掃討章銅章
・親衛隊名誉リング

服装はＳＳのピーパターンのヴィンターヤッケにＳＳの制帽、その後はＳＳのＭ３６に乗馬ズボン、ＳＳの制帽、戦闘時に秋季用迷彩ヤッケ。

名前のモデルはフリードリヒ・ホスバッハ。
見た目は遠すぎた橋のマクシミリアン・シェル
誕生日は第一次世界大戦の開戦日から。

名前：カーロイ・ラヨシュ・ヤーノシュ
階級：大尉
出身：ハンガリー王国ホードメゼーヴァーシャールヘイ
所属：ハンガリー空軍第１０２戦闘航空団
生年月日：１９１８年１１月１０日
使用火器：ＦＥＧ２９Ｍ、ダヌビア４３Ｍ短機関銃、ゲバウエル２

6／31・M
使用機材：フォッケウルフＦｗ１９０Ｆ―８
←
フラックウルフＦｗ１９０Ｆ―９
使い魔：クーバース
ハンガリーの名門貴族家コハーリ家の血を引きトランシルヴァニア公ケメーニ・ヤーノシュの末裔と言われるハンガリーの貴族家カーロイ家の跡取り。
父親は画商で絵画の知識も父親譲り。
父親の仕事の関係上パリとブダペストを行き来しながら育った。
父親は大戦中、ドイツが大量に絵画をフランスから巻き上げるのに憤り対抗してフランスで芸術品を買い漁りそれをフランスの知り合いの古城に隠していた。
母親はスロバキア人だったが１５歳の時に結核で死去した。
その後ハンガリー軍士官学校に入り空軍士官となった後初めはＣＲ３２（元オーストリア空軍機）、その後空軍省勤務となるがパンツァーファウスト作戦でホルティが失脚、その際空軍内部でよく知られたホルティ派であったため左遷、供与されたＦｗ１９０Ｆの部隊の指揮官として本土での戦闘に従事しエースとなったが４５年２月のブダペストからの脱出支援の対地攻撃任務中にソ連軍に撃墜され不時着、逃亡中にホスバッハと出会い逃げていた最中に戦死して飛ばされる。
持っている４３Ｍは戦死したハンガリー軍兵士の死体から回収したもの。
実はお調子者で楽観主義的、軽口が多いタイプ。
実は絵が趣味。人物画から風景画まで何でも描く。
水彩画派。
絵画に関する深い知識と洞察を持ち現代芸術から古代中国に至る幅広い知識は専門家も舌を巻くほど。
本人も絵画収集家の気質がある。
最終スコア７機、戦車２台、トラック・車両３台、火砲１門。

一人っ子。
空軍内部でもよく知られたホルティ派の反共主義者。
矢十字党に関してはいい印象を持ってないがソ連嫌いなので従っているだけ。
ドイツ嫌いでもある。
英語の他にフランス語もできる。
ピアノが得意。
犬好き。
料理はできないが料理に関する知識もある。
煙草はパイプ煙草派。普段使っているパイプは象牙製のストレートタイプ。点火にはマッチを使う。
服装はハンガリー空軍のＭ１９３０将校用制服にルフトヴァッフェジャケットに勤務帽。
名前のモデルはカーロイ・ヤーノシュとイェネイ・ミハーイ・ラヨシュ。
見た目はマッツ・ミケルセン
誕生日はハンガリー動乱が終わった日から。

名前：カポディストリア侯爵、ヴィツラフランカ・パドヴァーナ伯爵、ノヴァ・ゴリツィア男爵ロベルト・アンミトレ・ヴィットーリオ・デッラ・カルヴィ
階級：大尉
出身：イタリア王国ヴェネチア
所属：イタリア共同交戦空軍
生年月日：１９１２年８月２６日
使用火器：Ｓ＆Ｗ　Ｍ１０　２インチモデル、ブレダＭ３７
使用機材：ベラＰ―３９Ｑエアラコブラ
使い魔：ヤギ
固有魔法：未来予知
ヴェネチア出身の超名門貴族で大資産家。文字通りの億万長者。

先祖を辿ればエンリコ・ダンドロや教皇アレクサンデル6世、パウルス3世、フェリックス5世、アンドレア・ドーリア、ヴィスコンティ家、ルースポリ家、ディ・レヴェル家、デ・ラ・ペンネ家、スアルド家、メディチ家、スフォルツァ家、ハプスブルク家、ホーエンツォレルン家、ホーエンシュタウフェン家、ボルジア家、ファルネーゼ家、ブルボン家、ルクセンブルク家、リウドルフィング家など名だたる歴史に名を残した貴族家の血を引く超名門貴族。

予備役空軍士官上がりで一応の本業は銀行家。

貴族家としては長くヴェネチア共和国に仕えた家で先祖はエンリコ・ダンドロの第4回十字軍でコンスタンチノープルを略奪し家には東ローマ帝国の像のクアトリガの置物が代々家宝とされている。

貴族としての称号として代々カポディストリア（スロベニアのコペル）侯爵、ヴィッラフランカ・パドヴァーナ伯爵、ノヴァ・ゴリツィア（スロベニアのノヴァ・ゴリツァ）男爵の称号を有している。

ヴェネチアで銀行を経営していた父親の下に生まれ、大学卒業後空軍に入隊、パイロット資格を得て4年間勤務し第二次エチオピア戦争やスペイン内戦に従軍後38年に除隊し実家の銀行に入り、経営に参加、その後第二次世界大戦が始まると予備役招集で空軍に戻った。

大戦中は第22戦闘航空群に属しマッキMC200サエッタを操縦して東部戦線に派遣、42年の本国帰還までの間に7機を撃墜した。

帰還後はMc202フォルゴーレに機種転換、本土防空戦を戦い最終的に3機の重爆撃機を撃墜しイタリア降伏を迎える。

イタリア降伏後は王党派であったため武装解除される前に脱走、パルチザンに合流しローマを中心にドイツ軍を攻撃、ラゼッラ街事件にも関与した。

またドイツ語に堪能な事からドイツ軍に潜入し機密資料の奪取や将校の暗殺なども行った。

だがローマ解放の数日前にドイツ軍に捕らえられ数か月後に処刑され飛ばされる。

カトリック教徒。

偽旗作戦と破壊工作に長けている。
また銀行家という事もあり経済に通じ株式取引でも大儲けしている。
一方で大規模な脱税や贈賄を行う、マフィアと取引、マネーロンダリング、インサイダー取引、相場操縦に関与するなどかなり腐ってる。
こちらの世界に来ても金儲けに精を出し自家用にフィアットＢＲ２０チコーニャ爆撃機を改造した輸送機を一機所有している。
貴族の教養として英語の他にドイツ語とフランス語に堪能。
フィンツィとは旧知の間柄。
ジュゼッペ・ヴォルピやアルベルト・デ・ステファニなどのファシスト政権幹部とのつながりもあった。
投資家としてフィアット、カントなどの株式を有している。
見た目はマッツ・ミゲルセン
名前のモデルはアンブロシアーノ銀行頭取だったロベルト・カルヴィから。
誕生日はヨハネ・パウロ１世の即位日から。

名前：カート・ロバート・フーヴァー（旧姓ウィトゲンシュタイン）
階級：少佐
出身：コロラド州ラ・プラタ群デュランゴ
所属：アメリカ海軍
生年月日：１９１３年９月６日（拾われた日）
使用火器：コルトＭ１９１１
使用機材：グラマンＦ８Ｆ―１
←
ＧＭ　ＦＭ―２
使い魔：グリズリー
固有魔法：立体空間把握
パーソナルマーク：立ち上がるパンダ
元フライングタイガースのベテランパイロット。

スコアは僅か5機（内フライングタイガース3機、海軍2機）だが操縦経験と軍隊経験は非常に長い。

孤児院の生まれで両親はおらず生後すぐの時に教会の前で放置されていたところを教会の牧師に拾われた。

元々の名前も牧師から授けれた。

6歳まで教会の孤児院で育った。

そこで素晴らしい才能があることが分かり牧師から神学校に行くことを勧められ牧師を志したが6歳の時にデュランゴ出身の海軍将校に引き取られ父親の仕事の都合で15歳まで各地を転々とした。

その間に父親のような海軍将校を志したが15歳の時に父親の乗った飛行機が墜落し事故死、経済的理由から高校には通えず2年ほど工場で働きながら猛勉強しコロラド州立大学ＲＯＴＣに入学、卒業後晴れて海軍将校となった苦労人。

海軍に入った後はパイロットとして飛行艇を飛ばし大尉まで出世した。

その後フライングタイガースの募集が開始されるとボーナス目当てに志願し日本軍と交戦、解隊後は海軍に戻り教官を務めた後護衛空母ガンビア・ベイでＦＭ―2を操縦、対潜哨戒や対地攻撃、あのサマール沖海戦を戦いサマール沖で撃沈された後僚艦に救助され本国に帰還、そこで少佐に出世後Ｆ８Ｆベアキャットのテストに参加、実戦配備が始まると西海岸でＦ８Ｆの教官を務めた。

だが４５年7月に訓練飛行中に問題が発生、墜落して飛ばされる。

極めて信心深いキリスト教徒でルーテル教会信者。

信心深く聖書にも詳しいが同時に柔軟で寛容。同性愛も否定しない珍しいタイプ。

人種差別も嫌っている。

教会の中で生まれ育ったため私欲が薄く酒も煙草もしない、浮いた話一つもないが誰に対しても優しく礼儀正しいため女性からは相当モテるが本人は無視。

フライングタイガースに入ったのは生まれ育った孤児院へ寄付するため。

稼ぎの殆どを育った孤児院に寄付している。
努力家で勉強家で仕事一筋のタイプ。
割と人望があるタイプ。
軍人にならなかったら牧師になっていた。
聖書に関しては幅広い知識を持つ。
パーソナルマークはベアキャットの中国語の熊猫がパンダと同じという洒落から。
名前のモデルはＪ・Ｅ・フーヴァー
見た目はマイケル・ペイリン。
誕生日はマッキンリー大統領暗殺事件のあった日から。

名前：ジェフリー・パトリック・フィッツジェラルド・ジュニア
階級：大尉（米海兵隊）、中尉（英空軍）
出身：オレゴン州セーラム
所属：イギリス空軍第６１３スコードロン
生年月日：１９１４年１１月２３日
使用火器：コルトＭ１９１１
使用機材：デ・ハビランド　モスキート　ＦＢ　ＭｋＶＩ
←
ド・ハビランド　モスキート　ＦＢ　ＭｋＶＩ
使い魔：アメリカンショートヘア
固有魔法：限定的魔導針（魔導針だが通常の魔導針よりも探知範囲に制限があり探知レーダーではなく射撃管制レーダー程度の能力しかない。だがその代わりに強力な電波発信能力とＥＳＭ、ＥＣＭ、ＥＣＣＭ、シギント能力を持ち電子作戦を実行可能）
アイルランド系アメリカ人の４世で一応アイルランド貴族。
元々彼の曽祖父がある貴族家の次男で１８４０年代後半にアメリカに移民、元々貴族だったので高度な知識を持っていたためあっという間にアイルランド系の纏め役として活躍し５０年代に当時開拓地が増えていたオレゴン州にアイルランド系を率いて移住、そこでアイ

ルランド系の移民の作物を纏めて加工、販売することで財を成し、更にホップや大麦の栽培が近隣で行われていたことからそれを使いアイリッシュ・ビールの製造販売会社「オレゴン・アイリッシュ・ビール」（ＯＩＢ）を起業、セーラムに工場を構えオレゴン中で販売した。

それにより一気にオレゴン1のビール業者、アイリッシュビールでは西海岸一のビールメーカーとなり気がつけばセーラム随一の有力者でオレゴン州のアイルランド系の中心人物となった。

その後禁酒法論争が始まると祖父がアイルランド系の議員やオレゴン選出議員に圧力をかけ、さらにアイルランド系ギャングと結託し禁酒法団体を襲撃させるなどあの手この手で潰そうとするが失敗、禁酒法が成立すると表向きＯＩＢは廃業、祖父も引退したが実際には父親に代替わりし製造設備をセーラムからセーラムとポートランドを結ぶ道路沿いにありホップの産地でもあったセーラム郊外のホバートに移してそこでアイルランド系ギャングと共に密造アイリッシュビールを作り大儲け、この間にはそれ以前の１０倍の利益を出すなど荒稼ぎした。

その後禁酒法が終わると即合法企業に転換しホバートの製造設備をそのまま再利用してＯＩＢを再興、数少ないアイリッシュビール製造業者として西海岸一のビールメーカーの一つとなった。

アイルランド貴族になったのは彼の祖父の代に当時の当主（祖父から見た場合叔父）と本家の3兄弟（祖父から見た場合いとこ）が相次いで戦死・病死したため最も近い男系の親族だった祖父が爵位を継承する事態になったから。

英空軍軍人だが元々は米海兵隊軍人で１７歳でアナポリスに入り卒業（アナポリス１９３５年組。同期はユージーン・Ｂ・フラツキー少将など）、卒業後は海兵隊に入ったが退屈で第二次世界大戦が始まり、さらにフライングタイガースの応募が公示されると即日海兵隊をやめ志願、訓練を受けた後フライングタイガースに所属して日本軍と戦うがその直後にアメリカが参戦、４２年に解隊されると海軍に戻らずそのままイギリスに向かい英空軍に志願し義勇パイロットになった。

義勇パイロットとして戦闘爆撃機部隊の第６１３スコードロンに配属、オランダでのゲシュタポ施設破壊など重要目標のピンポイントの破壊だけでなく時には迎撃に上がってきたドイツ機を撃墜するなどしてエースになったが４４年６月２２日にパリ郊外サン＝ドニを空襲した際にドイツ軍の対空砲火を受け不時着、捕虜となりオーストリアの捕虜収容所に移送、そこでアランとトニーのパルチザンに救出されるが逃走途中に土砂崩れに巻き込まれ飛ばされる。

双子の弟がいるが弟は陸軍士官学校を卒業し陸軍士官になり戦車部隊指揮官としてパットンの第３軍で戦車部隊を率いていた。

中国で中華料理（雲南料理）を学んだため料理が作れる。

大の酒好きのビール好きだがビールはエールしか認めない。

民主党支持者。

大の猫好き。

元海兵隊なので射撃が大の得意。

元海兵隊員を誇りに思いコールサインも未だに海兵隊時代のを使っている（無許可）

ホッケー好き。

煙草はラッキーストライクを吸っている。

見た目はテリー・ジョーンズ。

名前のモデルはボストン市長でＪＦＫの母方の祖父のジョン・フィッツジェラルドから。

誕生日はＪＦＫの暗殺された日から。

名前：アントニー・カルロス・コルレオーネ

階級：少尉

所属：アメリカ陸軍航空隊

出身：アメリカ合衆国ニューヨーク州

生年月日：１９１５年２月１４日

使用火器：コルトＭ１９１０（３２ＡＣＰモデル）×２、トンプソンＭ１９２８、ウィンチェスターＭ７０（３０―０６弾）、コルト　モ

ニター
使用機材：ロッキードP―38ライトニング
←
P―38ライトニング
使い魔：ドブネズミ
固有魔法：ホークアイ
パーソナルマーク：クロスさせた拳銃と「私が誓いを破る事があれば聖人の貴方の様に我が身も燃え尽きる」という意味のイタリア語
イタリア系アメリカ人
父親は表向きはニューヨークの港湾運送業者で機械部品の輸出業者だったが裏ではニューヨークのマフィアに協力し密輸品の荷揚げ荷卸し、更にはヨーロッパへの密輸に関与していた。
元々祖父がイタリア系移民を集め安い労働力として使ってニューヨーク港に出入りする貨物船や客船の荷役作業請負をしていた会社でマフィアとは全ての一家と等距離で対応し年額をちゃんと払えばどんな仕事でもどれだけ運んでも請負う事から信頼を得るとマフィア御用達の荷役業者に成長、第一次世界大戦では大戦のドサクサに紛れヨーロッパへ禁制品の密輸に関与、その能力を買われ初期にはドイツやオーストリアからの仕事を請け負ったり日露戦争ではイギリス政府からの依頼でニューヨークで武器や機械類の日本への密輸に関与、禁酒法時代にはヨーロッパやカナダ、メキシコ、中南米からの酒類の密輸で儲け、その時期には息子（父親）が中心となりアメリカで廃棄された大量のスクラップから機械部品を回収したり中古の機械類を輸出する仕事を始め儲けた。
その経緯からマフィア関係の中では最強の対外諜報能力を持ち仕事の関係上ヨーロッパ各地の色々なギャング・マフィアと関わりを持つ国際派の集団として知られその能力から米政府も見て見ぬふりをしていた。
その後世界大恐慌で多大な損害を受けるがすぐに立て直すと密輸業に関与しヨーロッパ各地のギャング・マフィアとコネクションがあることから大戦中はＯＳＳと協力していた。

父親の会社は各マフィアのファミリーとの間に連絡員〝リエゾン〟を置きマフィアとの信頼関係を構築、リエゾンはそのファミリー以外の情報を持たず、また他のファミリーと接触してはいけない、もし接触した又は接触を受けた場合即座にリエゾンを〝解任〟される。

リエゾンは〝殺害〟又は〝辞任〟、〝失踪〟、〝逮捕〟でのみその役を解任される。

各マフィアはリエゾンに対して仕事に必要な情報のみを与えそれ以外の情報を与えず又受け取らない、受け取った又は与えた場合はその事を会社に報告する義務を持つ。

義務に反した場合、その程度によるが最悪の場合はその日から5から１０年間そのファミリーの一切の仕事を引き受けず手持ちの全ての情報を他のマフィアに開示する。

会社は一切の抗争に関して中立であり場合によっては抗争の仲裁を担う。

会社を攻撃したファミリーは即座にニューヨークより追放される。

という厳しい契約を各マフィアとの間で結ぶことで信頼関係を構築した。

彼自身もまたマフィア構成員でジェノヴェーゼ一家の構成員だった。

１５歳で初めて空を飛びパイロットライセンスを取得する傍ら飛行機を利用したマフィア関係者の移動、密輸を働き、更に１９歳になるとルイス・バガルターのマーダー・インクに所属、各地で〝処刑〟を行った。

更にその腕を買われ各地のマフィアからの上納金の運搬も行ったがそれを狙い何度も強盗に襲撃を受けるが全て始末した。

そのほかにも代理ボスのフランク・コステロからの意を汲んで麻薬の密売人の始末や密輸関係者の始末などの仕事もした。

この時期に射撃とドライビング、死体の始末、更に暗黒街で生き残る術を学び特に死体の始末に関しては１００人以上を始末したがそのうち９８％は死体が見つからないか事故死として処理されていた。

だが１９４０年にマーダー・インクが摘発された際に彼自身も逮

捕、基本的に無名の小物であり死体そのものが見つからないかそもそも死体自体が頭を一撃でぶち抜かれてるだけであり余りにも高度であったため1件の殺人と酒類と宝飾品の密輸のみで起訴されたがその直後に第二次世界大戦が勃発、ＯＳＳが父親の協力を得る条件に彼の即時釈放と陸軍航空隊への入隊であったため釈放、陸軍航空隊に入ると訓練を受け戦闘機パイロットになったが事実上の懲罰的扱いを受け、最前線の部隊をたらい回しにされた挙句に戦果に関しても実際の1／2しか記録しなかった。

４４年1月にフランスで撃墜され捕虜になりスタラグ・ルフトⅢＣ収容所に送られ例の大脱走にも関わった後オーストリアの収容所に移送途中に脱走、ユーゴパルチザンに合流、その後アランとジェフも脱走させたがジェフを解放したが逃走途中に土砂崩れに巻き込まれ飛ばされる。

元殺し屋で密輸業者。

二丁拳銃の使い手。

５０m以内の撃ちあいならば勝てる者はいない。

正確に頭と心臓だけを撃ち抜く技術と死体を消す技術を持ちある時には2台の車に乗った４人組の強盗に襲われるがその４人を全員射殺するとその死体を強盗の車に乗せ武器や身分証を回収した上で路肩で車に火をつけて事故死に偽装した。

それ以外にも一晩で麻薬業者８３人を殺してジャマイカ湾に投げ捨てたなど数々の殺人を行った。

一応の表向きの仕事は中古雑貨商。

ドライビングテクニックや射撃術、交渉術などを闇社会で身に着けた。

実はユダヤ系でありユダヤ教徒（ただしそれなりに世俗化してる）

喫煙者だが基本的に噛み煙草派。

酒は飲まない。

非常に珍しい３２口径の拳銃を好むタイプ。

大の麻薬嫌い、麻薬をやる奴は人類ではない。

見た目は若いころのマーロン・ブランド

服装はサービスドレスの上にA―2ジャケット。

名前：アラン・ジャン＝リュック・マリー・ド・メーストル
階級：大尉（フランス空軍・ヴィシー空軍・ユーゴスラビア人民解放軍及びパルチザン部隊）
出身：アメリカ合衆国ワシントンD．C
所属：フランス空軍（元）、ヴィシー空軍（元）、ユーゴスラビア人民解放軍及びパルチザン部隊
生年月日：1915年7月15日
使用火器：ルガーP―08、ブルーノZB26
使用機材：ノースリベリオンP―51Hムスタング
使い魔：バセット・ハウンド
固有魔法：魔眼

元フランス空軍のパイロットで現在はレジスタンスの士官。
一応先祖は貴族だが殆ど苗字以外大して関係なく爵位もなければ貴族と認められてもいない。
父親は生まれた当時は駐米大使館付き武官でワシントンの病院で生まれた。
その後も父親の仕事の都合でアメリカやカナダ、イギリスなどで育ち15歳の時に初めてフランスに来てその後は仕事の都合でパリで暮らし成長、20歳の時にその年できたフランス空軍士官学校に入学、卒業後は戦闘機部隊に配属されモラーヌ・ソルニエMS406、その後カーチスホークを飛ばし第二次世界大戦を迎えフランス降伏までにドイツ機を6機撃墜しエースとなったがフランス戦で父がドイツ軍の捕虜となった。
フランス降伏後はヴィシー空軍に所属、フランス南部で勤務するがドイツ軍に反発、最終的に素行不良で空軍をクビになった。
空軍をクビにされるとレジスタンス運動に参加、パリで各種破壊工作に従事したがドイツ軍の捕虜となりスロバキアに送られるがそこでスロバキア蜂起に遭遇、パルチザンに解放されるとパルチザンに志

願、スロバキア蜂起を戦うが敗北、また捕虜になりオーストリアの捕虜収容所へ移送直後ユーゴパルチザンに解放されユーゴパルチザンに加わりジェフを解放するが逃走途中に土砂崩れに巻き込まれ飛ばされる。

徹底した反人種差別主義者で民主主義者。

民主主義は他の全ての政体よりも優れていると言って憚らずナチスを嫌っている。（なお同じぐらい共産主義も嫌っている）

また権利と自由は与えられるものではなく戦って勝ち取るものであり守らなければならないものだと主張している。

民主主義と権利と自由を侵すものに対しては容赦が一切ない。

容赦のなさは捕らえたドイツ兵を殴り殺してその死体をドイツ軍の兵舎の前に放置したなど残虐な逸話多数。

スロバキア語やクロアチア語、セルビア語を簡単ながら喋ることが出来る。

元レジスタンスという事もあり爆弾を作るのも潰すのも得意。

対戦車砲使える（マジ）戦車殺したこともある（マジ・史実）

使っている武器は全てドイツ兵から奪ったもの。

フランス人の癖に味音痴。

煙草は吸わないが酒は飲む。

歌はうまい。

見た目はエリック・アイドル。

名前のモデルはジャン＝リュック・ゴダールとジョセフ・ド・メーストル。

誕生日はシャルル・ド・ゴールがモントリオールで自由ケベック万歳！を演説した日から。

第1章：大国に挟まれて
プロローグ：第二次世界大戦

１９４５年９月２日、この日推定６５００万人が死亡した人類史上最も破滅的且つ最も破壊的な戦争、第二次世界大戦は終結の時を迎えた。

この戦争により、人類史上最強最悪の兵器原子爆弾が生まれ、世界は鉄のカーテンにより二つに分かれ対立し、ヨーロッパ世界は単なる緩衝地帯としての役割しか果たさず、ドイツは東西に約５０年分かれる種が蒔かれたのだった。

ところでこの６５００万という数字だが、この中には多くのパイロットや航空機搭乗員も含まれる。

彼らは祖国のために散って行った若い青年がほとんどだった。

これはそんなとあるパイロットたちの物語である。

１９４４年５月、ドイツ北部上空。

ハインツ「ゲルプ１より全機。前方に敵編隊！一機残らず叩き落とせ！」

ゲルプ２『ゲルプ２。了解。』

ゲルプ３『ゲルプ３。突入する』

ミラー「少佐。突っ込むんですか？落ちないように気をつけてください。」

ハインツ「バカ言え、俺が落ちるとでも？」

Ｂ１７で編成された数十機の爆撃機の編隊に双発の飛行機が突っ込んでいく。

それはドイツ空軍の誇る重戦闘機Ｍｅ４１０だ。

その中の一機にハインツ・ヴァレンシュタイン少佐が操縦する機がある。
ハインツ「おい、あいつに行くぞ」
「クソッ！メッサーの重戦闘機だ！右にいる！」
「おい！護衛戦闘機はどうした！うわぁ！」
その瞬間、Ｂ１７が一機爆発した。
ハインツ「スコアを一機増やし『マスタングだ！後ろからくるぞ！』なに！」
次の瞬間、攻撃から離脱しようとしたＭｅ４１０が一機被弾、その後ろからは銀色の洗練された見た目の戦闘機が現れた。
ハインツ「クソ！逃げるぞ！「少佐！後ろにマスタング！食いつかれた！」しまった！」
マスタングに食いつかれたＭｅ４１０は右にロール、そのまま急降下して後方機銃を撃ちながら逃げようとする。
だが後にＷＷ２最優秀戦闘機の異名を持つ戦闘機に加速力や火力や上昇力はいいが機動性や速度はよろしくないＭｅ４１０が逃げ切れるはずもなく。
ミラー「ああ左エンジン被弾！」
ハインツ「畜生！なんでこうな」
その瞬間、Ｍｅ４１０は爆発した。

１９４５年４月
ビショップ１『ビショップ１から各機、攻撃目標を確認。攻撃せよ。繰り返す攻撃せよ。』

ビショップ2『ビショップ2了解。』
ノヴァク「ビショップ3了解。」
ドイツ北部、あと少し飛べばキールというような地域の上空。
数機の美しい航空機が飛んでいる。それは英国空軍のスーパーマリンスピットファイア。
後に救国の戦闘機と呼ばれ英国人の不屈の、そしてこの戦争の象徴として知られることになる名機である。
彼らの任務は眼下に広がるドイツの地に隠れたドイツ軍の陣地を翼下にぶら下げたロケット弾と爆弾で破壊すること。
この美しい英国機を飛ばすのは、祖国を奪われ復讐に燃えるポーランド人パイロット達。
その中にアレクサンデル・ノヴァクというパイロットがいる。
ビショップ2『ビショップ2、敵陣地破壊！』
ビショップ4『ビショップ4、奴さん素人ばっかだ！そんな弾当たらねーよ。ハハハハハ！』
ノヴァク「ビショップ3、見つけた！高射砲陣地だ！」
ビショップ1『ビショップ3了解！援護する！』
そう言うと一機のスピットファイアが急降下して突入する。
だが次の瞬間、目標の両側の森林から突然機関砲が火を吹いた。
スピットファイアの高度せいぜい１００ｍ。旧式の２０ミリ機関砲でも普通に狙える距離であった。
ノヴァク「しまった！」
その瞬間、スピットファイアの左翼が根元から、右翼の真ん中より先、そして機体尾部が吹っ飛んだ。
そのスピットファイアは空中分解しながら地面にキスした。
彼らは知る由もないだろう。まさかこの肉片一つ残らずこの世か

ら消えたパイロットたちが別の世界に行ったなどと。

第1話：ドッグファイト

????年??月

ハインツ「って…て、あれ？」
ドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセル（ＺＧ２６）所属のパイロット、ハインツ・ヴァレンシュタインはＭｅ４１０の機内で目を覚ました。
ミラー「少佐、大丈夫ですか？」
すると彼は後ろから自分を呼ぶ聞きなれた声に気が付く。
ハインツ「ミラーか？」
ミラー「ええ、アドルフ・ミラー少尉です。」
声の主は長年自分の相棒として後部銃手を務めてきたオーストリア出身のアドルフ・ミラーであった。
ハインツ「そっちは大丈夫か？」
ミラー「ええ、ピンピンしてますよ。」
ハインツ「なあここどこか分かるか？」
ミラー「さあ、雲が出て地面が見えないので分かりません。」
ふと自分たちがどこを飛んでいるか分かるかとミラーに聞くが、ミラーには分からなかった。
なにせ彼は後部銃手、航法の訓練なんて受けたこともない。
ハインツ「そうか。基地からそれほど離れてなきゃいいんだが。ゲルプ1よりゲルプ2、合流せよ。」
ハインツは無線で僚機を呼び出そうとするが応答がない。
ハインツ「ゲルプ2、応答せよ。ゲルプ2、こちらゲルプ1、応答せよ。」
ハインツ「ゲルプ3、こちらゲルプ1。ゲルプ3、こちらゲルプ1。」
ハインツ「こちらゲルプ1、誰でもいい応答せよ。
繰り返すこちらゲルプ1、誰でもいい応答せよ。」
ほかの僚機や基地にも連絡を取ろうとするが全くつながらなかった。

ハインツ「クソッ、おいミラー無線がイカレた。
もしかした近くに敵機がいるかもしれん警戒しろ。」
ミラー「了解。」
これを無線の不調と判断したハインツはミラーに敵機に警戒するよう伝えた。
するとハインツは機体の計器類に目を落とすが、
ハインツ「ん?おいアドルフ。燃料計も逝っちまったみたいだ。
何が燃料満タンだよ。こっちはもう３０分は飛んでんだ。」
なぜか燃料系が満タンを差していることに気が付きミラーに伝えた瞬間、
ミラー「少佐!後方から敵機!スピットファイアです!」
ハインツ「何!」

ノヴァク「ここはどこだ?」
ＲＡＦ第３１７スコードロンシティ・オブ・ヴィリュニスのパイロットアレクサンデル・ノヴァクは気が付けば雲の上を飛行していることに気が付いた。
高度計は約１万フィートを差していた。
ノヴァク「こちらビショップ３、ビショップ２、応答せよ。」
無線で僚機を呼び出そうとするが、
ノヴァク「ビショップ２、こちらビショップ３、応答しろ!」
全く応答がなかった。
ノヴァク「こちらビショップ３、ビショップ１、ビショップ４、応答せよ。」
ノヴァク「こちらビショップ３、ビショップ１、ビショップ４、応答せよ。」
別の機を呼び出そうとするがこちらも応答がなかった。
ノヴァク「クルヴァ!なんでこういう時に無線が壊れるんだ畜生。」

ノヴァク「燃料計も逝ったか…正直不安だ…」
無線が壊れたと判断したノヴァクは計器類を確認するが燃料計がおかしいことに気がつく。
スピットファイアは足の短い戦闘機である。そのため戦闘開始の時点で１／３程度消費していたはずだが燃料計は満タンを示していた。
ノヴァク「周囲に味方機は…ん？あれは…」
周辺に味方機がいないかと思い周囲を見回した彼が見つけたのは、
ノヴァク「あれは…メッサーシュミットの重戦闘機！」
ヴァレンシュタインのＭｅ４１０だった。

ハインツ「とにかく撃ちまくれ！
　どうせここまで来るのに燃料を使い果たしてんだ燃料切れになるまで逃げるぞ！」
ミラー「了解！」
スピットファイアと空戦をしたこともあるヴァレンシュタインはスピットファイアが足が短いことを知っていたので燃料を消費させて逃げようとする。メッサーシュミットはジグザグに旋回しながら逃走、スピットファイアはそれを追いかけながら銃撃する。
ノヴァク「くっ、上手いな。」
相手が最近では少なくなったベテランだと感じたノヴァクだったがすぐにスロットルをあげて追撃する。
ミラー「まだ追いかけてきます。」
ハインツ「見つけたぞ！左に雲がある！そこに突っ込むぞ！」
ミラー「了解！」
追跡を振り切るため、Ｍｅ４１０は機体を左に旋回させ雲の方に向かい、突入。
スピットファイアもそれを追い追撃する。
ハインツ「クソ、雲で何も見えん。」
ノヴァク「クルヴァ、やつはどこにいるんだ！」

濃い雲の中で両者互いを見失いながら追撃する。
暫く雲の中を飛行すると周りが明るくなり始めた。
ハインツ「雲から抜けるぞ！スピットが出てきたら撃ちまくれ！」
次の瞬間、機体は雲から飛び出した。その先にあったのは
ハインツ「な、なんだありゃあ…」
雲を出た先にいたもの、それは巨大な真っ黒な飛行物体であった…

第2話：出会い

ハインツ「な、なんだありゃあ…」
雲を抜けたＭｅ４１０、その先にあったのは巨大な真っ黒な飛行物体であった。
ハインツ「気をつけろ！舌噛むぞ！」
Ｍｅ４１０は上昇しながら機首の２０ミリ機関砲４門と７．９２ミリ機銃２門を撃つが全く効果はないように見えた。
機体はその飛行物体の上を掠めながら飛び、後部機銃をさらに撃ちこんでいった。
ミラー「少佐！あれなんなんですか！」
ハインツ「とにかくあのデカブツに撃ちまくれ！うわ！」
すると今度はそのデカブツから赤いビームが飛んできたのである。
咄嗟に右にロールして躱したところでヴァレンシュタインはあるものを目にする。
ハインツ「え…今度はなんなんだよ…」
ミラー「しょ、少佐、今度は人が空飛んでますよ！」
足に円筒形の物をつけた人が空を飛んでいるのだ。

ノヴァク「そろそろ雲からで…うわ！」
スピットファイアが雲から出た先にあったのは黒い巨大なものがこちらに突進してくるさまであった。
咄嗟に機体を左にロールさせ機関砲と機銃を撃ちまくって離脱しようとした。だが黒い物体はこちらにビームを撃ちまくって来る。
ノヴァク「クルヴァ！なんなんだよ！」
左にロールさせ急降下する中、彼の目に飛び込んできたのは、
ノヴァク「人…か？」
人が空を飛んでいる光景であった。

ハインツ「ありゃあ一体なんなんだ？」

ミラー「噂に聞く幽霊戦闘機って奴じゃないですかね？」
ハインツ「バカ言え、あんなデカブツが戦闘機な訳ねえだろ。
それになんで人が空飛んでるんだ？」
デカブツの攻撃が後ろから来たスピットファイアに集中しているので一旦離脱して遠巻きに戦闘を観察していたハインツとミラーだが、あれが噂に聞く幽霊戦闘機、世間一般で言うところのフーファイターではないか？とか言っていたが
ミラー「まさか別の世界に来た、とか？」
ハインツ「小説の読みすぎだろ、とは言えそうにないな。
あながちそういう事かもしれない。」
もしかしたら別の世界に来たのかもしれない。そう結論した２人であった。
次の瞬間、そのデカブツは突然白い破片となって消えた。

ノヴァク「クルヴァ！なんでこっちばかり撃ってくるんだ！」
必死で黒い物体の攻撃を躱そうとロールや急降下を繰り返すスピットファイアであったが前から来た何やら変なものを足につけた女の子が黒い物体を攻撃し始めるとこちらへの攻撃はやみ、少し離れたところで機体を立て直しＭｅ４１０を探し始めた。
ノヴァク「何処にいるんだあの戦闘機は…まさか上か！」
経験と勘から咄嗟に機体を旋回させた瞬間後方から撃たれた。Ｍｅ４１０だ！
スピットファイアが下に行ったため上昇していたＭｅ４１０は背後上方を取り一撃離脱を仕掛けた。
だが咄嗟に機体を旋回させたので幸い回避できた。
ノヴァク「クルヴァ！なんだあのニエムツィ！」
旋回後機体を急上昇させＭｅ４１０を追撃、いくらＭｅ４１０の上昇力が良くても単発機のスピットファイアにはかなわなかった。
たとえもし一撃離脱後急降下して離脱したとしてもかつてのスピットファイアのようにマイナスＧでマーリンが咳き込むことは無い、それどころかＭｋⅨｅは低空域で最も高性能を発揮するＥ翼であ

る。
　ついでに言えばこの機のエンジンマーリン６６は低空域で最もパワーを発揮できるように調整されていた。
　そのためＭｅ４１０の急上昇は決して悪手ではなかった。むしろ性能を十分に発揮できない高高度で勝負をつけることもできた。
　Ｍｅ４１０は急上昇で逃げながら後方機銃のＭＧ１３１を撃ちまくるがしばらくすると撃ってこなくなった。弾切れだ。
　その瞬間を待っていたかのようにエンジン全開でＭｅ４１０に肉薄する、次の瞬間、Ｍｅ４１０が失速、機体を急降下させ始めた。
　チャンスだ！自機も失速して急降下するがそれを待っていたかのようにＭｅ４１０に照準、トリガーを引くが…
　ノヴァク「クルヴァ！弾切れだ！」
　この前にＭｅ４１０を追撃しながら大量の弾を消費した上、巨大な黒いものにも多数の弾を打ち込んだため弾切れを起こしてしまった。

　ミラー「少佐！弾切れです！」
　ハインツ「はぁ！」
　ミラーの弾切れという報告に驚いたハインツだったが、次の瞬間機体が急激に速度を落とし始めた。
　失速だ。低速で機体を急上昇させることで主翼に気流が流れず揚力を失う状態が失速である。
　失速の回復は非常に難しいことで知られている上に並みのパイロットならパニック状態に陥り墜落してしまう危険な状況である。
　現代でもたまに旅客機が失速状態に陥りパイロットがパニックを起こして墜落する事故も起きている非常に危険な状態である。
　だが少なくともハインツはこの手の状況に慣れていた。だが今回少し違った。
　いつもなら自機より先に敵機が失速状態に陥っていることが多く、失速して急降下しているところを狙い撃ちにするのがいつもの戦術であった。
　だが今回はスピットファイアが上手いこと失速状態に陥らないギ

リギリの状態で急上昇していたため自機の方が先に失速してしまったのだ。
そのため気が付いた時にはスピットファイアは自機の後ろで至近距離から肉薄しようとしていた。
ハインツ「クソ！」
次の瞬間、スピットファイアから機関砲の弾が…飛んでこなかった。
ミラー「少佐、スピットファイアも弾切れですよ！」
ハインツ「よし、いけるぞ。」
そういうと高度５０００フィート付近で機体を立て直しまた上昇を始めた。
するとスピットファイアは追撃せず諦めたかのように離脱し始めた。
無論このチャンスを逃さなかった。
スピットファイアは不規則に旋回しながら離脱しようとするがＭｅ４１０はスピットファイアの後方上空１０００フィートを抑えチャンスを狙っていた。

スピットファイアは弾切れを起こした以上空中戦をする意味がなかった。
なにせ撃つ弾がないのだ。体当たりすればいけるかもしれないがドイツ上空でそんなことをすれば捕虜になるか死ぬだけだ。それもほとんど自殺に近い死に方だ。キリスト教では自殺はタブーなのは有名な話である。
それを敬虔なカトリックの彼がやるわけなかった。
だから空中戦を離脱して逃げようとした。
無論逃げながら不規則な旋回をしながら。
だがスピットファイアＭｋⅨはバブルキャノピーではない。
なので後方視界は差していいわけではない。むしろ最悪と言えた。
見えるのはコックピットの上にある小さなミラーのみ。ほとんど後ろが見えない以上振り切ったかどうかは全くわからない。

敵機がいつまで追撃してくるか。それが問題であった。さらに燃料計が故障してあとどれだけ燃料が持つか分からない。そもそもここがどこかすらわからない。不安要素だらけであった。

スピットファイアを追跡すること２０分、スピットファイアは速度を緩め水平飛行に移り始めた。

後方視界が悪い上に丁度このときＭｅ４１０は太陽に隠れる形になっていた。

無論このチャンスを逃さない手はない。

一気に急降下して撃墜しようとした。

急降下を開始し、距離が２０メートルほどの所に来たときトリガーを引こうとしたその瞬間

『そこの戦闘機、所属を答えなさい！』

突如壊れていたと思っていた無線から女性の声が響いた。

これに驚き、弾はスピットファイアの後方を掠めて行った。

機体はスピットファイアの後ろを通過してスピットファイアの後方左下についた。

『そこの戦闘機、所属を答えなさい！』

壊れていたと思っていた無線機から突然響いた女性の声に驚いた次の瞬間、銃声が後ろから聞こえ真後ろをＭｅ４１０が通過した。

この無線にＭｅ４１０は驚いて外したようだ。

この呼びかけは彼にとっては吉報であった。これで増援を呼んであのニエムツィを叩き落とすか基地に戻れるからだ。

ノヴァク「こちら英国空軍義勇第３１７スコードロンシティ・オブ・ヴィリュニス所属アレクサンデル・ノヴァク中尉。

コールサインはビショップ３。現在ドイツ軍のメッサーシュミットの双発戦闘機と交戦中。救援を求む。」

簡潔な救援要請であった。

突然無線から響いた綺麗な、若干ドイツ訛りがあるように感じた女

性の声にハインツは戸惑った。
　これは連合軍のなのかドイツ軍の物なのか?ドイツ訛りがあるということはドイツ人?じゃあなんで英語で呼びかける?
　そうこうしていると無線から
『こちら英国空軍第３１７スコードロンシティ・オブ・ヴィリュニス所属アレクサンデル・ノヴァク中尉。
　コールサインはビショップ３。現在ドイツ空軍のメッサーシュミットの双発戦闘機と交戦中。救援を求む。』
　英空軍機が答えるということはこの無線は連合軍か?連合軍が近くにいるということか?
　少なくとも近くに連合軍の基地がある。その情報が分かった時点で十分であった。つまり英本土に近い空域を飛んでいるということだ。
　そう仮定すると燃料の量がヤバい。Ｍｅ４１０の航続距離は大体２３００キロ。
　彼らの基地はドイツ北東部のメクレンベルク＝フォアポンメルン州からザクセン＝アンハルト州に至る地域だ。
　そうしたらこの辺りは燃料がギリギリのところになる。むしろなんで今まで燃料切れにならなかったかが不思議なぐらいだ。
　即座にヤバいどころの問題ではないと判断した彼らすぐに無線に応じた。
　ハインツ「こちらドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセル所属ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐。
　　コールサインはゲルプ１。燃料がない。至急緊急着陸を求む。武装解除は下でやる。」
　即座に降伏することにした。

　ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケは戸惑っていた。
　ネウロイと交戦中に突然雲の中から現れたのは見たことない国籍章をつけたＭｅ４１０とスピットファイア。
　しかもネウロイに機関砲を撃ちこみ離脱したと思ったらドック

ファイトをしているではないか。
ネウロイを撃墜した彼女は即座に戦闘機を探し無線で叫んでいた。
だが帰ってきた答えは何か?聞いたことのない国の聞いたことのない部隊名であった。
少なくとも第３１７スコードロンと第２６駆逐戦闘航空団自体は聞いたことがある。それぞれブリタニア軍とカールスラント軍の部隊だ。
だがこの両方の部隊の名誉称号が違う。ホルスト・ヴェッセル?一体誰だ?シティ・オブ・ヴィリュニス?一体どこだ?
その上第３１７の方がＭｅ４１０と交戦中だというなぜ交戦している?その上増援をよこせと、訳が分からない。
ＺＧ２６の方もだ、なぜ武装解除する必要がある?別にこちらはただ所属を聞いただけだ、捕虜に取るわけでもないのに。
ミーナ「こちらは連合軍第５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズです。
私はストライクウィッチーズ隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。
我々の基地に誘導します。ついてきてください。」
ノヴァク『ビショップ３、了解。』
ハインツ『ゲルプ１、了解。』
とりあえず自分たちの基地に誘導して下で話を聞くことにしたのだった。
これがどのような波乱を巻き起こすかまだ知らない…

第3話：違う世界

ハインツ「で、誘導してくれるのはあのレディーたちかい？」
ミラー「そうだと思いますよ少佐。」
ハインツ「やっぱり別の世界だろうなぁ…この世界にもカナダってあるのかな？」
ミラー「さあ？まああるなら過ごしやすいところがいいですね。」
ウィッチ達と合流したハインツとミラーだがすでにここ別の世界ではないかなどと考えながらどうせ降伏するからと雑談に興じていた。
ソ連軍ならともかく少なくとも英軍なら雑に扱わないはずなので割と呑気に考えていたのである。

ノヴァク「神よ、一体ここはどこなのでしょうか？彼女らは一体なんなのでしょうか？主が遣わした天使でしょうか？」
ノヴァクの方は大混乱に陥っていた。なにせ死んだと思ったら空を飛んでいた、よく分からない黒いものが飛んでいた、人が空を飛んでいる、常識的に考えておかしなことばかりであった。
ノヴァク「はは、怒りの日でも来たのか？それともあの天使達は主の御許にまで連れて行くのか？」

バルクホルン「一体あいつらはなんなんだ？鉄十字に鉤十字。あんな国籍章見たことないぞミーナ。」
ミーナ「ええ、それになんでドックファイトしていたのかしら？」
シャーリー「まさか別の世界から来たりして？」
バルクホルン「そんなことがあり得るかリベリアン。」
その頃ウィッチ達は基地に帰投しながら戦闘機を取り囲んでいた。
もし何かしたら撃墜できるような体制をとっていた。
しばらく飛んでいると基地が見えてきた。ドーバーの鼻先に浮かぶ小島を丸ごと一つ基地化したものだ。
彼女たちが着陸すると続いてＭｅ４１０、スピットファイアが着陸

した。

ハインツ「はいはい降伏しますよ。なあミラー。」

ミラー「ええ」

基地に着陸し後続機に迷惑のかからないところでエンジンを止め機体から降りた二人は両手を上げて降伏する。

ノヴァク「おい、クソッタレのニエムツィ！ブチ殺してやる！」

そう言うとスピットファイアから降りてきた英国空軍軍人は拳銃を持ち駆け下りてきた。

だが…

ノヴァク「おい、放せ！俺は友軍だ！なんで拘束される！憲兵呼んでこい！」

すぐに取り囲んでいた兵士に拘束された。

それからしばらくして3人は兵士に連行され基地内の部屋まで連れてこられた。

割と行儀よく指示に従っていたハインツとミラーは特に何もされずなぜか持っていた拳銃まで返された。

それに二人は（俺たち本当に捕虜なのか？）などと訝しんだ。

それに対してノヴァクの方は暴れたせいで銃を奪われ両手に手錠をかけられ拘束されたまま連れてこられた。

ミラー「あのトミーはいったい何やってんでしょうかねぇ少佐。」

ハインツ「さあ？バカなんじゃねえのか？」

そんなことを愚痴りながら指令室と思しき部屋で待っていると現れたのは赤毛の美しいドイツ人らしき女性と眼帯をつけた日本人と思われる女性であった。

ミーナ「初めまして。私は連合軍第５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。階級は中佐」

坂本「私は坂本美緒。階級は少佐。５０１の戦闘隊長だ。君たちに

ついていくつか質問したいがいいか?」
そう名乗ると質問が始まった。
ミーナ「まずあなた方の氏名、階級、所属を答えてください。」
ハインツ「俺はハインツ・ヴァレンシュタイン。階級は少佐。
所属はドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセル。」
ミラー「自分はアドルフ・ミラー。階級は少尉。
所属はドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセルです。」
ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァク中尉。
英国空軍義勇第３１７スコードロンシティ・オブ・ヴィリニュス所属。
一応自由ポーランド軍軍人だ。」
各自自己紹介と所属を答えた。すると
坂本「ドイツ空軍?英国空軍?自由ポーランド軍?どこの部隊だ。」
ミラー「どこって…ドイツの空軍。名前の通りですよ。」
ノヴァク「ロイヤルエアフォースの方が有名かな?
自由ポーランド軍は名前の通り亡命ポーランド政府の軍隊だ。」
ミーナ「この世界にドイツやポーランド、英国なる国は存在しません。
あなた方はいったい何者ですか?」
一気に物事の核心を突く質問を投げかけた。
ハインツ「おそらく気が狂ったか頭がいかれていると思われるだろうがおそらく別の世界の人間だ。
少なくとも俺が知っている限りではさっきであったあのデカブツは存在しないし人間は空を飛ばない。
その上今現在世界は真っ二つに分かれて戦争中。ドイツ人と日本人が英軍基地にいるわけない。」
真実を答えるが、
坂本「真っ二つに分かれて戦争?それはどういう意味だ。」

ノヴァク「そのまんまだよ。世界は真っ二つ。
俺たちの祖国ポーランドにお前らクソッタレのニエムツィとボルシェビキ共がなだれ込んで始めて戦争の真っ最中。
太平洋じゃあ日本人がヤンキー共と戦争してるらしいし俺達の祖国はあのクソッタレなボルシェビキ共に〝解放〟され俺たち英国に逃げたポーランド人はあの共産主義の元暮らしていかなきゃいけないんだよ。」
自嘲気味に答えるがそれにハインツが食って掛かる
ハインツ「は?まだソ連軍はポーランドになだれ込んでないぞ。
この間ルーマニアでイワンの戦車部隊を食い止めたってニュースやってたが。」
ノヴァク「はぁ?なに言ってんだソ連軍はもうベルリンに入ってるだろ。
俺たちはもうライン川を越えてドイツ上空で戦闘中だったはずだ。あと一カ月もすれば戦争は終わるよ。」
ハインツの反論にノヴァクは答える。
ハインツ「おい待て。俺が知ってる限りではお前らトミーもヤンキーもまだ大陸には来てないぞ。」
ノヴァク「何言ってんだ?４４年の６月にノルマンディーに上陸しただろ。」
ハインツ「え?今４４年の５月じゃ…」
ノヴァク「は?４５年の４月だろ。」
ここでさらなる矛盾が生まれた。二組の中の時系列が違う。４４年５月と４５年４月。約１年の差があった。
ミーナ「今日は４４年の３月よ。」
ハインツ・ミラー・ノヴァク「「えーーー!!」」
ノヴァク「一年前かよ…」
ハインツ・ミラー「「２か月前かよ…」」
坂本「ところでお前たちの世界の歴史はどうなんだ?ネウロイやウィッチはいるのか?」
坂本が聞く。

ハインツ「ウィッチもネウロイ?なんてものもいませんよ。」
それから自分たちの世界の歴史を詳しく語った。その大半が戦争と迫害の歴史であったため二人の顔は暗かった。
ノヴァク「そういやこの世界の歴史はどうなんだ?あとウィッチとネウロイってなんだ?」
ノヴァクが逆に質問するとミーナはこの世界の歴史とウィッチとネウロイについて説明した後、
ミーナ「あなた方の出身地はどこなのかしら?」
と聞いてきた。
ハインツ「俺はズデーテン地方のツナイム。３８年にドイツに併合されたから一応ドイツ軍人やってる。」
ミラー「僕はオーストリアのザルツブルクです。」
ノヴァク「グディニャ出身だが。」
坂本「全部どこだ?ここに地図がある。そこを指さしてくれ。」
すべて非常にマイナーな土地だったり地名自体が違うため坂本には全くわからなかった。
ハインツ「えーと。ズデーテン地方だからだいたいこの辺り。」
ミラー「ザルツブルクは名前変わってないんですね。ここですよ。」
ノヴァク「ダンツィヒの隣あたりだからだいたいこのあたりだな。」
それぞれ指をさすとミーナはこの世界で例えた
ミーナ「この世界だとハインツさんとミラーさんはオストマルク出身。ノヴァクさんはカールスラント出身になるわね。」
だが
ミラー「誰がオストマルクだ!オーストリアだオーストリア!誰があの臭い戦闘民族の名前で呼んだ!ハプスブルク家への冒涜だ!」
一番おとなしいと思われたミラーが激怒した。
ハインツ「落ち着けアドルフ。別の世界だからいいだろ。
すまんアドルフは筋金入りの大オーストリア主義者でハプスブルク家の支持者なんだ。だからオストマルクをと呼ばれるとキレるんだ。」
実は熱烈なハプスブルク家支持者で大オーストリア主義者。ドナ

ウ連邦を支持していたというミラーを諫める。
ある程度落ち着いたところでミーナが聞いた。
ミーナ「ところであなたたち魔力もってないかしら?」
ハインツ・ミラー「「は?」」
ノヴァク「何の冗談だ?」
ミーナ「感じるのよ。あなたたちからものすごい魔力を。」
坂本「ああ。ほとんど話を聞いたことがないがこの世には男のウィッチ、ウィザードというものも存在するからな。」
魔力は通常、女性しかないということはさっき聞いたがそれを持っているというのである。
すでに彼らの脳はウィッチだのネウロイだの異世界だのでもはや処理能力がパンク寸前のところにとんでもない爆弾が投下されたのである。
ハインツ「えーさっき聞いたこととかを総合的に考えると俺達には魔力があると。で、魔力を持った男なんてものはほとんどいないということか?」
ミーナ「ええ、そういうことよ。」
数分後情報を整理したハインツが口を開いた。
ハインツ「で、俺たちはどうすればいいんだ?」
ミラー「どうすればいんでしょうかね少佐?」
坂本「手っ取り早く言えばうちで戦ってくれないか?大丈夫だ。装備や階級などはこちらで手配するから。」
この誘いに数分間3人は考え込んだ。
彼らとしては祖国も戦う義理もないところで死ぬのは御免だがかといって明日の飯や宿、金の当てがあるはずがない。
数分後彼らが出した決断は、
ハインツ「はぁ…どちみち選択肢なんてあってもないようなもんでしょ。いいですよ戦いますよ。全くどうしてこうなるんだよ。」
ミラー「まあ少佐が参加するなら僕も。」
ノヴァク「ニエムツィは気に食わないがどうしようもないから参加しよう。」

結局所属する以外の選択肢なんてあってもないようなものであったため参加することになった。

ノヴァク「ところで君たちなんでズボンを履いてないんだ?はしたないじゃないか。」

ノヴァクが思い出したかのように質問する。

坂本「ん?ズボンなら履いてるぞ。」

坂本が答えるが、それは彼らの常識からすればどう見てもパンツであった…

ノヴァク「クルヴァ!」

ハインツ「アドルフ、あとで殴ってくれ。」

ミラー「少佐、あとで蹴ってください。」

第４話：新たな仲間

自己紹介を行うというので司令室を出た三人は着替えと身だしなみの手入れをした三人が向かったのはおそらく食堂と思われる部屋であった。その頃にはすっかり日は暮れていた。

テーブルには料理が並べられていた。

ミーナ「皆さん。今日は新しく５０１統合戦闘航空団に入ることになったウィッチ？「「なんでこっちを見るんですか？」」を紹介するわ。

ハインツ、ミラー、ノヴァクさん、どうぞ。」

そう言うとミーナは三人に自己紹介するように言った。

ハインツ「えードイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団ホルスト・ヴェッセルから所属することになったハインツ・ヴァレンシュタイン少佐だ。

こう見えてもとはなんだが一応実戦経験は軍服についている勲章レベルにはある。これから部下のミラー共々よろしく頼む。次誰だ？」

ノヴァク「なんでお前らニエムツイが先に言うんだ。

アレクサンデル・ノヴァク。階級は中尉。

所属は英国空軍義勇第３１７スコードロン。まあ好きなように呼んでくれ。」

ミラー「まあ階級が一番下だからいいですよね？アドルフ・ミラー少尉です。所属はＺＧ２６。

元々後部銃手なんで射撃は得意ですのでよろしくお願いします。」

３者３様で自己紹介と敬礼をすると。

バルクホルン「ミーナ。その男は一体何者なんだ？ドイツ空軍とか英国空軍とかホルスト・ヴェッセルとか聞いたことないぞ！」

茶髪を二つくくりにした気の強そうな少女が聞く。

ハインツ「それについては長くなるからゆっくり飯を食いながら話そうか。」

とハインツは返した。

ミーナ「後、明日ブリタニア空軍から補充のウィッチが来るそうよ。
では、皆さん席について食べましょう。
基地の案内は明日来る補充の人と一緒でいいかしら？」
最後に明日来るという補充要員の話をして食事となった。
席に向かおうとした次の瞬間、ノヴァクが突如振り返り背後から忍び寄っていた何者かの腕を掴み地面に押し倒し、その後頭部に持っていた拳銃を突きつけた。そこにいたのは褐色の子供であった。
ミーナ「ノヴァクさん、何やってるんですか？」
シャーリー「ル、ルッキーニ！」
即座にミーナ中佐と赤毛の胸の大きな少女が反応した。
ノヴァク「ん？あっ。済まない、以前の癖でな。えーと、君は？」
すぐに自分が子供を押さえつけていたことに気がつき離れ、赤毛の少女に名前を聞いた。
シャーリー「私はシャーロット・E・イェーガー中尉。シャーリーって呼んで。
で、今押さえつけてたのがルッキーニなんだけど…」
ミラー「ルッキーニ？ちゃんならここにいますよ。今自分の足にしがみついてます。」
ルッキーニはノヴァクを怖がりノヴァクの横にいたミラーの足にしがみついていた。
シャーリー「ルッキーニ、挨拶しな。」
ルッキーニ「フランチェスカ・ルッキーニ！ロマーニャ空軍少尉！」
ミラー「これからよろしくお願いしますねお嬢さん。」
ハインツ「これからよろしくなルッキーニちゃん。」
ノヴァク「さっきは済まないことをしたな。これから宜しく。」
それぞれ頭を撫でたり手を指しだりしたがノヴァクのさっきの行動に手を差し出した彼に近づくどころかミラーの足を盾にして隠れてしまった。
ノヴァク「子供に嫌われるのはキツイな…今度好きな菓子買ってやるから許してくれるか？」
シャーリー「あははは。ルッキーニかなり傷ついてるみたいだ

ぞ。許してやったらどうだ?」
ハルトマン「それ本当?」
すると今度は後ろから声をかけられた。
ハルトマン「私はエーリカ・ハルトマン。中尉だよ~。トゥルーデ、自己紹介は?」
バルクホルン「…ゲルトルート・バルクホルンだ。」
声をかけてきたのは金髪の少女エーリカ・ハルトマンとさっき声を荒だてていた気の強そうな少女ゲルトルート・バルクホルンであった。
名前を聞いたハインツが思い出したかのようにあることを聞いた。
ハインツ「ん?もしかして君たち、パイロットの兄がいないか?ラジオで名前のよく似たエースのニュースを聞いたことがあるんだ。」
ハルトマン「双子の妹がいるけど兄はいないよ。トゥルーデも妹がいるけど兄はいないよ。」
ハインツ「そうか。多分人違いかな?」
バルクホルン「それより、貴様らはいったい何者なんだ!ドイツなんて国も英国なんて国も聞いたことないぞ!」
その言葉に周りのウィッチたちも一斉に視線を向ける。
ハインツ「まあ手っ取り早く説明すると別の世界の人ってものかな?まあ信じるか信じないかは君たち次第だが。」
その言葉に部屋は静まり返った。
シャーリー「それ本当か?」
ノヴァク「ああ本当だ。俺たちの世界の歴史を聞くか?」
シャーリーの質問にノヴァクが答える。
ハルトマン「向こうの世界はどんな歴史なの?」
ハルトマンが聞くが…
ハインツ「話すが聞くのはすべて自己責任。この後吐いても知らんぞ。」
最初に注意をして話した。
第一次、二次世界大戦やそれに付随する各種戦争等々。
話し終わったころには部屋はどんよりとした空気が漂いウィッチ

たちは複雑な表情をしていた。
ハインツ（まあ食事の前にする話ではないからなぁ…）
サーニャ「でも、ヴァレンシュタインさんもミラーさんもノヴァクさんもいい人ですよね？
さっきルッキーニちゃんが怖がったの見てすぐに謝ってたからその…」
ハインツが話した事を後悔していると、銀髪の少女、アレクサンドラ・リトヴァクが静寂を破った。
ノヴァク「まあ少なくとも悪党ではないね。そこのニエムツィとイワンとボルシェビキとは違って。」
ハインツ「は？それどういう意味だ。」
ノヴァク「簡単だ。我が祖国ポーランドを侵略し、各地で同胞を虐殺したのはお前らだろ。」
ハインツ「それをやったのはＳＳとゲシュタポだ。俺たち国防軍は関係ない。」
ノヴァク「さあそれはどうかな？本当は手を貸してるんだろ？ワルシャワを灰にしてそこで戦ったレジスタンスを皆殺ししたんだろ。」
ノヴァクが皮肉を込めて話した内容にハインツが突っかかるとあっという間に口論になった。
ミーナ「何をやっているのかしら？ヴァレンシュタイン少佐？ノヴァク中尉？」
ハインツ・ノヴァク「「す、すいません」」
ものすごいオーラを出しながらミーナが威圧するとすっかりおとなしくなった。
ミラー「これで全員終わりましたかね？」
エイラ「おい、まだ私がしてないぞ。エイラ・イルマタル・ユーティライネン。スオムス空軍少尉だ。」
ペリーヌ「自由ガリア空軍中尉のペリーヌ・クロステルマンですわ。ウィザードなんて噂で聞いたことある程度ですわ。」
ハインツ「宜しく、ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐だ。」
ミラー「アドルフ・ミラーです。」

ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァクだ。」
ミーナ「これで全員したわね。それじゃあご飯を食べましょ。」
全員の自己紹介が終わると席に着き夕食を食べ始めた。すると席に着いたノヴァクがおもむろにポケットから一冊の本を取り出すと何か言い始めた。
ノヴァク「父よ、あなたのいつくしみに感謝して、この食事をいただきます。
ここに用意されたものを祝福し、わたしたちの心と体を支える糧としてください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」
そう唱えると食事に手を付け始めたがこのお祈りにハインツとミラーは「ああまたか」というような態度をとり、ほかのウィッチは何をやってるんだという目で見ていた。
シャーリー「なあノヴァク、今何やった?」
シャーリーが聞く
ノヴァク「ん?なにって食前の祈りだが。あんた方だって家ではするんじゃないのか?」
バルクホルン「そんな習慣ないぞ。」
ノヴァク「え?」

ロンドン、中心部から少し離れた所にとある社交クラブがある。
この歴史あるブリタニアの首都に１００年近く前に作られそこで話されることは一切の秘密とされた社交クラブだ。
今では数少なくなった伝統と格式高いこの会員制クラブのとある一室に男たちが集まっている。
「また新しいのが来た。」
一人は髭を生やしたブリタニア人。
「どこのだ?」
一人は場に似つかない乱暴な口調で話すカールスラント人。
「ホルスト・ヴェッセルと３１７スコードロン。」

「というとＪＧ２６？」
　一人はこの中では一番若いカールスラント人。
「いやＺＧ２６の方だ。」
「３１７というと我々の部隊か。」
　一人は聞きなれない訛りで話す頑固そうな男。
「ええ、３１７は義勇です。」
「どちみち陸軍ではないな。」
　最後に登山靴を履き鍵十字が描かれたバッジをつけたカールスラント人。
「ところでどこにそいつらはいるんだ？」
　乱暴な口調のカールスラント人が髭を生やしたブリタニア人に聞く。
「５０１」
「我々の管理下に置けるか？」
　今度は頑固そうな男が尋ねる。
「きついですね。５０１は完全独立部隊、他国軍がそう簡単に介入できる部隊ではないです。」
「まあまだマロニーの手元に置かれるよりは百倍マシか。」
　若いカールスラント人が答え、鍵十字のバッジをつけたカールスラント人が愚痴る。
「もし介入したとして、一体どこに連れて行くんだ？ロマーニャはもう無理だろ。」
「ああ無理だ。東部戦線は？」
「この間一個中隊送ったら５０２に持ってかれた。
　なんとか将軍が政治方面から圧力かけて返してもらったがまたそうなる可能性がある。」
「どちみちすぐに介入できる状況で監視が一番か。」
　男たちはそう結論すると席を離れて行った。
　彼らが表舞台に出るのには今しばらく掛かる。

第５話：新人さんとユニットと武器と

リーネ「は、初めましてリネット・ビショップです。」
ハインツ「ああ宜しく、ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐だ。」
ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァク、階級は中尉。」
ミラー「アドルフ・ミラー少尉です。」
翌日、基地の案内のため３人は基地の正面玄関に集められた。そこには気の弱そうな少女リネット・ビショップがいた。どうやら昨日話していた補充要員とやらが彼女らしい。
その後４人はミーナの案内で基地を見て回った。
食堂、司令塔、風呂、シャワールーム、宿舎、高射砲、格納庫ｅｔｃ
その間ミーナ中佐のルールの説明などをされた。ルールのほとんどがドイツ空軍やポーランド空軍、英国空軍と大して変わっていなかったため特に質問もなかった。
そして格納庫から出ようとしてた時、
ノヴァク「すまん。大丈夫か？」
ノヴァクの体に格納庫に入ろうとした整備士の体が当たった。その整備士はノヴァクの謝罪と気遣いに軽く礼をするとまるで逃げるかのように格納庫に入って行った。
ハインツ「なんだアイツ？階級章からして伍長みたいだが一応上官、しかもパイロットに礼だけして名乗らずに逃げるとは。」
ミラー「まったくですね少佐。前だったら最低限すいませんの一言ぐらい言いますよね。」
ミーナ「ヴァレンシュタインさん、ミラーさん、ノヴァクさん、リネットさん、ここでは整備士との接触は最低限とされています分かりましたか？」
ハインツとミラーが整備士の無礼な態度に憤慨しているとミーナ中佐が接触制限の規定について説明した。
「わ、わかりました。」
ハインツ「なんだそのクソみたいなルール。女性ならまだしも俺は

男ですよ。
　同性愛者でもなんでもないんで別にその辺はいいんじゃないですか？」
　ミーナ「分かりました。男であるヴァレンシュタインさん、ミラーさん、ノヴァクさんは特例で整備士との接触制限を廃止します。いいですね？」
　ハインツ「ありがとうございます。」
　ミーナ「それじゃあ次の所に行きましょうか。えっと次は…」
　格納庫から立ち去ろうとするがなぜかノヴァクは自分にあたった整備士の方を見ていた。
　ハインツ「ん？ノヴァク、どうした？何か気になるものでも？」
　ノヴァク「いや、何でもない。」
　ノヴァク（当たった時胸のあたりに硬いものが当たった気がする。拳銃のような気がするが気のせいか？）

　基地の説明が終わり、４人はまた格納庫に来ていた。
　そこにはどことなくスピットファイアに似た円筒形の物があった。
　ハインツ「これは？」
　ハインツが代表して聞く
　ミーナ「これはストライカーユニット、私たちの空飛ぶ箒です。」
　ノヴァク「なんとなくスピットファイアに似てるな。」
　ミーナ「ええ、これはウルトラマリンスピットファイアＭｋⅨ、リネットさんのユニットです。」
　ノヴァク「スピットファイアのＭｋⅨか。あれはいい奴だったよ。
　　なにせ足の長さ以外全てがハイレベルでどんな奴にも負ける気はしないね。」
　ハインツ「スピットファイア…こいつにどれだけバトルオブブリテンで悩まされた事か…こいつに落とされて海水浴したこともあったな…」

ミラー「東部戦線でもこれに乗ったイワンに何回追い回されたことか…」

リーネ「あっ、あのう、もういいですか？」

追う側と追われる側とで全く違うことを思い浮かべているとその後ろからリーネが声をかけてきた。

ミーナ「ええいいわよ。それじゃあ履いて飛んで見てくれる？」

リーネ「わ、分かりました。」

そう言うとリーネはユニットを履き、魔方陣を展開して動き始めた。

ストライカーユニットの離陸を初めて見る三人は最初に出てきた青い円に驚いたが動き始めて離陸滑走から離陸する光景を見てどことなく飛行機に似てるなと思っていた。

離陸したリーネはどうやら先に離陸していたらしい坂本少佐とペリーヌに先導されて編隊飛行やアクロバット飛行などを始めた

ノヴァク「ほーうまいもんだな。だけどどっか動きが硬いな。ああいう奴は戦場だと真っ先に狙われるぞ。」

ハインツ「良し悪しはわからんが下手くそに見えるな。５０１ってのは教育部隊か？俺なら即日訓練部隊に送り返す手続き始めるかベテランと組ませるな。」

ミラー「正直動きが鈍いですね。あれなら簡単に撃ち落とせますよ。」

ミーナ「ええそうね。あなた方の言う通り動きが鈍いわ。書類によると訓練部隊から直接送られてきたみたいですから仕方ないとはいえ。」

少なくともかつてＲＡＦやルフトヴァッフェで数々の空中戦を生き抜いてきた彼らから見るとリーネの空中機動は鈍いと感じるレベルであった。それはミーナも感じていた。

そうしているとリーネと坂本たちが降りてきた。リーネは挨拶をするとそそくさと離れていった。

坂本「リーネだが正直言って動きが鈍い。マロニーの差し金で送られてきたとはいえひどい。」

ミーナ「美緒もそう思う？ヴァレンシュタインさんたちもそう言っていたわ。」
ハインツ「正直あの手のやつが来て何人も一ヶ月と経たないうちに死んでいくか病院に行くのを見てますから不安ですよ。」
坂本「その話ぶりからすると指揮官だったのか？」
ハインツ「まあ一応ね。よく書類偽造して物資とか掠め取ったりしてたけどね。ところで私たちが来たのは彼女を見ることだけですか？」
ミーナ「それもあるけどストライカーユニットの訓練をしたかったのだけどさっき上から専用のユニットを明日空輸して来るそうよ。だからその訓練は明日になるわ。」
ハインツ「で、それだけですか？」
ミーナ「ユニットがどうにもならない以上、先に武器を決めましょうか。」
ユニットを明日空輸して来るらしいのでそれより先に武器を決めることになった。

射撃場に場所を移した彼らはそこで少なくとも見慣れた各種武器が並べられていた。
ハインツ「こいつはＭＧ４２だな。サドルマガジンなんて見たことないが。」
ノヴァク「ブレンにボーイズ、ＢＡＲにＭ１９１９。なんでもありだな。」
ミラー「ＭＰ４０なんて航空軍団時代以来ですよ。ＰＰＳＨは東部戦線で使ったことありますけど。」
ミーナ「で、あなたたちはどれを使うの？」
銃選びについては三者三様であった。
少なくとも航空軍団（ルフトヴァッフェに入隊した際最初に基本訓練を受ける部隊）でＭＧやＭＰの取り扱いの訓練を受けたことのあるハインツとミラーはＭＧ４２とＭＰ４０に興味を持っていたがハイ

ンツにはＭＰ４０をあまり信用していなかった。
かつてバトルオブブリテンの頃に同僚の一人がＭＰ４０の前のモデル、ＭＰ３８で暴発事故を起こして死亡していたのである。そのためＭＰ４０とその系列の銃には苦手意識があった。
ミラーの方は特に苦手意識もなくＭＧ４２に興味を持っていたが最初の空中戦で１３ミリクラスのＭＧ１３１を大量に撃ったのにあまり効かなかったことから８ミリモーゼルを使うＭＧ４２に疑念を抱いていた。

ノヴァクの方はさらに酷いと言えた。少なくとも彼には〝ドイツ製〟ということそのものに拒否反応があった。
そのためいくらカールスラント製とはいえ〝ドイツ軍が使っていた〟武器を使う気にはなれなかった。
さらに持ち前の反ソ反露感情からオラーシャ製の武器も使いたくなかった。
結果、選べる武器はブレン・ボーイズ・ＢＡＲ・Ｍ１９１９・九九式などのみとなったがどれも彼からすれば馴染みのない武器、Ｍ１９１９あたりはスピットファイアにも積まれていたから見覚えはありＢＡＲもポーランドでのライセンス生産版のｗｚ．１９２８の取り扱い訓練を過去に受けたことがあるので完全に無関係とは言い難いがＢＡＲとｗｚ．１９２８はベースは同じとはいえ見た目が大きく違っていた。
ｗｚ．１９２８はＢＡＲと違い銃床の形状やピストルグリップの有無、銃身の交換機能という点で異なっていた。
その他の九九式はそもそも聞いたことすらなくボーイズは昔北アフリカ時代に前線の兵士から聞いた話だが評判が悪かったのをなんと無く覚えていたためあまり使いたいものではなかった。
その他の候補はエリコン２０ミリ、Ｍ２、なぜかあるロマーニャ製ブレダＳＡＦＡＴ、一体どこから持ってきたか分からないジョンソンＭ１９４１、骨董品のようなルイス機関銃、オストマルク？製だというゲバウエルとかいう外部動力式機銃（弾はなぜかブレダと同じ）、も

はや何年振りに見るか分からない懐かしいＮＫＭ機関砲、ブレンそっくりのＺＢ２６、ヘルウェティア製らしいがドイツ軍が使っていたような気がするゾロターンの対戦車ライフル、明らかに見た目が貧弱なブレダＭ３０、ガリア製とかいうＦＭｍｌｅ１９２４、どれもこれも妖怪みたいな怪しい武器ばかりだった。

この怪しい武器の山を見てどう見ても希望のものがあるわけがなかった。

ノヴァク「中佐、ｗｚ．１９２８ってありますか？」

ミーナ「ｗｚ．１９２８？ええ、確か倉庫に前いた隊員が使っていたのがあった筈よ。」

ノヴァク「それ持ってきてください。」

数分後ミーナ中佐が持ってきたのはＢＡＲによく似たライフル、ポーランド製、この世界ではオストマルク製の機関銃ｗｚ．１９２８だ。

それを貰い数発試し撃ちすると

ノヴァク「中佐、俺はこいつを使います。別に構いませんよね？」

どうやらこれに決めたらしい。

翌朝、朝食を食べミーナ中佐など基地の主だった面々や整備士とともに格納庫の前に来ていた。

するとレシプロ機特有の轟音が聞こえてきた。

やってきたのはブリタニア空軍特有の三色迷彩を施した４発機、どことなくランカスターに似た輸送機。

ＭＷ２１６のマーキングが書かれたアブロ・ヨークだった。

第６話：航空兵よ飛翔せよ

ドッリオ「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐ですね。自分は連合軍西方総軍第４特殊兵器科所属のフリオ・Ｎ・ドッリオ技術中尉です。

今回は男性ウィッチ用の新型ストライカーユニットの輸送および技術的な説明等のため来ました。」

着陸したアブロ・ヨークから降りてきたのはロマーニャ人の技術将校らしい青年だった。

そして機体から降ろされたのは一つはスピットファイア、もう一つは見慣れないユニット、それに大砲らしきものが付いたユニットだった。

ドッリオ「えー今回もってきたユニットはウルトラマリンスピットファイアＭｋ．Ⅸｅ、メッサーシャルフＭｅ４１０Ｂ―２／Ｕ２、メッサーシャルフＭｅ４１０Ｂ―２／Ｕ４です。

それぞれ男性ウィッチ用に改造が施されてます。

主な改造に耐久性の強化、ユニットの口の拡大、靴を履いた状態でのユニット使用を可能にした点ですね。

これにより出動時間の短縮とともに不時着後の生残性の向上、サバイバルでの生存率の向上が見込まれます。

スペックについてはこちら、スピットファイアは通常のＭｋ．Ⅸより低空域向けに調整されたほか速度性能、上昇性能等が向上。そのかわり高高度域での機動性が低下しています。

Ｍｅ４１０Ｂ―２／Ｕ２の方は双発ユニットらしく機動性は低いですが上昇性能、火力などの面で上回ってます。

装備はＭＧ１５１／２０を４門使用可能です。

Ｍｅ４１０Ｂ―２／Ｕ４はＵ２と比べて機動性が低下したものの、装備として新型の５０ミリ機関砲ＢＫ―５が搭載され大型ネウロイさえも一撃で撃墜可能、その代わり装弾数が２０発前後なの

で射撃技量の優れた人が望ましくまた小型ネウロイに対しては性能との兼ね合いから非常に戦闘に不向きなので基本的に大型ネウロイ特化というかなりアクの強い性能になってます。」

ユニットが降ろされると格納庫でユニットの説明が行われていた。

ドッリオ「これらのユニットはすべて既存のユニットの改造型ですので整備パーツに関してはほとんどが既存パーツと共用できます。

また整備に関してはこちらで用意した整備マニュアルに従ってください。説明は以上ですね。」

ミーナ「ではユニットもそろったところで訓練をしましょうか。」

ミーナと坂本、そして三人と技術将校のドッリオ中尉は格納庫にいた。

彼らのユニットの試運転のためである。

初めはバルクホルンがテストしようとしたが口が通常の男性が服と靴を着た状態で使用できるようにセットされていたのでいくら鍛えられた軍人とはいえバルクホルンでは細すぎ使えなかった。

そのため三人の訓練の一環としてテストが行われることになった。

ノヴァク「でっ、これを履けばいいんだな?」

先陣を切ったのはスピットファイアを使うノヴァク、恐る恐る両足をユニットに入れる。

足を膝まで入れてその瞬間、彼に電流が体を突き抜けたような衝撃が襲った。

見ると頭と尻に先が黒い白色の羽が生えていた。

ノヴァク「なんだったんだ今のは…ん、なんだこりゃ?羽か?」

坂本「これは鶴か?」

ミーナ「というよりコウノトリじゃないかしら?あなた動物を触ったことは?」

ノヴァク「動物を触ったこと…あっ…」

動物を触ったことと聞かれて何か思い出したようだ。

ノヴァク「ポーランド空軍の訓練生時代に練習機でコウノトリの群れに突っ込んでバードストライク起こして死にかけたことなら。も

しかするとその時かと。」
ミーナ「間違いなくそれね。使い魔と契約したのは。」
ノヴァク「使い魔ってなんです?」
ノヴァクが質問する
ミーナ「使い魔っていうのは魔法力を行使するときに補助する動物のことよ。例えば私は狼、美緒はドーベルマンという風にウィッチはほとんどの場合使い魔がいるの。」
坂本「お前の場合はコウノトリ、まあ契約したのが事故なのは大変だったが。」
「バードストライクで契約とかジョーク紛いの方法だな。」
ミーナ「それじゃあまず、ユニットに魔力を流してくれるかしら?」
ノヴァク「どうやって?」
魔力を流せとかいうがそもそもどうやってやったらいいか分からないのであった。
だが次の瞬間何かひらめいたかのようにぶつぶつ唱え始めると魔道エンジンがかかり青色の円陣が現れた。
ミーナ「すごいわ、初めてやったとは思えないわ。」
坂本「ああ、普通そこまで行くのに数カ月は掛かる筈だ。」
ノヴァク「同じスピットファイアならエンジン始動手順も同じだと思ってマーリンのエンジン始動手順を唱えながらやってみたがこれでいいのか」
坂本「ああ大丈夫なはずだ。それじゃあ私について離陸してくれ。」
坂本がそう言うと隣の発進台に置いてあった自分のユニットを履き同じようにエンジンをかけて離陸し始めた。
ノヴァクはそれを追いかけて離陸した。
離陸後は始めは上昇しすぎたり急降下していたがエンジンがスピットファイアと同じように動くなら機体もスピットファイアと同じように動くのでは?と考えスピットファイアの操縦をイメージしながら飛ぶと飛行が安定し始め坂本の機動性能の高い零戦にもしっかり食らいついていた。それどころかスピットファイアのやたら高い上昇力を生かして坂本を追い回しているように見えた。

だがその飛行にはどこか違和感があった。
ハインツ「なあリネットってあんなに速く飛んでたか？」
ミーナ「確かに、スピットファイアはあんなに速く飛べないはず。」
そう、〝何故か〟通常より2、3割速く飛んでるように見えていた。
しばらくすると二人は降りてきた。
ミーナ「すごいわ、初めてであんなに上手に飛べるなんて。」
ノヴァク「そうなのか？スピットファイアを操縦するイメージでやってたがこれでいいのか？」
シャーリー「ところでお前の固有魔法はなんだ？さっき見た感じでは私と同じ加速みたいだったけど。」
ノヴァク「固有魔法？」
シャーリーが固有魔法について聞いてくる。
ミーナ「固有魔法は一部のウィッチが持っているその人しか使えない魔法の事。
私の場合3次元空間把握よ。」
ノヴァク「なるほど、ところでなんで加速だって聞いてきたんだ？」
シャーリー「ああお前が飛んでた時、リネットより早く飛んでるように見えたんだ。それで固有魔法は加速じゃないかなって。」
ノヴァク「ふーん。加速ねえ…役に立たなさそうだな。」
シャーリー「まあ新しいライバルができたと思えば万々歳かな？」
固有魔法が加速と判明して新しいライバルができたと喜ぶシャーリーだった。

ミーナ「それじゃあ次はヴァレンシュタインさんとミラーさんね。」
ハインツ「それじゃあ俺から。こいつに足を入れて、うぉ！」
続いてストライカーユニットＭｅ４１０Ｂ―２／Ｕ２に足を入れたハインツだったが、こっちは体を電流を突き抜けるような衝撃と同時に頭の中に基地の構造、遠くの兵士の話声等々が一瞬にして入ってきた。

その情報量に一瞬で気絶した。
それからしばらくして、気が付くとユニットを脱がされ、格納庫の端に寝かされて皆に見られていた。
ハインツ「ウェ…今のはなんだったんだ…ついでにまだ気分が悪い…おぇ…吐きそう…」
バルクホルン「ヴァレンシュタイン、大丈夫か？」
ミラー「少佐、無理そうなんで先やりますね？U2の方使っても？」
ハインツ「U2は俺が使うからU4使え。ついでにバケツ持ってきてくれ。吐きそう…」
格納庫の隅でハインツがバケツに吐きながら（なぜか使い魔の耳は出しっぱなし）横でバルクホルンが背中をさすっているのを横目にミラーの訓練が先に始まった。
ミラー「えっと、これに足入れて…うぉ！」
こちらも大砲が付属品としてついてるユニットに足を入れた瞬間、体に電流が流れたような衝撃を受けた。
頭には犬と思われる耳が生えていた
坂本「犬か…動物と触れ合った経験は？」
ミラー「動物ですか？…子供の頃に勝手に他人の家に入ってそこの番犬に襲われて入院したことなら。そのせいで今でも犬は苦手です。」
坂本「…すまない。犬種は分かるか？」
ミラー「うーん？たぶんこれはエスターライヒッシャー・クルツハーリガー・ピンシャーですかね？」
坂本「エスターライヒッシャー・クルツハーリガー・ピンシャー？」
ミラー「一般的にオーストリアン・ショートヘアード・ピンシャーって呼ばれている犬ですよ。
オーストリア国外ではかなり珍しいらしいですけど。」
坂本「そうなのか。まあそれよりユニットに魔力を流してくれ。
飛行機のエンジンをかけるイメージでやればいいらしいぞ。」
ミラー「えーと、どうやって？」
忘れがちだがミラーはただの後部銃手である。確かに階級は少尉

で一応士官だがそれは単に彼が元々ある程度の高等教育を受けて英語とイタリア語が話せたため士官教育を受けただけである。
それで東部戦線に送られたが後部銃手としてでは無く警備部隊の将校だったがその警備部隊が向かってる途中に壊滅してしまい成り行きでハインツの部隊に送られ、成り行きで後部銃手にさせられたある意味可哀想な経歴なのである。
なので飛行機なんて全くわからないのである。
ここから長くなるので割愛するが色々やった末エンジンをかけて離陸することには成功したがそのまま非常にアクロバティックな飛行をした末、管制塔に突っ込んだのだった。

ミーナ「はぁ…窓ガラスの修理代が…」
ハインツ「気分は落ち着いたとはいえミラー大丈夫かあれ。怪我してなきゃいいけど。」
その頃には胃の中にあったものを全て出し終えてすっかり回復（なお耳は出しっ放し）していたハインツだった。
ちなみにバルクホルンはこの時バケツいっぱいの吐瀉物（比較的綺麗な言い方）をトイレで処理中である。
ミーナ「あらヴァレンシュタインさん大丈夫なの？」
ハインツ「中佐一応大丈夫です。胃の中のもの全部出したんで。」
ミーナ「ところでさっきなんで気絶したのかしら？」
ハインツ「頭の中に一瞬で基地の構造とか遠くを飛んでる何かの情報とか遠くで話してる人の声とか自分がぶっ倒れる映像が入ってきて気絶したんです。
なんでか分かりますか？」
坂本「固有魔法みたいだが聞いたことないぞ。
魔導針と立体空間把握と未来予知と超聴力が一緒の魔法なんて。」
ミーナ「まさかとは思うけど感知系魔法を全て使えるとか？」

ハインツ「感知系魔法？」
ミーナ「感知系魔法はいわゆる美緒の魔眼などのようにいわゆる探知系の魔法のこと。基地の構造は立体空間把握を遠くに飛んでる何かの情報は魔導針、遠くで話している人の声は超聴力、自分が倒れる映像は未来予知ね。」
ハインツ「なるほど。というと俺はその全部が使えるというわけか。
やったぜ。これでゲームでインチキできるし酒と物資も盗めるし女風呂も覗けらぁ。」
ミーナ「ヴァレンシュタインさん？」
明らかに固有魔法を碌でもないことに使おうとするハインツだった。
坂本「ところで使い魔はなんだ？今も耳出しっぱなしだが？」
ミーナ「犬系みたいだけど何か心当たりは？」
ハインツ「うーん？心当たりが多すぎて迷う。
憲兵のシェパードに１０回以上追いかけられたし野良犬に襲われたこともあるし狂犬を殺したことも何回もあるからなあ…
一番思い当たるのはパイロット候補生時代に近くの施設から逃げ出した警察犬と軍用犬を回収した時か？
あの時何故かボヘミアン・シェパードが一匹見つからなくて自分にその容疑がかかったけどそれかな？」
ミーナ「貴方達使い魔と碌な出会い方してないわね…
バードストライク、怪我、冤罪って…」
全員が揃って碌な出会い方をしてないことを飽きられていた。
坂本「まあそれより回復したみたいだからユニットの訓練をするぞ。」
ハインツ「大丈夫か、ホント…」
恐る恐る足を入れるが特に何事もなかった。
ハインツ「えーと、大丈夫、みたいですねはい。」
坂本「よし、ならユニットに魔力を流してみろ、できたら私に続いて離陸だ。」

坂本に言われてノヴァクが言っていた様に飛行機のエンジン始動手順を思い出しながらやるとエンジンが掛かった。
そのまま離陸可能出力まで出力を上げると坂本に続いて離陸した。
こちらも初めは無茶苦茶な飛行をしていたがしばらくすると安定して飛び始めあっという間に機体のクセを掴んでこちらも坂本少佐を追いかけるどころか逆に追い回せるレベルまでになった。

ミーナ「ヴァレンシュタインさんとノヴァクさんはどちらもすぐにでも実戦投入可能、ミラーさんは訓練が必要だけど有望って感じね。」
坂本「ああそうだな。ミラーの方はまさか固有魔法が偏差射撃とはな。将来有望なスナイパーになるな。」
それから数時間後、ミーナと坂本は執務室で3人のことについて話していた。
3人の飛行訓練の後、管制塔の窓ガラスをすべて割ったにも関わらず奇跡的にシールドを張ったおかげで傷一つつかなかったミラーはそのまま回収され、ハインツが訓練している間医務室で寝ていたが、ハインツが着陸した頃に格納庫に戻り、今度は射撃訓練を行うことになった。
というのもミラーの使うＵ４の５０ミリ機関砲、５０ミリＢＫ―５はぶっちゃけⅢ号戦車Ｌ型などに積まれていた５０ミリ砲の機関砲版、見た目は2期４話などで使ってた５０ミリ機関砲のまんまである。
そのため専用の訓練が必要であった。
結果、ミラーは海岸に設けられた暫定的な試射場（ちょっと広い海岸の原っぱとその先の海に適当な浮の上に乗せたドラム缶程度の設備）にへとへとで体中が悲鳴を上げてるのに連れて行かれたのだった。
ちなみに疲れてるから明日やらないか?と提案したミラーだったが
「なにウィッチに不可能はない」

とどこぞの少佐に即却下された。ひどい
そのためどこか遠い目をしたままユニットごと射撃場にやってきて、ユニットを履いて５０ミリ砲を構えて、５００メートル先に浮かべたドラム缶を狙ったのだがここであることが起きた。
波や風で頻繁に動くドラム缶の動きを予知できたのである。そしてその予知したところに撃ちこむと見事ドラム缶を木っ端みじんになった。
このことをミーナや坂本に伝えるとスナイパー向きの固有魔法、偏差射撃と言われた。
一撃で大型ネウロイを屠れるが弾数が２０発前後しかないＢＫ―５向きの固有魔法である偏差射撃はミラーとしても都合がよかった。
そんなこんなあって３人の役割や訓練、実戦の見通しが立っていた。
坂本「まあ役割としてはミラーがスナイパー、ヴァレンシュタインをその援護と指揮、ノヴァクがシャーリーあたりと組ませるか。」
ミーナ「ええ、それが妥当ね。ただリネットさんが委縮しないかしら？自分とほぼ同じ時期に来た自分より優秀な人が３人もいるんだし。」
リーネが委縮する、このことが現実になるのには時間はかからないかもしれない。

ほぼ同時刻、格納庫では
整備士「どうだ３のワンペアだ。」
ハインツ「ふん、５のスリー・オブ・ア・カインド。」
整備士「クソ！負けた！」
ハインツ「ガハハハハ！大儲けだぜこれで３０００ポンド。ミラー、今度これで飲みに行こうぜ。」
ミラー「あー少佐？それ以上やったらまた憲兵呼ばれる気が…」
格納庫ではハインツ、ミラー、ノヴァクの３人が整備士たちとポーカーに興じていた。

そしてやたらこの手のゲームや賭け事が得意なうえにやたら強いハインツの独断場と化し、整備士全員から合計３０００ポンド（ちなみに３９年のライヒスマルク／ポンドのレートは大体１００マルク／９ポンドである）を巻き上げていた。

なおドイツ軍時代も同じようなことやって何度も憲兵にしょぴかれてるが全く気にしてはいなかった。

ノヴァク「大体３００ポンドか…ジャムぐらいは買えるかな？」

その奥ではしれっとポーカーに参加して３００ポンドを巻き上げていたノヴァクが札を数えていた。

するとそっとウォッカが隣に置かれた。見上げると昨日の整備士がいた。

ノヴァク「あ、お前昨日の整備士。」

トゥルーヒン「昨日すまなかったな。ルールで接触を禁じられててな。おっと自己紹介がまだだったなアドリアン・トゥルーヒン。オラーシャ陸軍所属の整備士だ。」

ノヴァク「あ、ああ宜しくトゥルーヒン。アレクサンデル・ノヴァクだ。このウォッカは？」

トゥルーヒン「昨日ぶつかったことへの謝罪のやつだ。もしかして酒飲まないか？」

ノヴァク「いや、酒は大好物だ。一緒に飲むか？」

トゥルーヒン「ぜひ。」

この宴は、金を巻き上げすぎたハインツにキレた整備士が憲兵を呼びに行こうとしてハインツが平謝りするまで続いた。

第7話：実戦

ユニットを手に入れて数日後、
シャーリー「なあ、あんたらカールスラント人だけどなんでコーラばっか飲んでんだ？」
ハインツ「んなの決まってるだろ。戦争で丸５年コーラが飲めなかったんだ。今飲んで何が悪い。」
ハインツは格納庫で機械いじりしてるシャーリーの横でコーラを飲みながら寝ていた。
以外と思うが現代はもちろん戦前でもドイツ人はコーラが大好きであった。
元々初期のコーラの製造に欠かせないコーラの実の生産地がドイツの植民地だったため一次大戦前からドイツではコーラが一般的だったのもあるが、ナチスが政権獲得後、よくプロパガンダでアメリカ文化を宣伝していたこともあった。
戦前ドイツではアメリカ文化は積極的に宣伝され、アメリカ文化は非常に身近なものであった。そのためアメリカ文化の象徴たるコーラはドイツでは非常に大人気だった。どのぐらいか？大戦が始まってからコーラの原液の輸入が止まったから代わりの飲料が作られるぐらいには。ちなみにだがその代わりの飲料があのファンタとシュペッツィである。
とにかく、ハインツとミラー、特にミラーは３５年からドイツ国民だったためコーラが大好きだった。
そのため二人がこの世界に来てからと言うもの毎日コーラと代用ではないコーヒーばかり飲んでいた。
本人たちからすれば数年ぶりのマトモなコーラとコーヒーだったため最初に豆のコーヒーを飲んだ時歓喜の涙を流したのは余談だが。
ハインツ「まあコーラの方はミラーの方が好きだ〈ウウウーーー！〉へ？空襲？」
シャーリー「ネウロイだ！」

ミラー「リネットさん、大丈夫ですか？」
リーネ「だ、大丈夫です…」
坂本「リーネ、このぐらいでへばるな。ミラーを見習え。」
ミラー「あんまり無理しない方がいいですよ？無理してぶっ倒れたら元も子もないですし。」
ミラーは丁度このときリーネと一緒に訓練をしていた。
新兵のリーネが訓練で息も絶え絶えなのに対し約２年の実戦経験があり、東部戦線の警備部隊将校としての訓練の一環として歩兵部隊の訓練（空軍なんで結構貧弱だが）もしたことがあるミラーは基地の周り１０週程度は大したことなかった。
坂本少佐のスパルタ訓練にミラーは体力のないリーネを心配していた。
坂本「よし、次はしゃげ〈ウウウ――――！〉ネウロイだ！」
ミラー「は？」

ネウロイの警報に最初に動いたのはシャーリーとハインツだった
警報が鳴ってすぐにユニットを履いて離陸した。
ハインツ「あー管制塔、こちらハインツ。離陸した。現在高度３０００ｍで待機中。」
本当は方位と高度を書いたブラックボードを持った兵士が塔にいるのだがそういう経験がないハインツは見ないまま基地から離れてしまった。そのため管制塔に位置を聞くしかなかった。
ミーナ『ハインツさん、敵はそこから南西に２０キロ、高度は１万。』
ハインツ「フィート？メートル？」
ミーナ『フィートよ。』
ハインツ「了解。敵は一万フィート。シャーリー行くぞ！」
シャーリー「ああわかった。」
そういうと二人は急上昇してネウロイを探し始めた。

ハインツ「このあたりだよな？見つけたかシャーリー？」
双眼鏡を覗きながらハインツが聞く。
シャーリー「いや全く。てか固有魔法使えよ。」
ハインツ「現在使用中。倍率が悪いんだ双眼鏡使わないと実用レベルじゃないんだ。」
ハインツの魔眼は坂本少佐を一般的な双眼鏡レベルとするとオペラグラス程度の倍率しかなかった。
これはほかの物でも同様で魔道針ならサーニャが現代の3次レーダーレベルとするなら60年代製の1次レーダーレベルの性能しかないというようにすべて使えるが全て専門よりも一回り劣っていた。
そのため魔眼を使う時は双眼鏡を使わないと実用レベルではなかった。

ハインツ「えーあ！見えた！正面2時下方！大型数1！」
数分後、ハインツが見つけたネウロイは卵のような形に翼を付けて所々に丸いコブのあるネウロイだった。
ミーナ『ハインツさん。今ノヴァクさんたちを向かわせているから時間稼ぎしてください。』
ハインツがネウロイを見つけたと報告するとミーナ中佐から指示が飛ぶ。
ハインツ「どのぐらい？」
ミーナ『だいたい10分よ』
ハインツ「了解。10分足止めしろってなかなか難しいオーダーじゃねえか。チップは弾んでもらうか。
行くぞシャーリー。とりあえず近づいて様子を見る。」
シャーリー「了解。」
そういうと二人は速度の速いシャーリーを先に向かわせ撃ちまくる。
シャーリー「コアは!?」
ハインツ「待ってろ。上にはない！下だ！シャーリー援護しろ！」
接近して撃ちまくりながらコアを探すハインツ。

魔眼の能力が低いため近づいても上からだとネウロイの上半分しか分からない。
上側にコアがないことが分かるとハインツは一気に急降下、右の翼の付け根から胴体にＭＧ１５１４門を撃ちまくる。
１門でも十分な破壊力を持つＭＧ１５１４門の集中砲火にネウロイはハインツに火力を集中するがそれを未来予知（ただしわかるのは５秒先）で躱したりシールドを張り防御する。
ハインツ「えー、下は…あった！下側の前の方だ！」
コアを見つけるとハインツはコアのある周囲をＭＧ１５１で撃ちまくる。
ネウロイも光線を撃ちまくるがあえて至近距離まで近づいたので全く見当違いの方向に飛んでいく。
ハインツ「はん、ヘタクソが。ヤンキーの爆撃機の方がまともに撃ってくるぜ。」
そんなことを無線でぼやきながらコア周辺を撃ちまくりついにコアを露出させるがここでネウロイの前に出てしまった。
ハインツ「シャイセ！シャーリー後は頼んだ！」
シャーリーにコアをやるように指示してハインツはそのまま急上昇、上面を撃ちまくる。
するとネウロイは粉々になった。
ハインツ「こちらハインツ。ネウロイを撃破した。周囲に敵映なし。帰投する。
中佐、このサービスは追加料金ですぜ。」
最後にジョークを言うと基地に戻った。

ノヴァク「結局、俺は出番なしかよ。」
ハインツとシャーリーに合流したノヴァクは愚痴った。

基地では

ミラー「結局少佐がやったんですか。暇ですね。」
リーネ「そうですね～」
坂本「お前ら、待機中なのにたるんどるぞ！」
リーネ・ミラー「「はい！」」
出撃するタイミングを逃したミラーとリーネはユニットを履いたまま呑気にしていた。
どこか能天気な二人は気が合うかもしれない…

第８話：布石

ヨーロッパの連合軍の組織は北アフリカ・地中海沿岸を管轄する地中海総軍、東部戦線全域を管轄する東方総軍、そしてヨーロッパ西部を管轄する西方総軍の３つに大別される。

そのうち西方総軍の司令部はここ、ロンドンにあった。

西方総軍において５０１は一部部隊とともに総軍直轄部隊として扱われている。

そのため西方総軍の高級将校会議においてミーナ中佐はその中でも最下級の将校ということが多かった。

それはこの日の、大陸反攻のため部隊の移動や装備等の増員に関する会議でも同様だった。

参謀「で、ありましてヒスパニアから第４４連隊と地中海から第２６旅団を移動させドーバーに配備。

書類上は第７軍団の予備部隊としつつも戦術的にはブリタニア南西軍管区の指揮下に置くことになります。」

西方総軍参謀本部の参謀将校が報告する。

ボック「うちの部隊は第７軍団の主力をサウサンプトンとワイトに、第１１３旅団をサウスエンドにおいて増援はドーバーだな。航空部隊は？」

会議に出席している西方総軍参謀本部第１３課課長フェードア・フォン・ボック大将が報告している参謀将校に聞く。

マロニー「それについては私から話そう。」

ボック大将の質問に対しブリタニア空軍代表として出席したブリニア空軍審議官トレヴァー・マロニー大将が発言した。

マロニー「まず通常航空部隊は広範囲に増員、装備についても充実させる。」

ボック「ウィッチ部隊は？彼女らは制空権を得るために必要だ。」

マロニー「ウィッチ部隊は主力となる５０１は補充要員を受け取る。

それでだ、ミーナ中佐、坂本少佐には来週扶桑に帰国して

もらう。」
ミーナ「ちょっと待ってください。いくらなんでも急すぎます。」
マロニー「昨日その連絡が来たんだ。」
ミーナ中佐が驚き抗議するがマロニーはまるで意に介さない。
ボック「まあミーナ中佐の抗議ももっともだ。
マロニー大将、５０１は反攻における航空戦力の主力と同時にブリタニアの防空の要だ。
それなりの補填はあるんだろうな？」
ボック大将がマロニーに聞くが、
マロニー「必要ないだろ。今の時点で十分な成果を上げているんだ。」
ミーナ「ですが坂本少佐はウィッチーズ隊の要です。」
マロニー「別に2か月程度いなくてもいいだろ。この間４人も補充を受けたばかりじゃないか。」
マロニーは５０１に補填は必要ないという。
ボック「それはどうかと思うが？マロニー大将。
彼女らには常に無理をさせているんだ、臨時予算ぐらい構わんだろ。」
マロニー「そんなの金がどこにあるんだ？」
ボックが臨時予算を与えるというがマロニーは反対する。すると、
ボック「このブリタニア軍の書類によるとそちらの空軍の開発予算がかなり多いように見えるが。」
マロニー「そりゃあ開発しなければいけないものはたくさんあるからな。」
ボック「だが予算の額がほぼ同じカールスラント空軍と比べると明らかに多いぞ。
その上そちらが〝開発中〟の兵器の数はカールスラント軍の半分程度、リベリオン軍の方が多いぐらいじゃないか。
それとも何かね、我々には言えない〝何か〟でも作っているのかね？」
マロニー「それは…」

ボックが持ち出した書類から予算に余りがあることを見つけられたマロニーは質問に答えられない。
ボック「我々は〝存在しないもの〟に金は出せない。
では、501に臨時予算を与える。その予算はブリタニア空軍から出される。
異存のない方は挙手。」
ボックが挙手を求め、マロニー以外の全員が挙手する。
ボック「君以外、反対する者はいないようだ。ではこれでよろしいな。
それじゃあ次の議題は?」
ボックが仕切ると次の議題に行き会議は進む…
あるブリタニア人がボックとミーナ中佐をにらんでいることも知らずに…

ミラー「外出ですか?」
ハインツ「いつ?」
ノヴァク「そういや給料日昨日だったな。」
3人が来て1カ月がたち、ミラーもノヴァクも実戦を一通り経験、ハインツに至っては夜間哨戒の任務までやり始めていた。
そんなある日、夕食を食べ終わりまったりしてるとミーナ中佐から外出してくれないかと聞かれたのだ。
ミーナ「次の日曜よ。あなたたち今まで一度も基地から外出してないでしょ。
それに美緒が扶桑に戻るからドーバー駅まで連れて行ってほしいの。」
ハインツ「なるほど、俺は構わんぞ。いい加減基地から出たいし。」
ノヴァク「俺も買いたいものがいくつかあるからいいぞ。」
ミラー「別に僕も構いませんよ。ただ…リーネさんも連れて行っていいですか?」

3人とも了承するがミラーがリーネも連れて行っていいか聞いてきた
ミーナ「リーネさん?」
ミラー「ええ、ここ数日あれで気落ちしてるみたいですし。」
この数日前、リーネはミラーとともに出撃したが戦闘中に魔力のコントロールを失い墜落。
幸い怪我もなかったがこの結果リーネはここ数日すっかり気落ちしていた。
互いにほぼ新人で同じ訓練を受けてしかも互いに比較的上流階級出身(ミラーの家はハプスブルク家の宮廷音楽家で先祖を辿るとオーストリア大公ジークムントの庶子に連なると言われる家)だったためミラーはリーネと仲が良かった。リーネをあだ名で呼ぶぐらいには。
とにかくリーネと仲がいいミラーはリーネの事をよく気にかけていた。
ミーナ「確かにそうね。ええいいわよ。」
すると後ろで聞いていたペリーヌが、
ペリーヌ「あの、坂本少佐のお見送りなら私もついて行ってよろしいでしょうか?」
ミーナ「ええいいわよ。私は仕事でいけないからお願いするわね。」

坂本「しかしこのメンバーとは珍しいな。」
ハインツ「まあ外出希望者がこんだけいたと思ってくれれば。」
次の日曜日、ハインツ、ミラー、ノヴァク、リーネ、ペリーヌ、坂本少佐は車で海岸道路を飛ばしていた。
運転席にハインツ、助手席に坂本少佐、後ろの対面座席にペリーヌ・ノヴァクとリーネ・ミラーと座っていた。
ノヴァク「ところでペリーヌ、ドーバーにいいティーショップあるか?」
ペリーヌ「何を買う気ですか?」
ノヴァク「まあ紅茶とティーセット一式、あとジャム。」

ペリーヌ「ジャム？」

ミラー「リーネさん、ドーバーって行ったことあります？」
リーネ「いえ、一度も行ったことないです。」
ミラー「整備士から聞いたんですけどドーバーにいい感じのカフェがあるらしいですよ。
一緒に行きましょう。」

ハインツ「ケッ、どいつもこいつも女口説きやがって畜生。
俺は一人悲しく土地勘もない場所でぶらぶらしなきゃいかんのかよ…」
後ろで４人がいい感じになっているのにハインツは一人、ものすごい負のオーラを出していた。
坂本「なあハインツ大丈夫か。」
ハインツ「大丈夫ですよ。ちょっとイライラしてるだけですから。ちょっと飛ばしますよ！」
そういうと東部戦線でパルチザンから逃げるために養われたドライビングテクニックでドーバーまで飛ばした。
ドーバーに着いた時、後ろの４人はミラー以外死んだ。ミラーは舌噛んで悶絶した。

リーネ「ミラーさん、大丈夫ですか？」
ミラー「ふぁのふぁろうふぇったいふぉろす（あの野郎絶対殺す）」
ハインツ「それじゃあ坂本少佐、気を付けて。」
ペリーヌ「坂本少佐、はやめにもどってきてください。」
ノヴァク「少佐、さっさと戻ってきてくださいよ。」
坂本「ああ、元気でな。」
ドーバー駅に着いた一行は坂本少佐を見送ると、
ハインツ「で？どーすんだ？俺は特に用事ないからぶらぶらしとくが。」

ノヴァク「俺とペリーヌは買い物。ミラーは？」
ミラー「僕はリーネさんとお茶でもしようかなぁと。」
ハインツ「ミラー、ちょっとムカつくから一発殴らせろ。」
そういうと一行は三つに分かれてドーバーの街に消えた。

三組に分かれた一行のうち、ノヴァクたちはペリーヌの案内でティーショップに来ていた。
店員「いらっしゃいませ、何かご用でしょうか？」
ノヴァク「ティーセット一式と紅茶。あと木苺のジャムはあるか？」
店員「少々お待ちください。」
そういうと店員が店の奥に消えると後ろにいたペリーヌが聞いてきた。
ペリーヌ「ティーセットと紅茶は分かりますけどジャムってどうしてですか？」
ノヴァク「ああ、ポーランドじゃ紅茶にジャムを入れるのが普通だからな。今度飲むか？」
ペリーヌ「ぜひお願いいたしますわ。」

唯一、一人になったハインツは特に土地勘もないドーバーを一人歩いていた。
ハインツ「そこの御嬢さん、一緒にお茶でもどう？」
女性「結構です。」
適当に見つけた女性にナンパしていたがことごとく撃沈されていた。
ハインツ「シャイセ！別に一人でいいんだよ…一人で…悲しくなんかないやい！」
別に目から汗が噴き出していたりするが本人は気にしてなかった。

最後にリーネとミラーの二人はドーバー港近くの海が見えるカ

フェに来ていた。
ミラー「えー、コーヒーとショートケーキ。リーネはどうする？」
リーネ「えっと…紅茶とショートケーキで。」
店員「かしこまりました。」
リーネ「あの、なんでここに誘ったんですか？」
店員に注文した後、リーネが聞いてきた。
ミラー「ん？いやここ数日目に見えて落ち込んでたからさ。気分転換にどうかなって思って。
駄目だった？」
リーネ「いや、そういうのじゃないんです。ただ…」
ミラー「ただ？」
リーネ「私みたいな落ちこぼれに構うなんかよりも…」
ミラー「リーネ、君は勘違いしてるよ。
別に君のことを落ちこぼれだとは１ミリも思ってないし大体みんな初陣はそんなもんだよ。
僕だって後部機銃手で初めて出撃した時、味方機を敵機と思って撃ったことあったし。」
リーネの質問に丁寧にミラーは返した。
彼自身、かつて東部戦線で初めて出撃した際、味方のＢｆ１１０をソ連のＰｅ―２と思い銃撃したことがあった。
リーネ「そうなんですか。あと一つ聞きたいことがあるんですけど。」
ミラー「ん？なに？」
リーネ「そのー「お待たせしました。ショートケーキ２つとコーヒーと紅茶です。」
リーネは何か聞こうとした瞬間、店員が注文の品を持ってきた。
ミラー「コーヒーは自分。紅茶は彼女に。」
店員「はい。ごゆっくり。」
ミラー「うん、いい香り。コーヒーはやっぱり豆のやつに限る。
で、リーネ聞きたいことってなに？」
リーネ「あの、ミラーさんたちはいったい何者なんですか？

ソビエト?とかナチス?とかっていう話してるし男性のウィッチなんて聞いたことないし見たことない勲章付けてたり帽子のマークがカールスラントじゃないですよね。

だから…」

ミラー「おっと、そこまでだ。この先は場所を変えて話した方がいい。

今はとりあえずこの風光明媚なドーバー海峡と白い崖を楽しもうか。」

ミラーはリーネの話を止めると、コーヒーを一口飲んだ。

それから数十分後、二人は人気のないドーバー港の端にいた。

リーネ「あの、ミラーさん。なんでここに?」

ミラー「ん?なんでって聞かれると相当不味いことを言うからね。

こういう所の方が都合がいいから。

本音としては基地で話したいけどここで聞かれちゃったからね。」

そう言いながらミラーは周囲を念入りに確認する。

周囲に誰もいないことを確認すると、

ミラー「これから言うことは他言無用、もし誰かに言ったら君の頭をブチ抜く。いいね?」

懐から護身用に持ち出していたＰＰＫを見せながら言った。

リーネ「え…な、何を話すんですか?」

ミラー「これから言うことは全て真実。君からすればお伽話、それもかなり後味の悪い方の奴だ。

それでも聞きたいか?」

動揺するリーネに最後の確認をする。しばらくするとリーネが頷いた。

ミラー「覚悟はできたみたいだね。それじゃあ話そうか。」

そう言って自分たちのことを話し始めた。

全て話し終わってあと、リーネの顔は暗かった。

ミラー「これが僕達の真実だ。分かったね?このことを話すのはこ

れが最後。いいね。」
リーネ「あ、あの。ミラーさんを信じていいんですね？」
リーネが聞いてきた。
ミラー「信じていいよ。僕はそれほど悪人じゃない。
少なくとも理由なく人を殺した事なんてないからね。
おっと、こんな時間だ。少佐たちが待ってるはずだ。リーネ
行こうか。」
そう言うと2人は駅の方に消えていった。

第9話：チート野郎参上

ハインツ「おぇ…気持ちわりぃ…」
ミラー「典型的な二日酔いですね…」
ペリーヌ「まったく、坂本少佐が帰ってきたらあきれますよ。」
ハインツ「へへ、別にあいつにどう思われようと知るかよ…そういうの気にするのお前だけだろ…」
坂本少佐が扶桑に帰って約2か月程経った後、坂本少佐が帰ってくる日。ハインツとミラーは格納庫にいた。
ハインツは昨日、1人で酒を飲みまくり二日酔いの真っ只中だった。
ペリーヌはその醜態に呆れていた。
すると
ミラー「あ、二人帰ってきたみたいですね。」
ミラーがエイラとサーニャが帰ってきたのに気がついた。
ハインツ「あ、おかえりー。気持ち悪りぃ…」
ハインツとミラーが格納庫から出て出迎えているとノヴァク「お帰り。紅茶いるか?レモンティーだが。」
シャーリー「おかえりー」
なぜか水着姿で日光浴しながら紅茶を飲んでるシャーリーとルッキーニ、その隣にテーブルとティーセットを用意して優雅に紅茶を飲んでいるノヴァクがいた。
ペリーヌ「相変わらず緊張感のない方々ですこと。そんな格好で…戦闘待機中ですわよ。」
ハインツ「まあそんなカリカリすんな。俺にとっては二日酔いも飛ぶいいもの見せて貰ってるけどな!」
その瞬間ハインツにフックが入った。どうやら青の一番を怒らせたらしい。
シャーリー「それに見られて減るもんじゃなーい。」
ハインツ「全くもってそうです。」
ルッキーニ「ペリーヌは減ったら困るから脱いじゃダメだよー」

ハインツ「俺は小さいのもいいけどな！」
次の瞬間ハインツはストレートとジャブを連続で食らった。
ハインツ「ペリーヌ…もうちょっと手加減してくれても…」
ペリーヌ「因果応報ですわ。」
ハインツが腹を抱えて悶絶していると…
＜ウウウウウーーーー!!＞
シャーリー「敵!?」
ペリーヌ「まさか、早すぎますわ!?」
ハインツ「えーなんでこのタイミングなんだよぉ…」
すぐに悶絶していたハインツはミラーとともに発進台に向かい出撃した。

ハインツ「バルクホルン、いつも通り、俺はミラーの射撃を指揮する。
前衛は任せた。」
バルクホルン「了解した。」
先に離陸したハインツとミラーの二人は後から来たバルクホルンたちが追い付き赤城の方へ向かっていた。
ハインツ「バルクホルン、見えたぞ。坂本少佐となんか明らかに飛び方のヤバいのがいる。
誤射に気をつけろ。ミラー、射撃用意。あの二匹が離れたら撃て。」
ミラー「了解。」
ネウロイから離れてミラーとハインツは待機、ミラーのＢＫ５は射程が長いのにまともな光学照準器がないためハインツの観測で撃つ必要があった。
双眼鏡でネウロイの動きを観測するハインツ
ハインツ「今、ネウロイのそば飛んでる明らかに動きのヤバい奴が離れたら撃つぞ。射撃用意」

双眼鏡をのぞき、動きのヤバいウィッチがネウロイから離れた瞬間、
ハインツ「今だ！射撃開始！」
次の瞬間隣のミラーから５０ミリ砲弾５発が発射、数秒後、全弾ネウロイに着弾、破壊した。
バルクホルン「ネウロイの消滅を確認した。戦闘終了。」

ハインツ「やったぞハインツ。全弾命中〈バン！〉大丈夫か！」
ミラー「うわ！」
ミラーに顔を向けた瞬間、ミラーの左のユニットが爆発した。ユニットパネルがはじけ飛び内部の機構が剥き出しになった。
ハインツ「こちらハインツ、緊急事態発生！ミラーのユニットが爆発した！
今すぐ来てくれ。ミラー、今すぐ重量物を捨てろ！」
ミラー「了解！」
そういうとＢＫ５をハインツに渡した。
ハインツ「肩貸せ。左のユニットは燃えてないな。」
ミラー「ええ、とにかくさっさと戻りましょう。」
そうこうしているとバルクホルンたちが戻ってきた。
バルクホルン「ミラー、大丈夫か。」
ハインツ「とにかく急ぐぞ。バルクホルン、ミラーを頼む。」
バルクホルン「ああわかった。」
ミラーはバルクホルンに抱えられ、基地に戻った。

それから数時間後、なんとか基地に不時着したミラーは念のため検査を受け全く問題なかったため格納庫にいた。
整備士Ａ「これは酷いな。」
整備士Ｂ「ええ酷いですね。」
ユニットの修理をしている整備士たちは中を見て酷いとしか言いようがなかった。

ミラー「どうですか？」
整備士「ああ、ここ見てくれ。」
修理の様子を見に来たミラーは整備士に中の一部を見るように言われる。
ミラー「破断していますね。金属疲労ですか？」
整備士「ああ、金属疲労だ。想定だとたしかこの部分はあと５０時間は使えるはずだった。
それなのにこれなのはたぶんあれだな。」
整備士は格納庫の隅に置かれたあるものを見た。
ミラー「ＢＫ５ですか…」
整備士「ああ、あれの反動で設計時以上の速度で金属疲労が進んだ。
そして今日、あれを連続で撃った反動でとうとう破断した。」
ユニットが爆発した理由、それはＢＫ５の反動でかかる負荷により金属疲労が想定以上に進行、結果想定より早く内部のパイプが破断し内部で爆発が発生した。
ヘタすればエンジンオイルに引火しかねないものだった。
ミラー「使えるようになるのにどれぐらいかかります？」
整備士「早くて２週間。戦闘に耐えられるレベルまで直すのに３週間。
ＢＫ５を撃っても問題ないレベルにするのに１か月。
これが限界だ。」
ミラー「そうですか。つまり１か月出撃不能ですか。」
整備士「まあそうなるな。ＢＫ５以外使うなら２週間で行けるが。」

その日の夜、ハインツ含めた５０１のウィッチ全員が集まった。
坂本少佐の隣には扶桑からつれて来たらしい昼のヤバい飛び方していた奴がいた。
坂本「えー、本日付で連合軍第５０１統合戦闘空団に配属となった宮藤芳佳だ。」
宮藤「宮藤芳佳です。よろしくお願いします！」

第10話：新入り

朝、ハインツとミラーは起きるといつも顔を洗い、髭を剃り、歯磨きして、昨日の内にアイロン掛けした軍服を着て、勲章類を付けた後、朝食に向かう。

ノヴァクも大体同じだがさらにそこに朝のお祈りも加わる。

この日は新入りの自己紹介のため基地の部屋に集まっていた。

ハインツとミラーはなぜかコーヒーと目玉焼きを乗せたトーストも持ってきて食いながら話を聞こうとしていた。

ノヴァク「お前ら…朝食はほかのとこで食えよ…」

ハインツ「仕方ねえだろ。昨日夜遅くまで書類と戦争したせいで寝たの2時だったんだからさ。

大体どこぞ少佐が全く書類を処理しないししたところでミスばっかだから苦労するんだよ。」

ミラー「僕の場合、昨日の夜遅くまで整備士とユニットの修理の打ち合わせしてましたから。」

ハインツ「ああ、ユニットどの位で直るんだ?」

ミラー「最低1か月はかかるみたいです。」

ノヴァク「それは御愁傷様。」

ノヴァクとハインツ、ミラーが朝食食べながら話しているとドアが開き、ミーナ中佐が宮藤とかいう新入りを連れて入ってきた。

そして壇上に上がると手を叩いた。

ミーナ「はい、皆さん注目。改めて今日から皆さんの仲間になる新人を紹介します。

坂本少佐が扶桑皇国から連れてきてくれた、宮藤芳佳さんです。」

宮藤「宮藤芳佳です、皆さんよろしくお願いします。」

そういうと宮藤がお辞儀する。

ミーナ「階級は軍曹になるので、同じ階級のリーネさんが面倒を見てあげてね。」

リーネ「は、はい…」

ミラー「中佐。僕今暇なんでリーネの手伝いしましょうか？」
リーネが自信なさげに答えるとミラーがリーネの手伝いに立候補した。
ミーナ「ええいいわよ。
じゃあ宮藤さん、必要な書類、衣類一式、階級章、認識票なんかはここにあるから。」
ミラーが手伝うことを許可して宮藤に壇の上にあるものを見せるが、木箱の上に置かれたある物を見ると顔色を変えた。
宮藤「あの…」
ミーナ「はい？」
宮藤「これはいりません…」
そういうと拳銃、ルガーＰＰＫをミーナ中佐に手渡した。
ハインツ「ＰＰＫがダメならＰ０８とかＰ３８、ハイパワーとかもあるぞ。」
ハインツがＰＰＫの威力が弱い事、ＰＰＫの弾は３８・ＡＣＰ、パラベラムと比べると一回り威力が弱かった。
ハインツもミラーもノヴァクも一応持っているが主に護身用に使っていて戦闘時には前から持っていたルガーやハイパワーを使っていた。
その事を気にしていると思い他の銃も選べることを言うが。
宮藤「威力とかそういうのじゃなくて使いませんから…」
坂本「あっははは、おかしなやつだな」
坂本少佐がそう言って笑うが、
ペリーヌ「何よきれいごと言って。ねぇどう思う？」
ルッキーニ「んぁ？」
その態度が気に障ったのかペリーヌが後ろで寝ていたルッキーニに聞くが居眠りしてたようで特に反応しなかった。
ルッキーニの態度にペリーヌはさらに癇癪を起して
ペリーヌ「なによなによ！」
立ち上がると部屋から出て行こうとした。だが
ハインツ「おーいペリーヌ、話は全く終わってねえぞ。

あと出ていくならトーストの皿食堂に持ってってくれる？」

ミラー「あ、あと僕のも。コーヒー飲み終わったんでそれも持ってってください。」

出て行こうとしたペリーヌにルッキーニの後ろで飯食いながら話を聞いていたハインツとミラーが部屋から出ていくついでに皿を持っていくようお願いした。

するといったん戻って二人の皿を持つとそのまま出て行った。

ハインツ「以外だな。キレてそのままアッパー来るかと思ったら素直に持って行くなんて。」

ノヴァク「まずここで飯食ってることからどうにかしろよ。」

ミーナ「あらあら、仕方ないわね……個別の紹介は改めてしましょう。では、解散。」

ミーナ中佐が表情を引き締めて言うと全員が起立、それを見たミーナ中佐は部屋を出て行った。

新人に自己紹介しようとハインツとミラー、ノヴァクが椅子から立ち上がった時、

宮藤「ひゃあ！」

シャーリー「どうだ、ルッキーニ。」

ルッキーニが宮藤の胸をもんでいた。

ハインツ「で、どんな感じだルッキーニ。デカい？大きくなる？」

後ろにいたハインツが聞くが

ルッキーニ「残念賞…」

ルッキーニがそういうとリーネの方を見て

ルッキーニ「リーネは大きかった。」

リーネ「うう…」

そういってリーネは恥ずかしがった。それを見てミラーが

ミラー「一体いつ揉んだんですか？シャーリーさん後でルッキーニ貸してください。」

シャーリー「いいけど…なにする気だ？」

ミラー「教育的指導ですよ。」

何やら黒いオーラを出していた。この後ルッキーニは別の部屋でミラーの親譲りの懇々とした反論の余地のない説教が行われた。

シャーリー「私はシャーロット・E・イェーガー。リベリオン出身で階級は中尉だ。シャーリーって呼んで。」

宮藤「はい。」

シャーリーはそういうと宮藤と握手するがどうやらシャーリーが強めに握ったようで宮藤が痛そうにする。

シャーリー「ははははは、食べないと大きくなれないぞ！」

シャーリーがそういうと胸を張って宮藤がそれを見て驚いたようだった。

ルッキーニは隣でやたら黒いオーラを出しながら見てるミラーから隠れるようにシャーリーの胸に抱き着いた。

すると今度は

エイラ「エイラ・イルマタル・ユーティライネン、スオムス空軍少尉。

こっちはサーニャ・V・リトヴャク、オラーシャ陸軍中尉。」

エイラが立ったまま器用に寝ているサーニャを支えながら自己紹介する。

ルッキーニ「私はフランチェスカ・ルッキーニ、ロマーニャ空軍少尉！」

さらにルッキーニが改めて自己紹介する。

ハインツ「で、俺がハインツ・ヴァレンシュタイン少佐。こう見えて基地のナンバー3だ。」

ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァク。階級は中尉。これから宜しく。

あとこいつこう見えて女好きの博打好きだから気を付けろ。

俺も財布の中身全部持ってかれた事がある。」

ハインツとノヴァクが注意も兼ねて自己紹介する。

ミラー「で、最後になりましたがアドルフ・ミラーです。階級は少尉。

今ユニットが破損して飛べないですけど訓練などで一緒になると思います。」

宮藤「よ、よろしくお願いします。」

最後にミラーが自己紹介して、宮藤が律儀にお辞儀した。

坂本「よし、自己紹介はそこまで。各自任務につけ。

リーネと宮藤は午後から訓練だ。リーネ、ミラー、宮藤に基地を案内してくれ。」

リーネ「りょ、了解。」

ミラー「了解しました。」

坂本少佐が自己紹介を終わらせリーネとミラーに指示する。それにミラーとリーネは返事するがリーネの自信なさげな態度にミラーは内心不安を感じていた。

元々ミラーは、リーネの不調の原因が自信のなさだと思い、訓練などで積極的に褒めたり相談に乗っていたため宮藤が来る前はかなり練度が上がってリーネに自信を待たせるぐらいにはしていたが、宮藤が訓練もなく実戦でユニットを飛ばしたせいでその自信を完全に失ってしまっていた。

その日の夜、ミラーはなぜか鼻に包帯巻いたハインツと二人で飲んでいた。

ミラー「少佐、どうやったらリーネを励ませますかね?」

ハインツ「珍しくそっちから飲もうかって言ってきて心配してくれてると思ったらオメエの悩み相談かよ。」

この日の昼間、宮藤の案内や宮藤との訓練でやたらとネガティヴなことを言うリーネをどうにかしようとしたミラーだが、逆にリーネが落ち込み悩んでいた。

ハインツは昼間宮藤の訓練を見ていたミーナ中佐に報告しに行こうとしたら迷走した宮藤が後ろから突っ込んで来たので咄嗟に走って逃げようとしたら宮藤がロックオンしたかのように追っかけてきて最終的に衝突。やたら鼻が痛いので医務室行くと鼻骨骨折と診断

されていた。
ミラー「別に少佐はイワンに捕まってシベリアに行っても生きて帰って来るような人間ですよね。」
ハインツ「もう2年ぐらい一緒にいるけどお前の中の俺は一体どう言う人間なんだよ。」
ミラー「知りませんよ。それよりリーネどうやったら励ませますかね？」
ハインツ「なんだよさっきからリーネリーネ、お前絶対リーネのこと好きだろ。」
ミラー「ええそうですよ！僕はリーネのことが1人の女性として好きですよ！
全く女性にモテない少佐に言われなくても分かってますよ！」
酒が入ってたせいで普段なら言わないであろうことをミラーは言ってしまっていた。
そしてこの叫びを、
宮藤「な、なんかすごいこと聞いちゃった気がする…」
昼間怪我したハインツを気遣ってミラーとハインツが飲んでいたハインツの部屋の前にいた宮藤が聞いていた。

第11話：新人達の初陣

ロンドンという街はブリタニアという日の沈まぬ帝国の首都であると同時に大陸から叩き出された人類の抵抗拠点の一つである。
そのため多くの軍人、政治家、官僚、資本家、思想家、活動家がいる。
だが人は三人寄れば派閥を作ると言うように軍人、政治家、官僚、資本家、思想家、活動家が派閥を作り、日夜ある者は権力の為にある者は権利の為に、ある者は野望の為に、ある者は思想の為に闘争を繰り広げ奇々怪界とした光景を生み出していた。
それは彼らのようなある〝特殊な事情を持つ軍人〟にも当てはまった。
ボック「なぜあんな奴が西方総軍航空軍最高指揮官になったか。それが全く理解できん。
確かに奴は優秀だ。だがな、奴には独断専行癖があるんだぞ。
彼奴らの様な輩のせいでどんな迷惑を被るのか分かっているのか。
最悪〝彼奴ら〟の様に祖国を灰にする気か。」
連合軍第13課課長フェードア・フォン・ボックは同じ派閥の将官や参謀を集めて憤っていた。
それは新たに西方総軍航空軍最高指揮官となったトレヴァー・マロニーブリタニア空軍大将に対してであった。
マロリー「ええ全くです。
この間経理の部下に命じて空軍内部の資金の流れを解析すると奴の派閥に大量の使途不明金らしきものが流れていたようです。
詳しく解析しようにも奴の派閥はかなり広いです。
分かってる限りで奴の派閥には南西軍管区司令官とブリタニア空軍の憲兵部長、人事課長がいます。
下手に動けば逆にこちらが飛びます。」

ブリタニア空軍参謀本部第１３課課長トラフォード・マロリー中将がボックの発言に同意し、マロニー派閥の不透明な資金について報告する。

シコルスキ「それに奴の派閥はどうやら政治家と内務省に相当巣食ってる。

その上最近は大蔵省に取り入り始めてるよ。

この使途不明金の額も気になる。おおよそ３０万ポンド。

これだけの資金が流れているのだから政治家官僚への賄賂だけじゃないだろう。

空軍だけでは相当足りん。おそらく他のところからも来てる。」

第１３課参謀長シコルスキ少将が精通している政治方面から補足する。

マロニー閥は空軍内部だけで無く内務省や政治家、特に保守強硬派に相当取り入っていた。

彼らの派閥は主に外務省と左派と保守穏健派に近いためこれはかなり厄介だった。

ディートル「個人的に気になるのはこの資金を何に使うかです。

３０万ポンドもあればどこかで内乱を起こして傀儡国家を作ることも出来ます。

もしこれが反乱などに使われたら…」

彼らの派閥で今この会議にいる中で唯一実戦部隊を率いる第７軍団軍団長エデュアルト・ディートル中将が恐ろしい可能性を指摘する。

ボック「マロニーを首班とするクーデターか…

恐ろしい事だがあり得る。奴にはそれをやれる権力、派閥、資金、兵力があるからな。」

シコルスキ「そうなった時、この国は死ぬ。」

マロリー「奴らに勝つために地獄の悪魔と手を組むとまではいかないがすでにＧＤＰの何倍もの額の買い物をしているんだ。

もしそうなった時ツケを踏み倒せばこの国は一瞬でパーだ。

ケインズ曰く経済は国家の血だ。

一体どこに自分の総血液量より多い血を抜こうとする奴がいる。」

最悪のパターン、即ちマロニーによるクーデターを恐れ、そうならないことを彼らは切に願った。

だが、残念な事に時代は血を欲していることに気がつくものはいなかった…

ミーナ「監視所から報告が入ったわ。敵、グリット東１１４地区に侵入。

高度はいつもより高いわ。今回はフォーメーションを変えます」

坂本「バルクホルン、ハルトマン、ノヴァクが前衛。

シャーリーとルッキーニは後衛。ペリーヌは私とペアを組め。」

ミーナ「残りの人は、私と基地で待機です。」

ミラーとハインツが珍しく酒盛りした数日後、またネウロイがやってきた。

だがそれはすぐにかの世界では圧倒的有利なキャベツを撃退し世界初の巡航ミサイル相手に必死の防空戦をしたことがあるブリタニアのやたら優秀な防空網に引っかかってしまった。

ネウロイを探知すると即座に最寄りの部隊である５０１にスクランブルをかけた。

宮藤「行っちゃったね」

滑走路からスクランブルした出撃組を待機組の宮藤、リーネ、ハインツ、そしてユニットがどうしようもないため警備部隊のトラックを改造した対空車両を率いる算段になってるミラーが見ていた。

リーネ「そうですね……」

宮藤「今、出来ることって何だろう」
ハインツ「まあ出撃しないってことは死ぬこたねぇってこっだ。俺からすれば万々歳な話だけどねー。」
リーネ「足手まといの私に、出来る事なんて……」
宮藤「あっ、リネットさん……」
そう言うとリーネは基地に走っていった。それを見ていたリーネをミラーは追いかけていった。
それと入れ替わるようにミーナ中佐がやってきた。
ミーナ「宮藤さん、ちょっといいかしら」
宮藤「あっ、はい」
ミーナ「リーネさんは、このブリタニアが故郷なの」
宮藤「へっ…」
ミーナ中佐の説明に宮藤がマヌケな声を出した
ハインツ「つまりこの戦いは彼女にとって祖国防衛戦ということだ。」
ポケットからタバコを取り出しながらハインツが補足する。
ミーナ「ヨーロッパ大陸がネウロイの手に落ちているのは知っているわよね?」
宮藤「はい、リネットさんに…」
ミーナ「欧州最後の砦、そして故郷でもあるブリタニアを守る。リーネさんはそのプレッシャーで実戦だとだめになっちゃうの。」
宮藤「リネットさん…」
宮藤がリーネのことを思い浮かべていると、タバコを吹かせたハインツが聞いてきた。
ハインツ「そういや宮藤はなんでウィッチーズに入ったんだ?銃を持つのが軍人の仕事だってのに。」
即座に宮藤は答えた。
宮藤「はい、困っている人達の力になりたくて―」
それを聞いたハインツとミーナ中佐は微笑むと、
ハインツ「あいつがここにきた時も同じようなこと言ってたな。(あいつらもな…)」

ハインツは最後にボソッと何かを言うとどこか遠くの方を見ていた。

ミーナ「その気持ちを忘れないで。そうすれば、きっとみんなの力になれるわ」

ミーナはそう言うと基地に戻っていった。

ミラー「リーネ、どうした?何かあるなら相談ぐらいしていいからさ。僕じゃダメなら他の奴でもいいからさ。」

滑走路近くでミーナ中佐と宮藤たちが話していた頃、リーネを追いかけていたミラーはリーネに追いつき強引に掴んで止めていた。

するとリーネはミラーの手を振り払うとか細い声で半泣きになりながら話し始めた

リーネ「…めてください…」

ミラー「?」

リーネ「やめてください!もう私に優しくするのをやめてください!」

リーネはミラーの手を振り払い絶叫した。

ミラー「え…?どうして…?」

その言葉にミラーが驚いて聞くと、

リーネ「辛いんですよミラーさんが優しくするから辛いんです。こんな落ちこぼれを優しくするから辛いんです!

なんで私に優しくするんですか!なんで私なんかに構うんですか!なんで、なんで落ちこぼれを優しくするんですか…

辛いんです…いっそのこと私を落ちこぼれって言ってくれた方がどれだけ楽か…

私のことを落ちこぼれの役立たずって罵ってくれた方がどれだけ楽なのか…わかってるんですか…」

リーネはそう言うと足早に自分の部屋に戻っていった。

その頃、上空では。

ノヴァク「目標発見。タリホー!」

そう言うとバルクホルンとハルトマンとともにノヴァクが攻撃を開始した。
ネウロイは一瞬で撃破された。
ペリーヌ「手応えがなさすぎる…」
あまりの手応えのなさにペリーヌが疑問を口に出す。
坂本「おかしい…コアが見つからない。」
ノヴァク「クルヴァ！陽動か！」
ノヴァクが自分の実戦経験からそう結論を出すと、
坂本「だとしたら…基地が危ない！」

ミラーを振り払い逃げたリーネは自分の部屋に閉じこもっていた。
ミラーはリーネを追わなかった。
リーネ（なんであんなことしたんだろ…ミラーさんは私のために言ったのに…）
自分の部屋でリーネは後悔していた。自分のためを思って色々してくれたミラーにあんな事をしたからだ。
リーネにとっては実質基地で唯一腹を割って話せて自分のことを一番気にかけてくれる人であるミラーがどういう存在かやっと理解した。
リーネ（なんでミラーさんは私なんかに構うんだろ…まさか…）
その時ドアの向こうから声がした。
宮藤「リネットさん」
宮藤の声だ。
宮藤はミーナ中佐の話を聞いてリーネを追いかけて来ていた。
宮藤「私、魔法もへたっぴで叱られてばかりだし、ちゃんと飛べないし、銃も満足に…使えないし、ネウロイとだって本当は戦いたくない。
でも、私はウィッチーズに居たい。
私の魔法でも誰かを救えるのなら、何か出来る事があるのならやりたいの。」
宮藤の言葉をリーネはドアの向こうで聞いていた。

宮藤「そして、みんなを守れたらって…」
リーネ（守る…）
その言葉にリーネは基地に来た頃を思い出した。
宮藤「だから私は頑張る。だからリネットさんも…」
その瞬間基地にサイレンが響いた
――――――――――――――――
ハインツ「ああ、高射砲部隊と警備部隊を緊急出動。すぐに撃てるようにしとけ。
あと周辺部隊に緊急警戒態勢を敷かせろ。今すぐだ。いいな。
中佐、高射砲と警備部隊の二個中隊の準備を指示しました。」
サイレンが鳴り新手のネウロイが接近中との連絡を受けたハインツは即座に基地の高射砲部隊。機関砲２個中隊１２門と高射砲２個小隊８門からなる高射砲部隊と警備担当の兵士からなる２個中隊を緊急出動させ、さらに近隣の部隊に警戒態勢を敷かせるように指示した。
ミーナ「ありがとう。今出られるのは私とエイラさんだけね。ハインツさんとサーニャさんは?」
ハインツ「出られないことはないが医者から無理するなって言われてる。」
エイラ「夜間哨戒で魔力を使い果たしてる。無理だな」
ミーナ中佐がサーニャとハインツが出られるか聞くがハインツは鼻骨骨折が完治していないため医者からできる限り戦闘を避けるように指示されていたため出撃に難色を示し、サーニャは魔力を使い果たして出撃すら不可能だった。
ミーナ「そう…じゃあ二人で行きましょう。」
ハインツ「それがいいな。ネウロイが来てる方向は?すぐにそっちにミラーの自走砲小隊を向かわせる。」
ミーナ中佐とエイラを出してハインツは地上で高射砲部隊の指揮を執る（経験はないがこの辺は仕方ない。史実でもパイロットが地上

部隊率いてたとかたまにある（例：第１９空軍地上師団の初代師団長は一次大戦のエースゲルハルト・バッセンゲ将軍）ことなんで）事で話し合っていると。

宮藤「待ってください！私も行きます！」

突然後ろから声をかけられて振り返ると宮藤がいた。

ミーナ「まだ貴方が実戦に出るのは早すぎるわ。」

ハインツ「本当にいいのか？死ぬかもしれんぞ。過去に同じようなこと言ってた新兵がいたがそいつらは漏れ無く死んだぞ。」

宮藤「足手まといにならないよう精一杯頑張ります！」

ハインツ「まずお前はまともに銃を撃てんだろ。戦場で銃を撃てないなど論外だ。」

宮藤「撃てます！守るためなら。」

ミーナ「とにかく、貴方はまだ半人前なの」

宮藤「でも…」

宮藤がさらに続けようとすると待機室にリーネが入ってきた。

リーネ「私も行きます！」

自分も行くと言った。

ハインツ「本気か？死ぬかもしれんぞ？」

リーネ「二人合わせれば、一人分ぐらいにはなります！」

その目は覚悟を決めた人間の目だった。数年に渡る実戦経験を持ち地獄の東部戦線を生き抜いてきたハインツですら今まで一度しか見たことのない目だった。

その気迫にさしものハインツも止めることが無理だと悟った。

ハインツ「はあ…どうなっても知らんぞ。

中佐、こいつら俺たちが止めても出て来るぞ。

出撃させよう。ただしバックアップで。」

ハインツが完全に諦めてミーナ中佐に進言する。それを聞いてしばらく考えると、

ミーナ「９０秒で支度しなさい。ただし、ヴァレンシュタインさん、あなたが面倒みてください。」

『はい！』

ハインツ「りょーかい、って俺？」
ミーナ中佐はハインツが面倒を見ることを条件に出撃を許可した。

5人が基地から出撃するとミーナ中佐はハインツに話しかけた。
ミーナ「驚いたわ。まさか許可するなんて。」
ハインツ「あいつらの目は俺が東部戦線で一度だけ見たことある目だよ。
俺たちに抵抗して取っ捕まったパルチザンの女の目にそっくりだったよ。」
リーネの目はかつてクリミアでハインツたちの基地の近くで破壊工作を働き、パルチザン掃討のためやってきたSS部隊とウクライナ人部隊に捕まったパルチザンの女の覚悟を決めた目にそっくりだった。
その後の彼女の運命は数日間近くの井戸から死臭がしたことから分かるだろう。
その言葉にミーナはただ頷くと、
ミーナ「敵は三時の方向から基地に向かってくるわ！私とエイラさんが先行するからハインツさんと芳佳さんとリーネさんはここでバックアップをお願いね。」
宮藤「はい！」
リーネ「はい！」
ハインツ「ってことだ。リーネは狙撃の用意、宮藤はリーネと俺の援護。俺はリーネの射撃を観測する。」
宮藤とリーネが返事をするとハインツが双眼鏡を取り出しながら作戦を指示する。
リーネ「本当は私、怖かったんです…」
ハインツが作戦を指示して双眼鏡を覗いて敵を探しているとリーネが宮藤に声をかけた。
宮藤「私は今も怖いよ。でも、うまく言えないんだけど…何もしないでじっとしている方が怖かったの。」
リーネ「何もしない方が……あっ！」

ハインツ「来たか！リーネ射撃用意、俺の指示で撃て。宮藤も戦闘用意。ん！かなり速いぞ！」
リーネがネウロイ交戦するミーナとエイラを見つける。それをたハインツが即座に戦闘要因を指示する。
ハインツ「あの速度だと一撃離脱は無理だ。」
ハインツが呟く。
その頃エイラたちは、
エイラ「速い…」
ミーナ「今までより圧倒的に早いわ…一撃離脱じゃ無理ね。速度を合わせて！」
エイラ「了解！」
その圧倒的スピードに苦戦していた。
ミーナの指示で二人がネウロイの後方について射撃するとネウロイは後部を切り離しさらに加速した。
その速度はあっという間に2人を引き離した。
ハインツ「シャイセ！奴が加速した！リーネ有効射程に入り次第撃て！
ミラー戦闘用意、かなり速いぞ。」
リーネ「了解」
ミラー『了解。』
その光景を見ていたハインツは即座に戦闘用意を指示するとさらに基地で改造対空自走砲2両を率いていたミラーにさらに戦闘用意を指示する。

ミラーの率いてる改造対空自走砲はハインツたちが乗っていたＭｅ４１０に積まれていたＭＧ１５１／２０を取り外し専用の３連装銃架に載せたものを基地のビュッシング製トラックに乗せたものだった。
ユニットが大破して修理中のミラーは暇だったためこの自走砲部隊を引きいていた。
ミラー「大丈夫かなリーネ…」

兵士「いたぞ！かなり速いぞ！」
一台のＭＧ１５１／２０機銃を構えていたミラーはリーネの心配をしているとトラックの運転手の兵士がネウロイが来るのを見つけた。
即座にミラーは機関砲をネウロイの方向に向ける。
ハインツ『シャイセ！奴が加速したぞ！リーネ有効射程に入り次第撃て！
ミラー戦闘用意、かなり速いぞ！」
ミラー「了解。
さあこい、クソッタレ。」

ハインツ「リーネ来たぞ！よし、撃て！」
ハインツの指示でリーネはボーイズを撃ち始めるが、
ハインツ「ハズレだ。下に修正。またハズレ。大丈夫か？」
弾は悉く外していた。ハインツが大丈夫かと聞くと、
リーネ「私、飛ぶのに精一杯で射撃を魔法でコントロール出来ないんです！」
宮藤「じゃあ、私が支えてあげる！だったら、撃つのに集中出来るでしょ？」
ハインツ「（いいなぁ、でも男がやったらただの犯罪だなぁ…）おっと、リーネ大丈夫か？」
宮藤はリーネを肩車した。それを見たハインツはしばし戦闘を忘れて不埒なことを漏らしていた。
宮藤「どう？これで安定する？」
リーネ「あ…は、はい。」
ミーナ『ハインツさん、リーネさん、宮藤さん、敵がそちらに向かっているわ。貴方達だけが頼りなの、お願い！』
宮藤「はい！」
ハインツ「中佐、明日あたりに書類の山が送られて来ると思うんで覚悟してください。」
リーネが肩車された時、無線機からミーナの通信が入る。

宮藤が返事し、ハインツがジョークで返す。リーネはボーイズを構えてネウロイに照準する。
ハインツ「リーネ、もう後がないぞ。」
リーネ（そうだ！敵の避ける未来位置を予測して、そこに…）
リーネ「宮藤さん、ハインツさん！私と一緒に撃って！」
宮藤「うん！わかった！」
ハインツ「了解。」
リーネの指示にハインツはＭＧ１５１／２０を、宮藤は１３ミリを構える。
リーネは魔力で視力を強化、目標を捉える。
リーネ「今です！」
次の瞬間、宮藤の１３ミリとハインツのＭＧ１５１／２０がネウロイに向かって放たれ、ネウロイは上に上昇して躱そうとするがそこをリーネのボーイズに狙われ直撃、撃墜された。
宮藤「すごーい！」
ハインツ「リーネ、初撃墜おめでとう。ミラー、見たか？リーネが落としたぜ。」
ミラー『ええ見てますよ。おめでとうリーネ。」
宮藤が感嘆し、ハインツとミラーはお祝いの言葉を述べる。
リーネ「やった！やったよ宮藤さん！私初めて皆の役に立てた！宮藤さんのおかげよ！ありがとう！」
そう言うとリーネは宮藤に抱きつき二人仲良く海に落ちた。
ハインツ「あー俺の活躍は？俺はハブられたの？」
海に落ちた二人は笑いあっていた。
宮藤「芳佳でいいよ！　私たち友達でしょ？」
宮藤のその言葉を聞いてリーネが笑顔になる。
リーネ「じゃあ、私もリーネで！」
リーネが返すと宮藤も笑顔になる。
宮藤「うん！リーネちゃん！」
リーネ「はい！芳佳ちゃん！」
ハインツ「うんうん、仲いいのはいいこっだ。

あとムードぶち壊しで悪いがユニット大丈夫か?」
完全にムードをぶち壊すことをハインツが言うが彼にとってはユニットが全損した後の書類処理ほど不愉快極まり無い事はなかった。

その日の夜、リーネはミラーの部屋にいた。
リーネの初戦果を祝ってミラーが何かしてくれるらしいというのだ。
リーネ「ミラーさん。何かするんですか?」
ミラー「まあね。」
そう言いながら部屋のキャビネットを開けて一本のボトルとワイングラスを二つだした。
ミラー「リーネ、初戦果おめでとう。僕からのプレゼント。ワイン。1929年の15年もの。」
そう言ってミラーがキャビネットから出したのは1929年もののワイン。
リーネ「1929年、私の生まれた年…しかもこれって…」
ミラー「そう、『王者のワインにしてワインの王者』
ハンガリーの、この世界だとオストマルクか、ワイン、トカイワインだ。まあ安物だけどね。」
ミラーが出したのは史実でも有名なハンガリー産の最高級ワイン、トカイワインだった。
ただ出したのはトカイワインの中でも比較的安物に入るトカイ・アスー・3プットニョシュだった。
それでもこの世界では生産地が壊滅したためかなり高い部類に入るが。
上流階級出身のリーネはこのワインのことを知っていた。
リーネ「嬉しい…でも私お酒飲んだことなくて…」
ミラー「ならいい機会だ。一緒に飲もう。まあそのためにワイングラス出したんだけどね。」
リーネは酒を飲んだことがなかった。ミラーの方は嗜む程度に酒を飲んでいた。

ミラーは慣れた手つきでワインのコルクを抜くとワイングラスに1／5程度入れた。
ミラー「それじゃあ初戦果を祝って乾杯。」
リーネ「乾杯。」
二人で一気に飲むと、
リーネ「美味しい…」
ミラー「ふん、流石トカイワイン。安物でも美味い。」
リーネは少し顔を赤らめて言い、ミラーは今までいろんな酒を飲んでいた、無論トカイワインも、そのため簡単な感想を言った。
ミラー「リーネもっと飲むか?酒を飲めば普段言えないことだって言えるぞ。
　まあそのせいで大目玉食らうこともあるけど。」
さらに飲むかと聞かれたリーネは少し考えると、
リーネ「飲みます。」
ミラー「じゃあこのぐらい、「もっとください。」え?いいの?」
グラスの半分ぐらいまで入れるとリーネはそれを一気に飲んでしまった。
ミラー「え…だ、大丈夫?結構一気に飲んだけど…」
リーネ「ミラーさん、ミラーさんはどう思ってるんですか?」
一気に酒を飲んでリーネは顔を真っ赤にして言ってきた。
ミラー「どうって…何を?」
リーネ「何って…私に事ですよ!ミラーさんは私のことをどう思ってるんですか!?」
リーネは立ち上がって叫んだ。その気迫にミラーも驚いた。
ミラー「リーネ、いったん落ち着こう。」
ミラーはそう言うと、リーネを落ち着かせて椅子に座らせた。
それを見てため息をつくと話し始めた。
ミラー「リーネ、君のことをどう思ってるかと言うと君は傷つくかもしれないけど好きだ。
　友人としてでは無く一人の女性として好きだ。」
ミラーはそう言うとワインをグラスになみなみ入れて一気に飲ん

だ。
その言葉にリーネは顔を更に真っ赤にしていた。
リーネ「そ、それは本当ですか。ほ、本当のこと言ってるんですか？」
リーネが口を開くが明らかに動揺していた。
ミラー「本当だよ。君に嘘ついても何の得もないし。」
ミラーが優しく言うと次の瞬間ミラーの口が塞がった。
なんとリーネがキスしたのだ。口からはトカイワインの芳醇な香りがした。
ミラー「リ、リーネ？」
リーネ「私のファーストキスです。ミラーさん。」
酔っ払いは稀によく突飛な行動をするがどうやらそれらしい。
ミラーは笑うとさらに二人で飲み始めた。
夜はさらに更けてゆく…

ハインツ「ミラーの野郎やりあがった！あの野郎とうとうやりやがった！」
トゥルーヒン「ハインツ少佐がモテない理由がなんと無く分かります。」
ノヴァク「そうだな、はいチェックメイト。」
その頃格納庫ではハインツが固有魔法使ってリーネとミラーの一部始終を見ていた。

第12話：亡国の軍人

サイレンが鳴り響き、悲鳴が聞こえ、空には飛行機が飛び、建物が燃えている。
まだ太陽は出ていないのに喧騒としていた。
「な、なにが…」
青年がそう呟く、次の瞬間、
「伏せろ！」
その声が聞こえると、体を誰かに押し倒された。
それからどれだけ時間が経ったのだろうか…太陽が出、飛行機は消えていた。
青年は動こうとするとなにかがのしかかり動けない。それは死体、下半身は前に飛ばされ、上半身だけとなった死体だった。
「うぅぁあああああああああ！」

ノヴァク「あああああ！
ハアハア、夢…か。」
アレクサンデル・ノヴァクは悪夢で飛び起きた。時計を見るとまだ太陽はその姿を見せていない時間だった。
ノヴァク「今日も見たな…主よ、我が罪を悔い改め、我を悪夢から救い給え」
そう十字を切って異世界の神に祈った。
彼にとって悪夢は日常茶飯事、いわゆるＰＴＳＤと呼ばれる病気の症状だった。

街が燃えている。
かの戦争ではヨーロッパの多くの都市が燃えた。
ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、ケーニヒスベルク、レニングラード、スターリングラード、ブダペスト、ウィーン、ワルシャワなどなど。
この全てが戦火によって燃えた。

その多くはいとも簡単に破壊された。
ハンブルク、ドレスデンは一晩で、レニングラード、スターリングラード、ベルリン、ケーニヒスベルク、ブダペスト、ワルシャワは多くの民間人と共に破壊された。
これらに都市が元の栄華を取り戻すのには数十年と言う長い月日が必要なことは４５年の時点で明白だった。
だが、この街はこれらの都市とは全く違う。
この街を破壊しているのはあるものが見ればヨハネの黙示録第６章第８節にある第４の騎士と解釈するものもいるだろう。
この第４の騎士はネウロイと言った。
そしてそれが街を焼いているのである。
「くっ！」
それを見ていた三人の少女のうち、１人が怒りに身を任せネウロイに銃を乱射する。
「っうあああああああ！」
弾はネウロイを貫き破片となって街に落ちていくがその少女の目にあるものが飛び込んできた

バルクホルン「クリス！」
バルクホルンはノヴァクのように悪夢で飛び起きた。
周りを見て夢だと理解する。
バルクホルン「なんで今頃あんな夢を…」

翌朝、食堂に目に隈をつけたハインツとミラーが入ってきた。
ハインツ「眠い…」
ミラー「昨日寝ました？僕はぐっすり寝れましたけど。」
ハインツ「うるせえ、昨日夜遅くまで某ウィッチと夜遅くまでイチャコラしてた奴が言うな。」
それにミラーと食堂のキッチンのリーネが反応する。
宮藤「ハインツさん、ミラーさんおはようございます。」
ハインツ「ああ、おはよう。なんの匂いだ？」

宮藤の挨拶に返すと匂いの元を聞く。
宮藤「お味噌汁です。今作ってるんです。」
ハインツ「味噌汁？」
ミラー「Ｍ☒ｓ　ｓｅａｒ？（ミス　シール：ミスアザラシの意）」
味噌汁がなんなのかわからずハインツとミラーは聞く。ミラーに至っては聞き間違いすら起こしていた。
ノヴァク「日本の料理だよ。子供の頃爺ちゃんがＷＷＩで捕虜になってた頃の話で出てきたな。」
すると後ろから食堂に入ってきたノヴァクが説明する。
宮藤「あ、ノヴァクさんおはようございます。
日本？ＷＷＩ？」
ノヴァク「なんでもない。宮藤」
異世界の話を宮藤にしていなかったことを思い出したノヴァクは何気なく言った話を誤魔化す。
リーネ「そういえばミラーさん、ハインツさん、ノヴァクさん知ってます？
カウハバ基地が迷子になった子供の為に出動したんですって。」
リーネがミラーたちに話しかけてきた。少し前ならミラーですら話しかけないといけないぐらい怯えてたのに今ではそう言うことは一切なかった。
ミラー「それはまたすごいなリーネ。」
リーネ「ですよね。」
リーネの話にミラーが反応する。心なしか両者の表情は非常に明るかった。
宮藤「でも、そうやって一人ひとりを助けられないと皆を助けるなんて無理だもんね。」
リーネ「そうだね。」
それにハインツ、ミラー、ノヴァクは苦笑いする。
あの戦争では守るどころか民間人と軍人の違いすらなかった。
ノヴァクはポーランドや各地でのナチスの蛮行、ミラーはドイツの

街を焼く爆撃機や東部戦線で見た建物からぶら下がったパルチザンの死体やパルチザンに捕まり無残に殺された戦友、ハインツは東部戦線での数え切れない虐殺、強姦、略奪、死体、パルチザンなどなどを思い出していた。

バルクホルン「みんなを助ける…そんなのは夢物語だ…」

リーネ「え？」

宮藤「ん？」

突然後ろから朝食を取りに来たバルクホルンが言う。

それに苦笑いしていた三人が（おいおい言っちゃったよ…）みたいな顔をしていた。三人にも人の夢を壊さない程度には良心ってものはあった。

宮藤「え？なんですか？」

バルクホルン「済まない独り言だ。」

バルクホルンはそう言うと朝食を取って席に歩いて行った。

その後他のウィッチもやってきて朝食を食べ始めた。

そんな中1人バルクホルンだけ食事に手をつけなかった。

クソみたいな納豆でさえ隣ではハインツが（まあ東部戦線で食った粥擬きか腐りかけの缶詰かネズミに食われたパンよりはマシか…）と思いながら食べていた。

ミーナ「どうしたのトゥルーデ？浮かない顔で。」

ハルトマン「食欲もなさそう。」

ハインツ「この腐った豆がダメか？少なくとも見た目よりはいけるぞ。腐りかけの缶詰かネズミに食われたパンよりかはうまい。」

ミラー「朝食は食べた方がいいですよ。朝食がその日の体を作るって言いますし。」

なぜか朝食を取らないバルクホルンをミーナ、ハルトマン、ハインツ、ミラーが心配して聞く。

バルクホルン「…そんなことはない」

そう反論して1口食べると宮藤の方を向く。

宮藤「ん？」

リーネ「どうしたの？」

宮藤が振り返る。
宮藤「誰か見ているような気がしたんだけど…」
リーネ「誰か？」
宮藤「…気のせいかな」
宮藤は気のせいだと納得して食べ続ける。すると、
ルッキーニ「お代わりー！」
宮藤「あ、はーい。」
ルッキーニのお代わりに宮藤は席を立ち上がりお代わりを取りに行くとバルクホルンの朝食が目に入った。
宮藤「あの…お口に合いませんでしたか？」
宮藤がバルクホルンに聞くが反応せずそのまま立ち上がって片付けようとするがハインツが止める。
ハインツ「バルクホルン、食わねえなら貰うぞ。せっかく勿体ねえんだし。あと後で話がある。」
バルクホルンが朝食をハインツにあげると宮藤を見て固まるがルッキーニが駄々をこね始めたため宮藤はバルクホルンからルッキーニに意識を移す。
その間にバルクホルンは外に出たがそれをノヴァクは心配そうな目で見ていた。
ペリーヌ「バルクホルン大尉じゃなくてもこんな腐った豆なんて、とても食べられたんじゃありませんわ」
するとペリーヌが納豆への文句を言い始めた。腐った常々はハインツもミラーもノヴァクも同意していたがまだ3人が食べたことのある食べ物の中では割とマシな方に入っていたため特に問題なかった。
だって腐った缶詰とかネズミに食われたパンとか砂の混じった米とか毎日スパムよりはマシじゃん。
宮藤「納豆は体にいいし、坂本さんも好きだって」
ペリーヌ「さ、坂本さんですって!?少佐とお呼びなさい！私だってさん…付けで…」
ペリーヌが盛大に自爆している光景をハインツは笑って見ていた

が、ミラーとノヴァクは嫌悪感を持った目で見ていた。
ハインツ「それ言ったら俺なんてキレた時は呼び捨てだぜ。
　それとご馳走さん。美味かったよ。」
ハインツはそう言うとトレーを片付け出て行った。
ノヴァク「なあミラー、バルクホルンのことどう思う?」
ミラー「どうって…何かあるんじゃないですか?」
ハインツが出て行くとノヴァクがミラーに話しかけた。
この二人は宗派が同じ（どちらもカトリック）で書類処理の関係でよく一緒に仕事をしていたため仲が良かった。
ノヴァク「まあ何かあるんだろうけど同性のことをあんな目で見るか普通。」
ミラー「確かに。大尉が精神異常だとは思いたくはないですね。」
ノヴァクは実はバルクホルンと仲が良かった。
これはハインツが来てから尉官クラスで決済可能だったり尉官クラスが本来やるはずの書類（なぜか大量に左官クラスの書類に紛れ込んでた）のほとんどをバルクホルンに回していたからだった。
そしてその量はバルクホルンがそれ以前にやっていた書類の2倍近い量だった。そのためこれをどうにかして処理するためにバルクホルンはノヴァクに書類の一部を回すことで処理していた。
そしてその書類の一部がさらに暇してるミラーに回っていたため二人はバルクホルンと付き合いがあったためそれなりに気になるものだった。

その日の昼前、バルクホルンとハルトマンは模擬戦をしていた。
空には2人のユニットで作った飛行機雲が描かれていた。
それをミーナと坂本が見ていた。
ミーナ「乗れてないわね。」
坂本「完璧主義のあいつらしく…」
ハインツ「あのクソッタレ!ふざけんじゃねえ!」
坂本が何か続けようとした時建物からタバコを吸ったハインツが大声でキレながら出てきた。

ミーナ「ど、どうしたのかしら?ハインツさん?」
その尋常ではない剣幕に驚いたミーナが聞く。
ハインツ「中佐、聞いてくださいよ!
バルクホルンの野郎、今朝書類出したかと思ったらその書類のほとんどでミスしまくってとてもじゃないが上に挙げられるもんじゃねえんですよ!
その上期限切れの奴も結構あるんだよ!」
ミーナ「え、ええ。それは大変ね。」
ハインツ「でしょ。降りてきたらすぐにでも部屋に呼び出してやり直しさせますよ。」
軍隊はいつの時代、どこの軍、ナチスやソ連軍でさえ徹底的に書類によって管理されていた。
そのため本来なら書類の誤記、提出期限切れは重大な問題だった。
ミーナ「書類の正確さに定評のあるトゥルーデの書類が問題だらけなのは不安ね。」
坂本「次の出撃は外した方が良さそうだな。」
ハインツ「全く、早いとこ調子戻ってくれないと残業で殺されるぞ。一体なんで不調なんだか。」
ミーナ「宮藤さんが来てからなのよ。」
坂本「宮藤と組ませてみるか。」
ハインツ「荒治療になるといいが下手すれば…
わかっていると思いますけど死に金って物があるんですよ。」
ハインツは最悪のパターンにならないことを祈った。

ハインツ「バルクホルン、ちょっといいか?」
模擬戦後、格納庫でユニットを脱いでいたバルクホルンをハインツは呼び止めた。
バルクホルン「何の用だ?」
ハインツ「いやあんたが今朝出した書類のことだが…」
そう言うとハインツは服のポッケから四つ折りにした書類を出し

た。
その書類は今朝、バルクホルンが出した前日の哨戒報告書だった。
ハインツ「ここと、ここ。それにここ。
間違えてるしこの手の書類の間違いが多い上にこの書類は本来昨日提出のはず。
これはどういうことだ？」
バルクホルン「すまない、昨日は疲れてた…」
ハインツ「疲れてただと？まあそうかもしれんがとにかく最近お前大丈夫か？
今朝も朝食食ってなかったし、最近様子おかしいぞ。いい加減休暇とったらどうだ？」
バルクホルン「休暇は必要ない。だから大丈夫…」
ハインツ「いや、大丈夫とかじゃ無くて規定であんた休暇取らなきゃいかんし。
ついでにあんたに死なれたら死に金っていう無駄金が発生するんですよ。
兵士の命は一厘五銭じゃないって分かってます？」
ハインツが休暇を取るようにしつこく迫った。
バルクホルン「だから大丈夫だ。それ以上ようがないなら失礼する。」
そう言うとバルクホルンはハインツを押しのけて出て行った。
それをノヴァクは格納庫の外から見ていた。
ハインツ「はあ、めんどくせぇ事になりそうだなぁ。」

イギリス人にとってティータイムとは1日の生活の中で最も重要と言えるだろう。飯はクソなのに。
戦争中もティータイムをとっていたし、センチュリオンではティーを作るための電気ポッドがあった、朝鮮戦争中にはティータイムのため味方の支援砲撃を中止したと言う話や、紅茶のお供の定番であるビスケットの工場が洪水で操業不能になった時にはメディアで「いかにして我々はビスケット不足を乗り切ればいいのか？」というニュース

が乗るほどティータイムは重要であった。
　このもっと他にやることないのかと思うこだわりは世界を超えた同位体であるブリタニア人、そしてブリタニア軍も同様であった。
　この日は午後からお茶会をすると言うのだ。
　ある意味戦争を舐めてるとしか思えない沙汰でありハインツとミラーもふざけてるとしか思えなかったが英軍での経験が長いノヴァクは特に疑問に思うことはなかった。
　なにせ英軍が同じことしていたのだから。
　ミーナ「作戦室からの報告では、明後日が出撃の予定です。
　　ですので皆さん、今日はゆっくり英気を養ってください。」
　坂本「宮藤とリーネ、二人はこの後訓練だ」
「はい！」
　ミーナが音頭を取り坂本が宮藤とリーネに連絡を入れる。
　お茶会が始まると宮藤は音を立てて紅茶を飲み始めた。
　ミラー「宮藤さん、紅茶は音を立てて飲んではいけないんですよ。」
　同じテーブルでリーネの隣に座ってるミラーが宮藤に注意する。
　宮藤「すいません。ところでミラーさん、バルクホルンさんのこと知りませんか？」
　宮藤が謝るとミラーにバルクホルンのことを聞いてきた。
　ミラー「知らないなぁ…あんまり自分のこと話す人間じゃないからよく知らないんだよなぁ。
　　まあ少佐なら知ってると思いますけど。大尉関連の書類を管理してますから。」
　宮藤「坂本さんがですか？」
　ミラー「いや、ヴァレンシュタイン少佐の方。」
　ノヴァク「あいつが管理してるのか？」
　すると隣のテーブルで持ち込んだジャムを入れた紅茶（一人だけレモンティー）を飲んでいたノヴァクが聞いてきた
　ミラー「ええ、もしかして知らなかったんですか？
　　この時期になると毎日『税金死ね』とか『誰か手伝えお前らの給料だぞ』とか愚痴ってますよ。」

ノヴァク「アイツそんなことしてたのかよ…」
ハインツ「へブっし！こんな時期に風邪？」
ミーナ中佐のテーブルで半分現実逃避中のハインツがくしゃみした。
そしてそれをバルクホルンは見ていた。
バルクホルン「……」
ハルトマン「どうしたの？」
バルクホルン「なんでもない…」

第13話：亡国の悲哀

ティータイム後、宮藤、リーネ、ミラー、ノヴァクの三人はハインツの部屋の前にいた。

宮藤「失礼しま…ひゃ！」

その瞬間宮藤の右をペーパーナイフが飛んできて内開きのドアに突き刺さった。ドアにはナイフが突き刺さった跡が沢山付いていた。

ハインツ「宮藤か…エイラが手伝いもしないのに来たのかと思った。

で、何の用だ？給料なら中佐が持ってるぞ。俺は忙しいんだ。」

部屋の隅と真ん中の左右にソファーが置かれたテーブルの上に山のように酒の空ビンが置かれ、座ってるイスの前の別のテーブルは書類で埋もれて隅に置かれた灰皿はタバコの吸い殻で山になっていた。

その部屋の真ん中に置かれたテーブルに足を乗せながらハインツが言った。

ハインツは仲のいいエイラがよく手伝いもしないのに来ては適当に話して帰っていくという仕事の邪魔してるとしか思えないことをよくしてたせいで仕事が忙しい時期になると部屋に入ってきた途端、ペーパーナイフや銃剣やトマホーク（斧の方。整備士から巻き上げた品らしい）やハサミを投げるクセがついていた。

そしてその忙しい時期がちょうど今日だった。

給料日前後は税金や補助金、手当やらの計算で忙しかった。

なにせこの部隊で使われる通貨はスターリング・ポンド、だが税金制度はカールスラント、リベリオン、ブリタニア、ロマーニャ、扶桑、スオムス、オラーシャ、ガリア。

これだけの国の税金制度で毎月所得税、住民税、各種地方税、その他税金、各種控除、給付金、年金その他諸々の計算をしなければならないのである。

めんどくさくて仕方ない。だがそうしないと脱税で捕まるので毎月気が遠くなるほどの計算をして給料を払っている。

特にまだ固定レートだからいいが毎月各国通貨に一旦ポンドを変換してどれだけ給料を天引きするか計算するのは面倒である。
通貨だけでリベリオンドル、ライヒスマルク、リラ、旧円、マルッカ、ルーブル、ガリアフラン。各レートは大体割り切れない。
さらにこの部隊の公用語はブリタニア語（英語）なのだが彼の英語力は当時のドイツ人の中ではパイロットという頭脳職だったので比較的マシだったがそれでも壊滅的であり、普段からかなりキツイ訛りで話してた上に書類でもたまに綴り間違いして、読むにかけてはさらにヒドイレベルだった。
最もこれでも結構マシになった方なのだが…
そのため毎月この時期は山のような書類仕事にさらにたまの夜間哨戒（だいたい週一）に戦闘で労災申請レベルの仕事量だった。
宮藤「あの、バルクホルンさんのことについて知りたいんですけど。」
ハインツ「まあ、いいぞ。ただし条件がある。それでいいなら話すぞ。」
ハインツはそう言うとテーブルに引き出しからファイルを一つ取り出した。
そのファイルを開くと読み始めた。
ハインツ「ゲルトルート・バルクホルン、１８歳、１９２６年3月２０日生まれ。
階級は大尉、ただし本国では少佐扱いだ。
所属は第５２戦闘航空団第２飛行隊隊長。
出身はカールスラントの東プロイセンカイザーベルク。
剣付騎士鉄十字章受勲者。撃墜スコアは２５０以上。
品行方正、質実剛健、目立った規律違反のない優秀かつ模範的軍人。
家族は両親がいたが４０年に行方不明になり一昨年裁判所により死亡扱いに。
そのため戦死者遺族給付金が給付中。
今年の3月まではさらに戦災孤児特別給付金が支給され

ていた。
　また妹がいるがこちらは４０年に戦災で負傷、現在ロンドンにて入院中。
　これにより戦傷病者特別給付金が給付されてる。こんなもんだな。」
　それはバルクホルンの履歴書だった。
　ノヴァク「妹がいるのか…まさかとは思うが見舞いには…」
　ハインツ「記録によると…行ってないな。まずここ最近休暇を取った記録がない。」
　バルクホルンの休暇関連の書類を確認する。そこにはここ数ヶ月休暇の申請に関する書類がないことが記されていた。
　ハインツ「で、取引って言ったな。それじゃあお前ら全員、この書類の山を処理するの手伝え。
　それかアンフェタミンかペルビチン、メタンフェタミン持ってこい。」
　だいたい聞きたいことが終わったと感じたハインツは４人に仕事を手伝うかある物を持って来いと言った。
　だがその物がわからない宮藤が首をかしげる。
　宮藤「アンフェタミン？ペルビチン？メタンフェタミン？」
　ミラー「それ確か覚醒剤ですよね？」
　宮藤「かっ覚醒剤ってダメですよ！」
　それは全て覚醒剤の一種、この物質は全て大戦中実際に使用された物だった。
　大戦中両陣営において覚醒剤は積極的に使用された。
　有名なのがドイツのペルビチン。もともと鎮静剤であり当時ドイツ国内では薬局で手軽に買える品だった。
　実際の使用例ではエバン・エマール要塞攻撃時のドイツ兵に投与された記録があり、４３年に起きたレロス島上陸作戦「タイフーン」において降下した降下猟兵がイタリア軍がストックしていたアンフェタミンを発見、それを投与して夜襲してきてイタリア兵を撃退したという例がある。

戦後も各国軍では薬物が装備品の一つに数えられ、ベトナム戦争では米兵の薬物乱用が問題化、東西ドイツ軍は再統一まで覚醒剤を秘密裏にストックしていたことで知られている。

あまりに仕事量が多いためハインツはこれを要求したのだ。

ハインツ「うるせえ！過労死するよりマシだー！」

ノヴァク「それじゃあ俺は用事あるから失礼するぞ。」

宮藤・リーネ・ミラーとハインツが言い争っているとノヴァクは部屋を出て行った。

ミラー「逃げた…」

ハインツ「逃げられた…喜べお前ら一人分の仕事が増えたぞ。」

この後４人は山のような書類相手に地獄の戦争を夕食時まで繰り広げた。

ノヴァクがハインツの部屋を出てしばらくして。

ノヴァクはバルクホルンの姿を見つけた。

ノヴァク「バルクホルン、ちょっといいか？」

バルクホルン「なんだ？」

ノヴァクはすぐに声をかけた。

ノヴァク「ああ、少しお茶でもどうだ？」

バルクホルン「お茶？こんな時間にか？」

ノヴァク「悪いか？」

すでに日は傾き始め綺麗な夕日が見えていた。

バルクホルン「まあ別に構わないが…」

ノヴァク「ならよかった。」

バルクホルンがそう返答すると自分の部屋まで案内した。

ノヴァクの部屋はドアを開けると左手にベッド隣に小さな祭壇が、目の前に小さなテーブルと椅子が二脚、その奥にはラジオが置かれた小さな棚、テーブルの右手には上に片付けられたティーセットが置かれたタンスがあった。

ノヴァク「どうぞ座ってくれ。俺はお茶の用意をするから。」

バルクホルンに着席を促し、ノヴァクはタンスの上のティーセット

を慣れた手つきで準備した。
しばらくして出されたのはブリタニアで言うところのレモンティーとジャムだった。
バルクホルン「ノヴァク、なんでレモンティーなんだ?レモンティーは子供の飲み物だ。」
ノヴァク「バルクホルン、ポーランドじゃレモンティーが主流。むしろミルクティーの方が子供の飲み物だよ。」
バルクホルンがなぜレモンティーを出したか聞くとミルクティーの方が子供の飲み物だと言う。
ポーランドではイギリスとは真逆にレモンティーが大人の飲み物、ミルクティーが子供の飲み物だった。
バルクホルン「それと、なんでジャムがあるんだ?」
ノヴァク「そりゃあこうして飲むからだよ。」
バルクホルンの質問にノヴァクはスプーンでジャムを一掬いするとそれを紅茶の中に入れて飲んだ。
ノヴァク「ポーランドじゃあこういう飲み方が主流だからな。」
バルクホルン「そうなのか?」
バルクホルンも真似して飲んで見る。
バルクホルン「美味いな。なかなかいいな。ところでノヴァク、なんで呼んだ。」
バルクホルンがノヴァクに本題を聞く。
すると、
ノヴァク「バルクホルン、ヴァレンシュタインから聞いたぞ。お前妹の見舞いに行ってないみたいだな。
怪我したんだ、一度ぐらい見に行ってやれ。」
バルクホルン「そんなことしてクリスが目を覚ますと思うか?だったら一体でも多くネウロイを撃墜したほうが…」
ノヴァク「唯一残った血の繋がった家族にそれか?それじゃあクリスちゃんが可哀想だ。
せっかく唯一生き残った家族が自分の元にこないなんて。」

バルクホルン「…まれ…」
ノヴァク「たとえ目が覚めても自分を抱きしめる人がいない。」
バルクホルン「黙れ…」
ノヴァク「まだ生きてたらたまにニュースに載るだけいいだろう、死ねばある朝起きたら先生に『あなたのお姉さんは二階級特進なさいました』と言われたらどう思う、起きたら自分一人でこの世界に孤児として放り出されるんだぞ。」
バルクホルン「黙れ！貴様に何がわかる！家族を！祖国を！故郷を失った何がわかる！」
そう言うとバルクホルンはカップをテーブルに叩きつけて割って出て行ってしまった。
その反応にノヴァクは暫く呆然とすると、
ノヴァク「祖国を、家族を、故郷を、友人を、なにもかも失ってるから分かるんだよ…」
その呟きは夜の闇に消えていった。

翌日、リーネとミラーは格納庫にいた。
リーネ「ミラーさん今日はなんで一緒に飛ぶんですか？」
ミラー「ああ、ユニットの修理が昨日終わったからそのテストに。訓練の邪魔はしないから安心して。」
リーネ「大丈夫なんですか？」
トゥルーヒン「大丈夫だと思いますよ。
全く、少尉がトカイワイン2本くれるって約束しなかったらあと二週間かかるんですから。」
リーネの疑問に目に隈をつけた整備士のトゥルーヒンが答える。
どうやらワインの王様目当てに徹夜したらしい。
ミラー「すいません。約束のブツは昨日主任に渡したんでいいですよね。」
トゥルーヒン「まあいいですけど。僕はこれから寝るんで失礼するよ。」
トゥルーヒンが大きな欠伸をして格納庫から出て行くとそれと入

れ替わって坂本たちがが入ってきた。
坂本「今日は編隊飛行の訓練を行う！
私の２番機にリーネ！」
リーネ「はい！」
坂本「バルクホルンの２番機に宮藤が入れ。」
坂本の指示に宮藤はバルクホルンを見る。バルクホルンは坂本を見ていた。
坂本「宮藤、返事はどうした。」
宮藤「はい！」
坂本「それとミラーもユニットのテスト一緒に飛ぶ予定だ。そうだな？」
ミラー「ええ、ある程度機動性テストしてから空中射撃テストもする予定です。もし落ちたらすぐに助けてください。」
４人が離陸するとリーネ達は編隊飛行の訓練を始めた。ミラーはその後ろで戦闘機動に耐えられるかのテストをしていた。
ミラーのテストがひと段落して基地の端にある専用射撃場上空について下で高射砲部隊の観測要員が砲兵用のカニ眼鏡を用意して待機していた。
いつもならハインツが手伝うのだがこの時彼は部屋で風呂にも入らず爆睡していた。
砲兵『ミラー少尉。観測用意完了。いつでもどうぞ。』
ミラー「それじゃあ今から訓練弾を三連射する。」
無線で観測班に連絡すると通常の銃とは比べものにならない重い発砲音が３回なった。
ミラーから見ると５００メートル先に１００メートル下に置かれた目標のドラム缶に全弾命中した。
砲兵『全弾命中！全く羨ましい精度…』
命中の報告をした砲兵が何か続けようとした時サイレンが鳴り信号弾が打ち上げられた。
砲兵『ミラー少尉。ネウロイです。』
ミラー「ああ、そうみたいだ。」

ハインツ「ふぁ!?ネウロイ?」
部屋で爆睡していたハインツは急いで部屋を飛び出すとミーナやノヴァクと出会いユニットを履いて出撃した。
上空で坂本たちとミラーに合流するとハインツは即座に敵の位置を聞いた。
ハインツ「敵は?」
坂本「グリッド東０７地区、高度１５０００に侵入した。」
ハインツ「グリッド東０７、レベル１５０ね。最近連中出撃サイクルのブレが激しいな。」
ミーナ「カールスラント領で動きがあったらしいけど、詳しくは…」
バルクホルン「カールスラント!」
ミーナのカールスラントという言葉にバルクホルンが反応する。
実はこの時そこから数百キロ離れたユトランド半島とバルト海諸島地域では連合軍による大規模反攻作戦が行われていた。
この作戦は秘密裏であったためミーナの耳には何かが行われているとしか入ってなかった。
ハインツ「どうかしたか?」
バルクホルン「いや、なんでもない。」
ハインツがに聞くがバルクホルンは否定する。
だがその態度や表情は明らかに異常だった。
坂本「よし、隊列変更だ。ペリーヌはバルクホルンの2番機に、宮藤は私のところに入れ。
ミラーとハインツは狙撃用意。ノヴァクは遊撃だ。」
ハインツ「了解!ミラー射撃用意!」
ノヴァク「了解!さてと、ショータイムだ!」
坂本の指示でハインツはいつも通りミラーと組んで、ノヴァクはその特異性からいつも通り遊撃だった。
ノヴァクの固有魔法である加速はシャーリーと比べると伸び幅が一回り劣っていた。だがその一方で加速力とエネルギー維持に優れドッグファイトや旋回戦闘ではノヴァクの方が有利だった。

さらにスピットファイアの高い旋回性能と上昇性能も組み合わさり1対1では坂本でさえ苦戦するほどのドッグファイトの名手になっていた。

しばらくすると坂本の魔眼とハインツの双眼鏡がネウロイを捉えた。

ハインツ「目標発見！射撃用意！中佐援護してくれ。」

坂本「バルクホルン隊突入！」

バルクホルン「了解！」

敵を発見するとハインツはミーナに援護を要請。坂本の指示でバルクホルンは突入する。

さらにその後ろからノヴァクがネウロイを攻撃する。

するとミラーの射撃を観測していたハインツが叫んだ。

ハインツ「クソ！バルクホルンが邪魔だ！」

ミーナ「やっぱりおかしいわ。」

リーネ「え？」

ハインツが叫んだのに続いてミーナが言い出した言葉にリーネはミーナの方を向く。

ミーナ「バルクホルンよ！あの子はいつも視界に二番機を入れているのよ。

なのに今日は一人で突っ込みすぎる！」

ハインツ「その上近づきすぎだ。誤射の可能性がある。今すぐそこを退け！」

ノヴァク「わかった。俺が回収する！」

ハインツのネウロイから離れろと言う指示にノヴァクは足の速い自分が回収すると言い出した。

だがそれを全く聞いていないバルクホルンは相変わらずネウロイの一部を攻撃し続ける。

ミーナ「あそこを狙って！」

リーネ「はい！」

リーネが攻撃し始めるとバルクホルンは離脱し始めるがそこをネウロイが攻撃し始めた。

バルクホルンは回避しようとするがその先でペリーヌと衝突、さらにそこにネウロイが攻撃を集中させた。
バルクホルンはシールドを張るが不完全だったためすぐに抜かれ持っていた銃が誘爆、墜落し始めた。
ノヴァク「クルヴァ！バルクホルンは俺がどうにかする！」
ノヴァクは固有魔法を使い加速して急降下、バルクホルンをキャッチするとポッケからハンカチを出して胸の傷を止血しようとした。
ペリーヌ「大尉！」
宮藤「バルクホルンさん！」
ペリーヌと宮藤も続いてやって来る。
ノヴァクは近くの森で開けたところを見つけるとそこに降りた。
ノヴァク「クソ！出血がひどい。ハンカチじゃ一時凌ぎにもならんぞ！」
宮藤「ノヴァクさん！私がやります！」
ノヴァク「ああ分かった。宮藤頼んだぞ。」
宮藤「はい！」
ノヴァク「ペリーヌは援護してくれ。俺のシールドはそんなに強くない。」
宮藤と応急処置を交代すると隣で宮藤をサポートし始めた。
ノヴァクのシールドは自分一人を守るのが精一杯レベルのものだったためペリーヌに援護させた。
しばらくすると宮藤の治癒魔法が効いたのかバルクホルンが目を開けた。
ノヴァク「すごい…マルコの書5章25節のようだ…」
ノヴァクは宮藤の治癒魔法に聖書に書かれていたイエスの奇跡を思い出した。
マルコの書第5章第25節にはイエスが出血が止まらない女性の出血を触っただけで治した奇跡が書かれていた。
宮藤「今、治しますから！」
バルクホルン「私に張り付いていてはお前たちも危険だ…
離れろ…私なんかにかまわず……その力を敵に使え

…」

バルクホルンがうわ言のように言い始めるがノヴァクはポッケからチューブを取り出すとそれをバルクホルンの足に刺した。

バルクホルン「う！ノヴァク、何した。」

宮藤「ノヴァクさん！何したんですか！」

ノヴァク「まさかこいつをお前に使うとはな。安心しろモルヒネだ。こいつは効くぞ。

時期に痛みはマシになるはずだ。」

刺したのは鎮痛剤のモルヒネだった。

バルクホルン「敵を倒せ…私の命など…捨て駒で良いんだ…」

ノヴァク「捨て駒ねえ…残念ながら世の中には捨て駒にしていい命とダメな命ってものがあるんだ。

そしてあんたはその捨て駒にしてはいけない命に入るんだよ。

それにあんたには帰りを待ってる家族ってもんがあるだろ？違うか？」

バルクホルンのうわごとにノヴァクが答える。

その話し方はまるで自分に言い聞かせてるようだった。

バルクホルン「帰りを待ってる家族か…」

ノヴァク「ああ、〝家族がある〟兵士は家族にために祖国に帰らなきゃいかんだろ？違うか？」

ペリーヌ「宮藤さん！ノヴァクさん！早くしてください！」

ペリーヌがネウロイの攻撃になんとか耐えていた。だがシールドが破られるのは時間の問題だった。

それを上空でネウロイの攻撃から逃げてなんとかひと段落して体制を立て直して再度攻撃しようとしていたハインツが見ていた。

ハインツ「ミラー！下が結構ヤバそうだ！攻撃できるか？」

ミラー「いつでもやれますよ。」

ハインツ「ならやれ！遠慮するな慈悲も要らん！」

ハインツはミラーに射撃を指示した。

彼にとって救護中の仲間を攻撃する者には慈悲も情けも無用だっ

た。
次の瞬間、ミラーが５０ミリ砲弾を連射。明らかにオーバーキルな攻撃にネウロイは一瞬で消えた。
ノヴァク「バルクホルン、あいつら俺たちに手柄をやる気は無いみたいだ。」
５０ミリの独特の飛翔音を聞いて見上げたノヴァクが見たのはネウロイが一瞬で撃破される光景だった。
それを見たノヴァクは軽くジョークを言うと攻撃が無くなったのもあって４人の顔に笑みが浮かんだ。
バルクホルン「手柄なんて次があれば取れるぞ。まあその時は私が貰うが。」
ノヴァク「お前ジョークなんて言うんだな。」
ノヴァクのジョークに触発されたか、バルクホルンも傷が治ったのか銃をとって立ち上がりながら慣れないジョークで返した。
４人は敵がいないのでのんびりと上昇しながら上空に戻った。
上空に戻るとミーナがバルクホルンに近づいていった。
バルクホルン「ミーナ」
それに気づいたバルクホルンがミーナの方を向くとミーナはその顔を平手打ちした。
ミーナ「何をやっているの！貴女まで失ったら私達はどうしたらいいの！
故郷も何もかも失ったけれど、私たちはチーム、いえ家族でしょ！
この部隊の皆がそうなのよ！あなたの妹のクリスだって、きっと元気になるわ！
だから、妹の為にも新しい仲間の為にも死に急いじゃダメ！
みんなを守れるのは私達ウィッチーズだけなんだから！」
ミーナがバルクホルンに抱きついていつもの冷静さを失った感情的な声で言った。
その後ろではハインツが「まあ一部は本当に家族になりそうなんだけどねぇ」と言いながら某ウィッチ達を見た。向けられた２人はすぐ

に目を逸らした。
バルクホルン「すまない、私達は家族だったんだよな。」
ハインツ「それに世の中死に金って言う面倒なものと各種死ぬほどめんどくさい手続きもあるんだ。
勝手に死なれたらてめえの遺産から残業代しょっ引くぞ。」
ハインツがいつものような軽口を叩くとウィッチ達は笑って基地に戻った。

第１４話：或る軍人の話

ポーランド。この国ほど２０世紀の歴史で翻弄された国はないだろう。

史上初の世界大戦と世界初の共産主義革命によって独立を手にした直後にかつての宗主国相手に戦争を行い機動戦の有効性と騎兵の最後の花道を飾りある稀代の名将に唯一黒星をつけた。

そして西に復活を遂げつつあるライヒ（ドイツ）と東に虎視眈々と西への道を求めてねらっている労働者のユート（ソ連）ピアに挟まれたポーランドはイギリスとフランスに助けを求めた。

だが、助けは求めても来なかった。独立から２０年、ポーランドは蹂躙された。

西からは世界を戦争の渦に放り込む独裁者の軍が、東からは世界を真っ二つに割ることになる独裁者の軍が。

そしてポーランドは全てを破壊された。

首都はまた自由を手に入れた時ただの残骸と化し、国民は１０人に１人が死んだ。国中からユダヤ人という当時最大の少数民族が消えその内の９割が生きて故郷に戻ることはなかった。

そして４５年、戦争は終わった。エルベ川の向こうに鉄のカーテンを下ろして。

ポーランドに自由を与えたのは新大陸ではなく旧大陸のかつての宗主国だった。

かつての宗主国は欲しくもない共産主義を与え、彼らが行なった数々の蛮行を隠し、さらなる蛮行を重ねた。

そしてそれに耐えかねたポーランド人はある電気技師を中心とした運動を開始した。

彼らはもう一度自由を手に入れるために連帯した。

その動きはこの国で生まれ、史上最悪の独裁者の元神を信じたある男によって支持され、守られた。

そしてその動きはさらに続いた。

ポーランドから東欧全体へ、中欧へと。

こうして世界史の一つの時代が終わった。そして自由と新たなヨーロッパが出来た。

ポーランドはその中にいた。

だが歴史は終わらない。歴史は続くよどこまでも。

平和と自由は戦いによって手に入れた。そしてそれを脅かすものは常にいる。そしてポーランドはその最前線にいる。

かつての宗主国、未だ野心に溢れ勢いに乗った北の大熊からヨーロッパを守るために。

だがこの事のうちこの男、アレクサンデル・ノヴァクが知っているのは４５年に欲しくもない共産主義を与えられたところまでである。

それでもこの先、祖国に何が起きるかは分かっていた。

そしてそれを見れないことにどこか安心している気もしていた。

バルクホルンが撃墜された日の夜、ノヴァクとバルクホルンはノヴァクの部屋にいた。

バルクホルン「ノヴァク、昨日は本当に済まない。つい感情的になって…」

ノヴァク「バルクホルン、謝るのは俺の方だよ。

いくら説得するためとはいえ他人のデリケートなところに土足で踏み込んだんだ。

本当にすまない。」

バルクホルンは昨日感情的になってノヴァクのティーカップを割ったことを、ノヴァクはバルクホルンのデリケートな話をしたことを誤っていた。

ノヴァク「バルクホルン、昨日は本当に済まないことをした。

謝罪の意を込めて何かしたい。ダメか?」

バルクホルン「別に駄目じゃない。

それじゃあ駄目なら構わないんだがノヴァクの家族の話を聞きたい。」

バルクホルンがノヴァクの家族の話を聞きたいと言う。

それに一瞬ノヴァクは戸惑うが、

ノヴァク「別に構わない。君が家族の話をしたんだ。こっちが話しておあいこだ。」

そう言うと、深く深呼吸して持っていたティーカップをテーブルの上に置いた。

ノヴァク「俺が生まれたのはグディニャ、ドイツ語じゃあゴーテンハーフェンって言うんだっけ？

父はドイツ軍の騎兵将校。祖父はドイツ陸軍の指揮官だった。

祖父は軍の勤務で世界中を回っていた。

それで子供の頃からいろんな話を聞いてきたよ。

今考えたら大ホラ話がほとんどだったけど。」

ここでノヴァクの表情が明るくなった。笑みを浮かべながら話を続ける。

ノヴァクの祖父はドイツ軍の指揮官だった。

ノヴァク「じいちゃんの話は本当に面白かったよ。

義和団事件鎮圧のため中国に行って巨大なヒョウを狩った話。

清の皇帝の宮殿に押し入って高そうな白磁の壺と屏風を手に入れた話。

中国で穴掘ってたら龍の骨見つけた話。

マジ・マジ反乱でアフリカに行ってライオンに襲われた話。

日本軍に捕まって捕虜収容所から脱走して逃げてたら綺麗な日本人にあって口説いてたら捕まったって話。

その女性と数週間後に胃潰瘍で入院したら看護婦として出会った話。

全部が面白くて楽しかった。」

ノヴァクの祖父は義和団事件やマジ・マジ反乱や戦い数々の功績を挙げた軍人だった。

一次大戦では青島で日本軍の捕虜になり、戦後独立したポーランドに戻ると孫たちに自分の話をよく聞かせていた。

最後には満遍の笑みで楽しそうに話していた。
ノヴァク「じいちゃんは戦争が始まる5年前に74で死んだ。
最後の言葉は「今度はサタンを退治してくる。天国なら天使を抱いて来る」って。
ほんと最後まで楽しいじいちゃんだったよ。」
祖父が死んだ時を思い出したのか目が少し涙ぐむ。
ノヴァク「父さんは英雄だった。
一次大戦中にロシアの騎兵と鉢合わせして一騎打ちで倒したこともあったらしい。
家にはその時ロシア騎兵が持ってたって言うサーベルがあったよ。
独立後のソビエト・ポーランド戦争ではヴィスワ川の奇跡に参加した。
その後もポーランド陸軍で騎兵将校だった。
母さんとは大戦前に出会ったらしい。
母さんはなんでもできたよ。
家事、料理、勉強、車の運転、一回馬に乗って父さんの部下の騎兵を追い抜いていたこともあったかな?
家では英雄だった父さんも頭が上がらなかった。
父さんと母さんはまさに理想の夫婦だったよ。
毎日キスして愛してるって言ってた。ホント素敵な両親だったよ。」
遠い目をしてノヴァクは紅茶を飲んだ。
父親はかの有名なヴィスワ川の奇跡に参加していた。
ヴィスワ川の奇跡は1919年から21年まで続いたポーランド・ソビエト戦争のハイライトのひとつ。
当時新興国でいくらフランスやイギリスの支援を受けているとはいえ弱小国だったポーランドに侵攻したソビエト(ソ連の成立は22年なんで当時まだロシア・ソビエト共和国)はその軍事力に物を言わせてワルシャワ前面にまで侵攻した。
だがこの時赤軍(ソビエト軍の成立は実は46年。それまでは労働

者・農民赤軍が正式名称）はあるミスを犯した。
本来ならワルシャワ方面の赤軍の側面を南の部隊にカバーさせるはずなのだが、ワルシャワ方面の軍司令官と南部の部隊の指揮官が不仲であったためカバーしなかった。そのため赤軍の南に巨大なギャップが生まれてしまった。
そしてそれをポーランド軍が見逃さなかった。即座に強力な機動部隊が投入。
主力をワルシャワの北で拘束してる間に機動部隊はそのギャップを突破。
一気にワルシャワ前面の赤軍を包囲しようとした。包囲を恐れた赤軍指揮官は撤退を開始、これがヴィスワ川の奇跡だった。
この戦史に残る輝かしい勝利は次の戦争で機動力が重要になるという結論が導かれポーランドは騎兵を強化、ソ連は機動戦を研究し次の戦争を迎えることになった。
ノヴァク「俺には姉と兄、それに妹がいた。
姉は俺より6歳年上。
父さんの部下の友人だって言う男と結婚してワルシャワに行った。
兄貴は3歳上で俺より大きくて強かった。
父さんに憧れて陸軍に入って騎兵将校になった。
妹のバーシアは俺の4歳下。優しくて誰にでも愛想が良くて誰からも愛された。
俺は子供の頃に父さんに連れられて見に行った飛行機レースで飛行機を見てパイロットになりたいって思った。
それで地元のグライダークラブに通って18になってポーランド空軍に入った。
そこでは大切な親友、先輩、上官、いろんな人に出会った。
でも…戦争が始まって…うう…」
するとノヴァクの顔が暗くなり泣き始めた。
バルクホルン「大丈夫か…」
バルクホルンが心配する。

ノヴァク「ううう…ああ大丈夫だ。戦争が始まって…
全員死んだ。」
その言葉にバルクホルンは衝撃を受けた。彼女は両親を失った。だがまだ妹がいる。
彼は両親も、姉も、兄も、妹も失ったのだ。
ノヴァク「家族だけならまだ良かったかもしれない。
戦争が始まったその日に大切な友人、親友、尊敬した先輩・上官。全員が死んだ。
戦争が始まった日、俺はいつもより早く目が覚めて散歩に出ようと宿舎を出た。
そして宿舎から２０メートルぐらい歩いたところでサイレンみたいなのが上から鳴ってきたんだ。
それで振り返ったら…宿舎が爆発した。空襲だった。
あまりに突然すぎてなんなのか分からず呆然と立ってた。
そしたら次の瞬間、誰かに押し倒された。
暫くすると敵機は消えて周りにはたくさんの穴が開いてた。
それで動こうとしたら何かがのし掛かって動けなかった。
退けようと見たらそれは知り合いの整備士、その死体。しかも上半身だけ。
下半身はそこから5メートル先にあった。」
そのショッキングな、現代でもこの手の話に慣れた人間でないと衝撃を隠せない話にバルクホルンは衝撃を受けた。
彼女自身同僚の死を何度も目撃した。それでもここまで衝撃的な話ではなかった。
ノヴァクはそれでも話を続ける。
ノヴァク「それで腕を怪我して近くにあった野戦病院で手当てを受けると基地の指揮官がやってきて動けるものは歩いて、動けないものはトラックに乗せて撤退するといった。
それで俺はそれから数日何十キロと歩いた。食うものも飲むものもなく歩いた。

クラウツが空襲してきて砲撃もしてくる中、時にはドイツ軍の偵察部隊に出会って戦いになった。

俺も機関銃でフリッツを何人も殺した。そうしなかったら自分が死んでた。

そして撤退してきた街で基地の負傷者を乗せた車列がドイツ軍の戦車部隊に見つかって全滅したと聞いた。

それから数日、その街で休んでた。そしたら今度はソ連が攻めてきた。

ここだけの話だが当時、俺はどことなくナチスとソ連にシンパシーみたいなのがあった。

共産主義は悪くないって思ってたしナチスの反ユダヤ主義もその通りだと思ってた。」

共産主義に２５までに~と言う言葉があるが彼は３９年までは共産主義にシンパシーを感じていた。

そして同時にナチスの反ユダヤ主義も支持していた。

余り知られていないが当時ポーランドはドイツに次ぐ反ユダヤ国家だった。しかもその割合は都市部であればあるほど高かった。

これは国内のユダヤ人が多すぎ（当時ヨーロッパで最もユダヤ人が多かったのがポーランド）、同化政策の失敗、ユダヤ陰謀論の蔓延（これは今でも世界中である）、そもそもユダヤエリート層がポーランド化ではなくロシア化を支持していたなどの理由から徹底的に嫌われていた。

当時のポーランドの非行少年はユダヤ人の店をドイツ人と一緒に襲ったりしていた程だった。

だが現代ではポーランド人は自らを被害者だと主張して全責任をドイツに擦りつけている。

ノヴァク「それで、俺たちは中立国のルーマニア、ここじゃあダキアになる、そこに逃げ込んだ。

そしてそこで父さんがソ連に捕まって兄貴が戦死したことを聞いた。

最初に聞いた時、言ってる意味がよくわからなかったが理

解してからは本当に泣いた。
それでいつか兄貴の仇を討つと誓った。
それからはルーマニアの難民キャンプを脱走して歩いてユーゴスラビアに密入国。
ベオグラードにあったカナダ大使館に逃げ込んだ。
イギリス大使館じゃなかったのはどうやら沢山のポーランド人がイギリスとフランスの大使館に逃げ込んでたらしくて警備がかなり厳しかったから連邦のカナダのほうに逃げ込んだ。
そこからカナダ大使の協力を得てドブロブニクからベネチアに船で渡った後、そこで船をイタリア船に乗り換えてアレクサンドリアに亡命した。」
ソ連が参戦した後ポーランド軍将兵は大挙して国境を接していた国で中立だったルーマニアとハンガリーに逃げ込んだ。
隣国にはスロバキアもあったが実はスロバキアもポーランド侵攻に参加していた。（なおボロ負けだった）
このルーマニアルートはポーランド銀行（現・ポーランド国立銀行）の有していた金をカナダに脱出させるルートにも使われた。
ノヴァク「で、そこでカナダ軍部隊の飛行隊に合流。
一応義勇兵扱いで初めはグロスター・グラディエーターって言う複葉機を飛ばしてた。
それから暫くするとホーカー・ハリケーンって言う戦闘機に乗り換えた。
それでイタリア軍相手に戦った。
イタリア軍はこっちが羽布張りとはいえ単葉機なのに複葉機で立ち向かって来たんだぜ？
ドイツの同盟国がこんなザコとは思わなかったよ。」
北アフリカの戦いはドイツのイメージが強いが始めから最後までイタリア軍の方が多かった。
そもそも北アフリカの戦いはイタリアが準備不足なのにエジプトに突っ込んだ結果、イギリスに鎧袖一触で潰されて逆にキレナイカを失いかけドイツに泣きついたというのがドイツがアフリカに介入し

た理由だった。
　そのためドイツにとってアフリカはイタリアへの外交的配慮だったのだが指揮官のロンメルはそこから更にエジプト、スエズを渡って中東の油を抑え、大英帝国の心臓部インドに侵攻するという壮大な計画を立てていた。
　残念ながらその計画は某チート国家の物量に叩き潰されたが。
　ノヴァク「イタリアが来てから5ヶ月ぐらいしてから今度はドイツ機がきた。
　メッサーが多かったな。
　メッサー相手だとハリケーンは部が悪かった。
　ハリケーンは悪い飛行機じゃない。初めて乗った時はこれならメッサーが１０機来ても勝てるとか思ってたよ。
　ケツが軽くて離陸滑走中に浮く癖があったけど飛べばそれを忘れるぐらいいい機だった。
　操縦は楽だし火力もある、その上無線機と風防がついて最高だった。」
　ハリケーンの評価というのはかなり面白いところがある。
　ハリケーンを供与されたソ連では無線や風防の品質などを評価されたが一方で火器の信頼性や運動性に関しては悪かった。
　兵器としては必要な時に必要な数が必要な場所に存在するという兵器として最も重要な点を満たしていた。
　少なくともあまり評価のよろしくない機なのだが重要な２番手として数々の戦線で活躍した。
　ノヴァクにとってはポーランドのＰＺのような一次大戦の機に毛が生えた機と比べればまさに無敵に思えた。
　ただメッサーはさらに強かった。
　ノヴァク「だけどメッサーはもっと強かった。
　ハリケーンで初めてメッサーに挑んだらあっという間に撃墜された。
　今でもその時を思い出すよ。
　間一髪パラシュートで脱出して見上げたらメッサーがい

たんだ。

黄色の文字で１４って書かれてて手を伸ばせば届きそうなところを飛んでて屈辱的だった。」

メッサーシュミットＢｆ１０９はハリケーンよりも優秀な機である。

その優秀さはソ連ではフィッケル（Ｆｗ１９０）よりメッセル（Ｂｆ１０９）の方が恐れられたぐらいである。

ノヴァク「それでも何機か撃墜してた４１年の年末に新しい機に乗り換えた。

カーチスＰ４０キティホーク。

ハリケーンとは違って全金属製で頑丈で旋回性能もかなり高くてメッサー相手に互角に戦えた。」

Ｐ４０はザコのイメージがあるが意外にも地中海戦線では非常に評価が高かった。

これはそもそも太平洋戦線では日本機に機動性で劣っていたと言うのが原因だった。

一方メッサー相手の場合、速度性能に劣っていたが旋回性能に優っていたため評価は高く多くのドイツ機を撃墜した。

ノヴァク「それから４３年までキティホークに乗って戦った。

地上ではエル・アラメインって街の近くで大規模な戦いが何度もあった。

そして４２年１０月にイギリス軍が戦線を突破、そのままチュニジアまで追いかけて４３年の５月にドイツ軍は降伏した。

その翌月、俺はイギリス本土に移動した。

そしてスピットファイアに乗り換えた。」

エル・アラメインの戦いはミッドウェー海戦・第３次ソロモン海戦・スターリングラード攻防戦に並ぶ第二次世界大戦の転換点の一つである。

「エル・アラメインの前に勝利無く、エル・アラメインの後に敗北無し」とチャーチルが語る大転換点だった。

この〝始まりの終わり〟の後、ドイツはアフリカから叩き出されイ

タリアは降伏、連合軍は再度大陸に戻った。
するとノヴァクの顔が暗くなった。
ノヴァク「そんなある日、ニュースでこんな事をやってた。
ベラルーシのカチン近郊でポーランド人将兵の虐殺死体を発見。ソ連の犯行と思われる。って。
そのニュースを聞いて分かったよ。父さんがボルシェビキに殺されたって。」
それは現代でいうカチンの森事件だった。
１９４０年にソ連のＮＫＶＤ（ＫＧＢの前身）がポーランド軍捕虜の将兵３０００人をベラルーシのスモレンスク近郊、カチン近くのグニェズドボで殺害し埋めたと言う事件だった。この将兵の多くはポーランドの知識人階層出身かソビエト・ポーランド戦争に参加した軍人だった。
その中にはポーランドを代表する映画監督アンジェイ・ワイダの父親も含まれていた。
ノヴァクの父はこのボルシェビキの蛮行に殺された。
ノヴァク「そして6月のある日。
あの日は本当に天気が悪くて出撃はないと思って前日に酒飲んで寝ていたんだが突然隊長に叩き起こされた。
で、急いで起きたらラジオから連合軍がノルマンディーに上陸したって言うニュースが流れてたんだ。
驚いたよ。みんな来月ぐらいになるんじゃないかとか思ってたからさ。
それから数ヶ月ノルマンディーで対地攻撃に精をあげたりビールを運んでた。
あの頃はまだ３１７じゃなくて３０２にいたからさ。」
有名なスピットファイアのエピソードにノルマンディーでのビール輸送の話がある。
最も有名なのが両翼の下にビール樽をぶら下げたもの。
実はこれを考えたと言われてる（いろんな部隊が自分のとこだと主張してる）のがポーランド人部隊の第３０２又は３０８飛行隊だっ

た。

ちなみにこの任務、一部は司令部の公認だったらしい…

ノヴァク「ノルマンディーの後、俺は３１７に移動。それからずっと対地攻撃してた。

この世界に来る一ヶ月ぐらい前俺に来客が来た。

そいつは俺の姉婿の弟のアンジェイ・カチンスキだった。」

ノヴァクの顔がまた暗くなる。

ノヴァク「彼とは姉の結婚式で会ったきりだったけど家族や姉のことを知ってると思って会った。

そして聞いたんだ。家族がどうなったかって…

母さんとバーシアはグディニャがドイツに占領されてすぐにＳＳの部隊に殺された。

連中にとってはポーランド人はゴミ以下の存在だったらしい」

ノヴァクの妹と母はドイツのタンネンベルク作戦でＳＳのアインザッツグルッペンに殺されたのだ。

アインザッツグルッペンは独ソ戦のイメージが強いがポーランド侵攻でも活動しており、ポーランドの知識人階層や元将校、活動家をタンネンベルク作戦だけで約2万人殺害していた。

その言葉、人がゴミ以下というのはバルクホルンには衝撃だった。

この世に〝生きるに値しない命〟なる概念があることに軍人以上に一人の人間として衝撃的だった。

ノヴァク「そして姉さんはもっと酷かった。

４４年8月に姉さんの暮らしてたワルシャワで大規模な蜂起があった。

姉さんと姉婿のリシャルト・カチンスキはＡＫ、国内軍のメンバーとして参加した。」

ワルシャワ蜂起、ポーランド史に残る悲劇の一つ。そして東西冷戦の最初の犠牲者となった戦いである。

バグラチオン作戦で東部戦線が崩壊した４４年8月にワルシャワのレジスタンスが蜂起した。ソ連軍が助けてくれると思って。

残念なことに結果は最悪だった。ワルシャワは文字どうり破壊され尽くした。

スターリンはこのレジスタンスを見捨てた。

ノヴァク「そしてリシャルトはドイツ軍のリモコン爆弾を伴った歩兵部隊と交戦中に戦死。

姉さんは…姉さんのクリスティナ・カチンスキは…トルキスタン人とアゼルバイジャン人に強姦されて殺された。」

ノヴァクは泣き始めた。

姉婿リシャルトはリモコン爆弾を伴った部隊。即ちポーゼンの歩兵学校から分遣されゴリアテを装備していたレック少佐指揮の歩兵大隊レック（記録によるとゴリアテを装備してたのはこの部隊だけ）との交戦中に戦死した。

そして姉のクリスティナ・カチンスキはワルシャワ蜂起鎮圧部隊でも悪名高い部隊の一つ、アゼルバイジャン人とトルキスタン人の反共義勇兵からなるベルクマン特務隊から分遣された戦闘団ベルクマン（記録によるとアゼルバイジャンとトルキスタン義勇兵がいたのはこの部隊だけ）に強姦されて殺されたのだ。

ノヴァク「アンジェイはなんとか生き残ってドイツ軍に投降して捕虜収容所に入ってたらしい。

それでその収容所が連合軍に解放され、自由ポーランド軍に入ろうとして俺の名前を聞いて話しに来た。

こんなもんだな。満足か?」

バルクホルン「すまない。本当に申し訳ない。そんな事を軽々しく聞いて本当にすまない。」

話終わるとバルクホルンはすぐに謝った。

この彼女にとっては自分以上に過酷な素性になんてことを聞いたんだと思っていた。

ノヴァク「なに、別に謝らなくていい。いつか話さないとダメな話だと思ってたからな。

バルクホルン、家族は大事にしろよ。いつ死ぬか分からないんだから。

俺みたいに家族が居なくなって初めて分かる孤独を味わせるなよ。」

バルクホルン「そうだな。それとノヴァク、お前の家族ならいるじゃないか。

ウィッチーズの全員が家族だ。」

バルクホルンの言葉にノヴァクは面食らうがすぐに微笑むと。

ノヴァク「そうだったな。お前と俺は家族だったな。」

バルクホルン「ああそうだ。私とお前は家族だ。」

その言葉に安堵したのか紅茶を一口飲む。

紅茶はすっかり冷え切っていた。

ノヴァク「なら家族だからぶっちゃけた話をするが、今日お前を助けた時なんというかその…お前のことを失いたくないって思った。

今までも戦友を失いたくないって思ったことはあったがそれとはもっと違うものがあった。

家族を失いたくないと言うかそう言う感じのだったな。

これってどう言うことか…ああそういう事か。」

バルクホルンに話していると突然何かに納得して紅茶を飲んだ。

それに疑問に思ったバルクホルンが聞く。

バルクホルン「どうしたノヴァク?」

ノヴァク「いや、なんでもないよ。あとアレックスって呼んでいいぞ。

戦友の英国人からはよくそう言われてたからな。」

バルクホルン「分かったアレックス。」

その答えに軽く疑問に思うが特に気にせず紅茶を飲み部屋を出て行った。

部屋を出て行くバルクホルンを見ながらノヴァクは、

ノヴァク（まあ流石にあいつのことが好きだなんて言えねえよな…）

まさかの上官に恋していたようだった。

第15話：内陸国は辛いよ

ミラー「リーネ！お願い！泳ぎ方教えて！」
リーネ「え？え？え？」
なぜミラーが恋人のリーネに扶桑出身の整備士から教えてもらった土下座をしているか？
そして時を同じくして
ハインツ「シャーリー！泳ぎ方教えてくれ！」
シャーリー「へ？なんで？」
なぜハインツが格納庫でユニットの調節中のなんやかんやあって仲がいいシャーリーに土下座しているか？
さらに、
ノヴァク「なあトゥルーデ。泳ぎ方教えてくれ。」
バルクホルン「アレックス？」
バルクホルンにノヴァクが泳ぎ方を教えてくれるようお願いしているか？それは少し時間を巻き戻したら分かるだろう。

その日の昼間
3人は談話室でタバコをふかしながらトランプゲームのジン・ラミーをしていた。
ハインツ「え？」
ノヴァク「海？」
ミラー「ですか？」
ミーナ「そう、最近出撃ばかりでしょ。それで気分転換に。」
ある日、ミーナが3人を集めると海に行くというのだ。
ハインツ「ヒャッホーウ！休暇だー！やっと休めるぞ！
　せっかく書類地獄から解放されたのに給料はあがんねーし残業代は出ねーし上司は怖いしたまに夜勤まであるブラック企業なんてクソ食らえ！」
ハインツはこのニュースに　今までの書類地獄や給料への不満（彼

曰く安月給すぎる）をぶちまけて狂喜乱舞していた。
その光景にミーナは微笑んで見ていた。
ミーナ「あ、そうそう。海水浴と言ってもあなたたちは訓練があるから。忘れないようにね。」
そう付け足すとミーナはどこかへ行ってしまったのだが、
ハインツ「え？」
ノヴァク「訓練？」
ミラー「海水浴で？それって…」
「「ノーーーーー!!!」」
三人の休暇をぶち壊された悲鳴が基地に響き渡った。

さて、極東の某変態国家では義務教育の一環として水泳の授業がある。
ではヨーロッパではどうか？基本的にない。
そもそも国民全員に水泳を教えるという発想自体がないのである。
その理由はヨーロッパのほとんど国は本質的には大陸国家であり海そのものが遠い存在。そもそも海がないなんて国がザラである。
その上水害とも縁遠いのがほとんど（なおそれでもたまに水害は起こる模様）なので教えても意味がないのだ。
そのためヨーロッパ人はだいたい泳げないと考えたほうがいい。
そしてそれはこの３人にも当てはまった。
宮藤「へ？なんで泳げないんですか？」
ミラー「まず学校で習わないし、実は海見たのもこの基地に来て初めて見たんです…」
ミラーはオーストリア出身だったため海など生まれてこのかた見たことなかった。
日本では考えられないが欧米では海を見たことない人間はかなりいる。例えば第二次大戦を戦ったあるカナダ海軍の退役軍人は「同僚のほとんどがカナダ中西部出身で海を見たことない奴がほとんどだった。中には海をデカイ麦畑と同じようなものと考えてたやつもいたでしょう。」と語っていた。

まだこれは世界第2位という領土の広さを誇る国（カナダは実は見かけよりデカイ国）という事情もあるがそれでも内陸部出身の人間というのは海は非常に縁遠いものである。

リーネ「でも、他の人に教えて貰えばいいんじゃないですか？」

ミラー「少佐もノヴァクも泳げません。」

リーネ「それでも…なんで私なんですか？」

ミラー「他に頼れる人がいないんです！お願いします！」

リーネ「えぇ…」

リーネが答えに迷っていると突如轟音が響いた。

リーネ「きゃあ！」

ミラー「おぅ…リーネ大丈夫？」

その音に驚いてリーネはミラーに抱きついた。

リーネ「ハンガーの中から？」

宮藤「行こう！」

ミラー「いやそんなに慌てなくても良いと思うよ。」

そう言って2人は格納庫に行くがその音の原因になんとなく心当たりがあったミラーはその後ろを呑気に歩いていた。

シャーリー「でさ、なんで私なの？エイラは？」

ハインツ「ガーしてビューンしたら簡単って言うやつに頼むか？」

シャーリー「た、たしかに…」

ハインツはエイラにかつて夜間飛行のコツを聞いたら擬音で返されその後サーニャに聞いたことを思い出していた。

彼も割合感覚派で擬音語で話すこともあるが基本的に一般レベルの説明はできた。

シャーリー「でもさ、本当の目的はこれじゃないのかい？」

そうハインツに言うと自分の大きな胸を揺らす。

ハインツ「そんな訳ない…とは言えません。すいませんそれもあります。

どさくさ紛れに揉めたらなぁとか考えてました！」

ハインツは素直に謝る。割とおっぱいとか尻とか考えてる人間な

のだが「男が揉んだらアウト」という謎な考えで基本的に揉もうとはしない。（除くエイラ）

エイラ相手にキレて揉むことはあるが元からそういう仲だったのと9割仕事の邪魔してるのが原因。

シャーリー「正直でよろしい。

それじゃあハインツ下がってろ。今から回すからな。」

ハインツ「へーイ。ところでこのオーダー受けるのかお前。」

シャーリー「私の欲しい部品注文してくれたら良いよ。」

そう言ってシャーリーはユニットを回し始めた。

ハインツはその後ろで慣れた手つきでヘッドセットをつけて轟音に備えた。

その光景をしばらく見ていると宮藤たちが入ってきた。

宮藤「シャーリーさん！」

シャーリー「よう！どうしたんだ三人とも！」

ハインツ「何の用だ？ミラー、まさかとは思うがあいつに頼んだな。」

宮藤の声に気がついた二人は振り向いてシャーリーは手を振る。

ハインツはミラーに気がつく。ハインツの言葉にミラーとリーネが反応するが宮藤とシャーリーは気がつかない。

リーネ「あの、さっきの音は…」

シャーリー「ん？これのことか？」

リーネが聞くとシャーリーは足に付けっ放しのユニットを指した。

シャーリー「ふふん、これはな…」

そう言うとユニットを回し始めた。

その音に宮藤、リーネは耳を塞ぎ。ミラーは普段持ち歩いていた耳栓（５０ミリの発砲音が酷いため持ち歩いていた）をつけた。

ハインツはシャーリーの横でヘッドセットをつけていた。

宮藤がシャーリーになにか話しかけるが轟音で掻き消されていた。

シャーリー「うん、いい感じだ。もう少しシールドとの傾斜配分を変えれば…」

ハインツ「なあ別に良いけどよあんまり速度全振りにしてると曲

がったりする時問題起きねえか?
あとユニットの耐久性考えろよ。」
シャーリー「ああ、そだったな。それじゃあこの辺りをこのぐらいでどうだ?」
ハインツ「いや、俺に聞かれても分からんよ。メカニックじゃねえし。あと宮藤がなんか話してるぞ。」
この轟音の中シャーリーとハインツは慣れたように話していた。
するとハインツが宮藤が何か話している事に気がついてシャーリーに話す。
それに気がついたシャーリーが振り向くと宮藤が腕を振り回していた。
シャーリー「何を言っているんだ?」
宮藤「音が…あの…」
ハインツ「エンジン切ったらどうだ?」
宮藤が何か話しているが全く分からないシャーリーはハインツの言った通りにエンジンを切った。
宮藤「静かにして下さい!」
その大声にシャーリーも耳を塞ぐ。
シャーリー「…声が大きい。」
宮藤「え、あ、すいません。」
宮藤が謝る。
宮藤「ていうかなんなんですか?ハンガーで一体何をやっているんですか?」
ルッキーニ「も~うるさいな~…」
ハインツ「よおルッキーニ、そこにいたのか。」
宮藤がシャーリーに聞いているとハンガーの上の方から声がした。
全員が見上げると鉄骨の上で寝ていたルッキーニがいた。
宮藤「ルッキーニちゃん!?」
ルッキーニ「ふぁ~。せっかくいい気持で寝てたのに、芳佳の大声で起きちゃったじゃない。」
そう言うとルッキーニは鉄骨の上から飛び降りてきた。

宮藤「ルッキーニちゃん、あの音平気だったの？」
ルッキーニ「うん。だっていつものことだし」
リーネ「いつも？」
ルッキーニの答えに疑問に思うリーネと宮藤。
ハインツ「今日もコイツがエンジン弄ってた。
全く弄るのは良いがぶっ壊したら誰が書類書くと思ってるんだ？」
シャーリー「わかってるよ。今度は私がちゃんと書くからさ。」
ハインツ「それ前にも聞いたぞ。次書かなかったらお前のコーラの配給全部貰うぞ。」
ハインツとシャーリーが話していると宮藤がシャーリーに聞いてきた。
宮藤「エンジンを弄ってたって、どういうことです…」
シャーリー「おいで、見せてあげる。」
するとシャーリーはユニットを履いたまま格納庫を出て行った。
その後ろを5人が付いていく。
宮藤「あの、改造って…」
シャーリー「魔導エンジンのエネルギーの割り振りをいじったんだよ。」
宮藤「割り振りって、攻撃や防御に使う分のエネルギーを変えてるんですか？」
シャーリー「そういうこと。」
シャーリーはそう言いながらゴーグルをかける。
リーネ「一体何を強化したんですか？」
ミラー「速度、ですよね。」
シャーリー「勿論、速度！」
ハインツ「いつも思うけどお前速度以外ねえのかよ。火力とか高高度性能とか火力とかさ。」
リーネとミラーが聞くとシャーリーが当然のように答えた。
それに後ろにいたハインツが呆れたように突っ込む。なおハインツはバルクホルン以上の火力バカのきらいがあるのだが…

ルッキーニ「シャーリー！」
シャーリー「おう！」
ハインツ「始めるか。よしお前ら下がれ。」
するとシャーリーはスタートの準備を始めた。
それを見たハインツはミラー、リーネ、宮藤を下がらせる。
そして安全な所まで下がらせたのを確認したルッキーニが、
ルッキーニ「ゴーッ!!」
その掛け声とともに加速して離陸、上昇する。
ハインツ「速え…」
ミラー「Ｍｅ４１０なんて目じゃないですね…」
その速度にミラーとハインツは驚いていた。
そしてその光景をミーナ、坂本、ペリーヌが見ていた。
坂本「おっ、一気に上がったな。」
ペリーヌ「高度１０００まで５０秒。今までにない上昇速度です少佐。」
ミーナ「ピーキーに仕上げたわね。」
坂本「お手並み拝見だ…」
するとシャーリーはさらに加速した。
リーネ「シャーリーさんまだ加速してる…」
ルッキーニ「時速７７０キロ！７８０…７８５…７９０…７９５…８００キロ突破！記録更新だよ！」
ハインツ「は、８００？Ｍｅ２０９で７５５キロだぞ…すごい…」
シャーリーの記録にハインツが驚き戦前に記録されていた速度のレコードホルダー、メッサーシュミットＭｅ２０９の記録と比較した。
レシプロ機の速度記録は〝公式には〟３８年に記録されたＭｅ２０９の時速７５５キロがそれから約３０年間最速だった。
ちなみに現在の最速レシプロ機はＦ８Ｆ改造機、エアレースで有名なＦ８Ｆレア・ベア機が叩き出した時速８５０キロである。
だが、シャーリーの速度は伸びなくなり始めすぐに頭打ちになった。

ハインツ「加速しなくなった。まあまず８００キロ出るだけでスゴイんだけどなぁ…」
ミラー「確かＰ５１で７００キロ、Ｍｅ４１０で６００キロ戦闘で出れば良い方ですからね…」
暫くするとシャーリーが降りてきた。
それにハインツと宮藤、ルッキーニ、リーネが駆け寄る。
ルッキーニ「シャーリー！記録更新だよ！」
ハインツ「お疲れさん。８００キロはすごいな。」
宮藤「凄かったです！」
シャーリー「おおっ、やったあ！」
そう言うとシャーリーは４人の上に落ちた。４人は下敷きとなり1人はなぜか満遍の笑みだった。
ハインツ「重いけど天国～」
ハインツが満遍の笑みでシャーリーに潰されながら言った。
ハインツが下敷きになっていることに気がついたシャーリーが呑気な声で、
シャーリー「あー、お腹減った～ハインツ、この間作ったあれ作ってよ。」
ハインツ「え～お前なぁ…あれぐらい簡単にできるでしょ。」
なぜか嫌そうに答えた。

第16話：340m／s・内陸国出身者にとって最も遠いところ・男のロマン

さて、ハインツは意外なことに料理ができる。
しかもかなり上手い。
なおノヴァクはチーズケーキぐらいなら作れる。
ミラー?作れないことはないが雑。お坊ちゃんだからね。
シャーリーがハインツが料理を作れることを知ったのはある日、仕事終わりに一人で食堂で晩酌していたハインツが夜食として久しぶりに料理を作っていたところに、偶々夜遅くまで機械いじりしていたシャーリーがやってきて流れでシャーリーの分も作った事があったからだった。
ちなみにその後匂いにつられて夜中まで仕事していたミーナがやってきて3人で夜食を食べることになったが。
そしてこの日もシャーリーが飯を作ってくれとおねだりしてきたせいで食堂で得意料理を作っていた。
ミラー「まさか少佐が料理作れるなんて知りませんでした。」
宮藤「以外です。料理どころか掃除さえ出来ないと思ってました。」
シャーリー「あいつの料理はうまいぞ。料理に腕なら多分私よりあるんじゃないか?」
料理を待つ間、シャーリーはユニットの整備をしながら、残りは横でそれを見ながら話していた。
すると後ろから中ぐらいの鍋を持ったハインツが入ってきた。
ハインツ「はい、おまたせ。グラシュだ。」
そう言って床に置いたのは中欧で最も一般的な料理、グヤーシュ。
表記については地域差がありグヤーシュはハンガリー語と正式なドイツ語での発音。中央ドイツやオーストリアではハインツの発音のグラシュ、北ドイツではグーラッシュ、スロバキア語ではグヤーシュ又はグリャーシュと発音するらしい。
ハンガリー発祥（さらに辿ればモンゴル料理に行き着くとされる）

の料理でいわゆるシチューの一種で戦中はドイツ兵の糧食でえんどう豆のベーコン添えに並ぶ前線の食事の定番の品だった。またフィールドキッチンがグヤーシュキャノンと呼ばれる語源でもある。
その中でもハインツが作ったのはチェコにおいてよく食べられていた野菜が炒めた玉ねぎだけで小麦粉でとろみがつけられたタイプのものだった。
シャーリー「やっときた。いただきまーす！　んーうまい！」
ミラー「少佐、自分もいいですか？」
ハインツ「別に良いぞ。一応全員分のスプーンと小皿持ってきたし。」
ハインツは自分の隣に置いたナプキンで包んだスプーンを取り出しお玉で小皿に入れると食べ始めた。
それを見て残りもスプーンと小皿を取って食べ始める。
宮藤「いただきます。　お、美味しい。」
リーネ「美味しいです。」
ミラー「美味しいけど何か物足りないというか…ダンプリングがないのが物足りない。
あと味付けが薄いような？」
ハインツ「うちの地元は薄めの味付けだぞ。チロルだともっと濃いのか？」
ミラー「チロルじゃなくてザルツブルクです。いい加減覚えてください。」
ハインツのグラシュを食べて各々感想を言う。
グラシュ含めたドイツ料理全般は地域差がかなりあり、チェコでは比較的薄めでオーストリアはチェコ料理の影響が強く、オーストリア料理の名前にはチェコ語のものがそのまま使われていると言う。
ミラーが言ったのはウィーン風グヤーシュでダンプリングという小麦粉の団子と目玉焼きがついたもの。
すると横で写真アルバムを開いていた宮藤とリーネがシャーリーに聞いてきた。
宮藤「これなんですか？」

リーネ「グラマラスシャーリー新記録って、バイクの記録ですか？」
ルッキーニ「シャーリーはパイロットになる前は、バイク乗りだったんだって！」
ルッキーニが答える。
更にそれに続けてシャーリーがグラシュを食べながら答える。
シャーリー「ボンネヴィル・フラッツって知ってるかい？」
宮藤「ぼん…？」
シャーリー「リベリオンの真ん中にある、見渡す限りすべて塩で出来た平原さ。」
宮藤「そんな所があるんですか？」
シャーリー「ああ。そこは、あたしらスピードマニアの聖地なんだ。」
シャーリーの説明に全員が感心する。
ハインツ「で、ユニットの方が速いことを知って軍に入ったってとこか？」
シャーリー「そう、だからこうして任務のない日は記録に挑戦してるわけ。」
ハインツ「責任がないってのは良いねぇ…俺なんて給料日前後はサービス残業…辛い…」
ハインツが悲しいオーラを出しながらグラシュを食べる。
２人の会話を聞いていた宮藤がシャーリーに聞く
宮藤「それってどこまで行けば満足するんです？」
シャーリー「そうだなぁ……」
宮藤の質問に少し考えると、
シャーリー「いつか…音速、マッハを超えることかな？」
宮藤「へ？音速って何ですか？」
ミラー「音が伝わる速度。確か条件によりますけど平均で３４０ｍ／ｓでしたよね？」
ハインツ「でも昔聞いたけどプロペラだと音速は超えられないらしいぞ。」
宮藤「え？どうしてですか？」

ハインツ「ああ、プロペラは音に近づくと効率が低下して全く役に立たなくなるらしい。」
宮藤「それじゃあユニットでは超えられないんじゃないんですか？」
ハインツ「俺は超えられないと思ってる。」
シャーリー「私は超えられると思うけどな。」
レシプロユニットでは音速を超えられないと主張するハインツと超えられると主張するシャーリー。
ハインツ「は？物理的に無理だからね？８００ぐらいが限界でしょ。」
シャーリー「超えられるかどうかは試してみなきゃわかんないでしょ。」
ハインツ「賭けるか？」
シャーリー「もちろん。私が勝ったら私の言うことして貰うから。」
ハインツ「じゃあ俺が勝ったらお前の胸揉ませろ。いいな？」
シャーリー「ああ、良いよ。さてと今日はここまでにするかー。
で、二人は何か用かい？」
話しかけられたリーネと宮藤は顔を見合わせると、
「あーっ、忘れてた！」
思い出したように声を出すとハインツは食器と鍋を片付けに食堂へ、ルッキーニ以外の４人は滑走路に向かった。
この後暫くして黒豹がユニットを損傷させた事も知らずに…

翌日、綺麗に晴れた真夏日。
ハインツ「よく晴れた青い空、白い砂浜、青い海、そして１１人の絶世の美女たち。
ああ、最高の日。
泳げない以外は。」
ミラー「少佐、現実逃避してないで現実を見ましょう。現実を。
あとしれっとウィスキーの瓶を持ち込まないでください。

死にますよ。」
　ハインツとミラーはドイツ軍で支給される水着（ドイツ軍では水着やジャージもスポーツ用として支給されてる。戦場写真で水のかかる作業中のドイツ兵が履いてる黒いパンツがそれ）を着て遠い目をしていた。
　目の前ではルッキーニとシャーリーが飛び込んだり、ハルトマンとバルクホルンが泳いでいたり、エイラとサーニャが日焼けを気にする平和な光景があった。
　だが２人の脳内は泳げないのに訓練というどう考えても悲劇か喜劇しか待ち受けていない現実でいっぱいだった。
　ハインツ「頼むから泳げないと言う事実とこの後くだらない訓練だと言うことを忘れさせてくれ。」
　ミラー「無理ですよ。ノヴァクはもう覚悟決めてるみたいですし。」
　坂本「よし、ハインツ、ミラー来い。」
　ハインツ「はぁ…はーい。」
　２人が坂本に呼ばれて行くとそこにはユニットを履いた状態のリーネ、宮藤、ノヴァクがいた。
　ミラー「で？何するんですか？」
　ハインツ「まさかとは思うがユニット履いたままドボーン？」
　坂本「そのまさかだ。」
　ハインツ・ミラー「「え？」」
　その瞬間２人は回れ右して逃亡しようとする。だが、坂本の横にいるミーナの謎のダークオーラに蛇に睨まれた蛙のように動かなくなった。
　そしてそのまま無理やりユニットをつけられた。
　ハインツ「あのー。私泳げないんですけど…」
　坂本「大丈夫だ。そのうち泳げるようになる。」
　ミラー「まず海に入ること自体初めてなんですが…」
　ミーナ「大丈夫よ。だいたいみんな最初はそう言うものだから。」
　ノヴァク「まず犬かきすらできません。」
　坂本「つべこべ言わずさっさと飛び込め！」

「「ギャー！」」
そう言うと5人は海に放り込まれた。
リーネと宮藤がもがくがそこに全く泳げない3人が抱きついてそのまま沈んでいった。
坂本とミーナはそれを見ていた。
坂本「…浮いてこないな」
ミーナ「ええ…それよりハインツさんたち大丈夫かしら?あの反応からしてかなりマズイ気がするのよ。」
そしてその危惧は当たっていた。
坂本は懐中時計を取り出すと時間を確認した。
坂本「やっぱり飛ぶようにはいかないか」
ミーナ「そろそろ限界かしら?」
しばらくするとリーネと宮藤だけが浮いてきた。
2人は浮いたり沈んだりを繰り返していた。
坂本「いつまで犬かきをやってるかー、こら。ペリーヌを見習わんか！」
ミーナ「ところでハインツさんたちはどこ行ったのかしら?」
坂本がリーネと宮藤を叱り、ミーナがハインツたちがいないことに気がついた。
その横をペリーヌが泳いできた、
ペリーヌ「まったくグブァ！」
次の瞬間ペリーヌが何かに引っ張られて沈んだ。
ハインツ「グハ！死ぬ！助けてくれー！」
ペリーヌに真面目に死にかけていたハインツが抱きつく。
するとさらに宮藤とリーネが沈みミラーとノヴァクが現れ助けを求めた。
この明らかにヤバイ反応にやっと危険だと気がついた坂本とミーナ、バルクホルンが3人を救出した。
3人はそのまま浜辺に横にさせられた。
坂本「まさか泳げないと言ってたが本当に泳げないとは…」
ハインツ「次からは最初に4泳法教えてからにしてください…」

そのまま3人は浜辺で海を見ながらタバコを吸ってリーネと宮藤の訓練が終わるのを見ていた。
暫くすると宮藤とリーネがクタクタになって上がってきてハインツたちの横に倒れた。
宮藤「…もう動けない」
リーネ「私も…」
宮藤「遊べるって言ったのに…ミーナ中佐の嘘つき…」
シャーリー「すぐ慣れるさ」
見上げるとシャーリーがいた。
シャーリー「まだ隣にいるのよりはマシだと思うよ。」
ハインツ「俺ら、さっき死にかけた。マジで。」
シャーリー「大丈夫か?」
ハインツ「多分大丈夫。だと思う。」
シャーリーは死にかけたハインツたちに話しかける。
シャーリー「そう。それに、」
シャーリーはそう言いながらリーネと宮藤の間に寝っ転がる。
シャーリー「こうやって寝てるだけだって悪くはない」
ハインツ「まあ泳げないとそれしかできなんだけどな。」
シャーリーはそのまま両腕を広げて寝た。それを見てリーネと宮藤も両腕を広げて寝転んだ。
リーネ「お日様あったかい…」
宮藤「うん、気持ちいい…」
ハインツ「あー暇!泳げないとクソ暇!」
シャーリー「ハインツ、空気読めよ…」
ハインツ「だってクソ暇だもん。」
シャーリー「いやそれでも…」
更に話を続けようとしたその時シャーリーが何かに気がついた。
それにハインツの軍人としての勘がすぐに反応。魔導針を展開して索敵する。
シャーリー「敵だ!」
ハインツ「敵は一機、行くぞシャーリー!」

シャーリー「おう！」
２人はすぐに立ち上がり基地に走っていった。
それにリーネと宮藤は置いていかれた。
すぐに基地から警報が鳴り響き他の隊員も動き始めた。
坂本「敵は一機、レーダー網を掻い潜って侵入した模様！」
ミーナ「っ、また予定より二日早いわね！」
坂本「誰が行く!?」
ミーナ「既にシャーリーさん達が動いているわ！」
ミーナと坂本がネウロイの情報を得ていた頃、ハインツとシャーリーは基地の格納庫についていた。
ハインツ「シャーリー、俺が指揮する。」
シャーリー「了解！イエーガー機、出る！」
シャーリーとハインツが出撃する。
宮藤「シャーリーさーん！うわぁ!?」
滑走路に来ていた宮藤が２人が通り過ぎて倒れる。
リーネ「芳佳ちゃん、私達も！」
宮藤「うん！」
さらに続いて宮藤とリーネが出撃する。
その間、２人は上昇して地上からの指示を待った。
ミーナ『ハインツさん、聞こえる？』
ハインツ「中佐、聞こえますよ。」
ミーナ『敵は一機、超高速型よ。既に内陸に入られているわ。』
ハインツ「進路は？」
ハインツが地上に敵の情報を求める。
ミーナ『方角はここから西北西、目標はこのまま進むと…』
ハインツ「ロンドンだな。俺たちが昔使ってたルートだ。
シャーリー、お前の方が足が速い。先に行ってくれ。」
シャーリー「了解！」
加速力や上昇力はあるが足の遅いＭｅ４１０であるハインツはシャーリーに先行するように指示する。

その頃地上では完全な奇襲を食らった他のメンバーがミーナのところまで来ていた。
完全な奇襲であったため出撃できたのはハインツ、シャーリー、リーネ、宮藤だけ。
そのため残りは彼らがネウロイを撃破することを祈ることしかできなかった。
するとルッキーニが気になることを言った。
ルッキーニ「あ～、シャーリー行っちゃった…まさかあのままなのかな…」
ミラー「あのままってどういうことですか?」
すかさずミラーが聞く。
ルッキーニ「えっとね、夕べね。あたしシャーリーのストライカーをね…」
ミラー「は?」
その話にミラーとミーナの態度が変わる。2人から恐ろしいオーラが出ていた。
そのオーラに圧倒されてルッキーニの言葉が途切れる。
ルッキーニ「あの、なんでもないです…」
そう言って振り返ると黒いオーラを出したミーナとミラーがいた。
ミーナ「続けなさい?フランチェスカ・ルッキーニ少尉?」
ミラー「どうしたんだい?ストライカーをどうしたんだい?」
完全に目が笑っていない2人の笑顔にルッキーニは詰んだことに気がついた。
そして話されたのは昨日シャーリーのユニットを破損させ、それを適当に直したと言うのだ。
ユニットは非常に高い精度を要求される精密機械である。
普通に考えれば飛行していること自体奇跡的だった。

そんなこともつゆ知らず、空ではシャーリーがものすごい勢いで加速していた。
ハインツ「ほぉすごい加速だなぁ…もう一キロも離されたよ。」

割合呑気なこと考えていたハインツだったがシャーリーは不思議な感覚に襲われていた。
シャーリー（何だ?全然加速が止まらない。今日はエンジンの調子がいいのか?）
シャーリーの脳裏にバイクで速度記録を叩き出した時のことを思い出す。
彼女の耳にはノイズ混じりの無線は入ってこなかった。
シャーリー（この感じ…似てる…似てる…あの時と!）
シャーリーはエンジンに魔力をあるだけ全て流し加速をかけた。
シャーリー「いっけえええええええええ!!」
次の瞬間、爆音が響いた。
ハインツ「は?これってソニックブームじゃ…」
それはソニックブーム、物体が音速を突破した際に発生する音。鞭のバチンという音もこの一種である。
だがものすごい衝撃と音を出し、コンコルドがコケた理由の一つがこのソニックブームの騒音がアメリカ当局に止められ陸地では音速で飛べないというものだった。
シャーリーは音がなくなり静かになった世界に驚く。
シャーリー（これは…私、マッハを超えたの!?これが超音速の世界…?）
それに喜びバレルロールを始める。
シャーリー「すごい!すごいぞ!やった!私やったんだ!」
坂本『聞こえるか大尉!返事をしろ!』
シャーリー「少佐!やりました!私音速を超えたんです!」
やっと無線が耳に届くが音速を突破したこと以外全てを忘れていた。
ハインツ『おいバカ!突っ込むぞ!』
次の瞬間、ハインツの無線を聞いて前を見るとネウロイが目の前に来ていた。
すぐにシールドをはるが激突、ネウロイは破片となって消えた。
ハインツ「あー、目標撃破。あとあのバカが音速を超えた。」

ミーナ『シャーリーさんは?』
ハインツ「多分、無事だと…あ、うんかなりヤバいぞおい。」
すぐに双眼鏡でシャーリーを探し、見るとユニットが外れて落ち始めていた。
すぐにハインツは全力で向かい海面ギリギリでキャッチしたのだが…
ハインツ「あー中佐?憲兵は呼ばないでください。」
ミーナ『へ?憲兵?』
宮藤「ハインツさん!シャーリーさん!きゃ!」
リーネ「きゃー!」
ハインツ「宮藤!リーネ!これは事故だ!偶然だ!」
ハインツの手がシャーリーの胸に当たっていた。
この後、ハインツはリーネと宮藤に事故だと弁明した。
なお基地に戻っても弁明した模様。

第17話：兎、口を滑らす又はいつのまにかリア充の仲間入りしていた犬

その日の夜、ハインツは自分の部屋にいた。
その部屋はいつもなら空き瓶やタバコの吸い殻で汚いのだがこの日はチリ一つ落ちていなかった。
そしてテーブルの上にはウィスキーとコップが二つ置かれていた。
部屋の主人のハインツは真ん中に置かれたテーブルの両側に置かれたソファーに座って誰かを待っていた。
しばらくするとドアがノックされた。
入ってきたのは昼間の体当たりで念のため医務室で検査を受け特に何もないことが確認されたシャーリーだった。
ハインツ「シャーリー、その…まあ座ってくれ。」
そう言ってシャーリーに着席するよう促す。
そしてシャーリーが向かいの席に座ると、
ハインツ「昼間はすいませんでした！」
ハインツは向かいの席に座ったシャーリーに土下座した。
シャーリー「まあ私が指示無視して体当たりしたのが原因だから謝らなくて良いよ。
で、私の胸はどうだった？」
シャーリーはハインツに聞いた。
ハインツ「そのー柔らかかったです。ハイ。」
シャーリー「しっかり揉んでるなぁ…」
ハインツ「本当に申し訳ありませんでした！許してくださいなんでもしますから！」
ハインツはシャーリーにさらに謝る。
シャーリー「ん？今？なんでもするって言ったよね？」
ハインツ「あっ」
なんでもすると言ったことを揚げ足取られた。
シャーリー「じゃあ、」

ハインツ「じゃあ？」
シャーリー「じゃあ毎日あれ、作ってよ。」
ハインツ「あれ？」
シャーリーはハインツにあれを毎日作れと言ってきた。
あれがわからないハインツは聞き返す。
シャーリー「あれだよ。グラなんとかってやつ。」
ハインツ「グラシュか？」
シャーリー「そうそれ。あれ美味いんだよね。気に入ったんだ。」
ハインツ「まあそのぐらいなら良いぞ。」
シャーリーの要求はハインツのグラシュを毎日作って欲しいと言うものだった。
本人からすれば大したことのない事だったのですぐにＯＫを出した。
シャーリー「それと…賭けのこと覚えてる？」
ハインツ「賭け…あっ…」
音速を超えれるか否かの賭けの話になる。
この賭けはハインツの負けだった。
ハインツ「で、でもこれでおあいこに…」
シャーリー「なるわけないでしょ。」
ハインツ「デスヨネー」
必死で逃れようとするが約束した以上どうしようもなかった。
シャーリー「それじゃあ…私に料理教えてよ。」
賭けの代償は料理を教えてくれと言うものだった。
ハインツ「別に良いけどさ、なんで料理なんだ？」
シャーリー「そりゃあ、お前に私の手料理いつか食べてもらいたいからね。」
ハインツ「え？」
シャーリーのその言葉にハインツは目を丸くする。
なにせ解釈の使用によっては好きだと告白している言葉であった。
ハインツ「シャーリー、今お前なんて言った？」
シャーリー「え？…あっ…」

どうやら無意識で言っていたようで顔を真っ赤にして俯く。
ハインツ「へぇ、お前俺のこと好きだったんだ～へ～」
シャーリー「頼む、この通りだから忘れてくれ！」
シャーリーは両手を合わせて忘れてくれるよう頼む。だが、
ハインツ「残念でした！お前の口滑らしたシーン記憶しちゃったもんね！」
よく見るとハインツに使い魔の耳が生えていた。
それでさらに顔を真っ赤にする。
シャーリー「もぉやめてよぉ…恥ずかしいんだからさ…」
涙目でハインツの方を見る。するとテーブルにウィスキーの瓶があることに気がつく。
するとそれを取って栓を開けた。
ハインツ「へ？シャーリー？何する気だ？お、おいそれやめろー！」
ハインツが叫んだ。
なにせシャーリーがウィスキーを瓶ごとラッパ飲みし始めたのだ。
そしてそのまま全部飲んでしまった。
飲み終わった頃にはシャーリーの目は酔っ払ってトロンとしていた。
シャーリー「ハインツ。私のこと、どう思ってるの？」
今にも泣き出しそうな声で聞いてきた。
ハインツ「どうって…まあそのあれだあれ」
シャーリー「どうせ胸が大きいとか尻が大きいとか考えてるんでしょ？」
ハインツ「まあそのぉ…否定できない部分があることは認めます。」
ハインツはシャーリーの質問に正直に答える。
それを聞いてシャーリーは悲しげな声で言う。
シャーリー「私ってさ胸とかあるじゃん。
他の人はあるだけ良いでしょって言うでしょ、でも私からすればそれだけ？
私は胸とか抜けば何も残らないの？ハインツだってそう思ってるでしょ。」

ハインツ「シャーリー…」
シャーリー「ハインツと出会うまではそんなこと少しも思ってなかった。
実はさ、私、ハインツに一目惚れしたんだよね。
ハインツが気が付かなかったってことは相当上手く隠してたんだなぁ。」
シャーリーがハインツに告白する。最後の方にはいつものような笑顔で話していた。
シャーリー「でもさ、ハインツ、エイラと仲いいでしょ。
それに料理作ってくれた時に料理のできない女とは結婚したくないって言ったよね。
私は料理も何も家事もできないからさ、それで私は料理を習いたかった。
いつかハインツの奥さんになるために。」
ハインツ「シャーリー…お前そんなこと考えてたのか…」
シャーリー「ああ、だって私にはハインツが初恋だからね。
ハインツ、いつか、私を嫁さんに貰ってください。
ダメかな？」
その話にハインツはふっと笑うと、
ハインツ「ダメだな。まず料理、家事、洗濯が出来てない。その上書類は適当。
とてもじゃないが俺の嫁さんにはできんな。」
ハインツの話にシャーリーの顔が暗くなる。
ハインツ「それに俺は軍人、お前も軍人、いつ、どっちが先に死ぬか分からん。
故郷に恋人、妻、婚約者を残して戦死したやつを大勢見てきた。
俺はそんな不幸を味わいたくないし味合わせたくない。
それにもうちょっと遊んでいたい。
それでも良いなら、もう一度出直して来い。今度は俺が料理を教えてからな。」

最後の言葉にシャーリーの暗かった顔が一気に明るくなった。
シャーリー「え?それって…良いってことなのか?」
ハインツ「まあ、その、あれだ。来るもの拒まず去る者追わずだ。ただし、付き合うわけじゃない。第一恋愛関係はご法度だ。」
俺に片思いしてても構わんが俺が何しようが何も言うな。俺もお前が別の男と付き合おうが知ったこっちゃない。」
照れ隠しで頭を掻きながらハインツが言う。
それにシャーリーは一気に笑顔になるとそのままハインツに抱きついた。
シャーリー「ありがとう!ハインツ!じゃあ早速明日から教えてくれよ!」
ハインツ「おま、キツイ!痛い!てか明日の朝まで覚えてるのか?」
シャーリー「だーいじょうぶ。一度バーボンの瓶3本一気飲みしても前の日の記憶残ってたし!」
ハインツ「はぁ?俺ですらウィスキー2本飲んだら寝落ちするぞ!まさかお前酒乱癖あるんじゃ…」
シャーリー「え?私あんまり酒は飲まないからさ!大丈夫だよ。」
すっかりシャーリーもハインツも元の調子を取り戻し明るい声が戻った。
2人はこのまま日付が変わる頃まで酒宴を繰り広げ、あまりのうるささにミーナがやって来ると逆に酒宴に巻き込むほど飲みまくったのだった。
なお翌朝、食堂のキッチンでシャーリーと酒宴の中で巻き込まれたミーナがハインツから料理を教わって朝食を作っていた光景があった。

第18話：ナイトストーカー

ドーバー、その街にあるとあるバー。
「エクストラドライマティーニ。」
1人の男がマティーニを頼んだ。
その男は喋りからはカールスラント訛りが感じられ、立ち振る舞いから貴族又はかなり恵まれた環境で育った事が分かる。
また、スーツを着ているが所々に軍人の癖が見受けられる。
この男は自らが信頼する部下と会うために来ていた。
暫くすると別の男が入ってきた。
それに気がつくとその男に合図した。その男は彼の隣の席に座った。
「久しぶりだな、フェルカーザム。調子はどうだ?」
フェルカーザムと呼ばれた男が答える。
フェルカーザム「ウォッカマティーニ。ステアではなくシェイクで。
まあ上々だ。相変わらずキツイが。そっちはどうだケーネン?」
ケーネンと呼ばれた男が返す。
ケーネン「こっちもサッパリだ。あいつは尻尾を見せねえしこちらを潰そうとする。
それどころか狼の巣の予算を減らしたよ。」
フェルカーザム「全くあの野郎は何を考えてるんだか?」
そう言って彼は出されたマティーニを飲んだ。
男たちのこの会話を別の男が後ろで聞いていたがその男はこの数日後、ロンドンで〝自殺〟した。

1944/8/16
ブリタニア南部、ケント州上空。
史実ではユーママという愛称で呼ばれ各地で物資輸送や輸送に活躍し、オランダに降下猟兵を降下させ、クレタから英軍を叩き出し、ホ

ルムやデミャンスクの包囲陣内のドイツ兵を救い、終戦直後にはクールラントから負傷兵を救出しようとした（助かったのは３５機中３機だけだったが）名機ユンカースＪｕ５２が飛んでいる。

この稀代の名機の機内では坂本が不機嫌さを露わにした顔で座っていた。

ミーナ「不機嫌さが顔に出てるわよ、坂本少佐」

それを見てミーナが話しかける。それに不機嫌な顔のまま答える。

坂本「わざわざ呼び出されて何かと思えば…予算の削減なんて聞かされたんだ。顔にも出るさ」

この日、２人はブリタニア上層部に直接呼び出され予算削減を告げられたのだ。

この原因は実際はブリタニアの５年物短期戦時国債を支払うため軍の開発費を削った結果、その補填の為５０１が犠牲になっただけだった。

さらに開発費をどうしても補填したい理由がリベリオンがパワーバランスを左右する兵器を開発中という情報を入手した空軍の一派が対抗のためある兵器の開発をスピードアップさせたい事情があった。

ミーナ「彼らも焦っているのよ。いつも私達ばかりに戦果を挙げられてはね」

坂本「連中が見てるのは自分たちの足元だけだ」

ミーナ「戦争屋なんてあんなものよ…」

少なくとも平均以上の優秀な軍人の２人だが完璧な軍人としての資質を持ち合わせてはいなかった。

即ち国際感覚、政治感覚が壊滅的だった。

この二つは軍人には絶対に必要な資質だったが、時として目的のため数十万の生命を犠牲にするような世界の資質を彼女らが持ち合わせているはずがなかった。

軍隊は政治に関わるなと言う考え方があるがそれを後生守った結果、日本では陸軍が政治方面への関与を強める中対抗勢力の海軍は沈黙を貫いたため戦争を止められなかった。

関わらなければ止められるものも止められない事があるのだ。
そしてブリタニアの苦しい台所事情を知らない彼女たちは原因を誤解していた。
ミーナ「ネウロイが居なかったら、私たちは人間を相手に戦い合う羽目になっていたかもしれないわね。
ハインツさん達のように。」
坂本「ああ、その点は奴らに感謝しないとな。」
そう言って二人は言葉を失う。二人はハインツ達が語った戦争、第二次大戦の惨劇を思い出した。
すると坂本は窓の外を見ていた宮藤に声をかける。
坂本「悪かったな宮藤、せっかくだからブリタニアの街でも見せてやろうと思ったのに。」
宮藤「いえ…私は軍にもいろんな人がいるんだなって…」
宮藤はミーナの話したハインツさん達のようにという言葉が気になり聞こうとすると機内に声が響いた。
サーニャ『～♪』
歌声だった。宮藤は坂本たちに質問した。
宮藤「あの、何か聞こえませんか？」
坂本「ん？ああ、これはサーニャの唄だ。基地に近づいたな」
ミーナ「私達を迎えに来てくれたのよ」
坂本が答えミーナが補足した。それを聞くと宮藤は輸送機の外を飛ぶサーニャに手を振った。
宮藤「ありがとう」
それを見たサーニャは恥ずかしいのか雲の中に隠れてしまった。
宮藤「サーニャちゃんって、なんか照れ屋さんですよね」
ミーナ「うふふ、とってもいい子よ。唄も上手でしょ？」
ミーナと宮藤が会話していると流れていた歌が止まった。
ミーナ「…あら？」
坂本「どうしたサーニャ」
異常を感じた坂本が聞く。
サーニャ『…誰かこっちを見ています』

坂本「報告は明瞭に、後大きな声でな。」
サーニャ『すみません。シリウスの方角に所属不明の飛行体、高速で接近しています。』
ミーナ「…ネウロイかしら?」
サーニャ「はい、間違いないと思います。通常の航空機の速度ではありません」
サーニャの報告を聞いて坂本は魔眼で探す。
坂本「…私には何も見えないが」
サーニャ『雲の中です。目標を肉眼で確認できません。』
雲の中、その上夜間では確認は困難だった。
宮藤「ど、どうすればいいんですか?」
坂本「どうしようもないなあ」
ミーナ「悔しいけど、ストライカーが無いから仕方がないわ」
宮藤「そ、そんなぁ…」
それを聞いた宮藤が慌てるがそれをミーナと坂本が落ち着いた声で答える。
ミーナ「!、まさかそれを狙って?」
坂本「ネウロイがそんな回りくどいことなどしないさ」
サーニャ『目標は依然、高速で近づいています』
ミーナの推測を坂本が否定する。
ネウロイに知性がないと言うのはある種の偏見であり上層部の一部はある程度の思考能力を持った連中と考えていたが。
ミーナ「サーニャさん、援護が来るまで時間を稼げればいいわ。交戦は出来るだけ避けて」
サーニャ『はい。目標を引き離します』
ミーナ「無理しないでね」
ミーナからの指示に武器の安全装置を解除すると輸送機から離れていった。
宮藤「サーニャちゃんにはネウロイが何処に居るかわかるんですか?」
坂本「ああ、あいつには地平線の向こう側にある物だって見えてい

るはずだ」
宮藤「へぇ～」
ミーナ「それで何時も、夜間の哨戒任務に就いてもらっているのよ」
坂本「お前の治癒魔法みたいなもんさ。さっき唄を聞いただろ？あれもその魔法の一つだ」
ミーナ「唄声でこの輸送機を誘導していたのよ」
宮藤の質問に坂本とミーナが答える。
その間外からは時折爆発音が聞こえていた。サーニャがネウロイを攻撃していた。
サーニャ「反撃してこない…？」
ネウロイにロケット弾は確実に当たっていたが反撃がないことに違和感を感じていた。
その間に輸送機はネウロイから安全な距離まで離れていた。
坂本「サーニャ、もういい。戻ってくれ」
サーニャ『でも、また…』
ミーナ「ありがとう、一人でよく守ってくれたわ」
坂本の指示にまだ戦えると主張したがミーナの言葉を聞いて戦闘を終了した。
その頃雲の下ではオートバイ兵用ゴム引オーバーコートを着用したハインツと陸軍のスプリンターパターンの迷彩ポンチョを着たミラー、バルクホルン、ハルトマン、エイラ、ペリーヌがいた。
ハルトマン「ひどい雨だね。何も見えない」
ハインツ「ああ全くだ。なんとか輸送機を捉えてるが戦闘は終わったみたいだぞ。
そろそろ肉眼で確認できる筈だ。どうだ？」
ハルトマンの言葉に続いて魔導針で輸送機とネウロイを確認していたハインツが目視できるか聞く。
バルクホルン「あそこだ。」
すると雲の間に隙間ができているのをバルクホルンが見つけそこから輸送機とサーニャが降りてきた。
エイラ「サーニャ！」

ペリーヌ「ちょっとエイラさん！勝手なことを…」
ハインツ「まあ良いじゃないかペリーヌ。愛しのサーニャちゃんのことを心配してるってことだよ。
　お前だってサーニャが坂本少佐ならああしてるだろ？」
ペリーヌ「なっ私がそんな訳が…」
エイラが編隊から飛び出してサーニャを迎えに行く。それにペリーヌは憤慨するがハインツが煽る。
それをミラーが嫌悪感丸出しの顔で見ていることに気がついたのはハルトマンだけだった。
サーニャと合流した7人はそのまま輸送機をエスコートして基地に戻っていった。

バルクホルン「それじゃあ、今回のネウロイはサーニャ以外誰も見ていないのか？」
インナー姿のバルクホルンが言った。
基地に戻ると全員がシャワーを浴びたが規定違反で傘をさしたまま（多くの軍で軍服着用時の傘の使用は禁止されてる。割と無視されてる写真があるが。）待機していたノヴァクは全く濡れずタオルで軽く拭いただけでありハインツに至ってはタオルで拭いた後体を温めるとか言ってウォッカのボトルを出して一人飲み始めていた。
坂本「ずっと雲に隠れて出てこなかったからな」
ハインツ「一応俺も確認したぞ～誰か話聞けよなあ。」
坂本とハインツが話すがすでにウォッカの瓶を丸一本飲んでアイリッシュウィスキーを飲み始めて完全にできていたハインツの話を聞くものはいなかった。
ハルトマン「けど、何も反撃してこなかったって言うけど、そんな事あるのかな？　それ本当にネウロイだったのか？」
ソファの肘掛にもたれながらハルトマンが疑問を口にする。
ノヴァク「どちみちＵＦＯだからな。何だろうがどちみち不届き者なのは変わりない。」
それにノヴァクが意見する。

ＵＦＯは軍事用語で未確認飛行物体のことを指す。決して宇宙船のことではなく「確認されてない空飛ぶ何か」というものである。要はそれが鳥かもしれないし飛行機かもしれないし違う星から来たスーパーヒーローかもしれないという程度の話。

別にこのノヴァクはサーニャを疑ってる訳ではなく勝手に好き勝手飛んでる不届き者が気にくわないだけである。

リーネ「恥ずかしがり屋のネウロイ！」

「…」

ハインツ「もうちょっとうまいジョークはなかったのか？ないよりマシだけど。」

リーネ「…ごめんなさい…」

リーネが慣れないジョークで場を和ませようとするが派手にスベリ縮こまった。

ペリーヌ「だとしたら、ちょうど似た者同士気でも合ったんじゃなくて？」

ミラー「ペリーヌ、あとで話がある。」

その言葉にエイラは舌を出し、ミラーは怒りを込めた落ち着いた声でペリーヌに声をかけた。

この後ペリーヌがミラーに怒られたのは言うまでもない。

ミーナ「ネウロイとは何か。それが明確になっていない以上、この先どんなネウロイが現れても不思議ではないわ」

ミーナが手に持ったマグカップを回しながら話す。

バルクホルン「仕損じたネウロイが連続して出現する確率は極めて高い…」

バルクホルンも経験から話す。

ミーナ「そうね。そこでしばらくは夜間戦闘を想定したシフトを敷こうと思うの。サーニャさん！」

サーニャ「はい」

ミーナ「芳佳さん！」

宮藤「は、はい！」

ミーナ「ハインツさん！」

ハインツ「うぃ？」
ミーナに指名された３人が答える。酒を飲みながら聞いていたハインツは完全に出来上がっていた。
ミーナ「当面の間、貴方達を夜間専従班に任命します」
宮藤「えっ!?私もですか!?」
ハインツ「は？」
宮藤とハインツが指名されたことに驚く。
坂本「今回の戦闘の経験者だからな」
宮藤「私はただ見ていただけ……うわっ!?」
宮藤は自信がないことを伝えようとすると突然エイラが宮藤の頭に手を乗せてのしかかってきた。
エイラ「はいはいはいはい！私もやる！」
エイラは自主的に志願した。
ミーナ「いいわ。ハインツさん、指揮をお願いできるかしら？」
ハインツ「てめー俺の仕事量わかって言ってんのか！
この部隊給料２５日払いだろ！俺がこの時期どれだけ仕事に忙殺されてんのかお前ら知ってんのか！え？
お前らが毎日下できゃっきゃうふふしてる間、俺は毎日３０時間紙とネウロイ相手に戦争してんだよ！
俺を殺す気か！この悪魔！鬼！クソババア！」
ハインツがキレた。ちょうどこれから仕事が忙しくなる時期であったためとてもじゃないが毎日夜飛んだ後１２時間紙と戦争するなど訓練された社畜でも無理だ。それに酒も入っていたこともあってキレた。
この後散々罵倒合戦が繰り広げられ仕事は全部ミーナに丸投げする形で決着がついたとかどうとか。

第19話：明るい夜間飛行

翌朝、ハインツはいつも通り起きたが昨夜のことはあまり覚えていなかった。

ハインツ「あー頭がいてぇ…あ中佐おはようございます。」

廊下を歩いているとミーナを見つけて声をかける。

ミーナ「え…ああハインツさん、おはよう。ところで昨日のこと覚えてるかしら?」

なぜかよそよそしく返事をする。

ハインツ「今日から夜間哨戒するとこまでしか覚えてねえ…」

ミーナ「そ、そう。仕事は全部私がするから安心して。」

ハインツ「そうですか。」

ハインツは気づかなかったがミーナの態度はどことなくぎこちなかった。

ミーナ（いくら酔っていたとはいえ公衆の面前であんな事するなんて…本人の記憶にないのが唯一の救いね）

ミーナはそんな事を思っていた。

何をやらかしたか?酔っ払い仕事の話が片付くとエイラとミーナを口説き始めた。

それをバルクホルンとシャーリーに殴られ気絶、そのまま自分の部屋に放り込まれた。（なおミラーは流石にここまで行くと助ける気などなかった。）

そのためこの日一日中ウィッチ全員から余所余所しい態度を取られた。

ペリーヌ「あら、ブルーベリー。でもどうしてこんなに?」

朝食後、ペリーヌが食堂に積まれたブルーベリーが山ほど積まれた籠に気がついた。

それに籠を持ったリーネが話す。

リーネ「私の実家から送られてきたんです。ブルーベリーは目にいいんですよ?」

この山のようなブルーベリーは全てリーネの実家から送られたものだった。

バルクホルン「確かに、ブリタニアでは夜間飛行のパイロットがよく食べるという話を聞くが…」

ノヴァク「そんな話聞いたことあるな。リーネ、ブルーベリー少しもらえるか？」

ブルーベリーに含まれるアントシアニンが目にいいと言うのは科学的には証明されているがそのプロセスは未だに解明されていない。（マジ）良いと言っても抗酸化作用で疲労を抑える方向らしいが。

そのため日本では保険は効かないがヨーロッパなどでは代替医療の一つとして認可されている。

ちなみにこの話が広まったのは大戦中に英軍がレーダーの存在を隠すためにプロパガンダで夜戦パイロットはニンジンやブルーベリーを食べていると流したのが原因である。ニンジンは真っ赤な嘘だが。

リーネ「良いですけど。何に使うんですか？」

ノヴァク「紅茶に入れるジャム作ろうと思ってさ。」

バルクホルン「あの飲み方は悪くないからな。」

ポーランドでは（というかロシア含めた東欧では）ベリー系のジャムが主流である。

そしてロシアンティーの定番はベリー系のジャムである。

そのためこんなにあるならジャム作ってもいいだろうと考えたのだ。東欧ではジャムは自家製造なので作った経験もあった。

その後ろでは、

ルッキーニ「芳佳、シャーリー！べ～して、べ～！」

宮藤「こう？」

ルッキーニが宮藤とシャーリーに舌を出すようにねだり三人が揃って舌を出すと舌はブルーベリーで紫だった。

それを見て三人が笑いあっているのを横目にペリーヌはナプキンで口を拭いていた。

ペリーヌ「まったくありがちなことを……」

エイラ「お前はどうなんだ?」
ハインツ「お前も人のこと言えねえな。うん。」
そこにこっそりと後ろから近づいたエイラが無理やり口を開けるとペリーヌの口の中が紫一色に染まっているのが曝け出された。
それをほとんど同じぐらい口の中が紫のハインツが見て笑っていた。
ハインツは前線での経験から食える時にとにかく食うため全員の中で一番食べていた。
そんなことをしているとタイミングよく坂本が通りかかった。
そしてペリーヌの歯を見ると、
坂本「…何事もほどほどにな」
そう言って立ち去っていった。
ペリーヌは半泣きになりながら三人に詰め寄る。
ペリーヌ「な、なんてことなさいまして!エイラさん!ハインツさん!」
エイラ「なんてことないって」
ハインツ「俺なんてとばっちりじゃねえか。全部こいつのせいだろ。」
なぜかとばっちりでハインツも怒られていた。
その横でサーニャとミラーは静かにブルーベリーを食べていた。
サーニャ「美味しい…」
ミラー「これのソースをカイザーシュマーレンにかけたら美味しいだろうなあ。」
リーネ「今度作りましょうか?ブルーベリーはまだたくさんありますし。」
カイザーシュマーレンはオーストリアの菓子で皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が好んだことでも知られる菓子で引き裂いたパンケーキに果物のコンポートを添えたものである。
ミラーはこれが好きだった。そのため自分で作ろうとしたが料理の腕が伴わないため最近ではリーネに頼んでそれっぽいもの（パンケーキを裂いたものにジャムをかける）を作ってもらっていた。

なおハインツは普通に作れるしたまにパラチンタ（パンケーキで作ったクレープ擬き）作って食ってる。
坂本「さて、朝食が済んだところで…」
あらかた朝食が済むと夜間専従班の方に向き直った。
坂本「お前たちは夜に備えて寝ろ！」
「了解」
ハインツ「りょーかーい。それじゃあおやすみー」
４人は返事すると自分の部屋に戻っていった。

ハインツ「もう蜂蜜はいいからさぁ…「夕方だぞ～おっきろー！」ファ？ああ時間か…
あー寝た。二日酔いも抜けたみたいだし絶好の夜間飛行日和だな。」
その日の夕方、ハインツは昼寝しながら昼寝しようと忍び込んだハルトマンを窓から放り投げたり、廊下に投げたら、寝ぼけながら本投げたり、ダーツ投げたり、ナイフ投げたり、トマホーク投げたりしていた。そのせいでドアにはトマホークが刺さったままだった。
なお全部ウルトラCな方法で回避されたりして最終的に騒ぎに気がついたバルクホルンに投げてそのまま寝た。
ハインツはそのまま起きて食堂に入り眠気覚ましにコーヒー（豆）を飲もうとしたが部屋に入ると紅茶を出された。
ハインツ「なにこれ？コーヒーある？豆の方。代用出したら殺すぞ。」
宮藤「これは？」
ハインツが脳内ではコーヒーだったのに紅茶（らしきもの）を出されて不機嫌になる。
宮藤も出された紅茶（らしきもの）が分からず聞く。
ペリーヌ「マリーゴールドのハーブティですわ！これも目の働きを良くすると言われていますのよ」
ハインツ「あ、なるほど。なら俺はパスで。すでに持ってるし。」
それにペリーヌが答えるとハインツはポッケから小瓶を取り出す。

それにはアダプチノールとカールスラント語で書かれていた。
アダプチノールは第二次大戦中にイギリスの「ブルーベリーは目にいい」というプロパガンダを真に受けたドイツがマリーゴールドから抽出することに成功した物質、ヘレニエンを配合した暗順応改善薬である。
本来医薬品であるため厳格な規則が設けられているはずだがハインツは基地の軍医からポーカーで一瓶巻き上げていた。
リーネ「あら?それって民間伝承じゃ?」
ペリーヌ「失敬な!これはおばあ様のおばあ様のそのまたおばあ様から伝わるものでしてよ!!」
リーネ「う、ごめんなさい」
リーネに迷信と指摘されペリーヌが怒る。
それを横目に宮藤はハーブティーを飲む。
宮藤「山椒みたいな匂いだね?」
リーネ「山椒?」
宮藤が感想を言うがリーネは山椒が何かわからない。
ルッキーニ「芳佳、リーネ、もっかいべ~して」
するとルッキーニがひょっこりと現れて下を出すようにせがむ。
二人が舌を出すが舌は特に変わっていなかった。
ルッキーニ「つまんな~い!つまんない!ないないない!つまんない!」
それを見てルッキーニが騒ぎ始める。
さらに、
ノヴァク「なんというか…俺の知ってるハーブティーじゃない…
絶対どこかで作りかた間違えてるか違うもの入れてるぞ…」
ミラー「こんなまずいハーブティーが存在したとは…」
ハインツ「怖いもの見たさで飲んでみたが端的に言ってクソマズイ。
今度淹れ方教えようか?」
自重とか遠慮なくハーブティーを3人がボロクソに批評する。

言葉を選ぶといったことを全くせずに言ったためペリーヌは完全に落ち込んでいた。

夜間飛行、ひいては盲目飛行というのは非常に難易度の高いことである。

特に計器飛行という能力はパイロットの中でも特に難易度の高い能力である。

パイロットは計器の飛行姿勢が如何に自分の感じている姿勢とはかけ離れていてもそれを信じて機体をコントロールしなければならないのである。

人間は平衡感覚を重力、内耳の中で流れるリンパ液、そして視界で判断する。

この三つは地面の上や天気が良く水平線が見える状況では特に問題はないが夜間など水平線が見えない状況では視界の中の基準が見つからず視界の中の姿勢と内耳の中の姿勢が一致しないことが発生する。

これを空間識失調という。

空間識失調に陥ったパイロットの操縦を例えるならスイカ割りのような感じである。自分の中でまっすぐ進んでいても実際にはあらぬ方向に進んでいるそのような感じだ。

空間識失調が恐ろしいのは飛行経験が浅いパイロットだけでなく時にベテランの、戦争で実際に戦果を挙げたエースや元戦闘機乗りでさえ陥ることがあるのだ。

例えば２００４年にエジプトのシャルムエルシェイク沖で起きたフラッシュ航空６０４便墜落事故では第４次中東戦争で実際に戦ったパイロットだった機長が空間敷失調に陥りその上でＣＲＭ（クルー・リソース・マネージメント）に欠いていたため副操縦士がリカバリーすることなく紅海に墜落している。

そのほかにも１９９９年イギリスのロンドン・スタンステッド国際空港を離陸した大韓航空８５０９便貨物機が機長の空間識失調とＣＲＭ（クルー・リソース・マネージメント）の欠落の問題で墜落したり、同じ年の７月にはケネ

ディ大統領の長男だったジョン・フィッツジェラルド・ケネディ・ジュニアの操縦する小型機がパイロットの空間識失調で墜落している。

さらには２００７年のアダム航空５７４便、２０１０年のエチオピア航空４０９便、１９８５年の中華航空００６便など多くの事故で直接的間接的にせよ原因の一つとなっている。

現代の非常に安全な旅客機ですら起きる可能性があるのに１９４０年代の飛行機で起きる可能性は比べ物にならないほど高い。

そのため当時の計器飛行の免許はトップクラスの難易度を誇る難関だった。

有名なのがドイツ軍のＣ２飛行免許。盲目飛行に習熟しているという資格でありハインツも持っていた非常に難易度の高いものだった。

クソみたいなマリーゴールドティー（擬き）を飲んだ後４人は夜の滑走路にいた。

滑走路には規定通りに誘導灯が一直線に並んでいた。（ちなみに誘導灯がついてる＝安全ではなく稀にこのライトの海に飛行機のライトが紛れ込み滑走路上で衝突することがある。ＵＳエア機がＬＡＸでウィングスウェスト機と衝突した事故がその例）

そもそも夜間視能力を持っていたハインツはなぜかパイプタバコを吸っていたが全く慣れてない宮藤は怯えていた。

宮藤「あっ…震えが止まんないよ」

サーニャ「何で？」

宮藤「夜の空がこんなに暗いなんて思わなかった」

エイラ「夜間飛行初めてなのか？」

サーニャ「無理ならやめる？」

ハインツ「早い事出たいんだが？なんだったら置いてくぞ。」

エイラとサーニャが心配するがさっさとくだらない任務を終わらせて寝たいハインツはイライラしていた。

宮藤「…て、手つないでもいい？サーニャちゃんが手を繋いでくれたら、きっと大丈夫だから」

それを聞いてサーニャの魔導針が赤くなり使い魔の尻尾が揺れて

いた。
サーニャが宮藤の手を繋ぐとエイラはそれが面白くないのか反対側に回り手を繋いだ。
エイラ「さっさと行くぞ！」
ハインツ「んじゃあ用意できたと言うことで俺を先導に行きますか。」
そう言ってハインツが先頭に、続いて宮藤たちが離陸した。
4人は数分後には雲の上に来ていた。
星空が綺麗なことに気がついたハインツが冗談めかして言う。
ハインツ「ようこそ夜の空へ。一面綺麗な星空と明るい月は見放題。
ただしサービスは一切ございません。
また途中下車および団体行動から外れますと当方は一切の責を負いません。
では快適な空の旅をご堪能ください。」
それを聞いて3人が笑う。
結局この日はネウロイに会うこともなく快適な空の旅を過ごしたのだった。

第２０話：お調子者の戦争

翌朝、食堂には何やら生臭いものが出されていた。
ハインツ「なにこれ？生ゴミ？」
宮藤「肝油です、ナツメウナギの。ビタミンたっぷりで目にいいんですよ？」
相変わらず言葉を選ばないハインツが生ゴミと表現したものは肝油だった。
ハインツの質問に答えた宮藤は一斗缶を抱えそこには肝油と漢字で書かれていた。
ちなみにだがこの時代、肝油の加工品に肝油ドロップというものがあり巷の子供達の数少ない甘味として人気だったことを記しておく。
ノヴァク「子供の頃港で嗅いだことある匂いだ…」
ポーランド随一の漁港でもあるグディニャ出身のノヴァクにとってはこの匂いは懐かしいものだった。
ハルトマン「…なんか生臭いぞ？」
バルクホルン「魚の油だからな。栄養があるなら味など関係ない」
ハルトマンが匂いを嗅いで言うがバルクホルンが問題ないという。
ペリーヌ「おっほほほ！いかにも宮藤さんらしい野暮ったいチョイスですこと！」
坂本「いや、持ってきたのは私だが…」
ペリーヌが笑う姿を見ていた坂本が答える。それを聞いてペリーヌが固まる。
ペリーヌ「あ、ありがたくいただきますわ！」
そう言ってペリーヌはこの生ゴミ（もどき）を一気飲みする、そして石のように固まった。
ルッキーニ「うぇ～なにこれ～」
その横ではルッキーニが舌を出して感想を漏らし、
シャーリー「エンジンオイルにこんなのがあったな…」
ハインツ「お前、エンジンオイル飲んだことあったのかよ…」
シャーリーの感想にハインツは突っ込んだ。

エイラ「ぺっぺっ！」
エイラは必死で口から吐き出し、サーニャに至っては容器を持ったまま固まっていた。
坂本「新米の頃は無理やり飲まされ往生したもんだ」
ペリーヌ「…お気持ち、お察しいたします」
坂本が昔を思い出すように語るがペリーヌはまだ悶えていた。
ミーナ「もう一杯♪」
このどう考えてもおかわりどころか一口口つけたくもない状況でまさかのミーナがお代わりを要求した。
その横ではバルクホルンが悶絶し、ハルトマンはミーナを見てドン引きしていた。
肝油にはビタミンAが大量に含まれているがこれは一気に取ると急性中毒を起こして死に至る可能性がある。
ちなみに同じ理由でホッキョクグマもやばい。ホッキョクグマを食べるときは気をつけましょう。
ハインツ「ど、どう考えてもこれ毒じゃねえか！こんなの飲むか！」
ミラー「リーネはもう逃げたみたいですし逃げましょうよ！食中毒で戦死したくないです。」
ノヴァク「テロだ…」
この死屍累々な光景に3人は逃亡しようとするが坂本に止められ無理やり飲まされた。
その後3人は近くのトイレに駆け込み数分何かを吐く声が聞こえた。
出てきた頃には3人ともグロッキー状態で胃薬を飲むと「朝飯全部出した…」と言いその日一日中顔色が悪かった。

その日の夕方、ミラーはハインツを起こしに部屋に入った。
ミラー「少佐、時間です…何やってるんですか？」
そこにはカーテンから双眼鏡で何かを覗いていたハインツがいた。
ハインツ「何って…見ればわかるよ。」
そう言ってミラーに双眼鏡を渡した。

渡されたミラーは双眼鏡を覗き、すぐにハインツに返すと、
ミラー「少佐…何やってるんですか?このことは報告しますから。」
そう言って部屋を出て行った。
何をやっていたか?ハインツの部屋からは基地の近くの池が見えるのだがそこで宮藤たちが水浴びをしていた。それを覗いていたのだ。
普段から女風呂を覗こうという無駄な努力をしていたハインツがこれを見逃すはずはなかった。
この数分後、鬼の形相をしたミーナが現れ説教を受けた。

ハインツがミーナから説教を受けて暫くして。
この日もいつも通り４人は哨戒飛行の最中だった。
しばらく飛んでいると宮藤は普段は遠くからしか見ないハインツの左腕に付けられた飾り、クリミア半島の形が彫られ、上に鉤十字を持った鷲が、その横に１９４１と１９４２と、クリミア半島のところに「ＫＲＩＭ」と彫られた盾型の飾りに気がついた。
さらに左手の下の方を見ると黄色と白の「ＫＲＥＴＡ」と書かれたカフタイトルに気がついた。
宮藤「あの、ハインツさん?」
ハインツ「ん?なに?」
宮藤「この盾みたいなのと袖についてるのはなんですか?」
ハインツ「ああクリミア盾章とクレタ従軍タイトルだよ。こう見えてクレタ戦とクリミアで従軍してたから。」
宮藤の質問にハインツは自慢げに話す。だが宮藤はおろかエイラやサーニャですら意味が分からず首をかしげる。
エイラ「クレタ戦ってなんだ?」
サーニャ「クリミアは確かオラーシャにある半島ですよね?」
宮藤「ハインツさんはそこで戦ってたんですか?」
ハインツ「そういや宮藤には話してなかったな。俺たちが異世界の住人だったってこと。」
宮藤「え?それってどう言う意味ですか?」

ハインツの突然のカミングアウトに宮藤は理解できなかった。
ハインツ「どう言うってそのまんまだけど?向こうじゃあウィッチはおろかネウロイさえ影も形もなかったよ。」
宮藤「え?ネウロイがいないんですか?」
見切り発車で話を続けるハインツのネウロイがいないと言う話に宮藤は驚く。
ハインツ「まあいない代わりに人間同士が世界規模でドンパチする素敵な世界だけどね。」
宮藤「え…人間同士が世界規模でですか?」
人間同士の殺し合いという単語に宮藤は驚く。
ハインツ「ああ。俺もいっぱい殺したよ。まあそうしなきゃ自分が死ぬんだから。」
エイラ「…お前も殺したことあるのか?」
ハインツのいっぱい殺したという言葉に全員が驚く。
ハインツ「あああるよ。俺の話を聞くか?」
ハインツの話に全員が顔を見合わせる。すると宮藤が、
宮藤「ハインツさんの世界のことを教えてください。」
ハインツ「いいんだな?」
宮藤「はい。知りたいんです。」
ハインツ「よし、いいんだろう。さてどこから話そうか。」
しばらくするとハインツは話し始めた。
ハインツ「俺が生まれたのはチェコスロバキア、ズデーテン地方のツナイム。
この世界だとカールスラントとオストマルクの国境沿いになる。
親父はオーストリア＝ハンガリー帝国軍の砲兵士官。
一次大戦でオーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊してからはチェコスロバキア軍、さらに今ではドイツ国防軍の士官だよ。
去年には駐スロバキア大使館付武官に任命された。」
ハインツの父はオーストリア＝ハンガリー帝国軍の砲兵士官で戦後はチェコスロバキア軍で勤務、その間にチェコ語とスロバキア語を

習得した優秀な士官だった。
そしてその能力を買われてドイツ軍士官になってからはスロバキア軍の軍事顧問としてスロバキアのポーランド侵攻や東部戦線での戦闘を支援。４３年以降はブラチスラバのドイツ大使館付武官として勤務していた。
ハインツは知らないがその後彼の父は４４年８月に起きたスロバキア民族蜂起で西部スロバキア軍の武装解除を指揮し、その後は鎮圧軍司令部の参謀将校の一人として鎮圧作戦を指揮した。
ちなみに彼の父は蜂起軍を指揮したルドルフ・ヴィエスト大将やヤン・ゴリアン大佐、マラー少将とは面識があった。
さらにその後はベーメン・メーレン保護領国防軍総監部で勤務しトゥーサイン大将の幕僚の一人としてプラハ蜂起を戦い、カール・フォン・ピュックラー＝ブルクハウスに参加し第二次大戦最後の激戦として名高いスリヴィツエの戦いに参加、ソ連軍の捕虜になったがすぐに脱走して故郷に帰還していた。
ハインツ「母さんは親父の上官の貴族の娘だったらしいが全く料理できなくて子供の頃から祖母に作ってもらってた。
親父の実家はツナイムの飯屋だった。俺は子供の頃から祖母から料理を教えてもらってた。
一応俺にも兄弟がいて弟がいる。４２年に空軍に徴兵されて今第４４帝国擲弾兵師団ホッホ・ウント・ドイッチュマイスターにいる。」
ハインツの４歳下の弟は空軍に徴兵され陸軍の第４４帝国擲弾兵師団ホッホ・ウント・ドイッチュマイスター（以下ＨｕＤ師団）にいた。
弟は空軍に徴兵後、弱兵で有名な空軍野戦師団の一つ第１９空軍野戦師団（後の第１９空軍突撃師団）に配属されたがこの部隊から補充要員として同じ時期にスターリングラードで壊滅して再編成中だった第４４歩兵師団（後のＨｕＤ師団）に送られていた。
その後第４４歩兵師団は第４４帝国擲弾兵師団ＨｕＤと改称され

た。

ちなみにＨｕＤの称号は本来はオーストリア軍の名誉称号だが第４４歩兵師団が元々オーストリア軍第2師団の系譜を引いていたため与えられた。

改称後、Ｈｕｄ師団はイタリア戦線で戦い、４４年１１月以降はハンガリー戦に投入され最終的にオーストリアで米軍に降伏している。

ちなみに第１９空軍突撃師団は４４年に姉妹師団の第２０空軍突撃師団共々イタリア戦線で壊滅している。

そしてハインツの弟は彼は知らないが４４年5月から6月にかけての撤退戦で負傷、米軍の捕虜となり戦後故郷に帰還している。

ハインツ「で、俺は元々チェコスロバキア軍のパイロット志望だったんだがズデーテン割譲でドイツ空軍に志願した。

で、士官教育を受けて３９年末に少尉任官、その時には戦争が始まってた。」

ツナイムはズデーテン地方であったためドイツに併合されたのは解体より早い３８年だった。

ハインツ「で、俺はＢｆ１１０を飛ばして英国への空襲に参加した。

そこで初撃墜でハリケーンを撃墜したけど俺も撃墜されてドーバー海峡の海水をたらふく飲まされた。

そのあとたまたま通りかかったＵボートに拾われて帰還した。」

意外と思うがＢｆ１１０はＢｏＢまではドイツ空軍機の中では損害率が低かった。

特にフランス戦ではＢｆ１０９の方が損害を出し一時はＢｆ１０９を全てＢｆ１１０に変えることが真面目に議論されたぐらいだった。

ハインツ「ＢｏＢは俺たちがイギリス、この世界だとブリタニアになる。

その街を俺たちが空襲して制空権を奪うのが目的。

だからいろんな街に爆弾を落としてた。

ドーバー、サウサンプトン、リパブール、もちろんロンド

ンにも。」

指を折りながら今まで戦った街を数えるハインツ。

ドイツの空襲は航続距離のなさからイギリス南部が中心、それにドイツ機の多くは爆弾搭載量が非常に少なく爆撃も不完全だった。

この点がこの苛烈な一大航空戦を分けた。結局ドイツはイギリスの制空権を得られずドイツの勢いに陰りを見せ始めた。

ハインツ「その数ヶ月後、今度はバルカンに移動した。

目標はユーゴスラビア。そしてギリシャだった。」

第二次大戦の運命を変えた最も無名な戦いがユーゴスラビア侵攻とギリシャ侵攻である。

片方は突如親独政権が崩れ敵となった要地を、片方は頼りない同盟国の尻拭いのためやりたくもない侵攻を行った。

この二つの戦いでソ連侵攻作戦のスケジュールが遅れモスクワにたどり着く前に冬となってしまった。

ハインツ「俺はそこで出撃して3機を落とした。これが初戦果だった。

初戦果はイギリス軍の爆撃機。味方部隊に爆撃しようとしたところを撃墜した。

ギリシャ戦終了後今度はクレタ島に降下する降下猟兵の支援のために出撃した。」

クレタ島の戦い、メルクール作戦は当時史上最大の一大空挺作戦だった。

ドイツ空軍の降下猟兵合計2万を地中海の要所の一つクレタ島に降下させこの島を奪取するという作戦だった。

だが作戦は成功したものの大損害を負いそれ以降ドイツ軍が降下作戦に慎重になる要因を作った。これ以降各国が降下作戦に積極的になるのと対照的にである。

ハインツ「で、そこで俺は対地攻撃と対艦攻撃に精を出して一級鉄十字賞とクレタタイトルを貰ったわけ。

貰った際には第4航空艦隊のアレクサンダー・レーア大将が直接下さった。」

クレタタイトルはクレタ戦に参加した全ての兵士に与えられた袖章のことである。似たものにアフリカタイトル、クールラントタイトルなどがある。

ハインツに勲章を授けたアレクサンダー・レーア大将はドイツ空軍にたまにいる珍しい経歴の持ち主でオーストリア軍将軍からドイツ空軍の将軍となり戦中にはE軍集団や第１２軍の指揮を執った事もある変わり種の将軍の一人。

戦後ユーゴスラビアへの空襲で戦争犯罪で裁かれ処刑された。

この人は騎士道精神に溢れた人物でバルカン半島の諸言語や風俗に通じているという人物だった。

ハインツ「その1カ月後、今度はソ連、こっちでいうオラーシャに侵攻した。

ソ連軍はとてつもなく弱かった。俺なんて開戦二日後にソ連機をまとめて8機落としたぐらいだった。

侵攻スピードもえげつなく一日で６０キロ進軍したなんて話を聞いたぐらいだよ。」

開戦直後のソ連軍は当時のソ連上層部がドイツの侵攻を予測しなかったため大混乱に陥り僅か数日でベラルーシのミンスクが陥落、空軍もちょうど旧式機から新型機への更新時期というタイミングで旧式機が多く最初の数か月はものすごい勢いで機を失っていった。

ハインツ「が、俺たちはナポレオンの二の舞になった。

モスクワで宴会をする前に冬になってその上補給路が伸びて冬用装備を貰えなかった。

俺たちは幸い入手できたが前線の兵士たちはそうはいかなかったらしい。

そのせいで俺たちはクレムリンの星が見えるところまで行ったところで撤退した。」

当時のロシアの道路事情は劣悪極まりないようなものであった上、ドイツ軍の補給は自動車化されておらずまだ旧態依然とした馬匹によるものであり補給の根幹をなす鉄道もロシアンゲージを標準軌に直さなければ全く使えなかった。

それでもマイナス３０℃近い中を突き進みモスクワまで３０キロまで到達したがそこが限界だった。

ハインツ「俺は４２年の1月に移動になってクリミア半島に移った。

そこはパルチザンだらけでよく補給部隊が襲われてた。

それで俺は基地周辺のパルチザン狩りのために上に部隊を要請して１０００人ぐらいのたいそうな部隊がやってきてパルチザンを５００人ぐらい捕まえてた。

その部隊の指揮官からそのあと、基地周辺で目立たない場所はないかって聞かれた。

俺は近くにあった貴族の屋敷跡を教えた。

それから屋敷の跡地からは銃声が聞こえて井戸からは死臭がした。」

ハインツは知らなかったがこのとき呼んだのはアインザッツグルッペン、ＳＳの殺戮部隊だった。

彼らはパルチザン掃討を兼ねて基地周辺のユダヤ人、共産党員を処理していた。

ハインツ「クリミア戦は最終的に7月にセバストポリ要塞を落として終わった。

で、その時にクリミアシールドをマンシュタイン元帥自らくださった。」

クリミアシールドはドイツ軍の盾章の中でも最も授与者の多いものである。

ほかの盾章にナルヴィクシールド、ホルムシールド、デミャンスクシールドなどがある。

ハインツはそれをマンシュタイン元帥から受け取るという名誉を受けていた。

ハインツ「そのあと俺はコーカサスに移動、ソ連軍相手に空襲したりした。

で、ある時対空砲火を受けて被弾、墜落した。

後方にいた機銃手は即死、俺は奇跡的に無傷だったがソ連

軍陣地のすぐそばに落ちてすぐに捕まった。
連中、俺を処刑するかと思いきや意外にも丁重に扱ってくれた。」
大戦時のソ連軍というと捕虜を即処刑するイメージがあるが実際には捕虜からの情報を重視し捕まえるとまず丁寧に扱い出来る限りの情報を得ようとしたのである。
ハインツ「で、しばらくするとトラックにほかの捕虜の共々乗せられた。
俺の前にいたのは陸軍の工兵中尉、隣には若い二等兵とバラライカを持った将校がいた。
乗せられてしばらく走ってると何やら砲撃音や銃撃音が聞こえて気が付けば隣にいた将校が倒れた。
次の瞬間、トラックが揺れて砲弾が炸裂した。
トラックが止まるといろんなとこからソ連兵が出てきて撃ちまくってた。
俺は伏せてトラックに空いた穴から外をのぞいたらドイツ兵が戦車とともにいた。
味方に気が付いたトラックにいたほかの捕虜が監視していたソ連兵を殴り倒して武器を奪った。
俺もバラライカをもってトラックから飛び出した。
飛び出したらそこはもうしっちゃかめっちゃか。
いろんな所に敵がいたり味方がいたりとにかく訳が分からなかった。
それでもソ連兵を白兵戦で倒したりした。弾がなくなれば絞殺したりスコップで殴り倒したこともあった。
で、気が付いたら味方の戦車のそばにいて戦車に乗ってた髭を生やした砲手から水を貰って部隊に戻った。
後で聞いたが救出したのは第１３装甲師団第４装甲連隊第３大隊第９中隊だったらしい。」
このときハインツを助けた戦車兵は彼は気が付いてないが第二次大戦のドイツ軍のトップ戦車エースクルト・クニスペルだった。

彼はこの時、丁度４２年８月末にコーカサスの第１３装甲師団に所属して戦闘を行っていた。

ハインツ「部隊に戻ると今度はスターリングラード方面に移動した。

その時機銃手の代わりに乗せたのがミラー。

あいつの初出撃の話聞くか？

あいつの初出撃はスターリングラード戦、スターリングラードへの空襲でスターリングラード上空に差し掛かったところでソ連機の襲撃を受けた。

俺は間一髪回避して右主翼の先を被弾しただけだったが襲ってきたソ連機のパイロットと目が合った。

驚いたことにそいつは女だった。胴体に白ユリの絵が描かれてて後で聞いたがそいつはエースだったらしい。

ミラーはそいつを撃ち落とせる絶好のチャンスを逃しやがったんだよ。

まあ今言ってもしょうがないが。

そのあとスターリングラードは包囲されて俺は輸送機の護衛任務に参加したけどスターリングラードの見方は降伏、俺のいた部隊はその後本国に戻ってＭｅ４１０に機種転換、ドイツ本国の防空戦に参加したんだ。

で、そこで撃墜されて気が付いたらこっちに来てた。こんな感じだな。」

ハインツは話し終えると宮藤たちのほうを見た。

３人とも俯き、暗い表情をしていた。

第21話：軍人とはメリハリをつける生き物

ハインツが自身の戦争体験を語った後、3人の表情は暗かった。
3人とも現代人のように〝人間同士で殺しあう〟世界に慣れてないためショッキングすぎた。
話した本人であるハインツですら流石に不味いと思うほど空気が重かった。
空気を換えようとハインツが宮藤に話しかける。
ハインツ「そういや宮藤、お前今日誕生日だよな？」
宮藤「え？何で知ってるんですか？」
ハインツの質問に驚く宮藤。
ハインツ「なんでって…お前らの書類管理してるの俺だぞ。その中にはお前の履歴書もあるんだからさ。」
エイラ「なんで黙ってたんだ？」
エイラが宮藤に質問する。
宮藤「でもこの日はお父さんの命日でもあるの…それにハインツさんの話もあったし…」
それを聞いてハインツとエイラが溜息をつく。
ハインツ「バカだねえ、宮藤。」
エイラ「こう言う時は楽しいこと優先したっていいんだぞ。」
宮藤「そうかな？」
ハインツ「ああ。お祝いに一杯どうだ？なに遠慮するな。」
そう言ってハインツがポッケから金属の水筒を出し宮藤に渡す。
宮藤は蓋を開けて飲むが口に強烈なものが流れ込みすぐに吐き出す。
宮藤「ぷっ！ハインツさん！これなんですか!?」
ハインツ「あー勿体ねえ…それハイランドコーヒーだぜ。
　せっかく入手したブルーマウンテンで淹れたコーヒーにバランタインを入れた高いやつなんだからさぁ…」
エイラ「なに未成年に酒飲まそうとしてるんだよ！」
ハインツの話を聞いてエイラがハインツに突っ込む。

ハインツが宮藤に飲ませたのは眠気覚まし用に夜間哨戒時に用意していたハイランドコーヒー（スコッチウィスキーにコーヒーを混ぜたもの）だった。
その光景を見て宮藤が笑っているとサーニャが近づき何かをいじった。
すると何か聞こえることに宮藤が気がついた。
宮藤「あれ？何か聞こえる」
ハインツ「こりゃあ…」
エイラ「…ラジオの音」
インカムに流れてきたのはラジオの音だった。
サーニャ「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線からの電波も届くようになるの」
ハインツ「まあ俺も普段はやってるんだがな。」
2人の話を聞いて宮藤は興奮してはしゃぐ。
宮藤「へええ、すごいすごい！こんな事が出来るなんて！」
その横でエイラが静かにサーニャの横に行く。
エイラ「三人だけの秘密じゃ無かったのかよ」
サーニャ「ごめんね。でも、今夜だけは特別」
ハインツ「まず秘密だったのかよ…」
エイラ「それどう言う意味だよ！」
ハインツ「この裏技ミラーにも教えたぞ。リーネも確か最近使ってるはずだし。」
エイラ「勝手に教えんなー！」
ハインツの発言にエイラが突っ込む。
それを見てサーニャと宮藤が笑う。
ハインツ「まあまあ、今日は特別なんだから良いじゃない、ね？」
エイラ「ちぇ、しょうがないなぁ…」
そう言ってエイラはハインツを許す。
その反応が気になった宮藤はサーニャに聞く。
宮藤「えっ？どうしたの？」
するとその間にエイラが割り込む。

エイラ「あのなっ、今日はサーニャの…」
次の瞬間、サーニャとハインツの魔導芯が赤くなる。
エイラ「どうした!?」
すると今度は無線から謎の音が流れてきた。
エイラ「何だ！」
宮藤「これ、唄だよ！」
ハインツ「唄ならもうちょっと上手く唄ってほしいもんだな。
　サーニャをパクってる割にはヘタクソじゃねえか。」
その音は声に近かった。
そしてその音程はサーニャの唄に近かった。
宮藤「どうして？」
エイラ「敵か!?サーニャ！ハインツ！」
宮藤「ネウロイなの？どこ!?」
エイラ「どこにいるんだ!?」
エイラと宮藤は状況の分かるハインツとサーニャに聞く。
サーニャ「三人とも避難して!!」
ハインツ「は？何言ってんだ？」
サーニャの意図が分からずハインツが聞き返したその時、サーニャは急上昇し始めた。
ハインツ「サーニャ！来るぞ！」
宮藤「あっ!?」
未来予知が限定的ながら使えるハインツがサーニャに警告し宮藤が声を上げた瞬間、赤いビームがサーニャめがけて飛んできた。
ビームはサーニャのユニットを掠め左のユニットを吹き飛ばし、サーニャはバランスを崩し落ちていく。
エイラ「サーニャ!!」
落下していくサーニャを加速力と急降下性能が最も良いハインツがキャッチする。
ハインツ「ふー。大丈夫か？怪我は見たところないみたいだな。」
サーニャをキャッチし怪我がないか確認する。
サーニャ「敵の狙いは私……間違いないわ。私から離れて……一緒

にいたら……」

ハインツ「リトビャク中尉。君は何の筋合いがあって言ってるんだ？」

サーニャ「え？」

震える声で逃げるように言うサーニャに向かってハインツがいつもの冗談交じりの声とは違う冷静な声で言う。

普段のサーニャ呼びではなく苗字に階級を付けた軍隊的な呼び方だった。

ハインツ「君はなんの筋合いがあって言ってんだ？君の階級は？中尉だ。それじゃあ俺の階級は？少佐だ。

俺の方が偉い。つまり貴官には俺の命令に従う義務がある。

君も一端の士官ならそのぐらい分かるだろう。」

エイラ「ハ、ハインツ？」

ハインツ「それに戦略の大原則とはなんだ？答えろ！」

普段とは違う怒り混じりの声だった。その迫力にサーニャはおろか仲のいいエイラでさえ驚く。

サーニャ「せ、戦力の集中、各個撃破…」

ハインツ「そうだ。ナポレオンはおろかスキピオとハンニバルの時代から変わらない大原則だ。

君はこの大原則を破るのかね？戦力の分散は愚の骨頂だ。士官学校でそう習っただろ。」

戦略の大原則に戦力の集中と各個撃破というものがある。

常に戦力は集中して運用し敵を各個撃破する。スキピオの時代から変わらない大原則である。

ハインツ「よろしい。ならば今我々にできる選択は？あのクソッタレを落とすかクソッタレに落とされるかクソッタレと戦う前に逃げる。

戦わずして逃げると言うのは軍人らしくない。そうだろ？ならば簡単だ。クソッタレを落として基地で祝杯をあげる。なに、簡単なことだ。

エイラ、宮藤、俺とサーニャが位置を指示する。俺が援護、エイラはサーニャの指示に従いフリーガーハマーを使え。

宮藤はサーニャを支えろ。

分ったなら今すぐ動け！敵さんは待ってくれんぞ！」

ハインツは声を普段の調子に戻すと即座に作戦を指示した。

指示に従いエイラがフリーガーハマーを受け取り宮藤がサーニャを支える。

それを見たハインツは、

ハインツ「それじゃあ、諸君！ショータイムだ！」

次の瞬間、ハインツの４門のＭＧ１５１が火を噴く。

ハインツ「サーニャ、奴に当てたぞ。エイラ、次だ！」

弾が直撃しネウロイはハインツに向かってビームを乱射する。

ハインツはそれを回避する。

それを横目にサーニャとエイラは迎撃準備を整える。

サーニャ「…ネウロイはベガとアルタイルを結ぶ線の上をまっすぐこっちに向かってる。距離約３２００…」

エイラ「こうか？」

サーニャの指示を聞いてフリーガーハマーを構えるエイラ。

サーニャ「減速してる。もっと奥を狙って…そう、後3秒」

エイラ「当たれよ！」

サーニャの指示で修正後三発発射し爆発する。すると爆発した方向からビームが撃たれる。

それを４人は回避する。

エイラ「外した!?」

サーニャ「いえ、さらに速度が落ちたわ！ダメージは与えてる…戻ってくるわ！」

エイラ「戻ってくるな！」

更にロケット弾を発射する。だがネウロイはそれを回避する。

宮藤「避けた！」

ハインツ「ならこいつを喰らえロクデナシ！」

それを見たハインツがＭＧ１５１を撃ちまくる。

これをまともに食らったネウロイは悲鳴と爆炎をあげながら雲から出てきて４人に向かって突進する。
エイラ「これでどうだ！」
ハインツ「さっさと死ねゴミ野郎！」
それを見たハインツとエイラは機関砲とロケット弾を撃ち込む。
単体で強力なロケット弾と一発の威力が強烈で普通のナイトウィッチの４倍の火力を持つハインツの雲の中への不正確な射撃とは違う正確な、それも魔眼を使い朧気ながらコア周辺を的確に狙った攻撃にネウロイは正面から粉砕されていきとうとうコアを露出させた。
そしてそれを見ていたサーニャも背中にかけられた１３ミリ機銃を使い撃つ。そしてその弾はコアを破壊しネウロイは白い破片とかした。
ハインツ「ふう。くたばったか。」
それを見たハインツは機関砲を下ろすとポッケからパイプタバコとマッチを取り出し火をつけて吸い始めた。
するとその耳に何かが入ってきた。
エイラ「…まだ聞こえる」
宮藤「なんで？やっつけたんじゃ…」
ハインツ「いや、違うぞ。しかし、なかなかこう言うのも悪くはないな。」
エイラと宮藤は混乱するがハインツは落ち着いていた。彼にはこの音の心当たりはないが少なくとも敵ではない事は分かっていた。
そしてサーニャはこの音に心当たりがあった。
サーニャ「これ…お父様のピアノ…」
そう言ってサーニャは片方が完全になくなったユニットで上昇する。
宮藤「そっか！ラジオだ！この空のどこかから届いているんだ！すごいよ！奇跡だよ！」
宮藤は奇跡だと言ってはしゃぐがハインツとエイラは首を振った。
ハインツ「奇跡なんかじゃねえぞ。」

宮藤「えっ？」
エイラ「今日はサーニャの誕生日だったんだ」
宮藤「そうなんですか？」
ハインツ「ああ、書類が偽造でなければ本当だ。まあ正確には昨日だな。日付変わってるし。」
宮藤「え…じゃあ私と一緒？」
腕時計を確認したハインツが付け足す。
エイラ「サーニャのことが大好きな人なら、誕生日を祝うなんて当たり前だろ？
　世界の何処かにそんな人がいるんなら、こんなことだって起きるんだ。奇跡なんかじゃない」
ハインツ「それに家族っていう生き物は口に出さなくても離れていても心配するものだろ？
　俺だって父さんや弟のリヒャルトのこと心配してるんだぜ？」
宮藤「エイラさんとハインツさんって優しいですね。」
ハインツ「やめてくれ。そう言うのは柄じゃない。」
エイラ「そんなんじゃねえよ、バカ」
宮藤「ば、ばかって…」
宮藤に優しいと呼ばれ照れる２人。
ふと見上げるとサーニャが綺麗な満月をバックに飛んでいた。
サーニャ「お父様、お母様、サーニャはここにいます…ここにいます」
すると宮藤が声をかけた。
宮藤「お誕生日おめでとう！サーニャちゃん！」
サーニャ「貴方もでしょ」
宮藤「へっ…？」
サーニャ「お誕生日おめでとう、宮藤さん」
エイラ「おめでとな」
ハインツ「おめでとう。で、２人ともいくつに…グフ！」
エイラ「レディーに年齢聞くのはアウトだろ！」

しれっと年齢を聞こうとしたハインツにエイラが腹パンする。
それをまともに喰らい悶絶する。それを見て2人は笑っていた。
ハインツ「エイラ…痛いよ…もうちょっと手加減をしてください…」

翌朝、食堂にはなぜか大きなブルーベリーがトッピングされたチーズケーキがあり、その上には「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ」と書かれたプレートが置かれていた。
宮藤「えっと…」
サーニャ「これって…」
エイラ「チーズケーキ？」
するとキッチンからノヴァクとバルクホルンが出てきた。
ノヴァク「ああ、それか？サーニャと宮藤とミラーにもだよ。」
宮藤「え？ミラーさんもですか？」
ミラー「まあね。正確には１９日だから今日だけど。」
ノヴァクの言ったミラーにもと言うことが分からず聞き返すと後ろからバイオリンを持ったミラーが出てきて話した。
ミラーの誕生日は宮藤たちの翌日、８月１９日である。
シャーリー「お、ニューヨークチーズケーキか？」
ノヴァク「セルニックだ。ポーランドの伝統的な菓子だよ。まあ今回は少しアレンジさせて貰ったが。」
ノヴァクが作ったのは世間一般で言うところのニューヨークチーズケーキ、ポーランド南部発祥の伝統的なお菓子セルニックをアレンジしたものだった。
ノヴァクはポーランド北部出身だが母がポーランド南部のクラクフ出身だったためこのお菓子の作り方を知っていた。
ハインツ「まあ今日は無礼講だ！みんな！こいつらの誕生日を祝って盛大に騒ぐぞ！ご馳走と酒は早い者勝ちだ！」
最後にハインツが両手にビール瓶を足元にビール樽を置いて大声で叫んだ。
それを合図にウィッチ達が騒ぎ始める。軍人という生き物はいつ

死ぬかわからないからこそ目の前で楽しめるものは全力で楽しむ生き物である。

数時間後…

ハインツ「もっと酒もってこい…」

ミーナ「なんでどいつもこいつも仕事を手伝わないのに仕事ばかり増やすのよほんと分かってるの…」

坂本「ワッショーイ!」

ノヴァク「ｚｚｚｚｚ」

ミラー「酷い…」

宮藤「あのー…」

エイラ「サーニャ見るな!」

サーニャ「え?エイラ?何?」

バルクホルン「お前ら…弛んでる…ｚｚｚｚｚ」

ハルトマン「お芋♪お芋♪」

シャーリー「一体何が起きたんだろ…」

年長組の殆どが酒を飲みどんちゃん騒ぎの大宴会とかし、坂本はキス魔に、ミーナは愚痴を延々と吐き続け、ハインツは誰彼構わず口説き始め、ノヴァクとバルクホルンは割と早い段階で居眠りを始め、ハルトマンは芋の山に溺れていた。

第22話：事案発生（冤罪です）

ハインツ「俺は何も知らない！」
何故かロープで椅子に縛られたハインツが叫ぶ。
バルクホルン「それはミーナが帰ってきたから言ってもらおうか。」
ミラー「少佐、身から出た錆ですよ。」
シャーリー「私、あんたのこと信じてたのに…」
ノヴァク「クソ食らえ。」
ペリーヌ「で、どこにあるんですかわたくしのズボンは？」
それをウィッチのほとんどが養豚場の豚を見るような目で見降ろす。
なぜ彼女たちがハインツを養豚場の豚を見るような目で見降ろしているか？
なぜハインツが椅子に縛られているか？
それはこの日の朝にさかのぼる。

この日の朝

宮藤「ん…寝坊しちゃった…朝は坂本さんの訓練に出ないと…」
この日は基地のほぼ全員が寝坊をしてしまっていた。
宮藤も起（軍人がこの世で2番目に聞きたくない音）床ラッパで起き手には枕を抱えていた。
ペリーヌ「遅刻！遅刻！」
そしてその前をペリーヌが走るが、すぐに忘れものをして部屋に戻っていった。
基地の別のところではシャーリーが何故か下着姿で歯磨きをしていた。
そんなシャーリーにミーナが挨拶する。
ミーナ「おはよう、シャーリーさん…」
シャーリー「ふわぁ～」
シャーリーは眠たいのか欠伸で返す。

すると今度は後ろからリーネを連れたミラーがやってきた。
ミラー「おはようございます。中佐。」
リーネ「おはようございます。」
ミーナ「おはよう、ミラーさん、リーネさん。ところでハインツさんは？」
ミーナはこの２人が付き合っている事を知らない。ただ仲のいいコンビだと思っているだけである。
ミラー「ああ、部屋で寝てます。起こすの面倒なんで放置してます。そのうち起きると思いますよ。」
ミーナ「ええ、そうね。」
この日も二日酔いで爆睡していたハインツは全く起きる気配がなかった。
すると突然、
バルクホルン「起床だ！起きろハルトマン！」
ノヴァク「さっさと起きろ！メシ全部食うぞ！」
バルクホルンとノヴァクの怒鳴り声が響いた。その場にいた全員がその方向を振り向くとハルトマンの部屋があった。
気になったミラーはそこを覗き込んだ。
ハルトマン「もうちょっと…あと７０分」
バルクホルン「そんなちょっとがあるか！」
ノヴァク「起きろ！てめーが起きるまでここに居座るぞ！てか起きる前に部屋片付けろ！」
ミラー「え…何やってんですか？」
部屋を覗くとゴミと衣服の山の中にハルトマンを起こそうとするバルクホルンとノヴァクがいた。
ノヴァク「ん？ああこのズボラ野郎を叩き起こそうとしてるだけだ。」
ハルトマン「後４０分…」
バルクホルン「おーきーろー！」
カールスラント軍人たるもの、一に規律、二に規律、三も規律だ！」

ノヴァク「名誉ある軍人なら規律以前に人としてのものを心に刻み込んでるはずだろ！」

どうも規律に関しては似たようなところがある2人はハルトマンをどうにかして起こそうとしていた。

ミラー「そういえばハルトマン中尉、今日表彰式じゃなかったでしたっけ？」

バルクホルン「そうだ！今日は午後から表彰式だ！さっさと起きんか！」

今日の予定を思い出したミラーが指摘するとバルクホルンとノヴァクが無理やりハルトマンの上に置かれた服の山を引き剥がす。

バルクホルン「なっ!?」

ノヴァク「ハルトマン!?」

ミラー「僕は何も見てませんから！」

2人は引き剥がすと赤面し、ノヴァクは顔を背け、ミラーは後ろを向き叫んだ。

ハルトマンが下半身をさらけ出していたからだ。

バルクホルン「さ、さっさと服を着んか！履かんか!!」

ノヴァク「せめて下半身を隠してくれ！」

2人がその場にあった服や毛布をハルトマンに投げつける。

だがそれを寝ぼけながら回避する。なにせハインツが寝ぼけながら投げた本やナイフ、ダーツ、トマホークを軽々と回避するやつである、どうやらこの手のことは朝飯前らしい。

それを背にさっき見たものをこの手のことに鼻が効くリーネに隠そうと必死で忘れようとするミラーが床に落ちた何かに気がついた。

ミラー「ん？なんだこれ？」

そう言って拾うがそれをよく見たミラーが叫ぶ。

ミラー「え！これ、これ、これか、柏葉付き騎士鉄十字賞じゃないですか！現物初めて見ましたよ！

こんな貴重品ここに置いていいのかよ！」

拾ったのは柏葉付騎士鉄十字勲章、ドイツ軍でも非常に高位の勲章である。

ミラーにとってはこの勲章はニュースでしか聞いたことのないまさに雲の上の勲章だった。

ミラーやその他一般兵卒、下士官、士官にとってこの一つ下どころか二つ下のドイツ十字章でさえ雲の上の勲章だった。

ドイツ空軍のエースパイロットの受勲歴を見ると結構な割合で騎士鉄十字勲章を授与されているのでかなり格下の勲章と思われがちだが、騎士鉄十字賞は陸軍脳の人間にとっては非常に高位なものである。

それを受勲されるには人並み以上の大戦果を個人で挙げなければならないのだ。

例として大戦最末期の４５年４月、ドイツ北部の町シュターデンゼンの戦闘で騎士鉄十字賞を授与された装甲師団クラウゼウィッツ戦闘団ヴァレ所属戦車猟兵大隊ＧＤ所属のグスタフ・ヴァレ少佐、フリードリヒ・アンテイグ少尉、ヨハン＝ネポムーク・シュティッツレ伍長の三名の有名な例を挙げよう。

この三人は揃って精鋭部隊たるグロースドイチュラント師団所属だった歴戦の兵士であり中には負傷した戦友を背負って凍えるオーデル川を泳いで渡ったという剛毅な強者もいたが騎士鉄十字賞は授与されたことはなかった。

この三人は前日に近郊の町ネッテルカンプを味方ＳＰＧ大隊と共に夜襲を仕掛け、この町にいたイギリス軍機甲偵察中隊を激戦の末撃破していた。そしてその勢いでその２キロ隣であるシュターデンゼンを強襲した。

だがシュターデンゼンとその周辺にはイギリス軍のグラスゴー・ハイランダーズ歩兵連隊の一個大隊、近衛コールドストリーム連隊の一個戦車中隊、２個砲兵中隊などの強力なイギリス軍がいた。そのためこの町を強襲した戦闘団ペーターとヴァレはたちまち苦戦した。

さらに夜明けになると町の南西から近衛ゴールドストリーム連隊の２個中隊３０両のチャーチル戦車が町に救援に向かっていた。

これをヴァレ少佐以下の三名はパンツァーファウスト片手に迎撃し、最終的に全員が負傷したもののチャーチル戦車２２両を撃破する

という大戦果を挙げた。
これほどの大戦果を挙げなければ騎士鉄十字賞は貰えないのだ。
では柏葉付は?さらに非凡な戦果が求められる。
例えば、指揮下の部隊を率いて包囲陣から脱出させる、包囲下の元抵抗し救出されるなど非常に困難な事例が要求された。
それぞれ実際に前者がハンス・フォン・テッタウ歩兵大将が４５年3月に、後者がヴェルナー＝アルブレヒト・フライヘア・フォン・ウント・ツー・ギルザ少将（当時）が４１~４２年の冬に成し遂げてそれぞれ授与されている。
騎士鉄十字賞を含めた多くの勲章は決して安いものではないのだ。
そしてこれら勲章はドイツ軍の規定では全て軍服につけていなければならない。
そのためハインツもミラーも全ての勲章、１級／２級鉄十字章、ドイツ十字章、戦傷章、パイロット及び観測員章ｅｔｃを規定通り普段から付けていた。
だが、ハルトマンはこの現代ではプレミア価格の付く勲章をゴミや脱ぎ散らかした服とともに無造作に放置していたのだ。
バルクホルン「柏葉付騎士鉄十字章が!」
ノヴァク「てめえ貴重品の管理までどんだけ雑なんだよ!」
２人はその後も数分ハルトマンに説教したりしていたがミラーは諦めて食堂に行った。
食堂ではリーネがおらず何故か山のような芋が置かれていた。
ミラー「え…芋?」
ミラーはドイツ人だがオーストリア、それもザルツブルクの上流階級出身である。フォンという貴族の称号こそついてないがハプスブルク家の末裔とも言われる名家の出であるためジャガイモがそれほど好きではない。むしろどちらかというと美食家に近いため嫌っていた。
そのためそれを見るとキッチンに入り自分で朝食を作り始めた。
そしてその間にバルクホルン、シャーリー、ノヴァクもやってきて芋を食べ始めた。

シャーリー「しっかし、誰も起きてこないな」
芋を食べながらシャーリーが話す。
ミラー「まぁいいんじゃないですかね？」
ミラーがトーストにバターを塗りながら返す。
バルクホルン「まったく、どいつもこいつもたるんでいる」
ノヴァク「ああ全くだ。奇襲はありえないからこそ奇襲と呼ばれるんだ。
軍人たるもの常に備えるべきだ。」
それに対してバルクホルンや開戦時の奇襲で多くの同僚を失っていたノヴァクは常に備えるべきだと言う。
ミラー「バルクホルン大尉、それ言ったら少佐、ハルトマン中尉より酷いですよ。
昨日の夜もフソウシュなる酒をゲットしたらしく夜遅くまで呑んでましたよ。
今朝も多分二日酔いで今頃気がついた頃でしょ。」
シャーリー「たしかに…この間のは酷かった…」
バルクホルンの基準で行けばハインツはハルトマン以上にタチが悪かった。
それにシャーリーも同意するが例のパーティーで割と早い段階で夢の世界に旅立っていた2人には分からなかった。

ハインツ「オエ！気持ち悪い…頭もガンガンするし昨日のこと覚えてねえ…」
その頃、ハインツは昨日の夜整備班長の扶桑人からポーカーで強奪した清酒を一升瓶一本飲んで酔いつぶれて二日酔いで起きていた。
清酒など日本酒の特性の一つが「口当たりがまろやかで飲みやすい割に度数が高い」と言うのがある。
その特性に完全に引っかかってハインツは調子に乗って一升瓶を丸々一本飲み尽くし酷い二日酔いだった。
そこで、何を思ったのかシャワーでも浴びようと部屋を出て更衣室に向かった。

そして更衣室の前まで来たところでルッキーニが更衣室から出てきた。それを見て開いたと思い入り上着を脱ごうとすると更衣室の棚に宮藤たちの服があることに気がつくとそのまま出て行った。
そしてそれと入れ違いで宮藤が出てきてズボンがなくなってることに気がついた。
そのあとハインツは食堂に行こうとするが、二日酔いで頭がボーっとしながらだったため途中で道を間違え食堂に行くのに時間がかかってしまった。
そして、彼が食堂に入るとそこにいたハルトマン以外のウィッチがなぜかハインツの方を一斉に見た。
バルクホルン「ハインツ、遅かったな。今まで何してた?」
バルクホルンが聞く。
ハインツ「何って…シャワー浴びようとして更衣室行ったら宮藤たちが使ってたからシャワー浴びずにここまで来たんだ。」
ミラー「それでももう少し早くつきますよね?」
ハインツ「途中で道間違えたの。とりあえず水ある?こっちは二日酔いなんだよ…」
ハインツが頭が痛いため水を飲もうとする。
ノヴァク「なあ?道間違えるとかありえるか?」
ミラー「来たばかりならまだしももう来て数ヶ月ですよ。」
バルクホルン「普段から風呂を覗こうとしていた奴だ。下着泥棒ぐらいするかもしれん。」
その言い訳があまりに不自然だったため全員が疑った。
ミラー「少佐?やりましたか?」
ハインツ「…ん?何を?」
ミラー「(ペリーヌのズボン)盗みましたね。」
ハインツ「あ…(ミラーのワイン盗んだこと)バレた?」
このコントのようなやりとり、偶然にもこの数日前ハインツはミラーの部屋に忍び込みミラーのトカイワインを銀蠅していた。
そして盗んだと言う語をズボンとワインで間違えたのである。
この結果、限りなく黒に近いグレーだった容疑が完全にクロになっ

てしまった。
　次の瞬間、ハインツが振り返るとバルクホルンが左腕を、ノヴァクが右腕を阿吽の呼吸で拘束し、そのまま近くにあった椅子にロープで縛った。
　ハインツ「へ…何が…おい！バルクホルン！これはなんだ！」
　バルクホルン「お前がペリーヌのズボンを盗んだんだ、なんだとはなんだ。」
　ノヴァク「正直に話したほうが身のためだ。」
　一瞬だったためハインツは現状を理解できていなかった。
　ハインツ「俺は（ペリーヌのズボンなんて）何も知らない！」
　バルクホルン「それはミーナが帰ってきたから言ってもらおうか。」
　ミラー「少佐、身から出た錆ですよ。」
　シャーリー「私、あんたのこと信じてたのに…」
　ノヴァク「クソ食らえ。」
　ペリーヌ「で、どこにあるんですかわたくしのズボンは？」
　そして冒頭のやりとりに戻るのである。
　バルクホルン「ペリーヌのズボンはどこへやった？」
　ノヴァク「早めに言わないとどうなるか分かるな？」
　そう言って2人は指を鳴らす。2人からは恐ろしいほどの負のオーラが出ていた。
　ハインツ「だから、知らないって。そもそも何でペリーヌみたいな貧乳野郎のパンツなんか…」
　次の瞬間、キレたペリーヌのビンタを食らった。
　ハインツ「イッテェ…まあ美女にビンタされるのも…ギャー！」
　今度はペリーヌの雷撃を食らった。もろに食らった彼は気絶した。
　ノヴァク「場所知りたいのに電撃で気絶させるのはなしだろ…で、どうする？
　　水ぶっかけて起こすか？」
　バルクホルン「そこまでやったら拷問じゃないかアレックス。ミラー、この変態の隠しそうな場所知らないか？」
　しれっと変態呼ばわりするバルクホルン。ミラーはバルクホルン

の質問に即座に彼の部屋が怪しいと答えた。
そしてウィッチ達はハルトマンとルッキーニと気絶したハインツを置いてハインツの部屋へ向かった。
ハルトマン「あ…美味しい…」
残されたハルトマンは1人芋を幸せそうに食べていた。
ルッキーニ「え、え、どうしよう」
ハルトマン「ん？何がどうしよう？」
ルッキーニの言葉が気になったハルトマンがルッキーニに聞く。
ルッキーニはそれにある告白をするのだった。

ノヴァク「何も見つからねえじゃねえか！出てくるのは酒と書類と馬券と競馬雑誌ぐらいじゃねえか。」
ハインツの部屋をガサ入れし始めたウィッチ達だが見つけたのは空き瓶、決済済みの書類、未決済の書類、銀行の通帳、給与明細、トマホーク、銃剣、ダーツの道具、チェスの道具一式、ウォッカ、ウィスキー、ビール、ワイン、リキュール、アクアビット、ジン、ブランデー、テキーラ、ラム、シードル、ペリー、シャンパン、ウーゾ、馬券、競馬雑誌、トランプ、宝くじ、ブックメーカー、ミーナの部屋から盗まれたワイン、ノヴァクの部屋から盗まれていたウォッカ、ミラーの部屋から盗まれたトカイワイン、整備班長の部屋から盗まれたラム、コップ、洗顔・髭剃り道具一式、勲章関連の書類、拳銃の整備道具一式、ラジオ、成人向けを含めた雑誌ぐらいだった。
結局ウィッチ達はミーナが帰って来るまでハインツの部屋をひっくり返しそれまで乱雑ではあったがそれなりに綺麗にされていたハインツの部屋はすっかりハルトマンの部屋ばりに無茶苦茶にされていた。無論冤罪が晴れたハインツがブチギレて全員を飛行機のプロペラに巻きつけて回そうとしたのは言うまでもない。

その日の午後、すべてが解決した基地ではハルトマンの勲章授与式が行われていた。
下着泥棒扱いされた上に拘束され、ビンタされ、電気ショックを食

らい、部屋を完全にひっくり返され、酒の一部（盗品）を分捕られたハインツは解放されるとシャーリーとバルクホルンにアイアンクローを、坂本とペリーヌに強烈なビンタを、ミラーとノヴァクにヘッドロックを、ルッキーニを縛って屋根から吊るそうとする（未遂）ほど怒り狂っていた。

そのため不機嫌どころではなく授与式でもタバコをふかし貧乏ゆすりをしながら式典を見ていた。

ミーナ「ハルトマン中尉、壇上へ！」

ハルトマン「はい！」

ハルトマンがミーナの呼びかけに力強く返事すると壇上に上がり首に勲章がかけられる。

そしてそれに全員が拍手を送る。すると風が吹きハルトマンのジャケットの下からズボンが少し見えた。

それを見て全員が驚いた、ルッキーニのズボンだ。

次の瞬間、発砲音が聞こえハルトマンの軍帽が後ろに吹っ飛んだ。

後ろではハインツがルガーを手に立っていた。

ハインツ「ハルトマン！てめえが原因か！ヤロウぶち殺してやる！」

そう叫ぶとハルトマンに向かって回りが止めようとする中突き進み、ハルトマンをつかむと海に投げた。

こうして冤罪騒動は幕を閉じた。

翌日、ハルトマンと下着泥棒扱いした全員がハインツに書類仕事と部屋の片づけを押し付けられた。

第２３話：軍歌と規則

ミラー「ねえリーネ。これ使えるの？」
ある日のこと、ふとミラーはずっと談話室に置かれていたグランドピアノに興味を持った。
リーネ「ええ、確か使えるはずですよ。弾けるんですか？」
質問に答えたリーネは弾けるのか聞く。
ミラー「まあね。それほどうまくないし数年ぶりに弾くから覚えてるかな？」
そういうとミラーは椅子に座りピアノを弾き始めた。
その旋律は少し高いがある曲にそっくりだった。
しばらくすると弾き終わったのかミラーはリーネのほうを向いた。
ミラー「どうだったかな？久しぶりだったけど案外体は覚えてるものだね。」
リーネ「上手でした。でも少し変でした。そのカールスラント国歌。」
リーネはミラーが弾いたのがカールスラント国歌だと思っていた。
ミラー「カールスラント国歌？いや、今弾いたのはオーストリア＝ハンガリー帝国国歌『神よ皇帝フランツを守り給え』だけど。」
ミラーが弾いたのはオーストリア＝ハンガリー帝国国歌「神よ皇帝フランツを守り給え」だった。
この曲はその旋律がドイツ国歌にも転用されていることでも知られている。
そして筋金入りのハプスブルク家支持者であった彼はこの曲を暗記していた。
リーネ「へえ、そうなんですか。ほかの曲も弾けるんですか？」
ミラー「弾けないことはないかな。ちょっと部屋に楽譜取りに行ってくる。」
ミラーは立ち上がりリーネを置いて自分の部屋に楽譜を取りに行った。
ドイツ軍では軍歌の楽譜などは酒保で普通に売っているものであ

る。ミラーはそれを買っていた。
暫くするとミラーは手に楽譜の入ったファイルをもって帰ってきた。
ミラー「さてと、何を聞きたい?クラシックなら有名どころは大体あるし軍歌もそれなりにあるよ。」
リーネ「えっと…好きなのでいいですよ。」
ミラーはリーネにリクエストを聞くがクラシックや軍歌に疎いのでミラーに任せた。
ミラー「そう言われるとなぁ…」
リーネの何でもいいというお題にファイルの中の楽譜をあさっていいのがないか探す。
するとある軍歌の題名が気になりその楽譜を取り出す。
そしてそれを見ながら少しピアノをいじると、
ミラー「まあこれでいいかな。軍歌だけど結構いい歌だよ。」
そういうとピアノを弾き始めた。そして歌い始めた。

ミラー「Im(緑)Wald,(な)im(森)gr▪nen(の)Walde,(に)
Da(林)steht(務官)ein(の)F▪rsterhaus(家)
Da(そ)schauet(こ)jeden(で)Morgen,(は)
So(元)frisch(気)und(に)frei(溌)von(剌)Sorgen,(と)

Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(が外)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(を眺)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(め)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(て)
Des(ほ)F▪rsters(ん)T▪chterlein(と)ganz(に)frisch(元気)
Ta—ra—la—la—la—la,(な)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(が外)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(を眺)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(め)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(て)
Des(林)F▪rsters(務官)T▪chterlein(の娘)
Ta—ra—la—la—la—la,(る)

歌っていたのはドイツ軍歌、ローレローレローレだった。
ドイツ語(カールスラント語)だったためカールスラント語に疎い

リーネには全く分からなかったが次の歌詞で赤面した。
なぜならこの次は本来はローレローレローレと続くのだがミラーはそこを替え歌にしてリーネリーネリーネと歌ったのだ。
一番だけ歌っただけだったがすっかりリーネは二人しかいないのに顔を真っ赤にしてミラーをぽかぽか叩いていた。
リーネ「ミラーさん！好きなのって言いましたけど恥ずかしいですよ！」

聞かれたらどうするんですか！」
ミラー「ごめんごめん。
でも聞かれたところでノリでやったっていえば言いし、第一少佐以外僕たちが付き合ってること知らないでしょ？それに本当はちょっと嬉しかったりして。」
リーネ「まあそうですけど…恥ずかしいものは恥ずかしいんですから！」
そう言って二人は笑いあった。
そしてこのやり取りをミーナがドア一枚挟んで聞いていた。
ハインツ「あ、中佐。どうしました？」
すると後ろからハインツがミーナに気が付き声をかけた。
ミーナ「あらハインツさん。どうしたの？」
ハインツ「ピアノの音が聞こえて気になって来てみた。
中佐もそんな感じですか？」
ハインツがミーナに聞く。
ミーナ「ええ、そんな感じよ。」
ミーナは始めから聞いていたのを話さず答えた。
ハインツ「そうですか」
そういうとハインツはドアを開けた。
そこにはびっくりして振り向いたミラーとリーネがいた。
ハインツ「なんだ、リーネとミラーか。
大方ミラーが弾いてたって感じか？」
ミラー「ええ、そんな感じです。何か弾きましょうか？」
ハインツ「それじゃあ、戦時報道中隊の歌を頼む」

ハインツはドイツ軍歌「戦時報道中隊の歌」を頼んだ。
リーネ「戦時報道中隊の歌？」
ミーナ「それどういう歌なのかしら？」
ハインツ「まあ軍歌ですけど面白い奴ですね。」
ミーナとリーネの質問に返すとハインツとミラーは歌い始めた。
ハインツ「We, re going to hang out the washing on the Siegfried Line.

Have you any dirty washing, mother dear?

We, re gonna hang out the washing on the Siegfried Line.

, Cause the washing day is here.」
ここまで歌うと口笛を吹き手元にあったものを叩いた。
続いてさらに歌うが
ハインツ「We, re going to hang out the washing on the Siegfried Line…」

スツーカ！スツーカ！

We, re going to hang out the washing on the Siegfried Line…」

弱弱しくなっていった。
すると今度は今までの曲調から変わってケーニヒスグレッツ行進曲が流れ始めた。そして今度はドイツ語で歌い始めた。
ハインツ「Ja, mein Junge, das hast du dir gar zu leicht gedacht

mit dem gro▪en W▪scheta
am deutschen Rhein

hast du dir auch deine Hosen ▪ chtig vollgemacht,
brauchst du gar nicht traurig sein!
Bald seifen wir dich gr▪ndlich ein
von oben und von unten her
wenn der deutsche Waschtag wird gewesen sein,
Mensch, dann brauchst du keine W▪sche mehr!」

その歌詞はドイツ語で連合軍兵士を冷やかす内容に変わっていった。

戦時報道中隊の歌とはイギリスの軍歌僕たちはジークフリート線に洗濯物を干しに行くの替え歌だった。

その歌詞にミーナとリーネは複雑な表情をしていた。

この後ハインツは調子に乗りドイツ国歌とホルスト・ヴェッセルリートを歌い気が付けばウィッチたちが集まり、ホルスト・ヴェッセルリートを歌うとノヴァクが対抗してドンブロフスキのマズルカを歌った。

翌日、ハインツとミラーは中庭でタバコを吸っていた。

赤城の艦長がきていたため普段なら屋内でタバコを吸っても問題ないのだがこの日は匂いや吸い殻の関係上、2人とも外で吸うしかなかった。

ハインツ「なんで今日だけ屋内全面禁煙なんだよ。」

ミラー「全くそうですよね。別に普段は屋内でも問題ないですし第一あの艦長だってタバコ吸ってるでしょ。」

ハインツ「だよな。」

2人がタバコを吸っていると風が吹き一枚の手紙が飛んできた。

それをハインツがキャッチし見る。そしてなんなのか分からず顔を見合わせていると宮藤と扶桑人らしき青年を連れてやってきた。
咄嗟にハインツはキャッチした手紙をポッケに入れる。
ハインツ「よお宮藤。どうした?」
宮藤「あの、手紙飛んできませんでした?この人が私に渡そうとしたのが飛んできたはずです。」
それがラブレターであり、この部隊ではラブレターは禁止であることを理解したハインツはある名案を考えついた。
ハインツ「ああ、それならあっちに飛んでいったぞ。」
宮藤「そうですか。ありがとうございます。」
そう言うと宮藤はハインツの嘘を信じてその方向に走っていった。
扶桑人の青年もそれについて行こうとするとハインツが呼び止める。
ハインツ「ちょっと君、いいかい?」
青年「はい、何でしょうか?」
ハインツ「この部隊さ、ラブレターとかこう言う手紙ダメなんだよね。」
そう言うとハインツはポッケから手紙を取り出す。
青年「え、向こう飛んで行ったんじゃ…」
ハインツ「ああ、それは真っ赤な嘘。なに話しは簡単だ。
取引といこう。君からならダメだが俺なら書類の一部として渡せる、そうだろ?
そこでだ。君の手紙を俺が渡す、勿論お駄賃は貰うぞ。どうだい?悪くないだろ?」
青年「わ、分かりました。で、そのお駄賃は…」
ハインツは青年に取引を持ちかける。
ハインツ「扶桑にはショウチュウなる酒があるんだろ?
セイシュは飲んだことあるがショウチュウはまだでね。
種類はいくつかあるらしいが全くわからない。
とりあえず種類はなんでもいいからショウチュウ、できれば高いやつ一本で手を打とう。」

ハインツはラブレターを渡す代わりに焼酎を求めた。
それを聞いて青年はうなづく。それを取引成立と理解したハインツは握手する。
ハインツ「ではこれで取引成立。あ、わかってると思うが口約束も約束だ。
証人もいるからお駄賃は忘れるなよ。」
ミーナ「何をしているのかしらヴァレンシュタイン少佐?」
すると後ろからミーナの声が聞こえた。その声色には僅かながら怒りが混じっているのが分かった。
ハインツ「何って商売取引ですよ。別に悪いことじゃないでしょ?
それともなんですか?この若造が俺と会うのにヤキモチでも焼いているのかな?」
ハインツが悪びれることもなく答える。ハインツにとってこれは普通のことだった。
ミーナ「今ポッケに突っ込んだ手紙は何なのかしら?」
ハインツ「さあ?こいつは重要な書類なんでね。
それとも何ですか?ラブレターらしいから取り上げると?
疑わしきは罰せずなんですから中佐には全く関係ないことですよ。
それじゃあ失礼しますね。」
そう言うとハインツはミーナたちを置いて立ち去った。
ミラー「まあ怒らないでくださいよ。疑わしきは罰せずは司法の基本ですから。」
ミラーもそう諫めると同じようにどこかへ行ってしまった。

それから数分後、宮藤とリーネは自分の部屋に戻って赤城の艦長からもらった包みを開いていた。
包みの中は扶桑人形だった。

宮藤「わぁ、扶桑人形だ！」
リーネ「かわいい～！」
それを二人が見ているとドアがノックされた。
宮藤「はーい」
ハインツ「よう宮藤、ちょっと話がある。」
ノックしたのはハインツだった。
ハインツは周りを見渡して誰もいないことを確認するとポッケから手紙を出した。
ハインツ「はい、これ。さっきの奴の手紙だよ。」
宮藤「え、でも飛んで行ったんじゃ…」
ハインツ「ああ、それ真っ赤なウソ。本当はあの時ポッケに突っ込んでた。
まあそうしないとあのクソババアに奪われてたと思うし。」
しれっとミーナのことをクソババア呼ばわりするハインツ。
彼からすればどういうわけか男女の付き合いに厳格な彼女の態度が気に食わなくて仕方なかった。
彼からすれば整備士や警備部隊、高射砲部隊や監視部隊との業務外での交流は重要であり人間関係の構築によって物資の融通などで有利になるというのにそれを理解しないため物資の調達に支障をきたしていた。
数か月前にデポから旧式の軍用車を融通して貰おうとした時にはまさか後方支援部隊との、特に周辺の一般部隊や整備部隊、ウィッチ部隊があまり使わない車両関連部隊との関係があり得ないほど希薄だったことに頭を抱えるぐらいだった。
現在ではハインツが中心になって何とか周辺のブリタニア軍部隊やドーバーの特別編成師団ドーバーの補給部隊と繋がりを作っていた。
宮藤「ありがとうございます。」
ハインツ「おう、今度そいつと会うから伝えたいことあったら俺に言ってくれ。じゃあな。」

ハインツはそう言って部屋から出て行った。

第２４話：２１時５７分、ベオグラード放送

ミーナ「ガリアから敵が進行中との報告です」
坂本「今回は珍しく予測が当たったな」
数日後、予想された襲来日にネウロイがやってきた。
戦争では予定通りに進むなんてほうが珍しいぐらいである。
もし予定通りに戦争が進んでいたらあの戦争はドイツがドーバーを渡り、モスクワを冬までに落として、中東を手に入れ、ユダヤ人は全員マダガスカルへ島流しになっているはずだ。
ミーナ「現在の高度は１５０００、進路は真っ直ぐこの基地を目指してるわ」
坂本「よし、バルクホルン、ハルトマンが前衛！ペリーヌとリーネが後衛！宮藤は私とミーナの直掩！ハインツとミラーは火力支援！シャーリーとルッキーニ、エイラとサーニャとノヴァクは基地待機だ！」
ルッキーニ「お留守番～お留守番～♪」
シャーリー「ユニットのセッティングでもするか」
ノヴァク「紅茶でも作っておくか」
待機組は呑気な反応をして出撃組は手慣れた手つきで出撃した。
出撃してしばらく飛んでいると坂本とハインツがネウロイを発見する。
坂本「敵発見！」
ハインツ「デカいぞ。３００はある。ミラー射撃用意。いつも通りでいいな。」
ミーナ「ええ、いいわよ。」
発見したハインツがミラーに射撃用意を指示。彼のいういつも通りとは小回りの利くウィッチがネウロイを拘束、そこをハインツの観測でミラーが攻撃するもの。
そのためミラーは大物狩りの名手としてそれなりに有名でスコアも数は多くないが全て大型というもので騎士鉄十字章の授与が内定した書類が先日来ていた。

一方ハインツはスコアはミラーよりは多いが大した数ではないしまずそのほとんどが中型、小型。
坂本「よし！　突撃！」
坂本が接近戦闘がまるでダメなハインツたち以外全員に指示する。
すると次の瞬間、ネウロイが分裂した。
バルクホルン「なにっ!?」
ハルトマン「分裂した!?」
ハインツ「ミラー、逃げろってもう逃げてるよ…」
分裂したのにそれぞれが驚く。
分裂したのを確認したハインツは特性から小型相手だとカモより弱いミラーに逃げるように指示しようと振り向くとミラーはすでに回れ右して基地に全速力で逃げていた。
その中でもミーナは冷静に固有魔法を使い敵の数を確認した。
ミーナ「右下方８０、中央１００、左８０」
坂本「総勢２６０機分か」
ハインツ「勲章の大盤振る舞いだ。嬉しいことだ。」
ミーナ「そうね」
坂本「で、どうする?」
坂本がミーナに指示を仰ぐ。
ミーナ「あなたはコアを探して」
坂本「了解」
ミーナ「バルクホルン隊中央」
バルクホルン「了解」
ミーナ「ペリーヌ隊、右を迎撃」
ペリーヌ「了解」
ミーナ「宮藤さん、貴方は坂本少佐の直掩に入りなさい」
宮藤「了解！」
ミーナ「いい、貴方の任務は少佐がコアを見つけるまで敵を近づけないことよ」
宮藤「はい！」
ミーナ「ハインツさんは私について来て！左を迎撃するわ」

ハインツ「女のケツを追いかけるならまだいいな」
ミーナは全員に指示を出し全員が返事をする。
ハインツだけは下ネタで返したが。
ミーナ「ハインツさん？」
ハインツ「別にいいじゃねえかよ下ネタぐらい」
ハインツの下ネタをミーナは咎めるが本人は全く気にするそぶりはない。
ハルトマン「これで１０機！」
バルクホルン「こっちは１２機だ！久しぶりにスコアを稼げるな！」
ハルトマン「ここの所全然だったからね」
その間にも戦闘は進みバルクホルンとハルトマンのコンビは真ん中のグループを食い破り次々と撃墜していた。
さらに右翼のペリーヌ隊では、
ペリーヌ「いいこと、貴方の銃では速射は無理だわ。引いて狙いなさい」
リーネ「はい！」
ペリーヌ「私の背中は任せましたわよ！」
ペリーヌがリーネに指示すると急降下する。
ペリーヌ「これを使うと後で髪の毛が大変なのよね…トネール！」
するとペリーヌが自身の固有魔法を使い周りにネウロイをまとめて処分する。
ペリーヌ「フン、わたくしにかかればこのくらい…」
彼女が何か言い終わる前に後ろで砕ける音がする。
振り返るとリーネが撃ち漏らしたネウロイを撃破していた。
ペリーヌ「やるじゃない」
それにペリーヌは賞賛する。
その頃ハインツとミーナの左翼は、
ハインツ「ヒーハー！さあこいゴミ共！女の子じゃなくて悪いが相手しな！
あらヨット！もうちょっと腕のいいやつ連れてこい！」

いつものように冗談まじりの独り言を呟きながら迫り来るネウロイに４門のＭＧ１５１を乱射していた。
そしてそれから撃ち漏らしたものをミーナが的確に撃破していく。
だがもう５０以上撃破しているというのにコアは見つからなかった。
ハルトマン「キリが無いよ！」
バルクホルン「コアは一体どいつなんだ!?」
ハルトマンが愚痴りバルクホルンが疑問を口にする。
それに苛立ちミーナはハインツと共に坂本の元に行く。
ミーナ「コアは見つかった？」
坂本「駄目だ」
ハインツ「少なくとも左翼にはない」
ミーナ「まさか、また揺動!?」
坂本「違うだろう。コアの気配はあるんだ。ただし、どうもあの群れの中にはいない」
ハインツ「ああ。ただ近くにいるのは確かだ。」
そう言うと３人は戦場を見渡す。
ミーナ「戦場は移動しつつあるわね」
坂本「ああ」
ハインツ「大陸に近づいてる。」
長期戦の結果、戦場は大陸に移動しつつあった。
するとネウロイを探すために魔導針を新たに出したハインツが振り返り叫ぶ。
ハインツ「上だ！太陽の中だ！」
太陽に隠れて接近するという手段は空戦の基本中の基本だ。そしてネウロイは図らずしもそれを実行していた。
宮藤「行きます！」
坂本「よし、いいぞ！もう少しだ！」
宮藤は急降下してくるネウロイに機関銃を撃ち始める。
ハインツ「手を貸すぞ。これでどうだ！」
宮藤「はい！」

それを見たハインツが援護射撃を行う。
坂本「見つけた！」
ハインツ「あの中だ！援護してくれ！他のを近づけさせるな！」
「了解」
さらに狙いながら魔眼を使っていたハインツと坂本がコアを見つける。
即座にハインツは他のウィッチに援護を指示する。
さらにミーナと坂本が撃ち始めるがネウロイは不規則に動きながら躱す。
ハインツ「逃すな宮藤！逃したら書類仕事手伝ってもらうぞ！」
宮藤「はい！」
ハインツの声に宮藤は返事する。
そして両者の攻撃にネウロイが被弾し始めとうとう宮藤の攻撃がコアを直撃し撃破し破片が飛び散る。
その破片を宮藤、ミーナ、ハインツ、坂本はシールドを張り防ぐが一部が坂本のシールドを貫通し髪を切り裂く。
それに隣にいたミーナが驚くがほかの面々は気がつかず宮藤を賞賛する。
リーネ「芳佳ちゃんすっごーい！」
リーネが宮藤に抱きつきながら褒める。なおこの時一足先に基地に逃げ込んだミラーに悪寒が走ったのは余談だが。
ペリーヌ「ふん。あんなのマグレですわよ」
ハインツ「お、嫉妬か？少佐のことが常々とか思ってんだろ？そうだろ？」
ペリーヌ「そ、そんなのではありませんわ！」
ペリーヌの素直じゃない感想にハインツはいつものように煽りペリーヌもいつものように慌てふためいていた。
ハインツ「まあ、宮藤。あのツンツンメガネ「なんであなたまでその言い方をするんですの！」別に良いじゃん…
とにかくあのエセ貴族は置いといてよくやった。お見事だ。」

宮藤「えへへ、そうかな？」
地味にペリーヌをディスりながらハインツは宮藤を褒める。
宮藤「綺麗…」
宮藤は撃墜したネウロイの破片を見て漏らす。
坂本「ああ、こうなってしまえばな」
ペリーヌ「綺麗な花には棘が…って言いますわね」
ハルトマン「自分のことか？」
ハインツ「俺は多少棘がある方が…ボフ！」
ハルトマンが茶化すのに次いでハインツも茶化すがペリーヌはハインツを殴る。その一撃に悶絶する。
ペリーヌ「誰がエセ貴族ですの？次言ったらどうなるか分かりますか？」
ペリーヌが何やら帯電しながらハインツに言う。
その光景に全員が笑う。このやり取りはおおよそ日常であった。
ハインツ「…ペリーヌ、頼むから上官なんだから手加減してよ…ん？中佐？どこに行くんだ？」
ハインツが悶絶しているとミーナが降下していることに気がつく。
バルクホルン「ミーナ？」
ハルトマン「え…おーい、どこに…」
坂本「待て…一人にさせてやろう」
バルクホルンたちも気がつき追いかけようとするが坂本が止める。
バルクホルン「…そうか。ここはパ・ド・カレーか」
そしてバルクホルンが現在位置がどこか気がつく。
フランスで最もイギリスに近い場所、史実では戦争素人の伍長殿と連合軍のよく考えられた徹底した情報管理と偽装で無駄に戦力を集中した結果、文字通り大西洋の壁として鉄壁を誇ったパ・ド・カレーだった。
ハインツ「いつのまにか海峡横断してたんだなぁ…
そうそう、ちょうどあの辺りにヴィックのＪｕ８８を不時着させてたな、思い出した。
で、あの辺りでヴィリーがハンプデン落として、ちょっと

向こう行ったところでケーラーが航法ミスって不時着してたよ。
そういや俺が落ちたのもこの辺りだっけ。
エンジンに食らって必死で大陸目指してたら送り狼の奴にこの辺りで襲われて大陸まで１０キロもないところに不時着したんだっけ。」
ハインツも大陸の光景を見てバトル・オブ・ブリテンの思い出を思い出していた。
この辺りで損傷した味方の爆撃機を不時着させたり、同僚が航法を間違え不時着したり、２番機として参加した空戦で敵機を落としたり、敵機に追われ不時着した記憶を思い出していた。全て彼にとってはルフトヴァッフェの栄光の思い出だった。どんな戦争であれ勝ち戦か無敵に近い時期の思い出の方がいいに決まってる。
暫くすると何やら包みを持ってミーナが戻ってきた。
そして彼は基地に帰投した。
このとき彼は気がつかなかった。
〝どういうわけか〟パ・ド・カレーの市街やその周辺にⅢ号突撃砲の長砲身モデルやティーガー、シャーマン、Ｔ３４などの残骸がある事に。

基地に戻るとハインツたちは知り合いの整備士トゥルーヒンの手を借りて談話室に通信設備を設置していた。
ハインツ「さあお前ら！急げ急げ！時間がないぞ！」
談話室は本来このような用途に使えるように設計されてないため設備を入れるだけでも難航していた。
トゥルーヒン「全く中佐も人使いが荒いんですから…」
ノヴァク「済まないな。謝礼は何が良い？」
トゥルーヒンがぼやく。それにノヴァクが反応して謝るが、
トゥルーヒン「別に気にしなくて良いですよ。これも俺たちの仕事ですから。」
そう言うと他の整備士を集めて機材の設置を進めた。
なおこの時一部の整備士がこの部屋になにかを仕掛けたがそれに

気がつくものは誰もいなかった。

それからしばらく経ってやっとこさ機材の設置、運用が可能になった。

なんでこんなことをするのか全員が疑問に思っていたが運用可能になってやっとわかった。ミーナが歌を歌いそれを放送するのだ。

それに一部（主にハインツとかハインツとかハインツとか）が大興奮していた。

ハインツ「ヒャッホーウ！最高だぜー！生歌＆ドレス姿！誰かカメラ持ってるか！写真撮って売ろうぜ！」

シャーリー「欲望に忠実だねぇ…」

ハインツ「欲望に忠実で何が悪い。誰かに迷惑かけたか？そういや赤城っていつ出航するんだ？昨日聞きそびれてさ。」

設置後談話室で何やら大興奮していたハインツがそれを見て呆れていたシャーリーに思い出したかのように聞く。

シャーリー「ん？今日だけど？ポーツマスだからここから車で2時間ぐらいかかるし出港したら多分次はスカパ・フローだと思うけど。」

そのことを聞いた瞬間、ハインツは崩れ落ちる。

英仏海峡沿いで赤城クラス（約３６０００トンクラス）が入渠できるドックは限られていた。そもそもこのクラスのドック自体ブリタニアではそれほど多くない。有名なのがベルファストのハーランド・アンド・ウルフの造船所のタイタニックを建造したことでも知られるドック。

英仏海峡沿いではこのクラスが入れる港でさえ交通の要所たるサウサンプトンと海軍の軍港のあるポーツマスぐらいだった。

そこまでドーバーからなら道路事情のいい現代でさえ2、3時間はかかるものである。ましてや交通事情が悪く、戦争中で、鉄道はダイヤが乱れ気味な状況では行くだけで1日がかりだ。スコットランド沖のスカパ・フローに至っては行くだけで1週間は軽くかかる。

ハインツ「ショウチュウが…酒が…」

シャーリー「何やってかは知らないけどご愁傷様。」

その現実に結局自分だけが損して終わったことに今までの大興奮があの世に召されていた。

そんなこんなしていると曲が始まった。サーニャのピアノに少し前まで超久しぶりにやるため必死で楽譜とにらめっこしていたミラーがヴァイオリンで参加し、ミーナが歌っていた。

歌はリリー・マルレーン。第一次大戦中に従軍した詩人ハンス・ライプの詩にノルベルト・シュルツェが曲をつけた歌唱曲。

ララ・アンデルセンの歌唱が有名だがそのレコードは初版でわずが６０枚しか売れなかった伝説がある。

そしてある時レコード屋の店員がこのレコードを前線慰問用のレコードに紛れ込ませたところ、どういうわけかベオグラード放送で放送されてしまいそれが一気に前線の兵士の間で大人気となった。

始めは人気となったが歌詞が陰鬱なものだったため一時は検閲で〝士気に関わる〟という理由で放送が止められていたが前線の兵士からの問い合わせが殺到した結果、ベオグラード放送が放送終了間際の毎日２１時５７分にかけていたエピソードがある。

ちなみに占領下のベオグラード放送の持っていた数少ないレコードがこのリリー・マルレーンである。

そしてこの歌はドイツ兵とともに連合軍兵士からも大人気となった。イギリス軍の司令部が実際に聞くなという命令を正式に出したこともあった。

そして大戦中には大西洋を挟んだ反対側、アメリカでドイツ出身の女優マレーネ・ディートリッヒがこの歌を歌い前線の兵士を慰問した。

なおこの話のせいで彼女は戦後ドイツでは非常に不人気だったのは余談である。

だが大戦中期にララ・アンデルセンの仲の良い友人がユダヤ人だったため彼女は逮捕されそれ以降この歌が流れることはめっきり減ったのだった。

そのためノヴァクにもハインツにもこの歌は馴染み深いものだった。

２人が過去の感傷に浸ってると曲が終わった。
終わり、ミーナが深々とお辞儀をすると全員が拍手を送る。
そして宮藤が感想を述べる。
宮藤「とっても素敵な歌でした！」
ミーナ「ありがとう」
宮藤にミーナは微笑み返す。すると宮藤の頬をエイラが引っ張る。
エイラ「サーニャのピアノはどうした～サーニャの～」
宮藤「ふぉっへもふへひへひは～」
エイラ「えい、もっと褒めろ！」
宮藤「ほへへまふっへは～」
それを見て全員が笑顔になる。
その横ではリーネがミラーに話しかけていた。
リーネ「ミラーさんのヴァイオリンも素敵でしたよ。」
ミラー「やめてよリーネ。結構久しぶり、多分最後に弾いたの戦争始まる前だからもう丸４年以上弾いていないからそんなに上手くないよ。
結構怪しいところいっぱいあったと思うよ。第一これ弦の調整さえ怪しいところあるし。」
リーネ「でも素敵でした。」
ミラー「そう?ありがとう。」
リーネにミラーはいつものように微笑みかける。
そしてそれをミーナが複雑な表情をして見ていた。

第25話：Ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ

ミラー「ねえリーネ、なんで呼ばれたと思う?」
リーネ「さあ?ミラーさんこそ何かやったんじゃないんですか?」
ミラー「思い当たることがリリー・マルレーンのサビのところでミスったことぐらいなんだよなぁ…」
その日の夜、何故かリーネとミラーはミーナの執務室の前にいた。
というのもミーナがリリー・マルレーンを歌った後、二人は執務室に行くように言われたのだ。
二人ともなんで呼ばれるのかわからず執務室の前で顔を見合わせて首を傾げていた。
すると中から話し声が聞こえてきた。二人は何のことかわからず悪いとは思いながらも耳をそばだてる。
ミーナ「こんな思いをするくらいなら、好きになんてならなければ良かった…てね。
　でも…そうじゃなかった」
ミラー「(これ中佐の声ですよね)」
リーネ「(誰かと話してるんでしょうか?)」
二人は耳をドアにつけながら小声で話す。
中にいる一人がミーナであることはすぐに分かった。
ミーナ「でも、失うのは今でも恐ろしいわ。
　それなら…失わない努力をすべきなの!約束して。もう二度とストライカーを履かないって」
坂本「それは命令か?　そんな格好で言われても、説得力がないぞ」

ミーナ「私は本気よ!今度戦いに出たら、きっと貴方は帰ってこない」
話しているもう一人が坂本であることも分かった。だが話してる内容が不穏だった。
ミーナの口調がいつもの冷静で落ち着いた声とは違う取り乱した、著しく冷静さに欠いたものだった。

ミラー「(もしかして結構ヤバい?)」
リーネ「(え?え?どうしますか?)」
ミラー「(とりあえず拳銃の用意はしておこう。あといつでも突入できるように)」
この平穏ではない会話に最悪の場合、つまりミーナが坂本に発砲する、またはその逆に備えて二人は拳銃を取り出し弾を薬室に装填する。多くの軍の規定では拳銃はいざ発砲するという時まで薬室に弾を入れない規定になっている場合が多い。二人はそれを順守していた。
坂本「だったらいっそ、自分の手でというわけか…矛盾だらけだな。お前らしくもない」
ミーナ「違う!違うわ!」
坂本「私は、まだ飛ばねばならないんだ」
そう言うと坂本はドアの方に歩いて行った。
それに気がついたミラーとリーネはドアから離れ拳銃を急いでホルスターに戻して不自然にならない位置に戻った。
坂本「ミラーとリーネか。」
出てきた坂本は二人は二人に気がつく。
それに二人は敬礼する。
坂本が去ると二人は部屋に入った。
ミラー「中佐、ミラー少尉です。」
入ると二人はミーナに敬礼する。
次の瞬間、ミラーはリーネをかばうように抱き着きホルスターからルガーを取り出しミーナに向ける。
そこには二人にＰＰＫを向けるミーナがいた。
ミラー「銃を下ろせ、武器を捨てろ。両手は頭の後ろだ。」
そしてミラーも今までの優しい人間ではなく冷酷な軍人の口調でミーナに言った。
ミーナ「ミラーさん、あなたのことを信用するべきではなかったわ。」
ミラー「それはこっちのセリフですよ。部下に向かって銃を向ける

クズを信じたこっちがバカだった。」
ミーナの言葉にミラーはクズといい今までに聞いたことがないほど乱暴な口調で返した。
ミーナ「リーネさん、あなたとミラーさんの関係よ。」
ミラー「軍機違反ですか。だからと言って銃を向ける理由にはならないそれぐらい分かれゴミが。」
ミラーの拳銃はミーナの頭を狙っていた。
ミーナ「わかってるわ。でもこれぐらいしないとあなたたちは別れないでしょ。」
ミラー「まさかあなたがこれほどまでに無能だったとは。」
ミラーが呆れたように言う。
ミラー「逆ですよ。むしろこちらのほうが有利だ。
少しは脳みそ使って考えろ。
貴様がこちらに明らかな殺意をもって銃を向けたんだ、こっちがそっちを撃っても正当防衛だ。
この距離ならあんたの脳みそを吹き飛ばされるぞ。」
ミラーはミーナの頭に照準していた。ルガーは非常に精度のいい拳銃として知られている。
そのため僅か2、3メートルでは簡単に狙える距離だ。
ミーナ「これはあなたたちのためよ。あなたたちに大切な人を失う悲しみを味合わせたくないの。」
ミラー「それがどうしたっていうんです?」
ミーナの悲しい声にミラーはそれがどうしたとばかりに答えた。
ミラー「戦争で誰かが死ぬのは当然だ。
僕だって戦友や同僚、同期、故郷の親友やその家族が何人も死んでる。
戦争だけじゃない。ある特定の人種だっただけで消された奴もいる。
人間、平時でさえいつ死ぬかわからないから楽しもうとしているのにそれを妨害するだと?」
ミラーの話にミーナも気が付く。そもそも人間とはいつ死ぬかわ

からないものだということに。
平時でさえ昨日まで元気だった隣の家のお爺さんがある日突然帰らぬ人になることだってある。
ミラーはさらに続ける。
ミラー「なんの権限があって言ってるんだ！いいか！てめえの言ってることはただのエゴだ！
一方的に理不尽なことを押し付け、人間の感情レベル、さらに言えば普通の営みレベルで拘束するだと？
それじゃああのナチスやボルシェビキと同等だ！貴様は人間の屑だ！それを自覚しろ！」
そのミラーの心の底からの怒りの声にミーナも驚く。
ミーナは普段の態度からミラーのことをおとなしい人間だと思っていた、だが実際は地獄の東部戦線、そして苛烈極まりないドイツ本土防空戦を生き抜き実際に何人も殺したことのある冷徹な軍人という側面とオーストリアの上流階級に生まれたおとなしい人間という二つの側面を持つ人間だった。
そのミラーの普段言わない屑やゴミという過激な言葉にミーナも冷静になり、銃を下ろす。
ミーナ「そうね…これは私のエゴなのかもしれないわね…」
ミラー「分かればいいんですよ、分かれば。」
それを見たミラーはリーネを連れて部屋を出ようとする。
ミラー「中佐、いいですか銃を向けていいのは撃たれる覚悟のある時だけって小説にありましたよ。
中佐にはその覚悟がなかったみたいですね。では。
あと、もし殺したければいつでも相手になりますよ。」
ミラーも怒りが収まったのか普段の口調に戻りミーナに話した。
その話にミーナも少し口角を上げた。
ハインツ「中佐、失礼しま、ミラーか。なんかあったのか？」
ミラーが出ていこうとすると今度は書類を抱えたハインツが偶然にも入ってきた。
それに両者驚くがすぐにミラーたちは出て行った。

出て行ったミラーたちは暗い廊下を歩く。するとリーネがミラーに話しかけた。
リーネ「ミラーさん、もし、先にどちらかが死んだらどうします?」
ミラー「ん?なんで?」
リーネ「だって…もしどちらかが先に死ぬってありえますよね?」
リーネの質問にミラーは立ち止まり少し考えると、
ミラー「そうならないようする…なんてことは約束できないな。
もしそうなったら、リーネは僕なんて忘れて次の人を見つけてくれ」
リーネ「え…」
ミラーのその言葉にリーネは驚く。
ミラー「だってそうだろ?嫌でも時間は進むんだ。
さっさとあきらめて次のことをしたほうが建設的さ。」
リーネ「言われてみればそうですね」
ミラー「ああ。過ぎたことは忘れてさっさと次のことをする。
過去にこだわるのは愚か者だけさ」
そう言ってミラーは笑う。それにつられてリーネも笑った。

ハインツ「中佐、あいつら何やってたんですか?」
ミラーたちが出て行ったミーナの執務室ではハインツがミーナに質問した。
ミーナ「ねえ、ハインツさん。」
ハインツ「ん?なんですか?」
ミーナ「あなた、誰かを愛したことある?」
ミーナの質問にハインツは答える。
ハインツ「正直に言ってないですね。付き合ったことはあるけど大概向こうからか遊びですから。」
ミーナ「そう。もしあなたのことを愛していた人が死んだらあなたはどうするつもり?」
ハインツ「どうって…まあさすがにそれなりに悲しむと思います

よ。

まあそうはいってもある程度のところで折り合いをつけないと。時間は勝手に進むし」

ミーナ「折り合いをつける?」

ハインツ「ええ。いつまでも過去のことでくよくよするなんて女々しいことしてる暇があるなら次を探すかほかのことに没頭したほうが自分のためだ。第一柄じゃない。

中佐もそうしたほうがいいですぜ。

いつまでもクルト・フラッハフェルトの幻影を追いかけるよりも。」

クルト・フラッハフェルトの名が出た瞬間、ミーナは崩れ落ちた。

ミーナ「…なんであなたが彼のことを知ってるの」

ハインツ「まあ興味本位かな?ちょっと前に全員の履歴書とか過去を探ってみたんだ。

それで基地の整備士が中佐の元カレの話をしてくれたから」

ミーナ「そう。いい加減私も折り合いをつける頃かしら…」

ハインツ「ああそう思うよ。だってもう4年も前のことだろ。いい加減忘れて現実を見ろ。

それぐらいしか俺には言えないね。あ、今日の報告書ここに置いときますから。」

そういうとハインツは持っていた書類を近くのテーブルに置き部屋を出て行った。

ミーナは一人残された部屋で呟いた。

ミーナ「幻影を追いかけてる…か…私もいい加減新しいことを始めようかしら…」

第２６話：大騒乱への序章／嵐の前の静けさ

ミーナとミラーたちがケンカした翌日、ミーナは一人執務室で事務処理をしていた。

ミーナ（どうすればいいのかしら？）

ミーナは一人悩んでいた。

昨日のキレたミラーの暴言とハインツの話に悩んでいた。

ミーナ（クルト、私は新しいことをしていいの？あなたを忘れて別の人を選んでいいの？）

ミーナ（あなたの幻影を忘れるなんてできるの？どうやったら忘れられるの？）

「…佐」

ミーナ（別の人って誰を選べばいいの？どうやって選ぶの？）

ハインツ「中佐、聞こえてます？」

ミーナ「あ、ハインツさん。いたの？」

ハインツ「もうかれこれ５分ぐらい中佐の前に立ってたんですけど…」

ミーナが一人悩んでいるとハインツが声をかけた。

というのも考えすぎて目の前にハインツがいるのに気がつかずずっと下を見ていたからだ。

ミーナ「何しにきたのかしら？」

ハインツ「何って昨日渡しそびれた書類と今朝決済した分の書類を持ってきたんですよ。」

よく見るとテーブルの上にはいくつかの書類が積まれていた。

ミーナ「そう、ありがとう」

ハインツ「中佐、なんか悩み事か？なんだったら話ぐらいは聞くぞ。」

ハインツはミーナの挙動がおかしいことに気がつき聞いた。

それにミーナは一瞬ドキッとするがすぐに誤魔化す。

ミーナ「なんでもないわよなんでも」

ハインツ「大方昨日の話で悩んでるところかな？」

ハインツの核心をつく言葉に手が止まる。
ミーナ「はぁ…そうよ。あなたの言った幻影をどうやったら忘れられるかをね。
　ハインツさん、あなたどうすればいいかわからない？」
ハインツ「どうって言われてもねぇ…とりあえず新しい恋でもしたら？」
ミーナの悩みを聞いてハインツはテーブルの上に座りながら答える。だが、
ミーナ「それが分からないから聞いてるの。」
ハインツ「そこからかよ…身近にいないのか？好きな奴か気になるやつ。」
ミーナの問題は最も根本的なところからだった。
ミーナ「まず出会いがないの分かって言ってる？」
ハインツ「そういやそうだな。なら俺なんてどうだい？」
どうしようもない以上ハインツは冗談で自分はどうだとミーナに言った。
無論冗談なので本気にされるとは一ミリも思ってない。
だが、
ミーナ「え…そうね…悪くはないわね。」
ハインツ「は？」
ミーナ「あなた料理もできて家事もできて仕事もできて文句は多いけど基本は優しいわよね。
　もしかしたらあなたと一緒にいたら…」
その瞬間、ドアがノックされ二人ともドアの方を見る。
坂本「ちょっといいか
　悪いな、便利に使って」
宮藤「いえ、このくらいへっちゃらです」
入ってきたのは坂本と大量の書類を抱えた宮藤だった。
彼らが持ってきたのは資料、それも最近の物だ。
坂本「８月１６日と１８日に来襲したネウロイだが、奴の出現した時に各地で謎の電波が傍受されている。

周波数こそ違うがサーニャの歌っていた声の波形と極めてよく似ている」

ミーナ「えぇ」

ハインツ「ふーん」

宮藤「唄…!?」

坂本の話にハインツは適当に相槌するが宮藤は驚く。

坂本「あのネウロイはサーニャの行動を再現していたと見て間違いなさそうだな」

ミーナ「ええ」

坂本の結論にミーナはうなずく。ハインツは声を出さなかったが同意はしていた。

坂本「分析の規模をもっと広げよう。しばらくは忙しくなるぞ」

ミーナ「そうね」

ハインツ「嘘ぉ…休みたいのに…来週からデスマーチなのに…」

ハインツはその話にため息をついた。ちょうどこの1週間後から給料日前後のデスマーチが始まるのだ。

分析と計算と書類処理のトリプルコンボがどんなに地獄か火を見るよりも明らかだった。

坂本「バルクホルンやハルトマン、それにノヴァクにも今のうちに知らせておきたいな。三人をここに…」

ハインツ「あいつら今日いねえぞ。3人揃ってロンドン行ってる。」

坂本が3人を呼ぼうとするとハインツが返す。

坂本「ロンドン?」

ハインツ「なんでもバルクホルンの妹さんの意識が回復したとかどうとかこうとか。

それ聞いた時バルクホルンがユニットでロンドンに行こうとしたからみんなで止めたと思いきやノヴァクが運転できないのに車に乗せてロンドン連れて行こうとしてたよ。

使おうとしたのが俺の車だったから無理やり止めたが。」

ハインツとミラーは運転はできるがノヴァクは車の運転ができない。

なにせ当時、アメリカ以外の殆どの国では自動車の運転免許は特殊技能扱いである。
その中にはポーランドやドイツもある。ハインツとミラーが運転できるのも軍で習ったからだ。
ミーナ「無理もないわ。
バルクホルンにとって、妹は戦う理由そのものだもの。
誰だって、自分にとって大切な守りたいものがあるから、勇気をもって戦えるのよ」
ハインツ「そうかね？俺なんて別に誰かを守りたいとかそういうもんねえぞ。
ただ明日の飯と宿、それだけだからね。
両方が保証されるならさっさと軍やめて年金暮らしがしたいんだよ。」
ミーナの言葉にハインツが返すが内容が全部台無しだった。
なにせ恐ろしく不真面目で、使命感といったものがないのだ。
そもそも彼にとってはカールスラントなど単なる利害の関係上所属してるだけで本音はカールスラントなぞに命を捧げる義理も理由もなかった。ただ金と飯と宿、それさえくれればどこでもよかった。
命を捧げるのはドイツで十分だ。

バルクホルン「クリス！」
看護師「病室ですよ！お静かに！」
ロンドンのある病院ではバルクホルンが怒られていた。
妹の意識が回復したということで急いで向かったからだ。
バルクホルン「あ、ああ、すみません！急いでいたもので」
クリス「フフッ…フフッ…」
バルクホルン「クリス…」
それを見てベットの上の少女が笑う。
それはバルクホルンの実の妹、クリステイアーネ・バルクホルンだ。

バルクホルンは彼女に少しずつ近づき抱き着いた。
それを看護師は微笑ましく見て後ろのノヴァクやハルトマンは「私たちは壁ですからどうぞお気になさらず」というような態度で見ていた。
クリス「お姉ちゃん、私が居なくて大丈夫だった?」
バルクホルン「な、なにを言う。大丈夫に決まっているだろう。私を誰だと…」
暫くするとクリスがバルクホルンに聞いた。
バルクホルンはすぐに返すがハルトマンが割って入った。
ハルトマン「あーもう全然ダメダメ。この間まではひどいものだったよ?やけっぱちになって無茶な戦い方ばっかりしてさ~」
クリス「お姉ちゃん…」
バルクホルン「お前!今日は見舞いに来たんだぞ、そういうことは…!」
ハルトマン「だって本当じゃん」
バルクホルン「ないない!そんな事は無いぞ!私はいつだって冷静だ!」
ハルトマンの話を必死で否定しようとするバルクホルン。それを見てクリスは笑いノヴァクは後ろで暖かく見守っていた。
クリス「お姉ちゃん、なんだか楽しそう」
バルクホルン「そ、そうか?」
ハルトマン「それは宮藤とノヴァクのおかげだな」
クリス「宮藤さん…?」
バルクホルンが楽しそうな事をクリスが指摘するがバルクホルンは自覚してなかった。
その横からハルトマンが宮藤の名前を出す。クリスは宮藤の事に興味を持った。
ハルトマン「うん。こないだ入った新人でね」
バルクホルン「お前に少し似ていてな」
クリス「私に!?会ってみたいな!」
バルクホルン「そうか、じゃあ今度来てもらおう」

クリス「本当!?お友達になってくれるかな?」
クリスは宮藤のことで興奮する。
バルクホルン「ハハハ、かなりの変わり者だけど、いい奴だ。
きっといい友達になれるさ。
あっ、似てると言っても当然お前の方がずっと美人だからな!」
ハルトマン「…姉馬鹿」
バルクホルンがクリスと宮藤を褒めてハルトマンが冷やかす。
するとクリスは後ろに立っていたガタイのいい青年に気がつく。
クリス「ところでお姉ちゃん、その人は…」
ノヴァク「ん?俺のことか?」
自分の事だと思い返事をする。
バルクホルン「アレックスだ。アレックス、妹のクリスだ。」
ノヴァク「どうも、アレクサンデル・ノヴァクだ。よろしくクリスちゃん。」
バルクホルンはノヴァクを紹介しノヴァクも挨拶して手を差し出す。
クリスはその手に握手して返事する。
クリス「よろしくお願いします。ところでお姉ちゃんとはどういう…もしかして彼氏?」
バルクホルン「なっ!そんなわけ無いだろ!ただの同僚だ!同僚!」
ノヴァク「そ、そうだ。トゥルーデとは単なる友人だ。」
クリスの爆弾発言に二人はテンパる。
それを見てハルトマンが冷やかす。
ハルトマン「本当かな~」
ノヴァク「ほ、本当だ!ハルトマン行くぞ!ここからは姉妹二人で水入らずにどうぞ」
ハルトマン「え~」
強引にハルトマンを連れてノヴァクは病室を出て行った。
それを見てクリスはクスクス笑っていた。

クリス「ノヴァクさんとお姉ちゃんって本当に何もないの？」
バルクホルン「あ、ああ。本当に何もない筈だ。」
クリスは二人が出て行くと再度バルクホルンに聞くがバルクホルンは否定する。
すると室内に部屋の外の会話が聞こえてきた。
どうやらドアのすぐ外で話してるらしい。
ハルトマン「ねえ、ノヴァクってトゥルーデのことどう思ってるの？」
ノヴァク「どうって…まあ仲のいい友人…」
ハルトマンとノヴァクはドアにもたれかかって話していた。
ハルトマン「ほんとはそんなこと思ってないでしょ。
　好きだよね？トゥルーデのこと。」
ノヴァク「な、そんなわけ…」
ハルトマンの追求にノヴァクは否定する。図星なのだが
ハルトマン「図星だね。」
ノヴァク「う…」
ハルトマン「やっぱり好きなんだトゥルーデのこと。」
ノヴァク「絶対言うなよ。言わなかったら後でケーキ奢ってやる。」
ハルトマン「ケーキ！分かった誰にもいわぁーーーー！」
その瞬間、ドアが開いてもたれ掛かっていた二人はそのままひっくり返った。
ノヴァクが見上げるとバルクホルンが仁王立ちして立っていた。
ノヴァク「イッテェ…トゥルーデ、終わったのか？」
バルクホルン「さ、さっきのは何だ？」
ノヴァク「さっきの？」
ノヴァクを見下ろしながらバルクホルンが詰め寄る。
その口調は珍しくどもり、しかも顔を真っ赤にして恥ずかしそうだった。
なんのことかわからずノヴァクは聞き返す。
バルクホルン「さ、さっきの私のことがその、だな、す、好きというの言うのは本当なのか？」

ノヴァク「え？聞こえてた？」
バルクホルン「ああ。ばっちりな。全部聞こえてた。」
それを聞いてノヴァクはハルトマンのほうを見る。
ノヴァク「ハルトマン、お前のせいだ。ケーキの話はなしだ。」
ハルトマン「え～そんな～」
ケーキの話を無しにされハルトマンは不満を漏らすが無視する。
バルクホルン「で、ど、どうなんだ？」
ノヴァク「とりあえずこの体勢で話を続けるか？」
今、この時の両者の体勢は床に仰向けに寝転がったノヴァクの頭の上でバルクホルンが見下ろす形になっている。ノヴァクの右側にはハルトマンが同じような体勢で寝転がっていた。
ノヴァクはそのまま返答を待たずに立ち上がった。
バルクホルン「で、その、どうなんだ？ほ、本当なのか？」
ノヴァク「はぁ…そのこんな場所で言うべきじゃないが…」
バルクホルンの質問にノヴァクは息を整えると帽子を取った。
ノヴァク「トゥルーデ、俺は君が好きだ。
　こんないつ死ぬかも何処の馬の骨かも分からない人でよければ付き合ってください。」
そう言って頭を下げて右手を差し出した。
それを見てクリスやハルトマンも驚く。
永遠とも思えるほどの沈黙が流れた後、バルクホルンが言った。
バルクホルン「私で良いのか？こんな筋肉だらけの脳筋で。
　リベリアンみたいな胸もミーナみたいな優しさも宮藤やリーネみたいな家事もできないぞ。」
ノヴァク「それでも結構です。俺はトゥルーデ、君が好きなんだ。」
下を向きながらノヴァクは返す。
それを聞いてバルクホルンは顔を真っ赤にして俯いていた。
バルクホルン「アレックス、私は恋なんてしたことがない。
　女性らしいところもない。それでも良いなら…」
次の瞬間、ノヴァクはバルクホルンに抱きついた。
バルクホルン「アレックス？」

ノヴァク「ありがとう、トゥルーデ。」
抱き着いた状態でノヴァクは感謝の言葉を述べる。
そしてバルクホルンが気が付く。二人の横でクリスとハルトマンがニヤニヤしながら見ていることに。
ハルトマン「トゥルーデがね～」
クリス「おめでとうお姉ちゃん。」
バルクホルン「な…」
それに気が付いてさらに顔を真っ赤にする。
ノヴァク「よかったよ。これで妹公認だ。」
バルクホルン「そ、そういう問題じゃないだろ！」
ノヴァク「そうかな？」
バルクホルン「ちが…」
次の瞬間、バルクホルンの口がふさがった。
ノヴァクがキスしたのだ。二人は数秒間キスし、唇が離れるとバルクホルンはノヴァクに詰め寄った。
バルクホルン「な、何するんだ！」
ノヴァク「俺はポーランド人だ。ポーランド人は回りくどいのが嫌いなんだ。」
そう言うと悪戯ぽく笑った。

ハルトマン「いやあまさかあんなところで告白するなんてね～」
バルクホルン「やめてくれ恥ずかしい…」
ノヴァク「ポーランド人は回りくどいのが嫌いなんだ。悪かったな」
それから暫く三人はクリスと色々話していた。
クリスが寝ている間の話やノヴァクの素性も正直話した。
始めは衝撃を受けていたが最後にはノヴァクがいい人だと言うことを理解した。ノヴァクのことをお兄ちゃんと呼び始めるぐらいには。
これにバルクホルンは焦ったがクリスが、
クリス「将来お姉ちゃんと結婚するかもしれないでしょ？」

という一言に丸め込まれてすっかり許していた。
その後三人は基地に戻るため車に向かったのだが車のワイパーになにかが挟んであることに気がつく。
ハルトマン「何だこれ？」
ハルトマンが気がつきそれを取る。
ノヴァク「見たところ手紙のようだな？宛先は…」
ノヴァクがそれを取り太陽の光で中身を透かして確認する。
バルクホルン「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ殿？」
ハルトマン「ミーナ宛？」
ノヴァク「怪しいな。もしかしたらそれ脅迫まがいのものじゃないか？
　そうでなくとも検閲のある通常の郵便では出せないってことは…」
ノヴァクの言葉に3人は怪しいものを感じる。
これが大騒乱への序章とも知らずに…

第27話：悪魔の来襲

ハインツ「こいつは…」
ミラー「興味深いですね」
ノヴァク「『深入りは禁物、これ以上知りすぎるな』か。」
バルクホルン「ミーナは何をしたんだ?」
ハインツ達が見ているもの、それは昨日ロンドンに行った時に車に置かれていた手紙だった。
彼らはこの手紙に怪しいものを感じミーナが見る前に読んでいた。
ハインツ「どちみちこいつは不審物だ。後でケッテンフンテに渡そう。」
その怪しすぎる内容にハインツはケッテンフンテ、憲兵に渡そうといった。
ケッテンフンテはドイツ語で鎖付きの犬、転じてドイツ軍での憲兵の蔑称だった。
ノヴァク「信用できるか?」
ハインツ「大丈夫だ。基地の憲兵将校は信用できる。」
ノヴァクは憲兵が信用できるか聞くがこの基地の憲兵将校はハインツの飲み仲間だったため信用していた。
すると後ろのドアが開き誰かが入ってくる。それに気がつきその場にいた全員が振り返る。
そこにいたのはミーナと坂本だった。
ミーナ「貴方達何をやってるの?」
ハインツ「すまんがこれを先に見させてもらった。」
ハインツは手紙を持ってミーナの質問に答える。
バルクホルン「『深入りは禁物、これ以上知りすぎるな』…これはどういうことだ?」
ノヴァク「一体何をした。こんな脅迫まがいの手紙が送られくるのは異常だ。」
バルクホルンとノヴァクがミーナ達に聞く。
坂本「やましいことなど何もしていない。そうだろう、ミーナ?」

ミーナ「え?.えええそうよ。私たちはただネウロイの事を調べていただけで…」
ハインツ「それだけでこんなブツが送られてくるか?」
坂本とミーナは質問に答えるがハインツがそれに納得しない。
ハルトマン「差出人に心当たりは?」
坂本「ありすぎて困るくらいだ」
ミーナ「そうね、私たちのことを疎ましく思う連中は軍の中にいくらでもいるはずだから」
ハインツ「なんだ、ここも一緒か」
ノヴァク「人間の本質は対して変わらないものだな」
ミラー「人は3人寄れば派閥を作るって言いますからね…どの組織も一枚岩なわけないですよね。」
ハルトマンがミーナたちに聞くがその答えにハインツ、ミラー、ノヴァクは派閥争いや噂で流れる政府や軍内部での権力闘争の話を思い出していた。
ドイツ軍では内部の派閥争いが激しく特に有名なのが空軍の空に関係あるものは全部支配下に置きたいというゲーリングの趣味の結果、海軍は独自の航空部隊を持てなかったり、同じく空軍が陸軍に補充要員として空軍兵２０万人を譲渡するのを拒み独自の陸戦部隊としてドイツ軍屈指の弱兵部隊として一部で有名な空軍地上師団を合計２１個も編成してしまったことなどが有名である。
某極東の同盟国は陸軍と海軍の中の悪さが酷すぎて防空さえ一本化できてなかったりただでさえ貧弱なリソースを奪い合う戦争以前の問題を戦中に何度も起こしていた模様。
なおその敵の某チート国家は5軍間の仲の悪さがガチで陸軍と海軍のトップがガチで仲悪い、空軍の駄作機を作るために海軍の空母が起工5日で撃沈される、某国防長官が「全部の軍で使う戦闘機一種類にすればよくね?」とかいう理論で戦闘機作ったけど全軍の要求が無茶苦茶すぎてとうとう海軍が匙を投げて結局できたのは爆撃機、救出作戦しようとしたら海軍・空軍・陸軍・海兵隊が足を引っ張りまくって結局大失敗、でその反省で特殊部隊専門軍作ったけど海兵隊が蚊帳

の外でゴネる、結構近いところに基地があるけど仲が悪いから滅多に交流しない基地がある（日本国内で）などなど。
とにかく大概の国では軍同士の仲はかなり悪いのである。
坂本「が、こんな品のない真似をする奴の見当は付く。
恐らくあの男は、この戦いの核心に触れる何かをすでに握っている。
私たちはそれに触れたのだろう」
ハインツ「あの男？」
坂本「トレヴァー・マロニー、空軍大将さ」
ノヴァク「トレヴァー・マロニー？トラフォード・マロリーじゃないのか？」
ノヴァクは坂本の言った人物が分からず自分達の元司令官トラフォード・リー＝マロリーの名前を言う。
トラフォード・リー・マロリーはイギリス空軍の名指揮官であり空陸直協に関しては連合軍一の専門家として知られる人物である。
その腕は仲の悪かったモンゴメリーでさえ賞賛するほどのものだった。
ただ彼はＶ１迎撃の件で連合軍航空軍司令官を解任されビルマに飛ばされ、新しい任地に向かう途中に航空機事故で死亡するという悲劇に巻き込まれた不運な名将だった。
ハインツ「トラフォード・マロリー？誰だそれ」
ノヴァク「俺の元上官。英空軍遠征部隊総司令官でＤデイの時には俺たちを指揮してノルマンディーからクラウツを追い出した。
俺も一回会ったことあるがなかなか良い人だったぞ。」
坂本「トラフォード・マロリーはブリタニア空軍第１３課課長だぞ。」
ハインツがトラフォード・マロリーが分からずノヴァクに聞き、坂本が同性同名のブリタニア軍の将軍の名を出す。
バルクホルン「この５０１の上官、ミーナの上司だ。
彼は軍上層部のタカ派で、ウィッチに対してあまり良い印象を持っていないんだ」

ハインツ「タカ派で我々に良い印象を持ってないねぇ…」
ノヴァク「何かしらこいつが絡んでいると考えて良さそうだな。」
バルクホルンの説明にノヴァクはこの事に何かしら絡んでいることを確信する。
ミラー「だとしても一体なんでこんなことをするんだ?
まさかこの部隊を解散させたいのか?そうなったらドーバーの守りが決壊して戦略的大敗北を喫するだけだ。」
ノヴァク「まさかとは思うがそのマロニーとやらは俺たちを失業させられる代物を作ってるんじゃないか?」
ハインツ「ありえない…とは言い切れないな。
ノヴァクの話だと俺たちが居なくなった後ドイツは飛行爆弾やら巨大ロケットやらジェット機やらを実戦で使ってるんだろ?
この世界でもありえないとは言い切れん。」
3人は与えられた情報の中から恐ろしい仮説を立てる。
即ちマロリーがウィッチーズを解散するのだ。それは3人には最も恐ろしかった。なにせ501は彼らの唯一の居場所であり仕事場であり家であった。
もしここがなくなれば居場所がなくなり、最悪モルモットにされる可能性さえある。
ハインツ「兎に角、今できるのは出来る限りの情報を掻き集めて想像を膨らませることしかできん。
あとはこの手紙をシャーロック・ホームズにでも見せて差出人をやらを見つけるぐらいだな。」
ミーナ「そうね。」
坂本「残念だがそれしかできないな。」
ハインツの結論にミーナと坂本が同意して解散となった。
ハインツは解散後手紙をハンカチで包みそれを下の憲兵詰所に持っていった。
この部隊の憲兵将校は彼の飲み仲間であり仲が良く信用していた。
ハインツ「よお、マイヤー。調子はどうだ?」

憲兵詰所に行くと彼は飲み仲間の警官上がりの憲兵マイヤー中尉に話しかけた。
マイヤー「まあぼちぼちだな。憲兵と警官は暇が一番だからな。」
ハインツ「そりゃよかった。で、だお前に頼みたいことがある。」
マイヤー「なんだ?違反の揉み消しとかじゃないよな?」
ハインツ「そんなもんじゃねえよ。こいつの分析ってできるか?」
そう言うとポッケから手紙を取り出す。
マイヤー「手紙だな。できないことはない。まあ欲しい情報が出るかどうかは別だが。」
ハインツ「まあ別に情報が出るとは一ミリも思ってないからな。じゃあ後は頼んだ。」
そう言うと彼は立ち去った。
だが、この手紙はマイヤーが少し目を離した隙に消えた。

その日の夜、ロンドンのとあるクラブ
ボック大将一派の主だった将校将軍たちが集まっていた。
ボック「そうか、連中が動いたか。」
ケーネン「ええ。フェルカーザムによると奴の可能性が高いとのこと。」
ボック大将に第５０１猟兵大隊大隊長フリードリヒ・フォン・ケーネン少佐が報告する。
シコルスキ「こちらもそろそろ動くか?」
マロリー「ああ。奴を叩き潰してこちらイニシアチブを得るためにもそろそろ頃合いだな。
情報は揃ってるのか?」
ケーネンの報告にシコルスキとマロリーが意見を述べる。
ケーネン「それが…できないことはないレベルでは揃ってますが奴の尻尾を完全に捕まえた訳ではないです。
ここは慎重を期すべきだと具申します。」
マロリー「そうか。はぁ…姑息な奴が」
ボック「そうだな。だがいつか尻尾を見せるだろ。

誰だっていつまでも頭も尻も隠してられない。そうだろ？
ここは我慢比べだ。」
だがケーネンの意見にマロリーはため息をつく。それにボックは同意する。
その日のこの集まりはその後も深夜まで続いた。翌日、一気に情勢が変化する事件が起きるとも知らずに…

翌日、ハインツは朝からマイヤーから手紙を盗まれたという不愉快極まりないニュースを聞いて不機嫌だった。
その上この日は突如ネウロイが出現、さらに宮藤とペリーヌが正式な届けを出さないで勝手に飛行訓練を行った上に宮藤が独断専行でネウロイに向かうという不快極まりない状況に不機嫌さがマックスだった。
坂本「じゃあ宮藤は一人で向かったんだな？」
ネウロイ出現という報告に坂本、ハインツ、ミラーたちがスクランブルし空中でペリーヌと合流した坂本がペリーヌに聞く。
ペリーヌ「すみません、もとはと言えば私が…」
ハインツ「その件は後で然るべき措置をとるから覚悟しとけよ。」
ペリーヌ「はい…」
ペリーヌが謝るがハインツが事務的な言葉で返す。この日は非常に不機嫌だった。
ハインツ「それにしても宮藤は何をやってるんだ？」
魔導針を出してネウロイを探していたハインツが漏らす。
坂本「どう言うことだ？」
ハインツ「どうもネウロイと一緒にいるのは確かなんだが戦闘行為をしている気配がない。」
ミラー「え。それかなりマズイですよね？」
ハインツの話にミラーが驚く。
戦闘行為をしていないということは戦場では、特に敵と交戦距離内にいる場合では座り込んだアヒルに他ならない。それを熟知しているミラーは最悪の場合をおそれていた。

ハインツ「かなりマズイな。とにかくコイツはもしかしたらかなり厄介な代物かもしれんぞ。」

坂本「まだ追い付かないのか、ミーナ！」

ミーナ『それが、ネウロイはガリア方面に引き返しているわ。単に戻るつもりなんじゃ…』

ハインツの話に坂本が焦り全速力で宮藤のところへ向かおうとする。

すると何かが飛んでいることにハインツが気がつき双眼鏡を覗き魔眼を使い確認する。

ハインツ「いた！宮藤だ！ん？その側に何かいるぞ。人みたいな形をしてる」

坂本「宮藤の他にウィッチがもう一人いる」

ミラー「は？この辺りに僕ら以外のウィッチは存在しないはずですよね？」

ハインツと坂本の言葉にミラーは慎重になる。

なにせ不正確な情報は誤射や致命的な悲劇を生み、チャンスをフイにすることがあるのだ。

実際、サボ島沖海戦では日本艦隊が誤って米艦隊を別の味方艦隊と誤認、さらにその米艦隊も日本艦隊を行方不明の味方艦と誤認し、互いに至近距離まで接近、米艦隊の誤った指令により軽巡ヘレナが発砲、その初弾が旗艦青葉艦橋を直撃したことで海戦の火蓋が切られたのだが互いに米艦隊は味方を撃ったと思い、日本艦隊は味方に撃たれたと思った結果至近距離、それも理想的なT字戦でありながら米艦隊は日本艦隊を取り逃がし戦果を拡大することが出来なかった。

他にも客船ヴィルヘルム・グストロフが撃沈された際には誤った情報によりこの客船は航海灯をつけっぱなしで航行していた。

ハインツ「いや、あれはウィッチじゃない。ネウロイだ！」

そのウィッチのようなものをよく観察したハインツはそれがウィッチではなく人の形をしてネウロイだということに気がつく。

そして宮藤がネウロイのコアに触ろうとしていることにも。

それに気がついて坂本は全速力で宮藤の元へ向かう。

坂本「何をしている！宮藤！」
宮藤「坂本さん！」
坂本「撃て！撃つんだ宮藤！」
宮藤「違うんです！このネウロイは…」
坂本「何をしている！いいから撃て！」
宮藤「駄目です、待ってください！」
宮藤と坂本の言い争いを横目にハインツとミラーはハンドサインで坂本の側から離れて上昇する。
空中戦だけでなく地上戦を含めた戦争の基本は高い所の方が絶対的に有利である。
上昇するとハインツはミラーに指示する。
ハインツ「よしミラー。あの人間モドキを吹き飛ばせ。」
ミラー「どっちにします？頭？腕？」
ハインツの指示に腕と頭どちらを撃つか聞く？
ハインツ「頭に決まってるだろ。お前首から上のない実体のあるやつ知ってるか？」
ミラー「そういえば大概脚ないですよね。」
そう言ってミラーは頭に照準を合わせる。無論誤射の危険を極限まで減らすため慎重にである。
大概のものは頭がないと死ぬ。
なお某赤い帝国は頭だけでも生物を生存させる狂気の品を作ったことがある。ブロッケン伯爵？知るかよ
坂本「惑わされるな！そいつは人じゃない！」
宮藤「違うんです…そんなことじゃ…！」
坂本「撃たぬなら退け！」
次の瞬間、坂本の後ろ上方より聞きなれた重い音がする。そして人型の頭を吹き飛ばす。
ハインツ「お見事」
ミラー「このぐらい朝飯前ですよ」
撃ったのはミラーのＢＫ５。バカみたいな火力にネウロイの頭は一撃で吹っ飛んだ。

撃たれたネウロイは降下する。それを見た坂本はチャンスと判断し機関銃を撃ち始める。だが頭がないにもかかわらずネウロイはその攻撃をいともたやすく躱し逆にビームを撃ち返す。
坂本はシールドを張るがビームはそれを貫き機関銃を誘爆させ爆発に巻き込まれる。
坂本「あああああ!!」
ペリーヌ「少佐!」
宮藤「坂本さん!」
爆発に巻き込まれた坂本はそのまま悲鳴をあげ墜落する。
それを見たハインツは即座に指示する。
ハインツ「ミラー、あの人擬きを消し炭にしろ!」
ミラー「了解!」
ハインツ「ペリーヌ、宮藤は坂本の救助。バルクホルンはミラーと俺の援護!」
地獄の東部戦線を生き抜いてきた二人には〝この程度のこと〟は日常茶飯事、全く動揺しなかった。
ミラーは人型に向かって５０ミリを撃つが比較的小さく、その上機動性が高い人型には中々当たらず弾は全く見当違いのほうに飛んでいく。
連続で撃ちまくるが暫くすると弾が切れてしまう。ＢＫ５の装弾数は僅か２０発。全力で撃てばすぐに尽きてしまう。
ミラー「少佐!弾切れです!」
ハインツ「ミラーはペリーヌ達の援護に行け!あとはこっちがやる」
ミラー「了解」
そういうとハインツはバルクホルンを連れて人型を追撃する。
だが人型は足が速くすぐに離されてしまう。魔道針で監視はできたがとてもじゃないが追いつける距離ではなかった。
ハインツ「こちらハインツ。人擬きを取り逃がした。全くなんて日だ!」
ただでさえ不機嫌なハインツは無線で当たり散らす。

その後重傷を負った坂本に応急処置をすると基地に帰還、そのまま彼女は医務室に担ぎ込まれた。

第２８話：理想は平和だが現実は残酷だ

ロンドン、西方総軍司令部近くにある連合軍第１３課のオフィス、そこに向かって一人の男、カールスラント陸軍の軍服を着用し階級章は少佐、首元には鍵十字が彫られた騎士鉄十字章をかけた男が向かっていた。その手にはある部隊に潜入中の腹心の部下の報告が握られていた。

そして目的のオフィスにつくと服装を整える暇もなく飛び込んで叫んだ。

ケーネン「ボック大将、マロリー中将、シコルスキ少将、重大な事案が発生しました。」

ボック「重大な事案？」

マロリー「奴がやったのか？」

シコルスキ「それともチャンネル諸島か？」

口々にオフィスで紅茶を飲みながら話し合っていた将軍たちはこの若い少佐、フリードリヒ・フォン・ケーネン少佐に聞く。

ケーネン「全部違います。出ました。奴が。」

シコルスキ「奴？ヒトラーか？」

ケーネン「違います。人型です。５０１に先ほど出たと報告が。」

ケーネンの持ち込んだ情報にこの場にいた全員が驚愕する。

シコルスキ「クルヴァ！とうとうこっちにも出やがったか！

現状は？」

ケーネン「それが…フェルカーザムからの情報によると迎撃に出たウィッチ一名が負傷、取り逃がしたようです…」

シコルスキ「あの無能共！スオムスの事例を周知しとけばこんな事態にはならなかったはずだ！」

マロリー「とにかく不味いな。

また出てくる可能性がある上に最悪の場合は…」

ボック「ゼーレーヴェか…」

彼らにとって人型とはネウロイが活発化する、もしくは大規模な行動を起こす重大なトリガーの一つと認識していた。

ただこの考えは非常に異端であり支持はあまり受けていなかった。
ボック「ふうむ…全予備部隊をケント州南部に移動、各師団より連隊規模戦闘団を緊急輸送させよう。
全部隊は警戒レベルをレベル5から3に引き上げ、ケント州への緊急輸送準備をさせろ。
ドーバー師団はレベル2にしろ。ディートルに指示しろ。」
シコルスキ「分かりました。」

ディートル「さてとみんな。不味いことになった。」
第7軍団軍団長エデュアルト・ディートル中将は急遽行われた作戦会議で参加した将校たちに向かって話した。
ギルザ「ええ。ヤツが出たんですよね。
すでにこちらでは一個戦闘団の戦闘準備が完了、今すぐドーバーに送れます。
残りも緊急輸送に備えて待機中です。」
不愛想なブルドックのような顔をした将軍、第52歩兵師団師団長ヴェルナー・アルブレヒト・フライヘア・フォン・ウント・ツー・ギルザ少将が答える。
ディートル「第55装甲師団は?」
クリゾリ「シェレンドルフ大佐を指揮官に1個戦車連隊を基幹とする戦闘団を編成済みです。
現在サウサンプトン駅で列車への積載作業中です。今日の夜にはケント州に送れます。」
古傷のある、切れ者だということを感じさせる口調の将軍、第55装甲師団師団長ヴィルヘルム・クリゾリ少将が話す。
プラット「こっちは既に大陸反攻用だった輸送機をかき集めて展開済みだ。
今日の夕方にはカーライル少佐の部隊をサセックスに送れる予定だ」
リベリオン訛りの英語を話す将軍、第18空挺師団師団長ドン・プ

ラット准将が報告する。
ディートル「分かった。その他部隊はどうなってるシュタウフェンベルク。」
報告を聞くとディートルは彼の後ろに立っている眼帯をつけた片手がない参謀に話しかける。
シュタウフェンベルク「第113歩兵旅団は現在ドーバーに緊急輸送中。
戦闘団ブリタニアはケント州北部に輸送中。
ドーバー師団は既にドーバー市街北部に展開しています。」
第7軍団主席参謀クラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐が目の前に置かれた地図を指して説明する。
地図にはケント州の北に一個戦闘団が、さらにテムズ川の対岸に一個旅団、ドーバーに一個師団、ワイト島に一個師団、サウサンプトンに2個師団あることが書かれていた。

ハインツ「はぁ…中佐が少佐にかかりっきりなせいであいつの仕事全部こっちに丸投げかよ…」
ミラー「だからって僕まで巻き込まないでください。」
ハインツ「しょうがねえだろ。人手が足りねえんだよ。」
ハインツが書類を処理しながら愚痴るがそれにミラーが愚痴で返す。
坂本が撃墜された後、ハインツはミーナが坂本につきっきりになったためミーナの書類とさらにユニットの損失関連の書類、坂本の負傷に関する書類、更には坂本が戦死した場合の書類を用意しなければならなかった。
その上元々あった書類も減る訳ではないので人手が足りないためハインツはミラーを連れて帰還してから数時間二人執務室に缶詰になって書類処理をしていた。

それから暫くすると書類がひと段落したので二人は坂本の様子を見に行った。その頃にはすっかり夜となり暗闇があたりを覆っていた。

二人が医務室に着くとそこにはベットから体を起こして宮藤と会話していた坂本がいた。

宮藤「…よかった」

坂本「宮藤、顔色が悪いぞ」

ハインツ「よ、大丈夫か?宮藤も大丈夫か?さっきノヴァクから聞いたぞ坂本を治療してぶっ倒れたんだろ?」

その会話に割り込む形でハインツも参加する。ハインツは書類を処理していた時に書類を持ってきたノヴァクから宮藤が治療してぶっ倒れたと聞いていた。

坂本「ああハインツ。多分大丈夫だ。宮藤、ありがとう。」

ハインツの話を聞いて坂本は宮藤に感謝を述べる、だがすぐに表情が変わる。

坂本「…何故撃たなかった」

宮藤「えっ」

坂本「あの時、何故お前はネウロイを撃たなかった」

坂本は宮藤に聞く。

宮藤「…撃てなかったんです」

坂本「人の形だからか?あれはお前を誘い込む罠だ」

宮藤「でも、私あの時なにか感じたんです…」

坂本「ネウロイは敵だ」

宮藤の答えに坂本が返すがそれはある意味硬直した思考からの答えだった。

この答えにある意味ハインツは呆れてしまった。なにせ「上官の命令は絶対」というのは軍の訓練所の一時間目に習う事である。

そしてその手の話を宮藤にする事を忘れていたことを内心後悔していた。

ハインツ「坂本、宮藤、その話は後だ。宮藤、悪いが君を拘束しなきゃならないらしい。」

ハインツはそう言うと二人の会話を止め宮藤を連れて出て行った。
宮藤を連れて出て行ったハインツは宮藤をミーナの執務室まで連れてまでいく。
執務室に入るとミーナ、バルクホルン、ハルトマンがいた。
ハインツ「中佐、連れてきましたよ。」
ミーナ「ご苦労、ハインツさん。
さて、宮藤芳佳軍曹、あなたは独断専行の上上官命令を無視、これは重大な軍規違反です」
宮藤「はい…」
入ってきた宮藤にミーナが淡々と話し始める。
ハインツはそれを聞きながら宮藤の後ろに立ちホルスターに手をかける。もし逃げようとした場合すぐに抜くためだ。
ミーナはさらに続ける。
ミーナ「この部隊における司法執行官として質問します。
あなたは軍法会議の開催を望みますか?」
ハインツ「宮藤、軍法会議は軍隊での裁判みたいなのだ。
言っておくが望んだ場合これまでのすべての発言が法廷で証拠として扱われる、いいね?」
ハインツは宮藤が軍法会議の知識に疎い宮藤に補足する。
ハインツは一応佐官、それも正規の士官教育を受け、この部隊では参謀長的役割も担い、ドイツ軍時代には特設軍法会議に参加した経験もあるため軍法に関する知識もそれなりに持っていた。
それを聞いても宮藤は小さく何かを言っただけで明確な返答を得なかった。
ミーナ「返答が無いので軍法会議の開催は望まないと判断しました」
それを見てミーナは判断する。
ハインツもこれを大事にしたくないため内部で処理するミーナの判断に納得していた。
軍を含めて多くの組織はできる限り内部で処理しようとする閉鎖的なところがある。

ミーナ「今回の命令違反に対し、勤務、食事、衛生上やむを得ぬ場合を除き、十日間の自室禁固を命じます。
異議は？」
宮藤「あの、私ネウロイと…」
ミーナ「改めて聞きます。異議は？」
宮藤「聞いてください！」
宮藤はミーナの質問を無視して自分の主張をしようとする。
それにミーナは持っていた資料をテーブルにたたきつけて大きな音を出す。それに宮藤が驚く。
ミーナ「異議は？」
宮藤「…ありません」
ミーナの質問に宮藤は答える。処分が決まった。

処分が決まった後、宮藤はハインツに連れられて自分の部屋まで行くが、途中でハインツは宮藤を全く別のところへ連れていく。
行先はハインツの部屋だった。
宮藤「ハインツさん？ここハインツさんの部屋ですよね？」
ハインツ「ああそうだよ。なに宮藤、お前の話をしっかり聞こうと思ってな。」
ハインツは宮藤を部屋に入れるとテーブルの上に置かれた瓶を取り、コップを二つ出す。
ハインツ「宮藤、座れよ。酒飲むか？上物のバーボンだ」
宮藤「いりません。」
ハインツ「そ、こいつ高いんだぞ。はい、コーラだ」
宮藤はハインツから酒を進められるが断る。
それを聞いたハインツは別のところからコーラの瓶を取り出し栓抜きと一緒に宮藤に渡す。
宮藤はそれを受け取り栓抜きでふたを開け一口飲む。
ハインツ「さて、宮藤。あの時何があった。君の感想を抜いて事実だけを語ってくれ。」

ハインツの言葉に宮藤は坂本が来るまでに起きたすべてを語った。
話し終わると宮藤はハインツに言った
宮藤「あの時、ネウロイと分かり合えて気がするんです。もしかしたら…」
ハインツ「宮藤、俺はそう考えるのを否定する気はない。
信じるだけならタダだ。」
宮藤の話にハインツは言う。そしてさらに続ける。
ハインツ「宮藤、いいか、理想と現実は違うんだ。
俺だって理想は平和だ、」
宮藤「なら」
ハインツ「だが現実は残酷だ。
宮藤、別に俺は考え直せとか言わない。ただ現実を直視し考えろ。
生きたければ、勝ちたければそうしろ。これは戦争だ。
それもただの戦争じゃない。
片方がこの地上から一匹残らず消えるまで続く。
やや過激な言葉を使うなら絶滅戦争だ。負けた方が絶滅するまでのな」
その言葉には散々嫌な、地球上で最低最悪の現実を見、夢や理想を捨てた悲しみが詰まっていた。

第２９話：終わりの始まり

翌日、突如全員がブリーフィングルームに集められる。
そしてそこで衝撃のことが告げられる。
ミーナ「宮藤さんが脱走したわ！」
ノヴァク「は？脱走？」
ハインツ「あのアッフェ！仕事増やしやがってあのクソッタレ！」
それに全員が驚きハインツは悪態をつく。
ミーナ「これが司令部に知れたら厄介だわ。急いで連れ戻すわよ」
ミーナは内部で処理を済ませるために指示するがその時テーブルの上の電話が鳴る。
すぐにミーナは受話器をとる。
ミーナ「はい、５０１統…閣下!?……ですが、それは…いえ、了解しました」
ミーナは受話器を置くと常識的には考えられない命令を伝える。
ミーナ「司令部から宮藤さんに対する撃墜命令が下ったわ」
ハインツ「は？連中は正気なのか？正式な手続きはしたのか？軍法会議は？

第一たかが一回の脱走だろ。なぜそこまでする？」

撃墜命令にハインツは理解できなかった。
軍隊では最高刑は銃殺刑だがこれは普通殺人、強盗、強姦、戦争犯罪、重大な規律違反、悪質な脱走、横領、重大な命令違反に適応されるものである。
確かに戦中は脱走兵が銃殺刑に処されていたがその場合形式的とはいえ軍法会議が行われて即決裁判によって処刑されていた。だがそれは本当に戦況が末期的だった大戦末期や督戦隊が付いていた場合ぐらいであり基本的には正規の司法手続きに基づく。
その場合宮藤のような〝ただの脱走〟で銃殺刑になる確率は低い。
例えば米軍は大戦中に程度の差こそあれ脱走・敵前逃亡した兵士は合計約２１０００人にも上る。
この内銃殺刑の判決を受けたのは合計４９人。その中で実際に執

行されたのはエディ・スロヴィク二等兵ただ一人。
しかも彼は米軍が南北戦争から現代までで実際に脱走が理由で銃殺刑が執行された唯一の人物である。
ベトナム戦争では71年に米軍史上最悪の脱走者数合計33094人（これは当時の総兵力の3．4%にもなる）も出しているがだれ一人銃殺刑には処されていないのである。
そのため宮藤の撃墜命令は不可解どころではなかった。
この命令に全員が驚く、軍内部の司法関係の知識をそれなりに有しているハインツ・ミラー・ノヴァクはこの異常な判断に、ウィッチたちは同僚を殺さなければいけないということに。
そしてミラーはふとリーネの反応がおかしいことに気がつく。
もしかしたら宮藤の件で何か知ってると思い聞く。
ミラー「リーネ、宮藤の事で何か知ってる？正直に話してくれないかな？」
リーネ「ミラーさん…その…ごめんなさい！」
ミラーの質問に対してリーネは謝った。
ハインツ「お前が宮藤を手伝った訳か。
リーネ、とりあえず今日一日お前は謹慎だ。この件については追って沙汰する。」
ハインツはリーネに対して事務的な口調で処置を言い渡す。
それを言うとミーナは捕獲隊を編成し宮藤を捕まえに行く。
だが、出撃前にハインツはミーナに話しかけた。
ハインツ「中佐、ルッキーニだけは外してやってくれないか？」
ミーナ「え？どうして？」
ハインツ「あの年の子供に見せたくない。ここからは大人だけの話にしたい」
ハインツはルッキーニを外すように頼んだ。ハインツの12歳の少女に人を殺すシーンを見せたくないという気遣いだった。
ミーナ「でも…」
ハインツ「それともし、宮藤をやるのなら俺がする」
ミーナ「えっ…」

シャーリー「ハインツ…」
ハインツの話にミーナとそれを聞いていたシャーリーが驚く。
シャーリー「なんで宮藤を殺すんだよ！なぁ、仲間なんだろ！」
ハインツ「仲間だからだよ。君らの手はまだ綺麗だ。だったら既に汚れ切ってる俺がやった方がいい。
　第一君らの年の少女に俺は人を殺すように指示できない…指示するぐらいなら自分で頭を撃ち抜いた方がマシだ！」
ハインツの悲しい声にミーナやそれを聞いていた全員が俯く。
ハインツにとってこれは気遣いだった。仲間を殺すという非情で軍人としても稀なことを彼女たちに強いることができないという責任からだった。
　この押し問答の後、ハインツはＭＧ４２を、ミラーはＭＰ４０を持ち出撃した。これも彼らなりの配慮だった。
　人体にＭＧ１５１の様な同クラス最強レベルの弾が直撃すれば、ＢＫ５の様な大砲の弾が直撃すればどうなるか？文字通りミンチより酷い事になるのである。そんなＲ１８つけても許可が下りないようなシーンを子供に見せたくないという配慮から二人はこれを選んでいた。
　バルクホルン「アレックス…アレックスはどう思う？ハインツの言うことに賛成か？」
　このやり取りを聞いたバルクホルンがｗｚ．１９２８を準備するノヴァクに聞いた。
　ノヴァク「そうだな…トゥルーデ、俺は君に人を殺させたくない。
　分かるだろ？最愛の人の手を汚させるなんてできないしさせたくない。だったら代わりに俺が泥を被ればいい」
　バルクホルン「そうか…」
　ノヴァクの答えに一言言うとバルクホルンはただ黙ってノヴァクの方を見た。
　そして捕獲隊は宮藤を追い出撃する。
　暫くハインツが固有魔法を使い探していると宮藤が人擬きと飛んでいるところを発見する。

ハインツ「中佐、目標発見。戦闘用意、俺の指示で撃てるようにしろ。」
いつも以上に冷静な声でハインツは全員に指示する。
そしてハインツはノヴァクとミラーを連れて宮藤を捕まえようと追いかけようとする。だが、
ミーナ「待って！」
ノヴァク「は？」
ミラー「え？」
ハインツ「おい、止まれ。なんなんだありゃあ…デケェ…」
ミーナが3人を止める。そしてハインツも前方の積乱雲らしき巨大な、見たこともない程黒い雲に気がつく。
ミラー「なんだアレ？」
ノヴァク「デカイ…噂に聞くタイフーンかハリケーンか？」
ミーナ「ネウロイの巣よ」
ミーナが呟く。
ハルトマン「前にも見たことある。あそこから奴らが来るんだ！」
バルクホルン「あれを破壊しようと多くの仲間が攻撃した。だが、誰一人近づくことすらできなかった…」
ハインツ「なんだ、トミーの飛行機工場とイワンのトラクター工場と同じじゃないか。
潰そうとして逆にこっちが潰されるってか？」
ハルトマンとバルクホルンが悔しそうに言うがハインツは全く気にせずそれどころかそれを自分達がバトル・オブ・ブリテンで何度も何度も完全に破壊しようとして逆にこちらの戦力をすり減らし続けたイギリスの飛行機工場やソ連の戦車工場（ソ連ではトラクター工場は戦車工場のこと）のことを引き合いに出して茶化す。義理も何もないため不謹慎だろうが気にしなかった。
それに二人は嫌悪感丸出しの目で見、何かを言うとするがそれをルッキーニが邪魔する。
ルッキーニ「芳佳が中に入っていくよ！」
ノヴァク「は？」

ハインツ「な、マジかよ…」
すぐにハインツは双眼鏡を覗き確認する。そこには宮藤がネウロイに連れられて巣に入って行く光景があった。
ルッキーニ「入っちゃった…」
ミラー「あれ入れるんだ」
ハインツ「なああれ、罠って可能性ないか?」
全員が口々に言うがハインツが最悪の可能性を指摘する。
ルッキーニ「芳佳!」
ハインツ「落ち着け。とにかく今は様子を見よう。」
ルッキーニがハインツの話を聞いて巣に向かおうとするがそれをハインツが止める。
捕獲班は暫くの間、巣の監視を続けた。
数分後、人型だけが出てきた。宮藤の姿はない。
ハインツ「彼奴が出てきた。戦闘用意!」
ルッキーニ「芳佳は!?」
バルクホルン「いない…やっぱり罠か!」
即座にミーナは全員に指示する。
ミーナ「ブレイク!」
「了解!」
そして散開する、そこからはあっという間だった。
突如後方より未確認飛行物体が接近したかと思うとネウロイが攻撃を開始した、その攻撃は今までとは比較にならないほど激しく、濃密だった。
全員が回避したりシールドを張って避け、その間にＵＦＯは有利な位置を陣取るとネウロイに向かってビーム攻撃を行い一瞬で殲滅した。
殲滅するとＵＦＯは仕事が終わったのかターンして戻っていった。
全てが終わった時、そこにはただ宮藤が落下している光景が残った。
シャーリーとルッキーニに宮藤の救出を任せたハインツはＵＦＯが行った方を見る。

ハインツ「戦争は人類を発展させるとはいえアレはなんだ?俺たちをクビにできる代物か?
　どうするミラー?ラッダイト運動でもするか?」
ミラー「なら少佐がネッド・ラッドになってください。僕はバイロンをやりますから」
ハインツは産業革命期に起きたラッダイト運動を引き合いに出して軽口を言う、それにミラーはこの運動のシンボルだったキャラクターの名前と擁護した詩人の名前を出した。

宮藤を拘束した一行は基地に戻っていた。
そしてルッキーニが基地に基地に多数の軍人、陸軍の特徴的なカーキのバトルドレスを着た兵士と黒に近い濃紺の軍服を着た将官らしき人物を見つけた。
ルッキーニ「あれ?誰かいるよ?」
ハインツ「見た感じお偉いさんだな。肩章がないから多分ブリタニアだ」
双眼鏡でさらに確認したハインツは肩章がないことからブリタニア空軍関連の人物と判断する。
全員が着陸すると紺の軍服を着用した将官らしき軍人がミーナに話しかける。
マロニー「ご苦労だった、ミーナ中佐」
それと同時に後ろに件のＵＦＯが着陸する。
そして次の瞬間、周りの兵士が銃を彼らに向ける。咄嗟にハインツは両手をあげる。
ハインツ「おいおい、捕虜になるのは3回目だ。ジュネーブ条約だけは守ってくれよ。」
ハインツは能天気に軽口を叩く。それにミラーやノヴァクが意味を理解してニヤリとするが他のウィッチはそれどころではなかった。
ミーナ「まるでクーデターですね、マロニー大将」
ハインツ「ブリタニア人はもうちっと紳士的な連中だと思ったらわりかし乱暴な手段を取るもんだな」

ミーナの言葉にハインツがふざけた調子で皮肉を言う。
マロニー「命令に基づく正式な配置転換だよミーナ中佐。
　この基地はこれより私の配下である第一特殊強襲部隊通称ウォーロックが引き継ぐこととなる」
ミラー「ウォーロック…確か魔女の一種でしたよね？」
ミラーはこのどう考えてもＳＦの世界から抜け出てきたとしか思えないフォルムに違和感以上に不安を感じる。
ハインツ「俺に聞くな。そのあたりの話は幽霊戦闘機とフライングダッチマンしか知らねえんだよ」
マロニーの言ったウォーロックという単語にミラーは古い言い伝えを思い出しハインツに聞くが彼はいわゆるオカルトや昔話に全く興味のないタイプの人間であるため分からなかった。
マロニー「ウィッチーズ全員集合かね」
ウィッチたちが全員揃うとマロニーは宮藤の前に立ち問う。
マロニー「君が宮藤芳佳軍曹か」
宮藤「はい…」
マロニー「君は軍規に背いて脱走をした。そうだな？」
宮藤「軍規…」
宮藤「あっ！その後ろの」
マロニーの質問に宮藤は何かを思い出した。
マロニー「ウォーロックのことかね？」
宮藤「私見ました。それがネウロイと同じ部屋で、実験室のような部屋で！」
マロニー「なっ!?何を言い出すんだ君は!!
　質問に答えたまえ！君は脱走した！そうだな？」
宮藤の爆弾発言にマロニーは狼狽えるがそれを隠すように再度質問する。
宮藤「…はい。でも…」
マロニー「中佐、私は脱走者は撃墜するように命令したはずだ」
ミーナ「はい。ですが…」
ハインツ「閣下、よろしいですか？」

マロニーは宮藤の事についてミーナを問いつめるがそこにハインツが割って入る。
その口調は珍しく敬語であった。
マロリー「なんだ？」
ハインツ「宮藤の撃墜命令の件ですが〝正規の〟手続きに則って発行したのでしょうか？
もし違う場合、さらに言えば虚偽、正規の手続きを経ずに発行していた、誤報の場合の責任の明確な所在について明確な答えを得ていないため今回は宮藤の捕獲を優先しましたがそのあたりはどうなんでしょうか？
小官としては捕獲の前にＭＰと話をつけて改めて正規の手順に則り正式な軍法会議を開くべきと判断しましたが。」
マロニー「う…」
ハインツの官僚的且つ反論の余地のない意見にマロニーは反論できない。
なにせ正論過ぎる意見であった。
マロニー「それより隊員は脱走を企てる、それを追うべき上官も司令部からの命令を守らない。
全く残念だ…」
マロニーは動揺を隠すようにハインツの話を無視して話す。
マロニー「本日只今を持って、第５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは解散する！」
ノヴァク「クルヴァ！」
ハインツ「あのクソ将軍は気が狂ったらしい」（ドイツ語）
ミラー「誰か近所の精神病院に連絡して患者が逃げ出して５０１にいると伝えてくれ」（ドイツ語）
ハインツ「そりゃあいい。それとどこから空軍大将の軍服を盗んだかも聞かねえとな」（ドイツ語）
ハインツとミラーはドイツ語でマロニーを侮辱する。
ドイツ語の分かるバルクホルンやミーナはそれに内心同意する。
このとても士官学校はおろか中学校を卒業したとは思えない判断

に目の前の将軍が実は狂ってるんじゃないかとしか思えなかった。
マロニー「各隊員は可及的速やかに各国の原隊に復帰せよ！以上だ。分かったかね中佐」
ミーナ「…了解しました」
ハインツ「了解しましたよ！行くぞ！あのデップはほっとけ！」
そういうとハインツ・ミラー・ノヴァクは両手を尻のポッケに突っ込み親指だけ出した状態で建物に戻る。
それを見てマロリーはあからさまに嫌な顔をする。このジェスチャーは軍隊では上官に対する最大級の侮辱を意味した。
3人が建物の中に消えるとマロリーは振り返り宮藤を見、うわ言を言う宮藤に言う。
宮藤「そんな…解散…ウィッチーズが…」
マロニー「君の独断専行が原因なのだよ、宮藤軍曹」
次の瞬間、彼女は意識を失った。

ほぼ同時刻。ドーバー近郊。
そこではＭ３ハーフトラックに乗ったカールスラント兵、扶桑兵、リベリオン兵らしき兵士の一団とブリタニアの憲兵がいざこざを起こしていた。
兵士Ａ「だから、俺たちは５０１に行くんだよ！そういう命令が来てるんだ！
お前らのとこにも来てるはずだ！」
憲兵Ａ「そんな命令は来てない。こちらの命令は５０１への道路の封鎖だ！」
兵士Ｂ「中尉、ダメです。時間もありませんし無視しましょう」
扶桑兵らしき兵士が拙いブリタニア語でＭ３に乗ったリベリオン兵らしき将校に進言する。

彼はそれを聞いてドライバーと二言三言会話し、地図と時計を確認すると手で前進を合図した。

それを確認した後ろに続く2、3台のSPGと共に前進するが、突如銃声が響いた。

そしてM3に乗っていた兵士が肩を撃たれて倒れる。

兵士たちと押し問答をしていた憲兵が持っていた拳銃からは硝煙が漂っていた。

そして次の瞬間、憲兵の一団はM3に乗った兵士たち、そして周りの兵士からの一斉射撃に全員が物言わぬ肉塊と化した。

この銃声を聞いた近隣のブリタニア軍部隊が急行、そして憲兵に発砲した兵士の一団を発見、発砲する。

さらにこれを受けこの一団はブリタニア軍に発砲、撃退するが今度は戦車を伴った部隊が接近、一団はいったん撤退するが今度は戦車を伴い再度強襲、ブリタニア軍部隊は鎧袖一触でこの部隊に殲滅される。

そして似たような事例はほぼ同時にケント州の各地で発生した。

これを受け西方総軍総司令部はケント州の全反乱ブリタニア軍部隊の武装解除を下令、だがこの地域を管轄するブリタニア軍南西軍管区は拒否、それどころかケント州に存在する全外国軍の武装解除を開始した。

これに対し西方総軍司令部はこの時、ケント州に緊急輸送中であった第7軍団に対して反乱鎮圧及びブリタニア軍の武装解除を下令する。

これによりケント州南部を舞台に強力な装甲部隊を擁する第7軍団と反乱部隊が激突する。

その波はウィッチーズさえも容赦なく巻き込んだ。

第３０話：戦争への道

このような大動乱に陥ったのは時間を数時間遡る必要がある。
数時間前、ロンドン、西方総軍総司令部大会議室。
そこである将軍が熱弁を振るっていた。
マロリー「いいですか！これは正規の司法手続きを経ていない非合法な命令です！
　そしてその内容は殺人教唆に値するものです！
　こんな命令を将軍が、それも我が国の空軍最高司令官が出していいんですか！」
ボック「そうだ。これは殺人教唆だ！
　こんな命令を我が国の軍人に出すとは貴国の空軍はどうなってるんだ！」
熱弁を振るいマロニー大将が出した「宮藤の撃墜命令」を理由に上官であるトレヴァー・マロニーを糾弾するのはブリタニア空軍参謀本部第１３課課長トラフォード・マロリー中将。
そしてその発言に西方総軍参謀本部第１３課課長のフェードア・フォン・ボック大将が激しく同意し会議で糾弾対象のマロニーの代理として送られたブリタニア空軍参謀中将に問い詰める。
彼はただ黙って椅子に座って小さくなることしかできなかった。
マロリー「総司令官、彼奴の、トレヴァー・マロニーの逮捕命令を出してください。」
総司令官「ふむ、理由は？」
マロリーは会議に参加していた事務屋として有名なリベリオン軍将軍に要求する。
そして彼はマロリーに聞き返す。
マロリー「殺人教唆、規律違反、命令違反です。」
総司令官「分かった、やれ。奴を裁判にかけろ」
マロリー「は！」
総司令官はマロニーの〝逮捕〟命令を出した。
その命令を受けた司令官達は各々各地に連絡する。

彼らはブリタニア軍がこの恥知らず供を自分達で逮捕する、そう思っていた…

マロリー「遅い！なんで彼奴を捕らえるのにこんな時間がかかるんだ！

彼奴は今ドーバー城の南西軍管区司令部に居るはずだろ、なんでドーバーは…まさか！」

命令を発行して約2時間後、丁度５０１がウォーロックに出会ったころ、第１３課オフィスではマロリーが苛立っていた。

彼らは予定ではこの日会議のためマロニー訪れているはずのブリタニア軍南西軍管区が彼を逮捕すると思っていた。

だが実際は違った、この命令を受け取った南西軍管区はこれを握り潰したのだ。

そして南西軍管区とマロニーがグルだと気が付いたマロリーは参謀長のシコルスキに聞く。

シコルスキ「そのまさかだ。連中グルだ。」

マロリー「やっぱりな。で、どうする？」

シコルスキ「もう手は打った。ワルキューレの発動だ。」

シコルスキはワルキューレを発動させた。

ワルキューレは内乱鎮圧用作戦コードの一つである。

それはつまり内乱を理由に連合軍最強と名高い装甲部隊が襲い掛かる事を意味した。

マロリー「そうか。許可は？」

シコルスキ「さっき電話で貰った。既にドーバー師団が動いてる。」

マロリー「そうか。ボック大将は？」

シコルスキ「作戦指揮のためサウサンプトンに飛んだ。

俺も1時間後のフライトで向かうつもりだ」

彼らの組織では〝余りにも多国籍且つ複雑すぎる〟ため作戦を指揮する際、当該作戦区域の最高クラスの将軍が部隊間の調整や作戦指揮のため前線で指揮を執ることがあった。

これは彼らがスタフカを組織の設立の際に参考にしたためであった。

スタフカは作戦指揮や焦点地域の防衛の際に前線部隊の指揮をスタフカから派遣した指揮官に一任させるというダイナミックな運用をしていた。

これはスタフカがソ連軍という非常に巨大かつ複雑な組織を円滑の運用し、勝利を得るために生み出した柔軟なシステムであった。

だが今回は別だった。

なにせだれも予想していなかった文字通りの想定外の事態であり総司令部も現在進行形で大混乱の渦の中だった。

そんな中突如オフィスの電話が鳴った。

それをシコルスキが取る。

シコルスキ「こちら第１３課オフィス、シコルスキ参謀長だ」

フェルカーザム『少将、第５０１猟兵大隊第２中隊ブランデンブルク中隊長フォン・フェルカーザム少佐であります』

電話をかけたのは諜報担当の第５０１猟兵大隊第２中隊長で本来なら上官であるフォン・ケーネン少佐を通じて連絡を取っているはずのフェルカーザム少佐だった。

シコルスキ「君か。で、なんだ？

普段ならケーネン君を通して５０１の情報をくれるが君が直接情報を持ってくるとは何か重大な事案でも発生したか？」

フェルカーザム『先ほど、トレヴァー・マロニーが基地に現れました。』

シコルスキ「何！よくやった！ヴィクトリアクロスものだ！」

その報告にシコルスキは喜ぶ。

だがさらにフェルカーザムは報告を続ける。

フェルカーザム『それと彼が第一強襲飛行隊なる部隊を連れてきています。

その部隊はウォーロックなる新型の航空機を装備してるようです』

シコルスキ「なに？分かった。監視を続けてくれ」

フェルカーザム「は！」
そういって電話を切るとシコルスキは電話をかける。
シコルスキ「私だ。サウサンプトンの第７軍団司令部にかけてくれ」

サウサンプトン郊外にある第７軍団司令部は指揮官のエデュアルト・ディートル中将以下主席参謀クラウス・フォン・シュタウフェンベルクなどの多くの将校が勤務していたがこの時ばかりはさらに大変なことになっていた。マロニーへの対処のため隷下４個師団及び１個旅団、１個戦闘団をケント州に緊急輸送している最中だった。
緊急事態のため彼らのボスボック大将や隷下各部隊の指揮官が集結して対応を話し合っていた。
そこで電話が鳴り参謀の一人が取った。
参謀「誰だ！こんなクソ忙しいときに電話をかけてくるバカは！」
あまりの忙しさに電話の相手に当たり散らすがすぐに態度を変える。
シコルスキ『シコルスキ少将だ』
参謀「し、失礼いたしました！で、何用でございましょうか？」
シコルスキ『ボック大将かディートル中将に代わってくれ』
参謀「は！ボック大将、ディートル中将、シコルスキ少将から電話です」
参謀はすぐにすぐそばのテーブルで会議中だった二人を呼び出す。
ボック「うん？なんだ？」
ディートル「何かありましたか？」
参謀「シコルスキ少将が変わるようにと」
ボック「分かった。私が出よう」
そういってボックは参謀から電話を替わる。
ボック「シコルスキ、私だ。なにがあった？」
シコルスキ『未確認の新型航空機を伴ってマロニーが５０１に現れ

ました。』

ボック「分かった。諸君、マロニーが５０１にいる。」

シコルスキから齎された情報をボックはその場にいる全員に伝える。

その情報に全員が驚く。

ディートル「不味いな。今すぐドーバー師団に下令！攻撃目標をドーバー城から５０１に変更しろ！」

クリゾリ「シェレンドルフ大佐に連絡、至急戦闘団を５０１に急がせろ！」

この情報に即座に攻撃目標をいると思われていたドーバー城から５０１基地に変更するように下令したが僅か３０分後にさらに衝撃的な情報が司令部に来た。

参謀「はぁ？ブリタニア憲兵が発砲し反撃した？で、それでブリタニア軍と遭遇戦に陥ったと？」

ケーネン「大変です！マロニーが５０１の解散を宣言しました！」

ギルザ「は？」

ディートル「なんてことだ…」

ボック「不味いな。」

それはドーバー師団がブリタニア軍と交戦状態に陥ったという情報とマロニーがブリタニア南部の防空の要である５０１を解散したという情報であった。

ボック「作戦を変える必要があるな。今すぐだとどのぐらい送れる」

ギルザ「第５２歩兵師団は全部隊を投入可能です。今すぐ行けます」

プラット「第１８空挺師団は何とか輸送機をかき集めてるが明日の朝までに何とか２個連隊分が確保できる見込みだ」

クリゾリ「ゼッケンドルフ大佐指揮の一個戦車連隊と一個装甲擲弾兵大隊からなる一個戦闘団が準備中です。」

ボックの質問に将軍たちはそれぞれ報告する。

この時点でケント州に投入可能だった戦力はドーバー師団、二個旅

団規模戦闘団、一個大隊規模戦闘団、1個旅団、二戦級の一個警察戦闘団のみだった。

それだけでは反乱の鎮圧は重荷な上にこの内一個旅団と一個警察戦闘団はケント州北部にいたため南部まで移動するのにそれ相応の時間がかかる。さらには残りの三個戦闘団は全て移動中でケント州西部で列車からの積卸作業中ですぐには動けなかった上に合計しても１５０００人程度しかいないため推計3万人がいるとされるドーバー周辺のブリタニア軍を鎮圧するには明らかな不利であった。

攻者三倍の法則を考えた場合投入すべき戦力は単純計算で9万人、第7軍団の戦力は僅か四個師団と一個旅団で合計7万人程度、戦力不足は否めなかった。

そのためにも増援は必要であった。

するとプラットが何かを思いついたのかクリゾリに聞く。

プラット「なあ、その戦闘団にうちの空挺大隊を随伴させられるか？」

クリゾリ「可能だ。というか今どちらかというと歩兵が足りない。こっちの師団は三個戦車連隊なのに擲弾兵連隊が二つしかないんだ。できれば一個連隊借りたい」

プラット「なら戦闘団カーライルを合流させよう」

第５５装甲師団は戦車三個連隊と装甲擲弾兵二個連隊しかないため他の師団と違い歩兵戦力に欠いていたのがネックだった。

そこでプラットは隷下の一個空挺連隊からなる戦闘団を随伴させることにした。

クリゾリ「いいのか？」

ギルザ「なら先行してる戦闘団シェレンドルフを戦闘団５２に合流させよう。それなら戦力を集中できる」

それを聞いたギルザも先行させていた二個戦闘団を合流させて運用させることにした。

プラット「攻撃目標だが、ドーバー師団にはドーバー市街とドーバー城の南西軍管区司令部を攻撃させるか？」

ボック「５０１はどうするのかね？」

クリゾリ「５０１はこっちでやります。
５０１の基地は陸側からの攻撃が難しい。
戦力が不十分でドーバー城のある関係上切り札たる揚陸部隊が港に閉じ込められてるドーバー師団では海側からの攻撃ができん。
その上周辺には脅威となる部隊があり下手すれば基地にかまってる間に挟撃される可能性がある。
だったら我々が５０１を攻撃するのが合理的だ」
ボックの質問にクリゾリは増援部隊で叩くと意見する。
５０１の基地は出入口が橋一つのみであるためもしこの橋を落とされるとボートが必要になるという非常に防衛しやすいところであった。
ギルザ「先行させてる戦闘団にはケント州のブリタニア軍部隊の武装解除をさせて我々で叩こう。
シュタウフェンベルク、５０１にはどのぐらいの兵員が籠城できる？」
シェレンドルフ「凡そ１５００人が限度かと。」
ギルザはシュタウフェンベルクに５０１にどのぐらい籠れるか聞くが規模などから１５００人、つまり１個大隊程度の人員しか立てこもれないと推測する。
ギルザ「なら戦闘団ゼッケンドルフと第５２歩兵師団から抽出した戦闘団でやれる。
あと５０１解散の混乱に乗じて人員を確保し情報を得る。
確か向こうに〝こちら側〟のウィッチが３人いたよな？」
ケーネン「ええ。いますよ。まさか…」
ギルザはシュタウフェンベルクの答えを聞くとさらにケーネンに聞く。
その質問にケーネンはギルザの言いたいことを察する。
ギルザ「そうだ。大将、今すぐ５０１に正規のルートでコンタクトしてヴァレンシュタイン少佐以下３名をサウサンプトンに連れてきてください。」

ギルザの目的、それは５０１の解散と騒乱の混乱に乗じてウィッチを確保し情報を得るというもの。
工作員を潜り込ませていても内部の構造や規模などの正確な情報を得るには利用しない手はなかった。
ボック「いけるか？」
ギルザ「いけます。ダメでもやります」
ボック「分かった。ところでほかのウィッチもいるかね？」
ボックがそれを聞いて電話に手をかけながらギルザに聞く。
ギルザ「ええ。情報は多い方がいいですよ。
それとあの年の少女に私たちの戦争は見せたくないですからね」
ボック「そうだな」
ギルザとボックのその言葉には何処か悲しみを含んでいた。

５０１が解散して数時間後
リーネ「芳佳ちゃん！芳佳ちゃん！」
宮藤はリーネの呼びかける声に気がつき目が覚めた。
それを見てリーネは喜ぶ。
リーネ「芳佳ちゃん！よかった…」
宮藤「リーネちゃん、皆…私…」
リーネ「さっき、滑走路で倒れたんだよ」
ミーナ「蓄積した疲労とショックで意識を失ったみたいね」
宮藤は状況が分からずリーネとミーナが説明する。
それを聞いて宮藤は何かを思い出した。
宮藤「そうだ！あのウォーロックって、なんかおかしい。今から皆で調べれば…」
だが宮藤の目にミーナやリーネの足元に置かれた物に気が付く。
宮藤「皆…それは…」
リーネ「…命令で、私達皆は今すぐここを出なくちゃいけないの」

宮藤「それじゃあ、やっぱりウィッチーズは…解散？」
宮藤の質問にリーネは頷くことしかできなかった。
それを聞いて宮藤は泣き始めた。
宮藤「ごめんなさい皆…私…ごめんなさい…私のせいで…私の…！」
リーネ「違うよ、そうじゃない…」
ルッキーニ「芳佳、元気出せ！」
それを見てルッキーニとリーネは励ます。
暫く泣き続けて落ち着いた宮藤は周りを見渡す。すると何故かハインツ達だけいないことに気が付く。
宮藤「ところで、ハインツさんたちは？」
ミーナ「もう行ったわよ。」
宮藤「え？」

約３０分前
ミラー「リーネ、手紙書くから待ってて。」
リーネ「はい、ミラーさん。私も書きますから。」
ハインツ「おーい、あんたら人前でイチャイチャすんなや。見てるこっちの身にもなれや」
宮藤が起きる約３０分前、リーネとミラー、ノヴァク、バルクホルン、ミーナ、シャーリー、ハインツは基地の出入り口にいた。
ハインツは荷物を乗せた大型統制自動車にもたれ掛かりながら別れを惜しんでるカップルに向かってヤジを飛ばしていた。
だがミラーとリーネはそんな事気にせず抱擁していた。
バルクホルン「そのだ、アレックス、元気でな。手紙は書いてくれ、できればクリスのお見舞いも行ってくれないか？」
ノヴァク「そうだな。トゥルーデ、死ぬな、怪我するな、無茶するな、しっかり休めいいな？」
その横ではバルクホルンが照れながらノヴァクに色々言っていた。
バルクホルン「それじゃあ、その…」
次の瞬間、ノヴァクはバルクホルンに抱きつくとキスしていた。

それにバルクホルンは耳まで真っ赤にして驚くがノヴァクは周りの目すら気にしなかった。
ミーナ「あら？」
ハインツ「おいコラ。俺への当てつけかクソッタレ」
シャーリー「あの堅物がねぇ～」
リーネ「えっと…」
ミラー「ほー」
それを見てミーナたちはそれぞれ反応する。
ミーナは微笑ましく、ハインツは完全にイラッとして、シャーリーはニヤニヤしながら、リーネは困惑しミラーはなぜか感心していた。
数秒その体勢を維持した後、二人は離れる、そしてバルクホルンがノヴァクに詰め寄る。
バルクホルン「ア、アレックス！何をするんだ！」
ノヴァク「しばらく会えないんだ。このぐらい良いだろ？」
バルクホルン「ま、まあしばらく会えないならいいとしても突然するな！」
ノヴァク「ハハ、ごめん。」
バルクホルン「ま、まあ私もしようかなとか考えてたから悪くは…」
その瞬間、周りでミーナやシャーリーやハインツ、ミラー、リーネが見ていたことに気がつき顔が茹で蛸のように真っ赤になりノヴァクを叩きながら詰め寄る。
バルクホルン「な、なんてことしてくれたんだ！」
ノヴァク「ダメだったか？これで基地のみんな公認だ」
バルクホルン「そ、そういう問題じゃないだろ！」
ハインツ「はぁ…シャーリーコーヒーあるか？口の中が甘ったるくて仕方ない」
シャーリー「私もあんなことしたいんだけどなぁ…」
ハインツ「あ？なんか言ったか？」
それを見て呆れかえったハインツはシャーリーに愚痴るがシャーリーは本音を漏らす。
それをハインツは全く聞いていなかった。

シャーリー「なんでもないよ。ハインツがいなくなるとグヤーシュ食べれなくなるなぁ…」
ハインツ「作り方教えてないからな。まあ今度休暇で会いに行くよ。
カールスラント軍でも年一回の2週間の休暇はあるみたいだし」
ドイツ軍の意外なシステムの一つが年一回全ての将兵に約2週間の休暇が与えられる。
これによりドイツ軍では常時全軍の約1割の将兵が休暇を取っていた。そしてこのシステムは世界を超えた同位体であるカールスラント軍にもあった。
シャーリー「次会う時にはハインツに手料理作ってあげるからさ、その…」
ハインツ「あ?ああ、あの約束?俺の嫁さ…」
シャーリー「あーー!それ言わない!」
ハインツはシャーリーとの約束を言いかけるがシャーリーが大声を出して誤魔化す。
ハインツ「はいはい。そういや俺もあいつらと同類か」
シャーリー「?そういやハインツ達ってどこ行くんだ?」
ハインツが今の状況を見て漏らす。それにシャーリーは疑問を持つが別の質問をしてそれを忘れる。
ハインツ「サウサンプトンだよ。
よくわかんねえが即座にサウサンプトンの第7軍団司令部に出頭しろだとよ」
シャーリー「そうなんだ」
ミーナ「それにしても変よね。第7軍団は陸軍部隊よ」
ハインツ「まああれだろ。空軍との連絡将校的な役割じゃね?
それとミラー、ノヴァク、イチャイチャしてるとこ悪いが行くぞ!
たく明日の朝までに来いとか無茶苦茶すぎんだよ」
ハインツ達の次の任地はどういうわけかサウサンプトンの陸軍部

隊第7軍団司令部だった。
ハインツは連絡将校として配備されると考えていたが解散した次の日の朝までに来いという無茶苦茶な命令にハインツは不満があった。なにせ準備の時間が全くないのだ。荷物もほとんど重要な奴と凶器になるものしか持っていけなかった。
ハインツの呼びかけにミラーとノヴァクは車に乗り込みそれを確認したハインツは車を出す。
ミラーとノヴァクは車から手を振りながら恋人との別れを惜しむがハインツはタバコを吹かしながら「なんで運転なんだよふざけんなてかどうやってサウサンプトンまで行きゃあいいんだよこの辺土地勘ねえぞ」とか色々愚痴りながら運転していた。

第３１話：足の生えた大戦の亡霊たち

一行が基地を出発して１時間ほどした後、ミラーは隣で運転中のハインツに愚痴る。

ミラー「全くなんで急にサウサンプトンに向かえなんて命令が来たんでしょうか？」

ハインツ「知るかよ。それよりも、誰か後ろをつけてるぞ。」

ハインツは基地を出たころから尾行している乗用車、オースチン８に気が付いていた。

それを聞いてノヴァクが振り返る。

ノヴァク「ほんとだ。双眼鏡あるか？」

ハインツ「ほい。」

ハインツはノヴァクに双眼鏡を渡す。

ノヴァク「ナンバーからして登録はロンドンだな。うん？」

ハインツ「どうした？」

双眼鏡を使い観察していたノヴァクはナンバープレートから登録がロンドンだということに気が付くがそれ以上におかしいことに気が付く。

ノヴァク「不味い！あいつ銃積んでるぞ！」

ハインツ「は?!それどういう意味だよ！」

ノヴァク「まんまだ！銃あるか？」

ノヴァクは車の助手席を確認したところそこにいた男がステンガンとブレンガンを持っていたことに気が付いたのだ。

すぐにノヴァクは銃を探す。

ハインツ「銃ならステンガンとライフルがある。

弾はライフルが一箱で多分１００発、ステンが弾倉一個分だけだ」

ミラー「これですか？なんでステンがこんなところにあるんですかねぇ…」

ノヴァク「なんでＰ１４ライフルがあるんだ？」

ハインツ「ああ。ステンは基地の倉庫から、ライフルはホームガー

ドが廃棄予定だった奴を持ってきた」
ハインツはいざという時の自衛用にホームガードから旧式のエンフィールドライフルと基地の倉庫からステンを持ってきていた。
ハインツ「で、どうすんだ？」
ノヴァク「とりあえず振り切れるか？」
ハインツ「ふん、そのぐらい朝飯前さ。口閉じとけよ舌噛むぞ！」
そういうとハインツはアクセルを全開にして加速する。
するとオースチンも加速して追いかける。
ノヴァク「野郎何する気だ？」
ミラー「追いかけてくるんですけど！なんなんですか奴は！」
ハインツ「さあな？ただ言えるのはあのキチガイ将軍の手先の可能性が高いってことだけだな」
ミラー「まあそうでしょうけど連中銃持ってるんですよ！」
ハインツ「大丈夫だってまさか連中が発砲なんて…」
ハインツが言いかけた次の瞬間、オースチンからブレンガンとステンガンの銃声が響いた。
ハインツ「訂正。連中撃ってきたぞ！殺せ！」
ノヴァク「分かってる！たく旧式ライフルとサブマシンガン一丁で勝てるか？」
ハインツは発砲音を聞くと車をジグザグに走らせながら逃げる。
ノヴァクはライフルにクリップで弾を装填すると撃つ。だが旧式ボルトアクションライフルとブレンガンではどう考えてもブレンガンの方が上であった。
なのでできることといえば一か八かでエンジンかタイヤかドライバーを狙うしかない、だがジグザグに動きながらだと非常に難しい。
その上ノヴァクは射撃はたいしてうまくない。
そのためほとんど逃げることしかできなかった。
弾は初めは外れていたがそのうち当たりはじめ一発が左のウィンカーを破壊する。
ノヴァク「おい弾が当たってるぞ！」
ハインツ「んなことわかってるよ！だったら奴をどうにかしろ！」

ノヴァク「無理に決まってんだろ！こっちはＷＷＩのライフルだぞ！おい前見ろ！」
ハインツ「え？前？うぉ！」
次の瞬間、ハインツ達の乗った車は土嚢を積んで作られた即席の検問のバーにぶつかりへし折る。
それに検問のカールスラント兵らしき指揮官が驚く。
指揮官「シャイセ！何やってくれてんだ！うお！」
兵士「撃ってきたぞ！」
立ち上がって悪態をつくがそこに後ろから来たオースチンが銃撃しながら突っ込む。
それに検問の兵士たちは伏せたり物陰に隠れたりライフルを撃ち返す。
指揮官「あのオースチンをぶっ壊せ！戦車部隊はどうした！」
それを見た指揮官は命令する。
すぐに兵士が電話をかけて戦車を呼び出す。さらに検問に置いてあった機関銃を装備した乗用車とバイクもオースチンを追いかける。
ハインツ達はそんなことも知らずオースチンに撃ちながら逃げていた。
ミラー「で、どーすんですか！検問ぶち壊して撃たれながらとか！」
ハインツ「知らねえよ！とにかくサウサンプトン着くまで生きてるよう祈ってろ！」
ノヴァク「おい！もうこれでクリップ５個目だぞ！」
ハインツ「神様にでも弾が当たるように祈ってろ！」
ノヴァク「もうやってる！神よ我の手にあの車を破壊する力を与え給えってな！
　というか追いかけてるのがなんか増えてるぞ！」
ハインツ「え？」
ノヴァクの声に振り返るとオースチンの後ろからＭＧ４２を据え付けたキューベルワーゲンとバイクが追いかけていることに気がついた。
ミラー「だいぶマズイですよねこの状況…」

ハインツ「マズイなんてもんじゃないだろ…」
ノヴァク「てかなんか聞こえねえか?金属がこすれるような音」
ノヴァクが近くから別のエンジン音と金属がこすれる独特の音が聞こえることに気が付いた。
すぐに二人も耳を澄ませる。
ハインツ「なあ、この音ってさ…」
ミラー「戦車ですよね?なんでここに?」
音を聞いて二人は顔を見合わせる。
だが次の瞬間、突如２０メートルほど前から巨大な物体が現れる。
戦車、それもキングタイガーであった。
ハインツ「ぬぉ!」
ミラー「ギャー!」
驚いたハインツは急ブレーキをかけハンドルを右に切る。
車はブレーキ音を立てながらスリップし前後逆になるほど回転した後突如現れたキングタイガーの手前で止まる。
乗っていた３人は滅茶苦茶になりノヴァクは後部座席でひっくり返っていた。
そして次の瞬間、キングタイガーは発砲する。
弾は吸い込まれるようにハインツ達の後ろを走っていたオースチンに直撃、車は大爆発を起こし木っ端微塵となった。
それに３人はただ呆然とするしかなかった。
ハインツ「あー…」
ミラー「何が起きたんでしょうか?」
ノヴァク「おおう…ミンチより酷いことになってるだろうなぁ…」
すると戦車からリードグリーンの作業服を着た車長が出てきて３人に声を掛ける。
「マックスよりモーリッツ、不審車両を撃破した。ん?あんたらどうした?」
「フェンテザック、誰かいるのか?」
フェンテザック「ああクニスペル、空軍の奴が乗った車がある。」
フェンテザックと呼ばれた車長がクニスペルという乗員に返す。

クニスペル「それ例の連中じゃねえか?」
フェンテザック「かもな。あんたらどこから来たんだ?」
フェンテザックが下にいるハインツたちに聞く。
それにハインツたちは答える。
ハインツ「５０１からだ。サウサンプトンに行く途中だった。助けてくれて助かった。」
フェンテザック「やっぱり。ちょっと待ってくれ。」
ハインツ達の答えを聞くとフェンテザックは無線でどこかに連絡した。
暫くやりとりがあったと思うとハインツたちに言う。
フェンテザック「あんたら５０１から来たんだろ?うちの隊長が会いたいそうだ。」
ハインツ「そりゃ無理だ。明日の朝までにはサウサンプトンに行かなきゃいかん。」
フェンテザック「大丈夫だ。うちの隊長がサウサンプトンまで連れてってくれるそうだ。門限には間に合うよ。」
ハインツ「本当か?そりゃあ有難い。」
フェンテザックの話にハインツは喜ぶ。
暫くするとフェンテザックの連絡を受けて一台のキューベルワーゲンがやってくるとハインツはそれについて行く。
ついて行くとある飛行場に着いた。
そこには焼け焦げた飛行機と思しきものの残骸や血の跡が残り野戦病院らしきテントなどが立ち並び数機の輸送機や戦闘機が駐機し、多数の戦車、装甲車、大砲、トラック、乗用車などが並び多くの兵士、それも非常に多国籍な兵士達が忙しなく動いていた。
ハインツ「なんだここ。飛行場か?」
ミラー「多分…なんか陸軍部隊の司令部みたいなことになってますけど」
３人が見回して困惑していると一人のカールスラント軍士官らしき兵士が声をかけた。
士官「ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐、アレクサンデル・ノヴァ

ク中尉、アドルフ・ミラー少尉ですね？」
ハインツ「だけど。それがどうかしたか？」
士官「シェレンドルフ大佐がお呼びです。私に続いて来てください。」
その言葉を聞いてハインツたちは困惑しながら降りる。
３人とも最悪のパターンを想定して銃を用意する。
士官について行くと飛行場に隣接する格納庫の一つに通される。
そこには赤いベレー帽を被り迷彩スモックを着たブリタニア人士官やフィールドグレーの見るからに仕立てのいいノリの効いた野戦服と乗馬ズボンを着て首から騎士鉄十字賞を下げた士官など数人の将校と無線機と大きなテーブル、その上には地図が置かれていた。
そしてハインツたちに気がついたその首から騎士鉄十字賞を下げた将校が連れてきた士官に話しかける。
「連れて来たか。」
士官「は、シェレンドルフ大佐。」
士官は話しかけられると敬礼して答える。
シェレンドルフ「よろしい。下がってくれ。」
シェレンドルフ大佐と呼ばれた将校は士官に下がるよう命令する。
士官「は、失礼します。」
命令された士官は敬礼すると下がって格納庫から出て行った。
出て行ったことを確認したシェレンドルフはハインツたちに話し始めた。
シェレンドルフ「第５５装甲師団第１５５装甲擲弾兵連隊連隊長兼戦闘団シェレンドルフ隊長ブロンザート＝シェレンドルフ大佐だ。
ヴァレンシュタイン君だな？」
ハインツ「は、小官がそうであります。」
ハインツが敬礼して返す。それにシェレンドルフは返礼すると話を続ける。
シェレンドルフ「今、私たちのボスが君たちを探している。
さっきサウサンプトンの司令部に連絡したら今すぐここにある輸送機で連れて来いとのことだ。

なので君達には輸送機に乗ってサウサンプトンに向かってもらう。いいね？」
ミラー「一つよろしいでしょうか？」
ここでミラーが話に割って入った。
シェレンドルフ「なんだね？」
ミラー「なぜ僕たちを探していたんですか？」
シェレンドルフ「君たちは何も知らないのか？」
ミラーの質問にシェレンドルフは驚いたように返す。
それに3人は顔を見合わせる。
シェレンドルフ「詳細は調査中だがマロニーが反乱を起こした。その鎮圧のための情報がいるんだ。」
ミラー「え！」
ノヴァク「な！」
ハインツ「は？嘘だろ？」
シェレンドルフの話に全員が驚く。
ミラー「少佐急いで戻りましょう！リーネが！」
ノヴァク「トゥルーデ！今行くぞ！おい戦闘機貸せ！」
ハインツ「お前ら落ち着け。それで大方基地の構造に詳しいから呼んだって感じですか？」
ミラーとノヴァクはそれを聞くとリーネとバルクホルンを心配し車に戻ろうとしたり格納庫の外に駐機されていたスピットファイアを使って基地に戻ろうとするがハインツが止める。
シェレンドルフ「ああ。大体そんな感じだ。
反乱についてはいまだに情報が錯綜して全容がつかめていない。見てくれ。」
シェレンドルフがハインツ達に手招きするとテーブルに置かれた地図を見せる。
シェレンドルフ「まず、今ここだ。ケント州とイースト・サセックスの州境の東側。」
シェレンドルフはまず現在地としてケント州とイースト・サセックス州の州境の東にある飛行場をさす。

シェレンドルフ「次に戦闘が発生してるのはドーバー近郊、それにカンタベリーの南でも起きてる。」
続いて戦闘が起きている場所としてカンタベリーの南とドーバーの近郊を指す。
地図上にはドーバーにそれなりの規模の部隊がいることが書かれていた。
シェレンドルフ「さらにアシュフォード近郊にブリタニア軍1個師団がある。
もしこれが南下した場合ドーバー師団は挟撃され、東進した場合カンタベリーで戦闘中の第113歩兵旅団が側面から圧迫される。
我々はこの後北上、アシュフォードの1個師団を牽制する予定だ。」
さらにシェレンドルフは現状最も危険な存在であるアシュフォードのブリタニア軍部隊を説明する。
もしこの部隊が東進、または南下した場合部隊が壊滅する可能性があった。
シェレンドルフ「今わかってる情報はこれだけだ。とにかく情報が錯綜している。
偵察によると基地の西側には戦線らしい物が一切ないという情報もあるし一部部隊が北上してロンドンを目指しているなんて情報まである。
控えめに言って無茶苦茶だ。」
ハインツ「はあ…」
シェレンドルフの説明にハインツ達は理解するだけで精一杯だった。
なにせいくら士官とはいえ陸戦は門外漢だった。
するとそこへ空軍所属らしき士官がやってきてシェレンドルフに報告する。
空軍士官「大佐、輸送機の準備完了しました。」
シェレンドルフ「うむ。ヴァレンシュタイン少佐、輸送機の用意が

できたようだ。」
それは輸送機の準備が完了したという報告だった。
それを聞いたハインツは車に戻り荷物を持つと空軍士官に連れられて司令部のあった隣の格納庫に駐機されていたC―47に乗り込みサウサンプトンへと夕焼けの空へと飛んで行った。

それから30分もしない間にC―47はサウサンプトンの飛行場に着陸した。
外はすっかり真っ暗になり下りた飛行場にはユニットを運んできたアブロ・ヨークやC―46、Ju―52などの輸送機や多数の高官用らしき乗用車であふれかえっていた。
到着した3人は迎えの将校に連れられ基地の管制塔らしき建物のある一室まで連れて行かれた。
連れてきた将校がドアをノックすると中から落ち着いた男の声がする。
それを聞いた将校はドアを開け中にいた将軍達に敬礼して報告する。
将校「ボック大将、マロリー中将、ディートル中将、シコルスキ少将、ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐以下3名を連れて来ました。」
ボック「うむ。下がってくれ。」
将校「は」
ボック大将と呼ばれた明らかにこの中で一番仕立てのいい軍服を着たカールスラント軍らしき将軍が将校を下がらせる。
部屋の中には彼の他に手に紅茶が入ったティーカップを持つブリタニア空軍の軍服を着てマロニーによく似た中将、タバコを加えながらハインツ達を見るブリタニア軍の軍服を着た少将、そして山岳帽を被り登山靴を履いた山岳兵科出身らしきカールスラント軍中将がいた。
将校が下がり変わってハインツ達が部屋に入り将軍達に敬礼する。

ハインツ「ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐以下3名、ただ今到着いたしました。」
ボック「うむよく来たハインツ・ヴァレンシュタイン〝ドイツ空軍少佐〟、アドルフ・ミラー〝ドイツ空軍少尉〟、アレクサンデル・ノヴァク〝自由ポーランド軍中尉〟」
その衝撃の言葉に3人は咄嗟に腰に下げた拳銃に手をかける。だがそれをブリタニア軍の軍服を着たシコルスキと呼ばれていた将軍とディートルと呼ばれた将軍がが止める。
シコルスキ「君たち、こんなところで殺し合いはいかんよ」
ディートル「ええ。もう人間同士の殺し合いはあの時だけで結構ですよ。少なくとも私は血に飢えてなどいませんから。」
それを聞いた3人は冷静になり拳銃から手を離す。
そしてハインツが聞く。
ハインツ「なぜ将軍は私たちの正体を…」
ボック「正体も何も同類だからな。我々もあの戦争で死んでこうなった。」
ノヴァク「え?」
ミラー「それじゃあ…」
シコルスキ「君らの同胞も大勢いるよ。まあ数は最高機密だから言えんが。
少なくとも第7軍団の多くは兵員は君らと同じ素性だ」
ハインツたちの驚きの声にシコルスキが補足する。
マロリー「まあ兎に角無事に来れてよかった。さてと本題に入ろう。
501はどうなってる?」
ミラー「と、言いますと?」
シコルスキ「マロニーはどのぐらいの兵力でどのぐらいの装備を持ちどこに兵士を配している?」
マロリーが聞いたのは501の情報だった。
ハインツ「それについては…正直言って分かりません。なにせ時間がなかったものですから」

ボック「そうか。ではあの基地に火砲類を持ち込めるかね？」
ミラー「火砲ですか…持ち込めないこともないと思います。
ただ基地には既にボフォースと８８ｍｍが設置されてます。」
ボックが気にしたのは火砲であった。
大砲は戦場の女神であるという言葉のように大砲は第２次世界大戦でも猛威を振るった。
死傷者の合計では大砲が圧倒的１位なことからあの戦争での大砲の役割がよくわかる。
ましてや８８ｍｍ高射砲はその中でも特に優秀な兵器である。ドイツの防空の一角を担い、対戦車戦闘では多くの戦車をスクラップにしてあるときには駆逐艦を２隻まとめて海底に送ったほどである。
ミラーの答えを聞いたボックは顎に手を当てて考える。
ボック「そうか。ふむ。君たち、あの基地の中の構造について詳しいかね？」
ノヴァク「ええまあ。」
ディートル「なら突入班を指揮してくれ。」
ノヴァクの返答にディートルは突入班を指揮するよう命令した。
この時点で既に書類上は第７軍団司令部付という立場であったためディートルは上官になった。
だがその命令に驚く。
ハインツ「え？小官らに陸戦を指揮しろと？」
ディートル「ああ。」
ミラー「ま、待ってください！我々は空軍軍人です！陸戦は門外漢です！」
その命令にミラーとハインツは反論する。ミラーは歩兵部隊指揮官の教育を齧る程度に受けているとはいえ陸戦、それも非常に危険な市街地戦など門外漢だった。
実際空軍軍人を陸戦に投入した空軍野戦師団はドイツ軍なのにイタリア軍より弱いことで知られている。
ディートル「君らも軍人ならわかるだろ？上官の命令は絶対だ。

いかに困難でも断行しなければならないことぐらい。」
ハインツ「いやしかし…」
ディートル「大丈夫だ。作戦を指揮するギルザ君には私から優秀な人員を当てるよう連絡しておく。
それと、ギルザ君の第５２歩兵師団は既に５０１に向けて進軍中だ。明日の午前中にも基地を包囲するらしいから今すぐ装備を纏めて輸送機で向かってもらう。いいね？」
ハインツ「え？輸送機でとんぼ返りですか？」
ディートル「まあそうなるな。だが軍隊ってものはこういうものじゃないか」
ディートルがハインツ達の不満を諫める。
軍隊、それ以上に組織というものでは稀に非常に困難な要求や不満のある指示がされることがある。
ハインツ達も長く軍隊という官僚主義の権化ともいえる組織にいる以上このぐらいのことは慣れっこであった。
ミラー「あの、一つ質問してもよろしいでしょうか？」
ボック「ん？なんだね？」
ここでミラーが質問をした。
ミラー「そのリーネたちは無事なんでしょうか？」
それは他のウィッチ達が無事かどうかだった。
ミラーにはリーネやほかのウィッチ達が心配で他ならなかった。
ボック「すまんがそれについてはよく分からない。多分ケーネン君なら分かると思うぞ。
おい副官。ケーネン君を呼んで来てくれ」
ボックは他のウィッチの詳細な動向については知らず部下に任せていたため部下のケーネン少佐を呼ぶよう外にいた副官に伝える。
それから数分してドアがノックされる。
ボック「誰かね？」
ケーネン「第５０１猟兵大隊大隊長フリードリヒ・フォン・ケーネン少佐であります。」
入って来たのは首から騎士鉄十字賞を下げ仕立てのいい軍服を着

た少佐だった。
ボック「うむ。すまんが彼らに５０１の他のウィッチについて説明してやってくれ。」
ケーネン「は。
ではヴァレンシュタイン少佐、ミラー少尉、ノヴァク中尉現在わかっている情報について説明します。」
ノヴァク「お、おい。なんで俺たちの名前を知ってる！」
ケーネンが説明しようとするがノヴァクがなぜ自分達の名前を知っているかと聞く。
それに対してケーネンはさも当然のように返す。
ケーネン「５０１には私の腹心の部下達が潜入しています。
貴方方の情報を手に入れることなど造作もないことですから。」
その答えにハインツたちは衝撃を受ける。
親しくしていた基地の人員の中にスパイがいる事になるからだ。
だがケーネンはそれを無視して話を続ける。
ケーネン「ウィッチ達は基本的にＵＴＣで今日の午後４時ごろに離れたことが確認されています。
少なくとも坂本・クロステルマン・宮藤の三名は混乱で特に行動を起こしていないアシュフォード経由でロンドン港に停泊中の赤城に乗船したことが確認されています。
その他のメンバーについてはリネットに関しては迎えを待っているようで基地に残留、ユーティライネン・リトヴャクの２名は近くの町の駅近くの徴用された兵舎でヴィルケ・バルクホルン・ハルトマンの３名と一緒にいるところが確認されています。
イェーガー・ルッキーニの両名に関しては基地近くの飛行場にいるようです。」
それを聞いてミラーが聞く。
ミラー「リーネを、救出できますか？」
ケーネン「５０１のウィッチは優先的回収目標とされています。
扶桑系を逃しましたがまだ獲物は沢山います。

予定では明日の朝までにロンドンに向かう全ての道路、鉄道を封鎖し検問を設置、全ての車両・列車を捜索し確保する予定です。
既にサウサンプトン方面と北西方面は既に封鎖中です。」
ケーネンの言葉にミラーはほっとする。
少なくとも優先的に救出される対象であるということだ。
この後打ち合わせと各種連絡のためハインツ達は別の部屋に移された。
その後一行はそこで陸戦用の装備を手に入れた後、輸送機に乗って第５２師団司令部へと向かった。
彼らがいなくなった部屋では将軍たちの密談が行われていた。
ボック「全く普通なら不審者扱いでこっちに突き出されるものをあの赤毛の狼のせいでこんな苦労をするとは」
ボックが吐き捨てるように愚痴る。それにマロリーも同意する。
マロリー「そうだな。ウィッチ部隊は良くも悪くも独自色が強いからな」
シコルスキ「思春期という最も多感な時期に戦争というこの世で最も刺激の強い世界に飛び込ませるのは軍人として以上に人の親としても辛いよ。
マロニーとはそれだけは分かり合えるのが皮肉だよ。
ただ彼女らがいなければ戦争は負けるというのも辛いもんだ。」
それを聞いたシコルスキが嘆くように話す。彼らも人の親であり子だった。
ディートル「この戦争を支えているのは我々を除けば僅かな数のウィッチだけっていうのは悲しいですね」
ボック「全くこんな下らん戦争モドキのゲームはさっさと終わらせたいものだ」
ボックとディートルが嘆くがそれにマロリーが続く。
マロリー「だが今の司令部では無理だ。
あんな楽観主義の権化みたいな連中にこの戦争が終わらせられるとは一ミリも思えん。

あいつらに戦争を任していたら１００年たっても終わらんよ」

シコルスキ「全くだ。あっちの連中も悪い部分はあったがそれでも真面目に戦争をしていた。

互いに互いの腹を読もうとしてあらゆる手段を擁して戦った。

あらゆる場面であらゆる可能性を検討しあらゆる危険を排除してきたがこっちの連中はあらゆる可能性を全く検討しない。

だから大陸から叩き落された事がまだわかってない。

戦争では常識なんて犬にでも食わせておくものだっていうのに。」

ディートル「もしこの戦争で最大の敗因はと聞かれたらあの頭でっかちの無能どもと即答しますよ。

我々が主導権を握らなければこの戦争は負けますよ。全く」

ボック「だからこそ例のチューブ・アロイズと魔力寿命延命剤の開発を急がねばな。」

シコルスキ「チューブ・アロイズがあればこの戦争を一年で終わらせられる。

魔力寿命延命剤があれば質のいいウィッチを用意して戦争に終わりが見える。

どちらかが開発できたら我々の勝利だ。」

彼らからすればこの世界の司令官達はその殆どが無能か辛うじて及第点が与えられる程度の能力しかなかった。

だからこそ戦争を終わらせるためには戦争の経験が豊富な彼らが必要であった。

第３２話：時として分かれたものはまたすぐに一つになることもある

翌朝、ケント州西部
ミーナたちは基地から離れある田舎のバス停にいた。
ミーナ「ふぅ、やっと監視もなくなったわ」
そういってミーナは使い魔の耳を戻す。
するとバルクホルンが呟く。
バルクホルン「このままカールスラントに戻って、祖国奪還のために戦った方がよかったかもな…」
ハルトマン「へ？」
その意外な言葉にハルトマンは聞き返す。
バルクホルン「ん、なんだ？」
ハルトマン「トゥルーデが戻ろうって言いだしたんじゃん」
バルクホルン「そ、それは宮藤に…借りがあるから」
ハルトマン「そうだね～、たっぷりとね」
ハルトマンがバルクホルンの答えを聞いて煽る。それにバルクホルンはしどろもどろになった。
バルクホルン「つ、つまりだ！あいつを失意のままに返してしまっていい物か！
カールスラント軍人がそのようなことで…」
ミーナ「はいはい、気持ちは十分よ。
それに、宮藤さんの言ってたことも気になってるの」
するとミーナが二人の会話を止め宮藤の話を出す。
ハルトマン「ネウロイと友達になるってやつ？」
ミーナ「いいえ、ウォーロックがネウロイと接触してたって話よ。
宮藤さんがあの話をした時のマロニ―大将の焦りは、何か秘密があるんじゃないかしら」
バルクホルン「報告義務違反があれば、こっちが攻めに回れる」
ミーナ「そういうこと。

問題はここからどうやって…」
ミーナは手を顎に当てて考える。
すでに基地からは２０キロ以上離れていた。歩いて帰れる距離ではない。
するとハルトマンが何かに気が付き声を出す。
ハルトマン「あ！」
それはトラックだった。
すぐにハルトマンはヒッチハイクしようとする。
ハルトマン「そこのトラックー！」
だがトラックはそれを無視して通り過ぎていく。
ハルトマン「こらー！このセクシーギャルを…」
すると今度はトラックの来た方からものすごい数のエンジン音と自動車や履帯の擦れる音が聞こえてきた。
すぐに全員がその方向を向く。
ミーナ「なにかしら？」
バルクホルン「陸軍か？」
ハルトマン「すごい数が来てるような…」
数分後、土煙を上げてやってきたのはオートバイ、乗用車、トラック、ハーフトラック、装甲車、装甲兵員輸送車、戦車、突撃砲、駆逐戦車、自走砲、牽引車、大砲、馬車の隊列だった。
それも種類も数もばらばらで軍用車両もあれば現地で徴用したらしい民間用のもの、ブリタニア軍のものもあればリベリオン軍のものも、カールスラント軍のもの、オラーシャ軍のものもあった。
そしてすべての車両にはカールスラント軍の軍服を着た兵士が鈴なりに乗っていた。
その兵士も古いＭ３６軍服を着た兵士もいれば質の悪いＭ４４を着た兵士、見慣れないえんどう豆パターンの迷彩服やヤッケを着た兵士、なぜかＰＰＳｈ４１を持っていたり、モシンナガンを持っていたりしていた。
その上一部は聞きなれない軍歌まで歌っていた。
そのほとんどの兵士がミーナたちに気が付くと笑顔で手を振る。

その光景にミーナたちは唖然とする。
バルクホルン「す、すごい…」
ミーナ「いったい何人いるのかしら…」
ハルトマン「うわぁ…」
３人はしばらく我を忘れてその光景を見ていたが誰かに声をかけられて気が付きその方向を見る。
そこには何故か空軍用の迷彩ヤッケを着て迷彩カバーをつけたヘルメットを被りＰＰＳｈ４１を持ったハインツと同じ格好をしてＭＰ４０を持ったミラー、空挺部隊用のデニソンスモックを着用してステンガンを持ち空挺部隊用ヘルメットを被ったノヴァクがシュタイヤー１５００に乗っていた。
ハインツ「中佐、なにカカシみたいに突っ立てたんですか？」
ミーナ「ハ、ハインツさん」
バルクホルン「アレックス！」
ノヴァク「トゥルーデ！無事でよかった」
そういうと後部座席にいたノヴァクは車から飛び降りてバルクホルンに抱き着く。
バルクホルン「く、苦しい…アレックス離れてくれ…きつい…」
ノヴァク「あ、すまん。無事だったからつい」
バルクホルンが苦しがっていることに気がついたノヴァクはすぐに話して謝る。
それにバルクホルンはため息をついてすぐに許す。
バルクホルン「まあ別に嫌では無かったからな。」
ハルトマン「そういえばさっき無事でよかったって言ったよね？何かあったの？」
ハルトマンがノヴァクの言ったことが気になり聞く。
それにハインツが返す。
ハインツ「は？ちょい待てや。何にも知らないのか？」
ミーナ「？ええ。
昨日一晩中ドーバーの方から砲声が聞こえて来て聞いたらドーバーの方で夜間演習だと聞かされた程度よ。」

バルクホルン「何かあったのか？」
その返答に一行は呆れる。
ハインツ「あーそのあれだ。話が長くなる上に複雑で今誰も正確な情報を掴んでいない話になるがいいか？」
ミーナ「ええお願いできるかしら？」
ハインツ「ざっくりは話せるが詳しくは将軍に聞いた方が早い。乗ってくれ将軍のところまで送る。」
そういうとハインツは3人を乗せて隊列の後ろの方に向かい星型アンテナをつけたダークイエローに3色迷彩が施されたｓｄｋｆｚ２５１／３（D型）に並走して大声で呼びかける。
ハインツ「少将！少しいいですか！」
それを聞いて通信を聞いていたカールスラント軍の軍服を着た少将が振り返る。
ギルザ「何かねヴァレンシュタイン君。」
振り返ったのは５０１の制圧を担当する第５２歩兵師団師団長アルブレヒト・フライヘア・フォン・ウント・ツー・ギルザ少将だった。
ハインツ「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐以下3名を連れてきました！
それと今の状況を教えてください！」
ギルザ「今の状況？参謀、どうなってる？」
ハインツの問いに装甲車に乗っていたギルザは隣で無線にかじりついていた参謀に聞く。
それに参謀は手で制止すると通信兵と2、3言会話すると振り返って報告する。
参謀「かなりいいです。約1時間前に第１１３旅団がカンタベリーのブリタニア軍を降伏させて第１１３旅団は旅団司令部と第３００バルチックライフル大隊からなる戦闘団をこちらに急行させてるようです。」
ギルザ「本当か？ブルクハウス君は本気だな。それ以外は？第２６旅団は？」
その報告を聞いてギルザは驚くがさらに特別編成師団ドーバーこ

と第２６水陸両用旅団（増強）の情報を聞く。
参謀「ドーバーは南西軍管区司令部のドーバー城を破壊したようですが砲兵火力を集中した結果ドーバー城のあった丘が更地になったようです。
現在は周辺地域で敗残兵狩りをやってるようです。」
ギルザ「更地はやりすぎなんじゃないか?何やったんだ」
参謀の報告にギルザは驚くを通り越して呆れる。南西軍管区司令部のあったドーバー城そのものが消えてしまったという事に一体何をやったんだという疑問が出てきた。
参謀「どうやらドーバー師団の全砲兵火力と抵抗したドーバー港在泊のブリタニア軍艦船、それに舟艇部隊の搭載火力を全部ぶつけたようです。
更地になった程度で済んだといった方がいいでしょう。下手すれば丘そのものが消えてた可能性があります。」
ギルザ「上陸作戦用のロケット弾の奴もか?」
参謀「多分。沖縄やイオージマの時の二の舞にしたくない兵士が大勢いたんでしょう。
持てる全火力を集中したんでしょう。」
第２６旅団の兵員が過剰とも言える火力、即ちドーバー港の仮装巡洋艦の１５センチ砲６門、旅団砲兵の５０門以上の榴弾砲・カノン砲・ロケット砲・迫撃砲・高射砲、歩兵大隊の重歩兵砲、上陸用舟艇搭載の備砲や高角砲、停泊中だったブリタニア海軍のスループやフリゲート・コルベット・トローラー・輸送船の火砲、上陸作戦支援用舟艇搭載ロケット砲などを集中した結果ドーバー城は弾薬庫などが誘爆して近くの高射砲陣地ごと大爆発して更地となった。
ギルザ「敗残兵狩りの方はどうだ?」
参謀「ドーバーではどうやら市街戦で一般市民の住居に逃げ込んだり私服に着替えて逃げようとした敵兵が大勢いたようです。
現在しらみつぶしで捜索中です。」
ギルザ「わかってると思うが私服姿で捕まえた奴は…」
参謀「分かってます。処刑しろですね。

一応現在ドーバーでは市長が反乱兵を匿った住居の住人は全員重罪に問われると言う布告を出させているようです。」

戦時国際法上私服など正規の軍服を着ていない兵士は便衣兵と呼ばれ捕虜として扱われず裁判によって裁かれ処刑されるのが普通である。

そのため彼らも私服姿の敵兵は即処刑していた。

ギルザ「市長にとは言っても実際はドーバー師団が銃を突きつけて出させたんだろ？」

参謀「ええ。実際匿った家の住人の何人かを視聴の前で殺すと脅して実際数名を処刑して出させたようです。」

ギルザ「後始末は大丈夫か？」

参謀「ええ。〝書類上は〟不幸にも戦闘に巻き込まれて死亡としてます。

他にも怪しい建物いくつかを住人の避難を確認せず吹き飛ばしてるようです。」

ギルザ「無駄に戦時国際法を遵守するだけの連中だと思ってたが評価を改める必要があるようだな。

敗残兵狩りはそのぐらいやっても良いだろう。」

彼らは敗残兵狩りを楽にするためドーバー市長を脅し、さらに協力者らしき民間人数名を処刑し民間人の避難を確認せず戦闘を行っていた。

彼らからすれば毎回毎回民間人の避難を確認するのは面倒極まりないため容赦なく民間人を巻き込むつもりでいた。

中には民間人を人間の盾に使っていた部隊もあった。

だがこの容赦なく民間人を巻き込みその上殺害することを厭わない戦い方に聞いていたミーナたちは衝撃を受けるがハインツ達からすればこれが普通であった。

それにバルクホルンは隣に座っているノヴァクに聞く。

バルクホルン「なあアレックス、おかしいと思わないか？軍隊は民間人を守るものじゃ…」

ギルザ「ははははは！君、そんな幻想を信じてるのかね？

軍隊とは国家を守るものであり戦争に民間人など存在しない。
存在するのは敵と味方と中立的存在の三つだけだ。
正直言ってネウロイの民間人を処理するあの戦い方も悪くないと思ってるよ。」
それを聞いたギルザが笑いながら否定する。
彼らからすれば戦時国際法は時として完全に無視していた。
それに民間人を守るために地獄の撤退戦を戦った3人は嫌悪感を抱いた。
ギルザ「そうそう。君たち、一応2時間後には501を包囲する予定だ。
その時作戦会議を行うからその時は頼むよ。」
ハインツ「そうですか。それでは。」
ギルザの最後の話が終わるとハインツはギルザに敬礼する。それにギルザが返礼するとギルザのｓｄｋｆｚ２５１／３から離れて隊列の前のほうに向かう。
それからしばらくすると基地が見え始めた。
ハルトマン「基地だ！」
ハインツ「やっと着いた…」
次の瞬間銃声が鳴り響く。
即座にハインツ達は伏せて銃を取り構える。
それは隊列の左側にあった廃墟からの銃撃だった。
バルクホルン「な、なんだ！」
ハインツ「銃撃だ！どっちからだ！」
ミラー「多分左の廃墟からです！」
即座に周囲にいた兵士たちは物陰に隠れると銃撃を開始した。
さらに随伴していた装甲車からも機関砲が放たれ銃火はあっという間に止んだ。
ハインツたちの隊列には被害はなかったが検分に向かった兵士たちは廃墟でミンチになった数体のブリタニア兵の死体を確認した。

同じ頃、サーニャとエイラは近くの鉄道駅から材木を運搬する貨物列車に乗り込みロンドンに向かっていた。
だが出発して10分ほどで列車は止まってしまった。
エイラ「なんだ?」
サーニャ「何かしら?」
二人は前の方を見る。すると数人のカールスラント軍の軍服を着て左腕に青・黒・白のシールドをつけた兵士が列車をくまなく検査していた。
兵士A「Ei ole k▪rvalekaldeid.」
兵士B「Keegi seal.」
兵士A「Kindlasti. あー身分証を見せてください。」
すると二人に気がついたスオムス語に近い言葉を話していた兵士が訛りのあるブリタニア語で話しかける。
二人とも武装しており片方はライフル、もう片方はドラムマガジンのサブマシンガンを持ち両方とも見慣れない迷彩服を着ていた。
エイラたちは顔を見合わせた後ポケットから身分証を取り出して渡す。
エイラ「はいよ。」
サーニャ「はい。何かあったんですか?」
兵士A「どうも。近くで事件がありましてね。ん?これは…」
兵士B「それで警備のため鉄道を封鎖してるんです。おい、これって…Leitnant! Palun tulge!」
二人の身分証を見た兵士たちはすぐに先頭の機関車のそばにいた中尉を呼ぶ。
呼ばれた中尉はすぐに兵士たちのところに向かい聞く。
中尉「Mis juhtus?」
兵士B「Palun vaata.」
中尉「Helistage brigaadi peakorterile kohe! leidsin sind!」
中尉がなにかを叫ぶと前の方にいた兵士たちが動き始めた。

そして中尉が比較的マシとはいえ訛りのあるブリタニア語で話しかける。
中尉「えー、ユーティライネン少尉、リトヴャク中尉。列車から降りて私について来てください。」
サーニャ「え？」
エイラ「何をするんだ？」
二人は怪しい空気を感じて警戒する。
中尉「大丈夫です。実は司令部が現在あなた方を探しているんです。
なのでこれから貴方方を連れて行くんです。Ｔｏｏｇｅａｕｔｏ！」
そう言うと部下らしき兵士がキューベルワーゲンを回してくる。
二人はそれに乗ると司令部へと向かった。

ほぼ同時刻。シャーリーとルッキーニは基地近くの飛行場にいた。
ルッキーニ「ロマーニャまで持つのかなあの飛行機？」
シャーリー「なに言ってんだよ…私はその後大西洋越えて戻るんだぞ…」
だが次の瞬間、基地の外から突如銃声が響く。
シャーリー「な、なんだ？」
ルッキーニ「ひゃ！」
咄嗟に二人は伏せる。
暫くするとｓｄｋｆｚ２５０／５やブリタニア軍の塗装の上から適当にダークイエローで迷彩が施されカールスラント軍のマーキングが施されたＡＥＣ装甲指揮車が多数のカールスラント兵と共に入って来た。
それにシャーリー達はただ呆然と見ていることしかできなかった。
兵士Ａ「Ｖａｉ　ｉｒ　ｋāｄｓ？」
兵士Ｂ「Ｐａｓｋａｔｉｅｓ．Ｉｒ　ｓｋａｉｓｔａ　ｓｉｅｖｉ

ｅｔｅ.」

兵士Ａ「Ｔｒｕｅ ｔａｓ ｉｒ. Ｋāｐēｃ ｔｕ ｅｓｉ šādā ｖｉｅｔā?」

兵士Ｂ「Ｄｚｉｒｄēｔ?」

兵士Ａ「Ｅｓ ｊａｕｔāｊｕ ｊｕｍｓ ｊａｕｔāｊｕｍｕ.」

すると聞きなれない言葉を話す二人の片方は見慣れないえんどう豆のような柄の迷彩服を着て見慣れない迷彩帽を被りｓｔｇ４４を持った、もう片方は見慣れない迷彩ヤッケを着て迷彩カバーがつけられたヘルメットを被りライフルを持ったカールスラント兵らしき人物が近づいてくる。

そして非常に強い訛りで話しかけてきた。

兵士Ａ「身分証明書を見せてください。えー二人分?」

身分証を見せるように言われたシャーリーは持っていたパスポートを渡す。

ルッキーニのほうもポッケから取り出し見せる。

兵士Ｂ「Ｋāｐēｃ ｊｕｍｓ ｉｒ ｂēｒｎｉ?」

兵士Ａ「Ｌūｄｚｕ ｎｅｐｒａｓｉ ｍａｎ. Ｋｏ? Ｐａｓｋａｔｉｅｓ.」

兵士Ｂ「Ｔａｓ ｉｒ…Ｏｂｅｒｓｔ! Ｒｅｇｉｍｅｎｔ Ｆ▪ｈｒｅｒ! Ｅｓ ｇａｂ!」

それを見た兵士は顔色を変えて装甲車のほうにカールスラント語で叫んだ。

それに装甲車に乗っていたそこら辺の役所にいるような冴えない風貌の少佐と彼と話し合っていた仕立てのいい軍服を着た大佐が向く。

大佐「Ｗａｓ?」

少佐「Ｇａｂ ｅｓ ｉｒｇｅｎｄｅｔｗａｓ?」

振り向いた大佐と少佐が大声で聞く。それに叫んだ兵士は走って彼らのもとに行き報告する。

兵士Ｂ「Ｅｓ ｇａｂ! Ｋａｐｉｔ▪ｎ Ｊａｅｇｅｒ ｕｎｄ Ｌｔ. Ｋａｐｉｔ▪ｎ Ｌｕｃｃｈｉｎｉ!」

少佐「ｖｅｒｓｔｅｈｅ．Ｂｒｉｎｇｔ．」
兵士Ｂ「Ｊａ！」
暫く話していると戻ってきて拙いブリタニア語で伝える。
兵士Ｂ「えー、少佐からあなた方を連れて行くように言われました。あーついてきてください。」
そう言われたシャーリーたちは兵士について装甲車のところまで行く。
兵士Ｂ「Ｏｂｅｒｓｔ，Ｍａｊｏｒ，ｉｃｈ ｈａｂｅ ｅｓ ｇｅｂｒａｃｈｔ．」
少佐「Ｊａ．」
一言少佐が返すと兵士は下がり敬礼して去っていった。
兵士が去ると装甲車に乗っていた少佐とそのそばで話し合っていた大佐が自己紹介する。
少佐「いろいろと済まないなミスイェーガー。
私は第１１３歩兵旅団第３００バルチックライフル大隊大隊長パウル・マイトラ少佐だ。で、」
大佐「私が第１１３歩兵旅団旅団長カール・フォン・ピュックラー＝ブルクハウス大佐だ。」
それにシャーリーも続く。
シャーリー「シャーロット・Ｅ・イェーガー大尉です。で、」
ルッキーニ「フ、フランチェスカ・ルッキーニ。シャーリー怖いよ」
二人も自己紹介するが周りには銃で完全武装して殺気立っていた兵士が多数いてルッキーニは怯えシャーリーも内心怖がっていた。
ブルクハウス「まあ御嬢さん方、安心しなさい。別に私たちは悪い連中じゃないから。」
ブルクハウスが紳士的な態度で優しく二人に話しかける。
マイトラ「まあいい人でもないですけど。
それよりどうします？さっき第２中隊から銀狐と黒猫の確保に成功したって連絡が来ました。
５２師団司令部も狼と犬たちの確保に成功したようですから…」

ブルクハウス「第２６旅団はドーバーを封鎖しているんだろ？
とりあえず我々も向かおう。
イェーガー大尉、ルッキーニ少尉、一緒についてきてもらう。いいね？
大丈夫だ悪いようにはせんよ。君たちの同僚も確保されたみたいだからな」
マイトラが補足すると無線で来た部下の報告と第５２師団司令部からの連絡を上官であるブルクハウスに伝える。
それにブルクハウスはシャーリーたちについてくるよう命令する。
それにシャーリーたちはただ従うしかなかった。

アシュフォードはケント州中部にある街である。
この街はちょうどロンドンとドーバーを繋ぐ鉄道・道路などが通る交通の要所であった。
そのためここにはブリタニア軍が一個師団を配していた。だがこの反乱では情報の錯綜により結局動くこともなく南から進出して来た戦闘団５２、戦闘団シェレンドルフ、戦闘団カーライルによって武装解除されていた。
この三個戦闘団はブリタニア軍一個師団を武装解除する傍ら反乱兵の逮捕等を名目にアシュフォード近郊で検問を敷いていた。
その検問の一つ、戦闘団カーライル所属第１１８空挺連隊司令部が敷いた検問に一台のロールスロイスが引っかかった。
兵士Ａ「すいません。身分証をお願いします。」
迷彩スモックと赤いベレー帽を被りステンガンＭｋⅤを持った兵士がロールスロイスの運転手と添乗者に身分証を求める。
すると運転手と後部座席に乗ったブロンドの少女が身分証を渡す。
兵士はそれを受け取り確認すると叫んだ。
兵士Ａ「カーライル少佐！いました！リネット・ビショップ軍曹です！」
カーライル「本当か！すぐに無線で連絡しろマーケットは司教を確保した。」

すると叫んだ方にあったテントのそばで紅茶を飲んでいたコウモリ傘を持った赤いベレー帽を被った将校が返し無線コードを送信するよう命令する。

その兵士の声に後部座席に乗っていたリーネは驚き困惑する。

兵士Ａ「ビショップ軍曹、今じつは５０１のウィッチを捜索中でして、ご同行願いますか？」

リーネ「は、はい…」

兵士Ａ「あ、別に車に乗ったままで結構ですよ。護衛と先導車両をつけるだけですし」

そういって暫くすると空挺部隊の兵士がロールスロイスの屋根やボンネット、助手席に乗り空挺部隊モデルのジープ数台の先導で５０１基地のほうへと向かった。

５０１の周辺地域の抵抗を排除した戦闘団ギルザは５０１を包囲する形で展開、海岸沿いには戦車や砲兵が展開し数少ない工兵ボートを工兵が準備し基地のたもとの橋には歩兵部隊が即席の陣地を作り封鎖していた。

その陣地の後ろに作られた指揮所ではギルザが作戦会議のためハインツやミーナとともにいた。

ギルザは参謀に状況を聞く。

ギルザ「で、どんな感じだ？」

参謀「は、第１１３旅団がイエーガー大尉、リトヴャク中尉、ユーティライネン少尉、ルッキーニ少尉を、第１８空挺師団第１１８空挺連隊司令部がビショップ軍曹を先ほど確保したようです。」

参謀の返答に少し考えるとさらに聞く。

ギルザ「うむ。連れてくるのにどれぐらいかかる？」

参謀「ブルクハウス大佐によりますと現在指揮車両に乗り込んで急行中だそうです。

第３００バルチックライフル大隊もそろそろ先遣部隊が到着するそうです。」

ギルザ「そうか。というか言ってるそばから来たみたいだな。」
すると外からエンジン音や履帯の音、兵士たちの歌声が聞こえてきた。
暫くするとテントの前にｓｄｋｆｚ２５０／５と適当にマーキングされたＡＥＣ装甲指揮車が到着し中からシャーリーとルッキーニ、そして冴えない中年公務員みたいな士官と仕立てのいい軍服を着た大佐が降りてきた。
ギルザ「来たか。ピュックラー＝ブルクハウス大佐。紹介しよう、第１１３歩兵旅団長のピュックラー＝ブルクハウス大佐と…誰だっけ？」
降りてきた大佐、ピュックラー＝ブルクハウス大佐をギルザは紹介するがもう一人の冴えない中年少佐の名前を忘れてしまった。
それにいつものように少佐は返す。
マイトラ「マイトラです。第３００バルチックライフル大隊大隊長パウル・マイトラ少佐です。」
ギルザ「そうだったな。すまんなこの歳になると忘れやすくて。」
マイトラ「別に構いませんよ。で、そちらの妙齢のレディーは？」
自己紹介が終わるとマイトラはミーナたちのことを聞く。
ギルザ「ああ。M．ヴィルケ君とG．バルクホルン君、E．ハルトマン君、H．ヴァレンシュタイン君とA．ミラー君、A．ノヴァク君だ。」
ブルクハウス「そうか。よろしく頼むよ。ところで…」
ブルクハウスはハインツ達の名前を聞くと少し間をおいてハインツに聞いた。
ブルクハウス「もしかして君の父親はハンス・エアハルト・ヴァレンシュタイン大佐か？」
ハインツ「え、ええ。父を知っているんですか？」
ブルクハウス「やっぱりか。君がハインツ・エアハルト・ヴァレンシュタイン君か。」
その言葉にハインツとミラーが驚く。
ハインツ「え？なんでミドルネーム知ってるんですか？」

ミラー「というか少佐のミドルネームエアハルトだったんですか？」

ハインツ「まあな。ほら、イニシャルにするとH．E．ヴァレンシュタインで親父と被るんだよ。」

ミラー「そうなんですか。」

ハインツの本名はハインツ・エアハルト・ヴァレンシュタインだったのだがイニシャルにすると父親と被るため普段はハインツ・ヴァレンシュタインで通していた。

そのことを知らないミラーは驚く。

ハインツ「ところで大佐は父の事を知っているんですか？」

ブルクハウス「ああ。君の父はトゥーサン大将の幕僚だったからな。」

ハインツ「え？トゥーサン大将はベーメン・メーレン保護領国防軍総監ですよね？

父は確かブラチスラバの在ドイツ大使館付き武官だったはずですが…それに階級も中佐だったはず…」

ブルクハウス「君の父親はスロバキア蜂起での西部スロバキア軍の武装解除の功績で大佐に出世、トゥーサン大将の幕僚になったんだ。

プラハでは君の父親がチェコ語とスロバキア語ができて旧チェコスロバキア軍士官に伝手があったお陰で多くのドイツ人を避難させられた。

君の父の功績は素晴らしいよ。」

ブルクハウスはハインツの父の事を讃える。

それにハインツは何やら照れくさそうな仕草を見せる。

ハインツ「いやあ照れますな。親父のことを褒められるなんて。」

シャーリー「珍しいなハインツが照れるなんて。」

するとブルクハウスの後ろからシャーリーとルッキーニが現れた。

ハインツ「シャ、シャーリー!?いたのか！」

シャーリー「ずっといたんだけど…」

ハインツ「そうだったんだ…ごめん、気が付かなかった。」

ハインツはずっとブルクハウスの後ろにシャーリーがいるのに全

く気が付いていなかった。
それにシャーリーは呆れるが丁度その時、外から車の音がした。
その音に全員が外を見る。そこにはフェンダーに青・黒・白で塗り分けられたシールドが描かれたキューベルワーゲンがあった。
キューベルワーゲンにはフェンダーに描かれたものと同じシールドをつけた数名の兵士とサーニャとエイラが乗っていた。
マイトラ「ああ、大佐。私の部下ですね。」
ブルクハウス「ご苦労だった。」
ハインツ「なああのシールドの色ってエストニア国旗だよな?」
ミラー「ええ。なんでそんなマークが?」
キューベルワーゲンを迎え入れるブルクハウスとマイトラの横でハインツとミラーはエストニア国旗と同じ柄のマークを訝しんだ。
ハインツ「まさかと思うがエステンか?」
ふとハインツはこの兵士がエステン、エストニア野郎だと漏らすがそれに即座にマイトラとブルクハウスが突っ込む。
マイトラ「ほお、それは我々に対する侮辱ですかな?」
ブルクハウス「君、エステンなんて言ってはいかんよ。
彼らは優秀だ。それこそ普通のドイツ人部隊なんかよりもね。
次言ったら多分君は東部戦線送りだ。」
非常に珍しいことに史実ではエストニア義勇兵はドイツ軍内はおろか敵であったチェコパルチザンにさえ一目置かれる非常に優秀な兵士たちであった。
実際エストニア人師団にいたあるSS士官が同僚のエストニア人士官をエステン、エストニア野郎と言った結果ウクライナ人義勇兵部隊に飛ばされたりエストニアの豚野郎と放言した士官に至っては降格の上ロシア人師団に飛ばされていた。
ハインツ「おっと、これは失礼しました。」
ブルクハウス「ならいい。で、どうするかね?こちらの用は済んだ。」
マイトラ「なら帰るとしますか。それでは失礼します。」

そういうと二人はエイラとサーニャを下ろしたキューベルワーゲンと共に帰っていった。

第３３話：反逆者の末路

マロニー「クソ！あの野郎ども！」
トレヴァー・マロニーは５０１基地に作られた司令部でテーブルを叩き大声で喚き散らしていた。
自らの行動により玉突き事故的に反逆者扱いされ、その上彼をコケにした軍使まで寄越してきたからだ。

――――――――――

３０分ほど前、基地と本土をつなぐ唯一の橋に本土側から白旗を持った一人の兵士がやって来るのに反乱兵は気がついた。
反乱兵Ａ「小隊長、何でしょうか？」
小隊長「分からん。でも何かが起きるぞ。大将を呼んでこい。」
しばらくするとマロニーとその副官がやってきた。
マロニー「なんだ？」
小隊長「あれ、見てください。」
そう言って兵士の方を指差す。
そうしている間にも兵士は少しずつ基地に近づき基地の封鎖陣地から２０メートルほど離れたところまで来ると叫んだ。
軍使「私はギルザ少将から派遣された軍使です！そちらの指揮官はいるか！」
マロニー「何の用だ！」
それにマロニーは陣地から立ち上がって返す。
それに周りの兵士は危険だと思い遮蔽物の陰に入れようとするが彼は拒否する。
軍使「少将からの伝言です！基地は完全に包囲した！他の部隊も全て降伏した！ただちに降伏せよ！
繰り返す！血を見たくなければ降伏せよ！」
マロニー「残念だがうちにはあんたら全員を入れる収容所が無い！降伏はしない！」
軍使の降伏勧告にマロニーはジョークで返して追い返す。

軍使「ならば全員反逆者として死ぬか家に帰ってママのベットで泣いてろだそうです！ではこれで。」
そう言うと軍使は帰っていった。
最後の返答にマロニーは怒りを露わにした。
そして司令部に戻ると喚き散らし始めたのだ。
彼が冷静になったのはそれから１０分ほど経った後だった。
急に冷静になった彼に副官が近づく。すると副官に聞いた。
マロニー「ウォーロックの出撃準備はどうなってる？」
副官「は？」
その問いに副官は固まった。降伏するかと思いきやウォーロックのことを聞いて来たからだ。
マロニー「どうなってるんだ!?」
副官「は！なんとか1時間後には再出撃可能かと思います。」
マロニー「よし、ならば準備完了後直ちに出撃させろ。ガリアの巣を破壊するんだ。」

同じ頃本土に置かれた戦闘団ギルザの司令部では軍使がギルザや戦闘団の各部隊長に結果を報告していた。
軍使「ということでして拒否されました。」
ギルザ「そうか。では実力行使といこう。３時間後、１３００時をもって総攻撃を行う。
砲撃開始は１３００、終了は１３１５、突入が１３２０だ。
終了予定は１５００から１７００。
各部隊は所定の位置にて待機。」
軍使の報告が終わるとギルザは即座に全部隊に作戦を指示する。
ハインツ「やるんですか将軍？」
ギルザ「ああ。叩き潰してやる。国家へ反逆した報いだ。
反逆者らしく惨たらしい最期を遂げさせてやる。」
ハインツの問いにギルザは相変わらず過激な言葉で返す。
ギルザ「さてと、それより先に所定の作戦を再度確認する。

まず、戦車と砲兵の直接射撃で敵陣地を破壊する。」

ギルザは続いて作戦に関する打ち合わせを始めた。

まず戦車部隊と砲兵部隊の直接照準射撃により陣地を破壊する。

本来なら間接照準による一斉砲撃により基地ごと吹き飛ばすが今回はマロニーやその一派の書類を確保するという目的もあったためこのような手段に出るしかなかった。

ギルザ「続けて両翼より工兵突撃ボートと水陸両用車に搭乗した突撃班と正面より戦車部隊に支援させた突入部隊を突撃させる。

その際砲兵部隊は火力支援を行う。

また同時に潜入工作班により基地内の発電機室、予備発電室、機械室、配電室、ボイラー室を爆破する。」

砲兵による事前射撃により敵陣血を無力化すると続いて歩兵部隊が突入する。

その際戦車部隊に支援させるほか両翼から工兵突撃ボートに乗せた部隊を投入させる。

さらに同時かそれより少し前に基地内の電気系を全て爆破し喪失させる。

ある意味では力押しとも言える作戦だったが彼らからすればとにかくいつネウロイがまた来るか分からない以上、とにかく早めに処理するのが一番だった。

ギルザ「で、だ。ヴァレンシュタイン君、基地の詳しい構造を知ってる君に聞きたいんだが弾薬庫、格納庫、発電室、予備発電室、機械室、配電室、ボイラー室はどこにあるんだ?

工作員の誤射や火薬庫爆破による大惨事や二次災害はできる限り避けたい。

可能な限り基地の最低限の運用システムへのダメージを減らしたいんだ。」

ギルザは戦闘終了後最低限の補修で基地を復旧させたいため基地機能に大損害を与える部分や工作員への誤射を避けるため弾薬庫などの場所を知りたかった。

ハインツ「えっと、確かここととここに弾薬庫、それに確かここに砲

兵用のがあった。」
まずハインツは3箇所の弾薬庫の場所を指差して説明する。
ハインツ「で、基地のこの辺りにボイラー室と配電室、発電室が、こっちに予備発電室と変圧室がある。」
さらに基地の二箇所を示して発電室などを説明する。
ギルザ「ふむ。その辺りには出来る限る当てないようにしよう。
ボルカース君、できるか?」
ボルカース「難しいですが出来る限りはやってみましょう。
少なくともボイラー室などは地下にあるのである程度は無視できますがむき出しの弾薬庫と格納庫は別ですね。」
ギルザの問いに砲兵部隊指揮官であるボルカース中佐は答える。
彼の答えは難しいが出来る限りはやってみるだった。
ギルザ「そうか。では解散。ウィッチーズの諸君はここにいてくれ。」
ミーナ「どうしてですか?あの基地のことは私たちが一番よくわかっているはずですが?」
ギルザの言葉にミーナが聞く。
ギルザ「なんでか?簡単だ。君達のようなお嬢様を戦争に投入させてたまるか!
あんたらが今まで戦っていたようなあんな生き物擬きとの戦争なんかじゃない!
敵も味方も全部人だ!あんたらに人を殺せるか?あんなデカブツのMG42だかを室内でぶん回す気か?
無理だな。あんたらのような花よ蝶よと育てられたお嬢様如きができるか?
女なんてもんは戦争に来ちゃいかん。家に帰って家事でもやってろ!」
その過激な答えとその威圧感にミーナはおろかほかのウィッチーズは全員黙ってしまった。

それから約一時間半後、基地の沖合に扶桑海軍の空母赤城とその護

衛艦艇が現れた。
ギルザにはこれはある意味吉報であった。
彼らはたしかに赤城が出航したと言う報告は聞いていたがその航路がまさか基地の沖合を通過するとは聞いていたなかったからである。
そのため彼はすぐにこの艦隊に連絡を取り駆逐艦や空母の火砲と航空機による援護を要請した。
だが、それと同じ頃、基地の左翼側の砲兵陣地で基地を観測していた兵士が何かに気がついた。
観測兵Ａ「ん?なんだありゃあ?」
観測兵Ｂ「どうした?」
観測兵Ａ「未確認のなにかが出されて何かやってるぞ?」
観測兵Ｂ「え、ちょっと見せろ、本当だ。急いで司令部に連絡しろ!」
すぐにこの観測所の報告は野戦電話で司令部に伝えられた。
参謀「え?未確認の物体?見た目は?うん、なにやら機首が尖ってる、飛行機みたいだがプロペラを確認できない、白色。」
ミーナ「それは恐らくウォーロックよ。」
参謀と観測所の報告を聞いていたミーナが漏らす。
ギルザ「ウォーロック?あのよく分からん連中の新兵器か?
ならだいぶマズイぞ!砲兵隊に連絡!滑走路と駐機場を砲撃して飛ばすのを阻止しろ!
作戦変更!３０分後に総攻撃を行う!特殊信号弾を打ち上げろ!」
ウォーロックは航空機であるため航空支援がなく対空兵器が随伴している高射砲部隊か手持ちの小火器程度しかないこの部隊にとって航空攻撃は悪夢そのものだった。
なので即座に離陸を阻止し地上で破壊するように砲兵部隊に指示を出し作戦変更の合図として開始３０分前に打ち上げ予定だった特殊発光信号弾が打ち上げられ空に緑色の筋を残した。

工作員「少佐、どうやら作戦変更のようです。」
少佐「わかった。急いで向かうぞ。」
それを見た基地内にいたブリタニア軍の軍服を着てサプレッサー付きステンガンと軍用爆薬を持った工作員たちは少佐と呼ばれた男に率いられ作戦を開始した。

ボルカース「わかりました。では。
射撃用意！目標基地の駐機場および滑走路！急げ！」
ギルザからの緊急指令を受けたボルカースは直ちに指揮下の３個砲兵大隊と高射砲部隊に行動を起こさせた。
連絡を受けた砲兵部隊や戦車部隊は慌てて照準を整え砲撃を開始した。
砲兵指揮官「目標グリッドロメオ２、エイブル３。距離５３００ｍ。弾種榴弾！」
砲兵Ａ「ロメオ２！エイブル３！距離５３００！」
連絡を受けた砲兵隊の隊長の号令に砲兵たちは手慣れた手つきで装薬や弾薬を用意する。
砲兵Ｂ「装薬準備完了！」
砲兵Ｃ「砲弾装填！」
榴弾と装薬をラマーで押し込んだ砲兵が報告する。
砲兵Ｂ「装薬装填！尾栓閉鎖。射撃準備完了！」
砲兵指揮官「撃ち方始め！」
尾栓を閉鎖し照準を完了したことを報告されると砲撃を開始する。
砲兵３個大隊のｌｅＦＨ　１８／４０１５門、ヴェスペ１５両、フンメル１５両に戦車部隊の二十数台の戦車、歩兵連隊に装備されたＳＩＧ３３４門、ネーベルヴェルファー数基、重装備中隊の重迫撃砲小隊に配備された１２　ｃｍ　ＧｒＷ　４２又は１２　ｃｍ　Ｇｒａｎａｔｗｅｒｆｅｒ　３７８（ｒ）、重装備中隊や戦車猟兵中隊に配備されたＰａｋ４０・７．６２　ｃｍ　ＰａＫ　３６（ｒ）・７．６２　ｃｍ　ＰａＫ　３９（ｒ）・８．８　ｃｍ　ＰａＫ　４３・８．８

ｃｍ　ＰａＫ　４３／４１、高射砲部隊の８・８　ｃｍ　ＦｌａＫ１８／３６／３７などが砲撃を試みる。
圧倒的とも言えるその火力だが碌な観測もされず滑走路との位置関係上基地の建物越しの射撃となるため砲撃できたのは精度と射程にに難のある重迫撃砲と陣地の両翼の先端部のみで全ての火砲を集めても８門程度しかなかった。
そのため不正確でまばらな砲撃というあまり効果的でないものしかできなかった。

司令部近くの道路では数台の空挺部隊用ジープと空挺兵が鈴なりに乗ったロールスロイスが走っていた。
そのロールスロイスにはリーネが乗っていた。
彼らはジープに乗った一人の空挺兵がフルートでブランデンブルク協奏曲第６番変ロ長調第３楽章を吹いたりしながら戦時であるにもかかわらずどこかのどかな空気を出しながら戦闘団ギルザの司令部に向かっていた、だが突如空に緑色の特殊発光弾が見え、さらに砲撃音が聞こえ始めると空気が一変した。
空挺兵たちはすぐに手持ちのステンガンやブレン、リーエンフィールドを構えると全車最高速で向かい始めた。

その頃砲撃を受けていた基地内では
マロニー「クソ！砲撃か！」
士官「大将、降伏しましょう！」
マロニー「なにを言ってるんだ！ここで降伏すればすべてが水の泡だ！
おい、高射砲部隊に敵陣地を砲撃させろ！」
砲撃を受けたことに動揺する中マロニーは降伏を具申する部下を叱り飛ばすと基地の高射砲部隊に命じて砲撃を指示した。
その連絡を受けた高射砲部隊は即座に反撃を行い砲撃を開始した。

反撃は基地の右翼に展開していた８８ｍｍ高射砲中隊に浴びせられた。

砲兵Ａ「伏せろーー！」

砲兵Ｂ「うぁあああああ！」

砲兵Ｃ「クソ！砲がやられた！」

それほど正確ではなかったがそれでも特徴的な甲高い音とともに放たれるアハト・アハトの砲撃に被弾したり至近弾で兵士が吹き飛んだり弾薬が誘爆する、砲そのものが故障などの被害が次々と出てきた。

高射砲指揮官「目標変更！あの高射砲陣地をぶっ飛ばせ！」

すると高射砲部隊は目標を基地の滑走路から砲撃をしてきた基地の高射砲に変更し撃ち始めた。

これは命令違反だったがすでに高射砲中隊の１２門の高射砲のうち１／３にあたる４門が撃破されるか損傷を受けていた。

軍隊では「戦闘可能戦力の４０％」が戦闘不能に陥った状態が全滅と一般に定義される。そのため壊滅を避けるため目標を変更した。

そして高い練度を持つ高射砲中隊は非常に正確な砲撃を浴びせ始めた。

さらにこの目標変更を見た隣接していた対戦車砲中隊と高射機関砲中隊、さらに榴弾砲や歩兵連隊の重歩兵砲、各種軽歩兵砲なども砲撃を開始、気が付けば右翼の砲兵戦力の半分が高射砲を攻撃し始めた。

この独断の目標変更の結果ウォーロックは離陸しガリアに向かったが戦闘団ギルザにはそれどころではなかった。

この突発的砲撃戦により突入が開始された。

ギルザ「たく高射砲部隊が独断で攻撃目標を変更するとは…

仕方ないが突入しろ。３０分でかたをつけてやる。」

この報告にギルザは苦虫を潰したような顔をしていた。

だが彼は戦闘経験が豊富であるため戦争なんてものが予定通り進むようなものではないと熟知していたためこれ以上はあらだてるつ

もりは無かった。
　するとそこへ外から数台の車の走行音が聞こえると司令部にレッドベレーを被った空挺兵が転がり込んで来た。
　空挺兵「ギルザ少将!リネット・ビショップ軍曹を連れて来ました!」
　ギルザ「そうか!やったな!」
　ミーナ「リーネさん!」
　リーネ「ミーナ中佐!あの、ミラーさんは?」
　空挺兵が息を切らしながら報告しているとリーネが走りこんで来た。
　そしてミーナやほかのウィッチーズを見つけるとミラーのことを聞いた。
　ミーナ「ミラーさんは…」
　ギルザ「ミラー君か?今正面陣地にいるはずだ。今からちょうど電話をかけるところだったから使う…
　　あら、出て行っちゃった…」
　ミラーのことを聞かれ作戦変更のため正面突入部隊を率いるハインツに電話しようとしたギルザだったがリーネはミラーがいるところを聞いてすぐに飛び出していった。

　そころ基地正面の橋のたもとではハインツたちが率いる突入部隊が作戦準備中だった。
　兵士たちは橋の両側に即席の陣地を作り機関銃を橋の欄干に据え付けさらに橋の両側にはパンター戦車A型の後期型が2両、別のところにはマズルブレーキ付きの10．5㎝突撃榴弾砲42とザウコップ防循にシュルツェンをつけたⅢ号突撃砲G型が配置され監視していた。
　ハインツたちは橋の右側に配置されたパンターの後ろに野戦電話と無線機を据え付けた簡素な拠点を作り他の兵士たちと打ち合わせをした後昼食として配給されたパンとグラシュを食べていた。

すると野戦電話が鳴りそれをハインツが取る。
ハインツ「はい、正面突入部隊。あ、将軍！何でしょうか？」
ギルザ『ハインツ君、作戦変更だ１０分後の１２００に突入する。急いでくれ。』
ハインツ「了解しました。では失礼します。
さてと、悪いニュースだ。作戦変更、１０分後に突入だとよ。」
ギルザからの電話にハインツはその内容をそのまま伝える。
それに兵士たちはすぐに食事をほっぽり出して装備を整えて配置に着く。
それはハインツたちも同じで即座にハインツはＰＰｓｈを用意してパンターのエンジンデッキに上がり砲塔越しに敵陣地を監視し、ミラーはその下でＭＰ４０を構え橋の右側の欄干に隠れ待機し、ノヴァクも同じく左側でステンガンを持って待機した。
ハインツ「敵陣には…ヴィッカースにブレンに6ポンドか。おい、あれやれるか？」
車長「簡単だな。今からやるか？」
ハインツ「別にやらなくていい。合図で榴弾とスモークをぶち込め。」
車長「分かってる。」
ハインツはパンターの車長と打ち合わせしていると後ろから足音がし振り返る。
そこにはリーネが息を切らして走ってきた。
それにミラーは驚いて声を出す。
ミラー「リーネ！」
ハインツ「なんでリーネがいるんだん!?不味い！伏せろ！」
ハインツが振り返り叫ぶ。リーネは丁度敵の機関銃の射線上にいた。
次の瞬間、敵のヴィッカース重機関銃が火を噴いた。
リーネは驚き伏せる。
ハインツ「作戦変更だ！榴弾をぶち込め！」

車長「了解！弾種榴弾装填！機関銃を吹き飛ばせ！」
ミラー「野郎！おい、援護しろ！」
兵士Ａ「あいよ。」
それを見たミラーは隣にいたライフルを持った兵士に援護させ遮蔽物を飛び出す。
さらにハインツはパンターに火力支援をさせる。
橋の欄干に据え付けられたＭＧ４２や遮蔽物の陰の兵士のライフルが一斉に発砲、さらに2台のパンターが榴弾と白燐弾を撃ち込む。
榴弾と白燐弾の直撃を受けた陣地では兵士が吹き飛ばされたり白燐が当たり兵士がもだえ苦しんでいた。
さらにそこに機関銃の銃撃も加わる。
ミラーは右手でＭＰ４０を乱射しながらリーネのもとに走り寄る。
ミラー「リーネ！何やってるんだ！行くぞ！」
リーネ「ミ、ミラーさん…」
そういうと強引に服の襟を掴み遮蔽物まで引きずる。
引きずり込むとミラーはリーネを叱りつけた。
ミラー「リーネ！何やってるんだ！死ぬ気か？」
リーネ「ミラーさん…」
ミラー「ここは戦場だ！それもリーネの知ってるような物じゃない！
今すぐ戻れ！これは命令だ！」
そう言ってミラーはリーネを怒鳴りつける。
今までに見たことのないほどの怒り具合にリーネは驚き萎縮する。
するとそこへＰＰｓｈ４１を持ち白兵戦章をつけ軍服を着崩した歩兵部隊の古参軍曹シュタイナーがやって来た。
シュタイナー「あんたらここは戦場だぞ。宮殿じゃない。
ロマンチックな事やってる暇なんてねえぞ。あと、作戦変更だ。１２時丁度に攻撃する。」
ミラー「分かりましたシュタイナー軍曹。リーネ、とにかくここは危険だから下がってろ。」
そういってリーネを置いてミラーはハインツのもとに向かった。

リーネはただその場にへたり込みミラーの向かった方を見ていた。
ミラー「で、どうするんですか？」
ハインツ「決まってるだろ。やるぞ。突撃砲を前に出せ。
パンターは橋が持たないから火力支援だ。」
ミラーはパンターからⅢ号突撃砲のエンジンデッキ上に移ったハインツに聞く。
それにハインツは橋の耐荷重量では４５トンもするパンターでは橋を壊してしまうためその半分程度の重さのⅢ号突撃砲に直接火力支援と盾として前進させた。
それにミラーとノヴァクも続く。
先頭の突撃砲にはハインツが乗り込み突撃砲の車長とともに敵陣に煙がかかる中をゆっくりと進んでいった。
ミラーは先頭の突撃砲の後ろにつきＭＰ４０を構え、ノヴァクはさらにその後ろの１０．５㎝突撃榴弾砲４２の後ろに続いていた。
その周りではライフルに銃剣をつけたり重機関銃を油断なく構えたり短機関銃や突撃銃を持ちシャベルや手榴弾を持った兵士がゆっくりと前進していた。
煙の中をしばらく進むと破壊された敵の陣地に到達、そこは滅茶苦茶に破壊され焼けた死体や死体らしきものがそこら中に転がり壊れた機関銃や対戦車砲、車などが放置されていた。
兵士たちは死体を一つずつ銃剣で刺して生死を確認したり息がある物にはとどめを刺していた。
ハインツ達はさらに前進する。
すると
〈バン！バン！バン！〉
〈キーン！〉
ハインツ「なんだ！」
車長「対戦車砲だ！」
突如銃撃と砲撃を受ける。
基地の出入口の手前に敵は車などを使いバリケードを作りそこに予備兵器として死蔵されていたはずの２ポンド砲を据え付けていた。

だがドアノッカーとして名高いこの砲では８０ｍｍもある突撃砲の装甲は抜けず即座に突撃砲と突撃榴弾砲の砲撃により陣地ごと吹き飛ばされた。

この陣地を吹き飛ばすとハインツ達は突撃砲から降り突撃する。

榴弾の煙が晴れるとそこには何人かの敵兵が両手を上げて立っていた。

ハインツ「ん？降伏するのか？」

敵兵「ああ。降伏する。」

ハインツが少しずつ近づき聞くと敵兵はそう言った。

負傷したりした敵兵たちを衛生兵と後続部隊に任せハインツ達はそのままなだれ込む。

するとそれを見た敵兵たちが次から次へと湧いてきたかのように出てきて降伏していく。

ハインツはそれを捌きながら基地内部への出入口を目指す。

すると突如基地内部から大爆発が起こり基地の電気系がすべてダウンした。

ハインツ「なんだ？」

ノヴァク「多分少将が言っていた基地内部の工作員だ。」

ミラー「ならありがたいです。行きましょう。混乱している今のうちです。」

そういうとそれぞれ短機関銃と突撃銃で武装し手榴弾とシャベルなどを持った選りすぐりのベテラン兵――その多くがスターリングラードやベルリンを経験した猛者――を連れて突入する。

ハインツ達は内部に入ると3手に分かれた。

ミラーは格納庫と弾薬庫の確保、ノヴァクは高射砲の破壊と工作員との合流、そしてハインツが管制塔の制圧だった。

格納庫に向かったミラーたちの隊は特に何もなく山のような投降してきた兵士を捌きながら前進しすぐに確保し上陸してきた工兵部隊などと合流、格納庫の出入口に作られた鉄筋の爆破解体に移った。

するとふと沖合を見た工兵が叫んだ

工兵「おい！見ろ！船が燃えてるぞ！」

ミラー「なに！」
すぐに兵士たちはそっちの方向を見る。
するとそこには沖合で燃え盛る赤城があった。

両翼の高射砲陣地破壊に向かったノヴァクだったが激しい抵抗を受けて途中で足止めを食らっていた。
ノヴァク「おい、どうなってんだ！」
兵士Ａ「連中ブレンガンぶっ放してらあ！手榴弾でぶっ飛ばすぞ！」
そういうとノヴァクたちは懐から手榴弾を取り出し紐やピンを抜き放り投げる。
数秒後、爆発が起こりそれを合図に銃を乱射しながら突撃する。
突撃するノヴァクだったが敵のいたところまでに到達したところで左肩に衝撃を受け倒れる。
そこには足を負傷したが拳銃を取り出して発砲した敵の士官がいた。
彼は直後、反対方向から来た銃撃受けた。
ノヴァク「って…」
兵士Ａ「衛生兵！衛生兵！」
???「大丈夫かノヴァク?ちょっとかせ。」
するとブリタニア軍の軍服を着た聞いたことのある声の兵士が近づきノヴァクを手当てし始めた。
兵士Ａ「えっと…あんた誰だ?敵か?」
???「敵じゃない。これを見ろ。」
驚いた兵士が警戒し銃を突きつけるがそれにその兵士は軍服の襟元を開けて首元に輝く鍵十字の騎士鉄十字章とフィールドグレイの軍服を見せる。
ノヴァク「…あんた何ものだ?」
フェルカーザム「フェルカーザム。アドリアン・バロン・フォン・フェルカーザム大尉。
あんたにはアドリアン・トゥルーヒンって自称して

たがな。」
ノヴァクが聞く。彼の正体はノヴァクたちにはトゥルーヒンと名乗っていた工作員、アドリアン・バロン・フォン・フェルカーザムだった。
ノヴァク「はん、あんたもあのニエムツィか?」
フェルカーザム「ああ。それにSSだ。とはいっても俺の仕事場がSSに移っただけだがな。」
ノヴァク「その上ナチか。ナチ野郎のニエムツィに手当てされるのも癪だが今は仕方ないか。」
フェルカーザム「そうだな。」
そういうとノヴァクは黙って応急処置を受けた。
応急処置が終わるとノヴァクは聞いた。
ノヴァク「なあこの後どうすりゃいいんだ?」
フェルカーザム「後のことは俺がやろう。あんたは野戦病院に行っといてくれ。
連絡もこっちが入れといてやる。」
そういうとフェルカーザムはノヴァク隊の残余を率いて前進した。
ノヴァクはフェルカーザムから護衛としてあてがわれた部下と共に野戦病院に向かった。

ハインツ隊はベテランのシュタイナーと共に前進を続けて部屋を一つずつ制圧していった。
ただ敵兵は次から次へと投降していたため大した損害もなく順調に進みとうとう管制塔になだれ込んだ。
そこにはマロニー以下の将校や技術者が書類や機械を破壊しようとしていた。
それをハインツが割って入り無理矢理止めて回収する。
ハインツ「全くなんなんだよ。えーと、これなんだ?」
兵士B「多分技術系の奴でしょう。知らないけど」
ハインツ「そ。にしても何やら面白そうなことが…」
シュタイナー「おい!ありゃなんだ!?船が燃えてるぞ!」

ハインツ「え？」
ハインツが押収した書類を読もうとすると窓の外を見たシュタイナーが叫んだ。
それにハインツやほかの兵士も振り向き窓から外を見る。
そこには燃え盛る赤城があった。
ハインツ「おい…ありゃ赤城だ。だいぶ不味いぞ。通信兵！」
それを見たハインツはすぐに通信兵を呼び無線連絡する。
ハインツ「こちらハインツ！沖合で赤城が燃えてる！」
無線機にかじりついたハインツが叫ぶ。
そして捕虜にした将校から奪った双眼鏡で赤城を見る。
するとその上空で何かが空中戦を演じていることに気が付く。
ハインツ「あとその上空で何かしらの航空機とウィッチらしきものが交戦中！」
さらに詳しく見ようと固有魔法を使いよく観察する。
そこには…
ハインツ「ありゃあ…宮藤だ！」
ギルザ『なに！』
ミーナ『なんですって！』

第３４話：始まりの終わり

ハインツ「あとその上空で何かしらの航空機とウィッチらしきものが交戦中！

ありゃあ…宮藤だ！」

燃え盛る赤城を見ながらハインツは無線機に叫んだ。

ギルザ『なに！』

ミーナ『なんですって！』

ハインツ「大変なことになったぞ…おいマロニー！てめえ何をした！」

通信兵が背負った無線機を持ちながらハインツはその横で銃を突きつけられて両手を頭に置いて床に伏せられたマロニーを問いつめる。

その答えは簡単だった。ウォーロックのコアコントロールシステムがガリア上空でネウロイを殲滅した直後、基地のすべての電気系が破壊されコントロール不能になり暴走したのだ。

おそらくはそれがたまたま付近を航行中だった赤城を襲撃した。

なんとも不運が過ぎる話だったが現実に起きた以上どうしようもなかった。

その話を聞くとハインツはそのまま全力で格納庫まで走った。

格納庫に付くとミラーが工兵を集めて出撃準備中だった。

ミラー「早く早く早く！これじゃあ間に合わない！」

工兵「分かってますよ！今倉庫から砲弾を運んできてますよ！」

ハインツ「ミラー！どうなってる!?」

ハインツはミラーに聞く。

ミラー「格納庫を塞いでいた鉄骨は見ての通り爆破、今ユニットと武器を引っ張り出してやってます」

ハインツ「そうか。俺のユニットと武器は？」

ミラー「あっちです。」

ハインツ「分かった。二人でも宮藤を援護するぞ」

ミラー「分かってますよ。」

そういってハインツはユニットと武器を整えると二人で離陸、宮藤の元へ急行した。
二人とも急ぎすぎていて装備が陸戦用のものを持ち手榴弾や短機関銃を吊り下げたままだった。
だがこれが後々役に立つとは思わず離陸した後は嵩張り邪魔で離陸する前に置いて行けばよかったとか愚痴っていた。

ギルザ「全く大変なことになったよ。ヴィルケ君、普通なら航空部隊に出撃を要請したいところだがあいにく手持ちがない。
行ってきてくれ。」
ミーナ「分かりました。皆行くわよ。宮藤さんだけでは時間稼ぎが精いっぱいよ。」
バルクホルン「そうだな。だが…」
ギルザはハインツからの報告を受けてミーナに航空支援を要請する。
それに他のウィッチも乗り気だが一人バルクホルンだけは気乗りしなかった。
ミーナ「どうしたのトゥルーデ?」
ハルトマン「もしかしてノヴァクのこと心配なの?」
ハルトマンはバルクホルンに聞く。
バルクホルン「ああ。アレックスが…」
バルクホルンはノヴァクが怪我をしたことにショックを受けていた。
するとそこへ、
ノヴァク「トゥルーデ、何落ち込んでんだ?」
バルクホルン「アレックス!大丈夫なのか?」
ノヴァクが左腕を包帯で吊って入ってきた。
ノヴァク「軍医曰く肩の骨が折れたが命に別状はないだとよ。
だからトゥルーデ、俺のことは気にせず存分に暴れてこい。」
一言そういうとバルクホルンはやる気を取り戻したのか元気な声

で

バルクホルン「行くぞミーナ！ハルトマン！宮藤を助けに行くぞ！」

ミーナ「え、ええそうね。」

ハルトマン「もう私の知ってるトゥルーデじゃない…」

そういって司令部から飛び出していった。

それにほかのウィッチも続き後にはギルザとノヴァクが残された。

ギルザ「全く若いってのはいいねぇ。老人にはないよ。

後、ノヴァク君。彼女は大事にしろよ。ありゃあ私の嫁なんかよりずっといい女だ。」

ノヴァク「分かってますよ少将。」

ギルザ「そうか。なら紅茶でもいるか？」

ノヴァク「貰いましょう」

ミーナたちが司令部から基地の格納庫に向かい、ハインツ達が離陸し急行したころには既に赤城は沈みかけていた。

その甲板の端ではペリーヌが坂本を掴み何とか甲板を掴んで耐えていた。

ペリーヌ「大丈夫ですか少佐!?」

坂本「もういいペリーヌ、放せ！」

ペリーヌ「その命令だけは絶対聞けません！」

それを見て宮藤は助けに向かおうとするがウォーロックが邪魔をして助けに行けない。

だが次の瞬間、聞きなれた銃とは全く違う重く、大きな音がしウォーロックを掠める。

ハインツ「外れだ。腕落としたか？」

ミラー「腕は落としてないと思いますよ。ウォーロックが速すぎるんです。」

振り向くとハインツとミラーのコンビがいた。

ハインツ「じゃあ次と言いたいがどうやらペリーヌと坂本がヤバいみたいだな。」

双眼鏡を覗いていたハインツが呟く。
ハインツ「それじゃあお姫様を助けに行きますか。」
そういうと急降下し全速力でペリーヌのもとに向かった。
それを見たウォーロックは止まって集中砲火を浴びせるがそこにミラーは砲弾を撃ち込む。
ミラーにとっては空戦で同じ姿勢を十数秒間取るだけで撃破するのに十分だった。
ウォーロックに撃ち込まれた５０ミリ砲弾は吸い込まれるように命中し一部を吹き飛ばす。
吹き飛ばされたウォーロックはよろめきながら沈み始めた赤城に直撃、その衝撃でペリーヌと坂本が落下する。
ペリーヌ「きゃあああああああ！」
次の瞬間、ペリーヌと坂本の首元を誰かが掴んだ。
それはハインツだった。
ハインツ「ふう。メガネ、これは貸しにしといてやる。」
ペリーヌ「ハ、ハインツさん！」
坂本「助かったハインツ。」
ハインツ「坂本少佐も無理しないでくださいよ。ベテランほど死なれたら困るんですぜ。」
そう言っていた下では赤城が沈んでいった。
ハインツは坂本を、ミラーはペリーヌをお姫様抱っこしながらその光景を見ていた。
するとその後ろからエンジン音が聞こえて振り返る。
そこにはノヴァク以外の他のウィッチーズが完全装備でいた。
ハインツ「遅いぞ。獲物はあんたらの分まで…」
食っちまった。そう言いかけた次の瞬間、下から数百メートルはする水柱が立ち上った。
ミラー「な、なんだ?」
ハインツ「フライング・ダッチマンが出て来たのか?それともデイビット・ジョーンズか?」
そこから出て来たのはウォーロックを古めかしいガレオン船の船

首像のようにつけ、黒と赤に見るも無惨に変わってしまった赤城だった。
それにハインツたちはただポカンと口を開けるしかできなかった。
ハインツ「フライング・ダッチマンだ…」
ミラー「空飛ぶ幽霊船はワーグナーだけで十分ですよ…」
ハインツ「だな。ワーグナー嫌いだけど。」
それを見たハインツたちは有名な船乗りの伝説、フライング・ダッチマン、さまよえるオランダ人を引き合いに出した。
それはまさしく空を飛ぶ幽霊船そのものだった。
二人が唖然としている間に他のウィッチは二人から坂本とペリーヌを貰いユニットを履かせて宮藤と交換していた。
これが完了すると突如ネウロイが攻撃を開始した。
それに全員が回避して戦闘、文字通りの最終決戦の火蓋を切られた。
ハインツ「全く魔法使いと幽霊船とはどこの伝説かな?」
いつも通りの軽口を叩きながらハインツはネウロイに接近、固有魔法の魔眼と立体空間把握を使い艦内構造とコアを探す。
ハインツ「うわぁ…良いニュースと悪いニュースだ。
コアが見つかった。悪いのはウォーナンチャラと幽霊船ががっちり融合してる。
残念ながらこの世界じゃあ幽霊船には価値はないし出てきても困るだけだ。
俺たちがエクソシストとして追い払うしかないな。十字架と聖水、聖油と聖書は持ったか?」
軽口を叩きながらさらっと悪いことを冗談めかして言う。
ミラー「少佐、聖書は基地に置いてきましたよ。
その代わりどんな悪魔も震え上がる５０ミリがありますよ。」
ハインツ「よろしい。さてと、中佐あいつをやりましょう。」
ミーナ「ええ。ストライクウィッチーズ、全機攻撃態勢に移れ!目標、赤城及びウォーロック!」

「了解！」
ハインツ「了解。コアは機関部、構造からして外部からの破壊は不能。内部に突入して破壊する必要がある。」
坂本「内部を知っている私が行く！」
ミーナ「美緒！あなたは…！」
ハインツの報告に坂本は自分が行くと言うがミーナが止める。
宮藤「私が行きます！」
リーネ「私も！」
ペリーヌ「私も内部なら多少は分かりますわ」
そこへ宮藤たちが志願する。
宮藤「ありがとう、ペリーヌさん！」
ペリーヌ「べ、別にあなたのためじゃありませんわ！」
坂本「ペリーヌ、オマエが付いていてくれれば心強い」
ペリーヌ「は、はい！」
宮藤からの言葉にツンケンするが坂本の言葉にわかりやすく態度を変える。
ミーナ「では、その他の隊員は三人の突入を援護！突破口を開いて！」
ハインツ「さてと、Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｇｕｙｓ　ｒｅａｄｙ？Ｌｅｔ☒ｓ　ｒｏｌｌ　！」
ミーナとハインツが号令を取る。
ハルトマン「先に行くよ！」
まずハルトマンが先陣を切り固有魔法で船体を削る。
バルクホルン「私の仕事を！」
さらにそれに続いてバルクホルンも機銃掃射を加える。
反対側では
エイラ「右だな」
サーニャ「うん」
エイラ「上だな」
サーニャ「うん」
エイラとサーニャが攻撃を加えていた。

ネウロイも反撃を加えるがエイラの固有魔法により悉く外していた。
その頃艦首の方ではハインツとミラーが痛い一撃を加えようとしていた。
ハインツ「さてと、ミラー、出し惜しみは不要だ。痛いのをぶっ食らわせてやれ！」
ハインツが指示するとミラーは初めてＢＫ―５を全力で連射する。
その激しい反動を無理やり抑えながら１０数発を撃ち込むと艦首はすっかりぺちゃんこになっていた。
だがそれでも出入り口は確保できない、そこでルッキーニとシャーリーが加速してカタパルトの要領で艦首に突っ込み粉砕する。
それを見たミラーは弾がなくなり役立たずとなったＢＫ―５を無理やりユニットから外し背中にかけたＭＰ４０を取り出す。
ミラー「あの３人じゃ不安なんで行って来てもいいですか？」
ハインツ「俺が止めるとでも？かっこいいとこ見せてこい、色男。」
ミラー「少佐に言われるほど落ちてはいませんよ。」
ハインツ「そうか。ならこいつを持ってけ！結局使わなかった手榴弾だ！」
ハインツはミラーに数個の柄付手榴弾を投げ渡す。
ミラーはそれを受け取ると腰のベルトに差し込み向かった。
ペリーヌ「行きますわよ！」
「「はい！」」
ミラー「僕も手伝いますよ。」
ペリーヌたちはルッキーニが開けた穴から入り込み機関部に向かう。
だが入ってすぐに隔壁に妨げられる。
ペリーヌ「隔壁が…！」
それを見たミラーがリーネの方に振り向くとそれを見たリーネが隔壁を吹き飛ばす。
隔壁を吹き飛ばすと先を急ぐが
宮藤「あっ！」

リーネ「しまっ…！」
ペリーヌ「武器を失うなんて、なんてこと！」
ミラー「宮藤、リーネ手榴弾だ！」
突然の奇襲に宮藤とリーネは武器を失うがそれにミラーは持っていた手榴弾を渡す。
さらに壁面にブレンとＭＰ４０で掃射しながら前進すると機関部の前にある隔壁まで到達する。
ペリーヌ「この奥ね！」
ペリーヌはブレンの．３０３ブリティッシュを撃ち込むが全く聞かなかった。
ペリーヌ「この銃じゃ無理ですわね…」
宮藤「そんな…」
リーネ「ここまで来たのに…」
するとペリーヌは弾の切れたブレンを捨て壁に近づく。
ペリーヌ「最後に取っておくつもりでしたのに…」
トネール！」
叫ぶとペリーヌは電撃を食らわせ壁を破壊する。
ペリーヌ「これは…」
その先にあったのは巨大なコアだった。
ペリーヌ「これだけの大きなコア…一体どうやって破壊すれば…！」
ミラー「いい手がある。手榴弾を使うぞ。」
だが彼女たちにはもう手持ちの武器がない、だがミラーにはまだ切り札があった。
そもそも離陸前の市街戦用に持っていて使う機会がなく、さらにその後ハインツから追加で貰った手榴弾だ。
ミラーはペリーヌに手榴弾を渡し自分も柄付手榴弾を2個取り出す。
ミラー「合図で紐を抜いてやるぞ。」
ミラー「よし、今だ！」
そういうとミラーは口で手榴弾の紐を抜き投げつける。

リーネたちも続いて投げつける。
数秒後手榴弾はコアの上や横で爆発、コアを破壊した。

外では突如、赤城の攻撃がやむと色が元に戻り落下し始め白い破片となっていった。
それに全員が驚くがルッキーニが何かに気が付く。
ルッキーニ「あっ！芳佳だ！」
ハインツ「やったか！」
ルッキーニが見た方向にはミラー、リーネ、ペリーヌ、宮藤がいた。
リーネ「やった！やったよミラーさん！」
ミラー「ああリーネ！今夜は祝杯かな？」
リーネは喜びミラーに抱き着く。それにミラーも返す。
そのそばではペリーヌがいつものように呆れていたが笑顔だった。
するとハインツがふとガリアの方を向く、そこにはネウロイの巣が消えていく様があった。
ハインツ「おい、ガリアの巣が…」
バルクホルン「消えていくぞ！」
ペリーヌ「ガリアが…私の故郷が解放された…」
口々に言い、ペリーヌに至っては歓喜で泣いていた。
それにミラーはさっとハンカチを渡す。
ハインツ「これでお仕事は完了ですかな中佐？」
ミーナ「ええ。ストライクウィッチーズ、全機帰還します！」
「了解」

ギルザ「フ、フハハハハハ！やったぞ！大陸に戻れるぞ！
オーバーロードはキャンセルだ！お前ら！今年のクリスマスはパリで楽しめるぞ！」
ガリアが解放されたというニュースを聞いてギルザは大笑いする。
その報告を受けた兵士たちは喜び帽子を投げたり音楽を奏で始めたり踊ったり酒を飲み始めた。
ノヴァク「そうか。よかった…」

ギルザ「さあ、今は喜ぶ時間だよ。まあこれは始まりの終わりだがな。」

ノヴァク「終わりの始まりは遠いですか？」

ギルザ「さあ？ただ我々は2年以内にこの戦争を終わらせられる。それだけは確約しよう。」

ボック「そうか。オーバーロードはやらなくて済んだな。」

ディートル「ええ。」

その頃、ギルザの報告を受けた第7軍団司令部ではボックとディートル、シコルスキがいた。

シコルスキ「ところでウォーロックはどうする？危険だが研究開発をしっかりすればなかなか興味深い兵器になる。」

ボック「危険なのはチューブ・アロイズも変わらんだろ。リベリオンに取引として売ろうか。」

ディートル「賛成ですね。彼らならより堅実的な兵器を作ってくれるでしょう。」

ボック「ああ。だがそれは順序としては3番目だ。今は核兵器の開発を優先すべきだがな。あれさえあれば世界を支配し絶対的な軍事力を得られる。そうなったとき、我々の真の意味での勝利だ。」

「Ｎｏｗ ｔｈｉｓ ｉｓ ｎｏｔ ｔｈｅ ｅｎｄ.
Ｉｔ ｉｓ ｎｏｔ ｅｖｅｎ ｔｈｅ ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ ｏｆ ｔｈｅ ｅｎｄ.
Ｂｕｔ ｉｔ ｉｓ，ｐｅｒｈａｐｓ，ｔｈｅ ｅｎｄ ｏｆ ｔｈｅ ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ.」

（今は終わりではない。これは終わりの始まりですらない。

しかしあるいは、始まりの終わりかもしれない。）

――サー・ウィンストン・レナード・スペンサー＝チャーチル（１９４２年）

第2章：ステイツ・ソビエト・リパブリック・インペリアル・キングダム
プロローグ1：戦闘機乗りは二度死ぬ

「全ての人間は己の内に猛獣を潜めている」

ーーフリードリヒ2世

「日本航空部隊の実力に対して何の疑問もなかった。オルモック湾での特攻による戦果が日本航空部隊の実力に対する疑問を残らず拭い去った」

ーーダニエル・バーベイ少将

「我が海軍が被った損害は、大戦中のどの海戦よりもはるかに大きかった

（中略）

この損害は主に日本の航空攻撃とくに特攻攻撃によるものであった。」

ーーチェスター・ニミッツ元帥

それはおそらく第二次世界大戦において最も狂気的な戦いであった。

スターリングラードや東部戦線、ノルマンディー、そしてベルリン。この全てと違う狂気的な戦いであった。

その戦いは結果的に戦後艦対空ミサイルやイージスシステム、艦隊防空システムの発展に貢献した。

だがその程度であった。この戦いに巻き込まれた提督二人は心労から戦争が終わって数年、1人は戦争終結から僅か数日で急死した。

その戦いとは

特別攻撃、通称特攻又は神風

飛行機を爆弾に、パイロットを誘導装置とする狂気に満ちた戦略。

だが狂気に満ちている一方でこれは非常に効果的であった。

なにせ飛行機が体当たりして来るのである。当時の艦隊防空シス

テムの有効性はどちらかというと攻撃の妨害に比重が置かれ撃墜が主目的ではなかった。
そのため攻撃を食らったアメリカ合衆国海軍はこれを必死で止めようとする。
一方この狂気的作戦に全てを賭けるという狂気的戦略しか選択肢のない日本はさらに狂気に走った。
その一つがＢａｋａ　ｂｏｎｂ　日本名桜花だった。
桜花は世界初の、そして唯一の有人対艦ミサイルと言えた。
一度母機から発射されれば止める手段はない。止めるには母機の破壊しか有効な手段がなかった。
それはこの空中戦でも同じだった。
１９４５年４月末、ヨーロッパではベルリンで戦争の最終段階に入り数日で戦争も終わる時期、太平洋では未だ、それどころか戦争はますます激しく、そして狂気的な方向に走っていた。
そんなある日、日本近海、沖縄沖を８機のグロッシーブルーの戦闘機、グラマンＦ６Ｆヘルキャットが飛んでいる。
Ｆ６Ｆは見た目はとても優雅とは言えない。それどころかどちらかというと丸々太った豚のような印象を受ける戦闘機である。
だが、その見た目に反してＦ６Ｆは非常に優秀な戦闘機だった。
鉄工所と呼ばれるほど頑丈な機体、一瞬で並みの機体をミンチにする１２．７ミリ機銃、ゼロにも負けない機動性、強力な２０００馬力エンジン。
これらが組み合わさった結果ある零戦乗り曰く「二度と戦いたくない」と言わしめるほど強力な戦闘機となった。
そしてそれは米海軍の戦闘機乗りにとっては心強い味方であった。
その８機にヘルキャットは全て垂直尾翼に四角のマーキングが施され、右の主翼には四角いマーキングが書かれていた。
だが８機のうち先頭を飛ぶヘルキャットだけ他の機と少し違っていた。
全面グロッシーブルーの塗装の上から大量の落書きが書かれ中には「オレが整備したんだ」だの「ジョン、これは貸しにしといてやる。」

「ケリーいい加減賭けの代金返しやがれ！」「サンジャンシントよりベローウッドの方がいい」「間違えて着艦すると言う事は陸軍の野郎だな」だの書かれていた。

これは米海軍の伝統の一つ、誤着艦した艦載機を元の空母に返す際にその空母の乗員がその機に落書きをするという伝統だった。

そしてこの機の主人、ポール・〃ポー〃・アンティリーズは前の日に間違えて母艦である空母サン・ジャシントと間違えて同じ部隊の同型艦、ベローウッドに着艦してしまった。翌日、ベローウッドで一晩過ごした彼は母艦への帰還を兼ねてパトロールに出ていた。そのため機体は落書きまみれのまま飛んでいた。

ポー「こちらシルバーリーダー、ドレクスラーどうぞ。」

ドレクスラー『こちらドレクスラー。レーダーで確認した。』

飛行隊の隊長であるポーは無線で近くを担当しているレーダーピケット艦、最新鋭のアレン・Ｍ・サムナー級駆逐艦ドレクスラーに連絡を取る。

ポー「了解。」

ドレクスラー『ドレクスラーからシルバーリーダー。

敵編隊を確認。数１０。ロメオ２１から南下中。

速度はおそらく毎時２００ノット。

７機はおそらく１２０から１３０。３機は１４０から１５０。

７機は大型機、３機は小型機と思われる。

シルバー隊は高度１６０に上昇、方位２９５旋回。２５マイル北上し迎撃せよ。』

ポー「了解。高度２００に上昇、方位２９５に旋回、迎撃する。」

ドレクスラーからの指示を受けた８機のＦ６Ｆは旋回し上昇、北上する。

それから１０分もしないうちに支持されたポイントに到着、パイロットたちは目を皿にして敵編隊を探す。

そしてすぐに一人のパイロットが編隊の右斜め下に編隊がいるのを確認した。

シルバー3『こちらシルバー3、ポー見つけたぞ！2時の方向、1000フィートほど下だ！」

ポー「シルバーリーダー、確認した。編隊の上に護衛のゼロが5、6機いるぞ。」

シルバー3『大型機は多分ベティだ。』

パイロット達は編隊を観察しそれが日本海軍の零戦と一式陸攻と識別した。

ポー「ワンショットライターってことは…腹にバカボンブがあるはずだ。発射される前に落とすぞ。

シルバーリーダーより各機、突入せよ。タリホー！」

そう言うとウィングマンを連れてポーは機体を右にロールさせ急降下する。

機銃手「上部銃座、以上なし。ん！あれは？う、うわあああああ！」

機長「クソ！グラマンだ！」

急降下して襲いかかったグラマンに一式陸攻の乗員たちは気がつき機銃を撃ち逃げようとする。

だが頑丈で知られ、その上開戦当初から事故で教官にならなかった結果現在まで前線で戦って来たベテランの乗るＦ６Ｆの前に敵うはずもなくあっという間に二機のＦ６Ｆの１２挺もの１２．７ミリ弾に穴だらけにされ右主翼根元の燃料タンクが発火、大爆発を起こし機体はバラバラになりながら墜落していった。

それはその後ろに続いていた陸攻もほぼ同じ運命を辿った。

続けて襲いかかった二機のＦ６Ｆによりあっという間に2機が落とされた。

それに護衛の零戦がおっとり刀で急降下し追いかけるが練度が劣悪な零戦に対して高い練度と頑丈な機体のＦ６Ｆ相手では分が悪すぎ追い回すことさえできなかった。

だが、ポーの乗ったＦ６Ｆから突然オイルが噴き出しキャノピーにオイル染みをつける。

ポー「ファック！オイル漏れだ！シルバーリーダーよりシルバー2！

オイル漏れだ！帰投する！」
シルバー2『了解。エスコートする。』
ポー「頼む」
ポーの依頼にウィングマンのシルバー2のエスコートで空母まで帰投しようとする。
不安定によろめきながらもそれから増援のＦ６Ｆとすれ違いながら３０分ほど飛ぶと、空母が水平線上に見えてきた。
ポー「空母だ…」
だが次の瞬間、とうとうエンジンが停止する。
機体は急降下しコントロール不能となり海面に叩きつけられた。

――――――――――

「ボンジュール！俺はチーズを食べながら降伏するサル野郎どもだ」
（スコットランド訛りで）
――アニメ「ザ・シンプソンズ」より

「フランス軍による栄光の歴史
ガリア戦争　―　負け
百年戦争　―　辛うじて引き分け
イタリア戦争　―　負け
ユグノー戦争　―　負け
三十年戦争　―　同盟国の勝利
ネーデルラント継承戦争　―　引き分け
オランダ侵略戦争　―　引き分け
アウクスブルク同盟戦争　―　敗北（彼らは引き分けと主張）
スペイン継承戦争　―　敗北
アメリカ独立戦争　―　無関係（彼らは自分が決定的影響を与えたと主張。ド・ゴール症候群の始まりである）
フランス革命　―　唯一の単独勝利（ただし相手もフランス人である）
ナポレオン戦争　―　敗北

普仏戦争　―　敗北
第一次世界大戦　―　同盟国の勝利
第二次世界大戦　―　同盟国の勝利（ド・ゴール症候群が悪化）
第一次インドシナ戦争　―　敗北
対テロ戦争　―　敵前逃亡
小規模な武力衝突も含めれば　丙寅洋擾　―　李氏朝鮮に敗北

彼らはローマ人、イタリア人、ロシア人、プロイセン人、ドイツ人、イギリス人、オランダ人、スペイン人、ベトナム人、インディアン、朝鮮人に敗れ去った。この事から言える教訓はただ一つ。

「神よ、どうかフランスが敵に回りますように！」

「フランス兵が最初に受ける教育は？

　１０各国語の習得（ただし覚えるのは一単語だけ）」

「米海兵隊のモットーは「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！」（常に忠誠を！）だが、ではフランス軍のモットーは？

「Ｓｔｏｐ，ｄｒｏｐ，ａｎｄ　ｒｕｎ！」（止まれ、捨てろ、走れ！）」

――あるフランス軍を罵った軍事ジョーク

フランス軍、この軍隊はジョークの世界ではすぐ降伏するヘタレと扱われている。

実際ナポレオン戦争で大打撃食らって負け、丙寅洋憂で李氏朝鮮に負け、１９４０年にドイツ軍に電撃戦食らって即死し、第一次インドシナ戦争でベトコンにボロ負けしてアルジェリア紛争では何故か軍がクーデター未遂を起こした。

ある意味クソ弱い軍隊だが勝率だけでいえばさほど悪くない。

ただフランスの数少ない負けがすべて致命的だった。

その中でもフランス戦、ドイツの黄色作戦によりまさかの奇襲とそもそも組織自体が超旧式システム・無能で梅毒なトップ・背後で権力闘争ににしか能のない政治家・旧式で時代遅れで時代の流れを派手に読み間違えた兵器というクソの中のクソ、これ以上ないほどゴミな要素が呆れるほど沢山集まり完敗したのだ。

だがフランスは戦後戦勝国として常任理事国とかいう戦勝国クラブの仲間入りをしている。
それはド・ゴール率いる自由フランス軍のおかげであった。
彼らはフランスから脱出した兵士や海外にいたもの、ヴィシー政府に付かなかった植民地が中心となりアメリカやイギリスから兵器を供与されて戦列に加わった。
有名なものはエル・アラメインの戦いの前哨戦ともいえるビル・アケムの戦いのフランス外人部隊、パリの戦いやアラクールの戦いで名高いルクレール将軍率いる自由フランス第2機甲師団、東部戦線でナチスに名指しで懸賞をかけられた赤旗勲章受勲第3戦闘飛行連隊「ノルマンディ」通称ノルマンディー・ニーメン。
このほかにも部隊というには存在する。
その中の一つが第ＩＩ戦闘航空群　第5飛行隊「ラファイエット」である。
１９４５年5月8日午前。
この部隊所属のＰ４７Ｄサンダーボルトの編隊がドイツ上空、ソ連との軍事境界線近くを飛行中だった。
そのうちの一機を操縦していたのはベテランのパトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉、通称パットだった。
彼らは軍事境界線上でドイツ軍部隊を攻撃する任についていた。
パット「こちらエーグル2、異常なし。」
エーグル1『エーグル1、エーグル2了解。
そろそろ引き返すぞ、これ以上先はロシアのものだ。』
パット「ああ。分かってる。引き返そう。」
Ｐ４７は左に旋回し元来た方へ戻っていく。
パット「ん?気のせいか?」
エーグル1『エーグル2、どうした?』
するとパットが何かに気が付く。
パット「今、一瞬太陽を何かが横切った気がした。気のせいか鳥かも。」
エーグル1『鳥だろう。もうここ数週間ドイツ機は見てないから

な。』

パット「そうだな。」

だが次の瞬間、上空から突如銃撃を浴びせられ被弾、機体は急降下していく。

パット「なんだ！」

彼が見たのは赤い星をつけたＰ４７に似た戦闘機だった。

ソ連機、それもＬａ―７だった。

このソ連機はＰ４７を上から見るとよく似ていることで知られるドイツ軍のＦｗ１９０と誤認、誤射してしまったのだ。

いくら頑丈なことで知られるＰ４７でさえ高い威力で知られる２０ミリＢ―２０を食らえば無事ではすまず右翼が折れ墜落した。

プロローグ2：戦後より愛をこめて

「Ｗｏ ｖｉｅｌ Ｌｉｃｈｔ ｉｓｔ，ｉｓｔ ｓｔａｒｋｅｒ Ｓｃｈａｔｔｅｎ」（光が強ければ影も強い）

――戯曲ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンから

第二次世界大戦における最も活躍した英国戦闘機は？

この質問に対して多くの人はこう答えるだろう。

スーパーマリンスピットファイアと。

イギリスにおいてスピットファイアはただの戦闘機ではない。

あの戦争、そして英国の最も苦しい時の象徴。ジョンブルらしい不屈の頑固さの現れである。

それに異論のある人はいないだろう。

だが世界大戦に参加して活躍した英国戦闘機はスピットファイアだけか？

答えはノーである。

スピットファイアだけでなく、数多くの戦闘機――一部は非常に紅茶の匂いがするが――が活躍した。

その代表例がホーカー社の生み出した嵐三兄弟、即ちハリケーン、タイフーン、テンペストの３兄弟である。

この三機は第二次世界大戦で大活躍した機である。

ハリケーンはバトルオブブリテンで活躍、ドイツ機を最も多く撃墜したことで知られる。

タイフーンは前線の兵士からティッフィーの愛称で親しまれ、連合軍地上部隊の頭上から支援した。

だがタイフーンはある悲劇を起こしたこともあった。

１９４５年４月、当時ドイツに残った最大クラスの船であり、３回に渡る東プロイセンからの難民輸送で約２５０００人を運んだ客船カップ・アルコナはドイツ北部の港町リューベックにいた。

このまま終戦まで何事もなく停泊すると思われた矢先の４月１９

日、ハンブルクのガウライターカウフマンからある依頼をされた。
それはハンブルクからリューベックを移送するハンブルク郊外にあったノイエンガーメ強制収容所の２４か国から集められたユダヤ人約８０００人を収容すると言うものだった。
こうしてカップ・アルコナは海に浮かぶ巨大な収容所となった。
だがカップ・アルコナと運んできた貨物船ティールベックの船倉のユダヤ人は希望に満ち溢れていた。
あと数日でナチスは連合国に敗れ、自分たちは生きて故郷に帰れると思っていた。
だがその願いはその連合軍によって打ち砕かれた。
５月３日、終戦の５日前。突如リューベック港内に空襲警報が響いた。
リューベック港を英空軍のタイフーンが空襲したのである。
リューベック港内最大の船舶であるカップ・アルコナとティールベックに空襲が集中、２隻は松明のように燃え上がりあっという間にバルト海の波間に消えた。
２隻に乗っていたユダヤ人８０００人のうち生きて故郷に戻れたのは５０人ほどだった。
これはドイツでの客船ヴィルヘルム・グストロフ撃沈に並ぶ悲劇だった。
では最後のテンペストはどうか?正直に言うとあまり活躍しなかった。
登場が遅すぎたため大して活躍しなかった。だが、この機を駆ってドイツ軍と戦ったパイロットはたくさんいた。
その例の一つがピエール・クロステルマン、極東の変態国家で女体化されたこともあるフランス一のエース。
そして、今、ハルツ山地上空を飛ぶドイツ機のコックピットにいるパイロット、アルバート・〝バーティ〟・クロンカイト中尉もその一人だ。
バーティ「どうだマントイフェル?テンペストはどんな感じだ?」
マントイフェル『ああ、かなりいいな。操縦が楽だ。』

この時テンペストに乗っていたのは書類上は鹵獲機のフェリーのためもう一機のドイツ機、フォッケウルフＴａ１５２Ｈ―０に乗っているはずの隻眼のヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル中尉だった。

二人とも出身が貴族だったので意気投合、記念にフェリーフライトでそれぞれの乗機を交換して飛んでいた。

バーティ「こっちはかなり重い。疲れるよ。よくこんなの飛ばしてたな。」

マントイフェル『飛ばしてたって言っても殆ど飛んでないぞ。最近はおたくらが２４時間飛んで飛び上がったらすぐ集まってタコ殴りで戦闘はおろか訓練飛行すら危険だよ。』

Ｔａ１５２は操縦したイギリスのテストパイロット曰く疲れる飛行機といわれている。

そのためバーティはかなり飛ばすのに苦労していた。

するとバーティが目的地周辺に雲がかかっていることに気が付く。

バーティ「なあそろそろ飛行場だが雲が垂れ込めてるな。」

マントイフェル『ああ。どうする？』

バーティ「とりあえず雲の下に出よう。」

そういうと降下して雲の下に向かおうとする。

だが突如、目の前に山が現れる。

バーティ「しまった！」

マントイフェル『シャイセ！』

必死で上昇しようとスロットルを全開にして機首上げをするが機体は降下を続け山腹に時速４８０キロで衝突した。

彼らは岩は雲の中にあることを忘れていた。

――――――――――

「ソ連が恋しくない者には心がない。ソ連に戻りたい者には脳がない」

ーーウラジミール・ウラジーミロヴィチ・プーチン

ソ連、正式名称ソビエト社会主義共和国連邦。この国は世界初の社会主義国家。

ロシアとその周辺国を舞台とした壮大な社会科学の実験上として生まれた国。

だがその結末は悲惨だった。最終的に約７０年間共産主義によって支配されたが次第に経済が疲弊、そしてとうとう１９９１年、東西冷戦終結後ソ連は自ら崩壊した。

だが１９４５年、おそらく当時のロシア人それどころか世界中の全ての人が信じないだろう。

この当時労働者のユートピアとされた国が５０年後みすぼらしくなり無惨にも崩壊するなどとはつゆほども思っていなかっただろう。

なにせこの日、即ちＵＴＣ＋９時１９４５年９月２日午前十時少し前、ソ連は新たな栄光の歴史を作っていた。

それは悪名高いナチスの同盟国日本を降すという勝利の歴史だ。

その時間、丁度降伏文書調印式が行われていた東京湾から北西に千数百キロ、満州上空をスピットファイアに似た赤い星を描かれた戦闘機が飛んでいた。

それはヤコブレフ設計局が開発したソ連の誇る名戦闘機ヤコブレフＹａｋ９Ｔである。

木金混合という古めかしい基本設計だが高い機動力であらゆるドイツ機より勝っていた。

この名機はその特性から主に爆撃機の直掩機として運用されたためこの機を駆って戦ってエースのスコアは多くない。

それでも多くの英雄を生み出した名機である。

この機は左側には「Ａзербайджанская Респу
блика и Советский Союз победят
с товарищами」（アゼルバイジャン・ソビエト共和国は

同志と共に勝利する)、右側には星と「Для　товарищей героев Ленинграда」(同志レニングラードの英雄のために)と書かれていた。

この機はアゼルバイジャン・ソビエト共和国の人たちの寄付によって作られた機であり乗っているのはソ連邦英雄でありレニングラード出身のエースであった。

乗っていたのはレニングラード大学医学部卒の共産党員レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ上級大尉、通称リョーニャであった。

リョーニャ「ボーバ、これで戦争は終わるな。」

ボーバ『ああリョーニャ。これでやっと家に帰れるよ。』

ほぼ戦争が終わった以上編隊を組んでいる二人のパイロットは気を抜いて雑談に興じていた。

このころにはソ連軍でも質は別としてすべての飛行機に無線が備わっていた。

リョーニャ「そうだな。ところでボーバはどこ出身だ?」

ボーバ『キエフだよ。』

リョーニャ「キエフか、キエフ風カツレツのキエフだろ?」

ボーバ『そしてウクライナ一の町さ!今度来いよ。良いところだぜ。』

リョーニャ「シベリアに送られなければ行ってみるよ。」

ボーバ『党員のあんたが言うか?』

ウクライナ出身の同僚と話していると進路上に雲が出てきた。

リョーニャ「雲だな。大したことないが。」

ボーバ『ああ。このまま突っ切ろう。』

そういって2機は編隊を組んだまま雲を抜けた。だが、

リョーニャ「うわ!」

ボーバ『なんでこんなところにいるんだ!』

雲を抜けてすぐのところに突然ペトリャコーフＰｅ—2が現れリョーニャの機が空中衝突した。

ヤクはペトリャコーフの右主翼に胴体下部をぶつけ機体後部がもげてばらばらになりながら落下した。

ペトリャコーフは衝突で右の補助翼とフラップを失い右にロールしながら錐もみ状態に陥り空中分解した。

第1話：戦闘機乗りは魔法使いの夢を見るか？

ポー「って…ここはどこだってって寒い！なんだよこの寒さ！オキナワってこんな寒いのか！」

ポーが気が付いた時、機体は1万フィート付近を水平飛行していた。

周りを見渡すがそこには遠くの方から見える船の煙以外は一面海原だった。

ポー「一体ここはどこなんだ？煙が見えるってこったああっちに艦隊がいるんだろうな。」

ポーは機体を旋回させ煙に方に向かった、すると視界の隅のなにかオリーブドラブに塗られたものを見つける。

ポー「ありゃあ一体なんだ？ん？Ｐ４７か？なんでこんなところに？」

近づくとそれはＰ４７、それもフランス軍のラウンデルをつけた機だった。

すると無線が響く。

『こちらエーグル２、そこの米軍機、支援を求む。』

それは若干のフランス訛りのある流暢な英語だった。

即座にポーは返す。

ポー「こちらアメリカ海軍空母サン・ジャシント所属第４５戦闘飛行隊ポール・アンティリーズ大尉だ。

そちらは？」

パット『こちらは自由フランス空軍第Ⅱ戦闘航空群第５飛行隊ラファイエット所属パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉だ。』

ポー「よろしくジャベール大尉。」

パット『パットでいい。』

ポー「ならよろしくパット。ところでここがどこかわかるか？」

パット『いや全く。少なくともドイツ上空ではないことは確かだ。』

ポー「だろうな。とりあえずあの船の方に向かおう。いいな？」

パット『賛成だ。』
両機は合流すると洋上飛行に慣れたポーを先導に煙の元へ向かった。

――――――――――

そこから数十キロ離れたところではテンペストとＴａ１５２が編隊飛行していた。
マントイフェル「なあここがどこか分かるか？」
バーティ『分からん。何が何やら』
両機に乗った二人は状況が全く分かっていなかった。
なにせどちらも洋上飛行の経験に疎かった。
するとバーティが視界の隅に小さい何かを見つける。
バーティ『マントイフェル、１０時の方向に不明機だ。気をつけろ。』
マントイフェル「了解、確認した。スピットファイアか？」
バーティ『かもな。近づいてみよう。』
２機はゆっくりとスピットファイアに似た機に近づいていく。
そしてある程度まで近づくとそれがソ連機だと確認した。
バーティ『マントイフェル、あれはソ連機だ。』
マントイフェル「ああ。ヤクだ。」
バーティ「なんでいるんだ？軍事境界線は？」
マントイフェル「とりあえず警告したらどうだ？まあこっちには弾薬がないが。」
マントイフェルはヤクに警告するよう勧める。
だが弾薬がないと思っていた。
バーティ『弾薬なら両方に積んでるから大丈夫だ。
もし逃げようとしたら俺が撃ち落とさないといけないし紙の上ではそっちに乗っていることになってるから一応そっちにも積んでるよ。』
だが実際は両方とも弾薬を満載していた。
書類上バーティはテンペストに乗っていることになっているため

弾薬を積んどかなければ不味いし実際にはＴａ１５２に乗る関係上こちらにも弾薬を積んでおく必要があり鹵獲した弾薬を積み込んでいた。

マントイフェル「そうか。それはよかった。」

バーティ『それじゃあ警告するぞ。

現在当機の１１時方向を飛行するソ連機に警告する。貴機は軍事境界線を侵犯している。

直ちに退去せよ、繰り返す、直ちに退去せよ。』

警告すると今度はソ連機の方から連絡が来た。

『当機に警告を出した機に連絡する、ここはどこだ?できれば最寄りの飛行場に降りたい。』

バーティ『ソ連機へ、残念だがこちらも現在位置を把握していない。』

『そうか。済まない』

バーティ『ああ。ところで水平線上に煙を確認できる。

我々はとりあえずそちらに向かうがどうする?』

リョーニャ『私も向かおう。ああ、自己紹介がまだだったな。

レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ上級大尉。リョーニャでいい。』

バーティ『よろしくリョーニャ。俺はアルバート・クロンカイト中尉。バーティでいい』

マントイフェル「よろしくレオニード・イリイチ。

俺はヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル中尉だ。」

リョーニャ『なんでキャベツがいるんだ?』

マントイフェル「鹵獲機のフェリー中なんだ。これが終われば捕虜収容所行さ。」

リョーニャ『そうか。』

リョーニャはそれだけ言うと黙った。

両機はそのままテンペストを先導、Ｔａ１５２がテンペストの右後

方、ヤクが左後方の編隊を取り煙の方へと向かった。

――――――――――

さて、彼らが向かった煙の方向には本当に艦隊が、それも空母を擁する史実呼ばれる世界では十分強力な打撃部隊――対潜能力が低い事と対空戦能力が限定的な事以外は――非常に高い能力を持つ艦隊があった。

だがこの艦隊はこの時現在進行系で壊滅の危機に瀕していた。

それはネウロイ、それも危険範囲外と言われていた地域での攻撃で奇襲となりその上護衛していた唯一のウィッチが重傷を負い現在その妹の平均以下のウィッチが必至の防衛戦を行ういわば末期的状況だった。

そんなこともつゆ知らず5機の戦闘機が一機を除いて敵味方識別装置を切った、3機はそもそも使う必要がなく一機は敵味方識別装置の周波数が偶然にもドイツ軍が使っていたものと近かったという理由から使ってないなかった状態で接近したため旗艦の空母の艦橋では一機の戦闘機が小型ネウロイに追われた状態で接近するのと反対側から別のが3機近づいてくるように写っていた。

ポー「は?ジャップの連中とうとう全力出撃して来やがったぞ!

うわ!なんだ今度は!フーファイターか!というか女が飛んでるぞ!」

そして上空に到達したポーは驚く。なにせ眼下を進んでいた艦隊はどう見ても日本海軍の大艦隊だった。

だがそれ以上に突如、機体の横を赤い光線が通り未確認の巨大な黒い物と女ががが飛んでいる事に驚く。

それは反対側から来たリョーニャ以下の編隊も同じだった。

リョーニャ「一体何が起きてるんだ?」

バーティ『分からん。見えてはいるが脳が理解しない。ただ何やら面白そうだな』

マントイフェル『この世にはあり得ないものがいくつか存在すると

聞いたがあんなのは初めてだ。
ポーの編隊はロールして回避しながら話し合っていた。
パット『どっちにつく?』
ポー「女だ!」
パット『OK。レディーにいいとこ見せたければ先にやれよ。』
そういうとパットは機体を急上昇させ女の子に接近していた一機の黒い物体に接近、下から対地用に積んでいたHVARを撃ち込む。
HVARは非常に強力な兵器、戦車を吹き飛ばすほどの兵器である。だがそれが少なくとも6発は当たったにもかかわらず半壊して中から赤いものが出るがすぐに戻っていった。
パット「メルド!なんなんだあいつは!」
さらにパットは機銃を撃ち込む。すると弾が修復されかかっていた赤い物に直撃、黒い飛行物体は白い破片となって消え去った。
ポー「それじゃあ女の子にいいとこ見せますか。」
続いてポーがもう一機に後ろから近づきエルロンロールをしながら機銃を乱射し黒い物体を半壊させる。
だがもうひと押しが足りず決め手に欠けたまま近づき機体を急降下させ離脱させる。
だが次の瞬間、黒い影が太陽を横切り黒い物体に機銃を撃ち込みさらにその後ろから別の2機が突っ込み撃破した。
それはテンペスト、Ta152、ヤクの3機だった。
バーティ「ふう、間に合ったな。」
マントイフェル「ああ。急ごしらえだったが効いたみたいだ。」
リョーニャ「まさかゲルマンスキーとブリテンスキーと一緒に編隊を組んで戦う日がくるとはな。」
マントイフェル「ふ、それはこっちのセリフさ。あんたみたいなスラブでコミュニストと翼を並べるだけでむしずが走る。」
バーティ「そうだな。次会うときはできれば共産主義的ではない人物を寄越してくれ。」
それはバーティたちの編隊だった。
全てを離れたところから見ていた彼らは隙を見て一撃を食らわせ

たのだ。
それが終わると三者三様に毒を吐いたりしていた。

そしてそれをぼーっと一人の少女が見ていた。
雁淵ひかり軍曹だ。
彼女は姉の雁淵孝美の代わりにネウロイ相手に戦っていた。そして死ぬと思った最後の瞬間、彼らが騎兵隊としてやってきた。
それに呆然となりひかりの周りを旋回する彼らを見ていた。
すると突然
「孝美!やっぱり孝美がやられるわけ…」
後ろから大声で呼びかけるのが聞こえ振り返ると一人のウィッチが降りて来た。
そしてひかりの顔を見て
菅野「誰だてめえ?」
こう漏らした。それはブレイブウィッチーズ所属の菅野直少尉だった。
その周りにはブレイブウィッチーズのほかの面々もいた。
だが他のウィッチの関心ごとは彼女よりその上を旋回していた戦闘機たちであり、戦闘機に乗っていたパイロットたちの関心ごとも彼女たちであった。
サーシャ「なんなんでしょうか?あの戦闘機は。あんな国籍章ありましたか?」
戦闘隊長のサーシャ・イワーノブナ・ポクルイーシキンが漏らす。
クルピンスキー「さあね?でもかわいこちゃんが乗ってるといいなぁ」
アホな事を漏らすのは「偽伯爵」クルピンスキー。残念ながら彼女の願望は実際には中に乗ってるのは屈強な、それこそオリンピック代表候補になるぐらいの屈強な男たちしかいないのだが。
そして彼女たちをポーたちも見ていた。
ポー「なぁパット、なんかかわいい子たちが飛んでるぞ。誰が好み

だ？

　俺はあのブロンドのロングの子かな？」

パット「別に誰でもいいだろ。まあなかなかの美人さんしかいないのは認めるが。」

ポーは旋回しながら女の目利きをしてパットはそれに呆れていた。

マントイフェル「なあ、この世に同じ顔をした人が二人もいると思うか？」

バーティ「そりゃあドッペルゲンガーだな。」

リョーニャ「そんなことありえないだろう。」

マントイフェルは目の前の光景にありえないものを見ているようだった。

　すると両機の無線機から女性の声が聞こえた。

『そこの戦闘機！所属を答えなさい！』

その声に各自驚くがすぐに答える。

ポー「こちらアメリカ合衆国海軍第５艦隊第５８．１任務部隊所属ＣＶＬ―３０軽空母サン・ジャシント配備第４５戦闘飛行隊所属ポール・アンティリーズ大尉。

　コールサインはシルバーリーダー」

パット「自由フランス空軍第Ⅱ戦闘航空群第５飛行隊ラファイエット所属パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉。

　コールサインはエーグル２。」

バーティ「王立空軍第３３スコードロン所属アルバート・クロンカイト中尉。コールサインはヨークピーター。」

マントフェル「えーヴァルター・グラーフ・フォン・マントイフェル中尉。所属は…捕虜？

　コールサインはピーター・オーボエ・ウィリアム」

リョーニャ「労農赤色空軍所属レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ上級大尉。

　コールサインはボストーク１４。そちらは？」

最後のリョーニャが逆に聞く。

サーシャ『こちらは連合軍第５０２統合戦闘航空団ブレイブウィッ

チーズ所属アレクサンドラ・イワーノブナ・ポルクイーシキン大尉です。

『我々についてきてください。』

ポー「ラジャー。」

パット「了解した。」

バーティ「了解。」

マントイフェル「分かった。」

リョーニャ「Дａ」

サーシャからの指示に戦闘機は旋回しウィッチの後ろについて陸地を目指した。

第2話：寒い国に来たパイロット

サーシャたちウィッチに先導された戦闘機たちはそのまま付近のノヴォホルモゴルイ、史実ではアルハンゲリスクとして知られる町の飛行場に降り立った。

ポー「やった！久しぶりの陸だ！ってクソ寒！」

最初に降り立ったポーが久しぶりの陸に喜ぶがその寒さに走って最寄りの建物に向かう。

パット「寒い、寒すぎる。」

続いて降りたパットも同じく走って建物に向かう。

バーティ「ふ、ジャパンでは心頭滅却すれば火もまた涼しだ…」

マントイフェル「じゃあなんで震えてるんだ？とはいえ寒い。早く建物中に入ろう。」

その次に来たバーティはジェントルマンらしく見栄を張るがその次に来たマントイフェルに震えていることを指摘される。

マントイフェルとバーティはそのまま歩いて建物の向かった。

リョーニャ「Оплот！寒い！」

最後に来たリョーニャは悪態を吐くとそのまま走って建物に向かった。

建物に駆け込み彼らはそのまま暖炉やストーブの前に陣取った。

バーティ「それにしても寒い。あ、自己紹介がまだだったな。アルバート・クロンカイトだ。

バーティでいい」

たどり着くとポッケからシガーケースを取り出しながらバーティが自己紹介する。

ポー「よろしくバーティ、俺はポール・アンティリーズ。ポーって呼んでくれ。」

バーティ「よろしく。ところで葉巻は吸うか？」

続いてポーが自己紹介するとバーティが葉巻を勧める。

パット「葉巻を持ってるのか？俺はパトリック・ジャン＝クロード・ジャベール。パットでどうぞ」

マントイフェル「フランス人か?かなり英語が上手いがまだ訛りが少しあるな。
俺はヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェルだ。
あと葉巻貰えるか?最近は質のいいやつを手に入れづらいんだ。」
さらにパットとマントイフェルが流暢な英語で自己紹介する。
リョーニャ「あんたブルジョアジーか?俺はレオニード・イリイチ・クトゥーゾフ。ソ連邦英雄で共産党員だ。」
バーティ「コミーか?なら殺すぞ。アカは死ね!」
マントイフェル「ケーニヒスベルクを忘れるな!野郎ぶち殺してやる!」
最後にややきついロシア訛りの英語でリョーニャが自己紹介するが共産党員だと言うとバーティとマントフェルが襲いかかった。
彼らにとっては共産主義とは最大の敵で一匹残らず地球上から消え去るべき存在だった。
そのまま3人で殴り合いの喧嘩となった。
リョーニャ「ブルジョアジーは死ね!共産主義万歳!」
バーティ「共産主義は敵だ!ぶち殺せ!」
マントイフェル「共産主義はペストだ!油断した隙に俺たちの喉笛を掻き切る気だ!」
ポー「いいぞ!もっとやれ!」
パット「あんたら!ケンカはやめ…てめえぶち殺してやる。」
ポーは外から煽るがパットが止めようと割って入るがそこにバーティの右ストレートが直撃、それにキレてケンカに乱入、バーティに右フックを決めると続いてリョーニャにコブラツイストを食らわせマントイフェルと殴り合いを開始した。
するとドアが開き咳払いが聞こえた。
それを聞いたバーティたちはケンカをやめて振り返ると赤毛?のボブで腰にコルセットを巻いた美女502の隊長のラルとブロンドでのロングの美少女であの時サーシャと名乗っていた少女がいた。

それを見たポーは立ち上がるとブロンドのロングを口説き始めた。
ポー「やあ、かわいこちゃん名前は?俺はポー・アンティリーズ。ポーって言ってくれ。
　どうだろう?一緒にお茶でもしないか?このあたりのことはよくわからないから君のおススメのところにこうじゃないか…痛!」
サーシャ「結構です。」
サーシャはポーの足を踏みつけた。
ラル「私は連合軍第５０２統合戦闘航空団ブレイブウィッチーズ隊長グンドュラ・ラルだ。」
サーシャ「私が連合軍第５０２統合戦闘航空団ブレイブウィッチーズ戦闘隊長のアレクサンドラ・イワーノブナ・ポクルイ―シキンです。」
　二人は自己紹介する。
　続けてポーたちも自己紹介する。
ポー「えー自分はアメリカ海軍第５艦隊第５８．１任務部隊所属軽空母サン・ジャシント配備第４５戦闘飛行隊所属ポール・アンティリーズ大尉であります。」
パット「自由フランス空軍第Ⅱ戦闘航空群第５飛行隊ラファイエット所属パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉だ。」
バーティ「王立空軍第３３スコードロン所属アルバート・クロンカイト中尉。よろしくＭｓ．ラル。」
マントイフェル「ヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツエレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル元ドイツ空軍中尉であります。
　よろしくＭｓ．ラル、Ｍｓ．アレクサンドラ・イワーノブナ」
リョーニャ「最後か、レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ労農赤色空軍上級大尉。
　よろしく、同志ラル、同志アレクサンドラ・イワーノブナ」
それぞれ自己紹介する。

バーティとマントイフェルはラルに近づくと挨拶が終わると手の甲にキスをした。
それにラルは終わると背中で手を拭いた。
彼らは知らないがラルはすでに彼らがどういう存在でどのような価値があるかを知っていた。
というのもミーナが実はハインツ達のことをラルやほかの統合戦闘航空団の隊長に知らせていたのだ。
本来なら機密なのだが検閲官が機密すぎてそれが機密だと気がつかなかったという酷すぎる理由から網を潜り抜けてラルの元に来ていた。
そのため心の中ではガッツポーズをしチャンスと思っていた。
彼女のがめつさはペテルブルクの補給担当部門では絶対に５０２にだけは補給の情報を渡すなという暗黙の了解ができるほどだった。
なにせこの夏だけで一体どうやったのか約一万トンもの物資を強奪されたのである。
そのためペテルブルク最大の物資集積所であるコトリン島のクロンシュタットとさらにその後ろにあるスオムスのコトカでは５０２の人員の立ち入りを禁ずるという命令が出ていた。
とにかくこの事に喜びまくっていたがなんとか持ち前のポーカーフェイスで隠してラルは話を続ける。
ラル「残念だがこの世界にはアメリカもドイツもフランスもなにも存在しない。
おそらくだが君たちから見たら異世界と呼ばれる所だ。」
さらっとラルは非常に重要なことを言う。
それを聞いてラルは５人が衝撃を受けると思っていた。だが正解は５人ともしばらく考え込むとバーティが呟いた。
バーティ「ホレーショよ、この天と地の間には、おまえの哲学が夢見る以上のものがあるのだ、か」
マントフェル「シェイクスピアか…」
ポー「まさにこの状況にふさわしいな…」
パット「神は存在するのかもな」

リョーニャ「オカルトは信じないがこの状況だけは信じる必要があるようだな」
意外なことに5人はラルの話をすんなりと信じた。
それにラルとサーシャが驚く。
ラル「意外とすんなり理解したな。」
ポー「ああ。だが今の状況を擦り合わせるとそれが最も合理的な答えなんだよ。」
パット「突然ドイツ上空からよくわからん海の上に来て」
バーティ「巨大な黒い物体に襲われ」
マントイフェル「生身で少女が空を飛んでる。この状況を説明するのは別の世界に来た、というのが一番合理的だ。」
リョーニャ「同志ラル、あの黒いものや少女はいったいなんだ?」
するとリョーニャが代表してラルに聞く。
それにサーシャが答えた。
サーシャ「ネウロイの事ですか?」
ポー「ネウロイっていうのか?」
サーシャ「ええ。人類の敵です。
そしてネウロイに対抗できるのは我々ウィッチだけなんです。」
バーティ「ウィッチ…魔女?」
サーシャ「そうです。魔力を持っているのはほぼ女性、それも二十歳以下だけです。」
マントイフェル「というと、未成年で戦ってるのか?」
サーシャ「え?ええ。私も今年で16です」
マントイフェル「そうか…それとレディーに年齢を聞くのは失礼だったな。済まない」
サーシャ「大丈夫です。気にしてませんから」
マントイフェルがサーシャに年齢を聞いたことを謝るがサーシャは気にしていなかった。
この後、さらなる詳しい説明を二人から受けた。
終わるとラルが

ラル「明日の明朝には我々はペテルブルクに戻る。ついてきて欲しい。」
ポー「分かった。」
リョーニャ「ペテルブルク…ああレニングラードか。」
一瞬リョーニャはペテルブルクがどこの町かわからなかったがすぐにレニングラードだと理解した。
それにサーシャは疑問に思う。
サーシャ「あなたたちの世界ではペテルブルクじゃないんですか？」
リョーニャ「ペテルブルクは忌々しき暗黒の帝政時代だ。
今は偉大なる同志ウラディーミル・イリイチの名を冠したレニングラードだ。」
サーシャ「誰ですかそれ」
バーティ「ロシア革命の指導者の共産主義者さ。ただ共産主義は死ねばいい。」
マントイフェル「ああ。共産主義は人類のペストだ。絶滅させなければならない」
サーシャの疑問にバーティが補足するがすぐに反共主義に凝り固まった二人が過激なことを言う。
この後、すぐにまた殴り合いの喧嘩が勃発し殴り合いをするがすぐにラルたちとパットが仲裁、そのあと地理や各種説明や疑問を質問した後ラルたちは出て行った。

サーシャ「ところで司令部には報告しますか？」
そのあと外でサーシャがラルに聞いた。
それに対してラルは
ラル「ああ。それなら後で私が報告しておく。サーシャは休んでいてくれ。」
そう返した。これが翌日ペテルブルクで大騒動が起きることをまだ知らない…

第3話・ペテルブルク作戦軍司令部を迎えて（別題・プラウダ）

「同志トレスコウ、つまり新たな巣によって我々の大事な補給路の一つである白海ルートが封鎖されると言うことかね？」
「は、ヴァトゥーチン大将。そういうことです。」
ペテルブルク、ペトロパブロフスク要塞にネヴァ川を挟んで斜め向かいにある旧海軍本部は現在ペテルブルク防衛を主任務とするペテルブルク作戦軍司令部と北方総軍参謀本部第１３課ペテルブルク支局があった。
そこでは北方総軍参謀本部第１３課課長のニコライ・フヨードロヴィチ・ヴァトゥーチン大将がペテルブルク作戦軍参謀総長ヘニング・フォン・トレスコウ少将とペテルブルク作戦軍総司令官エーリヒ・ヘプナー大将、ペテルブルク作戦軍に属する第１５０装甲軍団軍団長ハンス・ヴァレンティーン・フーベ中将とモーニングを摂りながら作戦会議中だった。
この日お題は白海の入り口にできた新しい巣に対する対処と反攻であった。
ヘプナー「白海の入り口は盲点だったがこの位置ならコモリスカヤ・プラウダ作戦が適応できるな。」
フーベ「本来はカレリア東部が対象でしたがこれは予想外です。コラ作戦軍団もかなり驚いていましたね。
ただそこからすぐ立て直したのはＭｒ．クリバヤシの腕でしょう。」
ニコライ「ただ時期が悪すぎる。これで中央軍集団とのデカブリスト作戦、ナルヴァ方面へのスモーリヌイ作戦、ペイプス湖方面へのスタハノフ作戦、さらにクラスナヤ・ズヴェズダ作戦が延期だ。
お陰でナロードニキ作戦の予定が大幅に狂ったぞ。」
ヴァトゥーチンはこの巣の存在によって予定されていたナルヴァ方面への攻撃「スモーリヌイ」、ペイプス湖への攻撃作戦「スタハノ

フ」、さらにはプスコフ方面への攻撃「クラスナヤ・ズヴェズダ」、中央軍集団との共同作戦「デカブリスト」が延期となってしまった。
この作戦は全て４４年中に戦線をナルヴァ～プスコフ～ビテプスク～キエフ～ケルチ地峡とする作戦「ナロードニキ」の作戦だがこれにより北方軍集団は作戦が破綻してしまいナロードニキ作戦は実行不能となった。
だが無策というわけでもなくその前から緊急時の対処計画「プラウダ」があった。
これは西方からの攻撃対処作戦「ビルジエチェー・ジョディス」、東方からの攻撃「イズベスチヤ」、南方からの攻撃「モスコフスキー・コムソモーレツ」そして北方からの攻撃対処計画「コモリスカヤ・プラウダ」であった。
この作戦名自体は共産系新聞の名前がコードに付与されていたためプラウダ計画と題されていた。
ヘプナー「今、うちの参謀部に急いで反攻作戦を検討させてる。一応作戦名はスピードバードだ。」
ニコライ「スピードバード、伝書鳩か。ところで西部戦線はどうなってる?.たしか秋のクロッカス作戦が実行中だが。」
するとヴァトゥーチンが西部戦線の話に変えた。
この時丁度ボルドー方面からアルザス・ロレーヌに抜く作戦「秋のクロッカス」が実行中だった。
トレスコウ「報告によりますと秋のクロッカス作戦は成功し現在アラクールが焦点のようです。
それと叔父から昨夜ガリア解放に関する情報が届きました。」
フーベ「ボック大将か。」
ニコライ「何と言ってきた」
トレスコウが秋のクロッカス作戦の報告の後叔父でありボック大将からガリア解放に関する情報を報告する。
トレスコウ「どうやらウォーロックというネウロイのコアを利用し

た兵器が絡んでいるようです。」
ヘプナー「目には目を歯には歯をか。」
ニコライ「発想は悪くないない。ただ技術的に信頼性を高められなかったか?」
トレスコウ「そのようですね。記録によると基地のコントロールシステムの電源が破壊された結果コアが機体を乗っ取ってしまったようです。」
ニコライ「そうか。ただ信頼性を高められればかなり使えるな。」
すると上空からエンジン音が聞こえてきた。
フーベ「珍しいな。こんな時間に飛行機なんて。」
一次大戦の戦傷で隻腕であるフーベがエンジン音に気が付き右手でコーヒーカップを持ったままネヴァ川を望む窓から外を見た。
それにつられて口の中にソーセージが入ったままのヘプナーと右手にタバコを挟んだままのヴァトゥーチン、書類を持ったままのトレスコウが窓から外を見る。
そこには見慣れた鉄十字と赤い星、白い星、ラウンデルをつけた戦闘機が旋回し一機が着陸しようとしていた、５０２に。
ヘプナー「なあ、だいぶ不味くないか?」
フーベ「不味いで済めばいいです。」
トレスコウ「あの強欲オオカミの事ですから力ずくで守ろうとするでしょう」
ニコライ「ならばこっちも実力行使するまでだ。」
そういうと将軍たちは従兵を呼び兵士を叩き起こし５０２へと向かった。

ペテルブルクの５０２に最初に着陸したのはリョーニャのヤクだった。
というのも彼らはウィッチたちに数時間遅れてきていた。
ノヴォホルモゴルイ（アルハンゲリスク）とペテルブルクの間は約１０００キロほどだがＹａｋ９では航続距離が足りないのである。

Ｆ６ＦやＰ４７、テンペストは一応２０００キロ、Ｔａ１５２も１５００キロ近く飛べるため問題ないがＹａｋ９は僅か９５０キロしか飛べない。

そのため途中にネウロイの巣の発生により大混乱の渦中のペテロザヴォーツクに立ち寄り燃料補給を行った後そこから夜明けとともに離陸しなんとか昼前にペテルブルクに到着していた。

だがすぐに次の問題が起きた。滑走路が短いのだ。

５０２の基地はペトロパブロフスク要塞を改装して作られている。そのため滑走路はネヴァ川に飛び出すように作られているのだがこのあたりのネヴァ川の川幅は約５００ｍ。できる限り伸ばしても僅か５５０ｍほどしか滑走路を確保できなかった。

これはストライカーユニットならば問題はないが長大な滑走が必要なテンペストやＰ４７では足りない。全く足りない。

そのため着陸にそれほど長いヤクとＦ６Ｆ、Ｔａ１５２が優先された。

リョーニャ「ふう。滑走路が短すぎる。しかもここペトロパブロフスク要塞じゃないか。」

降りたリョーニャは周囲を見渡し対岸のサンクトペテルブルクで最も有名な建物といっても過言ではない冬宮殿を見てここがサンクトペテルブルクの中心部にあるペトロパブロフスク要塞だということに気が付いた。

周りには昨日の少女たちや基地の整備士などが集まってきた。

リョーニャは機体を邪魔にならない場所に置きエンジンを切ると少女たちの横に並んだ。

続いて着陸したのはポーのＦ６Ｆだったがここで問題が起きた。着地の瞬間右の主脚が折れスリップしながら滑走路を突進、破片を撒き散らしながら格納庫のドアに激突、ドアの下半分を突き破り機体の前半分が格納庫に入った状態で停止した。

停止すると中からポーが急いで飛び出て走ってＦ６Ｆから離れた。数秒後漏れ出た燃料がエンジンの熱で発火、炎上した。

ポー「やっちゃった…」

サーシャ「正座！アンティリーズ大尉は正座！」
この様にポーは出てくるとリョーニャの横に並び呟く。リョーニャの横にいたサーシャはこの状況に大声で叫んだ。
それにポーは驚く。
ポー「え？セイザ？あの日本人労務者たちがしてた奴か？」
サーシャ「とにかく正座しなさい！」
ポー「えー、サーシャちゃん。そんな固いこと言ってるとせっかく君の綺麗な顔がシワで汚くなっちゃうよ。
まあ君のような美人さんはシワ程度で汚くならないんだろうけどね」
「おや、君は僕の子猫ちゃんを奪う気かい？」
するとその後ろから長身でブロンドの単発の美女がやってきてポーに言った。
ポー「そうなのか？となると親猫と一緒に貰おうか。このカッコいい猫ちゃんはなんて言うんだい？」
「え？…僕を口説こうとしてるのかい？」
ポー「ああ。テキサス人は君のような可愛い女の子と困ってる人には声をかけたくなる性分でねぇ」
クルピンスキー「へえそうなんだ。僕はヴァルトルート・クルピンスキー中尉、伯爵って呼んで。」
ポー「そうでございましたか伯爵様、それにしてもかわいい伯爵様だ。
テキサスにも伯爵はいたが牛糞の臭いがしてた。
それに対してこの伯爵様はなんと良い匂いをすることか。一日中嗅いでられるよ」
来たのは伯爵ことヴァルトルート・クルピンスキーだったがポーはそのまま今度はクルピンスキーを口説き始めた。
それに後ろでは身長の低い銀髪の少女が近づいて来た。
「彼女は偽伯爵よ」
クルピンスキー「酷いじゃないか先生」
ポー「先生？このレディーは先生でございましたか。どうも先生

ポール・アンティリーズでございます。
　彼女が先生と仰るなら一度先生の個人レッスンを受けてみたいですなぁ」
　ロスマン「それはどうも。私はエディータ・ロスマン。この隊の教育係をしているわ」
　ポー「そうでございましたか。小さいながらに先生とは立派ですなぁ。詳しいお話を今後の参考のためにも一緒にブランチでも…」
　ロスマン「結構です。」
　ポー「真面目さんはつれないねぇ…テキサスなら先生でも代議士でもバーにいますぜ。」
　ポーに忠告したのは先生ことエディータ・ロスマンだったがすぐにこちらも口説き始めるが適当にあしらわれた。
　呑気にポーはナンパしているがその横では格納庫に突っ込み大破、炎上しているＦ６Ｆを基地の消防隊が消火作業中だった。
　船の上ならばそのまま海に放り棄てれば終わるものだが陸上であるためそんなことはできず消防隊が集まって消火剤をばらまいて鎮火させていた。
　この火災により基地周辺には煙が立ち込めるが幸い風向きが西向きだったため着陸自体は何とか可能だった。
　その隙を突きマントイフェルが自分のＴａ１５２を無理やり着陸させた。
　マントイフェル「ふう。久しぶりにこんな危険な着陸したな。全く寿命が縮むよ…トゥルト?」
　着陸させ機体をヤクの隣に駐機したマントイフェルはウィッチたちの方を見る、そしてそこに自分の非常によく知った顔があることに気が付く。
　そして飛行機から飛び降りると走って抱き着いた。
　クルピンスキー「え?」
　マントイフェル「トゥルト…トゥルト、もう離さないからな。もう、もう」
　クルピンスキー「え?え?え?」

クルピンスキーに抱き着いたマントイフェルは感極まったのか泣きながらうわごとのようにつぶやいた。
それにクルピンスキーや周りの人間は大混乱に陥る。
だがすぐにそれ以上の事が起こりマントイフェルとクルピンスキーの以外の意識がそちらに移った。
続いてきたテンペストがわざと脚を折るように着陸、エンジンを無理やり止めて滑走路を突進して停止したのだ。
幸いこちらは燃えなかったが滑走路上に大量の破片が撒き散らされとてもじゃないが使えなかった。
バーティ「ふう、一か八かだったが成功したな。」
胴体着陸したバーティはポッケから葉巻を取り出し吸いながらテンペストから降りてウィッチたちの方に向かった。
バーティ「あー。マントイフェルは何やってんだエディス?」
ロスマン「エディス?」
バーティ「え?エディス・ラムゼーじゃないの?
フランク・ラムゼー子爵令嬢の」
ロスマン「誰ですかフランク・ラムゼー子爵とかエディス・ラムゼーとか。
私はエディータ・ロスマン曹長よ」
バーティ「レディー、大変失礼なことをしてしまいました。申し訳ない。
俺はアルバート・クロンカイト中尉。まあバーティでいい。」
ロスマン「ええ。よろしくバーティ中尉。ところでエディス・ラムゼーは誰のことですか?」
バーティ「ああ。俺の婚約者だよ。フランク・ラムゼー子爵の次女で大学の同級生だった。」
バーティは半分無自覚で婚約者のエディス・ラムゼーと勘違いしてロスマンに話しかけていた。
バーティ「それにしてもそっくりだなぁ…背が低い割りに大人っぽいところとか見た目も声も喋り方の癖も。」

ロスマン「え？」
バーティ「まさかドッペルゲンガー…とか？」
バーティは彼女がエディスのドッペルゲンガーだと思う。
ドッペルゲンガーは超常現象の一つ、自分と同じ姿をした分身を見る現象のことだがその種類の一つに「第三者がそれを目撃する」というパターンがありこの場合それに当てはまった。
ロスマン「ドッペルゲンガー…そうかもね。」
バーティ「なら嬉しい。超常現象にはそれなりの興味を持ってるからね。実家も幽霊出る噂があったし。」
この手の話が大好きな人種であるイギリス人の中でも特にこの手の話が大好きなバーティは逆にこのことが嬉しかった。
だが次の瞬間、今度は川の方から大きな衝撃音が聞こえ全員が振り向く。
そこにはネヴァ川を滑るＰ４７があった。
もはや燃料が足りず滑走路が復旧するめどがない以上パットはネヴァ川に機体を不時着水させた。
それにウィッチやほかの人たちは呆然となる。
パット「ふう、なんとかできたな。おーい！誰か助けてくれ！」
着水するとコックピットから這い出たパットが基地から見てくる人たちに助けを求めた。彼もまた泳げない人間である。
ポー「あー俺が助けに…」
マントイフェル「トゥルト、ここにいろ。俺が助けに行く。」
ひかり「私が行きます！」
すぐに海軍軍人で泳げるポーとオリンピック近代５種の代表候補だったマントイフェルが向かおうとするがそこにひかりが割り込み助けに行く。
ひかりは魔力を使い水面を飛び跳ねるようにしてＰ４７までたどり着いた。
ひかり「大丈夫ですか？」
パット「あ、ああ。」
時間がかかると思いポッケからタバコを取り出して一服しようと

した瞬間ひかりが来たため半分呆然としながらも答える。
パット「で、どうするんだ?俺泳げないんだが。」
ひかり「大丈夫です。背中に乗ってください。」
パット「え?無理無理無理!君のようなフィユに背負われるほどクズじゃない。」
ひかり「私は大丈夫ですから。」
パット「本当に?なら…」
ひかりに促されてパットはひかりの背中に乗る。
そしてひかりは元の要領で岸まで戻った。
パット「あ、ありのまま今起こったことを話すぜ…
14、5歳の女の子が体重75キロで装備含めると85キロぐらいある男を背負って水面をジャンプして岸までの数百メートルを渡った。
な、なに言ってるかわからねえと思うが俺も何されたか分からなかった。
物理法則とかそんなちゃちなもんじゃねえもっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」
ポー「うん。言いたいことはよくわかった。ただキャラが崩壊してるぞ」
パットはあまりの衝撃にキャラ崩壊した口調でポーに話していた。
「同志ラル少佐!これはいったいどういうことかね?」
そんなことを言っていると突如後ろからロシア訛りの英語で大きな声がした。
振り返ると仕立てのいいルパシカを着た将軍と同じ服装をしてモシンナガンやPPsh41などを持った兵士、そして数人のドイツ軍の軍服を着た将軍がいた。
ラル「これはヴァトゥーチン大将。何の用でしょうか?」
リョーニャ「同志ニコライ・フョードロヴィチ!なぜあなたが!
去年の5月にウクライナの反動勢力に暗殺されたはずじゃ…」
リョーニャは声の主があのソ連邦英雄でレーニン勲章、赤旗勲章、

一等スヴォーロフ勲章受勲者、かつてのヴォロネジ戦線、第1ウクライナ戦線司令官ニコライ・ヴァトゥーチン大将だということに気が付いた。

ニコライ「君らと同じさ。まあそれは置いといて。ラル少佐、直ちに彼らを我々に引き渡せ。

引き渡さないのなら…」

ヴァトゥーチンが合図すると周りの兵士が銃を構える。

ラル「なにをする気かね？大将」

ニコライ「反動勢力は排除しなければいけないからな。よき党員はよきチェキストなのだよ。」

これはヴァトゥーチンの脅しであり彼は目的のためならば一切の手段を選ばない人物であることはよく知られていた。

そのためこの脅しも半分は本気で排除しようとしていた。

ラル「本当に引き渡さなければならないのか？」

ニコライ「我々の規定ではな。ただ本人たちが望めば別だが。」

ラル「だ、そうだ。お前たちどっちがいい？この過激な将軍に付いて行くかここにいるか？」

ラルはヴァトゥーチンが「本人が希望すれば話は別」という言質を取った。

そしてそのまま同じことをポーたちに聞く。

ポー「どうするってもなあ…」

マントイフェル「俺はここに残る！シベリアになんか行きたくない！死ねボルシェビキ！」

バーティ「そうだそうだ！ボルシェビキは悪だ！共産主義は死ね！」

リョーニャ「なんだとクソ貴族！共産主義万歳！同志レーニン万歳！同志スターリン万歳！」

マントイフェル「やるかてめえ！」

リョーニャ「プロレタリアート舐めるな！」

議論している間にまたマントイフェルとバーティ、リョーニャの間でケンカが勃発した。

その横ではパットとポーが落ち着いて議論していた。
パット「あの将軍に付いて行くか？」
ポー「うーんどうしよう…俺としてはかわいこちゃんのいる方が嬉しいかな？あんたは？」
パット「正直どっちでもいい。ここは民主主義的に多数決でどっちに付いて行くかで決めよう。」
パットが多数決でどっちに行くかを決めようと提案する。
ポー「賛成だ。で、あの貴族様とアカはどうする？」
パット「俺が止めるから待ってろ」
ポーは賛成するがその横ではまだ共産主義者と貴族が殴り合っていた。そこでパットが割って入ると3人を殴り倒す。
パット「あんたらいい加減にしろや。ここは多数決で決めるぞ。」
ポー「ここに残る奴は挙手。」
ポーが言うとバーティ、マントイフェル、ポーが手を上げる。
ポー「じゃああの将軍に付いて行くやつは挙手。」
次に手を挙げたのはリョーニャだけだった。
ポー「よしこれで決まりだ。ここに残るとするよ。よろしくラル少佐。
　ところで君もなかなかの美人さんじゃないか。ぜひ今度一緒にお茶でも…」
ラル「そうか。だそうだ大将。これでいいか？」
ニコライ「блядь…撤退だ！帰るぞ！」
そういうとヴァトゥーチンたちは帰っていった。
ニコライ「あの雌犬が…」
フーベ「今回は彼女が一枚上手でしたな将軍？
　次ぐらいには目にもの見せてやりたいですな」
ニコライ「はん、カーメネツ・ポードリスキイでのことを忘れたか？」
フーベ「それを言ったら私だってスターリングラードのことを忘れるつもりはないね。」

ヴァトゥーチンたちが行くとラルはポーたちの方を振り向き言った。

ラル「あの腹黒ジジイが…さてと君たちよく決断してくれた。

ようこそ第５０２統合戦闘航空団ブレイブウィッチーズへ」

第４話：勉強の時間（別題：オラーシャ製ウォッカに連合軍がエントリー）

訳あってポーたちは５０２に配属となったがリョーニャだけは同じ共産党員であるヴァトゥーチンについて行くことになった。
そのあとリョーニャだけは基地の司令室に連れてこられた。ラルは目の前のテーブルの奥の椅子に座りリョーニャの右斜め後ろにはロスマンが立っていた
ラル「リョーニャ、ところであの戦闘機にはいくら燃料が残ってる？」
リョーニャ「ほぼ残ってない。５０キロ飛べれば良い方だ。」
ラルはリョーニャにヤクの燃料のついて聞く。ヤクはほぼ航続距離限界近く飛んだ上に滑走路が短かったため出来る限り機体を軽くしようとしたため燃料がほとんど残っていなかった。
ラル「そうか。なら燃料補給をする必要があるな。」
リョーニャ「どうしてですか同志ラル」
ロスマン「大将のことですから明日にはヘルシンキまで連れて行くでしょう。そうなると燃料が足りないでしょ？」
リョーニャ「そうですね。」
ラルの燃料補給の話にリョーニャは疑問に思うがロスマンが後ろから補足する。
ラル「ただこの基地には航空機用燃料を補給する設備がない。
プルコヴォから借りる必要がある。だから今日の晩は泊まってくれ。
あとそれをやるには君のサインがいる。」
そのためには燃料補給設備が必要だがこの基地にはそれがなかった。というのもストライカーユニットは航空機用燃料を必要としない。
そのためそもそも非常に狭い基地なのでオミットされていた。なので燃料補給をするのはペテルブルクの南にあるプルコヴォの飛行

場から一式を借りなければならなかった。
リョーニャ「それで書類処理を行えと？」
ラル「ああ。頼むよ。」
リョーニャ「わかりました。」
そうしてリョーニャはこの手続きの書類の手伝いをしたがこの時５０２への入隊志願書類などにもサインしたが英語が喋る以外は壊滅的にできなかったためそれに全く気がつかなかった。
そのため翌日この書類が斜め向かいの海軍本部に届いた時、ヘルシンキに戻ろうとしていたヴァトゥーチンが電話でラルを問い詰め罵詈雑言を浴びせたがのらりくらりとかわされた。
これ以降海軍本部では５０２は最も嫌われヘルシンキのヴァトゥーチンのオフィスにはラルの顔写真にナイフが刺さっていたりラルのポートレートを的にして射撃をすることが流行ったという。

その間ポーたちは基地の説明をサーシャから受け案内が終わった頃には昼食の時間だった。
そして昼食を兼ねて自己紹介をすることになった。
食堂にはウィッチたちと適当に書類を処理した結果紙の上では５０２に配属となったリョーニャがいた。
ロスマン「えー訳あって配属となったアンティリーズ大尉たちと…」
マントイフェル「なんでイワンがいる」
リョーニャ「今日の晩は有難いことにここに止めてくださるそうだ。どこぞのブルジョアジーとは大違いだ」
バーティ「なんだとアカ！」
マントイフェル「やるかコミー！」
ロスマンが紹介しようとするが共産党員のリョーニャがいることに気がついたバーティとマントイフェルが食って掛かりまた喧嘩が始まった。
マントイフェル「死ねコミー！死ねボルシェビキ！死ねアカ！人類

のペストだ！」
バーティ「共産主義は敵だ！人類のゴミだ！生きるに値しないクソだ！」
リョーニャ「反動勢力！ブルジョアジー！反革命勢力！ファシスト！帝国主義者！」
マントイフェル「なにがファシストだ！あのゴミ共と一緒にするなイワン！」
バーティ「帝国主義の何が悪い！われらが大英帝国万歳！国王陛下万歳！」
リョーニャ「ウラーーーー!!スターリン万歳！レーニン万歳！」
すぐに殴り合いとなりそれを見てウィッチたちは頭を抱える。
菅野「何やってんだあいつら？」
二パ「さ、さあ？」
何故か頬に絆創膏をつけた菅野直が隣のニッカ・エドワーディン・カタイヤネン通称二パに聞くが彼女も何も言えなかった。
ジョゼ「どうする定ちゃん…」
下原「どうしましょうか？」
それにただただ早く飯が食べたいだけのジョゼことジョーゼット・ルマールと下原定子が顔を見合わせる。
だが次の瞬間、３人の脳天に一撃が食らわされた。
パット「いい加減にしろ。はあ…何やってんだが…」
あまりの醜態にキレたパットが３人の頭に一撃を食らわせ黙らせた。
ロスマン「えー、まあ色々ありまして今日から配属となった…」
ポー「アメリカ海軍第５艦隊第５８．１任務部隊所属空母サン・ジャシント配備第４５戦闘飛行隊所属ポール・アンティリーズ大尉だ。
まあポーって言ってくれ。」
パット「自由フランス空軍第Ⅱ戦闘航空群第５飛行隊ラファイエット所属パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉。
愛称はパットだ。」

バーティ「王立空軍第３３スコードロン所属アルバート・クロンカイト中尉。
　レディーたち、バーティと呼んでください」
マントイフェル「元ドイツ空軍中尉ヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェルだ。」
リョーニャ「同志、レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ上級大尉である。リョーニャと呼んでくれ。
　まあ今夜一晩だけ厄介になる。」
全員が自己紹介する。終わるとマントイフェルがバーティに聞く。
マントイフェル「なあバーティ、俺の資格はどうなってるんだ？戦時捕虜か？」
バーティ「そのあたりは後で話そう。」
パット「戦時国際法なら詳しいが手伝おうか？」
バーティとマントイフェルの身分を巡る話で法律の専門家でもあるパットが割り込む。
バーティ「専門家か？」
パット「司法試験に受かってパリ第１大学とハーバートのロースクール卒だが」
ポー「え…俺Ａ＆Ｍ大学なんだが…」
バーティ「イートンとオックスフォードだが何か？」
マントイフェル「アビトゥーア受かってすぐ陸軍士官学校に入ったから大学なんて行ってないぞ」
パットがサラッとハーバード卒のエリートだと言い驚く。
ハーバード当時でさえ全米一位のエリートである。名門だがハーバードほど高くないテキサスＡ＆Ｍ大卒のポーやそもそもアビトゥーア（ドイツの大学入学資格試験）に受かってすぐヴァイマル共和国陸軍士官学校に入学したマントイフェルとは大違いである。
パット「まあフランス語が使えないから辛いが。」
ポー「大学談義はやめよう、な。名門だけど外国だと知名度ゼロ大学出身の俺が悲しくなる。

それにかわいこちゃんたちの自己紹介がまだだろ？」
そういってポーが大学談義を終わらせる。
ロスマン「では改めてエディータ・ロスマン曹長よ。
この部隊では教育係をやってるわ。」
最初にロスマンが自己紹介する。
続いてクルピンスキーが自己紹介する。
クルピンスキー「僕はヴァルトルート・クルピンスキー、伯爵って呼んで？
ところでなんでさっきマントイフェル君は僕に抱き着いたのかな？」
マントイフェル「トゥルト、済まない。妻にあまりにもそっくりだったものだから…」
クルピンスキーがなぜ自分に抱きついたかマントイフェルに聞く。
クルピンスキー「妻に？」
マントイフェル「ああ。妻のヴァルトルートにな。
君に似てブロンドのベリーショートで運動好きで軽薄、程よく日に焼けた肌。
最高の女性だった。お転婆でおしとやか、つつましさとは真逆の正確だったけど心の底から愛していたよ…
だけどな…まあこの先はあんまり言いたくない。分かるだろ？」
クルピンスキー「その、なんていうかごめん。」
マントイフェルは素直に全てを話したがその内容に流石のクルピンスキーも謝る。
マントフェル「いいよ。いまだに心の折り合いをつけられない自分も問題だからな。
ところで君と、ロスマン、ラル少佐に兄はいるか？」
するとマントイフェルがクルピンスキーとロスマン、ラルに聞く。
クルピンスキー「兄？」
ロスマン「いませんが」
ラル「何かあるのか？」

マントイフェル「いや、昔の同僚に同じ苗字のがいたから聞いてみた。
　特にロスマンとは趣味があったしクルピンスキーは同郷だったしラルとは射撃の腕を競い合ってその上負傷して同じ列車で本国に戻ってたから仲が良かったんだ。」
ラル「そうなのか。」
リョーニャ「それなら聞きたいんだがサーシャ、君にも兄はいるか？」
マントイフェルの疑問に答えると今度はリョーニャがサーシャに聞いた。
サーシャ「え？私ですか？」
リョーニャ「第９親衛戦闘機師団師団長同志アレクサンドル・イワーノヴィチ・ポクルィシュキン中佐というエースがいるんだ。
　ソ連邦英雄に前人未到の３度輝きレーニン勲章受勲。偉大なる同志だ！」
彼の言ったアレクサンドル・ポクルィシュキンはソ連のトップエースの一人である。
そしてその名はよくプロパガンダに登場していた上に史上初のソ連邦英雄を３度受賞する栄冠に輝いていたのでよく知っていたのだ。
サーシャ「残念ながら私に兄はいません。」
リョーニャ「そうか。それは失礼した。」
サーシャの返答にリョーニャは謝る。
会話がひと段落したのを見てさらに下原とジョゼが自己紹介する。
下原「下原定子、少尉です。」
ジョゼ「ジョーゼット・ルマール、少尉です。」
そして次が菅野とニパの番だが何故か菅野がやたら不機嫌だった。
ニパ「菅野の番だよ」
菅野「ふん！うるせえ！」
ポー「君、どうしたんだい？何をそんな不機嫌そうにしてるんだい？
　それとも俺みたいないい男がほかの女に…」

菅野「うるせえ！そんなんじゃねーよ！だいたいあんたらいったい何者…」

ポー「まあパラレルワールドからのはみ出し者かな？信じるかどうかは君次第だが」

菅野「パラレルワールド？そんなの小説の中だけ…」

ポー「残念ながらパラレルワールドは現実に存在するんだ。シュレーディンガーの猫って思考実験だけど。」

ひかり「シュレーディンガーの猫？」

ポーの言ったシュレーディンガーの猫に全員が首をかしげる。

そしてポーはシュレーディンガーの猫の解説を始める。

ポー「量子力学の思考実験の一つさ。

量子力学ってのは物質の分子や電子、粒子、原子のふるまいについての学問さ。

まず大前提として量子力学では量子は観測されるまでは本当に分からない。

つまり観測されるまではどこにでもあるかもしれない。

俺の頭の上にもあるかもしれないし君の尻の下にあるかもしれない、川の向こうにあるかもしれないしこの建物の一つ下の階にあるかもしれない。

本当に分からないんだ。

そしてその場合量子力学のコペンハーゲン解釈ではもしのその電子が一つの場合、これを電子Ａとすると「俺の頭の上にあるかもしれない電子Ａ」と「君の尻の下にあるかもしれない電子Ａ」が同時に本当に存在するとされてる。」

菅野「そんな馬鹿な…」

ポー「これがあり得るんだよ。なぜなら観測していないから。

観測していないものが「あっちにあるかもこっちにあるかも」って「観測される可能性」として存在しているんだから。

言葉遊びぽいが量子力学なんてこんなもんだ。

で、この「同時に複数の場所に存在する可能性」がある観測前のなんというかモヤっとした状態のことを重ね合わせ状態って言う。

ここまで合点したか？」
ロスマン「ええ。何とか。」
ポーの問いかけにロスマンが答える。
ポー「で、本題のシュレーディンガーの猫はまず中身が見えず聞こえない何も観測できない箱に、猫、電子Ａ、電子を観測するセンサーとそれにつながった毒ガス発生装置を入れてフタを閉める。
そして一定時間たった時猫は生きてるかどうかっていう簡単なものだ。
で、この場合もしセンサーのある場所、ここでは仮に位置Ａとしよう、位置Ａに電子があった場合猫は死んでる。
もしほかの場所、仮に位置Ｂとした場合そこにあった場合猫は生きてる。
そしてどちらにあるかはフタを開けるまで分からない。
では、この場合量子力学的には電子Ａの状態はどうなってますか？伯爵！」
クルピンスキー「えーと、電子Ａが複数の状態で同時に存在している？」
ここでポーがクルピンスキーに問いかける。それにクルピンスキーはなんとか答える。
ポー「そう！この場合電子Ａは複数の状態で同時に存在している。
つまり猫も同時に生きている状態と死んだ状態で存在しているということだ。」
ひかり「え、それおかしいですよね？死んでるのと生きてるのが同時に…」
ポー「そう！そこなんだよ！この実験で言いたいのは！
量子力学の理論が猫というマクロなものに影響を与えるっていうことが問題なんだ！」
菅野「確かにそうだけどそれとこれがどう関係…」
ポー「猫が死んだ状態と生きた状態の複数の状態で可能性として存在する、ならば原子や電子で構成された俺たちも例外ではないのか？」

ひかり「つまりはポーさんたちの世界はこの世界で観測される前の可能性の一つの世界ってことですか？」
ここでまさかのひかりがポーの言いたいことを理解してまとめる。
ポー「そう！そういうこと！君賢いな！すごい理解力だ」
ひかり「いやぁそれほどでも」
ポー「謙遜するな。理解力があるのはいい事だ。勉強に役に立つぞ。知は力なりだ。
ところで君、名前は？」
それをポーは絶賛する。
ひかり「雁淵ひかりです。」
ポー「ひかり君、知は力だ。いいね？」
ひかり「はい！」
ポー「よし、それじゃあさっさと飯を食おう」
それに続いて他の者も座って食べ始めるがバーティが下原に聞く。
バーティ「なあ、塩あるか？」
下原「塩、ですか？必要ないと思いますが。」
バーティ「いや、塩は必要だ。」
何故か塩を求めた。そして困惑しながらも下原が隣のキッチンから塩を持ってくると一心不乱に塩をかけた。
それに下原も含めた全員がドン引きする。
そしてある程度かけるとそのまま上品に口に運び顔をしかめながらも食べ続けた。
実はこれがイギリス流の食事である。とにかく一心不乱に塩をかけて味付けしたしょっぱい何かを黙々と食べる。このクソみたいな食事というものに対する愛情や良心、さらに言えば楽しむと言う発想すらない食べ方がルールだった。
パット「これだからロスビフ野郎は。えーとこの絶品料理を作ったのは誰かな？」
下原「あ、私です」
パット「下原、全く持って素晴らしい料理だ！いやあありがとう！」
ポー「ああ、本当に美味い。最高だ」

パットは下原を呼ぶと料理を絶賛した。それにポーも続く。
二人とも美食家であるため素直に下原の料理を褒めていた。
下原「いやそれほどでもないです。」
パット「謙遜するな。料理の腕は隠しようがない。人間不味くは作れても美味く作るのは難しい。
ましてや人に食べさせる料理だ。不味く作る奴がいるとしたらそいつは料理を愚弄してる。
イギリス人以外はな」
謙遜する下原をさらに褒めるパット。
皮肉を込めて言うが皮肉を言われたバーティはただ黙々と食べていた。
ある意味フランスとイギリスのテーブルマナーの違いが現れイギリスでは食事の際は黙々と食べるのがルール、それに対してフランスは喋りながら食べるのが普通だった。
この後昼食の間、各自ウィッチ達と親交を結んだのだったが途中から共産主義者との食事の投げ合いとなり約3名つまみ出されたのは余談である。

第５話：戦闘機パイロットの準備体操の時間

昼食後、ポーたちは格納庫に連れてこられていた。
マントイフェル「で、どうするんだ？」
昼食時に共産主義者（リョーニャ）と派手に喧嘩したマントイフェル、バーティ、リョーニャは着替えていたがそれ以外は大して変わらずマントイフェルはロスマンとサーシャに聞いた。
サーシャ「これから訓練です。」
ポー「訓練って言ってもヘルキャットとサンダーボルト、テンペストは全損してる上にこの基地、多分航空機用燃料用設備ないだろ。
その上どちみち危険すぎて離陸できない。」
リョーニャ「ヤクならなんとか離陸できるがそれだけだろ。」
ロスマン「誰が飛行機でと言いましたか？」
ポーやリョーニャの話にロスマンが返す。
すると格納庫の段の下からひかりの声が聞こえる。
ひかり「あれ？僕かな？」
パット「あー、雁淵？何やってんだ？」
ひかり「うわ！ジャベールさん！いたんですか！」
気になったパットが上から覗き込んで声をかけると驚いて尻餅をついた。
サーシャ「何をやっているんですか？」
ひかり「あ、あの！これはお姉ちゃんがユニットの声を聞けって…」
サーシャ「基礎体力はあるようですね。」
ひかりに気がついたサーシャとロスマンが発進台から降りて横から声をかけ、ひかりは驚きながら話すがサーシャは無視する。
その横ではロスマンが書類を見ながら話す。
ロスマン「初頭から中等訓練は修了、成績はＦランク。全く役に立たない資料ね。
ユニットを履きなさい。」
ひかり「はい！」
ロスマンの指示にひかりはユニットを履く。

ロスマン「貴方達、よく見てなさい。それじゃあエンジン始動」
ロスマンがポーたちもよく見るよう言うとひかりにエンジン始動を指示する。
それにひかりはエンジンを始動させる。
サーシャ「魔法力混合比９：１に、回転数１５００でキープ。」
ひかり「はい！」
ポー「おい、エンジン音がおかしいぞ！パワーが出てない！」
だがここでポーがエンジン音がおかしいことに気がつく。パイロットはその性格上エンジンに関しては些細なことにも注意を向ける生き物であるためどうにもパワーが出ていないという異音に気がついた。
それにサーシャも気がついていたようで注意する。
サーシャ「ベースとピークの回転数が１０００も離れているわ。もっと制御に気を配って」
ロスマン「酷いわね…」
その状況にロスマンが漏らす。
サーシャ「２０００に上げて！」
ひかり「はい！」
サーシャがさらに指示してなんとか離陸推力を得る。
サーシャ「扶桑の新型、２０００馬力で最高速度６００キロ、航続距離は２０００キロクラス。
どんな飛行をするか楽しみです。」
ロスマン「発進」
サーシャは新型ユニットへの期待していた。ロスマンが離陸を指示しひかりは離陸する。
だがその飛行は控えめに言って無茶苦茶、とても安定しているとは言えなかった。
ポー「あいつ大丈夫か?とてもステーブルしているとは言えないぞ」
ロスマン「２０００まで上げたはずだけど?」
サーシャ「加速が悪いですね」

その様子を見てポーは不安を漏らす。サーシャやロスマンも同じようなことを言う。

ロスマン「３００に上昇。その後基地外周に沿って旋回してから滑走路上空を全速で通過」

ひかり『はい！』

ロスマンの指示に従い飛行しようとするが無茶苦茶な飛行の末とうとう煙を吐き始めて

ロスマン「扶桑の新型って欠陥品なの？」

サーシャ「機体は悪くありませんね。魔法力がまったく足りていません」

ロスマン「いいわ。戻ってきて。」

ひかり『え！もうですか？』

ロスマン「そうよ。もういいわ。」

その様子に呆れたロスマンがひかりに戻るよう指示する。

ポー「なあ、サーシャ君、なんで俺たち呼ばれたの？」

ロスマン「本当はウイッチの飛行について教えたかったのだけどひかりさんがアレだったからやめたわ。」

ここでそもそもなんで呼ばれたのか疑問に思ったポーがサーシャに質問するがそれに後ろからロスマンが返す。

ひかりが地上に戻るとユニットにエンジンに計器をつけてユニットの性能を計測し始めた。

サーシャ「じゃあ、全力で回してみて」

ひかり「はい！」

サーシャが全力で回すように指示するが計器にはよろしくない数値が出た。

サーシャ「やっぱり、このユニットの必要魔法力に足りてませんね。」

ひかり「おかしいな…ちゃんと飛べたのに…」

ロスマン「飛べたんじゃない。飛ばせてもらっていたのよ」

ひかりの言葉にロスマンが現実を突きつける。

ポー「え？ちょっと待て、そいつは兵器だろ？

兵器ってのは誰でも、たとえ小学校を出てないやつでも訓練すれば使えるってのが大前提だ。
なのにただでさえ少ない適合者の中からさらに少ない人しか使えない兵器？それ本当に兵器か？
曲芸の道具じゃないんだふざけてるだろ。」
そこにそもそもユニットには兵器として根本的な欠陥があるのではないのか？という疑問をポーが投げかける。
ロスマン「残念ながらユニットっていうのはこういう兵器なの。」
菅野「ああ。だから素人じゃ無理だ。俺が使う！」
それにロスマンが返すと後ろから菅野の声が聞こえて振り返る。
ひかり「駄目です！チドリはお姉ちゃんと私のです！」
菅野「何がチドリだ！ふざけんな！」
サーシャ「新型に関しては誰が使用するのが最適かいずれ指示します！」
菅野「どうせ、こいつには無理だ！」
ひかり「そんなの分かりません！」
菅野「エンジンも満足に回せねえくせに何言ってやがる？」
ひかり「それは…」
パット「さあ、そこまでにしようか。これ以上仲間内で喧嘩したところで何の得もない。
内部で喧嘩して総崩れとかシャレにならないぞ。」
そのまま菅野とひかりで口論が始まるがそこにパットがさらに過熱する前に止める。
菅野「ちぇ、孝美は居ねえ、新しい巣だって出来てる。
そんな状態でこんなど素人を入れても足手まといになるだけだ」
マントイフェル「そうか？戦争は数だ。ここから教育、訓練すればまあ数合わせぐらいにはできると思うぞ。」
菅野が愚痴るがそれにマントイフェルが返す。彼からすればひかりの練度はまだ大戦末期の「着陸はおろか離陸さえおぼつかないガキ」な補充パイロットや「まともに整備訓練さえしたことのない整備

兵」、「元ＲＡＤかドイツ系ポーランド人か東方義勇兵かヒトラーユーゲントの警備兵」、「女性補助兵」なんかよりかはずっとマシだった。

ロスマン「とにかく、その判断はラル隊長が下します。」

最後にロスマンがそう言って話を終わらせる。

そのままひかりはラル隊長の元に連れて行かれる。

ポー「なあ、俺たちどうすれば良いんだ？」

ロスマン「今日のところは解散。続きは明日するわ。部屋に帰ってください。」

ポーがどうすれば聞くとロスマンは部屋に帰るよう指示する。

ポー「はいよ。たく、なあ先生、バーボンあるか？」

サーシャ「バーボンはありません。ウォッカでしたらありますけど。」

ポー「ちぇ、ウォッカかよ。久しぶりの陸だからバーボンが飲みたいのに」

リョーニャ「ウォッカがあるのか？貰おう」

ポーはロスマンにバーボンがあるか聞くがないがウォッカはあるとサーシャが返す。

米海軍では船の上は禁酒であるため酒好きのポーにとっては陸に上がると言うことは酒を飲めると言う事だった。

そして彼は故郷のバーボンが大好きだったがこの基地にはバーボンがなくそのかわりウォッカがあった。

ただロシア人（正確にはアゼルバイジャン人とベラルーシ人のハーフの母とロシア人の父らしいが）のリョーニャにとってはそれで十分だった。

なにせウォッカはロシア人にとっては心の友であり辛い時、悲しい時などあらゆる時に絶対に裏切らない友であり最高のご褒美で通貨だ。

――――――――――

リョーニャは途中でキッチンからウォッカの瓶とコップを持って行くと５人はラルからあてがわれた専用の談話室に集まった。

これはラルが２、３人ではなく５人という多さから特別にあてがっ

たものだ。部屋は真ん中に暖炉が置かれてその周りに机と椅子が置かれ窓以外は一面空の本棚に埋め尽くされていた。
ポー「はぁ…結局どうするんだ？」
バーティ「さぁ？正しい思想を再教育するか？」
リョーニャ「やるかブルジョアジー？」
バーティ「冗談だ。これ以上やってみろ、俺たちがネヴァ川に捨てられる。」
マントイフェル「ああ。流石に捨てられたくはない。」
部屋でそれぞれ椅子に座るとジョークを言ったりしていた。
するとリョーニャがウォッカの瓶を開けると持って来たコップに注いで呑み始めた。
リョーニャ「ああ美味い。最高だ。ロシア人は食卓に食事がなくとも生きていけるが酒がないと革命を起こす。」
バーティ「ならソ連の醸造所を全部爆破しよう。」
リョーニャ「その場合約1億の全ロシア人が怒り狂ってドーバー海峡を渡るぞ。ロシア人は酒だけは容赦はしない。」
リョーニャの感想にバーティは毒舌で返すとそれにジョークで返す。
するとポーがため息をついてウォッカの瓶を取って呟く。
ポー「はぁ…こいつがバーボンだったらなぁ…開けーゴマ！みたいにこいつがバーボンになればなぁ…魔法って本来そういうもんじゃ…」
次の瞬間、ポーとウォッカの瓶が青く光るとウォッカがバーボンのジン・ビームに変わっていた。
そしてポーの頭からは猫の耳が出ていた。
ポー「えーなにが…ウヒョー！バーボンだ！やったぜ！最高だ！」
リョーニャ「おい！それどころじゃないだろ！頭触ってみろ！猫の耳が生えてるぞ！」
ポー「え？そんなわけ…本当だ…え？え？え？死ぬの？ねえ、死ぬの？なあ、あんた医者だろ？」
バーボンができて喜んだのもつかの間、リョーニャの指摘されて頭

を触ると猫耳が、尻には尻尾が生えていることに気が付き医者のリョーニャに詰め寄る。
リョーニャ「落ち着け。とにかく、分からん。科学的に説明できない。」
バーティ「とりあえず魔女狩りでもするか？」
マントイフェル「ピッツフォークと松明と十字架持ってくる。」
パット「おいバカやめろ。とにかく誰か呼んでくる。」
そういってパットが誰か呼ぼうと部屋から出ようとした瞬間、サイレンが鳴った。
どうやらネウロイが来てスクランブルをかけたらしい。
パットはとりあえず誰かいるだろうと思い格納庫に行く。
格納庫のに付くとサーシャたちが入れ違いで出撃していった。
それを見ていたラルが入れ違いで来たパットに気が付き声をかける。
ラル「どうしたパット？」
パット「ラル少佐、だいぶ不味いことが起きた。急いできてくれ」
ラル「分かった。」
パットの話しぶりから尋常ではないことが起きたと思いラルはパットに付いて行く。

パット「とりあえずラル少佐を連れてきた」
ポー「助かった…少佐、いったい何が起きたんでしょうか？」
パットがラルを連れて入ってくるとポーはすぐに猫耳を見せる。
ラル「やっぱりな。」
ポー「ん？」
ラル「やっぱりウィッチだったか。」
それを見たラルが言う。
バーティ「え？ウィッチって女子だけじゃないのか？」
ラル「確かに基本はそうだ。だが君たちのような素性の人間は別だ。
君らのような素性の場合は魔力を持つ可能性がある。」

マントイフェル「まさかとは思うが…」
ラル「ああ。君ら全員から魔力を感じるよ。だからこの基地に置いたんだ。リョーニャも含めて。」
ラルがサラッと衝撃の事実を話す。
リョーニャ「ちょっと待て。俺は将軍と一緒に…」
ラル「さっきこの部隊への異動希望書にサインしただろ。」
リョーニャ「は?そんなのにサインしてないはずだ」
ラル「知らん。君がよく書類を読まずにサインしたのが悪い。」
リョーニャ「そんな…」
だがその内容にリョーニャが突っかかるがラルは躱す。
ポー「まあ、俺たちがウィッチやらなにやらってのは分かったけどウォッカがバーボンになったのはどう説明すればいいんだ?
キリストになったのか?」
ラル「キリスト?なんだそれは?まあいい。おそらく固有魔法だ。」
バーティ「あれか?早くなったり電撃食らわせたり映像覚えたりできなやつ」
ラル「ああ。話を聞く限りポーの固有魔法は何かを別のものに変えるものだ。」
ポー「なんか便利そうだな。」
ラルがポーの固有魔法を推測する。
ラル「かなり便利だろう。とりあえず続きは先生たちが帰ってからにしよう」

それから数十分後、ロスマンたちが帰ってきた。
ポーたちとラルとロスマンは格納庫の隅でユニットを見ながら俯いているひかりを見ながら話し合いを始めた。
ラル「どうだった?」
ロスマン「残念ながら…」
ラル「そうか。こっちでも少しあった。先生見てくれるか?」
ロスマン「はい。」

ポーたちのことをロスマンに任せるとひかりに話しかけた。
ラル「雁淵ひかり軍曹」
ひかり「は、はい！」
下原『ラル隊長、ニパさんがまた墜落しました。
　原因は冷却機に大量のイナゴが混入。』
ラル「なんだそれは」
ポー「昔農業機飛ばしてたけどそんな事故聞いたことないぞ」
ロスマン「相変わらずついてないわね。回収班は？」
下原が二パが墜落したことを伝えるがその原因が農業機を飛ばして農薬散布をした経験のあるポーでさえ聞いたことのない原因で呆れる。
ジョゼ『墜落場所の特定が難しく、地上からの捜索には時間がかかりそうです』
ラル「夕食には間に合いそうも無いな」
ポー「日が落ちる前に探さないとな。なあ今日の日没って何時だ？」
ポーは日没前に探す必要があることから時間を気にする。
捜索救難では夜間の場合当時では神業レベルの腕と運が求められる。
なにせ現代の航空救難活動の最初期の時代である。航空救難活動の歴史に名を残しているスイス空軍によるガウリ氷河における不時着した米軍輸送機生存者の救出が１９４６年１１月、それより前の時代である。
何ができるか、どの程度のレベルしかできないかは推して知るべし。
なのでポーは日没を気にしていた。
ひかり「私が助けに行きます！」
ロスマン「貴方が行っても…」
ラル「宜しい、許可する。
　現在、管野少尉がラドガ湖上空で待機中だ。それに同行しろ」
ひかり「はい！」

するとひかりが志願しラルが即許可を出し離陸する。
ロスマン「よかったのですか？」
ポー「まあ大丈夫じゃないか？捜索救難は戦闘行動じゃないし。」
ラル「思い出ぐらい持ち帰らせてやってもいいだろう…扶桑に返すための書類を頼む」
ロスマンが聞くがポーは捜索救難は基本的に戦闘行動ではないので大丈夫だと言う。
ラルはひかりを扶桑に返す書類の用意を頼むと戻っていった。
残されたポーたちにロスマンが聞く。
ロスマン「で、何があったのかしら？」
ポー「あーその、あれだ。ウィッチだとわかった。それで…」
ロスマン「訓練をしろってわけね。」
ポー「多分な。」
ロスマンはラルの意向を忖度する。
ロスマン「ユニットのついてはどうやら戦闘機を操縦するのと同じ感覚でやれば簡単だそうよ。
ところで貴方達何の戦闘機に乗っていたの？」
５０１の情報から戦闘機を操縦する感覚でやれば簡単だと聞いていたためロスマンが聞く。
ポー「バッファロー、ワイルドキャットとヘルキャットだけど。」
パット「スピットファイアとＰ４７。」
バーティ「ハリケーン、タイフーンそれとテンペストだが。」
マントイフェル「Ｂｆ１０９のＦまでとＦｗ１９０のＡからＤそれにＴａ１５２のＨ」
リョーニャ「ハリケーン、スピットファイア、Ｙａｋ9だが。」
ロスマン「物の見事にこの基地で使ってないユニットばかりね…」
操縦経験のある戦闘機が物の見事に５０２で使っていないものであったのにロスマンは呆れる。
そして少し俯いて考えると口を開いた。
ロスマン「いいわ。貴方達、ユニットを使う訓練は調達できるまで待つとして明日から特別な訓練をするわよ。いいわね？」

ポー「ああいいよ。」
バーティ「まあそっちの方がいいよな。」
マントイフェル「何もしないよりかはずっとマシだ。」
リョーニャ「別に構わんよ。」
ロスマンの話に全員が即答する。
これでお開きとなり翌朝から地獄の日々が始まる…かも?

第６話：魁!!?・ウィッチ塾

ニコライ「ラル少佐、この書類はどういうことだ！
貴様人員どころかうちで作ってる改修型ユニットまで強奪する気か!?」
ラル『大将、私は本人の希望を優先したまでですが』
翌朝、ヴァトゥーチンは電話でネヴァ川の対岸にいるペテルブルク最大の要注意人物で「煮ても焼いても蒸しても揚げてもミンチにしても食えない奴」と評されていたラルに電話で怒鳴り散らしていた。
その理由はこの日の朝、ペテルブルクにあるペテルブルク軍行政司令部にリョーニャの移動とストライカーユニットの補充要請が来たことだった。
この町の軍行政司令部は丁度彼らの派閥の一人で同じ素性のニコライ・エラーストヴィチ・ベルザーリン中将が就いていた。そしてこの書類が来たことを即座にヴァトゥーチンに連絡、その結果怒鳴り散らしていた。
ニコライ「どうせ姑息な手を使ったんだろ！え！」
副官「あのー大将？飛行機の時間が迫ってるんですが…」
ニコライ「なに？Сука！Блядь！これ以上は次からだ覚えてろ！」
怒り狂っていたが副官から飛行機の時間が迫っていることを突かれ冷静になり電話を切る。
ニコライ「同志ベルザーリン、ユニットはやるが運ぶときはヘルシンキ経由で飛行機でやってくれ。
はぁ…本当ならあの要塞ごと吹き飛ばしてやりたいところだがヴァルダイ突出部の掃討作戦で貸しを作りたいからな…」
ベルザーリン「そうですな同志ヴァトゥーチン。
求めてきたユニットのうちＦｗ１９０Ｄとヤクは確かチフヴィンのデポにあったはずです。
残りはストックホルムに聞く必要がありますが恐らくあるでしょう。」

ヴァトゥーチンはラルの扱いに溜息をつく。なにせ彼らにとって一番重要なのは北のグリゴーリより南に広がるヴァルダイ丘陵にあった突出部だった。

彼らは通常の補給路、北欧経由、ムルマン・ペトロザヴォーツク鉄道、セヴェロドヴィンスク・ノヴォホルモゴルイ・ホルモゴルイ鉄道とは別にペテルブルク～チフヴィン～チェレポベツ～ボログダ～ヤロスラブリ間の鉄道を補給路として重視していた。

このルートはペテルブルクから南東の交通の要所チフヴィンを経由してルイビンスク人造湖を望む鉄鋼の一大コンビナートチェレポベツを通りボログダで北に行きセヴェロドヴィンスクに向かう鉄道と南に向かいヤロスラブリ、ルイビンスクそしてモスクワに向かう鉄道に分かれるルートだった。

このルートは補給路が非常に長くなるが安全で輸送能力・補給の安定性という面では各段の差があった。

だがこのルート最大の問題はペテルブルクの南ヴァルダイ丘陵のノブゴロドからヴェリーキエ・ルーキ、ポルホフからヴェシエゴンスク郊外に至る地域に突出した南北約２７０キロ、東西約４５０キロの大突出部通称ヴァルダイ突出部と呼ばれる突出部が問題だった。

この地域の結果モスクワ～ペテルブルクの直通路線が封鎖されていた上に先端部がルイビンスク人造湖湖畔のヴェシエゴンスク郊外といういつチェレポベツが攻撃されてもおかしくない位置にあるという問題があった。

そのためナロードニキ作戦ではこの突出部の包囲・殲滅作戦「デカブリスト」が最優先であった。

この作戦には彼らの常套手段、ベラルーシやウクライナ、コーカサスで大成功した戦術を使う予定ですでにノブゴロドの北にはそれ用の数万門もの火砲類が弾薬とともに用意されつつあった。

そしてデカブリスト作戦が中止となったこの時点でさえ彼らは手持ちのカードを使ってどうにか作戦を実行しようとしていた。

その時重要となるのが５０２だった。彼らは常々「制空権さえ得れば勝」と公言していたため５０２のエアカバーは絶対に必要でこれが

なければ作戦実行さえ不可能だった。
なので彼らは完全な統制下においていない現状、いくら横紙破りしようが５０２には強く出れないという弱みがあった。
ベルザーリン「同志ヴァトゥーチン、それにしても物資の要求についてはまだユニットと武器弾薬はわかるんですがこれなんなんでしょうかね？」
ふとベルザーリンは話題をラルが出してきた物資の追加要求に話題を変える。
ニコライ「同志ベルザーリン、お前も思うか？」
ベルザーリン「ええ。なんなんでしょうかこの騎兵装具一式、軍馬一頭、フェンシングの道具一式、ヴァイオリン、ピアノ、アコーディオン、トランペット、マンドリン、釣りの道具二人分、そしてこの大量の本。」
ニコライ「だよな。種類も無茶苦茶だ。マルクス、エンゲルス、レーニンもあればブルジョア的なもの、軍事関連に神話まで…」
ベルザーリン「共産党宣言、戦争論、海上権力史論、シャーロック・ホームズ、怒りの葡萄、風と共に去りぬ、旧約聖書、新約聖書、コーラン、レ・ミゼラブル、社会契約論、ガリア戦記、算術、アリストテレス全集、プラトン全集、五経、論語、孟子にニュートンにシラーにゲーテにダンテにシェイクスピア。」
ニコライ「それになんだ？レーニン全集、総力戦、アハトゥンク・パンツァー、我が闘争、二十世紀の神話などなど…
あの小娘が読むのか？」
ベルザーリン「こんな難しい本を読めるほど賢いでしょうか？」
二人は注文して来た物資、特に大量の古今東西、ジャンルも種類も何もかもがバラバラの本に首を傾げた。
この一見すれば軍隊で使うものとは思えない物資を注文して来たのはこの前の夜に遡る。

前日の夜
リョーニャ「で、同志ロスマン。同志の言っていることはなんとな

くわかる。だがまだ半分信じられん。
　本当に俺たちがウィッチなのかという物的証拠はないのかね？」
　ロスマンやラルがポーたちがウィッチだという話にリョーニャは懐疑的だった。
　というのも彼は共産党員である。なのでオカルト的なものはおろか神の存在さえ否定する夢もロマンのへったくれもない人間だった。
　パット「ああ。証拠がない以上決定打にはならない。裁判なら証拠不十分で棄却できるぞ」
　さらにパットがタバコを吹かしながら裁判に例えて続ける。
　ロスマン「まあ口だけでは信じないでしょうね。
　　そうね、手っ取り早い方法は…」
　ロスマンがそういうとテーブルの上に置かれたウォッカを飲み終えたリョーニャのグラスを手に取るとパットに投げつけた。
　パット「うぉ！」
　咄嗟にパットは両手を前に出し構えるがそこに青いシールドが現れそこにコップが当たり粉々になる。
　ロスマン「これでわかったでしょ？ところであなたの使い魔は？」
　パット「まあわかったのはいいがなんか生えてるぞ。鳥の羽っぽいが」
　パットは頭を触る。頭にはグレーの羽が生えていた。
　バーティ「鳩じゃないか？色からしてそれっぽいし。あと、次俺にやってくれ」
　その羽をバーティは鳩と推測しロスマンに次にしてくれるよう頼む。
　バーティに言われるとロスマンは今度はポーのバーボンの瓶を取るとバーティに投げつける。
　するとこちらも青いシールドにあたり粉々になる。バーティの頭には一部が白い黒い羽根ができていた。
　バーティ「どうなってるマントイフェル？」
　マントイフェル「一部が白い黒い羽が生えてる。多分カササギじゃ

ないか?」
ポー「そんなことより俺の酒を返せ。裁判所に行くか?先生」
ロスマン「ごめんなさい」
マントイフェルがそれをカササギだと分析する。
その横ではバーボンを滅茶苦茶にされたポーが懐からレジスタード・マグナムを取り出してロスマンに向けロスマンは平謝りする。
マントイフェル「で、俺はどうなるんだ?」
リョーニャ「ああ。話はまだ済んでないぞ」
ロスマン「そうね、危険な方法だけど一つあるわよ。」
「危険な方法?」
ロスマンの言う危険な方法にリョーニャとマントイフェルは顔を見合わせる。
そして次の瞬間、ロスマンが懐からＰＰＫを取り出して向ける。
マントイフェル「ちょっと待て先生、殺す気か?」
リョーニャ「これだからブルジョアジーは!」
向けられたマントイフェルは両手を上げ、リョーニャはトカレフを取り出してロスマンに向ける。
ロスマンの後ろにいたポーもマグナムを向ける。
ロスマン「大丈夫よ。ウィッチなら銃弾をシールドで止めるから」
マントイフェル「いや、もし違ったらどうなるんだ?」
ロスマン「大丈夫、死なないように腕を狙うわ。それにいざという時はジョゼさんがいます」
リョーニャ「いや、問題はそこじゃない気がするぞ」
ロスマンの言い分にリョーニャが素で突っ込む。
だがロスマンはそれを無視してロスマンが撃つ。
弾は二人とも青いシールドが現れ止まる。リョーニャには黄色と黒の鮮やかな色の羽が、マントイフェルには馬の耳が生えていた。
リョーニャ「Сука!Блядь!何が起きた!?」
マントイフェル「死ぬかと思った…」
バーティ「マントイフェル、頭に馬の耳が生えてるぞ。」
パット「リョーニャも黄色と黒の羽が生えてる。」

マントイフェル「本当か?どれ…本当だ。元騎兵将校で馬術競技者だからな。

多分トラケナーじゃないか?」

リョーニャ「黄色と黒の羽?ゴシキヒワか?」

それぞれそれを競技用の馬の品種であるトラケナー、ロシアの国鳥でもあるゴシキヒワと分析する。

ロスマン「これで貴方達がウィッチだってわかったでしょ?」

リョーニャ「ああ。それにしてもこれどうやって生えてるんだ?正直医者の端くれとして気になる。」

ロスマン「え?あなた医者なの?」

リョーニャ「そうだが。正直ウィッチじゃなくて軍医として勤務もできるんだが。」

ロスマンがリョーニャが医者だったことに驚く。

ロスマン「それは有難いわ。この部隊、怪我してくる人が多いから」

リョーニャ「そうか。ただ専門は内科だが。」

ロスマン「ないよりマシでしょ?」

リョーニャ「まあそうだな。」

ポー「ところでユニットを持ってくるついでに頼めないか?」

するとここでポーが話題を変える。

マントイフェル「俺もいくつか頼みたい。」

バーティ「俺もだ。」

ロスマン「いいわ。物にもよるけど何を頼むのかしら?」

ポーたちがユニットのついでに頼みたいものがあると言いロスマンが聞く。

マントイフェル「そうだな、軍馬一頭、騎兵装具一式、フェンシングの道具一式、ヴァイオリン、トランペットか?あと本。」

バーティ「釣りの道具一式と本とピアノとアコーディオン」

ポー「あ、釣りの道具は俺の分も頼む、あそれに本も」

パット「本ぐらいか?大した趣味もないし」

リョーニャ「マンドリン、それに本も。」

ロスマン「多いわね。それにしても本?」

バーティ「本だ。知は力なりだ。」
ロスマンはそのオーダーに若干困惑するがさらに聞く。
ロスマン「本ってどの本？」
ポー「そうだな、ロビンソン・クルーソー、怒りの葡萄、風と共に去りぬ、聖書、海上権力史論、トム・ソーヤの冒険、クトゥルフ神話後なんだ？」
バーティ「シャーロットホームズシリーズ全巻、シェイクスピア全集、アガサ・クリスティ全巻、ローマ神話、アリストテレスとプラトン、ホッブス、ロック、マルクス、エンゲルスも」
パット「ルソーも忘れてるぞ。レ・ミゼラブル、モンテ・クリスト伯、サン＝デグジュペリも」
リョーニャ「トルストイとマクシム・ゴーリキー、プーシキン、チェルヌイシェフスキー、レーニンもだ。
後なんだ…」
ロスマン「ちょっと待って！多すぎわよ！これ以上は面倒だからリスト書いてちょうだい！」
あまりの多さにロスマンはとうとうメモを取るのをあきらめリョーニャたちにリストを書かせた。
それがベルザーリンに提出された山のような本と物資のリストの正体だった。

翌日、どういうわけかひかりとポー、パット、バーティ、マントイフェル、リョーニャはウィッチ用のＭ２、Ｓ１８／２０００、イスパノ・スイザ　ＨＳ．４０４　ＭｋＶ、ＳｈＶＡＫを持って射撃場に来ていた。
この全部が魔力を使わないととてもじゃないが一人で運べない、特にイスパノは設計上モーターカノン用だったため固定位置が銃身の極端に前の方であったため銃身の前の方からフレームが伸び固定していたため非常に嵩張った。

ポー「で、何するんだ?まさかこのデカブツを撃つ気じゃ…」
ロスマン「そのまさかよ。
ではひかりさん、ここからセミオートで、あの的に当てて見なさい」
ひかり「小さい…」
ロスマンはひかりにコインを狙って撃つよう指示する。
ひかり(銃はしっかりと脇を締めて…肩で保持して…静かに引き金を…戻す!)
心の中で呟きながら撃つが弾は外れる。
ポー「まあ当然だよな。おい、見ろこいつキャリバー50と同じ弾だ。
そりゃあ外れるよ。反動が強いからな。」
ポーはひかりが撃った後出てきた薬莢を拾いそれがキャリバー50と同じ12.7×99mm弾でありそもそもこの強烈な反動を発生させる銃ならばひかりが外しても何ら問題のないと判断する。
なにせ彼らだってそんな象撃ち銃をひかりの持ち方で撃てば外すで済めばいい方である。普通なら肩が外れてる。
ロスマン「ウィッチは魔力で筋力を強化できるから問題ないわよ。
ひかりさんの場合魔力が弱くて反動吸収ができてないわね。
五歩分前に出なさい」
ひかり「え…は、はい!」
ロスマンに言われるままひかりは5歩分ほど前に進み撃つが前よりも正確になったとはいえ外す。
その後も5歩分ずつ前に進むようロスマンは指示を繰り返しそれを数回繰り返してやっと当てるがその距離は非常に近く当たって当たり前の距離だった。
ロスマン「貴方は絶対的に魔法力が不足しています。私が教える基準に全く達していません」
ひかり「じ、じゃあテストは…」
ロスマン「不合格」

ロスマンはこの結果を見て不合格と評価する。それにひかりはなお食い下がる。

ひかり「だったら、朝の走り込み倍に増やします！そしたら魔法力だってきっと強く…」

ロスマン「なるわけ無いでしょ！魔法力は先天的なもので、後からどうにかなる物じゃないわ」

ひかり「でも、まだ一週間ありますよね!?テストを続けさせてください！」

ポー「なあよく考えたらあんな小娘に１２．７ｍｍ撃たせる方がおかしくないか？」

ひかり「え？」

するとここでポーが意見を述べる。

ポー「テキサスじゃあ雁淵みたいなやつも結構射撃場にいるがそういうのは大概持ってるのウィンチェスターライフルか大きくても普通のライフルだ。

こんな軍用大口径なんて撃つ奴はおろか持ってるやつさえいねえぞ。」

マントイフェル「確かに。１２．７ｍｍなんて対戦車ライフルレベルだ。

普通に撃てっていう方が無茶だ。」

二人とも射撃に関して言えばベテランどころかプロであった。

一方は子供のころから慣れ親しみ、もう一方は射撃競技でオリンピック代表候補に選ばれるほどの腕である。

マントイフェルに至っては元陸軍将校、対戦車ライフルなどの大口径火器に関する知識もある。

なのでそもそもひかりに持たせた銃そのものが不適切だと判断する。

ロスマン「う…それはそうね。

そもそも一般論として九九式は確かに普通に撃たせるような銃ではないのは確かね。

とにかく今はこの件は保留にするとして次にあなたたち、

さっきみたいにやってくれるかしら?」
ポーとマントイフェルの正論にロスマンはぐうの音も出なかった。
そのため一旦この件を保留として次にポーたちの射撃テストをすることにした。だが、
ポー「別にいいがこんなデカブツ撃てるか?」
パット「無理だ。肩が外れる。」
バーティ「まずどうやって撃つんだ?」
マントイフェル「撃てないこともないが台が持つか?」
リョーニャ「どうやって撃てと同志ロスマン。」
まだ対戦車ライフルとして使われていたゾロターンS18はともかくその他の武器は明らかに「撃つにはデカすぎる」か「そもそも撃ち方が分からない」ものであった。
それにロスマンはも頭を抱える。
ロスマン「じゃあ何なら撃てるわけ?ライフル?」
ポー「ライフル。それが一番だ。
まあ撃つのはピストルだろうがライフルだろうが機関砲だろうが基本は一緒さ。」
パット「ああ。ライフルの方が肩が外れるよりはずっといい」
バーティ「まだ撃ち方が分かるだけいいよ」
ロスマン「いいわ。ライフルを借りてくるわ。」
ポーたちの要望にロスマンは呆れてどこかに行くと5丁のモシンナガンと弾を持ってやってきた。
ロスマン「これで満足?それじゃあさっさとやって頂戴」
ポー「はいはい。女の子にいいとこ見せないとな」
パット「これ多分モシンナガンか。ロシア製の武器を使うのは初めてだ」
マントイフェル「確かこうするんだよな?鹵獲兵器マニュアルはあまり読んでなかったからよく覚えてない」
バーティ「ロスキーこれでいいのか?」
リョーニャ「ああそれで問題ない。あとロスキーだと?やるか?」
バーティ「望むところだ。」

それぞれ初めて使うライフルに悪戦苦闘するが何とかグリップを装填しているとまたバーティとリョーニャがケンカを始める。
それぞれモシンナガンを振り回し銃床で殴ろうとしたりする。
ロスマン「ちょっとあなたたちやめな…」
次の瞬間、バーティのモシンナガンが頭を直撃、衝撃で倒れる。
リョーニャ「おい、大丈夫か?すぐに手当てする。」
バーティ「すまん先生。大丈夫か?」
ロスマン「あんまり大丈夫じゃないわよ。」
すぐに我に返ったリョーニャが駆け寄りバーティもケンカをやめる。
ロスマンには当たったところが赤くはれていた。
リョーニャ「腫れてるな。骨は大丈夫だ。氷で冷やして…」
ロスマン「ちょっと待って。ちょうどいいわ。リョーニャさん使い魔を出して魔力を出してみて?」
リョーニャ「え?」
リョーニャが腫れた周りを見たり触診して応急処置をして氷を取りに行こうとするとロスマンが止め指示する。
それに困惑しながらもリョーニャはやってみる。すると赤くはれた部分が小さくなりすぐに元に戻った。
リョーニャ「え…何が起きた?」
ロスマン「やっぱりね。あなたの固有魔法は治癒魔法。
傷とかを治すのよ。医者のあなたにはこれ以上ないほど向いてるわ」
リョーニャ「確かにそうだが…俺は医者だ。こんな得体のしれないものはあまり使いたくないな」
ロスマンがリョーニャの固有魔法を説明するが本人はあまりうれしくなかった。
彼にも医者としての矜持があった。
ロスマン「それじゃあ撃ってみて。」
ロスマンは殴られたことも気にせず撃つよう指示する。
それに全員が従い撃つ。

弾はバーティ、パット、リョーニャは外すが2、3センチ程度でほとんど誤差に近かった。
ポーとマントイフェルに至っては一発目で当てていた。
ロスマン「すごいわね。何かやってたの?」
ポー「テキサス人は子供のころから銃をおもちゃに遊んでたからな。
　このぐらい朝飯前さ。テキサス人ならこのぐらい楽勝さ」
マントイフェル「元々近代5種と馬術、射撃、フェンシングのドイツ代表候補だったからな。
　まあこの程度なら楽だな。」
さらっとマントイフェルは言うが周りの人間は驚く。
ひかり「すごい…」
ポー「ちょっとまて代表候補?」
マントイフェル「まあな。空軍に入ってスペインで左目を失ってからは現役引退したがな。」
マントイフェルは自慢するわけでもなく答えた。
マントイフェル「雁淵、今度射撃のコツとか教えようか?」
ひかり「え?いいんですか?」
マントイフェル「ああ。別に構わんよ。
　空軍に復帰するまでは地元の学校やヒトラーユーゲントに射撃や乗馬、フェンシングを教えていたからな。」
パット「ところで先生?このテストの結果は?」
するとパットが話題を変える。
ロスマン「そうね。全員合格。とくにポーさんとマントイフェルさんは素晴らしいわ。」
ポー「そりゃどうも先生。お礼に今晩一緒にディナーでも如何ですかな?」
ロスマン「結構です。で、ひかりさん、貴方には別のテストを与えるわ。
　ついてきて。」
ロスマンはポーを適当にあしらうとひかりを連れてどこかに向か

う。

ロスマン「あ、ポーさんたちもついてきていいわよ。」

ロスマンに言われるままポーたちはロスマンについて行った。

第７話：偽装入隊した扶桑の平均以下のウィッチが部隊の負担となることを防ぎ、部隊の有益なる存在たらしめるための穏当なる提案

パット「高い…」
ポー「１５フィートぐらいか？」
ひかり「たっかーい」
バーティ「オベリスクか」
マントイフェル「芸術性は悪くないな」
リョーニャ「レニングラードにこんなのあったか？」
ひかりはロスマンに基地のはずれにあるオベリスクに連れてこられた。
それにポーたちも暇つぶしについてきた。
するとロスマンが銀モールの顎紐の空軍の士官用制帽を投げて見事なコントロールでオベリスクの先端に引っ掛ける。
ポー「ナイスコントロール！」
バーティ「で、あれをどうするんだ？」
バーティがロスマンに聞く。
ロスマン「簡単よ。ひかりさん、あれを取ってきなさい。」
ひかり「え。あ、はい！　ユニットを取ってきます」
ロスマン「飛んではダメです」
帽子を取るように言われユニットを取りに行こうとするひかりを止める。
それにひかりは疑問を漏らす。
ひかり「じゃあ、どうやって…」
ロスマン「手本を見せてあげます」
ロスマンはそう言ってオベリスクに近づき魔法力を使い上り始めた。
ロスマン「魔法力を全身に回して、それを手足に適切に分配。触れている個所の制御をきちんとすれば登れるわ」

ひかり「そ、そんなの学校では習いませんでした！」
半分程度登るとロスマンは滑るように降りてひかりに言う。
ロスマン「無理なら国に帰りなさい。このテストに合格できなければ、出撃は認めません」
ひかり「えっ」
ロスマン「どうするの？」
ひかり「やります！」
ポー「まあどうせ暇だし俺もやってみるか。」
マントイフェル「これはこれで気になるな。」
ひかりだけでなく暇を持て余しているポーとマントイフェルもやってみるという。
リョーニャ「それよりなんで魔力で張り付けるんだ？医者としてはそっちの方が気になる。
　それと怪我したら呼べ。応急処置ぐらいはできる。」
バーティ「ロスマンも無茶やるなぁ…というか純粋にメカニズムが気になる。理数系じゃないのに」
パット「確かに。理数系じゃないが気になる物は気になる。」
ロスマン「そう、別に減る物でもないからやっていいわよ。
　取れたら持ってきて。」
そういうとロスマンは去っていった。
ポー「で、だ。誰から先にやる？やっぱ元オリンピック代表候補からか？」
マントイフェル「やっていいのなら先にやるぞ。」
最初にマントイフェルが登り始める。
するとどういうわけかあっという間に半分ほど登り気が付けば頂上についていた。
ポー「え？意外と簡単なのか!?」
登り切って頂上の尖塔をつかんで見下ろしているマントイフェルにポーが簡単かどうか聞く。
マントイフェル「いや、かなり難しいぞ。
　ただよくわからないんだがいつもより筋力があっ

た気がする。
　それと、見てみろ。ここからはなかなかいい景色だぞ。」
　それに簡単じゃないと答える。どうやらそもそも固有魔法らしきものに助けられていたらしい。
　答えるとマントイフェルは続ける。
　マントイフェル「で、どうやって下りればいいんだ!?」
　ポー「あー…飛び降りる?」
　バーティ「パラシュートか?」
　降り方が分からずこの後色々やった末飛び降りて事なきを得た。
　降りると続いてポーとひかりがやり始める。
　だがひかりはすぐに落ち、ポーも半分ほど登ったところで降りてきた。
　ポー「ダメだ。こいつはかなり難しいぞ。」
　バーティ「そうか。まあ疲れたら呼んでくれ。紅茶ぐらいならある。」
　ポーがバーティに漏らすがバーティは頷くとそのまま建物に戻っていった。
　リョーニャ「怪我したら呼べよ。」
　さらにリョーニャもそう言って鼻歌でタチャンカを歌いながら建物に戻った。
　パット「ふむ。なかなか面白そうじゃないか。よし、俺もやってみるか」
　すると今度はパットも試してみるがこちらもポーと同程度の結果に終わった。
　結局3人は夕食の時間まで色々やるが無理であった。

　夕食後、ポーたちは例のあてがわれた部屋でひかりとともにいた。
　ポー「では。第一回共産党大会…ではなくどうすればあの塔を攻略できるか考える会を開催します。」

ひかり「わーい。って私のためにこんなことしても良いんですか？」

バーティ「教師の務めは生徒の意思を尊重し答えへの道を開くことだ。

俺だって元は教師で貴族だ。悩める生徒を助けるのは教師の務めだからな。」

ひかりはこんなことをしても良いのかと聞くがそれに元教師である葉巻をくわえたバーティが返す。

パット「俺は努力をする凡人を見ていると助けたくなる厄介な気質なんだよ。お節介ともいうがね。」

さらによくあるフランス人俳優に似ていると言われるほどのルックスを持つパットが吸い終わったタバコを灰皿に擦り付けながら言う。

リョーニャ「俺はただ単に魔力というものそのものについて気になるだけであって雁淵を助けたいわけじゃない。いいな？」

ウォッカのコップを持ったリョーニャがあくまでひかりのためではないと前置きする。

マントイフェル「とにかく、よかったな雁淵。一応俺も微力ながら手伝おう。

レディーを助けるのが良き貴族だ。」

ひかり「ありがとうございます！」

最後にタバコを右手に挟んだマントイフェルが右目でウィンクしながらひかりに言う。

それにひかりは感謝の言葉を述べる。

ポー「じゃあ、まず本題だ。一体どう言うメカニズム、正確には力の働き方でああなっていたのかだ。」

バーティ「確かに。力学は高校物理だ。単純に考えると重力に対して魔力の上向きの力が働いていたのか？」

早速ポーたちはこの現象を物理学的見地から分析し始めた。

リョーニャ「そんな単純なものじゃないだろ。それに今日、医務室の資料を読んだところ青い紋章のようなものはある程度の魔力が働

かないと発生しないらしい。
　ブリテンスキーの仮説だと紋章が足か少なくとも垂直方向に出ないと成り立たない。」
　バーティの「力が垂直方向に発生している」という仮説は即座にリョーニャによって否定された。
　マントイフェル「そうなると水平方向か。あの壁面にくっついてるってことか？」
　パット「そういう事になる。そうなるといわゆる気圧差でくっついてるのか？」
　ひかり「えーと。なんの話をしているんですか？」
　さらにマントイフェルとパットが今度は魔力によって空気が圧縮されその気圧差で水平方向に力が働いているのではないかと推察する。
　だがここでひかりが聞いてくる。
　ポー「なにって…簡単な高校物理の話だが。学校で習ったろ？」
　ひかり「えーと、その一私まだ１４歳なんですけど…」
　次の瞬間、ウォッカを飲んでいたリョーニャはウォッカを吹き出し、バーティは岩のように固まり、パットは複雑な表情をし、マントイフェルとポーはひどく驚いていた。
　ポー「えーと。本当か？」
　パット「アジア人は見た目から歳がわかりにくいと言うがここまでとは…」
　マントイフェル「あー、学校はどうした？１４ならまだ義務教育だろ？」
　ひかり「その、欧州派遣で学校を途中で…」
　驚き口々にひかりに聞く。そして欧州に来るのに学校を休学していることを言うと突如バーティとリョーニャが立ち上がりひかりを連れて外の行こうとする。
　ひかり「え？え？え？」
　バーティ「学校を抜けてこんなところの来るとは何事だ！一教育者として見逃せん！

今すぐラル少佐に掛け合って学校に帰れ！」

リョーニャ「教育を疎かにしこんな地獄に来るだと？これは君のためだ。

君はまだ思春期だ。心理学的にはルソー言うところの第二の誕生だ！

そんな時にここの来るとは君の心理の発達、そして一人の医者として悪影響しかない！」

バーティ「奇遇だなコミー。意見が合うとは」

リョーニャ「そりゃどうもブリテンスキー」

リョーニャは思春期における成長という点で、バーティは適切な教育を受けていないという点でひかりを扶桑に返そうと連れて行こうとするがなんとかポーとパットが止めて元の席に座らせてポーが一応の結論を出す。

ポー「はぁ…まあいい。とにかく今のところは絶対的なデータ不足が甚だしい。

明日一日かけて必要なデータを集めよう。いいな？」

マントイフェル「それが一番堅実だな。」

パット「賛成だ。じゃあよろしく、雁淵」

ひかり「はい！…え？」

翌日、ひかりは塔に上り、ポーたちは丸一日かけて魔力のデータを集めていた。

すると突然ひかりが鳥に襲われ落ちる。

それに周りにいたポーたちと二パと菅野が駆け寄る。

ひかり「痛ったぁ…」

二パ「ひかり！大丈夫!?」

リョーニャ「大丈夫か？」

すぐに駆け寄りリョーニャが医者らしく傷を確認する。

リョーニャ「見たところ大丈夫そうだ。

気をつけろよ、当たり所が悪かったら死なずに一生麻痺

が残るぞ。」
ひかり「はい…」
ふとバーティが見上げるとそこには鳥の巣があった。
バーティ「それにしてもあんな所に鳥の巣があるとはな」
菅野「千鳥だな。巣立ちが近づいてるみたいだ」
ひかり「千鳥…へぇ…」
リョーニャ「なんで今の時期にいるんだ?普通なら渡りでとっくにいないはずだが」
菅野が鳥の名前を言いひかりはそれに感心するがレニングラード出身のリョーニャは普通なら10月にはいないチドリがいることに疑問を持つ。
そしてひかりは二パに促されて腰を下ろす。ポーたちもその横でタバコを吸い始め、バーティはティータイムを始めていた。
菅野「おめえ分かんねえのか?ロスマン先生は諦めろって言ってんだよ」
ひかり「でも、てっぺんの帽子を取ってくれれば…」
菅野「バーカ。あんなのおめーが取れるわけねーだろ」
バーティ「菅野君。あんまり人の夢を否定するなよ。
『あなたの夢を萎えさせるような人間には近づくな。
器の小さい人間ほど人の夢にケチをつけたがるものだ。
真に器量の大きな人間は成功できると思わせてくれる』
マーク・トウウェインの言葉だ。君はどうやら器が小さいようだ。
第一君はできるのかね?」
菅野はひかりに意地の悪いことを言うがそれを紅茶を飲んでいたバーティがマーク・トウウェインの名言を引用して止める。
さらにバーティができるか聞く。
菅野「へっ、楽勝だろ!」
そういうと菅野は登り始めるが半分ほど行ったところで落ちてきた。
菅野「こんなのできたって何の役にも立たねえよ!」

捨て台詞を残して帰っていった。
ポー「何しに来たんだ？」
パット「さあ？雁淵、言いたい奴には言わせておけ。
　気にするな」
パットがひかりに慰めの言葉を言う。
そしてまたひかりは登り始めた。

そして3日目、ひかりは一人塔を登っていた。
それに対してポーたちは集めたデータをもとに基地のブリーフィングルームを借りてそこの黒板で魔力関連の本を読みながら複雑な計算をしていた。
だがその内容にポーは頭を抱えていた。
ポー「あー！クソー！計算上雁淵の魔力じゃ何やっても頂上までいけないぞ！
　どうやっても頂上の手前でガス欠だ！」
そう、午前中に集めたひかりの魔力に関するデータを計算したところ足りないと言う結果が出たのだ。ポーはそれに頭を抱えていた。
パット「ケチってもか？」
ポー「ケチってこれだ！頂上まで行くのに必要な魔力量ａに対して雁淵の魔力量ｂは微妙なところで足りない！
　支える部分を減らせばケチれるが支えを減らしたら下手をこけば危険だ！
　第一これ風やその他の影響を無視してこれだ！」
一応この計算の前提は「魔力を両手両足の４箇所で支える」、「約１メートル動いた時に消費した量ｘを定数として計算する」という雑なもので誤差や風の影響を計算していなくての結果だった。
ただ支える部分を減らすと使用する魔力量を減らせるため計算上一箇所減らすとギリギリ、二箇所にすると少し余裕がある程度、一箇所にすると余裕があるレベルまで伸ばせた。
ロスマン「何やってるのかしら？あなたたち？」
すると、ロスマンがやってきて声をかけた。

ポー「何って、計算だが。ひかりが上まで登れるかの雑な奴だが」
ロスマン「そんなことやって何になるのかしら？」
ポー「少なくとも役には立つね。数字は正直だ。人間の方が嘘つきだからね。」
ロスマンの質問にポーが返す。
ロスマン「そう。で、どうだったの？計算は」
ポー「無理だとよ。ただ支える部分を減らしたらいける。
今の四箇所だと魔力のロスが計算上発生してる。
一箇所にするとロスがなくなりかなり節約して登れるが安定性を保証できない。
まあ一箇所でいけるか先生に聞きたいところだが。」
ポーがロスマンに結果を伝え質問する。
ロスマン「一応できるわよ。ただかなり難しいわ。」
ポー「よし！いけるぞ！行くぞ！」
ロスマンの答えにポーは喜びそのまま走ってひかりの下に行った。
ロスマン「すごい熱気ね」
バーティ「まあな。教え子に対して熱くなるのはいい教師に必要な資格だ。
かくいう俺だって雁淵のもとに走っていきたいぐらいさ」
ロスマン「だったら行ったらどう？」
バーティ「残念ながらそういうのは紳士的じゃない」
パット「これだから島国は根性が捻くれてる。俺はポーについて行くぞ。」
ポーに続いてさらにパットも出て行った。

ポー「雁淵！大丈夫か！」
ひかり「は、はい！ってうぁあああああ！」
急いでひかりのところに来て塔を登っていたひかりに声をかけたポーだがひかりは返事をしようとし、バランスを崩して落ちてしまった。

ひかり「いててててて…」
ポー「大丈夫か？」
ひかり「は、はい。大丈夫です。」
すぐにポーは駆け寄るがひかりは大丈夫そうだった。
ひかり「ところでポーさん、なんですか？」
ポー「ああ。計算が上手くいった。上まで行ける方法が見つかったぞ。」
ひかり「え！本当ですか！」
ポーがひかりに言うとひかりの顔は明るくなり喜ぶ。
ポー「簡単だ。魔力で一箇所に減らす分そこに魔力を集中する。
それでいける」
ひかり「分かりました！やってみます！」
ポーに言われるとひかりはそのまま走って塔に触れ右手だけに魔力を集中して塔を登ろうとする。
だが、
ひかり「え？えええええええー！」
そのままゆっくりと落ちて行った。
ポー「えー、理論上できるはずじゃ…」
ロスマン「ええ。〝理論上は〟できるわよ。ただその手段は非常に高度で難しいの」
それに頭を抱えるポーに後ろからロスマンが声をかける。
パット「数字がいくら正しくとも実行は伴わないんだよ。
ほら、どっかで０．１ｍｍの紙を４２回折ったら月まで届くとか言ってるだろ？
実際はそんなの無理じゃないか。それと一緒だ」
ポー「ああ。そういうのと一緒か。まあただこれは不可能ではないからな。
できることを祈るとするか」
そういう二人の目の前ではまたひかりがゆっくりと落ちて行った。
気が付けば夕日がペテルブルクを照らしていた。
こうして３日目も終わった。

第８話：ウィッチーズ・ワールド（別題：雁淵の武勇伝）

４日目、折り返しの日となるこの日、基地には朝から数台のマウルティアとビュッシングＬ４５００トラックそして幾らかのコサック騎兵が来て積まれていた物資をラルに引き渡していた。

それにたまたま朝早くから散歩に出かけていたマントイフェルがラルに声をかける。

マントイフェル「ラル少佐。何ですかこれは？」

ラル「ああ。お前たちが頼んだ物資がやっと届いんたんだ。

ユニットとか色々だな。お前の馬もいるぞ。」

マントイフェル「本当ですか？」

ラルに言われすぐにマントイフェルは騎兵のところに向かう。

そこではカールスラント軍の軍服を着た馬上のロシア訛りの兵士が仕立てのいいコートを着て中佐の階級章をつけた佐官に話しかけていた。

騎兵「大佐、それにしてもなんで５０２が馬を？」

「知らないよ。ただ引き渡せばそれで終わりだ。帰って相変わらずのパトロールだ」

マントイフェル「失礼します。フォン・マントイフェル中尉です。」

マントイフェルはその仕立てのいいコートを着た中佐に敬礼して話しかける。

ヴォルフ「君がフォン・マントイフェル中尉か。

ペテルブルク都市司令部所属コサック旅団フォン・ヴォルフ指揮官ハンス・フォン・ヴォルフ中佐だ。」

それにその大佐、ハンス・フォン・ヴォルフが馬上から返礼して答える。

ヴォルフ「ところで君が頼んでいた軍馬ならそれだ。名前はまだ付けてない。

カバルディン種の雄、２歳馬。名前は元はオラーシャ軍の

輜重部隊のだった。
　カバルディン種ぐらいは知ってるだろ？」
ヴォルフが馬上から一頭の栗毛に前脚に白いソックスが入った馬を指して説明する。
マントイフェル「ええ。確かロ…じゃなかったオラーシャの馬でしたよね？」
ヴォルフ「別にロシアと言っても構わんぞ。私は君と同じような者だからさ。」
マントイフェル「そうですか。」
ヴォルフ「ああ。受領の書類にはラル少佐がサインしてくれてる。
　それじゃあな。さあ帰るぞ。」
そういうとヴォルフはコサックを率いて帰っていった。
マントイフェル「で、君が俺の馬か。」
そう言ってマントイフェルは馬に近づき首筋を撫でる。
馬はそれに鼻を伸ばして喜ぶ。
マントイフェル「そうか、気持ちいいか？」
ひかり「マントイフェルさん？何やってるんですか？」
すると日課のランニング中だったひかりが後ろから声をかける。
マントイフェル「雁淵か。注文していた品が届いたんだ。
　まあ見ての通り馬だが。」
ひかり「へえ…ところでマントイフェルさんは乗れるんですか？」
マントイフェル「ん？言ってなかったっけ？元騎兵将校で馬術でもオリンピック代表候補になったよ。」
ひかり「え！すごいです！」
マントイフェルが元騎兵将校で元馬術のオリンピック代表候補だと言うことに驚く。
　実は１９５２年まではオリンピックの馬術競技参加資格は現役騎兵将校に限られていた。そのため馬術競技者の中にはバロン西こと西竹一などの第二次世界大戦で活躍した戦車部隊将校のいくらかもオリンピック代表として出場、中にはメダルを取ったものもいた。
　そのためマントイフェルは馬術はもちろん乗馬は大の得意だった。

マントイフェル「乗るか？確かどっかに乗馬用の鞍があったはずだ。

あ、触っても良いが触るなら首筋にしろよ。それ以外を触ったら蹴られるぞ。」

マントイフェルは馬から離れるとトラックから降ろされた箱の中から鞍を探して持ってくる。

その間ひかりはマントイフェルに言われた通り馬の首筋を撫でながら待っていた。

鞍を持ってくるとマントイフェルは手慣れた手つきで馬に鞍を取り付け慣れたように馬にまたがった。

マントイフェル「雁淵、少し待ってくれ。まずはこいつがどんなものか見てみたい。」

マントイフェルはそう言って馬を軽く走らせる。

数分走らせるとひかりのところに戻って来た。

マントイフェル「じゃあ、雁淵、乗ってくれ。」

ひかり「はい！ってうわあああ！」

マントイフェル「おっと！大丈夫か？」

ひかりはマントイフェルに促されて乗ろうとするが失敗し落ち掛けるがマントイフェルが腕を掴んでこと無きを得る。

ひかり「はい！大丈夫です！」

マントイフェル「じゃあ軽く走らせるぞ」

マントイフェルはひかりを乗せ基地の周りを一周した。

その間ひかりはずっと目をキラキラさせて興奮していた。

マントイフェル「ふう…久しぶりだな。どうだった雁淵？」

ひかり「楽しかったです！」

マントイフェル「おお、それは良かった。」

最後に出発地点に戻ると感想を聞いてからひかりを下ろし、マントイフェルは馬を厩舎に連れて行った。

この頃には朝食の時間だった。

この日、ポーたちはやっと到着したユニットの訓練と同時に固有魔法の調査を開始していた。
こちらは特に問題もなければそのほとんどを完璧にこなし、固有魔法が判明していた。
その間ひかりは一人塔を登っていた。
昨日教えられた方法にさらに靴を脱いでやることでさらに効率が上がっていたがそれでも一番上までには届かなかった。

翌日、ひかりは朝食に手を付けなかった。
それに気が付いた二パが声をかける。
二パ「どうしたのひかり。なんで食べないの?」
ひかり「えへへ、ちょっとでも軽い方が登れるから」
菅野「おめーは超弩級のバカだな」
ポー「メシはちゃんと食えよ?これが下手すれば最後の飯になるかもしれないからな」
ひかりに菅野とポーが突っ込む。船の上では食事と寝ること以外楽しみがないような世界であるためポーなどの海軍軍人というのは伝統的に食事へのこだわりが強いのだ。
さらにポーはパトロールで事故って墜落したり着艦に失敗して死んだ同僚を見てきたため忠告する。
そしてこの日ひかりの結果は散々だった。

6日目、ひかりは朝から朝食をがっついて食べていた。
そしてまた登り始めるがパットとポーそれを見て心配していた。
ポー「大丈夫かあいつ?」
パット「確かに。そろそろ一回休んだ方がいいぞ。」
二人はひかりの疲労を心配していた。
疲労というのは恐ろしいもので身体的に回復したと思っていても心理的疲労などがたまっていることを自覚しにくく、その上疲労による判断力の低下は飲酒と同等以上である。

何事も効率的にこなすには適度な休養を定期的に行う必要があるがひかりはそれを全くやっていなかった。
そしてその心配は当たりひかりは登っている途中に落ちてきた。
パット「あ、ヤバい！」
パットが走って受け止めるがその衝撃こけて顔面から地面に突っ込む。
菅野「寝てやがる…」
パット「そうだな。部屋に連れてってリョーニャに見せよう。」
間抜けな顔で寝ているひかりをパットはお姫様抱っこして部屋に連れて行きリョーニャに見せる。
診察したリョーニャは疲労と判断してカルテを書いて提出した。

翌朝、ひかりはまた塔を登ろうとしていた。
すると声をかけられる。
ロスマン「こんな時間からやるつもり？」
ひかり「ロスマン先生」
振り返るとロスマンがいた。
ロスマン「ちょっと付き合いなさい」
ロスマンはひかりをつれてネヴァ川が見えるところまで連れて行った。
ロスマンがひかりに聞く。
ロスマン「ひかりさん。貴方はどんなウィッチになりたいの？」
ひかり「どんな…お姉ちゃんみたいに皆の役に立つ立派なウィッチです！」
ロスマン「それは無理よ」
ひかり「何でですか!?」
だがロスマンはひかりを否定する。
ロスマン「私は、前にもあなたのようにどうしても戦いたいという子を教えたことがあった。
真面目で、やる気もすごくあったのだけど…」

ひかり「魔法力が弱かったんですか」
ロスマン「そう。その子が戦闘に向いてないのは分かっていた。でも、私は熱意に負けて出撃を許可した」
ひかり「その子はどうなったんですか？」
ロスマン「二度と飛べなくなったわ。
戦場では能力のない物は、本人も周りも悲しい思いをするのよ」
ロスマンがかつての苦い経験を語る。
だがひかりが意外な言葉を呟く。
ひかり「でも、その子は悲しかったのかな？
先生！私も他の人の迷惑になるなら扶桑に帰ります。
でも、ほんのちょっとでも戦力になる見込みがあるなら、ここに居たいんです！」
ロスマン「それなら…」
ひかり「分かってます！帽子を取るんですよね？最後の最後までやらせてください！」
ひかりは必死で訴える。そしてそれに流石のロスマンも折れた。
ロスマン「もう好きにしなさい」
ひかり「はい！」
折れたロスマンが許可しひかりは塔に向かう。
バーティ「教師としていい事言ってますな先生？」
ロスマン「ひ！バーティさん、いたんですか？」
すると突然後ろから声をかけられてロスマンが驚く。
振り返るとバーティが釣りをしていた。
バーティ「初めからいたぞ。」
ロスマン「なら一声かけたらどうなの？」
バーティ「とても言い出せるような雰囲気じゃなかったろ？」
ロスマン「まあ、そうね。」
バーティ「まあ生徒の意思を尊重するのは教師としていい事だ先生。
ここは気楽にいこう。」

7日目、この日は生憎の天候だった。
その天候にパットがジッポーでタバコに火をつけながら愚痴る。
パット「酷い風だ。ジッポーじゃなければすぐ火が消えるぞ」
ポー「大丈夫かね？あいつ」
リョーニャ「とりあえず怪我しなければいいが。」
3人とも塔に登るひかりのことを心配していた。
だが3人の心配をよそにひかりは今まで以上の速度で登っていった。
　というのもポーが考えた理論とそれまでの経験、そして適度に抜けた疲労のおかげで気が付けば塔の頂上に到達、帽子を取っていた。
ひかり「はぁ、はぁ、やりましたー！」
ポー「やったぞ！成功だ！」
パット「すごいな。」
それを見てポーが喜びパットも拍手する。
ロスマンも内心喜ぶが後ろから気配を感じる。
ロスマン「何ですか？」
ラル「諦めさせるんじゃなかったのか？」
それはいつの間にか出てきたラルだった。
ラル「確かに、魔法力の少ないあいつにはこれしかない。
　だがこんな方法でクリアしても、後がつらいぞ？」
ロスマン「あの子のあきらめが悪すぎるんです」
ラル「そうか。不肖の弟子か」
だがその直後、放送が流れる。
『東方から急速に接近してくる中型ネウロイを確認。総員緊急出撃！』
　ネウロイが接近してくるという放送だった。
ポー「スクランブルだ！行くぞ！」
パット「メルド！」
ポーとパットは悪態をつくとそのまま走って格納庫に向かいグラマーF6F―5とリパブリカンP―47Dサンダーボルトを履きM

2を持って出撃する。
さらに遅れてマントイフェル、リョーニャ、バーティがフラックウルフＦｗ１９０Ｄ―９、ホークテンペスト、Ｙａｋ―９Ｍを履いてＨＳ４０４、Ｓ１８／１０００と騎兵用サーベル、ｓｈｖａｋを持って出撃する。
それと同時にサーシャたちも出撃する。
しばらく飛ぶとネウロイを見つけた。
サーシャ「ネウロイ発見！」
菅野「管野一番、出る！」
ポー「了解！援護する！タリホー！」
ネウロイを見つけると菅野が真っ先に突撃し、ポーとパットがそれに続いて援護を行う。
ポー「ケツに食らいつくぞ。」
パット「さあ当ててみろ」
ネウロイはどういうわけかパット以外を集中的に攻撃する。これは判明したパットの固有魔法、誤認、即ち自らを相手にとって「無害」又は「味方」と誤認させる固有魔法だった。
このおかげでネウロイからは全く攻撃を受けなかった。
サーシャ「前衛は攻撃、中尉達は援護を！」
クルピンスキー「了解！」
マントイフェル「了解！トゥルト！背中は任せろ！」
クルピンスキー「任せるよ」
サーシャはクルピンスキーたちに援護を指示、クルピンスキーが銃撃する後ろからマントイフェルは狙撃で援護する。
さらにリョーニャもＳｈＶＡＫを撃って援護する。
リョーニャ「Ｙｐａａａａａ!!」
バーティ「共産主義者に手柄を横取りされてたまるか！」
またバーティも横から火力支援をする。バーティの固有魔法はシンプルな火力強化であった。そのためイスパノの火力はもはや凶悪なレベルまで強化されていた。
だがそれでもコアは見つからない。

するとネウロイを後ろから攻撃していたポーとパットが前方に何かを見つける。
ポー「ん？1時の方向、何かくるぞ！」
パット「ありゃあ雁淵だ！」
それはひかりとロスマンだった。
菅野「ふん、おせえんだよ！」
ポー「はん、パーティーの主役は遅れてくるもんだぜ？」
それを見て菅野はどこか嬉しそうに言い、ポーもカッコつけたことを言う。
ひかりは銃を構えてネウロイを攻撃しようとする、するとロスマンが止める。
ロスマン「ひかりさん、貴方はお姉さんにはなれないわ」
ひかり「えっ？」
ロスマン「攻撃を避け続けて、弾が当たる距離まで接近するのよ。貴方はあなたになりなさい！」
ひかり「は、はい！」
ロスマンがひかりに教える。するとひかりは教えられた通りに行動、ビームを回避してネウロイに近づく。
回避は言うのは簡単だがするとなると話は別である。半分は腕、もう半分は運が必要な要素だからだ。
バーティ「ほお、ありゃあすごい。あんな見事な回避は初めてだ。」
マントイフェル「8年軍にいて戦闘機飛ばしてもあんな回避なんて今だにできんよ」
菅野「紫電改がしっかり回ってる。力をユニットに集中させてるんだ！」
ニパ「あの訓練のおかげ？流石ロスマン先生！」
その腕にベテラン、それもスペイン内戦時代からのであるマントイフェルとバーティは素直に褒め菅野とニパはロスマンの手腕を讃えた。
ひかりは回避しながら接近して銃撃を浴びせるが集中しすぎてネウロイの後部に激突してしまう。

そのまま衝撃で飛ばされるが同時に視界が変化した。
ひかり「コアが、見えた！」
ネウロイ内部が見えコアを見つけたひかりはその周囲を銃撃する。
するとコアが露出する。
そして次の瞬間、マントイフェルが一撃で仕留め白い破片となった。
マントイフェル「ふう、なかなかこういうのも悪くないな。」
クルピンスキー「ヒドイじゃないか～僕の獲物を取るなんて。」
マントイフェル「落としたんだからそれでいいだろトゥルト。」

その日の夜、基地の部屋ではポーたちは酒を飲んでいた。
リョーニャ「Это есть наш последний～♪
И решительный бой～♪」
バーティ「インターナショナル歌うな！共産主義者！ビールが不味くなる！」
酒を飲んで陽気になりソ連共産党党歌で旧ソ連国歌のインターナショナルをアカペラで歌うリョーニャにバーティは酔っ払って怒っていた。
ポー「別に良いじゃねえか減るもんでもねえんだしよ！」
マントイフェル「それでも共産主義は滅ぶべし」
パット「ローマ人から見たカルタゴか？」
ポー「そりゃあ良い例えだ。」
するとドア突然開いてひかりが入ってきた。
それに一番酒を飲んでいなかったパットが気がつく。
パット「ん？どうした雁淵？ようか？」
ひかり「パットさん…」
ポー「雁淵か？ラル少佐と固有魔法の話は終わったのか？」
ひかり「ええ、まあ…ただ…」
ポーが気がつきラルとの話を聞くとひかりは言葉を濁す。
パット「何かあったのか？」

ひかり「実は、固有魔法が接触魔眼だったんです。」
バーティ「それは何か問題があるのか？」
ひかりの告白にいまいち理解していないバーティが聞く。
ひかり「接触魔眼っての言うのはネウロイに触れないと発動しないんです、だから…」
パット「使うなと念押しされたか。」
ひかり「はい…」
パットがひかりの言いたいことを汲む。
するとパットが言う。
パット「まあそれは至極当然だ。危険だからな。
ただリスクを冒さなければ勝利を得られないこともある。
その時は、俺を頼れ。俺の固有魔法、誤認なら全く気がつかず接近できる。
だからその時は俺を頼れ、いいな？」
ひかり「え…いいんですか？」
パット「ああ。この場で誓約書を書いてもいいぞ。」
パットはひかりに自信のある言い方でいう。その頼り甲斐のある発言にひかりの顔も明るくなった。
ペテルブルクの夜は更けてゆく。

第９話：スノーウォーズ：エピソードⅠ：ファントム・メナス

ニコライ「同志ベルザーリン、記念日の予定はできてるか？」

ベルザーリン「ええ、同志ヴァトゥーチン。予定通りコンサートと閲兵式を行う予定です。」

１１月初頭、ヴァトゥーチンは珍しいことにペテルブルクに来ていた。

それは簡単だった、ソ連軍時代、毎年祝っていた十月革命記念日が近いからだ。

彼らはこの世界では派手に祝えないもののそれでもできる限りの事として軍楽隊、オラーシャ内務省歌と踊りのアンサンブルを招いてコンサートを行い恒例の閲兵式を行う予定だった。

ヘプナー「まあ単調な日常を変えるにはコンサートはいいが、正直その理由が気に食わんね。」

フーベ「ええ。共産主義には一定距離を置きたいものですから。」

トレスコウ「ナチスは嫌いですが共産主義が好きというわけではないのですよ。」

それに非共産系のヘプナー、フーベ、トレスコウは批判的だった。

人間三人寄れば派閥を作ると言うようにここでも主に共産系と非共産系の派閥が存在していたが協力していた。

それはロマーニャとヘルウェティアの右翼系勢力への対抗だった。

彼ら全体の派閥は共産系、リベラル系、自由主義系、右翼系に分かれ、右翼系と共産系、そしてリベラル系は派手に対立していた。なにせ右翼系の大半はナチスかファシストが主流だったからだ。

そしてその共産系は同時にオラーシャ内部の左翼勢力を結集しオラーシャ共産党を組織していた。ただこの勢力は今の所は暴力的手段に出ることなくオラーシャ立憲民主党（カデット）などとの緩やかな協力体制を取っていたため問題にはされていなかった。

このような政治的に複雑な関係である彼らだったが政治的な話をするには目の前のネウロイを倒さなければならないことぐらいは承知していた。
そのため彼らは一致団結、協力体制を築いていた。
ヘプナー「ところで天気はどうなんだ?折角のコンサートだ。天気がいいと良いが。」
するとヘプナーが天気に話題を変える。
それに参謀長のトレスコウがすぐ答える。
トレスコウ「それがどうやら北から低気圧が接近しているようで暫くは荒れるようです。
吹雪の可能性もあるかと。」
ニコライ「本当か?
衣替えはとっくに済んで前線部隊に冬期カモフラージュを用意させているから大丈夫だと思うが病院には凍傷患者に対応する準備をさせておいておけ。」
気象データというのは軍事情報の中でも非常に重要度の高いデータである。
作戦や部隊運用には天候が絡むため気象は非常に重要だった。
例えば戦前第四艦隊事件で日本海軍は大損害を被るが同時に台風内部の広い地域で同時に多数の船舶が内部の気象を観測することに成功、この時集められたデータは台風のメカニズムを分析するのに役立っただけでなくこの情報を独占することにより台風などの発生時の艦隊行動などで有利となった。
この情報を知らなかった米海軍は大戦中コブラ台風などで知られる数々の台風で大損害を被ってしまった。
このように気象データは非常に重要なものである。
そして彼らもネウロイが接近してもなおできる限りの気象データを集めていた。だが広い地域で観測ができないためそのデータは歯抜けが多く的中率にも難があった。それでもこれが最良のデータだった。
トレスコウ「ええ、分かってます。一応全部隊に数日はラドガ湖の

北を中心に荒れると気象通報を送ってます。」
ヘプナー「まあ、ただここ最近は的中率低いから当たらないかもな。」
トレスコウ「気象班も善処しているとはいえここ数週間の混乱は痛いですから…」
ただいくら最良のデータを集めても的中率は芳しくなかった。
そしてそれはそのデータへの信頼性の欠如につながり現場で無視することがしばしばあった。

バーティ「なあ、そっちに面白いニュースあるか?」
ポー「ん?いや全く。せいぜいリベリオン海軍のスポークスマンが間違った損害報道して真に受けた投資家のせいでニューヨーク株式市場の株価が暴落した件で担当のスポークスマンがクビになったことぐらいだな。
それともうすぐ大統領選挙だ。まあ俺は民主党支持だからルーズベルトに入れるが。
あと、明後日コンサートだっけ?オラーシャ内務省歌と踊りのアンサンブルの。」
ある朝、バーティとポーは食堂で紅茶とコーヒーを飲みながらそれぞれウォールストリートジャーナルとタイムズを読んでくつろいでいた。
ポーの関心はこの数日前にリベリオン海軍のスポークスマンが誤った損害報道を行い一時株価が暴落した件でそれを報道したスポークスマンがクビになったニュースと明日に迫った１９４４年リベリオン大統領選挙だった。
戦地にいるため投票こそできないが有権者として関心を持っていた。
すると美味しそうな匂いが漂い始めた。
ポー「ん?飯か?」
パット「誰が作ってるんだ?」

さらにその後ろからフィガロ紙を持ったパットが入ってきて隣のキッチンに向かった。
そこには料理中の下原となぜか食べてるジョゼがいた。
パット「ボンジュール、下原、ジョゼ。」
ジョゼ「ボンジュール、パットさん」（ガリア語）
下原「おはようございますパットさん。
　ジョゼ、今日のつまみ食いそれで五杯目だよ?」
パットがフランス語で挨拶するとガリア語が母語のジョゼもガリア語で返す。
フランス人と言う人種は海外でもやたらフランス語を使おうとする生き物でありその上やたら発音にうるさいのである。
そのため久し振りにネイティブのガリア語で話せてそしてネイティブのガリア語を聞ける存在のパットはジョゼにとっては重要だった。
下原もそれに続いて挨拶する。そしてジョゼに注意する。
ジョゼ「違うよ定ちゃん。これはつまみ食いじゃなくて味見」
下原「はいはい」
パット「まあ育ち盛りだからな…あ、コーヒー貰えるか?」
ジョゼがそれに言い訳し下原も慣れたように流す。
それにパットは微笑ましく見ながらコーヒーを貰うと朝から乗馬をして汗をかいていたマントイフェルがクルピンスキーとともに入れ違いでキッチンに入ってき、クルピンスキーの手がジョゼの肩に触れる。
クルピンスキー「ジョゼちゃん。僕にも君を味見させてほしいな?」
マントイフェル「トゥルト…」
下原「どうぞ。しっかり味見してください」
ジョゼを口説き始めるクルピンスキーにマントイフェルは複雑な表情を浮かべ下原は小皿を渡して味見させる。
クルピンスキー「そりゃないよ~下原ちゃん」
マントイフェル「水貰えるか?」

クルピンスキーは相変わらずの態度で小皿を受け取り味見する。
その横でマントイフェルは水を貰いシャワーを浴びに出て行こうとすると
リョーニャ「Наливайся знамёна~♪Кумачом последних ран~♪
おはよう、同志ジョゼ、同志下原。」
朝からやたら過激な歌詞、戦いの傷で旗は赤く染められたという歌詞の歌を口ずさんでいたリョーニャが入ってきた。
この曲は谷を越え丘を越え、ソ連の内戦期の軍歌だった。
そして彼はこの曲を好んでいた。なぜなら彼の父親はこの曲で歌われているスパスク強襲やヴァラチャイエフカの戦い、そして歌われてはいないがソ連軍の歴史において重要な役割を持っているツァーリツィンの戦いに参加していたのだ。そのため好んでいた。
さらに、
ひかり「おはようございまーす！」
ひかりが元気な声であいさつする。
クルピンスキー「おはようひかりちゃん」
下原「おはようございます」
リョーニャ「おはよう。朝から元気だな」
それに三者三葉に返す。
ジョゼ「あの、私ちょっと用事が…」
ひかり「えっ、ジョゼさん…」
ひかりとリョーニャの姿を見た途端ジョゼはキッチンから出て行った。
ひかり「私、嫌われてるのかな…？」
下原「違うんです！ジョゼは…」
クルピンスキー「とっても照れ屋さんなのさ。この僕の思いにも答えてくれないもんねー」
リョーニャ「当たり前だろ。そんな反革命的嗜好を好む輩などいるか？」
クルピンスキーの答えにリョーニャはきつい言葉で返す。

ロシア人という伝統的に同性愛を嫌い、その上同性愛は反革命的嗜好として「犯罪」扱いされていたのでリョーニャも同性愛は非常に嫌っていた。それどころかもしＮＫＶＤがあるなら突き出してやることさえ厭わなかった。

リョーニャ「まあ、雁淵だけでなく俺も嫌われてる気がするんだがな。

あ、紅茶貰っていくぞ。」

リョーニャは紅茶を貰うとキッチンから出て行った。

そして朝食の時間、ジョゼは先に一人で済ませていた。

それにひかりはがっかりする。

二パ「このカーシャ美味しい」

菅野「スープもうめえ！」

それを後目に二パと菅野は朝食のカーシャとシチーに舌鼓をうっていた。

サーシャ「オラーシャではシチーって言うのよ。

シチーとカーシャ、日々の糧。オラーシャの代表的な家庭料理です」

それにサーシャが説明を加える。

ひかり「下原さんって、オラーシャ料理も上手なんですね！」

下原「喜んでもらえてうれしいです」

クルピンスキー「下原ちゃんの料理の腕前は最高だよ」

ロスマン「オラーシャ料理もいいけど、扶桑料理も繊細よね」

ひかりやクルピンスキー、ロスマンも下原の料理の腕を褒める。

ポー「美味いな。テキサスはおろか西海岸にはロシア料理出す店なんてほとんどなかったからな」

パット「朝からこんな絶品の品を堪能できるとは戦争さえ忘れるよ。」

その腕をポーとパットが褒める。

リョーニャ「美味いが、なぁ…」

下原「どうかしましたか？」
リョーニャ「いや、何でもない。」
何故かリョーニャが複雑な表情をしてそれに気が付いた下原が聞くがリョーニャは誤魔化した。
ロスマン「ひかりさんはなにか得意な料理とかあるの？」
ひかり「お姉ちゃんの作る海軍カレーが好きです！」
菅野「そんなこと聞いてんじゃねーよ！」
ふとロスマンがひかりに質問するとひかりは的外れな事を言い菅野に突っ込まれる。
ポー「雁淵には姉がいるのか。その姉の料理とやらも食べてみたいものですな。」
パット「ああ。雁淵が好きだというのならどこぞの島国のような料理は出ないだろな」
クルピンスキー「ところでポーたちは何か作れるの？」
するとクルピンスキーが聞いてきた。
ポー「まあ作れるぞ。テキサスの牛肉があれば絶品のステーキを作ってやるぜ、伯爵様」
パット「いや全く。まあアマダイのシャンパン煮は好きだが。」
マントイフェル「子供のころから料理人がいたから学校の授業以外で作ったことないな」
リョーニャ「子供向けの病院食か流動食なら一応作り方知ってるぞ」
クルピンスキーの質問にポーとリョーニャ以外は全く作れず、リョーニャもほぼ病院食を知識として知っている程度だった。
バーティは相変わらず黙々と食べていた。
ロスマン「バーティさん、貴方も何か言ったら？」
バーティ「ん？そうだな。食事中に喋るのマナー違反だ。」
ロスマンが黙っているバーティに聞くがその答えはマナー違反というメシマズ大国のメシマズルールだった。
パット「先生、そこのメシマズはほっといた方がいいですよ。
イングランドの連中は食事中に喋らせたら食事まで不味く

なる。」
それにパットが毒を吐く。フランス人とイギリス人はドイツを殴る以外の時は伝統的に仲が悪いのである。

ロスマン「現在、ネウロイの侵攻はラドガ湖の北方で止まっていますが、湖の凍結が始まると一気に南下。
つまり、こっちに進出して来ると予想されます。」
昼前、ウィッチたちはブリーフィングルームに集められロスマンが戦況を説明していた。
ラドガ湖の凍結はネウロイの侵攻だけでなくラドガ湖の水運が完全に使用不能となるほかラドガ湖のラドガ小艦隊も行動不能になった。
クルピンスキー「凍結って12月の頭だっけ?」
サーシャ「あと一ヶ月足らずですね」
ロスマン「ですので、次の補給を待って新たな防衛網を構築する必要があります。」
クルピンスキーとサーシャの話にロスマンは計画を報告する。
するとリョーニャが質問した。
リョーニャ「冬季装備の備蓄は?」
ロスマン「被服に関しては既に備蓄しています。」
リョーニャ「食料・医薬品もか?」
ラル「ああ。一冬十分越せる量はある。」
リョーニャは〝あの〟1941年の冬、レニングラードにいた。
そのため物資不足が何を起こすかをいやというほど知っていた。
そして彼は時として冬が41年のように例年よりも早く来ることがあることを知っていた。
だからこそ心配していた。
ロスマン「今日の定時偵察、当番は誰ですか?」
リョーニャの質問が終わるとロスマンが偵察担当を聞き下原と

ジョゼが手を上げる。
ロスマン「下原さんとジョゼさんね。それにパットさんとひかりさんも行ってもらうわ。
遠乗りの訓練にいい機会だわ。」
ひかり「はい！」
ロスマンはさらに固有魔法の関係で非常に偵察向きなパットとひかりもジョゼたちに組ませた。
ロスマン「偵察範囲をラドガ湖北東、ペトロザヴォーツク周辺まで広げます。
気づいたことがあったらすべて報告してください」
リョーニャ「ペトロザヴォーツク？あのあたりなら戦前1年ほど勤務していた。土地勘がある。」
ロスマン「そうね、いいわよ。リョーニャさんも行ってもらえるかしら。
指揮はリョーニャさんがお願い。」
リョーニャ「分かりました同志ロスマン。」
するとリョーニャがこの偵察に志願する。
というのも彼は冬戦争後期から41年の初めまでペトロザヴォーツクの軍病院に勤務していた。
なのでこの地域はそれなりに土地勘があった。
ひかり「よろしくお願いします！」
下原「こちらこそ」
ジョゼ「よ、よろしく…」
ひかりは下原とジョゼに話しかけるがどうもジョゼはぎこちなかった。
リョーニャ「どうした？」
ジョゼ「な、んでもないです…」
リョーニャはジョゼに話しかけるがその返答も同じようにどこか暗かった。
そして4人は格納庫に向かい離陸した。

第１０話：スノーウォーズ：エピソードⅡ：ネウロイの攻撃

ラドガ湖、サンクトペテルブルクの東にある面積１６４００?、９０８?もの貯水量を誇るヨーロッパ最大の湖であり大戦前はフィンランドとソ連の国境。

その大きさは面積の上では都道府県の中の面積第２位の岩手県がすっぽり入ってしまうほど。

ヴォルホフ川、スヴィル川などの大河から流入し、ネヴァ川を通ってサンクトペテルブルクを通りバルト海へと流出している。

その位置から湖は重要な交通路でもある。

夏場はここを多くの船舶が通り海軍も存在していた。

大戦中は包囲され餓島と評されたガダルカナルさえかわいく見えるほどの飢餓に襲われたレニングラードの最後の生命線として氷結した湖の上の道路が活躍、またラドガ湖を舞台に遠路はるばるやってきたイタリア海軍部隊やフィンランド海軍部隊とラドガ小艦隊の戦闘や湖上道路を破壊しようとするドイツ空軍との間で戦闘もあった。

その中、ラドガ湖は完全に包囲が解かれるまでの約９００日に渡りレニングラードの生命線として役割を果たした。

ラドガ湖上空、この巨大な湖を５人のウィッチが北上していた。

一番先頭をリョーニャが、その後ろに下原、ジョゼ、そして最後尾がパットとひかりだった。

最後尾のパットは飛びながら煙草を吸っていたがその横でひかりは何やら腕を動かしていた。

パットはそれが雁淵の固有魔法に関連することと判断する。

パット「なあ、雁淵。例の話は箝口令が出てるの忘れたか?」

ひかり「あ、そうでした。」

下原「どうしましたか?」

パットがひかりに注意していると気になった下原が振り返って聞

いてきた。
パット「いや、別に。船荷証券に関するある規則の統一のための国際条約を雁淵に説明していただけだが」
ひかり「そ、そうなんです。勉強になります。
そ、そう言えば下原さんて扶桑のどこ出身なんですか?」
パットが咄嗟に誤魔化しひかりが話題を変える。
下原「安芸国。いえ、広島の尾道です」
リョーニャ「ヒロシマ…ああ。」
下原の出した広島という単語にリョーニャが反応する。
彼は終結の数日前、満州で出会ったアメリカ人記者や上官から広島と長崎に落とされた原爆の存在を知り、さらにはその廃墟の写真なども見ていた。
そしてその惨状と医者として放射能の恐ろしさも知っていた。
ひかり「私、長崎の佐世保です!佐世保も尾道と一緒で坂が多いんですよ!
いっつも走ってたんです!」
下原「そうなんですか。ところでリョーニャさんとパットさんはどこ出身なんですか?」
すると下原が話題をリョーニャとパットに振る。
パット「パリだよ。父さんが破棄院の裁判官だったからパリ生まれのパリ育ちさ」
リョーニャ「レニングラードだ。」
ひかり「レニングラード?」
ジョゼ「それ、どこですか?」
ジョゼもひかりも下原もレニングラードが分からなかった。
リョーニャ「偉大なる革命家、同志レオニード・イリイチの名を冠した偉大なる街だ。
こっちの世界のペテルブルクだよ。」
ひかり「そうなんですね~でもなんで街の名前を変えたんですか?ペテルブルクでもいいと思いますけど」
リョーニャ「〝聖〟ペトロの街だぞ。いいか宗教はアヘンだ。この

世に神なんて存在しない。
だから教会や聖人、聖職者などという反動的なものは全て排除しなければならないんだ。
同時に退廃的でブルジョアジー、帝国主義的、ファシスト的なものも排除しなければないんだ！」
ひかりの質問にリョーニャは力説した。
パット「これだから共産主義はダメなんだ。最も重要な〝自由〟と〝権利〟と言う概念が欠落してるから。
信教の自由、さらには宗教活動の自由、基本的人権を考慮されていないって点でダメだ。
この二つは国家を構成する上で重要な要素だ。
共産主義の理論だけは十分良いがそれを現実に落とし込もうとすると必ずどこかで破綻する。
そのツケがこれだ。」
だがそれをパットが否定する。共産主義は理論こそ素晴らしいが実際は人間という生き物を全く考慮していない点でダメであった。
この言い争いに下原もジョゼもひかりもついていけてなかった。
パット「おっと、どうやら難しい話をしすぎたみたいだ。
ところで下原たちはこのあたりは長いのか？」
それに気がついたパットが話題を変える。
下原「いえ、それ程長くはないです。それに私はあまり部隊の役には立ってないですから…」
だが話を振られた下原は悲観的なことを言う。
ひかり「そんな筈無いですよー今朝の料理もみんな喜んでいたじゃないですかー」
パット「軍人ってのは飯の味に煩い生き物で、ましてやこの世で最も料理の味にうるさい人種であるフランス人を満足できる料理を作れてるんだ。
十分役に立ってるじゃないか。」
リョーニャ「同志下原、食事は栄養補給や士気、兵士の体力・健康維持にとても重要なことだ。

それを支えているんだ。わかるだろ?」
下原「料理なんて関係無いです。この部隊に居るからにはネウロイと戦って戦果を挙げ無いと…
他の皆さんと比べたら私なんてまだまだダメ。もっと頑張ってネウロイを倒さないといけないんです」
ジョゼ「定ちゃんがダメなんてことないよ!」
下原がさらに悲観的なことを言うとジョゼが突然声を荒げる。
それに驚いて全員がジョゼを見る。
それに恥ずかしくなったのか前に向き直った。
ジョゼ「そろそろラドガ湖を越えるわ。任務に集中しよう」
下原「そうね」
ひかり「はい!」
ジョゼの言葉に続いてそれぞれ反応し戦闘体制を取る。
しばらく飛ぶと雪が降り始めた。
ひかり「あ、雪だ! 雪ですよ!」
下原「寒冷前線の動きが速い様ですね」
ジョゼ「早く偵察を終えて戻りましょう」
リョーニャ「これは荒れるぞ。せっかくの誕生日で革命記念日だっていうのにツイてない」
さらに飛び続けると天候はさらに悪化、なんとか編隊飛行を維持できる程度まで視程が低下した。
心配した下原がひかりに声をかける。
下原「吹雪いて来ましたけど、大丈夫ですか?」
ひかり「平気です」
するとジョゼと並んで飛んでいたリョーニャが左腕につけたリストコンパスと右腕につけた腕時計を確認してあることに気がつく。
リョーニャ「おかしい。そろそろペトロザヴォーツク近郊のはずだが何も確認できない。」
リョーニャは推測航法で飛行していたため正確性に難こそあったが少なくともそろそろ何かしらの街かオネガ湖が見えてもおかしくないにもかかわらず何も発見できなかった。

パット「へっぶし！寒い…パリでもここまで冷えねえぞ…」
ひかり「寒い…」
あまりの寒さに慣れていないパットはくしゃみをしひかりも寒さに震えていた。
二人とも防寒装備は一切持ってきていなかった。
そして5人は吹雪の中に何かを見つける。
リョーニャ「ん？あれは…」
パット「街だ。地図だとこのあたりの街は…ペトロザヴォーツク！」
すぐにポッケから地図を取り出し確認したパットがペトロザヴォーツクと判断する。
だが街は氷漬けにされていた。
パット「うわぁ…あんなの初めて見たぞ。ロシアではいつもこうなのか？」
リョーニャ「まあたまになるが普通は2月とかだ。
11月とかじゃない」
パットとリョーニャがなぜこうなったかを議論していると突如下原が叫ぶ。
下原「雲の上にネウロイ発見！」
ひかり「え？　何も見えないですよ…」
ジョゼ「定ちゃんは遠くの物を見る能力があるの」
リョーニャ「なに？とりあえず行こう」
下原の発見にリョーニャを先頭に上昇しネウロイを補足する。
それは扇風機のような形をしていた。
パット「こちらエーグル1、ペトロザヴォーツク近郊にてネウロイと遭遇、指示求、どうぞ。
ん？エーグル1、５０２、無線を確認せよ。」
ジョゼ「こちらジョゼ、ネウロイ発見。５０２部隊、応答してください！
だめ、基地と連絡がとれない！」
パットとジョゼが連絡を取ろうとするが全く取れないどころか同

時に交信したため混信が発生、無意味なスキール音しか発生しなかった。
ジョゼ「定ちゃん、どうしよう」
下原「戦いましょう。ここでネウロイを倒しておけば…！」
そういうと下原は先行してネウロイに向かった。
リョーニャ「おい！待て！畜生あのバカ行きやがった」
パット「雁淵、あの二人を援護するぞ！」
ひかり「は、はい！」
リョーニャは即座に止めようとするがジョゼたちは全く聞いていないようだった。
パットとひかりも二人を援護するため後に続く。
さらにリョーニャも仕方なく二人を追いかける。
先行した下原とジョゼにネウロイは攻撃を集中する。
そして突如冷気を二人にぶつける。
下原「嘘、銃が凍って使えない！」
ジョゼ「ユニットも凍ってる！」
冷気をもろに食らった下原とジョゼの武器とユニットは凍結、銃は氷漬けになりユニットは故障し始めた。
すると後ろにいたパットとひかりが出てくる。
パット「下原、ジョゼ！雁淵、二人を回収するから援護しろ！」
ひかり「はい！」
パットが二人の首根っこを掴み戻ろうとする前でひかりがネウロイに近づいて行った。
だがその直後今度はひかりが直撃を食らい体温が急激に低下し墜落していった。
「「雁淵さん！」」
パット「雁淵！」
リョーニャ「不味いぞ！」
すぐにリョーニャが雁淵を追いかける。
パットも二人を掴んで急降下し雁淵を追いかける。
追いかけたリョーニャがすぐに雪に刺さったひかりを見つけ掘り

出し呼吸などを確認する。
リョーニャ「不味いぞ…低体温症の初期症状が出てる。」
リョーニャは急いで着ていたルパシカをひかりに被せ近くの木陰に入れる。
その間にジョゼたちを掴んだままのパットがやってくる。
パット「雁淵は大丈夫か?」
リョーニャ「いや、だいぶ不味い。急いで雪と寒さをしのげるところを探さないと。
それと何でもいいから温かいものあるか?」
下原「私の所為よ! ネウロイを倒す事に拘ったから…」
それを見て下原が後悔するがそれをジョゼが頬を叩く。
ジョゼ「定ちゃん、自分を責めるのは後!
今やるべきことは、雁淵さんを助けることだよ!」
下原「そうね、ジョゼの言う通りよ。なんとしても、雁淵さんを助けましょう!」
ジョゼの叱責に冷静になった下原はすぐにそばに穴を掘り始めた。
ジョゼ「リョーニャさん、何か手伝えることありますか?」
リョーニャ「とにかく雁淵の体温を維持しろ。これ以上下がったらここじゃあ手におえない。
ちゃんとした病院に連れて行かないと」
ジョゼ「分かりました」
ジョゼは治癒魔法を使いひかりを温める。
パットは下原を手伝って穴を掘り始めた。

同時刻、５０２基地。
ロスマン「連絡が途絶えてもう二時間…」
クルピンスキー「はぁ、僕のかわいい子猫ちゃん達無事かな~…」
ポー「ハックシュン!サバノビッチ!寒い!」
連絡が途絶えた彼らの捜索のため５０２では出撃準備を整えていた。

だが出撃するそぶりはなく気温はみるみる低下していた。
そのためあまりの寒さにポーはダッフルコートを、バーティはトレンチコート、マントイフェルは支給された空軍のキルティング防寒服を着ていた。
するとサーシャがやってきた。
サーシャ「五人の捜索は中止です！」
菅野「中止!?なんでだよ！」
サーシャに菅野が抗議する。
サーシャは格納庫のドアを開ける。
そこには猛吹雪で視程は1キロはおろか安全な着陸に必要な目安と言える６００ｍもなかった。
ロスマン「この視界の中では出るのは無理ね」
マントイフェル「それどころか離陸さえ無理だ。」
それに菅野は手すりを叩いて悔しがる。
それは大なり小なりみな同じ心境だった。

ひかり「…あったかい？」
リョーニャ「よし！気が付いた！」
ひかりは体に感じる熱に気が付き起きた。
それにリョーニャが喜ぶ。
ひかり「ジョゼ…さん？リョーニャさん？」
ジョゼ「雁淵さん！よかった…」
リョーニャ「ジョゼもういいぞ。」
それを確認したジョゼが安堵の声を漏らしリョーニャはジョゼに治癒魔法をやめさせる。
ひかりはジョゼと下原の姿を見る。
ひかり「あの…二人ともその恰好？」
リョーニャ「まあ、その、俺はやめろと言ったんだがな…」
何故かジョゼと下原は下着姿、リョーニャはシャツ姿だった。

ふと自分を見ると同じように下着姿にリョーニャの勲章が付いたルパシカとジョゼと下原の服がかけられていた。
ひかり「えっ、私も!?」
ジョゼ「服を脱いでお互いの体温を直接伝えあってたの」
ジョゼが訳を説明する。
この方法は正直なところ正しくはないのである。
低体温症の治療の応急処置は基本的にとにかく温めることだがこのような下着姿で～なんてすれば全員纏めて低体温症になってしまう。
そのためリョーニャは必死で止めようとしたが二人は全く聞かず、パットは無駄に気を使って外で吹雪の中周りを探索していた。
下原「ジョゼが一晩中、治癒魔法の発熱で温めていたのよ」
ひかり「すみません。私が皆さんの言うことを聞かずに無茶したから…」
ひかりが謝る。するとジョゼが口を開いた。
ジョゼ「ううん、謝らなければいけないのは私。
ずっとあなたを見るのが辛かったの…孝美さんを治せなかったから」
ひかり「ジョゼさん…」
ジョゼ「最初に謝ればよかったのに、その勇気も無くて、あなたから逃げてたの。
それに、リョーニャさんにも謝らなきゃいけない。
同じ固有魔法で私なんかよりずっと優秀だったから避けてたの」
リョーニャ「そうか。」
ジョゼが二人に頭を下げる。
するとリョーニャがジョゼの頭をなでる。
ジョゼ「え?」
リョーニャ「同志ジョゼ、別に気にしてなんかないさ。
それに俺だって万能じゃない。だから気にするな」
ひかり「いえ、ジョゼさんが居たからお姉ちゃんは命をとりとめた

んです！

　私の方こそ本当に感謝しています」

リョーニャの言葉とひかりが頭を下げるとジョゼに笑みが戻った。

下原「フフ。これで四人共、仲良しさんですね」

下原はそう言って３人に抱き着いた。

そしてふと、リョーニャが言う。

リョーニャ「なあ、あんたら。服着たらどうだ？」

「「あ」」

そう、下原、ひかり、ジョゼは下着姿である。

それに気が付き赤面した３人はリョーニャをいったん外に出すと急いで服を着た。

第11話：レオニード・イリイチ／スノーウォーズストーリー

下原「あのーリョーニャさん。もう入っていいですよ」
リョーニャ「あ、ああ分かった。」
着替えが終わり下原は外で待っていたリョーニャを呼ぶ。
寒さに震えていたリョーニャも入ろうとすると後ろから何かが走ってきた。
振り返るとそれはなぜか銃身が曲がった銃を3丁背負ったパットだった。
パットは走って穴の中に入るとその中に置いていたM2を取り出す。
リョーニャ「なにがあったんだ?」
パット「クマが出た。」
下原「え?熊ですか?」
パットは周辺を探している間にクマと遭遇しそのまま全力で走って逃げてきたのだ。
本来なら走って逃げるのは極めて危険、特に10月から11月のクマは本来なら冬眠前なので非常に凶暴だがそんなことも知らないパットは全力で走って逃げてきたのだ。
そしてM2を取り出して殺そうとする。
パット「どこだ熊!」
下原「どうしましょ…」
リョーニャ「とりあえず武器を用意しろ」
リョーニャも急いでSHVAKを取り出して構える。
すると背後から唸り声が聞こえ、振り返る。そこには体高が3メートルはあろう大熊がいた。
パット「ギャー!」
咄嗟にパットはM2をクマに乱射、クマは何十発もの50口径弾を喰らい即死した。

パット「はあ…はあ…はあ…やったか？」
リョーニャ「あ、ああ。ただこれじゃあ食えないぞ。」
パットはクマと至近距離で遭遇すると言う戦場よりもずっと危険なことにパニックになったためそもそも熊狩りには威力過剰な５０口径弾を何十発も撃ち込んだせいでクマはミンチよりも酷いことになっていた。
リョーニャ「どうする？ここに放置したら狼とか他のクマとか野良犬がくるぞ。」
パット「大丈夫だ。近くにいいところを見つけた。そっちに行こう。」
リョーニャ「そうか。案内を頼む。」
パットに後を任せるとリョーニャはクマが本当に死んだかを確認しサイズと性別を計測する。
リョーニャ「ふむ、体高２．８メートル、推定４００キロのメスの大物だ。
ここまで大きいのはなかなかお目にかかれない。」
パット「そんな大きいのだったのかよ」
下原「きっとこの森の主だったんでしょうね…」
クマを調べながら下原とパットが感心していると突然目の前を何かの影が動いた。
パット「なんだ？野良犬か？」
パットが拳銃を取り出して構えてその影に近づく。
そして近づくとそれは子グマだった。
パット「こ、子グマだ…ど、どうする？殺すか？」
リョーニャ「いや待て。」
寒さと恐怖で震える手で拳銃を構えるパットがリョーニャと下原に聞く。
それにリョーニャはパットを止めると近づいていき、
リョーニャ「よーし、良い子だ。こっちおいで。そうだ、クワスはいるか？」
子グマに手招きして持っていた水筒のクワスを差し出す。

子グマはそのままリョーニャに近づきリョーニャは子グマを抱きかかえた。
リョーニャ「よし、これで良いだろ。おそらくそいつが母グマだったんだろうな。
まだ生まれて一年も経ってない。まあそれでも十分大きいが」
満遍の笑みでリョーニャは抱きかかえたまま下原とパットに話しかけるが二人とも呆然としていた。
パット「なあ、そいつどうするんだ?まさか…」
リョーニャ「連れて帰るぞ。名前はそうだな…ミーシャだ!」
パットと下原は呆れるがリョーニャはどういうわけか生き生きしていた。
パット「下原…俺が頭おかしいのか?それともあのロシア人がおかしいのか?」
下原「さ、さあ?ただあの子グマ可愛いですよね?」
パット「おい、お前もかよ、なあ」
パットが下原に聞くが下原は子グマの可愛さにうっとりしていた。
下原は知られていないがかわいい物好きで抱きつき魔である。
その性格がモロに出ていた。
一行はその後パットが見つけたある物まで移動した。
それは数年前に放置され錆が浮き出たＫＶ―２重戦車の１９４０年型だった。
ひかり「戦車?」
リョーニャ「ＫＶ―２だ。」
パット「どうやら戦闘中に路肩から外れてそのままスタックしたみたいだ。」
パットは周りを確認して戦闘による損傷がないことから路肩から外れてスタックしたものと判断する。
ＫＶ２は重戦車、その中でも特にトップヘビーで路外機動性が非常に低かったため史実でも道路（と言い張る多少それ以外と比べたらマシ程度の地面）から外れてそのまま動けなくなり、さらには重すぎた

ため回収すらされずそのまま放置されドイツ軍に鹵獲される事例が多数存在した。
そして鹵獲したドイツ軍でも重すぎて運べなかったりしたためそのまま道標になっているものもあった。
5人はそのままKV―2の中に入る。だがそれでも寒さは改善しなかった。
ひかり「でも、やっぱり寒いね」
下原「あっ、さっき取ってきたやつが」
すると下原がポッケから樹皮を取り出す。
下原「白樺の樹皮です。脂を含んでいるから湿っていても燃えやすいんですよ」
ひかり「へー!」
リョーニャ「それに白樺の樹液は甘くておいしいぞ。」
白樺の樹液は甘くロシアではよく白樺の木にパイプと容器をつけて樹液を採取している。
下原は白樺の樹皮を使い火種を作る。それを見てパットはポッケからタバコとジッポーを取り出してタバコに火をつける。
するとそれを見た下原たちがパットを見る。
パット「ん?なんだ?タバコ吸うのか?」
それに気がついたパットがタバコの箱を見せる。
下原「ライター持ってたんですか?」
パット「持ってたけど?」
下原「貸してください」
パット「マッチでいいなら。ジッポーは最近手に入りにくいんだ」
そう言ってパットは尻のポッケからマッチの箱を取り出して渡す。
下原はマッチで火種に火をつける。
するとジョゼのお腹が鳴りジョゼが顔を赤くする。
下原「そういえば、昨日から何も食べてませんね」
ジョゼ「そうだ!ビスケット持ってたんだ。皆で食べよう!」
ジョゼがポッケからビスケットを3枚取り出す。
だがここにいるのは5人、明らかに足りなかった。

ひかり「あ、どうしましょう…足りませんよね…」
パット「大丈夫だよ。まさかこんな時に役に立つとはな」
そう言うとパットはポッケからチョコバーを取り出す。
ひかり「チョコですか？」
パット「いや、Dレーションだよ。世界一マズイチョコ。味は蒸したじゃがいもより多少マシ程度。オススメはしない。」
とりあえず非常食として自由フランス軍の頃から持ち歩いていた。」
出したのは物凄くマズイことで知られるDレーションだった。
パットはそのマズさを嫌ってはいたがもし不時着した際のサバイバル用に一本ポッケに入れていた。ただ恐ろしくマズイので餓死するよりマシだから食うだけだった。
ひかり「でもリョーニャさんは？」
リョーニャ「別に大丈夫だよ。水筒にクワス入れてたからな。
それにこの程度、あの時よりかはずっとマシさ。」
そう言ってリョーニャは水筒に入れたクワスを飲む。
ふと、下原はある疑問を持ち聞く。
下原「ずっと気になっていたんですけど、リョーニャさんって今朝の朝食の時少し罪悪感を感じているみたいな表情していましたけど、なんでなんですか？
その、もしかしてさっき言ったあの時と関係あるんですか？」
その質問にリョーニャは水筒を下ろし隣で眠るミーシャを撫でながら呟く。
リョーニャ「ああ、関係あるよ。俺は地獄にいたからな。」
ひかり「地獄？」
リョーニャの呟きにひかりが興味を持つ。そしてリョーニャはその恐ろしい戦争を語り始めた。
リョーニャ「俺の戦争は１９４１年６月２２日日曜日、その正午に始まった。
あの日は綺麗に晴れた週末で俺も休みを取って図書館

で本を借りた後昼食を取っていた。
その時モスクワ放送の特徴的なオルゴールがなってこう放送した。
Внимание, говорит Москва.
（こちらモスクワ。）
Передаем важное правительственное сообщение.
（ソヴィエト政府による発表です。）
Граждане и гражданки Советского Союза!
（市民の皆様は傾聴願います。）
Сегодня в 4 часа утра без всякого объявления войны германские вооруженные силы атаковали границы Советского Союза.
（本朝午前4時、いかなる布告もなしにドイツ軍がソ連国境を攻撃しました。）
Началась Великая Отечественная война советского народа против немецко—фашистских захватчиков.
（ナチ侵略者に対するソ連人民の大祖国戦争、正義は我々にあります。）
Наше дело правое, враг будет разбит.
（敵は粉砕されるでありましょう。）
Победа будет за нами!
（勝利は我らのものとなります！）
ってな。
戦前俺たちはもし明日戦争が起きたらって歌っていた、

だが連中は今日来た。」

独ソ戦の開戦はソ連にとってはまさに奇襲であった。

当時ソ連軍上層部で戦争が近いと予期していたのは海軍人民委員長だったニコライ・ゲラシモヴィチ・クズネツォフ大将（当時）だけだった。

そのため海軍では開戦直前に虎の子の巡洋艦モロトフを急いで就役させるなどして戦争に備え、開戦直後も陸軍・空軍と所属組織が違う（海軍は人民委員部で陸軍・空軍は国防人民委員部）ため即座に行動し一機の飛行機も、一機の船も失わなかった。

それに対して陸軍・空軍は文字通りの奇襲となり、特に空軍はこの時期に丁度旧式機の装備転換が進んでいた時期だったため大損害を食らってしまった。

リョーニャ「その勢いはすさまじいものでたった１０日でミンスクが落ちた。

気が付けばレニングラードの目と鼻の先、ナルヴァまで連中は来やがった。

その頃にはレニングラード市内は大混乱だった。

市民だけでなく難民まで来て無茶苦茶だった。

俺がいた病院も患者を早急にレニングラードから避難させた。

そして空いた病床に負傷兵を入れた、だがそれでも足りなかった。」

北方軍集団の僅か2個軍は3週間でレニングラードまで僅か１１０キロの地点まで到達、周辺部隊が遅れてたため一時的に進撃を停止したがそれでも驚くべき速さだった。

そしてレニングラードでは市民だけでなく難民まで流入し大混乱を極め、市民の疎開は遅々として進まなかった。

それが悲劇となった。レニングラード市内には戦前、３１９万人の人口を誇っていた、そしてその市民の大部分が避難する前に包囲されたのだ。

リョーニャ「そして9月の上旬にレニングラードは包囲された。

それから11月までは…地獄だった。
すぐに食料は無くなり、飢餓と疫病が蔓延、革を食べたり人肉を売っていた店もあったぐらいだ。
病院でも弱っていたものや老人、子供から順に亡くなっていった。
辛かったのはもはや手の打ちようのない子供が聞いてくるんだよ、「先生、良くなるの?」って。
もはや医者の分どころか患者の分さえ食料も医薬品もないのに聞いてくるんだ。
それにどう答えたらよかったのかいまだにわからない…
真実を言えばよかったのか、嘘を言えばよかったのか。
あの時はただ、その子の頭を撫でるしかできなかったよ…」
リョーニャは思い出したのか珍しく泣きながら語っていた。
レニングラードは9月上旬に包囲された。
そして市内は飢餓と疫病が蔓延する地獄と化した。
例として9月12日に試算された市内にあった食料の量は
穀類・小麦粉：35日分
えん麦・粉物：30日分
肉類・家畜：33日分
油脂：45日分
砂糖・菓子類：60日分
これだけである。たって一ヶ月分の食料しかなかったのである。
それに周りの空気も重くなる。
リョーニャ「一番つらかったのがあるキルギス人の少女で、下原みたいな綺麗な赤い目が特徴的な子だったよ。
その子はレニングラードの看護学校の生徒で人手不足で空軍病院に送られたんだ。」
リョーニャが下原を見ながら言う。
ロシア、ひいてはソ連は超多民族国家である。

その民族の多さは西はドイツ人、東は朝鮮人や中国人までいるというほどだ。

その中には扶桑人の下原にそっくりなモンゴル系の人間も多かった。

サンクトペテルブルクは帝政ロシアの頃から脈々と続くロシア最大の文化都市である。

そのため多くの歴史ある学校があり多くの学生が存在していた。

リョーニャ「その子は包囲される前に脱出できたのに残って手伝ってくれた。

昼も夜も真面目に患者の面倒を見てくれて有り難かったがそれが仇になって過労から倒れた。

すぐに休ませたがそれからは悪くなる一方で碌な食べ物もなく栄養を得られず、医薬品さえ欠乏して何もできなかった。

辛いのがそこにいるのが自分たちがよく知っている人物で普通なら簡単に救えるのにここでは何もできず弱って行くのを見てることしかできないのが辛かった。

そして11月のある日、もうその頃には彼女は長くは持たないと分かってた。

その日の日付が変わる少し前、彼女は彼女が好きだったスムグリャンカを歌ってくれるよう頼んで来た。

俺はその子にスムグリャンカを歌ってあげたよ。

そして、歌い終わった頃には亡くなってた。その翌日、凍ったラドガ湖を通って救援物資が到着した。

もしあの一晩生きていれば彼女は助かったかもしれない、もし包囲される前に避難させてれば助かったかもしれない、そう考えたら辛かった。」

その話に全員の顔が暗くなる。リョーニャの話はショッキングすぎた。

リョーニャも泣きながら語っていた。

リョーニャ「それで俺は春になる前にレニングラードを去って戦闘機乗りになった。

幸い戦前から飛行機を趣味で飛ばしていたからすぐに慣れたよ。

そして色々あって今に至るわけさ。」

最後に自嘲気味にリョーニャは語った。

戦前ソ連ではグライダースポーツが盛んで多くの少年少女がパイロットを夢見てグライダーを飛ばしたりしていた。

そしてその層は大戦中ソ連軍の膨大な数のパイロットを支えた。

一般的に大戦時のソ連空軍は物量押しでパイロットの質は劣悪と言われているがそれはあくまで４３年以前の話であり４３年以降は品質や性能が大幅に改善された軍用機と長く効率的になった訓練、そして何よりある程度高い質を持ったパイロットを多数訓練できるシステムによって東部戦線の空は大きく変わったのである。

それは燃料不足と制空権の喪失から日に日に練度が低下していくドイツ軍とは対照的だった。

下原「すみませんでした…そんなこと、軽々しく聞いて…」

リョーニャ「下原…気にするな。いつかは話さないとダメだと思ってたからな。」

下原はリョーニャに軽々しく聞いたことを謝る。

だがリョーニャはそれを許す。そして彼女の頭を撫でる。

リョーニャ「下原、君はあの子に似て綺麗だ。そしてあの子のように芯があって真面目だ。

君みたいな子を側における男は幸運だろうな。」

下原「え…リョーニャさん?」

リョーニャの言葉に下原が顔を真っ赤にする。

リョーニャ「ん?おっとと、一体俺は何を言ってるんだか。今のは忘れてくれ、な?」

それに気がついたリョーニャが下原に忘れるように頼むが本人は顔を真っ赤にして俯いていた。

下原（え?え?え?リョーニャさん、もしかして私に気があるんですか?!え、どうしたらいいんでしょうか?!）

第12話：スノーウォーズ：エピソードⅢ：ウィッチの復讐

ポー「なにこれ？」
サーシャ「スープですね…多分」
リョーニャが自分の恐ろしい戦争体験を語っていたころ、なぜか夕食に明らかに食べ物の色をしていないスープのような何かが出されていた。
それをポーとロスマンが恐る恐る一口食べてみる。
そしてポーはそのまま走ってトイレに駆け込んだ。
戻ってくるとマグナムを取り出して開口一番に叫んだ。
ポー「いったいどこのバカだ！こんなゴミを作りやがったバカは！」
ポーはキレていた、海軍軍人とは伝統的に食事の味にうるさいのだ。
なにせ海の上では楽しみといえば寝ることと食事ぐらいだからだ。
クルピンスキー「僕が作ったんだよ。」
クルピンスキーが答えるとポーはクルピンスキーを掴み、引きずってどこかへ連れて行った。
その直後
クルピンスキー「ギャーーーー!!!誰か助けてーーーーー!!!!お願い許してーーーー!!!」
叫び声が聞こえボコボコにされたクルピンスキーはそれから一晩下着姿で基地の軒先に吊るされた。
この後、お口直しにポーが固有魔法を使って絶品のステーキをごちそうして事なきを得た。

翌朝、下原たちは戦車の外に出る。
吹雪は既にやんでいた。

下原「ペテルブルクの方は真っ暗、猛吹雪に包まれているみたいね」
リョーニャ「吹雪がやんだってことは…」
パット「移動したんだろうな」
下原が固有魔法を使いペテルブルクの方の状況を見る。
それにタバコを吹かしたパットとリョーニャが分析する。
パット「で、どうする?あの吹雪が移動したってことは増援は望めん。
　あれを処理できるのは俺たちだけだ。」
下原「銃は銃身が曲がって使い物になりませんし…」
リョーニャ「ＤＰの弾を抜いてＤＴに装填すれば使えるだろうがそれだけだと俺のＳｈＶＡＫとＭ２だけだ。
　それに耐寒性の高いＹａＫはともかくそれ以外だとすぐ故障するぞ。」
ＤＴとＤＰはどちらも弾は７．６２×５４Ｒ弾である。それにＤＴ自体ＤＰを戦車用に改設計したものなので特に問題なく使えるがそれだけでは圧倒的火力不足だった。
この圧倒的不利な状況の中、下原がつぶやく。
下原「ウィッチに不可能は無い…」
「え?」
下原「私の上官の口癖です…そうですね。やってみましょう!」
下原の言葉に準備を始める。
まずユニットを解凍してテーピングする。
パット「で、どうする?銃が三丁しかないぞ。」
ジョゼ「うん。使える銃が足りない以上はどうしようも…」
だが武器の絶対的不足が問題だった。
ＫＶ―２から取り外したＤＴにジョゼの持っていたＤＰの弾を装填して一丁、パットのＭ２、リョーニャのＳｈＶＡｋ、これにトカレフＴＴとＳ＆ＷＭ１０ミリタリー＆ポリスだけしか武器はなかった。
下原「ガラスの熱割れよ」
パット「ああ、あれか」
ひかり「へ?　熱割れ?」

それに下原は策があった。
そしてその策はパットは学校で教養として学んでいた。
下原「冷たいガラスのコップに、熱湯を入れると温度差で割れやすくなるんです」
ひかり「つまり、あのネウロイを急激に温めれば壊れやすくなる？」
下原「そう。燃料を使って一気に！」
ひかり「すごーい！」
パット「ガラスの熱割れを利用して外郭を破壊、止めにＭ２とＳｈＶＡＫか。」
リョーニャ「なかなか面白いことを考えたじゃないか。」
その策にパットやリョーニャも感心する。
準備ができるとリョーニャはミーシャを背負って５人は離陸する。
ネウロイを追いかけてラドガ湖上空に到達する、ラドガ湖は完全に氷結していた。
パット「なるほどな、これが狙いというわけか。」
その策にパットは感心する。
当時はまだ気象を兵器に使うなどということはＳＦの世界の話だった。
「Былинники речистые～♪」
ひかり「ん？誰か謳ってますか？」
ふとひかりは誰かが歌を歌っていることに気が付く。
周りを見渡すとリョーニャが口ずさんでいた。
リョーニャ「О том, как в дни ненастные～♪

О том, как в дни ненастные～♪
Мы смело и гордо в бой идём!
Веди, Будённый, нас смелее в бой!
Пусть гром гремит,

Пускай пожар кругом,
р кругом.
Мы беззаветные герои все,
И вся—то наша жизнь есть
борьба.～♪」
ひかり「リョーニャさん、何歌っているんですか?」
ひかりが聞く。
リョーニャ「Марш Буденного、ブジョンヌイ行進曲だよ。
父さんは内戦中同志ブジョンヌイの下でツァーリツィンの戦いに参加していたからな。」
リョーニャが歌っていたのはかの有名なブジョンヌイを歌ったブジョンヌイ行進曲、別名我ら赤軍騎兵隊であった。
そして5人は前方の黒い雲の中に突入する。
ひかり「さ、寒い…!」
ジョゼ「定ちゃん、急がないと!」
雲の内部の寒さにひかりも震え始めユニットに氷が付き始めた。
しばらく飛ぶとネウロイのところまで到達した。
リョーニャ「同志諸君、攻撃開始!」
リョーニャが合図を取るとひかりとジョゼが燃焼剤を投げ下原がパットから貸してもらったマッチで付けた火矢で射る、矢は燃焼剤の周りで炸裂し一気に燃え広がりその熱でネウロイの外郭が崩壊してコアが露出する。
パット「よし今だ!」
リョーニャ「Урааааааа!!」
さらにパットとリョーニャがその周囲に銃撃を浴びせコアを破壊した。
破壊したの同時に雲は消え吹雪がやんだ。
ひかり「やったー!やりましたね!」
ジョゼ「やったね定ちゃん!」
パット「よくやった!下原」

リョーニャ「これで帰れるぞ。」
終わると作戦の立役者である下原に声をかける。
下原「ありがとう」
ジョゼ「さぁ、基地に帰ろう。お腹へっちゃった！」
下原「うん！」
パット「ああ、久しぶりにまともなものが食いたい。」
リョーニャ「ああ。もうすぐ誕生日だからな、少し豪華なものが食いたい。
贅沢かな？」
下原「いいですよ。ケーキなんかどうですか？」
ふとリョーニャがこぼした呟きに下原が反応する。
リョーニャ「いいのか？同志下原」
下原「ええ。リョーニャさんのためなら喜んで」
リョーニャに笑顔で答える。

ロスマン「五人共無事で本当によかったわ」
基地に帰り５人は食堂にいた。
無事に帰ったことにロスマンは安堵する。
菅野「あのくらいの吹雪で死んでたら話になんねーぜ」
クルピンスキー「もう、素直じゃないな、直ちゃんは」
菅野「ふん」
菅野も続くがそれにクルピンスキーが揚げ足取りをする。
ロスマン「それにしても、吹雪がネウロイの仕業だったなんて…」
バーティ「なかなか面白いことを考えるものだねぇ。ＳＦ作家は喜ぶんじゃないか？」
今回のネウロイのことにロスマンとバーティが考察する。
ロスマン「リョーニャさんたち、今回は大手柄よ」
下原「いえ、任務ですから」
リョーニャ「与えられた任務を精一杯こなしただけです」
ロスマンがほめるがそれにリョーニャと下原は謙遜する。
そして朝食が配膳された。

ひかり「美味しそー！」
マントイフェル「おお、日本料理か。オリエンタルでいいな」
下原「今日は扶桑料理にしてみました」
朝食はヨーロッパでは珍しい扶桑料理だった。
そして全員食べ始める。
ポー「美味い。流石下原だ。」
パット「三ツ星レストランでも働けるんじゃないか？」
その変わらない腕をパットとポーが褒める。
ロスマン「あら？この茶碗蒸し…」
下原「はい。缶詰の底にキャビアが残っていたので使ってみました」
するとロスマンが茶碗蒸しにキャビアが使われていることに気が付く。
ロスマン「キャビアの使い方、よくわかってるわね。どこかのニセ伯爵とは大違いだわ」
クルピンスキー「キャビアなんて塩辛いだけで、どこがいいんだか」
ポー「てめー昨日の事反省してるのか！え！」
ロスマン「だから貴方は偽伯爵なの！」
ロスマンとポーとクルピンスキーで言い争いが始まった。
マントイフェルは流石に昨日の件で擁護する気にはならなかった。
それを横目にサーシャがラルに話す。
サーシャ「食事の力って、凄いんですね」
ラル「美味い」
一言、ラルは感想を漏らした。

その日の夕方、下原はリョーニャを探していた。
下原「ジョゼ、リョーニャさんは？」
ジョゼ「外でミーシャと遊んでるよ」
ジョゼに聞き外にいると分かると下原も外に行った。
外では連れて帰ってきた子熊のミーシャとリョーニャが遊んでいた。

下原がリョーニャに声をかける。
下原「リョーニャさん」
リョーニャ「ん？同志下原か。なんだ？」
ミーシャと遊んでいたリョーニャが振り返る。
下原「ケーキができたんで一緒に食べませんか？」
リョーニャ「あ、ああいいよ。」
ジョゼ「ケーキ！」
リョーニャは下原の誘いを受けるとジョゼが後ろから出てきた。
下原「ジョゼ！」
ジョゼ「定ちゃん、私もケーキ食べたい！」
下原「ごめんジョゼ、ケーキ二人分しか作ってないの」
ジョゼ「そんな～」
下原はケーキを作ったが二人分しか用意していなかった。
それにショックを受けたジョゼはどこかへ行ってしまった。
そして二人きりになると下原は二人分のケーキとフォークを出して近くにあった階段に座って二人で食べ始めた。
リョーニャ「うん、美味い。ありがとう下原」
下原「いえ、このぐらいお安い御用です」
リョーニャが一口食べて感想を言う。
それに下原は謙遜する。
下原もケーキを食べ始める。
下原「リョーニャさん、リョーニャさんはどんな人が好きなんですか？」
リョーニャ「なんだ、急に」
すると下原が聞いてきた。
下原「気になったんです。リョーニャさんがどんな人が好きなのか。」
リョーニャ「そうだな、特にないな。
ここだけの話だが実は今まで誰かと付き合ったことがないんだ。
勉強に忙しくて恋愛なんかに手を出す暇なんてなかっ

たんだよ。」
　下原「そうなんですか。なら、その初めての人、私なんてどうですか？」
　下原が告白する。だが、
　リョーニャ「ふ、ははは！まあそういうのはもうちょっと大きくなっていろんな人を見てから言いな。
　その時にもう一回考えてみろ。下原、美味かったぞケーキ。」
　リョーニャが笑って返す。リョーニャはこれを本気で取り合わなかった。
　そして完食したケーキの皿とフォークを返すとミーシャとまた遊び始めた。
　それに残された下原はつぶやいた。
　下原「…ずるい人です…」
　その顔は恋する乙女そのものだった。

　ヘプナー「まさかこの世に天気を操作するネウロイがいるとはな。
　物書きが喜びそうな話だよ。」
　トレスコウ「ええ。知り合いの記者もなかなか食いつきがよかったですよ」
　夜、コンサート会場のＶＩＰゾーンでヘプナーとトレスコウ、そしてフーベ、ベルザーリン、ヴァトゥーチンが会話していた。
　フーベ「そのせいで隷下の第１５０装甲軍団では車両の故障が続発、ペテルブルクの工場は修理で大わらわですよ。
　病院も風邪や肺炎、凍傷、低体温症患者で一杯だ」
　ベルザーリン「これのせいでフィンランド湾が凍結してバルト海艦隊が行動不能になった。
　さらにはヴォルホフ方面に向かう鉄道路線が大雪で寸断、ペテルブルクとチフヴィンの操車場に車両が滞留してるよ。
　鉄道保安列車２本と装甲列車２本が途中で故障して明日ペテルブルクの工場に送り返されるらしい」

ネウロイの被害は兵士たちへの病気やケガだけでなく各地で車両などの故障、鉄道路線・道路の寸断が発生して工兵たちは大わらわだった。
特に大動脈たるペテルブルク～ヴォルホフ間では雪崩と大雪によって鉄道網が寸断されていた。
ニコライ「そうか。輸送の遅れが一番の心配だ。
ところでスピードバード作戦は？」
ヘプナー「順調だ。第８８砲兵軍団をコラ半島に送った。
永久凍土で陣地建設は難しいが列車砲を引き込めるようにするそうだ。
弾の備蓄も十分あるらしい。
ただ気象が安定しないからやるとすれば３月まで待つ必要があるそうだ。」
ニコライ「そうか。まあ今はコンサートを楽しもうじゃないか。
そろそろ開演か。」
ヴァトゥーチンが時計を確認して会話を止める。
すると舞台の幕が上がりオーケストラと司会者が出てくる。
司会者「本日はオラーシャ内務省歌と踊りのアンサンブルの公演に来場していただきまして誠にありがとうございます。
では、１曲目とまいりましょう。Ｍ・グリンカ作曲オペラ「皇帝に捧げた命」より「栄光あれ」です。」
司会者が下がるとコンサートが始まった。
ペテルブルクの夜は更けていった。

第13話：ペテルブルクの片隅に

ロスマン「飛んでいる自分をイメージしてバランスを取りなさい！」

ひかり「はい先生！」

ある日、ひかりはロスマンとともに格納庫で訓練を行っていた。

すると横からサーシャの声が聞こえて振り向く。

サーシャ「こら、待ちなさい！」

それはなぜかニパを追いかけ回しているサーシャがいた。

ひかり「あっ、ニパさん！」

ニパ「ごめんなさーい！」

サーシャ「お待ちなさい！」

ポー「いいぞーもっと逃げろー1分以内にニパを捕まえられない20ドル賭ける。

パット、お前は？」

パット「えぇ…あれ賭けにするのか？」

ポー「いいだろ。いい小遣い稼ぎだ。」

パット「分かった、1分以内に捕まえられるに20ドル」

すると後ろからポーとパットがこの追いかけっこを煽りながら賭けをしていた。

ひかりの意識がそっちに集中しているとロスマンが雪玉を投げてきた。

ひかりはバランスを意識しながらそれを回避する。

すると突然ひかりの前にオイル缶が転がりニパがそれを踏んで転ぶ。

ひかり「ニパさん!?」

ニパ「いてて、何でオイル缶が転がって…」

ニパはたんこぶを作りながらオイル缶を見る。

すると背後に恐ろしい気配を感じ振り返る、そこにはサーシャがいた。

サーシャ「ニパさん」

ニパ「サ、サーシャさん…」
サーシャ「正座！」
パット「ふん、俺の勝ちだな。２０ドルは貰ってくぞ。」
サーシャはニパに正座を指示する。腕時計を確認して１分も経っていないためパットはポーの持っていた２０ドル札を取るとタバコを吸いながら格納庫を出て行った。
二パは自分のユニットの前に正座させられサーシャはユニットを見て溜息をついた。
サーシャ「またユニットをこんなにして」
ひかり「ニパさん頭大丈夫ですか？」
二パ「あぁ、平気平気。私の固有魔法は『超回復』でね。他人は直せないけど…
　ほら、この通り」
ひかり「凄い！墜落し放題でげふっ！」
ひかりが二パの怪我を心配すると二パは固有魔法を使って回復する。
それを見てひかりが驚いていると雪玉が直撃する。
ロスマン「しっかりよけなさい。ネウロイの攻撃はこんなものじゃないわよ」
ひかり「はい、先せばふっ！」
二パ「墜落し放題って…」
サーシャ「はぁ…」
ひかりの言葉に二パは苦笑いしサーシャはため息をつく。
そして二パのユニットを見る。
サーシャ「えっと、今回の破損個所は、ありました。
　ポーさん、この部品を直してください。」
ポー「はいはい、こいつをもとに直せばいいんだろ？はいよっと。」
サーシャは即座に固有魔法を使い破損部位を確認してポーに指示する。
ポーは指示された通りその部品を取ると固有魔法を使って元に戻す。

二パ「さすがサーシャさん、ポーさん！これならまた落ちても…」
サーシャ「また？」
ポー「また落ちる気か？」
二パ「あ、安全第一で…」
二パの発言にポーとサーシャが反応する。
それに二パもビビり言い直す。
ひかり「サーシャさんって見ただけでユニットの直し方が分かるんですか？」
ふと、ひかりはサーシャに疑問を持つ。
それにロスマンが答えた。
ロスマン「彼女の固有魔法は映像記憶能力。
　難解な技術書から十年前の朝食のメニューと言った些細なことまで魔法力で記憶した物をすべて頭に入っているのよ」
ひかり「凄ーい！」
その固有魔法にひかりは驚く。
ポー「テストじゃカンニングし放題だけどな」
ひかり「はは…」
だがそこにポーが水を差すことを言いひかりは苦笑いする。
ロスマン「サーシャさん。戦闘隊長であるあなたの力は出来れば修理以外で活用してほしいものね」
サーシャ「すみません…」
ロスマンにサーシャは謝る。
５０２は異常なほどユニットの損傷率が高い部隊であるがその分稼働率も高かった。
　稼働率というのはいくらそこに兵器がたくさんあろうともまともに動かなければ何の役にも立たないのである。
　例えばスターリングラード戦ではドイツ軍が数か月戦車を止めていたため装置類が故障、いざ使おうとしたら全く動かなかった話やパンターの初陣たるクルスク戦では最新鋭のパンターが戦場で次から次へと故障、戦闘以前に大混乱となった。その稼働率は全１９０両中作戦開始僅か５日で１０両にまで激減したという。

そのため稼働率というのはその部隊の整備能力を図ることができる指標の一つだった。
そして５０２が異常なのはその高い稼働率を過酷な冬が待ち受けるペテルブルクで達成したことだった。
するとポーが呑気なことを言う。
ポー「真面目ちゃんは損だからねぇ～
サーシャちゃんも俺みたいに気楽に生きればいいのに。」
サーシャ「ポーさんは気楽すぎます。」
それにサーシャが反応する。
ポー「おっと～眉間にしわができてるよ。
そんな気を張らない張らない。せっかくの美人が無駄になっちゃうよ～」
さらにポーが煽る。
すると突然アナウンスが入る。
ラル『北東部監視所がネウロイの攻撃を受けた。出られる者は全員出動せよ』
二パ「行かなきゃ！」
サーシャ「ニパさんは留守番です」
それを聞いた二パが向かおうとする。だがサーシャが止める。
二パ「えっ!?」
サーシャ「まだ修理が終わってないですから」
二パ「え～、そんなー！」
ポー「残念だったな。まあ留守番は頼むよ～」
呑気にポーは二パに声をかけるとコートを着てサーシャたちと共に出撃していった。

「ワーシャ、暇だな。」
「ああ。全く俺たちコサックの出番と言えばほぼパトロールぐらいだからな。」
その十数分前、市内を二人のコサックがパトロールしていた。
ペテルブルクは戦前３００万以上の人口を誇ったヨーロッパ有数

の大都市であった。
だが今ではその人口の大半が避難し残っていたのは軍隊、５０２以下のいくつかの空軍部隊、防空を行う1個高射砲師団、ペテルブルクにあったオラーシャ陸軍砲兵学校、オラーシャ海軍兵学校、オラーシャ海軍大学校、オラーシャ海軍バルト海艦隊、カールスラント海軍スオムス湾小艦隊、スオムス海軍分遣隊、警備を行う2個騎兵連隊と1個警察連隊、１０から１５程度の補充教育部隊、再編中の3個師団、1個要塞師団、その他後方支援部隊、移動中の1個戦車連隊、工場で修理を終えたばかりの装甲列車3本と鉄道保安列車2本にペテルブルクの各司令部程度と非常に手薄だった。
その合計は海軍部隊2万、陸軍部隊4万、空軍部隊1万５０００、火砲５００門、戦車３００両でその大半は再編中か編制中、訓練中が大半だった。
もしこの場で戦闘が発生した場合、再編中などで装備や練度が劣悪な陸軍部隊の大半は役に立たず頼りになるのは2個騎兵連隊と海軍部隊程度だった。
コサックA「ん？おい、見ろなんだありゃ？」
するとコサックの一人が建物の一部がおかしいことに気が付く。
よく見ると鐘が不自然にあった。
コサックB「確かに。撃ってみよう」
もう一人のコサックは肩にかけていたカービンを構えて鐘を撃つ。
弾はそれに当たる。するとその鐘がネウロイに変わった。
コサックA「おい！ネウロイだ！」
コサックB「市内にいるだと！」
すぐにコサックは馬を走らせネウロイの方に向かう。
ネウロイはシグナルのようなものを送ると逃げる。
コサックはそれを追いかけるが迷路のようなペテルブルクの街に消えてしまった。
その直後、ネウロイのいた建物に何かが直撃、破壊された。

サーシャたちが到着した時、そこには警備部隊の兵士たちと騎兵が

多数いた。
「おい！そっちはどうなってる？」
警備兵「生存者は見つかってません。」
「そうか。」
「ファス少佐、どうだ？」
ファス「ベーゼラーガー中佐、ダメですね。」
残骸のそばでは警備部隊が生存者を探していた。
警備部隊警察戦闘団ファス隊長のファス少佐と騎兵連隊ベーゼラーガーのベーゼラーガー中佐、コサック連隊フォン・ヴォルフのヴォルフ大佐はその作業を見ながら状況を確認していた。
ベーゼラーガー「それにしても姿を変えるネウロイとはな。
この間のに続いてブンヤが喜びそうだ」
ヴォルフ「ああ。厄介なのがそれがこの大都会ペテルブルクに潜んでるってことだ。
探し出さないと第2、第3の被害が出てくる。」
ファス「そうですね。」
すると上空からエンジン音がし振り向くとウィッチがいた。
ヴォルフ「やっとお出ましか。」
ベーゼラーガー「そうだな。」
すると上空からブロンドのウィッチが降りてきた。
サーシャ「５０２のアレクサンドラ・ポルクイーシキン大尉です。
状況は？」
ヴォルフ「騎兵連隊ヴォルフ連隊長フォン・ヴォルフ大佐だ。
見ての通り被害は全壊、敵は砲撃役と観測役のネウロイだ。
砲撃担当は一発でピンポイントで破壊した。
観測担当は完璧ではないが姿を変える能力を持っている。
我々は後者を今捜索中だから君らは砲撃役を探してくれ。」
サーシャが状況をヴォルフに聞くとヴォルフは指をさしたりして説明して指示する。

すると無線でラルがサーシャに聞く。
ラル『状況は？』
サーシャ「ヴォルフ大佐によれば砲撃は一発のみ。ペテルブルク外周部より撃ち込まれたと思われます。
　また、観測役と思われるネウロイが一体存在して現在ヴォルフ大佐たちが捜索中だそうです。」
サーシャは状況を明確に簡潔に報告する。
菅野「くそっ！とうとう街の近くまで来やがったか！」
下原「今まではラドガ湖が陸上ネウロイの侵攻を阻んでくれていたけど…」
ジョゼ「この前凍っちゃったから…」
菅野が毒づきジョゼと下原も続く。
サーシャ「隊長、指示を」
ラル『サーシャに任せる』
サーシャ「えぇ!?」
ロスマンがラルに指示を請うとラルはサーシャに丸投げする。
それにサーシャは驚く。
パット「で、どうする？どっちにいけばいい？」
クルピンスキー「それでは戦闘隊長、ご命令を」
サーシャにマッキーノコートを着たパットとクルピンスキーが聞く。
それにサーシャは迷っているとポーが口を出した。
ポー「まず、郊外の各部隊からの情報を集めろ。
　砲撃をしたとすれば発砲音かソニックブームが発生するはずだ。
　両方ともかなり目立つ音だ。
　簡単に見つかるだろう。
　それでも見つからない場合は砲撃した痕跡を探せ。
　少なくとも積雪で比較的分かりやすくなってるはずだ。
　サーシャちゃん、これでいいか？」
サーシャ「え、ええ。ポーさんの言ったとおりに行動してください」

「「了解！」」
ポーの指示は全く持って的を射ていたためサーシャも同意する。
そして５０２はポーの指示通り行動を開始した。
すぐに情報が集まりペテルブルクから９０キロほど離れたところに展開していた砲兵部隊が未確認の発砲音を聞いたことを報告した。
５０２はその連絡を受けてすぐにその地点へ向かった。

その数十分後、ペテルブルク市内にあった倉庫群では監視所の破壊から市内全域で警戒レベルを強化されていたため旧式のＴ２６とＢＡ―２０装甲車を伴ったオーバーコートを着たカールスラント軍の中年召集兵からなる一隊がパトロール中だった。
兵士Ａ「たく、市内にネウロイが侵入したとか５０２はいったい何をやってるんだか。」
兵士Ｂ「全くだ。俺たちはここで警備だけをしていればよかったのにな」
兵士たちは５０２に愚痴を言いながら進んでいった。
すると倉庫のそばに不審な車両を発見する。
一応軍隊でも車両不足のため乗用車は使われているがその大半は最低限ノテックライトなどのライトをつけるかどこかにＷＨ（国防軍）、ＷＬ（空軍）、ＷＭ（海軍）、ＵＮ（連合軍）などの所属マークを書かれていたがそれが一切なかった。
車長「前方に不審車両、射撃用意。ＨＥ装填」
砲手「了解。」
それを見たＴ２６の車長は４５ｍｍ砲に榴弾を装填、砲手もその不審車両に照準する。
その周りでは兵士やＢＡ―２０もその車に銃を向ける。
するとヘッドライトが点滅し始めた。
車長「撃て！」
Ｔ２６が発砲すると続いて兵士たちとＢＡ―２０も一斉に発砲した。
するとそれはネウロイに変わり撃たれながらも信号を送ると逃げ

始めた。
すぐに兵士たちと装甲車がそれを撃ちながら追いかけるがすぐ見失った。
その直後、倉庫群の一角が破壊された。

その少し前
下原『こちら下原・ジョゼ班、ポイントA異常ありません』
菅野『ポイントB、異常ないぜ』
砲兵部隊の連絡を受けてペテルブルクから約９０キロ離れた地域を５０２は捜索中だった。
だが全く見つからず菅野のいた場所も下原たちがいたところも何も見つからなかった。
サーシャはロスマン、ひかり、パット、ポーと共に飛んでいた。
サーシャ「了解、帰投してください」
ひかり「えっ!?まだネウロイを見つけてないですよ」
サーシャ「ネウロイ探索はこれより陸戦ウィッチ部隊へ引き継ぎます。
パットさん、ポーさん、ロスマンさん、雁淵さんと先に戻ってください。
私は最後にもう一回りしていきます」
ポー「俺はサーシャちゃんについてくぞ。
可愛いレディーをこんな危険なところで一人にしたら危険だ。」
するとサーシャがひかりたちを帰還させようとするがポーはサーシャに付いて行く。
単独行動は戦場では基本的に厳禁である。なにせ危険だ。
普通そんなことをするのは腕に自信のある物かとんでもないバカのどっちかだ。
ひかりたちは渋々帰還するがポーは結局無理矢理付いて行った。
サーシャ「ポーさん、なぜ私の指示に従わないんですか?」
ポー「こんな危険なところでレディーを一人にできますかな御嬢さ

ん」

サーシャ「私はあなたに守られるほど弱くはありません。
私はあなたの上官です、指示に従ってください。」

ポー「その指示が間違っていたら?」

サーシャとポーの間で飛びながら口論が始まった。

すると突然下の雪原が盛り上がると中からネウロイが現れた。

サーシャ「なっ、ネウロイ!」

ポー「本当にいたとはな!こちら502、ポイントアルファーロメオブラボー13にネウロイ発見!
第360砲兵連隊に火力支援を要請する!」

砲兵『こちらホワイトロック。了解した。火力支援を開始する』

即座にサーシャは機関銃を構えて攻撃しポーは無線で近隣の砲兵部隊に連絡する。

砲兵部隊は即座に装備していた強力で破壊的な威力を誇るML—20 152㎜榴弾砲が砲撃を開始してねうろいにあびせるがネウロイはその砲弾の雨の中、一発を砲撃すると被弾しながらも雪の中に消えて行った。

ポー「ファッキンシット!」

サーシャ「逃げられた…」

ポーは罵りの言葉を吐き、サーシャは悔しそうに穴を見ているとラルから無線が届いた。

ラル『こちらラル、第一貯蔵庫がやられた』

ポー「了解した。連中の目標はどうやら街の戦略拠点らしい」

それにポーは答えネウロイの狙いを分析する。

ネウロイの狙いは町の戦略拠点、即ち、司令部・補給物資集積所・通信施設等の破壊であった。

ベルザーリン「同志諸君、緊急の会議を行う。」

その数時間後、ペテルブルク都市司令官ベルザーリンは市内及びペテルブルク周辺のペテルブルク軍管区にいた全部隊の指揮官を集め

会議を開始した。
ベルザーリン「本日ネウロイは市内に侵入、市内にあった監視所と倉庫群の一部を破壊した！
本日午前中より市内の警戒レベルをレベル３からレベル１に引き上げた。
そして、貴官らには即日、ネウロイ掃討のため部隊を編制、即座に送ってもらう。
また本時刻を持ってペテルブルク軍管区の全部隊に対して動員命令を出す。
これは海軍、空軍、陸軍関係ない。
病院に入院中の傷病兵も対象である。」
それにラルも含めた各指揮官は驚く。
掃討のため即日部隊を派遣しろというのだ。無茶苦茶だったがベルザーリンは情け容赦のない動員令をかけ海軍部隊と空軍部隊、さらには後方部隊や警備部隊、教育補充部隊、入院中の傷病兵から警戒大隊を編成した。
ベルザーリン「それと、５０２は本日より強制的にペテルブルク都市部隊の指揮下に置く。
有無は言わさん！」
ラル「ちょっと待ってください！ベルザーリン中将！」
ベルザーリンは５０２を強制的に編成した臨時編成ペテルブルク都市部隊に組み込んだ。
強権的だったがネウロイの掃討のため情け容赦のない動員をかけた以上５０２も対象となった。
そのため集められた戦力は合計２万１０００人、戦車５９台、火砲９８門だった。
だがその大半は装備が劣悪、市内の操車場には製造されたばかりのチェリャビンスクの国営第１００工場製のＴ３４―８５や修理を終えたばかりの戦車が多数あったがこれは前線部隊への補充用であり戦車の大半は旧式のＢＴやＴ２６、よくてＴ３４―７６だった。
火砲も大半が高射砲であり陸戦用は少数のＦ２２かＰａｋ９７／

３８、Ｆ２２ＵＳＶという旧式砲ぐらいだった。
さらには大半が機械化されずせいぜいよくて自動車化であった。頼りになるのは５０２と２個騎兵連隊、そして修理後の装甲列車と鉄道保安列車だけだった。
ペテルブルクの運命は５０２、そしてベルザーリンのもとに集められた貧弱で頼りない泥縄式の戦闘団群にかかっていた。

第１４話：踊る大捜索線／ペテルブルクを封鎖せよ！

ネウロイを捜索、撃破するため作戦を開始したペテルブルク都市部隊、一応第３６０特別編成師団なる大層な名称が付けられたが問題は次にどこを攻撃するかだった。

なにせ攻撃されそうな場所は山ほどある。

海沿いの物資の荷揚げ拠点だがバルト海の氷結のため使用不能であるペテルブルク港、ペテルブルク作戦軍の司令部のある海軍本部、市内では最大の物資の運搬拠点である市内のいくつかの駅、交通の要所操車場、各種工場、通信基地となった教会、そして市内各地に点在する物資集積所と各種部隊の司令部。

これだけの場所を頼りない部隊で守るのは困難だった。

そのためベルザーリンは市街をＡ～Ｐの地区に分けて重点地域を設定した。

そしてその重点地域の一つが第２倉庫地区、５０２の第二貯蔵庫などがあるこの地区には騎兵連隊ベーゼラーガー第Ⅲ大隊とオラーシャ軍第７６補充教育戦車大隊第１中隊のＢＴ―７１０両、高射砲師団ペテルブルク所属の８５㎜５２―Ｋ高射砲８門が配備された。

５０２はベルザーリンの指示により分割、運用された。

そのうちの一つがサーシャ率いるポー、二パ、ひかり、マントイフェルの部隊だった。

だがこの内マントイフェルは騎兵将校の経歴から陸軍側との連絡将校として地上から捜索するため戦力は少なかった。

残りはベルザーリンの指示により郊外で砲兵部隊と戦車部隊と共同して砲撃担当を捕捉、撃破を担当した。

この部隊はそれぞれポルクイーシキングループとジャベールグループと呼称された。

そして前者のグループは翌日、ペテルブルク上空を飛行しながらネウロイを捜索していた。

二パ「いやぁ…ラル隊長はああいってたけど街には小さい頃に一度買い物に来たぐらいで本当は土地勘とかあんまりないんだよね」

二パが自信なさげに呟く。
この前日、部隊の振り分けの際に二パとサーシャがこの部隊に入れられ出身の筈のリョーニャが外された（ラル曰くなんとなく）ため地理に詳しいものは二パとサーシャだったがそれでも全く知らないよりはマシ程度だった。
ひかり「へー、何買ったんで…うわぁ！」
ひかりが二パに話しかけていると尖塔とぶつかりかけた。
ペテルブルクは史実では長く帝政ロシアの首都であり、ロシア最初の近代的都市と言える長い歴史を誇る街である。
そのため街には多くの歴史ある建物や遺産が多数存在していた。
ポー「大丈夫か？」
ひかり「なんとか…」
サーシャ「はぁ…」
ポー「まあ、落ちてもここは大都市だからすぐ救助されるとしても気をつけろよ。
この街には怖ーいクマがいるからね～」
サーシャ「それは誰の事かしら？」
ポー「おー怖い怖い」
ポーたちが心配するがポーはサーシャをからかっていた。
それにサーシャが反応するがポーは悪びれることもなかった。
ふとひかりはサーシャに話しかける。
ひかり「あの、サーシャさん！」
サーシャ「はい？」
ひかり「サーシャさんはこの街に詳しいんですか？」
サーシャ「昨日も言ったけど、私は南部の生まれだから…
この街には祖母が疎開する前に住んでいたらしいけど…」
二パ「じゃあ大事な街ですね！」
サーシャ「え？」
すると二パが割り込んだ。
二パ「頑張ってネウロイから守らなきゃ！」
サーシャ「どうせ無人なのだから、街を防衛する意味はありません」

サーシャが冷たく返す。
二パ「え？でもおばあちゃんの家が…」
サーシャ「私自身何の思い出もありません。
そもそもこの街に祖母を訪ねたことなど一度もないのだから…」
二パ「サーシャさん…」
サーシャ「無人の街を守るよりも、ネウロイを倒すことこそウィッチの責務です」
二パ「そ、そんな…」
サーシャ「くれぐれもつまらないことに気を取られ直したばかりのユニットをまた壊さないでくださいね」
二パ「はい…」
ポー「それはどうかな」
するとポーが口を開いた。
ポー「少なくとも貴重な歴史ある街並みや教会、宮殿は守るべきだと思うね。
それはこの街のためではなく人類の文化・学術のためだ。
我々が死んでも文化と街は残る、それを子供たちに受け継ぐのが今を生きる俺たちの責務だろ？」
ポーは文化・学術的な理由からできる限り守るべきだという。
戦争によって失われた遺産というのは非常に多いもので第２次アヘン戦争（アロー戦争）では清朝の庭園である頤和園の前身清漪園が略奪によって破壊され、義和団の乱でも頤和園は略奪の対象となったほか紫禁城などでも略奪が行われた。
大戦では有名なものではワルシャワ旧市街が跡形もなく消され、ドレスデンでは聖母教会とツヴィンガー宮殿が破壊され、ベルリンではカイザー・ヴィルヘルム記念教会が、ケーニヒスベルクでは歴史あるケーニヒスベルク城とケーニヒスベルク大聖堂が破壊されケーニヒスベルク城は再建されずソビエトの家なる運がなさすぎる建物に変わってしまった。
イギリスではコヴェントリー大聖堂が破壊され、エストニアではエ

ストニアの古都ナルヴァが完全に破壊され歴史ある街並みは完全に消えてしまい、イタリアではカトリック最古の修道会ベネディクト会の発祥の地であり長くヨーロッパの学術・文化の中心だったモンテ・カッシーノ修道院が激戦地となり教会は破壊されてしまったなど多くの被害が出ていた。

さらには各地で芸術品の略奪が相次いだ。

ドイツは国家プロジェクトとして占領国各地からユダヤ人や美術館・博物館・画商から大量の絵画を略奪又は不当に安く買いたたいた。

その中にはフェルメール、レンブラント、モネ、ダヴィンチなど多くの名作が名を連ねていた。

ソ連に至ってはそのドイツが略奪した絵画をさらにドイツが持っていたコレクションごと強奪、現在も１００万点以上が返還されていない。

すると突然、無線からラルの声が響く。

ラル『第二貯蔵庫付近より、謎の電波の発信を観測班がとらえた。至急向かってくれ』

サーシャ「了解！」

その内容を受け即座に第２倉庫地区に向かった。

だが到着した時には倉庫群の一部が破壊されていた。

ニパ「間に合わなかった…」

ひかり「そんな…！」

それにニパとひかりはショックを受けるがその横でサーシャに下から馬に乗りＳｔｇ４４を背負ったマントイフェルが話しかける。

マントイフェル「サーシャ、見ての通りだ。今、部隊が周辺部を捜索中だ。君らも探してくれ。」

サーシャ「分かりました。」

マントイフェルの要請にサーシャたちは散開して探し始める。

それを見たマントイフェルも馬を走らせて探し始める。

するとどうにもおかしい銅像を見つける。

マントイフェル「ん？なんだあの銅像？」

ニパ「どうかしたの？マントイフェルさん」

それを見て違和感を口にすると近くにいたニパが近づき聞く。
マントイフェル「あの銅像、おかしくないか？」
ニパ「ん？確かに。」
マントイフェル「ちょっと探りを入れて見る。ハ！」
ニパにそう言うとマントイフェルはサーベルを抜き馬を走らせすれ違いざまに銅像をサーベルで切りつけ馬首を返す。
すると銅像がネウロイへと変わった。
ニパ「いた！」
マントイフェル「こんなところにいたとはな。」
それを見たマントイフェルはサーベルを戻してＳｔｇ４４を右手で保持して構える。
ネウロイはそれを見ると逃げ始めた。
サーシャ「追います！続いて！」
それを見たマントイフェルとサーシャたちも追いかけ始めた。
さらにその騒ぎに気がついた周りにいた騎兵たちが集まり始めネウロイを追ってペテルブルクの迷路のような路地を進んでいった。
サーシャたちは看板や箱に邪魔されながらも追いかけていたがニパやひかりはすぐにぶつかったりして脱落するがポーとサーシャは問題なく進み、下を進む騎兵たちは馬上からネウロイに撃ったりサーベルを振り回して追いかけていた。
狭く複雑な路地ではウィッチよりもむしろ速く、小回りが利く騎兵の方が有利だった。
マントイフェル「よし！大通りに出る…うわ！」
さらには大通りに出ると突然後ろの建物が爆発した。
道路にはＢＴがおりそれが発砲していた。
大通りでは戦車だけでなく大砲なども発砲して後ろの建物や手前の地面に着弾していた。
それだけでなく追いかける兵士も次から次へと増え始め気がつけばネウロイ一匹を追いかけるのに百騎近い騎兵が追いかけ、さらに機関銃を据え付けたＧＡＺやタチャンカなども追いかけて撃ちまくっていた。

サーシャとポーはギリギリ砲撃を回避する。
ポー「クッソ！これじゃ埒が明かない！一旦上昇する！」
ポーは一旦上昇して追いかけようとするがすぐに後悔する。
ポー「ファック！全く見えない！」
ペテルブルクの迷路のような街並みによって全く見えなかった。
一方追いかけていたサーシャは先回りしようと動いていた。
その下では騎兵の一部もそれに続いていた。
サーシャ「ここだ！」
先回りしようと角を曲がり路地に入る。
するとある違和感に気が付く。
サーシャ「…あれ？何で私、こんなに迷わず飛べるの？」
角を曲がり路地を進むと前方にネウロイと追いかける騎兵を見つける。
それに向かってサーシャは発砲する。
さらに下の騎兵も追いかけようとするが
マントイフェル「しまった！」
正面から味方の騎兵が来るというミスを犯し騎兵たちの間で誤射が発生して数人が落馬する。
そのため騎兵たちは急停止する。
そのため追いかけるのはサーシャだけになった。
サーシャ「…えっ!?」
ネウロイを追いかけ角を曲がったサーシャだったが突如記憶がフラッシュバックした。
その記憶は自分の全く知らないものであったためそれに気を取られネウロイを逃がしてしまった。
二パ「サーシャさん！遅れてごめん！」
ポー「すまん、上からじゃ全く見つけられなかった。」
ひかり「ネウロイは!?」
やっと追いついた二パとポーとひかりがサーシャに話しかける。
だがサーシャはつぶやいた。
サーシャ「私、この街を知っている…」

ベルザーリン「ラル君。私はどちらか片方を完全に破壊されればそれでいい。
いくら優秀な狙撃手さえ観測員がいなければ戦力は半分だ。
だが！どういうことだこれは！」
ラル「申し訳ありません。ベルザーリン中将」
その日の夕方、ラルはメンシコフ宮殿にあるペテルブルク都市司令部に呼び出されベルザーリンに叱責されていた。
ベルザーリン「我々の騎兵部隊で誤射で３８名が負傷して戦果ゼロだと！
貴様いい加減にしろ！これまでの悪行はまだ耐えれた、だがこれは別だ！
いくら物資をかすめ取ろうがまだいい！
人的被害が出てるんだ！」
ベルザーリンが怒り狂っていたのは今までのラルの物資横領の悪行と今回の誤射による負傷者の件だった。
これによって元々マグマのように煮えたぎっていたラルへの怒りが爆発した。
ラル「申し訳ございません…」
ベルザーリン「はぁ…まあいい。
唯一の救いと言えば奴が一日に3発しか撃てず面で攻撃できないことだな。
倉庫群を一撃で吹き飛ばされないだけマシだ。」
救いといえたのが一日に3発しか撃てないことと面で攻撃できない点だけだった。
ラルは基地に戻った。
ラル「はぁ…ベルザーリン中将にこってり絞られた。」
ロスマン「そのようですね。」

ラル「ああ。今日の誤射の件と今までの物資の件でな。」
執務室でラルはロスマンたちに愚痴る。
するとサーシャの表情が優れないことに気が付き声をかける。
ラル「どうした?サーシャ」
サーシャ「い、いえ。すみません、自分が仕留めてさえいれば…」
ラル「まぁ、そういう時もある。明日も頼むぞ」
サーシャにラルは責任を押し付けず励ました。
このあたりはラルの上司としての力量が見える。部下としては扱いづらくて仕方ないが上司としては優秀すぎた。
サーシャはその後サウナで昼間のことを考えていた。
サーシャ「あの時のあれは…」
サーシャ（やっぱり、過去にあんな景色を記録した覚えはないわ。
けど、なんで街のことをあんなにはっきり…?）
サーシャは頭を振り考えるのをやめる。
サーシャ（何を考えてるの?街のことよりネウロイを倒すことの方が先決よ!）
そう暗示をかけるとサウナから出て行った。

ポー「二パ?何やってんだ?」
二パ「うわ!なんだ~ポーさんか」
その頃、ポーは格納庫で何かをやっていた二パに話しかけた。
ポー「で、何やってんだ?」
二パ「実は…」
二パはポーに聞かれ事情を話した、すると
ポー「面白そうじゃねえか。一枚噛ませろ」
そういうと手元にあったペンキを取るとサーシャのユニットに絵を描き始めた。
ポー「どうかな?」
二パ「凄ーい、上手!」
ポー「まあな。こう見えて美術の成績ずっとA+だったからな」
ポーは書き上げた絵を二パに見せ二パはそれを見てほめる。

サーシャ「ニパさん?ポーさん?どうしたのこんなところで?」
すると後ろからサーシャが声をかける。
サーシャ「それ、私のユニットでしょ?」
二パ「なな、なんでもないよ?」
それに二パは狼狽する。
ふとサーシャは後ろにあったユニットにあったものに気が付く。
サーシャ「なっ、なにこの落書き!?」
サーシャのユニットには膝の部分にあたる場所に雄鶏と豚が、そして整備用ハッチには何か得体のしれないものが書かれていた。
二パ「あの、これは…」
サーシャ「悪戯にも程があります!確かにニパさんとポーさんには厳しく当たることもありましたが…
だからと言ってこんなこと!」
サーシャは怒り二パたちを問いつめる。
二パは必死で弁解しようとする。
二パ「待ってよ!違うんだ、これは…」
ポー「落ち着けって」
サーシャ「私だって別に好きで厳しくしているわけじゃないのに!でも、私は戦闘隊長だから皆のことを…」
ポー「落ち着け、一旦深呼吸しろ。別に悪気があって書いてるんじゃない。
ちゃんと意味があるんだ。」
ポーの言葉にサーシャはいったん冷静になった。
そしてポーが説明した。
ポー「タトゥーって知ってるだろ?
よく船乗りがこれを入れているがその意味は知ってるか?
左ひざに豚を、右ひざに雄鶏を入れると決して闘志を失わないって意味になるんだ。」
ポーが書いた雄鶏と豚は同僚の水兵から教えてもらったタトゥーをモチーフにしていた。
タトゥー、タヒチ語で傷を意味する入れ墨の一種は船乗りにとって

はとても重要なものだった。
始まりはクックが2度目の航海の際にヨーロッパに伝えそれに一番最初に反応したのが船乗りだった。
船乗りは非常に迷信深い生き物であり彼らは数々の護符となる文様を作り自分たちの体に入れていた。
例えば北極星や錨、中国航海経験者は龍、赤道を超えたものはネプチューンと海亀、ホーン岬を通過したものはマストが奇数（偶数は船乗りにとっては不吉）の帆船を描いていた。
その中で雄鶏と豚は膝に入れると闘志を失わないという意味になった。
これは単なる迷信だが余談としてこの風潮をみくだしたクックはその後知られている通り3回目の航海の最中ハワイでタトゥーをしたハワイの先住民に殺されてしまった。
サーシャ「そうだったんですか…ところでこれは何ですか?」
それを聞いたサーシャは誤解を解くがまだ整備用ハッチの裏に書かれていた得体のしれないものが分からなかった。
ポー「ああ、それ、二パの書いたテントウムシ。
二パの絵心がなさ過ぎて化け物になった。」
サーシャ「えっと…本当ですか?」
二パ「い、一応ね…」
ポーはそれを説明するが絵心のなさが酷すぎ何とかギリギリ見えなくもない程度だった。
ポー「まあ、俺たちもさ一応色々言ってるけど君のようなかわいこちゃんを気にかけてるのよ」
二パ「そう。だからサーシャさんも…」
するとサーシャは二人に抱き着くと呟いた。
サーシャ「…バカ」
ポー「バカで結構。男なんて女ごときに命を懸けるバカしかいないからな」

第15話：ペテルブルク／ネウロイと戦闘隊長に隠された秘密

翌日、ニパとひかりはペテルブルク港上空を飛行していた。

この地区は海軍の造船所、兵器工場、学校、倉庫、燃料タンク、弾薬庫、潜水艦基地などが密集する中心部に匹敵する重要地区であったためこの日には増援が送られ守っていたのはオラーシャ海軍歩兵の歩兵大隊〝アドミラル・セニャーヴィン〟、歩兵大隊〝アドミラル・ウシャコフ〟、砲兵大隊〝ゲネラール＝アドミラル・アプラークシン〟、カールスラント海軍歩兵大隊〝アドミラル・ヒッパー〟、スオムス海軍歩兵中隊〝イルマリネン〟の3個歩兵大隊と一個砲兵大隊、予備となる一個歩兵中隊が当てられていた。

さらに港内にはオラーシャ海軍バルト海艦隊の巡洋艦マクシム・ゴーリキー、駆逐艦ヴェッツェ＝アドミラール・ドロースト、スラーヴヌイ、ステレグーシチイ、グロジャーシチイ、氷結のためペテルブルクに取り残されたカールスラント海軍高射砲艦ニオベなど多数の軍艦が在泊していたため戦闘能力は最も高かった。

ひかり「今日は別行動なんですね、ニパさん」

ニパ「うん。サーシャさんが街を記憶してネウロイが潜んでいるのを見破るんだって。

ポーさんはサーシャさんを一人にしては置けないって無理やりついて行ってるらしいよ。」

ひかり「えっ!?この街を全部ですか!?」

ひかりはニパの話に驚くがニパは流石にそれはないと思っていた。

ニパ「流石にそれは無いよ。次にネウロイが狙いそうな施設の周辺を記憶して、あぶり出すんだって」

ひかり「へぇ～」

そうは言うもののペテルブルクは史実ではソ連の軍事生産の最大の拠点でありソ連第2位の都市であったため巨大で重要な場所はそれこそ山のようにあった。

ふとひかりは前を見てニパを呼ぶ。
ひかり「ニパさん前！」
ひかり「え？ぎゃ！」
ニパは前を見るが間に合わず何故かあった銅像とぶつかってしまった。
ひかり「ニパさん大丈夫ですか？」
ニパ「またかよ…えっ？」
ニパがぶつかったものを確認するがすぐに違和感を感じる。
なにせそこは屋根の上である。教会でもなんでもない建物の上に銅像を作るなど一般人では理解し難い現代アートぐらいしかしないことだ。
その上こんな時にこんな場所でそんなことをするバカは存在しない。
なので尚更おかしかった
ニパ「こんなところに銅像…？」
ニパがそれを見て呟いた瞬間、それがネウロイへと変わった。
ニパ「わわあぁ!?」
二人は驚きながらも銃を向け撃ち始める。
それにネウロイは逃げ始めた。
その騒ぎはすぐ日常にいた海軍歩兵たちにも伝わり対空砲が火を放ち始めた。
海軍歩兵「いたぞ！」
海軍将校「撃て！撃ち落とせ！」
兵士たちも手持ちの火器で落とそうと撃ち始めた。
その混乱の中ひかりは無線でサーシャとポーに連絡する。
ひかり『マーカーネウロイ発見！追跡中です！』
ポー「なに！」
サーシャ「位置は？」
ひかり『えっと、海軍港を北に…わあっ！
ニパさんが頭からズズズって街灯に！ニパさんしっかりしてー!!』

その連絡はすぐにポーとサーシャに届く。
だがその内容に呆れていた。
サーシャ「全くあの子ったら…ついているのやらいないのやら…」
ポー「というか何が起きてるんだ…」
すぐにポーとサーシャは急行するがそこには木に突っ込んで動けなくなったひかりと街頭にぶつかり派手に曲げた二パがいた。
ポー「何が起きたんだ雁淵…というか二パは大丈夫なのか?」
ひかり「あっ!あそこです!」
それを見たポーは呆れるがひかりがネウロイを見つけ指さす。
その先には銅像に化けたふりをしたネウロイがいた。
ポー「あいつアホだな」
サーシャ「バレバレよ!」
すぐにポーとサーシャは銃撃する。
それにネウロイはすぐ逃げた。
それを即座にサーシャとポーは追いかける。
さらに遅れてトラックに乗った海軍歩兵が二人を追いかけていた。
ネウロイは複雑な市街地を抜け大通りに出るがそこには海軍砲兵大隊〝ゲネラール＝アドミラル・アプラークシン〟の８５ｍｍ高射砲５２―Ｋとトラックに６１―Ｋ　３７ｍｍ高射機関砲を乗せた車両が待ち受けておりすぐに発砲するが外して後ろの建物を吹き飛ばす。
サーシャとポーはその中でも追いかけるが突如サーシャがバランスを崩すと気絶して投げ出された。

そのころ、ペテルブルク郊外では、
パット「目標発見。グリッドイージー４、エックスレイ１９」
砲兵『了解。グリッドイージー４、エックスレイ１９。砲撃を開始する。
一分以内に安全空域へ退避せよ』
パット「了解した。さあ、あとは砲兵のお仕事だ。」
パットは見つけた砲撃ネウロイを砲兵に連絡するとほかのウィッ

チと共に安全空域へ退避する。
その直後、ネウロイに多数の砲弾、そしてカチューシャが浴びせられた。
砲撃を行ったのはオラーシャ軍の恐ろしく強力で、破壊的な威力を誇る砲兵部隊とカチューシャ部隊だった。
その破壊力は凄まじかったが精度に問題があった。
彼らの任務は本来面破壊である。それに対してネウロイは点である。
そのため砲撃はネウロイ周辺の１００ｍ以内に多数着弾して直撃しているわけではない状況だった。
するとポーから連絡が来た。
ポー『しまった。マーキングされた。
パット！急いでそっちを潰せ！』
パット「え？今突っ込めと？死ぬぞ」
その直後、ネウロイが一発発砲した直後、砲撃によって破壊された。
だが砲撃を許してしまった。
パット「ポー！撃たれた！」
下原「あと５０秒でそちらに着弾します！」

サーシャ「…うっ」
「…か？」
気絶したサーシャは誰かに肩を揺さぶられるのに気がついた。
目を開けるとポーがサーシャの肩を揺さぶり声をかけていた。
ポー「大丈夫か？見たところ怪我はないみたいだが」
サーシャ「え？ええ。多分大丈夫よ」
ポー「そりゃあよかった。かわいこちゃんに怪我されたら男が廃る」
サーシャは気絶してそれをポーがすんでのところでしたものの二人そろって地面に激突してしまっていた。
だが二人ともＦ６Ｆの無駄に頑丈なシールドによって無事であった。

ふとサーシャはポーの後ろにある修道院に気が付いた。
サーシャ「これって…」
ポー「ん？ニコロ＝ポゴヤヴレンスキー・モルスコイ・サボールがどうした？」
サーシャは何かに気が付くと周りを見渡して一人で歩き始めた。
サーシャは集中しているようでは後ろからきた二パとひかりの声にも気が付かなかった。
少し歩くとサーシャはある建物に入りとある部屋に入り感傷に浸っていた。
それにポーも続いて部屋に入り棚にあった一枚の写真に気が付く。
ポー「なあ、これって…」
それは小さい頃のサーシャの写真だった。
サーシャ「ええ。私よ。ここは祖母の家だったの。
ここに来るまで祖母の家を訪ねたことを忘れていたわ。
駄目な孫よね、すべてを記憶できるのにこのことだけを忘れていたなんて。」
ポー「そうでもないさ。忘れるっていうのは神が人にくれた素敵な能力さ。
忘れたくない記憶を忘れるだけマシさ、忘れたい記憶が永遠に脳にこびりつくよりもさ」
ふとポーは米海軍時代の数々の忘れがたい悲劇、3度にわたる乗艦の沈没や多くの戦友の死、衝撃的な光景の数々を思い出していた。
特に乗艦の沈没というのは船というものに少なからず愛着を持ち敬愛する海軍軍人にとってはいつの時代でも辛い事だった。
サーシャ「そうかもしれないわね。忘れたい記憶を覚えてるよりはいいわね」
ポーの話にふとサーシャが漏らす。
二人はしばらく感傷に浸っていると外から音がした。
振り向くと二パとひかりが入ってきた。
ひかり「あ、あの…」
二パ「どうしたの？サーシャさん、ポーさん…」

それに二人は現実に戻りポーは写真をもとの位置に戻した。
サーシャ「ごめんなさい、任務に戻ります」
ポー「すまん、さっさと見つけて帰ろうぜ」
ひかり「さっきパットさんから連絡があって砲撃ネウロイを見つけて砲兵部隊が攻撃中らしいです」
5人は外に出て行く途中でひかりがパットからの報告を伝える。
ポー「となると残りはこっちだけか。
少なくともこの近くにいるだろ。
例えばあの教会とか。
確かあれスオムス海軍が借り受けて今通信施設にしてるんだろ?」
それにポーがふと教会を指さして話す。
ニコロ=ポゴヤブレンスキー・モルスコイ・サボールはこの時スオムス海軍が借り受けてスオムス海軍ペテルブルク分遣隊通信所になっていた。
サーシャはふと教会に違和感を感じる。
サーシャ「違う…」
二パ「え?」
ポー「どうかしたか?」
サーシャが何かに気が付いた。
サーシャは目を閉じて記憶をたどり違和感の正体を見つけた。
サーシャ「あの寺院に尖塔は無い!」
二パ「え?」
ポー「じゃああいつが…」
それに周りが驚くがサーシャは即座に反応し修道院に向かった。
それにポーたちも急いで向かう。
二パ「サーシャさん!尖塔ってあの先っちょのやつでしょう?」
サーシャ「それで隠れたつもり!?」
二パが聞くがサーシャはそれを無視して尖塔を銃撃、それに続いてポーもM2を発砲、ネウロイは銃撃を受け元に戻った。
それを見ると続いて二パとひかりも銃撃する。

そしてネウロイは直前にシグナルを送ってから破壊された。
ポー「しまった。マーキングされた。
　パット！急いでそっちを潰せ！」
パット『え？今突っ込めと？死ぬぞ』
ポーはすぐに砲撃担当の破壊を要請するがその時向こうは砲弾の雨が降り注いでいた。
突っ込もうものなら即死は目に見えてる。
そして続いてパットから連絡が来た。
パット『ポー！撃たれた！』
下原『あと５０秒でそちらに着弾します！』
下原とパットの報告にサーシャは即座に指示した。
サーシャ「了解、至急退避します。
　攻撃を受ければこの辺りも無事では済みません」
サーシャは即座に退避を指示する。
それにニパとひかりは抵抗する。
ひかり「えっ!?でも…」
二パ「ここにはサーシャさんの…」
サーシャ「行ったはずです。
　無人の街を防衛する必要は無い、と。これは命令です」
ポー「そうかい、ならここからは俺の勝手だな。
　少しぐらいカッコつけさせろ」
するとポーが勝手に離脱、修道院の前に立ちはだかった。
ポーはポッケからタバコを取り出して吸い始め近づいてくる砲弾にシールドを貼り、銃を向ける。
ポー「アスタ・ラ・ビスタ、ベイベー！」
砲弾はシールドに当たるとそこにポーは銃撃を加え砲弾を爆発させる。
その爆炎と爆風でポーは地面に叩きつけられた。
サーシャ「ポーさん！」
すぐにサーシャが駆け寄りポーを空中でキャッチする。
サーシャはすぐにポーを地面に寝かせ呼びかける。

サーシャ「ポーさん！ポーさん！」
ポー「ん…サーシャちゃん、どうしてそんな顔をしてるんだ？」
サーシャの呼びかけにポーはいつも通りの調子で返した。
負傷で背中に打撲があったが全く気にしてないようだった。
サーシャ「何故このような無茶な真似をしたんですか！」
サーシャは泣きながらポーに怒っていた。
するとポーがサーシャの涙を拭いながら言う。
ポー「男たるもの女の子の前でカッコつけたいだろ？
　男ってのはただそれだけで命を懸けるバカさ。
　それに君に涙は似合わない」
それを聞いたサーシャの中で何かが切れた。
サーシャ「うわあああああん！
　ポーさんのバカー！バカバカバカ！
　なんでそんなことのために命を懸けるんですか！
　もっと自分を大切にしてくださいよ！」
サーシャは泣きじゃくりながらポーに抱きついた。
それにポーはサーシャを撫でながら呟く。
ポー「涙は似合わないが泣きたい時には泣いて良いんだぞ？
　泣けないよりはずっとマシさ」

その日の夜、無駄に頑丈なＦ６Ｆのお陰で怪我が軽度の背中への打撲程度だったポーは自室でタバコを吸いウィスキーを飲みながらながら本を読んでいた。
するとドアがノックされた。
ポー「ん？どうぞー」
サーシャ「失礼します」
入って来たのはサーシャだった。
それにポーは驚くも部屋に入れ椅子を用意する。
ポー「サーシャちゃん、なんか用か？」
サーシャ「いえ、その今日の昼のことを謝りに」
ポー「そんな気にしなくていいよ。

泣きたければいつでも俺の胸を貸してやるぜ」
サーシャ「次、泣きたい時はお願いしますね」
ポー「ああ、いつでもいいぜ。
サーシャは真面目だから大変だろ？
酒、飲むか？」
するとポーがウィスキーを勧めた。
サーシャ「ええ。一杯だけ」
ポー「あいよ。故郷の世界一美味いバーボンだ」
ポーはサーシャにコップを出すとそこに飲んでいたテキサスバーボンを注ぐ。
そしてそれをサーシャは飲んだ。
サーシャ「ん…美味しい…」
ポー「な、世界一美味いって言っただろ？」
サーシャ「ええ。そうですね。ところでポーさん」
するとサーシャがポーに聞いた。
ポー「なんだ？」
サーシャ「記憶は、忘れた方がいいのでしょうか？それとも覚えておくのがいいのでしょうか？」
ポー「なんでそれを？」
サーシャ「今日、ポーさんの話を聞いてふと考えたんです。
私は全てを永遠に覚えられる、それが本当にいいことなのかって思ったんです」
サーシャは昼間、ポーから言われた話を考えていた。
ポー「そうだな…忘れるのは大切だ。
だが覚えておくのはもっと大切だ。
人はすべての人に忘れられた時、本当の意味で死ぬんだ。
常に誰かが覚えておけばその人は記憶の中で生きていられる、だから俺は覚えておく方が大切だと思ってる。」
サーシャ「そうなんですか…」
ポー「ああ。俺が覚えておかないと誰があいつらを覚えてるんだ…」

それにポーはどこか物悲しさを漂わせながら呟く。
それにサーシャは只ならぬものを感じる。
サーシャ「ポーさん、過去に何があったんですか?
教えてください、私知りたいんです」
サーシャは真剣な表情でポーに聞く。
ポー「サーシャ…分かった。
話そう。俺があの戦争で、太平洋で何を見て、何を感じたのかを」
そう言うとポーは話し始めた。
騙し討ちから始まった太平洋を舞台にした世界第1位と第3位の海軍国家の3年に渡る死闘の数々を。

第16話：太平洋の嵐

ポーは椅子に座ると自らの戦争を話し始めた。

ポー「俺が生まれたのはテキサスのサンアントニオ郊外の農場。俺の家はヌーベルフランスに移住したフランス人から始まる家で南北戦争中は南軍に参加、あのゲティスバーグの戦いにも参加していたらしい。」

ポーが生まれたのはテキサス州のサンアントニオ、現代ではアメリカのヴェニスの別名を持つ街だった。

テキサス独立戦争などではアラモの戦いなどの重要な事件の舞台となった街でもあった。

ポーの家、即ちアンティリーズ家は独立戦争以前のヌーベルフランス時代にローワー・ルイジアナに移住したフランス系の家であった。

南北戦争では南軍に参加し南北戦争の天王山ゲティスバーグの戦いに参加したりした名門だった。

ポー「で、テキサスに移り住んだのは南北戦争で南部経済が崩壊、そのせいでルイジアナの農場を放棄せざるを得なくなった。」

南北戦争は内戦という側面と史上初の近代的戦争という側面があった。

特に名将ウィリアム・シャーマン将軍が南部経済の中心地、ジョージア州で行った海への進軍として知られる一連の作戦は史上初の近代的作戦としての側面を持っていた。

この一連の作戦ではインフラを徹底的に破壊しながら前進し、近代戦というものを史上初めて行っていた。

この作戦の後、南部経済は完全に崩壊、南北戦争は終結を迎えた。

だがこの作戦の被害は甚大なもので南部経済の崩壊やインフラの破壊は長く南部経済に尾を引いた。

そしてポーの家もこの被害を受け当時はまだメキシコから手に入れて10年ほどしかたっていなかったテキサスに移住、そこで農業を始めた。

ポー「俺が生まれたころには実家は街一番の大農家で街の名士だっ

た。

親父はかなり初期の飛行機野郎で子供のころから地元でアクロバット飛行とかをしていたよ。

ただ大戦にはいかなかった。当時は既婚者は操縦免許を剥奪されていたらしい。」

第一次大戦前、アメリカでは既婚者は飛行機の操縦免許を剥奪する法律があった。

そのためポーの父親やアメリカ空軍の父として有名なヘンリー・アーノルド元帥も当時は操縦免許を剥奪されていた。

ただこの法律は一次大戦中にはなくなったようでアーノルドも大戦中に操縦免許を取り直していた。

ポー「そこで俺は子供のころから銃と馬と飛行機に触れながら育った。

一応俺は一人っ子だったが農場労働者の黒人や中国人、日本人の子供と同世代だったから大して不自由はしなかったね。

親父は人種差別なんて全く気にしない人で誰にでも優しく接していたから人望も厚かった。」

ポーは子供のころから銃や飛行機などに触れて育っていた。

そして農場には黒人や中国人、日本人などの有色人種の移民が多く働いていた。

それに子供のころから触れていたため人種差別感情など一ミリも持っていなかった。

ポー「で、子供のころから色々あった。

俺が小学校を卒業するころには世界大恐慌が起きた。

その余波はこっちも食らったが何とか高校までは卒業できた。

だけどその頃には実家の金がなくなりかけてた。

そこで俺は予備役将校訓練課程が使えるＡ＆Ｍ大学に入学した。」

予備役将校訓練課程、略称ＲＯＴＣは１８８６年「モリス・ラングランド法」の成立により始まった制度だった。

これは軍が奨学金を出す代わりに士官候補生としての訓練や教育

を大学の教育と同時に行うものだった。
制度を利用して士官になったものは非常に多く現在の米軍の士官の４割や第５代空軍参謀長カーチス・ルメイや第２６代国防長官ジェームズ・マティス海兵隊大将などもこの制度を利用して将校となった人物だった。
そのためこの制度を利用するには強靭な肉体と強い精神力を求められる非常に厳しいものであった。
その中でポーはこの制度が使えるテキサス州立Ａ＆Ｍ大学に海軍予備役将校訓練課程で入学、理論物理学を学びつつ海軍将校としての訓練をこなして卒業した。
ポー「卒業後、俺はパイロットとしての訓練を受け見事アヴィエーターになった。」
米海軍には当時パイロットには二つの種類があった。
一つがアヴィエーター、もう一つがアヴィエーションパイロットだった。
これは前者が初めから将校としての教育を受けたのに対して後者は兵・下士官からパイロットになった者を指した。後者は１９４８年にパイロットの訓練資格が変更され全てのパイロット訓練性が士官扱いとなったため廃止となったが一応の資格は最後の有資格者が退役する８０年代まで存在したという。
ポーはこの内の前者、アヴィエーターに分類された。
ポー「アヴィエーターとして最初に配属されたのは空母レキシントン、レディ・レックスだった。
彼女は巨大な船でこの基地よりも巨大だった」
レキシントンは満載排水量４万トン、全長２７０ｍという当時としては史上最大クラスの空母だった。
その巨大な船体には約２８００人もの乗員と７８機の艦載機が積まれていた。
ポー「彼女は本当に素晴らしい船だったよ。
そしてその素晴らしい船に乗り込んだ状態であの１２月７日を迎えたんだ。

１９４１年１２月７日、俺たちは海兵隊の航空機をミッドウェーに輸送中だった。

そして突然真珠湾からの無線が慌ただしくなったと思ったら艦長が総員戦闘配置って号令した。

すぐに俺はブリーフィングルームに向かうと隊長が『真珠湾が攻撃を受けた、これは演習ではない』って言うんだ。

やったのはジャップ、日本海軍だ。

すぐに俺たちはジャップの艦隊を探して飛び回ったが見つからず結局エンタープライズと合流して真珠湾に戻った。

そして真珠湾のいつもエンタープライズが停泊してた場所には標的艦ユタとオクラホマがひっくり返っていてアリゾナは見るも無残な姿になって沈んでウエストヴァージニア、カリフォルニア、ネバダは湾内で座礁、湾内のあちこちに焼け焦げた船がいっぱいいたよ。

もはや太平洋艦隊の、太平洋を守る最後の盾は俺たち空母部隊しかいなかった。」

真珠湾攻撃、それはアメリカにとってはあの９．１１以前の最大の恥辱の日だった。

この日、真珠湾にいた米太平洋艦隊は日本海軍の攻撃によってその主力たる戦艦の大半を行動不能にされてしまった。

結果太平洋で動ける戦艦はコロラド一隻のみという状況に陥ってしまった。

当時はまだ戦艦は海軍の主力だった。

幸い太平洋艦隊の３隻の空母、レキシントン、エンタープライズ、サラトガは無傷であった。

３隻は海戦後即座に日本海軍機動部隊を捜索するが失敗する。

その後レキシントンは真珠湾に戻るがそこで彼らが見たものは無残な姿になった艦隊の姿だった。

ポー「こうして俺の戦争が始まった。

最初の戦闘は年が明けた２月２０日にウィルソン・ブラウン中将の元、ニューギニアのジャップを攻撃した。

その戦闘で同僚のブッチ、エドワード・オヘアがなんとたった5分で5機もベティを落とした。
ブッチはその後海軍航空隊初のメタル・オブ・オナー、名誉勲章を授与されたよ。
だけどニューブリテン島のラバウル攻撃は失敗、燃料不足でそのまま帰還した。」
ポーの最初の戦闘は日本語名ニューギニア沖海戦だった。
この海戦は日本海軍航空部隊がラバウルに接近する米機動艦隊を攻撃したが大損害を被ったがアメリカも当初の目的に失敗したため撤退したなんとも消極的な戦闘だった。
ただこの海戦でレキシントン乗り組みのカポネの弁護士として有名だったエドワード・J・オヘアの息子エドワード・〝ブッチ〟・オヘアが4分で5機の一式陸攻を撃墜、名誉勲章を授与される戦果を挙げていた。
ポー「次に俺たちはヨークタウンと組んでニューギニア島のラエとサラモアを空襲した。
こちらは成功してほとんど損害なく多くの輸送船を撃沈した。」
ラエとサラモアへの空襲は米海軍にとっては初の本格的な空母部隊による攻撃だった。
この作戦で日本軍は4隻の船舶を失い多数の商船が損傷する事態となった。
日本軍は結局この二つの街を占領するが海空戦では米海軍の完勝だった。
ポー「そのあと一時的に真珠湾に戻ってレックスは主砲の8インチ砲を取り外す工事を行ったんだがその途中で次の作戦に向かった。
目的地は珊瑚海だった。」
ラエ、サラモアへの空襲を終え真珠湾に戻ったレキシントンは8インチ砲を取り外して5インチ砲に交換する改装が行われる予定だった。
だがその最中、海軍の暗号解読部隊が日本軍の次なる行動を察知し

た。
それはニューギニア島のポートモレスビー、ここを抑えれば北オーストラリアを攻撃できるだけでなく珊瑚海の制空権、ニューギニアそのものを失う可能性があった。
珊瑚海航路の封鎖と北オーストラリアへの攻撃、ニューギニアの喪失、この3つが揃った時起きる最悪の可能性はオーストラリアの戦争脱落。
それは是が非でも避けなければならなかった。
そのためアメリカ海軍は空母レキシントン、そしてヨークタウンを珊瑚海に派遣、ここに史上初の機動部隊同士による海戦、珊瑚海海戦の火蓋が切られた。
ポー「珊瑚海ではまず俺たちはジャップの翔鶴型空母を撃沈した。
その日の夕方、今度はジャップの攻撃部隊を迎撃、ケイトを一機撃墜して初戦果になった。」
珊瑚海海戦では米艦隊はまず空母祥鳳を撃沈した。
だがアメリカ側は祥鳳を翔鶴型空母と誤認していた。
そしてその日の夕方に日本海軍は米艦隊を薄暮攻撃を仕掛けるがレーダーに発見され迎撃、大損害を被った。
ポー「で、その後、すっかり日が暮れてからレックスに着艦しようと上空を飛んでたらなんとジャップの攻撃機がレックスに着艦しようとしたんだ。
驚いたよ。そいつらが逃げた後着艦したんだがレックスはその時大変なことになったらしく副長が『白兵戦用意!』なんて指示したぐらいだったらしい」
この日、日本海軍の攻撃隊は海戦史上唯一ともいえる珍事を犯していた。
それはなんとレキシントンを味方空母と誤認、それに着艦しようとしたのだ。
幸い着艦直前にそれが敵空母と分かり再度上昇、逃げ切ったがこの珍事はその後二度と起きなかった。
ポー「翌日、今度は別の空母部隊を発見、味方が攻撃に行っている

間俺はレックスの直掩として残った。
現地時間11時を少し過ぎたころ、ジャップの攻撃隊が来た。
俺はレックスに攻撃を仕掛けようとする攻撃機や爆撃機を撃墜しようとしたがゼロが護衛についてた。
そのせいで戦闘が始まってすぐに被弾、何とか機体を着水させるのが精一杯だった。
ゼロはワイルドキャットよりも速く、機動性が高くてドッグファイトになれば勝ち目はなかった。」
翌日の1942年5月8日、珊瑚海海戦の最大の戦闘が始まった。
この戦闘で米艦隊は日本艦隊を攻撃、日本艦隊も米艦隊を攻撃した。
そしてポーは米艦隊の直掩機としてレキシントン上空にいたが戦闘が始まってすぐ翔鶴零戦隊に撃墜された。
当時の零戦とF4Fのキルレシオは1:2程度でF4Fはまだ不利だった。
ポー「不時着水して救助を待っていると目の前でレックスが魚雷を食らって水柱が上がり被弾して炎上していた。
あれは悔しかった。目の前で何年も乗っていた家のような船が燃えてるのに何もできないんだ。
それから戦闘が一段落すると直掩艦のハムマンに救助された。
そこで甲板から火災を鎮火して着艦を再開していたレックスを見ていると突然彼女が爆発した。
さらに断続的に爆発が続いた後、フェルプスが乗員を救助して処分した。
レックスはフェルプスの魚雷を食らって沈んだが彼女は最後まで腹を見せず淑女だったよ。」
レキシントンは戦闘で魚雷2発と爆弾2発が直撃、彼女は炎上するが米海軍の素晴らしいダメコン能力により何とか鎮火に成功した。
鎮火後彼女は攻撃隊の収容を開始するがその最中に最初の爆発が発生、さらに続いて二回目の爆発で前部エレベーターが吹き飛び深刻な事態となった。

そして3回目の爆発でとうとう前部機関室が浸水、浸水は激しくすぐに喫水下全域から乗員が避難、そして漂流を始め司令部は彼女の処分を命じた。

命じられた駆逐艦フェルプスは乗員の収容後レキシントンに魚雷を発射、自沈処分とした。

彼女は乗員の目の前で沈んでいったが船底を見せず沈んだ。それを評してある乗員は「彼女は最後まで淑女だった」と評した。

ポー「その後俺はトンガタプ島を経由して真珠湾に戻りレキシントン飛行隊の生き残りとして損傷を突貫工事で修理中のヨークタウンに移った。

そこで新型のＦ４Ｆに機種転換したんだが訓練なしだった。

とにかく一分一秒でも早く前線復帰させるのが優先だったらしい」

ポーは真珠湾に戻ると珊瑚海での損傷を突貫工事で修理中だったヨークタウン、別名オールド・ヨーキィに移った。

ヨークタウンの損害は深刻だったが既に日本艦隊が次なる作戦、即ちミッドウェーを攻撃することを掴んでいた海軍は彼女を急いで戦列に戻そうとしていた。

そのため彼女の修理はいささか乱暴でとりあえず運用には支障がない程度にまでしか修理されなかった。

ポー「彼女に乗り込んですぐに次の戦いが始まった。

任務はミッドウェーを攻撃する日本艦隊の撃退。

相手は４隻の空母、こちらはホーネット、ビッグＥことエンタープライズ、そしてオールド・ヨーキィの3隻だけ。

勝ち目は少なかったが俺たちがここで勝たないとアメリカは負けることぐらいは分かっていた。」

ミッドウェー海戦の米艦隊の主力はヨークタウン、エンタープライズ、ホーネットの3隻のヨークタウン級空母、相対する日本艦隊の戦力は空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍の４隻、数の上では負けていた。

だが彼らがここで勝たなければ戦争はアメリカの負けに終わってしまう。

太平洋戦争の行く末は彼らの肩にかかっていた。
ポー「ミッドウェーで戦闘が始まってすぐ、俺は本来ならレックス以来のボス、ジョン・サッチ少佐と共に出撃するはずだったんだが直前に俺は艦隊直掩に回された。
で、俺がヨークタウン上空を回っていると無線で大変なことが起きたことを知った。
エンタープライズのクラレンス・マクラスキー少佐の部隊とヨークタウンのレスリー少佐の部隊が空母三隻を撃破した。
これで一気に形勢逆転した。」
ミッドウェー海戦では本来悪手の筈の戦力の逐次投入が功を奏した。
最初に南雲機動部隊に襲いかかったヨークタウン攻撃隊に直掩機がかかりっきりになっている時に上空にエンタープライズのマクラスキー隊とヨークタウンのレスリー隊が襲い掛かったのだ。
その結果４空母のうち３隻が被弾、沈没した。
ポー「その後、ヨークタウンに連中の攻撃が集中した。
直掩の俺たちで何とか半分を落としたが残りがヨークタウンに集中、何発も爆弾を食らった。
だけど素晴らしいものでたった３０分で離着艦できるまで修理された」
その後の反撃でヨークタウンは被弾するもたった２５分で離着艦ができるまで修理された。
ポー「だけどその直後、今度は攻撃機がやってきてヨークタウンが被雷した。
側面に大きな水柱が上がって艦はみるみるうちに傾斜していった。」
応急修理から４０分後、第二波の友永隊がヨークタウンに襲いかかった。
この攻撃でヨークタウンは2本の魚雷を被雷した。
ポー「もはや彼女は助からず艦長が総員退艦を指示した。
俺はそのまま最寄りのハムマンのそばに不時着、ハムマンに拾

われてヨークタウンの乗員たちと合流した。
彼女は傾斜していたが沈み始めてはいなかったようで艦長が船を救おうと乗員を集めていた。」
ポーはその後着水しまたハムマンに拾われてハムマンに拾われたヨークタウン乗員と合流した。
ポー「で、俺はハムマンからヨークタウンに移って何とかして彼女を救おうとした。
そして一晩かけて艦を水平にすると真珠湾まで曳航され始めた。
だけどその日の昼間、潜水艦の雷撃を食らった。
それでそばにいたハムマンが沈没、ヨークタウンも沈み始めた。
俺たちは何とか護衛のベンハムに救助された。
ヨークタウンは一晩たった後、艦載機の残骸が耳障りな音を立て、魚雷とハムマンの爆雷で穴だらけになった醜い船体を晒ながら沈没した。」
ヨークタウンは何とか応急修理によって真珠湾に運ばれ始めたがその直後、日本の潜水艦伊一六五の雷撃によってそばにいたハムマン諸共被雷、懸命の努力もむなしく沈没した。
これはポーにとっては2回目の乗船の沈没だった。
ポー「その後、俺はホーネットに移った。
それからしばらくは真珠湾周辺で訓練にいそしんでいたが東部ソロモン海戦でエンタープライズが、潜水艦の雷撃でサラトガが損傷、さらにワスプが潜水艦によって撃沈されたせいで彼女が急遽前線に戻った。」
ホーネットに移り数ヶ月は真珠湾近辺で訓練に勤しんでいたポーだったが東ソロモン海戦（日本名第二次ソロモン海海戦）でエンタープライズが損傷しサラトガが大破、ワスプが撃沈されると太平洋に残った稼働空母はホーネット一隻になってしまった。
当時はまだ米帝の物量チートは発動していなかった。
そのため急遽ホーネットは激戦地ガダルカナルへと向かいそこで

修理を終えたエンタープライズと合流した。
ポー「そして次の戦いが始まった。
ジャップがガダルカナルをなんとしても守ろうとしてまた機動部隊を送ってきた。
この海戦で俺はホーネット直掩として海戦に参加したが彼女を守れなかった。
攻撃は彼女に集中、炎上した。
その上エンタープライズも損傷した。
俺は最初の攻撃の際に腕に被弾してさらに燃料が漏れ急遽不時着水してポーターに拾われたんだが、その直後に潜水艦の雷撃でポーターが撃沈され俺は海に投げ出され腕と足を骨折した。」
南太平洋海戦、アメリカ名称サンタクルーズ諸島沖海戦は日米海軍航空隊にとっては質・量ともに最大の戦闘だった。
この戦闘で日本海軍は一時的に米艦隊の稼働空母をゼロにするが日本側は被害を恐れ戦闘は消極的でありその結果海戦そのものはアメリカの戦略的勝利だった。
だがその代償にホーネットを失いエンタープライズが中破してしまった。
さらにポーは第一波攻撃で被弾、不時着水して駆逐艦ポーターに拾われるが直後、ポーターは潜水艦の雷撃――正確にはエンタープライズの雷撃機が着水の際に投棄した魚雷が当たってしまった前代未聞の事故――によりポーは海に投げ出され腕と足を骨折した。
ポー「俺はショーに拾われてハワイに戻って入院したんだがそこでジフテリアに感染、結局４３年の６月まで入院した。
その後俺はＦ６Ｆに機種転換するのと休暇を兼ねて本国に帰還、そこでＦ６Ｆに機種転換訓練をしたんだがその途中で着陸時に脚を折る事故をして重傷を負って４４年の１月まで入院した。」
その後ポーは入院するがそこでジフテリアに感染したため入院が長期化、さらにその後Ｆ６Ｆに機種転換するがその最中に着陸時に脚を折るというＦ６Ｆの設計上の欠陥に起因する事故で重傷を負ってしまった。

ポー「その間に俺はインディペンデンス級軽空母のサン・ジャシントに配属され４４年の４月に合流した。
　それから俺たちはマリアナ諸島を攻撃した。
　そこでジャップと激突した。」
　ポーはその後クリーブランド級軽巡洋艦を改造した軽空母サン・ジャシントに配属されマリアナ沖海戦、アメリカ名称フィリピン海海戦に参加した。
　ポー「マリアナの沖でジャップの艦載機数百機と空中戦になったんだが敵は恐ろしく弱かった。
　それこそ七面鳥を撃つようにね」
　マリアナ沖海戦での日本海軍航空隊は練度の低下が激しく七面鳥撃ちに例えられるほどだった。
　これは直前に米潜水艦隊の妨害もあったがそれとともに米艦隊はレーダーを使い早期に日本艦隊を察知、逆に待ち伏せしたため大損害を被った。
　そのためこの海戦はほぼワンサイドゲームに終わり日本側は宝石よりも貴重な多数の航空機搭乗員と空母3隻、タンカー2隻、そして大量の潜水艦と航空機を喪失したのに対してアメリカ艦隊は４４機が撃墜、８７機が事故又は不時着で喪失、兵士の損害は航空機搭乗員７６名と艦船乗組員３３名のみ、6隻が損傷程度だった。
　ポー「それから今度は小笠原諸島を攻撃した。
　そこで俺と仲の良かったＴＢＦ乗りのジョージっていうやつがいるんだがそいつが父島で撃墜された。
　ジャップは脱出したジョージを捕まえようとしたが俺は機銃で追い払った。
　それから数時間してジョージは味方の潜水艦に救助されたらしい。」
　ジョージは幸運だった。
　この後父島では人肉食事件が発生していた。
　彼は数時間漂流した末味方の潜水艦に拾われた。
　ポー「その後、俺たちはフィリピンでマックの陸軍を支援するため

移動した。
　そこでジャップの艦隊の総攻撃を受けた。」
レイテ沖海戦、それは史上最大の海空戦である。
両軍合計３００隻以上の艦艇、航空機２０００機以上がぶつかった大激戦だった。
この戦いで日本海軍は再建不能な損害を被った。
ポー「俺はサン・ジャシントが配属されていた第３８．４任務部隊の上空直掩がほとんどでシブヤン海に発見した艦隊への攻撃には参加しなかった。
　ただそこで仲間は世界最大の戦艦を撃沈したらしい。
　そいつは何でもヤマトクラスとかいうらしい。
で、俺はその大金星を逃したが翌日エンガノ岬沖に発見したジャップの機動部隊攻撃に参加した。
　この攻撃で翔鶴型空母など３隻を撃沈、俺もゼロ戦を３機ほど撃墜した。」
サン・ジャシントはこの海戦でラルフ・Ｅ・デヴィソン少将の第３８．４任務部隊に所属、シブヤン海海戦には参加しなかったがエンガノ岬沖海戦には参加、小沢艦隊の壊滅に寄与した。
ポー「だがその間にサマール島沖に展開していた第７７．３任務部隊がなんとシブヤン海にいたはずの艦隊に襲撃された。
　すぐにブル、俺たちの指揮官のハルゼー中将はタフィ３を救出するために向かったが結局逃がした。」
だがハルゼーの第３艦隊がエンガノ岬沖の小沢艦隊に集中している間に一度撤退したはずの栗田艦隊はサンベルナルジノ海峡を突破、サマール島沖に展開していた弱小第７７．３任務部隊、通称タフィ３を襲撃した。
　だがこの商船より多少マシ程度の防御力と雀の涙程度の艦載機しかない護衛空母と駆逐艦、そして潜水艦や仮装巡洋艦と撃ち合える程度しかないはずの護衛駆逐艦は奮戦し「戦艦のように戦った駆逐艦」サミュエル・Ｂ・ロバーツや駆逐艦ジョンストン、ヒーアマン、ホーエルは栗田艦隊に突撃、巡洋艦鳥海、筑摩、熊野、鈴谷などに大損害

を与え鳥海、筑摩、鈴谷を撃沈、熊野を大破させる大戦果を挙げた。
ポー「だがここでジャップは恐ろしい戦術を取り始めた。
サーシャ、もし君なら爆弾に高度な技術を使用せず高い信頼性と命中率を両立した誘導能力を付与するにはどうすると思う?」
ここでポーはサーシャに聞いた。
それにサーシャは少し考えた。
サーシャ「無理ですよね。高い命中率を得るには高度な技術力が必要ですよね?」
ポー「そうだな。〝常識的に〟考えたら不可能だ。
だが、戦争と恋はあらゆることが許されるって格言走ってるだろ?
一つあるじゃないか特別な技術も装置も必要とせず訓練だけで高い誘導能力を与えられる方法が」
サーシャは不可能だと答えるがそれにポーがヒントを与える。
そして恐ろしい可能性が浮かんだ。
サーシャ「まさか…人そのものを誘導装置に…
で、でも無理ですよね?そんなことしたら搭乗員諸共…」
ポー「だが連中はそれをやった。
飛行機を爆弾にしたんだ。狂ってやがるよ」
レイテ沖海戦で初めて使用された狂気の戦術、それは特攻、特別攻撃だった。
この戦術は自殺がタブーなキリスト教徒には理解不能な恐ろしいものだった。
ポー「この後、俺は休暇のため一度船を降りた。
で、クリスマスの直後にサン・ジャシントに戻ってグラティテュード作戦に参加、そこで多数の商船を撃沈した。」
グラティテュード作戦は45年の年明け早々に行われた空母部隊による南シナ海での通商破壊作戦だった。
この作戦により日本の南方航路は事実上破壊されサイゴン(現ホーチミン)、サンジャック、香港、高雄などベトナムから中国、台湾に至る主要な港全てが空襲を受け54隻の輸送船、18隻の日本海軍艦艇

と2隻のヴィシーフランス艦艇を撃沈した。
これ以降日本の南方航路は完全に封鎖された。
またこの作戦中にかの有名なホーネット上空を飛行するＳＢ２Ｃの写真が撮られているのは余談である。
ポー「その後サン・ジャシントは沖縄攻撃に参加、そこでジャップのヤマトクラスを撃沈した。
その様はすごいもので数百ｍもの爆炎が上がった凄まじいものだった。
多分あれは一生瞼に焼き付いて離れないだろうな。
あれ以上に衝撃的なものを見たことなんてないしこれからもないだろう。」
サン・ジャシントはあの坊ノ岬沖海戦に参加、大和の僚艦浜風を撃沈した。
そしてポーはその攻撃に参加し空の上から大和の最後を目撃していた。
ポー「そしてその後もジャップの体当たり攻撃が続いて俺はその迎撃に精を出していた。
そのさなかにエンジントラブルを起こして墜落、こうなったってわけさ。
こんな感じかなサーシャ。」
そしてポーはすべてを話し終えた。
それにサーシャは暗い顔をしていた。
サーシャ「そうですか…ポーさん、辛かったんですね。」
ポー「いや、そんなことはない。
俺は祖国アメリカのため、そして自由と権利のため戦った。
これは俺の誇りであり名誉だ。
栄光ある合衆国軍人としてのな。
そして俺は奴らを一ミリも恨んでいない。
なぜなら彼らも俺と同じように祖国に忠誠を誓い義務を果たして戦ったんだ。
これを汚すということは自分の名誉そのものを汚すことにな

る。
テキサスの男は一度倒したものを貶めたりしない。
それはそれを倒した自らの名誉と誇りそのものを汚すことだ。」
ポーは日本兵を恨んではいなかった。
それは彼の中にある軍人としての矜持からだった。
合衆国には倒したものを見下したりしない美風がある。
これは傲慢さもあったがそれを見下し貶めることは自らの誇りを貶めることと同義だった。
サーシャ「名誉と誇りですか、ポーさんからそんな言葉が出るなんて」
サーシャはポーの口から名誉や誇りといった単語が出てきたことに微笑む。
ポー「おいおいおい、サーシャちゃん、俺を何かと勘違いしてないか？
俺だって誇り高き海軍の男だ。
名誉と歴史ある海軍の先人たちの後を継ぎ伝統を受け継ぐ男だ」
それにポーが返した。
サーシャ「そんな男には見えませんけど。
伯爵と同じぐらいの女好きのアレな人に見えます」
ポー「俺とあいつを一緒にするな。
俺はあいつとは違う。危険な火遊びはしない主義だ。
それに俺だって一度に口説こうとするのは一人だけだ。
本命のな」
ポーはサーシャに言う。
それは半分告白のようなものだがポーにはその気はさらさらなかった。
なにせアメリカには告白なんて言う概念自体ないのだ。
サーシャ「本命、ですか…
私がなんていうか分かってるんですか？」

ポー「まあ予想できるかな?ここで賭けてもいい。」
サーシャにポーは返し近づき顔を近づける。
ポー「どうする?君がノーと言えば俺は君のことを全部忘れる。
さあどうする?」
顎に手を添えながらポーがサーシャに言う。
サーシャは動揺しポーから目をそらす。
そして数秒すると突如サーシャがポーにキスした。
サーシャ「ポーさん、愛してます」
ポー「分かってる」
ポーは一言返した。
北極圏に近いペテルブルクの夜は長い。

第17話：サトゥルヌス・キャロル

ヘプナー「では諸君、今年も無事クリスマスを祝えたことにプロージット！」

「プロージット！（乾杯！）」

ベルザーリン「３ａ　рождества！　３ａ　родина！」

１２月２４日、旧海軍本部ではささやかなパーティーが行われていた。

普段は真面目が服を着ているような者しかいない司令部の将校もこの日はハメを外して倉庫からワインやウォッカ、シャンパン、ビール、コニャックなどの酒を取り出し、料理人はケーキなどの豪勢な料理を作って配膳していた。

この日はクリスマスイブの前日でありそのため司令部はささやかなクリスマスパーティーの最中だった。

ペテルブルクはあのネウロイの攻撃を受けたものの補給状態に関しては比較的良好だった。

攻撃を受けた補給拠点に物資の損害はあったものの主要な補給拠点のペテルブルクの沖、コトリン島のオラーシャ海軍バルト海艦隊の根拠地クロンシュタット、そしてそこから１００キロほど離れたスオムス海軍の根拠地コトカ、鉄道の要所チフヴィンは無傷だった。

そのため補給は平常通りでありコラ半島に向かう鉄道がカンダラクシャとヴォルホフの間で途絶したためコラ半島方面への移動が一旦ノルウェーなどに出なければならない以外は問題はなかった。

ただ５０２だけが物資の貯蔵庫を破壊され物資不足にあえいでいた。

ヘプナー「まあ今日は盛大に飲んで構わんぞ。

だが明日の朝までには抜いておけよ。いつ攻めてくるか分からんからな」

ヘプナーがシャンパングラスに入ったシャンパンを飲みながら大騒ぎする将校たちに注意する。

フーベ「まあ今日ぐらいはいいのでは?せっかくのクリスマスですから。」
それにビールジョッキにビールを入れたフーベが返す。
ヘプナー「まあ私も口煩くは言わんよ。
ところで君はシャンパンはいるか?」
フーベ「貰いましょうか。いつのですかな?」

海軍本部でクリスマスを祝って盛大なパーティーが行われている少し前、対岸の５０２はというと
ひかり「あー!川が凍ってる!」
ひかりは基地の前のネヴァ川が凍っていることに気がついた。
ひかりは凍った川を足でつついたりして目をキラキラさせていた。
すると後ろから音がしてひかりは振り返る。そこにはマントイフェルとリョーニャ、そして１０人ほどの整備士がアイスホッケーの道具を持って来ていた。
マントイフェル「せっかく川が凍ったんだからこれをやらないとな、ボルシェビキ」
リョーニャ「アイスホッケーでゲルマンスキーに負ける気はせんよ」
ひかり「マントイフェルさん、リョーニャさん、何するんですか?」
ひかりは二人に聞く。
マントイフェル「川が凍ったからアイスホッケーをしようと思ってな。」
マントイフェルとリョーニャは整備士を集めてアイスホッケーをしようとしていた。
日本では一般的ではないが欧米、特にカナダやロシアではホッケーは非常に人気のスポーツである。
よく知られているのがカナダとアメリカのＮＦＬ（ナショナルホッケーリーグ）とロシアを中心としたヨーロッパのＫＨＬ（コンチネンタルホッケーリーグ）の二つのリーグ、そしてその優勝者に与えられ

るスタンレーカップとガガーリンカップだ。
　特にロシアではホッケーとは信仰のようなものでありリョーニャもよくやっていた。
　またドイツでもアイスホッケーは人気のスポーツだった。
　そしてリョーニャたちがホッケーの準備をする横でひかりは二パと菅野と共にそり遊びを始めた。
　ポー「へっぶし!うう…俺、サンディエゴより寒いところに住んだことないんだ…
　だから寒さだけはダメなんだ…」
　バーティ「だろうな。一人だけ北極海用のダッフルコート着てるし」
　暫くすると寒さに震えて北極海などで使う海軍のダッフルコートを引っ張り出して着ているポーとトレンチコートを着て葉巻を吹かしたバーティがやってきた。
　ポーは南国を超えて灼熱のテキサス生まれテキサス育ち、大学もテキサスであり海軍に入っても一年に一回あるかないか程度でアラスカに行く程度だったので寒さに対する耐性というのは非常に低かった。
　なにせこの少し前も暖炉の側で掛け布団に包まった状態でいるところをサーシャに見つかり布団を剥ぎ取られ暖炉の側から追い出されたのでストーブの側に行ったらストーブが故障中（先日ニパが使おうとして壊れたらしい）でサーシャに抱きついて暖を取ったら建物から追い出されるという酷い経緯でここにいた。
　それに対してバーティは冬で釣りなんかできないため暇でしょうがなくマントイフェルがアイスホッケーをやると聞いて観戦のため外に出ていた。
　パット「うう…寒い…お前ら…準備できたのか?
　たく15分でアイスホッケーのルール本読み込むとか無茶すぎるだろ。
　ちゃんと全部読み込んだが」
　するとマッキーノコートを着てタバコをふかし手にアイスホッ

ケーのルールブックを持ったパットがやってきた。
審判としてパットは呼ばれたのだがあまりに寒い上に彼はサッカーの審判の経験ぐらいはあるがアイスホッケーなんていうウィンタースポーツの審判の経験などなかった。
その上アイスホッケーは氷上の格闘技とも称されるほど激しい競技である。
そしてルールの中に乱闘が認められているのだ。
なので審判にはアイスホッケーの審判と同時に格闘技の審判を務めなければならない無茶苦茶な技能が求められた。
パットはこの無茶苦茶な技能が求められることに気がつきながらも引き受けていた。
パット「はぁ…怪我したら誰が…」
パットがふと怪我の心配を口にした瞬間、後ろで大きな音がして振り返る。
そこには川の氷の薄いところをぶち破ってニパと菅野が乗ったソリが川に落ちていた。
パット「大丈夫か?あれ」
マントイフェル「さあ?風邪を引かんといいが。」

ひかり「ハックシュン!」
それから少ししてひかりは体温計を咥えながら自室で大きなくしゃみをして鼻をすすっていた。
そばにはジョゼとリョーニャ、そして下原がいた。
リョーニャはひかりの口から体温計を回収して体温を確認する。
リョーニャ「38．1度、雁淵、口を開けろ」
ひかり「あー」
リョーニャはひかりの口を開けさせて喉を確認する。
リョーニャ「喉が腫れてる。
喉は痛むか?」
ひかり「はい、少し。それに頭痛と少し体が怠いですね」
リョーニャ「ふむ、38度程度の熱、喉の痛み・腫れ、疲労、頭痛。

典型的普通感冒、風邪だな。」
ひかりの症状を元にリョーニャは風邪と判断した。
そして下原に指示する。
リョーニャ「下原、暫くは雁淵には消化にいいものを頼む。
それと水1リットルに40グラムの砂糖と3グラムの塩を混ぜた水を作って雁淵に与えてくれ。
雁淵、少なくとも今日、明日は絶対安静だ。
出来る限りベットで寝ていろ。それが一番だ。」
下原「はい、分かりましたリョーニャさん」
ひかり「はい…ハックシュン！」
ひかりと下原は素直に答えた。

パット「風邪？」
リョーニャ「ああ。典型的な、それこそ教科書か講義で出てくる風邪の症状そのままの風邪だ。
一応解熱薬、総合感冒薬、それに咳止めを処方した。
少なくとも今日と明日は絶対安静だ。」
食事の際リョーニャが説明する。
それに他のウィッチやカルテを受け取っているラルさえも真剣に聞く。一応ラルはカルテは読んだが彼の医者という万国共通で悪筆な、それもロシア語という筆記体では知識があってもなお「文具屋のボールペンの試し書き」にしか見えない文字で書かれた書類を読むことさえできなかった。
クルピンスキー「直ちゃんたち、ひかりちゃんを凍った川に落としたって？」
菅野「落とされたのは俺らだ！」
パット「ああ。目撃者ならここにいるぞ」
クルピンスキーが菅野たちを茶化すがすぐに反論しパットも否定する。
ニパ「あの…ウィッチってあんまり風邪とか引かないですよね？」
リョーニャ「そう言えばそうだな。普通にそんな格好をしていたら

風邪どころか凍傷を患うぞ」
リョーニャがニパの言葉にふと思った疑問を口にする。
彼からすればロシアの長く厳しい冬にラルやロスマンのように特別な防寒具なしで下半身丸出しで過ごせばどうなるかは火を見るよりも明らかだった。普通なら死ぬのだ。
サーシャ「ええ。ウィッチは魔法力で守られているから、怪我や病気に罹ることは珍しいわ」
ロスマン「ただ、肉体的、精神的な疲労がたまると、ウィッチでも病気になることがあります」
ニパ「過労…やっぱり私が朝から連れ回したせいで…」
二パはひかりが風邪になったのは自分の責任だと思い俯く。
リョーニャ「それに戦闘と環境の変化が原因だろうな。
まだ今回は風邪程度で済んでよかった。
インフルエンザや肺炎になったらここの医療設備じゃ手に負えん。」
リョーニャも原因を推測して捕捉する。
もしインフルエンザや悪化して肺炎になった場合５０２の医療設備では手に負えず市内の病院に行かなければなかった。
それでもなお二パはひかりを心配して俯く。
すると下原が鍋を持ってキッチンからやってきた。
下原「お食事、出来ましたよ」
クルピンスキー「下原ちゃん…なんだい、これ？」
下原は鍋の中身を配膳するがそれを見てクルピンスキーが聞く。
出されたのは何とも言えない汁物の料理だった。
ロスマン「ニョッキに似てるわね…これ、ちゃんと煮えてる？」
クルピンスキー「ピエロギ…じゃないよね？」
サーシャ「具の無いペリメニ？」
ポー「イギリス料理じゃないのか？」
リョーニャ「どちみち食べられるだけマシだろ。」
マントイフェル「ただこれはない」
パット「下原、怒っていいか？

流石に物資不足でもこれはないぞ。
まだ完全に缶詰とかレーションなら許せるが中途半端に手の込んだ微妙な料理を出されると怒るもんだぞ」
各々食べてみて感想を言うが共通していたのは不味くもないが美味くもないだった。
ただバーティはいつも通り塩を山のようにかけて食べていたため特に問題はなかった。
なにせイギリスの料理のような無味無臭のなにかよりかはマシである。
すると菅野が答えを言う。
菅野「あ、これ水団か？」
下原「すみません。今ある食材ではこれが精一杯で…」
基地は前の戦闘でなぜか５０２の倉庫だけを破壊されていた。
そして５０２はクロンシュタットにもコトカにも倉庫を持っていないどころかそもそも立ち入り禁止にされていた。
夏の間にラルが物資の横領、強奪を多数やらかしたため秋から出禁を食らっていた。
それどころかベルザーリンの指示で補給将校の大半は５０２と関わるのをひどく嫌っていた。
もし５０２が物資を横領、強奪した際、その共犯として疑われ左遷されるのが嫌だからだ。

ロスマン「現在ムルマン港からの補給が断たれた上に先日の砲撃で弾薬や燃料の集積所と食料貯蔵庫も破壊されています」
その後ブリーフィングルームでひかり以外のウィッチに状況が説明されるがその状況は芳しくなかった。
なぜか５０２だけ物資不足が深刻だった。
ラル「スオムスからの援軍は？」
ロスマン「頼んではいますが物資の運搬手段に余裕がないようです」

サーシャ「現在補給線奪還作戦を立案中ですが、とにかく食料の備蓄が足りません」

北欧方面は現在非常に戦闘が激しかった。

なぜなら冬場は盾となるはずのバルト海が凍ってしまうためそこを通りネウロイが侵攻しようとしてくる。

そのためバルトランドやスオムスの沿岸部では沿岸砲や列車砲による大砲撃戦が行われていた。

スオムスの方は比較的物資に余裕があったが鉄道網が現在ペテルブルクからコラ半島への部隊移動に使われているため運搬手段が船舶と自動車のみで余裕がなくその頼りない運搬手段の大半が通常部隊への補給物資運搬用に転用されているため５０２に割ける量は少なかった。

ただ最低限の物資として前線の兵員に一日に支給される量の物資を５０２の兵員分引き渡していたがその量は足りない上に内容が「前線戦闘用レーション&アルコール飲料」で通常の食料等はクリスマス祝いとして前線部隊に優先的に送られていた。

毎日豪勢な料理を食べる５０２と違い前線部隊は毎日雪や雨や泥の中ビスケットや缶詰の冷えて不味いレーションしか口にできないのだ。クリスマスぐらいはこのぐらいの贅沢をさせてやりたいというヴァトゥーチンの心配りだったがそもそもの話５０２が贅沢すぎた。

クルピンスキー「しばらくはずっとあれ食べることになるのか…

えっと…チントン？」

菅野「水団だ」

クルピンスキーがふざけるが菅野がツッコむ。

ラル「現状打開策はなし、補給が改善するまで待つしかないということか」

ロスマン「明日は基地恒例のサトゥルヌス祭が予定されていますが…？」

ポー「サトゥルヌス？クリスマスじゃないのか？」

バーティ「サトゥルヌスなんて古代ローマのお祭りじゃないか」

ラルとロスマンは予定されていたサトゥルヌス祭の話をするがポーやバーティ、マントイフェル、パットからすればサトゥルヌス祭ではなくクリスマスの筈だった。

そもそもこの名称は古代ローマの名称、その上サトゥルヌスというのはローマ神話やギリシャ神話の農耕の神でゼウスなどの父だがゴヤの名画「我が子を食らうサトゥルヌス」のように自分の子供に殺されるという予言を聞いて生まれた子供を呑み込んだという神話を持った色々とアレな神だった。

ただこの世界ではキリスト教というヨーロッパの文化、思想の潮流の根源がないためクリスマスは存在しなかった。

ラル「クリスマス？なんだそれ？とにかく今年の祭りは中止だな」

二パ「えええええっ!?」

二パはラルの言葉に驚き立ち上がる。

それに驚いた周りの人間は二パを見る。

二パ「あっ…いえ…なんでも、ありません…」

それに二パはすぐに座って小さくなった。

第18話：世界のクリスマス

ポー「雁淵、大丈夫か？」
ひかり「はい、ポーさん。薬で熱とか鼻水は少し収まりました」
それからしばらくしてポー、二パ、菅野はひかりを見舞っていた。
ひかりの体調は薬のおかげで多少は良くなっていた。
ポー「そりゃよかった。リョーニャがひかりがこけた時に熱に気が付かずそのままサウナに入ってたらどうなったことか」
ひかりがそりで二パと菅野を川に落とした際、リョーニャがひかりも大丈夫か心配して確認した際にひかりがくしゃみをし、それに違和感を持ったリョーニャがひかりの体温を確認すると熱があった。
それに気が付いたリョーニャはひかりの検査を行い風邪だと判明したのだ。
もし確認していない場合最悪サウナで倒れていた可能性があった。
サウナ内で倒れれば最悪脱水症状で重症化する恐れがあっただけにこれは幸運だった。
ニパ「ごめん、ひかり…私がそりなんかに誘ったせいで…」
ひかり「い、いえ、私の気が緩んでたせいです」
ニパはひかりに謝るがひかりはそれを否定する。
ニパ「ひかりのせいじゃないって！」
ひかり「ただでさえ役立たずなのに、風邪引いて倒れちゃうなんて…」
ニパ「早く元気になって、また一緒に飛ぼう！」
すると黙って聞いていた菅野が立ち上がりひかりをベットに倒して掛け布団をかける。
菅野「燃料不足で基地内の暖房も止まってんだ。
暖かくしてさっさと寝ろ」
ひかり「管野さん…」
菅野はそう言うと部屋から出て行った。
ポー「まあ寝れないんだったら本でも持って来るぞ。」
ひかり「本？」

するとポーが暇つぶしに本でも持って来ると提案した。
それにひかりも興味を持つ。
ポー「トム・ソーヤの冒険とかハックルベリーフィンの冒険とか色々あるぞ」
ひかり「なんか面白そうですね。何冊か読みたいです」
ポー「分かった。面白そうなのを持ってくるよ」
ポーはそう言って部屋から出て行きしばらくすると数冊のアメリカ文学の小説を持って来ると部屋から出て行った。
一人になったひかりはふとポーの持ってきた本を読み始めた。

その頃格納庫ではリョーニャがサーシャと共にミーシャと遊んでいた。
リョーニャ「ハハハ！良い子だ。ちゃんと待てができるまでになったとはな。
隊長もなんで反対したんだ？熊はこんなに可愛くて賢いのに」
サーシャ「まあ熊を飼うなんてオラーシャ人ぐらいしかしませんからね。」
ミーシャに餌のコンビーフの缶詰を与えながら二人は話していた。
初めは熊を飼うことにサーシャ以外に徹底的に反対されたが今では躾もあって何の問題も起きていなかった。
ニパ「サーシャさん、リョーニャさん」
サーシャ「ニパさん、どうかしましたか？」
遊んでいると後ろからニパと菅野がやってきた。
ニパ「実は二人に相談があって…」
サーシャ「何ですか？ニパさん」
リョーニャ「体調崩したのか？」
ニパ「実は…」
ニパは正直にひかりのためにサトゥルヌス祭をやりたいと相談した。

それに二人は
サーシャ「なるほど、ひかりさんの為にサトゥルヌス祭をしたいんですね」
リョーニャ「宗教などという非現実的なものはともかく祝いたいだけなら別にやっても構わんだろ。
なっミーシャ」
リョーニャはミーシャを抱きかかえながら答える。
どうにもリョーニャはミーシャにだけは甘かった。
ニパ「隊長には秘密にしてもらえますか？」
ニパは二人にお願いする。それにサーシャは笑顔で返した。
サーシャ「うふふ、了解。
ひかりさんに冬じいさんと雪娘がプレゼントを持ってきてくれればいいのにね」
ニパ「冬じいさん？」
菅野「雪女がプレゼント？」
ニパと菅野はサーシャの言ったことが分からず首をかしげる。
サーシャ「雪娘。オラーシャ地方の言い伝えなのよ」
菅野「ふーん」
ニパ「あの！私たちで用意できそうなプレゼントって何かないですか？」
するとニパがサーシャにプレゼントを相談する。
サーシャ「そうね、うーん…
昔、朝起きたら枕元に木彫りの人形が置いてあったことがあってね…
きっとおばあちゃんが作ってくれてたんだと思うけど嬉しかったな…」
ニパ「それ、明日の夜までに作れます？」
ニパがそれを作れないかサーシャに依頼する。
サーシャ「ええ。一日あれば大丈夫。
準備しておくから明日朝から一緒に作りましょう」
その依頼をサーシャは快諾した。

菅野「リョーニャは何かねえのかよ」
リョーニャ「この時期に何の思い出もないんだよ。」
二パ「サトゥルヌスを祝わないの？」
リョーニャ「そもそもサトゥルヌスなんてないんだよ。
正教なる反動主義者の連中はこの時期を祝ってるが関係ない」
リョーニャはこの時期に何の思い出もなかった。
そもそもロシアは正教圏なのでクリスマスの時期が少し違う（正教会では暦がグレゴリオ暦ではなくユリウス暦なのでそもそもクリスマスは1月7日（グレゴリオ暦）になる）上にソ連では教会は弾圧の対象だった。
なのでクリスマスなんておおぴらに祝えるものではなかった。

パット「J’aime l’oignon fr▪t▪l’huile,
J’aime l’oignon quand il est bon,」
ジョゼ「パットさん、その歌歌わないでくださいよぉ…
余計お腹減るじゃないですか…」（フランス語）
食堂では暇を持て余したパットがタバコを吸いながら鼻歌を歌いながら本を読んでいた。
そしてその鼻歌にジョゼは注意した。
なにせ歌っていたのはフランスのナポレオンの時代の軍歌「玉葱の歌」、油で揚げた美味い玉葱があればそれだけでいいなどという感じの歌だった。
内容が内容でフランス語を解するジョゼには食欲を沸きたてるある意味毒な曲だった。
パット「すまん」（フランス語）
ジョゼ「別に良いですよ。ところで何の本を読んでるんですか？」

（フランス語）
パット「サン・テグジュペリの夜間飛行だよ」（フランス語）
パットはジョゼにフランス語で「Ｖｏｌ　ｄｅ　ｎｕｉｔ」と書かれた表紙を見せる。
ジョゼ「それ面白いんですか？」（フランス語）
パット「個人的には名作だと思うよ。読む？」（フランス語）
ジョゼ「後で読んでみます」（フランス語）
話しているとキッチンの方から話し声が聞こえパットとジョゼはキッチンをのぞき込む。
そこには何故かキャビネットを開けて何かを探している下原と二パと菅野がいた。
下原「探してみます」
ジョゼ「なにかったの定ちゃん？」
二パ「ジョゼさん、パットさん、実は…」
ジョゼは下原に聞くと二パがジョゼとパットにサトゥルヌスの件を相談した。
ジョゼ「サトゥルヌス？ガリアではよくブッシュドノエルっていうお菓子を作るの。
パット「丸太を模したケーキで美味しいぞ。
俺も子供のころから近所にあったケーキ屋で買ったのを家族みんなで食べてたよ。」
下原「探してるけどケーキを作れる材料は残ってませんね」
二人はブッシュドノエルの話を二パたちにするが食材を探していた下原はケーキを作る材料さえ残っていないという。
パット「食べ物以外ならこの時期になると教会にクレシュ・ド・ノエルを飾ってたな。
キリストの生誕を模したジオラマなんだがノエル（クリスマスのフランス語）の名物みたいなものだ。」
菅野「キリスト？なんだそれ？」
パットはほかに教会に飾られるジオラマクレシュ・ド・ノエルの話をするがそもそもキリスト教がないので菅野たちは理解できなかっ

た。
ジョゼ「後は…うちの家ではツリーの下に人参を置いたわ。
トナカイへのプレゼントなの」
菅野「トナカイって人参食うのか？」
下原「人参、一本もないですね」
ジョゼがトナカイへのプレゼントの話をするが菅野は変なところで反応し下原は人参を探すがなかった。
二パ「トナカイじゃなくてひかりを喜ばせたいんだって」
パット「ならさ明日ポーかマントイフェルかバーティにハンティングに行かせたらどうだ？
それなら肉ぐらいは手に入れるだろ？」
するとパットがハンティングを提案する。
下原「いいですね。だけどそれだけだと寂しいですし絶対に確保できるとは限りませんよ？」
ジョゼ「なら二パさんの得意なキノコなんてどう？」
下原「それいいかも。今晩のうちにレシピを考えておきます。」
ジョゼがさらに保険として二パにキノコを採らせる計画を提案する。
その提案に二パは喜んだ。

バーティ「なあこのレコードなんだ？」
マントイフェル「カドリーユの主題による速歩行進曲だよ。」
クルピンスキー「僕はさっきの曲の方がいいかな？
ブランデンブルク協奏曲だっけ？」
バーティ「Ｊ・Ｓ・バッハのブランデンブルク協奏曲第６番第３楽章か？」
マントイフェル「あれはトゥルトも好きだったよ。」
バーティ、マントイフェル、クルピンスキーはその頃マントイフェルの部屋でクラシックのレコードを聴いていた。
するとドアがノックされマントイフェルが出る。

マントイフェル「ん?なんだ二パ、菅野」
二パ「マントイフェルさん、バーティさん、それにクルピンスキーさんも?」
バーティ「3人で暇だから音楽を聴いてたんだ。」
二パは3人がいることに驚いていたがバーティが説明する。
クルピンスキー「で、子猫ちゃんたちは僕に何の用かな?」
バーティ「お前じゃねえだろ」
二パ「実は3人に相談があって…」
二パは3人に一通り説明する。
クルピンスキー「え?祭りでひかりちゃんのハートをゲットしたい?」
バーティ「なにを聞いているんだ?」
クルピンスキーのボケにバーティが突っ込む。
マントイフェルはそれに苦笑いしながら考える。
マントイフェル「うーん、クリスマスか…
いつもなら街のマルクトプラッツにマーケットを開いたりしてたな。
毎年休みが取れたらトゥルトと一緒に回って色々買ってたな。
二人でグリューワイン飲んだりしてたな。
ほかにもヘクセンハウスっていうお菓子の家があったりしたな。
家だとシュトレンって菓子パンを待降節からクリスマスまでの間に食べたりしたりレープクーヘンっていうお菓子を飾ったりしてたよ。」
マントイフェルは戦前や戦争が激しくなる前の頃の妻との思い出を語っていた。
ドイツではこの時期になるとクリスマスマーケットが行われグリューワインがふるまわれたりヘクセンハウスというお菓子の家が飾られたりシュトレンという菓子パンを食べたりレープクーヘンというケーキを飾ったりしていた。

また彼は東プロイセンの人間のため知らないが南ドイツやオーストリア、スイスではクグロフというケーキも食べられていた。

二パ「でも食べ物なんてほとんどないし市場もないよ？」

マントイフェル「ポーの固有魔法に出してもらったらどうだ？

あれなら材料ぐらい作れるだろ」

菅野「その手があったか」

二パは材料がないというがマントイフェルがポーの固有魔法を指摘する。

あれならいついかなる時でも任意の物を作れた、そしてその材料はゴミや残骸でもよかった。

バーティ「ならクリスマスプディングとかミンスパイとか作れないか？

あれがないとクリスマスって感じがしない」

菅野「クリスマスプリン？」

ニパ「ミントパイ？」

バーティがクリスマスプディングとミンスパイを提案するが菅野もニパも分からなかった。

バーティ「クリスマスプディングとミンスパイ。

クリスマスプディングは伝統的なクリスマスケーキでドライフルーツとかが入ってる。

伝統的にまず材料を混ぜ合わせる時に家族全員で1回づつ願い事を言いながら時計回りに混ぜて、プディングを蒸し上げる前にその中に願い事をしながらコインとかを入れて食べる時に当たったコインとかを見て運勢を占ったりしたな。

ミンスパイも同じくドライフルーツが入ったパイだよ。

どちらもものすごく美味いぞ。

我が国の料理は世界一マズイがパイとこういう甘いものだけは別だからな」

バーティがクリスマスプディングとミンスパイを自虐しながら説明する。

どちらもイギリスの伝統的なクリスマス料理だった。

バーティ「それ以外だとなぁ…
音楽なんてどうだ?やはり祭りをやるには音楽は必要だろう」
するとバーティが音楽を提案した。
それにマントイフェルも同調する。
マントイフェル「賛成だ。クリスマスといえば教会で流れるクリスマスキャロルだからな。
ただキリスト教徒じゃないから理解はできないだろ。
普通にクラシックで行くか?」
バーティ「ただクラシックだけだと退屈するだろ。
曲目は明日の朝までに考えておくから明日、音合わせだ。
ピアノとヴァイオリン、どっちやる?」
マントイフェル「ヴァイオリンをやる。ピアノは頼むよ」
バーティ「分かった。」
二人はすぐに段取りの打ち合わせを始めた。
ニパと菅野は二人がピアノとヴァイオリンができたことに驚いていた。
ニパ「すごい!二人ともヴァイオリンとピアノができるんだ」
菅野「なんか想像できないな」
バーティ「ピアノとヴァイオリンはハンティングなどともに貴族の嗜み、できて当然さ」
マントイフェル「貴族は色々あるんだ」
それにできて当然と二人は返す。忘れがちだがマントイフェルはれっきとした伯爵の爵位を持つ貴族でありバーティもクロンカイト男爵家という名門貴族家の一員であった。
だがこの流れで一名忘れ去られている人がいた
クルピンスキー「あれ、誰か忘れてないかい?」
菅野「ああ、クルピンスキーもいたな」
クルピンスキーがそれを指摘するが菅野が適当にあしらう。
クルピンスキー「酷いじゃないか直ちゃん。

サトゥルヌスに関しては実は僕、良いこと知ってるんだけどなぁ」

するとクルピンスキーが思わせぶりな口調で語る。

それに全員の視線が集まる。

マントイフェル「何かあるのかトゥルト?」

クルピンスキー「実はねこの基地にはサトゥルヌス祭の夜に銀髪の狐女が現れるんだ」

「「狐女」」

バーティ「なんだそれ?もっと詳しく」

クルピンスキーの話に幽霊などの話が大好きなイギリス人の中でも特にこの手の話が好きなバーティが食いつく。

バーティは話の続きを催促する。

クルピンスキー「身長151センチ、19歳って本人は言うんだけど本当は鯖を読んでる婆さん狐で夜な夜な若いウィッチの生き血をすすりに来るんだ」

ニパ「生き血を…」

マントイフェル「や、やめてくれトゥルト。

そう言う話は子供の頃に幽霊見てからダメなんだ…」

それにこの手の話が大の苦手なマントイフェルとニパ、菅野がびびる。

菅野「そ、そんなのいるわけねえだろ…」

クルピンスキー「後ろに!」

「「うあああああーー!」」

マントイフェル「ギャーーーー!」

びびる菅野にクルピンスキーが恐ろしいものを見るような表情で後ろを指して叫ぶ。

それにマントイフェル、菅野、ニパは部屋を飛び出して逃げる。

それにを見てクルピンスキーは笑っていた。

バーティ「クルピンスキー、それまさか…」

クルピンスキー「嘘に決まって…」

突如クルピンスキーは黒いオーラを感じ振り向く、そこには
ロスマン「初耳だわ。そんな言い伝え！」
使い魔の耳を出して怒っているロスマンがいた。
クルピンスキー「き、狐女…」
バーティ「あ、本当にいた…あ」
それにクルピンスキーは顔を青くし、バーティは本音を漏らすがすぐに気がつく。
この直後、二人の叫び声が基地内に響いた。
戻ってきたマントイフェルは酷い目にあった二人を部屋で発見した。

ポー「え？俺に小麦粉などを作ってトナカイだか鹿か何かを狩ってこい？」
ニパ「うん。ひかりのためにサトゥルヌスをやるには必要なんだ。」
しばらくしてニパと菅野は自分の部屋で固有魔法を使って一人だけ豪勢なTボーンステーキを食っていたポーに依頼していた。
それにポーは快諾する。
ポー「まあ良いけどよ。ツリーは？チキンは？ジンジャークッキーは？」
菅野「それぐらい自分で作れよ」
ポー「なんか扱いひどくない？」
菅野「一人だけステーキ食ってるのが気に食わねえんだよ！」
菅野は一人だけズルしてステーキを食っているポーが気に食わなかった。当たり前だ。

第19話：サトゥルヌスの奇跡

ロスマン「ニパさんと管野さんが、サトゥルヌス祭をやろうとしているようです」
ラル「なら今日は二人は非番でいい」
翌日、ロスマンはラルに二パたちの企みを報告していた。
ラルは二人の企みを止めなかった。
ロスマン「寛大なんですね」
ラル「そうじゃない。
　今は哨戒任務さえ減らして次の作戦の備蓄をしたい状況だ」
ラルはロスマンに対してもっともらしい理由をつける。
502の物資不足は官僚的事なかれ主義と触らぬ神に祟りなし無しを実践する補給部隊のせいで他の部隊と異なり補充が滞る有様だった。
　無論これはもっともらしい理由であり本音は全く違うとロスマンは見抜いていた。
ロスマン「あら？てっきり隊長もお祭りに興味があるのかと」
ロスマンの言葉にラルは沈黙で返す。
だが顔を少し赤くしていた。
興味がないというわけではなさそうだ。
ロスマン「それと、クルピンスキー中尉の風説の流布に対する懲罰の件ですが…」
ロスマンは話題を変える。
昨日のクルピンスキーの与太話にロスマンは内心怒っていた。
その話の狐女が誰かぐらい分かるだろう。
バーティはその話に期待した後の失言程度だったのでロスマンは怒ってはいなかったがクルピンスキーは別だった。
ラル「モミの木」
ロスマン「は？」
ラル「サトゥルヌスにはツリーが必要だ」
クルピンスキーはラルの命令によりモミの木を探すことになった。

ポー「はあ…なんでお前とこうなるんだよ」
クルピンスキー「別にいいじゃん。」
暫くしてポーとクルピンスキーはスチュードベーカーＵＳ６　Ｕ２トラックに乗って郊外の森に来ていた。
クルピンスキーはモミの木を探すため、ポーはハンティングに来ていた。
ポー「んじゃあ終わったらここでな。
　それと、これ。何が出てくるか分からんから念のために持っておけ。」
到着して車から降りたポーはクルピンスキーに念のためにライフルを渡す。
クルピンスキー「熊とか狼が出てくるかもしれないからね」
クルピンスキーはそれを受け取ると森の中に消えた。
それを見届けたポーも自分のモシンナガンを持って森の中に入った。
森の中に入り暫く歩いているとポーの耳に微かな動物の足音が聞こえた。
すぐにポーはライフルを構えてゆっくりと腰だめ姿勢で歩きながら進む。
そして少し歩くと森の奥に大きなヘラジカがいるのに気がつく。
ポー「ムースだ」
ポーはライフルを構えてヘラジカの頭部を狙う。
そして息を止めて撃つ。
弾はヘラジカの頭部を貫き倒れる。
ポー「ヒュー、やったぜ。」
ポーはすぐにライフルを肩にかけて駆け寄り確認する。
そして見下ろして呟く。
ポー「しかしデカイな…サンタのプレゼントとはいえ」
ヘラジカのサイズはゆうに2、３メートルはあった。
ポーはヘラジカの血抜きをしていると耳に微かな獣の唸り声と足

音が聞こえた。
咄嗟にポーはライフルを構えて周囲を確認する。
すると森の奥から十数匹はいるであろう狼の群れが出て来た。
どうやらいつのまにか狼の群れの縄張りに入っていたようだった。
ポー「ファック！狼の群れとはな」
ポーは悪態をついてライフルを構える。
そして最初に一番近くにいた狼に発砲、狼は即死する。
そして素早くボルトを動かし装填すると別の狼を撃ちさらに再装填して別の狼を撃つ。
それを繰り返し４匹を倒すとリロードしようとするがその隙に狼が襲いかかる。
ポー「ファッキンシット！喰らえマザーファッカー！」
咄嗟にポーは懐からレジスタードマグナムを取り出し襲って来た狼を殺す。
さらに6頭の狼をマグナムの弾を使い倒す。
１０匹倒したところで狼の群れは去っていった。
ポー「さてと、どうしようかねこの狼」
ポーはこの殺した狼たちの処理をどうすればいいのか頭を抱えていた。
すると
クルピンスキー「大丈夫かい？すごい銃声だったけど？」
別の場所で作業していたクルピンスキーが聞こえて来た銃声の感覚から何かが起きたと思いポーの元の駆け寄って来た。
それを見てポーは喜ぶ。
ポー「よかった。これ全部トラックまで運んでくれ。」
クルピンスキー「これ全部？
１、２、３、４、５…多分１０匹ぐらいいるけど」
ポーの頼みクルピンスキーは困惑する。
なにせ１０匹もの狼と巨大なヘラジカを運ぶのだ。
ポー「全部運ぶんだよ。少なくとも毛皮ぐらいにはできるぞ。
それにムースは俺が運ぶからさ。」

ポーが使い魔の耳を出して運び始めた。
ポーの指示でクルピンスキーはこの狼とヘラジカをトラックまで運びまたモミの木を探し始めた。

その頃基地の格納庫では
バーティ「これでどうだ？」
マントイフェル「星条旗よ永遠なれ、アメリカン・パトロール、旧友、遥かなるティペラリー、エーリカ、カドリーユの主題による速歩行進曲、トルコ行進曲、ブランデンブルク協奏曲第６番第３楽章、ベートーヴェン交響曲第５番第１楽章、威風堂々、ボロディン作曲オペラ『イゴーリ公』より韃靼人の踊り、ロッシーニ作曲オペラ『ウィリアム・テル』より序曲、プッチーニ作曲オペラトゥーランドットより『誰も寝てはならぬ』などなど。
いいじゃないか。
早速曲合わせといこう」
バーティとマントイフェルがピアノとヴァイオリンを引っ張り出して練習していた。
そしてその反対側では
サーシャたちが木彫りの人形を作っていた。
サーシャ「サトゥルヌス祭のこと、ひかりさんには教えてないの？」
サーシャが二パに聞いた。
二パ「うん。ひかりをびっくりさせたいんだ」
サーシャ「わかったわ」
するとサーシャが菅野が作っていた人形が完成したことに気が付く。
サーシャ「あ、管野さんできた？」
菅野「へへん。我ながら傑作」
完成した人形を持って二パとサーシャに見せる。
二パ「へー、管野うまいじゃん」
サーシャ「可愛い猫ね」
菅野「犬だ」

完成した人形を見て猫だというが犬らしい。
ひかり「おはようございまーす！」
二パ「ひかりだ、まずいよ」
菅野「隠せ隠せ！」
すると突然ひかりがやってきた。
それに慌てて二パたちは人形や木を隠す。
サーシャ「そんな急に…管野さん！そこに正座！」
菅野「はい！」
サーシャ「物資が厳しいのに、毎回ユニットを壊して…」
サーシャはいつものように菅野に正座させて誤魔化そうとする。
二パ「ひかり！寝てなきゃダメじゃないか」
ひかり「大丈夫です。熱も下がったし…」
二パはひかりの下に行き注意する。
ひかりは熱が下がったというが二パがひかりのおでこに手を当てて測る。
二パ「まだ少し熱が残ってるって。ほら、部屋に戻って」
ひかり「でも、ポーさんから借りた本全部読んじゃいましたし返そうと思ってポーさん探してるんですけど知りませんか？」
そもそもひかりが出てきたのはポーから借りた本を返すためだったがポーはハンティングとモミの木探しで基地からトラックで郊外の森に行っていた。
なので基地内をいくら探してもいないのだ。
する突然格納庫の入り口からトラックの音が聞こえてきた。
ポー「おーい！バックするぞ！気をつけろ！」
クルピンスキー「オーライ！オーライ！はい！そこでいいよ！」
するとモミの木とヘラジカと１０匹の狼を積んだトラックがバックで入ってきた。
ポー「んじゃあ降ろすぞ。」
クルピンスキー「はーい。
あ、見て見てひかりちゃん！」
トラックを誘導していたクルピンスキーがひかりに気が付き声を

かけた。
二パ「わあ！中尉だめー！」
クルピンスキー「ひかりちゃんの為のツリーだよ」
菅野「あちゃー」
二パ「中尉のバカ…」
二パが止めようとするがクルピンスキーがばらしてしまう。
ひかり「私の…ための…ツリー…？」
二パ「わぁあ、ほら、やっぱり寝てないと」
だがひかりはその言葉を聞いた後突然ふらつき二パが体を支えた。
ひかりは二パに連れられて部屋に戻った。

リョーニャ「ベットから絶対に出るなとは言わんが気をつけろ。
悪化したらどうしようもないぞ」
ひかり「すいません…」
部屋に運ばれたひかりは医者のリョーニャから小言を言われていた。
それにひかりは謝るしかできなかった。
リョーニャ「今日はお前のために二パたちがサトゥルヌスとかいう祭りをやるんだぞ。
ベットから出れなかったら意味がないだろ。
俺は検疫があるから失礼するよ。あ、本なら別に好きなだけ借りていいぞ」
リョーニャがひかりにサトゥルヌスの話をすると検疫のため出て行った。
多くの軍隊では輜重部隊には検疫担当の医官がいた。
これはもちろん入手した食料が安全かを確認するのが仕事だった。
前線ではその食材が１００％安全とは限らないのだ。食中毒の可能性や毒の混入、汚染が考えられる。
そしてそんなことのせいで貴重な兵士を失うわけにはいかないからこそ彼らが入手した食材を検疫、問題ないかを確認していた。
ひかり「私のためにお祭りですか？」

二パ「うん。今中尉がロスマンさんと一緒においしいキノコを採りに行ってるから楽しみにしてて」
二パがサトゥルヌスの説明をする。
ひかり「私、サトゥルヌス祭ってよくわからないんですけど…」
二パ「欧州各地の冬至の伝承や風習が集まって祭りになったって言われてるんだ」
二パが詳しい祭りの内容を説明する。
扶桑というヨーロッパとは文化がまるっきり違う地域出身のひかりにはサトゥルヌスはよくわからなかった。
ひかり「でも、どうして私のためにわざわざそのお祭りを？」
二パ「実は私が５０２に入ったのは１年とちょっと前なんだ。
スオムスでは同い年くらいの気の合う仲間と戦ってたから５０２に配属されたばっかりの頃は緊張して全然馴染めなくてさ」
ひかり「ニパさんにそんな頃があったなんて…」
ひかりは二パの意外な過去に驚く。
二パ「でもちょうど１年前に基地でサトゥルヌス祭があったんだ…
スオムスでもいつも仲間と一緒にサトゥルヌス祭で明かりを焚いていたんだ。
だからここも同じだと思ったら元気が出てさ。
あれ以来私は５０２に馴染めるようになった気がするんだ」
ひかり「お祭り…私も大好きです」
二パ「祭りって人と人との心を繋ぐ不思議な力があると思うんだ。
だからひかりにもサトゥルヌス祭を楽しんでもらいたくて」
ひかり「ありがとうございます…ニパさんって優しいんですね」
二パ「え、いや、そろそろキノコ届いてるかな！
ちょっと見てくるね！」
二パは照れ隠しで部屋を出て行った。

リョーニャ「さてと、これはこうだな。」
下ではリョーニャと下原とパットが部屋の窓を開けてキノコを暖炉にくべていた。

クルピンスキー「えー！せっかく取ってきたキノコをなんてことするのさ！」
それに取ってきたクルピンスキーが抗議する。
だがリョーニャがすぐに反論する。
リョーニャ「こいつはワライタケっていう毒キノコだ。
こんなもの食わせる気か？」
パット「一応法的には過失致傷未遂か食品衛生法違反になるぞ」
リョーニャが火にくべてクルピンスキーが取ってきたキノコはワライタケという毒キノコだった。
それを図鑑で確認したリョーニャは料理をする前に全部燃やしていた。
リョーニャ「全く最初に確認してなかったら大変なことになってたぞ。
確かこの基地活性炭の備蓄がほとんどないんだ。
もし食ってたら全員分の処置なんてできないぞ」
この基地にはワライタケの毒のシロビシンに対する処置用の活性炭はほとんど備蓄されていなかったためもし摂取していたら全員に胃洗浄をしなければならなかった。
二パ「リョーニャさん、どうですか？」
リョーニャ「見ての通りだ。このバカが毒キノコ持ってきた」
下原「ええ。もしリョーニャさんがいなかったらどうなってたことか」
すると後ろから二パがやってきて下原とリョーニャが説明する。
二パ「毒キノコ！」
下原「大丈夫です。全部燃やしましたから。」
リョーニャ「それに窓を開けて換気もしてるから燃えた成分で中毒にはならないだろ」
二パ「ならよかった～」
二パは毒キノコだと聞いて驚くが全部処理したとリョーニャが話して安心する。
すると突然基地内にサイレンと監視部隊の無線が響いた。

監視兵『中型ネウロイ一機、基地に接近中！』
リョーニャ「お休みをくれるわけではなさそうだな。」
二パ「こんな時にネウロイだなんて！」
それを聞いた二パは走って格納庫に行く。
格納庫では先にマントイフェルとバーティ、ポーが出撃していた。
二パ「菅野！サーシャさん！」
サーシャ「二パさん、菅野さん、出撃します」
二パが到着したのを確認するとサーシャと菅野たちも二パと共に出撃しようとする。
だがその直後、ネウロイの攻撃を受け格納庫の入り口にあったトラックとツリーが炎上、特にトラックにはガソリンが入れっぱなしだったためツリーごと激しく燃え上がっていた。
ひかり「あっ！ツリーが!!」
二パ「くそっ！よくもー!!」
それを見て二パは怒り炎を突っ切って出撃した。
サーシャと菅野は続こうとするが直後トラックのガソリンが爆発して出れるような状況ではなかった。
そして先行していたポーとバーティ、マントイフェルは上空でネウロイを上から攻撃していた。
バーティ「クリスマスぐらい休ませろ！」
ポー「ああ！全くだ！今日だけは給料を5倍にしてくれないとやってられねえ！」
バーティもポーもせっかくのクリスマスを台無しにされて怒っていた。
だが次の瞬間、ネウロイが消えた。
ポー「ファック！消えた！」
バーティ「違う！カモフラージュだ。」
バーティはすぐにそれがカモフラージュだと判断した。
マントイフェル「二パ！どこにいるか分かるか？」
二パ『え？11時の方向にいるよ！』
マントイフェル「そばにいるのか!?」

マントイフェルは上昇中の二パに情報を求めその情報からそばにいることを知り驚く。
すぐにその方向を探すが全く見つからない。
すると下の方から銃声がする。
ポー「まさか…上側だけカモフラージュしてるのか?」
すぐにポーは降下して下側から回り込む。
するとネウロイを見つけた。
ポー「やっぱりな。上側だけカモフラージュしてる。
　下から叩くぞ」
上にいるバーティとマントイフェルに連絡し下側から銃撃する。
するとネウロイはカモフラージュを解く。
その瞬間、続いてバーティの破壊的な威力を誇るイスパノ２０ミリとマントイフェルのＳ１８が銃撃し半壊させコアが露出する。
マントイフェル「よし、貰ったぞ!」
そして素晴らしい腕を誇るマントイフェルはそのコアを狙うと一撃で仕留めた。
「あーあ、とられちゃったじゃないかー」
ポー「なんか言ったか?」
二パ「何にも言ってないよ?」
すると突然無線にフィンランド訛りの英語が響く。
それにポーは隣にいた二パに聞くが二パは話してなどいなかった。
マントイフェル「じゃあ誰が?」
バーティ「さあ?」
ポー「どっかに…ヒュー、おい、バーティ、後ろに美女のサンタクロースがいるぜ」
すぐに周りを見回しポーがバーティたちの斜め後ろに赤い服を着た二人のウィッチを発見する。
マントイフェル「後ろ…おお、これは失礼したミス」
バーティ「レディー気づかなかったご無礼をお許しくださいませ」
二パ「イッル!サーニャさん!」
振り返ったマントイフェルとバーティはすぐに帽子を取って気が

付かなかった無礼を謝す。
そして二パはそのウィッチの名前を呼ぶ。
エイラ「よー、ニパ」
サーニャ「お久しぶりね、ニパさん」
それはサーニャとエイラだった。
ポー「やあかわいこちゃん、俺はポール・アンティリーズ大尉だ。
サーニャとイッルっていうのかい？
ペテルブルクは初めてかい？初めてなら俺が案内…ゲフ！」
エイラ「サーニャをそんな目で見るなー！」
早速ポーは二人を口説こうとするがエイラがポーの腹を殴る。
ポー「なんだよこいつ…初対面で人の腹殴るとか…
最悪のクリスマスだ…」
一人ポーは腹を抱えて空中で動けなかった。

第２０話：戦場のメリークリスマス

下原「わぁ！ハムです！」
ジョゼ「こっちはりんごジャムだ！」
サーニャとエイラが来た直後、５０２にはスオムスからの物資が到着した。
物資を開けて中に食料を確認してジョゼと下原は喜んでいた。
リョーニャ「えっと、物資はこれだけか？
　せいぜい一週間程度だな」
パット「食料は一部を検査に回せ、弾薬は開けて種類ごとに分別後倉庫に、残りは種類ごとだ。
　嗜好品は置いておけ。」
そしてその物資をリョーニャとパットは書類で確認しつつ各種指示を出していた。
スオムスからの救援物資の量は焼け石に水程度だったがそれだけでも十分だった。
二パがある荷物を開ける、その中身を見てひかりに声をかける。
二パ「ひかり、見て」
ひかり「わぁ」
中身は小さなツリーだった。
そして荷物を確認しつつサトゥルヌスの準備も開始されろうそくが格納庫内に並べられた。
二パがひかりに感想を聞く。
二パ「どう？ひかり」
ひかり「すごくきれいです…」
ポー「クリスマスにしてはしょぼいなぁ…
　もうちょっとパーっと祝いたいんだけどな」
ひかりはきれいだというが派手に祝いたいポーには不満だった。
それはともかく他のウィッチ、毒キノコを持ってきて危うく全滅させかけたクルピンスキー以外はそれに見とれていた。
クルピンスキー「先生もキノコ採ったのにさ…なんで僕だけ…」

クルピンスキーは首から「私は破壊活動をしました」と書かれた看板を下げられて放置されていたがその光景にマントイフェルやバーティ、パット、リョーニャは東部戦線での捕らえられたパルチザンや大戦末期にドイツ軍であった逃走したり脱走、後退した兵士を首から看板を吊り下げられた状態で処刑、放置されていた悲惨な末期的な嫌な思い出を思い出していた。

サーニャ「スオムス軍より５０２基地への補給任務、完了しました」

ラル「確かに受領した」

ロスマン「向こうも苦しいと聞いたけど…」

サーニャがラルに書類を渡しラルは受け取る。

するとロスマンがスオムスの状況を聞いていたためサーニャに聞いた。

サーニャ「エイラ達スオムスのウィッチがニパさんを助けるんだってかき集めたんです」

サーニャがスオムス軍のウィッチによって物資がかき集められたと答えた。

サーシャ「助かりました。リトヴャク中尉、ユーティライネン少尉」

エイラ「いやーそんな大したことはー」

サーシャが代表してお礼を言うとエイラが答える。

そして続いてパーティーの準備が始まった。

ポーと下原の手によって豪勢な料理とケーキやクリスマスプディングなどイギリスやドイツ、フランスのクリスマス料理などが並べられていた。

さらには大量のビール、コニャック、ワイン、ウィスキー、ウォッカ、クワス、ラム、リキュール、ジンなどの酒も出されていた。

ポー「それじゃ飲むぞー！」

ポーは持ってきたウィスキーを飲み始めた。

リョーニャ「おい、酒を全部飲むなよ」

さらにリョーニャもウォッカをボトルごとラッパ飲みし始める。

バーティ「全く下品だ。もう少し上品に飲めないものかね？」

マントイフェル「そうか？酒なんてそんなもんだ。

うん、クリスマスはグリューワインに限る」
パット「はぁ…シャンパンがない…」
バーティはビール瓶を持って、マントイフェルはグリューワインが入ったマグカップを持ちながら浴びるように酒を飲んでいる二人を見ていた。
ただパットは大好きなシャンパンがないことに落ち込んでいた。
その横で菅野がひかりに声をかける。
菅野「おい、雁淵」
ひかり「はい」
すると人形が差し出された。
ひかり「わぁ…可愛い」
サーシャ「マトリョーシカっていうオラーシャの人形よ」
菅野「お前にやる」
渡されたのはマトリョーシカ、ロシアとオラーシャの伝統的な工芸品である。
ひかり「ありがとうございます！」
サーシャ「それ真ん中から開くのよ」
ひかりが喜ぶとサーシャが補足して説明する。
言われた通り開くと一回り小さな人形が出てきた。
ひかり「わぁ！」
二パ「まだ開くんだよ」
それを見て喜ぶがさらに二パが説明する。
そしてまた開けると中から小さな人形が出てきた。
ひかり「わぁ！可愛いブタ！」
菅野「犬だ…」
ひかりはそれを見てブタだというが菅野が犬だという。
その下ではクルピンスキーが四つん這いで歩いていた。
クルピンスキー「匂う…匂うぞ…」
そして物資の中でも嗜好品が入れられて木箱のところについた。
クルピンスキー「僕を呼んでるこの香り…おっ！」
そして手を突っ込んで中を漁ると何かを見つける。

クルピンスキー「君かー！シャンパン君！」
引っ張り出したのはシャンパンのボトルだった。
だが別の手がそのシャンパンを奪い取る
クルピンスキー「あぁ、隊長!?」
ラル「これを振ったら楽しくなる…
奪い取ったのはラルだったがさらにそれを別の手が奪う。
パット「ほぉ、こいつはいい奴じゃないか。
　ペリエ・ジュエのベル・エポックじゃないか。
　振るなんて言ったバカには勿体ない」
奪ったのはパットだった。
シャンパンが好きであり半分マニアの域に達しているシャンパンの知識からそれがとんでもない上物だと確認した。
パットはシャンパンをラルから奪うとキッチンにシャンパングラスを取りに行った。
そこから少し離れたところではエイラとサーニャがその様子を見ていた。
エイラ「ちょっと心配してたんだけどなー」
サーニャ「ニパさんのこと?」
エイラ「うん。あいつ５０２で浮いてんじゃないかって…」
エイラは二パのことを心配していた、だが二パの方を見ると笑顔で会話していた。
サーニャ「心配ないみたいね」
エイラ「うん。心配して損した」
二パの笑顔を見てエイラは安心した。
すると宴会の中でマントイフェルがエイラたちに近づいてきた。
マントイフェル「レディー、パーティー楽しんでいただけてますかな?」
マントイフェルは紳士的に声をかけた。
マントイフェルはエイラたちがパーティーから少し離れたところにいたので気を使って話しかけた。
エイラ「まあな。ところで誰だ?」

マントイフェル「おっと、自己紹介がまだだったな。
俺はヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツェレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル予備役中尉だ。
よろしく、ミスユーティライネン。」
エイラに自己紹介をしていなかったためマントイフェルは簡単に自己紹介して手を差し出す。
エイラ「よろしくなマントイフェル。」
エイラは差し出された手に握手するがふとマントイフェルの首元にかけられた騎士鉄十字章に目が行った。
エイラ「なあ、その勲章さ」
マントイフェル「ん?騎士鉄十字章がどうかしたか?ミスユーティライネン」
エイラ「もしかしてドイツ軍人か?」
エイラがドイツ軍人と言った次の瞬間、エイラとサーニャにマントイフェル、バーティ、ポー、パット、リョーニャが拳銃を向けた。
マントイフェル「なぜ知っている?答えによっては眉間に風穴があくぞ」
ポー「正直に答えた方が身のためだぞ。こっちだってガキじゃない。
軍人だ」
マントイフェルとポーがなぜ知っているかを聞く。
それに周りのウィッチたちはその冷静で冷酷な口調に驚いていた。
エイラとサーニャは銃を突きつけられて答える。
エイラ「501にいたんだ。ドイツ空軍の奴とポーランドだかどっかの奴が。」
バーティ「なに?501にも?」
サーニャ「ええ。
ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐とアドルフ・ミラー少尉、アレクサンデル・ノヴァク中尉っていう三人がいました。
エイラとサーニャは正直に答えるが501にも同じような者がい

たことに驚いていた。
エイラ「知ってるのか？」
マントイフェル「いや全く。ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐なんて知らんぞ」
エイラは知っているかと聞くが全員面識はなかった。
そもそもマントイフェルとハインツは作戦地域も所属部隊、さらには軍管区、マントイフェルは東プロイセンの第Ｉ軍管区だがハインツはニーダードナウ大管区なので軍管区は全く違うので基本的に知るわけがないのだ。
ミラーも同じく所属も作戦地域も軍管区も全く違うので知るわけがなかった。
バーティ「俺も知らんぞ。そもそもポーランド人部隊と作戦行動をしたことなんて殆どないぞ」
バーティもポーランド人部隊とはあまり一緒に行動しなかった、それどころかフランス人部隊となら一緒に作戦を行った経験が多いのでポーランド人の知り合いなどいなかった。
パットなどはそもそも戦域が違ったり敵としていたため知るわけがなかった。
マントイフェル「だから知っていたのか。」
エイラ「まさかお前らもなのか？」
エイラの話を聞いてマントイフェルたちは銃を下ろす。
そしてエイラがマントイフェルがハインツ達と同類と勘付き聞く。
それにバーティ達が答える。
バーティ「ああそうだ。俺は王立空軍だ。」
パット「自由フランス空軍所属だが」
ポー「我らがＵ・Ｓネイビーだ。」
リョーニャ「偉大なる労農民赤色空軍軍人であり我らがソビエト共産党党員だ。」
それぞれ自分の所属している軍を言う。
それに対してハインツ達から最低限の向こうの知識を知っていたエイラたちは疑問を持たなかった。

マントイフェル「まあ色々あったんだこっちも。
それと、もうこの話は終わりにしよう。さあパーティーの続きをやろうじゃないか」
するとマントイフェルがこの話を無理矢理終わらせた。
その後パーティーは夜明けまで続いた。

ガリア、パリ。
ガリアの首都にして花の都、この街の一角モンマルトル、この地区はパリに中でも繁華街・風俗街として知られる地区である。
そしてこの地区にあるキャバレーの中に少佐の階級章と少尉の階級章をつけたカールスラント空軍の軍人がいた。
「ハハハハハ！酒もってこい！
ミラー！今日は貯蓄を全部使うぞ！」
ミラー「少佐、いくらこの後参謀教育でノイエカールスラントに戻るといってもここで全部使うのは不味いですよ。」
ハインツ「何しけた事言ってんだよ！今日はクリスマスだぜ？
それに軍隊は衣食住全部出るから問題ない！」
それはノイエカールスラントに参謀教育のため戻るハインツと休みでパリに来たミラーだった。
二人とも本来ならサン・トロンにいるミーナたちと一緒なのだが移動のためパリに来ていた。
そしてクリスマスということで普段はミーナの厳しい監視に耐えていたハインツが給料全部つぎ込んでパリ一番のキャバレーで遊んでいた。
ミラー「いやそうですけどねえ…それに飲みすぎたら大変ですよ？」
ハインツ「大丈夫だって！そんなしけたこと言ってないでパーっとやろうぜ！」
ミラー「いや、僕明日の早朝の列車でパ・ド・カレーに行かないと

だめなんで遠慮しておきます。」

ミラーはハインツからの酒の誘いを断った。明日の早朝の列車でリーネに会いに行かなければならないからだった。

翌日、ミラーは目当ての列車に乗ってパ・ド・カレーに行きリーネと久方振りの再開を喜んだ。

ハインツは二日酔いで一日中寝込んでいた。

第21話：ペテルブルクの休日

エイラ「ふぁぁ…ん？…うわ！
　サーニャ？」
サーニャ「ｚｚｚｚ」
エイラ「サーニャ、なんで私のベットに？
　また寝ぼけたのか？」
サトゥルヌスの翌日、エイラは起きるとベットにサーニャがいることに驚いていた。
そしてエイラはいつものように対応していた。
エイラ「今日だけだかんなー。
　ホントに今度こそ絶対今日だけだかんなー…」
エイラが寝ているサーニャを見ていると突然後ろのドアが開いた。
エイラ「うわっ！」
ジョゼ「サトゥルヌス祭の次は年末大掃除！
　年越しまであと1週間！
　基地中ピカピカにしちゃんだから！」
入ってきたのはモップを持ったジョゼだった。
ジョゼは二人を部屋から追い出すと大掃除を始めた。

ポー「うう…寒い…その上朝から部屋追い出されるとは…」
パット「昨日の酒がまだ残ってる気がする…その上全面禁煙はキツイ。」
ジョゼに朝から部屋を追い出された被害者はほかにもいた。
ポーとパットは朝から部屋を追い出された上パットはパーティーで上物のシャンパンを丸々一本と安物のワイン3本を開けたため二日酔い、ポーは朝から寒い思いをしていた。
さらにはヘビースモーカーでありニコチン依存症のパットにとっては禁煙は苦行だった。
パットは二日酔いから頭を抱えて、ポーは米海軍の将校用冬季制服のズボンのポッケに両手を突っ込みながら廊下を歩いているとサー

ニャとエイラと二パが会話しているのを見つけた。
ポー「よ、サーニャ、エイラ。
　何してたんだ？」
サーニャ「ポーさん、パットさん、おはようございます。
　街を見てたんです。」
パット「街か。行きたいのか？」
ポーは話しかけるとサーニャが答えパットが街に行きたいか聞く。
するとエイラが何か思いついた。
エイラ「そうだ！サーニャ、街を散策しようぜ。
　二人っきりで…」
エイラはサーニャと二人で街を散策したいという。
それにポーとパットは
ポー「まあいいんじゃないか。せっかくの休暇だ好きなことやりな」
パット「車ぐらいなら貸すぞ。馬もいるしな、貸してくれるかは別だが」
二人とも賛同していた。
すると後ろから声をかけられた。
ロスマン「リトヴャク中尉、ユーティライネン少尉、ここに居ましたか」
ラル「すまんが、少し時間をもらえるか？」
振り返るとロスマンとラルがいた。
サーニャ「はい。何でしょうか？」
ラル「スオムス方面の戦況について聞かせて欲しくてな」
ロスマン「現場の生の声が知りたいの」
二人はサーニャたちにスオムス方面の戦況を聞いていた。
５０２には他戦線の情報は届きにくかった。
エイラはそれに考えると答えた。
エイラ「あー…えっとだな…その…なんか色々大変…？」
ロスマン「それはわかるけど…」
ポー「士官としてその報告はない」

パット「要点を簡潔明瞭に説明しろ」
エイラの答えにポーとパットはいらいらしていた。
そのあまりにざっくりとした説明は酷すぎた。
サーニャ「正直、あまり余裕はありません。
この時期周辺の湖も凍り付くため陸戦ウィッチの稼働率も損耗率も通常より高いです。」
ラル「なるほど。ラドガ湖が凍結したうちとしても他人事ではないか」
サーニャが再度詳しく説明した。
スオムスでは精鋭たるスオムス作戦軍がカレリア方面の守りの要であり凍り付いたバルト海方面はスオムスがオラーシャから旧式艦砲を改造した沿岸砲や列車砲、重砲で守りを固めていた。
その状況をラルは自分たちの状況と照し合わせた。
続けてサーニャは空の情勢について説明した。
サーニャ「その分、空はハンナ大尉が中心になって凌いでくれています。おかげで、私やエイラもここに来られました」
ロスマン「流石はハンナ・ウィンド大尉ね。噂は聞いてるわ」
ニパ「そっか!やっぱりハッセはすごいなー
ねえイッル。ハッセ、私になんか言ってなかった?」
スオムス方面の空はハッセことハンナ・ウィンド大尉率いる５０７などの活躍で制空権を確保していた。
なのでウィッチの中でも最優秀の部類に入る二人が休暇で抜けても問題なかった。
ラル「中尉、立ち話もなんだ。続きは隊長室で」
サーニャ「わかりました」
エイラ「えっ!?ちょ…サーニャ!」
するとラルはサーニャから続きの話を聞こうと隊長室に連れて行く。
それにサーニャも同意してエイラに謝る。
サーニャ「ちょっと行ってくるね。街にはエイラだけで行ってきていいから」

サーニャは謝ってからラルたちと共に隊長室に行った。
エイラ「いや、一人じゃ意味ないだろ…」
ニパ「じゃあ私が付き合ってあげるよ。
　けど一人で行くのが寂しいなんていつまでたってもイッルは子供だな」
ポー「お嬢さん、ここに世界一いい男がいるぜ？
　レディーのエスコートぐらいはお任せあれ。」
置いてかれたエイラをニパが茶化しポーは早速口説き始めた。
パットは横で傍観していた。他人の不幸はなんとやらのようだ。
エイラ「サーニャ～」
エイラは一人、悲しい声で言うのだった。
だがポーは御構い無しにエイラを口説こうとする。
ポー「そんな悲しい声を出すなんてよほど辛いんだな、俺が慰めてやるさ。
　近所にいいカフェがあるから一緒に…」
するとポーの背中に寒いものを感じて振り返る。
そこには
サーシャ「ポーさん？」
スパナを持った怒り狂った白熊（サーシャ）がいた。
サーシャ「ポーさん、恋人の前で他の女の子を口説こうなんていい度胸してますね」
ポー「か、かわいい女の子は口説かなきゃ失礼だろ？
　俺のひいじいちゃんの一人はイタリア人だからな」
怒り狂い恐ろしい表情をした白熊が後ろに見えるオーラを纏ったサーシャにポーは震え声で弁解する。
だがその様は恐妻家が妻に浮気がバレた光景そのものだった。
サーシャ「そうですか、でもここはオラーシャです。
　オラーシャ女がどれだけ怖いか教えてあげますね。」
ポー「ひっ…」
サーシャは怖い笑顔で言うとポーの腕をがっしり掴んでポーをどこかへ連れて行った。

この後ボコボコにされたポーが格納庫で正座しているのが目撃されたのは言うまでもない。
その光景にパットは
パット「ロシア女は怒らせるべきではないな…」
震える手でタバコを取り出しながら呟いた。

エイラ「だーかーらー、こうビュンって飛んでスルっと躱して、シュパってまくればネウロイの攻撃なんか当たんないって！」
翌日、エイラはなぜか５０２のウィッチの前で回避を教えていたがその内容はかつてハインツが「ガーってしてビューしたら簡単」と言ったレベルから変わらない酷いものだった。
無論こんなものを理解できるわけがなく全員首を傾げていた。
一番分かりそうなひかりでさえ最近は暇を見つけては本に齧り付くようになったため理解不能だった。
マントイフェル「あー、ユーティライネン少尉、もうちょっと分かりやすい言葉で説明してくれないか？」
バーティ「ウィッチとしては良いかもしれんが教師としては試験で落ちるぞ」
リョーニャ「もうちょっと論理的に説明してくれないか？同志」
パット「売れない小説家のゴミにもならん小説の方が分かりやすいぞ」
ポー「だったら俺がサッチウィーブを教えた方が百倍マシじゃないか。
あれなら最小限の損害で最大の被害を数的不利な状況で出せるぞ」
その説明の酷さにそれぞれ厳しい評価をする。
５人とも言葉を選んでいたがそれでも酷いものだった。
サーシャ「ポーさん、そのサッチウィーブって何ですか？」
するとサーシャがポーの言ったサッチウィーブに興味を持ち聞いた。

ポー「サッチウィーブってのは俺が米海軍時代に上官のジョン・サッチ少佐、まあ階級は当時で今は大佐で我らはボスのミッチャー提督の幕僚まで出世してビッグ・ブルー・ブランケットも考案したんだが、彼がゼロ対策に考案した戦術だよ。
今から教えようか？」
サーシャ「ええ、お願いします」
急遽、ポーは成り行きでサッチウィーブを教えることになった。
ポーはエイラを退け黒板の地図を外すと説明を始めた。
ポー「まず大前提となるのが、ゼロ、ジャップはレイシキカンジョウセントウキなんて言ってる戦闘機のことだが、こいつは４２年当時我々アメリカ海軍などが使っていたワイルドキャットと比べると機動性と上昇性能に優れていた。
なのでもしこいつにワイルドキャットでドッグファイトを挑めば、ドカン、終わりだ。」
ポーはジェスチャーを交えながら説明する。
ポー「そこでこのゼロを徹底的に研究した上は三つのネヴァーを出した。
即ちゼロとドッグファイトをするな
ゼロの背後を取れない状態で時速３００マイル以下で空中戦をするな
上昇するゼロを追うなの三つだ。
もし守らなければそいつは終わりだ。」
三つのネヴァーはかの有名なアクタン・ゼロや各種報告を元に米軍が出した零戦対策の一つだ。
これは零戦の低い急降下性能と高速域での機動性を突いたものであった。
ポー「そしてこいつとともにゼロ対策に使ったのがこのサッチウィーブだ。
基本となるのはエシュロン編隊を組んだ２機のワイルドキャット、もしこの片方にゼロが食いつくとこうやって飛行する。」
するとポーは黒板に２機のワイルドキャットと零戦を書き機織り

機の動きのような線を描いた。
ポー「こういう風に交差するように旋回する。
　すると交差するところでゼロが射線上に出てくるわけだ。
　ここで撃って、ゼロを落とす。
もしここで失敗してもまた同じ機動を繰り返せばまた狙える。
これがサッチウィーブ、サッチの機織り機ってマニューバだ。
　質問はあるか？」
ポーがサッチウィーブの説明を終えた。
その説明は簡潔明瞭かつ分かりやすいものだった。

翌日、エイラはサーニャと共に何故か廊下を警戒しながらこそこそと歩いていた。
エイラ「今だ。さあ今日こそ一緒に街に行くぞサーニャ」
サーニャ「あ…」
サーニャと共になにがなんでも街に行きたいエイラは誰にも知られずに基地から出ようとしていた。
するとエイラは使い魔の耳を出すと廊下の角を曲がった。
エイラ「こっちだ」
サーニャ「え…」
するとその先からサーシャとラルが歩いてきた。
ラル「リトヴャク中尉…うちにも夜間戦闘に長けたウィッチが居ればな…」
サーシャ「ですね。そうすれば、専門外の下原さんにかかる負担も減りますし…」
二人はエイラたちに気が付かず通り過ぎた。
二人が去ってエイラは動こうとする。
エイラ「よし行ったな、今のうちに…
　伏せろサーニャ！」
すると何かを察知してエイラはサーニャと共に伏せさせる。
クルピンスキー「サーニャちゃん、どこかなー？
　今日こそもっとお近づきになりたいのにー」

花束を持ったクルピンスキーが近づいてきたため伏せたのだった。
クルピンスキーもまた二人に気が付かず通り過ぎた。
エイラ「はぁ…
　まったく、皆サーニャ、サーニャと。未来予知による絶対回避が無ければ捕まってたぞ…
　気を引き締めなきゃな。」
サーニャ「エイラはさっきから誰と戦っているの?」
エイラは困り顔で立ち上がりながら愚痴る、それにサーニャが不思議に思った。
エイラ「安心しろ。サーニャは私が守る!」
サーニャ「?う、うん…」
エイラの謎の決意にサーニャは首を傾げるが頷く。
エイラはサーニャを連れて移動を開始する。
サーニャ「エイラ、そんなに街に行きたかったの?」
エイラ「ま、まあな」
歩きながら話していると二人は誰かとぶつかってしまった。
エイラ「うわっ!?」
下原「あっ!?」
ぶつかったのは下原だった。
下原はぶつかったエイラに聞いた。
下原「あ…お出かけですか?」
エイラ（こいつは大丈夫そうだな）
エイラ「ああ、ちょっとな」
下原「そうですか。いってらっしゃい」
下原の態度から大丈夫だと思ったエイラは挨拶をすると足早に去ろうとする。
エイラ「もうすぐだぞ、サー…にゃうぅっ!?」
すると突然何かに引っ張られる。
振り返ると手をつないでいたはずのサーニャが下原に抱き着かれていた。
下原「はあああ～…幸せ～!」

サーニャ「あ、あうぅ…」
エイラ「わあああっ!?なにしてんだよお前!?」
下原「あああもうサーニャさんかわいいです小さいです私もう我慢できませーん！」
サーニャ「あ、あぅぅ…」
下原「ごめんなさい、本当は最初見た時からずっとこうしたかったんです！」
エイラは下原にサーニャを離させようとするが暴走している下原は抱き着いて離さない。
エイラ「こ、こらー！サーニャから離れろー！」
下原「後生です。もう少し、もう少しだけこの小さ可愛さを堪能させてくださーい！」
エイラ「はーなーせー！」
サーニャ「あぅ…うぅ…」
必死で離させようとするが下原は離さずサーニャはされるがまま何もできなかった。
リョーニャ「同志下原？何やってるんだ？」
すると突然エイラの前に書類を持ったリョーニャが現れた。
その声を聞いた下原は冷静になって振り向く。
下原「へ？リョ、リョーニャさん！
その、違うんですこれは、その、私、可愛いものに目がなくて…」
目の前にリョーニャがいることに気が付いた下原はサーニャを離して弁明する。
下原はリョーニャに恋しているため嫌われたくなかった。
リョーニャ「そうなのか？まあいい、でリトヴャク中尉達は出かけるのか？」
エイラ「ま、まあな。」
リョーニャ「ならよかった、この書類をメンシコフ宮殿のペテルブルク都市司令部に届けてくれないか？
雁淵の疾病に関する報告書と医薬品補充の書類だ。」

エイラたちが出かけると知るとリョーニャはひかりの疾病に関する報告書とそれに使った医薬品の補充を求める書類を渡した。
エイラ「えーと、これを届ければいいんだな？」
リョーニャ「ああ。それに出かけるんだったらそれなりの理由が必要だろ？
それに俺はさっさと酒を飲みたいからな」
エイラに書類を渡したリョーニャはそのまま部屋に戻った。
エイラは書類を貰うとこれを理由に街へと向かった。

第２２話：コンボイ　バレンツ海の戦い

第二次大戦中、最も危険な海域とは？

それは北極海航路である。

アイスランドのクヴァールヴァルフィヨルズルやレイキャビク、北スコットランドのユー湖を出発しスヴァールバル諸島とノルウェー湾の狭間のビュルネイ島を経由しムルマンスク、アルハンゲリスク、モロトフスクに至る航路である。

一年を通して気温は氷点下前後、海水温は　夏でさえ４、５度しかなく一度落ちればわずか五分で死に至る。

ある時は風や波はおろか雲ひとつない穏やかな海域だが一度荒れれば１メートル先も見えない霧が覆い、十数メートルもする波が船体を打ち付け氷結させ、骨の髄まで凍らせるほどの吹雪が襲う危険な海域だった。

これらの環境は平時でさえ例えレーダーを持っていても常に目を凝らさなければ衝突する危険のある海域だがこの時ばかりは全ての船乗り、水兵、将校、ソビエトの無神論者でさえこう神に祈った。

「神よどうか嵐か霧を与え給え」と。

彼らが恐れたもの。それはドイツ軍だった。

彼らを一隻残らず北極海の魚の餌にしようとするドイツ軍、その戦力は戦艦ティルピッツ以下強力な水上打撃艦隊、多くのＵボート、そして大量の航空機だった。

この戦力を持ってすれば輸送船団などどうにでも料理できた。煮るなり焼くなり凍らせるなりと。

だが、この海域を守るはずのソ連海軍が持っていた戦力はわずか８隻の駆逐艦。

そのためこの航路を守るべくイギリス海軍が出撃した。

そしてこの海域では輸送船団を守るイギリス海軍とそれを阻み北極海の藻屑にしようとするドイツ軍の熾烈な戦いが発生し、多くの船、物資、そして人命が永遠に失われた。

その中でも最も悲劇的だったのが輸送船団ＰＱ１７である。

時は１９４２年６月末、当時ドイツとの世界大戦は激しさを増していた。

ロシア南部では新たな大攻勢、ブラウ作戦の準備が着々と進み、レニングラードの攻防戦はもう一年も経とうとしていた。

この時ソ連にとってイギリスやアメリカからもたらされる全ての戦車、全ての飛行機、全ての車両、全ての食料、全ての物資が重要であった。

そしてそれを届けるべく送られたのが輸送船団ＰＱ１７である。

輸送船３３隻とタンカー2隻、2隻の戦艦と1隻の空母、7隻の巡洋艦、駆逐艦２４隻、潜水艦１３隻、その他護衛艦艇１３隻からなる大輸送船団。

積まれた物資は２９７機の飛行機、５９４両の戦車、４２４６台の車両と装甲車、および約１６万トンの物資だった。

だが彼らに訪れたもの、それは栄光ではなく悲劇だった。

輸送船団が出向して数日後の７月４日午前９時１１分、護衛艦隊に命令が届いた

「巡洋艦隊は至急西に向かえ」

ロンドンの海軍本部より第一海軍卿名義で届いたこの命令は戦艦ティルピッツが出撃したという未確認情報に基づいていた。確かにティルピッツは出撃したがすぐに港に戻っていた。

こうして護衛艦隊に見放された輸送船は1隻、また1隻とUボートと爆撃機によって海の藻屑となった。

この３３隻の輸送船のうち無事アルハンゲリスク、ムルマンスク、モロトフスクにたどり着けたのは僅か１１隻。

２２隻の輸送船が北極海、そしてバレンツ海の藻屑となった。ソ連は戦車４３０台、飛行機２１０機、３３５０両の車両、そして約１０万トンの物資を失ったのだ。

その数は当時スターリングラード戦線には４００台程度の戦車、６００機程度の航空機、そして車両が１０００台ほどしかなかったことを考えれば戦略的損失の大きさが分かるだろう。

だがこの魔の海域における戦闘で多くの物資、船舶、人命が失われ

たがもしこの航路がなければソ連、そして連合軍は勝てなかっただろう。

通信兵「第一波砲撃終了、全縦深にて第一波機動梯団突進を開始しました。」

ニコライ「よし、予定通り全部隊に対してペトロザボーツクまでの無停止進軍を行え。

少しでも抵抗があれば迂回して包囲しろ、孤立した敵など鴨同然だ！」

年が明けエイラたちがスオムスに帰った数日後、ペテルブルクの東にある交通の要所にして戦略上の最重要拠点の一つヴォルホフにはペテルブルク周辺部隊、そしてカレリア方面の主だった指揮官が大勢いた。

そして逐一通信兵が報告を行いヴァトゥーチンが作戦指揮を行っていた。

なぜなら年明け早々、ペトロザボーツク一帯の攻撃作戦「タングステン」を行っていたからだ。

この作戦は北のカレリア方面のスオムス軍とスオムス作戦軍、そして南のヴォルホフ方面のオラーシャ軍とペテルブルク作戦軍の合同作戦であった。

作戦自体はヴァトゥーチンの、そしてソ連軍のお家芸と言える縦深作戦でありこれをネウロイに対して行うという極めて簡単に説明できるが実際は非常に難しい作戦だった。

なぜなら縦深作戦は非常に高度な連携、それも陸上の戦車と歩兵と工兵、砲兵だけでなく空中から攻撃する空軍、さらには空挺部隊と連携するというものだ。

だがこの難しい作戦は敵の戦線を数十キロから１００キロ単位で破壊し無力化できるのだ。

ドイツ軍もこの戦術によってバグラチオンを始めとした大戦末期の各種攻勢の前に見るも無残に壊滅していった。

ヘプナー「トレスコウ君、北の状況は？」

トレスコウ「は！既にマティアス・クラインハイスターカンプ中将の第２０山岳軍団が前線を突破、シャピュイ少将の第３０３装甲師団の支援の元歩兵師団フィンランディアと山岳師団ラップランドが突進を行ってます。

またその隣のエルトマンドルフ中将の第３６軍団隷下のスネルマン少将指揮第１２歩兵師団も突破に成功、第１０６９歩兵師団前面で抵抗するネウロイを片翼包囲しつつある模様です。

ボック大将は支援としてさらにベーレンフェンガー大佐指揮のベーレンフェンガー師団を第１２歩兵師団戦区に投入、突破口の拡大に注力してます。

スオムス軍もまた各所で突破に成功、ペトロザボーツクに向け突進中です。」

ヘプナーにトレスコウが報告する。

北のカレリア方面も順調に推移し各所で戦線を突破、ペトロザボーツクに向け突進していた。

ふとそれにヘプナーが自嘲気味に呟く。

ヘプナー「そうか、ボックさんはよくやってくれてるな。

しかし、我々が苦しめられた戦術でネウロイを殲滅するとは皮肉だよ」

ニコライ「この戦術は我がソ連軍の長年の研究と大祖国戦争で流れた血によって生み出された究極の戦術だ。

ネウロイなどこの作戦の前ではファシストと同じ運命を辿ることしかできん」

するとそれにヴァトゥーチンが反応する。

ヘプナー「まあ私がネウロイを率いても同じことしかできないね。」

通信兵「大将、中将閣下、第８８砲兵軍団軍団長より通信です。」

ヘプナー「ラヨシュ中将からか？読んでくれ」

ヴァトゥーチンとヘプナーが話していると通信兵が前線の砲兵部隊を一括運用している第８８砲兵軍団軍団長のハンガリー人のチャタイ・フォン・チャタイ・ラヨシュ中将からの連絡を報告する。

通信兵「は、砲兵部隊の損害は皆無、これより前線部隊への支援砲

撃と陣地移動を行う。
　とのことです。」
ヘプナー「早いな、さすが大砲屋なだけある。
　ラヨシュ中将には補給は多めにしといてくれ、彼らがこの作戦の鍵だからな。」
トレスコウ「分かってます。この作戦が成功しない限り来週に来るＰＱ１１７船団と年末に来たＪＷ１５１船団が遊び駒になりますから。」
ヘプナー「ああ。ムルマンはＰＱ１１７を受け入れようとＪＷ１５１の船舶を何隻かヴァエンガとポリャールヌイに回したらしいからな。
　ムルマンと北方艦隊はＰＱ１１７が来たらすぐにＱＰ１１０を出したいらしい」
ムルマンには既にＪＷ１５１という船団が到着していたがムルマン～ヴォルホフ間の鉄道が封鎖されているため船団に積まれた物資はムルマン港に揚陸されそこで留め置かれていた。
そしてその中で新たな船団ＰＱ１１７が来るためムルマンでは何隻かの商船を近隣の軍港であるヴァエンガとポリャールヌイに回航して港を開けていた。
そしてＰＱ１１７が到着次第次の船団としてＱＰ１１０が出港予定だった。

作戦が開始して僅か二日後、ペトロザボーツク周辺のネウロイは掃討された。
その報告は電話で５０２に届けられた。
ロスマン「ペトラザヴォーツク地域の攻略が完了しました」
ポー「早いな、あと2，3日はかかると思ってたが」
リョーニャ「流石同志ヴァトゥーチン、縦深作戦はファシスト共を祖国から追い払いエルベまで突進した作戦だ。
　ネウロイなど簡単に排除されるさ」
ロスマンがその報告を受けラル、サーシャ、クルピンスキー、リョー

ニャ、ポー、マントイフェルに伝える。
その報告にポーは作戦開始から僅か二日で目標地点を制圧したその速度に驚いていたがバグラチオン作戦などを知り、そもそもバルト海攻勢や東プロイセン攻勢、満州侵攻など数々の縦深作戦に参加しその破壊力と速度、特に満州侵攻では開戦から1週間もしない間に大戦時の軍の中でも兵の規律や練度に関しては最高レベルでありあのジューコフさえもかつては苦戦した関東軍を撃破し新京に侵入するという素早さを見せつけていた。
だがこの作戦にマントイフェルは気分はよくなかった、なぜか？それはこの作戦はドイツへのソ連軍の侵攻に使われドイツ軍はこの戦術の前になすすべもなく文字通りの全滅をしていた。
クルピンスキー「ふぁ…いやーみんな頑張っているね」
サーシャ「これでムルマンとの補給路が開通しましたね」
クルピンスキーとサーシャはそんなことよりムルマンとの鉄道が再開することを喜んでいた。
ロスマン「現在、ブリタニアからムルマンに新型ユニットを搭載した大規模な補給船団が向かっています」
ラル「ああ。我々に船団護衛のラッセルシュプラング作戦が命じられている」
ロスマンが現在ムルマンに向かっている船団、即ちＰＱ１７船団の話を出しラルが船団護衛作戦ラッセルシュプラング、騎士の跳躍作戦を命じられているという。
ラッセルシュプラング、正確にはレッセルシュプリング作戦という作戦は史実でも二つ存在した。
一つは悲劇として知られるドイツ海軍によるＰＱ１７船団攻撃作戦、もう一つが最悪の結果に終わった第7次反パルチザン攻勢として知られるユーゴスラビアパルチザンの総司令部とチトーの襲撃作戦だった。
ちなみに騎士の跳躍とはチェスの動きの一つで騎士は将棋の桂馬と同じように前の駒を飛び越えられる、意訳すれば桂馬飛び作戦とも言える作戦名だった。

サーシャ「変ですね。安全な筈の航路なのに」
サーシャがふとムルマン方面のコラ湾とバレンツ海西部は比較的安全な（敵が出ないと言うだけで普通の海と比べれば北極海なので十分危険）海域なのを思い出し大層な護衛に疑問を持った。
ラル「よっぽど重要なものを積んでいるのかもな」
ロスマン「ユニット以外に？」
それにラルは重要な物資が積まれていると推測する。
輸送船団の護衛というのは基本的に中央に商船とタンカーを置き、その周囲に駆逐艦とフリゲート、武装トローラー、掃海艇、コルベット、スループなどで編成された近接護衛艦、そしてそこから数マイルほど離れたところに軽巡洋艦が護衛、さらに船団の中心から５０マイルほど離れたところに主力艦を中心とした大型艦が護衛する、また場合によっては２、３隻の潜水艦が船団後方に着くこともあった。
商船と護衛艦の比率は通常２から２．５：１とされている。
このような護衛の上に航空支援としてウィッチ部隊を出すのはよほど、それこそ戦略的価値の高い物資が積まれているということだ。
クルピンスキー「ぶどうジュースかな？」
ラル「違う」
ポー「まあワインぐらいは積んでんるじゃないか？ワインは嗜好品で軍需物資だろ？」
それにクルピンスキーがふざけてるのか分からないが推測するが即否定される。
だがポーが積まれてはいるだろうと言う。
ワインというのは嗜好品である。なので軍需物資の一つとして扱われていた。
例えば大戦中連合軍はドイツ軍の動向を探るのにシャンパーニュ地方のレジスタンス組織からある情報を得て推測していた。
その情報というのがシャンパンの納入記録と注文記録。
シャンパーニュ地方のシャンパン業者は大戦中独自にレジスタンス組織を作り連合軍にドイツ軍に納入するシャンパンの情報を提供していた。

一見すれば相関性がないように見える情報だがある時シャンパン業者に「ルーマニアに数万本出荷しろ」と言う発注が来た、命令通り出荷した数日後にドイツ軍がルーマニアに進駐、その翌年「非常に暑い地域に出荷できる梱包にしろ」と命令されその通り梱包して出荷してから暫くするとロンメルがエジプトに侵攻した。

余談だがこの時設立されたシャンパーニュ地方のシャンパン業者の組合こそが現在全シャンパン業者を監督する機関たるＣＩＶＣである。

このような情報を元に連合軍はドイツ軍の動向を探っていたのだ。

時として戦争というのは一見関係のなさそうな情報が重要なこともあるのだ。

ニパ「イッルのプレゼント、まだ開けてないのがあったよ」

菅野「早く開けてみようぜ」

ニパと菅野、クルピンスキー、リョーニャ、ポーそしてひかりはそれから少しして格納庫でエイラが持ってきた物資の中で未開封だったものを開けていた。

菅野がバールで蓋をこじ開ける。

ひかり「美味しいものとか入ってるといいですね～」

クルピンスキー「ぶどうジュースあるかな～」

ポー「バーボンがいいな」

リョーニャ「ウォッカが入ってたら文句なしだ」

ひかりやクルピンスキーたちが酒や食料を期待するが中から出て来たのはＳｔｇ４４などの銃だけだった。

クルピンスキー「何だ、武器か…」

ニパ「残念」

ポー「ああ、酒がよかったな。にしてもなんでジャップのスーサイドピストルまであるんだよ。」

それに全員ががっかりする。

そしてポーは中にかつて酒場で陸軍の軍人から見せられたある特徴的な銃を見つけて呆れていた。

それはＦＰ―４５リベレーター、アメリカのＯＳＳ（戦略情報局）がレジスタンス用に開発した銃だがこの銃は存在自体が極秘であったためポーなど一般の兵士には「ジャップの自殺用拳銃」などと誤解されていた。

実際極限まで簡素化され最低限〝殺傷力のある弾を撃てる〟程度の能力しかない銃であり命中精度も使い勝手も最悪、使い捨て前提という割り切った兵器だが一丁が周辺用品含めて僅か２．１０ドルという低コストなので大した問題ではなかった。

ひかり「スーサイドピストル？何ですかその明らかに嫌な感じがする名前は？」

ひかりはポーの言ったスーサイドピストル、自殺用拳銃という単語に興味を持った。

ポー「ああ、こいつはジャップが使ってた自殺用の拳銃だよ。

連中は捕虜になるのは死ぬよりダメなことらしくてな、捕虜になりそうになるとこいつを使ってバーン！

自分の頭を撃ち抜くんだよ。いるか？」

ひかり「え、遠慮します…」

ポーは指鉄砲をこめかみに当てて説明する。

実際はまるっきり間違ってるが当時の一般兵のリベレーターに関する知識などその程度である。

その説明にひかりは引いていた。

その横で荷物を漁っていたニパは張り紙が貼られた箱を見つける。

ニパ「ん？これなんだ？」

リョーニャ「同志クルピンスキー宛だぞ」

リョーニャが書いてる文字を読むと視線がその箱に集まる。

クルピンスキー「てことは、スペシャルなぶどうジュースかな？開けてみて」

クルピンスキーは中身を期待して開けるよう促す。

だが中身はマカロンだった。

ニパ「わぁ、お菓子だ！」

クルピンスキー「ちぇっ、違ったか～」

ポー「いらねえなら貰うぞ」
その期待外れの中身にクルピンスキーはがっかりしポーは戦場では貴重な甘いものにクルピンスキーを差し置いて一つ取り口に放り込む。
だが
ポー「ん?ぺっ!なんか入ってるぞ?」
中に何かが入ってるのに気がつき吐き出す。
そして床に捨てられたマカロンの中にあるものをリョーニャが拾う。
リョーニャ「これは…マイクロフィルムだ。
なんでこんなものを菓子の中に隠したんだ?」
ポー「さあな?ただ言えるのは普通に渡すと不味い代物だってことだ。
さっさと隊長に持っていけ」
ポーは吐き出したマイクロフィルムをラルに持って行くよう指示した。

第23話：思い出はディナーの後で

サーシャ「マイクロフィルムをお菓子の中に隠すなんて」
サーシャが隊長室のテーブルの上に置かれたマカロンの中に隠されたマイクロフィルムを見て呟く。
例のマイクロフィルムが発見されたため急遽ポー、パット、クルピンスキー、ロスマン、サーシャ、ラルが集まってその内容を話し合っていた。
パット「一つ言えるのはそうしないといけないような代物だってことだな。
まあこんなものを不注意にも一口で食おうとしたのは災難だったが」
ポー「ああ、弁護士呼んで裁判起こして歯医者代せしめてやる」
パットが言うとポーは口に手を当てながら答える。
マイクロフィルムが入ったマカロンを一口で食べようとしたためポーは派手に歯を痛めていた。
それを横目にラルはマイクロフィルムに入っていた資料を読んでいた。
ラル「ふむ、なるほど。これは極秘指定されるな」
ロスマン「どういうことですか？」
ラル「見ろ」
資料を読んでいたラルが感想を言うとロスマンが聞いた。
ラルは聞かれると資料を見せる。
ポー「なんだこれ？」
パット「ウォーロック？魔法使いの一種の名前だろ？
にしても何だこれ？ＳＦか？」
見せられた資料にはＳＦの世界から出てきたような兵器、即ちウォーロックが書かれていた。
ポー「ふむ、ネウロイのコアを利用した兵器だとよ。
物理学を齧ったことのある人間としてはなかなか面白い兵器じゃない」

パット「目には目を歯には歯をネウロイにはネウロイをか、発想としては悪くないが技術が追い付いてないな」
その兵器の詳細を読んでポーとパットはそう結論した。
イギリスの変態兵器の多くは「発想はいいが技術が追い付いてない」というのが多い（パンジャンドラム、ハボクック等々）がこれも同じように「発想はいいが技術が追い付いていない」兵器だった。
サーシャ「でもそれが結局暴走したわけですよね」
ポー「だが資料を読むと暴走した原因は基地での戦闘で基地の電気系統を破壊されコントロールシステムがダウンしたのが原因らしい。ただコントロールシステムがダウンすると暴走する欠陥はいただけないな。
戦場じゃあ電気系が落ちる事態ってのは考えられる可能性の一つだからな。
戦艦の巨大な砲塔と装弾装置だって電気が落ちて機関が止まっても手動で使えるようになってるぞ」
資料を読んでいたポーがウォーロックの欠陥としてフェイルセーフ設計の欠如という兵器としては最悪の点を挙げた。
フェイルセーフ設計、即ち「すべての機械は壊れるものであり一つぐらい壊れても安全には問題ないように設計する」というのは兵器はもちろん飛行機のような乗り物に関しては当たり前の設計である。
戦艦だってもし電気系が落ちても手動で発砲できるように設計されているし旅客機ではもし油圧系の一つが破損しても弁があるためそれを使って油圧系の損失を最小にできるし一本完全になくなっても他の系統があるため操縦は可能である。
ましてやコントロール側のシステムが落ちると味方を攻撃するというのは兵器としては最悪中の最悪の欠陥だった。
サーシャ「倒せたと言っても、これを我々が再現するのは不可能です」
ラル「だがこの資料から分かったことがある。
ネウロイの数にも限りがある。倒し続けていればいつかは巣が空になる」

ラルは資料からネウロイを倒す鍵があると踏んだ。
確かに物は有限であり根競べともいえる方法ならば行けるかもしれないがそれでは第一次大戦のような終わりのない消耗戦になるのが落ちである。
戦争というのは長期化して消耗戦化するほど国家にとっては不利益である。
現実的にはそんなことをすれば政治方面から圧力が飛んでくるだろう。
ロスマン「マンシュタイン元帥もこの情報を知れば火力を集中させてネウロイに消耗戦を仕掛けようとするでしょう」
ラル「だろうな」
パット「マンシュタイン?.あああのドイツ軍最高の頭脳と称されてたやつか。
あいつが余計なことをしなければフランスは落ちなかった。」
マンシュタインという名前を聞いてパットはフランス戦の最大の功労者ともいえる名将エーリヒ・ゲナント・フォン・レヴィンスキー・フォン・マンシュタイン元帥の名前を思い出した。
彼はフランス戦で従来の一次大戦のシュリーフェンプランの焼き直しであった作戦に対して当時戦車部隊による通行は不可能と言われていたアルデンヌ高地を突破してマジノ線とフランス・イギリス軍主力を迂回する作戦を提案、メヘレン事件で従来の作戦の一部がベルギーに漏洩したこともありこの作戦が実行されフランス軍は大混乱に陥り世界最強のマジノ線は遊兵と化しフランス軍とイギリス軍の主力がダンケルクで包囲されフランスは降伏した。
彼はまたドイツ軍においては歩兵の友であり最も頼りになる対戦車兵器となりドイツ軍を支えた突撃砲を考案、さらには難攻不落とたたえられたクリミア半島セヴァストポリのセヴァストポリ要塞を落としスターリングラード戦の直後にはドン軍集団を率いて東部戦線南翼の崩壊を阻止、第3次ハリコフ攻防戦では現代でも機動防御戦のケーススタディとして現代でも教えられる「バックハンドブロウ（後

手の一撃）」でソ連軍を粉砕するという戦果を挙げた大戦時のドイツ軍では名将の中の名将であった。

サーシャ「ひょっとして」

ラル「そうだ。

　ムルマンに向かっている物資の中にグリゴーリ攻略の切り札が積まれているに違いない」

ポー「ムルマン？ムルマンスクじゃないのか？」

ふとポーはなぜかバレンツ海の重要港として知られる港がムルマンと言われてることに疑問を持った。

ロシア語の文法上ムルマンではなくムルマンスクと言われるのが正しいはずである。

ましてやロシアでは都市の規模によって名前が変わることは多いのだ。

例としてセヴェロドヴィンスクをあげると最初に作られた集落はスドロストイという名前でありその後３８年に都市に昇格した際当時の人民委員会議議長（首相相当）で後の外務人民委員ヴャチェスラフ・ミハイロヴィチ・モロトフにちなんでモロトフスクとなり５７年に現在のセヴェロドヴィンスクとなっている。

そのためムルマンだけでは文法上正しくないのだ。その上ムルマンという単語はコラ半島全域を表す単語だった。

パット「そんな小さなことはどうでもいいだろ。」

ロスマン「とにかく、それで私達に護衛を」

そんな港の名前という小さなことを気にするポーにパットは突っ込む。

ロスマンはその話を聞いて不可解な船団護衛のことと繋がって納得していた。

その横でクルピンスキーがふと呑気なことを言う。

クルピンスキー「ぶどうジュースあるかな？」

ラル「ない」

ポー「ワインは軍需物資だから一本ぐらいはあるだろ。」

ラルは即否定するがポーはワインは軍需物資だから一本ぐらいは

あると言う。

――――――――――

マントイフェル「ふう」

夕食後、マントイフェルは射撃場にいた。

射撃場の的にＳｔｇ４４とＳ１８を撃っていた。

この少し前、食事中に船団護衛に向かうウィッチが選ばれパット、マントイフェル、クルピンスキー、菅野、二パ、ひかりが選ばれていた。

マントイフェルは構えていたＳｔｇ４４を下ろすとふと背後に気配を感じて振り返る。

マントイフェル「誰だ？なんだトゥルトか」

クルピンスキー「なんだってなんだよ、マントイフェル」

振り返るとそこには同じようにＳｔｇ４４を持ったクルピンスキーがいた。

マントイフェル「ヴァルトかゲルトでいいって言ってるだろ？」

クルピンスキー「君がいくらいいって言っても呼ぶ気は無いね。だってその呼び方をしていたのは君の奥さんじゃないのかい？」

マントイフェル「ふ、そうだよ。トゥルトは結婚する前から俺をそう呼んでたよ」

マントイフェルが渾名でいいと言うがクルピンスキーはそう呼ぶ気は無かった。

なぜならその呼び方はマントイフェルの最愛の妻が呼んでいた呼び方だと推測していたからだ。

そしてその推測は当たっていた。

クルピンスキー「ふーん、時々君の奥さんの話を聞くけどどんな人だったんだい？

僕とは似ても似つかない人に聞こえるけど」

ふとクルピンスキーはマントイフェルがよく言っていたが詳しくは知らない彼の妻のことを聞いた。

それにマントイフェルは少しの間クルピンスキーを見つめるとタ

バコを取り出して火をつけ吸い始めると話し始めた。
マントイフェル「トゥルトのことか、いいよいつかは話さなきゃならないと思ってたからな。
トゥルト、フルネームはヴァルトルート・ザビーネ・グレーフィン・フォン・マントイフェル、旧姓ヴァルトルート・ザビーネ・フォン・ディープゲン＝クレンツは俺の三歳年下の君にそっくりな女性だった。
ユンカーのディープゲン＝クレンツ家の三女で世間では変わり者でお転婆として知られたよ。」
クルピンスキー「変わり者？」
彼の妻は同じユンカーでインスターブルクに本拠地を持っていたフォン・ディープゲン＝クレンツ家の三女でお転婆娘、変人として知られていた。
マントイフェル「ああ、俺と彼女が出会うときも親父から『ディープゲン＝クレンツ家の三女には関わるな』って釘を刺されたよ。
出会ったのは俺が陸軍で少尉任官してすぐの１９３４年のことだ。
マントイフェル家では代々将校として任官したその年に妻を娶るのが習わしで俺は全く気乗りしないまま親父に連れられてケーニヒスベルクで街のお偉方やら貴族の令嬢ばっかりのパーティーに連れてこられた。
で、俺は全く気乗りない上に昔から華やかな場が苦手でな、すぐに会場を抜け出して近くのビアホールに行った時にたまたま相席した時に出会ったんだ。
運命の出会いってのはああ言うものだと思うほど素晴らしい出会いだった。
あの時は彼女はパーティー用のドレスを着ていて俺は陸軍の礼装を着ていたとはいえ互いにそれが例のディープゲン＝クレンツ家の三女だとは全く気づかなかった。
ただふと気になり別に話しかけなくても良かったのに話しかけたんだ、『あんたもパーティー抜け出したのか？』っ

て。

そしたら『まあね、君も?』って聞いて来た、それに俺も『ああ、昔からああいう華やかな場は苦手なんだ。貴族なんだがな』って返したよ。

俺の返事を聞くと彼女も『僕も同じだよ。貴族の娘だって言うのにこう言う派手なドレスも化粧も大っ嫌い。君のその軍服みたいな服の方が好きだけど父さんはあんなのは女の子着るものじゃないって言うんだよ、何が女の子だか別に好きなもの着て好きなところで好きなことして良いじゃないかって、僕はもう子供じゃないのにね』って言ったんだ。

それで意気投合、そこからいなくなったことに気がついた親父と召使いが俺を探しに来るまで二人で飲んでたよ。

で、親父に見つかって教えてもらってから始めてそれがあの変人だって気がついたんだ。」

マントイフェルと妻の出会いというのはなんともひょんなものだった。

互いにパーティーが嫌で抜け出し会場近くのビアホールで出会うと言うなんとも奇妙なものだった。

だがラブロマンスにその程度のことは小さいことだった。

マントイフェル「それからは四六時中彼女のことを考えるようになり親父の縁談、中には有名な貴族の娘や親族もいたけどそれを全部断った。

そして親父に彼女と結婚したいと言ったよ、そしたら猛反対。

あの変人、女らしくないやつと結婚するのか!ってな。

俺からすればなんだその程度のことだった。

別に俺が求めていたのは家事をしてくれるお手伝いじゃない、一生ただ側にいて互いに全てをさらけ出せる人、それだけを求めてた。

だから俺は親父を説得して再度、彼女と会って結婚

を申し込んだ、そして即ＯＫを貰った。
　彼女はまだ１９歳だったが俺のこと受け入れてくれた、そして彼女も俺のことがずっと気になっていたらしい。
　それで結婚を受け入れた。
　だけど結婚してから彼女がなんで変人って言われるかわかったよ、簡単な話両性愛者だった。
　彼女は女の子も男も好きという人だった、だがな法律では同性愛は違法だった。」
　マントイフェルの妻ヴァルートが変人と呼ばれた所以、それは両性愛即ちバイセクシャルだったからだ。
　当時ドイツには刑法１７５条の男性の同性愛をはじめとしたいくつかの法律によって同性愛は全面的に犯罪とされ、ホロコーストの間には同性愛者はユダヤ人、ロマ、ジプシー、精神障害者、障害者、スラブ人、共産主義者などとともに虐殺の対象とされていた。
　実際ナチス時代には当時の陸軍のトップフォン・フリッチュ大将が同性愛スキャンダルで失脚、その後彼はポーランド戦で自殺的な戦死を遂げていた。
　当時のドイツというのは性的少数者には生きにくいどころか生命の危機しかなかった。
　マントイフェル「だから俺は必死で隠した。
　トゥルトも外ではよい妻を演じて世間では評判のおしどり夫婦だったよ。
　オリンピックの代表から外れた時も二人でガルミッシュパルテンキルヒエンオリンピックやベルリンオリンピックも見に行って同僚を応援したりしたよ。」
　するとマントイフェルは一枚の写真をポッケから取り出した。
　そこには数人のドイツ陸軍将校と一人の日本陸軍将校、一人のクルピンスキーにそっくりな女性が２頭の馬と共に写っていた。
　マントイフェル「この写真はベルリンオリンピックの時に馬術競技で出場する同僚だったオッペルン＝ブロニコフスキー少将とハインツ・ブラント大佐、それにロルフ・リッパート大佐の応援に行ったと

きに偶々バロンニシと出会って6人で記念撮影した時の写真だよ。」
ベルリンオリンピックの馬術競技出場者の中には大戦時の名だたる機甲部隊指揮官の名が連なっていた。
まず前回１９３２年ロサンゼルスオリンピック金メダリストで日本を代表する機甲部隊指揮官バロン西こと西竹一。
ドイツ軍の中でも珍しいモスクワの戦い、スターリングラードの戦い、クルスクの戦い、ノルマンディーの戦いなど戦争の趨勢を決めた数々の戦いで戦車部隊を率い指揮し戦いの勝敗を分ける戦闘を指揮し負けた別名「必敗の指揮官」とも称される名将、ほとんどの戦いで「彼が勝っていればその戦いは勝てた」というような戦闘ばかりでこの異名が付いた。また戦後の１９６４年にはカナダ代表チームのコーチとして来日している。
そしてハインツ・ブラント、ゲオルク・ブラント騎兵大将の長男で大戦中は陸軍参謀本部作戦課主任参謀として中央で活躍したが７月２０日事件で上司のアドルフ・ホイジンガー大将と共に巻き込まれ戦死していた。
ロルフ・リッパートはその後大戦中機甲部隊指揮官として活躍、１９４４年１０月の東プロイセン攻防戦では第４装甲師団を率いて第１１親衛軍を撃破していた。
彼らは全員マントイフェルの当時の同僚か上司であった。
というのも戦前、オリンピックの規定で馬術競技参加者は全員現役の騎兵将校である必要があった。
そして騎兵将校というのは比較的金持ちが多い、それは騎兵将校が伝統的に高価な馬術装具を自前で用意する必要があったからだ。
なので父親が騎兵将校だが息子は別兵科の将校という場合も多く例えばゲルト・フォン・ルントシュテット元帥は歩兵科出身だが父親は騎兵将校だった。
マントイフェル「それでこの俺の隣にいるのが妻だ。」
クルピンスキー「あれ？僕にそっくり。
というか君、左目あったの？」
ふとクルピンスキーは写真の女性が自分にそっくりなこととマン

トイフェルの左目があるのに気が付いた。
マントイフェル「まあな、当時はまだ戦傷を受ける前だったからな。この戦傷はスペイン内戦で対地攻撃中に対空砲火を食らってな、その破片が左目から入ってこめかみから出て行ったんだ。ただ細かい破片はまだ少し残っていて今でも時々痛むよ。」
クルピンスキー「へえそうなんだ。」
マントイフェルの怪我は１９３８年にスペイン内戦でコンドル軍団の第８８戦闘飛行隊に所属していた時に共和国軍側の対空砲火を受け負傷した結果だった。
スペイン内戦ではドイツはフーゴ・シュペルレ少将（当時）が率いるコンドル軍団を派遣していた。
コンドル軍団にはアドルフ・ガーランドやヴェルナー・メルダース、ギュンター・リュッツオウ、ヴォルフ・ディートリッヒ・ヴィルケ、ゴットハルト・ハンドリック、ヴァルター・エーザウといった有名なエース達や色々な意味で有名なハヨ・ヘルマン、悪名高いオスカール・ディレルヴァンガー、連合軍に最初に投降した将軍としても知られるヴィルヘルム・フォン・トーマ、蒋介石の次男蒋緯国、レッドバロンの従兄弟のヴォルフラム・フォン・リヒトホーフェンなどがいた。
またスペイン内戦参加者にはロドルフ・ド・エムリコート・ド・グリユヌやニコライ・グズネツォフなどもいた。
マントイフェル「この怪我のせいでいったん空軍を退役、大戦まではケーニヒスベルクで地元の馬術学校で馬術を教えていたよ。大戦が始まってすぐに俺は空軍に召集されてまた戦闘機パイロットとして戦った。」
マントイフェルはスペイン内戦の戦傷で軍を退役し予備役となったが大戦が始まると召集を受け空軍に現役復帰した。
マントイフェル「大戦中は色々あった。あんまり話したくはないが。妻のいたケーニヒスベルクは４４年までは大きな

出来事はなかったが４４年にソ連軍が迫ると妻は俺の陸軍時代の友人を頼ってゴーテンハーフェンに避難、さらにそこにソ連軍が迫ると貨物船ゴヤに乗って避難しようとしたんだが、ゴヤが撃沈された。

乗っていたほとんどの人が助からなかったらしく妻の遺体さえ発見されなかった。」

マントイフェルが悲しげに語る。

彼の妻は史上最悪の海難事故の一つドイツ海軍貨物船ゴヤ撃沈で行方不明となっていた。

ゴヤの沈没による死者、生存者数は諸説あり一般的に死者６０００人以上、生存者１８２人で救助後まもなく9人が死亡とされている。

これはかのヴィルヘルム・グストロフ撃沈(死者９０００人以上)に次ぐ最悪の悲劇であった。

大戦中東ヨーロッパにおけるドイツ民間人の死者数は諸説あるがドイツ政府の公式統計によると約６３万５０００人と推計されている。

この内ソ連軍の戦争犯罪が２７万人、ドイツ人追放で１６万人、ソ連での強制労働で２０万５０００人とされている。

マントイフェル「しかもな、当時妻は妊娠していた。

俺の子供がいたんだ。

辛かった、毎日泣いていてもう涙も枯れたよ。

戦争が終わってすべてが終われば妻の後を追おうとも思ったけど君と出会った。」

さらに悪いことに当時彼の妻は妊娠していた。

彼は妻と同時に子供も失うという悲劇を味わったのだ。

そのショックからある種の鬱から自殺願望まで持ってしまった。

彼はクルピンスキーの頭を見ながら続ける。

マントイフェル「もしかしたらトゥルトは君と出会うことで俺を生かそうとしてるのかもな」

クルピンスキー「なにそれ?」

マントイフェルの独白にクルピンスキーは首を傾げる。

マントイフェル「おかしな話だと思うが妻は生きろって言うために

君に合わせてくれたのかも知れない。
あんまり幽霊とかそういう話は苦手だが運命ってのは信じるタイプだからね」
クルピンスキー「ふーん、意外とロマンチストなんだね。」
マントイフェル「悪いか?おっと、こんな時間か。
明日は早いから寝るよ、お休み」
するとマントイフェルは照れ隠しのように時計を確認して銃を持って立ち去って行った。

第２４話：１９４５年北極圏の旅

翌日格納庫にはマッキーノコートにシーツを改造した偽装をつけたパットや二パなどムルマンへ向かうウィッチが出撃準備を整えていた。

ムルマンまではおよそ１０００キロ、この間寄れそうな町と言えば白海の奥にあるカンダラクシャぐらい、人口もまばらでペテルブルク・ムルマン鉄道沿線以外にはほとんど人口はなく、北極圏なのでこの時期は極夜で厳しい寒さと雪という極めて過酷な地域である。

そのためこんなところに行くには装備は万全であるべきだが二パのユニットは調子が良くなさそうだった。

パット「大丈夫か？一回整備に見てもらえ」

二パ「うーん…１０００キロ持ってくれよ～」

パット「１０００キロは遠いぞ。」

二パは神頼みするがかつてイタリアから地中海を挟んで南フランスへの対地攻撃作戦やリビアやチュニジアからのシシリー攻撃作戦など比較的遠距離作戦に参加した経験のあるパットはそれを不安視した。

マントイフェル「銃、サーベル、拳銃、防寒装備、水筒、パン袋、マップケース、コンパス、防寒帽と、準備はいいぞ。」

パット「分かってるよ。

おい偽伯爵！いい加減出るぞ！そろそろ出ないと向こうが太陽出てる間につけないぞ」

マントイフェルは持っていく装備のＳ１８、サーベル、防寒具を確認する。

パットはタバコを吹かしながら腕時計で時間を確認して後ろのテーブルに向かっているクルピンスキーを呼んだ。

パットは向こうが日の出てる間にムルマンに行きたかった。

というのもパットは夜間飛行の技能に関しては計器飛行訓練をやった程度で不安があった。

まだマントイフェルは飛行経験が豊富なので夜間着陸程度なら可

能だった。
で、呼ばれたクルピンスキーはというと
クルピンスキー「夜空の星…いや、大輪の薔薇…違うな～」
渡された船団の護衛のウィッチを見ながら口説き文句を考えていた。
それにパットは呆れる。
パット「あいつは何バカなこと言ってるんだ？
あと３０秒以内にユニットのエンジンをかけねえと置いていくぞ」
パットはもうクルピンスキーを置いて行こうと考え始めた。
そんなこともつゆ知らずクルピンスキーはひかりに聞こうとする。
クルピンスキー「ねえ、ひかりちゃん」
ロスマン「伯爵様？」
クルピンスキー「ういっ!?先生…これは…その…ぐえっ！」
すると後ろからロスマンが現れると制裁を加えた。
パット「ふん、痴情の縺れだ。行くぞ」
パットはその様に当然とばかりな反応をすると時間に間に合うために即座に離陸した。

その頃、バレンツ海、ムルマンから約１５０キロ離れた北極海航路では極夜の暗闇の中を十数隻の大型艦が荒波を乗り越えながら進んでいた。
通信兵「アトミラール、５０２が出撃したようです。」
「そうか、予定よりかは少し遅れてるようだな。」
通信兵「それとバイ少将宛の通信がムルマンとノイエカールスラントのフリーデブルク大将より。」
バイ「分かった。」
それはＰＱ１７の間接護衛部隊だった。
それを率いるエーリヒ・バイ少将にはこの時幾つかの通信が入っていた。
バイ少将の手元には旗艦戦艦シャルンホルスト、巡洋艦ブリュッ

ヒャーなど数隻の巡洋艦と戦艦を主力とするものだった。
バイは届けられた二通の通信を受け取ると読み始めた。
バイ「ふむ、どうやら積み荷にマンシュタインの切り札があるようだな。
それとフリーデブルク大将によるとその兵器は８０cmクルップ列車砲だと？
あの陸軍のデカブツか？」
バイはフリーデブルクが通信で伝えた兵器の情報からその正体を察した。
それは伝説の巨砲、クルップ８０センチ列車砲。
史実ではセヴァストポリ要塞攻撃に使用された巨砲だがその巨体と列車砲という兵器自体が運用しづらい物であったためその後は実戦参加することはなく終戦前に爆破処分された。
その巨大さは砲弾だけでも高さ3．6メートル、重さ4．8トンもする化け物であり列車砲自体は全長４７メートル、重量１３００トン以上運用要員は砲操作だけで４００人以上必要、支援要員を含めれば５０００人近くになる化け物であった。
ただこの兵器は恐ろしい程にコスパが悪かった。
バイ「こんなものを使おうだなんて連中は気が狂ったか大砲の魅力に取り憑かれたかのどっちかだ。」
通信兵「アトミラール、追加でヴァエンガからの通信が来ました。」
この化け物を使おうとするマンシュタインにバイは半分狂ったかと感想を漏らしていると通信兵がヴァエンガのオラーシャ海軍からの通信を持ってきた。
バイ「ヴァエンガ？北方艦隊か、読んでくれ」
通信兵「は、ＰＱ１１７を支援するため駆逐艦グリミャーシチィとステレーグシチィが先程出撃、合流は翌０５００時を予定とのことです」
それはヴァエンガ（セヴェロモルスク）から北方艦隊の駆逐艦が支援のため出撃したという連絡だった。
出撃したのは7号計画駆逐艦で武運の誉れ高きグレミャーシチィ

とステレーグシチィだった。
バイ「了解した。船団には連絡したか？」
通信兵「はい、先程了解したと返事が来ました」
バイ「そうか。」
船団への連絡を行なったことを確認したバイは艦橋から外に暗闇と嵐の中見える自らの艦隊を眺めた。

その数時間後、途中カンダラクシャなどで休憩と天候情報を得てからパット達はムルマンに隣接する飛行場に日が出ている間に着陸した。
着陸し報告を終えるのには３０分もかからなかったが北極圏の冬らしくその頃には太陽は沈みかけていた。
パット「あぁ…遠いな…」
マントイフェル「ああ。１０００キロだぞ１０００キロ。
ベルリンからパリまでが８８０キロ、それより長いんだからな」
パット「ただ北極圏にしては寒くないんだな」
流石に１０００キロという距離と北極圏という経験の少ない過酷な条件も加わって二人を含めた全員が疲労していた。
ムルマンは北緯６８度という北極圏に存在している。
そのため冬は一日中太陽が出ない極夜、夏は太陽が沈まない白夜な上に極めて寒いのだ。
ただムルマン周辺は比較的緯度に対して気温が高いためある程度は寒さはマシであった。
ひかり「私はまだまだ行けますよ！」
菅野「お前はそのまんま飛んで扶桑に帰れ」
マントイフェル「元気があって結構だ。」
そんな中ひかりはまだ元気であった。
それにマントイフェルも半分呆れながらも返す。
クルピンスキー「いや～、凄い量の物資だね」
ひかり「これにまだ追加があるんですよね？」

パット「予定ではな。しかし、数字の上では一隻あたり1万トンとはいえ実際に見て見ると物量を実感するな。
前回の船団で運ばれてここに集積されている一部だけだからな」
一行は港を歩きながら港に集積されたＪＷ１５１船団が降ろしてまだペテルブルクに運んでいない物資を見ながら驚いていた。
輸送船、特にリバティシップは一隻あたり1万トンの物資を積載できた。
仮に船団の３０数隻の輸送船が全てリバティシップだった場合その物資の量は３０万トンを超えた。
これだけの物資の内一週間で１０００キロ以上も離れ輸送手段がムルマン・ペテルブルク鉄道一本では運べる量など高が知れている。
そのためムルマンには膨大な量の物資が集積されていた。
するとニパがこの大量の物資の山の中に巨大なものを見つける。
ニパ「ねえ、何？あのでっかいの」
菅野「すげえな。戦艦でも作ってんのか？」
マントイフェル「大砲の駐退複座機に見えるな、だがそれにしても直径が1メートルはあるように見えるぞ。
列車砲か何かか？」
それは巨大な大砲の駐退複座機のようなパーツだった。
その巨大なパーツにマントイフェルは大口径の列車砲の一部と推測した。
クルピンスキー「あれは…！」
今度はクルピンスキーがなにかに気がついた。
クルピンスキー「陸戦ウィッチのカワイ子ちゃん発見！いいねいいね～！」
菅野「またかよ…」
クルピンスキーは陸戦ウィッチを見つけると喜んでいた。
それに全員が呆れていた。
マントイフェル「陸戦ウィッチか…」
一人マントイフェルは陸戦ウィッチという存在に興味を持ってい

た。
と言うのも彼は元はと言えばワイマール共和国軍の騎兵士官である。
元々空軍軍人ではなく陸軍軍人という経歴であるため陸軍には親近感を抱いていた。
ましてや騎兵科出身者が多かった戦車兵などの機械化部隊に対してはなおさらだった。
一行はその後も物資の中を進んである倉庫の中を歩いていた。
パット「えっと、この倉庫の奥に補給のが…ああ、あった。」
倉庫の奥のライトが光ると2機のユニットと数個のユニットが入った箱があった。
菅野「やったぁ！俺の紫電改だ！これさえあればネウロイなんてイチコロだぜ！」
ニパ「ピカピカだ～」
クルピンスキー「こっちのK型は僕のだね」
パット「残りの箱はラル少佐とロスマン宛だ。多分中身はクルピンスキーと同じだろ」
菅野には紫電改、クルピンスキーにはBf109K―4クーアフェルスト（選帝侯）、が与えられた。
さらにラルとロスマンようにK型もいくつかあった。
一人ニパだけはユニットが与えられず菅野とクルピンスキーを羨ましがった。
ニパ「いいなぁ、新しいユニット」
クルピンスキー「じゃあ、ニパ君はこれを使って」
するとクルピンスキーが提案した。
ニパ「ええっ!?でもそれクルピンスキーさんのでしょう?」
クルピンスキー「ニパ君のは壊れちゃったから仕方ないよね」
それに二パは驚くが二パのユニットはムルマンに向かっている途中に壊れ、満足な整備設備のないここでは修理不能だった。
なのでクルピンスキーは自分用のユニットを二パにあげた。
クルピンスキー「それより僕は…」

クルピンスキーはユニットよりも大事なものがあった。
そばにあった箱を開けると中からワインの瓶が現れた。
パット「ワインか、一本持ってくぞ。」
クルピンスキー「ちょ、それ僕のワイン！」
パット「一本ぐらい構わんだろ、それじゃあ俺は書類仕事があるから失礼するよ」
パットはクルピンスキーからワインを一本奪うとそれを持って書類の処理に向かった。

それから少しして、ムルマンで太陽が沈みかける中二パと菅野のユニットのテストが行われた。
二人は滑走路上に出された発進台につけられたユニットを履いて待機していた。
菅野「管野一番、出る！」
二パ「カタヤイネン、行きます！」
ひかり「動作確認だけだから、無理しないようにって言われてますよ」
菅野「わーってるって」
マントイフェル「日没まで２０分だ、早く終わらせろ」
二人にひかりが注意しマントイフェルが日没までの時間を確認する。
二人はユニットを回すと離陸した。
菅野「おお！魔法力の立ち上がりがハンパねえ！」
二パ「管野！こっちのＫ型もすっごい早いよ！」
その性能の違いに菅野も二パも驚いていた。
その差は地上から双眼鏡で見ていたマントイフェルにも分かった。
マントイフェル「すごいな。速度も何もかもが段違いに見えるぞ。
二パ、菅野、どうだ？」
菅野『ひかりに伝えてくれ、もうお前にはデカい顔させねえって』
マントイフェル「そうか、そろそろ日没だから降りてこい。」
マントイフェルが無線で降りるように伝えた。

するとマントイフェルの後ろから声がした。
ひかり「クルピンスキーさん、何飲んでるんですか？」
クルピンスキー「ぶどうジュースだよ」
マントイフェル「ワインだろ、雁淵はまだ未成年だから飲むなよ」
ひかり「はーい」

その日の夜、二パやマントイフェルたちが先に寝たころ、パットはクルピンスキーを正座させ説教していた。
パット「えー中尉、サウナの中で飲酒してそこで酔いつぶれて危うく脱水症状で死にかけた件について何か申し開きはあるか？」
クルピンスキー「な、何にもございません…」
書類仕事とバレンツ海の気象情報、さらに船団側との合流に関する打ち合わせ等を終えたパットはサウナに行ったがそこにいたのはワインの瓶を持って寝ていたクルピンスキーであった。
さらに不味いことにサウナ内でアルコールを摂取して寝ていたせいで脱水症状を起こしていた。
そのため彼は疲れ切った体に鞭打ってサウナから引っ張り出して基地の軍医に診せていた。
そのことでパットはクルピンスキーに対してキレていた。
パット「サウナの中でワインを飲むバカがいるか！
死ぬ気か！第一明日は任務だぞ！今日何本飲んだ！」
クルピンスキー「えーと、一本だけです…」
パット「はあ、明日までに酒が抜けてないとバレンツ海に沈めるぞ。
命令だ、今すぐ寝ろ。いいな」
最後にクルピンスキーに寝ろと言うとパットは自分のベットに行き泥のように眠った。

第２５話：ネウロイの高跳びウィッチの餌食

ひかり「そろそろ時間なのに…クルピンスキーさんどうしたんだろう？」

パット「そろそろ時間だぞ、早く出ないと日没まで間に合わんぞ」

翌日、一行は出撃準備を整えていたが何故かクルピンスキーだけ来なかった。

マントイフェル「見に行こうか？」

パット「いや、来たみたいだ」

マントイフェルが様子を見に行こうとするとクルピンスキーがやってきたが顔色が悪く足取りも悪かった。

それにパットは頭を抱える。

パット「はぁ…二日酔いかよ…

俺は昨日さっさと寝ろと言ったはずだがあの様子だとさらに飲んだな…」

マントイフェル「トゥルト、今日は寝た方がいいんじゃないか？」

クルピンスキー「いや！どうしても行くんだ。」

パット「ほお」

マントイフェルが休むのを勧めるがクルピンスキーは真面目な様子で拒否する。

それにパットは感心するが続いた言葉で台無しにされる。

クルピンスキー「ブリタニアのカワイ子ちゃんを迎えに行かないと…」

パット「ＯＫ、感心した俺がバカだった。

シロクマの餌にしよう」

菅野「賛成だ」

それにパットと菅野は呆れていた。

呆れながらも予定通り一行はバレンツ海を航行中のＰＱ１１７船団に向けコラ湾を抜け出撃した。

バレンツ海では嵐がやみ風や波一つない穏やかな海になっていた。

極夜ということもあり空は明け方のように薄暗かった。
その中をＰＱ１７と護衛艦隊が進んでいた。
そして船団の近接護衛部隊を支援する軽巡洋艦部隊のレーダーに反応があった。
その連絡は即座に後方のバイ指揮する艦隊に連絡が入った。
バイ「なに！ネウロイだと！数は！」
通信兵「は、報告によりますと大型一体のみだそうです。」
バイ「それだけか？念のためだムルマンとコラ半島沿岸部の各レーダー基地と監視所に連絡しろ。
報告を受けたバイは即座に周辺にほかのネウロイがいないかコラ半島の各基地に情報を求めた。
その返信は早く船団に接近しつつある一体以外は確認できなかった。
バイ「そうか、なら船団に煙幕を張って船団を散開、自衛に努めつつムルマンを目指せと指示しろ。
そろそろ夜が明けるがどうせ3時間も出ないんだ、時間を稼いで日没を待て。
全艦最大戦速、全速力で迎撃するぞ。
連中に痛いのをブッ食らわせてやる」
バイは船団に煙幕を張らせ散開、商船に自衛させつつムルマンに向かわせるという手段に出た。
この手順は史実では船団に敵主力艦が接近しつつあるときに取られる措置だが大型ネウロイというのは大型艦と同等かそれ以上の危険性を持ちながらそれと同じぐらいの数しかないためこの戦術は有効だった。
さらにバイは隷下の艦隊を全速力で船団へと向かわせた。

船団にネウロイが接近する中船団はウィッチを出撃させつつ５０２に救援を求めた。
ニパ「緊急入電！船団にネウロイ襲来！」
パット「は？この海域は出ないはずだろ」

マントイフェル「だが出たんだ。急がないと大変だ」
その連絡に出る可能性は低いと事前に言われていたパットたちは驚くが一番のベテラン軍人であるマントイフェルは動揺しなかった。
すると突然最後尾でフラフラ飛んでいたはずのクルピンスキーが全力で通り抜けていった。
パット「うぉ！今度はなんだ！」
ニパ「急にどうしたの？」
ひかり「ブリタニアの子が危ないって言ってましたよ」
マントイフェル「とにかく一人で突出したら不味い、追いかけるぞ」
クルピンスキーだけが突出したことに驚くもすぐに彼女を追いかけ船団に向かった。

船団の近接護衛部隊旗艦のダイドー級軽巡洋艦では艦長が各種報告を受けていた。
通信兵「バイ少将より入電！煙幕を張り船団を解き自衛に努めよです」
副長「バイ少将はふざけてるのか！ここで船団を解けば全滅するぞ！」
通信兵「駆逐艦グレミャーシチイ、ウェインライト、前に出ます！」
船団を守るため2隻の駆逐艦が対空砲火を浴びせながら船団の前に出て対空戦闘を敢行していた。
だが艦長はこの状況で船団を解くというバイの判断に疑問を持っていた。
この状況では解けば各個撃破され全滅する上に戦闘規定では対空戦闘時は船団で守ったほうが効率的であるとかかれていた。
確かに対空戦闘や対潜戦闘ではこちらの方が有利だが空飛ぶ戦艦とも言えるネウロイ相手にこのような手を取るのはバイにとっては自殺行為そのものである。
その間にも状況は不利になっていった。
副長「艦長！随行のウィッチが撃墜されました！」

艦長「くっ…おのれ…！」
見張員『後方艦影視認！シャルンホルストとブリュッヒャーです！』
艦長「やっと来たか！遅すぎるぞ！」
すると見張員が後方に護衛の主力艦隊を視認した。
それに艦長は喜ぶがその艦隊を指揮するバイには不満であった。
バイ「シャイセ！あのアッフェ！一体何をしてる！
なぜ煙幕を張って船団を散開させない！全滅させる気か！
全くこの世界の司令官どもはどう言う思考回路をしてるんだ！」
船団を解かないという彼からすれば非常識で自殺行為でしかない判断に理解に苦しんでいた。
バイ「総員戦闘配置！左舷主砲砲撃戦用意！
弾種徹甲！対空戦闘用意！」
バイは戦闘配置と艦隊を右に回頭させると主砲砲撃戦を命じた。
その命令により各艦主砲、副砲を左舷に向けネウロイに向け３０ノットで突進する。
だがそれとほぼ同時に旗艦のダイドー級軽巡洋艦の艦橋にビームが迫った。
次の瞬間、ビームは外れて海面に落ちた。
そこには一人のウィッチがシールドを張っていた。
クルピンスキー「こちらは第５０２統合戦闘航空団、クルピンスキー中尉！これより船団を援護する！」
クルピンスキーがダイドー級軽巡洋艦の前に立ちはだかってシールドで跳ね返したのだ。
パット「ふう、間に合った…艦長、パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉です。
これより援護するので船団は即座に離脱せよ」
それに遅れてパットたちも到着、ネウロイを迎撃しようとする。
するとネウロイは２つに分裂した。
パット「ニパ、菅野、俺は左、雁淵、クルピンスキー、マントイフェ

ルが右をやれ」
「了解！」
パットは即座に指示する。
すぐに部隊を二手に分けるとそれぞれ攻撃目標のネウロイに向かうがネウロイはさらに分裂し無数の小型ネウロイを3人に向かわせる。
二パ「うわぁ！いっぱい出てきた！」
菅野「行くぞ」
すぐに三人は機銃掃射を加えるが一部を取り逃してしまう。
菅野「逃した！」
パット「取りこぼしたのは俺がやる」
取り逃したものは一番後ろにいたパットが撃墜する。
あっという間に小型ネウロイは全機撃墜された。
菅野「なんだ、楽勝じゃねえか」
二パ「新しいユニットのおかげだね」
パット「だがこのままだとジリ貧だぞ。早いところ片づけねえとな」
新型のおかげで今のところは有利に立ち回っていたが長期戦となると彼らが持っている弾薬では心もとなかった。
それは反対側のマントイフェルたちも同じだった。
クルピンスキー「ひかりちゃん、マントイフェル君、背中は任せたから絶対に離れちゃダメだよ」
マントイフェル「雁淵、俺が援護するからトゥルトの背中は任せた」
ひかり「はい！」
マントイフェルは接近戦用に得意の騎兵用サーベルを持っていたが基本は狙撃なので接近戦は苦手であった。
そのためクルピンスキーを先頭にひかりたちがネウロイに向かうのを後方より狙撃で援護した。
クルピンスキーは銃撃しながら次々と小型ネウロイを撃墜していく。
ひかり「凄い…ついていくのがやっとなのに…」

その攻撃は切れ味鋭く素早いものでさらに後ろからはマントイフェルが狙撃で取りこぼしたものを確実に落としていった。
ひかりはその攻撃に付いて行くのでやっとだった。
そしてあっという間にあらかた撃墜するがすぐにネウロイは第二波を繰り出す。
クルピンスキー「参ったな…キリが無いよ」
マントイフェル「弾がもつといいが…」
それにクルピンスキーは愚痴りマントイフェルは弾の心配をする。
マントイフェルが使っているＳ１８／１０００は対戦車ライフルだが使っているのは巨大な２０×１３８ミリベルテッド弾だがこの弾は実は対空機関砲のＦｌａｋ３０／３８／Ｆｌａｋｖｉｅｒｌｉｎｇ３８やブレダＭ３８などに使われている弾である。
そのため筋力強化をもってしてもそれほど多くの弾を持ってきてはいないし下の艦隊はブリタニア海軍なのでこの弾は全く使っていなかった。
ブリタニア海軍ではエリコン系を使っていた。
その間にも次々とネウロイを撃墜しさらに船団は回頭してムルマン港に向かう一方近接護衛部隊は対空戦闘でウィッチたちを支援、その後ろではバイの護衛艦隊が全力で接近しつつあった。
だがこの間にミスが発生した。
パット「しまった！」
菅野「やべえ、親機に抜かれた！」
二パ「子機が邪魔で追い付けないよ！」
右のネウロイを逃してしまった。
攻撃しようにも小型が邪魔をし接近することさえままならない。
その状況は左のマントイフェルにも聞こえていた。
マントイフェル「雁淵、右側が不味いようだ。
援護に向かえ」
ひかり「え？でもマントイフェルさんとクルピンスキーさんは？」
マントイフェル「大丈夫だ、二人でどうにかする。
安心しろ」

マントイフェルはひかりにパット達の援護に向かうように指示する、それにひかりは驚くがマントイフェルは説得して向かわせる。
それに納得してひかりはパット達の援護に向かった。
クルピンスキー「で、二人で何とかなると思うかい？」
マントイフェル「何とかするんだよ。それに一度君と二人きりで踊ってみたくてね」
クルピンスキー「ふーん、カッコつけるね」
クルピンスキーがマントイフェルに聞くと彼は少しカッコつけて返す。
その間にネウロイはまた子機を繰り出す。
マントイフェル「さてと、状況は最高、これより攻撃しようか」
クルピンスキー「なにそれ？」
マントイフェル「フランス軍フェルディナン・フォッシュ中将の言葉を引用してみた。」
この状況にマントイフェルは第一次大戦のフランスの名将フェルディナン・フォッシュ中将の戦史に残る名言を引用する。
クルピンスキー「そ、じゃあ、マジックブースト！」
マントイフェルの説明を聞くとクルピンスキーは固有魔法を使いネウロイに向け突撃する。
さらにその後ろからマントイフェルが狙撃で援護する。
だがしばらくするとマントイフェルは銃を捨てて拳銃を取り出す。
マントイフェル「トゥルト！」
クルピンスキー「なに？それどころじゃないんだけど」
マントイフェル「弾が尽きた。拳銃とサーベルしかない」
クルピンスキー「え？」
とうとうマントイフェルが懸念していた弾切れが起きてしまった。
すぐに彼は弾が切れたライフルを捨てスペインで貰ったアストラM６００とサーベルを取り出すと左手でサーベルを、右手で拳銃を撃ちながらクルピンスキーを援護する。

その頃反対側では

パット「あれ使うしかないな。
　二パ、菅野、これから誤認を使うからあとはよろしく」
菅野「あいよ」
二パ「分かった、気を付けてね」
パットは固有魔法を使うとネウロイに向かって突撃する。
ネウロイはパットを誤認し全く気が付ない。
そのままパットはネウロイのそばまでくると至近距離から銃撃を浴びせる。
銃撃を受けるとすぐにネウロイは破片に変わった。
パット「おかしい…コアがない！向こうだ！
　二パ、菅野、どっちでもいい！今すぐマントイフェルたちの援護に行け！」
菅野「じゃあ向こうにコアが！」
二パ「ひかりたちが！」
ひかり「私がどうかしましたか？というか終わっちゃいました？」
パットがネウロイにコアがないことに気が付き菅野と二パに援護に向かわせようとするとひかりがやってきた。
マントイフェルが援護に向かわせたが着く前にパットが片づけてしまった。
二パ「ひかり!?なんで!?」
菅野「おめえ！あっちはどうした!?」
ひかり「マントイフェルさんが応援に行けって！」
パット「不味いぞ！」
二パと菅野が驚きひかりが説明するがそれにパットは不味いと直感した。

マントイフェル「でや！は！トゥルト！」
とっくの昔に拳銃の弾が切れたマントイフェルはもはや使える武器はサーベル一本だけになっていた。
フェンシングの選手だったこともありそれでも近づいてきた小型ネウロイを切り捨てていたがもはやジリ貧でありサーベルも本来は

このようなときに使うものではないのでいつ折れてもおかしくなかった。
マントイフェルはクルピンスキーを呼ぶがクルピンスキーの方もユニットの片方が故障しながらもネウロイを銃撃していた。
次の瞬間、母機のネウロイの表面で大爆発が起きる。
クルピンスキー「なんだ？」
クルピンスキーは周りを見渡すと数キロ先に別の艦隊を見つけた。
それはバイのシャルンホルストだった。
シャルンホルストは全速で急行し射程に入った途端近くに味方がいることさえ気にせず発砲、乗員の大半が高い練度を誇っていたためレーダーと光学照準を併用して初弾で命中弾を与えていた。
そしてこの命中弾で表面が破壊されコアが露出した。
クルピンスキー「コアだ！」
即座にクルピンスキーはＳｔｇ４４の下につけていたワルサー・カンプピストルを発射、カンプピストルの擲弾はコアめがけて飛び破壊した。
そして破壊され一息つた瞬間、小型ネウロイが突進してきた。
クルピンスキー「しまった！」
次の瞬間、クルピンスキーの前に人影が割り込みネウロイは粉々になり同時に細い金属が空高く飛ばされた。
クルピンスキーの前には刃が根元から折れたサーベルを持ったマントイフェルがいた。
マントイフェル「トゥルト、大丈夫…」
マントイフェルがクルピンスキーに声をかけようとした瞬間、折れて飛ばされたサーベルの刃がマントイフェルの右肩に突き刺さった。
マントイフェル「が！」
クルピンスキー「マントイフェル！」
すぐにクルピンスキーは彼のそばに行き傷の手当てをしようとする。
腕に刺さったところからは血があふれていた上に周りの気温は摂氏―１０度以下、このままでは凍傷に陥る危険があった。

クルピンスキー「マントイフェル、大丈夫、僕が何とかするから」
マントイフェル「トゥルト…大丈夫か…？怪我はないか？」
出血で意識が朦朧とする中マントイフェルはクルピンスキーを心配する。
クルピンスキー「僕は大丈夫だからさ！自分の心配しなよ！ねえ！」
マントイフェル「よかった…君が無事ならそれでよかった…」
クルピンスキー「よくない！僕はよくない！このままだったら君は死ぬよ！
やだよもう誰かが死ぬところなんて見たくない！」
とうとうクルピンスキーは泣き出してマントイフェルを叱る。
それを聞くとマントイフェルは意識を手放した。

数日後、クルピンスキーはペテルブルクの病院のある一室にいた。
クルピンスキー「はい、口開けて」
スプーンで病院食を取るとマントイフェルの口に入れた。
マントイフェルは意識を失うとクルピンスキーが咄嗟に機転を利かせムルマンに連れ帰らずシャルンホルストに緊急着艦、マントイフェルは医療設備が整ったシャルンホルストで処置を受けたのちその日の夜にシャルンホルスト共にムルマンに到着、そこからさらに鉄道でペテルブルクに送り返された。
その間クルピンスキーはずっと一緒だった。
マントイフェル「ありがとう、トゥルト。」
クルピンスキー「いいよ、僕を助けてくれたんだからこのぐらいはさせてよ」
マントイフェル「そうだな」
マントイフェルは右肩にサーベルの刃が15センチ近く刺さり貫通、数センチずれていたら動脈や肺を損傷していた恐れがあったほどの重症だった。
だが幸い命に別状はなかった上にウィッチの治癒魔法である程度は回復していたが利き腕たる右腕はしばらく使えず最低1か月は入

院となった。
クルピンスキーはマントイフェルの介助のためそれから数日病院に通い詰めていた。
バーティ「すっかり夫婦みたいだな」
ロスマン「そうね、まさか偽伯爵がこんな事をするなんて思いもしなかったわ」
パット「なんか元気そうだな」
ひかり「心配して損しましたね」
その仲睦まじい姿を廊下からバーティとロスマン、そしてパットとひかりが見ていた。
すると二人が４人に気が付く。
マントイフェル「お、見舞いか?バーティ、パット、ロスマン、雁淵」
バーティ「まあそんなところだな、しかしなあお前ら夫婦みたいだぞ。」
マントイフェルは４人を病室に入れるとバーティが夫婦みたいだと言う。
それを聞いてクルピンスキーの顔が真っ赤になる。
クルピンスキー「な、ないって!第一僕には大勢のかわいい子猫ちゃんが…」
ロスマン「あなたの言う子猫ちゃんが入院した時でもここまで献身的に見舞いには行ってなかったわよね?」
クルピンスキー「せ、先生、それはその、えっと、あの、」
言い訳しようとするが付き合いの長いロスマンが過去の行動を持ち出して聞く。
それに珍しくクルピンスキーが慌てふためく。
ロスマン「まあいいわよ。だってあなただって可愛い女の子でしょ?」
バーティさん、行きましょう」
バーティ「そうだな、パット、雁淵、ここからは二人の邪魔になるから行こう」

パット「そうみたいだ。まあ成功したらワインでも奢るか」
ひかり「え？お見舞いはいいんですか？」
それを見てロスマンがバーティを連れて出ていく。
空気からなんとなく状況を察したパットもひかりを連れて出ていく。
二人きりになるとマントイフェルがクルピンスキーに話しかける。
マントイフェル「トゥルト、いいのか？トゥルトのことを〝妻に似ている〟ってだけで好きな人間だぞ」
マントイフェルにクルピンスキーは小さく頷く。
それを見てマントイフェルが呟く。
マントイフェル「ありがとう、トゥルト」
クルピンスキー「どういたしまして、ヴァルト」
クルピンスキーが返すとマントイフェルが笑顔になった。
マントイフェル「ところで、食事を続けたいんだがトゥルト」
クルピンスキー「ごめんヴァルト。じゃあ口開けて」
そしてまた食事を続けるのだった。

第２６話：Ｍｒジャベールと壊し屋なウィッチ達

パット「菅野中尉、貴官は本当に士官なのか？
毎回毎回壊してばかりで。ユニット一機のコストを考えてるのか？」
菅野「階級なんて関係ねえ！ネウロイをぶっ倒せばそれでいいだろ！」
パット「それで済めばいいがな、このユニットは誰の金で作られてるんだ？
誰の金で運用されているんだ？
国民の血税だ、君は国民が毎日汗水たらして働いて稼いだ金から徴収した金でできたものを乱暴に扱う気かね？
納税者に失礼ではないか？どうかね？」
菅野「うっ…」
ある日何故か菅野はパットから正座させられた状態で説教を受けていた。
理由は簡単だった。
菅野がまたユニットを壊したのだ。
それにサーシャが説教するがそれでも埒があかないためサーシャの次席指揮官として頭角を現していたパットに替わってもらったのだ。
そこでパットは菅野に「ユニットが国民の血税によって作られ運用されている」ことを再確認させていた。
軍隊というのは市民の安全にかかわるが同時にとんでもない予算が必要である。
そのため戦争が終われば軍隊はあっという間に予算削減の波に襲われるものだ。
その上一度平和になればどこの国も軍隊への風当たりというのは強いものである、なので言い方は悪いが民主主義の軍隊というのは基本的に納税者に媚びなければ大変なのである。
例えばベトナム戦争で米軍が撤退したのも作戦や指揮、戦略のミス

以上にベトナムで流されたおびただしい血に国民が怯えた結果米国内で反戦運動が激化、さらに機密書類の漏洩もあり撤退に追い込まれたのだ。

また予算も大変であり予算というのは有限である、そのため戦費に大量の予算を投じた結果破滅的な量の負債を抱えたり重税から暴動が起きてしまうことがある。

前者はイギリスが大戦時のレンドリース法の返済と戦時国債で莫大な量の負債を抱えてしまい戦後の英国病などの原因になった上、全て返し終えたのはなんと２００６年の１２月３１日だった。

後者は日本で１９０４年の日比谷焼打事件では戦費に苦しんで市民がポーツマス条約の内容を原因に暴徒と化し新聞社などを焼き討ち、１９１８年米騒動ではシベリア出兵が原因の米の暴騰が原因となった。

また血の日曜日事件やロシア革命も重税と国民が戦争への支持を失ったのが原因だった。

軍隊というのは独裁国家では最大にして最強の暴力装置だが民主主義の下では強力だが最も立場の弱い組織であった。

パット「雁淵」

ひかり「は、はい！」

するとパットは後ろで見ていたひかりを呼ぶ。

パット「お前はこんな国民の血税を軽んじてユニットを壊すような軍人にはなるなよ」

サーシャ「ええ、ひかりさんはブレイクウィッチーズなんて言われちゃダメですよ」

ひかり「ブレイクウィッチーズ？」

パットがひかりに菅野みたいになるなと注意しているとサーシャが後ろから割って入る。

ひかりはサーシャの言ったブレイクウィッチーズという単語が分からず聞き返す。

パット「頻繁にユニットを壊すダメ軍人三銃士だ」

サーシャ「まずそこのニパさん」

ニパ「わ、私は壊さないよ！壊れるんだ！」
すると二人でブレイクウィッチーズの説明を始めた。
最初に言われたニパは壊れるから違うと弁解するが運のなさは酷いものであった。
サーシャ「それから管野さん」
菅野「ふん！戦果は上げてんだろ。ブレイク上等だ！」
パット「貴様は少しは反省しろ」
次に菅野が言われるが反省するそぶりを見せない。
それにパットは少しは反省しろと注意する。
サーシャ「そして入院してるマントイフェルさんを手伝いに行っているクルピンスキーさん」
最後にサーシャはクルピンスキーの名前を出す。

クルンピンスキー「ヘックシュン！」
同じ頃、クルピンスキーがマントイフェルの病室でラルが窓のそばにいる中マントイフェルの横に座った状態でくしゃみをする。
マントイフェル「風邪か？トゥルト」
クルピンスキー「違うよヴァルト、何処かでかわいこちゃんが僕の噂をしてるんだよ。
って、露骨に嫉妬しないでくれるかな？」
マントイフェル「嫉妬なんてしてないぞトゥルト」
心配してクルピンスキーに聞くが答えにマントイフェルは露骨に不機嫌な顔をする。
マントイフェルも最愛の人がどこか知らないところで噂されるのは嫌なものだった。
ラル「それにしても本当に付き合い始めたんだな」
クルピンスキー「ええ。もしかして羨ましがってます？
ブリタニアのあの人と…」
ラル「ん？」
クルピンスキー「ナンデモアリマセン…」
クルピンスキーがラルの話をしようとするとラルは威圧して黙ら

せる。
ラル「お前たちのお陰で補給路が復旧した、ご苦労」
マントイフェル「ただこんな状況ですけどね。
まあ暫くは溜まってる本を好きなだけ読めますけど」
クルピンスキー「もしあの時ヴァルトが守ってくれなかったらやられてました」
ラルが先の戦闘を労うが二人とも死にかけた戦闘だった。
ラル「お前に傷を負わせかける程の奴なら一度戦ってみたいな」
クルピンスキー「隊長の怪我が治ってないのに凝りませんね、僕は勘弁です。」
マントイフェル「あんなのは一度だけで十分ですよ。
それとあんまりそう言うこと言わないでください。本当に起きたりしますから」
ラル「ふ、そうだな。変な願望を言えば実現してしまうなんて言うからな」
ラルは一度あのネウロイと戦ってみたいと言うが二人はあんなのは一度で十分でラルにあんまりそう言うことを言わないように言う。
言霊という概念というのは面白いことに日本だけでなく聖書にさえ書かれていた。
ラル「マントイフェル、近いうちに大規模な作戦が発動するはずだ。
それに間に合うよう治療に専念してくれ」
マントイフェル「そのぐらい分かってます。春になれば雪が全部溶けて泥の海になる。
その前に作戦をやりたいんだろう」
ラルがマントイフェルに作戦の話を伝える。
それにマントイフェルは予想していたように返す。
春になれば雪は全部溶けて泥の海になってしまう。
ましてや道路事情のいい西欧や南欧と違い中欧、北欧、東欧というのは道路事情というのが非常に劣悪である。
特に東欧、ロシアではその悪さが独ソ両軍のネックとなった。

ドイツ軍はモスクワまでの補給をスモレンスクから伸びる一本の道路に依存していたし春の泥の中では両軍共に足を阻まれ機動性を封殺されていた。

その最たる例と言えるのが１９４５年の春にハンガリーのバラトン湖周辺で行われた春の目覚め作戦、この作戦でドイツ軍は最後の機甲戦力を泥の海の中に突進させるという無謀すぎる作戦を敢行、結果泥で攻勢が停滞した所をソ連軍の逆攻勢に襲われ最後の装甲戦力は壊滅した上にそのままハンガリーどころかオーストリアのウィーンまでの道をソ連軍に突進させる結果となった。

そのことぐらい元騎兵将校で陸戦の素養があり機動戦などに関しての知識のあるマントイフェルには簡単に予測できた。

クルピンスキー「まあそう言う話はこのぐらいにしてさ、ヴァルト、りんご持って来たけどいる？」

マントイフェル「貰おう。で、剥けるのか？この間あんなことをしたのに」

するとクルピンスキーが仕事の話を終わらせて持ってきた籠からりんごを取り出した。

ただマントイフェルはクルピンスキーが料理できず自身も全くできないのはよく分かっていたためりんごを剥けるのか不安で仕方なかった。

だがクルピンスキーには秘策があった。

クルピンスキー「大丈夫だよ、昨日下原ちゃんにみっちり剥き方教えて貰ったから」

マントイフェル「そうなのか、よかった。」

この前日、クルピンスキーは下原からりんごの剥き方をみっちり教えて貰っていた。

ただそのせいで昨日はなぜか大量のりんご料理が出たのは余談だが。

クルピンスキー「じゃあ僕は給湯室でりんご剥いてくるから。

隊長、ヴァルトを取らないでください」

ラル「そのぐらい分かってる。」

菅野「イテテ…まだ痺れが収まんねぇ…」
その日の夜、菅野は廊下を足を引きずりながら歩いていた。
昼間の正座の後遺症がまだ残っていた。
すると廊下の奥に人影を見つける。
菅野「雁淵…こんな時間にあいつ…？」
ひかりがこんな時間にどこへ行くのか気になり菅野は後をつける。
ひかりは格納庫に行くとユニットの前にしゃがんで話しかけていた。
ひかり「チドリ…あれから連絡が無いんだけど、お姉ちゃん大丈夫かな…？」
パット「雁淵？こんな時間に何やってるんだ？」
話しかけていると後ろから突然パットがやってきた。
ひかり「パットさん、どうかしたんですか？」
パット「いや、書類仕事が終わってサウナに行こうとしたらお前が格納庫に入っていったから気になったんだ。
まあもう一名後をつけてた奴がいるみたいだけどな」
菅野「なんでバレた…」
ひかり「菅野さん」
パットは書類仕事が終わってサウナに行こうとしたら偶々ひかりが格納庫に入るところを目撃してひかりに話しかけていた。
そして菅野がいることにも気が付いていた。
パット「で、どうかしたのか？悩み相談ぐらいならのるぞ。」
ひかり「パットさん、実はお姉ちゃんからの連絡がないんです、だから大丈夫かなって」
ひかりはパットに姉からの連絡がないことを相談する。
パット「ああ、怪我をした件か。
あったことがないからどんな人か知らんがきっと大丈夫なんじゃないか？
便りがないのはいい事だって言うだろ？」

菅野「孝美は簡単にくたばる奴じゃねえ。
孝美はハンパなくつええからな。
呉の海軍学校で初めて会った時、俺の相棒はコイツしか居ねえって思ったぜ」
パットと菅野はひかりに大丈夫だという。
ひかり「管野さんの相棒…それって、私じゃダメですか!?」
するとひかりがとんでもないことを言う。
菅野「はぁ!?おめえが!?１００年早えんだよ！」
ひかり「じゃあ、どうすれば相棒にしてくれます?」
ひかりは諦めない、それに菅野は当たり前のことを言う。
菅野「そんなの簡単だ、強くなればいいんだよ。孝美のようにな。」
パット「まあ強くって言ったって戦闘だけじゃだめだぞ、勉強もしないと。
一度学んだものは何人たりとも奪うことはできないからな。
銃の撃ち方なんて家事のどこで使うんだ?」
菅野は強くなればいいと言うがただパットはそのことに否定的だった。
簡単な話「戦争で強くなっても平和な時は何の役にも立たない」という当たり前のことを考えていた。
軍隊で学んだことというのは基本的に日常では役に立たないことばかりである。
それどころか犯罪にだって使われるかもしれない、あの悪名高いギャングのアル・カポネが最新の兵器であった機関銃の知識を得たのは軍隊であった。
ひかり「勉強、ですか?」
パット「ああ。前にポーが言ってただろ、知は力なりって。
元はベーコンの格言だがな」
ひかり「ベーコン?食べ物ですか?」
パットが前にポーが話していた格言を引用する。
だがひかりはその格言を言った人物、フランシス・ベーコンを知らなかった。

パット「フランシス・ベーコン、イギリスの哲学者。
帰納法とか哲学の授業で習わなかったか？
確かバーティがベーコンの著作持ってたはずだし」
ひかり「哲学の授業なんてありませんしバーティさんの本はまだあんまり読んでないんですよ」
フランスでは高校などで哲学の授業教育がありバカレロアでも哲学から試験が行われるなど哲学はフランスの学校教育では非常に重要な物だった。
またバーティもベーコンの著作はいくつか持っていた。
だがひかりは読んだことも学んだこともなかった。
パット「雁淵、ベーコンも知らないとかだいぶ不味いぞ。
本当に戦争が終わって社会に出たら大変だぞ」
ひかり「そうですね…あのパットさん、勉強教えてくれませんか？」
ひかりもベーコンを知らないということに危機感を持った。
ベーコン程度は一般常識として知っておくべきである。
そこでパットに家庭教師を頼んだ。
パット「別にそのぐらいなら構わない。
というかさ、バーティにも頼んだら？あいつ本物の教師だぞ」
ひかり「え！そうだったんですか！」
パット「知らなかったのかよ…
まあ科目は歴史らしいが教えてもらえ。
今日は遅いから明日にでもどうだ？」
ひかりはバーティが教師だったことに驚いていた。
するとその横で放置されていた菅野が二人に言う。
菅野「おい！俺を忘れてねえか！」
パット「あ、すまん。つい…」
ひかり「すいません…」
完全に忘れていた二人は菅野に謝る。
するとふとひかりが菅野に質問する。
ひかり「管野さんの戦う理由って何ですか？」

それに菅野は答える。
菅野「決まってんだろ！
　どっから来たかわかんねえ変な奴らに好き勝手やられてムカつくじゃねえか！」
ひかり「フフッ、管野さんっぽいですね」
その答えは菅野らしいものだった。
菅野「だがな！その為には強くならなくちゃいけねえ！今よりもっともっとな！」
ひかり「ええっ!?管野さんは今でもすごく強いじゃないですか！」
菅野は今の状態でも平均以上と言えるほど強いがまだ不満だった。
菅野「ダメだ！クルピンスキーやマントイフェル、パットの方がずっと強え。
　けど、絶対俺は奴らより強くなって、ネウロイを全滅させてやる！一秒でも早くな！」
菅野はクルピンスキーやマントイフェルに引け目を感じていた。
マントイフェルは菅野よりも射撃も何もかも一回り以上上である。
パットはあのネウロイの攻撃を全て避けてあっという間に処理していた。
それと比べれば菅野はまだ未熟だった。
するとひかりが手を挙げて宣言する。
ひかり「はい！私も一緒に頑張ります！」
菅野「ばーか。お前の力なんて当てにしてねえよ」
そういうと菅野は歩いて行ってしまう。
それにひかりは
ひかり「いーっだ！」

第27話：ペトロザボーツク上空

ヘプナー「なに？ペトロザボーツク近郊に大型ネウロイ？
　砲兵部隊は？」
翌朝早朝、ペテルブルクのペテルブルク作戦軍の司令部にペトロザボーツク近郊の部隊から連絡が届いた。
報告を受けたヘプナーはその当該地域の砲兵部隊をトレスコウに問い合わせる。
トレスコウ「すでに待機済み。
　高射砲部隊ではすでに８５ミリ魔導徹甲弾が１５００発備蓄してありますからそれを使って迎撃するとのことです。」
ヘプナー「それは最終手段だ。
　先に５０２に叩かせろ、それとラヨシュ君を召喚してくれ」
トレスコウ「は、分かりました。
　ラヨシュ中将に連絡してきます。」
ヘプナーはこのネウロイを５０２に任せることにした。
ただ念を入れて彼は第８８砲兵軍団の司令官で砲兵の専門家、ペテルブルク作戦軍の砲兵の指揮者ラヨシュ中将をペテルブルクに召喚することにした。

軍司令部からの（ヘプナーは５０２に対する指揮権を持っていない（ベルザーリンはペテルブルク管区の軍司令官なので５０２に対する動員などの権限は持っていた）ので総司令部経由）命令により５０２からサーシャ、パット、ポー、菅野、バーティ、二パ、ロスマン、ひかり、下原、ジョゼが出撃した。
出撃して二パは菅野の様子がいつもの違うことに気が付く。
二パ「今日の菅野、少しピリピリしてない？」
ひかり「一秒でも早くネウロイを倒したいんですよ！」
二パ「何で？」

パット「まあ元気があるのはいい事だが突出しすぎるなよ」
ひかりとパットは昨日の件を知っていたためなんとなく菅野の気持ちは分かったがパットは菅野が突出することを心配していた。
突出しすぎると援護ができなくなり自滅してしまう。
軍隊とは個人戦ではなく集団戦であり連携とコミュニケーションこそが勝利の鍵である。
するとサーシャが菅野に注意する。
サーシャ「管野さん。新型のユニットにも慣れたからって、あまり無茶しちゃだめよ」
菅野「ああ。わーってるって」
サーシャの注意に菅野は答える。
すると下原と双眼鏡でネウロイを探していたバーティがネウロイを見つける。
下原「ネウロイ確認！」
バーティ「まだ向こうはこちらに気が付いてないみたいだ、動きはない」
二人の報告に最初に菅野が反応する。
菅野「管野一番！出る！」
菅野は先頭に立ち突撃する。
するとネウロイはそれに気が付き向きを変える。
サーシャ「みなさん！距離を取って！」
菅野「先手必勝！このまま突っ込む！」
それに気が付いたサーシャは一旦距離を取るよう指示するが菅野は無視して突っ込む。
するとネウロイは激しい攻撃を行う。
それにシールドを張るがその攻撃は桁違いだった。
ポー「なんだこりゃ！坊の岬の時よりもすごいぞ！」
パット「ああ！アルザスのアルマーニュの対空砲火とも桁違いだ！」
パットとポーはそれぞれアルザス地方で食らった対空砲火や坊の岬沖海戦の日本艦隊の対空砲火と比べる。

するとひかりが攻撃のエネルギーに耐えられず弾き飛ばされた。
ひかり「う…きゃあっ！」
二パ「ひかり！」
菅野「ったく…何やってんだあいつは！」
それに菅野は呆れるがこの攻撃に他のウィッチも動けなかった。
下原「蜂の巣をつついたみたい！」
ジョゼ「これじゃあ攻撃する暇が無いよ！」
バーティ「このままじゃジリ貧だ！」
ネウロイの攻撃に全員が全身を阻まれていた。
するとロスマンが経験からあることに気がつく。
ロスマン「この攻撃パターン…もしかしたら！」
ロスマンは上昇して攻撃する。
ロケットはネウロイの後部に直撃、コアが露出した。
ロスマン「やっぱり！コアだわ！」
バーティ「あのネウロイ、コアを守る形で攻撃していたのか」
ニパ「ロスマン先生、さすが！」
ネウロイはコアを守る形で攻撃していた。
それを見ると菅野とサーシャが突撃する。
サーシャ「管野さん！」
菅野「おう！任せろ！」
それにネウロイは激しい攻撃を浴びせる。
ポー「サーシャ！戻れ！」
サーシャ「管野さん！一旦距離を取って！」
菅野「問題ねえ！このままいける！」
サーシャ「管野さん！」
ポーが二人が突出しすぎていることに気が付き戻るよう言うが菅野は無視して突進する。
　すると突然ネウロイが攻撃パターンを変えエネルギーを中央に集中するとそれを菅野めがけて撃ち込んだ。
　その攻撃に菅野はシールドを張るがエネルギーに押され後ろに押される。

間髪入れずネウロイはさらにもう一撃を食らわせようとする。
サーシャ「管野さん！」
サーシャが叫ぶ菅野は対処できない、するとサーシャが菅野を突き飛ばし菅野は攻撃を回避するがサーシャはシールドを張るも吹き飛ばされ墜落する。
サーシャ「きゃあああ!!」
ポー「サーシャ！」
サーシャが叫びながら落ちる、気が付いたポーは急降下してサーシャを捕まえ抱き寄せる。
ポーは偽装のシーツの一部を引きちぎりそれでサーシャの頭部の傷を抑えながら声をかけ続ける。
ポー「サーシャ、しっかりしろ！」
サーシャ「うっ…」
それにサーシャは呻くことしかできない重症だった。
パット「不味いぞ…こちらパット！
指揮官負傷！作戦中止！医療支援を要請！
ジョゼ、ひかりはポーを支援、ロスマン、下原、バーティは離脱を支援しろ！」
パットは咄嗟に現場の先任が自分と判断、各自に対処を指示する。
作戦は指揮官たるサーシャの負傷により中止となった。

ヘプナー「なに!?失敗した!?負傷者1名、分かった。
ラヨシュ君の出番のようだな、彼は今どこに?」
502から作戦失敗の連絡を受けたヘプナーはトレスコウに話しかける。
ヘプナーはペテルブルクに向かっているはずのラヨシュと連絡を取ろうとする。
トレスコウ「ラヨシュ中将は先ほどヴォルホフの司令部を連絡機で発ったとのことです。」
ヘプナー「そうか、彼に連絡できるか?」
トレスコウ「ええ、できます」

ペテルブルクの東の上空１２０キロ付近、そこを一機のシュトルヒによく似た飛行機、アントノフＯＫＡ―３８アーイストが飛行していた。

パイロット「中将、ペテルブルクから無線です」

「分かった」

パイロットからの報告を受けたハンガリー軍の軍服を着て中将の階級章をつけた将軍が返事する。

ラヨシュ「こちらチャタイ・フォン・チャタイ・ラヨシュ中将、ペテルブルクどうぞ」

ヘプナー『Ｓｚｉａｓｚｔｏｋ、ラヨシュ君。ヘプナーだ。』

ラヨシュに連絡したのはヘプナーだった。

彼はドイツ訛りのマジャール語で挨拶する。

ラヨシュ「グーテンターク、ヘプナー大将。小官に何用ですかな?」

ヘプナー『５０２が攻撃に失敗した、君が５０２と砲兵部隊を指揮して明日、撃破しろ』

ラヨシュは流暢なドイツ語で挨拶し用件を聞く。

用件は５０２が撃ち漏らしたネウロイを始末しろと言うものだった。

だがラヨシュはいわば砲兵一筋の人間である、航空部隊の指揮など一回もしたことはなかった。

ラヨシュ「私は空軍部隊の指揮経験はありません。

どうしてもと仰るならやりますが空軍は誰が?」

ヘプナー『ジャベール大尉にやらせる。彼は若いが優秀だ。

５０２のウィッチにしておくのは勿体ない。

できることならうちの幕僚に加えたいぐらいだ』

ラヨシュは懸念をヘプナーに伝え空軍側の指揮官を要求する。

そこでヘプナーは５０２のパットの名前を出した。

ラヨシュ「分かりました、いいでしょう。パイロット、行き先変更だ。

プルコヴォじゃない。５０２だ」

パイロット「分かりました。５０２に向かいます。」
機体は旋回してプルコヴォではなく市内の５０２に向かった。

――――――――――

それから数十分してサーシャはペテルブルクの病院に担ぎ込まれた。
サーシャの怪我にリョーニャは内科医であるため手当てはできず他のウィッチ同様見ているしかできなかった。
ポー「クソ！おい菅野！」
突然後ろで黙っていたポーが声を荒げて菅野につかみかかる。
ポー「お前の責任だ！お前が上官の指示に従い動いていればサーシャは怪我しなかった！
　このろくでなしが！」
サーシャが怪我したことにポーは怒り狂い菅野につかみかかっていた。
ポー「おいジャップ！なんか言え！」
そしてポーの右手が腰のホルスターからレジスタード・マグナムを取り出す。
それを見た瞬間、パットは両腕を掴み拳銃を強引に取り上げる。
パット「ポー、これ以上はするな。
　頭が冷えるまで自室に閉じ込めておけ」
バーティ「分かった」
パットはポーを止めバーティにポーを事が収まるまで閉じ込めるよう指示する。
ポーはバーティに連れられて自室に連れていかれた。
パットはマグナムの弾を抜きタバコを吸おうとする、すると聞きなれないエンジン音が聞こえ窓から外をのぞくとＦｉ１５６に似た機が上空を通過して５０２の方に向かった。

――――――――――

その日の夕食、テーブルはマントイフェルだけでなくサーシャの席

とポーの席も空いていた。
ポーはパットの独断で謹慎処分としていた。
だがその代わりハンガリー軍の軍服を着た将軍がいた。
ひかり「あのーその方は？」
ひかりは代表してラルに聞く。
ラル「ああ、第８８砲兵軍団司令官のチャタイ・フォン・チャタイ・ラヨシュ中将だ」
ラヨシュ「チャタイ・ラヨシュだ。
よろしく頼むよ御嬢さん方」
二パ「あの、なんで陸軍の人が？」
二パはなぜ陸軍の将官が５０２にいるのか聞く。
それにラヨシュが答える。
ラヨシュ「先ほど、私にヘプナー大将から『５０２と砲兵部隊を指揮しペトロザボーツクに接近中のネウロイを撃破せよ』と正式な辞令が下った。
その件で作戦中は私が５０２を指揮することになった。
とはいっても私は砲兵畑の人間だから航空系はからっきしだからあまり介入はしない。」
ラル「ラヨシュ中将が指揮するという名目だが実際は変わらず私が指揮を執る。」
ラヨシュが作戦の指揮官となり指揮監督を行うがラヨシュは直接は介入する気はなかった。
ラヨシュ「では早速だが作戦について説明する。
私が指揮するのは高射砲戦闘団ラヨシュと５０２を糾合した統合戦闘団ラヨシュ、装備は８５ミリ高射砲３９門と４０ミリ高射機関砲３０門だ。
作戦は今日の夜のうちにネウロイの真下に高射砲部隊が移動、翌日５０２の攻撃と同時に砲兵部隊が下から攻撃を行う。
幸い天気予報によると今日の夜と明日の明け方は霧が発生するとのことだ、その上あの真下は森林地帯であるため偽装は容易だ。

ただ明日の昼頃には雲が晴れてしまう、よって作戦は明朝１０００時だ。

作戦名はルーアだ。」

ラヨシュは作戦を説明した。

作戦は大胆なものでネウロイの下が火砲の隠蔽が容易な森林地帯であること、さらに夜と朝に霧が出るという条件を利用し真下と上空から挟み撃ちにする作戦だった。

作戦名はルーアと名付けられた。

ひかり「ルーア？」

バーティ「アッティラの叔父の名前だ。」

ひかりはルーアが分からず聞く。それに歴史に詳しいバーティがアッティラの叔父の名前だと説明する。

ルーアはハンガリー人の先祖とも言われているフン族の王であり伝説的なアッティラの叔父でアッティラの前の統治者だった。

ラヨシュはこの偉大なる先祖の名をこの作戦に冠していた。

ラヨシュ「で、この作戦に参加するウィッチだが、指揮官はジャベール大尉、君がやってくれ」

パット「分かりました中将閣下、お引き受けいたします。

ただ参加するウィッチはこちらの人選でよろしいでしょうか？」

ラヨシュは指揮官にパットを選んだ。

パットはそれを引き受けた。

現時点でラルは出撃できず、ポーは謹慎中である以上先任士官は彼だった。

ラヨシュ「いいだろう、人選は君に任せる。」

ラヨシュは人選をパットに任せた。

パットは少し考えると人選を伝える。

パット「分かりました。

では、そうですね。

まずクルピンスキー、バーティ、菅野、中尉は全員出撃しろ。

先任はクルピンスキー、次にバーティ、菅野だ。

それにジョゼ、二パ、下原、ロスマンそれに雁淵もだ。
全員出撃しろ。」
パットは人選を伝える。
とはいってもほぼラルとリョーニャ、パット、サーシャ以外の全員を出撃させるものだった。
パット「以上だ。参加するものは明日の出撃まで体を休めてくれ、明日は早いぞ」
パットは人選を発表すると休むよう伝えた。

第２８話：ウィッチ　あるいは（無謀がもたらす予期せぬ奇跡）

翌日早朝、北極圏に近いペトロザボーツク周辺はこの時期夜明けは１０時過ぎだった。
そして地表近くには伸ばした手すら見えない程濃い霧が立ち込めていた。
この霧と闇の中を数十門の大砲と数百人の兵士が動いていた。
砲兵Ａ「中隊長、各砲陣地設営完了。
　砲撃準備完了しました。」
中隊長「分かった。こちらアッティラ、全門射撃準備完了。
　いつでも射撃可能です」
兵士から一晩かけて火砲と陣地の設営が完了したと言う報告を受けた中隊長は野戦電話で司令部に報告する。

通信兵Ａ「各中隊射撃準備完了、いつでも射撃可能です。」
通信兵Ｂ「５０２、先程出撃とのことです」
通信が送られたのはペトロザボーツクにあった戦闘団ラヨシュ司令部だった。
通信兵は指揮官のラヨシュに報告する。
ラヨシュは報告を受け時計を見る、時計はまだ9時を指していた。
ラヨシュ「そうか、少し早いな。まあいい。」
参謀「閣下、現地より霧が濃すぎてネウロイを確認できないと報告がありました。
　もう少し霧が晴れてから行うべきかと具申します」
すると参謀の一人が現地の霧の濃さを理由に作戦の一時延期を求めた。
現地の地表付近の視程は６００ｍほどしかなく地表からはネウロイを確認できなかった。
ラヨシュ「作戦は延期しない。

この機を逃せばいつやるのかね？
あのネウロイはここで叩き潰す。
もし高射砲部隊と５０２が撃ち漏らしたならば列車砲旅団カレリアでもって叩く。
いいな？」
参謀「は、はい」
ラヨシュはもし高射砲部隊と５０２が逃した場合に備えペトロザボーツクに列車砲旅団カレリアを待機させていた。
列車砲旅団カレリアの装備は
〈第Ⅰ大隊〉
・クルップ２８センチ列車砲Ｋ５「シュランケ・ベルタ」２門（第１中隊）
・２８センチ列車砲「シュヴェーレ・ブルーノ」２門（第２中隊）
・ガリア製２４センチ列車砲８門（第３、４中隊）
〈第Ⅱ大隊〉
・３０５ミリ列車砲ＴＭ―３―１２　２門（第１中隊）
・１８センチ列車砲ＴＭ―１―１８０　４門（第２中隊）
・４０センチ列車砲Ｍ１９１５／１６　２門（第３中隊）
・２８センチブリンク列車砲　２門（第４中隊）
〈第Ⅲ大隊〉
・１５センチカネー列車砲　８門（第１、２中隊）
・１３センチ列車砲Ｂ―５７　８門（第２、３中隊）
という極めて強力な物でありこの内第Ⅱ大隊の列車砲がペトロザボーツク郊外に射撃陣地を設営、射程に入り次第攻撃可能だった。
残りは別のところにいたが戦艦クラスの火砲である３０５ミリ列車砲や４０センチ列車砲、２８センチ列車砲、巡洋艦クラスの１８センチ列車砲がこれだけ集まれば流石のネウロイも耐えれる筈がなかった。

パット「作戦開始まで残り１５分、最終確認をするぞ。
クルピンスキー、菅野、二パ、雁淵が後方に回り込み退路を遮断、同時にネウロイの動きを封じる。
残りが前方から攻撃、前後から攻撃を行い拘束、それと同時に下の高射砲が攻撃する。
もし失敗した場合、ネウロイを指定されたキルゾーンへ誘引、そこで列車砲部隊の攻撃で撃破する。」
作戦開始１５分前、ペトロザボーツク上空に到達したパットは夜明けの薄暗い中最終確認を行う。
後方に回り込む部隊はクルピンスキーが指揮し素早さが優先された。
すると突然通信が入る。
通信兵『アッティラよりブレダ、アッティラよりブレダ』
パット「こちらブレダ、アッティラどうぞ」
通信を入れたのは砲兵部隊からだった。
通信兵『ブレダ、ここからじゃネウロイが確認できない、射撃観測を要請する』
パット「了解した」
砲兵部隊はネウロイを確認できないため５０２に情報を求めた。
それだけ地表付近の霧は濃かった。
パットは無線をつけながら下原にネウロイを確認できるか聞く。
パット「下原、ネウロイを確認できるか？」
下原「はい！３０キロ先に確認。
位置、Ａ１２、ｘ５、高度３５００ｍ」
パット「了解、こちらブレダ、目標エイブル１２、エックスレイ５。
高度３５００ｍ」
通信兵『アッティラ、了解。』
下原が確認した位置をパットは無線で砲兵部隊に伝える。
砲兵部隊は連絡を受けるとネウロイに砲門を向ける。
パット「０９５５、そろそろ作戦位置につけ。
あと５分で始まるぞ」

「「了解」」
パットが時計を確認し時間が迫っていることに気が付き部隊を二つに分ける。
そして5分後、作戦開始の合図として地上より信号弾が打ち上げられる。
その直後、ネウロイに真下から砲撃を浴びせ始めた。
ネウロイは魔導徹甲弾を撃ち込んでくる52—K85ミリ高射砲により下半分が崩壊し始めるが地上に向かって攻撃する。
だが一晩のうちに強固な陣地と巧妙な隠蔽、さらに霧により攻撃は全く当たらず森の木を焦がしたりするだけだが一部が木立にあたり曳火砲撃のような役割を果たし兵士に死傷者を発生させる。
そしてネウロイが地上に気を取られているうちにパット達は空から攻撃を開始する。
パット「攻撃開始！」
パットは右手で合図するとそれと同時にロスマンのフリーガーハマーが放たれさらにジョゼと下原、パットが銃撃を加える。
ネウロイは下への攻撃をやめるとパット達へ攻撃を開始した。
同時に後方からはクルピンスキーたちが忍び寄っていた。
クルピンスキー「始まったみたいだね」
菅野「行くぞ！」
ひかり「はい！」
後方からクルピンスキーたちは接近するがネウロイは攻撃してこなかった。
ひかり「ホントだ。全然撃ってこない」
二パ「コアの位置も分かっているし、これなら行けるね！」
菅野「ああ！速攻だぜ！」
クルピンスキー「ああ、早く帰ってマントイフェルの看病しなくちゃね」
それをいいことに銃撃する。
ネウロイは反撃こそするがそれは前方や下方向に比べても少なかった。

する突然ネウロイが分裂した。
菅野「なにっ!?」
パット「不味いぞ!こちらブレダ!ネウロイが分裂した!」

通信兵「なんだって!中将!ネウロイが分裂しました!」
ラヨシュ「なんだと…高射砲部隊の砲撃中止!
　目標分裂したネウロイ!」
ネウロイが分裂したという連絡を受けたラヨシュは即座に目標の変更を指示した。
だがそれに砲兵部隊からの通信が待ったをかける。
通信兵「閣下、霧が濃すぎて目標を発見できないとのことです。」
ラヨシュ「気象予報官!霧はいつ晴れる?」
霧が濃すぎて真上に居るはずのネウロイさえ確認できないのだ。
ラヨシュは気象予報官に霧が晴れるかを聞く。
気象予報官「今日は風がありますし気温もある程度上昇しますから大体３０分ほどでネウロイを確認できるぐらいには…」
ラヨシュ「分かった、５０２、ネウロイをキルゾーンへ誘引できるか?」
パット『こちらブレダ!攻撃激しく難しい。
　ここで拘束することさえ不可能かと』

分裂、さらに変形したネウロイは５０２に激しい攻撃を浴びせた。
分離したもののうちパット達に襲いかかった物は一体ずつ撃破されていたがすぐに再生していた。
それにより誰も動くことができずその間にネウロイは逃げ始めた。
ラヨシュ『５０２、ネウロイをキルゾーンへ誘引できるか?』
パット「こちらブレダ!攻撃が激しく難しい。
　ここで拘束することさえ不可能かと」
ラヨシュの質問にもパットは不可能と答える。
それだけ激しく動けなかった。

バーティ「おい！どうするんだ！弾も体力も持たんぞ！」
パット「分かってる！コアさえ破壊できればいいが…
　コアさえ…それだ！」
するとパットが何かを思いついた。
パット「雁淵、菅野、合流してくれ。
　雁淵、接触魔眼を使う機会が来たぞ」
ロスマン「パット大尉！なぜあなたがそれを知ってるの！」
下原「接触魔眼？」
ジョゼ「何それ？」
パットは雁淵の接触魔眼を使う機会だと決断する。
だがロスマンはなぜパットがそのことを知っているのか、下原とジョゼはそもそも事情を知らなかった。
パット「もうこうなった以上、ある程度のリスクを冒すしかあるまい。
　どうする？」
バーティ「恋と戦争ではあらゆる手段が正当化される、か」
パット「雁淵、どうする？お前が反対するならこの作戦は無しだ。」
　もし失敗したら、俺をぶち殺しても構わん」
パットはこの状況を打開するにはある程度のリスクを冒すしかないと判断した。
パットの判断にひかりはすぐに答えた。
ひかり「やります！やらせてください！」
パット「よし！バーティ、ここは任せた」
バーティ「了解、借りは返してもらうぞ」
パット「タバコぐらいならやるぞ」
ひかりの決断を聞くとパットはバーティに現場を任せ誤認を使いネウロイのすぐそばを掠めてひかりたちに合流する。
合流するとパットに二パと菅野、クルピンスキーが説明を求める。
菅野「おい！接触魔眼ってなんだよ！」
二パ「どういうこと？」
クルピンスキー「どういうことか説明して貰おうかな？」

パット「雁淵の固有魔法はネウロイに触ったらコアが分かるんだよ。
　危険だが今の状況の最善はこれしかない！」
パットが３人に説明する。
菅野「触ったらって死にてえのか！」
パット「戦争にはリスクはつきものだ！
　ここで全員死ぬか！戦死のリスクを冒すか！どっちを賭ける?!」
菅野「分かったよ！やればいいんだろやれば！」
パット「そうだ！クルピンスキー、二パ、後方から援護！
　菅野、雁淵は俺に捕まってろ！」
菅野を説得したパットは手短に指示すると二人の首根っこを強引に掴んで突進する。
菅野「おい！放せ！俺はひとりで行ける！」
パット「うるせえ！昨日のアレ食らいたくなかったら俺に捕まって雁淵みたいに口を閉じてろ！
　舌噛むぞ！」
菅野が抵抗するがパットはぜったに離さない。
その横で同じく引っ張られているひかりは舌を噛まないよう口を閉じていた。
クルピンスキー「二パちゃん、３人を援護しないとね」
二パ「そうだねクルピンスキーさん！」
後方から陽動として二パとクルピンスキーが援護する。
ネウロイは二人に攻撃を集中するがその横で拘束で近づいてくるパットには全く攻撃が当たらなかった。
菅野「お、おい…ネウロイはどこに向かって撃ってるんだ?」
パット「さあ?ただ少なくとも俺たちを敵と認識してないぞ。
　きっと雲か何かだと思ってるんじゃないか?」
パット達は攻撃そのものが飛んでこない中ネウロイに接近する。
パット「さてとこのぐらいでいいだろう、雁淵、気を付けてネウロイと握手してこい！」

ネウロイのそばまで来るとパットは二人を放して背負っていた銃を向け至近距離から銃撃して援護する。
ひかりはパットから離れるとネウロイの上部に触れコアを確認する。
ひかり「あそこだ！」
ひかりは見つけた場所を銃撃する。
するとコアが露出する。
二パ「あった！」
クルピンスキー「本当にあったんだ」
それを見て二パとクルピンスキーが驚く。
するとまたネウロイは分離し始めた。
二パ「あっ！また分離した！」
菅野「へっ、場所が分かればこっちのもんだ」
パット「全員、菅野を援護しろ」
二パが驚くが菅野は威勢よく言うとネウロイに向け突撃する。
菅野「うおおおおおおお!!くたばれえええええ!!剣一閃!!」
菅野は叫びながらネウロイの間を縫って飛びネウロイのコアに殴り掛かり破壊する。
その瞬間、ネウロイはすべて破片となった。
パット「ふう、終わったか。
こちらブレダ、ネウロイ撃破。
ルーア作戦完了」
作戦が終わるとパットはポッケからタバコを取り出し吸い始めた。
ラヨシュ『そうか、よくやったパット君。君にはマリア・テレジア指揮官十字章を推薦しよう』
パット「閣下、ならば私は雁淵軍曹と菅野中尉を推薦しますよ。」
無線でラヨシュとジョークを飛ばしていると突然後ろから声が聞こえて振り返る。
そこには
「うわあああああ！」
クルピンスキー、二パ、菅野、ひかりがユニットのトラブルを起こ

して墜落していっていた。
パット「あー、こちらパット。ブレイクと雁淵が落ちた。」

サーシャ「クルピンスキーさん!菅野さん!二パさん!ひかりさんはそこに正座!」
リョーニャ「あー、サーシャ、あまり無理するなよ。
まだ頭部の外傷は完治してないんだから」
ポー「ああ。リョーニャの言うとおりだ。無理しないでくれ」
帰投後ユニットを壊した4人はいつも通り正座させられていた。
頭部の怪我が治っていないとはいえそれでも元気なサーシャは4人に怒っていた。
クルピンスキー「いや~これでひかりちゃんんもすっかりこの502そしてブレイクウィッチーズの仲間入りだね」
ひかり「ホントですか!?やったー!やったやったー!」
クルピンスキーがブレイクの仲間入りだというとひかりは無邪気に喜ぶ。
それにバーティが突っ込む。
バーティ「喜んじゃダメだろ。
まあ正座してる間は本でも読んだらどうだ?」
ひかり「そうですね…あ、バーティさん。
後で勉強教えてもらえませんか?」
バーティ「ん?勉強?別にいいがどうしてまた急に」
するとひかりが思い出したかのように勉強の話をする。
それにバーティは聞き返す。
ひかり「この間、パットさんから勉強しなさいって言われてバーティさんが教師だったって聞いたんでおしえてもらえないかなぁ…って」
バーティ「なんだそんなことか。
別に構わんよ。
夕食後に1、2時間程度、教科は俺は歴史ぐらいしか教えられないが教えてやるよ」

ひかり「やったー！ありがとうございます！バーティさん」
ひかりはバーティから勉強を教えてもらえることに喜ぶ。
その日以降ひかりはバーティから勉強を教えてもらうことになった。

第２９話：ヘルシンキ会議

ヘルシンキ、このスオムスの首都にある軍司令部のタバコの紫煙の漂う一室にヴァトゥーチン、そして北方総軍のお偉方と呼ばれる軍人が揃っていた。

ニコライ「で、マルシャルマンシュタイン。

この作戦を本気で実行する気ですかな？」

マンシュタイン「ええ、ヴァトゥーチン大将。

なのでオラーシャ一と名高い機動戦の名手たる貴官の意見を聞きたい」

ソファに腰掛けタバコを薫せながら書類を確認するヴァトゥーチンが目の前に立つカールスラントの軍服を着た元帥、即ち北方総軍最高司令官エアハルト・フォン・マンシュタイン元帥に聞く。

それにマンシュタインは書類に書かれた作戦「フレイア」についての意見を聞く。

ニコライ「そうだな、どうだ？ヘプナー、トレスコウ、ベルザーリン。」

意見を求められたヴァトゥーチンは隣で同じように書類を確認していたヘプナーたちに意見を聞く。

最初に老眼鏡をかけて確認したヘプナーが問題点を指摘する。

ヘプナー「そうですな、まず準備期間が極端に短い。

事前偵察も偽装も陽動もなしですか」

書類によれば準備期間は僅か１０日、それもこの日も含めてである。

その期間ではまともな準備など出来るはずもないのである。

作戦、ましてや攻者三倍の法則が適用される攻勢では事前準備は重要である。

事前偵察や兵力の隠蔽、欺瞞作戦や陽動によって敵戦力を分散させる、これは攻勢では当たり前の行動である。

ノルマンディやエル・アラメインでも連合軍は大規模な欺瞞作戦を行ったしウラヌス、バグラチオン、ヤシ・キシニョフ攻勢などのソ連

軍の攻勢などでも、ましてやソ連軍ではかなり早い段階からマスキロフカ、即ち戦力の隠蔽というのは積極的に研究されて来た課題であり攻勢でやるのは当たり前であった。

事前偵察も「敵がどこにどのぐらいの数がいてどのような状況でどのような装備をしているか?」、「脅威となり得るか?」というのは戦場の霧を減らすために重要でありこれを疎かにするとほぼ１００％作戦は失敗した。

この重要な点が作戦段階で欠落していた。

次に切れ者たるトレスコウが意見する。

トレスコウ「次に作戦そのものですね。

８０センチ列車砲の徹甲弾で巣を破壊する、ですがそもそも当たるのですか?

当たるほどの弾が用意できるのですか?当たるまで何時間使う気ですか?

一発発射後の準備に２０分、仮に１０発発射するなら少なく見積もって１８０分、３時間もかけるのですか?

３時間敵の攻撃範囲内で作戦のキーたる兵器を暴露し続ける、作戦としてのリスクが高すぎます」

トレスコウそもそもの命中率、そしてかかりすぎる時間に疑問を呈した。

当たり前だが砲弾は百発百中ではない、一般的に戦場で砲撃がピンポイントの移動する目標に当たる確率というのは非常に低く１％あればいい世界である。

確かに実戦ではスリガオ海峡海戦で米海軍の戦艦ウェストヴァージニアが夜間、距離2万mで西村艦隊に対して8%という命中率を叩き出しているがこれはそもそも高い精度を誇るレーダー管制射撃であったからであり光学射撃の場合さらに低いのである。

アンツィオで列車砲レオポルトとロベルトが初弾でアンツィオの燃料集積所を破壊したことがあったがあれはほとんど例外的とも言える事例である。

なので大戦期の砲兵運用はウィリアム・テルではなくロングボウ隊

列であった。
　にもかかわらず列車砲でコアを破壊しろなどと言うのは拳銃で狙撃をしろなどというほど無茶苦茶な要求だった。
　さらにトレスコウは作戦にかかる時間にも注意を向けた。
　かの偉大なるアレクサンドル・スヴォーロフはかつて「戦争において金銭は尊い。人命はより尊い。それよりもなお時間は尊い」と自著の中で述べている。
　その言葉通り彼は速攻、機動、奇襲を重視した。
　戦争において最も平等で貴重で気まぐれな味方であり資源というのは時間である。
　時間は全てに対して平等であり一度失えば二度と戻らない資源であった。
　そしてこの作戦では一発撃つごとに２０分もの時間が必要だった。
　これでは一時間に3発撃てればいい程度というのはふざけてるにも程があった。
　トレスコウはこの作戦で「敵の攻撃範囲内で」、「数時間もの間」、「極めて巨大な火砲が」、「貧弱な防備の元」、「動かないで晒される」という状況に疑問を持っていた。
　これでは飛んで火に入る夏の虫そのものである。リスクが高いなどと言うレベルではないのだ。
　ベルザーリン「その上この二つの列車砲の偽装や隠蔽、撤退などに関する検討が一文字も見当たらない。
　　更にはもし仮に両方の列車砲が破壊、又は発射不能になった場合の対応について何も書かれていない」
　そしてベルザーリンは列車砲の偽装、隠蔽、撤退、さらには両方の列車砲が発射不能になった場合の作戦行動に関する検討に関して一文字も書かれていないことを指摘する。
　ドーラというは極めて巨大である。
　巨大である以上ある程度は偽装を行うのが常識的思考である。偽装というのはあながち無下にできるものでもなく簡単な、それこそ適当に白で塗るだけでも積雪下では十分な迷彩効果を出せた。

だが書類上2問の列車砲は一門はデュンケルグラウ、もう一門に至っては塗料不足を理由に下地のレッドプライマーのままという無茶苦茶度であった。

しかも恐ろしいことに作戦に参加するカールスラント軍の車両の全てが1両たりともデュンケルゲルプにも、上から白色の冬季迷彩も、シーツで装甲板を覆うことさえしていなかった。

史実では各国共に車両塗装の色に関しては大戦中期以降迷彩効果を重視していた。

例えばソ連軍は戦前塗装色としてフェイスグリーン（結構使われてるのになぜか公式な塗料リストには載ってない謎の色）と3ＡＵという迷彩色が使われていたが3ＡＵには特殊なフィルターを通して見ると目立ってしまうという特性があったためソ連軍は一般的にロシアングリーンとして知られている4ＢＯに塗料を更新している。

ドイツ軍も戦前、特にヴァイマル共和国軍時代には後の3色迷彩に似た迷彩が施されいたし再軍備後も開戦からしばらくするまで車両はデュンケルグラウとブラウの迷彩（ただ明度の差が非常に小さくモノクロ写真では単色に見えてしまう）が使われていた。

その後車両の生産の都合上開戦して少ししてからグラウの単色に切り替えたがその後作戦範囲が北アフリカまで広がると北アフリカ用に急遽ドイツ軍はありもののＲＡＬ（ドイツの規格。ドイツでは今でも多くのの塗料がこの規格で規格化されてる）の中から迷彩色を制定、さらにこれが41年の後半以降東部戦線にも広がり42年ごろには結構な数の車両がゲルプとグラウの迷彩を施していた。

そして43年の2月にドイツは車両塗装の大改革を行い車両塗装をグラウからデュンケルゲルプとし現地でデュンケルグリュンとロートブラウによる迷彩を施すと規定を変更、この結果ドイツ軍は43年以降車両の塗装が一新された。

また末期になった44年10月には使用塗料を変えずにベースをゲルプからグリュンに変更、さらに迷彩塗装を現地ではなく工場で施すようになり戦局が悪化するとブラウに変わってレッドプライマー色が迷彩に使ってもよいと規定が変更されたりするなど非常に細か

い変更が相次いだ。
　そのせいで大戦末期には迷彩塗装は無茶苦茶になりレッドプライマーとグレープライマーの上から適当にゲルプを吹いただけというような車両まで現れるようになった。
　それでもドイツは戦局が決定的となり塗料を溶かすガソリンさえ事欠くようになっても迷彩塗装をし続けていた。
　だがこの世界の軍隊はどうも「迷彩」という概念に鈍いようでこれ関連の規定が更新されず未だに車両はグラウの車両が多く冬季迷彩をしていない車両が山ほどいた。
　さらにベルザーリンはもし両方の列車砲が発射不能、例えば戦闘での損傷、機械的故障、誤操作、外部的要因による故障などで発射不能になった場合の対処に関して何一つ書かれていなかった。
　こういった可能性というのはゼロではない、むしろ極めて過酷な、それこそ極限の環境である北極圏で運用するとなれば絶対に考慮しなければならないのはずである。
　北極圏は精密な機械が使えるような地域ではない、なぜなら極めて寒いのだ。
　そのため故障する可能性高い、なのでもし砲撃のタイミングで故障するという可能性は十分考えられたがそれに関する検討や指針などは一言もないどころか故障の可能性にさえ一言も触れられていなかった。
　さらには撤退に関しても触れられていない、作戦の基本の一つである「あらゆる可能性を検討する」という点が欠落していた。
　ニコライ「そうか、総論すればこの作戦は〝作戦の名を借りた何か〟として評価する。
　　私ならこの作戦を書いたものを銃殺刑に処すかシベリアに送るね。」
　３人の意見から彼はフレイア作戦を「作戦の名を借りた何か」と評価した。
　ここまで問題点が多い上にその洗い出しすらされていないのは問題どころではなかった。

司令官や参謀の資質さえ疑われても仕方ないレベルの雑な作戦だった。

マンシュタイン「う、だがもはや我々はこの作戦に賭けるしか…」

トレスコウ「先日、うちからスピードバード作戦の原案を提出しましたが？」

マンシュタイン「あの作戦は不可能だ。

あんなので巣が破壊されるとは到底思えん」

マンシュタインは弁解しようとするがトレスコウが先日提出したスピードバード作戦の存在を指摘する。

ところがマンシュタインこの作戦を「不可能」と断じていた。

スピードバード作戦はいわゆる縦深作戦でありネウロイに対して圧倒的砲兵火力で殲滅するというものであり多少の損害は無視できる上に大打撃を与えることが可能だった。

だが巣への決定打に欠けることは否めず彼ら自身それを承知していた。

そしてとうとうヴァトゥーチンは怒り始めた。

ニコライ「はあ、マルシャルマンシュタイン、貴官とその部下は恐ろしいほどの無能なようだ。

いいか貴様ら、貴様らのその愚鈍な脳味噌のせいでこの戦争は西ヨーロッパの破滅という結果になったんだ！分かってるのか！

もし貴様らが硬性防御と陣地固守、撤退禁止、移動禁止を命じていなければ我々は３９年に戦争を終わらせていた！

もし貴様らが陣地固守に固執しなければカールスラントを失わずそのまま逆襲していた！

もし貴様らが早急なマジノ線の放棄とガリアでの機動防御戦を行なっていたらガリアは落ちなかった！

もし貴様らが中央ヨーロッパ平原での機動防御戦をしていればオラーシャまで来なかった！

もし貴様らがバルバロッサで我々にイニシアチブを渡していなかったら、我々はウラルの彼方まで追いやられていた！

この戦争がこうなったのは！貴様らのその恐ろしく甘い見通しと！その恐ろしく愚鈍な頭脳！そしてそんな連中を平気で要職につける組織だ！

貴様ら全員一度辞任して士官学校からやり直したらどうだ！」

ヴァトゥーチンはこのような無能極まりない軍人を平気で要職につける組織、そしてそのような地位についた無能の作戦によりどんな目に遭ったかを挙げる。

彼らの無能怠惰の結果中央ヨーロッパを失ったと言っても過言ではなかった。

ネウロイはいわばソ連軍に近い物量戦を得意としている、それに対して連合軍はなぜか拠点の固守と硬性防御にこだわった。

結果機動防御戦に切り替える前に壊滅したり破局に至ることが続発した。

機動防御戦というのは少ない兵力でも効率的に防御をできるのである。

例えば４２年の秋から冬にかけてドイツ軍は東部戦線南翼のカスピ海からドン河に至る５００キロの戦線で側面を曝け出してしまったことがあった。

この地域に配属されたのは僅か第１６自動車化歩兵師団と特別編成司令部Ｆのみ、兵力としてはせいぜい2万人程度というような状況であり、もしここを突破されればコーカサスのＡ軍集団が根元から包囲されるという危険もある地域であった。

そしてソ連軍もそれを理解しここに第５８軍を差し向けた結果カルミュック平原において激しい機動防御戦が行われた。

ドイツ軍は圧倒的なソ連軍を機動防御で撃退し続け１０月から1月までの3か月間守り切った。

さらに第3次ハリコフ攻防戦や東プロイセン攻防戦でも前者はマンシュタインとハウサーが、後者はデッカーが見事なバックハンドブロウを行い撃退している。

北アフリカでも圧倒的兵力不足と補給不足の中ロンメルがイギリ

ス軍を苦戦させるなどの大戦果を挙げているのは有名である。
だがこの世界の連中は硬性防御にこだわり機動防御を理解せず第一次世界大戦のような戦闘を繰り返し結果中央ヨーロッパ、そして西ヨーロッパを失陥した。
そしてそのような作戦指揮を執った将軍の殆どがまだ指揮官の座についている現状にとうとうヴァトゥーチンは怒った。
だがそれがマンシュタインの逆鱗に触れた。
マンシュタイン「ほう、ヴァトゥーチン君、それは上官への侮辱かね？」
ニコライ「事実を言ったまでですよ」
マンシュタイン「そうか、時間が来たので帰るがヴァトゥーチン君、君の資質の方が問題のようだ。
フレイア作戦が終了次第君を査問会に召集しよう」
そう言い残すとマンシュタインは司令部を出て行った。
それにヴァトゥーチンは大声で叫ぶ。
ニコライ「クソが！あの無能が！
何が資質だ！貴様よりかはあるぞ！
あのゲルマンスキーのブルジョアジーが！反革命罪でぶち殺してやる！」
ヘプナー「まあ落ち着け、私だってこの作戦には同意できないよ。
私の部下をこんな雑な作戦で失いたくない」
ヴァトゥーチンの罵りをヘプナーは諫める。
ヴァトゥーチンは完全に怒り狂っていた。
トレスコウ「それより、元帥は閣下をフレイアの終了後査問会にかけると言いました。」
ベルザーリン「不味いな、閣下をクビにする気だ。」
トレスコウとベルザーリンはマンシュタインがヴァトゥーチンを解任する気だという考えに気が付き脅威を感じていた。
ヴァトゥーチンは軍事的にも政治的にも大物だった。
オラーシャ軍で大きな影響力を持ち同時にオラーシャの左翼勢力の重鎮であった。

同時に彼らを庇護し従来の勢力を隷下の部隊から排除する役割も担っていたためもし彼が解任されれば自分たちの立場さえ危うかった。

ニコライ「ああ、奴は俺をクビにする気だ。どうする？殺すか？ニコライ・クトゥーゾフは優秀だぞ」

ヴァトゥーチンもそれを理解し部下の工作員による暗殺さえ検討した。

流石にここまで過激なことをしないようヘプナーが止める。

ヘプナー「そこまで過激なことはしない方がいい。フレイアを潰すか？」

トレスコウ「そうなればペテルブルク、カレリア、東部戦線の北端が決壊します。

フレイアが失敗したうえで我々の作戦でグリゴーリを排除するのが望ましいかと」

ヘプナーはフレイア作戦を潰すことを検討するがトレスコウが影響が大きすぎると止め「フレイア作戦が失敗した上で自分たちでグリゴーリを排除する」ということを提案した。

ニコライ「あるのか？そんな作戦が？」

トレスコウ「あります。事前にフレイア作戦の内部情報を入手していたためそれとスピードバード作戦を組み合わせた作戦です。

作戦名はまだ決まっていないため仮称でカレワラ作戦と名付けてます」

そういうとトレスコウは持参した作戦書類を配る。

作戦名は仮称としてフィンランドの叙述詩からとられたカレワラ。

内容は縦深作戦とフレイアを組み合わせたもので使用兵器は火砲３０００門とされていた。

作戦はシンプルにネウロイの巣を砲撃で叩き潰すものだがそこに破城槌として列車砲を動員する点で違っていた。

また作戦では綿密な偽装と隠蔽が支持されているほか攻撃方向もネウロイの前面と両側面、さらに後方から機動梯団による攻撃も加わり包囲、２重３重の包囲網で重包囲し殲滅するというものだった。

また失敗時にはこの戦力を再編し機動防御を行い消耗を強いる内容だった。
時間も基本的に無駄が少なくよく考え
その内容を一読し3人は感想を述べる。
ニコライ「素晴らしい作戦だ」
ヘプナー「流石トレスコウ君だ。
フレイアなんかよりずっといい」
ベルザーリン「同志トレスコウ、素晴らしい」
3人は作戦を絶賛する。
そして細かい点を質問する。
ニコライ「準備にどれぐらいかかる?」
トレスコウ「およそ12日から2週間、しかもスオムスから列車砲の殆どを持ってくる必要があります。
なのでこの間鉄道路線の大半を止めます」
ヘプナー「砲兵部隊の指揮は?」
トレスコウ「ラヨシュ中将が行います」
ベルザーリン「弾薬は?備蓄は足りるのか?」
トレスコウ「魔導徹甲弾をおよそ100万発必要という試算です。
緊急輸送でムルマンに15万発、ヴァエンガとポリャールヌイに5万発ずつ、コトカに25万発、ペテルブルクとクロンシュタットに25万発ずつ、チフヴィンに10万発が備蓄済み、これをすべて使います」
ニコライ「輸送は間に合うのか?」
トレスコウ「現在あらゆる輸送手段を使い輸送中です。
現状使用量の35%が輸送済み、21%が輸送中、29%が輸送準備中、15%が輸送待機中です。
間に合います、間に合わせます」
トレスコウは3人の質問に的確に答えた。
作戦の準備は既にトレスコウの独断で行われていた。
ニコライ「そうか。だがこんな作戦がバレたら全員クビだな」
トレスコウ「分かってます、なので表向き別の作戦として扱わなけ

ればなりません」
だがこの作戦は完全な独断専行、文民統制の観点からよろしくなかった。
そこでこの作戦を外部から偽装する必要があった。
ヘプナー「そうなるとプラウダ計画の防衛作戦か？」
トレスコウ「それがいいでしょう。」
ヘプナーはプラウダ計画の作戦名に偽装するのが適役と判断するが既に北方にはコムソモリスカヤ・プラウダ作戦があった。
ただ外部の将校にはプラウダ計画の作戦名の法則は理解できていなかった。
ただ共産系のコードが付与されているだけだと思われていた。
ベルザーリン「作戦名…ソヴィエツカヤ・オケアンとかか？」
ヘプナー「ソビエトの海？この作戦に海はないから逆に注意を惹くだろ。」
ベルザーリンはソヴィエツカヤ・オケアン、ソビエトの海という作戦名を提案したが逆に注意を惹くため不適切と言えた。
ニコライ「うーむ、法則通りザリャー・ヴォストーカでどうだ？
グルジアの共産系新聞からだ」
ヘプナー「まあそれでいいだろう」
ヴァトゥーチンは作戦名としてジョージアの共産系新聞ザリャー・ヴォストーカを提案した。
そして特に反対もなかった。
ニコライ「ではカレワラ改めザリャー・ヴォストーカ作戦の準備を行い、フレイア作戦失敗時にこの作戦を行う、ということでいいな。
同志諸君、これから忙しくなるぞ」
ヴァトゥーチンが纏めると会議は解散となり将軍たちは各々司令部に戻っていった。

第３０話：連合軍北方軍総司令官を迎えて（別題：フレイア）

ひかり「あの、ポーさん。
角が１３５。の直角三角形の三角関数ってなんで虚数なんですか？」
ポー「ああ、そういうのは関数で考えたらいいんだよ。
原点を角と考えたら１３５。のｘ座標はマイナスだろ？
場合によってはｙ座標もマイナスだけど基本的にはこういう感じで考えるんだ」
４５年２月の後半、マントイフェルは一か月もの入院生活を終え５０２に戻った。
そして戻った先で見たのは勤勉にも勉強に励んでいるひかりの姿だった。
この日はポーから三角関数を学んでいた。
暇さえあれば色々聞いてきたり本を読んだり勉強したりとそれまでとは大きく違う変わりようにマントイフェルは驚いていた。
マントイフェル「なあバーティ、退院したらいつの間にか雁淵が勉強教えてくれとか言ってきたんだが、俺がいない間に何があった？」
バーティ「ん？雁淵に勉強するよう勧め続けて口説き落とした。
で、今じゃ毎日こんな感じだよ。
教師やってた頃からの経験だけど雁淵みたいな体力とスタミナのあるスポーツ好きとかは結構勉強に対する集中力とか持続力ってのが高いから向いてるぞ」
マントイフェルはバーティに事情を聞いて納得した。
またバーティは経験から雁淵のようなタイプは勉強への適性が高いことも知っていたためかなり積極的に教えていた。
マントイフェル「ふーん、で雁淵は今まで何習ったんだ？」
ひかり「マントイフェルさん、えーと、バーティさんから大まかな歴史の流れは。

今は古代史を中心にやってますね」
マントイフェル「古代史って言うとローマとかギリシャか？」
ひかり「どちらかというと中国って地域の話が多いです。」
バーティ「だって扶桑って東アジアだろ？あの地域だったら中国の文化が強いから」
マントイフェルはどこまで習ったかひかりに聞いて確認する。
それを聞いてマントイフェルは試しに彼も知っている古代中国の問題をいくつか出してみた。
マントイフェル「そうだな。じゃあいくつか問題出してみるか、中国を最初に統一した皇帝は？」
ひかり「始皇帝ですよね」
マントイフェル「正解。じゃあ中国の軍事書武経七書の中で最も著名な本として知られる孫武が著したと言われる軍事書は？」
ひかり「孫子です」
ひかりはマントイフェルの出す比較的初歩的な古代中国の問題に答える。
ここでマントイフェルは少し変わった問題を出してみた。
マントイフェル「正解、じゃあそれとよく比較される戦争論の作者は？」
ひかり「えっと、ク、クラウ、クラウン！」
マントイフェル「不正解、クラウゼヴィッツだ。」
マントイフェルは孫子とよく比較される軍事書である戦争論の作者の問題を出しひかりはそれを間違えた。
戦争論はプロイセンの軍人カール・フォン・クラウゼウィッツが書いた現代でも軍事書の中でも傑作と言われるものである。
この本はそれ以前の軍事書と違い戦争そのものの分析から始まっているという点で画期的であった。
その内容は書かれてから１００年以上経った現代でも色褪せることはなく今でも士官教育や軍事研究における教科書、基礎の基礎としての役割を果たしている。
そしてこの戦争論と比較されるのが中国の孫子だった。

孫子は中国の軍事書の中でも最初期のものであったが内容は２００年以上経った現代でも高級将校の必読書として扱われるほどの内容だった。

マントイフェルはこの二冊を将校としての教養として読んでいた。

マントイフェル「雁淵、戦争論読んだか？」

ひかり「いえ、まだ第１編の半分ぐらいしか読んでないです…」

マントイフェル「まあそんなもんだろう。

それだけ難しいがその分価値もあるからな。

軍人としての基本的な教養として身につけておくべきだよ。

あと、勉強するのはいいがほどほどにしろよ。」

マントイフェルはそういうと自分の部屋に戻っていった。

ヘプナー「閣下、ありがとうございます。

ええ、何とか６０時間延期させました。

二日と半日だけですが何とかさせます、では。

トレスコウ君、状況は？」

翌日、ヘプナーは電話でヘルシンキのヴァトゥーチンに状況を報告していた。

ペテルブルクではヘルシンキから突然マンシュタインが来ると連絡が来て探ったところフレイア作戦が一週間後に行われるという情報を二日前に入手、トレスコウとヴァトゥーチン、さらに彼らがもっている北欧方面と左翼系政治勢力のチャンネルを使い何とか作戦を６０時間延期させその間に急いでザリャー・ヴォストーカ作戦の兵力と砲兵陣地構築作業を行わせ、さらにはスオムスとペテルブルク周辺の船舶以外の鉄道と自動車、輸送機を全て転用してコラ半島に輸送を行わせていた。

そのためスオムス方面の鉄道はすべて止められ機関車も客車も貨車も全てこの輸送に転用され、ある事情のためペテルブルクに向かっていたエイラとサーニャは途中のラハティで足止めを食らっていらほどだった。

トレスコウ「は、陣地構築進捗率６８％、弾薬輸送７９％、兵力８９％です。

各指揮官に対して作戦書類の輸送及び打ち合わせは完了済み」

ヘプナー「５０２は？」

トレスコウ「５０２は我々の指揮権が及びませんしマンシュタインの持ち駒です。

下手に動けば作戦自体が露見します」

ヘプナー「分かった」

するとエンジン音が鳴り響き二人は窓から外を見る、そこには彼らにとっては最も会いたくない人物であるマンシュタイン専用のＪｕ―５２が５０２の上空をフライパスするのが見えた。

ヘプナー「マンシュタインのユーママだ」

トレスコウ「５０２に用があるんでしょう。

それにしてもまだあんな旧式機を使ってるんですね」

ヘプナー「ああ、あんなのよりまだリスノフが使えるぞ」

二人はそれを見て旧式であるＪｕ―５２の愚痴を吐いていた。

二人が普段使っている輸送機はレンドリースされたＣ―４７かオラーシャ製のリスノフＬｉ―２だった。

―――――――――――――

その数十分後、マンシュタインは５０２にいた。

ラル「マンシュタイン元帥に敬礼」

マンシュタインに５０２のウィッチたちは敬礼する。

マンシュタインというかの「ドイツ軍最高の頭脳」であり「我らの最も恐るべき敵」と称された名将が目の前にいることにバーティやパット、ポーは内心驚いていたがマントイフェルは知っているだけでなく元ドイツ帝国軍の将軍だった養父は第一次大戦中マンシュタインの上官だったので付き合いがあった。

マンシュタイン「うむ、座ってくれたまえ。」

マンシュタインは着席を促すとラルに話しかけた。

マンシュタイン「突然すまないな、ラル少佐」

ラル「いえ。それで、今日はどういった用向きで？」
マンシュタイン「一部の者には内々に伝えていたがペテルブルグ軍集団によるグリゴーリ攻略のフレイア作戦についてだ」
ロスマン「ついに…」
ラルが要件を聞くとフレイア作戦についてだと答えロスマンが反応する。
するとひかりがニパにフレイアとは何か聞いた。
ひかり「フレイアって何ですか？」
バーティ「北欧神話の神の一つだ。
豊穣の女神だよ。」
ひかり「北欧神話、今度本貸してください」
それにバーティが北欧神話の豊穣の女神だと答えひかりは北欧神話に興味を持つ。
マンシュタインは二人の会話を横目に説明を続ける。
マンシュタイン「補給路が回復し士気が大幅に向上したことでフレイアー作戦の発動が正式に決定した。
そこで、君たち５０２部隊にも当作戦への参加を要請する」
ラル「いよいよか」
サーシャ「その作戦ですが５０１ストライクウィッチーズがガリアを開放した例に準ずるのでしょうか？
だとすればリスクが大きすぎると思われますが…」
するとサーシャが作戦について意見する。
５０１のウォーロックはある意味偶発的事故である上に技術的には未熟すぎた。
マンシュタイン「ウィッチは耳も早いな。
安心したまえネウロイのテクノロジーは我らの手に余る」
ラル「では？」
マンシュタインはサーシャの懸念を否定し作戦を説明する。
マンシュタイン「作戦そのものはシンプルだ。

現在ムルマンに集結中のペテルブルグ軍の戦力でグリゴーリを叩く。

そうすることにより…」

パット「ネウロイの生産能力を破壊する。」

マンシュタイン「そうだ。そして無防備になったグリゴーリ内部に侵入し本体のコアを超大型列車砲で撃ち抜く」

するとマントイフェルが疑問を持ち質問する。

マントイフェル「マンシュタイン元帥閣下、一つよろしいですかな？」

マンシュタイン「君は？」

マントイフェル「は、ヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・ツエレウスキー・グラーフ・フォン・マントイフェル予備役中尉です」

マンシュタイン「うむ、フォン・マントイフェル中尉、何かね？」

マントイフェル「小官は騎兵科出身であるため砲兵に関しては素人なのですが、当たるのですか？

作戦に必要な精度の射撃を行うには最低でも１０キロ以内に近づかなければならないと考えます」

マントイフェルは一応ヴァイマル共和国軍時代の陸軍士官学校卒である。

その上数年は陸軍の騎兵部隊で勤務していたので陸軍の知識は持っていてもちろんその中には砲兵に関するものもあった。

その知識から射撃の精度に関して疑問を持ったのだ。

マンシュタイン「そうだ、この作戦で列車砲はネウロイの巣の１０キロ手前まで接近する。

そこで魔眼持ちのウィッチによる砲撃指示を行う」

マントイフェル「そうですか、次に、そのような特殊技能を持ったウィッチがいるのですか？

騎兵科出身なので砲兵観測に関する知識は疎いですがそれでも特殊な技能が必要なこと自体は把握しています。

この部隊にいる雁淵軍曹は魔眼持ちですが彼女は

砲兵観測の技能を持っていません」
当たり前だが砲兵観測というのは特殊技能である。
観測用の設備というのは特殊で単なる観測用だけでも通常の光学装置を使用したもの、地震計のような振動を利用したもの、音を利用したものなどいくつか存在する。
そしてそのすべてに高い数学・物理学の知識が必要であった。
マンシュタイン「君の意見だが、そろそろかな？」
それにマンシュタインは時間を確認すると外を見る。
すると突然窓の外をウィッチが通過した。
下原「何？今の…」
ジョゼ「ウィッチ…だよね？」
菅野「あれは…」
それに下原とジョゼは驚くが菅野にはそれに見覚えがあった。
そして何故かひかりは嬉しそうな顔をして突然走り出した。
二パ「ひかり？」
サーシャ「ひかりさん？」
パット「雁淵？」
二パたちがひかりの方を向くとひかりは部屋から飛び出していった。
マンシュタイン「これで５０２も正しい形となるだろう。
これまで現場の判断でよく頑張ってくれたな、ラル少佐」
ラル「恐縮です」
マンシュタイン「では、失礼する」
マンシュタインがラルに話すと部屋から出て行った。
ラル「とんだタヌキジジイだ」
ロスマン「隊長の独断でひかりさんを５０２に引き留めた件は、お咎め無しのようですね」
ラル「代わりに、少しばかり面倒なことになりそうだがな」
出て行ったマンシュタインにラルは吐き捨てる。
マンシュタインはラルとある取引をしていた、それがこれだった。

ひかり「間違いない！あれは…あれは…お姉ちゃん！」
ひかりが喜んでいた理由、それはそれが姉の孝美だったからだ。
ひかりは孝美に並んで滑走路を走って呼びかけていた。
そして孝美が滑走路の先に着陸するとひかりもそこに向かい姉を呼ぶ。
ひかり「お姉ちゃん」
孝美「ひかり」
ひかり「お、お姉ちゃん…？」
孝美「どうしてあなたがここに居るの？」
ひかり「えっ？」
だが帰ってきたのは冷たい言葉だった。
孝美「あなたの本来の任地はカウハバ基地だったはずよ。それが何故ここに居るの？」
ひかり「そ、それは…」
キツイ口調でなぜここにいるか聞く。
もとはと言えば彼女自身が負傷してその代替としてラルが色々やって入れたという理由があった。
だがひかりはそれを説明できない。
孝美「ひかり。ここはあなたが居ていい場所ではないわ」
ひかり「お姉ちゃん…
で、でも！私、扶桑にいた時より強くなったんだよ！
チドリだってちゃんと乗れるようになったんだよ！」
孝美「誰もそんなこと聞いてないわ」
孝美はひかりの横を通り過ぎて基地に向かう。
孝美「すぐに荷物をまとめてカウハバに行きなさい。これは正式な辞令よ」
ひかり「そんな！」
ひかりは振り返るが孝美は振り返ることなく基地に向かう。
ひかり「お姉ちゃん…」
ふとひかりはバーティから教えられたある本の言葉を思い出した。

ひかり「士別れて三日なれば、即ち刮目して相対すべし。」
孝美「ひかり？」
その言葉に孝美は振り返る。
ひかり「バーティさんから教えてもらったの、日々鍛錬しているものは三日もすれば見違えるほどになっているって意味の言葉だよ。
　呉下の阿蒙じゃないんだよ」
ひかりはバーティから教えてもらったこの世界にない書物「三国志」から引用した言葉を孝美に言った。
それに彼女は少し動揺するが無視する。
孝美「それがどうしたの？それがここにいていい理由にはならないわよ」
そういうと基地に向かっていった。

格納庫についてユニットを固定すると孝美の周りに５０２のウィッチたちが集まった。
菅野「孝美！やっと来たな。待たせやがって、コノヤロウ」
菅野は威勢よく孝美に話かける。
その前と変わらない様子に孝美は微笑む。
孝美「相変わらずのようね、管野さん」
菅野「ふん、そうそう変わるかよ。
　けどお前の妹はなかなかやるようになったと思うぜ」
菅野からひかりの話題が出ると表情を暗くする。
菅野「孝美？」
孝美「いえ、なんでもないわ…」
菅野の心配に何でもないというと孝美はラルに話しかける。
孝美「本日をもって５０２統合戦闘航空団に着任しました、雁淵孝美中尉です。
　リバウ以来ですね、ラル隊長」
ラル「ああ。久しぶりだな、孝美」
ジョゼ「本当に復帰できたんだ…」
下原「良かったね、ジョゼ」

ジョゼと下原は孝美が無事復帰できたことに喜んでいた。
するとポーが孝美の前にやってきて口説き始めた。
ポー「やあ雁淵のお姉さん、俺はポー、ポール・アンティリーズだ。
　ポーって呼んでくれ。
　君は美しい、君の美しさに比べたらこの歴史あるヨーロッパ一の都市さえ霞んで見えるよ」
孝美「ど、どうも…」
それに孝美は引くがポーの後ろではサーシャがご立腹であった。
サーシャ「はぁ…ポーさん?彼女の前でナンパとはいい御身分ですね?」
ポー「ひっ!サーシャ、その、美女はナンパしないと損だろ?」
サーシャ「だからって彼女の前でするのはねぇ?」
サーシャから出す嫉妬の黒いオーラにポーは固まり動けなくなった。
そしてサーシャはポーをどこかに連れて行った。
リョーニャ「あいつは一体いつになったら成長するんだ?」
パット「知るかよ、自業自得だ」
バーティ「えーまあポーは女好きでな、初めて会った時もさっきみたいに口説こうとしてたよ。
　おっと、自己紹介が遅れましたなレディ、私はアルバート・クロンカイト、中尉です。
　以後お見知りおきを、ミス孝美」
それを無視して続いてバーティが帽子を取り孝美の右手の甲にキスして挨拶する。
孝美「アルバート…もしかして…」
孝美はバーティの名前を聞いてひかりが言ったバーティだと気が付いた。
バーティ「ん?もしかしてひかりから何か話していましたか?
　君の妹さんは優秀ですよ、戦前こう見えても教師でして、彼女ぐらい優秀な生徒は数人ぐらいしか見てませんよ。
　それも全員その後オックスブリッジに行ったような優秀

なものばかりでしたよ」
孝美「そう…」
バーティはひかりを褒めるが孝美はなぜか表情を暗くする。
それにバーティが気が付き声をかける。
バーティ「ところでレディ、何かお気に障るようなことでも言いましたでしょうか？」
孝美「いえ、何でもないわ」
孝美はバーティに対して何でもないという。
すると今度はマントイフェルが同じように帽子を取り右手を取って挨拶する。
マントイフェル「レディ孝美、自分はヴァルター・ハインリヒ・フリードリヒ・ゲルト・フォン・マントイフェル・グラーフ・フォン・マントイフェル中尉です。
よろしく、ミス孝美」
孝美「ええ、よろしく」
孝美はマントイフェルに挨拶する。
続いてリョーニャが自己紹介する。
リョーニャ「同志孝美、レオニード・イリイチ・クトゥーゾフ上級大尉、リョーニャと呼んでください」
ところで怪我の方は大丈夫なのかね？」
孝美「ええ、大丈夫よ」
リョーニャは回復したばかりだという怪我の心配をする。
リョーニャ「そうか、一応専門は内科とは言え軍医なので何かあればお声かけを」
孝美「ええ、そうさせてもらうわ。」
リョーニャの自己紹介が終わると最後にパットが自己紹介する。
パット「パトリック・ジャン＝クロード・ジャベール大尉だ。
君のことは色々聞いてる、とても優秀な軍人だそうだが？」
孝美「ありがとう」
パットは孝美のことを褒めた。
ふと菅野はひかりがいないことに気が付く。

菅野「あ…そういやひかりの奴は？」
気が付いた菅野は二パを連れたひかりを探し始めた。
そして滑走路の先で佇んでるひかりを見つけた。
二パ「居た居た、ひかり～」
二パが声をかけて駆け寄る。
二パ「どうしたのさ？こんなところで」
菅野「待ちに待ってた孝美が復帰したってのによ」
だが二人に振り返らない。
様子がおかしいことに気が付いた菅野はひかりの正面に回って顔を見る。
菅野「ひかり？あっ…」
その表情は孝美がひかりの話を聞いた時のように暗かった。

第３１話：姉の異常な愛情　または如何にして心配しすぎて妹に冷たく当たるのか

翌朝、マントイフェルとクルピンスキーは久しぶりに基地内の厩舎に行き馬をなでていた。

マントイフェル「いい子にしていたか？

ご主人様が帰ったぞ」

するとふと後ろに気配を感じて振り返ると孝美がいた。

孝美「マントイフェルさん？クルピンスキーさん？」

クルピンスキー「孝美ちゃん、どうかしたのかい？」

孝美「なんでこの基地に厩舎があるのが気になって、それで覗いてみたんです。

その馬はマントイフェルさんのなんですか？」

クルピンスキーが聞くと孝美はどうやらなぜ空軍基地に厩舎があるのか気になり覗きに来たようだった。

孝美は質問を返しそれにマントイフェルが馬をなでながら答える。

マントイフェル「まあね、これは俺の馬だよ」

孝美「え、マントイフェルさんって乗馬できるんですか？」

孝美はマントイフェルが乗馬ができることに驚いた。

扶桑も含めて日本には乗馬の文化は少ないので乗馬ができることそのものに驚いていた。

マントイフェル「ああ、できるよ」

クルピンスキー「こう見えて馬術と近代５種のオリンピック代表候補になったことあるんだよね～」

クルピンスキーは孝美に自慢げに言う。

クルピンスキーにはこのことはある意味彼氏の自慢できるところでもあった。

孝美「え、オリンピック？」

マントイフェル「ああ、３６年のベルリン大会でな。

ただ代表選考会の三日前に母から風邪うつされて

棄権したんだけど」
クルピンスキー「へえ、そんなことがあったんだ」
マントイフェルは代表選考会の三日前に母から風邪をうつされて棄権した結果代表にはなれなかった。
そのことはクルピンスキーにも初めて話すことであった。
孝美「そうなんですか」
マントイフェル「ああ、それにしても姉妹なんだな、妹さんも同じように興味を持ってたよ。
その時は馬に乗せてあげたが。
乗ってみるか？」
孝美「いいんですか？」
クルピンスキー「ヴァルト？」
マントイフェルは孝美に乗ってみるかと聞く。
それに孝美は驚きクルピンスキーは不機嫌になった。
マントイフェル「トゥルトが先でもいいなら乗せてあげるよ。
遠慮しなくていいぞ」
孝美「なら少しだけ乗ってみますね」
クルピンスキー「でも僕が先だから」
クルピンスキーが先に乗ると強調する。
マントイフェルは先にクルピンスキーを乗せて暫く二人で乗馬を楽しむと続いて孝美を乗せた。
孝美「意外と高いんですね…」
マントイフェル「そうだろ？とりあえず基地を一回りするか」
馬に乗って孝美が感想を言う。
マントイフェルは孝美を乗せて基地の周りを一回りすると厩舎に馬を戻して朝食に向かった。
その後、孝美は病み上がりのマントイフェルと模擬空戦をやることになったのだが
孝美「え？」
マントイフェル「ふう、悪くないな、射程も上がって弾道性能に至ってはＳ１８なんかよりずっといい。」

Ｓ１８に代わってシモノフＰＴＲＳに装備を変更したマントイフェルが７００ｍ先から狙撃して一撃で終わってしまった。
それ以前や孝美の使っているＳ１８と比べるとＰＴＲＳは弾道性能も初速も装甲貫徹能力も全ての面で有利であったのとそれにさらに小銃用のスコープと元々のオリンピック代表候補になるぐらいの射撃の腕が合わさった結果空戦としては常識外れの距離から狙撃できた。
その常識外れさは孝美でさえ食らった瞬間に間抜けな声を出すぐらいだった。
そもそもマントイフェルはこういうことでは初めから本気でルール内では本気で勝ちに行く人間であり孝美のユニットの特性から接近戦になれば不利と判断、武器の特性と自身のスキルを勘案して遠距離からの狙撃という答えを出していた。
なので開始されると即座にＦｗ１９０の良好な加速性能を生かし孝美から全速力で逃げると追いかけてきた孝美を逆に待ち伏せして終わらせてしまったのだ。

ジョゼ「なにこれ！おいしい！」
パット「美味い、こういうエキゾチックな料理というのも悪くないな」
ポー「素晴らしい料理だ。テキサスで料理屋を出せばヒットするぞ」
孝美「皿うどんって言って、扶桑の郷土料理なんです」
その日の昼、孝美は皿うどんをふるまい全員がその腕を絶賛していた。
特に美食家であるパットやポーは大絶賛だった。
マントイフェル「美人で軍人としても優秀、家事もできるとは素晴らしいな。
って、トゥルト、何不機嫌なんだ？」

マントイフェルも絶賛するがそれを聞いて隣のクルピンスキーが足で小突く。
クルピンスキーは孝美に嫉妬していた。
クルピンスキー「別に。孝美ちゃん、今度作り方教えてもらえるかな？」
孝美「ええ、いいですよ」
クルピンスキーは孝美から皿うどんの作り方を教えてもらおうとしていた。
二パもまた孝美の完璧さを褒める。
二パ「いやぁー綺麗で強くて郷土料理も上手だなんて完璧だよね、孝美さんって。
ね？ひかり」
二パはひかりに聞くがひかりは反応せず俯いていた。
二パ「ひかり？」
ひかり「え？あ、そうですね…ごちそうさま」
ひかりはそう言って席を立ってしまった。
二パ「あ…ひかり？」
二パも含めた全員がその様子を不思議に思いひかりを見る。
孝美だけが何故かひかりの方を見なかった。

夕食後、ひかりは勉強しに来なかった。
それにバーティが心配する。
バーティ「大丈夫かひかりは？
ポー、なんか知ってるか？」
ポー「ひかりには元々スオムス行きの辞令が出ていたらしい。
だけど姉が負傷したのでラル隊長が無理やりこっちに連れてきたんだとよ」
マントイフェル「そもそもここにいること自体が問題なのか」
ポーがひかりの事情を説明する。
そもそもひかりは本来とは違う場所にいる時点で問題だった。
ポー「ああ、まあどうせここから出られないが」

バーティ「どうしてだ?」
ポー「スオムス行きの旅客列車が全部フレイア作戦後まで止まってる。
　自動車も飛行機もだ。船以外全部止められてるんだ」
バーティが聞くとポーがスオムスに行こうにも鉄道も車も飛行機も全て止められていると答える。
　唯一動いていたのはペテルブルクからコトカに向かう定期輸送船程度であり、これもバルト海が氷結しているため丸一日かけてやっとコトカなうえに天候や氷の状況によって欠航するなど問題も多かったしコトカに着いたところでそこからカウハバまでの鉄道も止まっていたので無理であった。
　ふとマントイフェルはなぜ鉄道が止まっているか気になった。
マントイフェル「ところでなんで止まってるんだ?」
ポー「多分フレイア作戦用の物資と部隊輸送だろう」
マントイフェル「作戦開始まで1週間切っているのにまだ運んでるのか?
　大丈夫か?」
ポー「さあ?ところで、」
ふとここでポーが気が付いた。
ポー「パットどこだ?」

その頃、ひかりは基地の塔を登っていた。
その速度は初めとは比べ物にならないぐらい速かった。
ひかり「はあ…はあ…はあ…」
孝美「ひかり!」
頂上につくと下から声をかけられる。
見下ろすと孝美が足で普通に歩くように登っていた。
そしてあっという間に頂上についてひかり「お姉ちゃん…」
孝美「こんな無駄なことをしていないで、早くカウハバ行きの準備をしなさい」

孝美はひかりに厳しく言う。
だがそれにひかりは反論する。
ひかり「無駄じゃないよ！
私、少しでもお姉ちゃんに近づきたくてずっと頑張ってきた。
５０２の皆にも、最初は全然認めてもらえなかったけど、でも頑張って頑張って、今は仲間って言ってくれてる！
それにね、私接触魔眼が使えるようになったんだよ！
魔眼で管野さん達と一緒にいっぱいネウロイを倒したんだよ！」
孝美「全部知ってるわ。それでも、あなたはここに居てはいけない」
ひかり「お姉ちゃん…」
それでも孝美は引き下がらずひかりを置いて塔から飛び降りた。
残されたひかりはショックで動けなかった。
その後基地に戻ろうとした孝美はふと途中でラルとタバコを吹かしたパットが柱にもたれかかっていることに気が付いた。
孝美「ラル隊長、ジャベール大尉」
パット「正直に言ったらどうだ？」
ラル「大事な妹を危険な目に遭わせたくないのだとはっきり言ってしまえばいいじゃないか」
ラルがそういうと体を孝美の方に向ける。
パット「妹を前線から引き離す、これだマンシュタインとのディールか？」
孝美「知っていたんですか？」
孝美は作戦に参加する代わりにひかりを比較的安全な後方に送るという取引をマンシュタインとしていた。
パットもラルもそのことを知っていた、だからこそ疑問を持っていた。
ラル「正式な辞令が出ているのに何故そこまであいつを追い込もうとする？」
パット「ああ、こんなことをすれば逆効果だ」

二人の問いに孝美は下を向いて本心を語った。
孝美「だってあの子は、ひかりは絶対にあきらめない子だから…
こうでもしないと…
本当は…本当はあの子を力いっぱい抱きしめたい。
抱きしめて、強くなったねって褒めてあげたい。
なのに私は、ひかりを傷つけることしか…」
それを聞いて二人は笑う。
ラル「姉妹揃って」
パット「不器用だな」
それを聞くと孝美は基地に戻っていった。
二人きりになるとラルがパットに聞いた。
ラル「パット、どう思う?」
パット「まずはあの二人をどうにかしないと無理ですね。
幸い時間はあります、のんびり考えましょう」
ラル「そうだな」
パットの言葉にラルは笑うと二人で基地に戻っていった。

翌日早朝
ヘプナー「なに!それは本当か?」
トレスコウ「本当です」
ヘプナーはトレスコウから緊急の連絡を受けていた。
トレスコウ「昨夜０２３５時にコラ湾沖８５カイリ付近にてＱＰ１１４がネウロイの襲撃に遭遇、幸い夜間戦闘であったため損害は少なかったもののそれでもリベリオンの商船シルバーソードが撃沈、駆逐艦ソマリが大破、現在駆逐艦ターターが曳航作業中です。
で、そのネウロイがレーダー及び形状から推測するに先日ＰＱ１１７を襲撃したものと同型か同一と思われます。」
ヘプナー「とうとう連中、不死身になったか?
怒りの日にはまだ早いぞ」
未明にムルマンを出港したばかりのブリタニアに向かっていたＱ

Ｐ１１４船団が襲撃を受けたのだ。
夜間であったため損害は商船一隻が撃沈、駆逐艦一隻が大破、航行不能だけだったが問題はそのネウロイがＰＱ１１７を襲撃したものとほぼ同一か同じものだった。
トレスコウ「それだけではありません、先ほどこのネウロイと思われるものがコラ半島の第２３装甲師団の拠点の一部を襲撃、戦車３両が撃破され、死者行方不明者５８名の損害を出してます。
侵攻ルートからして恐らく目標はカンダラクシャ、現在第８８砲兵軍団の主力が集結中です。」
ヘプナー「不味い、大いに不味い。
航空支援を要請しろ、ラヨシュ君に警告もだ」
トレスコウはヘプナーの前に置かれたテーブルの地図で状況を説明する。
その状況は非常に不味かった。もしカンダラクシャに集結中の砲兵戦力を破壊されれば作戦そのものが破綻してしまうのだ。
すると今度は別の参謀がやってきてトレスコウに耳打ちして一枚の写真を渡す。
トレスコウ「分かった、閣下、先ほどソマリが悪天候により沈没しました。
それと、偵察部隊がこれを」
トレスコウは参謀が持ってきた写真を渡す。
そこにはネウロイが写っていた。
ヘプナー「ネウロイだが、これがどうかしたか?」
トレスコウ「よく見てください」
ヘプナー「うん?これは…砲弾の破片か?」
ヘプナーは写真をよく見ると砲弾の破片があることに気が付いた。
トレスコウ「はい、サイズからして１１インチから１２インチの艦砲用です。
この地域でこの砲弾を使ったのは…」
ヘプナー「ＰＱ１１７…あれが復活したのか…
５０２に緊急航空支援を要請しろ、奴をカンダラクシャに

入れるな」
トレスコウ「は」
ヘプナー「これをカンダラクシャに入れたら作戦だけじゃない、カレリア戦線そのものが崩壊するぞ…」
カンダラクシャ周辺にはすでにこの地域の主力であるオラーシャ軍カレリア戦線とヴォルホフ戦線の主力部隊が集結中であった。
これはカンダラクシャがムルマン～ペテルブルク鉄道沿線のキーポイントであったため部隊の輸送の関係上ここに集まってしまったのだ。
もしここを失えば南北でカレリア方面の主力オラーシャ軍の2個軍集団を分断される恐れがあった。
その上鉄道のキーポイントであり白海では数少ない良港でもあるため失った時の影響は計り知れなかった。

第３２話：偽装入隊した扶桑の平均以下のウィッチが姉及び部隊の負担となることを防ぎ、部隊の有益なる存在たらしめるための穏当なる提案

ヘプナーからの緊急航空支援要請を受けた５０２ではウィッチ全員が集められロスマンが状況を説明する。

ロスマン「先ほど、グリゴーリを監視していた偵察部隊が襲撃を受けました」

サーシャ「襲撃!?」

ロスマンの報告にサーシャが驚く。

他のウィッチもこの報告に衝撃を受けた、なにせ反攻作戦直前に攻撃を受けたのだ。

ロスマン「報告では、先日バレンツ海で出現した球体型ネウロイが再生した個体とのことです」

マントイフェル「バレンツ海のネウロイ?そんな馬鹿な!」

クルピンスキー「あいつは僕たちが確かに倒したはずだ!」

ロスマン「ですが、事実です」

ネウロイがバレンツ海でＰＱ１１７を襲撃しマントイフェルに重傷を負わせたネウロイだと聞いてマントイフェルとクルピンスキーが反応する。

二人ともその話が信じれなかった。

するとロスマンが一枚の写真を見せる。

それはネウロイとその中に砲弾の断片が写った写真だった。

マントイフェル「これは?」

ロスマン「砲弾の破片、サイズからして１１インチから１２インチの艦砲。

このクラスの大砲が使われたのはＰＱ１１７のあのネウロイだけです。」

その写真はトレスコウが報告を受けた写真を焼き増ししたものでありそれと同じようにネウロイと２８センチ徹甲弾の断片が写って

いた。
マントイフェル「コアは破壊したはずだ」
クルピンスキー「何で？」
ラル「そう熱くなるな」
マントイフェルとクルピンスキーは理解できず混乱するがそれをラルが制止する。
ラルの方を見るとロスマンがラルのコルセットを絞めていた。
クルピンスキー「隊長…？まさか！」
ラル「お前達が倒しきれなかったのなら私が出るしかないだろう」
ラルは世界第三位のエースである、そのスーパーエースが出撃する気なのだ。
マントイフェルは実力を見たことはないが似たような名前だった同僚が同じようにトップエースでありクルピンスキーやロスマンからその実力を聞かされていた。
ラル「行くぞ孝美。作戦の肩慣らしにちょうどいい」
孝美「はい」
ひかり「待ってください」
孝美がラルに返事した瞬間声がし、振り返るとひかりがいた。
菅野「ひかり！」
孝美「何をしに来たの？」
ひかり「私も戦わせてください」
孝美が厳しく言うがひかりは無視してラルに進言した。
孝美「あなたには無理だと何度言えば！」
ひかり「そんなのは、やってみなくちゃわかんない！」
その内容に孝美が反応しひかりと睨み合う。
ラル「いいだろう」
孝美「ラル隊長!?」
ラルはひかりの進言を受け入れる。それに孝美が驚いた。
ラル「もしお前の接触魔眼が孝美に勝るようなら、どんな手を使ってでも５０２に置いてやろう」
ひかり「ホントですか!?」

ラル「ただし、その場合お前に変わってカウハバには孝美に行ってもらう」
「「えっ!?」」
もしひかりが勝てば孝美を代わりにカウハバに送る、それが条件だった。
ラル「もしお前が勝っても、孝美と一緒に戦うという望みは叶わない。それでもやるか?」
ひかり「やります!だって今の私は５０２の一員だから!」
孝美「ひかり…」
菅野「お前…」
それでもひかりは引かない、その硬い意思に菅野と孝美は驚く。
ラル「上等だ。さあ、孝美はどうする?」
孝美「いいわ。どちらがこの５０２にふさわしいか、はっきりさせましょう」
孝美にも聞くと少し考えて勝負を受けた。
ひかり「うん、わかった」
ポー「ふ、面白くなってきたじゃねえか。
さあ、お前ら、どっちに賭ける?
俺は孝美に２０ドル」
この状況にポーが賭けを始めた。
ポーは孝美に２０ドルを賭けた。
バーティ「そうだな、俺も孝美に同じく２０ドル」
マントイフェル「どう考えても孝美が有利だろう。
負けたくはない、同じく２０ドル」
リョーニャ「賭けなんかするか、資本主義者」
ポー「おいおい、もうちょっと柔軟になれよ、いい小遣い稼ぎだ」
マントイフェルとバーティも孝美に賭け、リョーニャは賭け自体に参加しない。
ポー「パット、どうする?」
ポーが聞くとパットは財布から札を取り出しテーブルに叩きつける。

パット「ひかりに、１００ドル」
パットは不敵に笑いながら１００ドルを叩きつけた。

サーシャ「ネウロイは現在ムルマン方向へ進行中です」
ポー「カンダラクシャじゃないのか？
　なんでわざわざ一回陸地に入って南からムルマンを襲うんだか」
　５０２は普段は軍医として出撃はしないリョーニャや負傷のためあまり出ないラルさえも動員してバレンツ海からカンダラクシャに向かっていたはずのネウロイに向かっていた。
　ただネウロイは途中で方向を変えコラ湾の奥にあるムルマンに向かっていた。
　ヘプナーの懸念であるカンダラクシャへの攻撃は杞憂に終わったが今度はムルマンに逃げ帰ったＱＰ１１４船団と作戦用に運搬中の物資、何よりフレイア作戦に参加する扶桑とブリタニアの機動部隊が攻撃される可能性が出てきた。
　そのため向きを変えたと分かるとムルマンでは逃げ帰ったＱＰ１４を出港させさらに機動部隊も退避を急いでいたがそれでも最低６時間はかかる予定だった。
　ラル「孝美、ひかり、コアの位置を捉え私に報告しろ。
　　より早く、より正確に見抜いた方を勝者とする」
「了解！」
　ラルは二人に勝負の内容を伝える。
　二パ「ひかりはずっと孝美さんと一緒に戦いたがっていたのに、なんだってこんな勝負をするのさ？」
　パット「仲直りのためさ、よく言うだろ？　Ｖｏｉｒ，ｃ，ｅｓｔ　ｃｒｏｉｒｅ　って」
　二パ「？」
　二パが話すとパットが答えるがパットがフランス語の諺を引用するが二パは理解できなかった。
　その諺をフランス語が母国語のジョゼが説明する。

ジョゼ「見ることは信じること、ですか。
　でも遠視可能な孝美さんの魔眼と、ひかりさんの接触魔眼じゃ、どう考えても…」
ロスマン「そうね。ひかりさんが勝てる確率は万に一つよ」
ひかりと孝美では明らかに孝美の方が有利であった。
なにせ剣と小銃が戦うようなものである。
有効距離の面で負けていた。
ロスマン「それでも、あの子はわずかな可能性に賭けた。
　私たちと共に戦うために。そして、自分の成長を姉に見せるために」
菅野「ひかり…」
ロスマンの話に菅野は小さく呟く。
この話は外野がどうこうできる話ではなかった。
下原「１１時の方向、ネウロイです」
そしてしばらく飛ぶと下原がネウロイを見つけた。
クルピンスキー「ホントだ…再生しちゃってるよ」
マントイフェル「本当に復活したのか…」
ラル「行くぞ！」
その姿を見てクルピンスキーとマントイフェルが驚く。
ラルはネウロイを見ると即座に合図する。
その合図を受け取るとすぐに散開、ネウロイに接近する。
ネウロイはウィッチたち、特に孝美とひかりに攻撃を集中する。
ひかりはネウロイの攻撃を回避しながら接近する。一方孝美は一気に決着をつけようと魔眼を使ってコアを確認していた。
孝美「一気に決着させる！
　目標捕捉！Ｈ４６９９Ｔ９３２６！」
ラル「早いな」
マントイフェル「了解」
孝美の座標を聞いてラルとマントイフェルが即座に狙撃する。
射撃の名手たる二人の狙撃は寸分たがわずコアを直撃して破壊した。

孝美「やった！…えっ!?」
孝美は思わず喜ぶがすぐにおかしなことに気が付いた。
破壊されたコアが再生しているのだ。
孝美「コアが…コアが再生した!?」
クルピンスキー「なんだって!?」
バーティ「審判の日には早すぎるぞ」
ジョゼ「じゃあ、どうやって倒せばいいの!?」
孝美の発言に全員驚いた。
すると観察していた孝美はあることに気が付いた。
孝美「いえ、待ってください！
　コアの中で何か動いてます！
まるで、コアの中にコアがあるみたい！」
ラル「そう言うカラクリか！おそらくそいつが真のコアだ！」
このネウロイは外郭のコアの中に真のコアを仕込んだ二重構造になっていた。
そして問題の中身の方は中で動き回る厄介な代物だった。
ひかり「真のコア!?」
ラル「そいつを撃ち抜くしかない！」
それを処理するには真のコアを破壊するしかなかった。
すると突然ネウロイが分離した。
それを見てすぐにマントイフェルが警告を出す。
マントイフェル「不味い！子機を出してくるぞ！」
その警告通り分離すると中から大量の子機を出して襲い掛かった。
そのためウィッチたちはその処理に忙殺されることになった。
孝美「くっ…！魔眼に集中できない…！」
孝美もまた子機の処理に追われ魔眼に集中できなかった。
次の瞬間、その横をウィッチが通過した。
そしてそれが誰か一瞬で分かった。
孝美「あっ…ひかり！」
ひかりは孝美の横を通り過ぎるとネウロイにぶつかりながらも突進ししていた。

ひかり「くっ…うっ…まだまだ！」
二パ「頑張れ、ひかり！」
二パもひかりを応援するが数が多すぎとうとうネウロイとぶつかり跳ね飛ばされた。
ひかり「きゃあっ！」
下原「雁淵さん！」
ジョゼ「ひかりさん！」
ジョゼと下原が呼ぶが二人も手一杯であった。
ネウロイはこの隙にひかりを包囲して攻撃しようとする、だが次の瞬間上から機銃掃射が行われネウロイは破片となりさらにひかりの服を誰かが掴んで無理矢理急降下した。
ひかり「うわ！」
パット「おっと！口閉じてろ！舌噛むぞ！」
ひかり「パットさん！」
パット「こっちは１００ドルがかかってるんだ、負けたら困る。」
機銃掃射しひかりを掴んでいたのはパットだった。
パットはひかりを掴んだまま誤認を使って強引に突破しようとする。
それを見て焦った孝美は周りのネウロイを処理するとパット達の後を追ってネウロイに接近、魔眼を使ってコアを探す。
孝美「目標、重捕捉！」
その間にもパット達は接近し続ける。
孝美「目標、補正！」
ある程度まで近づくとパットはひかりを全力でネウロイに投げる。
パット「勝ったらフランス料理奢ってやる！
行ってこい！」
孝美「目標！最終捕捉！」
ひかり「たあああああ!!」
放り出されたひかりは全力で突進しネウロイに触れる。
孝美「完全捕捉！グリッドＨ１５８８Ｔ１１２７!!」
ひかり「ここです!!」

孝美はコアの位置を報告し、ひかりはコアの場所を銃口で示す。
次の瞬間、ラルとマントイフェルの狙撃でコアは破壊された。
ひかり「私?お姉ちゃん?どっち?」
戦闘が終わりひかりが周りを見渡す、その瞬間生き残った子機がひかりに向かって突進した。
次の瞬間、ひかりの前に影が立ちはだかり6発の機関銃とは違う軽い銃声が響くとネウロイが消えた。
パット「ふう、まさかリボルバーの出番が来るとはな。
　ひかり、大丈夫か?」
ひかり「え?パットさん?」
立ちはだかったのはパットだった。
パットはマントイフェルの時のように生き残った子機が襲い掛かる事を懸念してひかりの近くを飛んでいた。
そしてひかりに子機が接近すると背負っているM2を構える前にホルスターからS&w M10・38ビクトリーモデルを構えて破壊した。
パット「ショックで上司の顔忘れたか?」
ひかり「パットさん…パットさーん!」
パット「心理的負荷がどれだけ大きかったんだ?
　まあ戦闘も終わったんだ、泣けるだけ泣いとけ」
ひかりはパットのジョークを聞いた瞬間緊張が切れパットに抱き着いて泣き始めた。
パットは驚かずにひかりの背中をさすっていた。

ラル「コアへの指示だが、二人とも正確な位置を示していた。
　だが、孝美の方が僅かだが早かった。
　よって、命令通り部隊には孝美を残す。以上だ」
帰投後、ブリーフィングルームでラルから勝負の結果が伝えられた。
孝美の方が僅かながら早かった。
だがブリーフィングルームにはひかりの姿はなかった。

ひかりは滑走路の先で佇んでいた。
そして泣き始めた。
ひかり「うわぁぁぁぁん！うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」
滑走路にへたり込み大粒の涙を流しながら泣いていた。
するとその後ろから誰かが近づくとひかりの隣にしゃがんで背中をさすった。
パットだった。
パットは黙って背中をさすり、落ち着き始めるといつもの癖で右手でポッケからタバコを取り出そうとするがすぐにやめる。
そしてひかりに言う。
パット「ひかり、よく頑張った。
結果がこれでもいいじゃないか、努力する凡人は恐ろしいって言うだろ？」
ひかり「でも負けましたよ…」
パット「そうだ、だが全部を出し切ったんだ。
胸を張れ、涙を流すな、お前は英雄だ。
無責任だと思うがこれでいいんだ、それにまだ最低でも４日は俺たちと一緒にいれるんだからな」
ひかり「はい！」
パットの慰めの言葉にひかりは笑顔で返事した。
パット「じゃあ戻ろうか、そろそろ日が暮れる。
今は寒い盛りだ」
そういうと二人で基地に戻っていった。

第３３話：ペテルブルクのいちばん長い日

翌日、ペテルブルクの海軍省にはペテルブルク作戦軍、さらにスオムス作戦軍、オラーシャ軍の２個戦線、スオムス・オラーシャ空軍の主だった指揮官たちが集まっていた。

彼らはザリャー・ヴォストーカ作戦の作戦前の打ち合わせのため集まっていた。

トレスコウ「各指揮官の皆様、確実指定の席にお座りください。これより作戦の最終ブリーフィングを行います。」

トレスコウが集められた指揮官たちに向かって大声で着席を促す。

それを聞いて指揮官たちはそれぞれ指定されていた席に着席した。

全員が着席したのを確認するとヴァトーチンが真ん中の台の上に上がって作戦の説明を開始した。

ニコライ「同志諸君！本日、作戦開始前の忙しい中きてくれたことに感謝する。

では早速だが作戦の説明について始めよう。

まず作戦の目的についてだ。」

ヴァトゥーチンは手に棒を持って作戦の説明を始めた。

最初に説明するのは作戦の戦略的戦術的意味であった。

ニコライ「この作戦の基本的なものはフレイア作戦の予備作戦であると言うことだ。

フレイア作戦がもし失敗した場合この作戦でネウロイにとどめを刺す、それがこの作戦の意味だ。

これはあくまで戦術的な意味であるが、戦略的な意味としてはグリゴーリの排除による東部戦線北端の安全の確保、ペテルブルクの後方の安全確保の二点にある。

この作戦後１～２ヶ月後を持って我々はナルヴァ方面への大攻勢とヴァルダイ突出部への攻撃を再開、５月をめどに我々はナルヴァ川を渡河、ペイプス湖を抑え、ヴァルダイ突出部を排除する。

このためにはグリゴーリの排除は絶対に欠かせないのである。」

戦術的にはザリャー・ヴォストーカ作戦はフレイア作戦の予備プランであるが戦略的には東部戦線北翼の後方の安全確保という重大な目的があった。

グリゴーリを排除することでこの地域の安全を確保しなければ彼らはこれ以上西にも南にも進めなかった。

ニコライ「ここまでで分からないことがあるなら後でシベリアでじっくり聞こう。

では次だ、使用兵力。

使用兵力はまずペテルブルク作戦軍、スオムス作戦軍、コラ軍団、そしてオラーシャ軍のカレリア戦線とヴォルホフ戦線の合計２００万人、戦車６０００台、各種火砲２５０００門だ。」

作戦に投入するのは総兵力２００万、戦車６０００台、各種火砲２５０００門という膨大な数であった。

これを二重三重に配してグリゴーリを包囲、殲滅するというものであった。

そのため実際の兵力密度というのは攻勢重点を除いて大したことないがそれでも後方部隊も含めれば動員兵力が２００万にもなった。

ニコライ「作戦については基本は通常の縦深突破であるがフレイア作戦の要素として列車砲旅団カレリア及び列車砲連隊スオムスの列車砲合計５０門を投入しこれを破城槌として使う。

なので作戦の基本手順としてはまず全火砲による事前砲撃で敵の抵抗力・戦闘力を全て破壊、そこに戦車部隊からなる第一波機動梯団を投入、無人の野とかした土地を前進する。

さらに巣に対しては砲兵部隊の魔導徹甲弾による直接攻撃を行う。

これにより巣そのものを破壊する、以上だ。

何か質問は？」

ヴァトゥーチンは作戦を説明し質問がないか聞いた。

すると一人の若い将軍が質問した。

「同志ヴァトゥーチン、よろしいですか？」

ニコライ「うむ、イワン・ダニロヴィチ・チェルニャホフスキー中

将。」
　質問したのは第３３軍団司令官でヴァトゥーチンとは旧知の間柄のイワン・ダニロヴィチ・チェルニャホフスキー中将、若干３９歳というこのクラスの中では最年少という優秀な男であった。
　チェルニャホフスキー「は、この作戦を実行する際の指揮権はどうなりますか？
　マンシュタインが閣下に移譲するのですか？」
　ニコライ「それについてだが作戦時に私が直接指揮権を移譲するよう迫る。
　もし拒否したら我々の忠実なる同志（チェキスト）が幕僚ごと処理してくれる」
　チェルニャホフスキー「そうですか」
　ヴァトゥーチンがチェルニャホフスキーの質問に答えると続いてフーベが質問した。
　フーベ「閣下、この作戦の指揮系統は？」
　ニコライ「指揮系統は私がすべての指揮を執りスオムス作戦軍、ペテルブルク作戦軍、コラ軍団は私の直接指揮としオラーシャ軍の２個戦線と共に私が指揮する。
　砲兵部隊はチャタイ中将が全部隊を指揮しろ」
　フーベ「なるほど」
　ニコライ「分かったな。もう質問はないか？
　ならこれで終了する。」

　同時刻５０２ではマンシュタインがウィッチたちに作戦の説明をしていた。
　昨日の勝負でひかりは負けたがペテルブルクから出られないため一応作戦会議に参加していた。
　ウィッチたちの前には映写機でグリゴーリの姿が映し出されていた。
　マンシュタイン「周知の通り、グリゴーリは現在時速５キロで南西

に移動している。
目標はペテルブルグ。この５０２で間違いない。
従来の出現した敵に応戦する策を捨て我々から打って出る反攻。
それがフレイアー作戦である」
フレイア作戦は反攻作戦だったが規模としては小さいものであった。
なにせこの前年にはベラルーシと左岸ウクライナ全域で大規模な反攻作戦が行われている上に現在進行形で右岸ウクライナ解放作戦と西部ウクライナ解放作戦が実行中であり既にドニエプル川を渡河、キエフを解放しモルドバに向け前進していた。
さらにはそれに呼応してバルカンではモエシア方向とヴォイヴォディナからダキアに向け攻勢が開始されドナウ川を渡河しムンテニアとオルテニアに侵入していた。
またバルカンではスロベニアとクロアチア方面よりハンガリーとオストマルク南部に対して攻撃を行い牽制、ロマーニャではヘルウェティアの共同で南チロルに侵攻していた。
次にマンシュタインは写真を変えボビンのような形をした謎の物体を見せる。
マンシュタイン「北方軍がグリゴーリ内部の観測に成功した結果、雲状の巣の中心には巨大な本体がありそれがネウロイの発生源であることが判明した」
ラル「ネウロイの生産工場」
それは巣の本体だった。
そしてまた次の写真に変わる。
マンシュタイン「我々の作戦目的はその本体の破壊。そのための切り札が…これだ
超巨大列車砲、グスタフとドーラだ」
二パ「これが…」
菅野「でけえ…」
マンシュタイン「カールスラント技術省の力を集結した、口径８０

０ミリ。

史上最大最強の火砲だ」

下原「８００ミリ…そんなの作れるんだ…」

写したのは現代でも史上最大のカノン砲（すべての火砲の場合３１インチのリトル・デーヴィッドという迫撃砲が世界最大、又榴弾砲だとロシアのツァーリ・プーシュカが８９０ミリで最大）クルップ製８０センチ列車砲（Ｅ）通称グスタフ、ドーラだった。

この史上最大にして謎に包まれた巨砲は史実ではセヴァストポリ攻防戦やスターリングラード攻防戦、レニングラード包囲戦に投入されその後は戦場に出ることなくそれぞれケムニッツとニュルンベルクで破壊され米軍とソ連軍に残骸を回収されたと言われている。

その常識外れの巨大さにウィッチたちは驚いていた。

マンシュタイン「まずグスタフがグリゴーリに向かって撃ち込むのは新たに開発した超爆風弾だ。

子の弾丸を使って本体を隠しているこの雲を消滅させる。

その後、露出した本体を破壊するのがドーラだ。

ドーラには対ネウロイ用魔導徹甲弾が装填されている」

孝美「魔導徹甲弾…？」

マンシュタイン「陸上ウィッチのべ数百名の魔法力を充填した、この魔導徹甲弾。

これを本体コアに叩き込み決着をつける。」

作戦の切り札となるのが新規開発された８０センチ砲用魔導徹甲弾だった。

それよりも小さい１６インチや２８センチといったものは既に開発され大量に配備されていたが８０センチともなれば開発するだけでも多くの困難があった。

マンシュタイン「だが、上空１１００メートルに位置するグリゴーリを撃ち抜くには最低でも１０キロ圏内に近づかなければならない」

クルピンスキー「そこって敵の攻撃範囲じゃないか」

列車砲が近づく１０キロ圏内というのは陸戦では至近距離である。
この距離では戦車砲は届かないにしても榴弾砲やカノン砲どころか重臼砲さえ届いてしまうのだ。
そしてマンシュタインは５０２の役割を伝えた。
マンシュタイン「５０２統合戦闘航空団、諸君らの任務は列車砲を護衛し、射程内に到達させることだ。
そして、雁淵中尉はコアの位置を特定せよ」

作戦開始日、司令部には多くの将官が詰めていた。
すると隣接する飛行場に数機のＣ―４７とＬｉ―２が着陸し中からヴァトゥーチンたちと武装した青い兵科色をつけたオラーシャ軍兵士たちが降り立った。
マンシュタイン「ヴァトゥーチン大将、その兵士たちは？」
ヴァトゥーチン「私の護衛です。いつ何時何が起きるから分かりませんからな」
その様子にマンシュタインはヴァトゥーチンに嫌味を言うがヴァトゥーチンは全く気にしなかった。
司令部に入ると部屋の一角に座りトレスコウに聞いた。
ヴァトゥーチン「作戦の最終準備は？」
トレスコウ「は、準備できてます。
フレイア作戦に関してはある程度適当にやるように指示してます。」
ヴァトゥーチン「よろしい。フレイア作戦で戦力を失うな、ここを耐えろ。
耐えれば我々の勝ちだ」
トレスコウ「分かっております」

同時刻、５０２ではウィッチたちが出撃を準備していた。
ひかりはスオムスに行けないため待機となっていた。
パットはふと出撃準備をするウィッチたちを見ているひかりに声をかける。

パット「ひかりは基地にいろよ。
　ユニットと武器があっても出てくるなよ、まあ〝非常事態〟になれば呼ぶからその時は頼むぞ」
ひかり「はい！」
ラル「いいか！グリゴーリを倒すまで帰れると思うなよ！５０２統合戦闘航空団、出撃！」
「「了解！」」
ラルの掛け声に返事すると５０２は出撃した。

離陸後５０２は素晴らしい編隊飛行で作戦空域に向かっていた。
すると菅野が隣を飛んでいた孝美に声をかける。
菅野「孝美お前はひかりに勝って俺の相棒になったんだ。
　俺たちは絶対に勝たなくちゃいけねえ、絶対にだ」
孝美「ええ。もちろんよ、管野さん」
菅野の話孝美は頷いて答えた。
すると前方に二門の巨大な列車砲を確認した。
サーシャ「グスタフとドーラを確認しました」
クルピンスキー「あれを僕たちが守るのか」
マントイフェル「それにしてもなんで偽装をしていないんだ？
　あれじゃあ座り込んだアヒルだ」
その巨大さに驚くがマントイフェルはなぜか適当な冬季迷彩さえ施されていないことに疑問を持っていた。
マントイフェルやポー、パット、バーティ、リョーニャはこの作戦のために通常の冬季用の軍服の上からシーツを改造した偽装をつけ、ユニットも上面に白の塗料を塗って偽装していた。
さらにはマントイフェルはヘルメットまで被りそれもまた白で塗られていた。
ラル「１０時の方向、グリゴーリを視認した」
右方向、１０時の位置にグリゴーリのまがまがしい雲をラルが確認する。
眼下には大規模な砲兵陣地、戦車部隊、塹壕、カチューシャ、榴弾

砲、カノン砲、対戦車砲、高射砲、迫撃砲、歩兵砲、野砲、重臼砲、そして大規模な列車砲陣地が構築され配備されていた。
その兵器はカールスラント製が多かった。
二パ「大部隊だな」
菅野「そりゃそうだ。この作戦に全部かかってるんだ」
バーティ「こんな作戦プランダー作戦以来だ」
ポー「俺は海軍だからこんな大舞台なんてほとんど見たことないな。」
リョーニャ「それにしてもファシスト共の兵器ばかりだな…
ん?どうやら同志たちの兵器もあるようだ」
その兵器がカールスラント製ばかりだとリョーニャは嘆くがそれとは別のところにロシアングリーンに塗られた車両や火砲が多数いるのを見つけた。
これはマンシュタインではなくヴァトゥーチンの持ち駒の部隊だった。

ヘプナー「作戦開始1時間前…チャタイ君は?」
トレスコウ「砲兵指揮所で指揮してます。」
司令部では艦載機の発進要請などが出され作戦準備の最終段階に来ていた。
マンシュタイン「これより、フレイア作戦を開始する」
するとマンシュタインが作戦開始を宣言した。
ヘプナー「ルビコン川を渡る…」
ニコライ「賽は投げられた」
それにヘプナーとヴァトゥーチンが呟いた。
その命令が各部隊に届くとグリゴーリに集中砲火が浴びせられた。
フレイア作戦の開始である。

第３４話：血、破壊、死、戦争、そしてネウロイ（別題：ブイレブ・ズーチッィウ）

砲兵指揮官「目標、グリッドエックスレイ２１９、タンゴ５１８」
砲兵「照準完了、装薬装填！弾種榴弾！
信管調停着発３秒前に曳火砲撃！」
砲兵指揮官「よし撃て！」
作戦が始まるとヴァトゥーチンが用意した１４０門／キロで布陣した合計６０００門もの各種火砲が火を噴きネウロイを攻撃し始めた。
ヴァトゥーチン自身は作戦そのものは反対だが初期段階の戦力をすり潰すという点に関しては賛成でありそのため集められた火砲は初期段階の作戦に投入されていた。
この破壊的かつ破滅的な鉄の暴風はネウロイに浴びせられネウロイは現れた瞬間地面ごと耕されていた。
さらにそこにオラーシャ空軍のシュットゥルモヴィークが襲い掛かりクラスター爆弾と機関砲とロケット弾で耕されこの攻撃を逃れられたネウロイは極僅かだった。
そしてシュットゥルモヴィークと砲撃から逃れた僅かなネウロイは陣地に向かうが陣地にたどり着く前に対戦車砲と戦車砲の餌食となりたどり着けたものは片手で数えられるほどだった。
そして陣地にたどり着いた数匹のネウロイはあっという間に歩兵たちのパンツァーファウストとパンツァーシュレック、地雷、火炎瓶、バズーカ、対戦車ライフルの集中砲火を浴びて破壊された。
陸上では明らかに砲兵部隊の活躍により圧倒していた。
空中では戦闘機がネウロイを襲い次々と撃墜していたが損害も出ていた。
砲兵の活躍により現れた瞬間この世から蒸発している陸戦とは全く違っていた。
そのため空戦での不利から地上部隊への損害、特にマンシュタイン

の手持ち部隊に損害が出ていた。
ヴァトゥーチンが用意した部隊はソ連軍、そしてオラーシャ軍のお家芸である徹底した隠蔽と偽装によりネウロイが真上に来ても気が付かないほど隠されていたがマンシュタインの部隊は凍土の上にそのまま大砲を据え付けただけですぐに見つかりなすすべもなく叩き潰されていた。

そしてこの鉄の暴風をの後ろでは2門の超巨大列車砲が猛スピードでレールの上を疾走していた。
サーシャ「敵の攻撃範囲に到達」
ラル「来るぞ！列車砲が射程内に到達するまで何としても守り抜け！」
作戦が開始され列車砲はレールの上を進み射撃ポイントに急ぐ、だがそこにネウロイが襲い掛かった。
ウィッチたちは散開し襲い掛かったネウロイを迎撃する。
ジョゼ「うっ！」
二パ「何だよこのビームの数！」
ポー「ファック！ふざけるな！ジャップでももうちょっとマシだぞ！」
ネウロイは列車砲に攻撃を集中、それを二パとジョゼとポーが守るがその多さにポーが愚痴る。
ロスマン「敵も本気って事ね」
バーティ「ならこちらも本気で行きましょうかレディ？
まずはワルツからだ」
その攻撃をロスマンが分析してバーティがジョークを交えて返す。
ロスマンはロケット弾を撃ち込みバーティが横から銃撃する。
マントイフェル「トゥルト！」
クルピンスキー「任せて！」
別のところではマントイフェルがネウロイを狙撃していたが数匹通してしまう。
だがすぐにクルピンスキーがそれを処理してマントイフェルの後

ろに着く。
マントイフェル「背中はまかせた」
クルピンスキー「ヴァルトの背中を守れるのは僕だけだからね」
マントイフェルにクルピンスキーが返事して二人で周りのネウロイを攻撃する。
二人は回りながら息の合った攻撃を行い次から次へと撃破していった。
ラル「5秒で1体がノルマだぞ！」
パット「タバコを吸う暇さえないな」
リョーニャ「ｙｐａａａａａ!!」
ラルは大群を銃撃しながらノルマを言う。
その横でパットは火のついてないタバコを噛みながら愚痴る。
リョーニャは叫びながら突撃し撃墜していった。
菅野「うおりゃあああ!!」
菅野は雄たけびを上げながら周りのネウロイを排除すると孝美の後ろについてクルピンスキーとマントイフェルのように次々と撃破していった。
ジョゼ「あの二人凄い！」
二パ「息ぴったり！」
その光景にジョゼと二パは感嘆の声を漏らす。
マントイフェル「あの二人凄いな」
クルピンスキー「ヴァルト、よそ見しないでよ。
妬いちゃうじゃないか」
マントイフェル「ごめん」
マントイフェルも褒めるが後ろにいるクルピンスキーが嫉妬する。
その声にマントイフェルはまた戦闘に集中する。

司令部では次々と報告が入っていた。
通信兵「第1航空隊壊滅！第8高射砲大隊壊滅！
連隊損耗率30%！ネウロイの毎分出現数半数に減少」
マンネルヘイム「攻撃を緩めるな！

撃って撃って撃ちまくれ！
出し惜しみは無しだ！」
マンシュタインの横でスオムス軍のマンネルヘイム元帥が大声を出す。
そしてマンネルヘイムの反対側ではヴァトゥーチンがヘプナーとトレスコウと共に無線機に齧りついていた。
ニコライ「チャタイ、今どうなってる？」
チャタイ『現在予定弾薬使用率９％で予定よりも少ないです。
全体損耗率は２％、机上演習時よりも少ないですね。
ネウロイも予定より早く生産能力が減衰しているようでかなり減って来てます。
ただ空軍が頼りないので損害が出てます』
ヴァトゥーチンは無線の相手であるチャタイ中将に報告を求め詳細な報告をする。
この時点では作戦前に行われた机上演習よりも使用弾薬量も損害も少なく想定よりもネウロイの生産能力が低かった。
ニコライ「そうか、そろそろフレイア作戦の第２段階が来る、爆風弾の用意をしておけ」
チャタイ『了解しました。』
ヴァトゥーチンは司令部の状況から次の段階が近いことを最新の情報を得にくいチャタイに伝えた。
チャタイは報告を受けるとすぐに隷下の砲兵部隊に爆風弾の用意を指示した。
爆風弾は８０センチ列車砲の超爆風弾の設計のベースとなった弾であり威力も小さいが大量に打ち込むことでネウロイの巣の雲を引き剥がすことができた。
彼らの作戦ではこれを使い引き剥がすことで丸裸にしてそこに大量の魔導徹甲弾を撃ち込んで撃破する手筈だった。
そしてヴァトゥーチンの予想通り作戦は次の段階へと移った。
通信兵「グスタフ、ドーラ、射程圏内到達まであと１分！」
マンシュタイン「超爆風弾発射用意！」

マンシュタインの命令を受けた８０センチ列車砲の一つ、グスタフは動き出し回転すると巣に照準する。
その結果ネウロイの攻撃が集中する。
だがその前に菅野と孝美が立ちふさがった。
菅野「こっちに来るんじゃねえ！」
孝美「邪魔しないで！」
二人のシールドとさらにその後ろにポーとジョゼ、二パがいることでグスタフへの攻撃は防がれた。
その間に砲兵たちは急いで射撃準備を整える。
通信兵「機関停止。標準誤差修正。装薬装填。安全装置全て解除。発射準備完了。グスタフ、射程圏内に到達」
グスタフが弾薬を装填、照準が終わると海軍軍人で陸軍では使わないような大口径砲に詳しいポーが警告する。
ポー「来るぞ！気をつけろ！」
マンシュタイン『発射!!』
警告したのと同時にマンシュタインが発砲を命じる。
次の瞬間、物凄い音と衝撃と共にグスタフが発砲した。
二パ「うわあっ!?」
ジョゼ「すごい衝撃！」
ある程度予想していたポーと違い二パとジョゼは発砲時の衝撃をもろに食らっていた。
かの大和の４６センチ砲の発砲時の衝撃波は甲板にいる人間を文字通り蒸発させるほどの威力である。
その二倍近い８０センチ砲の衝撃波は少し離れたところにいた二人を襲い、さらにはネウロイを吹き飛ばして巣を貫通、ネウロイの周りの雲を吹き飛ばした。

その報告は即座に司令部にもたらされた。
副官「超爆風機構発動成功。グリゴーリ周辺の雲が消滅しました」
マンネルヘイム「成功だ！」

マンシュタイン「ここまでは、です」
副官の報告にマンネルヘイムは喜びの声を上げるがマンシュタインはまだ作戦が途中だと理解していた。
そしてその報告を受けたのは彼らだけでなくチャタイもほぼ同時に入手、全火砲に魔導徹甲弾の準備を指示した。

孝美「あれが敵の本体」
ポー「ヤマトクラスよりデカイんじゃないか？」
クルピンスキー「うわー、でっかー」
マントイフェル「空飛ぶ要塞だな」
爆風弾によって雲を吹き飛ばされ現れた敵の本丸に全員呆然とする。
パットだけは暇ができたのでその間にタバコに火をつけていた。
するとロスマンがロケット弾を撃ち込む。
ロケット弾は命中するが傷一つついていなかった。
ロスマン「通常の兵器では傷もつけられませんね」
バーティ「大砲がいるな」
それにバーティとロスマンが分析する。
すると無線からマンシュタインの指示が飛んできた。
マンシュタイン『雁淵中尉、コアの特定だ』
菅野「行くぞ孝美！」
孝美「了解！」
マンシュタインの指示が飛ぶとすぐに菅野と孝美が動き出した。
それに続いて他のウィッチも続く。
ラル「孝美をコア特定可能エリアまで護衛する」
「了解」
ラルの指示に他のウィッチも続いてグリゴーリに接近する。
接近すると巣の下の方から触手を出しそれで攻撃する。
その数と攻撃は凄まじいものであった。
ウィッチたちも触手を攻撃するが全くきりがなかった。

その間に孝美は魔眼を使ってコアを探す、ネウロイは孝美を攻撃しようとするがその前に菅野が立ちはだかり攻撃を防いだ。
菅野「見えたか、孝美!?」
孝美「ええ。目標重捕捉…目標補正…
　最終捕捉…完全捕捉!グリッドＨ２５４１、Ｔ０４２９!」
孝美はコアを特定すると即座に司令部に伝えた。

通信兵「グリゴーリのコアを特定!」
マンシュタイン「ドーラ、発射用意!」
連絡を受けたマンシュタインは即座に発射用意を命じる。
砲兵たちはカウントダウンを始める。
砲兵「ドーラ、術式完了。発射１０秒前。９、８…」
だがネウロイはドーラに攻撃を集中、そして巨大なビームをドーラに向けて発射する。
ジョゼ「くっ…くぅ…」
二パ「くそっ…くそっ…」
ポー「サバノビッチ!」
二パ、ジョゼ、ポーは何とか耐えようとするがとうとう突き破ってドーラの砲身を直撃、ドーラは砲身が花弁のように裂けてしまった。
砲兵は即座にその連絡を司令部に伝える。
通信兵「ドーラ被弾!砲身が融解して発射できません!」
マンシュタイン「何っ!?」
マンネルヘイム「撃てないだと!?」
この想定外の事態に甘い見通しを持っていた二人は動揺する。
マンシュタイン「ならばグスタフで撃つ!予備弾を用意しろ!」
通信兵「グリゴーリがペテルブルク方面に移動を開始しました」
グリゴーリが移動を開始した連絡にマンシュタインとマンネルヘイムは驚く。
マンシュタイン「何だと!?」
マンネルヘイム「発射までどれくらいだ!?」
砲兵『術式の展開に２０分必要です!』

マンネルヘイム「遅い！射程外に出られたら終わりだぞ！」
このような状況を想定していなかった二人は動揺するがヴァトゥーチンは冷静に無線機でチャタイに作戦を指示する。
ニコライ「ザリャー・ヴォストーカ作戦発動用意！
５分後に始めろ！」
チャタイ『は！５分後に始めるぞ！急げ！』
ニコライ「はん！これだから私の言ったとおりだ！
無能どもが！」
ヴァトゥーチンは無線でチャタイに指示を出すと大声を出してマンシュタインを非難する。
そして指を鳴らす。
すると指令室のドアが開いて青い兵科色のオラーシャ兵がなだれ込みマンシュタインに武器を向けた。
マンシュタイン「ヴァトゥーチン大将、なんですかこの兵士は？」
ニコライ「私の忠実なる部下、ＮＫＶＤ（チェキスト）ですよ。」
マンネルヘイム「クーデターか！」
マンシュタインがヴァトゥーチンに聞きマンネルヘイムがクーデターだと声を荒げる。
それにマンシュタインにトカレフを向けているＮＫＶＤ将校が答える。
ＮＫＶＤ将校「違う、正式な辞令だ。
フレイア作戦失敗時には即時にマンシュタイン元帥を北方軍総司令官から解任、ヴァトゥーチン大将を代行指揮官とする。
なお権限の譲渡は一切をヴァトゥーチン大将に一任するとある。
さあ、部外者は出ていけ！」
ＮＫＶＤ将校が説明し終わるとＮＫＶＤの兵士はマンシュタインを銃床で殴ったり蹴り飛ばしながらマンシュタインを司令部の外に出した。
マンシュタインが外に出るとＮＫＶＤの兵士は今度はマンシュタインの幕僚たちに銃を向け、このことを前線に伝えようとしていた通

信兵を拳銃で射殺する。
ＮＫＶＤ将校「いいか！お前らの誰かが不審な動きをすればこうなる！
間違っても変なことを考えようとするなよ」
射殺した将校が拳銃を幕僚たちに向けながら脅す。
それに幕僚たちは従うほかなかった。
ニコライ「さてと、マンシュタイン元帥より事情があって指揮権を移譲したヴァトゥーチン大将だ。
現在どうなっている？」
パット『こちら５０２、現在魔導徹甲弾を回収してグリゴーリの真上に輸送中。
これでやります』
ニコライ「は？どういう意味だ？」
パット『そのままですが』
司令部を掌握し状況を聞くとパットが答えた。
だがその内容に彼は理解できなかった。

第３５話：グリゴーリはどっちだ?!

時はドーラが破壊されグリゴーリが移動し始めた頃に遡る。
ウィッチたちは攻撃がやみ巣が移動し始めたことに気が付いた。
ロスマン「攻撃が止んだ?」
クルピンスキー「僕達には興味なしってことかな」
マントイフェル「俺たちは所詮大河の流れを止めようとする小石か…シャイセ!」
自分たちを無視して通り過ぎて行くグリゴーリを見てウィッチ達は悔しがる。
特にマントイフェルにはかつてのドイツ空軍での祖国を焼かれているにもかかわらず足止めさえできずに片っ端から落とされ、そもそも離陸すらできない状況を思い出して悔しかった。
二パ「２０分も待ってたら射程外になっちゃうよ」
菅野「こっちの武器じゃ歯が立たねえし、どうすりゃいいんだ!」
グリゴーリの外殻は歩兵用小火器や航空機用軟目標用ロケット弾程度の火力ではびくともせずもはやウィッチには手はないように思えた。
だがふと孝美は下のドーラの残骸を見ると何かを思いついたのかドーラに向かった。
菅野「孝美?」
それに菅野が気が付く。
孝美はドーラの残骸に近づくとＳ１８を捨てドーラの隔螺式閉鎖器を開けると中から魔導徹甲弾を取り出した。
ラル「あれは!」
ロスマン「魔導徹甲弾?まさか!」
バーティ「ｕ　ｗｏｔ　ｍ８?」
すると孝美は魔導徹甲弾を持ちあげようとする。
もちろん重量が一トン近い、この半分以下の２８センチ砲弾でさえ砲弾2発と装薬を合わせれば1トン近いのにその倍以上のサイズの８０センチ砲弾が動くわけなかった。

下原「弾を運ぶつもりです！」
ラル「直接ぶつけようって気か！」
サーシャ「魔導徹甲弾の重量は1トン近いわ」
それを見て全員が無理だと思う。
当たり前だが一人で1トン近いものを運ぶなんてできるのはせいぜい５０１のバルクホルンとアフリカにいる稲垣真美ぐらいである。
ミラーの馬鹿でかいＢＫ―５もユニットにアームを介して馬力のあるＭｅ４１０に固定しているのである。
ジョゼ「ム、ムリですよ！」
孝美「きっと、ひかりならこうするはず！絶対にあきらめるわけにはいかないの！」
ジョゼが近づいて止めようとするが孝美はそれでも運ぼうとする。
するとその隣に菅野が近づく。
菅野「バーカ、一人で出来るわけねーだろ」
二パ「そうそう」
さらに二パも手伝おうとする。
するとパットが吸い終わったタバコを捨てユニットで踏んで火を消すと二パの横に並ぶ。
パット「Ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ，ｎ，ｅｓｔ　ｐａｓ　ｆｒａｎ▪ａｉｓ.」
ジョゼ「不可能という言葉はフランス的ではない、ですね」
パットの言った言葉を孝美の隣に来たジョゼが解説する。
さらにバーティとマントイフェルも手伝う。
バーティ「レディーに重いものを持たせるのは紳士としては如何なものですから。
かのベンジャミン・ディズレーリは言った、成功は大胆不敵な向こう見ずの子、と」
マントイフェル「こう見えて固有魔法は筋力強化なんだ。
それに生半可な鍛え方はしてないぞ」
クルピンスキー「いや、でも肩が治ったばっかりじゃん。
僕も手伝うよ、ヴァルトに怪我されたらたまらない

し」

さらにクルピンスキーやロスマン、ポー、下原も手伝おうとする。

唯一リョーニャは冷静になって無理だと思い後ろで冷静に見ていた。

ロスマン「やっぱり妹さんとソックリね」

菅野「姉妹揃ってバカって事か」

ロスマンが言うと菅野も続ける、するとポーがリョーニャに聞かせるように言う。

ポー「バカと天才は紙一重だ、バカは時に思いがけない策で状況を打開する。

だろ?ロスキー」

リョーニャ「ああ!やればいいんだろやれば!

こんな作戦成功するか!?」

ラル「成功させればいいだろ」

下原「ええ、リョーニャさん。

私たちで成功させましょう!」

それでも抵抗するリョーニャだったがラルと下原の説得に渋々手伝う。

全員が揃うと下原が掛け声を取って持ち上げようとする。

下原「せーの!」

「うぉおおお!」

すると一トン近い砲弾はゆっくりと上がっていった。

ジョゼ「上がった!」

孝美「やった!」

ラル「行くぞ!」

十分な高さまで上がるとウィッチたちは下に回り込んで巣に向かう。

するとここで司令部を掌握したヴァトゥーチンからの無線が届いた。

ニコライ『さてと、マンシュタイン元帥より事情があって指揮権を移譲したヴァトゥーチン大将だ。

現在どうなっている？』
パット「こちら５０２、現在魔導徹甲弾を回収してグリゴーリの真上に輸送中。
これでやります」
パットが答えるがヴァトゥーチンには理解できなかった。
なにせ常軌を逸したありえない行動だからだ。
ニコライ『は？どういう意味だ？』
パット「そのままですが」
ヴァトゥーチンが聞きなおすがパットはそれに返事するだけだった。
だがそれがグリゴーリに勝手に向かっていることと理解したヴァトゥーチンは即座に指示した。
ニコライ『五分後に砲兵部隊によってグリゴーリに砲撃を行う。
直ちに安全空域へ退避せよ、これは命令だ！』
ラル「大将、２分でやります」
ヴァトゥーチンは５０２を退避させようとするがラルが何とか説得しようとする。
それを聞いてヴァトゥーチンは怒り狂いそうになるがそれにヘプナーが無線を替わって何とか諫める。
ヘプナー『分かった、２分、２分だけだ。
それ以上なら君らの安全は保障しない。
砲撃に巻き込まれても自己責任だ、それでもいいならやりたまえ』
ラル「ありがとうございます、ヘプナー大将。
許可が出た、やるぞ！」
ヘプナーが許可を出したころには５０２はグリゴーリの真上近くに来ていた。
サーシャ「敵の直上６００メートル！目標地点到達！」
孝美「コアの位置変わらず！補足完了！」
孝美とサーシャが報告するとラルが掛け声を取る。
ラル「降下！」

ラルの指示に従い降下してネウロイに近づく。
そしてサーシャが次の指示を出す。
サーシャ「投下！」
その指示に従い全員が手を放すが一人だけ孝美が放さなかった。
菅野「何やってんだ、孝美！」
孝美「絶対に当てて見せる！」
孝美は絶対に当てるために砲弾を放さなかった。
するとグリゴーリも気が付き攻撃した。
だがその前に菅野が立ちはだかり攻撃を防ぐ。
菅野「行くぞ！孝美！」
孝美「管野さん！はい！」
菅野が盾となりさらに降下すると砲弾を放す。
孝美「いっけぇぇぇ！」
放された砲弾は落下しながら直撃、貫通してコアを破壊し破片となった。
菅野「やったぞ、孝美！」
孝美「はい！」
パット「ん？何かがおかしいぞ」
孝美と菅野が喜ぶがパットが何かに気が付く。
破片が逆再生するかのように元に戻った。
ポー「は？まさか…」
マントイフェル「どうしてこうも面倒くさい敵とばかり当たるんだよ」
すると孝美があることに気が付いた。
孝美「あれは…！
　コ、コアの中にコアが見えます！」
クルピンスキー「なんだって!?」
ラル「こいつもコアの中に真コアを持っていたのか！」
グリゴーリもまたコアの中にコアを持つタイプだったのだ。
ニコライ『なに？こいつもこの間ＱＰ１１４を襲ったのと同じなのか

とりあえず聞くが真コアは見えるか?』
孝美「見えます!グリットＨ６…えっ!?」
ラル「どうした?孝美」
ヴァトゥーチンが一応コアの位置を聞き孝美が答えようとするが途中で止まる。
孝美「き、消えた!?捕捉不能!真コアが見えません!」
ラル「何だと!?」
孝美「コアが魔眼を遮っているんだ…くっ…」
コアが魔眼を遮ることで真コアが補足できなかった。
ニコライ『分かった、５０２は即座に安全空域へ退避せよ。
繰り返す、安全空域へ退避せよ』
「え?」
突然の退避命令にウィッチたちは驚く、そして次に飛んできたのはヴァトゥーチンの作戦開始の命令だった。
ニコライ『全軍に下令、ザリャー・ヴォストーカ作戦発動!
同志諸君!砲兵諸君!戦車兵諸君!兵士諸君!労働者諸君!
祖国が呼んでいる!
母の涙に報いるため!祖国のため!撃て!撃て!』

ニコライ「全軍に下令、ザリャー・ヴォストーカ作戦発動!
同志諸君!砲兵諸君!戦車兵諸君!兵士諸君!労働者諸君!
祖国が呼んでいる!
母の涙に報いるため!祖国のため!撃て!撃て!」
コアを捕捉できないという連絡を受けると即座にヴァトゥーチンは作戦を開始した。
その連絡はすぐにチャタイに伝わる。
チャタイ「全軍砲撃開始」
砲兵将校「了解、全軍砲撃開始!」
チャタイは連絡を受けるとすぐに隷下の全部隊の合計６０００門

以上の火砲に射撃を命じる。
その連絡は砲兵部隊に伝わると砲撃が開始された。
オラーシャ軍将校「目標グリゴーリ！Ｏｇｏｎь！Ｏｇｏｎь！Ｏｇｏｎь！」
オラーシャ軍将校が砲撃を命じると彼の指揮する陣地に据えられた２０門以上の１５２ミリ榴弾砲が火を噴く。
さらに別の陣地では
列車砲将校「各門調停完了、信管調停完了、ファイア！」
カールスラント人将校が命じると５０門以上の各種列車砲が火を噴き２０キロ以上先のグリゴーリに向けて巨弾を放つ。
数十秒後、グリゴーリ全体が砲弾の着弾の煙に包まれた。
観測兵「第１弾着弾今！グリゴーリ！大破！」
チャタイ「よし、連続射撃！反撃の隙を与えるな！」
煙が晴れるとグリゴーリは数百発以上の魔導徹甲弾を食らい半壊していた。
すぐにチャタイは連続で砲撃を命じる。
すぐにグリゴーリはまた煙に包まれ大爆発が連続して発生した。
チャタイ「いいぞ！その調子だ！いいか！弾幕はパワーだ！
奴が死ぬまでぶちのめせ！」
砲兵将校「は！とにかく撃ちまくれ！
弾がないなら歩兵と戦車兵と工兵も使って弾薬を運べ！
何をやってもいい！とにかく砲撃を絶やすな！」
そのこの世のものと思えないほどの砲撃に砲兵将校たちは大興奮する。
彼らも人の子であり何より骨の髄まで大砲に魅せられた者たちである、彼らにとっては数千門の火砲の一斉射撃など夢のような光景だった。
チャタイ「全く夢見てぇな光景だぜ！若返ったぞ！
ハンガリーじゃこんな光景滅多にお目にかかれねえぞ！」
砲兵将校「ドイツでもですよ！今まではイワンにやられてた側ですがやってみる側になれば最高ですよ！」

チャタイ「全くもってそうだ！大砲はぶっ放す方に限る！」
砲兵司令部はもはや異様な熱気を発していた。
砲兵たちの砲撃よりもはやネウロイは反撃さえできずに痛めつけられていた。
だがコアを破壊できず長期化しつつあった。
ニコライ「まだ破壊できないのか…５０２に真コアの位置を捜させろ。
　一瞬でいいし大まかでいい。どうせ精密射撃なんてできないんだ、大まかな位置で構わん」
流石に長期化すれば砲兵部隊に危険を与えるほか火薬残渣による暴発事故、なにより戦場で最も貴重な資源である時間を浪費するだけになってしまう。
それを避けるためにヴァトゥーチンは真コアの大まかな位置を捕捉するよう５０２に指示した。
この連絡は５０２、そして同じ無線チャンネルを使ってずっと聞いていたペテルブルクのひかりにも届いてた。

ひかり「え？お姉ちゃん…あれ使う気じゃ…」
部屋で無線にかじりついていたひかりはヴァトゥーチンの指示を聞いて孝美が絶対魔眼を使うのではと危惧する。
そして部屋を飛び出すと格納庫に向かいユニットを履く。
だがすぐに整備兵が止めようとする。
整備兵「雁淵軍曹！ダメです！」
ひかり「お姉ちゃんを止めないと！」
整備兵「それでもダメです！
　ジャベール大尉から自分ラル少佐の指示以外であなたを上げるなと言われてます！」
ひかり「え…パットさんが？」
ひかりは自分を止めようとする意外な人物の名前に驚いた。
パットはあらかじめひかりが出てきそうなことを予期して整備兵にひかりを指示以外で上げるなと命令していた。

ひかり「なら…パットさんに聞いてください！」
整備兵「は、はぁ…」
ひかりはなんとしても離陸しようとする。
整備兵はどうしようもないため無線機でパットに問い合わせる。

そのころ、パット達は安全空域に退避し遠くから砲撃を見ていた。
パット「圧巻だな…」
マントイフェル「流石にネウロイもこれではひとたまりもないだろう」
ポー「あそこにいなくてよかった…」
リョーニャ「いつ見ても砲兵たちの砲撃は素晴らしいな」
バーティ「恐ろしいな…」
その恐ろしい砲撃に全員が心の底から恐怖していた。
すると突然無線が響いた。
整備兵『こちらペテルブルク、ジャベール大尉、雁淵軍曹が離陸しようとしています。
どうすればいいでしょうか？』
パット「は？」
孝美「ひかり！」
その内容にパットと孝美は驚いた。
そしてパットは少し考えると答えを出す。
パット「分かった、出してやれ。
どうせあいつは止めたところで格納庫の壁ぶち抜いても離陸するさ。」
整備兵『は、はぁ…分かりました』
孝美「パットさん！」
パットの指示に孝美は抗議の声を上げる。
だがパットは意に介さない。
パット「止めたところで上がってくるさ。
君だってそう思うだろ？あいつはそういう人間だって」
孝美「そうね、そういう子だったわね」

整備兵「は、はぁ…分かりました」
ひかり「どうでした？」
整備兵は困惑しながらも無線を切る。
ひかりは答えを聞いた。
整備兵「出撃していいとのことです」
答えを聞くとひかりはそのまま返事もせず武器を持って離陸した。
目指すはグリゴーリだ。

第３６話：遠くから異なるコアを見分ける方法

ニコライ『５０２、今すぐコアの位置を報告しろ。
大まかな位置でいい。
これ以上時間がかかるとだいぶ不味いぞ』
孝美「分かりました」
ひかりがグリゴーリに向かった頃、改めてヴァトゥーチンは５０２にコアの位置の報告を命じる。
グリゴーリは相変わらず砲撃の爆発に包まれ反撃すらしてこないがコアを、正確にはコアはすでに何回も破壊しているが真コアが加害半径に入っていないため破壊できていなかった。
ヴァトゥーチンからの無線を聞いていた菅野がふと質問する。
菅野「さっき見えた位置じゃダメなのか？」
孝美「真コアは移動している。もう同じ位置にはないわ」
ニパ「じゃあ、どこに撃っていいかわかんないの？」
二パは困ったように言う。
コアの位置がわからないため砲兵部隊はとにかくグリゴーリに反撃の隙を与えず、さらに徹底して攻撃能力を破壊しつつコアを破壊しようとしていた。
すると孝美は突然グリゴーリのほうに向かった。
サーシャ「雁淵中尉が本体に向かっていきます！」
ラル「待て！孝美！」
菅野「おい！孝美！」
パット「バカ！戻れ！」
すぐにラルと菅野、パットが止めようとするが孝美は無視する。
ラル「はやまるな、孝美！」
孝美「隊長！他に方法がないんです！」
ラル「バカ野郎！」
ラルが説得するが孝美は拒否した。
そして爆炎に包まれるグリゴーリの手間で止まる。
孝美「発動…絶対魔眼！」

砲撃でグリゴーリには反撃の隙は無いと判断して孝美は絶対魔眼を発動する。
その光はその数十キロ後ろで全力で向かっていたひかりにも見えた。
ひかり「赤い光…ダメ！お姉ちゃん！」
光はそれを見るとユニットを全開にして向かった。
そして孝美は絶対魔眼を使ってコアを探し始めた。
孝美「コア補足、目標、最終補正！
完全捕捉！
真コア、グリットＨ５８９５４…」
特定し、位置を報告するが次の瞬間、装填間隔の関係上一瞬薄くなった弾幕の隙間からネウロイがビームを発し孝美を攻撃した。
この砲撃で反撃はないと思っていたウィッチたちは驚いてすぐに向かった。
孝美は持てる魔力を振り絞ってシールドを張り防ぐが突き破って負傷させた。
顔を歪めながらも報告を続ける。
孝美「Ｔ８７４４９…」
ニコライ『ハウ５８９５４、テーレ８７４４９、了解。
おい！これを今すぐチャタイに伝えろ！』
位置を報告し終わった孝美は糸が切れたように落下する。
すぐにジョゼとリョーニャが向かい孝美をキャッチする。
リョーニャ「右腹部に裂傷、出血あり、ジョゼ、応急処置だ！」
ジョゼ「はい！」
すぐにリョーニャはポッケから包帯を取り出すと手際よく患部に巻き、さらに痛み止めにモルヒネを取り出す。
リョーニャ「モルヒネだ、効くぞ」
孝美「うっ…」
モルヒネを打たれ一瞬苦しそうな声を出すがすぐにモルヒネが効いて気を失った。

チャタイ「新座標ハウ５８９５４、テーレ８７４４９に効力射！急げ！」

新座標の情報を入手した砲兵司令部では即座に砲兵部隊に対して即座に砲撃を命じる。

砲兵部隊はその連絡を受けるとすぐに目標を変更してそのグリッドに破壊的な砲撃を与える。

だがすぐにチャタイは違和感を感じた。

チャタイ「おかしい…座標の通り撃っていて、確実に制圧しているはずなのにコアを破壊できていない…

何かがおかしいぞ。」

なぜか確実に制圧しているにもかかわらずコアが破壊できていないのだ。

砲兵部隊の火力集中により巣の撃破というのはすでに他の地域、バルカンやウクライナ、白ロシア、コーカサス、北カールスラント、南チロルなどでは何度も行われて確実に破壊してきたがこのようなことは初めてであった。

そしてチャタイはある仮説を立てる。

チャタイ「まさかとは思うが着弾するたびにコアが移動している？」

砲兵将校「そんな馬鹿なことが…」

チャタイは着弾するたびにコアが移動することで弾を回避している可能性に気が付いた。

そしておそらくそれがあるのは一度弾が着弾した場所、理論上砲撃や爆撃に対して最も安全な場所というのは一度砲弾や爆弾が落ちた場所である。

この時代の砲撃の精度というのは現代と比べ物にならないほど低い、特に長距離射撃となれば精度は精々１０メートルか５メートル単位である、だがこの場合求められるのは最大で１メートル単位、より正確を期すなら３０センチ単位の精度が求められた。

そんなことは不可能である。

チャタイ「ありえないと思うかもしれないが現実的に考えればそうだ。
　そうなればネウロイ全体を一撃で制圧するか、コアの周辺だけをピンポイントで破壊するかのどちらかだ。
　神に祈って気まぐれな一発がコアを破壊するのを祈るしかない」
砲兵将校「神に祈って大砲を撃つだけですか…」
その運任せな現実に二人は気が付いた。
チャタイ「ああ、５０２に連絡、砲撃している間中真コアの位置を報告し続けろ」
チャタイは５０２にコアの位置を報告し続けるよう要請する。
それが最良の選択と言えた、だがその選択はすぐに潰えた。
通信兵「５０２より連絡、雁淵中尉の負傷により要請は不可能、とのことです」
チャタイ「なに！」
孝美が負傷したため彼の要請は実行不能だった。

その頃５０２はグリゴーリから少し離れた場所で負傷した孝美を囲むように立っていた。
ラル「孝美はどうだ？」
リョーニャ「出血は抑えた。心拍も血圧も安定、呼吸もある。
　体温が少し低いがこの外気温じゃそうなるだろう。
　後はモルヒネの効果が切れて起きるのを待つだけだ」
ラルが応急処置を終えたリョーニャに孝美の容態を聞いた。
リョーニャとジョゼの迅速な処置により孝美は無事であった。
すると彼らの耳にエンジン音が聞こえてきた。
すぐに周りを見渡すと上空から誰かが降りてきた。
菅野「ひかり!?」
クルピンスキー「ひかりちゃん？」
ロスマン「ひかりさん…」
パット「やっと来たか」

来たのはひかりだった。
ひかりは降りるとすぐに地面に寝かされた孝美に駆け寄る。
ひかり「お姉ちゃん！お姉ちゃん、しっかりして！死んじゃ駄目っ！」
ひかりは泣きながら孝美に言う、するとリョーニャが肩をさする。
リョーニャ「大丈夫だ、今は鎮静剤の効果で寝ているだけだ。
傷も塞いだし、あとで詳細な検査をする必要はあるが無事だ」
ひかり「え…よかったぁ…」
リョーニャからの詳細な状態を聞いてひかりは泣き止んで安心する。
するとパットがひかりに近づくと頭を下げた。
パット「ひかり、油断していて君の姉を怪我させてしまった。
済まない。」
ひかり「パットさん…」
パット「あの砲撃で反撃はできないと踏んでいたんだ。
だが奴は反撃して君の姉に怪我をさせてしまった。
このことの責任は自分にある。許してもらおうとは思ってない。
だが謝らせてくれ」
パットは孝美に怪我させたことを謝った。
もしあの時自分がついていれば怪我をさせなかった、それだけは彼は確信していた、そして何より筋を通すために謝った。
それにひかりはパットの手を取ると言った。
ひかり「パットさん、そんなこと言わないでください！
皆さんでお姉ちゃんを助けようとしたんですからお礼を言わなきゃいけないのはこっちの方です！」
パット「ひかり…」
するとパットは安心したのか顔を上げて微笑みながらひかりの頭をなでる。
パット「ひかり、お前は本当にいい子だよな。」

ひかり「ありがとうございます」
ポー「おーい、あんたらがいい感じになっているところ悪いがさ、あれなんだ？」
ひかりとパットが話していると周りを見ていたポーが森の方に何かがあるの気が付いた。
その手間にはタイヤの跡とスリップ痕があった。
ラル「なんだ？」
バーティ「トラックか？」
ロスマン「行ってみましょう」
ポーが見つけたものの方にウィッチたちが向かう。
そこにあったのはスリップして雪だまりに頭から突っ込んでスタックしたメルセデスベンツＬ１５００Ｓトラックだった。
ポー「トラックだ、何かを運んでいたんだな」
バーティ「こりゃあ魔導徹甲弾だ。
方向からしてどうやらドーラに砲弾を運んでる最中にスリップして雪だまりに突っ込んだんだろう。
重すぎて回収できなかったんだろうな」
バーティが箱の表示を見て魔導徹甲弾と判断する。
魔導徹甲弾は１ｔ近いため通常のトラックや砲兵部隊にあてがわれている装備では雪だまりに突っ込み、さらに不安定な場所では回収するのは困難だったのでそのまま放置されていた。
するとポーがサーシャに聞いた。
ポー「サーシャ、一つ聞きたいんだが仮に魔力を有した物体Ａを魔力を持っていない物体Ｂに魔力を移すことってできるか？」
サーシャ「え？ええ、まあできますよ」
ポー「そうか、ならいけるな。
なあ、俺に言い考えがある。
乗るか？」
サーシャの話を聞いてポーは名案が浮かんだ。
そしてその内容をバーティ、リョーニャ、パット、マントイフェル

に一通り説明した。
バーティ「成功は大胆不敵の子供、その言葉通りだな。」
マントイフェル「面白いな」
パット「Ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ，ｎ，ｅｓｔ　ｐａｓ　ｆｒａｎ▪ａｉｓ.」
リョーニャ「成功するか?.なんて言ったら多分下原にまた言われるな」
その内容に驚くが同時に面白いと評価する。
そしてさっそく5人は行動を開始する。
まず荷台から無理矢理魔導徹甲弾を引っ張り出すとポーは側面を銃で撃って一部を壊す、そしてその中にトラックの装備品のバールを取り出すと5人でバールを動かして中から弾芯を無理捻じ曲げて出した。
その様子にウィッチたちは何をする気なのか全く分からなかった。
ロスマン「えっと、何をする気?」
ポー「簡単だ、こいつの魔力を菅野の手袋に移す、そしてひかりがコアを見つけて菅野がそれを殴る。
簡単な賭けだ。さあどうする?」
ポーが乗るか聞く、するとラルが答える。
ラル「その賭け、乗った。」
クルピンスキー「いいね、面白そうじゃん」
サーシャ「ポーさん、バカですね。
やりましょう」
菅野「ああ!巣を殴るなんて最高じゃねえか」
ポーがやるか聞くと口々に賛成する。
ポー「よし、ならやろうじゃねえか。
時にはアリだって猛毒で襲い掛かるってな!」
ポーがそういうと早速ウィッチたちも動き始める。
まずリョーニャは連れてきた孝美をトラックの陰に移す。
ポーたちは菅野の手袋に魔導徹甲弾の弾芯から魔力を移した。
そしてパットは無線で司令部に掛け合う。

パット「こちら５０２、ヴァトゥーチン大将、一つお願いがあります」
ニコライ『ジャベール大尉、なんだ？』
パット「こちらに策があります。
　１０分時間をください」
ニコライ『策？何をする気だ？』
パットはヴァトゥーチンに作戦を説明する。
説明し終わるとヴァトゥーチンは少し考える、そして少しすると答えた。
ニコライ『いいだろう、ただし１０分だけだ。
　もし１０分以内にできなかったら君らごと巣を吹き飛ばす、いいな？』
パット「はい！ありがとうございます！
　それと、できれば弾薬の補充を要請します。」
パットは作戦の許可をもぎ取ると今度は心もとない弾薬の補充を要請した。
既に彼がもっていた弾は弾倉一個分、せいぜい２５０発だけだった。
ニコライ『いいだろう、そこからならオーボエ１０９８地点の塹壕に向かってそこから補充を受けろ。
　歩兵部隊にはこちらから要請する』
パット「は、分かりました。
　隊長、許可と補給要請、何とかできました」
作戦の許可と弾薬の補充をもぎ取ったパットはラルに伝える。
だが作戦はともかくパットの独断で弾薬補充を要請していたためラルは驚いた。
ラル「弾薬補充？そんなこと頼んでないぞ」
マントイフェル「弾薬補充か、有難い。もう残り２５発しかない」
ただマントイフェルなどはもう弾薬がほとんど残っていないためこの判断は有難かった。
その後ろでは菅野の右手に魔導徹甲弾から魔力を移していて手袋

は少しずつ青く光っていった。
菅野「うおぉ…！」
ひかり「すごい！」
ポー「これで菅野の右手は魔導徹甲弾とほとんど同じだ。
パット！こっちの準備はできたぞ！」
ポーが準備が終わったことをパットに伝える。
パット「そうか、ならまずはオーボエ１０９８地点に移動して弾薬補充を受けてから行くぞ。」
そういうとウィッチーズたちは孝美とジョゼ、リョーニャを置いて離陸した。

数分後、ウィッチたちは指定された塹壕のある場所にやってきた。
クルピンスキー「ねえ、ここに本当に塹壕があるの？」
パット「そのはずなんだがな…」
だが眼下に広がるのは雪原だけだった。
するとポーが雪原の一角から何かが光っていることに気が付いた。
ポー「ん？向こうになんかあるぞ。
下原、見えるか？」
下原「えーと、塹壕です。
かなり巧妙に隠されてます」
下原が遠距離視を使って確認するとそれは巧妙に隠蔽された塹壕だった。
ウィッチたちはそこに近づいて呼びかけた。
ラル「５０２統合戦闘航空団の者だ！誰かいるか！」
すると塹壕の中から空軍の規格帽を被ったヴィンターヤッケを着たカールスラント兵が出てきた。
兵士「あああんたらか！おい！持ってこい！」
出てきたカールスラント兵は合図すると中から別の兵士が大量の弾薬と地雷やパンツァーファウスト、吸着地雷などを持ってきた。
兵士「へい、これが全部だ。
ＤＰ２８の弾倉４つ、ＭＧ４２の５０発弾倉５つ、Ｓｔｇ４４

の弾倉１０個、１４．５ミリ弾１００発、１２．７ミリ弾５００発、吸着地雷５個、パンツァーファウスト５つ、火炎瓶４本、工兵用爆薬２０キロ、手榴弾３０個にＰＰＳＨ４１２丁だ」

マントイフェル「こんなにくれるのか？」

兵士「ああ、同じ空軍だからな！」

マントイフェルが聞くと答えた。

そしてその言葉にマントイフェルはピンときた。

マントイフェル「あんたら空軍野戦部隊か？」

兵士「俺たちは第２１猟兵師団だ。

もとはと言えば空軍部隊さ」

彼らは空軍兵士からなる第２１猟兵師団の兵士だった。

だからこそ彼らは装備品を大盤振る舞いしていた。

ウィッチたちは自分の使う武器を取っていく。

するとパットが横に置かれた変な形のものを取る。

パット「なんだこれ？」

兵士「そいつは吸着地雷だ。

そいつをネウロイの体に張り付けて中の紐を引っ張る、そうしたら成形炸薬でぶち抜ける」

パットが取ったのは吸着地雷、戦車の車体に張り付けて使う成形炸薬である。

戦車に近づかなければ使えない極めて危険な対戦車兵器だがその貫通能力は１４０ミリもあった。

だが極めて危険で扱いずらい兵器であり同様の兵器と言えばせいぜいソ連のＲＰＧ―４３ぐらいしかないようなものであったため４４年の５月には生産中止されてしまった兵器である。

ちなみに大戦中の４３年の後半から４４年の７月頃までのドイツ戦車に施されていたツィメリットコーティングは元々この兵器のコピー品が連合軍で使われることを危惧して行われた。

だが実際は連合軍はもっと使い勝手のいいバズーカやＰＩＡＴを使ったためコピー品が生まれることは無かった。

パット「そんな危険なものなのか？」

兵士「ああ、だからそいつは去年には生産中止されたよ。
ここにあるのは残り物だ。
あ、取ったんだから持っていけよ」
兵士たちはウィッチにあげることでこの面倒くさい上に厄介で扱いずらい兵器を厄介払いしようとしていた。
そして全員が武器と弾薬を持ったことを確認したラルは掛け声をかける。
ラル「さあ、奴をぶっ飛ばしにいくぞ！」
「「了解！」」

第３７話：空飛ぶブレイブウィッチーズ

ニコライ「分かった、５分後に砲撃を中止する。
　そのタイミングで突入しろ、いいな？」
パット『は、了解しました』
ヘプナー「本当に彼女たちにやらせるのかね？」
５０２の攻撃開始直前、ヴァトゥーチンは５０２と最終打ち合わせをしていた。
そして終わると横からヘプナーが聞いた。
ニコライ「ああ、とりあえずやらせるだけやってみよう。
　失敗しても壊滅しなければそれでいい」
ヘプナー「なるほど、まあ選択肢は多いに限る。
　ただ全力で支援するんだろ？」
ニコライ「形だけでもな。
　ウィッチを見殺しにしてみろ、我々の支持を失いかねない。
　そうなればあのファシスト共に対して政治的に不味すぎる。」
ヴァトゥーチンはこの作戦が成功するとは思ってはいないが形だけでも支援しなければウィッチ、それも最も戦略的に重要な部隊を見殺しにしたという汚名を被り政治的な支持を失いかねなかった。

パット「隊長、５分後に砲撃中止、それから１０分間砲撃を一時中止します。」
ラル「分かった。
パットはヴァトゥーチンとの打ち合わせの内容をラルに伝えた。
すでにウィッチたちはグリゴーリに向け飛んでいた。
ラルは飛びながら先日の戦闘の勝負を思い出す。
ラル「この前の戦闘の時、先に真コアを特定したのは確かに孝美だった。
　だが、よりピンポイントに真コアの位置を特定できたのはひか

りだった。
　一度きりの勝負だ。
　私はひかりに全部のチップを掛けよう。
　こいつはバカしか賭けないギャンブルだがな」
クルピンスキー「いいねそれ。僕も乗ったよ」
この作戦は極めてリスクの高い無茶苦茶な作戦だが彼女らにはその作戦をやるだけの度胸があった。
ロスマン「ひかりさん。
　あなたは決して優れた教え子では無かった。
　でも努力は誰よりもしてきたわ。
　費やした努力の価値がどれほどかをここで証明して見せなさい」
ひかり「はい、ロスマン先生」
バーティ「自分自身を最大限に利用しなさい。あなたにとって、あるのはそれだけなのですから。
　エマーソンの言葉だ、自分自身の能力を最大限に使え」
振り向いたロスマンがひかりに言い、バーティもアドバイスする。
そして時計を確認したパットが伝える。
パット「砲撃中止まで1分、距離は?」
下原「グリゴーリまでの距離、１２０００!」
パット「了解、猶予は離脱時間も考えて8分だ!」
パットが作戦ができる時間を伝える。
安全空域への離脱時間も考えればできるのは僅か8分だった。
ラル「5分で片を付ける、行くぞ!」
「「了解」」
それに5分で行けるとラルが答えると全員が返事する。

チャタイ「そろそろだ。全軍砲撃中止!
　１０分間砲撃を中止する、この間に弾薬補充、休養、陣地転換をやれ!」
砲兵将校「は!」

時計を確認したチャタイが砲撃中止を命じる。
その連絡を受け1分ほどしてすべての砲撃がやんだ。
砲撃がやんで現れたのは穴だらけの無残な姿になったグリゴーリだった。
パット「よし！突撃！」
「フラーーー!!」
すぐにそれを見たパットが突撃を号令する。
それにマントイフェルとバーティ、ポーは鬨の声を上げて突進する。
グリゴーリは砲撃がやんだことで少しずつ損害を回復しようとしていた。
そしてある程度までウィッチたちが接近すると回復させた触手で攻撃し始めた。
サーシャ「ブレイク！」
すぐにサーシャが散開を命じウィッチたちは分散する。
マントイフェル「トゥルト！ワルツとタンゴ、どっち踊りたい？」
クルピンスキー「君がエスコートするならどちらでも！」
マントイフェル「ならタンゴでどうだ！スペインで習ったよ！」
マントイフェルとクルピンスキーは二人で連携して先頭に立って触手たちを攻撃していた。
グリゴーリは回復しつつあるなかで触手で絶え間なく攻撃してきた。
だが余りの数にＰＴＲＳのリロードが間に合わない上に触手で叩きつけようとする。
そこでマントイフェルはサーベルを抜くと触手をぶった切った。
クルピンスキー「ヴァルト、やるね」
マントイフェル「プロイセン軍人を舐めるな！」
次の瞬間、今度は後ろで爆発が起き触手が吹き飛ばされた。
バーティ「プロイセン軍人は後ろを見ないのか？」
マントイフェル「ドイツ人は頭の後ろに目はないぞ！」
バーティ「そうだな、それより右上、敵の攻撃が薄いぞ」

攻撃したのはバーティだった。
またバーティは攻撃の薄い地点を見極めて指示する。
クルピンスキー「マジックブースト！」
それを聞いたクルピンスキーがマジックブーストを使って突破しその後ろをパットと菅野、ひかりが付いて行く。
パット「それじゃああれ使うぞ。
　舌噛まなように気をつけろ！」
突破したパットは注意を菅野とひかりに言うと二人の手を掴んで誤認を使ってグリゴーリに近づく。
グリゴーリは二人に待った気が付かずあっという間にグリゴーリまで到達する。
パット「よし、ひかり！いけ！」
パットは近づくといつものようにひかりを放す。
ひかり「やあああああ!!」
放されたひかりはグリゴーリを触れコアを見つける。
だが誤認が切れたためグリゴーリがひかりを攻撃しようとする。
次の瞬間、攻撃される前にパットが急降下してひかりを回収する。
パット「ひかり！どこだ！コアは！」
ひかり「あっちです！」
パットが聞くとひかりが答える。
そこでパットはひかりを放してひかりを先導にコアのある場所に向かう。
　一行はグリゴーリを躱しながらコアに向かうが途中触手が襲おうとするがすぐにパットとひかりが銃撃して破壊する。
菅野「やりやがるぜ。まさかこいつのケツに付く日が来るとはな」
パット「全くだ！」
菅野が言うとパットも同意する。
ひかり「うおおおお!!ここだあああああ!!」
そしてコアのある場所につくとひかりは叫びながら機関銃を突き立てる。
菅野「うおおおおおお!!剣！いっせ――――ん!!」

そして菅野がその場所を全力で殴る。
菅野「砕けろおおおおおお!!!」
その攻撃でネウロイは砕け始め大きなクレーターを作る。
ひかり「あとちょっと！管野さん、もう一発！」
菅野「もう、鼻血も出ねえ…」
だがコアまでは少し届かなかった。
ひかり「管野さん!!」
パット「菅野！」
菅野はすべてを出し切り墜落しそうになる。
すぐにパットが菅野の手を取ろうとすると腰に差したダークイエローの吸着地雷に気が付いた。
パット「ひかり！離れろ！」
ひかり「はい！」
すぐにパットはそれを取るとコアの場所に突き立ててねじを回し中の紐を取り出して思いっきり引く。
その数秒後吸着地雷の成形炸薬がモンロー／ノイマン効果で中の金属板を溶かして超高速のメタルジェットを放ち真コアに穴をあけ破壊した。

数秒後グリゴーリは崩壊した。
リョーニャ「Ｙｐａａａａａ!!」
ジョゼ「終わったみたいですね…」
孝美「ん…ん…あれ?ここは…」
それを見てリョーニャは歓声を上げジョゼも喜んでいた。
すると孝美が気が付いた。
ジョゼ「孝美さん、気が付きましたか?」
孝美「え、ええ。」
リョーニャ「戦闘は終わったぞ！Ｄｅｎь　Ｐｏｂｅды！
　酒を持ってこい！Ｙｐａａａａａａａ!!」
リョーニャは喜んで拳銃を取り出すと空に向かって撃ち始めた。

下原「リョーニャさん！危険ですからやめて下さい！」
すると上から下原が降りてきて注意する。
リョーニャ「じゃあどうしろと？酒もないだぞ」
下原「こうするんですよ！」
そういうと下原はリョーニャに抱き着く。
さらにそのまま地面に押し倒されたリョーニャにキスする。
リョーニャ「え？何が起きてるんだ？」
下原「ふふ、ファーストキス、あげちゃいました。
　リョーニャさんが悪いんですよ、鈍感で私の気持ちに全然気が付かないんですから」
混乱するリョーニャに下原は妖艶な笑みでリョーニャに言う。
それに続いてパットに首根っこ掴まれた菅野とひかりもやってきた。
そしてパットは二人をゆっくり降ろすとタバコを吸い始めた。
孝美「ひかり！」
ひかり「お姉ちゃん！」
孝美は立ち上がるとひかりに近づき抱きしめる。
孝美「やったね、ひかり！ホントに強くなったね。すごいね、ホントにすごい。えらいね…」
ひかり「ううん、私じゃない。皆のおかげ」
孝美はひかりを褒めるがひかりは否定する。
その横で菅野はジョゼに支えられて立ち上がっていた。
二パ「管野おおおお!!」
菅野「うばっ!?」
すると二パが突進してきて菅野に抱き着く。
菅野は吹き飛ばされる。
二パ「良かったよおお!!怪我してない!?」
菅野「むぐ…ぶはっ！い、今のが一番効いた…ジョゼ」
ジョゼ「もう魔力切れです」
菅野「リョーニャ！」
下原「リョーニャさんはしばらく借りますね」

菅野はジョゼとリョーニャを呼ぶがジョゼは魔力切れ、リョーニャは下原に抱き着かれていた。
その上では
クルピンスキー「ふぁーーー、終わった終わった…」
マントイフェル「トゥルト」
クルピンスキー「なにヴァ…」
マントイフェルに呼ばれてクルピンスキーは振り向くとマントイフェルはクルピンスキーに抱き着いてキスする。
たっぷり数秒キスするとクルピンスキーはマントイフェルに抗議する。
クルピンスキー「ヴァルト！何するのさー！不意打ちは無しだよ！」
マントイフェル「トゥルト、やりたかったんだ！」
クルピンスキー「まあ、その僕もさ、したかったんだけど、せめて人のいないところでやってよ…
恥ずかしいよ…」
クルピンスキーは顔を真っ赤にしながらもマントイフェルに言う。
二人のいちゃつきにロスマンはその横で不機嫌になる。
ロスマン「カップルのいちゃつきはよそでやってくれないかしら？」
ラル「なんだ嫉妬か？」
ロスマン「違います、そんなんじゃありません」
ラルが聞くがロスマンは否定する。
だが見ていたバーティはポーと小声で話す。
バーティ「表情に出てるんだがな」
ポー「ああ、それと後ろ見ろ」
バーティ「え？」
ロスマン「バーティさん？」
ポーと話していたバーティは後ろを見るよう促され振り返るとロスマンがいた。
この後バーティの叫び声が雄大なるカレリアの地に響いた。

司令部では兵士たちが書類を投げたり銃を掲げて喜んでいた。
ニコライ「ｙｐａａａａ!!!」
ヘプナー「やったぞ！我々の勝ちだ！」
ニコライ「同志諸君！兵士諸君！我々は今日、国家と革命を守った！
偉大なる国家に栄光あれ！」
作戦が終わりヴァトゥーチンが演説する、するとそれを聞いていた兵士たちが銃を上げて歓声を上げる。
「「ｙｐａａａａａａａ!!!!!!!!!!」」
戦闘も何もかもが終わりウィッチたちは飛べないジョゼ、菅野、孝美を抱えたり背負いながらペテルブルクに向かう。
孝美「綺麗ね」
ひかり「うん」
ふと孝美は眼下に広がる美しい雄大なる自然に言葉を漏らす。
サーシャ「もうすぐここにも春が来るわ」
二パ「平和な春だね」
リョーニャ「春は一番好きだ。
耐乏の時期が過ぎ平和と繁栄の季節だからな」
すると突然誰かのお腹が鳴った。
音源となったジョゼは顔を赤くする。
下原「フフフ、お腹減りましたね」
菅野「はあ…腹と背中がくっつきそうだぜ」
ひかり「私もです」
それに下原は微笑み、菅野とひかりもジョゼに同意する。
二パ「う、うわっ！マズイ！」
サーシャ「ニパさん？また壊したんですか？」
すると今度は二パのユニットから変な音がし始めた。
そしてサーシャもいつものように二パに聞く。
だが次の瞬間、今度はサーシャのユニットから煙を吐く。

サーシャ「キャー！」
ポー「おっと！大丈夫か？」
サーシャ「ええ…」
すぐにポーがサーシャの手を取る。
その様子を見てクルピンスキーが言う。
クルピンスキー「アハハ！あの戦闘の後で、まともなユニットなんてないよ」
ひかり「じゃあ、全員正座ですね」
バーティ「なに終わり良ければすべて良しだ」
「アハハハハハハ！」
それにひかりが返すとバーティも言う。
そして全員で笑う。
その様子を見てラルが微笑みながら言う。
ラル「フッ。全く…帰るぞ、ブレイクウィッチーズ」
「了解！」

――――――――――

「Славься, славься, ты Русь моя!
(栄光あれ、栄光あれ、我がルーシよ！)
Славься, ты русская наша земля!
(栄光あれ、我らがロシアの大地よ！)
Слава, слава, хвала бойцам!
(栄光あれ、栄光あれ、戦士に称賛あれ！)」
――M・グリンカ作曲オペラ「皇帝に捧げた命」より「栄光あれ」の一節

第3章：血と土

プロローグ：知られざる英雄

１９４５年2月中旬、ドイツ上空

深夜、雪が舞い、遠くに見える空襲の炎と月明かり以外は何も見えない漆黒の闇の中を一機にユンカースＪｕ８８Ｒが飛んでいた。

ユンカースＪｕ８８は元々爆撃機、それも一時期流行った高速爆撃機と呼ばれるタイプの爆撃機だった。

だが大戦に入ってからは航空機の進化によって速度性能に見劣りするようになるがそれでもハインケルＨｅ１１１の代わりとして大戦中期以降ドイツ軍の主力爆撃機としてドイツ軍を支えた。

この機の有名な戦果の一つと言えば４３年１２月2日に行われたバーリ空襲である。

時は４３年１２月、イタリア戦線はローマを前にして膠着状態に陥っていた。

即ちローマを守る最後の防衛線グスタフライン、そしてキリスト教の聖地でもあるモンテ・カッシーノでドイツ軍の激しい抵抗に遭い進めなかった。

そして激しい抵抗により大打撃を被った連合軍は損害補充と補給のため大量の物資をイタリアに送っていた。

その物資の揚陸港の一つがイタリア南部、アドリア海に面した港湾都市で当時２５万人の人口を誇ったバーリ港だった。

当時ドイツ空軍は連合軍がイタリアのドイツ空軍を過小評価していることに気が付いていた。

そこでドイツ空軍はイタリア及び地中海地域で大規模な航空攻撃を行おうとしていた。

その目標としてこの地域のドイツ空軍の司令官でありかのレッドバロンの従兄弟、ゲルニカ爆撃の指揮官だったヴォルフラム・フライヘア・フォン・リヒトホーフェン元帥はこの地域のドイツ軍総司令官アルベルト・ケッセルリンク元帥に港湾都市のバーリを提案した。

そして事前偵察によって多数の商船がいることを確認したケッセルリンクはリヒトホーフェンにバーリの空襲を命じた。

リヒトホーフェンはこの作戦のために１０５機のＪｕ８８Ａ―４をかき集め１２月２日夜、決行された。

午後７時２５分、荷役作業のため照明がつけられていたバーリ港上空にチャフが投下、それに続いて爆撃機がバーリを襲い港内で合計１７隻の輸送船を撃沈、港の機能を約２週間に渡って奪い、４４年２月まで使用不能にした。

だが空襲後、バーリ市内、そしてバーリ港から退避した船舶内で異変が生じ始めた。

医療スタッフや救助された乗組員、市民などに失明、化学やけどなどの症状が生じ始めた。

その数は分かってるだけでその日のうちに６２８名、これにバーリ市民数百名などに被害が出始めた。

実は撃沈された船の一隻にアメリカのリバティ船ＳＳジョン・ハーヴェイという船があった。

そしてこの船の積み荷は米陸軍のＭ４７爆弾、これはマスタードガスを充填した毒ガス兵器であった。

ジョン・ハーヴェイは空襲で被弾、その際に積み荷のマスタードガスが漏れ出た重油によってマスタードガスには理想的な溶媒となっていた海中に漏れ出し海に飛び込んだ商船乗組員に被害を出した。

さらに爆発と火災によって気化したマスタードガスはバーリ市内を襲ったのだ。

その被害は民間人に関しては正確な集計ができなかったものの、軍人だけで６８名が死亡した。

これは大戦中最大の化学兵器による被害であった。

また大戦中にはツェルステーラー、駆逐機に転身、各地で活躍した。

例えばボルドーの第４０爆撃航空団第Ⅴ飛行隊、この部隊はボルドー湾上空でＵボートを狙う英軍機相手に死闘を演じた。

また夜間戦闘機となったものは数多くの夜戦エース、最も代表的なものは王子とも呼ばれた第２夜間戦闘航空団（ＮＪＧ２）司令ハイン

リヒ・プリンツ・ツー・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン＝ザイン少佐、第３夜間戦闘航空団（ＮＪＧ３）司令ヘルムート・レント中佐などなどの乗機として活躍した。

だが大戦末期には護衛にあらゆる面でＪｕ８８に勝るデ・ハビランドモスキートが護衛に就くようになり接近すればモスキートに襲われるようになった。

だがそれでも終戦のその日までドイツの夜の空を必死で守っていた。

だがこの機の機体は穴だらけ、左エンジンは止まり、主脚が左側だけ出、主翼からは燃料が漏れ出し、補助翼と主翼の先は半分吹き飛び、窓ガラスは弾痕で割れていた。

「って…ベック、レック、大丈夫か?」

この機を操縦していたニコルッシ・アレクサンダー・フェリックス・ハルトマン＝ファルケンホルスト中尉、通称ニコはつい数分前、空襲に向かっていた英空軍のランカスター爆撃機編隊を迎撃しようとしたが接近した瞬間、護衛のモスキート数機に襲われ機体を急降下するなどして振り切った。

だが機体はモスキートによって穴だらけにされ左エンジンは止まり、右エンジンも冷却器を損傷しオーバーヒート寸前、補助翼を半分失い操縦桿は重く、燃料は漏れて長い尾を引き、何より彼自身左腕に窓ガラスの破片が刺さって血を流していた。

出血する中彼は乗っているレーダー手と機上整備員を気に掛ける。

ベック「ニコ、大丈夫だ。

幸い怪我はない」

レック「俺は無事じゃない。

足に一発食らった。」

だがレーダー手は無事だが機上整備員は足に被弾していた。

それを聞いて思わず愚痴る。

ニコ「シャイセ、このままじゃ長く持たない。

どこか適当なところに不時着するぞ」

ニコは今にも分解して落ちそうな機体をゆっくりと旋回させなが

ら不時着できそうな場所を探す。
そして眼下に農場か畑らしきものを見つけそこに機体を向かわせる。
ニコ「これから不時着する！シートベルトしろ！」
ベック「ああ分かった！」
レック「分かった！ベック、手伝ってくれ！」
後ろの二人に声をかけると機体をゆっくりと降ろしていく。
そして３０秒ほどしてまず脚格納扉が吹き飛ばされ出されたままの左主脚が地面につき吹き飛ばされる、そしてプロペラが地面を叩き始め地面に衝突する。
その瞬間、乗員にできることは祈って身構えるのみとなり機体は時速数百キロで郊外の農場を疾走する。
そしてニコは眼前にあるものを見つける。
それは空襲か何かで破壊され廃墟となった家であった。
だが彼らに何かができるわけでもなく機体はその家に衝突、機首は派手につぶれ燃料タンクからは燃料が漏れ始めた。
衝突から少しして、ベックとレックが気が付いた。
ベック「ん…ニコ、レック大丈夫か？」
レック「あ…ベック、何とか生きてる…
ニコは？」
二人は気が付いたが二人とも椅子ごと床から外れ、床に投げ出されていた。
二人は体中が痛む中暗闇の中でニコを捜して見つける、だが
レック「ニコ、大丈夫…」
ベック「ニコ、おい！ニコ！クソ！」
ニコは激突の衝撃で即死していた。
レック「ベック、そっちを持て。
燃える前に出るぞ」
ベック「ああ」
二人はニコの亡骸を抱えて胴体の裂け目から外に出た。
そして二人が出た直後、機体は燃え始めた。

フィンランド、北欧にある面積３３８４００?、人口約５３２万人（２０１２年）の国家。

フィンランド人、スウェーデン人、サーミ人、ロシア人などからなる人口を持ち公用語としてフィンランド語とスウェーデン語を使用、西にスウェーデン、東にロシア、北はノルウェー、南にはフィンランド湾を挟んでエストニアと隣接する国である。

この国は古くよりスウェーデンとロシアという地域大国に翻弄されて来た。

それは１９１７年の独立後も変わらず、１９１８年のフィンランド内戦ではソビエト政権の赤軍の介入を受け、それから２０年後の３９年の冬には当時史上最強を誇ったソ連軍に侵攻された。

だがフィンランド人は座して死を待つなどということはしなかった。

彼らは自ら銃を持ち抵抗した。

侵攻開始から僅か数日でフィンランドの殆どの男は軍に入り銃を持ち前線に向かった。

そして礼儀知らずのリュッシャにフィンランド流の手厚いもてなしをした。

もてなしを受けたロシア人たちは苦戦どころか敗退を繰り返した。

粛清で骨抜きにされた彼らにはフィンランドのもてなしはきつすぎた。

碌な支援もない中フィンランドは善戦する。

だが世界は非情であった。

ほとんどの国はこの北欧の小国に手を差し伸べなかった。

差し伸べてもその支援は少なく、そして遅すぎた。

フィンランドは負けなかった、だが勝てなかった。

彼らは翌年、春と共に屈辱的な講和条約を結ばされた。

その内容は戦争で失った土地よりも多くの土地を失い、そして工業の中心を根こそぎ奪われ、フィンランド人の精神的な故郷たるカレリアを失った。

彼らにこの条約は屈辱以上のものであった。

だが彼らに手を差し伸べる国は一つしかなかった。

ドイツだ。

ドイツはソ連への侵攻のための足掛かりとしてフィンランドを仲間に引き入れた。

そして１９４１年６月、フィンランドはソ連に対して新たな戦争を始めた。

冬戦争の続き、継続戦争である。

だがこの戦争でもまた世界は、歴史は非情だった。

ドイツは冬になると負け始め、名将マンネルヘイム率いるフィンランドは戦争からの離脱を検討し始めた。

だがドイツによって枢軸側に縛り付けられソ連との戦争により戦争は長引いた。

そして４４年６月、ソ連はヴィボルグ・ペトロザヴォーツク攻勢を開始した。

これはもはやフィンランドには破局に等しいものだった。

彼は死力を尽くしてソ連と戦った。

そして第２防衛線の街タリとイハンタラの地域で激戦が発生した。

スカンジナビア史上最大の戦闘、タリ＝イハンタラの戦いである。

この戦闘によりフィンランドはソ連軍を止めた。

この一連の攻勢はフィンランドに対して多大なる影響を与えた。

だがソ連軍は目標まで到達できず、さらにはフィンランド軍の主力を殲滅できなかった。

それでもフィンランドにとっては戦争離脱を決めるのに十分だった。

１９４４年９月１９日、モスクワでモスクワ休戦協定を結んだ。

この奇跡的な大戦末期の枢軸からの離脱は成功した。

だが新たな戦争が幕を開けた。

ラップランド戦争である。
だが互いに戦闘を避けようとしたためその内容はバルト海諸島をめぐるタンネ・オスト作戦とバルト海を除いて初期は戦争と言っても激しいものではなくドイツ側がフィンランドに撤退の予定表を渡す代わりにインフラの破壊を認めるなどなんとも奇妙な状況が発生した。
だがフィンランドはソ連の圧力によりドイツと戦う羽目になった。
オルハヴァの戦いとトルニオの戦いで初めて両軍は本格的に激突、この戦いでフィンランド軍はドイツから貰った兵器をドイツ軍に向けるという何とも因縁めいた出来事が発生した。
その後は両軍ともに本格的な戦闘を何度も繰り返すがそのほとんどが「早く撤退したい装備と機動力に優れたドイツ軍」とそれを追いかける「兵力不足で装備と機動力に劣り疲弊しきった同程度のフィンランド軍」という図式でありいくらフィンランド軍が必死でドイツ軍を追いかけようと自動車化されたドイツ軍はあっという間に撤いてしまった。
その後ロヴァニエミの戦いなど数回の激戦の末１９４５年４月２５日に最後の部隊がノルウェーに撤退した。
両軍の死傷者はフィンランド軍戦死７７４、行方不明２６２、負傷約3，０００、ドイツ軍戦死1，２００、負傷2，０００、捕虜1，３００でドイツ軍が撤退する際に撒いた大量の地雷はその後も長くラップランドで多くの人命を奪った。
その後フィンランドはソ連の影響を受けながらも資本主義を維持するスタンス、いわゆるパーシキヴィ路線を取り冷戦を生き抜いた。
そして現代ではフィンランドは世界一幸福な国、平和的な国、民主的な国の一つとして知られている。

１９４５年2月、雪が舞うフィンランド・ソ連国境付近。
雨が降るその上空を青と白の真新しい国籍章をつけたラウンデルをつけたＢｆ１０９Ｇ―2が飛んでいた。
これはフィンランド空軍のＢｆ１０９であった。

フィンランド空軍は意外なことに各国の空軍の歴史の中でも特に歴史ある空軍であった。

設立は１９１８年、正式な空軍としての独立は１９２８年、これはイギリス空軍、スウェーデン空軍に次ぐ古さであった。

このＢｆ１０９Ｇを操縦していたのはフィンランド空軍第３３戦隊所属のスウェーデン系フィンランド人ヤン・オーラ・ハンマルフェルド中尉だった。

ドイツ生まれで父親は第一次世界大戦でバイエルン王国軍第２７猟兵大隊に所属して戦い、その後はフィンランド内戦で白衛軍に参加しフィンランドの独立のために命を落とした。

彼が生まれたころには父親は戦死していたが彼は母親、そして祖父母や周りの人から父親は祖国の英雄だと教えられそれを誇りにしているような男で冬戦争、継続戦争と戦い抜き多くの機種を渡り歩いたエースであった。

元々彼は第２４戦隊所属であったが継続戦争後の再編で彼は第３４戦隊を改変した第３３戦隊に移っていた。

ヤン「ヤーカリ１３、ロメオ異常なし」

司令部『ヤーカリ１３、了解。帰投せよ』

ヤン「ヤーカリ１３、了解。」

ヤンは司令部からの帰投命令を受けると旋回して基地に向かい、着陸しようと減速する。

だがその直後機体がガタガタと嫌な音を立て始め突然機体が急降下した。

ヤン「ペルケレ！失速だ！」

機体は着氷により失速した。

航空機というのは例外なく着氷に弱いのだ。

僅かな、たった1，2ミリの氷でさえ紙やすりのような役割を果たし気流を乱して揚力を奪ってしまう。

彼は気が付かなかったがこの雨はただの雨ではなく過冷却水滴と呼ばれるいわゆる雨氷の一つであった。

過冷却水滴は金属などの固体に触れると瞬間的に氷結する、そのた

めこのＢｆ１０９の主翼は氷に覆われ気流を乱して揚力を得られなくなっていた。
そして氷というのは肉眼では非常に分かりづらいのだ。
そのため彼は着氷に気が付かず減速してしまい失速したのだ。
彼は必死で機体を立て直そうとするが高度が足りず何とか機首を殆ど水平にしたところでフィンランドの針葉樹林に墜落した。

第1話：あの男の亡霊たち

「諸君、あの男の敗北を喜ぶな。
世界は立ち上がり奴を阻止した。
だが奴を生んだメス犬がまた発情している」
――ベルトルト・ブレヒト

――――――――――――

ロマーニャ、ローマ
「で、どうなっている？
トラヤヌスは？」
「順調さ、まあ１００％失敗するがね」
「当たり前だな。
まあその時が儂らの勝利だがな」
「海軍もその時のための準備はできてる」
「カラビニエリもその時になれば一気にローマに戒厳令を敷ける」
「外務省は既に掌握済みだ」
ロマーニャの首都でロマーニャ軍の４軍、即ち陸軍、海軍、空軍、カラビニエリのお偉方４人、外務省の高官、そしてロマーニャ戦線最強の第１５騎兵軍の総司令官の５人が集まっていた。
その人物とはロマーニャ空軍第１３課課長イタロ・バルボ大将、ロマーニャ陸軍第１３課課長エミリーオ・デ・ボーノ大将、ロマーニャ海軍第１３課課長アントニオ・レニャーノ中将、ロマーニャカラビニエリ第１３課課長アツォリノ・アーゾン中将、ロマーニャ外務省特務局局長ガレッアツォ・チャーノ、第１５騎兵軍総司令官テオドール・アイケ大将だった。
バルボ「我々の手で偉大なるイタリアを統一し古のローマ帝国を復活させる、そのための第一歩だ。」
アイケ「そしてこのヨーロッパをアカの手から守る、それができる

のは我々だけだ。
　こうしている間にもボルシェビキは一歩ずつ東欧を支配している。
　我々はあのスラブの劣等人種からこの偉大なるアーリアの地を守らなければならん」
デ・ボーノ「偉大なるイタリアのため、そして自由なるヨーロッパのため。
　我々の手でリソルジメントを完成させるのだ！」
レニャーノ「この国を正しい道に導くのは、ファスケスの旗だ。
　赤旗ではない」
アーゾン「我々はまたローマ進軍をやるのかね？」
チャーノ「偉大なるローマ帝国をここに復活させるためだ。
　我々は一切の助力を惜しまない」

その数日後、ローマ市内。
街中を数十台のカラビニエリと黒い軍服を着た兵士たちを乗せたトラックが疾走する。
そして官庁街や市内要所につくと兵士たちが降り突入する。
役人「お前ら何をやってるんだ！今すぐ兵舎に帰…」
止めようとした役人はそのまま射殺され、さらには同時にロマーニャ共産党の各種支部なども次々と制圧された。
共産党員「お、おい、待ってくれ、俺が、俺が何を…」
将校「撃て！」
カラビニエリに捕まった共産党員が命乞いするがカラビニエリと黒シャツ隊は無視して頭を撃ち抜く。
　このような光景はこの日から数日間にわたりロマーニャ各地で続いた。
　犠牲となったのは共産党員だけでなく左翼系運動家、左翼系新聞社、王党派、無政府主義者、労働運動家、政治家、王党派、マフィア、犯罪勢力、宗教家、学者、ジャーナリストなど数千人に上った。

そしてこの日からロマーニャ全体で共産主義者への激しい弾圧が始まった。
この日ロマーニャ全体にカラビニエリと陸軍によって戒厳令が出された。
なぜそうなったか、それはそこから百キロもないほど北から始まった。

アイケ「作戦はどうなってる？」
参謀「は、トラヤヌス作戦は〝予定通り〟失敗。
予定通りカリグラ作戦を発動し現在ポー平原北部を中心に反撃中です。
ハドリアヌス作戦は成功して権力を奪取しました。」
戒厳令の原因となったのは彼らの立てた作戦「カリグラ」と「ハドリアヌス」によるものだった。
この作戦はアイケが言う「作戦ですらない無理心中」と評したトラヤヌス作戦後に一気にロマーニャ方面の主導権を握るある種のクーデターとトラヤヌス作戦後の反撃の二本立ての作戦だった。
ハドリアヌス作戦はクーデター作戦で参加部隊はアーゾン指揮するカラビニエリと第１５騎兵軍の予備部隊第１突撃旅団フォルリ、防空師団エトナ、第８義勇旅団アルド・セレガ、義勇連隊「９月９日」、「フィアンメ・ビアンケ」、「タリアメント」、「M」、第３龍騎兵連隊サヴォア、第８ベルサリエリ旅団、そしてアイケ直属の「特別行動部隊」の合計８万がロマーニャの各都市に戒厳令を敷き主導権を握ると同時に共産党などの左翼系勢力、各種王党派、反政府勢力、マフィアを掃討して殲滅する作戦であった。
ハドリアヌス作戦はアーゾン中将の指揮により成功し各地で反政府勢力の殲滅が開始され、政府の主要閣僚を抑えて政治は実権を彼らからアイケ達のファシスト勢力に移された。
アイケ「そうか、あの劣等人種共は肉塊の一つも残さずこの地球上から消し去ってしまえ。」

参謀「分かってます。現在特別行動部隊も動員して清掃作業中です。」

アイケ「劣った思想は劣った人種に宿る。

劣等人種に情けは無用である、正しい血を残し劣った血は地球上から消さなければならない。

それこそが我々の使命だ。

ところでカリグラ作戦の詳細はどうなってる?」

するとアイケはカリグラ作戦に話を変えた。

参謀「は、現在マントヴァ付近にてクリューガー中将の第１５騎兵軍団が反撃を行い敗走するヴェネチア軍を収容しつつパドヴァに向け西進中。

同時にポンテヴォ付近で渡河したネウロイは装甲軍団イタリアが機動防御によって殲滅、現在ポー川を渡河してパドヴァに向け北上中。

このまま第１５騎兵軍団と協力してパドヴァ付近でネウロイを包囲、殲滅します。

装甲軍団イタリアの右翼のリグリア軍団は現在ポー川河口のポーデルタでポー川を防衛線として防御中。

またバルカン作戦軍の第２４山岳軍団の歩兵師団ＯＺＡＫが現在ラティザーナ付近でタリアメント川を渡河、ポルトグルアーロに向かって国道１４号を西進中。

また第７山岳師団がカルパッコを渡河して対岸のスペリンベルゴを制圧、コーザ川を渡ってメドゥーナ川に向かっています。」

カリグラ作戦はトラヤヌス作戦後の大規模反撃作戦でありポー川とポー平原を舞台とした機動防御作戦であった。

キャスティングボードとなるのはマントヴァとポー川の下流ロヴィーゴ、そしてタリアメント川沿いのラティザーナからカルパッコの地域であった。

作戦はポー川、タリアメント川、ミンチョ川をラインとした地域を中心に機動防御戦を展開、ネウロイを消耗させると逆に反撃を行い早いうちにネウロイを閉じ込める作戦だった。

そしてその作戦は機能してネウロイはヴェネチア公国西部に突出した形で封じ込められようとしていた。

アイケ「そうか、増援は？」

参謀「シュピッツ作戦の予定通りガリアとロマーニャの鉄道を総動員して再編中のコート・ダジュール軍団を輸送中です。

さらに予備兵力として現在フィウメに第９２装甲擲弾兵師団が待機中、輸送船が集まり次第ベルガミーニ提督のインペロ以下のヴェネチア艦隊と共にリミニに輸送予定です。

輸送船団コードはＦＲ２９３です。

ただ現在アドリア海の輸送船の大半がトリエステとポーラにいるため第９２装甲擲弾兵師団を輸送するのに必要な輸送船を掻き集めてる最中です。」

ただそれでも第１５騎兵軍の合計１２個師団１００万人では兵員不足は否めないため元々ガリア方面のコート・ダジュール戦線にいたがガリア解放により再編成後、ガリア南部で治安維持任務中のコート・ダジュール軍団を緊急輸送、装甲軍団イタリアとリグリア軍団の間のギャップに投入予定だった。

さらにバルカンから第９２装甲擲弾兵師団をフィウメからリミニにヴェネチア海軍の戦艦インペロ以下のベルガミーニ提督の艦隊の護衛の下輸送する作戦、シュピッツ（シュピッツ犬）も同時に発動、コート・ダジュール軍団と第９２装甲擲弾兵師団をイタリア半島に輸送中だったが第９２装甲擲弾兵師団は輸送船が確保できずリエカで足止めを食らっていた。

こうなった原因は輸送船の大半がヴェネチアからの避難に回されたのとバルカン作戦軍の司令部とアイケの不和も原因だった。

過激な極右たる彼らと隷下の部隊にユーゴパルチの系譜を引く部隊を有しそもそも黒いオーケストラ関係者の多い彼らとは仲が悪くて当然だった。

アイケ「まあいい、連中がその程度だとそのぐらいは分かってる。

コート・ダジュール軍団の主力は？」

参謀「現在パルマです。

鉄道網をフルに使ってなんとか1日でマルセイユからパルマまで運べました。
これからボローニャに移動後、事前偵察の後投入予定です。」
するとアイケの下にロマーニャ空軍の軍服を着た将校がやってきた。
「アイケ大将、バルボ大将からの報告です。」
アイケ「なんだ?ヴィスコンティ少佐。」
報告を持ってきたのはロマーニャ空軍少佐でバルボとの連絡将校として派遣されていたアドリアーノ・ヴィスコンティ少佐だった。
ヴィスコンティ「ローマは制圧、陸海空軍の主導権を確保。
なお504は戦闘能力を喪失、再編に最低3か月を要する、です」
アイケ「3か月?今は何とか既存の航空部隊で何とかしてるが3か月も持たんぞ。
どうする気だ?」
トラヤヌス作戦で504は戦闘能力を喪失、そのためロマーニャ北部の制空権は非常に危うく何とかギリギリのバランスを取っている状態であった。
ヴィスコンティ「そこで我々に策があります。
これです」
そういうとヴィスコンティはアイケにある計画書を見せた。
その内容を一読するとヴィスコンティに言う。
アイケ「なるほどな、誰の発案だ?バルボと君じゃないのは分かるぞ」
ヴィスコンティ「西方総軍のヴィルケ中佐とリュッツオウ大佐です。」
計画を立てたのは彼らではなく西方総軍の幕僚たちだった。
アイケ「〝どっちの〟ヴィルケだ?」
ヴィスコンティ「西方総軍航空参謀部のディートリヒ・ヴィルケ中佐の方です。
それとガーランド少将経由でディートリンデ・ヴィ

ルケ中佐からも要求があります」
アイケ「女狼はいいとしてそっちのヴィルケとすればやりたいことは分かるぞ。
即応戦闘航空団計画だろ。」
ヴィスコンティ「ええ。狙いはその計画の実行です。
その最初の実験に５０１を使います」
内容は実に簡単なものであった。
５０１を再編成しロマーニャで５０４の再編までの間投入するというものだった。
そしてこの計画は西方総軍で計画された即応戦闘航空団、ネウロイの突然の発生の際に最初に投入される高い自己完結性と戦闘能力を持ち航空輸送可能な規模のウィッチ部隊の編成計画を進めるための実験の一つだった。
アイケ「許可は?カールスラントとブリタニアは?
スオムスとリベリオン、オラーシャは初めから賛成だと聞いているが」
ヴィスコンティ「グライム大将とコルテン大将、イェションネク大将が何とか説得して許可を得たようです。」
アイケ「３人も大将が要求したら通るぞ普通。
ブリタニアは?どうせマロリーが頑張ったんだろ?」
ヴィスコンティ「それがどうやら説得する前に賛成したようです。
やはり地中海でしょう、この海は彼らの生命線ですし。」
アイケ「スエズがないのに?
ならさっさと連中を紅海に追い落とせ。
はぁ…ロンメルがいればスエズまで一気にいけるんだろうがな…」
各国の交渉の末この計画は既に相当の段階まで来ていた。
カールスラントは有力な大将クラスの将軍が３人も、ブリタニアは地中海の安全という自国の利益を天秤にかけて賛成した。
だがアイケにしてみればなぜスエズの奪還に消極的なのか理解不

能だった。
彼らからすればアフリカは最優先と言える地域である。
なにせスエズさえ取り返せば欧州とアジアが喜望峰経由から紅海からスエズを通り地中海を抜けジブラルタルを通って行けるのだ。
わざわざアフリカ大陸を回らなくて済む、この戦略的に重要な点を軽視する連中が理解できなかった。
アイケ「まあいい、この計画は俺が反対してもやるんだろ？」
ヴィスコンティ「ええ。もうあとは実際に人員を呼ぶだけですから。」

ロマーニャ、アドリア海に浮かぶ小島。
「ん？なんだ？Ｂｆ１０９か？いやイタリアのフォルゴーレか」
この島でカメラを持ち写真撮影に精を出していた初老の男がけたたましい音を立てて上空を通過するＭＣ２０２の編隊を見上げる。
すると後ろから今度は箒に乗った老婆がやってきた。
「アンナさん、何が起きたんですか？」
初老の男がアンナという老婆に聞く。
アンナ「ヴェネチアの方でネウロイの巣ができたんだとさ」
「そうか、ここにも嵐が来るのか…」
アンナからの答えを聞くとカメラを下ろしてヴェネチアの方を見る。
ヴェネチアの方にはかすかに煙が上がっていた。
アンナ「あんた、元は名のある軍人だったんだろ？
行かねえのか？」
「昔は英雄とか言われていたがもう戦争に行く気はない。
私は祖国に裏切られたんだ。
もう二度と軍はごめんだね。一昔前なら喜んで行ったんだろうが」
そう言って初老の男は島の家に向かって歩いて行った。

第2話：アドリア海の空

アドリア海上空、そこを一機のボロボロになったＪｕ８８Ｒが飛んでいた。

ニコ「ん…ここは？ベック！レック！いるか？」

その機内でニコは不時着の衝撃から気が付きすぐにレーダー手と機上整備員を呼ぶが反応がない。

すぐに振り返るがそこには誰もいなかった。

だがすぐに何かがおかしいことに気が付いた。

二人がいないだけでなく周りが明るいのだ。

上を見ると太陽が出ていた。

ニコ「は？そんな馬鹿な。今は真夜中だろ」

彼の最後の記憶では彼は真夜中のドイツ上空を飛んでいたはずであった。

だが気が付いた時には真昼間の海の上を飛んでいた。

ニコ「いったい何が起きてるんだ…機体の方は…」

それに疑問を持ちながらも機体の方を点検する。

ニコ「右エンジン、油温油圧正常、ラジエター正常、プロペラ角正常、混合比は少し高いな。

燃料流量正常、燃料ポンプ正常、出力７５％、異常なし。

左は、は？油温油圧は少し高いが正常、ラジエター異常なし、プロペラフェザー、混合比低めだが異常なし。燃料流量シャットダウン中、燃料ポンプ正常、出力なし、スロットルはカットオフ。」

おかしなことに機体は被弾こそしてるが弾を食らったはずの左エンジンは正常そのものだった。

ニコ「左が問題ないように見えるな。

左を再点火しよう。」

すぐにニコは問題ないと判断、エンジンを再点火する。

すると左エンジンは何の異常もなく周り始めた。

ニコ「よしこれで問題なし。

次は場所だな。」

するとニコの目の片隅に前方に小型機が飛んでいるのに気が付く。
ニコは機体をゆっくりと旋回させながら近づく。
ニコ「あれは…Ｂｆ１０９か？」
その機影はＢｆ１０９に見えた。
ニコは友軍機だと思いある程度まで接近するがすぐにそのＢｆ１０９を照準する。
その機には青と白のラウンデルが描かれていた。
それは敵機、即ちフィンランド空軍機であった。
この時フィンランドとドイツは既に戦争状態であった、
互いに気乗りしない戦争であったが一応は見つけた以上攻撃しなければならない。
だがしかし互いに気乗りしないためニコは一応無線で呼びかけた。
ニコ「そこのフィンランド機、応答しろ」
『グーテンターク、ドイツの誰かさん。
丁度よかったここはどこだ？』（ドイツ語）
フィンランド機から帰ってきたのは少し訛りのあるドイツ語の返事だった。
ニコは驚き聞き返す。
ニコ「ドイツ語ができるのか？」
『まあな、一応ベルリン生まれだ』（ドイツ語）
ニコ「そうか、ところでここはどこだ？」
『それはこっちのセリフだよ。
こっちだって気がついたら海の上だからな』
互いにここがどこかよくわかっていなかった。

ニコと交信していたのはフィンランド空軍のヤン・オーラ・ハンマルフェルド中尉だった。
ニコ『そうか、ところでここはどこだ？』
ヤン「それはこっちのセリフだよ。

こっちだって気がついたら海の上だからな」
彼もまた気がついたら海の上を飛んでいて混乱していた。
彼はＢｆ１０９をＪｕ８８の横に並べて飛び始めた。
すると彼が眼下に何かを見つけた。
ヤン「なんかいるぞ？前方2時の方向。
大型機だ」
ニコ『本当だ。あれは…４発飛行艇！
サンダーランドだ。』
それは大型の４発飛行艇だった。
ヤンは分からなかったがニコはすぐにそれをイギリスのショートサンダーランドと判断する。
ショートサンダーランドは大戦中のイギリス軍の４発飛行艇である。
大西洋の戦いではＵボートを多数撃沈、Ｕボートからは「指輪の幽鬼」と、航空機からは「フライング・ポーキュパイン（空飛ぶヤマアラシ）」と恐れられた。
ニコはかつてはビスケー湾上空でイギリス空軍との間でＵボートを狩ろうとするハンターのサンダーランドやボーファイター、ハリファックスなどの英軍機と死闘を繰り広げていた、そのため彼の中では４発飛行艇とはサンダーランドであった。
ヤン「サンダーランド？サンダーランドって確かイギリスのか？」
ニコ『トミーの飛行艇だ。
撃ち落とすぞ』
そういうとニコは本来なら3人乗りのＪｕ８８を器用に旋回させて飛行艇の背後に回り込んだ。

シュピッツ作戦が発動され約一週間後、アドリア海上空を一機の飛行艇、扶桑の二式大艇が飛んでいた。
この機は飛行艇という枠の中では飛び抜けた機であった。

なにせ性能では当時世界最高性能を誇り単純なスペックだけならば戦後のジェット飛行艇やターボプロップ飛行艇以外では当時の全ての飛行艇の性能を凌駕する空飛ぶ戦艦であった。

８０００キロを越す航続性能、最高速度４７０キロ、５門の２０ミリ機関砲と４丁の７．７ミリ機銃を有する強力な火力を誇る。

史実では日本海軍によって偵察や哨戒、輸送などの任務に使用されていたがその火力と防御力の高さから連合軍からも「フォーミダブル」と呼ばれて恐れられた。

それどころかこの機には明らかに格上のはずのＢ―２５ミッチェルやＢ―１７の撃墜記録があるなど非常に優れた機であった。

飛行艇という機種は第二次世界大戦後航空技術の発達により急激に衰退したがこの機の技術とノウハウは川西重工業の後継たる新明和工業に受け継がれ現代でもこの機の子孫たる新明和ＵＳ―２は今日でもなお日本の空を飛び回り遭難者たちの救いの翼として活躍している。

その機は扶桑海軍の機でありニコがサンダーランドと誤認して撃墜しようとしている機だった。

乗っていたのは坂本美緒少佐と宮藤芳佳の二人に従兵の土方などであった。

土方「現在アドリア海上空。

間もなく目的のロマーニャ軍北部方面基地に到着します」

坂本「うむ」

従兵の土方が坂本達に基地が報告する。

宮藤「う～、やっと降りられる」

坂本「なまったな、宮藤。

この程度の飛行でもう弱音か」

坂本の隣で疲れ切っていた宮藤が漏らす。

１週間近くかけてユーラシアを横断しているのであり宮藤の反応はもっともだった。

だが坂本が言うと宮藤は姿勢を正した。

すると宮藤は何かを思い出したかのように坂本に聞く。

宮藤「すいません…
あ、そうだ。
お父さんからの手紙ってなんだかわかりましたか？」
宮藤は出発する直前に貰った父親からの手紙のことを聞いた。
坂本「いや…だが、宮藤博士の研究に関するものかもしれない。
技術班に渡して置いた。
遅れて付いたのは検閲によるトラブルだろう」
宮藤「またか…」
その返事に宮藤は落胆する。
だが突然パイロットから報告が入った。
パイロット「電探に反応あり、急速接近中」
坂本「なに？」
パイロット「前と後ろに二つです。」
坂本「後ろ？」
飛行艇に未確認機が複数接近していた。
だが坂本が疑問を持ったのは後ろ、即ちバルカン半島のクロアチアやダルマチアの方からくる飛行物体であった。
宮藤「坂本さん！あれ！」
すると窓の外を見た宮藤が坂本を呼んだ。
坂本は宮藤に言われるままに窓から外を見る。
そこには鉄十字の国籍章をつけたグレーと黒のＪｕ８８、そしてその後ろ上方に迷彩が施され青と白のラウンデルが書かれたＢｆ１０９が飛んでいた。
坂本「Ｊｕ８８とＢｆ１０９？いや、あの国籍章は！」
宮藤「ドイツ…フィンランド…じゃあハインツさんたちの…」
宮藤はその国籍章からハインツ達から教えられた国籍章を思い出した。
宮藤が話していた瞬間、突然機体が大きく揺れる。
宮藤「きゃあああ！」
突如前方から何本もの赤い光線が飛んできて機体はゆすぶられ、さらにはエンジンも損傷させた。

坂本「くっ、どうした！」
パイロット「未確認機からの攻撃です！
第一エンジン被弾！
未確認機なおも接近中！」
土方「まさか…！」
宮藤「ネウロイ…」
すぐに一同は攻撃してきたものの正体を理解した。
ネウロイだ。

ネウロイの攻撃は二式大艇を攻撃しようと攻撃位置につこうとしていたニコを掠めた。
幸い彼の天才的な勘により機体を宙返りさせそのまま急降下することで攻撃を回避した。
ニコ「シャイセ！一体何なんだ！あれは！」
ヤン『知るかよ！オーディンが怒り狂ってるのか?!』
ニコは無線で悪態をつくが上空で傍観していたヤンは北欧神話を引き合いに出した。
ニコは急降下をやめると前方に攻撃してきたものの正体、黒い常識外れのサイズの飛行物体を発見する。
ニコ「見つけた！１２時方向大型飛行物体！
こちらに気が付いてない！いける！」
するとニコは一旦その物体から離れて大きく旋回すると雲に隠れながら後方から近づく。
ニコ「よし、行けるぞ…」
そして全く気が付かず飛行艇の攻撃に集中している物体に忍び寄ると至近距離から夜戦型Ｊｕ８８の独特の装備、上向きのシュレーゲムジークのＭＧ１５１／２０を使ってネウロイの表面を掃射する。
ニコ「これでどうだ！」
だが次の瞬間、ネウロイは離脱するＪｕ８８を攻撃する。
ニコは間一髪攻撃を避けた。
ニコ「なんなんだあいつは！ランカスターだってあれだけ食らえば

撃墜できるぞ！」
ニコは機体を急降下させ海面ギリギリを飛んで攻撃を回避しながら悪態をついた。

坂本「ネウロイ確認！距離約１２０００！
奴らめ、もうこんなところまで来ていたのか…！」
機銃座から前方のネウロイを確認した坂本が言う。
すると機体は突然旋回、急降下する。
宮藤「きゃあああ！」
坂本「くっ…！」
この急な機動により身構えていなかった宮藤と土方は機内で跳ねまわり宮藤は何とか坂本に支えられていた。
土方「うぐっ…！」
坂本「土方！」
だが捕まる物がなかった土方は機内で体をうち怪我をしてしまった。
宮藤「土方さん！」
すぐに宮藤は土方に治癒魔法をかける。
その手際は数か月前とは見違えるほどにまで成長していた。
坂本（魔法力が安定している…成長したな、宮藤！）
その手際の良さに坂本は感心するとある程度まで土方が回復したのを見てコックピットに指示を出す。
坂本「今は退避だ！急降下してやり過ごす！」
機長「了解！」
すると後ろで機銃の音がし急いで坂本が後ろを見る。
坂本「なんだ？」
後ろを覗き込むとＪｕ８８がネウロイの下に回り込んでネウロイを掃射していた。
だが攻撃は全く聞かずネウロイは二式大艇への攻撃をやめＪｕ８８を攻撃したが見事に回避され本来鈍重なＪｕ８８を使って遠目からも腕のいいパイロットが乗っていることが分かるような回避を

行っていた。

坂本達が攻撃を受けた空域の近くは丁度フィウメ～リミニ間の航路の近くであった。

そしてこの日、この海域には輸送船団ＦＲ２９３船団が存在した。

その護衛部隊の第一部隊はネウロイをレーダーで確認すると即座に船団を離脱、艦隊を急行させた。

通信兵「提督、ネウロイは現在本艦隊の北西１９カイリ。

そろそろ目視可能です。」

「そうか、船団は？」

通信兵の報告に旗艦ヴェネチア海軍戦艦インペロ座上のカルロ・ベルガミーニ提督が答えた。

通信兵「既に離脱、現在巡洋艦バルトロメオ・コレオーニを旗艦とする第二部隊が護衛中です。」

ベルガミーニ「そうか、総員戦闘配置、主砲装填、弾種魔導徹甲」

副長「総員戦闘配置！」

ベルガミーニが戦闘配置を指示すると副長が復唱する。

その連絡を受けると即座に彼の隷下の戦艦２隻、旗艦インペロとフィウメに退避していたためそのまま指揮下にいれたヴェネチア海軍第１戦隊の戦艦ヴィットリオ・ヴェネト、重巡洋艦トレント、トリエステ、軽巡洋艦アルベルト・ディ・ジュッサーノ、アルマンド・ディアス、ムツィオ・アッテンドーロ、駆逐艦８隻、水雷艇９隻、コルベット４隻の大艦隊が戦闘配置を取っていた。

そして全艦ベルガミーニの指示を受け魔道徹甲弾を装填するとネウロイに向け全力で突進する。

そして全艦射程に捉えるとベルガミーニが命じる。

ベルガミーニ「よし、撃て！」

数十秒後ネウロイは爆散した。

宮藤「すごい…」

坂本「ネウロイを一撃…だと…」
たった一撃、艦砲の一斉射で巨大なネウロイを粉砕したその威力に宮藤と坂本は驚いていた。
ふと宮藤はここで思い出した。
宮藤「坂本さん、あの飛行機たちは？」
坂本「うむ…いたぞ！あそこだ！」
坂本が魔眼を使って探すとＪｕ８８は海面すれすれを、Ｂｆ１０９は二式大艇の上を旋回していた。
宮藤「どうしましょう、坂本さん」
坂本「そうだな、とりあえず呼びかけてみよう。
土方、無線機を」
宮藤が聞くと坂本は土方から無線機を受け取り無線で呼びかけた。
坂本「こちら扶桑海軍坂本美緒少佐だ。
当機の周囲を飛行しているＪｕ８８とＢｆ１０９は所属を答えよ」

ベルガミーニ艦隊がネウロイを一撃で吹き飛ばしたのは海面すれすれを飛んでいたニコ、二式大艇の上を旋回して攻撃するチャンスを伺っていたヤンの両方に見えていた。
ヤン『なんだ!?戦艦か?!』
ニコ「ああ、戦艦だ！前方にヴィットリオ・ヴェネト級戦艦二隻とアルベルト・ディ・ジュッサーノ級巡洋艦、トレント級に似た未確認の巡洋艦を確認した！
イタリア共同交戦海軍だ！」
ニコは前方に艦隊を発見していた。
そしてその艦影をかつてはマルタやクレタに向かっていたイギリス艦隊も攻撃していたニコが即座にイタリア海軍のヴィットリオ・ヴェネト級戦艦とアルベルト・ディ・ジュッサーノ級軽巡洋艦、そしてトレント級重巡洋艦に似た巡洋艦と識別した。
そしてこれらの艦艇を持っていたのは枢軸軍ではない、連合軍側に

ついたイタリア軍、イタリア共同交戦海軍である。
即ち敵であった。
すぐにニコは機体を１８０度旋回させて艦隊から離れた。
ニコ「にしても一体何なんだ…気がついたらベックとレックが消えて、真昼間でその上巨大な黒い飛行物体が光線を放つし沈んだはずのトレント級重巡洋艦が浮いているって…」
艦隊から離れたところでニコは状況を整理し始めた。
状況は訳の分からない常識では考えられないことの連続であり理解不能だった。
同じようにヤンも状況を整理していたが全くもって理解不能だった。
すると無線が響いて若干の訛りのある流暢な英語が聞こえてきた。
坂本『こちら扶桑海軍坂本美緒少佐だ。
当機の周囲を飛行しているＪｕ８８とＢｆ１０９は所属を答えよ』
ニコ「こちらドイツ空軍第1夜間戦闘航空団所属ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト中尉。」
ヤン『フィンランド空軍第３３戦隊ヤン・オーラ・ハンマルフェルド中尉、どうぞ』
二人は答えるが警戒を緩めるどころかさらに警戒しヤンは二式大艇の後ろについていつでも撃墜できる態勢を整え、ニコも二式大艇の下に回り込みシュレーゲムジークを照準する。
だが続いて来たのは意外な言葉だった。
坂本『了解した。当方に攻撃の意思はない。
最寄りの基地へ誘導する。』
ニコ「了解した」
ヤン『了解』
その言葉に二人は安心する。
自機の位置が分からない上にＢｆ１０９は航続距離が短く、Ｊｕ８８は燃料タンクに穴が開いたままであり現在進行形で機体の後ろには燃料の尾を引いていた。

両機は飛行艇の後ろについて飛び始めるが突如、前方から飛行機よりもずっと小さい飛行物体が二つ飛んできてすれ違う。
そしてその正体を見て二人は愕然とする。
ニコ「人…だと…」
すれ違い、戻ってきて機体の外に並んで飛ぶ二人の少女を見てありえないように呟いた。

第3話：偉大なる５０１

ニコ「人…だと…」
ニコは機体の外を飛ぶ赤いジャケットを着て兎の耳を生やした少女と褐色の少女を見て呟いた。
彼にはこの光景は理解不能であった。
それはヤンも同じでありコックピットから呆然として見ていた。

シャーリー「なあ少佐、ネウロイはどこだ？」
その兎耳を生やして赤いジャケットを着た少女、シャーロット・E・イェーガー大尉はニコのＪｕ８８の左側について辺りを見回しながら無線機で飛行艇に乗った坂本に聞く。
彼女は元々この飛行艇の援護に来たが、向かっている途中で該当空域にネウロイを発見したベルガミーニの艦隊からの連絡を受け急行したのだ。
坂本『今回だけは遅かったなシャーリー。
　来る少し前に艦隊に撃破された。』
シャーリー「艦隊って下の大艦隊か」
シャーリーは眼下の艦隊を見て言う。
艦隊は撃破すると反転して船団の方へ戻っていった。
ルッキーニ「チャオ！芳佳！」
宮藤『ルッキーニちゃん！』
またルッキーニは二式大艇の窓に手を振って宮藤に挨拶する。
すると今度は横から別のウィッチたちが近づく。
リーネ「芳佳ちゃん！」
宮藤『リーネちゃん！無事だったんだ！』
リーネ「うん！ガリアから今着いたの！」
窓の外からリーネがが宮藤を呼ぶ。
親友同士の久しぶりの再会に窓越しとはいえ喜んでいた。
宮藤『ガリア？ってことは…』
ペリーヌ「感激している場合ではありませんわよ」

宮藤『ペリーヌさん！』
するとリーネの後ろからペリーヌが宮藤に声をかける。
さらに続いて今度は違うエンジン音が聞こえ始めた。
そして右側から二人のウィッチ、左側から3人のウィッチが現れた。
宮藤「エイラさん！サーニャちゃん！
ミーナ隊長！バルクホルンさん！ハルトマンさん！」
現れたのはエイラ、サーニャ、ミーナ、バルクホルン、ハルトマンの5人だった。
5人は飛行艇を囲むようにしてロマーニャに向かった。
するとミーナが後ろのドイツ機を見て坂本に聞く。
ミーナ「美緒、後ろのドイツ機は？」
坂本『突然現れたんだ。ミーナ』
ミーナ「そう、面倒なことになりそうね」

その数十分後、ウィッチたちは目的地の基地にいた。
ニコとヤンは先に降ろされたが状況が分からずとりあえず拳銃を準備してエンジンを切り滑走路の横に駐機してコックピットにいた。
ニコ「いったい何が何やら…」
ヤン「おい！ドイツ人！いるか？」
コックピットで拳銃を用意していたニコにヤンがいつの間にか駆け寄りコックピットの窓を叩いて呼んだ。
呼ばれたニコは窓を開けて聞いた。
ニコ「なんだ？」
ヤン「いったい何がどうなってるんだ？」
ニコ「それはこっちのセリフだ。何が何やらさっぱりだ」
二人とも状況をまともに理解できていなかった。
二人は一応拳銃を用意するととりあえず機体から降りるとヤンはタバコを吸い始めた。
ヤン「なにが起きてるんだか…タバコいるか？」
ニコ「いい。吸えないんだ」

ヤン「もったいねぇな。」
ヤンはニコにタバコを勧めるがニコはタバコが吸えないので断った。
そこから少し離れたところでは宮藤が飛行艇から降りると階段を上がっていた。
リーネ「芳佳ちゃん！」
宮藤「リーネちゃん！無事でよかった！」
階段を上がるとすぐにリーネが宮藤に抱き着いていた。
リーネ「うん、芳佳ちゃん来てくれたんだ！」
二人は親友同士の久しぶりの再会を喜んでいた。
シャーリー「しっかし、まさか宮藤が来るとはなあ」
ペリーヌ「それを言ったら、シャーリーさんはアフリカのはずじゃ？」
ルッキーニ「へへ～ん。ロマーニャが心配で抜け出してきた！」
シャーリーが宮藤が来たことを喜ぶがシャーリーたちもそもそもアフリカを抜け出してこっちに来ていた。
無論無許可離隊は本来重罪である。場合によっては銃殺刑に処されてもおかしくのないほどのである。
エイラ「えっと、私たちはスオムスに行くはずがさ…ちょっと乗り間違えてアドリア海に…」
サーニャ「エイラの占いで、危ないって出てたから」
エイラたちも事情を言うがエイラが隠そうとするのをサーシャがぶっちゃける。
するとふと宮藤はあることに気が付いた。
宮藤「ところで、ハインツさんたちは？」
ふとどういうわけかハインツ達がいないことに気が付いた宮藤はバルクホルンに聞く。
バルクホルンは時計を取り出して時間を確認する。
バルクホルン「おかしいな。
予定ならアレックスたちはもう来てるはずだぞ」
ハルトマン「何かあったんじゃない？」

バルクホルン「アレックスに?まさか…」
本来ならハインツ達はとっくの昔にこの基地に来ているはずだった。
だがハインツ達は来ていなかった。
それにバルクホルンは心配になる。
すると後ろから数台の車のエンジン音が聞こえ振り向くと2台の乗用車と1台のトラックがやってきてウィッチたちの前で止まった。
ハインツ「あー!やっと着いた!寝る!お休み!」
ミラー「眠い…リーネ…ベッドまで運んで…ｚｚｚ」
ノヴァク「ｚｚｚｚｚ」
先頭のフィアット５０８ＣＭには胸に金の飾緒をつけたハインツ、2台目のフィアット５００トポリーノにはミラー、3台目のドブンクェ３５汎用トラックにはノヴァクが乗っていた。
だが3人は到着した途端、その場で眠り始めた。
バルクホルン「なにをやってるんだハインツ!ミラー!アレックス!
ハルトマンでもないのにそこで寝るな!」
ハインツ「うるせぇ…こっちはカンヌで列車から降ろされヒッチハイクと途中で拾ったロマーニャ軍と民間の車使って4日間寝ずに道に迷ってナポリ行ったり、ローマで立ち往生したりチヴィタヴェッキアで大渋滞に巻き込まれたりしてやっと着いたんだぞ。
こっちはもう６０時間は寝てないんだ、寝させろ…」
バルクホルンは3人を怒るが3人はミーナたちとは別行動でロマーニャに向かったが途中のカンヌで鉄道が止まりそこで降ろされ、そこからヒッチハイクを繰り返して何とかロマーニャのオスティリアまで向かい、そこで放棄されたロマーニャ軍の車と民間乗用車を見つけそこから基地に向かったが途中で道を間違えてナポリまで行ってしまった上に戻ろうとしてチヴィタヴェッキアで大渋滞に巻き込まれ、ローマで燃料が切れるなどの珍道中の末4日間走り続けてやっと着いたのだ。
この間チヴィタヴェッキアでの大渋滞で寝ていた以外はほとんど

寝ずに来ていたため3人はもうすでに疲れ切っていた。
するとミーナがハインツに近寄り頭を叩く。
ミーナ「ハインツさん！起きて！仕事よ！」
ハインツ「それは明日やるからほっといてくれ…」
ミーナはハインツを起こそうとするがハインツは座席に寝転がりながら寝ぼけながら答える。
ミーナ「あなたのお仲間が二人も来たのよ！」
ハインツ「めんどくさそうだからミラーかノヴァクに振っといて…」
ハインツはミーナに言われても起きる気などなくミラーとノヴァクに丸投げする。
ミーナはミラーの方を見る。
ミーナ「だそうよ、ミラーさん」
ミラー「ｚｚｚｚｚ」
リーネ「爆睡してます。ふふ、可愛い寝顔ですね」
ミラーの方を見るがミラーはトポリーノのキャビンでいつの間にか助手席に座っていたリーネにもたれかかって爆睡していた。
リーネはそれを見て微笑みながらミラーの頭をなでていた。
ミーナ「ノヴァクさんは？」
バルクホルン「この通りだ」
ノヴァク「ｚｚｚｚｚ」
ミーナがノヴァクのこと聞くがバルクホルンが寝ているノヴァクをお姫様抱っこして連れてくる。
ミーナ「両方駄目ね、二人とも寝てるから起きなさい、仕事よ！」
ハインツ「ｚｚｚｚｚ」
ミーナ「ペリーヌさん、やっていいわよ」
ペリーヌ「分かりました中佐、トネール！」
ハインツ「ギャー！」
するとミーナはハインツを無理やり起こそうとペリーヌにトネールを使わせて起こした。
ハインツ「痛ぇ…」

ミーナ「ハインツさん！仕事よ！」
無理矢理ハインツを叩きおこすとミーナは寝ぼけたハインツを連れてニコたちの下に向かった。
ミーナ「ハインツさん！見て頂戴！」
ハインツ「ん？おいおいお仲間か」
ミーナはハインツにニコたちを見せる。
それにハインツは寝ぼけながらも言う。
ハインツ「はいはい、えーと俺は元ドイツ空軍第２６駆逐戦闘航空団所属ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐だ。
こっちがミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。
あんたらは？」
ハインツがミーナと自分の自己紹介をして敬礼する。
するとニコは右手を上げ、ヤンは普通に敬礼する。
ニコ「ヴァレンシュタイン少佐、自分はドイツ空軍第１夜間戦闘航空団所属ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト中尉です。」
ヤン「フィンランド空軍第３３飛行隊所属ヤン・オーラ・ハルマンフェルド中尉です」
ハインツ「分かった。それといつからルフトヴァフェはその敬礼をするようになったんだ？」
二人の自己紹介を聞いたハインツはふとなぜニコがナチス式敬礼をしたのか気になり聞いた。
ニコ「７月２０日に総統閣下を国防軍の一派が殺害しようとしてそれ以降国防軍ではこの敬礼を」
ハインツ「なら今すぐやめろ。少なくともＮＳＤＡＰはいないからな。
ぶっちゃけるがここは異世界だ。それと今何年の何月だと思ってる？」
ハインツはナチス式敬礼をニコにやめるよう言うと状況をぶっちゃける。
そしてハインツの質問に二人は答えた。

ニコ「いつって…４５年２月では？」
ヤン「ああ、４５年の２月だろ」
ハインツ「今日は４５年３月だぞ。それもここはロマーニャ。
　向こうで言う所のイタリアだ！」
ヤン「そんな馬鹿な。フィンランドじゃ…」
ニコ「ドイツじゃないのか…」
ハインツ「ああ。それと詳細は後で説明するが一つ言っておく。
　この世界ズボンとスカートがないからパンツみたいなのがズボンだ」
ショックを受ける二人にハインツはある程度の説明をした。
説明するとハインツは坂本と話していたミーナのもとに行った。
ハインツ「中佐、終わりましたよ。」
ミーナ「そう、集合！」
するとミーナはウィッチたちを集めた。
そしてミーナの横に坂本とハインツが並ぶ
ミーナ「では、連合軍総司令部からの命令を伝えます。
　旧５０１メンバーは原隊に復帰後、アドリア海にてロマーニャを侵攻する新型ネウロイを迎撃、これを撃滅せよ。
　尚、必要な機材・物資は追って送るが、それまでは現地司令官との協議の上調達すべし。」
坂本「はっははは、流石に手際がいいな！」
ミーナ「ガランド少将とリュッツオウ大佐、それにバルボ大将のお墨付きよ」
坂本が手際の良さを指摘するがそれにミーナが微笑んで返す。
するとハインツがタバコに火をつけながら内情を話す。
ハインツ「まあ命令とはいってもどうもリュッツオウ大佐とヴィルケ中佐が絡んでるらしいけどな」
坂本「ヴィルケ中佐？」
すると坂本はハインツの言ったヴィルケ中佐の名前に疑問を持った。
ハインツ「知らないのか？ヴォルフ・ディートリヒ・ヴィルケ中佐。

連合軍西方総軍航空参謀部参謀、ギュンター・リュッツオウ大佐の部下だ。
この話はリュッツオウ大佐とヴィルケ中佐が絡んでるって話だ。」
坂本「そうなのか」
坂本は西方総軍の内情を知らないためヴィルケ中佐のことを知らなかった。
すると宮藤が隣にいて寝ているミラーを支えていたリーネに聞く。
宮藤「ねえねえリーネちゃん、つまりどういうこと?」
リーネ「えっと…」
リーネが考えているとミーナが話し始めた。
ミーナ「私、ミーナ・ヴィルケ中佐以下、坂本美緒少佐、ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐、ゲルトルート・バルクホルン大尉。シャーロット・E・イェーガー大尉、アレクサンデル・ノヴァク中尉、エーリカ・ハルトマン中尉、サーニャ・V・リトヴャク中尉、ペリーヌ・クロステルマン中尉、エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉、アドルフ・ミラー少尉、フランチェスカ・ルッキーニ少尉、リネット・ビショップ曹長、宮藤芳佳軍曹」
メンバーの名前をミーナが読み上げる。
ミーナ「ここに、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』を再結成します!」
「了解!」
ミーナの宣言に寝ているミラーとノヴァク以外が返事した。

その日の夜、ハインツとミラー、ノヴァクはニコとヤンの二人に世界の情勢を教えていた。
ハインツ「…というわけだ。これがお前らの目の前に置かれた現実だ。いいな?」
ヤン「分かった、しかし死んだらヴァルハラかと思いきや異世界と

はな」
ニコ「そうですか…しかし残酷だな。
妹みたいな年の子を戦場に送るなんて」
ハインツが一通り、ウィッチや世界の情勢、地理などを教えその内容に二人は衝撃を受けていた。
ハインツ「ふーん、ニコ、あんた妹がいるのか？」
ニコ「まあね。４人いて全員可愛いよ。目にいれても痛くないぐらいには」
ノヴァク「シスコンじゃねえか」
ニコがシスコン発言をしそれにノヴァクが突っ込むが彼自身も義理の妹になるクリス相手には甘いのである種同類だった。
ハインツ「まあシスコンだが何でもいいがこれからお互い仲良くやろうや。
よろしくニコ、ヤン」
ニコ「よろしくお願いします、ヴァレンシュタイン少佐、ノヴァク中尉、ミラー少尉」
ヤン「よろしく」
そういうと両者握手をした。

第４話：問題だらけの始動

ロマーニャ、第１５騎兵軍総司令部の司令官室。
その部屋には数人の将軍がいた。
アイケ「どう思うかね？クリューガー中将」
クリューガー「そうですね、〝処理〟すべきかと。
害虫、ましてや敵のネウロイを崇める連中などユダヤのペスト共よりたちが悪い。
そんな連中など生きるに値するどころかアーリアの血を汚す汚物だ。
早いところこの地球上から骨一つ残さず消し去ってしまうべきだ。
フリードリヒやフェーゲライン君がポーランドやベラルーシでやったようにな！」
アイケの問いに答えたのは眼鏡をかけた第１５騎兵軍団司令官ヴァルター・クリューガー中将だった。
アイケが聞いていたのはネウロイを崇める新興宗教に関する処理だった。
彼は弟のフリードリヒ・ヴィルヘルム・クリューガー武装親衛隊大将や同じ部屋にいる一番若い将軍であるヘルマン・フェーゲラインがポーランドやベラルーシでやったようにすべきだという。
つまるところナチス言う所の「最終的解決」であった。
それに第６００騎兵師団フロリアン・ガイエル師団長ヘルマン・フェーゲライン少将を続く。
フェーゲライン「私も賛成です。
早いところこんな害虫どもを綺麗にしなければ」
アイケ「フェーゲラインも賛成か。
なら特別行動部隊に処理させよう」
この数時間後、その新興宗教の各施設や信者の家にカラビニエリと黒シャツ隊、そして特別行動部隊が押し入り親族諸共捕まえた。
その大半はそれから数日から数週間かけてロマーニャ各地で〝処

理〟された。
アイケ「ところで、デ・ボーノ大将が来週、ガリアに介入するそうだ」
クリューガー「なにをするんです?」
するとアイケが話題をデ・ボーノが企んでいるガリア方面への介入に話題を変えた。
アイケ「未回収のイタリアを回収するそうだ」
クリューガー「バカかあいつは?」
デ・ボーノの企み、それは未回収のイタリア、つまりニースとサヴォアを権力争いの混迷の度を深め、実質的な統治の権限の大半を連合軍ガリア軍行政司令部に奪われた結果、国内でテロと騒乱の嵐が吹きすさびロマーニャと同等かそれ以上の赤狩りの真っ只中で殆ど皮だけになっているガリアから混乱をついて占領するという外交問題確実のことをするつもりだった。
現状を完全に無視した行動にクリューガーは思わずバカだという。
アイケ「表向きはニースとサヴォアのロマーニャ系住民を保護するためだそうだ。
それに侵攻するのは「民兵」がやるそうだ」
クリューガー「最新のロマーニャ軍火器を持ったロマーニャ民兵か?」
アイケ「ああ、礼儀正しい人々、だそうだ」
クリューガー「礼儀正しい人々…酷いジョークだ」
正規軍が出ると大問題であるためデ・ボーノは「民兵」を使う予定だった。
この翌週、突如ガリア領のニースとサヴォアに最新のロマーニャ軍装備を付けた国籍不明の武装勢力「礼儀正しい人々」が現れ両地域を制圧、ガリア政府は碌な対処も出来ず黙認することしかできなかった。

５０４基地、５０１再結成の翌日。
坂本と宮藤はこの基地に物資を搬入していた。

竹井「扶桑からの物資、助かったわ。ありがとう」
５０４の戦闘隊長で坂本とは旧知の間柄の竹井が坂本に礼を言う。
坂本「報告書は読んだ。あの内容、事実なのか？」
竹井「ええ。あの時私達はネウロイと接触できると思ってた。
でも結局私達は分かり合えなかった。
ネウロイはより一層凶暴になって現れた」
すると坂本は５０４からロマーニャ空軍経由で渡された報告書の内容を竹井に聞いた。
その報告書はアイケやバルボが「作戦ですらない無理心中」と評したトラヤヌス作戦の顛末だった。
トラヤヌス作戦は大失敗、５０４は戦闘能力を喪失した。
竹井はその忸怩たる思いを思い出していた。
竹井「それだけじゃないわ。トラヤヌス作戦の直後、ロマーニャ軍の一派とカラビニエリが行動を起こしたの」
坂本「それは初耳だぞ」
竹井はそれと同時に起きたロマーニャ軍の行動を坂本に言う。
このことは彼女の耳には届いていなかった。
竹井「そうでしょうね。行動を起こしたのはカラビニエリのアーゾン中将、ロマーニャ陸軍のデ・ボーノ大将、海軍のレニャーノ中将、そして空軍のバルボ大将よ」
坂本「バルボ大将だと」
坂本はこのクーデターに関わった人の中に５０１の設立に関わり、当面の物資の提供を確約したロマーニャ空軍のバルボ大将の名前があることに驚いた。
竹井「ええ。彼らはトラヤヌス作戦後の混乱を突いて各地で行動を開始した。
彼らは戒厳令を敷き、報道管制と検閲を実行、各地で多くの人が拘束されて殺されたわ。
５０４にいた整備士や兵士も数人カラビニエリに拘束されたわ。」
竹井はクーデター後のロマーニャでの変化を語る。

彼女らから見ればバルボやアイケの指揮するロマーニャの「清掃作業」は無作為の虐殺に見えた。
だが実際は殺されたのは大半が共産主義者やその関係者、マフィア、反政府勢力などのゴミでありむしろ清掃されて当然といえた。
竹井「それだけじゃない、ここ最近カールスラント軍の一部部隊も動いているって噂があるわ。
それも逮捕どころじゃない、彼らに捕まったら最後生きては戻れない殺戮部隊って噂よ。」
坂本「殺戮部隊…」
竹井「捕まえればあらゆる残虐非道な手段で人としての尊厳を踏み躙って殺す。
人としてさえ扱われず殺され、死体は消え失せる。そういう噂よ」
坂本「そんな恐ろしいことが…」
竹井は坂本にカラビニエリと黒シャツ隊以上の悪逆非道を繰り返しているという噂のカールスラント軍部隊を伝える。
その内容に坂本は絶句した。
もはや人間はかくもそこまで残虐になれるのか、そのレベルのほどの話であった。
竹井「気をつけて、美緒」
坂本「ああ…」
坂本の返事はどこか上の空だった。
坂本（殺戮部隊…ノヴァクの言っていたナチス…か?）
竹井の言った殺戮部隊の話を聞いて坂本はノヴァクから聞かされたナチスの虐殺を思い浮かべた。

５０１が再結成された日から数日後
ニコは暗い廊下を歩いていた。
ニコ「はぁ…夜尿症だけはこっちに来ても収まらないか…」

彼は戦場でのＰＴＳＤから夜尿症を患っていた。
そのためいつも夜になれば頻繁にトイレに行かなければならなかった。
この日もまた夜中に尿意を催しトイレに行っていた。
そして薄暗い廊下を歩いていると向かいから何かがふらふらと歩いてきた。
ニコ「なんだ？」
ニコは心配になり近寄る。
それは夜間哨戒を終えたサーニャだった。
ニコ「リトヴァク中尉？大丈夫ですか？うぉ」
ふらふら今にも倒れそうなサーニャを気遣い声をかける。
するとサーニャはそのままニコに向かって倒れニコはそれを受け止めた。
ニコ「えっと…リトヴァク中尉？」
サーニャ「ｚｚｚｚ」
サーニャはニコの胸の中で眠ってしまった。
ニコ「はぁ…で？リトヴァク中尉の部屋ってどこだ？」
ニコはサーニャの部屋を知らないのであたりを見渡すが誰もいないため聞くことすらできなかった。
ニコ「はぁ…仕方ない。今日は僕の部屋で寝ていいですよ」
そう言ってニコは寝ているサーニャをお姫様抱っこで抱えると自分の部屋に連れて行きベッドに寝かせ自分はそのままベッドにもたれかかり眠った。

翌朝
エイラ「サーニャァァァァ！」
突如エイラが叫んだ。その大声に寝不足のハインツはキレた。
ハインツ「エイラ！朝からうるせえ！こっちは3時間しか寝てねえんだ！」
エイラ「ハインツ！サーニャがいないんだ！」

ハインツ「基地のどっかにはいるから自分で探せ！俺は昼まで寝てる」

サーニャがいないとエイラは訴えるが５０１の再編により５０１の主席参謀という新たな役割を与えられた結果仕事が倍増、５０１運営の庶務を統括することになり毎日ストレスと書類の波によって寝不足気味のハインツは無視して自分の部屋に戻りその日は昼間で寝ていた。

だがエイラの叫びはニコの部屋にいたサーニャとニコを起こしてしまった。

サーニャ「ん…え？」

ニコ「ん…ふぁぁ…あ？起きました？リトヴァク中尉」

エイラの叫びは二人を起こしたがサーニャは気がついたらニコがそばで寝ていることに驚いていた。

サーニャ「はい、えっとハルトマン＝ファルケンホルスト中尉？」

ニコ「別にニコでいいですよ。」

サーニャ「なら私もサーニャで。えっと、ここは？」

ニコ「僕の部屋です。別にいやらしいことをしようといたわけではなくて、トイレに行った帰りにサーニャさんが今にも倒れそうな感じで歩いていたんで助けたらそのまま寝てしまって…

部屋が分からず仕方ないので僕の部屋に…」

ニコはサーニャに事情を説明する。

その丁寧な説明と態度にサーニャはニコに好感を持った。

サーニャ「ありがとうございます。」

ニコ「いえいえ、まだ寝ていていいですよ」

サーニャはニコに感謝の言葉を述べるがニコはサーニャに布団をかけると部屋を出て行った。

部屋を出たニコは同じくエイラの叫びで目を覚ましたヤンと出会った。

ヤン「おはよう、ニコ。今のはなんだ？」

ニコ「さあ？」

二人はそのまま廊下を歩いて食堂に向かう、すると取り乱したエイ

ラがやってきた。
エイラ「おい！お前ら！サーニャ知らないか?!」
ヤン「サーニャってリトヴァク中尉だろ？知らんぞ」
ニコ「僕の部屋で寝てますけど何かあったんですか？」
二人は正直に答えた。
するとエイラがニコの返事を聞いてニコに掴みかかった。
エイラ「サーニャに何をした！」
ニコ「ちょっ！別に何もしてませんよ！僕の部屋で寝ているだけですから！」
エイラ「本当にそれだけなんだろうな！」
ニコ「なにもしてませんよ！」
エイラはニコを問いつめる。
ニコは半分慌てながらもちゃんと答えた。
だが信用していないエイラはニコを放すと走ってニコの部屋に行った。
そしてニコの部屋を勢いよく開ける。
エイラ「サーニャ！」
サーニャ「エイラ？」
突然のエイラの乱入にベットで寝ていたサーニャは驚く。
エイラ「サーニャ、大丈夫だったか？あいつに変な事されなかったか？」
サーニャ「大丈夫よエイラ。エイラ、ニコさんを疑っちゃだめよ」
サーニャに駆け寄ったエイラがサーニャに聞くがサーニャはなにもされずただ寝ていただけだった。

その後、ヤンとニコはユニットの訓練が行われていた。
すでに数日経過し、数回二人はユニットの訓練を受けていた。
そのためある程度はユニットの扱いに慣れ、固有魔法や使い魔まで分かっていたが実戦に出すには決定打に欠けていた。
ヤンの使い魔はケワタガモ、固有魔法は計算、この固有魔法はあらゆるものを数学的に解析するというものでありそれによって数学的

に最も当たりにくい場所をはじき出すことができたほか、数学的に最も当たる可能性の高い場所やコアのある可能性のある場所さえも弾き出せた。

そしてニコは使い魔がヨーロッパミミズク、固有魔法は固有魔法コピー、つまり固有魔法を完璧にコピーしてしまうものだった。

そのせいですでにハインツとノヴァク、ミーナ、バルクホルンの固有魔法が完全にコピーされていた。

だがそのせいで非常にコントロールが難しく飛んでる最中に誤って固有魔法を発動してしまうことが乱発した。

そしてこのほぼ新人と言っていいこの二人より問題のある人物が3人いた。

それはリーネ、ペリーヌ、宮藤だった。

3人は訓練を終えてミラーたちの前に倒れこんでいた。

ミラー「大丈夫リーネ？水持ってきたけどいる？」

ハインツ「こりゃ駄目だ」

半袖の熱帯シャツを着て左足にポケットのある長ズボンを履いたミラーがリーネに水筒を渡す。

その横で白いチュニックを着て左足に大きなポケットがあるズボンを履いたハインツがそう評価する。

3人は前ならば何の問題もなかった程度の訓練で根を上げていた。

ミーナ「明らかに体力不足ね」

坂本「あの3人はブリタニアの戦いの後軍から離れていたからな。実質半年以上のブランクだ」

3人はブリタニアの解放後軍を離れていたため体力も何もかもが衰えていた。

1日サボればなんとやらというように半年も離れていたら当たり前だが相応に落ちてしまうものである。

バルクホルン「午前中の飛行訓練でもあの3人は問題が多かったぞ」

ハインツ「ああ、まだニコとヤンの方が空中衝突しないだけマシだぞ」

午前中の飛行訓練も相当酷いものであった。
3人はそこで空中衝突していた。
その点だけならば最低限飛べているヤンとニコの方がマシであった。
バルクホルン「少佐、今のままじゃ実戦に出すのは危険だぞ。」
ハインツ「それはどっちの少佐に言ってるんだ？」
バルクホルン「両方だ」
ハインツ「まあ確かにな。ただでさえ新人を二人抱えてるのにさらに3人もほぼ一からとなると大変だな」
坂本「そうだな」
現状、新人を5人も同時に教育するとなると５０１では手に余った。
なにせただでさえ人員不足なのだ。
坂本「起きろ、二人とも。」
宮藤「坂本さん」
ペリーヌ「少佐…」
すると坂本はリーネと宮藤、ペリーヌを座らせた。
坂本「宮藤、リーネ、ペリーヌ、お前たちは基礎からやり直しだ！」
「は、はい！」

第5話：特訓

その後、ペリーヌ、リーネ、宮藤、ニコ、ヤンは荷物を纏め武器を持って基地からアドリア海を飛んでいた。
ニコ「大体問題はないな。ルートからは逸れてない」
ペリーヌ「ありがとう、ニコさん。」
ニコはクロノメーターと六分儀を使って位置を確認してそれを地図を持ったペリーヌに伝えた。
ニコは元々爆撃機パイロットでありクレタへの爆撃やマルタへの空襲にも参加、そのため彼は天測の技術を身につけていた。
するとペリーヌが雲の隙間から小島を見つける。
ペリーヌ「あそこですわ」
そういうとペリーヌ達は降下して小島に降り立つがそこには誰もいなかった。
リーネ「本当にここが訓練所なんですか？」
ヤン「なにもないぞ」
ペリーヌ「少佐に頂いた地図だとここに間違いありませんわね」
宮藤「でも誰もいないよ」
ヤンとリーネがペリーヌに聞く。
ペリーヌの持っていた地図によればこの島が訓練所であった。
ニコ「ん？なんだ？」
ふとニコは上に何かがあるのに気が付く。
それにつられて全員上を見ると何かが落ちてきた。
5人はすぐにその場を離れる。
ペリーヌ「ネウロイ！」
ヤン「なんだ！」
ニコ「誰だ！」
すぐにペリーヌは銃を向けヤンとニコは拳銃を抜いて構えた。
そして落ちてきたものを確認する。
ヤン「たらい？」
ニコ「誰かいるのか？」

落ちてきたのはただのたらいだった。
アンナ「誰がネウロイだい」
ペリーヌ「喋った！」
ニコ「誰だ！」
ヤン「武器を捨てろ！」
そして突然声がするとヤンとニコは声がした方向に武器を向ける。
そこにいたのは箒に乗った老婆だった。
アンナ「挨拶もなしにうちの庭に入る上に人様に銃を向けるなんて！
　近頃の若い子はしつけがなってないね」
老婆はヤンたちを叱る。
宮藤は慌てて挨拶する。
宮藤「あ…こ、こんにちは」
リーネ「もしかして、アンナ・フェラーラさんですか？」
宮藤「え？」
アンナ「そうだよ」
この老婆こそ教えを請う先生のアンナ・フェラーラだった。
それを聞いてすぐにヤンとニコは拳銃をホルスターに戻して謝る。
ニコ「すいません、つい軍人としての癖が出てしまいました」
宮藤「あの、私達坂本少佐の命令で訓練に来たんです！
　ここで合格貰うまでは絶対に帰るなって言われました！」
すると宮藤がアンナに来た理由を説明した。
坂本は5人の訓練をアンナに任せた（又は丸投げした）のだ。
アンナ「はぁ…とりあえずその履いてるもん、脱ぎな」
それを聞いてアンナは最初にユニットを脱ぐよう指示する。
言われた通りに5人はユニットを脱ぐ。
宮藤「バケツ？」
ニコ「何に使うんだ？」
ヤン「いたずら？」
アンナはまず5人にバケツを渡すが何に使うか全く理解できなかった。

アンナ「じゃあまずあんたたちには、今晩の食事とお風呂の為に水を汲んできてもらおうかね」
リーネ「水汲みですか？」
ニコ「井戸かタンクは…」
アンナはバケツを使って水くみをさせようとしていた。
それを聞いてニコが周りを見回すが井戸らしきものも水タンクらしきものもなかった。
アンナ「井戸ならあっちだよ」
井戸を探すのを見てアンナは井戸を指さす。
井戸は半島にある小高い丘の上にあった。
ペリーヌ「ええっ!?あんな遠く…」
宮藤「うわあ…」
ニコ「まあオアシスが１００キロ先とか水が一日コップ一杯よりかはマシか」
ヤン「お前一体どんなところにいたんだ？」
あまりの遠さに驚くが唯一アフリカに1年以上いたニコだけはなぜかアフリカよりまだ水があるだけマシという理由でそれほど驚いていなかった。
アンナ「ここは海の上だからね、水が出るのはあそこだけさ」
するとリーネが名案を思い付いた。
リーネ「あっ、でもストライカーを履けば！」
宮藤「そっか！」
ペリーヌ「ストライカーで飛んでいけばあっという間ですわ」
ニコ「多分違うと思うんだけど…」
その案を聞いてペリーヌ達はユニットの方に向かう。
ただニコとヤンは違うと感じていた。
アンナ「誰がそんなの使っていいって言ったんだい！」
その予想通りアンナはペリーヌ達の前に立ちはだかって注意する。
そしてあるものを渡した。
アンナ「ほら、これを使うんだよ」
ペリーヌ「って…まさか…」

「「箒？」」
アンナが渡したのは箒だった。
それを見てヤンとニコは不安になる。
ヤン「いやまあ、俺の知ってる魔女は箒使ってたけど…」
ニコ「これで飛べ…るんだろうなうん。さっき飛んでたし」
そしてさっそく訓練が始まった。　５人は箒を持って一列に並ぶ。
宮藤「行きます！」
宮藤が合図すると５人は箒に魔力を流す。
すると５人は少しずつ浮く。
だが、
リーネ「い、痛い…」
宮藤「く、食い込む…」
ヤン「ケツが…痔になるぞマジで…」
ニコ「クッションが欲しい…」
ペリーヌ「あ…く…」
股間に箒が当たる上に全体重がそこにかかるため相当な痛みを伴っていた。
そのためペリーヌ達はコントロールすらできず宮藤は箒が前のめりになってそのまま滑り落ちかけ、リーネは箒にしがみついていた。
ペリーヌは何とかコントロールできていたがそのバランスは危ういものだった。
またヤンもペリーヌよりはマシとは言えバランスを維持するのに精一杯で何とか少しずつ動いている程度だった。
一方のニコはというと
ニコ「この感覚、どっかで…」
箒の飛ばす感覚が昔経験したあることに似ていると感じていた。
その感覚を思い出しながらゆっくり動き出すとそのまま井戸まで行ってしまった。
アンナ「いつまで地面をうろうろしてるんだい！
　あいつを見習って早く行かないと晩御飯に間に合わないよ！」

そこでアンナがあまりに酷い４人にはっぱをかける。
するとペリーヌ達はバランスを崩してコントロール不能になった。
ヤンは何とか牛歩程度の速度で井戸に向かって移動し始めた。
このあまりに酷い様にアンナは呆れる。
アンナ「全く情けない。
　これで魔女とは片腹痛いね。男の方がよっぽどできてるじゃないか」
するとアンナは落ちたリーネに近づく。
アンナ「あんたは無駄にデカいものをつけてるからバランスが取れないんだよ！」
リーネ「キャー！」
アンナはそう言いながらリーネの胸を触る。
それにリーネは悲鳴を上げる。なおこの時５０１ではミラーが「誰かがリーネに痴漢した気がする」とか言ったとかどうとか。
続いて今度はなぜか空中で回り続けている宮藤の方に行く。
アンナ「いつまで回ってんだい！」
宮藤「ほ、箒に聞いてください！
　うっうううう…」
すると宮藤は酔ったのか箒を放して落ちてしまった。
すると何とかバランスを回復したペリーヌが来た。
アンナ「お、なかなかやるね」
ペリーヌ「こ、これくらい…ウィッチとして当然。
　う、ら、楽勝ですわ…」
アンナ「そうかいそうかい」
そういうとアンナは箒の後ろを上げる。
するとペリーヌはそのまま滑り落ちた。
だがそれとほぼ同時に別の音が響いた。
アンナ「あんたたちには永遠に合格をやれそうにないね」
リーネ「そ、そんな…」
その酷い有様にアンナはそう評価する。
ペリーヌ「今どきウィッチの修行に箒だなんて。

時代遅れにもほどがありますわ、やっていられません」

ニコ「そうかな？」

「お嬢ちゃん、案外そうじゃないかもしれないよ」

すると上から水を汲んで戻ってきたニコ、そしてアンナの後ろからサスペンダーで吊った乗馬ズボンとシャツを着たカメラを持った初老の男が現れた。

宮藤「それってどういう意味ですか？」

ニコ「いや、箒の感覚がさユニットを飛行機だとした時のグライダーの感覚に似てるんだよ。

僕は航空機で訓練を受ける前に地元のグライダークラブにいたからグライダーには慣れてるんだ。

動力がついてない、その分限られた方法でしか飛べない、それをどうするかって言うと操縦テクニックでどうにかする。

グライダーってそういう感じだから」

ルフトハンザに入る前はドイツで盛んだったグライダークラブに入っていたニコは箒の感覚がグライダーを飛ばす時と似ていると感じていた。

ニコのように軍や航空会社に入ったりパイロット訓練を受ける前にグライダーを飛ばしていた又はグライダーが趣味のパイロットは多く、世界一のエースエーリヒ・ハルトマンは軍に入る前は地元のヒトラーユーゲントのグライダーグループに入り有資格者でもあったほか有名なテストパイロットであるハンナ・ライチュもまたグライダーパイロットからパイロットになり戦後はグライダーの世界記録を何度も塗り替えている。

またかの有名なギムリーグライダーことエアカナダ１４３便不時着事故の機長はグライダーが趣味でありその時の経験やテクニックを使って無事燃料が切れ４３トンの巨大なグライダーと化した機体をギムリーの廃止された滑走路へと導き乗員乗客６９人の命を救っていた。

その説明に宮藤は納得する。

宮藤「なるほど」

「確かコントロールがどうこうらしいね、アンナさん」
アンナ「そうだよ。ところで遅かったじゃないか。」
「近所で検問があったんだ。身分証を持ってなかったからくまなく調べられたよ」
リーネ「あの、そちらの方は…もしかして旦那さん？」
するとリーネが初老の男とアンナの関係を聞いた。
それを聞いてニコがその男の顔を見るがその顔には見覚えがあった。
アンナ「旦那なんて大層なもんじゃないよ。ただの居候さ」
エルヴィン「どうもフロイライン、エルヴィン・ロンメルだ。
今は訳あってここに居候させてもらってる。
君たちが訓練に来た子かね？」
するとエルヴィンと名乗った男は宮藤たちに聞いた。
宮藤「はい。宮藤芳佳って言います」
エルヴィン「最近の若いのは元気があっていいねぇ。」
宮藤「ありがとうございます。」
エルヴィン「元気があるのはいい事だよ。
ところで君たちもしかすると思うがこれで本当に強くなれるのか？とか思っていないか？」
宮藤を褒めたエルヴィンは話題を変える。
それにペリーヌが同意する。
ペリーヌ「ええ。いくら言われてもこんな時代遅れの訓練で強くなるとは思えませんわ」
エルヴィン「だそうだ、ここはEin Bild sagt mehr als tausend Worte、といこう。
見ときな、この婆さんはすごいぞ」
エルヴィンはアンナに言う。
言われたアンナは箒に跨ると飛んで行った。
その姿はあっという間に消えてしまった。
宮藤「ア、アンナさん？」
リーネ「行っちゃった…」

ペリーヌ「あ…ふん、もう戻ってこなくて結構ですわ！」
エルヴィン「戻ってきたぞ」
ペリーヌ「え？」
するとアンナはすぐに戻ってきた。
箒の下には水が並々入ったタライがぶら下げられていた。
宮藤「うぁ！こんなに一杯！」
ペリーヌ「こ、これを一人で…」
リーネ「凄いです！」
ニコ「何キロあるんだ…」
ヤン「俺が15分かけて往復したところを1分もかけずにだと…」
5人はアンナの見事な飛行に驚いていた。
宮藤「でもこれで本当に強くなれるんですか？」
宮藤が改めてアンナに質問する。
アンナ「信じられないかい？
　でもねあんたたちの教官だってここで訓練して一人前の魔女になったんだよ」
リーネ「え？教官って…」
ペリーヌ「坂本少佐が!?」
坂本がここで訓練を受けていたことに3人は驚いた。
アンナ「ああ、あの子は素直でねぇ。
　最初っから私のことを尊敬して一生懸命練習したもんさ。
　おかげで見事な魔女に成長したってわけだ、ふん」
「わぁ～」
ヤン「ちょっと嘘くさい気がする」
その話に宮藤たちは感激を受けるがヤンとニコは胡散臭いと感じていた。
宮藤「坂本さんもこの訓練を…」
ペリーヌ「あ、あの…さ、坂本少佐が使われていた箒って…」
アンナ「そこの上手い奴が使ってるのじゃなかったかな？」
ニコ「これ？」
ペリーヌが坂本が使った箒を聞くがその箒はおそらくニコが使っ

ているものだった。
ペリーヌ「ニコさん！降りてくださいまし！」
ニコ「え？何で!?」
何故かペリーヌがそれを聞いてニコに迫った。
アンナ「なんだい、ありゃ？」
エルヴィン「流石の私でもあれは引くね」
ヤン「同感です。怖い」
その光景にアンナは呆れ、エルヴィンとヤンは冷ややかな目で見ていた。

翌日、この日もまた宮藤たちはコントロール不能で宮藤は橋をピンボールのように跳ねまわり、リーネは箒から落ちてぶら下がり、ペリーヌは箒が竹馬のように跳ねまわっていた。
一方のニコは鼻歌を歌いながらアンナと同じようにタライで水を運び、ヤンは昨日よりかは速い速度で往復していた。
そしてエルヴィンはその光景を写真で撮って回っていたが宮藤たちはそんなことにまるで気が付かなかった。
アンナ「やれやれ、3人ともちょっと来な。」
するとアンナは見かねて3人を集める。
アンナ「あんた達3人とも魔法力は足りているんだ。
足りないのはコントロール。
今までは機械がしてくれたものを自分でコントロールしなくちゃ駄目なんだよ」
そういうとアンナは宮藤の箒を少し上げる。
宮藤「ううっ…い、痛いですアンナさん」
アンナ「痛いのは箒に体重がかかってるからだよ！」
アンナが言うと続いてリーネ、ペリーヌにも同じようなことをする。
アンナ「いいかい？

あんたたちはストライカーユニットっていう機械にずーっと頼ってた。
まずそれを忘れて箒と一体化するんだ」
宮藤「箒と一体化？」
アンナ「箒に乗ろうとするんじゃなくて箒を体の一部だと感じるんだよ。」
リーネ「体の一部？」
アンナ「そして自分の脚で一歩前に踏み出す。
そんなイメージで魔法を込めるんだ。
ちゃんとした魔女なら簡単なことさ」
アンナは3人にアドバイスする。
3人はそれを聞いてアドバイス通りに魔力をこめ始めた。
ペリーヌ「自分の脚…」
宮藤「一歩前へ…」
すると3人は少しずつ浮き始めた。
宮藤「あっ、あっ、あっ、と、飛べたー！」
リーネ「私も飛べた！」
3人はある程度まで上がると喜んでいた。
そして三人はしばらく喜んで箒での飛行を楽しんでいた。
アンナ「いつまで遊んでんだい？さっさと水汲みに行かんと、日が暮れちまうよ！」
ペリーヌ「い、言われなくても行きますわ！」
「行ってきまーす！」
するとアンナも上がってきて3人に水くみに行くよう言う。
そして井戸に行くと何故か二人でサボってたニコとヤンが出迎える。
ヤン「やっと飛べたのかお前ら」
ニコ「これで少しは楽になりますね」
ペリーヌ「二人ともサボってたんですか？」
ペリーヌが聞く。
ヤン「なんだよ、水って意外と重いんだぞ。」

ニコ「タライ一つで多分１０キロはあるんですよ。少しぐらい休んでいいじゃないですか」
二人は水運びがそれなりに疲れるため休憩していた。
そしてペリーヌ達が来ると休憩をやめまた水を運び始めた。
暫くそうしているとニコの耳に微かにある特徴的な音が聞こえてきた。
ニコ「ん？ねえ、銃声がしないか？」
「え？」
ニコは微かに遠くから銃声のような音が聞こえてきたことに気が付いた。
それを言われてペリーヌ達も耳をそばだてる。
すると微かに銃声、機関銃やライフルなどの音が混ざった音が聞こえてきた。
リーネ「本当だ…」
ペリーヌ「確かに…」
宮藤「行ってみよう！リーネちゃん、ペリーヌさん、ヤンさん」
ヤン「ああ、なんでこんなところで銃声が鳴るんだ？」
すると５人はその銃声のした方へと向かった。
そこに「特別行動部隊」がいるとは知らずに…

第６話：〝最終的解決〟と砂漠の狐（注：ショッキングなシーンあり）

ニコ「確かこっちの方からしたような…」
ペリーヌ「このあたりの筈ですわね」
銃声を聞いた５人は音がした方に向かいしたであろう付近で地上に降りた。
そこは井戸から少し離れた森の中だった。
ヤン「本当にこんなところにいるのか？」
ニコ「分からん、聞き違いかも」
ヤンが不安になって聞くがニコも確信が持てなかった。
すると今度は別の音が聞こえてきた。
ニコ「ん？この音は…」
リーネ「トラック？」
ペリーヌ「何でこんな森の中で？」
気になった５人は音がした方へと向かう。
少し行くと開けた場所が見えた。
そこには大きな穴と数台のダークイエローやポリッツィアイグリュンのオペルブリッツやビュッシングＬ４５００やメルセデスベンツＬ１５００、ＫＨＤ３０００、フォードＧ９１７Ｔ、フォードＶ３０００トラック、黒塗りのオペル・アドミラル４ドアカブリオレ、ポリッツィアイグリュンのオペル・カピテーン２ドアサルーンとオペル・カデット２ドアサルーン、ダークイエローベースの迷彩塗装やダークイエローのＢＭＷＲ７５やツェンダップＫＳ７５０、ＤＫＷ３５０オートバイ、そして武装した多数のカールスラント軍らしき兵士がいた。
リーネ「カールスラント軍？」
宮藤「こんな森の奥でなにしてるんだろ？」
すると別のルノーＡＨＮトラックがやってきた。
荷台にはカールスラント兵と一緒に多数の民間人が乗っていた。

その民間人は全員殴られたり出血していた。
兵士Ａ「さあ！降りろ！」
兵士は民間人をトラックから降ろす。
兵士Ｂ「早くしろ！」
民間人「待ってくれ！」
将校「もたもたするな！」
数人がもたついたり降りようとしないが兵士たちはその数人を引きずり降ろし銃床で殴る。
それを５人は隠れて見ていた。
ニコ「なにをする気なんだ？」
ヤン「さあ？」
宮藤「でもあの人たち怪我してます！助けに行かな…」
宮藤は降りてきた民間人の殆どが大なり小なり怪我をしていることに気が付き助けに行こうとするがヤンが止める。
ヤン「やめろ。死にたいのか？」
ヤンは周りの殺気からこの兵士たちが只者ではないことに気が付いた。
そしてこれから何が起きるのか注視していた。
すると数人の民間人が隙を見て逃げ出そうとする。
だがすぐに兵士たちが銃撃して射殺する。
それを見てウィッチたちは顔を背けたり覆う。
それに対して兵士たちは死体をそのまま穴の中に放り込んだ。
将校「穴の中に並べ。早くしろ！害虫共が！」
すると開襟のフィールドグレーの軍服を着た将校が拳銃を向けて民間人に命令する。
言われた通りに民間人たちは穴の中に並ぶ。
それを見た将校はアドミラルに乗った将校に近づき報告する。
そして会話すると兵士たちを穴の淵に並べさせる。
将校「小隊整列！」
兵士たちはＭＧ３４やライフル、ＭＰ４０やＭＰ４１、ＭＰ３５、ＥＭＰ３５、ＭＰ２８、ＭＰ１８、ベレッタＭ３８Ａ、ベレッタＭ３８

／４２／４４などを持って並び構える。
民間人Ａ「おい！お願いだ助けてくれ！」
民間人Ｂ「ママには僕しか頼れる人がいないんだ！だから撃たないでくれ！」
民間人Ｃ「やめろ！俺には子供がいるんだ！妻もいるんだ！」
民間人Ｄ「老い先短い儂が身代わりになるから若い衆だけは見逃してくれ」
並べられた民間人は泣き叫び命乞いを始める。
だが兵士たちは無反応だった。
ニコ「まさか…」
ヤン「ああ」
ニコとヤンはこの先起きることを察した。
次の瞬間将校が拳銃を抜いて合図する。
将校「撃て」
将校が拳銃を撃って一人を射殺したのを合図に次々と兵士たちは銃を穴に向け乱射し民間人を射殺する。
それを見て周りの兵士たちはただ大笑いしていた。
ウィッチたちは目をそらし耳を塞いでいた。
そしてしばらくして虐殺は終わった。
ヤン「やめたぞ」
ニコ「ああ、次は何だ…」
すると将校が兵士に言う。
将校「お楽しみの時間だ！ガソリンを持ってこい！」
すると兵士がジェリカンを別のトラックから降ろして持ってきた。
そしてガソリンをまだ息のある人のうめき声が聞こえる穴に撒く。
数個分のジェリカンを撒くと別の兵士が瓶を兵士たちに渡す。
兵士たちはその瓶から出ている布に火をつける、そして穴に投げ込んだ。
ペリーヌ「酷い…」
リーネ「うっ…」
宮藤「なにが…」

その光景にペリーヌは衝撃を受けリーネは吐き気を催し、宮藤はもはや放心状態であった。
それに対して兵士たちは
「「ハハハハハ！」」
将校「手榴弾だ！」
大笑いし、さらに酒を飲んで大騒ぎしていた。
さらに将校は兵士たちに手榴弾を投げるように言う。
言われた通りに兵士たちは手榴弾や爆薬、さらに火炎瓶やガソリンを穴に投げ込んだ。
それどころか一部の兵士は穴の中にさらに弾を撃ち込んだ。
一帯には死体が焼ける匂いと硝煙、ガソリンが燃える匂いが覆い辛うじて息のあった者が火をつけられ叫ぶ声が微かに聞こえた後は兵士たちの笑い声だけが響いていた。
そのあまりに残虐かつ衝撃的な光景にウィッチたちは恐怖を覚えた。
ペリーヌ「あれが、人間のすることなんて…」
ヤン「これ以上長居する必要はない、行くぞ」
リーネ「は、はい…」
ヤンとニコは離れようとするがリーネや宮藤はショックで木にもたれかかって立っているのでやっとだった。
二人は歩くのがおぼつかない二人を連れて無理矢理戻った。

それからしばらくして5人は島に戻ったがリーネたちは憔悴しきり、ついた途端リーネと宮藤、ペリーヌは吐いていた。
その明らかに只事ではない様子にエルヴィンは心配になり声をかける。
エルヴィン「どうした君たち?何かあったのか?」
宮藤「エルヴィンさん…その…実は…」
宮藤は見たものをすべて話した。
その衝撃的な話にエルヴィンは慣れているかのように顔色一つ変

えず聞いていた。
そしてすべて話し終わると宮藤は泣き始めた。
エルヴィンは宮藤を抱擁して背中をさする。
エルヴィン「大丈夫だ。安心しろ。
今日のところはもう休め、アンナさんには私から話しておく」
話を聞いたエルヴィンは3人を休ませた。
3人の心理的ダメージは相当なものだった。
エルヴィンは3人を部屋に戻すとニコ達に聞いた。
エルヴィン「あの話は本当なのか?」
ニコ「本当です。」
ヤン「この目ではっきり見た。あの虐殺をな」
ヤンとニコがはっきりと見たと答えた。
さらにエルヴィンは聞く。
エルヴィン「そうか、どこの連中かわかるか?」
ニコ「多分、ドイ…カールスラントのかと」
ニコが答えるがニコがドイツと言いかけたことにエルヴィンは少し反応するが二人は気がつかなかった。
エルヴィン「そうか。ならこのことは信用できる人間以外に話すな。」
ヤン「え?どうしてだ?こんな衝撃的なこと…」
エルヴィン「衝撃的だからだ」
するとエルヴィンはこのことを黙っているよう言う。
それにヤンが反論するがエルヴィンが説明する。
エルヴィン「軍の一部が民間人を虐殺したのだぞ。
理由があるかも知れんが理由があっても軍による虐殺など大問題だ。
その上そんな虐殺をする連中だ、もし他言すれば恐らく君たちの口を封じようとするだろう。
君たちの言うようなことをする連中はいくつか知ってるがその大半は極めて攻撃的で暴力的だ。

ガキと若造の口を封じるなど造作もない事だ。だから命が惜しければ黙っていろ」

エルヴィンからはとても普通の初老の男とは思えない、まるで将軍のような殺気とオーラを出していた。

その空気に二人は黙って頷くことしかできなかった。

そしてエルヴィンが部屋に戻った3人の様子を見に行くと二人はまた水汲みに戻った。

その途中、飛んでいる間にニコはヤンに話しかけた。

ニコ「なあ」

ヤン「なんだ?」

ニコ「あの男、もしかしたら…」

ニコはヤンにある衝撃的な可能性を話した。

それはエルヴィンの素性だった。

その日の夜、ニコはヤンと一緒にある部屋に向かっていた。

ヤン「なあ、大丈夫なのか?」

ヤンが小声でニコに聞く。

ニコ「大丈夫じゃない、かも」

ヤン「本当にやるのか?」

ニコ「ああ、あの男が本当に〝閣下〟なのか知りたくないか?」

ヤン「まあ確かに知りたいが…」

そして二人は目的の部屋に着くとゆっくりとドアを開けて中に入った。

その部屋にはベッド、カメラの手入れ道具、フィルムケース、大量のフィルムとネガなどが置かれていた。

二人は部屋を見回す、すると部屋の壁に掛けられた軍服に気がついた。

ニコ「これって…」

ヤン「軍服?これって…」

ニコ「そうだ。この階級章、襟章、袖章、間違いない。

あの男は…」

エルヴィン「そこで何をやっている」
突如後ろから声がする。
二人は振り返る、そこには普通の男とは思えない殺気を出しグリセンティM1889を構えたエルヴィンが立っていた。
エルヴィン「何をやっている、私の部屋に入り込んで。
その服は…」
エルヴィンはニコが持っている服に気がついた。
ニコ「エルヴィンさん、あなたは…」
ニコがエルヴィンに質問しようとする。
だがエルヴィンは止める。
エルヴィン「そこまでだ。話は外で聞こう」
するとエルヴィンは二人を連れて外に出て橋の方に向かった。
橋に着くとそこには体調が回復したペリーヌたちがいた。
ニコ「あれ?元気になった?」
ペリーヌ「ええ、少しは良くなって外の風に当たろうかと思って来ましたの」
3人は気分が良くなったので外の風に当たろうと橋に座っていた。
エルヴィン「そうか、3人とも明日も早いんだろうからいい子は早く寝な」
宮藤「あの、一ついいですか?」
エルヴィンは3人を家に戻そうとするが逆に宮藤が質問した。
エルヴィン「なんだい?」
宮藤「アンナさんはあんなに上手く箒で飛べるんだから橋なんていらないんじゃないかなって」
宮藤はなぜここに橋があるのか聞いた。
エルヴィン「アンナさんの娘さんは魔法が使えなくてね、孫を連れて戻ってくる時にこの橋を使うんだ。
少し前までヴェネツィアにいたらしいが無事避難して近々戻ってくるそうだ。
まあそれと私は魔法なんて持ってないんでね、島から出るときは歩くか自転車さ」

宮藤「そうなんですか」
エルヴィンとアンナの娘達は魔法が使えずこの島に行くには橋が必須だった。
それに3人は納得した。
エルヴィン「分ったならさっさと寝な、きっと朝一番で修行だぞ」
ニコ「3人とも、ちょっと話を聞いてもらえるかな?」
リーネ「え?あ、はい」
エルヴィンは3人をどかそうとするがニコは逆にここにいて貰いたかった。
それにエルヴィンはため息をつく。
エルヴィン「はぁ、まあ良いだろう。
君、タバコあるか?」
ニコ「えっと…」
ヤン「一応あるが」
エルヴィンがタバコを求めるとヤンがポッケからタバコを取り出す。
エルヴィン「一本もらえるか?ああ、ありがとう。
火もくれるか?」
エルヴィンはヤンからタバコを貰いライターで火をつけてもらう。
そして一服するとニコに聞いた。
エルヴィン「さてと、君は何が聞きたい?」
ニコ「もしかして、貴方は、エルヴィン・ヨハネス・オイゲン・ロンメル元帥閣下ですか?」
ニコが衝撃的なことを聞いた。
エルヴィン・ヨハネス・オイゲン・ロンメルドイツ陸軍元帥、第二次世界大戦でパットンやモンゴメリィ、ジューコフやマンシュタイン、アイゼンハワーやグデーリアンなどと並び名将の中の名将として最もよく名前が挙がる〝砂漠の狐〟、フランスでは機甲部隊を率い幽霊にように前線をすり抜け連合軍をズタズタに引き裂き、アフリカで僅かなドイツ軍とイタリア軍で圧倒的多数のイギリス軍を相手に翻弄、ノルマンディーでは「最も長い一日」で叩き潰そうとした名将の

中の名将にして機動戦に関しては現代でもなお多くの将軍たちの尊敬の的である人物である。

だが彼はその後、祖国によって裏切り者と疑われ自殺させられた。

そのフィンランド人であるヤンでさえ知っている名将こそ彼だというのだ。

すると彼は吸っていたタバコを橋から海に捨てると答えた。

エルヴィン「そうだよ。

ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト君」

第7話：祖国に裏切られた狐の目覚め

エルヴィン「そうだよ。
　ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト君」
エルヴィンは答えた。
その言葉にペリーヌ達は首を傾げるがニコとヤンは衝撃を受けた。
ロンメルは前年の１０月に〝戦傷死〟したとされていたからだ。
するとニコは感極まり涙を流しながらエルヴィンの手を取る。
ニコ「閣下！やはり閣下でしたのですね！」
エルヴィン「君の言う閣下がエルヴィン・ロンメルという軍人のことを言うのならな。
　君のことも覚えているよ。君の騎士鉄十字賞を授与したのは私だったからな。
　今は勲章に柏葉が付いてるみたいだが、誰から貰った？」
ニコが地中海で連合軍の輸送船３隻、合計１万トンを撃沈した戦果で騎士鉄十字賞を受勲した時、彼に賞を与えたのはエルヴィンだった。
そのことを思い出すかのようにニコを見る。
ニコ「柏葉付は総統閣下からです。
　閣下、もしあなたが軍を率いてくださるのなら小官はたとえ灼熱のアフリカでも極寒のロシアでも閣下についていく所存です！」
エルヴィン「ハルトマン＝ファルケンホルスト中尉、長ったらしいからハルトマン中尉と呼ぶが、君は何か勘違いしてるようだ。
　私はもう軍には戻らない。二度と軍服に袖を通す気などない」
ニコ「え？閣下？どうしてですか？」
ニコはエルヴィンに軍に戻るよう言うがエルヴィンは拒否する。
ニコにはその理由が理解できなかった。
エルヴィン「どうしてか？簡単だ、私は君達のような部下に命を預

けられる男じゃない！
　なんでかって？私は祖国に裏切られたんだ！」
ペリーヌ「祖国に？」
リーネ「裏切られた？」
ニコ「閣下が？閣下は英雄ですよ、なのになんで？」
エルヴィンの言葉に驚く。ペリーヌ達には祖国に裏切られるという言葉そのものが、ニコにはなぜ英雄である「エルヴィン・ロンメル」が祖国に裏切られる理由が分からなかった。
エルヴィン「そうか、君らは知らないのか。
私は、祖国に、いや総統に、アドルフ・ヒトラーに言われたんだ。
『家族を守りたければ自殺しろ』とね。
私は、それまで祖国の為、総統閣下の為、多くの若者を死地に送り込み死なせた。
それは勿論それが祖国の為、総統閣下の為だと思っていたからだ、軍人なら誰だってそうだ、軍人なら祖国の為あらゆる場所であらゆる状況で義務を果たそうとするものだ。
だが、祖国ドイツは負け始めた、もはや風前の灯火だ。
そこでヒトラーはこの私を厄介者にしたんだ。
私は英雄だ。敵からも砂漠の狐などと言われて尊敬されていることぐらい知っている、勿論自国での人気もな。
だからヒトラーは私に反逆の濡れ衣を着せたんだ。
私の部下がヒトラーの殺害に関与したのは事実だ、だが私は知らなかった。
せいぜい何かやろうとしているな、程度だった。
確かに何かあれば私を頼れと言ったがその時はせいぜい物資か人員ぐらいは少しは融通するか上に掛け合うのを手伝ってやる、程度だ。
そして事が起きてから部下たちが何をやろうとしていたかを知ったんだ、私はなんの関係もない。
だが奴は、奴らは私を反逆者に仕立て上げるか英雄とし

て死ぬかのどちらかを選べと言ってきた。
私は、家族を、ルーツィエを、マンフレートを、最愛の妻を、息子を守るために自決させられたんだ！
これを〝祖国から裏切られた〟以外になんと言えるんだ！」
エルヴィンは激しい口調で語った。
彼の本当の最期、それは祖国に裏切り者の汚名を着せられ家族を守る為に追い込まれた自殺だった。
彼は祖国に裏切られた、そう言っても過言ではなかった。
ニコ「そんな！ありえない、閣下が裏切り者だなんて…」
エルヴィン「言っておくぞ、私は断じて裏切り者などという卑怯者ではない。
私は一人のドイツ軍人として祖国ドイツのため忠義を尽くして義務を果たした、だがヒトラーは私を裏切り者にしたんだ。」
ニコにはこの敬愛する将軍が裏切り者という汚名を着せられ自殺させられたことが信じられなかった。
するとエルヴィンは宮藤に聞いた。
エルヴィン「宮藤君、君は何に為に戦うんだ？」
宮藤「私はネウロイからこの世界を守りたいんです！」
宮藤は正直に答えた。
だがエルヴィンは宮藤に怒鳴る。
エルヴィン「守る？世界だと？なら初めに言っておく、そんな言葉を軽々しく使うな！
私は祖国を！故郷を！友を！家族を守るために戦ったんだ！
そして家族を守るために自殺という選択肢を選んだ、この苦しみを理解できるか？
私は最愛の家族と部下を守るために自らの手で命を絶った、君に言っておく、もし本気で世界とやらを守りたければ、君の全てを捨てる覚悟を見せろ。
家族も、友も、そして何より自らの命を捨てるだけの覚

悟をな、その覚悟が君にあるか？」
宮藤「え…」
エルヴィンの言葉に宮藤は動揺する。
だがエルヴィンは続ける。
エルヴィン「いいか！そうならないようになどとほざくなよ！
時として自らの全てを捨てなければ守れないということがあるんだ！
その時！君は自らのこめかみに銃口を突きつけられるか？
毒を飲めるか？友を撃てるか？」
宮藤「それは…できません…」
エルヴィン「そういうことだ、守るとは。
はぁ、済まない、柄でもないのに熱くなってしまったな。
君たち、早く寝ろ、明日も早いし寝不足はいい仕事の敵だ、美容にも悪いぞ」
冷静になったエルヴィンは5人に言い残すと一人部屋に戻った。
エルヴィン「はぁ…守るか…クソ！
何のための勲章だ！元帥だ！」
そういうとビール瓶を開けビールを一気飲みした。
一方残されたペリーヌたちはエルヴィンの正体を聞いた。
ペリーヌ「ニコさん、エルヴィンさんは一体何者なんですか？」
ニコ「エルヴィン・ヨハネス・オイゲン・ロンメル。ドイツ陸軍元帥。
フランスでは第7装甲師団を、アフリカではアフリカ軍団を率い北アフリカで砂漠の狐と謳われた大活躍した人だ。
そして僕が最も尊敬していた人物」
リーネ「じゃあ、ミラーさんと同じような…」
ニコ「そう、僕の知っている閣下はあんな人じゃない。
僕の知っている『エルヴィン・ロンメル』は誰よりも知性に溢れ、行動力に満ち、活気のある人だった。
あんな人じゃなかったはずだ…」

ニコは嘆くかのように言った。
彼にはエルヴィンがあの砂漠の狐と同一人物とは思えないほど変わっているように見えた。

翌日、リーネ、宮藤、ペリーヌの3人は箒からタライを三人でぶら下げて運んでいた。
宮藤「初めからこの方法で運べばよかったんだ」
リーネ「あ、うん」
3人はタライをぶら下げてより効率的な方法で水を運ぼうとしていた。
それに対してニコとヤンは一人でタライをぶら下げて運んでいた。
宮藤「今日こそお風呂を一杯にしようね」
リーネ「うん、肩までつかろうね。ね、ペリーヌさん」
ペリーヌ「え?私はどちらでもいいんですけど…」
3人は昨日、例の特別行動部隊の惨状を見たせいで途中から運ぶことができずニコとヤンの二人で水を運んだが食事はともかく風呂に関しては全く量が足りなかった。
するとペリーヌが何かに気が付いた。
ペリーヌ「ん?何?あれ」
リーネ「まさか…」
宮藤「ネウロイ!」
それは先に井戸で水を汲んでいたニコたちも気が付いた。
ヤン「ん?水から変なにおいがするんだが…ニコ?どうした?」
ニコ「水なんか気にしてる場合じゃない!ネウロイだ!」
水から変な匂いがするのに気が付いたヤンに魔導針を出していたニコが呼ぶ。
二人はタライを放置し急いで島に向かった。

501ではハインツが報告を受けたネウロイをミーナたちに説明していた。
ハインツ「観測班と防空部隊からの報告によるとネウロイはヴェネ

チアから真っすぐアドリア海沿岸をバーリ方面に南下中。
　バーリには確か今ジブラルタルから来たＺＢ２４９８船団がいたはずだ。」
ハインツは駒を使って状況を説明する。
ネウロイが向かっていたのはロマーニャ南部有数の港、バーリ。
そしてバーリにはジブラルタルから来た船団が存在した。
坂本「直線的にしか移動しないタイプか…」
ハインツ「ああ、ルートからして上陸する可能性は低…ん?ちょっと待て」
すると地図で予想ルートを見たハインツがあることに気が付いた。
そして坂本もすぐ気が付いた。
坂本「これは…」
ハインツ「不味いぞ、すぐに警告を出せ!」
地図には予想ルートの真下に宮藤たちがいる島があった。

宮藤「アンナさん!エルヴィンさん!大変です!ネウロイが!」
ニコ「ネウロイが来てます!」
島では宮藤たちがアンナの家のドアを開けてネウロイが来ていることを伝える。
すると電話を持っていたアンナは二人に言う。
アンナ「今、あんたたちの基地から連絡があったよ。」
リーネ「誰か出撃してくれたんですか?」
リーネが聞く、だがその答えはいいものではなかった。
アンナ「基地からの部隊は今から出撃しても間に合わないそうだ」
エルヴィン「この家をあきらめるしかない。荷物を運ぶのを手伝ってくれ」
すると荷物を抱えたエルヴィンが奥から出てきて答える。
エルヴィンはそのまま宮藤たちの間を割って通って荷物を自転車に括りつけようとする。
するとニコが叫んだ。
ニコ「閣下!本気で言っているんですか!」

エルヴィン「本気だ、逆に聞くが逃げる以外の手があるのか？」
その答えにニコはエルヴィンに掴みかかった。
ニコ「貴様！本当にドイツ軍人か！
名誉と栄光あるフリードリヒ・デア・グロッセ、ブリュッヒャー、クラウゼヴィッツ、シャルンホルスト、モルトケ、ヒンデンブルクの後に続くプロイセン軍人か！
いつからドイツ軍人は戦えるにも関わらず部下と国民を置いて逃げようとするようになった！
いいか！貴様は軍人なんかじゃない！ただの臆病者だ！
卑怯者だ！雌犬以下のクソッタレだ！
逃げたければ逃げて卑怯者のごとく野垂れ死ねばいい！」
エルヴィンは何も言い返せなかった。
なにせニコの言っていることは正論だった。
彼は砂漠の狐である前にかのフリードリヒ大王、ブリュッヒャー、クラウゼヴィッツ、シャルンホルスト、モルトケに続く名誉と栄光あるプロイセン軍人でありドイツ軍人だった。
ニコはエルヴィンを放すと納屋に向かった。
ヤン「なにをする気だ！」
ニコ「なにって、軍人なら決まってるだろ！戦うんだ！
銃を持てるなら義務を果たすまでだ！
そこの臆病者の卑怯者と違ってな！」
ニコは戦うつもりだった。
彼にとってはこの状況で逃げようとすればそれはエルヴィンと同様の卑怯者であった。
ヤン「そうだな、俺はフィンランド軍人だ。
あんなろくでなしとは違うぞ。
猟兵たちは独立のため戦ったんだ、俺たちが義務を果たさなければ失礼だ」
ヤンはＷＷ１を戦ったプロイセン王国軍第２７猟兵大隊を引き合いに出して戦うつもりだった。
第２７猟兵大隊はフィンランド人部隊で彼らはその後のフィンラ

ンド内戦などで白衛軍の中核となりフィンランドの独立を勝ち取った。
宮藤「ニコさん！私たちも戦います！
ここを見捨てるなんてできません！」
リーネ「アンナさんの家族が帰ってくる家なんですよね」
ペリーヌ「あの橋がなくなってしまったらアンナさんの家族が帰る時の目印がなくなってしまいますわ」
すると宮藤たちも戦うと言う。
すぐに５人は納屋に行くとそれぞれ武器を取りユニットを履いて離陸した。
ニコ「ペリーヌ、リーネ、ヤンが編隊で攻撃、僕と宮藤は援護だ！」
「了解！」
離陸してすぐ、ニコは全員に指示を出す。
そしてネウロイに近づくとネウロイが攻撃し始めた。
ニコ「攻撃開始！」
ニコが合図するとＭＧ４２を持ったヤンとペリーヌとリーネが攻撃、それをＭＧ１５１／２０を持ったニコと宮藤が援護するがネウロイはすぐに被害を回復する。
ペリーヌ「固い！」
ニコ「コアの位置が分かった。
後ろだ！」
その頑丈さにペリーヌが愚痴るがその間にニコはコアの位置を特定した。
コアは後ろの方にあった。
リーネ「でも火力を上げないと破壊できないよ」
ニコ「なら全員で同時に攻撃するだけだ」
リーネが火力が足りないと嘆くがニコが同時攻撃を決断する。
リーネ「でもそんな高度なこと…」
ニコ「できるから言ってるんだ。鶏を羽ばたかせようとしてるわけじゃない。
できるに決まってるだろ？」

するとニコがジョークを言う。
それに全員の表情が和らぐ。
ペリーヌ「行きますわよ！」
リーネ「はい！」
そしてペリーヌを先頭にネウロイに向かって突撃する。
ビームを躱し、海面すれすれまで降りると下に回り込みニコが見つけたコア周辺を集中攻撃する。
集中攻撃、特に破壊力の高いニコのＭＧ１５１／２０によりコアの周辺部が破壊されコアが露出する。
ニコ「コアだ！あそこを狙え！」
「了解！」
ニコが即座にその周囲を攻撃するよう指示する。
ネウロイは修復しようとしつつ攻撃を行う。
だが箒の訓練を受けたウィッチたちはそれを易々と躱した、特に鈍重なはずのＪｕ８８でニコはスピットファイアやＢｆ１０９などと遜色のない回避術を披露していた。
そしてそのままネウロイに接近するとニコは上を向いてＭＧ１５１を乱射してコアを破壊した。

その光景は島にいた二人にも見えていた。
エルヴィン「ふ、フハハハハ！」
アンナ「どうしたんだい？」
突如エルヴィンは笑い始めた。
その訳をアンナはエルヴィンに聞いた。
エルヴィン「今更気が付くとはな、私が逃げていたことに。
あのようなか弱い少女を戦場に立たせておきながら私は名誉あるドイツ軍人でありながら逃げるという卑怯で不名誉な行為をしていたことにな。」
エルヴィンはそういうと５人を出迎えた。
エルヴィン「君たち！よくやった！」
宮藤「エルヴィンさん」

ニコ「閣下、あの、さっきは本当に申し訳ございません。
つい熱くなってしまい、上官であるあなたにあんなこと…」
ニコはすぐに例の暴言を謝す。
だがエルヴィンはなぜか笑顔で許す。
エルヴィン「別に構わない、君たちのお陰だ。
どうやら私は卑怯者になっていたようだな。」
エルヴィンは笑顔で言った。

数日後、ローマ、第15騎兵軍司令部。
この実質的にロマーニャを仕切っている建物はローマ市内でも特に厳重な警備が行われ黒シャツ隊やカールスラント軍、カラビニエリによって守られていた。
そしてこの建物の一室に二人の将軍がいた。
アイケ「しかし、本気で?」
エルヴィン「ああ。現役復帰だ。ボック元帥やイェションネク大将、シュトゥンメ君がいることぐらいは知っているよ。
私も軍務に復そうかなっと思ってな、それで君にあの手紙を送ったんだ」
そこにいたのは第15騎兵軍総司令官のアイケと陸軍元帥の格好をしたエルヴィンだった。
アイケの前にはエルヴィンの手によって書かれた一通の手紙があった。
アイケ「そうか、ならどこがいい?
アフリカか?」
エルヴィン「一番はそこだね。まあ二番はロマーニャだが。」
エルヴィンの希望はアフリカでの前線勤務だった。
アイケ「そうか、ならいいだろう。
第5アフリカ装甲軍の総司令官なんてどうだ?」
エルヴィン「第5アフリカ装甲軍?」
アイケ「ああ、今トリポタニアとチュニジアで編成中の部隊だ。

実質アフリカ方面の予備部隊と言ってもいい。
アフリカを仕切ってるのは3バカ将軍、そいつらのせいで我々の仲間であるテレーラ中将とシュトゥンメ大将が苦労している。
アフリカを立て直してスエズを取り戻す、できるか?」
アフリカは3バカ将軍、即ちカールスラント軍のロンメル、リベリオン軍のパットン、そしてブリタニア軍のモンゴメリーのせいで戦力と補給は潤沢にもかかわらず奪還は遅々として進まなかった。
何故か?このバカ将軍たちが互いに指揮権を奪い合うという最前線において最悪のことを繰り広げていた。
そのため実質この地域を支えていたのは彼らの下にいるはずのアイケの仲間であるシュトゥンメ大将とテレーラ中将だった。
そこでアイケはこの名将を送り込みアフリカを立て直し、一気にスエズを奪還、地中海の安全を確保し共産主義者への圧力としたかった。
アイケが聞くとエルヴィンは自信満々に答えた。
エルヴィン「いいだろう、北アフリカでの屈辱、晴らしてくれようじゃないか」

第8話：ジェットの騒音

リーネたちが特訓から帰ってきてから数日後の夜、ミラーの部屋に動く影があった。
それは部屋に入ると寝ていたミラーのベッドに潜り込んだ。
ミラー「ん…リーネ？」
リーネ「ミラーさん…」
潜り込んだのはリーネだった。
リーネはなぜか帰ってきてからずっと、夜になれば何故かミラーのベッドに潜り込みミラーと一緒に寝ていた。
ミラーはそれを許していたがなぜ急にこんなことをしだしたのかが気になった。
ミラー「リーネ、あそこで何があったんだ？
　正直に話してくれないか？」
リーネ「ミラーさん…」
リーネはミラーの問いに答えずミラーに抱き着いただけだった。
それにミラーはリーネの頭を撫でながら聞く。
ミラー「僕を信じれないのかい？」
リーネ「そんなことないです。ミラーさんは正直で優しくて一番信頼しています。」
ミラー「そんな僕にも言えないことがあったのか？」
ミラーが再度聞くとリーネは頷いた。
ミラー「それを僕に話せない？」
ミラーが聞くとリーネが怯えた声で言う。
リーネ「話したら…ミラーさんが殺されるかもしれないんですよ」
ミラー「大丈夫だ、誰にも話さない。
　それに僕はリーネを置いて死ぬようなことはしない、約束する。」
ミラーが答えるとリーネはゆっくりとあの日、あの場所で見た残虐行為の全てを話した。
すべて話し終わるとリーネは泣き始めミラーはリーネの背中をさ

する。
暫くするとリーネは泣き疲れて寝息を立てて眠り始めた。
ミラー「リーネ…」
ミラーはリーネの頭を撫でながら名前を呟き額にキスをすると天井を見て呟いた。
ミラー「とんでもない事を知ってしまったぞ…」

翌朝、ミーナ、ハインツ、坂本、バルクホルン、シャーリー、ミラーの6人が集まっていた。
ミーナ「本当にそんなことが…」
坂本「ありがとう、ミラー。
だから島から戻ってきてから宮藤たちの様子がおかしかったのか…」
ミラーは5人にリーネから聞いたことをすべて話した。
その内容に5人は衝撃を受けた。
ハインツ「そりゃそんなもん見たらそうなるよな。」
シャーリー「そんな連中が実在するとはな…」
口々にその衝撃を口にするが一人だけバルクホルンが別のことを言った。
バルクホルン「このことは、アレックスだけには言わないでくれるか?」
ハインツ「何でだ?」
バルクホルン「アレックスの家族は多分その虐殺部隊に殺されたんだ。
多分聞いたら冷静でいられなくなると思うんだ」
バルクホルンはノヴァクのことを思い黙っていてほしかった。
ノヴァクの家族はタンネンベルク作戦で特別行動部隊に虐殺されていた。
バルクホルンはもしノヴァクがこのことを聞いたらどうなるのか想像がついた。
ハインツ「なんだ、大丈夫だ。このことは俺たちだけしか知らない

し聞いていない。
　誰にも話す気はない、不用意に話してみろ、全員この世から消されるぞ」
ミーナ「ええ、トゥルーデ。
　安心して。」
二人はこのことを毛頭話すつもりなどはなかった。
なにせ不要に言えば消される話であった。
バルクホルン「ありがとう、ミーナ、ハインツ」
シャーリー「しかしあの堅物がノヴァクの心配をするなんてねぇ」
するとシャーリーがバルクホルンを煽る。
だがバルクホルンは胸を張って答えた。
バルクホルン「リベリアン、アレックスは私の家族だ。
　家族の心配をするのが当然…ってどうした?ミーナ、ハインツ、坂本少佐」
するとバルクホルンがミーナたちが何故か笑顔で見てくることに気が付いた。
ミーナ「トゥルーデが家族って言うなんてねぇ」
ハインツ「お前らいい加減結婚しろよ。」
バルクホルンがノヴァクのことを家族と言い切ったことを微笑ましく見ていた。
バルクホルンとノヴァクの付き合いはハインツから見ればあとは結婚するだけレベルだった。
坂本「お前たち、そういう関係だったのか?」
ミラー「坂本少佐、知らなかったんですか?
　二人とも結婚を前提に付き合ってるんですよね?
　よく二人でクリスさんのお見舞いにも行ってますし」
一方、坂本は二人の関係を少しも知らなかった。
ミラーはそのことに半分呆れながらも説明する。
二人の仲はほとんど夫婦であった。
坂本「そうだったのか、まあバルクホルンも年ごろだからな。」
ハインツ「まあそうだが、そういえばそろそろ当直の交代の時間だ

ろ？

次は確か…」

するとハインツが腕時計を確認すると当直の交代の時間が迫っていた。

シャーリー「私とノヴァクだっけ？」

バルクホルン「分かってると思うがあのことは絶対にアレックスには言うなよ」

次の当直はシャーリーとノヴァクだった。

それにバルクホルンがくぎを刺す。

シャーリー「はいはい、分かってるって、じゃあ行ってくるねー」

シャーリーはそれを適当に流すとハンガーに向かった。

それから少ししして、格納庫では熱帯シャツ姿のニコとヤンがへばっていた。

ニコ「暑い…今何度だ…」

ヤン「２８度、外は２０度だぞ…シャーリー、エンジン切ってくれ…」

フィンランド人を蒸し焼きにする気か…」

外の気温は４月のロマーニャでは平均的な２０度前後だったがハンガー内はなぜか２８度にもなっていた。

理由は簡単だった、シャーリーがその横でエンジンを回していたのだ。

当たり前だが物理学上エネルギーが生まれると熱も発生する、ましてやエネルギーの塊であるエンジンは非常に高い熱を発するものである。

そのため適切な冷却をしなければあっという間にオーバーヒートからの炎上を起こしてしまう。

そして締め切って空調がなく、風通しの悪い（この時点でハンガーとしては問題である）ハンガーでエンジンを回した結果、熱がこもって蒸し風呂状態になっていた。

二人は暇だったので格納庫に来てみればこの蒸し風呂状態にへばっていた。
一方、シャーリーはというと
シャーリー「よしよし、今日も絶好調だな。
私のマーリンエンジンは」
下着姿でユニットを回していた。
その姿にヤンとニコは呆れた。
するとシャーリーの前に二人の影が現れた。
バルクホルン「シャーロット・イェーガー大尉」
ノヴァク「そんな恰好で何をしている？」
バルクホルンとノヴァクがシャーリーの格好を注意する。
その恰好は明らかに適切とは、特にノヴァクやニコ、ヤンにとっては目のやり場に困る姿でもあった。
バルクホルンはノヴァクのことも気になり注意し、ノヴァクもバルクホルンとの関係から注意した。
だが二人の質問にシャーリーは呑気な口調で答えた。
シャーリー「何って、エンジンテストだけど？」
「そうじゃない！」
その呑気な答えに二人が同時に反応する。
バルクホルン「今は戦闘待機中だぞ！」
ノヴァク「連中が来たらどうする気だ！」
二人はシャーリーを注意するがシャーリーの反応は呑気なものだった。
シャーリー「だってハンガーの中でエンジン回すと暑いじゃん。
ほらあっちでも」
シャーリーが指さすとそこには暑さでへばっているルッキーニがいた。
バルクホルン「全く、お前たちは」
ノヴァク「いつもいつも」
シャーリーとルッキーニの姿に二人は呆れる。
するとシャーリーは二人を弄ることにした。

シャーリー「へぇ、カールスラント人とポーランド人は規則に厳しいってか？
　どうなんだ？ハルトマン」
ニコ「呼びました？」
シャーリー「あ、ニコの方は呼んでないぞ」
シャーリーはバルクホルンたちの後ろに来た下着姿のハルトマンに聞いたが同じ苗字（ただしハルトマン＝ファルケンホルストという複合性。ただ長いのでみんなハルトマン呼び）のニコが反応するがシャーリーが違うというとそれ以上何も言わなかった
ハルトマン「あっつ～」
バルクホルン「うっ、ハ、ハルトマン！お前まで！」
ニコ「え？」
シャーリー「多分ニコじゃないぞ」
二人が振り返ると暑さにへばって下着姿のハルトマンがいた。
バルクホルンがハルトマンを呼ぶが同じ苗字のニコがまた反応する。
ノヴァク「なんて格好をしてるんだ！服を着ろ！
　それでも軍人か！」
ハルトマン「え、そうだけど…」
ノヴァク「お前に軍人たるもの誇りを持って国民の模範になろうとしないのか！」
二人は今度はハルトマンを注意した。
シャーリー「ハハハ、それにしてもお二人は本当に息ぴったりだねぇ」
シャーリーは今度はノヴァクとバルクホルンの息の合った行動を弄る。
バルクホルン「なんだリベリアン、アレックスは私の家族だ」
ノヴァク「トゥルーデは俺の家族だ、俺の唯一のな」
バルクホルン「リベリアン、アレックスを取ろうとか考えるなよ。
　その時は、本当に〝殺す〟からな」
シャーリーが二人を弄ったが、逆にバルクホルンに脅され彼女から

はものすごい殺気が出ていた。
それにシャーリーは本気で恐怖を覚えた。
シャーリー「ヒェ…取らないからな、私にはハインツがいるし」
バルクホルン「そうか、ならいいが少しでも誘惑しようものなら…」
バルクホルンは指を鳴らして脅した。
するとハンガーの端から別の声が聞こえてきた。
ハインツ「こいつが例のテスト機か」
ミーナ「ええ、Ｍｅ２６２Ｖ１、ジェットストライカーよ」
ハルトマン「ジェット？」
格納庫の端でハインツとミーナが会話していた。
目の前には赤色に塗られた変わったユニットが置かれていた。
その会話にハルトマンが後ろから割り込んだ。
ミーナ「ハルトマン中尉？」
ニコ「何ですか？」
ハインツ「お前じゃない、というか何で下着姿なんだ？」
ミーナが呼ぶとまたニコが反応する。
すぐにハインツが訂正してハルトマンがなぜ下着姿か聞く、するとバルクホルンとノヴァクがやってきた。
バルクホルン「コラ！ハルトマン！」
ノヴァク「服を着ろ！はしたないぞ！」
バルクホルン「ん？なんだこれは？」
するとバルクホルンが二人にジェットストライカーのことを聞いた。
ハルトマン「ジェットストライカーだって」
ノヴァク「ジェット？あのニエムツィの新兵器だった奴か？」
ハインツ「知ってるのか？」
ノヴァクがジェットという単語に反応しハインツが聞いた。
ノヴァク「ああ、実際戦ったことも見たこともないんだが何でもレシプロよりも早く、パワフルなエンジンを積んだニエムツィの最新の秘密兵器だと聞いたことがある。
ただ加速力と機動性、上昇力に欠けてドッグファイトに持

ち込むと結構楽に落とせるらしいぞ。
　知り合いのヤンキーはＰ―５１でアウクスブルクへの爆撃隊の護衛中にジェット戦闘機に襲われて空中戦になったら目の前で急旋回してエンジンが停止、そのまま撃墜したらしい。
　他の知り合いも離着陸時を狙って数機落としたりしたらしい」
ハインツ「なんだそりゃ、ダメダメじゃないか」
ノヴァク「だが一度速度が乗ればどんな戦闘機でも追いつけない恐ろしい奴らしい」
ノヴァクは自分の聞いたジェット戦闘機、即ちＭｅ２６２のうわさを話した。
　Ｍｅ２６２は史上初のジェット戦闘機として航空史に載っているがその実情は未熟な最新技術を使用したため欠点が多く飛行機としてはともかく軍用機としては欠陥が多かった。
　だがそれでも名機である。
バルクホルン「確かジェットは研究中だったはずだが」
ミーナ「今朝ノイエ・カールスラントから届いたの。
　エンジン出力はレシプロストライカーの数倍、最高時速は９５０キロ以上、とあるわ」
シャーリー「９５０！すごいじゃないか！」
ミーナが性能の説明をするといつの間にかシャーリーがやってきて惚れ惚れしたような表情でＭｅ２６２を見る。
ミーナ「レシプロストライカーに変わる新世代の技術ね。」
ハインツ「シャーリー、てめえもなんて格好してるんだ。」
バルクホルン「ん？これは？ＢＫ―５か？」
すると今度はバルクホルンが横に置かれた巨大な大砲に気が付いた。
ミーナ「ジェットストライカー用に開発された武装よ。
　ミラーさんのＢＫ―５を改良した５０ミリ砲一門、他に３０ミリ機関砲４門？」
ハインツ「ふーん、３０ミリねぇ」

バルクホルン「すごい！」
その火力にバルクホルンは珍しく目をキラキラさせていた。
するとシャーリーが声をかけた。
シャーリー「なあなあ、これ私に履かせてくれよ！」
バルクホルン「いいや、私が履こう！」
シャーリーが志願するとバルクホルンも志願する。
そしてすぐに口論になった。
シャーリー「なんだよ、お前んじゃないだろ！」
バルクホルン「何を言っている、カールスラント製のこの機体は私が履くべきだ！」
シャーリー「国なんか関係ないだろ！９５０キロだぞ！
超音速の世界を知っている私が履くべきだ！」
バルクホルン「お前の頭の中はスピードのことしかないのか？」
シャーリー「ケチケチすんなよ」
ミーナ「また始まった…」
ハインツ「ほっとけほっとけ、そのうち勝手に仲直りするさ」
そのいつものような喧嘩に他のウィッチは呆れていた。
すると柱の上で寝ていたルッキーニが口論の声で起きて飛び降りた。
ルッキーニ「いっちばーん！」
飛び降りるとそのままユニットを履く。
バルクホルン「あ、おい」
シャーリー「ずるいぞ、ルッキーニ」
ルッキーニ「へへーん、早い者勝ちだもーん」
履いたルッキーニはそのまま使い魔を出してユニットのエンジンをかける。
Ｍｅ２６２はジェット特有の甲高い音が響き始めるが突如、ルッキーニが電撃を受けたかのように飛び上がるとユニットを脱いで逃げ出した。
シャーリー「ルッキーニ！」
ハインツ「何が起きたんだ？」

シャーリーはすぐに追いかけてルッキーニに訳を聞いた。
シャーリー「ルッキーニ、どうしたんだよ？」
ルッキーニ「なんかビビビッてきたぁ！」
シャーリー「ビビビ？」
ルッキーニ「あれ嫌い、シャーリー履かないで」
ルッキーニの話を聞くとシャーリーが決断した。
シャーリー「やっぱ私はパスするよ」
バルクホルン「何？」
シャーリー「考えてみたらまだレシプロでやり残したこともあるしな。
　ジェットを履くのはその後でも遅くはないさ」
シャーリーはルッキーニの話を聞いてジェットを履くのをパスした。
それを聞いてバルクホルンが自慢げに言う。
バルクホルン「ふ、怖気づいたな。
　まあ見ていろ、私が履く！」
するとそのままバルクホルンはジェットを履くとユニットを起動させまたジェット特有の甲高い轟音を奏で始めた。
そして顔を少し赤らめながらつぶやく。
バルクホルン「すごい」
ノヴァク「トゥルーデ！無理するなよ！危険だと思ったらすぐにやめろ！」
バルクホルン「分かってるアレックス。
　どうだ、今までのレシプロストライカーでこいつに勝てると思うか？」
シャーリー「なんだと！」
そしてまたバルクホルンはシャーリーを挑発して口論し始めそれにほかのウィッチたちはまたかと呆れていた。

第９話：駄っ作ユニット

その日の夜、ウィッチたちはハンガーで夕食を取っていた。
宮藤「夕食は肉じゃがですよ～」
シャーリー「ん～、私は料理のことはよくわかんないけど宮藤の作るものはなんでも美味いな。
　これ、魚の出汁か？」
宮藤「カツオです。
　フフフ、ありがとうございます。」
この日の夕食はフィールドキッチンで作られた肉じゃがだった。
その味に初めて日本食を食べるニコとヤンは舌鼓を打っていた。
ニコ「日本料理？でしたっけ、初めて食べましたけど凄い。」
ヤン「うんめぇ！酒とも合うぞ！」
勝手にヤンはどこからかウォッカを持ってきて酒を飲み始めていた。
その横でハインツとミラーはジェットストライカーの性能を検討していた。
ハインツ「しかし凄い性能だな、速度性能はシャーリーのＰ―５１以上、馬力もＪｕ８８やＭｅ４１０と同レベルかそれ以上。
　実用上昇限度は１万５０００、まさに未来のストライカーだ。」
ミラー「ええ。僕のＢＫ―５とほぼ同じ火力を持ちながらそれ以上の高い機動性を持つ。
　バケモノですね。」
ミラーは自分のＭｅ４１０Ｂ―１／Ｕ４と比べてもＭｅ４１０では高い火力を犠牲に機動性が極めて低く、大型・中型以外相手では逃げることしかできないＭｅ４１０に対してＭｅ２６２は機動力に優れＢＫ―５と同時に３０ミリ機関砲を使い小型相手にも攻撃可能だった。
その性能はまさにバケモノであった。
するとノヴァクが宮藤に聞いた。

ノヴァク「宮藤、トゥルーデの分、あるか？」
宮藤「バルクホルンさんの分ならこれです」
ノヴァク「ありがとう」
ノヴァクはバルクホルンの分の肉じゃがを受け取るとそれを発進台の傍に座っていたバルクホルンに持っていった。
ノヴァク「トゥルーデ、持ってきたぞ」
バルクホルン「あ、ありがとうアレックス。そこに置いといてくれないか」
ノヴァク「いいが、どうした？顔色が悪いぞ。風邪か？」
バルクホルンの姿や表情は長い間一緒にいたアレックスにはすぐにおかしいことに気が付いた。
顔色が悪く見えていた。
風邪かと思いノヴァクはバルクホルンの額に手を当てる。
バルクホルン「アレックス、そんなに心配しなくていいぞ。
酷く疲れてるだけだ。」
ノヴァク「ならなおさら心配だな。しっかり食べてしっかり寝ろ。」
バルクホルン「分かった」
ノヴァクはそういうと肉じゃがをバルクホルンの傍に置いた。

翌日、シャーリーとバルクホルン、そしてルッキーニとノヴァクはこの日もまたＭｅ２６２の性能試験をしていた。
この日は速度性能を図るためシャーリーとバルクホルンが競争することになった。
ルッキーニ「よーい、どーん！」
ルッキーニが号令するとシャーリーが全速力でスタートするがバルクホルンはその場から動かなかった。
ノヴァク「トゥルーデ？」
ルッキーニ「あり？バルクホルン？
どーん！どーん、だってば！」
何故か動かないバルクホルンをノヴァクは心配する。

すると力をためていたのか突然全力で発進してルッキーニを吹き飛ばし、ノヴァクを吹き飛ばしかけた。
シャーリー「ん？」
その爆音を聞いたシャーリーが振り返ると全速力のバルクホルンが後ろからシャーリーを追い抜いた。
バルクホルン（すごいぞ、まるで天使に後押しされてるみたいだ…）
その速度性能にバルクホルンは天使に押されているみたいだと表現する。
シャーリー「わ、私がスピードで負けるなんて…」
一方シャーリーは速度性能で負けたことに驚いていた。
だが直後、様子が変わった。
突如バルクホルンが無茶苦茶な機動を初めたのだ。
シャーリー「なんだ？」
ノヴァク「マズイ！トゥルーデ！」
すぐにノヴァクはユニットを全力で回して急降下すると海面すれすれでバルクホルンを無理やり捕まえた。
ノヴァク「トゥルーデ！しっかりしろ！」
すぐにノヴァクがバルクホルンに呼びかけるが応答がなく意識を失っていた。
その上その状態でユニットは出力全開状態だった。
結果ノヴァクはバルクホルンに引っ張られる形で飛んでいた。
ノヴァク「クルヴァ！これじゃ暴れ馬だ！」
バルクホルンの態勢を無理やり変えることでなんとか方向は決められたが問題はこのままでは着陸は不可能と言っても過言ではなかった。
ノヴァクは地上のハインツに呼びかけた。
ノヴァク「おいハインツ！こいつをどうすればいい！」
ハインツ『ちょっと待て！確かここに緊急停止の記述が…あった！
えーと、そのユニットには緊急停止ハンドルがある！
そいつを引っ張れ！場所は両方のユニットの外側、翼の後ろあたりだ！』

ノヴァク「分かった！ハンドルって…これか！」
ハインツがＭｅ２６２の技術書類を漁ったところユニットの緊急停止ハンドルに関する記述を見つけノヴァクに伝える。
言われたノヴァクはハンドルを掴むとバルクホルンの態勢をコントロールして海面すれすれを飛ばして基地上空に着くとハンドルを力一杯引っ張った。
ユニットはハンドルが引かれると空気抵抗によりバルクホルンから脱落。
両方ともわずか数メートル下の滑走路に落下した。

バルクホルン「ん…ん？」
ノヴァク「トゥルーデ！」
小一時間経った後、バルクホルンが気がつくと、ベットの上で寝てウィッチ達全員が取り囲んでいた。
そして突然涙を浮かべたノヴァクが抱きついた。
それにバルクホルンは混乱する。
バルクホルン「アレックス…どうした？なんで泣いてるんだ？軍人らしくないぞ」
ノヴァク「トゥルーデ、大丈夫か？怪我はないか？どこかおかしなところはないか？」
バルクホルン「アレックス、何かあったのか？」
バルクホルンがノヴァクに聞くと横にいたハインツが答えた。
ハインツ「あのユニットだ。あのユニットが暴走してお前の魔法力を吸い尽くそうとしたんだ。
それで気絶して暴走したんだ。覚えてないのか？」
バルクホルン「バカな、私がそんな初歩的なミスをするはずがない」
ノヴァク「トゥルーデは何も悪くない。悪いのあのユニットだ。」
ニコ「ええ、こう見えても元は航空機関士なんでエンジン周りに関しては詳しいんでユニットを少し履いてみたんですけどあのユニット、エンジン制御系に欠陥がありますよ。
簡単に説明するとエンジンを回し続けるとエンジンがリミッ

ターを破壊して吸い尽くすか壊れるまで魔法力を吸い続けるんですよですよ。」

元航空機関士のニコが何が起きたかを説明した。

Ｍｅ２６２はエンジン周りに欠陥があった。

エンジンを回し続けるとが魔法力の流量を調整するリミッターを破壊、エンジンが壊れるか魔法力が切れるまで吸い続ける欠点があった。

現実の航空機エンジンにおいてもこのような「エンジンのコントロールシステムの故障」という事故は発生している。

最も有名なのが１９８９年９月１５日カリブ海上空ハリケーン・ヒューゴの中で起きたアメリカ海洋大気庁（ＮＯＡＡ）のハリケーン・ハンターコールサインＮＯＡＡ４２が当時最も東で発生したカテゴリー５のハリケーンであったヒューゴの中でＮＯＡＡ４２のＷＰ―３Ｄオライオンがメソ渦と呼ばれる極めて強力な大気の渦に突っ込んでしまい過剰なＧがかかりその結果、当時のオライオンの欠陥であったエンジンの燃料ポンプの故障が発生、ＮＯＡＡ４２の第３エンジンがハリケーンの壁雲の中で過剰な燃料が送られて発火炎上したのだ。

この後ＮＯＡＡ４２は後続の空軍予備役Ｃ―１３０の支援もあり無事この当時最も強力なハリケーンの中から脱出、プエルトリコに帰還した。

またエンジンのコントロール不能では１９８３年６月８日にアラスカ州のアリューシャン列島のコールド・ベイ空港からシアトルのタコマ国際空港に向かっていた当時最も老舗の民間航空会社の一つであったリーブ・アリューシャン航空８便ロッキードＬ―１８８エレクトラでコールド・ベイを離陸直後、異常な振動が発生、そして突然第４エンジンのプロペラが脱落（ちなみにこれはエレクトラで数回にわたって起きた事故）、胴体下部を切り裂き４機のエンジンのコントロールシステムを故障、手動操縦のシステムを圧迫し手動操縦系統を一時使用不能にした。

その後機体は手動操縦を取り戻すとベテランの機長の卓越した操

縦により無事乗員乗客全員を無傷でアンカレッジ国際空港に降ろし、機体もほぼ無傷であった。（ちなみに当該機は２０１８年現在カナダで森林火災消火機として現役である）

その他にも２０１０年１１月４日に起きたカンタス航空３２便エンジン爆発事故では爆発した第２エンジンが世界最大の旅客機であるエアバスＡ３８０の第１エンジンの制御系を破壊、第１エンジンを停止不能にしたため緊急着陸後に乗客が１時間機内で待たされ、エンジン停止に５時間を要した。

このような事故もあるなど燃料の過剰供給またはコントロールシステムの故障というのは恐ろしいものである。

バルクホルン「試作機に問題はつきものだ。

あのストライカーは素晴らしい、実戦配備するためにまだまだテストを続けなければ…」

それでもバルクホルンはテストを続けようとする。

だがそれをノヴァクが止める。

ノヴァク「これ以上はやめてくれ。危険だ。

何度も言ってるが俺はもう二度と家族を失いたくない…

俺の家族はトゥルーデだけなんだ、２回も家族全員を失いたくないんだ…

分かるだろ？」

バルクホルン「アレックス…でも！」

ノヴァクに説得されてもなおバルクホルンは食い下がる。

するとハインツとミーナが割り込んだ。

ハインツ「それと、そのテストだが、さっき上に欠陥ことを伝えたら明日西方総軍のリュッツオウ大佐とヴィルケ中佐、それに開発した技術者連れてこっちに来るそうだ。

それで状況を見て現地改修可能ならばその場で改修、不可能な場合本国に持って帰って再設計だそうだ。」

ミーナ「それと当分の間、飛行停止の上自室待機を命じます。

命令よ、いいわね？」

バルクホルン「了解…」

二人の駄目押しの命令に流石のバルクホルンも従った。
ハインツ「で、現時刻を持ってジェットストライカーの一切の使用を禁止する。
　移動を含め指一本触れるのも禁止だからな」
そしてハインツがジェットストライカーの使用禁止を宣言した。
ジェットストライカーは発進台に鎖で括り付けられた。

翌日、バルクホルンの部屋に食事を持ってきたノヴァクとリーネ、宮藤の目の前にはトレーニングをしているバルクホルンがいた。
ノヴァク「トゥルーデ、何をしてるんだ？」
バルクホルン「アレックス、見ての通りトレーニングだ。
　私が落ちたのはジェットストライカーのせいではない、私の力が足りなかったからだ。」
バルクホルンはまだ諦めていなかった。
ノヴァク「トゥルーデ、やめろ。まだ飛ぶ気なのか？」
バルクホルン「当然…」
次の瞬間、後ろからノヴァクに掴まれそのままそばにあったベットに押し倒された。
ノヴァク「トゥルーデ、死にたいのか？これ以上どうしたいんだ？
　俺をまた一人にしたいのか？そうなのか？
　神に救いを求めても神は答えず、最愛の人をまた失い一人で歩けっていうのか？
　トゥルーデ、俺を置いて行きたいのか？また俺は置いていかれるのか？」
バルクホルン「アレックス…だがあれがあれば…」
ノヴァク「トゥルーデ！いい加減目を覚ませ！俺は〝軍人〟としてのお前に〝軍人〟としての俺が言っているんじゃない！
　俺は！ただゲルトルート・バルクホルンという最愛の人を守りたいから言ってるんだ！
　俺はお前を一生をかけて守る、そう神に誓ったんだ！俺は最愛の人を自らの命に代えても守るんだ！

かつて俺は最愛のものを全て失ったんだ！トゥルーデ、お前はそれを知ってるだろ！

また全てを失わせるつもりか！そうなのか？」

バルクホルン「そうならないためにも私はもっと強くならなければならないんだ！」

次の瞬間、乾いた音が響きベットから持ち上げられたバルクホルンがベットに倒れた。

バルクホルン「え…アレックス…？」

ノヴァクが思いっきりバルクホルンの頬を殴った。

その衝撃にバルクホルンは放心状態となった。

ノヴァク「言い訳なんか聞きたくない！

そんなに死にたければ勝手に死ね！

俺の知っているゲルトルート・バルクホルンはあんたみたいな雌犬なんかじゃない！

くたばりたけりゃその辺で野垂れ死ね！このビッチが！」

宮藤「ノヴァクさん！」

ノヴァクは思いつく限りの暴言をバルクホルンに浴びせると部屋を飛び出していった。

急いで宮藤が追いかけるがそれに正気に戻ったバルクホルンがうわごとのように言う。

バルクホルン「アレックス…そんな…待ってくれ…アレックス…なあ、待ってくれ…

アレックス…アレックス…うぁあああ！

済まないアレックス！ごめんアレックス！許してくれ！許してください！お願い許して…」

バルクホルンはとうとう泣き出して謝罪の言葉を繰り返し床を力一杯殴った。

バルクホルン「アレックス…わたしにはお前しかいないんだ…

お前が行ってしまったら…わたしは…」

バルクホルンは俯き目から大粒の涙を流しながら呟いた。

それは部屋を飛び出したノヴァクも一緒だった。

ノヴァク「クソ！なんなんだよ！なんでこうなるんだよ…」
飛び出していったノヴァクは廊下で壁を殴りながら泣いていた。
すると追いかけてきた宮藤が声をかける。
宮藤「ノヴァクさん？」
ノヴァク「宮藤、家族なら家族が苦しい時は優しい言葉をかけるのが筋だよな、だが俺は暴言を吐いて傷つけることしかできない。
ほんと、不器用だよな、ハハ、この辺りは親父譲りだ。
宮藤、笑っていいぞ、いや、笑ってくれた方が気が楽になるよ。」
ノヴァクが自嘲気味に言う。
彼もまたバルクホルンにあんなことを言って後悔していた。
すると突如、警報が鳴った。
ノヴァク「ネウロイだ！」

第１０話：ジェット機狂想曲

突如、基地にサイレンが鳴り響いた。
その音でバルクホルンと同室でゴミの中で寝ていたハルトマンは気が付いた。
ハルトマン「あ、ネウロイだ」
リーネ「ハルトマンさん！いたんですか？」
ハルトマン「うん」
ハルトマンがいたことに気が付かなかったリーネは驚くがハルトマンは気にせず服を払ってから着ると出て行った。
ハルトマン「お先」
ハルトマンが出ていくとリーネも続いて出て行った。
一人残されたバルクホルンは立ち上がると涙を拭くと窓から外を見る。
ハルトマン「隙あり！」
バルクホルン「うわぁあ！」
ハルトマン「忘れものだよ！にゃははは！」
すると突然行った筈のハルトマンが後ろからバルクホルンの耳に何かを入れるとまた行ってしまった。
バルクホルン「インカム？」
ハルトマンが入れたのはインカムだった。

ミーナ『目標はローマ方面を目指して南下中。
ただし徐々に加速している模様。
交戦予想地点を修正、およそ…』
ハインツ「こちらハインツ、目標発見、距離およそ４０キロ。」
少しして、坂本、ハインツ、ミラー、シャーリー、ノヴァク、ハルトマン、ペリーヌ、ルッキーニはネウロイを迎撃するため離陸していた。
今回のネウロイは徐々に加速していた。
すると突如ネウロイは５つに分離した。

坂本「数を利用して突破する気か！」
ハインツ「ミラー、やれるか？」
ミラー「真ん中の一番速い奴以外は。」
ハインツ「分かった、一番速くて恐らくコアのある奴はシャーリーとノヴァクがやれ。
　残りは俺とミラーがやるから他のは援護を頼む」
「「了解！」」
ハインツは即座に指示を出した。
全体的に機動性が高いので比較的機動力の低いＭｅ４１０では通常の手段では対抗できないと判断したハインツは他のウィッチにネウロイを拘束させその隙にミラーに狙撃させる手に出た。
一方、コアがあると思われる最も速いネウロイは固有魔法が加速で機動力では最も優れたノヴァクとシャーリーに任せた。
指示を受けたウィッチは散開して行動し始めた。
ハインツ「３時方向、距離３００、ルッキーニの上の奴、よーい、撃て！」
ハインツの指示の元ミラーは最初にルッキーニと交戦していたものに発砲、初弾、二発目を外し三発目に命中させて撃破する。
ハインツ「腕落ちたか？」
ミラー「向こうが速いんですよ。次は？」
ハインツ「９時方向、ハルトマンと戦ってる奴だ！」
ミラー「了解！」
ミラーはすぐにハルトマンと戦っているネウロイに照準を変え発砲する。
一方、ノヴァクとシャーリーはコアのあるネウロイを捕捉していた。
シャーリー「あいつか」
ノヴァク「目標発見、タリホー！」
ネウロイを見つけると二人は接近する。
ノヴァク「逃がすかクソッタレ！」
接近すると銃撃するがネウロイは素早く二人の銃撃は見当違いの

方向にしか飛んで行かなかった。
シャーリー「あれ？」
ノヴァク「クルヴァ！なんだあの速さは！」
するとネウロイは急降下するとノヴァクたちに向かって突進してきた。
ノヴァク「来たか」
シャーリー「お、やる気か？そう来なくっちゃ！」
それに対してノヴァクたちも突撃して攻撃する。
だがあまりにも速く弾は一向に当たらなかった。
ノヴァク「じっとしてろ！クルヴァ！」
二人はネウロイが速すぎ苦戦していた。

そのことは地上にも伝わっていた。
ハインツ『こちらハインツ、どうもノヴァクとシャーリーが苦戦してる。
こっちは全部片付けたが速すぎて追いかけられない。
支援を頼む』
ミーナ「了解！リーネさん、宮藤さん、ヤンさん、エイラさん」
「了解！」
ハインツの応援要請に待機中だったリーネ、宮藤、ヤン、エイラが急いで向かう。
サーニャ、ニコは夜間哨戒明けで飛べるわけなかった。
最近はサーニャはなぜかエイラよりニコと組む方を好み始めそのためニコはよくサーニャと組んで夜間哨戒をしていた。
それどころかサーニャはエイラの布団に潜り込むことが減りニコと一緒に寝ることが増えていた。
そのためエイラはなぜかニコに嫉妬していたが二人は全く気が付いてなかった。
４人は急いでハンガーに向かいユニットを履き離陸しようとする。
だがその４人の前に影が立ちはだかった。
宮藤「バルクホルンさん!?」

立ちはだかったのは息を切らしたバルクホルンだった。
バルクホルン「お前たちの足では間に合わん。」
そういうとバルクホルンは使い魔の耳を出してジェットストライカーのユニットを固定している鎖を腕力で引きちぎるとユニットを履いて勝手に出撃しようとする。
リーネ「命令違反です、大尉！」
ヤン「バカか！部屋に戻って寝ろ！」
バルクホルン「今、あいつを、アレックスを助けられるのはこれしかないんだ！」
エイラ「でもまだ体力が回復してないだろ！」
４人は止めようとするがバルクホルンは聞く耳を持たずそのまま出撃してしまった。
ミーナ『トゥルーデ！』
バルクホルン「すまん、ミーナ。
　罰は後で受ける、今は…」
ミーナの呼びかけにバルクホルンが返事する。
ミーナは少し間を開けてバルクホルンに言う。
ミーナ『５分よ！あなたが飛べる時間は！』
バルクホルン「ふ、５分で十分！」
ミーナの返事にバルクホルンは不敵な笑みを浮かべて返した。

その頃ノヴァクたちはネウロイと交戦を続けていた。
シャーリーは何とかネウロイに対して有利な位置につき照準する。
シャーリー「そこだ！」
シャーリーは銃を撃とうとするが出ない。
ノヴァク「どうした！」
シャーリー「ジャムった！」
ノヴァク「なに！俺がやる！」
シャーリーのＢＡＲがジャムったので代わりにノヴァクがｗｚ．１９２８を構えて撃つがこちらも弾が出ない。
ノヴァク「クルヴァ！弾切れだ！」

ノヴァクは急いで腰のポーチから予備弾倉を取り出してリロードしようとする。
その隙にネウロイは分裂する。
シャーリー「ノヴァク！また分裂した！」
ノヴァク「クルヴァ！またか！」
リロードし終えたノヴァクがシャーリーに言われて顔を上げる。
すると分裂したネウロイは二人を挟み撃ちにしようとする。
シャーリー「ヤバい、挟まれた」
ノヴァク「どうする？」
挟み撃ちにされ混乱する二人の前に次の瞬間、ミラーの使っている聞きなれた爆音が響くと後ろから襲い掛かってきた方のネウロイを木っ端微塵にする。
シャーリー「えー!?」
ノヴァク「なんだ？」
振り返ると目に飛び込んできたのはジェットストライカーを履いたバルクホルンだった。
シャーリー「バルクホルン!?なんで!?」
ノヴァク「トゥルーデ！」
驚く二人の頭越しにバルクホルンはさらに近づいてきていたもう一体のネウロイを攻撃し撃破する。
ノヴァク「耳がおかしい。あんな砲撃こんな近くで受けるもんじゃないな…」
シャーリー「すげぇ…ミラーの砲撃ここまで近くで見たことないからな…」
その威力に二人は驚いていた。
ペリーヌ「ジェ、ジェットストライカーは使用禁止の筈では…」
ハインツ「あのバカ、ノヴァクのことになるといつもあの調子だ」
ミラー「そうですね…」
ハインツ「おめえだってリーネ絡んだらバルクホルンと同じかそれより面倒だぞ」
そしてあらかた片づけてシャーリーたちを追いかけていたハイン

ツ達も驚いていた。
ノヴァク「トゥルーデ！やったな！」
無線でノヴァクはバルクホルンに呼びかけるが反応がない。
ノヴァク「トゥルーデ？返事してくれ！」
シャーリー「どうなってんだ？バルクホルンのスピードが落ちないぞ」
ノヴァクが再度無線で呼びかけるがそれでも反応がなかった。
すぐにハインツが双眼鏡でバルクホルンの様子を確認する。
ハインツ「えーと、おい、不味いぞ。
　また暴走してる！」
ノヴァク「なに！」
ハインツが確認するとジェットストライカーが暴走を始めていた。
それを聞いたノヴァクはすぐに動いた。
ノヴァクはスピットファイアのエンジンを全開にしバルクホルンを追いかける。
ノヴァク「トゥルーデ！」
エンジンが焼き付く限界までエンジンを回しさらに加速を全力で使って追いかける。
だがジェットストライカーの方が早く少しずつ引き離されてしまう。
ノヴァク「クソ！」
ノヴァクは悪態をつくと今度は十字を切って祈り始めた。
ノヴァク「主よ、我に愛するものを救う力を与え給え、我の足に彼女の元に行く力を与え給え、我の手に彼女を救う力を与え給え、我に永遠に彼女を支え、助け、救う力を与え給え、アーメン」
次の瞬間、ユニットにさらなる魔力が送られるとこれまでにないほどの速度で加速、衝撃音が響き渡った。
ハインツ「おい、これって…」
シャーリー「マジかよ…」
ミラー「ソニックブーム…音速突破しちゃいましたよ…」
その音はソニックブームの音だった。

音速を突破したノヴァクはバルクホルンに抱き着くと緊急停止ハンドルを引っ張る。
ノヴァク「止まれ！」
ハンドルを引っ張ると止まり風圧に負けジェットストライカーは脱落した。
そして二人は少しずつ減速して止まる。
ノヴァク「トゥルーデ、大丈夫か？」
ノヴァクは抱えたバルクホルンの方を見る。
バルクホルンは幸せそうにノヴァクの胸にもたれかかって寝ていた。
ノヴァク「ふ、トゥルーデ…」
それを見てノヴァクはバルクホルンの頭を撫でると顎に手を添えてキスする。
バルクホルン「ん…ん？」
キスされた状態でバルクホルンが気が付いた。
バルクホルンは驚くがすぐにノヴァクの腰に手を回してキスを続ける。
そして数秒キスを続ける。
ノヴァク「ん？トゥルーデ、気が付いたか」
バルクホルン「ああ、王子様のキスでな」
ノヴァク「それじゃあ戻りましょうか、お姫様？」
次の瞬間、ノヴァクのユニットが両方とも爆発した。
ノヴァク「うわ！」
バルクホルン「おい！どうなってるんだ！」
ノヴァク「爆発したんだよ！両方！」
二人はそのままゆっくりと落ちていくがすぐに誰かに支えられた。
ノヴァク「シャーリーか、ありがとう」
支えたのはシャーリーだった。
ノヴァクはシャーリーにお姫様抱っこされ、更にバルクホルンはノヴァクにお姫様抱っこされて帰っていった。

夕方、基地には一機のC―46コマンドーが来ていた。
そしてハンガーには残骸になり、さらに使えそうな部品が全部剥ぎ取られたMe262と50ミリ砲の残骸があった。
ニコ「寝てる間に何があったんだろ?」
サーニャ「バラバラ…」
ニコ「だね、なんか使えそうな部品も剥ぎ取られてるみたいだけど」
残骸を見ながら寝ていたニコとサーニャが呟く。
ペリーヌ「全く、人騒がせなストライカーでしたわね」
ペリーヌが残骸を呆れた目で見ながらつぶやく。
するとその残骸の前に一人の少女と二人の軍人がやってきた。
「これがあのパリで見たMe262とは…この2、3日で何があったんだ?ヴィルケ君」
「酷いですね、それにしてもエンジンの暴走とは欠陥の洗い出し前に前線に送るとは…」
「ああ、ノイエ・ベルリンだと三大将がブチギレて技術省と開発局に乗り込んだそうだ。
ウルスラ中尉、君はパリにいてラッキーだったな」
「ええ、リュッツオウ大佐、ヴィルケ中佐」
ハインツ「えーと、どちら様…」
ハインツが声をかけようと近づくとその顔を見てすぐに敬礼した。
ハインツ「リュ、リュッツオウ大佐!」
それは彼の元上司、第1戦闘機師団師団長だったはずのギュンター・リュッツオウ大佐だった。
リュッツオウ「君は?」
ハインツ「第501統合戦闘航空団主席参謀ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐であります!」
リュッツオウ「うむ、ヴァレンシュタイン少佐。
西方総軍航空参謀部参謀ギュンター・リュッツオウ大佐だ。

こっちが同じく航空参謀部所属で私の部下の」
ヴィルケ「ヴォルフ・ディートリッヒ・ヴィルケ中佐です。
で、彼女がこのストライカーユニットの開発者の一人、ウルスラ・ハルトマン中尉だ」
ウルスラ「どうもよろしくお願いします、姉から色々とお話は伺ってます」
ハインツが自己紹介するとリュッツオウ、そして部下のヴィルケ中佐、そして技術者でハルトマンの妹のウルスラが自己紹介する。
ハルトマン「あれ？ウルスラ？」
ウルスラ「お久しぶりです、お姉さま」
するとハルトマンがやってきてウルスラに気が付いた。
ウルスラは姉に挨拶するとハインツに言う。
ウルスラ「この度はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。
どうやらジェットストライカーには致命的な欠陥があったようです。」
リュッツオウ「それで私とヴィルケ君、それにウルスラ君が赴いたんだ。
とりあえずあのユニットとデータは私たちがこのまま持って帰る。
それでいいな」
リュッツオウたちが赴いたのはジェットストライカーの欠陥の修正又はストライカーの回収だったが完全に破壊されていたためこのまま持って帰ることになった。
ハインツ「ええ、使える部品は全部剥ぎ取ってしまいましたけど。
いいんですか？」
ヴィルケ「どうせ後でスクラップですから結構です。」
ここまで徹底的に破壊された上に真水で洗浄後とはいえ海水に浸かっていたＭｅ２６２はもはやスクラップ程度しか使い道はなかった。
ウルスラ「お詫びとして代わりにジャガイモを置いて行きますね」
ハインツ「は？ジャガイモ？」

するとウルスラがお詫びとしてジャガイモを置いて行くという。
すぐにハインツはハンガーから外に出るとそこにあったのはC―46から大量のジャガイモが降ろされている光景だった。
ハインツ「ジャガイモこんなに必要ねー!!!」
ハインツの叫びはロマーニャの空に木霊した。

夜、バルクホルンとノヴァクは基地の隅の遺跡の中にいた。
満点の星空の中二人遺跡の中を散歩していた。
ノヴァク「トゥルーデ、済まなかった。昼間のことは言いすぎた。」
バルクホルン「アレックス。私の方こそ、お前の気持ちを考えずにあんなこと言ってしまって。
それと、助けてくれてありがとう。」
ノヴァク「トゥルーデ…」
ノヴァクはそう言うとバルクホルンに抱き着きキスする。
それにバルクホルンは驚くがすぐに彼女の方もノヴァクの背中に手を回す。
二人は誰も見ていないことをいいことにたっぷりと十数秒もキスをする。
二人の唇が離れた時には唾液で橋ができていた。
バルクホルン「アレックス、いつものことだが急すぎるぞ全く…
私だから受け入れたものを…」
バルクホルンはいつも急なノヴァクのことを愚痴るが本音としてはまんざらでもなかった。
ノヴァクは急にキスなどをするがそんなことを毎日すれば慣れてしまい益々バルクホルンはノヴァクに惚れていた。
気がつけばバルクホルンはノヴァクの自慢だって普通にするようになった程である。
ノヴァク「俺はポーランド人だからな、回りくどいのは嫌いなんだ。
少し前までは大声で詰め寄ってきたのに最近はすっかり言わなくなったな」
バルクホルン「私はお前の全てを受け入れたんだ。

お前の無鉄砲なところとか直球なところとかな。」
ノヴァク「そうか、トゥルーデ、この一件で一つ思ったんだ」
するとノヴァクが話題を変える。
バルクホルン「なんだ?」
バルクホルンが聞くとノヴァクは深呼吸するとバルクホルンの両手を手に取ると言った。
ノヴァク「指輪も準備も何にもないが、結婚しよう」
バルクホルン「は?

け、結婚!ア、アレックス!お前が普段から突拍子もないことをするのは分かってるが結婚?!
無理無理無理早すぎる!」
プロポーズだった。
それを理解した瞬間、バルクホルンは耳まで真っ赤になりノヴァクに詰め寄る。
それはあまりにも突然すぎた。
ノヴァク「出会って一年だぞ?親父は母さんに3回目のデートでプロポーズしたぞ」
バルクホルン「そういう問題じゃない!何の準備もないだろ!」
そう、何の準備もなかった。
あまりに突然すぎ、指輪すらないのだ。
ノヴァク「そのぐらい分かってる。式なんて後でいいから先に籍だけでも入れたいんだ。」
バルクホルン「いやだが、こっちだって気持ちとか色々あるんだぞ…バカ」
バルクホルンは照れながら小声で言う。
彼女としても嬉しかった、だが突然すぎ気持ちを整理することさえできなかった。
ノヴァク「そうか、このことは忘れ…」
バルクホルン「駄目とは一言も行ってないぞ?」

ノヴァク「え？」
ノヴァクはこのことを忘れようとするとバルクホルンが止める。
そしてノヴァクの手を掴むと言った。
バルクホルン「こんな女でよければ、戦争が終わるか、私があがりを迎えた時、その時結婚しよう。」
ノヴァク「トゥルーデ…」
バルクホルン「だから、その、なんだ、待っていてくれるか？」
次の瞬間、ノヴァクはまたバルクホルンにキスした。
今度は数秒ほどのキスだった。
ノヴァク「トゥルーデ、ああ、戦争が終わったら、結婚しよう。
約束だからな、破ろうものなら地獄の果てまで追いかけてやる」
バルクホルン「破ったら承知しないからな、旦那様」
バルクホルンがはにかみながら言う。
それを聞いてノヴァクは珍しく照れる。
ノヴァク「そ、そうだな。
そろそろ戻ろう、冷えてきた」
バルクホルン「明日も早いんだ、早く帰ろう。」
二人は手をつなぐと基地へと戻っていった。

第11話：陰謀と治安維持

アイケ「全く不愉快だ、そう思うだろ？
　マルセイユ少将、ゴットベルク少将」
「ええ、我々が大公家に対して攻撃する意思がないことをいいことにこんな大公名義のふざけた意向を伝えてくるとは。
　これではローマ市内の治安維持がますますやりにくくなるだけです。
　黒シャツ師団とゴットベルク師団、第8ベルサリエリ旅団、第3竜騎兵連隊を増員して何とかやりくりしてますがこのままではローマが反対勢力の聖域になってしまいます」
「いっそのこと大公家を取り潰したいがそんなことすれば俺たち全員がロマーニャ人に殴り殺される。
　〝直接的な脅威〟を与えなければ無理だろうな」
　ある日、ローマのある高級ホテルの一室に3人の将軍がいた。
　それはアイケと警察装甲擲弾兵師団〝フォン・ゴットベルク〟師団長クルト・フォン・ゴットベルク少将、ローマ都市部隊司令官ジークフリート・マルセイユ少将だった。
　彼らが話し合っていたのは先週大公副官のあるロマーニャ軍の将軍から伝えられた大公家からの意向であった。
　マルセイユ「『ローマ市内では暴力的且つ強権的な治安維持活動をできる限り控え市内に平穏を取り戻したい』
　ふざけてますね。我々のやり口が反発を生んでいるのは知ってます、ですがその反発は元から左翼の強いリヴォルノとマフィアの影響力の強い南部だけです。
　おそらくですがこれにはマフィアと絡んでる政治家も関わってると推測します」
　アイケ「だろうな、腐りきった民主主義が」
　ゴットベルク「今日の閲兵式で公女から我々の要求を伝えてもらおう。
　それが一番だ」

大公からの意向は実質的にローマ市内での摘発をやめろと言う意味であった。

彼らは大公家からの支持を得なければただでさえ非合法且つ強権的な方法で政治の実権を握ったためもし大公家の支持を失うことは大変不味いことであり一応はこの意向に従っていた。

アイケ「分かってる、だがその後はヴェネチアの方の会議だ。

今日はカヴァッレーロ大将とカンピオーニ大将が来るんだ。

二人とも我々とは距離を取りたいはずだ」

この日はロマーニャ公女マリア・ピア・ディ・ロマーニャとヴェネチア公国海軍第１３課課長イニーゴ・カンピオーニ大将、ヴェネチア公国陸軍第１３課課長ウーゴ・カヴァッレーロ大将が来て国防省の前の通りでカラビニエリと陸軍の合同儀仗隊を閲兵した後、マリア公女、カンピオーニ大将、カヴァッレーロ大将、デ・ボーノ大将、アイケ、バルボの六者会談が行われる予定だった。

その場で彼らの要求であるローマ市内での治安維持活動のための許可を求めるつもりだった。

儀仗兵「マリア公女、カヴァッレーロ大将、カンピオーニ大将、デ・ボーノ大将、バルボ大将、アイケ大将に捧げ銃！」

数時間後、ローマ市内の国防省前の通りにはカラビニエリとベルサリエリ、そして陸軍兵士の儀仗隊がロマーニャ国歌が流れる中捧げ銃をして閲兵式をしていた。

捧げ銃をする儀仗兵にデ・ボーノやバルボ、アイケ、そしてヴェネチア陸軍の軍服を着たカヴァッレーロ、ヴェネチア海軍の軍服を着たカンピオーニが敬礼し、青い服を着た赤毛のマリア公女は文民であるため胸に手を当てて敬礼する。

儀仗兵「立て銃！」

儀仗兵の隊長が国歌が流れ終わると立て銃を命じ、デ・ボーノ大将たちの元に向かう。

儀仗兵「マリア公女、カヴァッレーロ大将、カンピオーニ大将、デ・ボーノ大将、バルボ大将、アイケ大将。

特別儀仗隊、巡閲準備完了しました。
先導します」
デ・ボーノたちの元につくと報告の後巡閲のため先導する。
そして儀仗兵の先導の元儀仗隊を巡閲する。
巡閲後、デ・ボーノはマリアに話しかける。
デ・ボーノ「公女殿下、如何ですか?我がロマーニャ軍の精鋭、そしてこのロマーニャの地を守る者たちです。」
マリア「え、ええ。頼りにしています」
デ・ボーノ「そうですか、ですが嘆かわしいことに大公殿下の意向によって彼らは全力で敵に立ち向かうことができません。」
デ・ボーノは大公の意向のせいで自由な行動ができないと嘆く。
マリア「大叔父様の?」
デ・ボーノ「ええ、大公殿下がローマ市内での暴力的行為で強権的な行為をやめるようにと」
マリア「ですが、暴力的で強権的な行為なことをしては民人が平穏に暮らせないではないですか」
マリアはデ・ボーノに彼らのやり口が暴力的だという。
実際極めて攻撃的で強権的だが一方でロマーニャに根深く潜んでいたマフィアなどの各種犯罪組織の一掃という側面もあり彼らが実権を握って以降軍による掃討作戦で南部を中心にマフィア数万人が逮捕、シチリアのコーサ・ノストラ、ナポリのカモッラ、カラブリアのンドランゲダ、ローマのシカーリオ、コルシカのユニオン・コルスなどの〝大物〟と目されたマフィアのファミリーは情け容赦のない、それこそ戦車や装甲車を持ちだし、万単位の軍隊を投入した掃討作戦により構成員の９８％を逮捕又は殺害、さらにこれらのマフィアと関係のあった人間の大半を逮捕することでマフィアの影響力を排除するなど強権的な方法でマフィアを壊滅させていった。
特に幹部は逮捕後２４時間以内に弁明権無しの即決裁判にかけられ拷問された後最長でも拘束後２４０時間以内に処刑されていた。
だがここでアイケが口を挟んだ。
アイケ「大公殿下は何一つわかっていない、我々は無差別に攻撃し

ているのではない。
　我々が攻撃しているのは〝危険人物〟のみです。
　マフィアや共産主義者などと言ったクズだけです、一般市民には一切の危害を加えていない。
　なので、大公殿下の意向に沿ってしまえばこのローマに各地からそういったクズどもが集まるだけです。
　ガリアを見てください、政府が混乱した結果、南部は紛争状態、各地でテロが乱発し政府は機能していない。
　この国を第二のガリアにしてもよろしいのですか？」
マリア「それは…」
アイケは騒乱の結果紛争状態に陥ったガリアを引き合いに出す。
ガリアは政府の混乱により政治の実権を連合軍ガリア軍行政司令部に奪われ、さらにそこに王党派、オラーシャが秘密裏に支援するガリア共産党（ＰＣＧ）、アナーキスト、政争に敗れた勢力がゲリラ化しリベリオンなどが支援するマキ、ロマーニャの支援するアルジェリア独立派とチュニジア独立派、扶桑の支援するインドシナ独立派などの各地の独立運動勢力などがガリア政府、さらにそれを支援する連合軍を攻撃し紛争となったところにロマーニャのニースとサヴォアの併合によるナショナリズムの高揚、そしてガリア軍内部のでの紛争、親ガリア政府勢力民兵ガリア国内軍（ＧＦＩ）、ド・ゴール派に近いが立場を異にするフランソワ・ダルラン提督率いるダルラン派、親カールスラント勢力で反共・ファシストでガリア政府と協力しているヴィシーを中心とするヴィシー派などが合わさり南部を中心に激しいゲリラ戦が発生、血で血を洗う血みどろのゲリラ戦になり泥沼化していた。
　この紛争はまるで終わりが見えず後方地域では各種義勇兵を中心とした部隊によって血生臭い掃討戦が続いていた。
　そしてこの火はロマーニャ北部にも飛び火する可能性があった。
アイケ「それを食い止められるのは我々だけです。
　我々にすべて任せてもらえればこの国は守られるのですよ、大公殿下にそうお伝えくださいませ、マリア公女殿下」

アイケはマリアに向かって威圧する。
アイケにはマリアはただの政治的には重要とはいえただの小娘であった。
いざとなればこの場で撃ち殺しても構わなかった。
マリア「わ、分かりました…大叔父様にお伝えします」
アイケ「そうですか、よろしく頼みますよ」
マリアはアイケの威圧に屈した。
それを聞いたアイケは不気味な笑みを浮かべていた。

数十分後、マリアとは別にアイケ達は集まっていた。
アイケ「カヴァッレーロ大将とカンピオーニ大将は本気で?」
アイケはカヴァッレーロとカンピオーニが語った計画に驚いていた。
カヴァッレーロ「ああ、このぐらい過激な手を使わなければリソルジメントは完成しない。
私が求めるのは統一された祖国、イタリアだ」
カンピオーニ「私も彼と同意見だ。ファシスト、ナチス、共産主義でなければそういったものには拘らない。
我々が求めるのはイタリアの統一、ただ一つ。
ニースとサヴォア、ダルマチアにシチリア、コルシカ、チロル、マルタ、そしてチュニス。
これが我々のイタリアだ。」
バルボ「だが、クーデターと併合とは…」
彼らの計画、それはヴェネチア軍を掌握しクーデターを行いヴェネチア政府を打倒、その混乱に乗じてヴェネチアをロマーニャの保護国、そして併合するという過激極まりない策だった。
ヴェネチア公国はロマーニャの隣国で元を辿ればオストマルク系のロンバルト・ヴェネト王国につながる国だった。
最近では経済的軍事的結びつきを強め国家共同体と言うべき関係だったが統一には消極的だった。
一方、ロマーニャ、そしてヴェネチアの民族主義者にとってはこの

2カ国が統一することによって一つのロマーニャが完成するため統一を望み、また世論も比較的統一には積極的な面もあった。
だがヴェネチア政府の上層部は統一に非積極的、特にヴェネチア公家と貴族層、資産家などは反対であった。
そこでカヴァッレーロ達がクーデターで政治の実権を握りロマーニャに併合される形で統一するという計画だった。
彼らにとってイタリア統一のためにはこのぐらいやって当然だった。

カヴァッレーロ「統一されたイタリア、これが重要なんだ。
我々は同じ言語で話し、同じ民族で、同じものを食べてる、だがハプスブルクかサヴォイアか、この二つの違いで分断されているんだ。
我々の王はハプスブルクではなくサヴォイアだ、サヴォイアこそがイタリア王にふさわしい。
アレマン人のハプスブルクじゃない」

カンピオーニ「イタリア人のイタリア人のためのイタリア人によって支配された統一されたイタリア国家、そのためならば我々は何でもするのだよ」

デ・ボーノ「我々の目標はイタリア統一、我々ロマーニャ陸軍は貴官らの計画に賛同しあらゆる助力を惜しまないことを約束しよう。」

バルボ「ああ、我々にとっても統一イタリアは最終目標だ。
我が空軍も支援する」

アイケ「第15騎兵軍もその計画に乗ろう」

二人の計画にデ・ボーノ、バルボ、アイケは乗った。
彼らにとってもイタリア統一とはカールスラント解放に並ぶ重大目標だった。

その頃、国防省の裏の通りを黒いシャツを着た兵士を鈴なりに乗せた義勇擲弾兵師団黒シャツ偵察大隊E・ムーティのランチアリンチェとフィアットAS42サハリアーナ後期型メトロポリターナ（都市）

型2台、ＡＢ４３装甲車2台がが走っていた。
彼ら義勇擲弾兵師団黒シャツはクーデターに参加した各種義勇連隊と防空師団エトナを再編したバルボ達の私兵であった。
そしてＥ・ムーティ偵察大隊はＧＮＲのＥ・ムーティ機動部隊の系譜を引く機械化軽歩兵部隊だった。
指揮官のフランチェスコ・コロンボ大佐以下彼らはクーデター以降ローマ市内での治安維持任務に投入されていた。
だが行動制限により彼らはある種暇を持て余していた。
しかしこの日は別であった。
即ちこの日は国防省から住居のサヴォイア＝アオスタ家私邸に向かう公女の車列を護衛するという任務のため国防省に向かっていた。
将校「護衛対象を確認した。
車列を組め」
国防相の裏口に止められた公女の車を確認した車列の隊長はサハリアーナ、ＡＢ４３、リンチェ、公女の車、ＡＢ４３、サハリアーナの順で前後に並ぶ。
だがすぐにおかしいことに気が付いた。
兵士「おい！大丈夫か！」
車の傍にボディーガードと運転手が倒れていた。
すぐに兵士が車から飛び降りて駆け寄る。
将校「公女は！」
ボディーガード「…え？いないのか？」
将校は公女の姿が見えないことに気が付き倒れたボディーガードに聞くが全く理解していなかった。
その瞬間、将校の脳裏に最悪の可能性が浮かんだ。
将校「まさか！全員急いで周辺を捜索しろ！」
すぐに兵士たちに周囲の捜索を命じる。
兵士たちは散開して捜索するが見つからなかった。
兵士「駄目です、影も形も見当たりません。」
将校「まさか、緊急連絡！マリア公女が誘拐された！
第一種警戒態勢！」

将校はすぐに司令部に緊急連絡した。
公女が誘拐されたのだ。

マルセイユ「は?なんだと!誘拐されただと!」
ゴットベルク「誘拐だと!?」
「そんな馬鹿な、何かの間違いじゃないのか?」
ローマ都市司令部ではこの連絡をマルセイユとゴットベルク、そして義勇擲弾兵師団黒シャツ師団長ルイージ・ヴォランテ少将が受け取り驚いていた。
ヴォランテ「誰が誘拐した?」
マルセイユ「分からん、情報によるとボディーガードはマリア公女ともめていた時に突然何者かに襲われて気絶、気がついたら誘拐されていた、それだけだ」
ゴットベルク「マフィアか?いや、共産主義者の可能性もある」
ヴォランテ「どちみちもし公女の身に何か起きれば…」
彼らは誘拐した犯人を共産主義者又はマフィアとにらんでいた。
公女の誘拐という大事を実行できる勢力はこのぐらいしかないと踏んでいた。
マルセイユ「我々の責任問題になる。
直ちにローマ市内に緊急警戒態勢を取らせ戒厳令を敷き、すべての主要道路に検問を敷け」
ヴォランテ「まて、公女が誘拐されたことが分かれば最悪殺害されるぞ」
マルセイユ「それもそうだな、戒厳令は無し、その代わり全治安維持部隊を出動、緊急警戒態勢を取らせる。
後検問もだ。
これより、ローマ都市司令官権限によってローマ市内での一切の武器使用自由を宣言。
公女を誘拐した反逆者は殺しても構わん、何としても公女を取り返せ、これは我々の威信にかかわる」
マルセイユはローマ市内での武器使用自由を宣言、さらに誘拐犯の

殺害さえも許可した。
ゴットベルク「それと、いい機会だ。
これを理由にローマ市内の全摘発対象を捕まえ、摘発しろ！
マフィア、共産主義者、全部だ！一気にローマ市内を掃除してやる！」
マルセイユ「分かった、ローマ市内の清掃作業も許可する。
何としても、公女を取り返し、マフィアと共産主義者を殲滅しろ」
二人はローマ市内の清掃作業を公女誘拐にかこつけて再開した。
だが、公女を〝誘拐〟したのはマフィアでも、共産主義者でもなかった。
なぜ、公女が消えたか?それはその日の朝に遡る。

第12話：ローマへの道

〝公女誘拐事件〟が発生した日の早朝、501の厨房にバルクホルン、宮藤、リーネ、ミラーが朝食を作っていた。

ミラー「珍しいですね、バルクホルンさんが料理を手伝いたいって。」

バルクホルン「あ、ああ。アレックスのためにも、な」

ミラーが珍しく料理を手伝いたいと言ってきたバルクホルンに声をかける。

バルクホルンはノヴァクにプロポーズされて以降、家事の手伝いを積極的にしていた。

勿論理由はプロポーズだがその事は二人以外誰も知らなかった。

ミラー「好きな人のために料理を作りたいってのは分かりますよ。料理さっぱりですけど」

リーネ「そうですね、ミラーさん」

バルクホルンの思いを勘違いしたリーネとミラーはいつものように二人でイチャイチャし始める。

その横で宮藤は米を炊く用意をしていた。

だが米袋から米を出そうとするとほとんど入っていなかった。

宮藤「あれ？お米がない」

「え？」

リーネ「まだどこからも補給来てないよ」

米が切れたがまだ補給はどこからも来ていなかった。

そもそも小麦が主食の欧州では米、ましてや東アジアで主流のジャポニカ米の調達は極めて困難だった。

スペインのボンバ米などは主にインディカ米だった。

宮藤「坂本さーん！

お米無くなっちゃいました！」

坂本「ん？

一挙に全員集まると思わなかったからな～

それは困った」

宮藤はたまたま通りかかった坂本を呼ぶ。
坂本もこの事態は想定外だった。
宮藤「どうしよう…」
ハインツ「米が切れたのか？丁度良かった。
　色々備品ががなくなったから買い物行くか」
すると今度はハインツがやってきた。
「「買い物？」」
リーネ「了解！ミラーさん！一緒に行きましょう！」
ミラー「そうだねリーネ。」
ハインツの買い物という単語にリーネたちは喜んだ。

ミーナ「ということで、臨時補給をすることになりました。
　大型トラックの運転ができるのはシャーリーさん、ロマーニャの土地勘があるのはルッキーニさんなのでこの二人にお願いします」
リーネ「えっ…」
「「了解！」」
シャーリー「よっしゃー！久しぶりの運転だ！」
朝食後すぐにミーナにブリーフィングルームに集められたウィッチたちは臨時補給の件をミーナから伝えられていた。
そのことを伝えられたルッキーニとシャーリーは大喜びする。
だがリーネはシャーリーが運転すると聞いて不安になった。
ハインツ「それと、シャーリーだけじゃ不安すぎるんで俺も行く。
　リーネ、どうせまたシャーリーが暴走するとか心配してねえか。
　大丈夫、俺が止めるし最悪ミラーのフィアットに乗って行け、どうせ人数余ってるせいで常時二人か三人は非番扱いだ」
坂本「敵の襲来がいつ来るか分からないとはいえ人手が余ってるからな」
ハインツはミラーとリーネを非番扱いとしてローマに連れて行く

ことにした。
５０１は１７人もウィッチがいるため常時２、３人が非番扱いとなっていた。
そのためミラーとリーネを出してもたいして問題ではなかった。
ミーナ「それじゃあミラーさんとリーネさんは非番扱いで宮藤さんも同行します」
リーネ「えっとミラーさんの車ですか？」
リーネはミラーの車に乗るか聞くとハインツが答えた。
ハインツ「ローマについてシャーリーを殴りたければ乗っていいぞ」
シャーリー「えっと…殴るって？」
ハインツ「今から１時間後ぐらいには山道で暴走する未来が見える。
とりあえずローマに着いたら最初に殴るぞ」
ハインツはこの先起きることをなんとなく予想していた。
坂本「宮藤、任務中はハインツの指示に従うようにな。」
宮藤「はい」
ミーナ「では欲しい物がある人は言ってください」
ミーナは続いて各自の要望を聞いた。
横で坂本は考える。
坂本「欲しいものか…新しい訓練器具とかか？」
ミーナ「はいはいそういうのじゃなくて」
ハインツ「もうちょっと他にないのか？服とか本とか娯楽用品。
ここ殆ど娯楽用品ないぞ。」
坂本が訓練器具などと答えるがハインツからすれば娯楽用品が少なかった。
ヤン「うーん、サルミアッキ？」
エイラ「サルミアッキならあるぞ」
ヤン「え？よかった…切れかけてたんだ」
ヤンがサルミアッキと答えるがエイラが持っていたので必要なかった。

リーネ「ミラーさん、ローマに行ったら紅茶買いましょう。」
ミラー「そうだね、僕もコーヒーとワインが欲しいし」
ハインツ「後ラジオも買わないとな。
何故かこの基地ラジオが一つもないし。
それと酒」
ハインツはラジオと酒、ミラーはコーヒーとワイン、リーネは紅茶を買うつもりだった。
ノヴァク「買うもの…」
バルクホルン「ん?どうしたアレックス」
ノヴァク「いや、何でもない。アレにしよう」
ノヴァクは考えているとふと隣のバルクホルンの方を見る。
それに気が付いたバルクホルンが聞くが誤魔化す。
宮藤「えっと、紅茶とラジオと酒とワインですね。」
エイラ「ピアノ!ピアノを頼む!」
ハインツ「エイラ、ピアノは運べ…ドブンクェ連れてったら運べるけど多分金がない」
エイラ「チェ、サーニャのピアノが聞きたかったのに。」
エイラはピアノを頼むがピアノは巨大で高価なので無理であった。
ニコ「うーん、お菓子とかかな?全員分の。」
サーニャ「お菓子?」
ニコ「うん、ダメかな?」
サーニャ「いえ、ニコさんって優しいんですね。」
ニコ「いやぁ、ウィッチたちみんな妹みたいだからさ、ついつい甘やかしたくなるんだよね~」
サーニャとニコはエイラの横で話していた。
宮藤「ニコさんはお菓子と、バルクホルンさんは?」
宮藤はバルクホルンに聞いた。
すると照れながら答えた。
バルクホルン「そうだな…りょ、料理の本をいくつか頼む」
宮藤「料理の本ですね」
ノヴァク「それと、クリス用に服も、可愛いので。

サイズは宮藤とほぼ同じだから」
宮藤「服ですね」
ノヴァク「それと、ちょっと」
宮藤「？」
ノヴァクはクリス用の服を頼むと宮藤を少し離れたところに連れて行く。
宮藤「何ですか？」
ノヴァク「いや、トゥルーデにも服を送りたい。
サイズはレディースのMでよかったはずだ。
サプライズで送りたいから絶対にばれないようにしてくれ、あとラッピングも出来れば頼む。
可愛い感じので頼む。それと宝飾店のカタログも」
宮藤「分かりました、可愛い服でラッピングと宝飾店のカタログですね。」
ノヴァクはバルクホルンにプレゼントを贈るつもりだった。
そして宝飾店のカタログはもちろん指輪の検討のためだった。
ノヴァク「それと代金、流石に人の金で送りたくはないからな」
宮藤「は、はい」
ノヴァクはプレゼント代に幾らか金を渡すと解放した。
宮藤「あ、ペリーヌさんは？」
最後に宮藤はペリーヌに聞く。
ペリーヌ「私は別に要りませんわ」
宮藤「え、でもせっかくだし…」
ペリーヌ「いらないって言ってるでしょ！」
ペリーヌは語気を強めていらないというと部屋を出て行ってしまった。
宮藤「ペリーヌさん…」
リーネ「実はペリーヌさん、頂いた給料と貯金を全部ガリア復興財団に寄付してて…」
宮藤「そうなんだ」
するとリーネがなぜペリーヌがいらないと言った事情を説明した。

ペリーヌは手持ちの金を全部復興に回していたためそもそも何も買えなかった。
ミラー「そうだ、花の種なんかどうだろ？」
リーネ「いいですねミラーさん、ローマで買ってきましょう」
ミラーたちはさらに花の種を追加した。

その後エイラとハルトマンの注文を追加するとハインツ、ルッキーニ、シャーリーはオリーブドラブのリベリオン製トラックに、リーネとミラーはフィアット５００トポリーノに乗って出発した。
一行は長閑な田舎道を進んでいた。
ハインツ「平和だな、シャーリー、暴走するなよ」
シャーリー「分かってるって」
ハインツはダッシュボードに脚を乗せてタバコを吹かしながらシャーリーにくぎを刺す。
だがしばらくして山道に入るとハインツの恐れていたことが起きた。
シャーリー「前方見通し良し、対向車なし、フフーッ」
ハインツ「ん？なんか嫌な予感が…」
シャーリーは周りを確認すると邪悪な笑みを浮かべた。
それにハインツは悪寒を感じる。
次の瞬間、トラックが加速し始めた。
シャーリー「いくぞ！」
ハインツ「え？ちょ…うわ！」
猛加速して山道を暴走し始めた。
ハインツ「ギャー！シャーリー！やめろー！」
シャーリー「大丈夫だって！」
ハインツ「大丈夫なわけあるかバカ！」
ハインツはダッシュボードから足を下ろしてシャーリーに食って掛かるがシャーリーはどこ吹く風だった。
そのまま運転席でシャーリーとハインツはハンドルを取り合って

喧嘩し始めた。
ハインツ「バカ止まれ！俺が運転変わる！」
シャーリー「そんな揺らすと落ちるぞ」
ハインツ「今すぐ止まれ！命令だ！」
シャーリー「私にキスしてくれたら止まるかもね！」
ハインツ「テメェトラックから捨ててやる！って前！」
シャーリー「前？うわ！」
するとハインツは前を見るよう言う。
すると崖からトラックは飛び出すとちょっとした谷を飛び越えて反対側の道路に着地した。
ハインツ「シャーリー…」
シャーリー「まぁ、今回は無事…」
着地するとハインツがシャーリーに言う。
ハインツ「シャーリー、俺の書類整理３日、朝食作り一週間」
シャーリー「え？そんな殺生なー！」
ハインツ「残念ながら当然」
その光景は後ろを走っていたリーネとミラーが見ていた。
ミラー「あー」
リーネ「芳佳ちゃん…」
二人は呆然としていた。

十数分後、一行はローマ市内手前で渋滞に巻き込まれていた。
ルッキーニ「シャーリー、ひまぁ…」
ハインツ「なんだよ、ここで渋滞かよ」
宮藤「何かあったのかな？」
シャーリー「事故かな？」
シャーリーの頭には大きなたんこぶができていた。
平地に出た瞬間、ハインツがシャーリーの頭を殴った。
するとトラックのドアを誰かが叩いた。
ハインツは窓を開けるとそこには規格帽を被りゴルゲットをつけライフルを持った憲兵がいた。

憲兵「身分証を」
ハインツ「はい」
ハインツは全員の身分証を憲兵に渡す。
憲兵は身分証を確認するとハインツに返した。
憲兵「行っていいぞ」
ハインツ「あいよ」
憲兵に行くよう促されると車列の横を通ってローマに向かった。
後ろにいたミラーたちも同じように身分証の確認をされるとハインツの後ろを通っていった。
渋滞の前の方を見ると車から数人引きずり降ろされて憲兵に殴られていた。
シャーリー「えぇ…ルッキーニ、見ない方がいい」
宮藤「うっ…」
ハインツ「ふーん」
その光景にシャーリーは咄嗟にルッキーニの目を隠し宮藤はあの時の光景を思い出し、ハインツはいつものようにタバコを吸っていた。
ミラー「リーネ、僕がいいというまで向こう見てて。」
リーネ「はい」
その後ろのミラーたちも同じようにリーネの視線を逸らさせた。
しばらく走るとローマ市内に入った。
ハインツ「やっとローマか」
宮藤「わ～！わ～！凄ーい！」
宮藤はローマ市内の光景に驚いていた興奮していた。
ルッキーニ「あれ？芳佳ローマ初めて？」
宮藤「うん、あれなに？」
ルッキーニ「昔の闘技場だよ」
ハインツ「コロッセオだ」
宮藤「へぇー！あっちは？」
ルッキーニ「あれは公会堂」
宮藤はローマの色々な名所旧跡を見て興奮していた。

ハインツ「お前ら、観光はいいが目的は買い物だぞ。
　まあローマはヨーロッパでも最も歴史ある街だからな」
宮藤「へぇ、ハインツさんの世界でもですか？」
ハインツ「ああ、古代ローマ帝国から始まり欧州の覇者たちがこの街を都にした。
　騒乱もあったが今ではローマカトリックの総本山、ローマの中に別の国があるぐらいだ」
ハインツは史実でのローマの歴史を話す。
ローマは古代ローマ帝国から始まり古代から中世にかけての文化・学術の中心地、さらにキリスト教の総本山として発展、近代以降は統一イタリアの首都として世界で最も美しい街であった。
そして丁度１９３０年代にはファシスト政権下においてローマの再開発が行われローマ地下鉄の一部やヴェネチアとコロッセオを結ぶ「帝国の道」、ティレニア海とローマを結ぶ世界初の高速道路アウストラーダ、ローマ郊外の新都市エウロなどが建設され、さらに荒れ果てていたアウグストゥス廟の再整備などが行われた。
このファシスト政権期の再開発は現在でもファシスト政権期の政策の中でも高く評価されている。
宮藤「別の国？」
ルッキーニ「ローマはローマじゃないの？」
ハインツ「いや、バチカン市国ってあるんだよ。
　サンピエトロ大聖堂がバチカン市国になってる」
ハインツがバチカン市国を説明した。
その間に一行は国防省の裏の通りの一本隣にあった目的の店に着いた。
ミラー「僕たちはここでお別れですね、じゃあ基地で」
ハインツ「あいよ、デート楽しんで来い」
ここでミラーとリーネは分かれてデートに行った。

第13話：偶然の連鎖

店に入った一行はそれぞれ買うものを選んでいた。
宮藤「えっと…」
ハインツ「ミラー達は確か自分達で買ってくるからいいって言ってたから俺の酒、そういやタバコも切れかけてるからタバコも買っとこう。」
宮藤は棚の下の方の商品を選びハインツは酒とタバコを選んでいた。
その側でシャーリーはラジオを探していた。
シャーリー「ラジオはこれだな」
ルッキーニ「これ私の！」
シャーリー「ニコとハルトマンの分も忘れるなよ。
ルッキーニ、ちょっとこれ持っててくれ」
ラジオを見ていたシャーリーにルッキーニは自分の分をカゴに入れて持ってきた。
シャーリーは肩にかけていたバッグをルッキーニに渡すと棚のラジオを手に取ろうとする。
宮藤「あとはお洋服と…」
すると宮藤は立ち上がると側の衣装ラックにかけられたフリフリのついたピンクの服を手に取った。
シャーリー「うーん、似合ってるじゃないか宮藤」
宮藤「いえ、これはバルクホルンさんとノヴァクさんに頼まれたやつです」
シャーリーはその服を褒めるがこれはバルクホルンとノヴァクから頼まれた品だった。
シャーリー「あの二人ってことは堅物の妹用か？」
宮藤「ええ」
ハインツ「最近あいつらの仲いいとか飛び越えて夫婦だよな。」
ふとハインツはバルクホルンとノヴァクの仲の良さの話を出す。
あの二人はここ最近ではもはや夫婦であった。

宮藤「そういえばノヴァクさんから宝飾店のカタログとバルクホルンさんへのプレゼント頼まれてるんですよね」
シャーリー「プレゼントはわかるけどカタログ？」
ハインツ「何に使うんだ？結婚指輪か？」
シャーリー「あの二人が結婚…」
ふとシャーリーとハインツは二人の結婚式の様子を想像する。
シャーリー「どうしよう、あの二人本当にやりそうだからシャレになんないって」
ハインツ「確かにあいつら結婚しそうだよな、まさかもうプロポーズまでしてるんじゃねえか？」
二人はノヴァクたちの事を想像して色々話す。
実際二人の想像はほぼ事実だった。
そしてふとシャーリーは目の前の想い人のとの関係を考えた。
シャーリー「なあハインツ、いつになったら私のこと貰ってくれるんだ？」
ハインツ「ゲェ！忘れてると思ってた」
シャーリー「わ、忘れるわけないだろ！あんなこと…」
ハインツは例の嫁にもらう常々の話を忘れてると思っていたが実際はシャーリーは忘れてなどいなかった。
ハインツはこの件を有耶無耶にしようというクズみたいなことを考えていたが現実は甘くなかった。
ハインツ「あーその件はだなー」
シャーリー「ハインツ、今ここで決めて。有耶無耶にしたくないの。
今ここで決めないと有耶無耶にするでしょ」
ハインツ「いや、そう簡単に決める話…」
シャーリー「去年そう言って有耶無耶にしたよね？
今日という今日こそ結論出してよ」
ハインツ「えぇ…」
宮藤「え、えっと！二人ともよくわかんないですけど喧嘩はやめましょうよ！」
気がつけばハインツにシャーリーは詰め寄り宮藤がそばで止めよ

うとしていた。
　唯一蚊帳の外のルッキーニは窓のそばのソファで欠伸をして暇を持て余していた。
　ふと窓の外を見るとそこには黒づくめの服装の二人の男と赤毛の青い服を着た少女が揉み合いになっていた。
　それを見るとルッキーニは立ち上がると窓から外に出て男達の方に向かった。
マリア「離してください！」
ルッキーニ「スーパールッキーニキーック！」
ボディーガード「うわ！」
男達の方に向かったルッキーニはまず一人を飛び蹴りで倒す。
ルッキーニ「もう一個！」
運転手「ガッ！」
続いて二人目も倒す。
その光景に少女は混乱する。
マリア「ああ…あ…あの！」
ルッキーニ「行こっ」
マリア「え？」
ルッキーニ「こっちこっち！」
するとルッキーニは少女の手を取るとどこかに連れて行った。
そしてその数分後、ここに義勇擲弾兵師団黒シャツ偵察大隊Ｅ・ムーティの車両がやって来て倒れたボディーガードと運転手を発見、周囲の捜索を開始した。
ハインツ「シャーリー、ところでルッキーニどこだ？」
シャーリー「え？そこに座って…っていない!?」
ハインツはふとルッキーニの方を見るといなくなっていることに気がついた。
　ハインツに言われてシャーリーもルッキーニの方を見るといないことに気がついた。
宮藤「どこ行ったんでしょうか？」
ハインツ「宮藤知らねえか？」

宮藤「いえ、全く」
宮藤もルッキーニがいないことに気が付き3人はどこ行ったか話していると店のドアが開いて黒い軍服と黒い帽子を被りカルカノM1891ライフルを肩にかけた兵士と同じ格好をしてベレッタM38／42を持った下士官が入ってきた。
兵士「すいません、ここに青い服を着た赤毛の少女が来ませんでしたか?」(イタリア語)
店員「いえ、来てませんが」(イタリア語)
下士官「そうですか、ならもし来たらすぐに連絡してください。ここも駄目か」(イタリア語)
兵士と下士官は店員と会話すると出て行った。

ルッキーニが意図せず公女を連れ去ってしまいE・ムーティ偵察大隊の兵士たちが急いで周囲を捜索している頃ルッキーニとマリアは少し離れた公園で息を切らして座っていた。
マリア「あ…ありがとうございました。あの、貴方は?」
マリアはルッキーニに感謝を述べると名前を聞いた。
すると後ろから別の声が聞こえた。
ミラー「え?ルッキーニ?何でいるの?」
ルッキーニ「にゃ?ミラーとリーネ!」
振り返ると仲良くジェラートを食べながらデート中だったミラーとリーネがいた。
それにマリアは困惑する。
マリア「えっと…」
ルッキーニ「私の友達のミラーとリーネだよ。で私が通りすがりの正義の味方!フランチェスカ・ルッキーニ!」
マリア「私はマリアです」
ルッキーニがミラーとリーネを紹介して自己紹介するとマリアも

自己紹介した。
ふとミラーはマリアの名前と顔、そして服を見てすぐにマリアが只者ではないと理解した。
彼は新聞でマリア公女の顔を覚えており、そして何より着ていた服が明らかに超高級品であった。
またリーネも着ている服や靴が高級品だとすぐに見抜いた。
だがルッキーニは全く気が付いていなかった。
ルッキーニ「マリアか、よろしくね」
マリア「あ、あのよろしくお願いします」
ミラー「よろしく、ミスマリア」
リーネ「よろしくお願いします、マリアさん」
ルッキーニ「ねぇ、さっきの何？」
するとルッキーニがマリアに先ほどの揉みあいのことを聞いた。
それに事情をほとんど知らないミラーが反応した。
ミラー「さっきの？」
ルッキーニ「うん、さっきシャーリーたちのいた店の裏の通りでマリアと黒づくめの怖ーい顔した二人と揉み合いになってたの。
そこを助けてあげたんだ」
ミラー「へ、へぇ…（リーネ、黒づくめの二人ってボディーガードのような気がするんだ）」
リーネ「（同感です…）」
ルッキーニが事情を説明すると何となく状況を察したミラーとリーネはルッキーニが大変なことをやらかしたことに気が付いた。
場合によっては誘拐とされてもおかしくないことだった。
それに気が付いた二人は小声で話し合いを始めた。
ミラー「（どうする？誘拐ってされたら公女誘拐だから最悪絞首刑…）」
リーネ「（ひっ…そ、そうだ、本人の意思でついて行ったなら誘拐じゃないですよね？）」
ミラー「（そうだった）」
リーネは誘拐はあくまで本人の意思に反して連れ去られる行為で

あって本人の意思ならば誘拐ではないことに気が付いた。
これであくまで「本人の意思」でルッキーニに付いて行ったと言えばルッキーニは誘拐ではなくなるのだ。
ルッキーニ「リーネたち、何やってるの？」
ミラー「なんでもないよルッキーニ」
ルッキーニは内緒話をする二人に話しかけるがミラーが適当に誤魔化した。
ルッキーニ「マリア、さっきのは何だったの？」
マリア「あの…えっと…」
ルッキーニ「あ、分かった！あいつらマフィアだ！
だよね！だよね！」
マリア「あ、えっと、そのようなものです」
マリアはルッキーニの追及を適当に誤魔化した。
ルッキーニは知らなかったがハドリアヌス作戦後の治安維持作戦によりローマ市内の犯罪勢力の構図、何より規模そのものが大幅に縮小、もはや風前の灯火となっていた。
特にマフィアはどの組織も壊滅状態、それどころかマフィアにいる方が危険だと構成員の離脱に歯止めがかからない状態になっていた。
ルッキーニ「やっぱり！裏通りは結構物騒だから気をつけないとダメだよ！」
マリア「あ…フフッ、はい分かりました。」
ルッキーニの注意に答えると二人は笑い始めた。
一通り笑うと二人はそばの噴水に腰かけた。
その隣にミラーとリーネも腰かける。
ルッキーニ「あのさ、買い物だったら一緒に行くよ」
マリア「いえ買い物ではないのです」
マリアにルッキーニが聞くと買い物ではなかった。
ルッキーニ「ん？じゃあ何してたの？」
マリア「えっと…」
ミラー「もしかして家出？」
言葉を濁すマリアにミラーが聞いた。

マリア「そんなところです。
　でも、実はほとんど家から出たことがなくてローマをよく知らないんです。」
ルッキーニ「ふーん」
マリア「生まれた街なのによく知らないなんて変ですよね。」
マリアの言葉に正体に勘づいていたミラーとリーネはある意味当たり前だよなと思っていた。
王家に生まれると極めて不自由である。
この世界ではまだマシとはいえ史実では更に不自由であった。
ただでさえ立憲君主制となり実権を失い、第一次世界大戦後には多くの王家が崩壊していた。
特に悲惨と言えたのがハプスブルク家、殆どの財産をオーストリア政府に没収され大西洋の孤島に幽閉され貧困の中カール1世は死去するなど悲惨だった。
するとルッキーニがマリアに自信満々に言った。
ルッキーニ「ニヒーッ、このルッキーニ様にお任せあれ！」
マリア「え？」
ルッキーニ「さ、行くよ」
ルッキーニはマリアに手を差し伸べる。
差し出されたマリアはルッキーニの手を取った。
するとミラーが割り込んだ。
ミラー「こらこら、君達二人だけじゃ不安だから僕達もついてくよ。
　別に良いでしょ？」
リーネ「え？ええ、いいですよミラーさん」
そして二人もルッキーニ達に付いて行く。
ミラー「マリアさん、ちょっといいかな？」
マリア「は、はい」
ミラーはマリアに声をかけると耳打ちした。
ミラー「もしかして君、マリア公女だよね？」
マリア「え！なんで！」
ミラーがマリアの正体を言うとマリアは驚いた。

ミラー「しっ、誰にも言わないからさ、公女のお忍びを邪魔する気はないから安心して」
マリア「そ、そうですか」
ミラーはマリアのお忍び旅を邪魔する気はなかった。

「公女誘拐事件発生、全部隊は緊急配置、ローマを封鎖、危険人物を全て摘発せよ」
ローマ都市司令部から市内の全部隊に出された命令、この命令によりローマ市内の全部隊、即ち憲兵司令部「ローマ」、ローマを管轄するカラビニエリ、第８ベルサリエリ旅団、第３竜騎兵連隊サヴォア、義勇擲弾兵師団黒シャツ、警察装甲擲弾兵師団フォン・ゴットベルクの一個戦闘団などが緊急出動、ローマ市内から外に出るすべての道路、鉄道、航空機などが止められ全員の検査を行った。
同時に全部隊でもって市内各所の敵の拠点への攻撃が開始された。
ローマ市内のある通りではマフィアの拠点を攻撃するためカラビニエリとサヴォア連隊の騎兵、そして数台の軽戦車が動員されていた。
兵士たちが近づくとマフィアは裏通りや屋根伝いに逃げようとしたり戦おうとする。
そして一人のマフィアがライフルを発砲すると一斉に銃撃を開始し、騎兵はサーベルを抜いて突撃を開始した。
騎兵「突撃！突撃！」
カラビニエリ「一人残らず捕まえろ！」
兵士「サヴォイア万歳！」
騎兵は突撃すると裏通りなどを逃げるマフィアに襲いかかり次々とサーベルで斬り捨てる。
追われたマフィアは兵士に捕まった者もいれば建物に立てこもった者、車に乗って逃げようとするのもいた。
だが建物に立てこもった者は戦車の機銃掃射と砲撃によって建物ごと吹き飛ばされたり兵士たちが突入して手榴弾の餌食になり、運の

いいものは投降してヒマシ油を大量に飲まされたりする拷問を受けた後仲間の元に旅立った。
車で逃げたものはその全てが機銃掃射、運のいいものは通常の機関銃だが大半はＬ６やサハリアーナ、ＡＢ４１などの装甲車に積まれたブレダ２０ミリ、酷いものではランチア３Ｒｏに積まれた９０ミリ高射砲や１００ミリ山砲、サハリアーナやＭ１３などの４７ミリ砲、セモヴェンテの７５ミリ砲などの大砲に跡形もなく吹き飛ばされた。

４人は〝公女誘拐事件〟が起きたことも知らずローマ観光に洒落こんでいた。
ルッキーニ「おっきいでしょー！」
マリア「素晴らしい！」
コロッセオを見てマリアは感動していた。
その横でミラーとリーネも見て回っていた。
ミラー「コロッセオ、写真で見るより大きいな」
リーネ「ですね」
ミラー「それにしても兵士が多いな…何かあったのかな？」
ふとミラーは周りにパトロールの兵士が多いことに気が付いた。
周りを見渡すとカラビニエリだけでなくロマーニャ軍兵士、カールスラント軍兵士、黒い軍服を着た兵士などがパトロールし傍の大通りでは軍のトラックや戦車、装甲車が走り回り兵士たちが軍歌を歌いながら行進していた。
４人はこのことを気にせずローマ観光を続けた。

その頃ハインツ達はルッキーニを捜してローマ市内をトラックで走り回っていた。
ハインツ「全然見つからねえな」
シャーリー「だな」
宮藤「ですね…それにしてもなんか兵士が多くないですか？」
ハインツ「確かに、さっきまでこんなにいなかったぞ」
突然兵士が増えたことに疑問を持ちながらある通りの角を曲がる

と2台のセモヴェンテｄａ47／32と3台のL3／35、それにＤａ90／53高射砲とブレダ20ミリ機関砲（Ｄａ20／65）を装備したロマーニャ軍部隊に出くわした。
兵士Ａ「おい！この先は今は通行禁止だ！戻れ！」
ハインツ「通行禁止？なんかあるのか？」
兵士Ａ「この先で一斉摘発が…」
次の瞬間銃声が響き全員伏せた。
その音を聞いて兵士たちが武器を取ると撃ち返した。
兵士Ａ「分かったろ！この先は危険だから戻れ！」
ハインツ「あいよ、シャーリー急いでバックだ！」
シャーリー「了解！」
ハインツはすぐにシャーリーにバックを命じるとバックして安全なところまで戻った。

マルセイユ「シャイセ！まだ公女は見つからんのか！」
副官「は、はい…
手がかりがない上に捕まえたどのマフィアもコミュニストもアナーキストも自分たちがやっていないと…」
ローマ都市司令部ではマルセイユが公女が誘拐された手がかりが見つからないことにイライラしていた。
マルセイユ「どんな手を使っても構わん、絶対に自白させろ。」
副官「は！」
マルセイユはなんとしても自白を出して公女を取り返すつもりだった。
そのためあらゆる拷問がマフィアと共産主義者、無政府主義者などに使われた。
その残虐な手段はこの日捕まった者たち約560人はその9割が1週間後までに死亡または処刑された。

第14話：ローマ

ルッキーニたちはルッキーニのせいでローマ市内で掃討戦が開始されたことも知らずに王宮クイリナーレ宮殿の西にあるトレヴィの泉に来ていた。

ルッキーニはコインを持ってマリアに説明していた。

ルッキーニ「こうやって後ろ向きでコインを投げるとまたローマに来られるんだって」

ルッキーニは説明しながらコインを泉に投げ入れた。

これはトレヴィの泉の有名な話である。

ちなみに一枚ならばまたローマに来れる、2枚なら大切な人と永遠に一緒にいることができ、3枚なら恋人や妻・夫と別れられると言われている。

説明を受けたマリアは見よう見まねで投げ入れる。

マリア「こうですか?うぁあー!」

「うぁー!」

マリアは投げ入れようとするとバランスを崩してルッキーニ共々泉に落ちてしまった。

ミラー「あー、何やってんだろうね二人とも。

リーネ、2枚入れようか」

リーネ「何で二枚なんですか?」

それを見ながら横でミラーは笑いながらリーネに2枚の1ライヒスペニヒ硬貨を渡す。

リーネはなぜ二枚なのか聞いた。

ミラー「言い伝えだよ。一枚ならまたローマに来られる、二枚なら大切な人と永遠に一緒にいることができるんだ。

三枚なら、まああんまり縁起はよくないね」

リーネ「そうなんですか、じゃあ一緒にいれましょう!せーの!」

リーネはミラーの説明を聞くと二人で一緒に泉にコインを投げ入れた。

そして4つの水の音がした。

ミラー「入ったみたいだね」
リーネ「ですね。これで永遠に一緒ですね」
ミラー「だね」
するとリーネのお腹が鳴った。
リーネは赤面した。
リーネ「すいません…」
ミラー「ううん、そろそろお昼時だね。
　ルッキーニ！マリア！そろそろ行くよ！」
ルッキーニ「はーい！」
マリア「分かりました」
二人は泉から上がるとミラーとリーネからハンカチを受け取り体を拭きながら近くに止めてあったミラーたちのトポリーノに乗った。
その後ろで二人のロマーニャ陸軍Ｍ４０軍服を着て拳銃とカルカノＭ１８９１／３８ライフルを持った兵士が何かに気が付いた。
将校「ん？」
兵士「どうかしましたか？」
将校「あのトポリーノに乗っている赤毛の奴、公女に似てないか？」
将校はトポリーノに乗って体を拭いている赤毛の少女を指さす。
兵士「確かに」
将校「とりあえず司令部に連絡だ」
将校と兵士はすぐに近くの公衆電話を取ると司令部に電話連絡した。

一行はトポリーノでスペイン広場に移動するとジェラートを買っていた。
リーネ「ん～美味しいです」
ミラー「ボーノ、美味いよ」
店主「そりゃよかった、本当なら二人で１０リラだが嬢ちゃんたちは特別に5リラにまけといてやる」
ミラー「えっと、生憎１０リラしかないんだ。
　釣りはいいよ」

店主がまけるというがミラーはそれにわざと１０リラを出して答えた。
店主「あいよ、あんたらの連れの分は３０リラだ。」
ミラー「３０リラね。
　マリア、ジェラートごちそうするのはいいけど少しは考えてください」
マリア「はい、どうぞ」
子供「うわあ、ありがとう」
その横ではマリアが子供たちにジェラートをごちそうしていた。
その後一行はマリアとルッキーニに振り回されウィンドウショッピング（ついでに二人でワインと紅茶も買った）やレストランで食事したりした後子供たちと別れた。
ミラー「あーあ…先月の給料が…」
リーネ「ミラーさん…大丈夫です、まだ私のがありますから…」
二人に振り回されミラーは手持ちの現金を全て使い果たし落ち込んでいた。
その一行の後ろを一台のベルサリエリのフィアット６６５ＮＭプロテクトが通り過ぎたが気が付かなかった。

――――――――――

その頃、ハインツ達は
ハインツ「で、ルッキーニどこ行ったんだろうな?」
シャーリー「あーもう全然見つかんねー」
宮藤「いろんな人に聞いてみたけどさっぱりでもうへとへとです。」
散々探し回ったハインツたちははとうとう諦めてカフェでエスプレッソとケーキを食べていた。
シャーリーはやる気を失ったのかハインツの隣の席で脱力していた。
その横でハインツはエスプレッソを飲みながら宮藤と同じケーキを食べていた。
ハインツ「まあそのうち見つかるだろ、鳩だってちゃんと家に帰っ

てくるぞ。
　とりあえずケーキ食って、エスプレッソ飲んで気分転換しようぜ」
宮藤「ですね。」
宮藤はハインツの言葉に同意するとケーキを食べる。
宮藤「シャーリーさん！これすっごく美味しいですよ！」
ハインツ「ん！うめぇ！シャーリーも一口食えよ」
シャーリー「お前らなぁ…」
二人はケーキを一口食べるとそのおいしさに驚いていた。
能天気な二人にシャーリーは呆れる。
ハインツ「そんなこと言うなよ、一口やるからさ。
　はい」
シャーリー「ん。ん！
　すっげー美味いなこれ！」
ハインツに食べさせられたケーキの美味しさにシャーリーが驚く。
そして次の瞬間、ハインツに食べさせられたことに気が付いて顔が真っ赤になる。
シャーリー「え？今、ハインツにアーンされた？え？」
ハインツ「どうした？」
宮藤「どうかしましたか？」
二人はシャーリーを気に掛けるがシャーリーは恥ずかしがった。
シャーリー「と、とりあえず、もう一口…」
ハインツ「ん？気に入ったらもう一つ頼むぞ。すいませーん！」
シャーリー「そ、そういのじゃないんだけどハインツ」
ハインツは店員に注文を頼もうとするがシャーリーはハインツの服の裾を掴んで止める。
ハインツ「え？じゃあなんだよ」
シャーリー「えっと、その、ハ、ハインツに、アーンされるのが…」
シャーリーは顔を真っ赤にしてしどろもどろになりながらハインツに言う。
それを聞いたハインツは座るとめんどくさそうな表情をする。

ハインツ「そういう奴ね…メンドクセー！」
宮藤「ハインツさん、乙女心は複雑なんですよ」
ハインツの本音に宮藤は呆れる。
ハインツ「いやそんなこと言ったって面倒なもんは面倒じゃん」
シャーリー「ハインツ…後一口、一口くれたらいいからさ、お願い」
ハインツ「しょーがないなー。はい、口開けろ、ったくめんどくせえな」
シャーリーの必死のお願いにハインツは面倒臭がりながらもう一口シャーリーにあげた。
ハインツ達がこのやり取りをしている横ではミラーたちが通り過ぎていたが互いに全く気が付かなかった。
ハインツ「はぁ、これで満足か？」
シャーリー「は、はい。」
シャーリーにアーンし終わるとハインツはめんどくさそうにシャーリーに聞くとすっかり冷めたエスプレッソを飲む。
すると周りが騒然とし始めハインツ達から見て広場の方の右の奥の方から蜘蛛の子を散らすように市民が逃げ始めた。
ハインツ「なんだ？」
シャーリー「なんだろ」
すると数人の民間人がカラビニエリに追われながら走ってきた。
数人のカラビニエリが持っていた拳銃やライフルで発砲する。
すぐにハインツ達は椅子やテーブルの後ろに隠れるが追われていた一人が足を撃たれて倒れる。
宮藤「大変！助けないと！」
ハインツ「バカ！」
それを見た宮藤は助けようとするがハインツが止める。
撃たれた民間人はカラビニエリに捕まり連行される。
その間に別の追われていた人がハインツ達の方にやってきた。
民間人「おい！あんたら助けてくれ！軍人だろ！」
ハインツ「いや、助けろって言われてもだねぇ」
宮藤「ハインツさん！困ってるんだから助けないと！」

追われていた男はハインツ達に助けを求めるがハインツは渋る、一方宮藤は助けようと言う。
ハインツ「何言ってんだよ！こいつカラビニエリに追われてるんだぞ！
　犯罪者を庇うなんて真っ平御免だ！」
民間人「俺は犯罪者なんかじゃ…」
カラビニエリ「おい！こっちに来い！」
宮藤とハインツが言い合っていると男は追いかけてきたカラビニエリに首根っこを掴まれ連れていかれた。
シャーリー「なんだったんだ？」
ハインツ「さあ？ほっとけ、カラビニエリが追っかけてたんだったらなんかやらかしたに決まってる」
宮藤「でも…」
宮藤とシャーリーは捕まった人を心配するがハインツはどこ吹く風だった。
ハインツ「宮藤、面倒なことに巻き込まれるのは御免だぞ。
　正義感だけじゃ生きていけない、それがこの世だ。
　まあ本当にあれが犯罪と関係ないかは俺たちの与り知らぬとこだがな」
ハインツにとっては彼らの運命やそもそも犯罪者か否かなど些細なことだった。
この時捕まったものは確かに犯罪者だった。
だがそれはハインツには理解できるが彼らには理解できないいわゆる「共産主義者」と「無政府主義者」だった。

それから少しして、ミラーたちはローマ中心部の史実ではカトリックの聖地たるサン・ピエトロ修道院にいた。
ミラー「リーネ、実は一生に一度はここに来たかったんだよね」
リーネ「そうなんですか？」
ミラーは展望台からローマ市街を眺めながらリーネに言った。
ミラー「うん、ここで行われる法王隣席のミサに一度は参加するこ

とは恐らく世界中のカトリック教徒の夢の一つだと思うよ。
　本当はここで礼拝したいけどこの世界にはカトリックどころかキリスト教自体ないからね。」
リーネ「そういえばそうでしたね。」
ミラーはカトリック教徒であった、だからこそサン・ピエトロ修道院は極めて重要だった。
この修道院はカトリックの総本山であり歴代の法王が地下に埋葬され、この修道院自体が一つの国、バチカン市国を構成していた。
そして何よりここはカトリック教会という世界最大級の宗教の聖地であった。
そのためミラーやノヴァクなどのカトリックには特別な場所だった。
するとミラーは後ろから来た兵士たちに注意を移す。
ミラー「なんだろ?」
リーネ「何かあったんでしょうか?」
ミラー「さあ。そろそろ降りようか、ここは一週間いても回りきれないからさ」
二人はルッキーニとマリアを置いて下に降りていった。
ミラーたちがローマ市街を眺めていた反対側ではルッキーニとマリアが市街を眺めていた。
ルッキーニ「どう?マリア。
　ここから見る景色が私は一番好きなんだ!」
マリア「美しい…
　私、家に帰らないでずっとここにいたいです。」
ルッキーニは一番好きな景色をマリアに見せていた。
その素晴らしさにマリアは感動する。
ルッキーニ「だったらいればいいじゃない。」
ルッキーニとマリアは楽しそうに会話していた。
だがその背後に彼女たちを狙う別のグループが近づいていた。
将校「いたぞ」
それは黒シャツ師団の兵士だった。

彼らはトレヴィの泉でのパトロール中の部隊が公女らしき人物を発見、その情報は市内にいた全部隊に伝えられた。
そしてサン・ピエトロ修道院の展望台を双眼鏡で確認したところ偶然公女を発見したのだ。
そこで彼らは急いで気づかれないように接近、後ろからカルカノＭ１８９１、ブレダＭ３０、ベレッタＭ３８などを装備した歩兵たちが近づいて行き二人から見えない展望台の反対側で二手に分かれてマリアを確保しようと待機していた。
そして将校がベレッタＭ１９３４を取り出すと手振りで兵士たちは突進する。
将校「動くな！」
兵士たちがルッキーニたちに銃を向ける。
驚いたルッキーニはマリアを呼ぶ。
ルッキーニ「マリア！」
マリア「キャ！」
兵士「公女確保！」
振り向くと別の方向から近づいていたＭ３８とＭ１８９１を持った兵士に腕を掴まれて兵士たちの後ろに引き込まれていた。
将校「やったか！
じゃあ…」
公女が確保されたことを確認した将校は拳銃をルッキーニに向け狙いを定める。
周りのほかの兵士も銃を構えた。
マリア「待ってください！彼女は何も悪くありません！」
将校「公女は黙っててください！」
するとマリアが抗議の声を上げ兵士たちを叩く。
それに強く出れない兵士たちはいらいらする。
将校「ああクソ！おい！公女を連れてけ！」
マリア「待ってください！放して！」
兵士と将校の注意が一瞬マリアの方に逸れた、その瞬間ルッキーニは展望台から飛び出して屋根を滑り降りた。

将校「しまった！撃て！」
マリア「やめてください！」
それに気が付いた将校はすぐに拳銃で発砲、後ろにいた兵士たちも次々と発泡しＭ３０を持っていた兵士が展望台の欄干にＭ３０を据え付けて銃撃し手榴弾を投げる。
マリアは無理矢理掴んでいた兵士を振りほどくと将校の右側で発砲していた軽機関銃手の機関銃を奪い取ろうとする。
マリア「やめてください！撃たないでください！」
将校「小癪な！この小娘が！そいつを連れていけ！」
そのまま兵士たちとマリアはもみ合いになった。
ルッキーニ「マリア！」
マリア「ルッキーニさん！早く逃げてください！」
将校「逃げるぞ！今すぐあいつをぶっ殺せ！」
将校は拳銃を乱射しながら兵士達に命令する。
ルッキーニはそれを器用に躱したりシールドを張って弾を止めて地面まで降りた。
将校「クソ！ウィッチだ！誘拐犯はウィッチだ！今すぐ応援を呼べ！
お前らは今すぐ下に降りろ！」
将校はルッキーニがウィッチだと気がつくがルッキーニは先に下に降りてしまった。
将校は兵士達に下に降りるよう命じ増援を要請した。
だが次の瞬間、サイレンが鳴り響いた。
将校「クソ！なんでこんな時にネウロイが！」
ルッキーニ「ネウロイだ！」

第15話：ローマは一日にして

マルセイユ「はあ?ネウロイが侵入?空軍部隊は何をやっていた!
チャンピーノの連中は一日中の女のケツでも追っかけてたのか!」
空軍将校『閣下、その、敵ネウロイはレーダーの電波が届きにくいところを通っていまして…
それにフィレンツェのレーダー基地は今日、定期メンテナンスでしたので発見が遅れました』
ネウロイがローマに侵入した、その連絡を受けてマルセイユは近隣の空港であるチャンピーノ空港の空軍将校に当たり散らしていた。
ネウロイがここまで侵入できたのはまずルート上真下にあったフィレンツェ郊外のロマーニャ空軍レーダー基地が定期メンテナンスのため使用不能、さらにローマのレーダー基地とチャンピーノのレーダーでは捉えにくいルートを飛行したため捕捉が遅れたのだ。
マルセイユ「言い訳はどうでもいい!今すぐ何でもいいから上げろ!
ウィッチでも戦闘機でも何でもいい!
もしローマの街に傷が一つでもつけばお前らの責任だ!」
マルセイユは空軍将校に当たり散らすと電話を叩きつけた。
マルセイユ「高射砲部隊は!」
副官「は!既に攻撃しています」
マルセイユ「何としても撃ち落とせ!」
マルセイユは副官に高射砲部隊の情報を聞くと強い口調で命令した。

ハインツ「シャイセ!空軍は何やってるんだ!
シャーリー!どこでもいい広いところに向かってくれ!
いくら飛ばしても構わん!」
サイレンが鳴り響く中ハインツは悪態をつきながらシャーリーに

離陸のために広い場所に向かうよう指示する。
シャーリー「了解！」
返事をするとシャーリーは全速力でローマの通りを突進しサン・ピエトロ大聖堂のサン・ピエトロ広場に入った。
ハインツ「おい！ルッキーニがいたぞ！ってなんか陸軍部隊に撃たれてるぞ！」
シャーリー「え!?」
ハインツは広場に入ると大聖堂の屋根を逃げるルッキーニを見つけるがルッキーニは展望台から銃撃を受けていた。
だがすぐに兵士たちは銃撃をやめ赤毛の少女を連れて大聖堂の中に入った。
彼らは公女を守るためルッキーニへの銃撃をやめマリアを無理矢理大聖堂の中に入れたのだ。
ハインツ「いったい何が起きてるんだ?」
シャーリー「ルッキーニ！こっちだ！」
ルッキーニ「シャーリー！」
シャーリーは逃げるルッキーニ呼びかける。
するとルッキーニは屋根から飛び降りて宮藤がカバーを外した発進台に固定されたユニットを履くと離陸した。
ハインツ「先に行っちまったぞ！追いかけるぞ！」
シャーリー「おう！」
宮藤「了解！」
置いて行かれたハインツ達も急いでユニットを履くと離陸して先に向かったルッキーニを追いかけた。

地上ではローマを守る高射砲部隊が動いていた。
高射砲兵「目標、方位１９５、高度約６７００ｍ、時速４５０キロで南下中！」
指揮官「射撃用意！弾種対空弾！信管は高度６８００と６６００にセット！」

ネウロイが近づくと指揮官は砲兵部隊に命令する。
指揮官「撃て！」
指揮官の命令と同時に高射砲部隊のＦｌａｋ１８／３６／３７／４１やＦｌａｋ４０、Ｄａ９０／５３、Ｄａ７５／３４、Ｄａ７５／５０などが発砲する。
高射砲の砲撃はネウロイの周りに黒い煙を生みネウロイに損害を与えるがさほど効いているとは思えなかった。
するとチャンピーノのレーダーが別の物体を捕らえた。
高射砲兵「え？なんだって！ローマ上空に別の飛行物体！
数４！サイズからしてウィッチです！」
指揮官「なんだと！この状況でか?!」

離陸したルッキーニたちだが先に離陸したルッキーニが先頭を飛んでいた。
ルッキーニ「ロマーニャは私が守る！」
ハインツ「バカ！先走るな！」
ルッキーニ「でも…」
ハインツ「分かってるよ、だが一人で突っ込むのは自殺行為だ」
先走ろうとするルッキーニをハインツが諫める。
ハインツ「ネウロイは１２時方向、高度６５００ｍ付近だ。
今高射砲が撃ってるあたりだ」
シャーリー「了解！連携攻撃だ！」
ハインツは魔導針を出してネウロイを確認する。
その方向は高射砲の煙で覆われていた。
そして煙が晴れると中からネウロイが現れウィッチたちを攻撃する。
ハインツ「さあ来い！１対４、これで対等だ！」
ハインツのＭＧ１５１／２０を筆頭にウィッチたちはネウロイの攻撃を躱しながら攻撃する。
さらにそこに高射砲部隊が誤射上等で対空砲弾をばら撒く。
彼らはマルセイユからウィッチを誤射しても構わないから絶対に

撃墜しろと命令されていた。
そしてルッキーニの銃撃が腹を掠めてコアを露出させた。
ルッキーニ「あれだ！シャーリー！コアが見えた！」
ハインツ「了解！下から殴り上げ…」
ハインツが指示しようとした瞬間、高射砲兵の高射砲弾がコアを直撃して撃破した。

戦闘が終わり、トラックのところに降りたウィッチだったがそこにいたのは
将校「これで終わりだ、クソガキが」
地上に降りたルッキーニたちを待っていたのは黒シャツ師団の兵士たちだった。
着陸したルッキーニたちを兵士たちが取り囲んだ。
ハインツ「ルッキーニ、何やった？」
ルッキーニ「マリアを返せ！」
将校「貴様今の状況を分かってるのかね？
貴様は公女を誘拐するという重罪を犯したのだ。
貴様にふさわしいのは処刑場で犯罪者として死ぬことだ」
シャーリー「え!?」
ハインツ「公女を…誘拐…？」
宮藤「それって…」
将校の公女を誘拐したという言葉にハインツ達は驚いた。
ルッキーニはそれに呆然としていた。
兵士たちがルッキーニたちを取り囲む後ろでは戦闘の間ユニットを持ってきていなかったため民間人どうよう避難していて戦闘が終わり外に出てきたミラーとリーネが野次馬に紛れていた。
ミラー「えっと…かなり不味いですよね…」
リーネ「ええ…」
マリア「通してください！お願いします！」
するとマリアの声がしたので振り向くと取り囲む兵士とマリアが揉めていた。

兵士「駄目です公女、公女は安全なところに戻ってください！」
マリア「いやです！通してください！
あっミラーさん！リーネさん！手伝ってください！」
するとマリアはミラーとリーネに気が付いて呼んだ。
呼ばれた二人はマリアの元に言った。
マリア「ミラーさん！リーネさん！手伝ってください！」
ミラー「手伝うって…そうだ！」
ミラーはマリアに手伝うよう言われ考える。
するとふと今自分がカールスラント空軍の少尉の軍服を着ていることに気が付いた。
ミラー「すいませんが、通してもらえますか？」
兵士「いやダメですよ…」
ミラー「私はカールスラント空軍の少尉です。
君の階級は？」
兵士「上等兵、ですけど」
ミラー「分かりました、では司令部に帰ってロマーニャ軍に抗議しますね。
〝貴国の将兵は休暇中の他国の少尉に対して横暴な態度を取った〟と」
兵士「それは…」
ミラー「どうしますか？公女と一緒に通しますか？
それとも抗議を受けますか？一応彼女もブリタニア空軍の曹長ですよ？
それと、貴国の軍人というのは国家元首の親族に対して無礼を働くのですかな？」
ミラーはしれっと兵士に脅しをかけた。
本来ミラーには何の権限もないが他国の軍人という地位を利用してブラフをかけた。
さらにマリアが「国家元首の親族」という立場であるという点を利用した。
ロマーニャは公国であり軍の総司令官は大公でもあった、さらにこ

ういった王族というのは多くの場合カーネル・イン・チーフ、名誉連隊長などで儀礼的な階級を持っていることもあった。
軍隊というのは元々王族の私兵であり彼らの入隊の際には国家と同時にこういった王族への忠誠も誓うのである。
兵士「わ、分かりました…」
ミラーの脅しに屈した兵士はミラーたちを通した。
ミラーたちはそのまま兵士たちをかき分けてルッキーニたちの元に向かった。
将校「さてと、貴様等全員を公女誘拐容疑で連行する。
連れていけ」
マリア「待ってください！」
将校はルッキーニたちと一緒にハインツ達も連れて行こうとするがそれをミラーたちと一緒に来たマリアが止める。
将校「公女、何を言っているのですか？
彼らはあなたを誘拐した重罪人です、ウィッチなど関係ありません。
全ての軍人、民間人は平等に法律が適応されるのがこの国ですよ。
それとも、中世の如く公女の恩赦で許すですか？あなたには今何の権限もないんですよ」
マリア「それは…」
マリアは止めようとするが将校の正論に黙ってしまう。
マリアには今、何の権限もない、それどころかそもそも王族には大した権限が与えられない上にその権利も実質的に形骸化しているのが立憲君主制である。
するとミラーが耳打ちした。
ミラー「（公女、そもそもあなた、誘拐されてませんよね？）」
マリア「えっ…」
マリアは突然のミラーのアドバイスに驚く。
ミラー「（ルッキーニに自らの意思でついて行ったんですよね？
自らの意思でついて行ったなら誘拐として犯罪が成立し

ないですよ。
　そう言えばいいんですよ）」
マリア「（分かりました。）
　ちょっと待ってください、私は誘拐なんかされてません」
将校「は？何をふざけたことを仰いますか、ハハハハハ」
マリアはミラーのアドバイスの通り言う。
だが将校は笑い飛ばす。
マリア「本当です。私は自分の意思でルッキーニさんたちについて行ったんです。
　信じてください」
ミラー「君、失礼ではないのですかな？公女殿下ですよ。
　公女殿下の話を笑い飛ばすとは無礼極まりないですな」
マリア「え？」
するとマリアの後ろにいたミラーが機転を利かせて発言する。
驚いたマリアは振り向く。
するとミラーは小声でマリアにアドバイスする。
ミラー「（いいから、僕の言う通り喋って。
　ええミラー少尉の言う通りです、カールスラント軍人の方が敬意を払ってくれます。
　我が国の軍人は王族を蔑ろにする輩しかいないのですか）」
マリア「（は、はい）
　ええ、ミラー少尉の言う通りです。
カールスラント軍人の方が敬意を払ってくれます。
我が国の軍人は王族を蔑ろにする輩しかいないのですか」
将校「そ、それは…」
マリアはミラーの言った通りに言葉を繰り返す。
その言葉に将校はたじろぐ。
ミラー「（これ以上彼女たちを拘束するつもりなら大叔父様を通して抗議します）」
マリア「これ以上彼女たちを拘束するつもりなら大叔父様を通して

抗議します」
将校「そ、それは困ります！」
ミラー「（なら今すぐ彼女たちを解放してくださいまし。
　これは命令ではなく要請ですが）」
マリア「なら今すぐ彼女たちを解放してくださいまし。
　これは命令ではなく要請ですが」
将校「わ、分かりました。お前ら、そいつらはほっておけ！
　公女、手荒な真似をして大変申し訳ございませんでした。
　行くぞ！」
マリアの言葉に将校も困りルッキーニたちを解放すると謝罪してから兵士たちを連れて行ってしまった。
兵士たちが去るとルッキーニたちはマリアの方を見た。
ルッキーニ「マリア？」
ハインツ「ミラー、もしかしてそのガキ…」
マリア「はぁあああ…怖かった…」
マリアは緊張が切れその場にぺたんと座り込んだ。
屈強な兵士に囲まれた状態では公女でさえ危険を感じるものだった。
ミラー「よく頑張りましたよ公女」
ミラーはマリアを褒める。
マリア「驚きました。まさかミラーさんがあんなこと言うとは…」
リーネ「ファインプレーでしたよ」
ミラー「いやいや、どうにかしようと思って言っただけだよ」
マリア「ミラーさんのアドバイスに感謝します。」
ミラー「公女殿下、身に余る光栄恐悦至極に存じます」
ミラーはマリアに感謝の言葉を述べられるともったいぶった態度で礼をする。
そこにハインツがマリアに声をかけた。
ハインツ「えっと、もしやロマーニャ公女マリアでございましょうか？」
マリア「ええ。そうですよ」

ハインツ「公女殿下！小官は第５０１統合戦闘航空団主席参謀ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐であります！
宮藤、シャーリー、お前らも早く！」
ハインツはマリアの正体を聞くとすぐに不動の体勢になり敬礼した。
さらにハインツはそれを見ていたシャーリーと宮藤にも敬礼を取らせた。
マリア「よろしくお願いします、ヴァレンシュタインさん」
ハインツ「公女殿下…失礼ながら小官らはそろそろお暇させてよろしいでございましょうか？」
マリア「え？ええ。構いませんよ」
ハインツ「失礼します。
じゃあそろそろ帰るぞ。
ルッキーニに金持たせなかったから買い物は終わったし帰るぞ！」
ハインツはそう言うとトラックに乗り込んだ。
シャーリー「ハハ、じゃあルッキーニ帰ろっか」
ルッキーニ「うん！マリア、またね！」
マリア「はい！」
ルッキーニはマリアに挨拶するとトラックに乗って基地に帰った。

カヴァッレーロ「しかし昼間の公女誘拐騒動、ただの公女の家でとは笑えるじゃないか」
アイケ「我々は笑いごとではなかったのですがね。」
カンピオーニ「あの騒動のせいで会議は途中でお開きになってしましたが」
バルボ「その代わりとして会食をするのだよ。」
その日の夜、昼間閲兵式に参加していたロマーニャとヴェネチアの軍上層部たちはローマ市内の高級ホテルの一室で夕食を食べていた。
同時にこの場は公女誘拐事件という緊急事態の結果中断した密談

の続きをする場だった。
カヴァッレーロ「それじゃあ話せなかったクーデターの具体的な時期だが、想定はヴェネチア解放後約2、3週間後。
それなりにインフラの復興が進み同時に残敵掃討のためにクーデター用の十分な戦力を用意できる時期がもっと望ましい。」
デ・ボーノ「そうなるといつまでにヴェネチアの巣を潰せばいい？」
カンピオーニ「天気の悪くなる冬までには」
アイケ「そうなると、最低10月か？」
カヴァッレーロ「いや、そこまで延びると露見する可能性も増える。できれば8月の終わりまでにかたをつけてほしい。できるか？」
彼らは夏の終わりまでにヴェネチアの巣を片付けたかった。
アイケ「8月末までか…できるな。
だがそれには、ヴェネチアの説得が必要だ」
カヴァッレーロ「説得？」
アイケ「君らはリベリオンで開発中の〝チューブアロイズ〟を知ってるかね？」
「チューブアロイズ？」
アイケ「ああ。
端的に言えば人類の生み出した神の火、一撃で一つの大都市をソドムとゴモラのようにできる究極の兵器だ。
それをあの巣に投下する」
アイケの策、それは人類史上最も恐ろしく危険で愚かで破滅的で破壊的な究極の兵器をヴェネチアに投下するという過激な策だった。
カヴァッレーロ「できるのかね？」
アイケ「開発中だが、投下部隊は7月の初めには実戦準備が完了する。
その時、ヴェネチアに投下する。
あのネウロイ共に神の火を落としてやるのだよ」
カンピオーニ「賛成だ。所詮ヴェネチアなどロマーニャに統合され

れば大した都市ではなくなる。
　一発の爆弾で１００万が救われるなら賛成だ」
カヴァッレーロ「私も賛成だ。」
その恐ろしい策にカヴァッレーロもカンピオーニも賛成した。
カヴァッレーロ「そうそう、言い忘れていたがこのクーデター計画の符牒はガリバルディだ。
　では諸君、ガリバルディ作戦とネウロイの殲滅を祈って、アッラ・サルーテ！」
カヴァッレーロは最後にクーデター計画の名前を伝えるとワイングラスを持って乾杯の合図を取った。
こうして悪魔の計画は始まった。

第16話：騒動の後始末／大人の宴

翌日ルッキーニはバケツを持たされて立たされていた。
ルッキーニ「えーん、ごめんなさぁい～」
坂本「しかし、公女誘拐騒動とはな…
　監督責任！」
ハインツ「分かってるよ、それで俺は来月から3か月減給3／4だ！」
ルッキーニの公女誘拐騒動で監督責任を問われたハインツは減給処分となっていた。
だがその後ろでシャーリーがジト目をしてハインツを見る。
シャーリー「ハインツ…そういうの担当するの自分だから手抜いてないか？」
ハインツ「…ノーコメントで」
俸給関連はハインツの管轄であったため本来なら1／2のところを書類を弄ってシャーリーとの連帯責任にして3／4にしていた。
そのせいでシャーリーもまた減給3／4になっていた。
ハインツ「じゃあそろそろ戻るか。
　ルッキーニ、反省しろよ。いいな」
シャーリー「すまーん、ルッキーニ」
ハインツとシャーリーはそう言うと坂本について屋内に戻っていった。

基地のブリーフィングルーム、そこでは購入した物品がそれぞれ渡されていた。
宮藤「はい、エイラさん」
エイラ「言ったものあったか？」
まず宮藤はエイラに注文した枕を渡す。
横のサーニャはエイラに言う。
サーニャ「欲しいもの見つかったの？よかった」
宮藤「サーニャちゃんにはこれ」

すると宮藤はサーニャに黒猫の置物を渡す。
サーニャに渡すと宮藤はエイラの注文のことを話した。
宮藤「もう、エイラさん注文が細かくって…」
エイラ「そ、そんなことないさ」
サーニャ「エイラ、人にお願いするときはちょっとは遠慮するものよ」
エイラ「うっ…」
エイラはサーニャに言われてぐうの音しか出なかった。
3人が話しているとサーニャの後ろに今度はニコが来た。
ニコ「二人とも欲しいもの見つかった?」
宮藤「ニコさんにはこれ、お菓子です。
　確かビスコッティ・サヴォイ何とかってお菓子です」
宮藤はニコにお菓子の入った大きめの箱を渡す。
ニコ「ありがとう、これビスコッティ・サヴォイアルディだね。
　みんなで食べよっか」
宮藤が買ってきたのはイタリアの伝統的なお菓子の一つビスコッティ・サヴォイアルディだった。
ニコは受け取った箱を開けるとみんなにお菓子を配り始めた。
サーニャ「あ、ありがとうございます」
ハルトマン「お菓子♪お菓子♪ありがとう!ニコ!」
ニコ「いいよいいよ、勝手に食べてよ。
　なんだったら僕の分もあげるよ」
配り終わるとハルトマンとサーニャはニコに礼を言う。
ニコは気にせずそれどころか自分の分まで差し出した。
バルクホルン「お、おい…」
ニコ「バルクホルンさんもいりますか?」
バルクホルン「私はいらん、ニコ、ハルトマンを甘やかすな!」
ニコ「別にいいじゃないですか、減るもんじゃないですし。」
バルクホルンはニコを止めようとするがニコは全くやめる気はなかった。
その間に宮藤はペリーヌに花の種を渡していた。

宮藤「ペリーヌさん、これ」
ペリーヌ「なんですの？これは…」
ペリーヌは頼んでいない花の種を疑問に思い宮藤に聞いた。
宮藤「お花の種。この基地の周りにお花を植えたらどうかなってリーネちゃんが」
ペリーヌ「リーネさんが？」
リーネ「うん、ペリーヌさんにお花の育て方を教えてもらおうと思って。」
リーネに言われるとペリーヌは照れた。
ペリーヌ「どうして私がそんなことを…」
宮藤「一緒に植えようよ」
リーネ「教えてください」
二人に言われるとペリーヌも折れ買ってきた花の説明を始めた。
ペリーヌ「仕方ありませんわね。
　まずマリーゴールドは日当たりの良い場所に、こっちのカモミールとベルガモットは夏は直射日光禁止ですわよ」
ペリーヌの説明が一通り終わると宮藤はバルクホルンとノヴァクに服を見せていた。
宮藤「バルクホルンさんこれどうですか？」
バルクホルン「あ、ああ、すごくいいな。」
ノヴァク「ありがとう、宮藤。
　クリスも喜ぶよ」
バルクホルンとノヴァクは買ってきた服に満足していた。
宮藤「ありがとうございます。それと、ノヴァクさんにこれ。」
すると宮藤はラッピングされた袋と数冊の本を渡した。
ノヴァク「ありがとう宮藤。」
バルクホルン「なんだそれは？」
ノヴァクが受け取るとバルクホルンが聞いた。
ノヴァク「なにって、プレゼント。
　はい、トゥルーデ」
バルクホルン「ありがとうアレックス」

ノヴァクはプレゼントを渡すとバルクホルンはノヴァクに抱き着いて感謝を述べる。
バルクホルン「中身、見てもいいかな？」
ノヴァク「いいよ」
バルクホルンは一言ノヴァクに断りを入れるとラッピングを開けて中から服を取り出した。
バルクホルン「これは…」
ノヴァク「ダメ、だったかな？」
バルクホルン「いや…アレックス、ありがとう」
バルクホルンはそう言うとノヴァクの頬にキスする。
軽くキスするとバルクホルンは一緒に受け取った本のことを聞いた。
バルクホルン「ところで、さっきの本は？」
ノヴァク「なに、いかがわしいものじゃないよ」
宮藤「宝飾店のカタログです。
　ノヴァクさん、プレゼントですか？」
ノヴァク「ま、まあそんなもんだ」
するとハインツとシャーリーが横からやってきて二人を弄り始めた。
ハインツ「もしかしたらプレゼントって言っても結婚指輪だったりして」
シャーリー「かもな～」
二人の言葉に何故かノヴァクとバルクホルンが固まった。
ノヴァク「(トゥルーデ、誰かに言った？)」
バルクホルン「(私が言うわけないだろ！)」
ノヴァク「(じゃあなんでバレた？)」
二人は小声で話し始めた。
ハインツ「おーい、二人ともどうした？」
バルクホルン「な、何でもないぞハインツ」
ハインツ「そうか？」
ハルトマン「そういえばトゥルーデ、最近夜中に『結婚するのか～』

とか『バルクホルンじゃなくノヴァクになるのか…寂しいな』、『あいつを支えるには家事ができないとダメだな』とか言ってるよね」
バルクホルン「ハルトマン！お前寝てたはずじゃないのか！」
バルクホルンが誤魔化そうとするとハルトマンが特大の爆弾を落とした。
バルクホルンはハルトマンに掴みかかり振り回す。
だが周りのウィッチたちはバルクホルンとノヴァクを見る。
ミーナ「トゥルーデ!?」
坂本「結婚するのかお前たち」
ハインツ「おいおい」
シャーリー「マジかよ…」
リーネ「結婚…」
ミラー「おめでとうございます」
ペリーヌ「おめでとうございますわ」
宮藤「おめでとうございます、バルクホルンさん、ノヴァクさん」
ヤン「お熱いねぇ」
サーニャ「おめでとうございます、大尉」
ニコ「おめでとうございます」
それぞれ祝いの言葉や驚きの言葉を述べる。
それに二人は顔を真っ赤にして俯くだけだった。
バルクホルン「…ハルトマン…貴様のせいだ…」
ノヴァク「ハルトマン…罪は重いぞ…」
バルクホルンとノヴァクは恐ろしい負のオーラを出してハルトマンを威圧する。
その瞬間ハルトマンは死を覚悟した。
次の瞬間、ハルトマンの顔面に二発のストレートが直撃、夢の世界へと旅立った。
ハルトマンを始末した二人にミーナが代表して聞いた。
ミーナ「トゥルーデ、本当に結婚するの？」
バルクホルン「ミーナ、えっと、そのだな、まあ簡単にだな、言うと…

結婚するつもりだ、戦争が終わるか私があがりを迎えたらな。」
バルクホルンは正直に答えた。
ミーナは微笑むとバルクホルンにハグした。
ミーナ「おめでとう、トゥルーデ。幸せにね」
バルクホルン「ミーナ…とはいっても結婚はまだ先だぞ。少なくとも来年の3月までは」
ミーナ「ふふ、そうだったわね」
バルクホルンとミーナが話していると突然ブリーフィングルームの電話が鳴った。
ミーナはバルクホルンから離れると電話を取った。
ミーナ「こちら501部隊、ミーナ・ヴィルケ中佐ですが」
『ヴィルケ中佐ですね、私はロマーニャ空軍参謀本部監察部首席監察官エットレ・ムーティ中佐です』
電話をかけてきたのはロマーニャ空軍参謀本部監察部首席監察官エットレ・ムーティ中佐だった。
ミーナ「ムーティ中佐、何の用でしょうか?」
ムーティ『先日のローマ市内での件について、バルボ大将より明日ヴィルケ中佐、坂本少佐、ヴァレンシュタイン少佐は空軍参謀本部に出頭せよとのことです。』
ミーナ「え?」
ムーティ『では失礼します』
そう言うとムーティは電話を切った。
電話を切られたミーナは隣にいたハインツに話しかけた。
ミーナ「ねえハインツさん、お酒って買ってきたかしら?」
ハインツ「酒?結構買ってきたが」
ミーナ「なんでもいいから一本頂戴、できれば強いのを」
ハインツ「分かった、はいウィスキー」
ミーナが酒を求めるとハインツは足元に置いていたケースからアイリッシュウィスキーの瓶を取り出してミーナに渡す。
するとミーナは手で無理矢理ウィスキーの栓を引っこ抜きそのま

まウィスキーを丸々一本ラッパ飲みし飲み終わった瓶を思いっきりテーブルに叩きつけて割った。
ハインツ「ミ、ミーナ?まだ昼間だぞ…」
ミーナ「昼間から飲まないとやってられないじゃない!
明日バルボ大将にローマに呼ばれたのよ!」
ハインツが心配そうに声をかけるとミーナはハインツに当たり散らした。
ハインツ「あっそ、がんば…」
ミーナ「あなたと美緒も呼ばれてるのよ」
坂本「何だって!」
ハインツ「めんどくせぇ…」
二人も呼ばれていることに坂本は驚きハインツは面倒くさがった。

翌日、ミーナ、坂本、ハインツはローマのロマーニャ空軍参謀本部に来ていた。
早朝から輸送機でローマに向かった一行はチャンピーノ空港に着陸、そこでロマーニャ空軍から回されたアルファロメオ６Ｃ２５００コロニアーレスタッフカーに乗せられ空軍省に連れてこられた。
一行は空軍省の一室に案内されそこで待機していたがミーナは溜息をつき、坂本はミーナの横で腕を組み、ハインツは二人の前をタバコを吸いながら行ったり来たりしていた。
ハインツ「畜生、いつになったら呼ばれるんだ…」
ミーナ「どうなるのかしら…」
ハインツ「この騒動だ、最悪ミーナか坂本か俺の首が飛ぶだけで済めばいいが」
二人はどうなるか話しているとドアがノックされ一人のロマーニャ空軍将校が入ってきた。
将校「ヴィルケ中佐、坂本少佐、ヴァレンシュタイン少佐、バルボ大将がお呼びです」
ミーナ「分かりました。」
一行は空軍将校に案内されバルボのオフィスの前まで案内される

と将校はドアをノックした。
将校「バルボ大将、ヴィルケ中佐、坂本少佐、ヴァレンシュタイン少佐をお連れしました」
バルボ「分かった、通してくれ」
中から声がすると将校はドアを開けミーナたちを部屋に入れた。
部屋の中には髭を生やしたバルボ、そしてマルセイユ、アイケがいた。
部屋に入るとミーナたちはバルボ達に敬礼する。
バルボ「おお、よく来た。それじゃあ早速だが例の件についてだ」
バルボは早速公女誘拐騒動について話し始めた。
バルボ「一応本来ならば君ら501の幹部は全員処分ということになるのだが今回は公女からの依頼と我々にも恩を売ってくれたお陰で形式的には全員3か月減給1／2で連合軍司令部は手を打ったよ。
まああくまでこれは形式的な処分でこちらからその減給分は給付しよう」
その寛大な処分に全員が驚いた。
それは実質御咎めなし同然だった。
ミーナ「閣下、それはどういう意味でしょうか?」
バルボ「さっきも言ったじゃないか、我々に恩を売ってくれたからだ」
ミーナが事情を聞くがその事情が全く理解不能だった。
彼らには恩を売ったという意識は一ミリもなかった。
ハインツ「恩を売ったという意識はないのですが…」
マルセイユ「そりゃそうだろうね、君らの騒動で結果的に、って形だがな」
坂本「それはどういう意味ですか?」
マルセイユの発言を坂本が聞いた。
マルセイユ「簡単だ、公女誘拐騒動にかこつけてローマ市内での活動のフリーハンドを取り戻して連中を駆除出来てローマ市内の安全を格段の物にしたんだ。
それ以上あるか?」

坂本「連中を駆除?」
坂本はマルセイユの連中を駆除という部分が気になった。
するとアイケが答えた。
アイケ「ふん、所詮はイエローモンキーだ。
君らは欧州の情勢を全く知らないのかね?」
そう言うとアイケはテーブルの上に置かれたラジオを弄った。
するとラジオから歌が流れてきた。
『И под звёздами Балканскими Вспоминаем неспроста~♪』
流れてきたのはオラーシャ語の歌だった。
だがこの意味が全く理解できなかった。
坂本「これはどういう意味でしょうか?」
アイケ「貴様ら、まだ分からんのか!
スラブの劣等人種の共産主義者共はもうすぐそこ、庭先にまで来ているのだぞ!」
坂本が聞くとアイケが叫んだ。このラジオはベオグラード・オラーシャ軍放送から流されていた。
それに驚くウィッチたちを無視して続ける。
アイケ「あの劣等人種共はもうバルカンにまで来ているのだ!
これを見ろ!連中はビャウィストク、カウナス、ジーベンビュルゲンにまで迫っているのだ!」
さらにアイケは「ビャウィストク解放」、「カウナス制圧」、「オラーシャ軍、トランシルバニア地方に侵入」と書かれた新聞をテーブルに叩きつける。
ミーナ「えっと、それはどういうことですか?順調に解放が進んでるということでは…」
アイケ「お前らは共産主義者か!どういうことかって?簡単だ!このままでは連中はトリエステからシュテッツィンより東側の全ユーラシアが赤く染めあげられるのだぞ!
連中は我々に親しげに近づき寝首を掻く連中だ!貴様らはヨーロッパを赤く染めあげられてもいいのか!

我らの清浄なるアーリアの地に我々より早くスラブの劣等人種が足を踏み入れてもいいのか！」

アイケの気迫にミーナたちは委縮するが言っていることは彼女たちには理解不能だった。

唯一ハインツは理解した。

ハインツ「なるほど、閣下の言う通りヨーロッパが赤く染めあげられるのはいけませんな」

アイケ「ほう、少しは話が分かる奴がいたとはな」

アイケはハインツの話に感嘆する。

ハインツ「ありがとうございます。

アカ共から欧州を守るためにはまず腹の中にいるアカを駆除せねばならん、そういう意味ですか？」

アイケ「その通りだ。だがこの国の連中、いやこの世界の連中は誰一人として話が通じん。

共産主義の脅威というのを。

やっと理解してくれたか、そこの話の通じんガキよりかは話になるな」

ハインツ「ありがとうございます」

バルボ「まあこれでいいだろう、一応話は済んだ。

基地に帰り給え」

坂本「待ってください！駆除ってどういうことですか？

我々の敵は人類ではなくネウロイではないのですか！」

バルボはミーナたちを帰らせようとするが坂本もミーナもまだ納得していなかった。

ハインツ「分かりました、失礼します。行くぞ」

坂本「ま、待てハインツ！」

ハインツはミーナと坂本を掴んで部屋から無理やり出て行った。

廊下に出ると坂本とミーナはハインツに詰め寄った。

坂本「ハインツ！なんで止めた！

我々の敵はネウロイだ！共産何とかではない！」

ミーナ「ええ、美緒の言う通りよ。

人類同士で戦うなんて」
ハインツ「はあ?お前ら本気で言ってるのか?
相手はコミュニストだぞ!」
ハインツには逆になぜ共産主義に対して警戒心を抱かないかというのが謎だった。
坂本「それがどうしたって言うんだ、ハインツ。
ネウロイでないなら戦う必要など…」
ハインツ「分かってないのか?連中は無実の罪の人間を数百万人殺す連中だぞ。
政権を獲得するためにあらゆる手を辞さない厚顔無恥のクソ共だぞ。
そんな連中がもし動いてみろ、人類は後方から崩壊するんだぞ、そうなってもいいのか?」
ハインツが共産主義の脅威を力説するが坂本は理解できなかった。
坂本「そんなことありえない!」
ハインツ「ありえないなじゃい!起きたんだよ!
第一次世界大戦でドイツは背後のユダヤ人と共産主義者の攻撃で崩壊したんだ!
そしてドイツは無茶苦茶になったんだ!それでも言うのか!」
ハインツは声を荒げた。
ハインツが語ったのは当時ドイツ人の多くが信じていた「背後からの一撃」だった。
これは第一次世界大戦にドイツが負けたのは後方から共産主義者とユダヤ人が革命を煽ったからというある種の被害妄想的なものだった。
だがドイツ人はこれを信じ反共・反ユダヤに突き進んだ。
そしてハインツもそれを信じていた、その上ハインツは軍人の息子であるため反共主義には理解があった。
その凄みに坂本は驚く。
坂本「ハインツ…」

ハインツ「済まない、ちょっと頭に血が上った。
さっさと行こう、こんなところおさらばだ」
冷静になったハインツは一言謝ると足早に歩いて行った。

第17話：『空より高く』

「全ての冒険、とりわけ未知の領域への冒険は恐ろしいものです。」
――サリー・ライド（チャレンジャー号搭乗員）

ある日、５０１のウィッチたちは映画館に来ていた。
坂本「しかし、５０１のウィッチ全員が映画に招待されるとは」
ミーナ「予想だと今日はネウロイは来ないそうですし、それにもし来ても他のウィッチ部隊が対処してくれるそうよ」
ハインツ「まあ久しぶりの休暇だし楽しもうぜ。ポップコーンいるか？」
ハインツは隣に座るミーナと坂本にポップコーンを渡す。
彼らはこの日、映画会社からの正式な招待でロッセリーニ監督の最新作「貨物駅」のワールドプレミアに招待された。
ノヴァク「二人で映画見るなんていつ以来だ？」
バルクホルン「今年の初めにロンドンにクリスの見舞いに行った時の我が道を往くが最後だな。」
ノヴァク「ああ」
ノヴァクが右隣に座ったバルクホルンとその間に置かれた特大サイズのポップコーンを食べながら話す。
ニコ「サーニャさん、楽しみですね」
サーニャ「はい、ニコさん」
サーニャとニコは映画を楽しみにしていた。
そして劇場が暗くなると画面にでかでかと「国営ステーファニ通信社」と映ると続いてファンファーレと共にステーファニ通信のロゴ、そしてニュース映画が始まった。
題名は「空より高く　―人類の限界に挑んだ魔女たち―」と書かれていた。

数週間前、ロマーニャ北部。
エイラとヤンは歌を歌いながらネウロイの攻撃を躱していた。
ヤン「Kun painuvi pʼt muun kansan, maan,
me jʼkʼrit uskoimme yhʼ~♪」
エイラ「雨が降っても気にしない~♪」
ヤン「Oli rinnassa yʼ, tuhat tuskaa,
vaan yks, aatos ylpeʼ, pyhʼ~♪」
エイラ「槍が降っても気にしない~♪」
ヤン「Me nousemme kostona Kullervon,
soma on sodan kohtalot koittaa~♪」
エイラ「何があっても気にしない~♪」
ヤン「Satu uusi nyt Suomesta syntyvʼ on,
se kasvaa, se ryntʼ, se voittaa!」
次の瞬間二人の周りのネウロイは全て破片となった。
それをそばで見ていた宮藤は驚き話しかけた。
宮藤「エイラさん、ヤンさん、シールド使わないと危ないですよ」
エイラ「ん?どこ見てんだお前」
ヤン「おっと!」
すると二人はロールするとまたネウロイが攻撃し始めるが二人はそのほとんどを回避しネウロイを次々と撃破していった。

エイラ「あらよっと！」
ヤン「リュッシャの方が強いぞ」
宮藤「す、すごーい！」
宮藤は二人の連携の取れた攻撃驚いていた。
そこから少し離れたところでは坂本とハインツが周りを見渡していた。
シャーリー「こんなもんか？」
バルクホルン「あらかた撃墜したようだが妙だな、手応えがない」
その周りではほかのウィッチが集まっていた。
彼らはネウロイを攻撃しあらかた殲滅したが妙なことに手応えがなかった。
ハインツ「どうもこいつら全部子機だぞ。
　どっかに親分がいるはずだ。」
ハインツはこれが全部子機だと判断していた。
ペリーヌ「まだ健在だと」
ルッキーニ「いつの間にかやっつけちゃったんじゃない？」
リーネ「本体を倒せば子機も消えるはずだよ」
すると突然無線が割り込んだ。
通信兵『こちら第２山岳師団トリデンティーナ、５０１応答せよ』
ハインツ「ん？トリデンティーナ、こちら５０１どうぞ」
突然近くで展開しているロマーニャ軍のアルピーニ師団トリデンティーナが５０１を呼び出した。
通信兵『トリデンティーナ師団前面１５キロに超大型ネウロイ発見。
　高さ推定２万メートル以上。援護を要請する』
ハインツ「は？２万メートル？」
坂本「あれか！」
無線で言われて坂本が振り向くとそこにはアペニン山脈の向こうに雲よりも高くそびえる巨大な黒い塔があった。
バルクホルン「なんだあれは!?」
ペリーヌ「雲を突き抜けてますわ…」

ハインツ「マジで2万、いや下手すればそれ以上はあるぞ…」
ルッキーニ「ほぇ～」
シャーリー「まさか、あれが本体？」
険しきアルプス山脈や雲よりも高いその姿に全員が驚いていた。
ハインツは双眼鏡と魔眼を使ってネウロイを観察する。
ハインツ「すげぇな…ここからじゃ一番上まで見れない…
　少なくとも2万５０００メートルはある。もっと上から見ないと」
坂本「お前たちはここで待て」
坂本とハインツは二人で上昇する。
雲を抜け雲海の上高度1万メートルまで上昇する。
ハインツ「よし見えた！コアは一番上だ！」
坂本「一番上か…厄介だな」
ハインツは双眼鏡で何とかコアを見つけた。
だがその場所は2万５０００メートルよりさらに上、成層圏だった。
ハインツ「ああ、世界高度記録よりさらに上だ。
　もはや戦争どころか冒険だよ」
それは厄介極まりないでは済まなかった。
当時の世界高度記録、それよりもさらに上なのである。
戦争どころか冒険、未知への挑戦だった。
坂本「一時撤退だ、基地に帰投する」
ペリーヌ『ですが、まだ敵が…』
ハインツ「作戦を立て直す、厄介すぎてこちらの手に負えない。
　それと遠出しすぎた、そろそろ帰らないと基地に戻れないぞ」
あまりにも厄介であったため５０１は一旦基地に戻ることにした。

夕方、基地に戻るため夕日を背にウィッチたちは飛んでいた。
エイラ「ヒヒッ」
エイラは飛びながら手に持った小さな枝を見ながらニヤついてい

た。
宮藤「なんですか?それ」
エイラ「なんだよ」
すると宮藤が覗き込んだ。
宮藤「何かの枝ですか?」
エイラ「うるさいな、何でもないよ」
宮藤「どこで見つけたんですか?
　なんでそんなの持ってるんですか?」
エイラ「そんなのどうだっていいだろ?
宮藤「見せてくれたっていいじゃないですかー!」
宮藤は詳しく知ろうとエイラを追いかけまわすがエイラはすべて回避して宮藤は疲れ果てた。
宮藤「はぁ、はぁ、エイラさんってなんでそんなにすばしっこいんですか?」
エイラ「ふふーんすばしっこいだけじゃこうはいかないさ。
　私は未来予知の魔法が使えるんだ。
　敵の動きだろうがお前の動きだろうが、私には全部見切れんのさ~」
宮藤「へぇー」
エイラの話に宮藤は初めて知ったようだった。
ヤン「ふーん、お前未来予知使えるのかー」
エイラ「うぇ!ヤン!突然話しかけるなよ!」
すると突然エイラの後ろからヤンが現れてエイラにニヤつきながら話しかけた。
ヤン「いやぁ、そりゃああんな回避できるよなって思ってさ」
エイラ「お前だって使えるんじゃないのか?」
エイラはヤンに聞くと答えた。
ヤン「いや、俺は計算だよ。数学的に最も確率の高い結果だけわかるってやつだ。
　なんでお前みたいな確定じゃない、あくまで可能性の一つだけ分かるってやつだよ」

宮藤「へぇそうだったんですか、エイラさんと同じだと思ってました。」
ヤンの言葉に宮藤が驚いた。今までエイラと同じであの回避をしていたと思っていたからだ。
ヤン「まあエイラと同じのが使えるのだったらニコもなんだけどな。」
エイラ「ニコ…」
宮藤「ニコさんも使えるんですか?」
するとヤンがニコの名前を出すがエイラはその名前を聞いて不機嫌になった。
ヤン「まあな、あいつは使えると言ってもＪｕ８８が鈍重だから回避がかなり難しいがな」
宮藤「そうなんですか」
エイラ「まあシールドに頼るあいつと比べれば私の方が上だがな。
自慢じゃないが、私は実戦でシールド使ったことが無いんだ。
あんなものに頼ってる奴は、私に言わせりゃ二流だな」
宮藤「そんなー!私はシールドだけが取り柄なのに!」
エイラが宮藤とその場にいないニコを二流という。
すると無線から声が響いた。
サーニャ『そんな言い方してはダメよ、エイラ』
ニコ『二流とは酷いなぁ…柏葉付き持ってるのに』
それは夜間哨戒に向かうサーニャとニコだった。
ニコ「おかえりー、みんな」
サーニャ「おかえりなさい、みんな」
エイラ「サーニャ!」
宮藤「サーニャちゃん!ニコさん!」
ニコとサーニャは宮藤たちと交差すると一旦回ってから宮藤たちの横についた。
宮藤「そっか、これから夜間哨戒なんだ」
サーニャ「うん」

ハインツ「待て、今日はいい。ちょっと状況が変わった、今日はやらなくていい。
　基地に戻ってくれ。」
ニコ「え？」
サーニャ「はい」
するとハインツは夜間哨戒をやめさせ基地に戻るように指示した。
二人はそのまま目と鼻の先の基地に戻った。

ローマ、ロマーニャ海軍省
レニャーノ「バベルの攻撃を我々がやると？」
アイケ『ああ、空軍と共同で叩き潰す、のは無理にしてもとりあえずは時間稼ぎに攻撃する。
　そちらからいくら出せる？』
海軍省ではレニャーノとアイケが話していた。
それはネウロイ「バベル」、あの高さが2万メートル以上あると思われるネウロイを攻撃する作戦だった。
その高さから通常のコードとは別に彼らはバベルの愛称をつけていた。
　このネウロイはその高さから攻撃は通常戦力では不可能と既に判断され如何にしてこのネウロイの侵攻速度を遅らせるか、攻撃手段確立のための時間稼ぎが重要だった。
レニャーノ「急すぎる、ただでさえこちらの懐事情は悪いんだ。
　その上船を出すのにいったい何時間かかると思ってるんだ？」
アイケ『そのぐらい分かってる』
ロマーニャ海軍の懐事情はさしてよくなかった。
その理由はロマーニャの低い工業力による艦艇の整備不足・燃料不足が原因だった。
　さらには基本的に蒸気機関の船というのは一度火を落とすと動き出すのに１０時間以上かかるのである。

そのため急な出撃など難しかった。
レニャーノ「分かってるならいい。
位置からして一番近いのはＢＦ１９５１船団を護衛中のザラとポーラだ。
一応ベルガミーニ艦隊とバーリの扶桑艦隊を動かせるようにはしておく。
攻撃開始は明日の夕方になる、今はアンコーナの沖だからな」
レニャーノはバーリからフィウメに向かっていた船団を護衛中の重巡洋艦二隻に参加させ、同時にリミニのベルガミーニ艦隊とバーリの扶桑艦隊を動かす準備をさせることにした。
アイケ『分かった、自前のは動かす気はないんだな』
レニャーノ「動かせるほど裕福じゃないんでね。
それとブレストの古賀とツーロンの連中が煩いって事情もあるが」
ロマーニャ海軍の懐事情ではこれが限界だった。
それと同時に彼らの仲間の提督が煩いという事情もあった。

その頃、５０１では数枚の写真を見せていた。
坂本「空軍の偵察機が撮ってきた写真だ」
バルクホルン「ノイズしか映ってないようだが」
だがその写真は極めて不鮮明だった。
坂本「これが昼間現れたネウロイだ」
ハインツ「あちらさんによるとデカすぎて全体を捉えようとしたらこうなったとさ。
高さは推定３万メートル以上、あまりの巨大さに通常のコードとは別にバベルのコードが付与されたよ」
このネウロイの高さは推定３万メートル、約３０キロだった。
これは太陽系で最も高い山火星のオリンポス山よりも高いのだ。
さらには当時の世界高度記録は約１７０００ｍであるためその高

さがどれだけ異常か分かるだろう。
バルクホルン「３万!?３０キロを超えるってことか!?」
宮藤「それって富士山の…」
ニコ「えーとツークシュピッツェ山が約３０００ｍだからその十倍…」
その高さに全員が驚いていた。
ハインツ「で、このバベルの塔が毎時１０キロでローマ方面に動いてる。
問題はこいつのコアの位置、コアがあるのは一番上、つまり高度３０キロにある。
分かってると思うが高度３０キロだ、もはや戦争どころの話じゃない。
高度３０キロといういまだ人類が到達したことのない世界、そこにある。
このネウロイを撃破するためにはまず、我々は記録に挑戦せねばならない。
燃える話じゃないか、男ってのはいつの時代も世界一、世界初って言葉には弱いんだ。
違うか？」
ハインツがこのネウロイの難しいところを不敵な笑みを浮かべて説明する。
だが同時にそれは男としての浪漫を掻き立てるものだった。
目の前には世界一、世界初の男になれる切符が転がっているのだ。
その事実を理解した瞬間、リーネの隣に座るミラーも、バルクホルンの隣に座るノヴァクも、エイラの横で腕を組んで立っているヤンも、サーニャの横でピアノにもたれかかるニコも事の重大さと同時に興奮した。
彼らだって男である、世界一、世界初の男になるチャンスが目の前にあるのだ。
ハインツ「もちろん、従来のままでは俺たちは高度3万どころか今の世界記録を破ることさえ不可能だ。

だからこれを使う」
そう言うと別の写真に変わった。
ハインツ「ロケットブースター、又はロケットモーターとも呼ばれる品だ。
これをまず高度一万まで運びそこでロケットに点火一気に上昇する。
まあ簡単に説明すればこうだな。」
ハインツが作戦を簡単に説明した。
そしてリスクも説明する。
ハインツ「で、口で言うのは簡単だが、高度三万だ。
空気がなくウィッチでなければ生命維持さえ不可能、いやウィッチであっても厳しい。
そんな環境だ。
こんな環境で世界一の切符と引き換えに戦いたい向こう見ずな奴はいるか？」
ミラー「少佐、男って言うのは世界一とかそういう切符が目の前にあればその程度の事無視しますよ」
ハインツが不敵に言うとミラーが不敵に笑いながらノヴァクやヤン、ニコの気持ちを代弁する。
ハインツ「そうだったな、中佐、男共は誰が一番上まで行くかで喧嘩が起きそうですぜ。」
ミーナ「ええ、そうね。でも一番上にまで行けるのは二人だけよ」
ハインツが男たちのやる気をミーナに伝えるとミーナが二人しか行けないという。
坂本「で、まず一人目だが、サーニャ。
瞬間的且つ広範囲にわたる攻撃力を持つサーニャにコアを攻撃してもらいたい」
ハインツ「言っておくが、これはリスクが従来の作戦とはレベルが違う。
あくまで志願だ。」
坂本がサーニャを選んだ。

同時にハインツもリスクを説明したうえであくまで志願だと伝える。
この作戦はリスクが高すぎあくまで志願という形にした。
サーニャ「分かりました。」
エイラ「ハイハイハイ！」
サーニャはリスクを分かったうえで参加した。
すると横にいたエイラが手を挙げた。
エイラ「だったら私も行く！」
ハインツ「いいだろう、で、あんたシールド張れるのか？」
エイラも志願したがハインツがあくまでもう一人のウィッチに必要な絶対条件をエイラに聞いた。
エイラはそれに自慢げに答えた。
エイラ「シールド？自慢じゃないが私は実戦でシールドを張ったことが一度もないんだ」
ハインツ「ムリダナ」
エイラ「うん、ムリダナ、ってハインツ！私のモノマネするな！」
ハインツはエイラの自慢にエイラのモノマネをして返す。
ハインツ「この作戦で攻撃担当ともう一人、援護担当が必要だ。
この援護担当に必要なのはシールドが張れる、できれば強力なシールドが。
で、シールド張れなきゃ無理だぞ。
というわけで俺が…」
ヤン「テメェ！」
ノヴァク「ニエムツィ！職権乱用するな！」
ミラー「少佐でもそれはダメです！」
エイラが無理なことをハインツは説明するがその調子で自分が援護担当になろうとして男たちから抗議の声が上がる。
誰だって世界一になりたかった。
ハインツ「チェ、誰だって世界一になりたいだろ。
で、この世界一の切符を手に入れた幸運な奴ってのがニコ、お前だ」

ニコ「え?」
もう一人、世界記録への挑戦という幸運をつかんだのはニコだった。
指名されたニコは驚いた。
ハインツ「お前、宮藤の強力なシールドも、バルクホルンの筋肉も、坂本の魔眼も、シャーリーの加速も全部オリジナルと同レベルで使えるだろ?」
ニコ「え、ええ…」
ハインツ「全部満たしてるんだよ、作戦に必要な素質全部を。で、どうする?やめるなら宮藤放り込むが」
ニコ「分かりました、やりましょう。世界記録に挑戦なんて一生に一度ですから、名誉ですしここで辞退すれば漢が廃りますし。ん?」
ニコはやる気満々だった。
するとニコは殺気を感じる。
エイラ「ぐぬぬぬぬ…」
ニコ「え…」
その方向を見るとエイラが嫉妬丸出しでニコに詰め寄ってきた。

第18話：世界初へのチケット

「幸運にも、世界で初めての男になるためのチケットが目の前に現れたんだ。
そのチャンスを見送る事なんかできなかったさ」
―チャック・イエーガー（世界初の超音速飛行のことを聞かれて）

―――――――――――――

ブリーフィング後、エイラとペリーヌはサウナにいた。
ペリーヌ「ちょ、ちょっと…
あんまりくっつかないでくださらない？」
エイラ「しょうがないだろ、狭いんだから。
それにこの後もう一人来るんだぞ」
湿気で髪が爆発したペリーヌは狭いサウナの中で隣に座るエイラに言う。
ペリーヌ「もう一人って？」
エイラの言った言葉が気になりエイラに聞く。
するとサウナの出入口が開いた。
ヤン「うーん！サウナはやっぱりいいな、エイラ」
エイラ「ヤン、遅いじゃないか」
ペリーヌ「ヤ、ヤンさん！なんで入ってきたんですか！
出ていきます！」
入ってきたのは素っ裸だが一応エイラたちに考慮してタオルで局部（丁寧な言い方）を隠したヤンだった。
ヤンが入ってきたことにペリーヌは慌てふためきサウナから出ようとする。
ヤン「ちょ、出て行こうとするなよ！」
ペリーヌ「男性の方と一緒にサウナに入るなんてありえませんわ！」
ヤンは出て行こうとするペリーヌを止める。

ペリーヌはサウナの混浴などありえないと思っていた。
だがエイラとヤンがペリーヌとは真逆のことを言った。
エイラ「そうか～スオムスだとサウナは男女混浴だぞ」
ヤン「フィンランドでもだ。サウナはこうして男女水入らず、裸の付き合いをする場だ。
　下心はないぞ。それにルールでも混浴は認められてるぞ」
一応この基地ではサウナだけは混浴は認められていた（正確には混浴に関する規定を意図的に設けなかった）
そのためたまにリーネとミラー、ノヴァクとバルクホルン、そしてエイラとヤンが二人でサウナに入っている。
前者二人は互いに恥ずかしがって何とも気まずい空気の中サウナに入っていたがエイラとヤンはどちらも「サウナは混浴」が常識であったため恥ずかしがるも何も互いに白樺の枝で叩き合ったりする程度には楽しんでいた。
エイラ「それとツンツンメガネと話したいことがあるんだ」
ペリーヌ「わ、分かりましたわ！手短にお願いしますわ。
　それとヤンさんはエイラさんの隣に行ってください」
ヤン「あいよ、で話って？」
ペリーヌは諦めてヤンをエイラの隣に行かせた。
ヤンがエイラの隣に座りエイラに聞いた。
エイラ「お前いつも宮藤と喧嘩してるからな、敵の敵は味方って言うだろ？」
ペリーヌ「それ、どんなイメージですの？
　もう、それにしても私、サウナって苦手ですわ。
　それに殿方と一緒に入るなんて…」
ペリーヌは湿気で爆発した髪を弄りながらエイラに愚痴る。
するとイラしたエイラはペリーヌの手を取って語気を強めて言う。
エイラ「いいからちょっと私に協力してくれよ！」
ヤン「何を？」
エイラに反対側からヤンが聞いた。

エイラ「決まってるじゃないか！
　シールドを張れるようになってサーニャを守るためだろ！」
ヤン「ムリダナ」
エイラ「お前まで私の真似するなー！」
エイラの目的を知ってヤンはエイラの真似をして即答する。
ヤン「エイラ、ニコが降りると思うか？
　あいつの前には今、世界一の、世界初の男になるチャンスがあるんだよ。
　それを逃すと思うか？」
エイラ「そんなのどうだっていいだろ！」
ヤンはニコが絶対にこのチャンスを逃さないと思っていた。
だがエイラにはその理由が分からなかった。
ヤン「お前にはそうかもしれないけど男には重要なんだ。
　目の前に世界初の男にあるチャンスがある、それを逃すなんてそう簡単にはできない。
　例え体中の骨が全部折れても飛ぼうとするぞ。
　女にはわからんと思うが男ってのはそういう生き物なんだ、バカだと思うがね」
エイラ「じゃあお前は諦めろって言うのか！」
ヤンが理由を説明する、それを聞いてエイラはヤンに詰め寄る。
ヤン「そうは言ってない。
　まあシールド張れるようになったらバックアップには回してもらえるんじゃないかなぁ～
　ニコを説得するかハインツに掛け合うかして頑張れ」
ペリーヌ「あの、話は済んだんでしょうね。
　じゃあ私は出ていきますわ」
ペリーヌはそう言うとサウナから出て行った。

翌日、早朝午前6時前。
ハインツはあてがわれた執務室で寝ていた。

すると電話が鳴った。
ハインツ「ん…んー、ふぁい、こちら５０１ヴァレンシュタイン少佐」
『ヴァレンシュタイン少佐ですね！』
ハインツ「そうだけど…誰だよこんな時間に…」
電話から聞こえるやたら声のデカいロマーニャ訛りの英語にハインツは寝ぼけながら返事する。
記者『ラ・スタンパです！』
ハインツ「ラ・スタンパ？ブンヤがうちに何の用だ。
こんな朝っぱらから電話かけるなアホが」
ハインツは叩き起こされたことにイライラしながら電話をかけてきたロマーニャの新聞社ラ・スタンパの記者に用を聞いた。
記者『明日、５０１が世界高度記録に挑戦するというのは事実でしょうか？』
ハインツ「は？…はぁ!?そりゃ一体どこからの情報だ！」
ハインツは記者からの質問を聞いて目が覚めた。
すぐに立ち上がると記者に大声で聞いた。
記者『今朝発売のロマーニャ空軍の機関紙で発表されましたが』
ハインツ「なんだと！」
ハインツはそれを聞くと電話を叩きつけ部屋を飛び出して基地のポストに向かい投函された新聞の束を取り出すとロマーニャ空軍の英語版の機関紙を確認する。
ハインツ「マジかよ…」
そこには「５０１　明日　世界高度記録挑戦　ロマーニャ空軍発表記者に一般公開」と書かれていた。
その記事を見てハインツが呆然としていると基地中の電話が鳴り始めた。
ハインツ「ハハ…ミーナと坂本とバルクホルンとシャーリー叩き起こさなきゃ…」
それを見てハインツは苦笑いするとミーナたちを叩きおこし行った。

その日一日中ハインツ達は記者からの電話の処理に忙殺された。

その日の昼間、ハインツ達があらゆる国のあらゆる媒体の記者やジャーナリストからの電話に忙殺されていたころ。

エイラ「えっと…」

ヤン「逃げるならこれが一番だろ」

ペリーヌ「これなら逃げる余地はありませんわね」

リーネ「でも、これ凄くダメな気がするんですけど…」

ミラー「大丈夫ですよ、少佐の許可は貰ってますから」

何故かエイラが木にロープで縛りつけられ木にはエイラの頭の上のところに的が釘で打ち付けられていた。

そしてその前でヤンとリーネとペリーヌとミラーがモシンナガンとＫａｒ９８ｋとリーエンフィールドＮｏ．４、ＭＡＳ３６に弾を込めていた。

ヤン「じゃあ、行くぞ」

エイラ「ちょ、ちょっと待てヤン！」

ミラー「あんまり動かないでください、下手に動くと当たりますから」

エイラが気に縛り付けられながらもがく。

ミラーはそれを注意するがエイラにはそれどころじゃなかった。

ヤンたちはもがくエイラを無視してライフルを構える。

エイラ「誰か助けてくれ～！サーニャ！ハインツ！」

全員がエイラに向かって銃を向けエイラは命の危険を感じる。

次の瞬間、全員が発砲、エイラの頭の上にあった的に当たった。

ヤン「おい！エイラ、シールド張れ！」

ペリーヌ「空でやってダメなのですからせめて地上で張れるようになりなさい！」

これはエイラがシールドを張れるようにする訓練だった。

だが空でやったところエイラは回避しかしなかったためヤンの提案で木に縛り付け、頭の上に的めがけて全員で撃つという銃殺刑方式に出た。

そのせいでエイラは誰かが外せば死ぬという悪夢のような状況にいた。
エイラ「ヤン…ほどいて…」
ヤン「お前がシールド張れるようなるかこっちの弾がなくなるまで撃ち続ける」
放心状態のエイラがヤンに頼むがその願いは露と消えた。
この後最終的に弾がなくなるまで撃ち続けたがその時にはエイラは死んだ魚のような目をし放心状態だった。

悪夢のような訓練が終わり、エイラは自室に戻ると椅子に何かがかけられていることに気が付いた。
エイラ「ん?これは…」
サーニャ「エイラのコートでしょ。成層圏は寒いから」
エイラ「そっか、そういやこれも久しぶりだな」
それはエイラのコートだった。
サーニャは寒さ対策で防寒用の服を出していた。
成層圏というのは高度が上がれば上がるほど高くなるが最も高い中間圏との境界付近である高度約５０キロ成層圏境界でさえ僅か０度前後であり高度３０キロ付近では対流圏境界付近と大して変わらない—５６度前後だった。
それほど寒いのである。
サーニャ「で、どうだったの?」
エイラ「え?」
サーニャ「ヤンさんたちとの特訓」
サーニャはエイラにヤンたちとの特訓のことを聞いた。
エイラ「な、なんだ知ってたのか」
サーニャ「上手くできた?」
するとエイラは苦笑いしながら答えた。
エイラ「ハハ、無理、ダメだった。」
サーニャ「そう…」
サーニャはそれを聞いて落胆する。

ふとエイラはサーニャの方を見る。
エイラ「ん？あれ？マフラーそんなに持っていくのか？」
サーニャはなぜかマフラーを４人分持っていた。
サーニャ「ああ、これ。
　エイラと私とニコさんと芳佳ちゃんのよ」
エイラ「ニコと宮藤？」
サーニャが持っていたのはニコと宮藤用のマフラーだった。
それにエイラは驚いた。
サーニャ「芳佳ちゃん、扶桑から何の用意もしないで来ちゃって、ニコさんも冬服は持ってるけどマフラーとかを持ってないから貸してあげようと思って。」
　宮藤は何の用意もせずやって来、ニコは元々着ていた冬服と海峡ヤッケ以外服は現地調達だったが冬季用の防寒具はシーズンからずれていたため調達できなかった。
　幸いコートは支給品の物があり手袋は元々持っていたためどうにかなったがマフラーなどはサーニャから借りるしかなかった。
サーニャ「でも、エイラも張れるようになるといいね、シールド」
エイラ「無理だよ」
サーニャ「えっ」
サーニャがエイラにシールドのことを言うとエイラは落ち込んだ声で返す。
エイラ「やっぱり、慣れないことはするもんじゃないな。」
サーニャ「エイラ、あきらめるの？」
その言葉にサーニャは聞き返す。
エイラ「できないことをいくら頑張ったって仕方ないじゃないか」
サーニャ「できないからって諦めちゃダメ！
　諦めちゃうからできないのよ」
サーニャはエイラを慰めようとする、だが
エイラ「じゃあ最初からできるニコに守ってもらえればいいだろ！」
エイラはサーニャに大声で言った。

サーニャ「エイラのバカ！」
エイラ「サーニャの分からず屋！あっ」
するとエイラめがけてサーニャが枕を投げた。
そして目に涙を浮かべながらサーニャは出て行った。

サーニャが向かったのはニコの部屋だった。
その頃ニコはなぜかハルトマンの相手をしていた。
ハルトマン「ありがとーニコ、お菓子くれて」
ニコ「そのぐらいいいですよ」
ハルトマンはニコにお菓子をせびりニコは気前よくショカコーラをあげていた。
するとドアが開いて涙目のサーニャが入ってきた。
ニコ「サーニャさん？どうかしましたか？
　ショカコーラいります？」
ハルトマン「サーニャン？」
驚く二人にサーニャは事情を話した。
ハルトマン「ハハハ、そんなことがあったんだ」
ニコ「喧嘩したんだ、エイラと、僕のことで。
　なんか、ごめん、サーニャ」
サーニャ「ニコさんは関係ないんですから謝らなくていいですよ」
ニコは事情を聞いて何故か謝った。
するとハルトマンがサーニャに聞いた。
ハルトマン「で、サーニャンはどうしたいんだい？」
サーニャ「私…」
ハルトマン「任務じゃ仕方ないか…ニコは？」
ハルトマンはニコに聞いた。
だが
ニコ「その、サーニャさん、ごめん。
　今回ばかりは無理だ。」
ニコはエイラと変わるのは無理だと言った。
サーニャ「え…」

ニコ「今回はただの任務じゃない、昨日ヴァレンシュタイン少佐が言っていたように〝人間の限界と未知の世界〟に挑むんだ。
そうなると信じれるのは自分とパートナーの能力だけ、一歩間違えれば死ぬ任務だ。
サーニャさんが行く以上、この任務でサーニャさんを無事に地上に返すのはもう一人に指名された僕の責任だ。
エイラさんには悪いけどこれは僕の責任だから変わるなんて絶対にできない。
それと、僕の目の前には世界で初めて高度3万メートルに行く男になるチケットがあるんだ、見送る事なんてできないよ」
ニコは絶対にこの任務から外れるつもりなどなかった。
サーニャ「ニコさん…」
ニコ「力になりたかったけど、ごめん」
ニコはサーニャに謝ることしかできなかった。

その数時間後、ローマの海軍省
レニャーノ「貴様ら底抜けのアホか！」
海軍将校『しかし、提督』
レニャーノ「言い訳など聞きたくない！」
レニャーノは電話口で怒り狂っていた。
その理由は簡単だった。
レニャーノ「貴様ら、なんであの馬鹿でかいブタ如きに大破するんだ！
ザラとポーラ、それにこの戦闘に関わったすべての士官は全員クビだ！」
バベルへの攻撃でザラとポーラが大破したのだ。
そのあまりにも不甲斐ない戦闘にレニャーノは怒り狂って当然だった。
レニャーノ「地球を半周回って疲れ切った飲んだくれの露助でももう少しまともな結果を出すはずだ！
お前らは古代ギリシャの連中にも負ける気か!?」

海軍将校『提督！』
レニャーノ「もういい！貴様等全員港に着いたらクビだ！」
そう叫ぶと受話器を叩きつけた。

カンピオーニ「全く、ザラとポーラの連中は何をやっているんだか」
副官「全くです」
同じ頃、すっかり日が落ちたアドリア海を二つの大艦隊が進んでいた。
一つがこのカンピオーニが指揮するヴェネチア・ロマーニャ海軍連合艦隊、もう一つが
カンピオーニ「しかし、デカいな。」
副官「この地中海一の戦艦であるローマが小舟に見えますよ。」
カンピオーニ「全くだ、しかし連中はあれを三隻も作ったんだから驚くよ」
彼らの十数キロ先を進む巨大な影、大和級戦艦二番艦武蔵を見てカンピオーニは驚いていた。
それはすなわち扶桑海軍から派遣された艦隊だった。
この艦隊はロマーニャ南部バーリを拠点とする大艦隊でありその一部がカンピオーニの艦隊と共にバベルの攻撃に向かっていた。
カンピオーニ「このローマが１４インチ砲９門なのにあの巨艦は１８インチを９門装備とは…
初めて知ったとき疑ったよ、１８インチ砲を９門も積んだ船が実在するのかね？って」
副官「それは私もですよ」
カンピオーニ「しかし連中はやる気だねぇ、伝統の夜戦とやらか？」
副官「でしょうね。我々がいなければ改革すらできなかった黄色いサルのくせに。」
カンピオーニ「君、我々がいなければの下りには同意するが黄色いサルはいかんよ。
彼らも一応は海軍軍人だ。そんなことを言っちゃいかんよ」

カンピオーニは副官の黄色いサルという発言を窘めるが彼らのやっていたことはそういわれても仕方のない事だった。

彼らは互いにある程度各国軍の伝統を重視し軍行政や伝統には不干渉だったが唯一日本軍系だけは徹底的に改革されていた。

それは一時日本軍系部隊で大損害が相次ぎそれを重く見た他国系の軍人たちが内部監査をしたところ「全く持って不健全であり、その上一切の自浄能力を持っていないか持っていても機能不全を起こしている組織」、「国際法及び一般的な法的知識、さらには軍内部の規律、一般国際慣習に非常に疎く国際的な連携行動には不適当」、「兵士たちの優秀さには非の打ち所がないが士官等に関しては教育及び意識の面で大きな問題がある」、「規律に固執し兵士たちの柔軟性をないがしろにする教育」、「実戦に即していない兵士たちの装備と教育」、「補給、休養、各種後方事務に関する一般的な知識の欠如と意識不足」、「インテリジェンスに関する意識と知識の欠如」と結論付けられたからだった。

あまりにも組織として不健全な上に自浄作用がないため彼らは最終的に徹底した改革を行い改善された。

だが海軍は更に酷くあまりにも頻繁なリンチにより下士官の半分が再教育を受けるか懲罰部隊送りになるという前代未聞の事態になった。

それだけでなく「すべての艦艇の居住性の改善」、「電子戦装備の改善」、「防御性の改善」まで指示される有様だった。

それでもなおリンチ事件の乱発の結果、最終的に何故か他国海軍軍人が政治将校的役割のため全ての艦に乗船するという解決法により問題を解決したほどだった。

この同じ海軍軍人であるということが恥ずかしいほどの酷い実情から彼らは日本海軍を恥晒しとして毛嫌いする者が多かった。

カンピオーニ「まあ私もあの実情には吐き気がしたね。

部下を教育名目で毎晩叩くとは…あれでは教育ではなくただの奴隷だよ。

そろそろこの手の話はやめよう、総員戦闘配置」

カンピオーニは話を切ると総員戦闘配置を命じる。
カンピオーニはこの連合部隊、ヴェネチア・ロマーニャ・扶桑連合任務部隊の総司令官を臨時で勤めていた。
この大艦隊は前衛に扶桑の水雷戦隊と巡洋艦隊そして武蔵、中央にヴェネチア艦隊主力、その後ろに扶桑海軍の低速艦を配してネウロイに向かっていた。
扶桑艦隊は戦艦武蔵、、重巡洋艦鳥海、軽巡洋艦多摩、神通の軽巡２からなる艦隊だった。
この大艦隊は付け焼刃の連携ながら闇夜の中で陣形を組んでいた。
艦隊はネウロイに接近すると右に転舵、左舷砲撃戦を仕掛けようとした。
カンピオーニ「全艦、レーダー管制射撃用意！弾種魔導徹甲！」
カンピオーニの指示で全艦主砲副砲高角砲に魔導徹甲弾を装填、レーダー管制で９キロ先のネウロイを照準する。
カンピオーニ「よーい、撃て！」
号令をした直後、闇夜にいくつもの砲火が炸裂すると数百発の砲弾がネウロイめがけて飛んで行った。
高い精度を誇るレーダー管制射撃は一撃でネウロイの一番下の１００ｍ分を破壊した。
だがネウロイの色もあり満月とはいえ闇で全く確認できていなかった。
カンピオーニ「クソ、見えない。照明弾発射！」
カンピオーニは戦果の確認のため照明弾を発射させた、するとネウロイが照明弾の明かりで照らし出される。
副官「一番下の１００ｍを破壊したようですね」
カンピオーニ「だな、よしレーダー管制射撃で連続射撃！弾が尽きるまで撃ちまくれ！」
カンピオーニが叫ぶ。
その後弾が尽きるかレーダーが故障するまでの約数時間にわたり艦隊はネウロイを攻撃し続けた。
だがそれでもネウロイの高さを１０００ｍ程度小さくしただけ

だった

第１９話：エンタープライズ／未知への飛行

翌朝、５０１には人だかりができていた。
ハインツ「押さない！押さない！時間はあるから！」
ミラー「質問は一人一問！質問するときは社名か媒体を名乗ってください！」
この人だかりは記者たちだった。
彼らは５０１の世界高度記録への挑戦を取材していた。
記者Ａ「ヴァレンシュタイン少佐ですね！ネプチューン社です！
世界記録挑戦に何か一言！」
記者Ｂ「シュテルマーです！世界記録の更新とネウロイの撃破、両方できますか？」
記者Ｃ「フェルキッシャー・ベオバハター誌です！
世界記録に挑戦するのは誰ですか？」
記者たちは表に出ている一番階級の高いハインツに質問を浴びせる。
ハインツ「質問は質問タイムにやってください！ミーナ！手伝ってくれ！」
ハインツは記者の勢いにまけミーナを呼んだ。
ミーナ「はぁ…なんでこうなったのかしら…」
バルボ「いやあ、盛況だねぇ」
ミーナ「バルボ大将!?どうしてここに？」
ミーナはハインツ達に群がる記者に頭を抱えていると後ろから突然バルボが現れて驚く。
バルボ「いやぁ、５０１の冒険飛行に冒険飛行家としての血が騒いでね。
視察に来たのだよ。」
バルボはかつては大西洋横断飛行を2回行ったほどの優れたパイロットであり飛行艇時代の冒険飛行家の一人だった。
イタリア空軍は戦前多くの冒険飛行と世界記録で有名であった。
１９２０年のアルトゥーロ・フェラリンとグイド・マシエロのロー

マ～東京連絡飛行、１９２６年ウンベルト・ノビレが設計した飛行船ノルゲによる世界初の北極点上空の飛行、１９２７年フランチェスコ・デ・ピネードとカルロ・デル・プレーテによるローマ～ブエノスアイレス連絡飛行、１９２８年フェラリンとデル・プレーテによる周回飛行世界記録とローマ～リオデジャネイロ連絡飛行、１９３３年バルボ率いるサヴォイア・マルケッティＳ５５飛行艇２４機による編隊大西洋横断飛行、１９３７年と３８年のマリオ・ペッツィによる世界高度記録、そして１９２０年代から３１年まで続いたシュナイダー・カップでの国の威信をかけたパイロットと技術者の熾烈な戦い、このすべてがイタリアの航空技術と空にあこがれた男達の戦いだった。

この能力、特に長距離飛行のノウハウは大戦中も遺憾無く発揮され初期には東アフリカから往復４０００キロを飛びイタリア空軍はバーレーンやサウジアラビアを空襲しただけでなく４２年にはイタリア空軍はロシア南部からユーラシア大陸の反対側、日本への連絡飛行を実行、これを成功させる快挙を成し遂げた。

ミーナ「そ、そうですか閣下」

バルボ「ああ、いつの時代も人類は空にあこがれるものだ。」

バルボはミーナに話しかける。

すると記者の一人が気が付いた。

記者Ｄ「おい、バルボ大将だ！

バルボ大将！タイムです！

世界高度記録への挑戦について何か一言！」

バルボに気が付いた記者はハインツ達から離れバルボに殺到した。

それにミーナは慌てるがバルボは慣れたように応対し始めた。

バルボ「今日、我々はここに航空史における新たな一ページが刻まれる。

その歴史を我々はこの目で見れるのだ、素晴らしいことだ。

この偉大な業績は長く語り継がれるだろう」

記者Ｅ「ライフです。写真撮影に関して何か制限はありますか？」

バルボ「この飛行に関してはロマーニャ空軍よりウィッチを除いて制限はない。

好きなように報道したまえ。
あ、間違っても貶めるようなことは書かないでくれよ。
それと、この飛行に関してはロマーニャ空軍の全面協力によりチェイス機を用意している。
その写真は追って公開予定である」
バルボはこの挑戦をプロパガンダとして大々的に利用するため空軍を総動員、チェイス機としてブリタニアから高高度偵察機としてレンドリースされていたデ・ハビランドモスキートＰＲＭｋ３２とカールスラント軍のＪｕ８６Ｐを動員して撮影機材を搭載、撮影を行うという無茶をしていた。
無論これには国営通信社であるステーファニ通信社とその社長であり同志でもあるマンリオ・モルガーニが一枚噛んでいた。
それに記者たちはどよめいた。
記者Ｆ「イズベスチヤですが挑戦するウィッチがカールスラントと現在外交関係が良好ではないオラーシャのウィッチですがそのあたりはどう思いですか？」
バルボ「人類の挑戦というものに人種も民族も関係ない。
確かにオラーシャは我が国の反政府勢力を支援したという証拠がありその件で揉めているがそれは政治の話だ。
これは政治といった小難しい話は抜きにした挑戦なのだ、政治などを持ち込むのはナンセンスであり冒険者達に失礼だ」
オラーシャの新聞イズベスチヤがバルボに意地の悪い質問をするがバルボは無難に返した。
これは人類の偉大な挑戦であって政治を持ち込むのはナンセンスだった。

その様子をニコとサーニャは基地の窓から見ていた。
ニコ「なんか…想像以上に大変な事になってますね…」
サーニャ「ですね…」
ニコはドイツ空軍のフィールドグレーのオーバーコートを着てサーニャのマフラーをし、サーニャはコートとマフラーをつけてい

た。
　すると後ろのドアがノックされオーバーコートを着たヤンが入ってきた。
ヤン「ニコ、サーニャ、そろそろ来いとさ」
ニコ「分かりました、行きましょうか」
サーニャ「はい、ニコさん」
ヤンに言われサーニャとニコは基地の外に向かった。
だが二人は基地の外に出るとすぐに記者たちに囲まれてしまった。
記者G「ステーファニ通信社です！ハルトマン中尉、リトヴァク中尉、世界記録に挑む現在の心境は？」
すぐに側にカメラマンを従えた記者に質問された。
ニコ「そうですね…今日、世界記録に挑戦するというのは人類にとっても意義深いですしとても名誉だと思います。
　ですがあくまで自分たちの任務はネウロイの撃破です、世界記録への挑戦はおまけですよ」
記者G「そうですか、リトヴァク中尉は？」
ニコがそつなく答えると記者は隣のサーニャにマイクを向けた。
それにサーニャは困惑する。
サーニャ「えっと…世界記録に挑むという実感がないといいますか…」
　その…」
記者G「中尉、できればもう少し大きめの声で…」
エイラ「おい！サーニャに近寄るな！」
するとコートを着たエイラが記者との間に割り込んできた。
記者G「え!?ちょっと！君！取材妨害です！」
エイラ「うるさい！サーニャをそんな目で見んなー！」
エイラは二人に群がっていた記者を全員追い払ってしまった。
追い払うとエイラはサーニャに聞いた。
エイラ「サーニャ、大丈夫だったか？」
サーニャ「え、ええ。」
ニコ「ありがとうございます、でも記者追い払ってよかったんで

しょうか?」
二人は記者を追い払ったことに感謝するが追い払って良かったのか困惑していた。
すると二人をハインツが呼んだ。
ハインツ「おーい!お前ら!そこでボーっと突っ立ってねえでさっさと来い!
打ち上げまで後10分だ!」
もう作戦開始まで10分を切っていた。
滑走路上には二段目を担当する宮藤、ペリーヌ、ルッキーニ、リーネ、ミラー、ヤンがコートを着て、一段目の他のウィッチ達も滑走路上に置かれたロケットの周りで待機していた。
二人は急いで向かうとそこで最終ブリーフィングを行うと発射準備を整えた。
その光景を記者とバルボ達は安全の為設けられたバリケードの向こう側から見ていた。
バリケードのところにはロケットに付けられた高度計と連動した電光掲示板と打ち上げ予定時刻までのカウントダウンの時計が置かれていた。
そしてウィッチ達は準備を整えると発射までのカウトダウンが鳴り響き始めた。
『発射まで、10、9、8、7』
カウントダウンが始まると記者たちは緊張感が増しカメラを構え固唾を呑んで見守る。
『6、5、4、3、2、1』
そしてカウントダウンがゼロになると発射された。
ウィッチ達は通常動力でまず高度1万メートルまで運ばれた。
この方法は現代でも宇宙船の打ち上げで使われる方法の一つだった。
この方式の利点と言えるのがまず地表付近の濃い大気の層を回避できるので宇宙空間に行くまでの難易度がぐっと下がるのである。
この方式で最も有名な宇宙船といえばヴァージン・アトランティッ

ク社が運行しスケールド・コンポジッツが設計したスペースプレーン、スペースシップツーである。
スペースシップツーはまず高度1万メートルまで母機のホワイトナイトツーに運ばれてそこでリリース、ロケットエンジンで一気に宇宙空間に向かうという方式だった。
チェイス機A『こちらカヴァリエーレ・ビアンコ。目標を確認。現在高度100000メートル。』
地上に高度1万メートルで待機していたチェイス機のモスキートからの連絡が届いた。
チェイス機は雲を突き抜け上昇を続けるウィッチ達を視認した。
そして地上の高度計が1万メートルに達すると第一段階が切り離され第二打ち上げ班がロケットに点火、一気に高度2万メートルまで目指した。
地上では第二打ち上げ班に変わると一気に高度計の高度が上がっていった。
記者H「すごい…」
チェイス機B『110000、120000、130000、140000、150000、160000…』
そのものすごい上昇率に記者たちは釘付けになる。
同時に会場には高度120000メートルで待機していたJu86Pからの高度の実況が入っていた。
記者I「170000…」
記者J「すごいぞ!世界高度記録更新だ!」
記者たちは高度170000メートルを突破した瞬間、喜んだ。
当時の高度世界記録は高度17083メートル、世界記録更新である。
そんなこともつゆ知らずウィッチ達はさらに上昇を続けていた。
だが、高度2万メートルに達した時、チェイス機が異常を察知した。
チェイス機B『180000、190000、200000、第2グループ離脱確認、ん?
第2グループの一名、離脱せず上昇中!』

その1分程前、ウィッチ達は高度2万メートルに到達した。
ペリーヌ「時間ですわ」
第2グループのリーダーであるペリーヌの指示で第2グループのウィッチ達はサーニャとニコから離脱する。
ここまで事前の打ち合わせ通りであった。
だが、突如エイラが叫んだ。
エイラ「嫌だ！私が…私が…サーニャを守る！」
そう叫ぶとエイラはサーニャとニコを追いかけて急上昇する。
すぐにそれをチェイス機から聞いたハインツは作戦中止を命じる。
ハインツ『ミッションアボート！ミッションアボート！』
驚いていたのはハインツだけでなくニコとサーニャもだった。
サーニャ「何してるの!?エイラ！」
エイラ「サーニャ言ったじゃないか！
諦めてるからできないんだって！
私は諦めたくないんだ！
私がサーニャを守るんだー！」
ニコ「そこまでいうなら仕方ないです、今回は特別に一緒に行きますよ」
するとエイラの手を一旦離脱したニコが掴むと急上昇した。
エイラ「ニコ…」
ニコ「爆撃機乗りは一にも二にもクソ度胸、伊達に5年も生き抜いてきたわけじゃないんですよ。
それにＪｕ８８は並みのユニットよりもパワーがあるぞ」
ニコはエイラに呆れ面倒ながらも無理やり連れて行くことにした。
ニコにはエイラも連れて帰れる自信があった。
だがペリーヌ達にはそう思えなかった。
ペリーヌ「無茶よ！魔法力が持ちませんわ！
帰れなくなりますわよ！」
ニコ「二人はちゃんと連れて帰りますよ！
この程度、マルタとロンドンを爆撃するのに比べたらどうって

ことはないですよ」
ペリーヌにニコが返す。
ニコは地獄のロンドン空襲、そしてマルタ島攻防戦に従軍していた。
それと比べればこの程度、どうって事はなかった。
ペリーヌ「む…無茶苦茶ですわ…」
ルッキーニ「行けー！サーニャ！ニコ！エイラ！」
ミラー「すごい度胸…僕には無理だ」
ヤン「流石あいつだ」
それに第二グループのウィッチ達は呆れていた。
3人はその後も上昇を続け、そして高度3万2000メートルに到達しロケットを切り離すと水平飛行に移った。
前方にはネウロイ「バベル」がいた。
ネウロイは先端から触手を出し真ん中のコアにエネルギーを集中して攻撃し始めた。
それをニコとエイラはシールドで受け止めながら前進する。
そしてある程度近づくとネウロイはエネルギーを使い果たしたのか攻撃をやめた。
その隙をついてサーニャはフリーガーハマーを構え、十分に近づいたところで発射、一撃で撃破した。
その爆風でサーニャは吹き飛ばされかけるがすぐにニコが右手でサーニャの左手を、左手でエイラの右手を掴んで吹き飛ばされないよう支える。
先頭が終わり破片の雨の中を飛びながらエイラはサーニャに話しかけるがニコにすら全く聞こえなかった。
するとニコは二人の頭を近づける。
ニコ「エイラさん、何か話したいことがあるんでしょ？」
エイラ「うん、サーニャ、ごめんな」
サーニャ「ううん、私も」
ニコが二人を近づけるとエイラはサーニャと仲直りした。
その横でニコはふと地上を見た。

ニコ「二人とも、周りを見て。
今まで誰も、誰一人として見たことのない景色だ。
唯一無二で、一生に一度の世界一美しい景色だ。」
ニコは二人に呼びかけ景色を眺める。
高度3万メートル、前人未到であり今後彼らが見ることもない景色を独り占めできた。
ニコ「見て、険しきウラル山脈、荒れ狂う大西洋、サハラの砂嵐に地中海のさざ波。
美しい…何よりこんな小さかったんだな…僕達は…
そして何より、こんな所で戦争をしてたんだ…血みどろの血生臭い酷い戦争を…」
ニコはその景色に感動しながらどこか哀愁を感じた。
するとサーニャが呟いた。
サーニャ「ウラルの山に手が届きそう…
このままあの山の向こうまで飛んで行こうか…」
サーニャの呟きにニコとエイラが反応した。
エイラ「いいよ、サーニャと一緒なら私は何処へだって行ける」
ニコ「飛びたければ飛べばいい。
人生は短い、何より世界は広い、君が行きたいのなら僕はお供するよ」
二人の言葉にサーニャは返した。
サーニャ「嘘、ごめんね。
今の私たちには帰るところがあるもの」
エイラ「あいつが誰かを守りたいって気持ちが少しだけ分かった気がするよ」
ニコ「そうか、じゃあ景色を目に焼き付けて、帰ろうか。
下には僕達の活躍を聞きたい記者が大勢いる」
そう言ってニコは残ったロケットに点火した。

数日後、3人はローマにいた。
そこで3人は正式な礼装を身につけて大勢のメディアに囲まれて

式典に参加していた。
　3人は壇上で並んで立っているとマリア、バルボ、そして地中海方面カールスラント空軍総司令官アレクサンダー・レーア大将がやってきた。
　そしてマリアは宣言した。
　マリア「今日、ここにネウロイの撃破に活躍しただけでなく人間の限界と未知に挑んだ勇敢なる3人のウィッチ、ニコルッシ・ハルトマン＝ファルケンホルスト大尉、サーニャ・V・リトビャク中尉、エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉の3名に聖マウリツィオ・ラザル騎士団勲章、及びサヴォイア軍事勲章、黄金武功勲章を授与します！」
　これはこの3人への勲章授与式だった。
　ロマーニャはこのことをプロパガンダとして盛大に利用、彼らにロマーニャ第2位の勲章聖マウリツィオ・ラザル騎士団勲章、第3位のサヴォイア軍事勲章、そしてサヴォイア軍事勲章に並ぶ名誉ある黄金武功勲章を授与した。
　更にニコはこの件で正式に大尉に昇格した。
　そしてマリアに変わって続いてレーアが同じように宣言した。
　レーア「ニコルッシ・フェリックス＝アレクサンダー・ハルトマン＝ファルケンホルスト大尉、貴官に対して今日柏葉・剣付騎士鉄十字章を授与する。
　貴官は前人未到の極限環境下において冷静さと勇気を持って義務を遂行した、その勇気と顕著な功績を持ってこの勲章を授与する。
　おめでとう」
　同時にニコには柏葉付騎士鉄十字章の上の勲章柏葉・剣付騎士鉄十字章を授与された。
　そして3人の勲章授与が終わると3人は記者に取り囲まれた。
　記者「ハルトマン大尉、高度3万メートルの景色はどんな景色でしたか？」
　ニコ「そうですね、とても美しかったです。

美しく、雄大で、言葉では表現できないほどでした」

「Небо очень и очень темное, а Земля голубоватая.」
（空は非常に暗かった。一方、地球は青みがかっていた）
ーユーリイ・アレクセーヴィチ・ガガーリン

第２０話：平凡な日常

リベリオン、ニューメキシコ州アラモゴード。
この砂漠のど真ん中に謎の鉄塔があった。
鉄塔の上には巨大な丸い爆弾のようなものがあった。
そして突如、無機質なアナウンスが始まると、その爆弾は爆発し、巨大なキノコ雲を生み出した。

その数時間後、ロマーニャ。
朝食を摂っていたアイケの元に副官が一通の報告を持って慌ててやってきた。
アイケ「なんだ？人がゆったりと朝食を食べてるのに邪魔するとは」
副官「失礼しました、閣下宛にリベリオンから電報です」
アイケ「リベリオン？」
アイケは電報を訝しみながら受け取る。
そしてその内容を読んで驚いた。
アイケ「フ、フハハハハハ！やったぞ！遂にやったぞ！
これで勝ちだ！我々の！我々の勝ちだ！連中をソドムとゴモラの市民にしてやる！」
アイケはそれを読んで高笑いする。
アイケの手元にはこう書かれていた『アラモゴード基地の遠隔地の火薬庫が爆発したが、死者・負傷者は出なかった』
人類が悪魔の兵器を、究極の兵器を手にしたことを意味する文章だった。

同じ頃、５０１では。
シャーリー「ハインツ、それ取って」
ハインツ「はいはい、たく少しぐらい整理しろよな」
エンジンをいじるシャーリーのそばでハインツがサンドイッチを食べながらシャーリーに工具を渡していた。

ハインツはシャーリーの部屋の雑な整理に文句をつける。
シャーリー「いやぁ、色々工具とかパーツとか必要だからつい…」
ハインツ「それでも少しぐらいどうにかしろよ…」
シャーリー「ハインツもあんまり人のこと言えないだろ。」
ハインツ「まあそれもそうだな。」
ハインツも自分の部屋が酒とタバコ、書類の山に埋もれていたため人のことは言えなかった。
ふとシャーリーがハインツに聞いた。
シャーリー「なあハインツ、なんで私の部屋にいるんだ?」
ハインツ「書類から逃げてきた。」
シャーリー「ああ…」
ハインツは自室の山のような書類から現実逃避するためにシャーリーの部屋に来ていた。
ハインツ「それに、例の話もそろそろ片付けないとな」
シャーリー「例の話?」
ハインツ「ほら、あれだよ、うん?」
ハインツが話していると何かに気がついた。
シャーリーがハインツに聞く。
シャーリー「どうしたハインツ?」
ハインツ「いや、近くにネウロイがいるぞ」
ハインツはそう言うと魔導針を出すと一本の瓶を手に取った。
その瓶には沢山の虫が入っていた。
ハインツ「この中にいるぞ、ハエ取り紙あるか?」
シャーリー「あ、ああ。」
シャーリーはハインツに未使用のハエ取り紙を渡すとハインツは瓶の蓋を開けてハエ取り紙の上に虫を全部出した。
出た虫は全てハエ取り紙にくっつき動けなくなった。
そしてハインツはその中から一匹だけ毛並みの違うものを見つけた。
ハインツ「こいつだ」
シャーリー「あ、本当だ。ネウロイ」

ハインツが赤と黒のテントウムシのようなものを指差した。
シャーリーもそれを見て確認する。
ハインツ「じゃあ、アディオス。ネウロイ」
ハインツはすぐにそばにあったスパナでネウロイを叩き潰した。
ハインツ「ふう、それにしてもガキはなんでこんな気持ち悪いのが好きなんだか。」
ハインツはスパナでネウロイを叩き潰すと虫がついたハエ取り紙を見ながら呟く。
するとハインツはハエ取り紙を掴むとくしゃくしゃにしてゴミ箱に捨てた。
シャーリー「あー、ルッキーニになんて言えばいいんだろ…」
ハインツ「知らんよ、適当に瓶を倒して中身全部逃げられたって言っとけ。
俺は後でこのことの書類処理しないとな」
シャーリーは瓶の持ち主であるルッキーニになんて言えばいいのか悩むがハインツは気にしていなかった。
するとシャーリーは話題を戻した。
シャーリー「で、さあ。ハインツの話って何?」
ハインツ「ああ、その、あれだ。あの話だよ、あれ」
あの話と言われシャーリーは首をかしげるがすぐに理解した。
シャーリー「え?あの、その、あの話!?
ハインツ、仕事のしすぎで狂った?」
ハインツ「狂ったとは失礼な、毎日朝8時から21時まで働いてるけど狂ってないぞ!」
普段はハインツから言うことが少ないシャーリーとハインツの関係の話にシャーリーが驚き狂ったか聞いた。
ハインツはワーカーホリック気味だが狂ってはいなかった。
ハインツ「なんだよ、人が真面目な話しようってのにその反応は」
シャーリー「ごめんごめん、でもさハインツがそういう話するの意外というかなんというか。
いつまで私を待たせてるんだよ、で話って?」

するとハインツは改まって話し始めた。
ハインツ「真面目な話、実はお前に告白されてから１０ヶ月、ずっと考えてたんだ。
お前との関係が変わるって事に。
俺だって真面目かどうかは置いといて軍人だし組織人だ。
お上の事情を忖度し、部下を大切にする、それが中間管理職たる俺だ。
だけどな、シャーリーとの関係が変わる、部下と上司から恋人だ。
その程度だけど重要なんだ。
正直に言えば、そうなった時俺にシャーリーを〝切り捨てる〟決断ができるのかって。」
シャーリー「切り捨てる？」
ハインツ「ああ、俺は軍人であり指揮官だ。
指揮官は時として非情な決断を下すもんだ。
俺はそういう経験を何度もした、だからあくまで戦友とは一定の線を決めて接してる。
それ以上深入りすれば絶対に見捨てられない、そういうラインを決めてきた。
ミラーだってそうだ。
俺はあいつをいざとなれば切り捨てられる」
ハインツは指揮官としての経験が長い、そのためいざという時に仲間とは切り捨てる決断をできる関係を心がけていた。
これは彼の地獄の戦争の経験からだった。
ハインツ「だが、男女の仲は話が別だ。
そうなった時、お前を切り捨てられる決断ができるか不安で仕方ないんだ。
だから俺はお前との関係をはぐらかしてきたんだ」
シャーリー「ハインツ…」
ハインツはシャーリーとの関係をはぐらかしてきた理由を語った。
ハインツは軍人としてシャーリーを切り捨てられるか、私情が判断

に入ってしまう事を恐れていた。
ハインツ「で、流石に一年もはぐらかすのはどうかと思って、今日蹴りをつけようと思ってな。
シャーリー、一つだけ条件がある、もしお前を切り捨てても、見殺しにしても許してくれるか？」
ハインツがシャーリーに聞いた。
シャーリーは微笑んで返した。
シャーリー「なんだ、そんなことか。
いいよ、そのぐらい。
ハインツは私の命をかけてもいい、そんな人だからさ」
それを聞いたハインツはシャーリーに近づくと額に軽くキスした。
されたシャーリーは顔を真っ赤にする。
シャーリー「ハ、ハインツ？」
ハインツ「なんだよ…サンドイッチ臭い口でキスされたかったか？
そろそろ仕事に戻らないとミーナがうるさいから戻るよ」
ハインツは照れながらシャーリーに言うとそそくさと部屋を出て行った。
シャーリー「ハインツ…ぬふふふふ、やったぞ！遂にやったぞ！」
一人残されたシャーリーは落ち着くと一人で狂喜乱舞していた。

その頃、バルクホルンとノヴァクはノヴァクの部屋にいた。
バルクホルン「なあ、これなんかどうだ？アレックス」
ノヴァク「いいと思う、きっと似合う。
トゥルーデは何を着ても何をつけても似合うから」
二人は仲睦まじく貰った宝飾店のカタログを見ていた。
ノヴァクがバルクホルンを褒めるとバルクホルンは少し顔を赤らめる。
バルクホルン「何を着てもなんて言い過ぎだ。
まあそれを言えばアレックスだって何を着ても似合うと思うぞ」
ノヴァク「そうか？」

バルクホルン「似合うと思うぞ」
ノヴァク「そうか、ありがとう、トゥルーデ」
そう言うとノヴァクは隣に座るバルクホルンの頬にキスし耳元で囁く。
ノヴァク「愛してるよ、トゥルーデ」
バルクホルン「ひゃ！アレックス…私もだ、愛してる。」
バルクホルンは一瞬驚くがすぐに愛の言葉を返すとそのまま口付けする。
数秒キスするとノヴァクはそのままバルクホルンを押し倒す。
ノヴァク「トゥルーデ…愛してる、好きだ、トゥルーデ以外のことを考えられない」
バルクホルン「アレックス、私もだ。
世界で一番愛してる、私の前にいるときは私だけを見てくれ」
そう言うとまた二人はキスした。

基地の別のところではニコの部屋でニコとヤンとハルトマンとサーニャとエイラが駄弁っていた。
ハルトマン「ニコ！お菓子！」
ニコ「ショカコーラでいい？」
ハルトマンはお菓子をニコに求める。
それにニコはすぐにショカコーラの缶を取り出して渡す。
ヤン「しかし、あんたら三人落ち着いたか？勲章ラッシュ」
ニコ「まあね」
エイラ「大変だったなぁ…」
サーニャ「色々貰いましたよね」
ニコとサーニャとエイラはあの世界記録更新後世界各国から多くの勲章を受勲する大騒動に巻き込まれていた。
具体的に三人はガリアからレジオンドヌール勲章シュヴァリエ、リベリオンから殊勲十字章、ブリタニアからメリット勲章を受勲しサーニャは本国からオラーシャ帝国英雄と聖アレクサンドル・ネフスキー

勲章を受勲、エイラは本国から2回目のマンネルヘイム十字章にさらにスオムス白薔薇勲章とスオムス獅子勲章を受勲した。
さらには三人はマスコミの熱狂に巻き込まれそれから連日ラジオ・新聞・雑誌・映画などなどの取材を受け、更に戦時国債のキャンペーンにも動員される始末でつい最近になってやっとその熱狂が収まり日常を取り戻したのだった。
ニコ「暫くはゆっくりしたいかなぁ…まあ休暇取ってもどうせ何処行っても大変なことになるだろうし」
ヤン「だな、どの国のどの新聞を読んでも全部お前らの顔が写ってるぞ」
ニコはテーブルに倒れながら呟くと向かいでスオムスの新聞を読んでいたヤンが新聞でニコ達の顔を見つける。
三人はすっかり有名人であり下手に外に出れば取り囲まれて大変なことになった。
ニコ「ハハ…大変だなぁ…
下手に外に出れないからね」
サーニャ「ですね、久しぶりにお出かけしたいです。
ニコさんと一緒に…」
ニコ「だね」
二人は久しぶりに仕事以外で出かけたかった。
だが向かいのエイラは二人の話を聞きながら嫉妬に狂った表情をしていた。
ヤン「エイラ、どうした?すごい顔してるけど」
エイラ「な、なんでもない」
ヤン「ふーん、どうせあれか?愛しのサーニャちゃんがニコに取られるのが嫌なのか?」
ヤンの言葉にエイラは固まる。
ヤン「図星だな。エイラ、でももう遅いと思うぞ。
もうあれ完全にニコに惚れてる。」
エイラ「ぐぬぬ…」
ヤンはサーニャが完全にニコに惚れてるとエイラに伝える。

エイラも分かっていたがサーニャは完全にニコに惚れていた。
ヤン「ま、元気出せ。
　この間お前がスオムスから持って帰ってきたウォッカ飲んで忘れよう」
エイラ「ヤン～お前だけだ～いつも私の味方してくれるのは～」
エイラはそう言ってヤンに泣きつく。
ヤン「じゃあ飲んでくるわ」
泣きつかれたヤンはエイラを連れて部屋に戻り昼間（一応勤務中）から飲み始めた。
これが５０１の平凡な日常だった。

第21話・トラブル

１９４５年６月初旬、メッシーナ海峡、レッジョ・ディ・カラブリア沖

ここを一つの艦隊が航行していた。

それはリベリオン海軍の戦艦アリゾナ重巡洋艦インディアナポリスと軽巡ジュノーと駆逐艦８隻からなる艦隊だった。

「今のところ予定通りだな艦長」

「ええ。提督」

アリゾナのブリッジでこの艦隊を指揮するアイザック・Ｃ・キッド少将は隣に立っているアリゾナ艦長フランクリン・ヴァン・ヴァルケンバーグ大佐の話しかける。

ヴァルケンバーグ「しかし、どうして急に我々が派遣されたんでしょうか？

本来なら我々はトブルクのはずです。」

キッド「うむ、どうやらあの船に積まれてる品が問題らしい」

ヴァルケンバーグの疑問にキッドは前方を進むインディアナポリスを見る。

彼らは元々ジブラルタルで休養と整備を終えロンメル主体の大攻勢スーパーチャージ作戦支援のためトブルクに向かう予定だったが突然サンフランシスコからパナマ運河経由でニューヨークに寄り、大西洋艦隊の護衛の元ジブラルタルまで来たインディアナポリスを護衛しチュニス経由でターラントに向かいロマーニャ戦線を支援するよう命じられたのだ。

そのため彼らはジブラルタルを出航後、チュニスに向かいそこで休養と燃料補給、さらにロマーニャ海軍のフリゲートとコルベットの護衛の追加を行なった上でターラントに向かっていた。

ヴァルケンバーグ「しかし、不安ですね、マルタ島と連絡が取れないとは」

キッド「ああ、マルタ島の全島民は既にシシリー島に避難しているがあそこには約５万の兵員がいたはずだ。

その一人も連絡が取れないとは」

彼らの唯一の心配な点は数日前より地中海の要所マルタ島と連絡が途絶した件だった。

この件は地中海地域の連合軍に重大な不安を及ぼし特にアフリカのロンメルとロマーニャは過敏に反応した。

彼らにはマルタ島は目と鼻の先でありもしここを失えば補給に重大な影響を及ぼすからだ。

そして彼らもまたその影響を受け急遽航路をマルタ島とシチリア島の間を通過するルートからシチリア島の北を回りメッシーナ海峡を通過、レッジョカラブリアを回ってからイオニア海に出てターラント湾に入るルートに変更していた。

キッド「しかし、このせいで予定よりも3日も遅れるとはな。

我々が出る一週間後にジブラルタルを出た扶桑艦隊がシチリアの南、1日遅れで出航したリュッチェンスの艦隊は昨日ついたぞ」

ヴァルケンバーグ「文句はこの艦を設計した奴に言ってくださいよ。

このロートルはどんなに頑張ったって21ノットしか出ないんですから」

キッドはこの艦隊が予定よりも遅れていることに苛立っていた。

この艦隊はワシントンから「最大限敵と遭遇するのを避け、最も安全な航路を使用せよ」という命令を受けていたため予定よりも大回りのルートで予定よりも遅れていた。

それ以上に苛立ったのは艦隊の速力だった。

この艦隊は30ノット以上出せる高速艦が殆どだが旗艦のアリゾナが問題だった。

アリゾナの最大速力はアメリカ海軍の旧式戦艦と同じ僅か21ノット、それどころか現状出せるのは20．5ノット、さらに言えば航続速力は最大で15ノットであった。

そのため艦隊は15ノットでターラントに向かっていた。

キッド「はぁ、まあ明日の夜にはターラントだ。

イタリア女にキスされてディナーは本場のイタリアンだ」
ヴァルケンバーグ「そうならいいんですけど…」
キッド「念のために５０１に航空支援も要請してるから大丈夫だろう」
彼らは念のため５０１に航空支援を要請していた。
彼らはあらゆる手を使いこの任務を完遂しようとしていた。
何故なら、この艦隊が運んでいる物資こそ人類の切り札であり「先に完成させた者こそがこの先５０年世界を支配する」とした兵器だった。

その頃５０１では朝食の時間だった。
だが一人、宮藤の様子がおかしかった。
シャーリー「おお、宮藤。遅かったな」
ハインツ「今日はグラーシュとクネードリキだ。
俺たちが作った。」
シャーリー「味は私が保証するぞ、超うまいぞハインツの料理は」
宮藤「うん…」
キッチンからハインツとシャーリーが声をかける。
この日の朝食はハインツによるチェコ風の朝食であった。
そのため朝食はシンプルにチェコの伝統的なパンであるクネードリキが添えられたグラーシュにコーヒーか紅茶であった。
チェコ料理では朝食はシンプルにパンと付け合わせにパンかチーズを添えた程度でありグラーシュにクネードリキを添えただけでも十分豪華であった。
だが宮藤は目の前に置かれたグラーシュに添えられたクネードリキを見ても落ち込んでいるようだった。
ハインツ「ん？」
シャーリー「ん？」
リーネ「どうしたの？芳佳ちゃん。
具合でも悪いの？」
宮藤「ううん、どこも悪くないよ」

心配したリーネが宮藤に聞くが宮藤は大丈夫だと答えた。
ノヴァク「だったら食え。朝食はその日の体を作る」
バルクホルン「ああ、アレックスの言うとおりだ。
エネルギーを摂取しない奴が有事の際まともな戦闘ができると思うか？」
すると向かいに座るノヴァクとバルクホルンが食べるように言う。
宮藤「あ、はい…」
シャーリー「エネルギーって…」
ハインツ「贅沢だけどせめて味わってほしいけどな…」
二人の論調にハインツとシャーリーは引く。
するとハルトマンがめんどくさそうに言った。
ハルトマン「あーもう、朝っぱらから軍人の説教なんて聞きたくないよ…」
ヤン「それな」
ニコ「食事の時ぐらいは楽しく過ごしたいですから…」
バルクホルン「おいハルトマン！ヤン！ニコ！
それがカールスラント軍人のセリフか！」
3人の愚痴にバルクホルンが噛みついた。
ハルトマン「また始まった」
バルクホルン「いいか！ここはブリタニアと違って戦力が全然足りないんだ！
我々の任務は今まで以上に重いんだぞ！」
バルクホルンはハルトマンに説教をする。
ロマーニャ戦線はそもそもの戦略的な〝広さ〟が狭く縦深が深いため戦力としてはそれほど多くなかった。
だがその分個々の部隊の能力が重要視され同時に山岳地帯を利用した防衛線を築きつつあった。
特に主力となるロマーニャ軍はそれまでの頼りないという汚名を払拭し各地で勇戦、ネウロイを食い止めるどころか積極的な反撃を繰り返し主にミラノ方面でネウロイに大打撃を与え続けていた。
またアドリア海沿岸地域に展開するロマーニャ軍主体のリグリア

軍団と装甲軍団イタリアは機動防御戦でネウロイをポー川沿いから進ませずネウロイに出血と消耗を強いていた。
宮藤「いただきまーす！」
この二人の説教を見ていた宮藤は何かを思ったのか元気な声で言った。

その後宮藤、ペリーヌ、リーネは模擬空戦をしていたが地上から見ていたハインツと坂本はどうも調子がおかしいと感じていた。
ハインツ「妙だな、宮藤、あんなヘタクソだったか？」
坂本「ハインツも思うか？何かあったのか？」
宮藤はどうも見る限り時々ユニットの飛行が不安定になったりしているようだった。
ハインツ「とりあえず降りたら宮藤の身体検査とユニットを総点検させるか」
ハインツは宮藤が降りたらユニットの総点検と宮藤の身体検査をさせるとことにした。

夕方、ハインツは自室で宮藤の身体検査の結果と点検の結果を読んでいた。
ハインツ「あー、なんの異常もねえじゃねえか。
おい、ミラー、ニコ、どう思う？」
その結果はすべて異常なしであった。
その件をミラーと元航空機関士であるニコに聞いた。
ミラー「宮藤の不調ですかね？」
ニコ「とりあえず、実際に宮藤さんにユニットを履いてもらってそれで計測してもらえればいいのでは？
恐らく話を聞く限りエンジン周りでしょうし」
するとニコが名案を出した。
宮藤に実際にユニットを履かせて飛行中の状態を疑似的に再現、そ

のとき何が起きているかを確認するという手だった。
ハインツ「そりゃ名案だ。すぐにさせよう」
その案にハインツはすぐに実行した。
数分後、宮藤は格納庫に呼ばれ宮藤のユニットには倉庫から引っ張り出した各種計器がつけられていた。
宮藤「あの、ハインツさん。
何するんですか？」
ハインツ「ああ、早速だがユニットを履いてエンジンを回してくれ。
離陸する必要はない」
宮藤「分かりました。」
宮藤はハインツの指示通りユニットを履いてエンジンを回し始めた。
回し始めると計器を監視していたニコにハインツが聞いた。
ハインツ「どうだ、ニコ？」
ニコ「今のところ異常はないですね。
うん？混合比が少し高い」
今のところ異常はなかった。
計器にはエンジンが正常に起動し正常の出力が上がっているように出ていた。
ハインツ「よし、じゃあ宮藤、少しずつパワーを上げてくれ！」
宮藤「了解！」
ハインツの指示に宮藤は従いユニットの出力を少しずつ上げていった。
すると突然一つの計器に異常が発生した。
ニコ「ん？これだ！みんな！魔力流量計を見ろ！」
ニコは周りの整備士を含めた全員に一つの計器を見るように言う。
それはエンジンへの魔力流量計だった。
ハインツ「なんかあったのか？」
ニコ「見てください、今出力は５９％ですけど魔力流量計によると明らかに過剰な魔力が流れ込んでます。」
ニコは零式のエンジン周りのマニュアルを見ながら説明する。

宮藤は明らかにその出力、セッティングで過剰な魔力を流していた。
ニコ「このままいくと恐らく停止します。」
ハインツ「分かった、宮藤、最大出力まで上げてくれ！」
宮藤「了解！」
ハインツは宮藤に最大出力まで出力を上げ、魔力流量計が振り切れた直後、一つのランプが点灯、ユニットが停止した。
宮藤「あれ？おかしいな…なんで動かないの…」
ニコ「やっぱり、原因は魔力流量です」
ニコは原因を突き止めた。
原因は宮藤がユニットに過剰な魔力を流していることだった。
ニコ「宮藤さん、原因は宮藤さんがユニットに過剰な魔力を流しているからです」
宮藤「過剰な魔力？」
ニコは原因を突き止めると宮藤に説明する。
ニコ「宮藤さんは、明らかにユニットに対して過剰な魔力を流していたんです。
　そのせいで最大出力になった時にユニットの安全な魔力流量を超え、リミッターが作動、ユニットを強制停止したんです」
宮藤「なるほど…」
宮藤は無意識に過剰な魔力をユニットに流し、その結果安全装置が作動していた。
　エンジンへの燃料の過剰供給は極めて危険であるため安全装置がつけられていたが宮藤の流した魔力は明らかに過剰だった。
ニコ「だから、宮藤さん、まずはユニットに流す魔法の量を減らしてみて。」
宮藤「分かりました」
ニコは宮藤にアドバイスする。
　ニコのアドバイス通り宮藤は普段よりも少ない量を流してみる、するとユニットは正常に回りだし正常に出力を上げ最大出力まで上がった。

ハインツ「これで問題解決だな」
ニコ「ええ、ですけどこの状態だと宮藤さんが無駄な注意力を使うことになりますし、何より彼女の能力を１００％発揮できませんから早いうちに如何にかしないと。」
ハインツはこれで問題が解決したと思うがニコにはこれはただの小手先の改善であって根本的には何も解決していなかった。
ハインツ「そうだな。しかしそんなユニットのあて…
一つあったな、かなり難しいが」
ニコ「？」
宮藤の零式に代わる新しいユニットのあてにハインツは一つ心当たりがあった。
だがニコはわからず首をかしげる。
ハインツ「先週ジブラルタルから来た書類の中に間違えて５０１に送られた書類の中にターラントの扶桑海軍物資集積所宛の書類があってな、その中に今ターラントに向かってる扶桑艦隊に積まれた物資の書類があったんだ。」
ニコ「そうなんですか」
ハインツ「で、その目録の中に試作局地戦闘脚震電ってのがあったんだ。
こいつをせしめる」
ハインツのあて、それは間違えて送られた書類の中に入っていた現在大和に積まれターラントに送られている試作局地戦闘脚震電であった。
ハインツはこれをどうにかして５０１に送らせようと考えていた。
ニコ「えっと…それいいんですか？」
ハインツ「チャンスはある。明日、リベリオン艦隊の航空支援のためウィッチを数人ターラントに送るよう言われてる。
そこで俺とミラーとお前と宮藤を送る、予定だとリベリオン艦隊と同じ日に扶桑艦隊も入港予定だ。
そこで書類をいじって５０１に送るんだ」
ハインツは５０１に来ていたリベリオン艦隊支援要請を利用して

震電をせしめる気だった。
その考えに思わずニコは苦笑いする。
ニコ「えっと…そんなことして大丈夫なんですか?」
ハインツ「大丈夫じゃね?５０２のラルって狼もやったことあるらしいし」
ニコ「は、はぁ…」
ハインツの返答にニコは思わず苦笑いしかできなかった。
なおこのほぼ同時刻、北のエストニアとオラーシャの国境近くの飛行場で一人のウィッチがくしゃみをし部下の内科医に診てもらっていた。

第２２話：新たな翼（強奪）

翌日早朝、ウィッチたちはブリーフィングルームに集められていた。

ミーナ「連合軍司令部によると明日にはロマーニャ地域の戦力強化のため戦艦大和を旗艦とした扶桑艦隊が到着する予定です。」

坂本「いよいよ到着するか」

宮藤「え？大和？」

明日、ターラントに扶桑海軍の第二次派遣部隊が到着する予定をミーナは伝えた。

すると宮藤は大和という単語に反応した。

リーネ「芳佳ちゃん知ってるの？」

ニコ「対艦攻撃が多かったから結構各国艦艇を知ってるけど大和なんて聞いたことないな」

だがリーネや対艦攻撃が任務で多く、実際に輸送船の撃沈で柏葉付騎士鉄十字賞を受勲したニコには聞き覚えがなかった。

宮藤「うん、扶桑の港で見たことあるんだ。

ものすごく大きいんだよ」

リーネ「へぇー」

宮藤が大和について説明する。

大和は史実では史上最大の戦艦であり排水量６万４０００トン、全長２６３メートル、主砲は４６センチ三連装砲三基９門、副砲に１５．５センチ三連装砲を装備する史上最大の戦艦である。

そのサイズは横に並んだ戦艦が重巡クラスと間違えられるほどであった。

またこれ程の巨艦でありながら最高速力は２７ノットでこれは日本海軍の歴代の戦艦の中では巡洋戦艦として竣工した金剛級に次ぐ速力であり旋回性が非常に高いなど見かけによらず小回りの利く艦でもあった。

続いてハインツが関連して来ていた要請について話した。

ハインツ「で、同時に我々に同日到着予定のリベリオン海軍第６５

任務部隊から上空直掩の要請が来ている。
その援護のために数人ウィッチを出す。
俺とミラーとニコと宮藤でいいな？」
ミラー「いいですよ」
ニコ「ええ、洋上飛行には慣れてます」
宮藤「了解！」
ハインツがキッド艦隊の支援のためミラーとニコと宮藤を向かわせることにした。
だがそれにミーナと坂本が懸念を示す。
ミーナ「ハインツさん、大丈夫なの？」
坂本「宮藤はどうなんだ？」
二人は前日の夜に原因が分かったため一応トラブルは解決していることを知らなかった。
ハインツ「一応解決はしましたよ。
それにこの中じゃ艦隊を援護できるほど足が長いユニットは俺達のＭｅ４１０、ニコのＪｕ８８、シャーリーのＰ―５１、それに宮藤の零式だけじゃないですか」
ハインツがこの４人を選んだのは足の長さであった。
大型ユニットに属するＭｅ４１０とＪｕ８８、それに航続距離の長い零式ならばターラントを基地にして十分上空直掩が可能だった。
４人はすぐに５０１を出発、一路ターラントを目指して南に向かった。

―――――――――――

５０１を出発して１時間後、イオニア海のターラント湾の入り口付近では第６５任務部隊が航行中だった。
すでに第６５任務部隊は元々の戦艦アリゾナ、重巡インディアナポリス、軽巡ジュノーに駆逐艦８隻とロマーニャ海軍のガッビアーノ級コルベットガッツェーラとマランゴーネ、アニモソ級水雷艇アルディート、チクローネの護衛を受けていたがさらにイオニア海に入るとターラント艦隊のアルフレド・オリアーニ級駆逐艦ジョスエ・カルドゥッチ、ヴィットリオ・アルフィーエリ、カルロ・ミラベロ級駆逐

艦カルロ・ミラベロ、マエストラーレ級駆逐艦リベッチオ、シロッコ、水雷艇オーダチェ、スピカ級水雷艇チーニョ、ルポ、ペルセオ、アンターレス、ガッビアーノ級コルベットエゲリア、メルポメネの護衛の追加を受けていた。

その上空をハインツたちが飛んでいた。

ニコ「しかし、とんでもない大艦隊ですね…」

ハインツ「ああ、ただの艦隊にこんなたいそうな護衛をつけるか？普通」

ニコとハインツは艦隊を見下ろしながら言う。

艦隊は戦艦１、重巡１、軽巡１、駆逐艦１３、水雷艇１０、コルベット４隻の大艦隊になっていた。

普通の艦隊にこれ程の護衛を普通はつけるとは思えなかった。

何せ規模だけなら彼らの２０カイリ南を航行中の扶桑艦隊のほうが大きいはずだ。

ミラー「何か重要な物でも運んでるんですかね？」

ハインツ「さあ？そういう話は俺達の与り知らぬところの話だ」

ハインツにはこの艦隊が何を運んでいるかなど興味はなかった。

すると突然、無線が響いた。

『こちら扶桑海軍遣欧艦隊旗艦大和、５０１応答願います』

ハインツ「ん？こちら５０１分遣隊。何かあったのか？」

突然大和から無線が来た。

通信兵『大和で事故発生、医務室で爆発。負傷者多数至急救援を求む！』

それは大和で事故が発生したという連絡だった。

ハインツ「医務室で事故？やぶ医者でも乗せてたのか？まあいい、とりあえずニコと宮藤は大和に迎え。ここからなら２０カイリ南だ」

「「了解！」」

ハインツは医務室での事故に呆れるがすぐに宮藤とニコを向かわせた。

ほぼ同時刻、マルタ島沖２０キロの洋上を一隻の潜水艦が航行していた。
「艦長、見えました！マルタ島、グランドハーバーです！」
「見えたか！」
それはロマーニャ海軍のアドゥア級潜水艦シィレーだった。
シィレーはターラント艦隊所属の潜水艦でその性能からフロッグマン部隊やマイアーレ部隊の母艦として積極的に使用されていたがこの日はトリポリからターラントに向かっている最中にマルタ島に最も近いロマーニャ海軍艦艇としてマルタ島への偵察を命じられ急遽進路を変更、マルタ島のグランドハーバーに向かっていた。
艦長のブルーノ・ゼリク少佐は部下からの報告を受け双眼鏡を覗き２０キロ先のマルタ島を視認する。
するとそこには信じられないものがあった。
ゼリク「嘘だろ…ネウロイだ！グランドハーバーにネウロイだ！」
グランドハーバーにネウロイがいた。
それに全乗員が張り詰める、すると上空警戒をしていた見張りが報告した。
見張り「１１時方向！ネウロイ接近！」
ゼリク「何！急速潜航！１００まで急げ！」
ゼリクは即座に急速潜航を指示、深度１００ｍまで急速潜航した。
副長「まさかネウロイがマルタに…」
ゼリク「ああ、司令部に打電、マルタにネウロイあり。
早急なる対処を求む、地中海の制海権を失う可能性大」
ゼリクの報告はシィレーが一旦浮上後ローマに向け打電された。
だがこの時シィレーがニアミスしたネウロイは数百キロ離れた扶桑艦隊に向かっていた。

大和に向かったニコと宮藤は大和につくと医務室に急行した。
宮藤「あ…」

ニコ「酷いな…」
その惨状に二人とも驚いていた。
彼らは軽症患者はその場で手当て、重傷者は僚艦に移送されていると踏んでいたがそれでも非常に多かった。
すると二人に気が付いた水兵が声をかける。
水兵「宮藤さんとハルトマン＝ファルケンホルスト大尉ですか？」
宮藤「はい！」
すると水兵は重症患者を見せた。
水兵「一番の重篤患者です、ここの設備ではこれ以上は手の施しようがなくて…」
ニコ「酷い…他の艦に運べますか？」
水兵「無理です、もうすでに運べるだけ運びました。
ここにいるのは他の艦に運べなかった者だけです」
ここにいたのは僚艦に運べないほど重篤な患者ばかりだった。
宮藤「分かりました」
すると宮藤は治癒魔法を使い治療し始めた。
ニコ「凄い、出血が止まった…」
ニコが驚いていると治療を終えた宮藤がニコに指示した。
宮藤「よし、ニコさん、包帯を」
ニコ「了解」
本来なら階級が逆だがこの場では無視された。
そしてその後も次々と二人は患者の手当てをし１０人以上治療した。
そしてふと周りを見ると患者が一人もおらずニコが聞いた。
ニコ「これで最後ですか？」
水兵「はい、これで最後です」
ニコ「そうですか、ふう、終わった終わった…」
最後と聞くとニコは立ち上がって伸びをするとポッケからショカコーラの缶を出して一切れ取り出すと宮藤にも缶を渡す。
ニコ「はい、疲れてるだろうから。
疲れた時には甘いものが効きますよ」

宮藤「ありがとうございます。」
宮藤はショカコーラの缶を受け取ると一切れ口に放り込んだ。

そのころ第６５任務部隊では突如シラクーザのレーダー基地から緊急連絡を受けていた。
キッド「何!?マルタからネウロイ!?
　大型が一基こちらに向かっているだと!?」
キッドは受け取った無線を通信士に問い合わせていた。
すると後ろからアリゾナの副長が別の無電を持ってきた。
副長「提督、大変です。
　マルタのグランドハーバーがネウロイに占拠されました」
ヴァルケンバーグ「なんだと！」
キッド「それか！全艦総員戦闘配置！対空戦闘用意！
　ロマーニャの上空直掩を要請！全艦最大戦速！」
キッドはローマからもたらされた情報に合点がいった。
マルタから来たネウロイがこちらに向かっているのだ。
それに艦橋は慌ただしくなる。
キッド「ネウロイの予想進路と会敵予想時刻は？」
参謀「どうもネウロイは艦隊の南、２０カイリから３０カイリのあたりを一時間後に通過する可能性が高いです」
キッドが予想時刻を聞くとネウロイは一時間後に艦隊の南２０カイリから３０カイリを通過する可能性が高かった。
だが
キッド「その位置は扶桑艦隊の位置じゃないか！
　すぐに警告を出せ！タフィ２を分離して援護に向かわせろ！
　上空直掩のウィッチもだ！」
その位置は扶桑艦隊であった。
キッドは扶桑艦隊への警告と第６５任務部隊第２群通称タフィ２を分遣することにした。
タフィ２は軽巡ジュノーを旗艦とする駆逐艦ドレクスラー、クー

パー、マナート・L・エーベル、メレディスの4隻のアレン・M・サムナー級駆逐艦で編成されていた。
タフィ2は基本的に第65任務部隊の臨時編成的要素の強い部隊であるため指揮官にはジュノー艦長ライマン・K・スウェンドン大佐が充てられていた。
キッドの命令を受けてジュノーと駆逐艦4隻は回頭、一路南下して扶桑艦隊の救援に向かった。
さらにキッドは上空直掩のハインツとミラーもネウロイに差し向けた。

第65任務部隊からの警告は即座に扶桑艦隊に届いた。
通信兵「報告、第65任務部隊より大型ネウロイが接近中とのことです」
杉田「バカな、ここは安全圏のはずだぞ」
イオニア海、特にレッジョカラブリアの東のターラント湾は比較的安全なはずの海域であるのに大型ネウロイが接近しているという連絡を受け大和艦長の杉田は驚く。
通信兵「マルタから来たとのことです」
杉田「マルタだと！」
更にネウロイが来たのが地中海のチョークポイント、マルタと聞いてさらに驚いた。
副長「艦長」
杉田「く、全艦戦闘準備、急げ！」
杉田はすぐに戦闘配置を命じた。
すぐに全艦の艦内にサイレンが響き渡る。
それは医務室で休憩中だったニコと宮藤にも聞こえた。
ニコ「ネウロイ？」
宮藤「行きましょう、ニコさん」
ニコ「急ごう」
サイレンを聞いた宮藤とニコは急いで格納庫に向かいユニットを

履くとエンジンを回し始めた。
だが宮藤のユニットがエンジンを回した直後、爆発した。
宮藤「え？」
ニコ「何が…とりあえず脱いで！ユニットの中を開けて！
まだ時間はある！」
すぐにニコはユニットを脱ぐとストライカーユニットのエンジン部分を開けるように宮藤に言う。
宮藤は言われた通り脱ぎニコは近くに遭った工具箱からドライバーを取り出してエンジン部分のカバーを取り外し中を確認する。
ニコ「酷い、中で燃料が漏れてるぞ…燃料系のどこかに漏れが…
あった！強制停止弁付近で燃料パイプが破断してる！
宮藤さんが過剰に魔力を流し続けてたから金属疲労が早まったんだ…」
宮藤のユニットが止まったのは強制停止弁付近で燃料パイプが破断、そこから魔力が漏れエンジンに燃料がかぶりそこで爆発してしまったのだ。
ニコ「ここで修理は無理だ！エンジンを丸ごと交換しないと…」
宮藤「そんな…」
その損傷の酷さはエンジンを丸ごと交換しないとダメなほどだった。
それに宮藤は落胆する。
ニコ「シャイセ、代わりのユニットは…」
ニコは周りを見渡して代わりのユニットを探すが周りにあるのは水上機とその整備道具程度だった。
ニコ「ないか…どうすれば…」
ここでニコは昨日ハインツが言っていたことを思い出した。
ニコ「そうだ！震電だ！
宮藤さん！この艦の積荷に震電があったはず、それを探して！」
宮藤「震電？」
宮藤はニコの言う震電が分からず首をかしげる。

ニコはハインツが昨日、「大和に震電という扶桑の試作ユニットが積まれている」と言っていたことを思い出したのだ。
ニコ「この艦に積まれて輸送中のはずの試作局地戦闘脚だ！
この艦のどこかに積まれてるはず、それを探して！」
宮藤「分かりました」
すぐに二人は格納庫を隅々まで探す。
だがそのようなものは影も形もなかった。
宮藤「ニコさん、本当に積まれてるんですか？」
ニコ「ヴァレンシュタイン少佐の話では積まれてるはずなんだ。
どこかに…」
するとニコは格納庫の床のあることに気が付いた。
ニコ「宮藤さん、あれもしかしてエレベーター？」
宮藤「え？」
ユニットの発進台のそばに発進台が一つ入るサイズのエレベーターの蓋らしきものがあった。
すぐにニコは周りを見回し、エレベーターのスイッチらしきものを見つけ動かす。
するとその蓋が開き中からユニットが出てきた。
宮藤「もしかして…」
ニコ「これだ！これが多分震電だ！
宮藤さん、ぶっつけ本番だけど急ごう！もうネウロイはそこまで来てるはずだ！」
そういってニコは自分のユニットに走る、宮藤も急いで震電を履き自分の九九式を手に取る。
そして二人は無理やり離艦しようとする。
その様子は艦橋から見ていた杉田達にも見えた。
副長「あ、あの機体は試作型の…」
杉田「宮藤さん、危険だ！その機体は試験飛行も済んでない！」
だがそれでも二人は無理矢理にでも飛ぶつもりだった。
宮藤「ニコさん、大丈夫なんですか？」
ニコ「何かあったらヴァレンシュタイン少佐がどうにかしてくれま

す。
　早く行きましょう、時間がない」
二人は杉田の注意を無視すると無理矢理発艦した。
発艦すると宮藤は鈍重なＪｕ８８を履いたニコを置いて先に行ってしまった。

――――――――――――――――

ハインツ「お、来たか宮藤」
ミラー「あれ？そのユニット…」
宮藤はニコを置いて先に上空に来たハインツ達と合流した。
そしてミラーは宮藤が見慣れないユニットを履いていることに気がついた。
宮藤「えっと、震電っていうユニットらしいです。
　ユニットが壊れたので大和にあるのをもって来ちゃいました」
ハインツ「ハハ、港に着いてから書類を弄ろうと思ってたのに船の上から強奪とは…」
ハインツは宮藤の話を聞いて苦笑いする。
するとやっとこさ追いついたニコもやってきた。
ニコ「ふぅ、やっと追いつきました…
　速いですよ…全然追いつけませんでしたよ…」
ニコは宮藤のあまりの速さを愚痴る。
その速さは相当なものでありニコは加速を使ってもなお追いつく事は出来なかった。
ハインツ「ふーん。まあいい。
　とりあえずそろそろ頃合いだな。」
ハインツは時計を確認すると双眼鏡を覗いて周囲を捜索する。
そしてすぐに南西方向から来るのを確認した。
ハインツ「ネウロイは…いたぞ！
　相当デカイ、爆弾みたいな形をしてる、戦闘用意」
ハインツは確認するとすぐに戦闘用意を指示した。
その命令のにミラーは即座にＢＫ―５を構え宮藤とニコも武器を

構える。
ハインツ「報告通り大型だな、ミラー射撃用意。
７００を切ったら撃て」
ミラー「了解！」
ハインツの指示にミラーは返事をする。
ハインツ「ニコ、宮藤、ネウロイを拘束しろ」
「了解！」
ニコと宮藤にはネウロイの拘束を命令した。
その命令を受けるとニコと宮藤は先陣を切ってネウロイに向け突撃する。
ニコ「僕が上！君が下、いいね？」
宮藤「了解！」
ニコは飛びながら宮藤に指示する。
ニコ「よし、そろそろくるぞ、３、２、１、今、ブレイク！」
ニコは固有魔法を使いネウロイの攻撃を回避する。
回避するとニコは上に、宮藤は下に回り込むと攻撃を開始した。
ニコ「よし、これでどうだ！」
ハインツ「距離６５０！撃て！」
ハインツはネウロイの注意がニコと宮藤に向いた隙にミラーに発砲を命じる。
ミラーの砲撃は吸い込まれるようにネウロイを直撃し、貫通する。
ハインツ「良いぞ、連続射撃五発！」
続いてミラーはネウロイに向け連射、そして一発がコアの命中しネウロイを撃破した。

その日の夜、ミーナと坂本、そしてハインツは格納庫の置かれた震電を見ていた。
ミーナ「これが扶桑の新型機？」
ハインツ「らしい、えっと、Ｊ７Ｗ１震電って奴だ」
坂本「一時は開発が頓挫したと聞いたが宮藤博士からの手紙によって完成したそうだ」

震電は開発が難しく一時開発が頓挫しかける事態となったが突然来た宮藤博士、即ち宮藤の父親からの手紙によって完成した。

ミーナ「博士の？

まるで宮藤さんの専用機みたいな話ね。

でも…」

ミーナは横のハインツを見る。

ハインツは気まずそうに目をそらす。

それを見てミーナは溜息をつく。

ミーナ「はぁ、まさか強奪するとはね…

とりあえずネウロイを撃破できたから良かったものを…」

ハインツ「上から文句が来たのか？」

ミーナ「形式的なのがね、まあ元々色々テストをしてからうちに送る予定だったから問題は無かったそうよ」

ハインツ「そ、んじゃあ俺はそろそろ寝る。

おやす…」

ハインツは寝ようと部屋に戻ろうとするとミーナが首根っこを掴んだ。

ミーナ「ハインツさん？言っとくけど震電の配備と強奪に関する書類は全部あなたに押し付けるつもりよ。

逃げないで仕事しなさい？

大丈夫よ、私が監視しておくからね？」

逃げようとするハインツをミーナが捕まえものすごい黒いオーラを出しながら伝える。

その恐怖にハインツは振り返ることもできずただ蛇に睨まれた蛙のように固まるだけだった。

ほぼ同時刻、ターラントの港の一角には物々しい警備が敷かれていた。

憲兵、カラビニエリ、海兵部隊など合計数百人が守るその一角には「トップシークレット」や「許可のある者以外の開封を禁ずる」、「ＤＯＮＯＴ　ＯＰＥＮ」などと書かれた巨大な箱が次々と停泊中のイン

ディアナポリスから降ろされていた。
そしてその中をアイケとバルボが護衛を連れて歩いていた。
一行はその大量の箱の中の中でももっと大きい箱の前で止まった。
アイケ「これか…中身を見せてくれ」
アイケは中身を見せるよう指示する。
すると木箱の蓋の上が丁寧に外され中から巨大な丸い球体、心なしか昼間扶桑艦隊を襲ったネウロイに似たものが覗いた。
アイケ「これが…これこそが…」
バルボ「戦争を変える兵器、人類の生み出した神の火…」
その箱の中にあったもの、それは史実において１９４５年８月９日日本時間午前１１時２分、九州地方長崎県長崎市の上空高度５０３ｍ＋―１０ｍで炸裂したプルトニウム型原子爆弾ＭａｒｋⅢ、通称ファットマン。
人類史上最も恐るべき兵器の最も最初の子供であった。
これこそが彼らの切り札であった。

第２３話：宝探し

ロマーニャ南部ターラント郊外の軍用飛行場に銀色の翼が並んでいた。

その機は巨大で他の機、ロマーニャ空軍では最大クラスの機であるサヴォイア・マルケッティＳＭ８２カングーロが小さく見えるほど巨大であった。

バルボ「ほお、これがリベリオンの最新鋭機Ｂ―２９か…」

「はい、閣下。Ｂ―２９シルバープレート。

あの爆弾を投下するためだけの特別仕様機です。」

この日、バルボは新たに設立された爆撃航空団第５０９統合爆撃航空団を視察していた。

バルボの横で第５０９統合爆撃航空団司令ヴァルター・マリエンフェルト大佐が説明する。

第５０９統合爆撃航空団は新兵器原子爆弾投下専門部隊で装備はＢ―２９シルバープレート３０機、３個飛行隊と各種特殊地上部隊から成る大規模な部隊であった。

その上人員は各国の精鋭爆撃機乗りが掻き集められ統合という称号がついていた。

バルボ「君たちがこのロマーニャの切り札だ。

期待しているよ」

マリエンフェルト「ありがとうございます、閣下。」

バルボが褒めるとマリエンフェルトは感謝の言葉を述べる。

するとバルボが聞いた。

バルボ「ところで、いつになったら実戦投入可能になる?」

マリエンフェルト「恐らく7月初頭前後かと。

元々機材の訓練等に関しては半年前からやっていましたから全員完熟してますがパンプキン爆弾の訓練はロマーニャに来てからです。

その上パンプキン爆弾の数も限られてますから…」

この部隊は元々リベリオンで半年以上訓練が行われていたため乗員の練度は非常に高かったが原子爆弾投下のための訓練はまだ始めて2週間程度、それも訓練用の爆弾であるパンプキン爆弾の不足から数回しか投下してなかった。

バルボ「分かった、パンプキン爆弾は私が手配しよう。

我々にはもう時間がない、今、こうしている間にも共産主義者は東欧を西に西にと進んでいる。

連中がベルリンに入る前に我々がベルリンに入らなければならないのだよ」

彼らには時間がなかった、それは政治的な意味でである。

すでにオラーシャ軍は東部戦線の最終局面に駒を進めつつあった。

彼らは一気にベラルーシを解放するとポーランドに雪崩れ込みワルシャワの東側、プラーガに近づきつつあった。

オラーシャがワルシャワを制圧し、東プロイセンに入るまで、それまでにヴェネチアのネウロイを片付けなければならなかった。

だが問題は山積みだった。

マルタを奪われ背後に強大な敵を抱えることになったのだ。

その頃501では海水浴にしゃれ込んでいた。

そもそも501とマルタは1000キロ以上離れている上に今のところマルタのネウロイの活動はそれほど激しくなかった。

だが喜ぶウィッチを後目にある3人は冷ややかな目をしていた。

ハインツ「海なんてクソ食らえ」

ミラー「今日だけは何でもいいから出撃したいです」

ノヴァク「マルタにネウロイがいるのにこんなことしていいのか？」

まったく泳げない3人は楽しもうという気さえなくすぐにでも部屋に戻りたがっていた。

そんな三人にバルクホルンとシャーリーが声をかける。

バルクホルン「アレックス、泳ぐ練習を手伝おうか？」

シャーリー「ハインツ、私が泳ぎを教えてやるぞ」

二人はハインツたちが泳げるようになるのを手伝おうとしていた。
ハインツ「まあいいけどさ…」
ノヴァク「トゥルーデ、いいのか？」
二人はそう言って泳ぐ練習を始めた。
唯一ミラーはリーネに教えてもらおうと思っていたがリーネたちは近くの岩場で別の訓練をしていた。
坂本「いいか、訓練だからと言って気を抜いてはいかんぞ！」
ミーナ「久しぶりだから気をつけてね」
ヤン「あー、なんだこれ？」
ニコ「なんでしょうか？」
リーネ「この訓練だったんだ…」
宮藤「またやるんですか…」
ペリーヌ「なぜ私まで？」
岩場の上にいるリーネ、ペリーヌ、宮藤、ヤン、ニコにミーナと坂本が声をかけていた。
それは一年前ハインツたちもした訓練だった。
坂本「さっさと飛び込め！」
愚痴を言う５人に坂本が叫ぶと５人は一人ずつ海に飛び込んだ。
するとすぐにニコが出てきた。
ニコ「ふう、何とかなった…」
坂本「ニコ、早いな」
坂本はニコの早さに感心する。
ニコ「ええまあ。地中海と北海で一回ずつ墜落してますから。
まだ片手折った状態で水温が一度で荒れ狂う冬の北海の中でＪｕ８８の機内から怪我をした同僚をサメから守りながら脱出して一晩凍えながら漂流するよりかはずっとマシですよ」
ニコはこの中では一番洋上戦闘経験が多く、バトル・オブ・ブリテンとマルタ島攻防戦でそれぞれ一回ずつ北海と地中海に墜落していた。
前者は衝撃で左手を折りながらも負傷した副操縦士を担いで荒れた北海の海の中を泳ぎながら何とか水面に上がりサメから守りつつ

機体に装備された筏で丸一晩漂流、翌日運よくゼーノートディーンストのＤｏ２４Ｔに発見され救助され、後者はマルタ島攻防戦でスピットファイアの攻撃によりエンジンに被弾、何とかシチリア島を目指して飛び続けたが辿り着けず墜落、漂流した末幸運にもシチリア島に流れ着いて助かった経験だった。
その過酷な話にミーナと坂本は苦笑いする。
続いてヤンとペリーヌがほぼ同時に上がってきた。
坂本「流石だなペリーヌ」
ペリーヌ「は、はい…日頃のご指導の賜物です。
何時如何なる状況において…」
するとペリーヌの後ろから手が伸びペリーヌをつかんだ。
宮藤「ぐっ…」
出てきたのは宮藤だった。
宮藤は溺れそうになりペリーヌを掴むが更に溺れかけたリーネもペリーヌを掴み3人は仲良く沈んでいった。
ヤン「あー、大丈夫なのか？」
ニコ「さ、さあ？」
その状況にニコとヤンは心配した。

それから少しして、5人は訓練が終わるとリーネはすぐにミラーの元に、ヤンとニコはエイラとサーニャに合流した。
リーネはミラーの前に寝転がりミラーに話す。
リーネ「ミラーさん、疲れました…」
ミラー「お疲れ様」
そう言うとミラーは寝転がったリーネの頭をなでる。
それにリーネはミラーに近づくとミラーの太ももに自分の足を乗せた。
ミラーはリーネの積極的な行動に驚いた。
ミラー「リーネ？」
リーネ「駄目でしたか？」
ミラー「いいよ、どうせまだ何もしてないしリーネに泳ぎ方教えて

もらおうと思ったけど疲れてるみたいだから後にするよ」
ミラーは泳ぎを教えてもらおうと思っていたがこの調子では無理と思い諦めることにした。
そのそばではエイラとサーニャとニコとヤンが話していた。
ヤン「いやぁ、まさかあんな目に合うとはな…」
ニコ「ですね…」
サーニャ「大変だったみたいですね、ニコさん」
二人は訓練のことをサーニャとエイラに話していた。
エイラ「まあ私とサーニャも最初来た時させられたからな」
ニコ「そうなんですか」
ヤン「大変だな」
するとヤンが隣に座りエイラを見て思い出した。
ヤン「ところで、日焼けは大丈夫か？
北欧と違ってこっちは結構簡単に焼けるぞ。
外で1、2時間昼寝しただけで結構焼けたぞ」
「あ」
ヤンが日焼けのことを聞くと二人はすっかり忘れていたようだった。
ニコ「二人とも北欧出身でしたね。
とりあえずパラソル持ってきますね、確か基地から一つ持ってきたはず」
ニコは二人を心配して基地から持ってきたパラソルを探しに立ち上がった。
ニコがパラソルを探しに行ったのと入れ違いで今度は海からハインツとノヴァクがバルクホルンとシャーリーと共に上がってくるとミラーの前に倒れた。
ハインツ「はぁ…疲れた…泳ぐって結構疲れるんだな…」
ノヴァク「トゥルーデ、もう動けない…」
疲れ切って動く気力さえ失った二人にシャーリーは苦笑いするがバルクホルンはノヴァクに喝を入れる。
バルクホルン「情けないぞアレックス！

軍人たるものこの程度弱音を吐くな！」
ノヴァク「トゥルーデ…寝る」
ノヴァクはもはや言い返す気力さえなく顔を突っ伏した。
それにバルクホルンはため息をつく。
バルクホルン「はぁ、まあいい。
慣れないことをしたんだ、少し休憩しよう。
泳ぎ続けるのも体に悪いしな」
ノヴァク「体冷えるからな。それに夏風邪は治りにくいし」
話しているとバルクホルンはノヴァクの隣に寝転がった。
バルクホルン「夏風邪をひいてもアレックスが看病してくれるなら問題ない。
アレックスが風邪をひいても私が看病するから安心しろ」
ノヴァク「逆にうつすぞ、風邪。
こんな風にキスばっかりしてな」
そう言ってノヴァクはいつものようにバルクホルンにキスする。
バルクホルン「なら私が風邪をひいても同じだな」
そう言うと今度はバルクホルンからキスした。
二人はすっかり自分達の世界に入り周りの目を無視してイチャつく。
二人のイチャつきに気を遣い周りの人間は二人から目を逸らした。
そうこうしているとニコがパラソルを持って帰ってきた。
ニコ「ごめん、ちょっと探すので手間取って。」
ニコは謝るとサーニャとエイラの後ろにパラソルを立てた。
ここでふとニコは気がついた。
ニコ「ところで宮藤さん、ルッキーニさん、ペリーヌさんは？」
「え？」
ニコがふとこの三人がいないことに気がついた。
すぐに周りを見回すが近くにいたのは何か話しているミーナと坂本、一人で遊んでいるハルトマン程度だった。
シャーリー「おかしいなぁ…ルッキーニの奴、魚採りに行くとか

言って岩場に行ったんだけどなぁ…」
リーネ「芳佳ちゃんとペリーヌさん、どこ行ったんだろ?」
3人がいない事に気がつきシャーリーとリーネは心配になりミーナと坂本のところに向かい、それに続いてエイラとサーニャ以外もミーナの元に向かった。
ミーナ「ルッキーニさんと宮藤さん、ペリーヌさんがいない?」
シャーリー「ああ、魚を採りに行くとか言って岩場の方に行ったっきり戻ってこないんだ」
ミーナはシャーリーとリーネから話を伝えられるとミーナは驚いた。
話を聞いた坂本はある事を思い出した。
坂本「確か宮藤たちも訓練後へ岩場に行ったはずだが」
ミーナ「行ってみましょう」
訓練後宮藤達も岩場に行ったという話を聞いてミーナたちは岩場に向かう事にした。
だが途中で水中に洞窟があることが分かると泳げないミラー、ハインツ、ノヴァクと疲れて泳げないリーネは置いてきぼりにされミーナ、坂本、バルクホルン、シャーリー、ニコ、ヤンだけが向かった。
そして洞窟に入るとバルクホルンが地面を触り確認する。
ミーナ「どう?」
バルクホルン「ちょっと前に誰かが歩いてる。
この奥に入って行ったんだろう。」
微かに残る痕跡から誰かが通った事を確認した。
だが目の前には二つの穴があった。
シャーリー「どっちに行ったんだ?」
坂本「二手に分かれるか」
ミーナ「分かれるのは危険だわ」
ミーナは分かれるのは危険だと思いどちらか一方から探す事にした。
ニコ「じゃあ、左から行きます?」
ミーナ「いえ、右から行きましょう」

ニコが左を提案するがミーナは右を探す事にした。
だが実は宮藤達はニコの言った左に行っていた。
その為間違った方向に向かったミーナ達はいないことも知らずに洞窟を進んでいった。
するとハルトマンが愚痴った。
ハルトマン「全く手間掛けさせるなぁ…」
シャーリー「でも探検みたいで楽しいな～」
ヤン「だな。変なアドレナリンが出てるのがわかるよ。
　実は結構こういうの好きなんだよ」
バルクホルン「全く遊びじゃないんだぞ」
ヤンとシャーリーは能天気に言うがバルクホルンが注意する。
ヤンは歴史好きであるためこう言うものは好きだった。
ふと坂本はあることの気がついた。
坂本「人口の洞窟のようだが…」
ニコ「そうみたいですね。煉瓦の材質とかからして15～7世紀ごろですかね？」
坂本が人口の洞窟だと言うとニコが煉瓦の材質や風化度合いから時期を推察した。
それに坂本は感心する。
坂本「詳しいな」
ニコ「実は骨董品の収集が趣味で、結構この手のものは詳しいんですよね」
ミーナ「そうなのね。
　私達が基地にしているところは元々は古代のウィッチの遺跡だったからこの洞窟もその一部じゃないかしら？」
ヤン「それにしては近代的すぎる。
　こりゃ中世後期から近世初期だからおそらく遺跡の後に作ったんだろう」
ミーナの想像に歴史に詳しいヤンが補足する。
ヤンはこの遺跡が地上の遺跡とは別の時代のものと睨んでいた。
すると一行は大きな壺を見つけた。

ミーナ「これは随分立派な壺ね」
ミーナが感心するがその横でニコは別の事を考えていた。
ニコ「うーん、暗くてよく見えないな。
　ちょっと下ろしてみるか、ヤンさん、肩貸して」
ヤン「あ、ああ」
ニコは器用にヤンの肩に上がると壺を手に取った。
ニコ「よいしょっと。うん？この壺何か入ってる」
ニコは中に何かが入っている事に気がついた。
ニコとヤンは壺を慎重に下ろすと壺の蓋を開けた。
すると中から微かにアルコールの匂いがし赤い液体のようなものが入っていた。
ニコ「もしかしてこれ、ワイン？」
ヤン「ほんとだ」
ミーナ「ワインね」
中に入っていたのはワインだった。
ふとニコが聞いた。
ニコ「で、これどうやってもって帰る？」
ヤン「持って帰る気なのか…」
ニコ「状態がそこそこいい壺だよ？
　持って帰って詳しく調べないと分からないけどそれなりのお値打ち物だと思う」
ニコの骨董品コレクターの血が騒いでしまいニコはこの壺を持って帰ろうとしていた。
だがニコにバルクホルンが注意する。
バルクホルン「ニコ、それは後だ。
　まずは宮藤たちを探すのが先だ」
ミーナ「ええ。多分この奥かしら」
壺は後回しに一行はさらに奥に進んだ。
すると広い部屋のようなところに入り、そこにはルッキーニ達もいた。
シャーリー「お、ルッキーニだ」

バルクホルン「宮藤たちもいるな」
シャーリー「おーい！何やってたんだよー！」
シャーリーたちを見たルッキーニ達もシャーリーたちに声をかける。
宮藤「シャーリーさん！」
ミーナ「心配したのよ」
坂本「無事のようだな」
ニコ「ですね…」
宮藤たちは無事そうであった。
それにミーナ達は安心した。

その日の夜
ハインツ「しかし物騒だな、この基地の下にそんなものがあるとは」
ミラー「宝を守る魔法が残って、その魔法が巨大な石像を動かすとかどこの冒険小説ですかね？」
ハインツとミラーは昼間あったことを話していた。
昼間、ペリーヌ達は偶然にも宝箱を見つけその中に入っていた地図を元にあの洞窟に向かい途中、合流した広い部屋で巨大な動く石像と遭遇したのだ。
結局大した宝など見つからなかったが。
ハインツ「まあペリーヌがガリアの復興に宝を使いたかったんだろうがそもそもなぁ…」
ミラー「大混乱で内乱中、アルデンヌ地方と南部にゲリラが山ほど。その上最近は北部にも飛び火し始めてる、こんなところで復興なんて無茶ですよ。
すぐ全部焼かれますよ」
ペリーヌが宝に拘ったのはガリアの復興のためだったが現状を考えればそんなのは無茶極まりなかった。
何せガリアは内乱から各地で、特に南部の山岳地帯とランス周辺、そしてセダンからアルデンヌ地方に至る一帯で激しいゲリラ戦が展開されていた。

それはロマーニャ軍のニッツァとサヴォアの併合後悪化の一途をたどりゲリラ戦はペリーヌ達の北部にも飛び火しつつあった。
そのため各地では対ゲリラ戦と称して虐殺や焼き討ちが相次ぐ血で血を洗う血みどろの戦いが続いていた。
ハインツ「ま、うまくいけばいいけどな」
ミラー「ですね」
二人は窓の外を見ながらつぶやいた。

第２４話：オペレーションＣ３

数週間前、シチリア島、パレルモ。

このシチリア島最大の都市で数か月前から激しいマフィア掃討戦が続くこの街にあるロマーニャ軍シチリア軍管区司令部で二人の将軍が会談していた。

デ・ボーノ「で、いくら兵力がいる？」

一人はロマーニャ陸軍を仕切るデ・ボーノ、もう一人はエルヴィン「最低上陸部隊に３個師団、空挺部隊に２個師団だ」もう一人は新編成されたリビア軍集団総司令官エルヴィン・ロンメル大将だった。

彼らが話していたのはマルタ島攻略「Ｃ３」に関するものだった。

マルタ島は彼らの管轄ではロマーニャ管区ではなくアフリカ管区だったがアフリカにはマルタを取り返すだけの戦力はあった、だが輸送力が足りず、何よりその部隊は一週間前にリベリオンからアルジェリアに来たばかりだった。

とてもじゃないが投入などできなかった。

そうなれば残された戦力はチュニスを拠点とする第２６水陸両用旅団、昨年のマロニー大将の反乱―ドーバー事件と名付けられた事件―でドーバー市で孤立無援の中包囲下で奮戦し反乱ブリタニア軍を撃退、独力でドーバーを解放した戦果を挙げたこの部隊でさえ独力ではマルタの解放など不可能であった。

そこで彼らはロマーニャを頼った。

そもそもマルタ島はシチリア島に近いため攻略拠点はリビアよりむしろシチリア島が適任だった。

デ・ボーノ「そうか、ならサン・マルコとデチマ・マス師団と海軍のＦＮＳを出そう。

これに第２６旅団を追加すれば３個師団規模だ」

デ・ボーノは精鋭の海兵師団サン・マルコとデチマ・マスの二個師団、そして海軍特殊部隊ＦＮＳを投入するつもりだった。

これに第２６水陸両用旅団が加われば十分な戦力となった。

エルヴィン「それだけか？空挺部隊は？
ネンボゥかフォルゴーレのどっちでもいいだぞ？」
デ・ボーノ「どちらも出せない。
その二個師団はリグリア軍団の主力だ。」
エルヴィンは第１８４空挺師団ネンボゥか第１８５空挺師団フォルゴーレのどちらかを求めた。
だが両師団はリグリア軍団の主力としてポー川河口付近の戦闘に参加中であり引き抜くことは難しかった。
エルヴィン「なら空挺部隊はどうする？」
デ・ボーノ「再編中のチクローネ師団を投入する。」
代わりにデ・ボーノは再編中の第１８３空挺師団チクローネを投入することにした。
この部隊は再編成中だったが一個連隊規模の戦闘団程度なら分遣可能だった。
エルヴィン「そうか、ウィッチ部隊も出すよな？」
エルヴィンは続いて航空支援の要、ウィッチ部隊を聞いた。
デ・ボーノ「無論、マルタは地中海の要所だ。
５０１を出す」
エルヴィン「５０１？なら私から一つ提案したい。
アフリカからも一人出そう」
エルヴィンはデ・ボーノに提案した。
デ・ボーノ「誰を出す？」
エルヴィン「通称アフリカの星だ。
あの少しばかり生意気な少女だが腕は認めよう。
そいつと、５０１のハルトマン＝ファルケンホルストを出してくれ。」
エルヴィンの提案にデ・ボーノは驚いた。
デ・ボーノ「ふむ、いいだろう。
作戦開始はいつ頃がいい？」
エルヴィン「最低２週間後だ。」
デ・ボーノ「輸送船の都合と訓練の都合もある、３週間後でどうだ

？」

エルヴィン「いいだろう、これで決まりだな」

そう言うと二人は握手した。

だがマルタ攻略作戦を実行するにはまだひと悶着があることを知らなかった。

その数日後、ローマの陸軍参謀本部ではデ・ボーノ、バルボ、レニャーノ、アイケ、チャーノがいた。

彼らはこの日突如マルタを支配するブリタニアから突き付けられた内容の話し合いをしていた。

チャーノ「ブリタニアは我が国主導の攻略が不満のようです」

バルボ「まあそうだろうな。

我々だってシチリアが奪われてリベリオン主導で取り返そうとするなら嫌がるね」

彼らが話し合っていたのはブリタニアがC3作戦にケチをつけたことだった。

というのもマルタ島はブリタニア領である、そしてそれを解放しようとするのはロマーニャ主導でロマーニャ軍が主体であった。

アイケ「それに連中はニッツァとサヴォアの二の舞になるのを恐れてるんだろうな」

デ・ボーノ「わかっとるよ、アレは欲をかきすぎた」

アイケが横に座るデ・ボーノを睨みながら言う。

ブリタニアがロマーニャ主導で攻略するのを嫌がった二番目の理由、さらに言えば最大の理由がニッツァとサヴォアの二の舞になることだった。

まず一般的に史実で未回収のイタリアとされるのはニッツァとサヴォア、南チロル、ヴェネチア・ジュリア、フィウメ、ダルマチア、ゴリツィア・グランディスカ伯国、コルシカ島、チュニス、スイスのティチーノ州とグラウビュンデン州、そしてマルタ島である。

そして彼らが目指すのは完全なる統一イタリア国家の建設であった。

その一環で混乱が続くガリアからニッツァとサヴォア、さらにはコルシカ島を併合する強硬策に出た、結果この策はガリアのナショナリズムの高揚とガリア政府の形骸化、そしてガリアの分割が開始され各国はガリアの植民地や領土を切り取り始め、カールスラントは領土問題が続いていたアルザス・ロレーヌを秘密裏に切り取り中央アフリカへの影響力を拡大、ブリタニアはセネガルとチャドの奪取を狙い、リベリオンと扶桑は東南アジアへの影響を見越してインドシナ半島を奪おうとしていた。

このせいでガリアは内乱から紛争が勃発、各地でゲリラと連合軍の戦闘が続く異常事態になった。

そしてブリタニアがマルタ攻略を嫌がったのはマルタをロマーニャに攻略されることでマルタに対してロマーニャが多大な影響力を与えることを恐れたのだ。

ただでさえカルメーロ・ボルグ・ピサーニなどのマルタ人ナショナリストの一部はロマーニャに接近しつつあり、住人の大半は戦争が始まって以降マルタからシチリアに避難していたためロマーニャの影響力は戦争が始まって以降拡大しつつあった。

彼らはこのマルタ攻略が最後の一押しとなることを恐れた。

バルボ「ブリタニアを入れれば文句は収まるか？」

デ・ボーノ「彼らが欲しいのは何だ？」

チャーノ「恐らく実績です。マルタをブリタニアが解放したという実績が」

二人の質問にチャーノが答える。

ブリタニアが欲したのはＣ３作戦にブリタニアが参加したという事実だった。

それにレニャーノが考察する、

レニャーノ「どうせ陸軍部隊は連中は出せないだろう。海軍と空軍ぐらいか？」

チャーノ「あとせめて一人でもブリタニア兵が上がれば文句は絶対に言わないでしょう」

レニャーノ「ない袖は振れないぞ」

ブリタニア陸軍にはC3作戦に参加するだけの余力はなかった。
デ・ボーノ「ふむ、我々としてはあの国の特殊戦車が欲しいのだがな。
あれがあれば歩兵たちが上陸したときの支援になる」
デ・ボーノはブリタニアが開発した特殊戦車、史実ではホバーズ・ファニーズとして知られる戦車たちを求めた。
チャーノ「とりあえず提案はしてみます。
実際に分捕れるかは怪しいですけど」
チャーノはブリタニアとの妥協案を纏めるとブリタニアに通告した。
数日後、ブリタニア政府から正式な許可と第79機甲師団から抽出された一個戦闘団と一個ブリタニア艦隊、そして空軍部隊が参加することで合意した。

それから2週間後、ミーナとハインツはローマの連合軍司令部に呼ばれていた。
いつもの報告の後、二人はレーアから別室に来るように言われた。
その部屋で二人は待機していた。
ミーナ「何かしら?」
ハインツ「バルボ大将ならともかくレーア大将が何の用だ?」
ミーナは腕を組みハインツはその横でタバコをふかしていた。
するとドアが開きレーア、そしてハインツも知っている稀代の名将とブロンドのウィッチが入ってきた。
ミーナ「あ、あなたは!」
ハインツ「え…閣下?」
その二人の登場にミーナとハインツは驚いていた。

数時間後、501ではハルトマンとバルクホルン、そしてノヴァクがトレーニングをしていた。
ハルトマン「ふぁあ…ねむねむ…」

バルクホルン「気を抜くなハルトマン」
ノヴァク「マルタ島攻撃まで時間がないぞ」
欠伸をして半分寝ぼけているハルトマンにノヴァクとバルクホルンが注意する。
二人はマルタ島への攻撃が近いことを新聞や輸送船の情報、何よりロマーニャ軍の精鋭強襲揚陸部隊であるサン・マルコ師団とデチマ・マス師団がシチリア島に移動したことから作戦が近いと踏んでいた。
この2個師団はロマーニャ軍の精鋭であるため少しでも動けばすぐに情報が各地に伝わるほどであった。
更には海軍特殊部隊ＦＮＳが動き、輸送船や強襲揚陸艦艇がシラクーザに集結中でありロマーニャ海軍だけでなくヴェネチア海軍第1艦隊、フッドを旗艦とするブリタニア海軍Ｘ部隊、ビスマルクを旗艦とするカールスラント艦隊、扶桑艦隊が次々とシチリア島、ターラント、カタンザーロに集結していればマルタ島への攻撃が近いと簡単に予想できた。
ハルトマン「ほぇ?作戦って?」
だがそんな周りの様子を理解してなかったハルトマンは聞き返した。
ノヴァク「マルタ島への攻撃だ!
地中海の東西の航路を寸断できるマルタ島を抑えられたままにするわけがない。」
バルクホルン「この様子からして2、3週間、早いと１０日以内には上陸作戦が開始される。
そうなれば恐らく５０１が動員されるだろう。」
ハルトマン「えー!」
それにハルトマンは驚く。
ふと3人は耳に微かに輸送機のエンジン音をとらえた。
見上げると上空を５０１のＪｕ５２、そしてその後ろを熱帯地域の迷彩が施され薄っすらとアラ・リットリア航空の塗装が見えるサヴォイア・マルケッティＳＭ７５が飛んでいた。
それは洗濯物を干していたリーネと宮藤、ミラーにも見えた。

ふとエンジン音がし宮藤が上を見る
宮藤「あ、輸送機だ」
リーネ「あれはＪｕ５２と…」
ミラー「珍しい、ＳＭ７５だよ。
　カングーロならよく見るんだけどね」
ミラーはＳＭ７５が飛んでいることに驚いていた。
普段彼らも似たような機を見るがそれは大半がＳＭ７５の軍用派生型ＳＭ８２カングーロである。
ＳＭ８２はサヴォイア・マルケッティ社がアラ・リットリア航空の要請で開発した旅客機ＳＭ７５の軍用モデルである。
史実では輸送機としてだけでなく特別仕様機がエリトリアからバーレーンへの空襲に参加するなど活躍した機である。
そしてそのベースとなったＳＭ７５は史実では戦争が始まると軍に徴用、各地の植民地への連絡に使われただけでなく特別仕様機ＳＭ７５ＲＴはドイツもなしえなかった日本との連絡飛行に使用され見事成功した。
彼らがＳＭ７５を見ない理由は単に軍用型が少ないという事情だけでなく運用地域が殆どがアフリカであり、そして何よりそもそもの生産機数が１００機に満たないためだった。
そう言っている間に2機は着陸コースに入る、すると突然前方の機から誰かが飛び降りた。
リーネ「あ！」
宮藤「飛んだ！」
それに宮藤たちが驚く。
その様子はノヴァク達にも見えた。
ノヴァク「は？」
ハルトマン「あ…」
バルクホルン「あいつは…」
その陰にバルクホルンは見覚えがあった。
飛び降りたことに驚いたリーネ、ミラー、宮藤はすぐに着地する場所に向かうだがその陰は地面にぶつかることなく魔力を使って無事

に着地した。
それに駆け付けたミラーたちが驚く。
ミラー「ブ、ブラボー」
リーネ「わぁ…」
宮藤「す、すごい…」
それに全員が感嘆しミラーは拍手までしていた。
飛び降りたのはブロンドで日焼けしたウィッチだった。
そのウィッチはかけていたゴーグルを外すとリーネたちに声をかけた。
「やあ、子猫ちゃんたち」
そのリーネたちにかけた言葉がミラーの逆鱗に触れた。
ミラーはそのウィッチに近づくと肩に手を置き、次の瞬間乾いた音が響いた。
ミラー「人の恋人に手を出すとはいい度胸じゃねえか。」
ウィッチは倒れ頬が赤くなっていた。
ミラーはこれがリーネを口説こうとしている言葉と判断、一発食らわせたのだった。
そのミラーから普段出ないオーラにリーネと宮藤は恐怖を感じていた。
だがそのウィッチは悪びれることなく立ち上がりミラーに挨拶する。
「酷いなぁ、挨拶しただけじゃないか」
ミラー「あれを挨拶というならナンパはプロポーズだな。
さてと小便は済んだか?神様にお祈りは?
基地の隅でガタガタ震えながら命乞いをする準備はＯＫ?」
それにミラーは指を鳴らして答える。
二人の険悪な雰囲気に宮藤とリーネは怯えるが二人に別の声が割って入った。
バルクホルン「マルセイユ!
何しに来た?お前はアフリカにいるはずだろ」
それはバルクホルンだった。

だがその口調は喧嘩腰であった。
その声にマルセイユと呼ばれたウィッチは振り返る。
そしてバルクホルンの隣にいたハルトマンに気がつくと声をかけた。
ハンナ「アッハハ、久し振りだなハルトマン！」
そう言うとマルセイユはハルトマンに近づき手を取って喜びハルトマンに弾丸のように言葉を浴びせる。
ハンナ「航空学校以来か？
いや違うなＪＧ５２の第４中隊だ！
そうだよ、覚えてるか？
同じ中隊の融通の利かない上官の、ほらなんて言ったっけ」
バルクホルン「バルクホルンだ！」
すると相変わらずの喧嘩腰の口調でバルクホルンがマルセイユに言う。
ハンナ「ああ、そうだった。
久し振りだなバルクホルン。」
ノヴァク「トゥルーデ、このクソガキ誰だ？」
するとバルクホルンの後ろにいたノヴァクがマルセイユをゴミを見るような目をしながらバルクホルンに聞いた。
ハンナ「クソガキとは失礼だな。
私はハンナ・マルセイユだ。君は誰だい？」
ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァクだ」
ハンナ「そうか、悪いがサインはしない主義なんだ。」
ノヴァク「あんたみたいなニエムツィのクソガキのサインは結構だ」
マルセイユは自己紹介するがノヴァクは嫌悪感を露わにした表情で返す。
するとその横に二機の輸送機が駐機する。
そして駐機したＳＭ７５の中から一人の将軍が降り立った。
「ふう、久しぶりのイタ…じゃなかったロマーニャは気持ちがいいな。
時間があればアンナさんを訪ねてみようかね」

降りたのは大将の階級章をつけカールスラント軍の熱帯野戦服をオーダーメイドした白みがかった軍服を着、制帽を被った将軍だった。
その顔にリーネと宮藤は見覚えがあった。
リーネ「え?芳佳ちゃん、あれ…」
宮藤「エルヴィンさん?エルヴィンさーん!久し振りでーす!」
宮藤はその将軍に声をかけた。
それを見てミラーとノヴァクが振り向くとその将軍を見た瞬間直立不動になり敬礼する。
それにエルヴィンは返礼すると宮藤達の元に向かう。
エルヴィン「久し振りだね、宮藤君、リーネ君」
宮藤「はい!エルヴィンさん!」
リーネ「お久しぶりです」
声をかけられた二人は宮藤は元気よく返しリーネはお辞儀する。
それに隣にいた者たちは気が気じゃなかった。
エルヴィンはそれを見て二人の頭を撫でる。
エルヴィン「うむ、元気でよろしい。
おっと、娘が丁度君達ぐらいの歳だったからついな。」
エルヴィンは将軍とは思えないほど親しく二人と会話していた。
するとエルヴィンはその隣のミラーたちに目線を移す。
エルヴィン「君は?」
ノヴァク「ブリタニア空軍義勇第３１７スコードロン所属アレクサンデル・ノヴァク中尉です!」
ミラー「は!第２６駆逐戦闘航空団所属アドルフ・ミラー少尉であります!
ロンメル元帥閣下!」
ミラーの言葉にエルヴィンは笑った。
エルヴィン「ハハ、今は元帥じゃなく大将だ。
とは言っても一応は軍集団の総司令官だがね。
おっと、まだまだ話していたいが忙しいので失礼するね」

そう言うとエルヴィンはＳＭ７５から降りた他の将校を連れて基地に入っていった。
その様子をＪｕ５２の中からハインツとミーナは見ていた。
ハインツ「本当にあの男が？」
ミーナ「はぁ…」
ミーナはため息をつきハインツはエルヴィンのフランクな態度に困惑していた。

第２５話：アフリカの星と砂漠のキツネと天才パイロット

それから少ししてウィッチ達は全員ブリーフィングルームに集められていた。
その中で宮藤、リーネ、ミラーはある本を読んでいた。
そこにマルセイユが載っていた。
宮藤「あ、さっきの人だ。
　凄い、本に載ってるんだ…」
リーネ「えっと、ハンナ・マルセイユカールスラント大尉」
ミラー「第３１飛行隊ストームウィッチーズ所属、２００機撃墜のエースで通称アフリカの星…
　ハンス・ヨアヒム・マルセイユのパクリか？」
その内容にミラーはかの有名なエースハンス・ヨアヒム・マルセイユとそっくりな事に疑いの目を向ける。
ミラーはマルセイユを一ミリも信用していなかった。
リーネ「しかも、容姿端麗でカールスラントにとどまらず世界中にファンが多数…」
ミラー「ますます怪しい」
宮藤「ミラーさん信用してないんですね…」
ミラー「怪しさしかない。
　リーネを口説こうとしたんだ、本当なら八つ裂きにしてワニの餌にしてやりたいよ」
宮藤はミラーのマルセイユへの信用してなさに呆れるがミラーはますます過激なことを言う。
すると横からシャーリーが言った。
シャーリー「ミラー、あいつは信用できるぞ」
ミラー「あれのどこが？あんなビ…」
リーネ「ミラーさん！それ以上言っちゃダメです！」
ミラーがビと言いかけるとリーネが次にいう単語を理解してすぐ

に口を塞いで注意する。
ミラーが次にいう単語は簡単だった。
ミラー「ごめん。兎に角あのクソガキのどこが信用できるんですか。」
宮藤「シャーリーさん、マルセイユさんのこと知ってるんですか?」
宮藤がシャーリーにマルセイユのことを知っているのか聞いた。
シャーリー「ルッキーニと私はここに来る前ちょっとアフリカにいたからな。」
ルッキーニ「いたー」
二人は501の再結成前はアフリカにいた。
そのためマルセイユのことを知っていた。
宮藤「どんな人なんですか?」
シャーリー「噂なら一杯聞いたけど」
ルッキーニ「聞いたー聞いたー」
シャーリー「あいつのことなら同じカールスラントの連中が詳しいだろ」
シャーリーはマルセイユのことを全部バルクホルンたちに丸投げした。
すると宮藤が思い出した。
宮藤「そういえば同じ部隊だったって」
バルクホルン「カールスラントで私とハルトマン、マルセイユは同じ飛行中隊にいた」
宮藤が聞くとバルクホルンが答えた。
宮藤「やっぱり!友達なんですね!」
バルクホルン「友達じゃない!あんなチャラチャラした奴」
ノヴァク「俺もあいつにはいい印象を抱かないね。」
宮藤の言葉をバルクホルンが否定し隣に座ったノヴァクも同意する。
二人ともマルセイユに対してはいい印象がなかった。
ミーナ「はい、静粛に」
するとミーナの声が響き全員が振り返る、するとミーナの後ろに坂

本、ハインツ、そしてエルヴィンと参謀将校、そしてマルセイユがいた。
エルヴィンはウィッチたちを見るとある人物に気が付いた。
エルヴィン「おお、ハルトマン＝ファルケンホルスト君！
久しぶりじゃないか」
ニコ「閣下！覚えてくださったのですか！」
エルヴィンはニコの存在に気が付くと声をかけた。
それにニコは敬礼するとエルヴィンに駆け寄った。
エルヴィン「ああ、久しぶりに妻以外から怒られたからね。
どうだ、アフリカに来ないか？今なら私が便宜を図るよ」
ニコ「閣下、それは光栄ですが私はここで任務がありますので。
ロマーニャが片付いてからで…」
エルヴィン「はは、構わんよ。
ここが片付くころにはアフリカが終わってなければいいがな」
エルヴィンは親しげにニコの腕を叩きながら話していた。
その光景にミーナ達は眉を顰める。
すると参謀将校がエルヴィンに話しかけた。
「閣下、お時間が」
するとエルヴィンが返した。
エルヴィン「あまり言うな。
前線の兵士との交流は重要だよビュフティンク君。
現代の戦争は前線の兵士でさえ何が起きてるかを理解できてないんだぞ」
エルヴィンに進言した第1リビア軍集団通信情報責任者のアンドレアス・ビュフティンク大佐はその返事に眉を顰める。
エルヴィン「そんな顔をするな。
まあ兎に角さっさと話しを始めよう」
それを見てエルヴィンは折れた。
そして黒板に絵がいくつか書かれるとなぜここに彼らが集められ

たかの説明が開始された。
ハインツ「では、説明を始める。
えーと、まずそちらの方々は自己紹介を…」
最初にハインツは黒板の横で並んでいるエルヴィンたちに自己紹介を求めた。
ビュフティンク「第1リビア軍集団通信情報責任者アンドレアス・ビュフティンク大佐です」
エルヴィン「で私が第1リビア軍集団司令官エルヴィン・ロンメルだ」
それぞれ自己紹介する。
自己紹介が終わるとハインツが説明を始めた。
ハインツ「で、今から説明するのは来たる、2週間後に行われる予定のマルタ島攻略作戦C3に付随して行われるウィッチ部隊による特殊作戦、ステッラ作戦だ。」
これから説明するのはウィッチ部隊による特殊作戦「ステッラ」イタリア語で星を意味する作戦だった。
ハインツは最初に数枚の写真を見せた。
ハインツ「まず、これらの写真はつい先週、ロマーニャ海軍の潜水艦レオナルド・ダ・ヴィンチがマルタのグランドハーバーに潜航しながら侵入、浮上後撮影したものだ」
ハインツが説明する写真にはネウロイのコアと巨大なドーム、そしてその中のマルタの街が映っていた。
ハインツ「マルタのネウロイの親玉であるこいつを潜水艦でウィッチが突入、護衛のネウロイを撃破してコアを破壊する。
これがステッラ作戦だ」
ステッラ作戦のモデルとなったのは史実イタリア海軍のフロッグマン部隊の活躍であった。
史実イタリア海軍は戦争の準備が全くできていない状態で戦争に突入、その結果主力艦隊さえ動かせず訓練さえ事欠く状態だった。
その代わりにイタリア海軍は特殊部隊を積極的に使用した。
その特殊部隊が第10駆潜艇部隊「デチマ・マス」だった。

この部隊は突撃ボートM．T．M、人間魚雷S．L．Cなどを装備し潜水部隊による地中海各地の港湾の襲撃を繰り返した。

最も有名な戦果といえば41年12月に行われたアレクサンドリア襲撃で戦艦クイーン・エリザベス、ヴァリアントの二隻を撃沈、更に同じ頃ジブラルタルでは数回に渡り襲撃を行い多数の船舶を撃沈、またトルコでは単身爆薬と潜水道具だけを持った伝説的なフロッグマンであるルイジ・フェッラーロ少尉が三隻の連合軍輸送船を撃沈し無事帰還していた。

そしてロマーニャ海軍もまたこういった部隊を有していた。

だがネウロイとの戦争では殆ど役に立たないと思われ冷や飯食いに甘んじていた。

しかし捨てる神あれば拾う神あり、レニャーノたちはこの部隊が沿岸地域を制圧したネウロイへの攻撃や偵察に使い始めた。

そしてマルタ島のグランドハーバーを占拠したネウロイに対してこの部隊は数回に渡り偵察を繰り返した。

その情報と海中からの侵入というこの部隊の特性からロマーニャ海軍は「潜水艦にウィッチを乗せ港に侵入、ネウロイを叩く」という特殊作戦を立案、ステッラ作戦としてC3作戦に組み込まれた。

ハインツ「で、このステッラ作戦に投入可能なウィッチは輸送の都合上最大で3人だ。」

ステッラ作戦の唯一の欠点は投入するウィッチが最大で三名、即ち扶桑海軍から借りた伊四百型潜水艦と伊十三の二隻の輸送可能なウィッチの合計であった。

ロマーニャ海軍もこの作戦でマイアーレ用耐圧格納筒を改造したウィッチ用耐圧格納筒を使用するつもりだったがユニットの発進台の固定はいいとして発進時にサイズ関係上一旦発進台を出さないと履くこともできないという欠陥があったためその修正のため大規模な設計変更によりこの作戦には投入不能だった。

そしてハインツがメンバーの一人を発表した。

ハインツ「そのための選ばれたウィッチの一人がマルセイユだ。」

バルクホルン「ハインツ！なんでこいつなんだ！」

ハインツがマルセイユが参加するというとバルクホルンが怒った。
それにハインツはエルヴィンのほうを見ながら答えた。
ハインツ「それは、ロンメル大将が直々に推薦した、とのことだが本当ですか？」
エルヴィン「本当だ、彼女はアフリカで最も優秀なウィッチだ」
マルセイユが来たのはエルヴィンが推薦したからだった。
エルヴィンはウィッチ部隊の能力に関して冷静に見ており今回は最も優秀なウィッチとしてマルセイユを送り込んだのだ。
それでもバルクホルンは渋る。
バルクホルン「だが」
エルヴィン「それにマルタは君らロマーニャの区分じゃない、我々アフリカの区分だ。
今回は我々に手駒がないから依頼してるだけで我々からも出さなければな」
マルタは本来アフリカの担当であるが手駒がない以上ロマーニャに代打を依頼している形であった。
だが流石にアフリカから一兵も出さないとなるとメンツに関わるという事情もあった。
ハインツ「これで納得したか？
で、次のメンバーだが…
閣下、本当にいいんで？」
エルヴィン「ああ、私は彼のことを最も信頼している。」
ハインツは続いて二人目のメンバーを発表するが何故か困惑してエルヴィンに聞き直していた。
ハインツ「しかし、小官としてはこの部隊にはもっと優秀なウィッチが他にいますが…」
エルヴィン「だが、私はその能力を知らない。
彼を選んだのは能力を知っているからだ」
ハインツ「分かりました、二人目は、ニコ、お前だ」
「え？」
ニコ「え？ええ!?」

二人目に選ばれたのはニコだった。
世界高度記録こそ持っているがウィッチとしての戦果はノヴァクやハインツにさえ劣るニコが選ばれたことに全員が驚きニコを見る。
するとマルセイユがニコに言った。
ハンナ「無理だ、実力もわからないあんたには私のパートナーは務まらない」
ニコ「ええ、自分もそう思ってます。
ですので自分は辞退を…」
ニコは辞退しようとする。
するとエルヴィンがニコに語った。
エルヴィン「ハルトマン＝ファルケンホルスト君、君は私が直々に選んだんだ。
私が最も信頼するウィッチ、それが君だ。」
ニコ「閣下…ありがとうございます。
分かりました、閣下直々の指名ならば小官は喜んで参加しましょう！」
エルヴィンからの直々の指名だとわかるとニコは態度を変えて参加することにした。
ニコはエルヴィンからの指名を断れるわけなかった。
だがこれにマルセイユは快く思わなかった。
ハンナ「閣下、なんでこんな奴を！」
エルヴィン「君、君は彼の実力を知らないから言えるんだ。
彼の実力は君以上だ、文字通りの天才だ。」
マルセイユはエルヴィンに抗議するが逆にエルヴィンが彼女に説教する。
だがマルセイユはニコの実力を疑っていた。
ハンナ「あんな人畜無害そうなウィッチがですか？」
エルヴィン「よく言うじゃないか、能ある鷹は爪を隠す。
彼がそれだ、一見すれば無害そうな青年だがその実は私以上の切れ者だ」
一見すればニコは軍服を脱げば人畜無害な好青年だがその実力は

折り紙付きであった。
それは首元にかかった剣・柏葉付騎士鉄十字賞を見れば明らかだった。
ハインツ「あー、最後の一人だが、これはこっちから好きなように出してくれって言われてるんでとりあえずバルクホルンでいいよな？」
バルクホルン「とりあえずって何だ、とりあえずって」
ハンナ「無理だ、バルクホルン、あんたに私のパートナーは務まらない」
最後にハインツは適当にバルクホルンを選んだ、だがそれにまたマルセイユが突っかかった。
ハインツ「はぁ？文句つけるな文句なら俺が聞くからあんたは拗れるから黙ってろ」
バルクホルン「何が言いたいだマルセイユ？」
ノヴァク「それはトゥルーデに喧嘩を売ってるのか？」
それにハインツが呆れ黙らせようとするがバルクホルンとノヴァクは立ち上がるとマルセイユに突っかかった。
ハンナ「言葉通りさ、あんたの力量じゃ私と一緒に戦うのは無理だって言ってるんだ」
ハインツ「お前ら黙れ」
ハンナ「私の力量に釣り合うのは…」
マルセイユはハルトマンのほうを見るがそこに席から立ち上がったバルクホルンとノヴァクが割って入った。
バルクホルン「どこを見ているんだマルセイユ、カールスラント防衛線の頃からお前の上官を上官と思わないその態度！
変わってないな！」
バルクホルンは使い魔を出しながらマルセイユに近づく。
その険悪な空気に全員がおびえる。
宮藤「はわわわ…」
リーネ「どうしよう…」
ミラー「一発ぶん殴れ！」

リーネ「ミラーさん…」
唯一ミラーはなぜか喧嘩を煽っていた。
それにリーネは呆れていた。
ハインツ「バルクホルン！」
ハインツは止めようとするがバルクホルンは無視してマルセイユに近づく。
ハンナ「今は同じ階級だ」
そう言うとマルセイユもまた使い魔を出すとバルクホルンの手を受け止め睨みあった。
二人の魔法力は周りの床を破壊し始めた。
ハインツ「お前ら！喧嘩はよそでやれ！」
エルヴィン「あーあ、床が…」
ビユフティンク「閣下、避難を」

ビユフティンクはどこか暢気なエルヴィンを避難させようとしハインツは二人を注意する、だが二人とも聞いていなかった。
すると突如、マルセイユが持ち上げられるとそのままジャーマンスープレックスを仕掛けられ地面にたたきつけられた。
バルクホルン「やったな、アレックス」
ノヴァク「クルヴァ、クソニエムツィ」
ハンナ「痛…2対1は反則だ！」
仕掛けたのはいつの間にか後ろに回り込んだノヴァクだった。
それにハンナは抗議するがすぐにノヴァクがアームロックする。
ノヴァク「うるせえ！喧嘩に反則も糞もあるか！」
バルクホルン「貴様の態度のツケだ！」
マルセイユ「痛い痛い痛い！折れる折れる！」
ノヴァク「うちにはいい治癒魔法使いがいるから大丈夫だ」
そのまま3人は2対1の喧嘩に縺れ込んだ。
それにとうとうハインツは呆れ賭けを始めた。
ハインツ「もう駄目だ…中佐、どっちに賭けます？」
ミーナ「ハインツさん！」

その間にも3人の喧嘩は続いていた。
バルクホルン「アレックス、交代だ」
ノヴァク「あいよ」
ハンナ「ふう…お、おいやめ…ギャー！頭が割れる！」
今度はバルクホルンが全身全霊の力でアイアンクローを仕掛けマルセイユは宙に浮いた状態でもがく。
すると突然ハルトマンが声を上げた。
ハルトマン「ストーップ！私がマルセイユのパートナーやるよ、それでいいだろ？」
「え？」
それに全員が驚いた。
ミーナ「ハルトマン中尉」
ハインツ「お前…」
バルクホルン「ハルトマン…」
それに全員が驚いた。
ハインツ「えーと、これでマルセイユ、ニコ、ハルトマンってことでいいよな？」
ニコ「ええ、構いません」
エルヴィン「ああ、構わんよ」
ハインツが一応ニコとエルヴィンに確認してこの三人で決定された。
ここでふと、ハインツが聞いた。
ハインツ「マルセイユは？ん？マルセイユ…」
聞いたが反応がないので振り向くとバルクホルンにアイアンクローをされた状態で気絶していた。
ハインツ「バルクホルン、今すぐアイアンクローやめろ、命令だ」
バルクホルン「え？ハインツ…あ」
ノヴァク「アーメン」
バルクホルンはどうやら無意識でアイアンクローをかけ続けマルセイユは気絶してしまった。

第２６話：天才パイロットとアフリカの星

マルセイユが気絶から回復すると3人で飛行訓練が行われた。
だが軽快なＢｆ１０９を使うマルセイユとハルトマンに対して鈍重なＪｕ８８を使うニコは二人に後れを取っていた。
３人は前方に設置された標的の阻塞気球相手を銃撃する。
発射レートの高いＭＧ３４やＭＧ４２を使うマルセイユ達に対してニコは航空機関砲としては発射レートは高いもののこの二つの歩兵用機関銃に対しては明らかに低いため撃破する数では明らかに劣っていた。
だがニコは二人が撃ち漏らした気球を目ざとく見つけるとマルセイユ並みの短い連射で撃破していった。
それをエルヴィンやハインツなどが地上から見ていた。
宮藤「3人ともすごいですね！」
シャーリー「マルセイユとハルトマンはカールスラントのトップエースだからな。
　ニコも実力はあるからな」
エルヴィン「ビュフティンク君、な、私が言ったとおりだろ？
　ハルトマン＝ファルケンホルスト君の腕は世界一だと」
ビュフティンク「はぁ、小官は陸軍軍人なのでよく分からないのですが閣下のおっしゃる通りでしたな」
エルヴィンは有名なマルセイユならともかく世界高度記録を持っている程度で一般にはそれほど有名でも戦果でも全く目立たないニコを選んだことを疑っていたビュフティンクに話かける。
ビュフティンクはこの訓練を見てニコの能力に満足したようだった。
ハインツ「しかし、大丈夫か？
　どうにも連携があってないようにも見える」
坂本「確かに」
バルクホルン「あまり息があってないように見える」
だが地上から3人の連携を見るとニコとマルセイユ、ニコとハルト

マンの連携はあっているがハルトマンとマルセイユの連携があっていなかった。
　すると突如マルセイユが急減速するとハルトマンの後ろにつき、銃を向けた。
　だがその直後、ハルトマンとの間に別の影が割り込むとハルトマンは急降下する。
　ハルトマン「え？ニコ！」
　ニコ「後ろを見て！マルセイユが君に銃を向けたんだ！」
　割り込んだのはニコでありニコはハルトマンを掴むと強引に急降下、
　ハルトマン「よく気が付いたね」
　ニコ「爆撃機乗りは普段からケツには気を付けるんだ！」
　ニコは元々は爆撃機パイロットであるため後方に対しては常に気を付ける癖がついていた。
　爆撃機は一度戦闘機の背後につかれたら最後、撃墜されることが多かった。
　そのため常に背後に気を付ける癖がついていた。
　これに不意を討たれたのはマルセイユだった。
　マルセイユはニコの能力を疑っていたためまさかハルトマンより先に気が付きハルトマンを掴むと強引に急降下するとは思ってもいなかった。
　ハンナ「なんだあいつは！」
　マルセイユは急降下して二人を追いかける。
　それに気が付いたニコはハルトマンに話す。
　ニコ「クソ、追いかけてきた！
　　ハルトマンさん、三つ数えるから分かれて、君は上昇、僕が気をそらせる、いいね？」
　ハルトマン「分かった」
　ニコ「3、2、1、今！」
　ニコが三つ数えると二人は二手に分かれニコはマルセイユを挑発しハルトマンは急上昇して離脱する。

ニコ「来い、アフリカの星！
　爆撃機乗りに後れを取るか!?」
ハンナ「く、私がお前に負けるわけがない！」
ニコの簡単な挑発に乗ったマルセイユはハルトマンをほっぽり出してニコを追いかける。
すると無線からミーナの声が響いた。
ミーナ『飛行中止よ、３人とも。
　直ちに帰投しなさい！」
ニコ「了解」
ハンナ「く」
ミーナは３人に帰投を命じた。
地上ではエルヴィンは急な帰投を命じたことをミーナに聞いた。
エルヴィン「ミーナ君、何かあったのか？」
ミーナ「マルセイユ大尉がハルトマン中尉とハルトマン＝ファルケンホルスト大尉に銃を向けました。」
エルヴィン「そうか、ではしかるべき措置を頼むよ。
　ビュフティンク君、そろそろ帰ろうか」
ビュフティンク「は」
そう言うとエルヴィンは輸送機に乗り込み帰っていった。

少しして、ハルトマンとマルセイユ、ニコは基地のある部屋にいた。
そこは殺風景でベッドが二つあるだけだった。
ミーナ「二人は今日から作戦の日までこの部屋で過ごすこと。
　訓練飛行中に人に銃を向けたマルセイユ大尉は本来なら営倉行きです、が残念ながらこの基地にはありません。
　代わりに３人でこの部屋で過ごしてもらいます」
ハルトマン「ねえ、なんで私もなんだよー」
マルセイユが銃を向けた件の処分として二人はこの部屋で過ごすことになった。
そのことにハルトマンは不満を言う。
ミーナ「いい機会です、３人で同じ部屋で過ごして少しでも作戦の

ためのチームワークを養いなさい。
いいわね」
ハルトマン「はーい」
ハンナ「分かった」
ニコ「了解」
ミーナ「次やったら絶対許しませんよ」
ミーナは最後にくぎを刺すと出て行った。
ミーナが出ていくとハルトマンはベッドに腰かけた。
ハルトマン「ハンナのせいで怒られたじゃないか」
ニコ「あんまり言いたくないですけどそもそも訓練中に人に銃を向けるなって習いませんでした？」
ハルトマンとニコはハンナに言う。
ニコからすれば理由なく人に銃を向けるなというのは銃を取り扱う際に最初に習うことの一つであった。
だがハンナは笑いながらベッドに寝転がる。
ハンナ「ハハ、やっぱりミーナは怖いな」
ハルトマン「本気になったらもっと怖いんだぞ」
ハンナ「どうして気が付いた？」
するとハンナが聞いた。
ニコ「ん？」
ハンナ「お前だ、ニコ。
なんで気が付いた？」
ニコ「僕は元は爆撃機乗りでね。
背中には常に注意を払うんだ。
それと、君がハルトマンさんに銃を向ける未来が見えた。
だから妨害したんだ。
逆に聞きたいけど、なんで銃を向けようとした？」
ニコは逆に聞いた。
ハンナ「ハルトマン、お前と同じ隊にいたころの勝負は8勝8敗、私と戦って互角だったのはエーリカ、お前だけだ。
だから決着をつけたいのさ、この作戦の間に」

ハルトマン「ふぅ、じゃあハンナの勝ちでいいよ」
それを聞いたハルトマンはため息をつくとベッドに倒れこんだ。
ハンナ「またか！前もお前は同じようなセリフで私から逃げた！
なぜだ！」
ハルトマン「めんどくさいじゃん、それに私と同じぐらい強いならニコだってそうじゃん」
ハルトマンの言葉にハンナはニコを見る。
するとハンナはハルトマンの隣のベッドに座るニコに近寄る。
ニコ「えっと、何か用ですか？」
ハンナ「ニコ、ハルトマンより強いらしいな」
座るニコを見下ろしながらマルセイユが聞く。
それにニコは謙遜する。
ニコ「そんなことないですよ。」
ハルトマン「でもこの前模擬空戦でトゥルーデ倒したよね？」
ニコ「あれはたまたまですよ、うん。
そもそも本職違いますし、ナイトウィッチですし」
数日前、ニコはバルクホルンと模擬空戦をしてバルクホルンを倒していた。
だがニコはたまたまだと思っていた。
すると更にハルトマンは言う。
ハルトマン「この間私と空戦してタイマンしたよね？」
ニコ「あれも運が良かっただけで…」
ハンナ「ハルトマンとタイマンだと!?」
さらにその前にはニコとハルトマンは模擬空戦でほぼ互角の勝負をしていた。
その事にマルセイユは驚いた、そして勝負を挑んだ。
ハンナ「おい、私と勝負しろ！」
ニコ「別に構いませんけど、ちゃんと許可取ってくださいよ。
もう二度は御免です。
あ、チョコ食べます？」
ニコはちゃんとした許可を取った上でならと条件をつけて快諾す

るとポッケからショカコーラを取り出してマルセイユに聞いた。
それに反応したのはマルセイユではなくハルトマンだった。
ハルトマン「お菓子！ニコ、頂戴！」
ニコ「はいはい、慌てないで。」
ニコはすぐに缶の蓋を開けてハルトマンにチョコを一切れ渡した。

翌日、ニコとマルセイユは模擬空戦をしようとしていた。
それを地上からウィッチたち、そして何故か大量の整備士や兵士が集まっていた。
ミーナ「大丈夫かしら？」
坂本「大丈夫だろう、今回は模擬空戦だ。
それにしても…」
坂本は兵士たちが集まっているほうを見る。
そこではハインツが台に立って叫んでいた。
ハインツ「アフリカの星と世界高度記録保持ウィッチの大勝負だ！
司令部主催の賭けだ！」
なぜかハインツが整備士を集めて賭けをしていた。
一応ミーナの許可を得たうえでガス抜きのため賭け事を主宰していた。
それに坂本たちは呆れていた。
サーニャ「ニコさん…」
一方サーニャはニコのことを案じていた。
するとエイラとヤンがサーニャを安心させようとする。
エイラ「サーニャ、きっとニコは大丈夫だよ、うん」
ヤン「あいつは俺が今まで会ってきた誰よりも強い。
だから大丈夫だって」
二人の言葉にサーニャは安心する。

そのころ上空ではニコが地上の大騒ぎを見て呆れていた。
ニコ「なんかお祭り騒ぎになってますね」

ハンナ「ああ」
それに向かい合ってＭＧ３４を持ったマルセイユも同意する。
二人とも地上の大騒ぎを呆れていた。
ニコ「言っておきますけどあくまで模擬空戦ですよ？
　まあそれでも手を抜く気はありませんが」
ハンナ「分かってる、私も手を抜く気はない」
ニコ「一発でも食らうかノックアウトしたら負け、いいね？」
ハンナ「ああ」
ハインツ『おい！お前ら早く始めろ！』
二人で話していると無線でハインツが早く始めろとヤジる。
地上の興奮は大変なことになりつつあった。
ニコ「じゃあ、やりましょうか。
　３、２、１でスタートして交差してから開始で」
ハンナ「いいだろう」
ニコ「じゃあ、３、２、１、０！」
ニコのカウントダウンで二人はスタート、交差するとまずマルセイユが仕掛け上を取った。
それにニコは急降下して海面すれすれを飛ぶ。
ハインツ「はじめっから一方的になってきたぞ！」
それを地上からハインツたちが見ていた。
それを見てエイラは不安がる。
エイラ「ニコ！何やってるんだよ！高度を取れ！」
ヤン「いや、今やったらまともに弾を食らうぞ！
　海面すれすれのほうが当てにくいんだ、無駄弾撃たせようって気だ」
だがヤンにはニコの狙いが見えた。
ニコはあえて海面スレスレを飛ぶことで回避していた。
さらにニコはそこに不規則な旋回と未来予知を組み合わせてすべて回避する。
だがここで見ていたハインツはあることに気が付いた。
ハインツ「あ！不味い！こっち来る！」

ニコは逃げながら気が付けば基地に向かっていた。
すぐに群集とウィッチたちは遮蔽物に隠れたり逃げるがそのど真ん中をマルセイユが銃撃する。
ハインツ「よそでやれ！」
ハインツは二人に向かって叫ぶ。
一方二人は基地の上空を掠めるとニコは翼から雲を引きながら急上昇する。
ヤン「スゲェ…ニコが雲を引きやがった…」
エイラ「それってすごいのか？」
ニコの状況の凄さが分からないエイラがヤンに聞いた。
ヤンはエイラに解説する。
ヤン「ああ、翼から雲を引く状態ってのは翼から気流が剥がれかけて失速寸前なんだ。
あの状態で空戦をやろうってものならすぐに失速しちまうぞ」
ニコは失速寸前でありながらマルセイユを翻弄していた。
ニコの腕の良さはここに表れていた。
だが二人はその後もこのような終わらないドッグファイトを数分続けその間マルセイユは銃撃していたが一発も当たらなかった。
だが突如ニコが後ろを向くと銃撃した。
それにマルセイユは驚く、何せ常識的に考えてこれは悪手である、と思ったからだった。
だがこの銃撃でマルセイユはニコを追いかけるのを一瞬やめてしまった。
ニコの狙いはそれだった、一瞬の隙をを作りその間に態勢を立て直すのが狙いだった。
その狙い通りニコは銃撃するとその間に一気に急上昇する。
すぐにマルセイユは追いかけようとするがその先は太陽であった、ニコは急上昇し速度を位置エネルギーに変換、更に太陽の角度を計算し空戦のセオリーである太陽の中に隠れるをやってのけた。
ニコは加速と計算、そして未来予知という普通なら両立しない三つの固有魔法を使いこのような複雑な手をやったのだ。

これこそがニコが天才と呼ばれる所以であった。
普通なら両立できない固有魔法を同時に使い極端な戦術や普通なら悪手とされる手を使い状況を一変させる、これがニコの空戦での常套手段だった。
だがニコは銃撃しようとするが弾が出なかった。
ニコ「シャイセ!ジャムった!」
ニコは急激な軌道をしたせいでＭＧ１５１にジャムが発生してしまった。
すぐにニコはジャムを直そうとコッキングレバーを弄る。
その間にマルセイユは急上昇してニコの背後についてしまった。
ハンナ「貰った!」
だがこちらも出なかった。
ハンナ「弾詰まりか?!」
ニコ「そっちは弾切れだ!クソ、よし!
　食らえ!」
マルセイユが弾切れに動揺している間にニコはＭＧ１５１のジャムを直すとニコを銃撃しようと至近距離に近づいていたマルセイユに銃撃し、あっという間にペイント弾で染め上げてしまった。
それを地上から双眼鏡でハインツが確認した。
ハインツ「えー、勝負ニコの勝ち!」
それを聞いて兵士たちの７割がブーイングをし、３割が歓声をあげていた。
７割がマルセイユに賭け、３割がニコに賭けていたからだった。
空ではペイント弾で染め上げられたマルセイユがニコに話しかけていた。
ハンナ「参った参った、完敗だ」
ニコ「大丈夫ですか?」
ニコはマルセイユの心配をする。
ハンナ「ああ。しかし、気に入った!
　アフリカに来ないか?アフリカはいいところだぞ」
するとマルセイユはニコをアフリカに誘った。

それにニコは笑って返した。
ニコ「ええ、ここが片付いたら。
　アフリカは古巣ですし、それに閣下から直々に招待されてますし」
ハンナ「そうか、アフリカに来たら今度は私が勝つ」
そう言うとマルセイユは手を差し出す。
ニコはマルセイユに握手すると返した。
ニコ「その時も手加減はしませんよ」
ハンナ「望むところだ」
その様子は地上からも見えていた。
ハインツ「あー、なんか友情を築いてる」
地上からウィッチ達は二人を見ていたがふとエイラとヤンは何やら不穏なオーラを感じて振り向く。
エイラ「サ、サーニャ？」
ヤン「お、おい…」
一人サーニャだけが何やら嫉妬していた。

第27話：天才パイロットの過去

その日の夜、マルセイユは部屋で本を読んでいたニコに話しかけた。

ハンナ「ニコ、昼は完敗だった」

ニコ「そちらこそ、手強かったですよ」

互いに昼間の健闘を讃えあっていた。

それにベッド寝転がるハルトマンは呟く。

ハルトマン「なんで二人とも仲いいんだよ…」

ニコ「まあ、仲良くするのはいい事じゃないですか」

ハルトマンの愚痴にニコが笑顔で返す。

府とマルセイユはここであることを聞いた。

ハンナ「ところでニコ、そのテクニックどこで手に入れた？

お前がただのウィッチ、それも実戦経験が数か月ではないってことだけは分かるぞ」

それにニコは一瞬驚くがすぐに返した。

ニコ「まあ、普通じゃないところから」

ハルトマン「異世界だもんねぇ…あ」

ハルトマンが口を滑らした。

それにマルセイユは反応しニコとハルトマンを問い詰める。

ハンナ「異世界？どういう意味だニコ、ハルトマン」

ニコ「はぁ、その言葉の通りですよ。

ウィッチもいなけりゃネウロイもいない、人間同士でドンパチする世界ですよ」

ニコは正直に話した。

するとマルセイユはにやりと笑うとニコに言う。

ハンナ「なら教えてもらえるか？その異世界とやらを。

酒のあてぐらいにはなるだろ？」

マルセイユはいつの間にか酒の瓶を取り出していた。

ニコ「ええ、いいですけど、気持ちのいい話ではないですし多分相当ショッキングですよ。」

ハンナ「別に構わない」
ニコはマルセイユに再度聞き直すがマルセイユは構わないといった。
それにニコはため息をついてベッドに寝転がると話し始めた。
ニコ「本当にいいんだね、じゃあ話すよ。
僕が生まれたのはドイツ、こちらで言うところのカールスラントの当時はヴェルテンベルク王国と呼ばれたヴェルテンヴェルク＝ホーエンツォレルン大管区のタウバービショフスハイム、とはいってもその街の郊外の田舎町で１９１５年の１０月１６日に生まれた。
父親は町の名士でそれなりに裕福だった。」
ニコが生まれたのは当時ヴェルテンベルク王国だった現在のバーデン＝ヴェルテンベルク州マイン＝タウバー群タウバービショフスハイムに生まれた。
あまり知られていないがドイツ第二帝国はプロイセン王国による中央集権国家ではなかった。
実態はプロイセン王国を長とする大小様々な王国・公国・領邦・自由ハンザ都市などを含んだ連邦国家であった。
その中の一つであるヴェルテンベルク王国は第一次世界大戦後崩壊、ヴァイマル共和制ではヴェルテンベルク自由国民国となりその後ナチス政権下で近隣のホーエンツォレルン県と合併しヴェルテンベルク＝ホーエンツォレルン大管区となった後、戦後アメリカとフランスに占領、ヴュルテンベルク＝バーデン州、ヴュルテンベルク＝ホーエンツォレルン州、バーデン州に分割後西ドイツの成立時に統一されバーデン＝ヴェルテンベルク州となった。
タウバービショフスハイムはその中のマイン＝タウバー群にある街でこの地域の中枢都市の一つで古くは８３６年の記録に名前が載っている歴史ある街だった。
ニコ「一応僕は５人兄妹の長男で下には４人の妹がいるんだ。
全員優しくて最高の妹達だよ」
ハルトマン「へえ、初めて聞いた」
ニコ「まあね、お陰でこんな風に女の子に囲まれた生活ってのには

慣れてるんだ。
君達とどう接すればいいかもなんとなく分かるよ。」
ニコは5人兄妹の長男坊であったため女性との生活には慣れていたが問題は彼の女性経験が妹だけであった上にシスコンであった。
この話を聞いてハルトマンはサーニャからの恋愛相談に合点がいった。
ハルトマン「ふーん、だからサーニャンのアタックに気がつかないんだ」
ニコ「サーニャさんがどうかしましたか?」
ハルトマン「なんでもないよー」
ハルトマンの呟きにニコは全く理解していなかった。
それに一瞬気をとられるがすぐにニコはまた話し始めた。
ニコ「そう、で僕が子供の頃の憧れといえば世界大戦を戦ったエースパイロット達、そして世界中で冒険に挑んでいた飛行家たちだった。
僕もそれに憧れてた。丁度その頃父親が地元にグライダークラブを開いてね、僕もそこで飛行を学んだよ。」
ニコが子供の頃の１９２０年代、子供達の憧れとなったのは当時全盛期を迎えていた冒険飛行時代の冒険飛行家、そして第一次世界大戦のエース達だった。
ニコもまた彼らに憧れた一人であり丁度時を同じくしてニコの父親が街でグライダークラブを始めニコもそれに参加していた。
グライダー飛行というのは飛行機の基本を学ぶ上で重要であり多くのパイロットはまずグライダーで飛行の感覚を掴むことが多かった。
ニコ「で、そんな事をしながらギムナジウムから飛行学校を経て幸運にも僕は１９３７年にドイツ・ルフトハンザ航空に入ることが出来た。
初めはＪｕ５２を飛ばしてたけど翌年からはＦｗ２００の航空機関士になって長距離路線を飛んでたよ。」
ニコは幸運な事に飛行学校で正式な飛行を学ぶと今でもドイツを

代表する航空会社であるルフトハンザ航空に入社してＪｕ５２、そしてドイツ最大の陸上旅客機だったフォッケウルフＦｗ２００コンドルを飛ばし始めた。

Ｊｕ５２はユンカース社が開発した旅客機であり輸送機、爆撃機だった。

戦前はルフトハンザをはじめとする各国の航空会社でも使用されスペイン内戦ではゲルニカも爆撃した機だった。

だがその設計は極めて旧式で全金属製だが外側は波型外板、構造も金属モノコックではなく鋼管フレームに外板を貼った固定脚機で性能や設計で比較すれば明らかにＤＣ―３やＳＭ７５、それどころかエアスピードエンボイや日本のＡＴ―２にさえ劣る機だったが終戦まで活躍した。

そしてＦｗ２００はフォッケウルフ社がＤＣ―３に対抗して作った機であった。

その性能は１９３８年にベルリン～ニューヨーク間を無着陸で飛行した長距離性能を誇っていた。

戦中はドイツ軍に徴用、さらに長距離哨戒機として改設計され大西洋ではＵボートを呼び寄せる大西洋の疫病神と恐れられた。

ニコはそんな機を乗り継いで第二次世界大戦を迎えた。

ニコ「そして１９３９年の９月に戦争が始まった。

その時は僕は丁度ベルリンにいて暫くして空軍がパイロットの募集をかけたからすぐに応募、空軍に入った。

それから一年ほどＪｕ８８のパイロットの訓練を受けて１９４０年の７月に第１教導航空団に配属された。

そしてすぐにイギリス、こちらで言うところのブリタニアへの空襲が開始され出撃した」

ハンナ「空襲？」

するとハンナが空襲という単語に反応した。

ニコが参加したバトルオブブリテンは当時史上最大の航空戦でありイギリス史上最大の危機であった。

もしも王立空軍がドイツ空軍に負ければ、次の戦いは英本土。

英本土を守る最後の戦いがバトルオブブリテン（ＢＯＢ）だった。
ニコ「ああ、当時乗っていたＪｕ８８Ａは爆撃機で目標は初めはレーダー基地や飛行場、工場とかだったけど途中から目標は都市部に代わったよ」
ハンナ「都市部って…まさか！」
ＢＯＢは基本的に三つの段階に分かれていた、一つがドーバー海峡上空を舞台にした船舶への攻撃、次に爆撃機による各地のレーダー基地、飛行場、航空機生産工場への空爆、そして都市部への空爆だった。
一般的にＢＯＢの始まりとされるのは１９４０年７月１０日に偵察機を護衛していたＢｆ１０９とスピットファイアの空戦とされている。
この空戦から7月いっぱいはドーバー海峡を舞台にした輸送船への攻撃に終始した。
だが翌月、標的がイギリス本土の空軍に変更され本格的な戦闘が開始された。
この段階が最も長くそして最も損害が多かった。
だがこの段階の途中のある日に一機の爆撃機が誤ってロンドンを誤爆、その直後イギリス空軍は報復としてベルリンを爆撃した。
これにヒトラーが激怒、後一歩で英空軍の戦闘能力を奪いかけた矢先の８月３０日、突如独空軍の大編隊がロンドンを空襲した。
ザ・ブリッツの始まりであった。
このロンドン空襲は４０年の８月から一般的にＢＯＢが終わったとされる翌年の5月初めまで続いた。
だがザ・ブリッツは英空軍に立ち直らせる時間を与え、大陸のジャガイモがドーバー海峡を渡ることはなかった。
この出来事はジョンブルにとっては重要でありスピットファイアが救国の戦闘機として伝説となり、彼らの誇りとなった。
彼らは無敵と謳われたナチスに初めて挫折を与えたのだ。
マルセイユはニコの言った都市部への空襲に反応した。
彼女達にはニコは民間人の頭の上に爆弾を落としたように聞こえるからだ。

ニコ「多分民間人も大勢巻き込んだね」
ニコは民間人を殺したかもしれないと認めた。
ニコはザ・ブリッツに参加していた、そして勿論ロンドンやその他の都市に爆弾を落としていた。
それを聞いてハルトマンもマルセイユもニコを驚いた眼で見る。
人畜無害そうなニコが実はハインツやミラーさえもしのぐ殺人者だという事実に。
ニコ「まあ、でもそれが戦争だから。
それを言えばイギリス人はドイツを爆撃して何人殺した、奴らは一晩でケルンを灰にしたんだ。
ハンブルクもベルリンもウルムもイギリス人とアメリカ人によって全部瓦礫になったよ。
それに比べれば僕らがロンドンをいくら爆撃しても街の半分が消えたり一晩に数万人が死んだわけじゃないだけマシだよ」
ハルトマン「ニコ…マシとかって問題じゃないと思うよ」
ニコは独本土への各種の大空襲を引き合いに出すがそれはハルトマンには受け入れがたかった。
戦争だからと言ってニコは自分のしたことを正当化しているように聞こえたからだ。
ニコ「分かってる。でもこれが戦争だから、そう言って納得するしかないんだ僕たちは。
文句があるならもっと上に言ってくれ、僕らはただ命令に従って飛んでるだけだ。
それが、僕たちの戦争なんだ」
ハルトマンの言葉にニコは暗い声で返した。
ニコ「で、話がそれたね。
その間の確か４０年の１２月だったかな?その辺りにロンドンへの爆撃の帰りにトミーのハリケーンに追われて被弾、航空機関士と通信手が戦死、副操縦士も重傷を負って僕も足に被弾してその状態で次々と被弾してエンジンも止まって燃料も漏れ幸い護衛のＢｆ１０９が追い払ったとはいえ大陸に戻れるわけでもなく最終的に真冬

の北海に不時着、気絶しそうなほど冷たい海水の中を泳いで怪我をした副操縦士を連れて脱出、筏に乗って真冬の北海を時化の中一晩漂流した。

翌日味方の飛行艇に救助されたときには二人とも低体温症で副操縦士だったロベルトは凍傷で左足を切断して現役を退いた。」

ニコのＢＯＢの最後の戦いは１２月に真冬の北海に不時着して終わった。

不時着した後荒れた北海で一晩漂流しドイツ空軍の先進的な航空救難部隊であるゼーノートディーンストに救助された。

だが怪我は深刻であり同時に真冬の北海で一晩漂流したため低体温症になっていた。

ニコ「僕もそれから入院した後翌年の3月に部隊に戻ってクレタ戦と北アフリカ戦、それにマルタ戦に参加したよ。

そこで同じ任務に参加するイタリア人パイロットと結構仲良くなったりしたね。

戦闘機パイロットでも何人か仲良くなったりしたよ。」

ニコは退院後地中海の戦い、クレタと北アフリカ、そしてマルタ島の戦いに参加した。

マルタは地中海のちょうど真ん中、中間地点にある島でありこの島からイギリス軍は北アフリカのドイツ軍やイタリア軍の補給を潜水艦と空襲によって脅かし続けていた。

そのためマルタにはイタリア、そしてドイツの爆撃機が殺到した。

さらにこの島は一切の物資を船舶による輸送に頼っていたため輸送船への攻撃も集中した。

この一連のマルタへの空襲とマルタ行き輸送船団への攻撃がマルタ島の戦い、通称第二次マルタ包囲戦だった。

この戦いはいくつもの主要な輸送船団の戦いがあるがその中でも伝説的なのが１９４２年8月2日に開始されたイギリスから輸送船団ＷＳ２１Ｓをマルタへ向かわせる大作戦「ペデスタル」であった。

当時マルタはもはや風前の灯火であった。

空ではカナダ人トップエースの一人であるスクリューボールこと

ジョージ・Ｆ・バーリング以下イギリス空軍のパイロットたちの戦いにより凌いでいたが物資不足は限界にまで近づきつつあった。

マルタに送った数回の輸送船団はすべて枢軸軍の潜水艦と空襲により阻まれ運べたのは僅かであった。

その僅かな物資もなくなりつつありマルタ島の島民はもとより比較的物資に恵まれていたパイロットでさえ食事は腐りかけのコンビーフという程度であった。

さらに深刻だったのが石油の不足、当時マルタ島では飲料水を得るのに海水淡水化装置を使用していた。

その燃料が切れかけていたのだ。

マルタ島が降るＸデーは４２年８月３１日から９月４日にかけてとされた。

マルタ島に鍵十字とファスケスの旗が翻るということはイギリスは生命線たる地中海を失うのと同義であった。

彼らはマルタを救うため当時世界最大のタンカーオハイオ、そして合計１４隻の輸送船、それを守るため北方船団から転用した大艦隊が用意された。

この大艦隊の中にはかの悲劇として名高いＰＱ１７に参加したものもあった。

だがマルタ島を救うにはただ船団を護衛すればいいわけではなかった、鍵となるのはタンカーオハイオ、この超巨大タンカーがマルタ島につかなかった時、マルタの失陥が確定するのだ。

マルタ島、地中海、そして戦争の行方は彼らの手にかかっていた。

そして１９４２年８月２日、輸送船団がイギリスを出発、本格的な戦闘は８月１１日の早朝から始まった。

この日ドイツ海軍のＵボートが護衛の空母イーグルを雷撃、撃沈した。

その後この日一日を通して４回にわたる大空襲を受け商船一隻が損傷し速力低下、駆逐艦フォアサイトが航行不能になりその後駆逐艦タイガーが処分、更にアルジェ沖ではフューリアスを護衛中の駆逐艦ウルヴァリンがイタリア海軍の潜水艦ダガブールを撃沈する代わり

に艦首を大破、空母インドミタブルも空襲により航空機の運用が不可能になったほかヴィクトリアスも被弾した。

翌１２日、イタリア海軍は巡洋艦部隊を送り込んだ。だがこの部隊は独空軍との連携不足、更にドイツ側の能力への不信から翌日にはシチリア島に戻ってしまった。

幸運にもこの日の空襲のうち午前のものは連携不足から簡単に撃退された、だが運がよかったのはこれだけだった。

この日の日没後、イタリア海軍の潜水艦アクスムが軽巡洋艦カイロを撃沈、更に軽巡洋艦ナイジェリアと最重要目標オハイオに命中させる大戦果を挙げた。

さらには午後の空襲でインドミタブルが大破、駆逐艦一隻と商船一隻が撃沈された。

悪いことは続きイタリア海軍の潜水艦アラジとブロンゾはアクスムの襲撃後さらに攻撃を行い軽巡洋艦ケニアを損傷、輸送船２隻を撃沈した。

１３日、退避中のイタリア艦隊を英海軍の潜水艦が襲撃重巡ボルツァーノと軽巡ムツィオ・アッテンドーロが大破した。

またこの日オハイオが空襲で深刻な損傷を受けた他軽巡マンチェスターがＳボート（ドイツ海軍の魚雷艇）によって損傷、復旧を試みるも沈没した。

だが枢軸軍の攻撃も此処までだった。

船団はマルタのエアカバー圏に入ると戦闘機の援護を受けられるようになりその日に生き残った３隻、翌日に損傷して落後していた輸送船ブリスベン・スターが到着した。

その中にオハイオの姿はなかった、だが二日後の１５日、オハイオは駆逐艦ペン、ブラハム、レトベリー、掃海艇ライに抱えられるようにしてマルタ島グランドハーバーに到着した。

オハイオは集中攻撃を受け竜骨が破断、３０発近い直撃弾と至近弾により機関室が全壊、上部構造物は穴だらけにされブリッジには敵機が刺さっていた程であった。

オハイオは入港後すべての石油が抜き取られたのと同時に着底、４

６年に沖合で撃沈処分にされた。
この作戦で空母１隻、巡洋艦２隻、駆逐艦１隻、輸送船９隻を失った、だがこの作戦により地中海の制海・制空権はイギリスの手に戻り第二次エル・アラメインの戦いでは復活したマルタからの攻撃により物資不足にあえぐ枢軸軍を一気にチュニジアまで押し返した。
ニコ「その戦いでマルタに向かう輸送船を３隻撃沈して騎士鉄十字賞をロンメル閣下から直接貰ったよ。
閣下にはその時に感銘を受けて尊敬しているよ。」
ニコはこの戦いの間に輸送船三隻を撃沈、その功績から騎士鉄十字賞を受勲しその時彼に勲章を与えたのはエルヴィンだった。
そのことに感銘を受けニコはエルヴィンを尊敬していた。
ニコ「アフリカはかなり環境が厳しかったし敵も強かった、でもまあいろいろ楽しかったよ。
天才的記憶力を持ったイタリア空軍の戦闘機パイロットと仲良くなったりしてさ。
北アフリカじゃマルタだけじゃなくて友軍支援のため敵軍も爆撃したりで西へ行ったり東へ行ったり。
大変だったよ」
北アフリカ戦はイギリス軍とドイツ軍が互いに攻め込んだり敗走したりを繰り返し戦いだった。
初めはイタリア軍が準備不足でエジプトに侵攻するも準備不足が祟り反撃を受けると一気に瓦解、リビアのトブルク、バルディア、ベンガジを失いトリポリに追い詰められるがそこにＤＡＫが到着、反撃により一気にエジプト国境を越え要所ハルファヤ峠を抑え英軍の機動を制限した。
だがトブルクの要塞化された陣地にこもるオーストラリア軍に悩まされ、さらに数回に渡るエジプト国境でも英軍の大攻勢により補給が付き始めたため４１年の１２月には撤退を開始、放置されたハルファヤ峠の守備隊は降伏した。
撤退によりまたもやキレナイカを失うがマルタ島への攻撃の戦果で補給が安定すると翌年から再度枢軸軍は侵攻すると今度はトブル

クなどを一気に落とし気が付けばエル・アラメインにまで侵攻したがここは極めて侵攻しにくい地点だった。

南には戦車の通行が不能なカッダーラ低地があり戦車部隊が動けるのはカッダーラ低地と海岸の間の狭い地域だけ、その地域に攻撃を仕掛けるも失敗、補給線が伸び切った上に空襲により物資不足にあえいでいた。

そのため枢軸軍は要所ルウェイサット高地を奪えず守勢に回ったがここにドイツ軍は史上最大の地雷原、通称悪魔の園を設営しイギリス軍を迎え撃とうとしたが英軍はこれを正面突破、エル・アラメインの前線を崩壊させた。

この大攻勢にドイツ軍は総崩れになり友軍のイタリア軍の車両を強奪してまで撤退を始めたがその間戦線を支えたのは皮肉にもイタリア軍だった。

南部ではパヴィア歩兵師団とフォルゴーレ空挺師団が壊滅するまで抵抗するも枢軸軍はチュニジアまで撤退してしまった。

その後増援を受けチュニジアで連合軍と相対するも４３年５月に降伏、ここに北アフリカの戦いは終わりをつげた。

ニコ「そんな中、英軍の大攻勢の真っただ中で息もつけない中で僕に移動の命令が来た。

行先はフランスのボルドー、ＫＧ４０第Ⅴ飛行隊だった」

イギリス軍の大攻勢の中、ニコに来たのは移動の命令、行先はビスケー湾のＫＧ４０だった。

この部隊はいわゆるツェルステーラー（駆逐機）装備の部隊で任務は知られざる大西洋の航空戦、ボルドー湾上空のハンターキラーだった。

大西洋の狼たちの頭上を守る任務であり敵は哨戒機、飛行艇、戦闘機、更にはこのころにはイギリスからアフリカに向かう連合軍機も含まれていた。

またこの部隊は４３年にリスボンからイギリスのウィットチャーチに向かっていたＢＯＡＣ７７７便をチャーチル搭乗機と誤認され撃墜した事件を起こしていた。この事件で名優レスリー・ハワードが

非業の死を遂げてしまった。
この戦いの主役となったのはＫＧ４０のＪｕ８８Ｃだった。
ニコ「そこでしばらくの間ビスケー湾上空の哨戒飛行に参加してそこで初めて撃墜スコアを挙げたよ。
最初のスコアは英軍のリベレーター、対潜哨戒中だったところを撃墜、続いてボーフォート、こちらはUボートからの報告を受けて向かったら攻撃中だったから撃墜した。」
ニコはこの戦いでリベレーターとボーフォートを撃墜して２機のスコアを挙げた。
ニコ「で、４３年の１０月にＶ．／ＫＧ４０がＩ．／ＺＧ１になった時に第２夜間戦闘航空団ＮＪＧ２に移動した」
Ｖ．／ＫＧ４０は４３年１０月にＩ．／ＺＧ１に再編されたがその時にニコはＮＪＧ２に移動して独本土防空戦に参加することになった。
ニコ「ＮＪＧ２で飛び始めたけどそこは大変だったよ。
毎日昼夜逆転の生活に敵は爆撃機に護衛のモスキート、損害も多くて上司のハインリヒ・プリンツ・ツー・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン＝ザインも１月に戦死、僕も翌月にモスキートと相討ちになって撃墜されて入院したよ。
まあこの時にランカスター３機とハリファックス１機、モスキート１機を一晩で撃墜してたから柏葉付騎士鉄十字賞を受勲されたね。
一晩で５機撃墜で一気に部隊で一目置かれるようになったよ。」
ニコは後にビッグ・ウィークとして知られる連合軍の大空襲作戦の真っ最中に一晩で５機を撃墜、さらにモスキートと相討ちになるという大戦果を挙げた。
だが撃墜され重傷を負った。
ビッグ・ウィークは連合軍の戦略爆撃の大作戦で目標はドイツの航空機生産能力と航空戦力そのもの。
大規模な爆撃に初めて投入されるＰ―５１を使い一気に航空戦力

の消耗を強いるという大作戦だった。
この作戦でドイツ空軍の昼間戦闘機は大打撃を負いこれ以降ドイツの空の戦いには強敵Ｐ―５１が付くようになり多くのエースが撃墜され始めるようになった。
ニコ「それから6月まで入院、それ以降はＮＪＧ1に移動したよ。ＮＪＧ1でもＪｕ８８を飛ばしてそれから１１機を撃墜したけど４５年2月にモスキートに追われて不時着、その衝撃でこうなったとさ。
満足した？」
ニコはその後ＮＪＧ1に移動してそこで１１機を撃墜した後撃墜され戦死した。
その話を聞いてマルセイユもハルトマンの暗い表情をしていた。
ニコ「それじゃあ、おやすみ。」
黙っている二人を見てニコはベッドに寝転がってそのまま寝始めた。
それを見てマルセイユもハルトマンも同じようにベッドに入ると寝た、だがその心中は穏やかではなかった。

第２８話：Ｃ３発動

翌朝、マルセイユとハルトマンが起きたがニコは二人より先に起きていたためいなかった。
二人は暗い表情をしながら部屋から出るとドアのすぐそばにバルクホルンが立っていることに気が付いた。
ハルトマン「あ、トゥルーデ」
ハンナ「堅物、なんでいる」
呼ばれたバルクホルンは振り向くがすぐに二人の表情がどことなく暗いことに気が付いた。
それを見てバルクホルンは思い当たった。
バルクホルン「ハルトマン、マルセイユ、もしかしてニコの話を聞いたか？」
ハルトマン「う、うん…」
バルクホルン「そうか…」
ハルトマンが頷く。
バルクホルンはそれを聞いて一言返しただけだった。
するとハルトマンが聞いた。
ハルトマン「トゥルーデも聞いたことあるの？」
バルクホルン「ああ、アレックスの話をな…」
バルクホルンは暗い表情で返した。
彼女もまたノヴァクの話を聞いていた。
ハルトマン「ところでトゥルーデ、なんでいるの？」
するとまたハルトマンが話を戻した。
それにバルクホルンはしどろもどろになる。
バルクホルン「あ、あのな、いや、やっぱり何でもない」
ハルトマン「もしかしてハンナのサインが欲しいの？」
バルクホルン「う、私じゃないぞ。妹が奴のファンなんだ…
だから少しでも喜んでくれればと…」
図星だった。
バルクホルンは妹のためにマルセイユのサインが欲しかった。

だがハルトマンの隣にいたマルセイユは即拒否した。
ハンナ「嫌だね。私はサインをしない主義なんだ。」
ハルトマン「なんだよ、いいじゃんサインの一つや二つ」
それにハルトマンが突っかかる。
ハンナ「ふん、あんなシスコンのクソ石頭に書いてやるサインはないね！」
ノヴァク「ほお？それは喧嘩を売ってるのかな？」
すると突然マルセイユの肩にノヴァクの手が置かれた。
それに一瞬でマルセイユは固まる。
マルセイユは先日の喧嘩でのことをよく覚えていた。
そしてこの二人が組めばどんなに恐ろしいことが起きたかを身をもって感じていた。
ハンナ「そ、それは…」
ノヴァク「俺だって手荒な真似はしたくないのよ嬢ちゃん。
ただ君は、黙ってこのポートレートにサインをすればいい。
そうすれば君に一切の危害は加えない、いいね？」
ハンナ「い、いやだ…だ、第一なんでお前がサインを求めるんだ、お、お前も欲しいのか？」
恐怖で固まったマルセイユにノヴァクがゆっくりと話す。
それにマルセイユはやはり拒否し震える声で逆に聞いた。
ノヴァク「義理の妹のためだ、それだけじゃ不満か？」
ハンナ「ぎ、義理の妹？ちょ、ちょっと待て、お前らどういう関係だ？」
ノヴァクが答えるとマルセイユはさらに混乱する。
それにバルクホルンとノヴァクはさも当然のように返した。
バルクホルン「どういうって、婚約者だ」
ノヴァク「ああ、俺はトゥルーデの夫でトゥルーデは俺の妻だ」
ハンナ「え？あ、おめでとうございます」
それにマルセイユは驚き普通の口調で祝った。
バルクホルン「ありがとうマルセイユ。じゃあサインを」

ハンナ「い、いやだ！」
バルクホルン「祝儀にサインぐらい構わないだろう？」
その流れでバルクホルンはサインを要求するがマルセイユは拒否し続ける。
ハンナ「わ、私はサインしない主義なんだ！」
ノヴァク「嬢ちゃん、我々だって手荒な真似はしたくないんだ。
何事も穏便に済ませたいのだよ。
分かるか？」
バルクホルン「お前が折れてくれればすべて丸く収まる話なんだ。
さあどうする？」
ハルトマン「なんかマフィアみたい…」
二人はマルセイユを説得するがその空気とやり口がどう見てもマフィアであった。
それにハルトマンは引いていた。
ハンナ「い、いやだ！」
バルクホルン「そうか、それでも折れないなら一度痛い目に遭ってみるか。
アレックス」
ノヴァク「了解」
するとノヴァクはマルセイユの耳元でわざとらしく指を鳴らす。
それを聞いてマルセイユは青ざめる。
バルクホルン「それじゃあ、逃げるなよ」
ハンナ「ひ、お願い許して…」
バルクホルンは逃げないようにマルセイユを抱きかかえると魔力を使って動かないようにした。
それにマルセイユは逃げようとするが無駄であった。
バルクホルン「カウント3でやるぞ。
3」
ハンナ「許してください許してください」
カウントダウンが始まるとマルセイユは涙目になりながら許しを請うが二人は全く聞いていなかった。

バルクホルン「2」
ハンナ「ひ」
ノヴァク「サインしますって言えば殴らんぞ」
バルクホルン「1」
ハンナ「分かりましたサインしますから殴らないでくださいお願いします」
マルセイユが折れた。
それを聞くとバルクホルンはマルセイユを解放する。
マルセイユは恐怖からかその場に座り込んだ。
バルクホルン「はじめからそう言えばよかったんだ。
じゃあサインしてくれ、万年筆だ」
ハンナ「は、はい！」
バルクホルンはポッケからポートレートと万年筆を渡してマルセイユに渡す。
マルセイユはそれを取ると素直にサインして渡す。
バルクホルン「うん、ありがとうマルセイユ。
アレックス、行こう」
ノヴァク「ありがとうなマルセイユ」
二人は何事もなかったかのように二人に感謝の言葉を述べると行ってしまった。
それにマルセイユは呟いた。
ハンナ「ハ、ハルトマン…あの二人っていつもあんな感じなのか？」
ハルトマン「まあ、隙があればいつもいちゃついてるよ…
とりあえず家族のためなら何でもするんだよ…」
ハンナ「ハハ…そう…怖かった…」
二人の行動にマルセイユは心の底から震えあがっていた。

数日後、C3作戦の全体作戦会議がシチリア島、パレルモで開かれた。

その中にハインツとミーナ、坂本もいた。
坂本「しかし、すごい人だな」
ミーナ「ええ、それにいろんな人がいるわね。」
ハインツ「そうだな、カールスラント海軍にリベリオン海軍、扶桑海軍、ブリタニア海軍、ヴェネチア海軍までいるぞ。」
会議に参加していたのは作戦を支援する地中海の主要艦隊の指揮官、即ちビスマルクを旗艦とするカールスラントチヴィタヴェッキア艦隊司令リュッチェンス中将、ターラントの第６５任務部隊のキッド少将、扶桑海軍第２遣欧派遣艦隊司令西村祥治中将、ブリタニア海軍X部隊のランスロット・ホランド提督とバートラム・ラムゼー提督、ロマーニャ海軍参謀第１３課課長のレニャーノとターラントの第５戦隊司令アントニノ・トスカーニ少将、ヴェネチア海軍作戦部長ルイージ・マスケルパ中将と第１艦隊司令のベルガミーニ、第１戦隊司令のスタニズラオ・カラチョッティ少将までいた。
ハインツ「海軍だけであれだから陸軍の方は…
見ろよ、バーリ軍管区の二コラ・ベッローモ中将とデチマ・マス師団のピエトロ・マレッティ少将、サン・マルコ師団のティート・アーゴスティ少将だ。
まさかサン・マルコ師団とデチマ・マス師団が上陸するのか？」
陸軍の方もまたバーリ軍管区司令で今回臨時で編成される海兵軍団サン・マルコの司令官でバーリ軍管区司令官ニコラ・ベッローモ、そして両師団の師団長であるピエトロ・マレッティ少将、ティート・アーゴスティ少将が来ていた。
さらにこれだけでなく空軍将校も大勢いた。
するとドアが開きエルヴィンが入ってきた。
それを見ると部屋にいた全員が立ち上がり敬礼する。
エルヴィンは部屋の真ん中に立つと返礼する。
エルヴィン「では座ってくれ。」
エルヴィンは返礼すると全員に着席を促す。
促された将校たちは全員一斉に座った。

エルヴィン「早速だが作戦会議を始める。
作戦は勿論Ｃ３作戦のことだ」
そして早速Ｃ３作戦の説明が開始された。
エルヴィン「この作戦の重要な点は陸海空の陸海空一体による極めて高度な上陸作戦である、という点だ。
この作戦は極めて緻密な計画に基づき一切のミスが大損害に繋がる恐れがある、各員はそれをしっかりと心に刻んで欲しい」
この作戦は陸海空の連携を重要とする作戦だった。
数ある作戦の中でも最も困難と言われている作戦、即ち敵前への強襲上陸作戦だったからだ。
すると部屋が暗くなり映写機でマルタ島の地図が映し出された。
エルヴィン「見ての通りマルタ島だ。
ネウロイはここ、北のグランドハーバーを占拠している。
そしてこの島にいたブリタニア軍などの大半は既に南に撤退しその大半が夜間の潜水艦による撤退作戦により撤退している。
残っているのはおよそ３００人だ」
マルタ島の地図を見せながらエルヴィンは説明する。
マルタ島は地中海の最重要拠点の一つであったため多くの兵士がおり元々いた約１万２０００の陸海空の兵員はその大半が即座に撤退し残っていたのは僅か3個中隊程度であった。
エルヴィン「まず作戦だが、作戦開始三日前にサン・マルコ師団の空挺大隊ＮＰと空軍空挺コマンドより選抜空挺コマンドを夜間空挺降下させ情報収集及び作戦前の破壊工作を行わせる」
この作戦の最初の行動はサン・マルコ師団の特殊空挺コマンド部隊ＮＰ大隊と空軍空挺コマンドの兵員を夜間空挺降下させ情報収集と作戦前の破壊工作を行わせるというものだった。
この二つの部隊は空軍と海軍がそれぞれ特殊破壊工作部隊として編成した部隊であり空軍空挺コマンド部隊は既にアフリカでいくつ

かの作戦に参加し能力が評価されていた。
　またＮＰ大隊は夜間空挺降下の技能のほかに水上への空挺降下といった特殊技能を持ち、更にこちらも潜水艦による上陸作戦によるコマンド攻撃を行っていたため能力には定評があった。
　エルヴィン「そして上陸開始日の前夜０２００にブリタニア・ロマーニャ・リベリオン・カールスラントの連合爆撃部隊による夜間空襲を行う。
　夜間空襲後チクローネ師団から分遣された戦闘団アズッロが０３００、空挺降下、ＮＰ大隊、空軍空挺コマンドと連携して島内の各重要拠点を確保せよ」
　上陸前夜には事前空襲としてブリタニア・ロマーニャ・リベリオン・カールスラント連合爆撃部隊による夜間空襲が行われた後、再編中のチクローネ師団から分遣された戦闘団アズッロ(青色)が空挺降下、マルタ島の各重要拠点をＮＰ大隊、空軍空挺コマンドコマンドと共に強襲、確保する予定だった。
　エルヴィン「その後夜明けと共にサン・マルコ師団、デチマ・マス師団、第２６水陸両用旅団、海軍特殊部隊ＦＮＳの各部隊がウィッチ部隊、航空部隊、艦艇の艦砲射撃を援護に強襲揚陸を開始する。
　上陸地点はそれぞれ、レッドビーチにサン・マルコ、グリーンビーチにデチマ・マス、イエロービーチが第２６、そしてブルービーチがＦＮＳだ。
　第一波は０５４５、第二波は０７００、第三波は０８００に上陸開始だ」
　上陸は翌日の夜明けと共に行われる予定だった。
　そして上陸部隊は５０１以下のウィッチ部隊、海軍の艦載機、そして大量の艦艇が援護する予定だった。
　これらの援護を受けながらサン・マルコ、デチマ・マス、第２６水陸両用旅団、ＦＮＳはそれぞれ島の５つのビーチに上陸する。
　エルヴィン「上陸後各部隊はそれぞれ所定の目標拠点を制圧、空挺部隊と合流した後グランドハーバーを奪還する。
　そしてこれと同時に行われるウィッチの特殊作戦がス

テツラだ」
続いてエルヴィンはステツラ作戦の作戦説明を開始した。
エルヴィン「ステツラ作戦の開始時刻は０６００。
第一波と同時にグランドハーバーに伊十三、伊四百が侵入、浮上後ウィッチ３名が発進、ネウロイのコアを直接破壊する。
支援は一切ない特殊作戦だ」
ステツラ作戦は第一波上陸と同時に行われる予定だった。
第一波に遅れること１５分でグランドハーバーに侵入、発進しネウロイのコアを直接破壊する、それが作戦だった。
エルヴィン「各部隊の総司令官は上陸部隊は二コラ・ベッローモ中将が、艦隊総司令はバートラム・ラムゼー提督が指揮してくれ。」
上陸部隊指揮官には二コラ・ベッローモ中将が、艦隊総司令はバートラム・ラムゼー提督が指揮することになった。
エルヴィン「詳細は各部隊で詰めるとしてこれがマルタ島攻略作戦Ｃ３だ。
諸君、地中海の制空・制海権は我々の手にかかっている。
私は諸君らが忠実に義務を果たすことを期待する」
最後にエルヴィンがそう締めると続いて各部隊毎の打ち合わせに入った。

数日後、真夜中のマルタ島上空を一機の輸送機が飛行していた。
上空につくとドアが開き中から数人の迷彩服を着てＭ４２空挺ヘルメットを被りＭ３８とそれ用のサムライベストを付けた兵士が降下した。
彼がＣ３作戦の先遣隊のサン・マルコ師団とデチマ・マス師団のＮＰ大隊だった。
彼らは地上につくとパラシュートを切り離し銃を構えるとマルタの市街地を動き始めた。
空挺兵Ａ「前方、小型ネウロイ」
前方に小型ネウロイを見つけると彼らは忍び寄り陰から手榴弾を投げつける。

数秒後爆発してネウロイを始末した。
空挺兵Ａ「行くぞ」
彼らは撃破すると夜のマルタの廃墟を進み始めた。

それから数日後の深夜、マルタ沖
イオニア海を大艦隊、１０隻近い戦艦、１００隻以上の護衛艦艇、そして１００隻近い輸送船で編成された大艦隊だった。
戦闘序列はラムゼーを指揮官とする司令艦隊の下に輸送艦隊、護衛艦隊、支援艦隊の三つが置かれ、その中で戦艦や重巡といった大型艦艇からなる上陸部隊支援艦隊はインペロを旗艦とするベルガミーニが指揮していた。
その中の一隻、上陸指揮艦として改装された客船ヴィルヘルム・グストロフではブリッジから作戦を指揮する二コラ・ベッローモ中将とバートラム・ラムゼー提督は目の前の艦隊を見てつぶやいた。
ベッローモ「凄い艦隊だ…海が３分に船が７分だ…」
ラムゼー「ノルマンディーの時はもっとすごかったぞ。
水平線の向こうからもいくつも煙がたなびいていた。
文字通り英仏海峡を埋め尽くすほどの大艦隊だったよ」
ベッローモはこれ程の大艦隊を見たころがなかったがノルマンディー上陸作戦を指揮したこともあるラムゼーにはこの程度の艦隊はどうってことはなかった。
すると見張りから報告が入った。
見張り『上空、友軍機、通過します』
艦隊の上空を大規模な爆撃機編隊が通過した。

上空を通過する爆撃機編隊では航空兵たちが眼下の大艦隊を見ていた。
航空兵Ａ「史上最大の大艦隊だ…」
航空兵Ｂ「そんなの見てる暇はないぞ。
そろそろだ、全機アタックフォーメーション」

眼下の艦隊を見て息をのむ航空兵に機長が言う。
編隊はコンバットボックスを組んだＢ―１７とＢ―２４、そしてその後ろをＳＭ７９スパヴィエロの編隊が続いていた。
航空兵Ｂ「爆弾倉開け。
投下用意！」
爆撃手「目標照準、よーい、リリース！」
爆撃手が月明かりの中目標を捉えると大量の爆弾の雨が降り始めた。
マルタ島では大量の爆弾が降り注ぎ次々とネウロイが破壊されていった。
そして爆撃機の編隊がマルタ島を破壊しつくし煙と炎に包まれた後、数百機のＣ―４７とＳＭ８２、そしてグライダーがマルタ上空に侵入した。
彼らは上空に到達すると空挺降下を開始した。
ネウロイは反撃しようにも事前の空襲で反撃能力を失いなすすべはなかった。
彼らは空挺降下すると事前に降下したＮＰ大隊や空軍空挺コマンドと合流しマルタ島各所の確保に動いた。

２時間後の現地時間０４００、大艦隊がマルタ島の沖合に表れた。
そして艦砲射撃を行う支援艦隊は各上陸地点の１０キロ沖合に到達、そしてベルガミーニはマルタ島を眺めながら命令する。
ベルガミーニ「全艦、砲撃用意」
チーマ「対地砲撃用意！弾種榴弾！」
その命令を艦長のアドネ・デル・チーマ大佐が復唱する。
すると各艦マルタに主砲を向け照準する。
それは他の艦隊でも同じだった。

ビスマルクの艦橋ではリュッチェンスにビスマルクの砲術長と参謀が報告していた。
砲術長「アントン、ベルタ、ツェーザル、ドーラ、各主砲塔装填、照

準完了。
　左舷副砲群射撃準備完了」
参謀「ティルピッツ、アドミラル・シェーア、アドミラル・ヒッパー射撃準備完了。
　いつでもいけます」
リュッチェンス「了解、インペロに打電」

アリゾナでは
キッド「全艦いけるな？」
ヴァルケンバーグ「は、いつでもやれます」
キッドが隷下の艦隊の状況を聞いていた。
キッド「そうか、クラウツとジャップの新鋭艦相手に俺たちはこのロートルか。
　まあ、ロートルはロートルなりに楽しんでみるがね」
ヴァルケンバーグ「新しいことがすべてでないことを教えてやりますよ」

また武蔵の艦橋では西村中将が艦長の猪口敏平少将に聞いていた。
西村「さてと、いつでもやれるかね？」
猪口「ええ、命令さえあればいつでも」
西村「そうか、君の腕の見せ場だよ。
　せっかく武蔵だけじゃなく山城と扶桑も与えられたんだ。
　こんな立派なおもちゃを使う機会はなかなかないよ」
猪口「勿論、楽しめるだけ楽しんでみます」
砲術の権威である猪口の腕を西村は期待していた。

フッドでは
参謀「フッド、レパルス、バーラム、ロイヤルオーク、コーンウォール、ドーセットシャー、エジンバラ、フィジー、トリニダード射撃準備完了」
ホランド「そうか、インペロに報告。

砲撃準備完了、ロイヤルネイビーは各艦隊がその義務を尽くすことを期待する、と」

ロマーニャ艦隊旗艦重巡フィウメではロマーニャ艦隊司令トスカーニがいた。

参謀「トレント、トリエステ、ボルツァーノ、準備完了。いつでもいけます」

トスカーニ「そうか、ベルガミーニ提督に伝えろ」

参謀「は」

そして全艦からの射撃準備完了という報告がインペロの艦橋に届いた。

参謀「カールスラント、扶桑、リベリオン、ブリタニア、ヴェネチア、ロマーニャ各艦隊射撃準備完了。いつでもいけます！」

ベルガミーニ「うむ、全艦砲撃開始！」

ベルガミーニが発砲を命じる。

そしてこの命令が各艦に届くと次々と爆炎が現れ爆音が響き渡ると火の玉がマルタへ飛んでいくと大爆発を起こす。

C３作戦の開始である。

第２９話：マルタの戦い

マルタ島、地中海のちょうど真ん中にある面積２４６?の島。
この島は古くより地中海の要所として数多くの者たちが支配してきた。
紀元前１０００年頃にはフェニキア人が、ＢＣ４００年頃にはカルタゴ、そしてローマの支配を受け地中海交易の拠点として栄えた。
その後アラブ人、ノルマン人、スペイン、聖ヨハネ騎士団、フランス、イギリスと変わっていった。
またこの島は地中海の要所であることからかの高名な第一次マルタ包囲戦ではマルタ騎士団が死守、第二次世界大戦中には枢軸軍による徹底した空襲と封鎖により危機を迎えるが無事脱し島と島民そのものにジョージクロスが授与され、冷戦期にはこの島でアメリカとソ連の歴史的な会談、マルタ会談が行われ冷戦の終結が宣言された。

その島の沖合、多数の砲弾やロケット弾が島に降り注ぐ中上空をウィッチたちが飛んでいた。
バルクホルン「凄い砲撃だな…」
ノヴァク「ああ…まさに鉄の暴風だ」
その圧巻の砲爆撃を見ながらウィッチたちは茫然としていた。
地上では次々とネウロイが破壊されていた。
ハインツ「茫然としてる暇はないぞ。
そろそろ第一波が動き出すころだ」
ミーナ「ええ、私たちの任務は上陸部隊の上空支援よ」
「「了解！」」
茫然とするウィッチたちをハインツとミーナがウィッチたちに言う。
それにウィッチたちが返事した。
眼下では明け方の薄暗い中海面にいくつもの小さなものが白い筋

を作りながら進んでいた。

その小さなものとは上陸部隊のＬＣＶＰとＬＣＭだった。
彼ら海兵部隊はロマーニャ軍の精鋭であり精強な兵士たちだった。
彼らはカルカノライフルやベレッタＭ３８、ブレダＭ３０を持ちヘルメットを被り襟無しの軍服を着、波しぶきでずぶぬれになりながら緊張した面持ちである者は緊張で手が震え、ある者は船酔いで吐き、ある者は神に祈っていた。
艇長「上陸１分前！神のご加護を！」
ＬＣＶＰの艇長が上陸までの時間を伝える。
それを聞くと小隊長が部下に言う。
小隊長「左舷用意！右舷用意！
　着弾穴に注意！」
軍曹「互いにくっつくな！
　一人より五人が狙われる！」
小隊長「銃に砂が入らないように注意しろ！特にパオロとマルコのＭ３０」
小隊長が緊張をほぐそうとジョークを言うと全員がクスリと笑う。
するとＬＣＶＰが何かにぶつかって止まる。
そして艇の乗員がハンドルを回し始めるとゆっくりと船首が開きマルタの街が見え始めた。
小隊長「サン・マルコ！アヴァンティ！」
船首が完全に開くと小隊長が号令を取るとＭ３８を持って走って突撃する。
それに続いて兵士たちも艇から飛び出し前進する。
その周りでも同じように兵士たちやブリタニア軍のチャーチル戦車、ロマーニャ軍のⅢ号戦車やⅣ号戦車が上陸用舟艇から降りると突撃していた。
ネウロイは既に事前の艦砲射撃で粗方殲滅され浜辺には砲弾のクレーターとネウロイだったものしか残っていなかった。
彼らは無抵抗で浜辺を突破、マルタの市街地に入った。

小隊長「艦隊の野郎どもやりすぎだ。
　地図がまるで役に立たねえ」
海兵Ａ「ですね、ここがどこだかさっぱり。
　空挺兵はどこにいるんでしょうか？」
市街地に入ったチャーチル戦車を伴った海兵だが市街地は空襲と艦砲射撃で滅茶苦茶であり持っていた地図がまるで役に立たず空挺兵がどこにいるかもさっぱりわからなかった。
小隊長「とりあえずグランドハーバーは分かるぞ、あのでっかいのだろ？」
海兵Ａ「ええ。どうします？」
小隊長「とりあえず進もう。ここで止まったらいい的だ」
彼らは止まらずに進み始めた。
すると突如ビームが彼らの頭上を飛び越えた。
小隊長「ネウロイだ！手榴弾！パンツァーファウスト！」
突如数体のネウロイが前方１００ｍに表れた。
すぐに援護していたチャーチル戦車が発砲、一体を撃破する。
ネウロイはチャーチルを攻撃するがチャーチルの分厚い装甲に阻まれる。
攻撃を耐えたチャーチルはすぐにまた発砲し撃破する。
その間に兵士たちがネウロイに近寄りパンツァーファウストを撃ち込み一体を撃破、更にパンツァーシュレックを持った兵士が近寄るともう一体を撃破する。
だがここまで撃破するとネウロイは逃走を始めた。
小隊長「クソ、逃げるぞ！」
その直後、ネウロイが上空から銃撃され撃破された。
小隊長「ウィッチだ！」
撃破したの５０１のウィッチだった。
５０１は各所で陸軍部隊を支援していた。
海兵Ａ「小隊長、助かりましたね。」
小隊長「ああ。とりあえず先を急ごう。１１時方向から銃声がする。

もしかしたら味方かもしれん、行ってみよう」
彼らはネウロイを撃破すると先を急いだ。
彼らは銃声がした方向に瓦礫で埋まった通りを戦車を置いて向かい始めた。
その銃声がした方向では空挺兵とＮＰ大隊の兵士が建物に立てこもりネウロイを攻撃していた。
空挺兵Ａ「おい！味方はいつになったら来るんだ！」
空挺兵Ｂ「知るか！アパム弾持って来い！」
その建物の屋上では眼下の通りのネウロイに向けカルカノライフルでネウロイを銃撃する兵士が隣でブレダＭ３７を撃つ重機関銃手に言うが彼は無視して弾薬手に弾薬を持ってこさせる。
空挺兵Ｃ「新手のネウロイ！手榴弾！」
空挺兵Ｄ「衛生兵！衛生兵！」
空挺兵Ｅ「ママ！ママ！」
その下の階ではサムライベストを着て迷彩服を着たＮＰ大隊の下士官がネウロイを見つけ窓から手榴弾を投げネウロイが吹き飛ぶ。
部屋の反対側では破片を食らったのか腹部から酷く出血し泣き叫ぶ空挺兵をとっくの昔に弾薬を使い果たしたのかベレッタＭ１９３４を持ち空になったサムライベストを付けた下士官が衛生兵を呼んでいた。
隣の部屋では
空挺兵Ｆ「クソ、詰まった！」
空挺兵Ｇ「どけ、こっちの方がいい！」
軽機関銃手がＭ３０を撃っていたが弾詰まりを起こしてしまい軽機関銃を捨て拳銃を取り出して下の通りのネウロイに発砲すると横からカルカノライフルを持った兵士がパンツァーファウストを構えてネウロイに撃ち込み撃破する。
空挺兵Ｈ「クソ、弾はいくらある！」
空挺兵Ｉ「もうそれほど残ってません！
３人が死亡、２人が重傷、４人が軽傷です！」
空挺兵の隊長が状況を聞くが状況は芳しくなかった。

空挺兵Ｈ「全滅は時間の問題だぞ！」
隊長が嘆いていると突如別の方向から銃声が響いた。
空挺兵Ａ「なんだ？」
空挺兵Ｂ「ありゃ…味方だ！サン・マルコ師団だ！」
屋上にいた重機関銃手と兵士がそれがサン・マルコ師団だと気が付いた。
海兵Ａ「小隊長！いました！アズツロとＮＰです！」
小隊長「俺の言ったとおりだ。
サン・マルコ師団は続け！」
向かっていたサン・マルコ師団の兵士が空挺兵に気が付くと手を振り急いで空挺兵たちの下に向かう。
それは空挺兵からも見えていた。
空挺兵Ｈ「騎兵隊の到着だ！
チクローネ、ＮＰ大隊突撃！」
それを知った隊長は自らＭ３８を手に取ると兵士たちを引き連れ突撃、ネウロイを撃破してサン・マルコ師団の海兵たちと合流した。

地上で歩兵たちが市街戦を展開していた頃、海中では2隻の潜水艦がグランドハーバーに秘密裏に侵入した。
侵入した二隻の潜水艦は湾内に入ると浮上、３人のウィッチが甲板に上がった。
ハンナ「発進！」
ウィッチ、即ちマルセイユ、ハルトマン、そしてニコは伊四百と伊十三から離艦した。
離艦した３人を狙い回りの多数のネウロイが彼女たちを攻撃する。
だが三人はそれをうまく回避する。
ハルトマン「うわあ！いっぱいいる！」
ニコ「敵合計４０！」
ニコとハルトマンは無線で報告する。
だが直後にマルセイユが否定する。

ハンナ「違う、３８だ」
ハルトマン「３５だよ」
ニコ「３０」
３人はそれぞれ攻撃の合間を縫って次々と撃破していった。
ハルトマン「２８」
ハンナ「２５だ」
ニコ「２１！」
ハンナ「１０！」
３人はある程度片付けると本丸のコアめがけて急上昇する。
ハンナ「７！」
ハルトマン「６！」
ニコ「５！」
ハンナ「４！」
ハルトマン「３！」
そして最後の３体を３人が同時に撃破する。
「０！」
ニコ「残りはコアだ！」
３人が銃撃を浴びせるとその銃弾は同時にコアを破壊した。
破壊されるとドームは真上から崩壊していった。
崩壊し始めると３人が急上昇して出てきた。
ハンナ「１３だ」
ハルトマン「私も１３、ニコは？」
ニコ「ん？１４だけど？」
３人はそれぞれが撃墜した数を聞いたが一番多かったのはニコだった。
ハンナ「また負けた…」
ハルトマン「流石ニコ」
ニコ「いえいえそんなことないですよ」
ハルトマン「謙遜しなくていいだよ？」
ニコはいつものように謙遜するがハルトマンが謙遜しなくてもいいという。

グランドハーバーのネウロイの撃破は沖合の艦隊からも観測された。
見張り『グランドハーバーのネウロイ消失！』
ベッローモ「やったか！」
ラムゼー「司令部に打電、ステッラ作戦成功。
　これより残敵掃討に移行する。」
見張りからの報告にベッローモは喜びラムゼーは総司令部へ打電を命じた。
これにより作戦は掃討戦に移行した。

勿論その光景は空からも見えていた。
ミラー「少佐、あれ」
ハインツ「え？お、やったか」
ミラーが最初にグランドハーバーのネウロイが崩壊し始めたことに気が付き隣のハインツに報告する。
ハインツも振り向いて確認する。
ヤン「やったな」
エイラ「ほんと、すごいよなニコは」
サーニャ「ニコさん…」
ヤン、エイラ、サーニャも遠くから3人の戦果を確認した。
他のウィッチもそれぞれ各担当地域の上空で崩壊を見ていた。
すると突如無線からハインツの声が響く。
ハインツ「お前ら、余韻に浸ってる暇はないぞ！
　残敵掃討って任務があるんだ、これから忙しいぞ」
「了解！」
ハインツの命令が届くとそれぞれ各地域で地上の残党のネウロイ狩りが始まった。
ネウロイ狩りは丸一日続きその日のうちにマルタのネウロイは完全に殲滅された。

翌日、５０１の基地では輸送機が駐機しそのそばでハインツとミーナ、マルセイユ、坂本が会話していた。
ミーナ「ずいぶん急ぐのね」
ハインツ「昨日一日中飛んだんだ、少しぐらい休んだらどうだ？」
ハンナ「午後から向こうで雑誌の取材があるんでね」
ハインツ「はあ、そっちもそっちで大変なんだな」
一日中戦ったにも関わらずマルセイユはアフリカに帰ろうとしていた。
それにハインツは向こうの事情を察した。
ハンナ「ああ、そうだ。
　一つ言付けを頼みたい」
ハインツ「ああ、いいが誰に？」
ふとマルセイユはハインツに言付けを依頼した。
ハンナ「ニコにだ。
　ロマーニャが片付いたらアフリカで会おう。
　そこで決着をつけてやる、って」
ハインツ「ああ、分かったよ。
　というか直接言ったらどうだ？」
するとハインツが直接言うことを勧めた。
だがそれにマルセイユはＪｕ５２のタラップを上り機内に入るとハインツに言った。
ハンナ「言っただろ。私は忙しいんだ」
カッコつけて言うと彼女はアフリカに帰っていった。

エルヴィン「Ｃ３作戦は大成功だ。
　貴官らの協力に感謝する」
同じ頃、ローマではエルヴィンがアイケやバルボ達と話し合っていた。
彼は真っ先にＣ３作戦への感謝を述べ一人づつ握手する。
バルボ「此方としてもヴェネチアを叩く前に背後の憂いを断ちたい

ですから」
エルヴィン「事情は同じですよ。これでスーパーチャージ作戦を実行できる。
言い方は悪いですがこの件のお陰でこちらは時間を稼げた。
来月の初めには実行できそうだ」
この一連のマルタでの作戦の間に彼らはスーパーチャージ作戦の最終準備を整えられた。
この作戦には北アフリカのほぼ全軍、さらにリベリオンからの増援のバックナー中将指揮するリベリオン第１０軍が投入される予定だった。
彼らはまずリビア・エジプト国境を沿岸部を攻撃すると同時に戦車部隊が内陸部を迂回、国境地域の主力を包囲、殲滅するのと同時にエジプトのエル・アラメインに第１０軍が上陸し国境地域の主力を包囲、各個撃破するのが狙いだった。
この作戦で一気に北アフリカ戦線をこじ開け前線をアレクサンドリアまで押し上げるつもりだった。
だがこのままの実行時期が不味かった。
アイケ「ちょっと待て、来月初め？
おい」
バルボ「ああ、マルスとクロスロードに重なる」
エルヴィン「なんだそれ」
丁度その時期はヴェネチア方面への連合軍の二つの作戦と重なる予定だった。
一つが海軍戦力によるヴェネチアへの攻撃、マルス。
もう一つが秘密兵器原子爆弾を使用したクロスロードだった。
デ・ボーノ「ヴェネチアへの攻撃作戦だ。
まあ我々の本命はマルスではなくクロスロードだがね。
この作戦には艦隊が動員される。同時期に上陸作戦なんてほとんど無理だ」
マルス作戦には艦隊が使用されるためスーパーチャージ作戦は実

行不能だった。
エルヴィン「分かった。作戦時期は来月半ば、７月の２０日ぐらいにしよう」
デ・ボーノ「いいだろう、こちらは７月１０日頃でいいな？」
バルボ「いいだろう。そのぐらいには５０９は作戦可能だ」
アイケ「これで決まりだな」
こうしてマルス、クロスロード、スーパーチャージの作戦実行日が決定された。
後に崩壊の夏と呼ばれるようになるネウロイへの最終攻勢、その最初の段階が決まったのだった。

第３０話：崩壊の始まり

１９４５年６月３０日

「「Ｗｉｒ ｓｉｎｄ ｄｅｓ Ｇｅｙｅｒｓ ｓｃｈｗａｒｚｅｒ Ｈａｕｆｅｎ～♪ Ｈｅ ｊａ ｈｅ ｈｏ！
Ｗｉｒ ｗｏｌｌ，ｎ ｍｉｔ Ｐｆａｆｆ，ｕｎｄ Ａｄｅｌ ｒａｕｆｅｎ～♪ ｈｅ ｊａ ｈｅ ｈｏ ｈｏ！」」

ヴェネチアの南西約８０キロ、サンタ・マリア・マッダレーナ。
ここにかかる橋ではえんどう豆柄の迷彩服を着た兵士や迷彩ヤッケを着たカールスラント軍の戦車部隊が軍歌を歌いながらこの街に流れるポー川に架かる橋を渡っていた。
彼らは第６００騎兵師団フロリアン・ガイエルの将兵だった。
だが彼らは進撃しているのではなく真逆、撤退していた。
彼らは北からやってくるとこの街の橋を渡ってポー川南岸に移動していた。
その光景を橋のすぐ傍の建物に設けられた第１５騎兵軍団司令部からクリューガー、フェーゲライン、第１６装甲擲弾兵師団ファスケス師団長ヴェルナー・オステンドルフ少将、第３９装甲師団トーテンコップ師団長フリッツ・ヴィット少将が見下ろしながら作戦会議をしていた。
クリューガー「ネロ作戦はとうとう最終段階に来たが状況は？」
フェーゲライン「予定通りです。
ネウロイの動きは非常に鈍く追撃する動きは見えません」
彼らはクロスロード作戦に付随した撤退作戦「ネロ」に従いポー川北岸から撤退していた。
ネロ作戦はポー川以北の地域の全部隊を焦土作戦を行いつつ撤退させる作戦だった。
オステンドルフ「私のファスケス師団もです。

一切の金属を一つ残らず回収しながらすべてを燃やしつつ撤退しています」

ヴィット「トーテンコップ師団も既に部隊の半分が撤退済み。敵の追撃はほぼないです」

それぞれ状況をクリューガーに伝える。

ネロ作戦は現状では大成功と言えた。

クリューガー「そうか、では予定通り撤退。撤退後はクロスロード作戦終了後まで穴に隠れておけ」

ヴィット「ところで中将、クロスロード作戦はどういう作戦なんですか？

小官たちには一切伝えられてないのですが…」

するとヴィットがクロスロード作戦の詳細を聞いた。

だがそれはクリューガーもよく知らなかった。

クリューガー「分からん。

ただ危険だからヴェネチアから最低５０キロは離れろと言われてる。

本当にそれだけだ」

オステンドルフ「はあ」

それにただ全員が相槌を打つだけだった。

シャーリー「なあ、ハインツ、構ってくれよぉ～」

ハインツ「はいはい、構ってやるからさ。

仕事の邪魔はするなよ」

その日の夜、５０１のハインツの部屋では機体のオーバーホールのため出撃できないため一日中書類の処理をしていたハインツにソファーに座ったシャーリーがちょっかいをかけていた。

それにハインツは処理中の書類とタイプライターと万年筆、コーヒーが入ったマグカップに灰皿を持ってシャーリーの隣に座った。

シャーリー「サンキュ！ハインツ！」

ハインツ「どういたしまして。
　なあ、男の膝に寝転がっても痛いだけだろ？」
シャーリーはハインツが隣に座るとすぐにハインツの膝に寝転がって膝枕の姿勢を取っていた。
それにハインツが突っ込む。
シャーリー「別に～ハインツのだからいいんだよ～
　ハインツってバルクホルンとノヴァクとかミラーとリーネみたいにいちゃついてこないからさ、こっちから構わないとさぁ」
ハインツ「あんまり人前でいちゃつかないミラーたちはいいとしてあのバカを見習うなよ。
　彼奴らスイッチ入ると周り気にせずいちゃつくぞ」
シャーリーはハインツがあまりにも構ってこないことにしびれを切らして自分からアタックしたのだ。
その気持ちは何となくハインツも理解していた。
シャーリー「まあね…本音はあれぐらいやりたいけど。」
ハインツ「人目がなかったらあれぐらいやってもいいんだぞ？」
シャーリー「じゃあやって！」
ハインツ「はいはい」
シャーリーがいちゃつきたいと強請るとハインツはシャーリーの口にキスする。
だがキスしたのとほぼ同時にドアが開いた。
ミーナ「ハインツさん、い…
　お邪魔だったかしら？失礼するわね」
ハインツがシャーリーにキスしてるを見てミーナはそそくさと部屋から出て行こうとする。
ハインツ「！中佐！別に邪魔じゃないですよ！シャーリー立て！」
シャーリー「中佐！あの、その…」
すぐにハインツはシャーリーを立たせてミーナを引き止める。
出て行こうとしたミーナは振り返るとハインツの前に座った。
ミーナ「いいの？お邪魔じゃなかったかしら？」

シャーリー「問題ないよな、ハインツ」
ハインツ「あ、ああ」
ミーナは二人の水入らずの時間を邪魔したことを気にするが二人は気にしていなかった。
ミーナ「別に膝枕してても良かったのよ」
ハインツ「シャーリー、どうする」
シャーリー「じゃあお言葉に甘えて」
ミーナの許可を得るとシャーリーはまたハインツに膝枕されて寝転がる。
ハインツはシャーリーを膝枕するとミーナに聞いた。
ハインツ「で、なんの用ですか？」
ミーナ「今すぐ書類を作ってほしいの」
ミーナはハインツに書類作成を依頼しに来たのだ。
ハインツ「そのぐらいならいいですけど、なんの書類？」
ミーナ「美緒の飛行禁止書類」
シャーリー「え？」
ハインツ「坂本になんかあったのか？」
坂本の飛行禁止書類と聞いてハインツとシャーリーは驚いた。
突然そんな書類を依頼されたことにハインツは理由を聞いた。
ミーナ「今日の戦闘で美緒の様子がおかしかったの。
烈風斬を撃った後一瞬苦しんだようだったの」
この日の昼間の戦闘でミーナは坂本がネウロイに烈風斬を撃った直後に苦しんだ様子を見ていた。
それで自分の権限で坂本の飛行禁止を命じることにした。
ハインツ「なるほどね。それで大事を取って」
ミーナ「いいえ、美緒の魔力はもうなくなりかけてるの。」
ハインツ「は」
シャーリー「少佐が？」
ミーナの言葉に二人が驚く。
坂本の魔力がなくなりかけているというのは初耳だった。
ミーナ「だから、作ってくれるかしら？」

ハインツ「いいですよ、中佐には部下に対する責任がある。
　俺にも上官に対する責任がある。
　5分ぐらい待ってください」
ハインツはミーナの依頼を受けるとタイプライターに紙をセットし文字を打ち込み始めた。
5分ほどすると書類が完成しハインツがサインしミーナに万年筆と共に渡す。
ハインツ「はい、あとは中佐がサインするだけです」
ミーナ「ええ。これで美緒はもう飛ばないのよね？」
ハインツ「一応な。命令無視すれば別だが。
　彼奴らやたら命令を無視したがる」
ミーナが再度ハインツに確認するとミーナは万年筆を取ってサインした。
ミーナ「これでいいのよね？」
ハインツ「ああ。とりあえずこいつは明日渡すよ。
　もう今日は遅い」
ハインツが壁に掛けられた時計を確認して言う。
もうすでに時間は消灯時間の少し前だった。
ミーナ「そうね、ところでシャーリーさん。
　あなた何時からハインツさんと付き合ってたの？」
シャーリー「中佐？」
すると突然ミーナがシャーリーに聞いた。
それにシャーリーが驚いた。
ミーナ「いいじゃない、恋愛話ぐらい」
ハインツ「それ、俺がいない方がいいか？」
ミーナ「いない方がいいわよ」
ハインツ「あいよ、じゃあシャワーでも浴びてくる。
　今の時間帯ならだれも使ってないだろ？」
二人の空気を察したハインツは立ち上がると着替えを持ってシャワーを浴びに行った。
ハインツが出ていくとシャーリーが答えた。

シャーリー「告白した、っていうか口滑らしたのは去年の８月。
　ちゃんと付き合い始めたのはここ一か月ぐらいかな？」
ミーナ「そう、私より先こされちゃったわね」
シャーリー「え？」
ミーナの突然の告白にシャーリーは驚いた。
ミーナは微笑みながらシャーリーに話す。
ミーナ「ここだけの話、私もハインツさんのことが好きだったの。
　でも、シャーリーさんに取られちゃったわね。」
シャーリー「え、なんかごめんなさい」
ミーナ「ふふ、幸せにね。
　そろそろ私も行くわね、おやすみなさい、シャーリーさん」
ミーナは最後に微笑んで言うと立ち上がって出て行った。
残されたシャーリーは一人ソファーに寝転がると呟いた。
シャーリー「あーあ、ライバルは多いなぁ…」

翌朝、ハインツは坂本の部屋の前にいた。
ハインツ「坂本、い…宮藤！何やってる！」
ハインツは坂本の部屋のドアを開けるとそこには宮藤が烈風丸を持っていたが烈風丸は発光して明らかに通常とは思えない状態だった。
　ハインツが駆け寄ると突然宮藤が意識を失い烈風丸を落として倒れる。
　すぐにハインツが宮藤の体を支える。
ハインツ「宮藤、大丈夫か？」
宮藤「は、はい…ハインツさん」
ハインツ「そこで座ってろ。
　一体何なんだこいつは」
ハインツは宮藤に座らせると畳に突き刺さったままの烈風丸を引き抜き観察する。
　すると烈風丸はまた発光し始める、そして同時に魔力を吸い取られる感覚を感じ急いで床に置き鞘に戻す。

ハインツ「ふう、なんだこの危険な奴は」
坂本「ハインツ！宮藤！何やってる！」
すると突如坂本が部屋に入り二人を怒鳴る。
ハインツは振り返り坂本の方を見ると問い詰めた。
ハインツ「なんだこの危険な武器は？
　こんな危険な物がここに置かれていたのか？」
坂本「ハインツ、二度と烈風丸を触るな」
ハインツ「分かってるよ、こんな危険な物二度と倉庫から出しちゃいかん。
　こいつは俺の権限で回収させて貰う」
ハインツは烈風丸を自分の権限で回収することにした。
基地内の一切の武器管理はハインツの管轄だった。
坂本「待て、ハインツ。
　なぜ回収する？」
ハインツ「危険物を回収するのに理由がいるか？
　これは、危険すぎる」
坂本「ハインツ！」
坂本はハインツに抗議するがハインツは一切聞く耳を持たなかった。
そしてハインツはさらに坂本を追い詰める事を伝える。
ハインツ「それとお前にだ、今日から一切の飛行を禁止する。
　いいな？これはミーナの命令だ」
坂本「ハインツ！お前は私から烈風丸だけじゃなく翼まで奪うのか！」
ハインツ「そんなこと知ったこっちゃない。
　俺は部下と上司の生命に対する責任があるんだ」
ハインツは坂本に飛行禁止を伝えた。
それに坂本は今まで以上に強く抗議しハインツの胸倉を掴むがハインツは意に介さない。
ハインツ「お前がどう思おうとこれは命令だ。
　戦闘隊長だがなんだか知らねえがあんたも佐官なら相応

しい態度ってものを取るんだな。
　それと少しは喜んだらどうだ?戦わなくて済むんだ」
坂本「ハインツ…」
ハインツ「それと、今日は会議でターラントに行くのを忘れるなよ」
ハインツは坂本の手を無理やりほどくと出て行った。

地中海方面連合軍総司令部はターラントにあった。
ロマーニャ軍の司令部や軍司令部の多くはローマかフェラーラ、マントヴァにあったのに対してこのロマーニャ随一の軍港に司令部を構えていた。
　坂本「どういうことですか将軍!」
ミーナ「作戦にウィッチは必要ないということですか?」
そこで坂本とミーナは目の前に座る地中海方面の連合軍司令部の将官――アイケやバルボの言うところの態度だけはやたらでかい無能――に抗議していた。
その中で端に座るレーアとアイケは渋い顔で将軍たちを見ていた。
将軍「そうではない、ネウロイを倒す主戦力はウィッチではない。
　そう言っているだけだ」
レーア「第一、ネウロイの巣をウィッチ部隊単独で撃破しようなど能力を過信しすぎだ。
　まあ、今回の作戦は私やロマーニャ軍の上層部も疑問を持っているのだがね」
レーアは将軍たちに嫌味を言う。
それに将軍たちは気にしなかった。
将軍「レーア大将、アイケ大将、ミーナ中佐、今回の作戦は既に決定したのだよ。
　そうだな、ベルガミーニ提督」
ミーナ達は驚き視線をレーアの横で不機嫌そうな態度で立っているベルガミーニに移した。
　ベルガミーニ「ええ、ヴェネチアのクソッタレは海軍が叩き潰します。

ふん、（どうせ失敗するぞ無能共が）」

それにベルガミーニは返事するが小声で恨みの言葉を言うほど不満だった。

それに坂本はベルガミーニ抗議する。

坂本「ベルガミーニ提督！海軍の艦艇はいくら大和と武蔵を以てしても通常兵器です！

上空のネウロイの巣を破壊できるとは思えません」

将軍「通常兵器ではないのだよ、少佐。

戦艦大和は我々の決戦兵器なのだ」

坂本「決戦兵器…」

ベルガミーニ「大和にウォーロックとやらに使われた技術を改良したシステムが搭載されているらしい。

たった１０分ながらネウロイ化が可能だそうだ」

ベルガミーニが解説する。

これはドーバー事件の際に戦闘団ギルザが鹵獲した各種資料に基づきそれを扶桑が改良したシステムを大和に搭載していた。

だがベルガミーニを含めて多くの将官はこの技術を信頼せずこのあまりにも信頼できない兵器を作戦の主軸とするマルス作戦に反対であった。

特にベルガミーニは大和を事故として撃沈するためデチマ・マスを使おうとしたほどだった。

流石にそれはできなかったものの彼は部下に秘密裏に大和へのサボタージュを命じていた。

この作戦は彼らが連合軍総司令部を見限る最後の一押しとなった。

もはやベルガミーニは彼らの言うこと、そしてこの無能共に従うよう命じるヴェネチア政府さえ無視するようになったがこの時点ではまだ面従腹背の態度を取っていた。

これが後にヴェネチア政府最大の失策と言われるようになるのは一か月後のことだった。

ミーナ「大和をネウロイ化させるですって！」

坂本「血迷ったか」

ハインツ「正直不安しかないぞ」
それにミーナは驚き坂本は血迷ったかといいハインツは不安を漏らす。
彼らとしてもこれは不安でしかなかった。
将軍「ネウロイを制するのはネウロイだけ。
巣を倒すのはウィッチでは不可能だ」
坂本「ウィッチに不可能はありません！
私の真烈風斬さえあればたとえネウロイの巣であっても…」
アイケ「君、いつまで剣に拘る。今は２０世紀だ。
飛行機が空を飛び地上波戦車が走り回り機関銃が敵をなぎ倒す。
中世のように騎士が馬に乗って突撃する時代とは違うのだよ。
所詮黄色人種はこの程度だ。
それにその何とかってやつは今すぐ用意できるのか？
もう、アカ共はバルト三国を解放して東プロイセンにまで来てるんだ！
我々は彼奴が神聖なるゲルマンの地に入る前にカールスラントを解放しなければならないのだぞ！
連中は我々の庭先にまで来てるんだ！」
坂本の話にアイケが強烈な言葉で否定する。
彼からすれば未だ剣を持っている彼女はただの時代遅れのクソッタレであった。
ましてや黄色人種など聞く耳さえ持つ気はなかった。
アイケ「そこでだ、もう一つ作戦がある。
その作戦については最高機密だ。
その作戦を説明するために私が５０１に赴く、いいね？」
将軍「アイケ大将、クロスロード作戦のことかね？」
アイケ「ええ」
将軍「それは我々にも教えられないのか？」
アイケ「リベリオンとの約束で然るべき時が来るまで例えあなた方

と言えど教えることはできませんね」
将軍「そうか、これで会議は終わりだ。
１０日後の７月１０日の０９００時よりオペレーションマルスを発動する。」
アイケは最後にクロスロード作戦の説明のため５０１に行くことを伝えると作戦日時を伝えた。
坂本「将軍！」
ハインツ「やめろ、坂本」
坂本「ハインツ！」
坂本が食い下がるがハインツが止める。
将軍「５０１統合戦闘航空団は敵ネウロイに突入する大和を護衛せよ」
ミーナ「了解しました」
ハインツ「了解」
将軍たちが立ち上がり最後に伝えるとミーナとハインツは敬礼して返事する。
こうして会議が終わった。

第３１話：戦神と十字路

宮藤「あ、中佐たち帰ってきた。
あれ？」
リーネ「なんだろう？」
作戦会議が終了してから数時間後、洗濯物を取り込んでいた宮藤とリーネがミーナ達が乗った輸送機を見つけるがその後ろに１０機ほどのＣ―５４が続いているの気が付いた。
最初にミーナ達の輸送機が降りた後続いてＣ―５４が順番に着陸する。
着陸したＣ―５４の機内からは一機からはアイケが、残りのＣ―５４からは完全武装のカールスラント軍の兵士がフィールドグレイの開襟の軍服を着た士官の指示の下降りると整列していた。
「第１、第２、第３中隊整列！」
アイケ「シュターレッカー、頼んだぞ」
シュターレッカー「は」
この兵士はアイケの部下の特別行動部隊から抽出した直卒の護衛・警備部隊だった。
指揮官のフランツ・ヴァルター・シュターレッカー大佐にアイケが声をかける。
アイケ「ああ、間違っても誰も殺すなよ。
この基地にはリストに載っている奴が数人いるが指一本触れるな。
やるなら許可を得るかにしろよ」
シュターレッカー「分かってます。監視だけにしておきます」
アイケはこの部隊が問題を起こさないよう注意する。
それはシュターレッカーも同じだった。
アイケ「ああ、特にクロステルマンは注意しろ。
ガリアの王党派との関係が疑われてる、ハイドリヒとネーベも疑ってるんだ」
シュターレッカー「は」

アイケは〝王党派との関与〟が疑われているペリーヌの監視をシュターレッカーに命じると基地に向かった。
ペリーヌはその生まれや関係からガリアの治安を掌握するラインハルト・ハイドリヒ中将とアルトゥール・ネーベ警察中将から疑われ監視対象となっていた。
彼らの原則は疑わしきは監視し動きがあれば始末しろだった。
その怪しい動きをハインツ、ミーナ、坂本は遠巻きに眺めるだけだった。

少ししてブリーフィングルームでは黒板にマルス作戦の艦隊陣形図が張られミーナ、ハインツ、坂本がウィッチたちに作戦を説明していた。
ミーナ「持てる全ての戦力でネウロイの巣ごと殲滅し一気に片をつける、以上が最終決戦の内容よ」
ミーナがマルス作戦を一通り説明した。
するとバルクホルンが質問した。
バルクホルン「もし失敗したら？」
ミーナ「失敗した場合に関してはアイケ大将が」
ミーナはバルクホルンの質問をアイケに振った。
アイケはそれを聞いて黒板の前に立つと一枚の地図を出して説明する。
アイケ「もし失敗した場合その時点で次の作戦、クロスロード作戦が発動される。
クロスロード作戦も失敗した場合は数日の猶予を置いて陸軍による攻勢、シングル作戦、ダイアデム作戦を発動する。」
マルスが失敗した場合行われるのがクロスロード、更にこれも失敗した場合陸軍部隊による攻勢シングル、そしてダイアデムによって何としても叩き潰すつもりだった。
アイケ「この二つも失敗し、更にはネウロイがポー平原を突破した場合、その時は我々はロマーニャ全体に１０の防衛線を築き徹底抗戦する。」

その地図にはロマーニャ半島に１０本の線が書かれていた。
アイケはダイアデムやシングルが失敗した場合のことも考慮していた。
アイケ「北からポー線、ジンギス・カン線、ゴシック線、トラメジーノ線、ヴィテルボ線、カイザー線、グスタフ線、ラインハルト線、バルバラ線、ボルトゥルノ線、ロマーニャは細く、山がちだ。
この地形ならばネウロイと言えど機動には大きな制限がある。
守る程度簡単だ、連中には我々からこの地を奪いたければ痛い目を見ることを教育してやるつもりだ」
イタリア半島は真ん中にアペニン山脈が貫いていた。
さらに幅は狭い、これは防衛側にとっては非常に有利な条件だった。
狭く、山がちということは敵の機動を制限できるのだ。
それは史実でもドイツ軍とイタリア社会共和国軍が４３年から終戦までイタリアを守り続け最終的に北イタリアまで連合軍が到達したのは終戦直前だったことからも明らかだった。
それを逆手に取りアイケはロマーニャに１０の防衛線を築くつもりだった。
ミラー「ところで、さっきから閣下がおっしゃってるクロスロード作戦って何なんですか？」
するとミラーが手を挙げて質問した。
アイケ「そうだな、説明しよう」
ミラーの質問にアイケは指を鳴らして答えた。
すると室内にＭＰ３５やＭＰ１８、ＭＰ４１などの短機関銃やライフルを持ったカールスラント軍の兵士が乱入した。
シャーリー「な、なんだ！」
ルッキーニ「シャーリー、怖いよぉ…」
ノヴァク「なんだこいつらは!?」
ヤン「いったい何者だ？」
乱入した兵士はウィッチたちを取り囲み銃を向ける。

それにルッキーニは怯えシャーリーに抱き着きノヴァクのヤンは混乱し他のウィッチも同じような状況だった。
兵士たちが全員入ると一人の開襟のフィールドグレイの軍服を着た将校が入ってきた。
アイケ「上出来だ、シュターレッカー」
シュターレッカー「感謝の極み」
アイケは入ってきたシュターレッカーを褒める。
それにシュターレッカーは謙遜するがその顔にペリーヌ、リーネ、宮藤、ヤン、ニコは心当たりがあった。
ペリーヌ「まさかあの人は…」
リーネ「もしかして…うっ…」
ヤン「ニコ、彼奴は…」
ニコ「ああ…不味いな…」
宮藤「ミーナ中佐！私その人知ってます！
アンナさんの家の近くで見ました！」
ペリーヌ達はあの光景、あのアンナの家の近くで見た虐殺を思い出しリーネは吐き気を催す。
そして宮藤が立ち上がってシュターレッカーを指さして叫んだ。
それを聞いてミーナ達は驚いた。
ミーナ「なんですって！」
バルクホルン「おい！じゃあ！」
ハインツ「こいつらが…」
この兵士たちはあの虐殺に関わった兵士たちだった。
それを聞いて絶句する。
アイケ「どうしたのかね？彼の顔に何かついているのか？」
ミーナ「閣下…その…」
宮藤「アンナさんの家の近くで人を殺してるのを見ました！」
ハインツ「宮藤！あのバカ！」
ミーナが誤魔化そうとすると宮藤が叫んだ。
それを聞いた瞬間、周りの兵士がウィッチたちに銃を向ける。
だがノヴァクはこの状況を半分理解できず隣のバルクホルンに聞

いた。
ノヴァク「ちょっと待て、一体何が起きてるんだ?
宮藤は何を見たんだ?」
バルクホルン「アレックス、その…冷静になって聞いてくれ。
アレックス、この兵士たちは、虐殺に関わった可能性がある」
ノヴァク「虐殺?それって…」
バルクホルン「ああ、殺戮部隊だ…アレックスの家族を殺したのと同じ…」
ノヴァクはバルクホルンの説明を聞いて怒りに震えるがバルクホルンが抱き着いて落ち着かせる。
バルクホルン「落ち着け、アレックス。私はお前を失いたくない、だから…」
ノヴァク「分かってる、トゥルーデ」
バルクホルンの説得にノヴァクは落ち着いた。
だが兵士達、そしてシュターレッカーとアイケに恨みのこもった目で睨んだ。
向けられたシュターレッカーとアイケはそんなことも気にせずミーナに話しかけていた。
アイケ「ミーナ中佐、君らには黙ってもらうことが一つ増えたな」
シュターレッカー「ええ、もし口外した場合は…」
アイケ「ウィッチ達の諸君、安心したまえ。
この件とこれから説明する件を一切口外しなければ君らには指一本触れない、但し外部に少しでも漏らせば全員を縄で吊るす、いいね?」
アイケがウィッチ達に口外しないよう脅す。
だがそれでも恐怖心は拭えなかった。
アイケ「少なくとも彼らが処理した連中は大半が犯罪者だ。
無実の人間は殺してない、そうだろ?」
シュターレッカー「ええ、我々が処分したのは共産主義者、無政府主義者、反動勢力、スパイなどです。

貴方方には法を犯さなければ危害を加える意思はないのでご安心を」

二人はウィッチ達に説明した。

だがそれで納得できるわけではなかったがアイケは話を進めることにした。

アイケ「まあいい、兎に角話を進めよう。

クロスロード作戦、この作戦の核となるのはリベリオンが開発した新兵器、それが中心となる」

アイケはウィッチ達にクロスロード作戦の説明を始めた。

クロスロード作戦の核となるのはリベリオンが開発したある新兵器だった。

ミーナ「その、閣下。

その新兵器というのは？」

アイケ「いいだろう、フィルムと映写機を持ってきてれ。

部屋も暗くしろ」

アイケにミーナが新兵器のことを質問するとアイケは部下にフィルムと映写機を持ってこさせ部屋のカーテンを閉め電気を消した。

そして準備ができると映像と共にナレーションが始まった。

『１９０５年、物理学者のアインシュタインは特殊相対性理論の中で言った、Ｅ＝ｍｃ２と。

即ち質量＝エネルギーである、質量が消えた時、その瞬間膨大エネルギーが放出される。

だがそれを実証できるだろうか？』

アインシュタインの肖像写真、続いてＥ＝ｍｃ２の式とこの式のイメージ映像がナレーションと共に流れた。

続いて画面が暗くなると砂漠の映像に変わった。

『１９４５年ニューメキシコ州アラモゴード。

この日、人類の技術と英知の結集によって新時代が開かれた』

砂漠の映像にこのナレーションが被せられた。

続いて突如カウントダウンが始まる。

『５、４、３、２、１、０』

カウントダウンが終わった瞬間、画面が一瞬白くなると砂漠に巨大なキノコ雲が発生した。
バルクホルン「な、なんだ…」
ルッキーニ「シャーリー！怖いよぉ…」
シャーリー「何が起きてるんだ…」
その映像に全員が絶句した。
彼女たちには何が起きたか理解できなかった。
そのキノコ雲の映像にさらに続いてナレーションが続く。
『これが人類の英知の結晶、人類は太陽を作ることに成功した。
これが、原子爆弾である』
このナレーションが終わると映像が真っ暗になりクレジットタイトルが流された。
そこにはリベリオン陸軍の名やリベリオンの有名大学の名が続き最後にはマンハッタン工兵管区と書かれていた。
すべての映像が流れ終わり電気がつけられカーテンが開いて明るくなってもウィッチ達は絶句していた。
この映像は彼女たち、それどころかハインツたちでさえ見たことがない程衝撃的なものだった。
アイケ「これを、ヴェネチアに投下する。
君らには投下する爆撃機の護衛を行ってもらいたい」
「「え？」」
ハルトマン「これを…」
バルクホルン「ヴェネチアに…」
ルッキーニ「ヴェネチアの街はどうなっちゃうの？」
アイケの発言にさらに驚いた。
これをヴェネチアに投下するのだ。
それにさらに驚きルッキーニはヴェネチアの街がどうなるか聞いた。
アイケ「まあヴェネチアの街は灰と化すだろう」
ルッキーニ「駄目だよ！ヴェネチアの街を壊しちゃ！」
アイケ「ガキが、ヴェネチアの街など大したことない。

どうせよその国の街だ、それに聞くが君らはどちらを取る？
たかが都市の街並みか、それとも数百万の兵士の命か」
ルッキーニが抗議するがアイケは取り合う気などなかった。
彼からすればヴェネチアの街など大したことなかった。
アイケはそのまま演説を始める。
アイケ「この爆弾一つで数百万の兵士の命が救われるだけではない！
この爆弾の威力に世界は恐れおののく、あのオラーシャの劣等民族の共産主義者の心胆を寒からしめることができるのだ！
想像したまえ、タバコの箱程度の爆弾が爆発するだけで都市の一角を吹き飛ばされるのだぞ。
もしもこれが爆弾のサイズになって自分達の頭の上から突如振ってきたら。
この戦略的価値を君らはたかが一つの都市の街並みを守るなる軍事的に全くもって価値のない事のために放棄するのかね？
これはただネウロイを殲滅する作戦ではない、戦後世界のパワーバランスを決める戦いだ！
我々が求めるのは何だ！」
「勝利！」
アイケの演説に周りの兵士達は熱狂しアイケの演説に大声で答える。
アイケ「そうだ！勝利だ！
我々が求めるのは勝利だ！
ジークハイル！」
「ジークハイル！ジークハイル！ジークハイル！」
アイケ「ジークハイル！」
その熱狂に兵士たちは右腕を挙げ叫ぶ。
兵士たちの狂気にウィッチ達は恐怖しノヴァクは軽蔑のまなざしを向けた。
この狂気はウィッチ達にある決意をさせるのに十分だった。
ミーナ「ハインツさん、何としてもマルス作戦を成功させるわよ」

ハインツ「え？」
突然ミーナは小声でハインツに話しかけた。
それにハインツは驚いて聞き返す。
ミーナ「こんな人たちの思惑に乗ったら戦争がまた起きてしまうわ、だから何としてもマルス作戦を成功させてクロスロードを潰すわよ」
ミーナは何としてもマルス作戦を成功させクロスロード作戦を潰す決意を固めた。
だがそれはハインツたちの意思に反していた。
ハインツ「ミーナ、何言ってるんだ？
閣下の言うことにも一理あるぞ、共産主義者を心胆を寒からしめることの何が不味いんだ？」
ミーナ「え？」
ハインツ「そもそもこれで数百万の兵士の命が救われるなら最もじゃないか」
反共主義者でアイケの考えにも共感していたハインツにはミーナがなぜ問題視するか理解できなかった。
彼からすれば共産主義者を恐怖させるだけでなく数百万の兵士の命が救われることの方が重要だった。

それから４日後、５０１のウィッチ達は数機のＢ―２９を護衛していた。
だがその表情はハインツやニコ、ヤン、ミラー、ノヴァクを除いて暗かった。
ハインツ「どうしたんだよ、そんな時化た顔して」
シャーリー「逆になんでハインツは普通で居られるんだよ」
ハインツ「そんなに不満か？クロスロード作戦は」
彼女たちが不機嫌だったのはこの飛行がクロスロード作戦の事前演習の一つだということだった。
原子爆弾を投下後はウィッチと爆撃機は全機一斉に１５５度の旋回をした後全速で離れるのが命令だった。

これはもちろん原子爆弾の爆風から守るためだった。
だが彼女達はそもそも原子爆弾をヴェネチアに落とすこと自体が不満だった。
シャーリー「なんで落とさなきゃいけないんだよ」
ハインツ「敵を殲滅するためだろ？
　勝つためには仕方ない、コテラテルダメージって奴だ」
シャーリー「でも！」
ハインツ「シャーリー、お前も知ってるだろ？これが戦争だって。
　俺達はただの駒、考えるけどただの駒だ。
　上の命令に従って作戦を成功させ勝利に導くそれだけだ」
不満を言うシャーリーをハインツが黙らせる。
すると無線からマリエンフェルトの声が聞こえてきた。
マリエンフェルト『ウィッチ達の諸君、そろそろ投下する。
　離脱の用意！』
それを聞いてウィッチ達が身構えると一機のＢ―２９からパンプキン爆弾が投下、眼下のキオッジャの街に落ちていった。
作戦開始まで６日前、一週間を切った日のことだった。

第３２話：約束されし失敗

７月８日深夜、ターラント港
翌朝早朝に控えた連合軍艦隊の出航を前に港は慌ただしかった。
その中停泊している大和の艦内では数人の人影が配電盤を弄るとコードを抜き、電線を切ると船から降りていった。

その少し後、バーリ港
この港に停泊するインペロの艦橋でベルガミーニに参謀が報告した。
参謀「閣下、サボタージュ、成功したようです」
ベルガミーニ「分かった、これで１００％失敗する。
マルス作戦は適当にやっておこう」
参謀「は」
ベルガミーニは部下に命じて大和へのサボタージュを命じていた。
この目的は簡単だった、マルス作戦を１００％失敗させるためだった。
彼らにはこの作戦を成功させる気など毛頭なかった。
失敗するとわかっている作戦のために犠牲を払う気などなかった。
ベルガミーニ「美しいヴェネチアの街が消えるのは悲しいがヴェネチアが消えれば我々はイタリアを統一できる。
イタリアの統一のためだ」
参謀「ええ」
彼らはヴェネチアを破壊することでヴェネチア政府の権威を崩壊させ来たるべきイタリア統一運動の最終段階ヴェネチア併合に繋げようとしていた。
このサボタージュによりマルス作戦の失敗は確実となった。
だがウィッチ達は全く知らなかった。

作戦前日の夜、ウィッチ達は失敗が約束されていることも知らず決戦を明日に控え昂ぶる気持ちを抑えながら過ごしていた。

ノヴァクの部屋では珍しくバルクホルンとノヴァクが二人で飲んでいた。
バルクホルン「明日、明日で全部が決まるのか…」
ノヴァク「ああ」
バルクホルンはテーブルに置かれたウォッカが入ったグラスを見ながら呟く。
バルクホルン「ここが片付けば次は…」
ノヴァク「カールスラント本土…トゥルーデの祖国だ」
バルクホルン「ああ、例え故郷じゃなくても祖国だ」
ノヴァク「Ｊｅｓｚｃｚｅ　Ｐｏｌｓｋａ　ｎｉｅ　ｚｇｉｎ□ｌａ，Ｋｉｅｄｙ　ｍｙ　□ｙｊｅｍｙ.」
ふとノヴァクはポーランド語の文を呟いた。
意味がわからないバルクホルンはノヴァクに聞いた。
バルクホルン「アレックス?どういう意味だ?」
ノヴァク「ポーランドは滅びず、我らが生きている限り。
ポーランドは滅びない。最後のポーランド人が死ぬその時までな。」
バルクホルン「この世界にポーランドは無くてもアレックスの祖国はポーランドか…」
ノヴァク「ああ。ポーランド人として生まれ、ポーランド人として戦い、ポーランド人として生きて、ポーランド人として死ぬ。
今の目標かな?」
ノヴァクはポーランド人であるという事に誇りを持っていた。
だからこそ常にポーランド人でありたかった。
バルクホルン「私を妻にするんじゃなかったのか?」
するとバルクホルンが不満そうな表情でノヴァクに言う。
ノヴァク「もう俺の妻だろ?お前は」
バルクホルン「そうだったな」
バルクホルンが微笑むとノヴァクが近づきキスする。
数秒二人の影が重なるとノヴァクが囁いた。
ノヴァク「トゥルーデ、作戦前に渡したいものがある」

バルクホルン「なんだ?アレックス」
バルクホルンが聞くとノヴァクはポッケから小さな箱を取り出した。
その中身にバルクホルンはすぐに合点がいった。
バルクホルン「アレックス…それって…」
ノヴァク「婚約指輪。この間、休暇でローマに行った時に買った。
開けてみてくれ」
バルクホルンは箱を受け取ると蓋を開ける。
その中には銀色の飾りのついていない地味な指輪が入っていた。
バルクホルン「これって…」
ノヴァク「ごめん、勝手に買ってきて。
そんなに金もないから一番安い一番地味な…」
勝手に買ってきたことをノヴァクはバルクホルンに謝るがその続きは言えなかった。
バルクホルンがキスをして塞いだからだ。
そのまま二人は数秒キスするとバルクホルンが涙目になりながら感謝の言葉を述べる。
バルクホルン「ありがとう、アレックス。
お前からのプレゼントなら何でも嬉しい、それに私はあんまり派手なのは似合わないからな。」
ノヴァク「そうか…つけて、見てくれないか?」
バルクホルン「こういうのは王子様がお姫様につけるものだろ?」
ノヴァク「ふ、そうだった」
ノヴァクはふと笑うと指輪を持ってバルクホルンの左手を取り薬指に指輪をはめた。
それをバルクホルンはうっとりしながら眺める。
バルクホルン「これで、夫婦だな」
ノヴァク「まだ婚約だけだがな。
これで家族だ」
バルクホルン「ああ、クリスに自慢しようかな」
ノヴァク「だな、親父とかが見たら感動するだろうな…」

バルクホルン「もしかしたらアレックスの家族もこの世界にいるかもしれないな」
ノヴァク「え…それは考えたことなかった」
バルクホルンの言葉にノヴァクは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする。
そんなこと一度も考えたことはなかったからだ。
バルクホルン「まあ、今は私だけを見てくれ」
ノヴァク「そうするよ、トゥルーデ」

ミラーの部屋では
ミラー「じゃ乾杯」
リーネ「乾杯！」
ミラーの部屋でリーネとミラーはワイン、それもトカイワインを飲んでいた。
二人はワイングラスに入ったワインを一気に飲むとリーネが妖艶に呟く。
リーネ「ん…美味しい…」
ミラー「あ…リーネもワインの味が分かるようになってきたんだね」
その姿にミラーは少し驚くも話しかけて誤魔化す。
リーネ「ミラーさんがいっぱい飲ませるからじゃないですか」
ミラー「ごめんごめん」
ミラーはよくリーネとワインを飲んでいた結果リーネはすっかりワインに慣れてしまった。
リーネ「ミラーさんが買ってくるワインって全部美味しいですよね」
ミラー「そりゃあワインの王様トカイワインだからね。
今飲んでるのは１９１６年物だけど。」
リーネ「美味しくて幾らでも飲めちゃいそうです」
ミラー「ハハ、明日の朝までには酒は抜いておいてよ」
リーネ「はーい」

ミラーが飲みすぎないよう注意した。

一方、リーネとミラーやノヴァクとバルクホルンが束の間の休息を楽しんでいる一方でニコは早めに寝ていた。
すると物音に気が付き目を開けるといつの間にかサーニャが布団に潜り込んでいた。
ニコ「ん…サーニャさん？」
目の前にサーニャがいることにニコは驚く。
するとサーニャが顔を少し赤らめながら聞いた。
サーニャ「ニコさん、一緒に寝てもいいですか？」
ニコ「別にいいよ。
　気のせいかもしれないけどサーニャさんと寝ていると夜尿症が治まってる気がするんだよね」
　ニコはすぐに快諾するとふとサーニャと一緒に寝ている間夜尿症が治まっている気がすると呟いた。
サーニャ「そうなんですか。
　あの、ニコさん」
ニコ「ん？何？サーニャさん」
するとサーニャがニコを呼んだ。
サーニャ「明日、作戦が終わったら話したいことがあります。
　いいですか？」
ニコ「うん、別にいいよ」
サーニャの願いをニコは快諾した。
そのまま二人は一緒に夜を過ごした。

ウィッチ達が自室で寝ていたりしている一方、格納庫を刀を持った一つの人影が動いていた。
それは坂本のユニットを履いて離陸しようとする。
その人影は坂本だった。
坂本（今夜だ…何としても今夜中に真烈風斬を完成せねば…）

坂本はユニットを履いて離陸滑走を始めるが思うように回らない。
坂本「く…ちゃんと回れ！」
何とか回すと無理や離陸しようとする。
だが突如目の前に二人の人影と一つの明かりが現れバランスを崩し地面に激突する。
それは一人はミーナ、もう一人はＰＰｓｈ４１を持ってタバコを咥えたハインツだった。
坂本「く…ミーナ、ハインツ、知っていたのか？」
ハインツ「坂本少佐、飛行禁止処分は解いてないぞ。
それにその危険物も倉庫にしまったはずだ」
右手でＰＰｓｈ４１を持ち左手にタバコを挟みながらハインツが坂本を咎める。
するとミーナが坂本に語り掛ける。
ミーナ「いつかこうなることは分かっていたわ。」
ハインツ「ああ、だからお前を飛行禁止にしたんだ。
死なせないためにな。
戦わなければ死なない、それにな、前も言ったが兵士の命は安くない。
ましてや佐官クラスとなればな」
坂本「そうか…」
二人の言葉に坂本はどこか納得した。
ミーナ「まさに諸刃の刃ね。」
ハインツ「戦場で戦う力と引き換えに大量の魔法力を消費する化け物。
こいつはお前のウィッチとしての寿命を削り取ろうとしてる。
畜生、雨が降ってきやがった。」
すると突然雨が降り始めハインツが悪態をつく。
坂本は立ち上がると烈風丸を構える。
坂本「私はまだ戦える！」
坂本は魔法力を込めて光を放つがすぐに元に戻ってしまう。

坂本「く…」
ミーナ「もうやめて！美緒！」
坂本「まだだ！私は、必ず真烈風斬を完成させる！」
ミーナ「駄目よ！分からないの？もう無理なのよ！」
坂本「頼む！一度だけ！一撃だけでいい！私に真烈風斬を打たせてくれ！」
坂本はそう叫ぶとひざまづく。
坂本「お願いだ…私も…私も17人の中に居させてくれ！頼む…ミーナ、ハインツ…」
坂本は号泣しながら崩れ落ちミーナの胸の中で泣き始めた。
ミーナ「美緒…ハインツさん」
ハインツ「ん？何ですか？明日このバカを出撃させろと？」
ミーナはハインツを呼ぶがハインツは次にミーナが何を言うか理解していた。
ミーナ「ええ」
ハインツ「拒否します。坂本はとてもじゃないが戦える状態じゃない。」
ミーナの意に対してハインツは明確に拒否した。
ハインツは坂本には戦闘能力が無いと判断していた。
ミーナ「命令よ、私の命令が聞けないの？」
ハインツ「分かった、命令なら従うまでだ。
どうなっても知らんぞ」
ミーナが珍しく強い口調でハインツにハインツは従うしかなかった。
その様子を物陰から宮藤が聞いていた。

翌日、アドリア海北部を大艦隊が進んでいた。
艦隊はベルガミーニが指揮する任務部隊「ベルガミーニ」であった。
艦隊の編成は
戦艦：インペロ（旗艦）、ヴィットリオ・ヴェネト（ヴェネチア艦隊）
ビスマルク、ティルピッツ、グナイゼナウ（カールスラント艦

隊）

バーラム、フッド、レパルス、プリンス・オブ・ウェールズ、ロイヤルオーク（ブリタニア艦隊）

コンテ・ディ・カブール（ロマーニャ艦隊）

アリゾナ（リベリオン艦隊）

武蔵、大和、扶桑、山城（扶桑艦隊）

重巡洋艦：アドミラル・ヒッパー、アドミラル・シェーア（カールスラント艦隊）

ザラ、ポーラ、トレント、トリエステ（ロマーニャ艦隊）

コーンウォール、ドーセットシャー、エクセター（ブリタニア艦隊）

最上、那智、鳥海（扶桑艦隊）

軽巡洋艦：アルベルト・ディ・ジュッサーノ、アルマンド・ディアス（ヴェネチア艦隊）

エジンバラ、フィジー、トリニダード、ボナヴェンチャー、ハーマイオニー、カリブディス、ナイアド、スパルタン、カイロ、カルカッタ、コヴェントリー、キュラソー、クールー（ブリタニア艦隊）

アトランタ、ジュノー（リベリオン艦隊）

神通、多摩、五十鈴（扶桑艦隊）

空母：ワスプ（リベリオン艦隊）

アークロイヤル（ブリタニア艦隊）

天城、翔鶴、瑞鶴、千歳、千代田（扶桑艦隊）

の戦艦16、空母7、重巡11、軽巡21、そして多数の駆逐艦と水雷艇、フリゲート、コルベットからなる大艦隊だった。

艦隊はリベリオンからもたらされた新艦隊編成であるビッグブルーブランケットという編成を取っていた。

これは史実において対特攻機用に作られた編成で艦隊の外周にレーダーを装備したレーダーピケット艦を配し、その誘導により艦隊の空母から発進した戦闘機部隊が接近する敵機を攻撃するという戦術だった。

旗艦はインペロであり艦隊中央部には大和が天城に横付けされな

がら進んでいた。
ベルガミーニ「マルスは１００％失敗する。
我々の今日の作戦行動は高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処して損害を最小にする、だ」
チーマ「それは行き当たりばったりでは？」
ベルガミーニがインペロの艦橋で参謀たちに言う。
するとチーマの指摘に全員がクスリと笑う。
ベルガミーニ「そうだよ、そもそもが失敗するってわかってるんだ。
かと言って先に我々だけ逃げたら臆病者だ、丁度いい塩梅で逃げるんだよ」
ベルガミーニは笑顔で指摘に答えた。
この作戦が初めから失敗する事はベルガミーニは勿論扶桑艦隊以外の全ての司令部と扶桑艦隊の司令官と主席参謀が知っていた。
その上でこの作戦を実行するつもりだった。
参謀「閣下、先程５０１が出撃。高度１５０００フィートを維持して北上中。
１０分後に上空直掩に着くようです。」
すると参謀の一人が５０１からの情報を伝える。
それを聞くとベルガミーニが命令した。
ベルガミーニ「全艦、総員戦闘配置。」
ベルガミーニの命令は即座に全艦に通達された。

１０分後、艦隊のレーダーが５０１を捉えた。
レーダー手『方位１７５、高度１５０よりウィッチ部隊接近、上空通過します。』
ベルガミーニ「来たか。」
レーダー手が接近する方位と高度を伝える。
すると艦隊の上空をウィッチ部隊が通過した。
だがそれを遮るようにして通信兵が割り込む。
通信兵『駆逐艦ドレクスラーより報告！ネウロイ接近！
時速２７０ノット！方位３２５！高度３０００！数５０か

ら８０！』
ベルガミーニ「来たか！全艦対空戦闘用意！各艦回避行動始め！」
ベルガミーニが即座に全艦に命令する。
それにより各艦動き始めた。
直後、前方で爆発が起きた。
ベルガミーニ「なんだ！」
通信兵『ドレクスラー被弾！被害報告！』
ドレクスラー『こちらドレクスラー！艦首被弾！一番砲塔より前を喪失！火災発生！
現在一番砲塔に注水、防水作業中！
航行可能速力最大９ノット！』
一番前方にいたレーダーピケット艦ドレクスラーが被弾した。
損害は艦首を喪失し火災発生、浸水も発生し最大で９ノットしか出せなくなった。
ベルガミーニ「５０１をドレクスラー救援に向かわせろ！駆逐艦ケリーにドレクスラーを護衛させろ！」
ベルガミーニはすぐにドレクスラーをブリタニア海軍の駆逐艦ケリーに護衛させて離脱させるように命じた。
こうして失敗する事が約束された作戦「マルス」が開始された。

第３３話：戦神のよろめき

ホランド「来たか！総員Ｔｈｅ　Ｎａｖｙ☒ｓ　ｈｅｒｅ！」
フッドの艦橋では敵が来たことに艦隊司令ランスロット・ホランドが反応していた。
空ではウィッチ部隊が動き始めた一方、艦隊では激しい対空砲火を撃ち上げ弾幕を作り上げていた。
キッド「どうだ！レーダーとＶＴ信管を組み合わせた死の空間は！」
ヴァルケンバーグ「左舷！弾幕薄いぞ！」
アリゾナ艦橋ではキッドとヴァルケンバーグが叫んでいた。
艦隊には多数のネウロイが接近していたがその大半はレーダーと連動したＶＴ信管装備の対空砲の餌食となっていた。
艦隊は全艦対空装備が強化された上に防空艦が中心となっていた。
そのためネウロイは接近すればあっという間に対空砲の餌食となった。
ミーナ「始まったわ。大和がネウロイ化するまでの間、何としても守り切るのよ」
「了解」
ネウロイが接近すると５０１は散開、それぞれネウロイを迎撃し始める。
ネウロイは艦隊中心の大和を集中攻撃するがそれを宮藤がシールドを張って防御する。
リーネ「芳佳ちゃん！」
宮藤「く…キツイ…」
リーネはネウロイを撃墜しながら宮藤を気に掛ける。
この攻撃は宮藤でさえキツイと感じるほどだった。
だが攻撃が大和に集中しているということは前方でのろのろとしか動けないドレクスラーやそれを支援するケリー、その他艦艇に対しての攻撃が薄いという事を意味した。
ネウロイは大和を拘束するがその他艦艇を自由にしてしまった。

ミーナ「攻撃が大和に集中しているわ」
坂本「奴らめ、大和が普通じゃないことに気付いたか！」
ハインツ「連中も大和が鍵だって気が付いてるな。
ミラー、射撃用意！」
それを見下ろしながらミーナと坂本、ハインツが言う。
ハインツはすぐに隣を飛ぶミラーに射撃準備を命じる。
すぐにミラーはＢｋ―５を構えるとハインツの指示でネウロイを狙う。
ハインツ「１１時方向、シャーリー、ネウロイを集めろ」
シャーリー「了解！さあ来い！」
ルッキーニ「こっこまでおいで～」
ハインツは相手が小型ばかりであったため対大型・中型に特化したＢｋ―５ではキツイと判断。
纏めて叩くためシャーリーとルッキーニに集めさせる。
シャーリーとルッキーニはネウロイを挑発しハインツが指示したポイントに数十体纏めて誘導する。
ハインツ「いいぞ…よーい、ファイア！」
ハインツが指示するとミラーが一発だけ発射する。
発射したのはこのために特別に用意したＶＴ信管を付けた５０ミリ榴弾だった。
弾はネウロイが集まったど真ん中で爆発、一気に纏めて撃破した。
ハインツ「ヒーハー！やったぜ！」
ミラー「ええ、できる限りたくさん集めてください、弾が少ないんですから。」
ハインツ「ああ、２１発しかないんだろ？分かってるよ」
Ｂｋ―５は最大２１発しか運べないためミラーは継戦能力が低く問題があった。
エイラ「こっちだこっち！」
ヤン「さあ来い！」
ヤンとエイラはネウロイを挑発する。
ネウロイは二人の挑発に乗り一列に並んで二人を追いかける。

二人は攻撃を回避しながらサーニャとニコを呼ぶ。
エイラ「サーニャ！」
ヤン「ニコ！」
サーニャ「うん！」
ニコ「了解！」
サーニャはロケット弾を発射しニコがＭＧ１５１／２０を浴びせる。
それを食らったネウロイは次々と玉突き事故のように撃破された。
ニコ「何が起きたんだ？」
サーニャ「一発しか撃ってないのに」
その光景に二人は呆然とする。
エイラ「凄いぞ、サーニャ。」
ヤン「やったな、ニコ」
一方エイラとヤンは二人を褒めていた。
その上ではハルトマンとバルクホルンとノヴァクがものすごい勢いでネウロイを撃墜していっていた。
だがいくら撃墜しても減らないネウロイにハルトマンが愚痴る。
ハルトマン「ねえ、全然減らないよ！」
バルクホルン「黙って倒せ！勲章が向こうからくると思えばいい！」
ハルトマン「そんなんどうでもいいよぉ」
ノヴァク「一体撃墜する度に貯金してたら今頃大金持ちだな！」
ノヴァクはあまりにも敵が多いことを皮肉る。
するとそれにバルクホルンが乗った。
バルクホルン「ああ！大金持ちになったらデカい家でも買うか？」
ノヴァク「それに立派な車もだ！
　折角結婚するんだ戦争が終わったらクリスと３人でヨーロッパでも巡るか？」
バルクホルン「ああ、悪くないな！」
ハルトマン「はぁ…もう私の知ってるトゥルーデじゃない…」
ハルトマンは二人のやり取りに呆れていた。

だが攻撃はやまず益々激しくなりつつあった。
リーネ「芳佳ちゃん、大丈夫？」
宮藤「うん、平気だよ」
リーネは宮藤の後ろにつくと聞いたが宮藤は平気だと答える。
一方、坂本は明らかに異常であった。
坂本「はぁ…はぁ…はぁ…」
明らかに息を切らし冷や汗をかいていた。
ミーナ「大丈夫？少佐」
坂本「何のこれしき、宮藤たちも頑張っているんだ私も負けてはいられない！」
ミーナが心配して聞くと坂本は強がった。

ベルガミーニ「流石５０１だ。
凄いな」
チーマ「ええ…」
その撃墜速度に見上げていたベルガミーニとチーマは感嘆する。
直後、突然爆発音と共にインペロの船体に衝撃が走る。
参謀「なんだ！」
チーマ「被弾したか！被害報告！」
ベルガミーニ「戦艦が簡単に沈むか！」
インペロが被弾した。
すぐにチーマは被害報告を聞く。
応急員『こちら第一ダメコン班。
後部水上機甲板および後部甲板被弾。
損害は水上機甲板および後部居住区画で火災発生、操舵室電力喪失』
チーマ「至急鎮火急げ！操舵は人力に切り替え！急げ！」
損傷は後部甲板と水上機甲板を損傷、居住区画と水上機甲板で火災発生、更に損傷で操舵室の電力を喪失したというものだった。
チーマは即座にダメージコントロールを命令する。
すると通信員が後方を航行するヴィットリオ・ヴェネトからの発光

信号を伝える。
通信員『ヴィットリオ・ヴェネトより発光信号、キカンノソンガイハイカニ！』
チーマ「返信、損害微小戦闘航海・指揮に支障なし」
チーマが返信を伝える。
その間にベルガミーニは次の行動を命令する。
ベルガミーニ「全艦、タイプ３装填、対空射撃用意！」
チーマ「タイプ３装填！対空戦闘用意！主砲砲撃戦用意！」
砲術長「目標！方位３０８！高度０７８！２３０ノットで接近！ＶＴ信管用意！」
ベルガミーニは対空戦闘用として扶桑で開発された新型対空砲弾を用意させる。
この砲弾は対地攻撃用としても優秀とされ彼らも対空だけでなく対地攻撃にも積極的に使用していた。
彼の指示に各艦従いそれぞれ主砲をネウロイに向ける。
砲術員「発砲同調回路修正０．２５秒！アラーム！」
チーマ「アラーム！甲板要員は退避！急げ！」
ベルガミーニ「ファイア！」
ベルガミーニの指示と共に轟音が轟き近づきつつあったネウロイが纏めて吹き飛んだ。
だがすぐに新手のネウロイが来た。
チーマ「対空砲要員は今すぐ配置に戻れ！レーダー連動射撃！何としても叩き落せ！」
チーマは急いで退避した甲板の対空砲要員を配置に戻す。

だがその隙に一部のネウロイがリーネとペリーヌを包囲した。
リーネ「あ！」
ペリーヌ「囲まれた！」
宮藤「リーネちゃん！ペリーヌさん！」
ミラー「リーネ！」
気が付いたミラーと宮藤が振り向いて叫ぶ。

その二人に坂本は烈風丸を抜いて立ち向かう。
坂本「させるかぁあああ!!」
宮藤「坂本さん!」
ミーナ「少佐!」
ハインツ「あのバカ!」
それに気が付いてハインツとミーナも振り向く。
坂本「烈風斬!」
叫びながらネウロイを切ろうとするが全く切れず烈風丸が弾き飛ばされる。
それに坂本は衝撃を受け放心状態となる。
その隙にネウロイが坂本を攻撃しようとするがその前に宮藤が立ちはだかりシールドを張り攻撃を防ぎ反対側からハインツがＭＧ１５１／２０で撃墜する。
ハインツ「クソ!坂本!お前はさっさと退避しろ!」
宮藤「大丈夫ですか?!坂本さん!あ…」
ハインツと宮藤は坂本を心配するが坂本は茫然自失とした表情で突っ立っていた。
吹き飛んだ烈風丸はそのまま大和の甲板に突き刺さった。

参謀「巣との距離、１１０００、ネウロイ化まで３０秒。」
ベルガミーニ「了解、全艦退避準備。どうせ失敗する。
ターラントに連絡、５０９に緊急近接航空支援」
参謀「は!」
参謀が大和のネウロイ化が近いことをつげるとベルガミーニは艦隊の退避、そして５０９の出撃を要請した。
勿論これは失敗する事が前提で動いていたからだった。
通信兵『ターラントより返信、了解、第Ｉ飛行隊出撃、到着予定時刻は１１００!』
ベルガミーニ「早いな。５０１を一旦着艦させ休養と弾薬補給を急がせろ。
敵のネウロイの生産数は?」

参謀「戦闘前の3割程度、更に大半が対空砲火に食われてます」
ベルガミーニ「分かった」
ベルガミーニは５０１に補給と休養を命じた。

戦闘は佳境に差し掛かっていたが既に弾薬も尽き始めミラーはとっくの昔に弾が切れＭＰ４０を取り出しニコとヤンはエイラとサーニャの退避を援護していた。
ハインツ「魔法力が消耗したのは空母に退避しろ！
　休めるのは今の内だ！」
ミラー「少佐、自分も退避していいですか？」
ハインツ「そもそも弾がないだろ、補給に行ってこい。
　ああ、ゆっくりで構わんぞ。」
ミラー「了解！」
ミラーはハインツの許可を得ると空母に向かった。
ハインツはミラーを退避させると坂本を見る。
坂本は棒立ちになっていた。
坂本「もう、私は戦えないのか…誰も…守れないのか…」

参謀「ネウロイ化まで5秒前、４、３、２、１、ネウロイ化始まりました。」
ベルガミーニ「ふん、どうせ失敗するに決まってる」
参謀の報告にベルガミーニはタバコに火をつけながらそう吐き捨てる。
だが数十秒後の見張り員からの報告に驚く。
見張り員『大和！ネウロイ化始まりました！』
ベルガミーニ「はぁ?!サボタージュはどうした！」
参謀「まさか失敗したんじゃ…」
〝サボタージュでネウロイ化をできなくした〟筈の大和がネウロイ化を始めた。
その報告にベルガミーニは驚き戦闘艦橋から飛び出しウィングから大和を見る。

そこにはネウロイ化が始まった大和の姿があった。
ベルガミーニ「クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！
　あのジャップが！あの無能なクソッタレ共が！」
参謀「提督、戻りましょう…」
ベルガミーニはウィングで手摺を叩きながら悔しがる。
その間に大和は浮上し巣へと突進し始めた。
大和は飛びながら対空砲火でネウロイを殲滅しつつ巣へと向かう。
参謀「どうやら上手く行っているようです」
ベルガミーニ「何がうまくだ！クソ共が」
参謀の報告にベルガミーニは悪態をつく。
その心境は他の提督も同じだった。
ビスマルクの艦橋ではリュッチェンスが艦長のエルンスト・リンデマンに呟く。
リュッチェンス「全くなんでうまくいったんだ」
リンデマン「さあ？しかし上手くいったはいったでそれでよろしいかと」
リュッチェンス「そうだな」
二人は完全に呆れていた。

どういうわけかサボタージュを行ったにもかかわらずネウロイ化が成功した大和に艦隊が混乱している一方で上空ではそれを見届けたミーナとハインツがいた。
ミーナ「任務完了、全員空母天城に帰還して。
　美緒、私たちの任務は成功したのよ」
全員に帰投を命じたミーナは目の前にいる坂本に声をかけた。
坂本「私にとって生きることは戦うことだった…だがもうシールドを失い烈風斬も使えない…」
ハインツ「坂本、少しは喜んだらどうだ？
　俺達より一足先に戦争って地獄から抜け出せれるんだ、祖

国に帰れるんだぞ」
坂本が涙を流しながら語るがそれにハインツが一服しながら返す。
ハインツからすれば戦争など地獄であった、地獄から抜け出せるならそれ以上の喜びはないと思っていた。

その間に大和は前進を続けていた。
大和と巣との距離を参謀がベルガミーニに報告する。
参謀「残り５００、３００！」
ベルガミーニ「突っ込むぞ」
そして次の瞬間、大和は巣に激突した。
だがその次がなかった。
ベルガミーニ「ん？撃たないぞ、何かあったか？」
参謀「妙ですね、天城に問い合わせてみます」
大和が何故か発砲しなかった。
それに参謀はすぐにコントロールシステムが積載された天城に問い合わせた。
するとすぐに返信が来た。
参謀「閣下、どうやら発砲できないようです」
ベルガミーニ「何？連中が整備でも怠ったのか？」
参謀「いえ、予想ですが我々のサボタージュです。
どうやら間違えてコアコントロールシステムではなくコアコントロールシステム起動時の主砲射撃システムを破壊したようです。
このせいで作動させようとした結果魔導ダイナモがダウンしたようです。」
どうも原因は彼らのサボタージュだった。
サボタージュで誤ってコアコントロールシステムではなくコアコントロールシステム起動時の主砲射撃システムを破壊してしまったのだ。
そのためネウロイ化や副砲の迎撃は可能だったが主砲を動かそうとした結果魔導ダイナモがダウンしてしまった。
それを聞いたベルガミーニは満足そうに命令を下した。

ベルガミーニ「なるほど、全艦に下令、マルス作戦中止、全艦１８０度回頭、帰投する。
現時刻を持ってマルス作戦よりクロスロード作戦に移行する。
ウィッチ部隊は再度出撃、爆撃機部隊を掩護せよ。
これで終わりだ、さらばネウロイ、さらば愛しきヴェネチアよ。
ヴェネチアの街並みは今のうちに瞼に焼き付けておけよ」
ベルガミーニは艦隊の撤退とクロスロード作戦への移行を命令した。
だが彼らの通信に突如別の声が割り込んだ。
坂本『まだだ！まだ終わっていない！終わってなどいない！この戦いも！そして私もだ！』
ベルガミーニ「は？今のは何だ！」
参謀「ちょっとお待ちください！ヴィルケ中佐！今のは何だ！」
その声にベルガミーニは混乱し参謀はミーナを問い詰める。
ハインツ『こちら５０１主席参謀ヴァレンシュタイン少佐、坂本少佐です。
坂本少佐が独断専行して大和に向かってます』
ベルガミーニ「はぁ?!貴様ら！命令だ今すぐ戻れ！」
返事はハインツの坂本が大和に向かっているというものだった。
それは命令の無視、そして何よりクロスロード作戦ができないことを意味した。
ベルガミーニ「不味いぞ…クロスロード作戦は規定だと目標の周囲２５キロ圏内に一切の友軍が存在しないことが前提だ…
このままじゃ…」
クロスロード作戦は安全のため最低でも周囲２５キロ圏内に友軍が存在しないという前提で計画され作戦の中でも作戦前に爆撃機とその護衛を除いた全部隊を撤退させるという命令が最初に書かれていた。

坂本の軽率な行動はクロスロード作戦の破綻、その始まりを意味した。

第３４話：Ａｔ　ｔｈｅ　ｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｈｅｒ　ｗａｒ

坂本「まだだ！まだ終わっていない！終わってなどいない！この戦いも！そして私もだ！」

ベルガミーニの作戦中止命令を聞いてミーナに支えられながら飛んでいた坂本が突然叫んだ。

そしてミーナを振り払うとネウロイが集中攻撃をする大和に向かって行った。

ミーナ「美緒！」

参謀『ヴィルケ中佐！今のは何だ！』

ハインツ「こちら５０１主席参謀ヴァレンシュタイン少佐、坂本少佐です。

坂本少佐が独断専行して大和に向かってます」

ベルガミーニ『はぁ?!貴様ら！命令だ今すぐ戻れ！』

坂本の行動に驚いた参謀の問い合わせにハインツが答えるとベルガミーニが直接戻るよう命令する。

ミーナとハインツは坂本を止めようとするが坂本は全速力で大和に向かう。

坂本「私が大和に乗り込んで魔法力で魔導ダイナモを再起動させる！」

ミーナ「駄目よ美緒！」

ミーナは坂本に叫ぶが坂本は無視して向かう。

そのやり取りは空母天城で休養と補給を行っていた他のウィッチ達にも聞こえていた。

ペリーヌ「駄目です少佐！行かないで！」

バルクホルン「無茶だ！」

ノヴァク「自殺行為だ！」

宮藤「坂本さん！無理です！坂本さんにはもう魔法力が！」

宮藤の呼びかけを聞いて坂本はふと笑った。

坂本「知っていたか、宮藤。そうだ、もはや私には飛ぶだけの魔法力しかない」
坂本が話しているとその横をミーナとハインツが通りＭＧ４２とＰＰＳｈ４１を構えて立ちはだかる。
ミーナ「分かってるならやめなさい！」
ハインツ「命令だ！士官なら従え！」
坂本「ミーナ、ハインツ…」
ミーナ「戻りなさい！少佐！」
ハインツ「命令が聞けないのか？そうか？なら」
ハインツはＰＰＳｈ４１の安全装置を解除する。
すると坂本は二人に聞いた。
坂本「私が行かなければ誰が大和を動かせる？」
ハインツ「必要ない、クロスロード作戦がある。
事前の取り決め通り行動しろ」
ハインツが答えると坂本は近寄りミーナに近寄り囁く。
坂本「皮肉なものだ、まともに戦えなかった私だけがただ一人魔法力を残すことになったのだから」
ミーナ「少佐…！」
坂本「ミーナ、私は嬉しいんだ。
こんな私にもまだできることが残ってる、５０１にいることができる、１７人の仲間で居られる」
ミーナ「美緒…お願い！必ず、必ず、帰ってきて！これは命令よ」
坂本「了解した！」
ミーナは坂本を行かせることを許可した。
坂本は許可を得ると大和に向かって行った。
坂本が向かうとハインツがミーナに抗議する。
ハインツ「ミーナ、正気か？この後すぐクロスロード作戦が始まるんだぞ！
そんなことをしなくてもいいんだぞ！」
ミーナ「ハインツさんはヴェネチアの街が焼かれてもいいの!?」
ハインツ「ああ！どうせ俺には関係ないことだ！

俺たちの任務はあのクソッタレを絶滅させること、それ以上でもそれ以下でもない！
無用なリスクを冒す必要なんてこれっぽちもないんだぞ！」
ハインツはクロスロード作戦で巣を破壊すると思っていた。
だからこそ坂本の行動には反対だった。
無用なリスクを冒して無用な損害を出すことこそが無駄であった。

それを見た艦隊では混乱が広がっていった。
ベルガミーニ「これだからウィッチは嫌いだ！こちらの事情も知らず勝手に動く！」
参謀「どうします？」
ベルガミーニ「放置だ！勝手に死んでくれればそれでいい！
たった一人のために全滅なんて御免だ！最大戦速、急速離脱！」
ベルガミーニは艦隊と坂本、二つを天秤にかけ離脱を命じた。
坂本を見捨てた。これは非情に思えるが命令を無視したものを助けるほど軍は甘くない、ベルガミーニは艦隊を預かりその艦隊には数万の兵士がいた、数万の兵士と地中海の制海権を司る大艦隊、そして命令を無視したウィッチ一人、どちらが重要かなど簡単だった。
この軍事的、組織的に正しい判断は空母天城のウィッチ達には非情に思えたが組織とはそういうものである。

その間に坂本はネウロイの攻撃を躱しながら大和に向かった。
そして何とか辿り着くと魔導ダイナモを起動した。
参謀「魔導ダイナモが反応しました！」
ベルガミーニ「クソ！なぜくたばらん！死んでしまえば簡単に済むんだ！」
それにベルガミーニは悪態をつく。
そしてまた大和が動き始めると主砲が動き巣を照準する。
そして発砲、ほぼゼロ距離射撃となった砲撃は巣を直撃する。

参謀「大和発砲！」
ベルガミーニ「なんてことだ…状況は？」
大和と巣は煙と爆炎に包まれ雲が晴れる。
ベルガミーニは状況を聞く。
参謀は急いで情報を掻き集める。
するとレーダー手から報告が届いた。
レーダー手『ネウロイの反応消滅、飛行体確認、大和です』
参謀「そうか」
ベルガミーニ「参謀、私はこれを喜べばいいのか？それとも悲しめばいいのか？」
参謀「提督？」
ベルガミーニ「ヴェネチアの巣が破壊された、これは十分戦略的勝利だ。
だが核兵器を使えなかったという事はそれだけで十分な戦略的、外交的敗北だ」
ベルガミーニは極めて微妙な心境だった。
核兵器の使用による外交的勝利、それを達成できなかっただけで十分な敗北とも言えた。
するとレーダー手からの別の報告が届いた。
レーダー手『ネウロイの反応復活！』
参謀「何！」
ベルガミーニ「どうなってる！真コアタイプか！」
ネウロイの反応が復活したことにベルガミーニは驚く。
すると煙が晴れ巨大なコアが現れた。
参謀「なんですか…あれは…」
ベルガミーニ「デカいな…」
するとネウロイは攻撃を開始、一発が戦艦グナイゼナウの艦首を直撃する。
ベルガミーニ「グナイゼナウが！被害報告！」
すぐにグナイゼナウの損害を聞いた。
通信兵『報告！グナイゼナウ大破！1番砲塔より前部の艦首喪失！

２番砲塔にて火災発生、現在注水中！』
レーダー手『こちらレーダー手！ネウロイの表面にＩＦＦ信号確認！
坂本少佐です！』
グナイゼナウの損害と同時にレーダー手からネウロイの表面に坂本少佐がいることが報告される。
だがこれは最悪の結果だった。
ベルガミーニ「最悪だ…これじゃあ…」
参謀「クロスロード作戦が…」
ベルガミーニ「破綻した。我々が、やるしかない。
陸軍などに任せるか、海軍のケツは海軍が拭く。
全艦主砲装填弾種魔導徹甲！」
クロスロード作戦が破綻した。
このままでは作戦は不能だった。
そうなれば残されたのは海軍の艦隊による攻撃だった。
ベルガミーニ「諸君、我々はレージャ・マリーナだ。
ヴェネチア、ジェノヴァ、ピサの海洋共和国、そして地中海を制した古代ローマ帝国の艦隊の末裔である。
地中海の覇者たる我々の強さを思い知らせてやれ。
諸君、祖国のためエイヤ！エイヤ！アララ！」
「エイヤ！エイヤ！アララ！」
ベルガミーニの演説に艦艇乗組員の士気は上がる。
艦隊は巣を照準すると一斉に発砲した、だが弾は直前で制止する。
参謀「砲弾停止！」
ベルガミーニ「何が起きた！」
参謀「シールドです！恐らく坂本少佐の！」
ベルガミーニ「クソ、どうすれば…」
ネウロイが坂本少佐の魔法力を使い弾を止めたのだ。
その結果にベルガミーニは絶望する。
だが参謀が名案を思い付いた。
参謀「提督！策はあります！」

ベルガミーニ「何?どんな策だ?」
参謀「魔法力を消耗させるんです。
　坂本少佐は上がり直前です、そんな大した量はないはず、ならば兎に角攻撃し続け魔法力が尽きるかシールドが脆くなるまで待つんです。
　そして脆くなったところを!」
参謀の名案、それは攻撃し続け魔法力を消耗させ、脆くなったところを一斉に攻撃する案だった。
この状況ではそれが最善の案だった。
ベルガミーニ「そうか!501に問い合わせろ!坂本少佐の魔法力を!」
参謀「は!」

その頃、501はというと。
ハルトマン「シールドだ!」
バルクホルン「ネウロイがシールドを張った!」
シャーリー「嘘だろ…」
ニコ「ん?あのシールドって…」
宮藤「扶桑のシールド!」
ミーナ「間違いないわ!ネウロイは少佐の魔法力を利用しているのよ!」
ウィッチ達はネウロイがシールドを使ったことに驚いていた。
すると後ろから銃の装填する音が聞こえ振り向いた。
そこにはPPSh41とMP40に弾を装填、拳銃を用意していたハインツとミラーがいた。
ハインツ「ミラー、やるしかないか」
ミラー「ええ、少佐」
シャーリー「ハインツ…何をするんだ?」
その殺気立った雰囲気にシャーリーが聞いた。
ハインツ「決まってるだろ?彼奴を始末する。
　ネウロイでも味方の砲撃でもなく仲間の銃撃で楽にして

やるのがせめてもの情けだ」
シャーリー「ハインツ！正気か!?なんで少佐を殺すんだよ！なあ！」
シャーリーはハインツにつかみかかる。
それにハインツは冷静に答えた。
ハインツ「シャーリー、いいか、このままだと全滅か逃げるしかできない。
ならば坂本を始末してシールドを貼れなくしたところに砲撃をぶち込む、それが最善だ。」
リーネ「それ以外にないんですか?」
ミラー「リーネ…ない。
誰かが坂本少佐を始末しないと」
ハインツ「ああ、だから俺達がする。
あんたらの手は綺麗でいろよ、俺たちが今から一人殺したって大したことない」
リーネの問いかけに二人は冷静に答えた。
他のウィッチも理性ではこれが最善だとわかっていたが仲間を殺すという現実を直視できるわけがなかった。
宮藤「そんな…」
ペリーヌ「少佐を…」
ウィッチ達に絶望が広がる中突然無線が届きハインツが答えた。
ハインツ「はい、こちら５０１。
はい？坂本少佐の魔法力？もう飛ぶだけで限界でしたが…
あ、はい。では」
ミーナ「ハインツさん、なんだったの？」
ミーナが内容を聞いた。
ハインツ「ああ、坂本少佐の魔法力はどのぐらい残ってるんだって聞いてきたから答えただけだ。
何おっぱじめようって言うんだ？」
ハインツが答えると艦隊の方を見る。

すると艦隊は進路を変え巣へと向かっていった。

チーマ「主砲装填！弾種タイプ３！」
砲術長「タイプ３装填！ＶＴ信管！レーダー連動射撃！」
ベルガミーニ「よし、撃て！」
艦隊では進路を変え巣に向かうと砲撃が開始された。
全艦艇が一斉に発砲するとシールドを張る直前に炸裂、多数のシールドが発生する。
それこそが狙いだった。
ベルガミーニ「いいぞ！出し惜しみは無用だ！撃ちまくれ！」
チーマ「第二斉射急げ！」
艦隊は一列に並び両翼から浴びせ続ける。
その攻撃はあまりにも激しく周囲にいた子機の大半が次々と吹き飛んでいきネウロイは反撃さえできなかった。

ヤン「艦隊はいったい何を…」
ハインツ「恐らくあれだ、兎に角坂本の魔法力を消耗させて消耗しきったところを一気に攻撃する気だろう。
まあそれがいつになるかは知らんが。
ネウロイの方も砲撃が強すぎて反撃できないみたいだし」
遠くで艦砲射撃を行う艦隊を見るヤンの質問にハインツは双眼鏡を覗きながら答える。
その砲撃は圧巻でネウロイは反撃さえできず動きを封じられていた。
するとふとハインツがあることに気が付いた。
ハインツ「なあ、ここからだと坂本がユニットを履いているようには見えないんだが…」
ミーナ「それって…」
ハインツ「破壊した瞬間地面に真っ逆さま…
不味くね？」
坂本がユニットを履いているように見えなかった。

これが意味することは簡単だった、巣を撃破した瞬間地面に真っ逆さまである。
ミーナ「不味いわね、とりあえず向かいましょう。」
ハインツ「ああ、宮藤、シャーリー、ノヴァク、ニコ、急いで離陸しろ。
とりあえず飛べるだけでいい、最低限の武器と医療品を持って艦隊が破壊する前に向かうぞ！」
「了解！」
すぐにハインツとミーナは救助部隊を編成して離陸させ巣に向かった。

５０１が坂本の救助に向かった一方艦隊は砲撃を続けていた。
水雷艇、駆逐艦、軽巡洋艦、防空巡洋艦、重巡洋艦、巡洋戦艦、戦艦の合計数百門の艦砲の連続射撃、さらに効果を上げるため艦隊は時限信管又はＶＴ信管を使用することで命中する前に炸裂し破片を増やしてシールドの数を増やす方法で魔力の消耗を強い続けた。
大型の砲弾が一発炸裂すれば多数の断片、危害を与える破片だけで数百個以上発生する。
それ一つ一つにシールドを張れば膨大な数になる。
それが同時に数百個も発生するのである。
仮に一つの砲弾から発生した破片の数が１００個だとしてそれが同時に２００発くれば１００＾２００個という天文学的数字となるのである。
そうなれば魔法力の消耗の速度は極めて早く砲撃開始から僅か３０分程でシールドの強度の低下が見え始めた。
そして一発の砲弾がシールドを突き破るとコアの表面付近で炸裂する。
ベルガミーニ「よし、行ける！全艦隊に下令！全戦艦は魔導徹甲弾を装填しコアを攻撃せよ、繰り返す魔道徹甲弾を装填しコアを攻撃せよ。
これで決めるぞ！」

参謀「了解！」
チーマ「了解、主砲装填、弾種魔道徹甲弾！」
それを見るとベルガミーニはトドメを刺すことにした。
すぐに艦隊の全戦艦が主砲に魔導徹甲弾を装填する。
３分程して全艦が主砲を装填し終わると無線のマイクを手に取り直接命令した。
ベルガミーニ「これで全てを決めるぞ、撃て」
最後の攻撃命令とは思えないほど小さく、そして冷淡な命令を下すと船体が轟音と爆炎と共に大きく揺れる。
それは艦隊の全ての戦艦で同じだった。
全ての、１６隻の戦艦から放たれた巨弾はネウロイのなけなしのシールドをいとも容易く貫きコアの表面を突き破るとコアの内部で次々と炸裂する。
その強烈なエネルギーはコアの表面を突き破り爆炎と轟音がネウロイを包んだ。
そして数十秒後煙が晴れるとそこにはネウロイなどなく海面に落下するネウロイの破片、ネウロイ化が解けた大和、そして地面に落ちて行く坂本以外なかった。
参謀「提督」
ベルガミーニ「ああ、終わった。全てが終わった。
ローマに連絡、戦闘終了、巣は海軍によって破壊せり。
イタリア万歳。」
ベルガミーニは被っていた軍帽を脱ぎ汗を拭うとローマへの通信を命じる。
ベルガミーニ「追伸、今後はウィッチ部隊への統制の強化、又は再編成を求める。
ウィッチ部隊は命令無視の嫌いあり、本官はそれが今後の重大なる懸念と憂慮する。」
ベルガミーニは最後にこの様な事態に至った最大の原因を伝えた。
ベルガミーニ「ウィッチ部隊、戦略的価値はあれど戦略そのものを無視した行動をする部隊。

連合軍上層部の無能怠惰が癌ならばあれは我々の糖尿病だ」

ベルガミーニは窓から外で坂本を助けるウィッチ達を憎たらしそうな目で見ながら呟いた。

第35話：ｂｅｇｉｎ　ｎｅｗ　ｗａｒ

最後の一撃が終わり爆炎と煙が晴れるとすぐに向かった。
ミーナ「美緒は！」
ハインツ「待て、いたぞ！あそこだ！」
ミーナがハインツに聞くと魔導針を出していたハインツが気を失い落下する坂本を見つける。
ハインツ「あー、気を失って落ちてるぞ！シャーリー、行け！」
シャーリー「了解！」
不味いと感じたハインツはすぐにシャーリーを向かわせる。
シャーリーは全力で向かうと空中で坂本を捕まえる。
坂本「ぐふ！ん…シャーリー？何があった？」
捕まえられた時の衝撃で坂本は意識を取り戻したがなぜシャーリーに抱えられているのかが理解できていなかった。
ニコ「話せば長くなりますよ」
宮藤「坂本さん！大丈夫ですか！」
坂本「ニコ、宮藤。大丈夫だ。
何があったんだ？」
駆け付けた宮藤とニコに坂本が聞いた。
ニコ「端的に説明するとネウロイに捕まって魔法力利用されてたんです。
艦隊がさっきネウロイを始末して終わりましたけど」
坂本「そうか、迷惑かけたな」
宮藤「迷惑だなんてそんな」
ニコの説明を聞いて坂本は謝った。
するとハインツとミーナが追いついた。
ハインツ「迷惑どころか作戦破綻したぞ。
本当に軍法会議物なんだぞ、あんたのやったことは！」
ミーナ「ハインツさん、無事だったからよかったじゃない。
それによく言うわよ、終わり良ければ総て良しって」
ハインツ「ミーナ、全然よろしくねえぞ。」

ハインツは坂本に文句を言うがミーナがそれを諫める。
そのまま一行は空母天城に向かい着艦した。
着艦するとすぐにペリーヌが駆け寄り坂本に聞いた。
ペリーヌ「少佐！大丈夫ですか！」
坂本「ああ、ペリーヌ。見ての通り無事だ」
坂本が答える。
その後ろでは他のウィッチ達が見ていた。
ノヴァク「これで、終わったな」
バルクホルン「だな、アレ…」
バルクホルンがノヴァクの名前を呼ぼうとするとその口がふさがった。
いつものようにノヴァクがバルクホルンにキスしたからだ。
ハルトマン「あーあ、またやってるよ…ん？
ま、今日ぐらいはいっか」
その横でハルトマンは呆れていたがふとバルクホルンとノヴァクの指につけたものを見つけると笑顔で二人を見守った。
その横ではニコがサーニャたちと一緒にいた。
ニコ「んー、やっと終わったぁ！」
サーニャ「お疲れ様、ニコさん」
ニコ「サーニャさんもね」
サーニャとニコは互いに労をねぎらっていた。
するとサーニャがニコに話す。
サーニャ「あの、ニコさん」
ニコ「ん？何サーニャさん」
サーニャ「ちょっとしゃがんでくれませんか？」
突然サーニャがニコにしゃがんでくれるよう頼んできた。
ニコは身長が１７０センチ程度だがサーニャは１５２センチなので頭一つ分ニコが高かった。
ニコ「ん？別にいいけど…」
ニコは言われた通りしゃがんで目線を合わせる。
するとサーニャはニコの頭の後ろに手を回すとそのまま強引にキ

スした。
エイラ「サーニャ！」
ヤン「お！やったか！」
それにエイラは驚きヤンは喜ぶ。
一方鈍感さと不意打ちで状況を理解できないニコはサーニャから解放されるとそのままへたり込んだ。
ニコ「ふぇ、何が起きた？」
サーニャ「ニコさんが悪いんです。ニコさんが鈍化すぎるのが。
ニコさん、好きです、大好きです」
サーニャがニコに精一杯の気持ちを伝えるがニコは未だ理解できていなかった。
ニコ「え？それってどういう…」
ヤン「はぁ…ニコ、お前恋愛感情理解してるのか？」
未だ理解できていないニコにヤンが呆れて説明する。
そしてちゃんと理解すると焦った。
ニコ「え？それってつまり…ちょ、ちょっと待って！
なんで僕！他にも一杯いるでしょ！」
サーニャ「ニコさんが好きなんです！」
ニコ「いやでも」
どう答えていいか分からないニコは狼狽える。
するとエイラがサーニャの肩に手を置いてニコに詰め寄る。
エイラ「ニコ、サーニャを悲しませる気か？そうか？」
ヤン「エイラの言うとおりだ。
ニコ、お前に残された選択は頭を縦に振るかヤーかイエスかウィかはいかダーかイョーって答えるどれかだけだ」
二人もニコに詰め寄った。
二人共嫉妬どうこう以上にニコの鈍感さとヘタレに呆れていた。
ニコ「それって実質選択しないですよね…」
ヤン「先に外堀を埋めたんだ。さあ答えろ」
エイラ「サーニャを待たせるな！」
ニコとエイラが再度催促する。

ニコ「は、はい！
　べ、別にいいですけど…」
サーニャ「え…」
ニコ「こ、こんな自分でよろしいのでしたら、その、あの、えっと…」
ニコはしどろもどろになりながら了承した。
するとサーニャはそれを聞いて安心したのかニコに抱きついた。
サーニャ「ニコさん…本当なんですか？」
ニコ「本当だよ、サーニャさん。
　君の前で僕が嘘ついたことある？」
サーニャ「ニコさん、本当に本当にずるい人です」
ニコは抱きついたサーニャを優しく撫でながら微笑んでいた。
それをエイラとヤンは見守る。
エイラ「サーニャ…ヤン、これでいいんだよな？」
ヤン「ああ、いいんだよ。
　エイラ、独り身同士仲良くやろうや」
エイラがいつもより少し暗い口調でヤンに聞くとヤンはエイラの肩に手を回して答えた。
エイラ「だな」
ヤン「ああエイラ、これからも宜しくな」
二人は肩を組みながら笑う。
一方ハインツはその様子を見ながら煙草を吸っていた。
すると突然後ろから誰かに抱き着かれて倒れかける。
ハインツ「うぉ！」
シャーリー「ハインツ！」
抱き着いたのはシャーリーだった。
シャーリーはハインツの左肩に頭を乗せる。
ハインツ「シャーリー、なんだ急に？」
シャーリー「いやぁ、バルクホルンとサーニャたち見てたらやりたくなって、つい」
ハインツ「何がついだ」

ハインツはそう言うと煙草を右手で挟んで持つとそのままシャーリーにキスする。
されたシャーリーは驚きハインツの唇が離れるとその場にへたり込む。
シャーリー「ハ、ハインツ？」
ハインツ「なんだよ、こうしたかったんだろ？」
ハインツの言葉を聞くとシャーリーはハインツにまた抱き着き甲板に押し倒す。
シャーリー「ハインツ、今度は私が攻める番だな。
知ってるかハインツ、ウサギは常に発情してるって」
ハインツの上に跨ったシャーリーは妖艶な笑みを浮かべながらハインツを見下ろした。
その様子を見ながらミラーは隣に立ったリーネに話しかける。
ミラー「いつも通り、だね」
リーネ「ですね」
二人はのんびりとその様子を見ていた。
こうしてヴェネチアの戦いは終了した。
だが戦争は終わらず、そして破滅的で破壊的な方向に進んでいくこと、そしてこの夏更なる混乱と戦乱が欧州を覆う事など知る由もなかった。

レニャーノ「そうか、分かった。」
アイケ「作戦はどうなった？」
バルボ「成功したのか？」
ローマ、ロマーニャ海軍参謀本部ではバルボ、デ・ボーノ、アイケ、チャーノ、そして見慣れないスーツ姿の男がいた。
レニャーノは海軍将校からメモと報告を耳打ちされるとアイケとバルボが内容を聞いた。
レニャーノ「巣の破壊には成功した」
デ・ボーノ「おお！」

レニャーノ「だが…」
アイケ「何かあったのか？」
レニャーノが巣の破壊には成功したと伝えるがその続きを濁す。
レニャーノ「ウィッチ部隊のせいでクロスロード作戦が破綻、急遽艦隊が艦砲射撃を行い巣を破壊した、とのことだ。」
バルボ「なんだと！」
アイケ「シャイセ！ウィッチか！あのクソガキ共が！」
レニャーノがウィッチ部隊が原因で作戦が破綻したと伝えるとバルボとアイケは声を荒げる。
レニャーノ「ベルガミーニ提督からの具申としてウィッチ部隊の統制の強化を求めてきてますが、バルボ大将」
バルボ「そうだな、早速だが再編中の５０４に誰か送り込もう。
ヴィスコンティ君かムーティ君でいいだろう」
レニャーノがウィッチ部隊の統制の強化を要求するとすぐにバルボは再編中の５０４に人員を送り込むことにした。
すると見慣れないスーツを着た男がタバコをふかしながら口を開いた。
「まあ、ヴェネチアが解放できたんだ。
それでいいだろう、これでやっとできる。
我々の、すべてのイタリア人の悲願が」
バルボ「そうだな、フィンツィ」
バルボがフィンツィと呼んだ男、ヴェネチア公国内務次官で次期内務大臣と目される男で彼らの仲間である古参ファシストのユダヤ人アルド・フィンツィが口を開いた。
フィンツィ「イタリア統一の大義がついに達成されるのだからな」
バルボ「決まったのか？」
フィンツィ「ああ、来月の三日。
行動を起こす、全てはイタリアの為、祖国の為だ」
彼らは立ち上がろうとしていた。
イタリアの統一という偉大な大義のために。
アイケ「そっちは勝手にやってくれ。

こっちはやっとこれで行けるぞ」
アイケはそう言うと持っていた鞄から一つの作戦書類を出す。
アイケ「これで行ける、成功すれば我々は一気にライン川からエルベ川まで押し込みベルリンを脅かす。
共産主義者供より早くベルリンに行けるぞ」
その作戦書類の表紙にはこう書かれていた
トリニティ作戦
コンコルダート作戦
カメルレンゴ作戦
コンクラーベ作戦
と。
この作戦、これこそがカールスラントへの頂上作戦だった。
ネウロイの破局、そのカウントダウンは切って落とされた。

チューリッヒ、ヘルウェティア軍集団司令部
この西部戦線南翼を担う司令部のオフィスにいた総司令官のヴァルター・モーデル大将の電話が鳴り受話器を取る。
モーデル「私だ、ああアイケか。
何、分かった。いいだろう、フェルトヘルンハレで会おう。
先にミュンヘンについた方がビュルガーブロイケラーで酒を奢ってもらうぞ、じゃあ。
ハイルヒトラー」
最後に右手を挙げて挨拶すると受話器を置くと電話をかけ直す。
モーデル「交換手、ヘルウェティア陸軍陸軍参謀本部に繋いでくれ。
モーデル大将だ、参謀総長に繋いでくれ。
参謀総長、モーデルです。
ええ、来ましたよ、この時が、ハンニバルの如くアルプスを踏破する時が！」

コペンハーゲン、連合軍北カールスラント軍集団司令部
カールスラントのメクレンブルク＝フォアポンメルン、シュレス

ヴィヒ＝ホルシュタイン、そしてデンマークに展開する連合軍総司令部では総司令官ギュンター・フォン・クルーゲ大将に参謀が報告する。
参謀「閣下、先ほど連絡がありヴェネチアの巣を破壊した、とのことです」
クルーゲ「そうか、となれば我々の出番か」
参謀「ええ、カメルレンゴ作戦で我々がハンブルク、ロストックを抑え一気にオランダに雪崩れ込みます。」
参謀が答えるとクルーゲは立ち上がり手を叩いて司令部の将校たちに号令をかける。
クルーゲ「賽は我々の手にある、さあ諸君、このくだらない戦争を早く終わらせるぞ！
作戦までは眠れないぞ！」

北アフリカ、トリポリ、第1リビア軍集団司令部ではエルヴィンに副官が報告する。
副官「ヴェネチアの巣の破壊に成功、だそうです。」
エルヴィン「そうか、これで背後の憂いを絶ったな」
エルヴィンはそう言うとテーブルに置かれたコーヒーを一口飲むと窓から地中海を眺める。
エルヴィン「我々がスエズを取り返す、そうすれば我々の勝利は確実だ」

ネーデルラント、アーネムの手前、ナイメーヘン
この解放されたばかりの街で連合軍西方総軍参謀次長になったヴワディスワフ・シコルスキ中将とブリタニア軍の軍服を着てポーランド軍の軍帽を被った将校が歩いていた。
「閣下、それは本当で?」
シコルスキ「ああ、君のカルパチア騎兵旅団は来週サン・トロンに移動、そこでカルパチア山岳旅団と共に再編、第1義勇装甲師団ドンブロフスキを編成する。

そこで君には准将に昇進した上で師団長になって貰いたい」

「何故今ですか?」

シコルスキ「ヴェネチアが解放された、次はドイツ本土だ。コンコルダート作戦の先鋒として我々はライン川を渡りエルベ川に突進する。その為の布石だよ」

「ですが、ここはどうなるんです?ライン川を北に迂回して進むのも重要では?」

シコルスキ「大丈夫だよ、君らに変わってここにはカールスラント軍第２０義勇歩兵師団とリベリオン軍第４４２歩兵師団が投入される。

この二つの部隊の能力は君も知っているだろ?」

「ええ、パープルハート部隊の日本人部隊と祖国を失ったエストニア人ですか」

シコルスキ「ああ。能力は折り紙付きだ。安心したまえ」

「分かりました、では」

すると将校はシコルスキに二本指の敬礼をする。

それにシコルスキも同じ敬礼で返礼した。

シコルスキ「では頼むよ、〝ノヴァク〟大佐」

第4．1章：サンダーボルト
第1話：混迷のガリア

ガリア、パリ
パリ市内中心部のエコール・ミリテール。
このガリア軍の士官学校だった建物は現在連合軍ガリア軍行政司令部の建物になっていた。
その建物の中で連合軍ガリア軍行政司令部司令官フェードア・フォン・ボック、そしてガリア軍行政司令部参謀第3課課長アルトゥール・ネーベ警察大将、参謀第2課ラインハルト・ハイドリヒ大将、軍行政司令部法務課長アルトゥール・ザイス＝インクヴァルト、軍行政司令部達が会議中であった。
彼らはガリアの影の支配者だった。
ガリア政府は混乱によりまともに機能せずその代わりに連合軍が本来はガリア政府へ移行するまでの間の臨時の行政組織でガリア政府の連合軍側の外部諮問機関であったガリア軍行政司令部が内政を実質的に牛耳り、その中で実際に内政を動かしていたのは法務担当のインクヴァルト、刑事警察を担当するネーベ、そして秘密警察を動かすハイドリヒの3人であった。
彼らはガリア国民に対して飴と鞭で対処した、即ち軍行政司令部民生部民生部長フリッツ・トートが責任者となりガリア国民に対して連合軍の後方輸送路の確保というお題目を理由に道路や鉄道の整備のために雇用、更には補給関連の仕事や後方警備、後方設備の運用、整備にもガリア人を雇用し始め、その結果ガリア全域で犯罪率が低下、失業率と失業者も急激に減り、更に補給路と後方要員を確保することによりこの地域でまともに機能する港湾施設がシェルブールとマルセイユ、ツーロン、ブレストのみにも関わらず十分な補給を前線に送れるようになった。
これが飴だった。
そして鞭はハイドリヒが組織した秘密警察、そして各種義勇兵によ

る反対勢力の徹底的な弾圧だった。
王党派、共産主義者、無政府主義者、労働運動家、全てが徹底的に弾圧された。
この戦略はそれなりの効果を示しこういった勢力は衰え続けた。

ロマーニャのサヴォア・ニッツァ併合事件が起きるまでは

この事件によりガリアのナショナリズムは燃え上がった。
そしてロマーニャに対して及び腰な政府、政府を意のままに動かす真の支配者たる軍行政司令部と連合軍に対する反感が一気に広まった。
反対勢力は「ガリアを取り戻せ!」「ガリア人のガリア人によるガリア人のためのガリア政府を!」を合言葉に連合軍とガリア政府を攻撃し始めた。
5月には在ガリアカールスラント大使の暗殺未遂事件が発生し大使が重傷、同行していた秘書と2等書記官が殺害、その翌週には在マルセイユロマーニャ公使館が襲撃され公使と職員5人、警備のロマーニャ兵8人が殺害され死体はマルセイユ市内を引きずり回された挙句打ち捨てられ、公使館も焼け落ちた。
さらに6月に入るとヒスパニアでヒスパニアを訪問中だったガリア政府外務次官が襲撃、またヘルウェティアでは在ヘルウェティアガリア大使館の参事官が誘拐されガリア政府は要求を拒否、結果参事官の死体が数日後にジュネーブ郊外で発見された。
それだけでなく各地で連合軍を攻撃したが物量・戦力・訓練に勝る連合軍に平地では大半がすぐに撃破され多数のゲリラが殺害、又は捕縛された。
一方山岳地帯や森林地帯、特にピレネーやアルプス、アルデンヌや一部地域、ランスやセダン、ディジョン周辺は別であった。
この地域の掃討作戦は失敗又はかなり早い段階でゲリラそのものが戦術を変更したため完全な掃討をできずランスやセダン、ディジョンでは断続的なテロやサボタージュが続いていた。

そしてピレネー、アルプス、アルデンヌはこの地域に展開する連合軍に対して継続的に攻撃を続けていた。
その損害は相当なものであり6月だけで全体で約６００人の正規兵が死傷、義勇兵、民兵、警察部隊、その他補助的任務に従事する補助要員も含めれば死傷者数は１０００人を軽く超えるほどだった。
そのため各地で血で血を洗う過酷な掃討戦が続き一部地域では1対５０ルール、連合軍兵士一人の戦死に対してガリア人５０人を処刑する過激なルールまで適応されたほどだった。
さらに不味い事に地下に潜伏した反政府勢力やナショナリズム勢力の一部はゲリラ戦から方針を転換、デモやストライキなどの合法的闘争に打って出た。
これは効果的で体面上ガリア国法を守っている連合軍は手を出しづらかった。
それで勢いに乗った反政府勢力、左翼は7月１４日パリ祭の日に行動に出た。
この日ガリア全域において大規模なゼネストを敢行、エトワール広場を占拠した。
これに対して連合軍は警備を強化する以外何もできず全てガリア警察とガリア軍に丸投げした。
そしてこの日はこのデモが始まってから3日目に今後の対策等を話し合うために集まっていた。
まず刑事警察を担うネーベが状況を言う。
ネーベ「デモだが、相変わらずエトワール広場を占拠したままだ。
ガリア警察も軍もただ外巻きに見ているだけだ」
インクヴァルト「でしょうね。
彼らも内心はデモに参加したいようですし。
ところでこのデモとゼネストの首謀者は?」
インクヴァルトがこのゼネストとデモの首謀者をハイドリヒに聞いた。
するとハイドリヒは数人のファイルをテーブルの上に乗せる。
ハイドリヒ「こいつらだ、揃いも揃って共産主義者か民族主義者だ。

こいつらの家族は既に拘束済みだ。」
インクヴァルト「そうか、しかしそれだけでは現状打開にはなりません。
ここは思い切った行動が必要では?」
ボック「ああ、だが理由がない。
相手が武装したとかそういう理由がな、現状は一部が暴徒化して周辺の商店等を襲撃程度じゃないか」
思い切った行動がしたかったが理由がなかった。
こういった運動の常である一部の暴徒化こそ起きてるがその程度であった。
だが突如会議室のドアが開くと血相を変えた参謀が飛び込んできた。
参謀「大変です!大変です!」
ボック「何かあったのか?」
慌てて飛び込んだ参謀に一同は驚きながら参謀を見る。
すると驚きの報告をした。
参謀「警察とガリア軍の一部がデモに寝返りました!
現在デモ隊はこちらに向かっています!」
ネーベ「なんだと!」
警備を行っていた警察とガリア軍の一部が寝返ったのだ。
それに一同が驚愕するがそれ以上に驚いたのが彼らがこちらに向かっていることだった。
さらに悪い報告も続いた。
参謀「さらにオステルリッツ駅に留め置かれていた補給列車3本が襲撃され武器弾薬合計128トンが強奪されました!
幸い強奪されたのは小火器のみで重火器等は下せず放置されているようです」
パリ市内にあったオステルリッツ駅で鉄道網がゼネストで停止したため急遽留め置かれていたヒスパニアから来た補給列車3本が襲撃され積載されていた武器弾薬多数が強奪されたのだ。
幸い荷下ろし設備がないオステルリッツ駅であったため大砲や戦

車などは奪われなかったが大量の火器が流出したことには変わりなかった。
ボック「こちらの警備はどうなってる?」
参謀「は、予想ルート上にバリケードを設置し第３２５保安師団と第２１０戦車大隊の戦車を数か所に配置しています。」
ボックが警備状況を聞くと参謀が答えた。
彼らは市内駐屯の第３２５保安師団と第２１０戦車大隊を投入し各所にバリケードを築いていた。
ボック「分かった、デモ隊への発砲を許可する。
ただし発砲していいのはバリケード地点で警告後でも接近した場合に限る」
参謀「は」
ボックはデモ隊への発砲を許可した。
それは最悪の結果を招くことになった。

パリ市内のあるバリケードでは兵士たちが準備していた。
バリケードには兵士たちが銃を構えているだけでなくその後ろにはオペルブリッツにＦｌａｋ３８を積んだ車両や第２１０戦車大隊のⅠ号戦車やⅢ号突撃砲初期型などが待ち構えていた。
バリケードには数丁のＭＧ４２が設置され周囲の通りにはコサックが待ち構えていた。
すると通りの奥から群集が現れた。
「「ガリアを取り戻せ!」」
「「売国奴に死を!」」
「「ジャガイモ野郎は出ていけ!」」
将校「デモ隊に警告する!今すぐ解散するか移動せよ!」
デモ隊に向けバリケードに設置された広報隊のスピーカー付きトラックから将校が怒鳴るがデモ隊は聞く耳を持たない。
デモ隊は警告を無視し接近する。
将校「駄目だな、発砲用意、俺の指示で撃て」
兵士「は」

将校が発砲準備を命じる。
兵士たちはすぐに配置につき弾を銃に装填するとデモ隊を照準する。
その間にデモ隊はどんどんと近づきバリケードの１００ｍほど手間にまで接近した。
将校「よし、撃て！」
将校の号令で一気に兵士たちの銃が火を噴いた。
多数の機関銃の掃射にデモ隊の先頭が一斉に倒れる。
さらにそこに兵士たちがライフルや機関砲を撃ち込み被害を拡大させる。
そして煙が晴れるとそこには死体と撃たれ動けなくなり呻く参加者と逃げるデモ隊があった。
将校「突撃！突撃！追え！一人も逃がすな！」
将校が命じると兵士たちが銃剣をライフルにつけるとバリケードを飛び出しデモ隊を追いかける。
また一部の兵士は死体を一つずつ銃剣で刺し確認しさらに動けない参加者を射殺する。
さらに戦車や突撃砲も動き出し動けない参加者をひき潰しながら前進しあっという間にデモ隊に追いつくと兵士たちと共にデモ隊を蹂躙する。
その日の夕方までにデモ隊はほぼ壊滅、パリ中の通りが血に染まった。
この日一日だけでデモ参加者合計５０００人が殺傷された。

その日の夜、司令部に最終的な報告が届いた。
参謀「という事です。
閣下、これは少しやりすぎでは？」
ボック「君、このぐらいやらねばいかんのだよ」
参謀の意見にボックは窓の外を眺めながら答える。
ボック「飴と鞭、それでもってこの国を統治する。
それが我々のやり方だ。

この国に潜むすべての敵を殲滅する、それ以外でもってこの国を平和にすることなどできん。
むしろ連中は我々に感謝すべきだ、我々がいなければこの国の大半の労働者は職を求めて街をさまようかスラムを作ることしかできないってことにな」
これが彼らのやり方であった。

その数日後サン・トロン郊外の森
この森の中で二人のブリタニア軍将校がいた。
副官「閣下、いいのですか？」
「ん？いいんだよ、どうせ編成中といっても師団長は暇だからな」
それはサン・トロンで編成中だった第1義勇装甲師団ドンブロフスキ師団長イエジー・ノヴァク准将とその副官であった。
二人は編成中という事から周辺地域の警備以外暇極まりなかったため森の中の川で釣りにいそしんでいた。
副官「はぁ、確かに暇ですけど…」
イエジー「ハハ、しかしさっぱり釣れないな」
副官「釣ったところで食べないですよね、閣下」
イエジー「まあな」
雑談しながら釣りをしていると突然後ろから微かに銃声のような音が聞こえてきた。
副官「ん？なんでしょうか？銃声？」
イエジー「なんだろうな、ゲリラか？」
二人はもしもの時に持ってきていたＭ１９２８短機関銃とステンＭＫⅤを手に取ると構える。
銃声は徐々に近づきそれと共にエンジン音が聞こえ始めた。
副官「なんでしょうか？」
イエジー「なんにせよ、銃を持ってることには変わらんぞ」
二人は銃声が向かってくる方向に銃を構える。
銃声がどんどん近づくと同時に風もざわつき始める。

イェジー「来るぞ」
次の瞬間、木々の梢を掠めてウィッチが上空を通過、そして大量のペイント弾が飛んでくると二人に何発も当たってしまった。
副官「クルヴァ！てめえら！どこ見て撃ってるんだ！」
イェジー「あーあ、新調した軍服がめちゃくちゃだよ」
副官は飛んでいったウィッチに文句を叫びイェジーはぐちゃぐちゃになった新品の軍服を嘆いた。
副官「閣下、恐らくシント・トロイデン飛行場のウィッチです。抗議しましょう」
副官は抗議しようと言うがそれにイェジーは何か思いついたような表情をする。
イェジー「いや、もっといい方法があるぞ。
少し驚かしてやるか。
とりあえず帰ったらシャワーを浴びてから車を用意してくれ」
副官「は」

この二人を流れ弾で誤射したウィッチ、それはサン・トロン基地のバルクホルンとノヴァクだった。
二人は久しぶりに模擬戦をしていた。
この二人の模擬戦は珍しく普段は別々の相手かペアを組んでが大半だった。
そして二人の模擬戦は互いに実力と動き、癖を理解したうえでやっていたためその横でミーナとサン・トロンに元々いたハイデマリー・W・シュナウファー少佐、ハインツとハルトマンの空戦が終わっても未だ続けていた。
ハルトマン「あの二人何時になったら終わるんだろ」
ハインツ「さあ？弾が切れるまでじゃね？」
ハイデマリー「確かお二人ともそれなりに予備の弾を持って行って

ましたよ」
ミーナ「はぁ…あの二人、久しぶりの模擬戦で張り切ってものね…」
二人はこの模擬戦でいつもよりも多くのペイント弾を用意していた。
そのせいで長引いていた。
そしてそれから15分ほどたった後、二人が戻ってきた。
二人共一発もペイント弾を食らっていなかった。
ハルトマン「トゥルーデ、やっと終わったの？」
バルクホルン「ああ、二人共弾が切れた」
ノヴァク「もう一発もないよ、あー疲れた」
ハルトマンが聞くと二人は答える。
二人共弾を使い切って終わっただけだった。
ハインツ「はぁ、んじゃあ帰るぞ。
お前らバラマキすぎだぞ、流れ弾が何かに当たったとかないか？」
ノヴァク「あー、一つだけある。
何発か地上にいた人に当てたな…あれ誰だったんだろうな？」
バルクホルン「ブリタニア軍の将校のようだったがどこで当てた？」
ノヴァク「さあ？」
二人は地上にいたブリタニア軍将校に何発か当てたようだった。
だがどこで当てたかもわからなかった。
これが数時間後に波乱になるとは少しも分からなかった。

第2話：再会

それから一時間少々経った後、サン・トロン郊外の田舎道を一台のハンバースナイプが黒いベレー帽を被った運転手の運転でイェジーとその副官を乗せて走っていた。

副官「閣下、いいのですか？」

イェジー「ん？構わんだろ？クレームを一つつけるだけだ。

それに君も知っているだろ？あそこには彼奴がいるんだ」

書類を確認しているイェジーに副官が聞くと答えた。

副官「成る程、そういうことですか。」

イェジー「ああそういう事だ。」

その答えに納得したようだった。

するとその横を一台のルノーＡＨＮトラックと護衛らしき空軍兵士を乗せたＫｆｚ．７０２台が通過した。

副官「なんでしょうか？」

イェジー「補給車両じゃないか？」

追い越された二人はそれを気にも留めなかった。

一行はしばらく走るとチェックポイントに到着するとフリーガーヤツケを着てＫａｒ９８ｋとＭ１９０３を持ち規格帽を被った空軍兵士に止められた。

空軍兵士「止まれ！身分証を」

イェジー「あいよ」

空軍兵士「えーと、准将閣下でしたか、これは失礼を」

空軍兵士はイェジーから受け取った身分証を確認しブリタニア軍の将軍だと分かると敬礼する。

イェジーは返礼すると声をかける。

イェジー「いや、それが君たちの仕事だからな。

相手が元帥でもちゃんとやってくれよ」

空軍兵士「は」

会話が終わると車が発進し基地の正面玄関に車を止めると大声で叫んだ。

イェジー「おい！誰かいるか！」
ミラー「はい、なんでしょうか？…失礼しました！
　何の御用でございましょうか？准将閣下」
すると通りがかったミラーが応対するが階級章を見てすぐに敬礼する。
イェジー「うむ、今すぐ基地の司令に会わせてくれ」
ミラー「その、面会のご予約は？」
イェジー「そんなものしていない。
　ただここの基地のウィッチに私の部隊の兵士が酷い目に遭ったから抗議しに来た」
ミラーの質問に堂々と答える。
ある種のクレーマーだが問題は彼が将軍であった、そのため無碍にもできずとりあえず会わせることしかできなかった。
ミラー「分かりました、指令室にご案内します」

その少し前、基地では
ミーナ「久しぶりにいい訓練ができたわ。
　それにしても夜戦向けの一撃離脱だけじゃなくて格闘戦も上手なのね」
ハイデマリー「いえ、中佐が相手ですとどこから近づいても躱されてしまうので仕方なく…」
ミーナが訓練でのハイデマリーの動きを褒めるがハイデマリーは謙遜する。
ハインツ「そんな謙遜するな、ツェルシュテーラーでドッグファイトなんで余程腕に覚えのある奴以外自殺行為だ。
　俺だって絶対にドッグファイトなんてせずにずっと一撃離脱しかしてなかったぞ」
すると横から書類を持ってきたハインツが言う。
ハインツは駆逐機乗りであるため駆逐機で格闘戦をすることの難しさをよく理解していた。
ミーナ「ふふ、同じストライカーなら私の方が危なかったわ。

ハインツさん、書類持ってきた？」
ハインツ「はいよ」
ミーナがハインツに聞くとハインツは持ってきた書類を渡した。
ミーナはそれを受け取るとサインしてハイデマリーに渡す。
ミーナ「はい、これで引き継ぎは完了。今後は貴方も私達の指揮下に入ってもらうわ」
ハイデマリー「了解です」
ハイデマリーは書類を受け取ると返事をする。
５０１解散後ミーナ達はベルギカ南部でアルデンヌ地方の北サン・トロンに配備された。
この位置ならば丁度アルデンヌ地方北部とベルギカ、それにネーデルラント南部をカバーできる拠点であり今後行われる頂上作戦ではこの辺りは北部のネーデルラントから北部カールスラントに入る部隊と中央部で突進する部隊の側面をカバーする任を担う予定だった。
ハインツ「すまんな、基地に押しかけてあんたの部隊を吸収して」
ハイデマリー「構いません。最前線の戦力強化は重要ですから。お陰で私も溜まった書類をセダンの司令部へ提出できます」
ハインツが謝るがハイデマリーは何も思っていなかったようだった。
それどころか人員が増えたため余裕ができていた。
するとハインツが何かを思い出した。
ハインツ「そういやセダン行くのか？」
ハイデマリー「はい、一応車で」
ハインツ「なら輸送機で言ったらどうだ？地上は面倒だぞ。アルデンヌ地区は全体的に不安定だ。最近はザンクト・フィート周辺で土砂崩れが頻繁に起きて結構な割合で不通、それに全域でゲリラだ。輸送機ならひとっ飛びだ」
するとハインツはアルデンヌ地方の情勢を解説して陸路は危険だと言う。

というのもまずアルデンヌはゲリラが跳梁跋扈しその上最近はどういうわけか局地的な地震や土砂崩れ、崖崩れ、地割れ、地下水の汚濁、地下水の漏出などが頻発しただでさえ悪い道路事情が悪化しつつあった。

そこでハインツは毎日セダン経由でパリから物資等を運んでいた定期便のC―47を勧めた。

ハイデマリーもここまで言われればそちらの方がいいと納得した。

ハイデマリー「では輸送機にします。」

ハインツ「そうした方がいい、言っておくがセダン行きの輸送機は1時間後には出るから気をつけろ」

ハイデマリー「分かりました、準備のため失礼します」

ハインツが飛行機の時間を伝えるとハイデマリーは部屋を出て行った。

すると入れ替わりで慌てた様子でミラーが入ってきた。

ハインツ「どうした?」

ミラー「ブリタニア軍の准将が面会を求めてます」

ハインツ「面倒だ、追い返せ」

ミラー「それが、流れ弾で部下が酷い目に遭ったらしくその抗議らしいです」

ハインツが面倒だと直感し追い返そうというがミラーの説明に無理だと即理解した。

ハインツ「あー、なら仕方ないな。

とりあえず通して穏便に話し合おう、とりあえずその准将を案内したらあのバカ二人を呼んで来い」

ミラー「分かりました」

ハインツが決めるとミラーは案内するため部屋を出て行った。

ミーナ「はぁ、面倒なことになったわね…」

ハインツ「あーあ、めんどくさいなぁ…」

二人はミラーが出ていくと急いで部屋を片付けるとソファに座って愚痴る。

するとドアがノックされミラーの声が聞こえた。

ミラー「ミラー少尉です、准将閣下をお連れしました」
ミーナ「どうぞ」
ミーナが答えるとミラーの後にブリタニア軍の将軍が入ってきた。
ミーナとハインツは彼に敬礼する。
イェジー「うむ、座ってくれ。
　自己紹介がまだだったな、イェジー・ノヴァク、第1義勇装甲師団ドンブロフスキ師団長だ」
ミーナ「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。
　この度はうちの部下がご迷惑を」
自己紹介するとミーナが早速謝罪した。
イェジー「ああ、全くだ。
　森の中で釣りをしようとしたらウィッチに副官ともどもペイント弾で染め上げられたんだからな」
ハインツ「これは失礼を！今当事者を呼んでますので座ってお待ちください」
ハインツはイェジーに座るのを促す。
イェジーはそのまま二人の対面に座ると当事者を待った。
そしてすぐにドアがノックされた。
ミラー「バルクホルン大尉とノヴァク中尉を連れてきました」
ミーナ「どうぞ」
バルクホルン「失礼します、ゲルトルート・バルクホルン大尉であります」
ノヴァク「アレクサンデル・ノヴァクちゅ…」
二人は部屋に入ると敬礼して自己紹介するがノヴァクは目の前にいる人物を見て驚いた。
そして衝撃的な言葉をつぶやく。
ノヴァク「親父？」
「「え？」」
バルクホルン「親父って…まさか！アレックスのお父さん!?」
その言葉に一同驚愕する。
彼、イェジー・ノヴァクはノヴァクの実の父親だった。

イエジー「久しぶりだな、アレック。
　6年振りか？少しは連絡ぐらいよこせよ親不孝者が」
ノヴァク「親父…うぅぅ…」
するとノヴァクは隣のバルクホルンに抱き着いて泣き始めた。
バルクホルンはノヴァクの背中を黙ってさする。
だがその光景に大半が理解できていなかった。
ハインツ「えーと、准将閣下、ノヴァク中尉と閣下は実の親子という事でしょうか？」
イエジー「まあな、6年振りの再会がペイント弾で染め上げられる相当酷いものだったがな」
ミーナ「そ、そうですか…」
イエジーが大まかな説明をしてやっとミーナやハインツは理解した。
その間もノヴァクはバルクホルンに抱かれて泣いていた。
イエジー「我が息子、何時まで泣いてるんだ？
　泣いてる間に明日になるぞ」
ノヴァク「ぅう…親父…親父なんだよな？」
イエジーは泣き止まないノヴァクに声をかけるとノヴァクは涙声でイエジーに聞いた。
イエジー「そうだ、それより先に言うことがあるだろ？
　6年まともに連絡を寄こさなかった事、俺をペイント弾で染め上げて折角の新品の軍服を台無しにした事、俺の知らない間に結婚してた事」
ノヴァク「親父…ごめん、知らなかったんだ、親父がこっちに来てたなんて」
イエジーの言葉にノヴァクは謝る。
それにイエジーは笑顔になる。
イエジー「なに、こっちだってお前が来ていることはシコルスキ将軍からずっと前から聞いていたが連絡を寄こさなかったからな。
　まあそこは怒ってないが正直一番怒ってるのが勝手に結婚しただろ？」

ノヴァク「親父が何でそれを?」
イエジー「結婚指輪をつけてるだろ、相手はどこの誰だ?」
イエジーはノヴァクの婚約指輪を見ながら聞いた。
彼はノヴァクが実の父親に話もせずに結婚しようとしていることに怒っていた。
ノヴァク「親父、まだ結婚はしてない。
これは婚約指輪だ」
イエジー「そうか、とりあえず結婚式には出れそうだな。
で、相手は?」
ノヴァク「それは…」
イエジーはまだ婚約だと知って安心し相手を聞く。
ノヴァクは隣に立つバルクホルンを見るとバルクホルンが答えた。
バルクホルン「私です、お義父さん。」
イエジー「彼女かね?」
ノヴァク「ああ、ゲルトルート・バルクホルン、大尉で上司で婚約者。
トゥルーデ、イエジー・ノヴァク、親父だ」
ノヴァクがバルクホルンを紹介する。
バルクホルンは手を伸ばしイエジーと握手する、
バルクホルン「よろしくお願いします、お義父さん」
イエジー「ああ、これからよろしく。
アレック、いい子じゃないか」
握手しながらノヴァクに言う。
ノヴァクは照れて頭をかく。
イエジー「まあ、そこに座ってくれ、ミーナ君たちはちょっとどいてくれたまえ」
ミーナ「わ、分かりました」
イエジーは二人を対面に座らせるためミーナとハインツを立たせる。
気が付けばクレームどうこうではなくただの親子の話し合いになっていた。

イエジー「まあいいだろう、ところでいくつかね？
　レディーに年齢を聞くのは無礼だと分かってるが家族になるんだ、そのぐらいは聞いておかないと」
バルクホルン「１９です、お義父さん」
するとイエジーはバルクホルンに色々聞き始めた。
イエジー「そうか、出身は？」
バルクホルン「カイザーベルク、そちらで言うとケーニヒスベルクです」
イエジー「ドイツ人か、家族はいるのか？」
バルクホルン「入院中の妹が一人、それ以外は…」
イエジー「その先は言わなくていい。苦労したんだな。
　とりあえず一番最後に聞きたいんだが、信仰は？」
最後にイエジーがバルクホルンに信仰を聞いたがそれにバルクホルンとノヴァクは顔を見合わせる。
バルクホルン「それが、特にそういうのはないです」
イエジー「つまりは無神論者か？」
バルクホルン「いえ、そういうわけでは…」
イエジー「アレック、ドイツ人でも６歳年下でも宗派が違っても文句はつけないつもりだがこの全部だと？
　私は結婚を認めん、当たり前だ。
　カトリックでないドイツ人と結婚など断じてあり得ん！」
イエジーはきっぱりと反対を表明する。
彼にとってはカトリック以外でもドイツ人でも年の差でも別に文句はなかったがそれが全部そろえば話は別だった。
ノヴァク「親父！なんでだよ！そもそもこの世界にはキリスト教なんてないんだぞ！」
イエジー「それでもだ！ましてやウィッチだ！
　魔女だ！神の御心に反するのだぞ！
　私は認めん！魔女は悪魔だ！」
ノヴァク「このクソ親父！」
頑なに認めないイエジーにノヴァクは立ち上がるとイエジーを殴

り飛ばした。
イエジーはそのままソファーごとひっくり返る。
イエジー「実の父親を殴るとはなんだ！このバカ息子が！」
ノヴァク「俺のことはどうでもいいがトゥルーデの事は話が別だ！」
それにキレたイエジーは立ち上がるとノヴァクにアッパー食らわせる。
そのまま二人は殴り合いの喧嘩を始めた。
ミーナ「トゥルーデ！今すぐ二人を止めて！」
ハインツ「如何にかしろ！」
バルクホルン「アレックス！やめろ！」
ノヴァク「トゥルーデ放せ！あのクソ野郎の息の根を止めてやる！」
すぐにバルクホルンはノヴァクを羽交い絞めにして止める。
するとイエジーがそれを見てノヴァクに言った。
イエジー「いいだろう、アレック、少し試してみた。
ゲルトルート君、さっきはすまないな、ちょっと挑発するつもりだったんだ。
いいだろう、結婚を認めよう」
ノヴァク「え、いいのか？」
イエジー「ああ、彼女の事を愛していることはよく分かった。
ただし、彼女が２０歳になってからな」
そもそもが演技であった。
彼自身は古臭いカトリック原理主義でもなければ頑固者でもなかった。
認めなかったのはノヴァクがどれだけバルクホルンを大切にしているかを見定める演技だったのだ。
それを聞いたノヴァクは力が抜けたように倒れバルクホルンが支える。
ノヴァク「はぁ、よかったぁ…トゥルーデ、これでちゃんと結婚出来るな」

バルクホルン「ああ、やったなアレックス。」
そう言うと二人はキスする。
するとドアが開いた。
ハルトマン「ミーナ！ウルスラが来たよ！って…」
ドアが開くとハルトマンとその後ろからウルスラが入ってきた。
だが部屋の中の状況を見て引く。
なぜならソファーが一つひっくり返り顔を殴られたのか頬が赤いブリタニア軍の将軍が微笑みながらキスするバルクホルンとノヴァクを眺め、いちゃつくノヴァク達の横でミーナとハインツが苦笑いしていた。
ハルトマン「何があったんだろ…」
その光景を見ながらハルトマンが嘆いた。

第3話：新兵器の時代

ハルトマン「へぇ、トゥルーデのお義父さんねぇ」
ウルスラ「おめでとうございます、大尉」
それから少ししてバルクホルン、ハルトマン姉妹、ハインツ、ミラー、ノヴァクは格納庫にいた。
バルクホルンとノヴァクはハルトマン達にさっき起きた事を説明していた。
バルクホルン「まだ結婚が決まった訳じゃない。
よしてくれ」
ハルトマン「そういえばウルスラトゥルーデ達にもお土産があるんだよね？」
ウルスラ「はい」
ハルトマンがお土産の事を思い出し話題に出す。
ウルスラはすると小包に入った一着の服をバルクホルンに渡す。
ウルスラ「大尉にはこれを」
受け取ったバルクホルンは中身を取り出し顔を赤らめる。
バルクホルン「こ、これは一体…」
中身はフリルの多数ついた赤と白の服だった。
ミラー「ああ、これって、ディアンドルだよね」
それにオーストリア出身のミラーが反応した。
彼にはディアンドルは見慣れたものだった。
ウルスラ「そうです、ディアンドル、南カールスラントの伝統衣装です。
大尉にお似合いだと思いまして」
バルクホルン「そ、そうか…アレックス、似合うと思うか？」
バルクホルンは苦笑いしながらノヴァクに見せる。
するとノヴァクは即答した。
ノヴァク「絶対似合う」
バルクホルン「ほ、本当か？」
ノヴァク「本当だ、絶対絶対似合う」

バルクホルン「な、なら着てみるか」
ノヴァクに褒められバルクホルンは簡単にその気になってしまった。
続いてウルスラは更にラッピングされた瓶と箱を出した。
ウルスラ「ハインツさんにはこちら、キューバ産の葉巻です。」
ハインツ「おお、ありがとう！
スゲェミラー、見ろよこれH．アップルマンだぞ」
ミラー「え?あの高級ブランドのですか?」
ウルスラのハインツへの土産はキューバの葉巻H．アップルマンだった。
H．アップルマンはキューバ産葉巻のブランドの中でも最古参の部類に入りヨーロッパ市場では最も人気のブランドでもあった。
その名は葉巻が高いせいであまり吸わないハインツとミラーでもよく知っていた。
ウルスラ「で、ミラーさんにはこちら、ノイエカールスラントワインです」
ミラー「ありがとうございます。
ワインですか、品質とかはどうなんですか?」
ウルスラのミラーへの土産はワインだったが史実でもアルゼンチンワインの品質についてはあまり聞いていない上にそもそも市場に出回らないためミラーは品質を疑いウルスラに聞いた。
ウルスラ「大丈夫です、見かけ以上に品質はいいですし味も見劣りしませんよ。
赤ワインは肉料理とよく合うそうです」
ミラー「へぇ、そうなんですか」
アルゼンチンワインは史実でも高い品質を誇りアルゼンチンそのものの経済の悪化から１９３０年代から９０年代まで停滞こそしていたものの品質は折り紙付きであり特に牛肉とよく合うことで知られていた。
ふとハインツはあることを思い出した。
ハインツ「ところで、あんたなんで来たんだ?」

ウルスラ「はい、この子のテストです」
バルクホルン「これは！」
そう言うとウルスラは台に置かれていた布を取り去る。
そしてその下からある特徴的なユニットが姿を現した。
ハインツ「成程ね、Ｍｅ２６２。
　まあいいんじゃないか？ジェットだろ？
　欠陥は勿論修正済みだよな？」
それはＭｅ２６２だった。
ハインツはまず欠陥が修正されたかを聞いた。
ウルスラ「はい、Ｈｓ２１４に代わってＪｕｍａ００４を…」
ハインツ「ああいい。別に詳しい事は説明したところで分かるわけない。」
ノヴァク「要はもう起きないんだな？」
ウルスラは詳しい説明を始めるがハインツにとっては少しも分からないためすぐに止めた。
そしてノヴァクが要約する。
ウルスラ「はい、それで今回も大尉に履いてもらおうかと」
ハルトマン「ダメダメダメダメー！絶対履いちゃダメー！
　前にアレで酷い目に遭ったじゃん！忘れたの？」
ウルスラの言葉にハルトマンが反応し強く反対する。
ハルトマンは前回の大失敗をよく覚えていた。
ハインツ「別にそのトラブルは解決済みなんだから問題ないだろ」
バルクホルン「ああ、もう起きないなら断る理由がない。
　大体テストをするのは私でお前じゃないだろ！」
ハルトマン「ふん、ミーナは許可しないよ」
未だ前回の大失敗をハルトマンはジェットを信用していなかった。

ミーナ「許可します」
ハルトマン「なんで！」
数分後、指令室でイェジーと話していたミーナにハルトマンが乱入

してテストの事を話したがミーナは即許可した。
ミーナ「ジェットストライカーの早期実用化はカールスラント奪還のため重要な事だと思うの。
それに先ほどパリから電報が来て正式にテストが依頼されたの」
ハインツ「まあ新兵器の開発でトラブルは避けられんぞ。
飛行機だってライト兄弟だかラングレーだかが作るまで一体何人が挑戦して失敗したか。
トラブルを洗い出してそれを改善するために彼奴は来たんだ。
ジェット自体限界が見えてるレシプロに近い将来、本当に5、6年ぐらいで実戦機は殆ど取って代わられるんじゃないかな?」
サン・トロンにはパリからリュッツオウ大佐とヴィルケ中佐名義でテストの件に関する命令の電報が届いていた。
さらにハインツはハルトマンの後ろに立ってジェットの将来性を語った。
ハルトマン「ミーナは心配じゃないの?」
ミーナ「大丈夫、前回のテストの経験値から例え不具合が生じてもトゥルーデなら対処可能な筈よ。」
ハインツ「ああ、能力を疑ってどうするんだ?」
ハルトマン「でもさぁ…」
それでもハルトマンは疑っていた。
するとそのやり取りを黙ってみていたイェジーが声を上げた。
イェジー「ところで、ジェットとは何かね?飛行機の事はよくわからんのでな。
何分騎兵将校上がりだからな」
イェジーは3人のやり取りは少しも分からなかった。

それから少しして基地の滑走路上でテストが開始された。
バルクホルンはＭｅ２６２を履き、Ｍｋ２１４を装備してエンジンを起動する。

ウルスラ「改めて注意点ですが、離陸に必要な速度に達するまで無理なスロットル操作をしない事、エンジンストールの危険があるので急加速や急旋回は避けてください」
バルクホルン「了解した。
発進！」
エンジンが離陸滑走可能な出力が出るまでの間ウルスラはバルクホルンに注意点を説明する。
説明が終わるとバルクホルンは離陸滑走を開始する。
ハルトマン「滑走距離長いなぁ…」
ウルスラ「適正な魔法力の運用を行うように改良したので離陸に必要な速度に達するまで時間が必要です」
滑走距離が長い事をハルトマンが指摘するとウルスラが説明する。
そもそもジェット自体レシプロ以上のパワーを出せるがその分機体にかかる負荷が増すため機体自体の構造が強化され、更にそもそもジェットエンジン自体が非常に重い、例えば現代で最も普及したターボファンエンジンの一つであるＣＦＭ５６の乾燥重量は２３６６kg、約2トンもの重量があった。
それを使用するボーイング７３７はサイズではＢ―２９とほぼ同じながら機体重量ではＢ―２９の約３２トンより１０トン近く重い約４１トン、更にジェット自体レシプロと違い急な推力変化を行えない構造上の理由もあった。
ハルトマン「上昇速度も悪いね」
ウルスラ「そうですね」
ハルトマンは上昇速度が遅い事にケチをつけるがそもそもＭｅ２６２は初めてのという枕詞が付くようなものである。
当たり前だが初めてという枕詞が付くものは技術的にも未熟である（一部では初めてが技術的にも完成されすぎて長く使われるものもある、ＦＴ―１７やブローニングハイパワー、ＢＡＲ辺りはその代表例）
その間にバルクホルンは旋回するがその旋回半径は非常に大きかった。

ハルトマン「あんなに大きく回ってる、旋回性悪いなぁ」
ハインツ「重戦闘機はあれに足が遅いもつくぞ。
　速いだけマシだ」
ウルスラ「姉さま、先程説明した通りジェットとはそういうものなのです」
ハルトマン「なんだよ！そういうものって！」
ハインツ「あれだろ？ジェットは根本的に違うものでありレシプロの脳味噌のままでは地面にキスするだけだって。
　これからはより速く、より高く、より遠くで戦闘が起きる、ドッグファイトは無くならないだろうが数が減り一撃離脱がメインになるだろうな。」
ウルスラ「そうです、ドッグファイトから一撃離脱戦に代わるのです。」
ウルスラとハインツの説明にハルトマンは不機嫌になる。
ハインツは元々一撃離脱以外では戦闘機相手に鴨である駆逐機に乗っていたからこそジェットの戦闘スタイルには理解があった。
その間にバルクホルンは彼らの上空を猛スピードで通過する。
イェジー「おお、速いな」
ミーナ「一度速度に乗れば流石の速さだわ」
その速度にイェジーとミーナは驚いていた。
バルクホルン『こちらバルクホルン、前回と同じ速度で飛んでいるが魔法力の過剰消費は感じられない！
　いけるぞこれは！」
ハルトマン「チェ」
バルクホルンの報告を聞いてハルトマンは不機嫌だった。
通信手「現在速度８００キロに到達、射撃試験に入ってください」
バルクホルン『了解！』
続いて通信手が射撃試験を行うよう指示する。
バルクホルンはすぐに近隣のドンブロフスキ師団が編成中のサン・トロン演習場の砲兵射撃標的に向かう。

砲兵将校「射撃中止！射撃中止！」（ポーランド語）
その頃演習場では砲兵部隊がＢＬ５．５インチカノン砲の射撃訓練中だったがバルクホルンが使うため射撃中止を命じる。
砲兵は射撃をやめると観測班は目標の観測を続ける。
次の瞬間標的に数発の砲弾が着弾する。
砲兵観測班「観測班、目標全弾外れ、夾叉せず」

その報告はすぐに基地に届いた。
ハルトマン「全部外れてるじゃん」
ウルスラ「出力制御によって反動吸収が難しくなったためと思われます」
ミーナ「まだ実戦には使えないわね」
ハインツ「ああ、あれならミラーのＢＫ―５で十分だしそもそもピーキーだ。
３０ミリで十分じゃないか？」
その様子にハインツは命中率の低下からＭｋ２１４よりＭｋ１０３で十分だと考えた。
ただでさえミラーのＢＫ―５が大型・中型以外や長期戦に対して圧倒的不利というピーキーな性格から持て余し気味だった以上わざわざ使用するメリットも薄かった。
しばらくするとバルクホルンが着陸する。
ハルトマン「ほーら、いったとおりじゃーん。
ジェットなんてダメだって」
バルクホルン「いや、前回あった異常個所は改善されている。
欠点はあるが補って余りあるパワーだ。
だが、命中精度が致命的に悪い、ただでさえミラーのＢＫ―５でも相当ピーキーだ。
だったらＭｋ１０３の方がいいだろう」
ハインツ「それだよな、５０ミリとＭｅ２６２は致命的なほど相性が悪い。

ウルスラ、今度からはＭｋ１０３にしといてくれ」
バルクホルンとハインツは二人共５０ミリ砲がＭｅ２６２に対して非常に相性が悪いと指摘する。
実際ミラーの戦闘スタイルはハインツが観測手として５０ミリの長射程を生かした戦術が大半であった。
その点高い機動力で敵に接近して撃ち込むＭｅ２６２は長い砲身もあって明らかに相性が悪いと言えた。
ウルスラ「分かりました。次からはＭｋ１０３にしてみますね」
ハルトマン「ふぁああ。帰ろ」
するとハルトマンが妨害するかのように大きな欠伸をして邪魔すると基地に戻っていった。
ウルスラ「ところで、ツヴァイリンクの件ですがどうしますか？」
ハインツ「あれだが、正直メリットがないだろ。
性能表見てもＭｅ４１０より飛行性能はいいみたいだが積載量も航続距離も劣ってる上に二人で運用なんて難易度高すぎないか？
却下だ。兵器は総合性能と使い勝手、それに量産性が重要だって知ってるだろ？」
ウルスラはＢｆ１０９の双子機化、ツヴァイリンクの件をハインツに相談するが即却下した。
ハインツには飛行性能こそＭｅ４１０より良かったが総合的に見ればそこまでする必要の薄い機体であった。
ミーナ「ところで、准将閣下。
砲兵観測班と射撃場を貸してくださってありがとうございます」
その横でミーナはイェジーに射撃テストの件で感謝を伝えていた。
イェジー「いやいい。別に砲兵部隊も暇だからな。
そうだ、今度うちの部隊に遊びに来ないか？」
ミーナ「え？よろしいのですか？」
イェジー「ああ勿論。うちの部隊は野郎しかいないから君らのようなレディーが偶には来てくれないとストレスが溜まる。

それに陸空協同訓練というのもいいだろう、これからは陸軍が地上を這いずり回る時代じゃない、空と協力して動いてこそ目標を達成し勝利を得れる。

違うかね？

ミーナ「その通りですね、では検討させていただきます」

イェジー「ああ、返事は早くした方がいい、予定だと９月か８月半ばには前線に移動だ。

それまでは息子夫婦と仲良くしたいからそれなりに出入りすると思うがね」

イェジーはそばで楽しそうに話しているノヴァクとバルクホルンを見ながらつぶやいた。

第４話：攻勢の予兆

翌朝、バルクホルンとミーナは食堂で待ち構えていた。
バルクホルン「ミーナ、似合うと思うか？」
ミーナ「ええ、とっても似合ってるわよ。
　きっとノヴァクさんも喜ぶわ」
なぜか顔を赤くしてミーナにバルクホルンが困惑気味に聞くがミーナは笑顔で答えた。
するとドアが開きノヴァクが入ってきた。
ノヴァク「おはよう、トゥルーデ…」
バルクホルン「お、おはよう、アレックス。
　昨日ウルスラが持ってきたのを着てみたんだ、似合うか？」
バルクホルンはノヴァクに来ている服を見せる。
バルクホルンが着ていたのは昨日ウルスラから貰ったディアンドルだった。
それを着てノヴァクに見せてみたのだ。
するとノヴァクはゆっくり近づくとバルクホルンの両肩に手を置いた。
ノヴァク「似合ってる、とてもよく似合ってる。」
バルクホルン「そ、そうか…」
ノヴァク「ああ、ちょっと部屋にカメラ取りに行ってくる！」
バルクホルン「ちょ、アレックス！」
ノヴァクはバルクホルンに言うと制止の声を聞かずに食堂から飛び出して部屋に戻るとカメラを持って戻ってくるとディアンドルを着たバルクホルンを撮影し始めた。
そうしているとハインツとミラーが入ってきた。
ハインツ「ふぁぁ…Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ…何やってんだ？」
ミラー「Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ。え？」
二人は食堂で写真撮影をしているノヴァクとバルクホルンを見て呆れていた。

それはその直後に入ってきたハルトマンも同じだった。
ハルトマン「え？何やってるの？」
3人ともその状況に呆れていた。
するとバルクホルンが気が付いた。
バルクホルン「ハインツ！ミラー！ハルトマン！これは…」
ハインツ「ま、まあ似合ってるんじゃないかな…」
ミラー「え、ええ。お似合いですよ」
ハルトマン「変なの！」
ハインツとミラーは気を遣い褒めるがハルトマンは本音を言ってしまう。
それにバルクホルンは顔を真っ赤にし表情が固まる。
ノヴァク「そんなことない！似合ってる！」
ミーナ「ええ、似合ってるわよトゥルーデ」
ハインツ「そ、そうだ、な？ミラー」
ミラー「はい！とっても似合ってます」
何とかミーナ達はフォローしようとした。
そして少しするとバルクホルンは元の調子を取り戻して椅子に座ると朝食を食べ始める。
それに続いて他のウィッチも食べ始めた。
ハインツ「(はぁ、朝からとんでもないもの見せられた)」
ミラー「(ですね、まあこっちは朝からリーネから手紙が届きましたけど。)」
ハインツとミラーは小声で話をしていた。
するとミラーが一通の封筒を取り出した。
ミラー「ところで、これ見てください」
ハインツ「ん？どうした？」
ミーナ「何かあったの？」
ミラーが突然封筒を見せて声をかけた。
ミラーは封筒の中から一枚の写真を取り出し見せた。
ミラー「これ見てください」
ハインツ「ん？なんだ…これって！」

その写真を見たハインツは驚いた、その写真には戦闘機、マッキＭＣ２０５ベルトロとペリーヌ、リーネ、それに地元の民間人らしき人数人が写っていたが問題はその塗装だった。

なぜか通常のイタリア社会共和国機の迷彩でもドイツ空軍機でもクロアチア独立国空軍機でもイタリア共同交戦軍でもなくエジプト王国空軍（ＲＥＡＦ）機の塗装だった。

だがそのＲＥＡＦ機の塗装には少し違和感があった。

ハインツ「エジプト王国空軍機か？

いや、国籍マークが少し違うぞ、王冠は？」

というのも国籍マークが違っていた。

ＲＥＡＦの国籍マークは緑をベースとした白と緑のラウンデルで真ん中に三日月と星、そして左上に王冠が書かれていたがこの国籍マークは王冠が書かれていなかった。

ミラー「どうも我々が知っている歴史の少し後から来たようです。

１９４８年だそうです」

ミラーが衝撃的な事実を伝える。

するとコーヒーを飲んでいたノヴァクは吹き、ハインツはミラーを見る。

ハインツ「１９４８年？本当か？」

ミラー「ええ、１９４８年のシナイ半島、エジプト王国空軍第２飛行隊所属のマッキＭＣ２０５Ｖベルトロ、だそうです」

この機は１９４８年エジプトのシナイ半島から飛ばされたというのだ、それに驚く。

彼らの知っている歴史はせいぜい１９４５年までだった。

するとノヴァクが聞いた。

ノヴァク「じゃあ乗ってるのはアラブ人か？」

ミラー「いえ、イタリア人らしいです」

「は？」

さらに驚く。

ＲＥＡＦならば普通はアラブ人だがこの機に乗っていたのはイタリア人だった。

もはや理解しがたかった。
ハインツ「イタリア人？なんでそこでイタリア人が出てくる？」
ミラー「どうも話によればイタリア社会共和国についた後、戦後パルチザンに祖国を追われて色々あってエジプト王国空軍に所属したようです」
ミラーが手紙に書かれたパイロットの事情を説明する。
そのパイロットはイタリア社会共和国（ＲＳＩ）空軍（ＡＮＲ）のパイロットで戦後パルチザンに追われ色々あった末にＲＥＡＦに所属したようだった。
ハインツ「ふーん、で誰が来たんだ？」
ミラー「えーと、ユニオ・ヴァレリオ・レート、ＲＥＡＦ少尉、元イタリア社会共和国空軍大尉、元ＡＮＲ第Ｉ戦闘航空群アッソ・ディ・バストーニ所属だそうです。
写真のペリーヌの横に立ってる頭に包帯を巻いた男らしいです」
ミラーは写真に写るペリーヌの横に立つ包帯を巻いた長身の口髭を生やした男を指さす。
この男こそユニオ・ヴァレリオ・レートだった。
ハインツ「こいつか？どう思う？」
ミラー「どうって言われても、会ってみない事には…」
ハインツ「だな」
するとドアが開きウルスラが入ってきた。
ウルスラ「おはようございます」
ハインツ「Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ」
ミラー「遅かったですね、こっちは朝食を食べ始めてますよ」
振り返ったミラーとハインツが挨拶する。
ウルスラ「はい、今朝少佐が頼まれていたＭｅ２６２用のＭｋ１０３が到着したのでその梱包を解いていました。」
ウルスラが朝食に遅れたのはハインツが前日にＭｋ２１４よりＭｋ１０３を推したため急遽近くの倉庫に置かれていたＭｋ１０３を取り寄せていたからだった。

ハインツ「おお、早いな。
　バルクホルン、飯食ったら早速やるか？」
バルクホルン「いいだろう」
ハインツ「それと、終わったら俺に使わせてくれ。
　一回試してみたい、誰か他に試すか？」
ハインツはバルクホルンのテストの後Ｍｅ２６２を試したかった。
ハインツ自身Ｍｅ２６２の将来性を評価していたから興味を持っていた。
ミラー「興味はありますね」
ミーナ「いいじゃない、試してみましょう、ね？フラウ」
ハルトマン「ふん、ジェットなんていらないよ！今のＢｆ１０９のままでも十分戦えるじゃん！」
ミーナやミラーは乗り気だったがハルトマンは断固として拒否した。
するとハインツがハルトマンに語る。
ハインツ「ハルトマン、本気で言ってるのか？
　言っておくぞ、今兵器は日進月歩でこれまでにない程の速度で進化しているんだ。
もはや人類が人類の手で絶滅させることだってできる兵器だってあるんだ、それは飛行機もストライカーユニットも同じだ。
Ｂｆ１０９が言いユニットなのは認めるがそいつは設計が１０年前だろ？
　１０年も経ってるんだ、近いうちに旧式化する。
その代わりになるのがジェットなんだ、ジェットは2、3年後の兵器でなく5年、１０年後の兵器なんだ。
　今からすればオーバースペックだが１０年後には凡作だ。
前回のアレで嫌ってるのは分かるがジェットの有効性を認めたらどうだ？」
ハルトマン「でも…」
ハインツの正論にハルトマンは黙った。
ノヴァク「まあ、実際試してみてから言った方がいいんじゃないか

?」
バルクホルン「ああ、試してみれば良さがわかると思うぞ」
さらにノヴァクとバルクホルンも勧める。
それにとうとうハルトマンは折れた。
ハルトマン「あーもう、分かったよ。
一回だけ、一回だけ試すよ」
ハルトマンがそう言った直後、基地内にサイレンが響き渡った。

サン・トロンの北、ハッセルト、ベルギカ南防空司令部。
ここではネウロイの出現を受け警戒態勢が敷かれていた。
レーダー手「ネウロイ出現、グリッドラブ8、ハウ7、ヘディング280、高度12000、速度280ノット。
10分後にサン・トロン、1時間後にアントワープに到達します!」
司令官「アーヘンの防空司令部から連絡は来てないぞ、どうした?」
兵士「現在アーヘンに問い合わせ中ですが無線回線が不通です!」
彼らが混乱していたのはこの手前にあるアーヘン防空管区からの探知の連絡が来ていないことだった。
そのため司令官はアーヘン防空司令部に問い合わせていた。
副司令官「直通回線で司令部を呼び出せ、出るまで続けろ。
どこから来たんでしょうか?」
司令官「さあな」
だが無線が不通であり急遽通常の電話回線を使い問い合わせていたがこの地域の電話回線は戦前の民間の電話回線の転用であったため国際電話になるため交換には時間がかかった。
兵士「要撃隊上がりました、サン・トロンよりヴィルケ中佐のウィッチ隊です」
司令官「サン・トロンの第3高射砲軍団に発令、迎撃態勢を取らせろ。」

副司令官「は」
その間にサン・トロンからはミーナ達が出撃、更にサン・トロン地区の高射砲部隊である第3高射砲軍団に迎撃態勢を取らせた。
すると兵士が報告した。
兵士「アーヘン防空司令部、繋がりました！」
報告を受けた司令官は電話の受話器を取るとアーヘン防空司令部を問い詰める。
司令官「こちらハッセルト防空司令部、アーヘン、報告を受けてないぞ！
何？探知してない？」
アーヘン防空司令部『こちらのレーダーでは確認していません。
現在管区内の全レーダーを確認中ですが無線回線が不通です』
アーヘンはネウロイを探知していなかった。
世界最高峰の防空システムで探知できなかったのだ。
司令官「アーヘン管区の全防空設備を点検しろ、最優先だ！」
アーヘン防空司令部『は』
司令官「ネウロイが我々のレーダー網を潜り抜けたのか？」
副司令官「カムフーバーラインは完璧です。
バルト海から地中海までネズミ一匹逃しませんよ」
西部戦線の防空網は北はバルト海、南は地中海に至るまでの地域を完璧にカバーしていた。
それを潜り抜けたとは到底思えなかった。
司令官「ウィッチ隊の要撃はまだか！」
兵士「そろそろかと…」
司令官「絶対に撃ち落とせ、絶対だ！
このルートだとブリュッセル近郊も通過する！」
ネウロイの予想進路はサン・トロン、連合軍の補給の要所アントワープだけでなくベルギカの首都でこの地域の司令部が集中しているブリュッセル郊外も通過予定だった。
何としても迎撃しなければならなかった。

その間にミーナ、バルクホルン、ハルトマン、ノヴァク、ハインツ、ミラーは離陸しネウロイに向かっていた。
ハインツが無線でハッセルトの防空司令部に問い合わせる。
ハインツ「ハッセルト、敵は？」
レーダー手『こちらハッセルト、敵はレーダー及び監視所の報告によれば中型もしくは大型の一機のみとのこと。
なお現在サン・トロンの北西にて雷雨及び積乱雲が発生中、注意されたし』
ハインツ「了解、中型か大型か、ミラー、出番だ。
ミーナ、いつも通りでやろう」
ミラー「了解」
ミーナ「ええ」
ハインツは情報からすぐにいつもの対大型戦術であるミーナ達がネウロイを拘束、そこをミラーが遠距離射撃で撃破する戦術を選択した。
そして飛び続けるが見つからなかった。
ミラー「おかしいですね、そろそろ見えても可笑しくないのに」
ハインツ「いや、いるぞ。目の前にな」
ミラーが不思議がるとハインツが目の前の積乱雲を指さす。
バルクホルン「まさかあの中に！」
ハインツ「ああ、魔導針でも確認した。
あの雲の中、高度１５０００フィート付近だ」
ミーナ「積乱雲を利用するなんて…」
ネウロイは前方の積乱雲の中に隠れていた。
だが積乱雲、更には雷雨の中は現代でもなお極めて危険である。
内部は危険な上昇気流、下降気流、追い風が組み合わさり低空を飛行する飛行機を地面に叩きつけるダウンバースト、視界を奪いその上エンジンさえストールさせる程の豪雨、機体を叩き壊す雹、そして何より原子爆弾の炸裂にも匹敵するほどのエネルギーを誇る雷、これら全てがその中を飛ぼうとする者を破壊しようとするのだ。

この中に入った結果悲劇的な結末を迎えた事故は非常に多い、有名な例では１９８５年ダラスフォートワース空港に着陸しようとしたデルタ航空１９１便ロッキードトライスターがダウンバーストで地面に叩きつけられ１３５人が死亡、１９９９年にはリトルロックに着陸しようとしたアメリカン航空１４２０便が雷雨の中での飛行により着陸手順を飛ばした結果オーバーランし１１人が死亡、１９７７年ジョージア州ハンツビルからアトランタに向かっていたサザン航空２４２便ＤＣ―９は積乱雲の中で雹と雨で２基のエンジンを喪失、ジョージア州のハイウェーに不時着とし大破、炎上、乗員乗客８５名の内助かったのは２２名のみ、１９８２年にニューオーリンズを離陸した直後のパンアメリカン航空７５９便は更に悲惨であった、離陸直後にダウンバーストに遭遇、ニューオーリンズ郊外のケナーに墜落し乗員乗客全員とさらに地上の８名が死亡した大惨事となった。

ノヴァク「で、どうやって奴さんを引っ張り出す？」

ハインツ「出さなくてもいい、向こうからお出ましだ」

ハインツが言った直後、ネウロイが積乱雲の中から現れ攻撃し始めた。

ミーナ「ブレイク！」

ミーナの指示ですぐにウィッチ達は散開するとネウロイを攻撃し始める。

ネウロイは激しく攻撃するがその合間を縫ってバルクホルンとハルトマン、ノヴァク、ミーナが近づき攻撃する。

そして幾らか命中するがその大半はＭＧ４２の８ミリモーゼルを弾いた。

ミーナ「装甲が固い！ミラーさん！」

ミラー「了解！」

ハインツ「ミラー、待てよ、ちょい右、よーい」

ミーナの要請にミラーとハインツがネウロイに狙いを定めた直後、ネウロイは積乱雲の中に入ってしまった。

ハインツ「クソ！入られた！ええい！こっちの指示で撃て！

２時方向！上に２０度、撃て！」

ハインツはミラーに盲目射撃を命じる。
ミラーはそれに従い撃つが弾はネウロイを掠めただけだった。
ハインツ「畜生、風で弾道特性が変わって掠っただけだ！
どうすりゃ…ん？高度が落ちてる」
ミラーの放った弾は積乱雲内部の気流によって弾道特性が変化し掠めただけでも奇跡だったが突然ネウロイが急降下し始めた。
ハインツ「よし！やったぞ！」
バルクホルン「どういうことだ？」
ハインツ「砲弾が掠めた結果ネウロイの空力的特性が変化してエネルギーを失ったんだ！
奴さんそれで内部の下降気流に負け始めた！
あのままだと一気に地面に叩きつけられるぞ！」
ネウロイは砲弾が掠り表面の空力的特性が変化した。
その結果揚力を失い始め下降気流に負け始めたのだ。
ネウロイは積乱雲の下降気流によって地面に急降下し始めそれから回復しようとネウロイは雲から飛び出た。
ハインツ「よし、今だ！撃て！」
ハインツの号令でミラーが砲撃、砲弾はネウロイを貫き撃破した。

数日後、ブリュッセル
「そうか、アーヘンのレーダー網、監視網は問題なし、か」
参謀「はい、３回確認しましたが問題ありませんでした」
ブリュッセルのベルギカ地区後方行政責任者であるフランツ・ベーメ大将は参謀から数日前のサン・トロン郊外での戦闘の件で報告を受けていた。
ベーメ「君はどう思う？」
参謀「もしかしたら戦線の後方に敵の拠点があると推測します」
ベーメの問いに参謀が答える。
ベーメはそれを聞くと机の上に広げられたベルギカの地図を見る。
ベーメ「私も同感だ。
さて、ではそれはどこだと思う？」

参謀「恐らく、アルデンヌかと」
参謀はアルデンヌ地方を指さした。
ベルギカで巨大な何かを隠そうと思えばこの深い森が一番だった。
ベーメ「そうだ、この何処かだ。
だがどこだ?ネウロイの巣なんてものは簡単に見つかるはずだ」
参謀「確かに、空中に発生すれば…まさか!」
参謀があることに思い至る。
それはアルデンヌ地方での地震・崖崩れ・土砂崩れ・水質汚濁・不自然な地下水の枯渇などの事象を合わせれば簡単だった。
ベーメ「地下、だ」
参謀「地下に巨大なネウロイの巣が作られつつある、と考えればアルデンヌ地方での全ての事象に説明がつきます」
ベーメ「ああ、その上今朝ブリュッセル自由大学の地質学者達から報告が来た。
かいつまんで説明すれば『アルデンヌ地方での不可解な地質学的事象の全ては地下に何らかの巨大な物体が存在しその物体が移動していることでしか説明しえない』だそうだ。」
参謀「では」
ベーメ「我々はこいつに備えなければならないな、すぐにパリに行く支度をしてくれ」
参謀「は」
ベーメたちが気が付いた事象、それは正史ではこの一か月以上先になって分かったことだったが彼らはそれよりも早く気が付いてしまった。
そしてこれが大きな変化を生み出すことをまだ知らなかった。

第４．２章：タイフーン
第１話：デロス島沖

１９４５年７月２３日深夜、北アフリカ。
この灼熱の砂漠の戦線の夜は昼間とは打って変わって極寒であった。
この空を見上げれば満点の星空に覆われた砂の大地の闇の中で多数の大砲、そして戦車、歩兵、装甲車等が動いていた。
そしてその中の一つの陣地の中でブリタニア軍の将校が腕時計を確認すると号令した。
将校「ファイア！」
次の瞬間、一斉に大砲の火蓋が切られると大量の砲弾、ロケット弾が飛んでいった。
目標はこの先に居座るネウロイだった。
時に１９４５年７月２３日、北アフリカ戦線の大転換点となる大攻勢スーパーチャージの始まりであった。

スーパーチャージ作戦が開始されたのとほぼ同じ７月２３日早朝、エーゲ海デロス島沖。
この沖をイズミルを出港しジブラルタルに向かっていた酸化マグネシウムとクロム、アンチモンを満載した鉱石運搬船プロテウスが駆逐艦ヴァシレフスキ・ゲオルギウス、ヴァシリッサ・オルガの２隻に護衛されながら航行していた。
夜明けの霧の中プロテウスの前を航行していたゲオルギウスのレーダーが何かを探知した。
レーダー手『レーダーに感あり、方位２９８、距離４５００』
副長「了解、総員戦闘…」
艦長「いや、待て」
レーダー手の報告に副長は総員戦闘配置を命じようとするがそれ

を艦長が制止する。
艦長「その方角ならデロス島だ。
おそらくレーダーが島を反射したんだろう。この海域ではよくあることだ」
副長「はぁ…」
その方角はデロス島だった。
艦長はこの海域でよく起きていた島にレーダー波が反射して敵と誤認する現象だと思い気にも留めなかった。
だがそれは間違いだとすぐに気が付くことになる。
突如見張り員が報告する。
見張り員『右舷に発光物を確認！』
副長「まさかネウロイ!?」
艦長「そんな馬鹿な、前線から数百キロも離れてるんだぞ！」
次の瞬間、赤い光線が飛び後方を航行していたプロテウスの船首に直撃する。
船長「何が起きた！」
副長「攻撃です！」
プロテウスのブリッジでは船長と副長が攻撃で激しく揺れる中状況を整理していた。
船員『前部船倉に浸水！』
船長「不味いぞ！すぐに浸水を止めろ！」
船員『無理です！浸水が激しすぎます！
このままだと酸化マグネシウムが！』
次の瞬間前部船倉で爆発が発生、白い煙が立ち上る。
船長「酸化マグネシウムだ！もう手が付けられん！総員退避！」
船長は即座に船を捨てるよう命じた。
もはや手遅れだった。
プロテウスは急激に沈み始め船員は電気系が生きている間にデッキに上がると海に飛び込んだ。
そして全員が飛び込み最後に船長が飛び込むと船から離れ始めるがふと海面に何かが漂っていることに気が付いた。

副長「なんだこれ？」
船長「ん？この匂い、色、まさか！
　重油が漏れてる！急いで離れろ！」
船から重油が漏れていた。
さらに沈みゆくプロテウスは更に激しく燃えつつあった。
そうなれば何が起きるかは簡単だった。
船員は急いで船から泳いで離れる。
その間にヴァシレフスキ・ゲオルギウスはネウロイに向け発砲、
ヴァシリッサ・オルガはプロテウスの乗員を救助し始める。
だがその前にプロテウスは沈没、そして海面を漂う重油に船の火災が引火、海面は一気に地獄と化した。

「クソ！なんてざまだ！」
数日後、クレタ島、イラクリオンではエーゲ海地域連合軍総司令官フリードリヒ＝ヴィルヘルム・ミュラー中将が悪態をついていた。
ミュラー「クソ、巡洋艦を持ってしても破壊不能だと!?
　その上増援の赤ズボン共は我々が西から叩けと命令したのに東から叩いて失敗、空爆は有効な数を集められていないとは…
　連中は我々の実情を分かってるのか!?」
理由はデロス島の東岸の崖に現れたネウロイだった。
このネウロイはトルコからの鉱物輸送航路を寸断していた。
そしてそれをどうにかしようとエーゲ海地域のなけなしの戦力で手を打った。
まずこの地域の最強の戦力である巡洋艦サウサンプトンとグラスゴーが艦砲射撃を行ったが破壊できず急遽ロマーニャ領エーゲ海諸島地域防衛のため送られた赤ズボン隊が攻撃したが彼女らはなぜか事前の打ち合わせでは大きく回り込んで死角となる西から叩く筈が最短ルートの東から攻撃したため失敗、重爆編隊の攻撃はそもそもこの地域には爆撃機が旧式のＨｅ１１１やハリファックスなどせいぜい哨戒機程度しかなく、Ｂ―２４等も少数存在したが余りにも少なすぎ有効な打撃は与えられないと結論づけられた。

そのため彼らは最終手段としてブリタニア空軍に第６１７スコードロン、通称ダムバスターズの派遣を要請、更に直接上陸して叩くためこの地域に派遣されているロードス島のロマーニャ陸軍第５１歩兵師団シエナとカールスラント陸軍ロードス突撃師団、クレタ島のカールスラント陸軍第２２空輸歩兵師団、レロス島のロマーニャ陸軍第５０歩兵師団レジーナとギリシャ本土から派遣された第１１空軍野戦師団の１個大隊とブランデンブルク沿岸猟兵大隊、ブリタニア軍第２３４歩兵旅団という部隊を掻き集めて何とか攻撃部隊を編成中だった。

だがこの攻撃部隊はこの地域の海上輸送力が１０００トン以上の輸送船３５隻、それ以下の機帆船含む輸送船合計９８隻という貧弱すぎる輸送力からオストマンからの輸送船の徴用を行っても輸送可能兵員は僅か2万人程度であった。

参謀「閣下、落ち着いてください。

今アフリカもギリシャも手一杯なんです、北アフリカでは攻勢の真っ最中、ギリシャは内戦前夜で大変なんですよ」

ミュラー「だが奴のせいでトルコからの重要な鉱物輸送航路が寸断されているんだぞ！

その上連中はまともな戦力を寄こさん、油も足りない弾もない！

兵士もいないし戦車はロードス島に３０両、クレタの５１両は戦力になるのはたったの１０両！

大砲は沿岸砲なら腐るほどあるが運搬可能なのは旧式だけだ！

おまけに兵員は懲罰部隊に中年招集兵、部隊の定員すら満たしてない！

これだけで戦えるか！」

この地域は副次的な戦線だった。

そのため兵員も装備もお寒い限り、打てる手は限られていた。

参謀「閣下、何とか北アフリカから二人、それに元５０１を３人集めることに成功しました。

それにブリタニアも６１７を派遣するそうです」
参謀たちの必死の訴えに何とか彼らは5人のウィッチと６１７を掻き集めることに成功した。
ミュラー「なに!?それは本当か！」
参謀「ええ、明日にはイラクリオンに到着します」
ミュラー「何とかなりそうだな、ではタイフーン作戦の準備を始めようか」

翌日、イラクリオンの司令部ではルッキーニとシャーリーが言い争いをしていた。
ルッキーニ「ねえ、なんで直接デロス島に行っちゃダメなの?」
シャーリー「一旦クレタに来いって命令だったんだよ」
ルッキーニ「二人してがーっと行ってバーンって行ってやっつけちゃえばいいじゃん！」
するとドアが開き誰かが入ってきた。
マルセイユ「全く、なんで私が他の奴と組まねばならんのだ」
ライーサ「これも命令なんですから我慢してください」
ニコ「ライーサさんの言うとおりですよ。
んー…とりあえずこっちはバルセロナからローマ経由で直接来たから寝ていいですか?」
入ってきたのはマルセイユとニコ、そしてマルセイユの僚機であるライーサ・ペットゲンだった。
それなりに元気のあるマルセイユに対してニコは相当疲れた様子だった。
ルッキーニ「あ！マル何とかとニコ！」
シャーリー「アフリカの！と、ニコ！久しぶりだな！」
ニコ「イェーガー大尉、久しぶりです。
とりあえず今は寝てもいいですか?こっちは昨日までバルセロナ、一昨日までカサブランカ、その前はアルジェ、リスボン、コンスタンティノープル、アテネ、ローマ、ベオグラードって飛び回って

たんですからもうくたくたなんです…」
ニコは５０１解散後アフリカの第1リビア軍集団司令部付ウィッチとしてロンメルの特使として地中海沿岸を飛び回っていた。
そのためニコは疲れ切っていた。
シャーリー「あはは…膝枕ぐらいならしてやるぞ」
ニコ「そんなことしたらサーニャさんが怒りますからいいですよ…
それじゃあおやすみ…ｚｚｚ…」
シャーリーは苦笑いするがニコはそのまま部屋の椅子に座り帽子を顔に乗せるとそのまま眠り始めた。
シャーリー「はは…なんかシシリーで休暇中だったって言えない感じ…」
ライーサ「ニコさんは北アフリカに来たのにずっと飛び回ってますからね」
マルセイユ「私の勝負も受けられないぐらい忙しいからな。
まあ今日ぐらいは大目に見てやるさ」
爆睡するニコをマルセイユとライーサはかなり多めに見ていた。
というのも彼女らのいる第３３統合戦闘飛行隊とはそれなりの交流があったがいつもアフリカに来れば慌ただしく司令部に行き報告、会議の後寝てすぐに出発というような状況であるため同情していた。
するとまたドアが開き一人のブリタニア空軍の将校とカールスラント陸軍の将軍、それにその将軍の参謀が入ってきた。
ライーサ「ニコさん、起きてください…」
ニコ「ｚｚｚ…あと5分寝かせて…ｚｚｚ…」
ライーサはニコを起こそうとするがまだニコは寝ていた。
ミュラー「とりあえず全員揃ってるみたいだな。
私は連合軍エーゲ海諸島司令官フリードリヒ＝ヴィルヘルム・ミュラー中将だ。」
入ってきたのはミュラーだった。
ミュラー「座ってくれ、早速だが本題に入る。
君たちには明後日開始されるデロス島奪還作戦『タイフーン』に参加してもらう」

ミュラーはウィッチ達を座らせると参謀は映写機でネウロイを映した。
ミュラー「今回の標的はこいつだ。
この洞窟に潜むドラゴンを我々が殺すのだ。
そしてこのドラゴンを狩る者が…」
マルセイユ「我々という事か」
ミュラーは映写機に映るネウロイをドラゴンと称しそれをマルセイユは自分達が倒すものだと考えた。
だが実際は違った。
ミュラー「違う、それが彼、ガイ・ギブソン大佐率いる第617スコードロン、通称ダムバスターズだ。」
ルッキーニ「え!?」
シャーリー「おい、どういうことだ」
この〝ドラゴン〟を屠るのはウィッチではなくミュラーの隣に立つブリタニア空軍士官ガイ・ギブソン大佐率いる第617スコードロン、通称ダムバスターズだった。
ミュラー「ダムバスターズが上空から5トン爆弾トールボーイ、それに10トン爆弾グランドスラムを投下、巣穴の洞窟ごと吹き飛ばす。
奴の有利な点は洞窟に潜んでいるから通常兵器は効きにくい事だ、だが同時に洞窟からは敵が来ないと出てこないという事でもある。
さらに言えば巣穴は東向き、朝日が美しいサンセットだが西からの攻撃は察知されにくい、だから我々は夜明けに西から爆撃隊が接近、真上からグランドスラムとトールボーイを投下して巣穴ごと吹き飛ばす。
そのドラゴンスレイヤーの護衛を君たちにしてもらいたい」
ミュラーの作戦はダムバスターズが地中貫通爆弾であるトールボーイとグランドスラムで巣穴ごとネウロイを倒すという策だった。
これはネウロイの長所を逆に鍵としてウィークポイントの西から

の攻撃を組み合わせることで彼らの限られた戦力の中で最も成功率の高い策だった。
だがこの作戦は島ごと叩き潰すという事でもあった。
ルッキーニ「そんなのダメー！」
シャーリー「おい、ルッキーニ」
ミュラー「何が駄目なのかね？」
ルッキーニ「だって、デロス島はたくさんの遺跡があってとーっても大事で、えっと…人類の…」
ライーサ「人類の遺産ですね」
ルッキーニ「それ」
ルッキーニはデロス島の遺跡を守るため反対した。
だがミュラーの反応は最悪だった。
ミュラー「アハハハハハ！人類の遺産？それがどうした！
そんなもので敵が退散するか？ネウロイが消えるか？
これが最善であり最高の策だ！遺跡など考古学者にでも任しておけ、我々は軍人、そんなことはどうでもいい。
我々の仕事は国家に仇なす全ての物から国家を守り撃退し破壊し殲滅し勝利することだ。
寝言は寝て言え」
ルッキーニ「うじゅ…」
シャーリー「何か手があるはずです、島を破壊せずにネウロイを倒す方法が！」
ミュラー「そんなのがあったらもうとっくにやっている。
いいか！我々の手駒は定員割れしている装備も旧式、人員の質もよくない僅か４個師団と２万人を運ぶのが限界の、それもエーゲ海の広く散らばる島々への補給さえも無視したうえでこの程度の海上輸送能力！
各種航空機、戦闘機、爆撃機、偵察機、救難機、輸送機、連絡機、練習機、雑役機、観測機、水上機、飛行艇合わせて立った３００機！
地域全域で合計５万バレルの燃料と１０００トンもない

弾薬！

軽巡2隻と駆逐艦5隻、水雷艇8隻、その他艦艇２０隻、小型舟艇８０隻、戦車８１両、自走砲３０両、大砲１２０門、これがエーゲ海地域の〝全〟戦力だ。

その上このネウロイの為に赤ズボン隊とやらが来たがこのバカ小娘共は島を東から攻撃して失敗、艦砲射撃も効かん、爆撃機はそもそも数が足りない。

ここはロマーニャでもアフリカでもない！エーゲ海だ！

後方だ！副次的で言わば忘れ去られた戦場だ！

物資、弾薬、装備、戦力、全部が揃ったロマーニャやアフリカとは違うんだ！

分かったか小娘共！」

ミュラーはシャーリー達にエーゲ海地域の現状を当たり散らす。

そもそも戦力がないのだ、だから手の打ちようもない、それが現実だった。

翌々日、午前5時、夜明けの薄明の中アブロランカスターB．Ⅰスペシャル爆撃機の編隊が高度２２０００フィートでデロス島に西から接近していた。

司令部『司令部よりドラゴンスレイヤー、攻撃を開始せよ、繰り返す、攻撃を開始せよ』

ギブソン『ドラゴンスレイヤー、ラジャー。

オールエアクラフト、アタックフォーメーション。

ウェポンベイ、オープン』

先頭を飛ぶギブソンのランカスターからの合図で全機戦闘態勢を取る。

そして編隊は少しずつデロス島に近づき爆撃手が目標を照準する。

そして目標を捉えるとギブソン機がグランドスラムを投下、それに続いて他の爆撃機も狙いを定めると次々とグランドスラムやトールボーイを投下していった。

ニコ「始まりましたね。」

ルッキーニ「シャーリー、本当にこうするしかないの？」
シャーリー「まだやりようはあるはずだ！そうだろ？ニコ？」
ニコ「これが命令なんですから仕方ないですよ。
　それにもし違反すれば軍法上の責任を問われますし」
デロス島への攻撃を悲しむルッキーニを後目に爆撃機隊の落としたグランドスラムとトールボーイは正確にデロス島の岩盤を貫きネウロイに命中、破壊した。
その後残敵掃討と戦果確認のためおよそ1個連隊規模の戦闘団からなる部隊が艦隊の援護の下上陸、ネウロイの完全破壊を確認した。

ヴェネチア公国第3の都市パドヴァはヴェネチア解放後ヴェネチアの政府施設の復旧が完了するまでの間臨時首都となっていた。
そのためこの街には臨時の官公庁街ができていた。
その中の一つが内務省だった。
そして内務省のトップはフィンツィだった。
「内務大臣」
フィンツィ「うん？フリリャーニ大佐か」
内務省の建物を出たフィンツィが車に乗ろうとすると待ち構えていたヴェネチアカラビニエリ大佐のジョヴァンニ・フリリャーニに呼び止められた。
フィンツィ「大佐も乗りたまえ」
フリリャーニ「では」
フィンツィが車に乗るように促すとフリリャーニがフィンツィに続いて車の後部座席に座った。
そしてドアが閉まると車が発進した。
フィンツィ「で、何かあったか？」
フリリャーニ「まあ、ですがここで言っても？」
フィンツィ「かまわん、どうせ車の中なら盗聴はできん」
フリリャーニ「8月3日午前に行われる臨時国会開会式の警備の責任者に私が任命されました。

そこでクーデター派の陸軍部隊を一部警備に投入します、いいですか？」
フィンツィ「カヴァツレーロ君には？」
フリリャーニ「アヴェルサ大尉が向かってます。恐らく許可されるものと…」
フィンツィ「いいだろう」
フリリャーニ「は」
彼らの密談はヴェネチア公国の終焉の日を決めることになった。

第４．３章：Ａ　Ｂｒｉｄｇｅ　Ｔｏｏ　Ｆａｒ
第１話：猟犬の墜落

１９４４年７月、ネーデルラント

「援護しろ！」

「了解！」

アルンヘムの市街地でカールスラント陸軍第２０義勇擲弾兵師団第２１擲弾兵連隊第２大隊第３中隊の兵士たちが戦闘中だった。

ＰＰｓｈ４１を持ったユーリ・タミクが崩れた壁の後ろで後ろを進むＭＧ４２を抱えたカール・ヨギに援護を頼む。

ヨギは走って壁から飛び出しＭＧ４２を瓦礫の上に据え付け一緒に来た弾薬手の弾帯を装填すると数十メートル先のネウロイに向け銃撃を開始する。

ネウロイはヨギに注意を向け攻撃しながら近づく、そしてそれを待っていたかのようにタミクは持っていたパンツァーファウストを取り出し構える。

タミク「よし…これでも食らえ！」

十分に接近するとパンツァーファウストを発射、破壊した。

そして土埃が消えネウロイがいなくなるのを確認するとタミクはヨギに近づく。

タミク「ヨギ！大丈夫か？」

ヨギ「ああ、何とか、ニュカネン、大丈夫か？」

ヨギは何とか無事だった。

ヨギは隣にいた弾薬手のニュカネンを呼ぶが反応がない。

振り向くとニュカネンは血塗れで動かなかった。

それを見るとヨギはヘルメットを脱ぐとそのまま座り込んだ。

ヨギ「またか…俺達は祖国でもないこんなところで何をしているんだ？

これが、エストニアの為なのか…？」

ヨギの呟きは煙と埃にまみれ爆音と銃声が鳴り響くアルンヘムの

街に消えた。

同じ頃、数百キロ離れたガリア北部パ・ド・カレー上空を3人のウィッチが飛んでいた。

ペリーヌ「ここも随分人が増えたようですわね」

リーネ「えっと、先週だけで5軒の家が使えるようになったみたい」

アメリー「記録記録っと」

リーネは書類を確認しアメリーは写真撮影を行う。

するとペリーヌのユニットが異音を出し始めた。

ペリーヌ「そろそろオーバーホールが必要ですわね」

リーネ「だったらカレーの基地に整備依頼を出します」

ペリーヌ「ええ、お願い。

ん？」

ふとペリーヌは微かに何かの音を捉え耳をそばだてる。

ペリーヌ「リーネさん、アメリーさん、微かに飛行機の音がしないかしら？」

リーネ「え？」

アメリー「言われてみれば何か聞こえますね」

ペリーヌ「上の方からしますけど何かしら？」

ペリーヌは上を向いた。

すると上空を戦闘機が飛んでいるのが見えた。

それだけならば通常の光景だった、だが問題はその機の国籍章だった。

ペリーヌ「ねえ、リーネさん、あの戦闘機の国籍章、見覚えあるわよね？」

リーネ「ええ、あれって…」

ペリーヌ「エジプト王国空軍…不味いわね、行きましょう！」

リーネ「はい！」

アメリー「え？え？え？ま、待ってくださいペリーヌさん！」

ペリーヌはその戦闘機の国籍章がエジプト王国空軍ものだと知っ

ていた。
　すぐにそれが不味い事だと判断しペリーヌとリーネは急いで戦闘機を追いかける。
　置いて行かれたアメリーも急いで追いかける。
　そして戦闘機の背後から近寄り右側に並んだ。
　戦闘機のコックピットではパイロットが驚いた様子だった。
　そして同時に追いついたアメリーが機体の国籍章を見る。
　アメリー「あの、ペリーヌさん、この機体の国籍章って…」
　ペリーヌ「国籍章が少し違うけどエジプト王国空軍機よ。」
　アメリーが困惑しながら聞くとペリーヌが答えた。
　その間にパイロットはペリーヌ達にジェスチャーで下を指さした。
　それにペリーヌはＯＫサインを見せると戦闘機の前に回った。
　リーネ「ペリーヌさん、なんて言ったんですか？」
　ペリーヌ「多分どこかに着陸したいと思いますわ。
　　確か近くに飛行場跡地があったはずですわ、そこに連れて行きましょう」
　ペリーヌは前に回ると主翼を振って合図し旋回、降下する。
　しばらくすると広い荒れ地が見え始めた。
　そこでペリーヌは離脱すると戦闘機は降下、主脚を出し着陸しようする直前、エンジンが止まり機体は高い降下率のまま地面に激突しポーポイズ現象を起こして地面から跳ねた。
　数回跳ねると機体は地面を猛スピードで滑走し止まりかけたところで砲弾のクレーターに突っ込み機尾を上げた状態で止まった。
　ペリーヌ「大変！」
　すぐにペリーヌは止まった戦闘機のそばに駆け寄りユニットを脱いで機体のコックピットをこじ開ける。
　中には頭を計器盤にぶつけて負傷したらしきパイロットがいた。
　ペリーヌ「大丈夫ですか!?」
　ペリーヌは体をゆすって声をかけるが反応はなかった。
　次にペリーヌは呼吸を確認する。
　ペリーヌ「息はあるようね」

リーネ「ペリーヌさん、手伝いましょうか？」
幸い呼吸はあった。
するとリーネが駆け寄りペリーヌに聞いた。
ペリーヌ「ええ、機体が燃える前に引っ張り出すわよ、せーの！」
リーネ「う、んー！」
二人はシートベルトを引きちぎるとパイロットの服を掴んで引っ張る。
そして何とか機体から引きずり下ろすとペリーヌはパイロットのゴーグルと帽子を脱がせハンカチで頭の傷を抑える。
ペリーヌ「リーネさん、急いで屋敷から包帯を持ってきてください！」

アメリーさん、街に行って医者を呼んできてください！」
リーネ「了解！」
アメリー「分かりました！」
二人はすぐにユニットを履いて屋敷と街へと向かった。
二人を見送り出血を抑えようとしているとふと首元にかけられた認識票を見つけると回収する。
ペリーヌ「えっと、ユニオ・ヴァレリオ・レート？階級、少尉。
ＲＥＡＦ、名前からしてロマーニャ人、いえイタリア人かしら？」
ペリーヌは回収した認識票からそう判断した。

それから2、3時間後、ペリーヌの屋敷の一室ではあのパイロットが頭に包帯を巻かれて寝かされていた。
「ん…ん？知らない天井だ…」
ペリーヌ「気が付きましたか？」
パイロットが気が付くとベッドの隣に座ったペリーヌが聞いた。
「あ、ああ。ここは？カイロか？それともテルアビブか？」
ペリーヌ「パ・ド・カレーですわよ」
「は？パ・ド・カレー？フランスのか？

シナイ半島から３０００キロ以上離れてるじゃないか！」
ペリーヌの言葉にパイロットは驚いた。
パ・ド・カレーはシナイ半島から３４００キロも離れている、そのことが信じられなかった。
「私のベルトロならアレクサンドリアからせいぜいアテネまでしか行けないはずなのに…
一体何が…」
ペリーヌ「落ち着いてください、ユニオ・ヴァレリオ・レート少尉、でいいですわよね？」
ペリーヌは混乱するパイロット、ユニオ・ヴァレリオ・レートを落ち着かせる。
レート「なんで私の名前を…ああ、認識票か…
ユニオ・ヴァレリオ・レート、エジプト王国空軍だと少尉だがイタリア王国空軍、イタリア社会共和国空軍の元大尉でもある。
怪我の手当てをしてくれたのか？えーと」
ペリーヌ「ペリーヌ・クロステルマンですわ、レートさん」
レートはペリーヌの名前を聞くとお辞儀して感謝の言葉を伝える。
レート「ミスクロステルマン、怪我の手当てと救助に感謝する。
ところで、あんまり状況がよくわからないんだ、シナイ半島上空でイスラエル軍のＢｆ１０９擬きと戦っていて撃墜されたと思ったらフランス上空とは…」
ペリーヌ「その、レートさん、恐らくですけど心当たりがあります。」
レート「本当か！」
ペリーヌ「ただ、これから話すことはすべて真実で事実です。
かなり衝撃的で信じられないと思いますが…」
そしてペリーヌは今までのハインツやミラー、ノヴァク、ニコ、ヤンが経験したことを説明した。
それが終わるとレートは茫然としていた。
レート「そんな…まただ、また私だけ生き残った…」
レートはベッドに寝転がると天井を向いて呟いた。
その言葉にペリーヌは引っかかった。

ペリーヌ「また？」
レート「父も母も妹も親友を失い、故郷から追われ、エジプトに逃げ、また戦争に巻き込まれ、そして戦死したと思ったらこれだ…
　すまない、ちょっと愚痴みたいになったな」
レートの独白にペリーヌは衝撃を受ける。
レートは少し愚痴みたいになったと思いペリーヌに謝った。
ペリーヌ「いえ、分かります、その気持ち。
　私もお父様もお母様も戦争で亡くしましたから…」
レート「そうか…辛い事を思い出させてすまなかった。
　なんだろうな、今までこんなこと、一人を除いて話したことなかったのに…」
ペリーヌも家族全員を失っていたからこそレートに同情していた。
それにレートが意味深な事をつぶやいた。
するとレートが話題を変えた。
レート「ところで、これから私はどうすればいいんだ？
　戸籍も身分証もない」
ペリーヌ「なら、私たちを手伝ってくれませんか？」
レート「手伝う？」
ペリーヌが復興の手伝いを提案した。
ペリーヌ「ええ、パ・ド・カレーの復興を手伝ってください。
　軍のおかげである程度は復興してますけどそれでも全然、人でも何もかもが足りないんですの」
レート「いいだろう、私でよければ」
するとレートは手を伸ばす。
それにペリーヌは握手する。
ペリーヌ「ええ、よろしくお願いしますわ、レートさん」
するとドアがノックされた。
リーネ「ペリーヌさん、入ります」
レート「えーと、彼女は？」
入ってきたのはリーネだった。
レートはペリーヌにリーネの事を聞いた。

ペリーヌ「リーネさんですわ。
　　リーネさん、こちらレートさん」
リーネ「よろしくお願いします、レートさん」
レート「よろしく、ミスリーネ」
ペリーヌ「ところで、何かあったの？」
リーネ「はい、カレーの基地のユニット整備部隊が移動になってアイントホーフェンに移るそうです。」
前線の移動により今まで整備を行っていたパ・ド・カレー＝ダンケルク飛行場の整備部隊がネーデルラントのアルンヘムの手前、アイントホーフェン空港に移動したという話だった。
これにより整備依頼を出したペリーヌ達のユニットはアイントホーフェンに送られることになった。
ペリーヌ「そう」
レート「ところで、ユニットとは何かね？」
するとレートがユニットが何かわからずペリーヌに聞いた。
ペリーヌ「ユニットは私たちのような魔力を持った魔女、通称ウィッチの魔法力で飛ぶ現代版魔法の箒のようなものですわね？」
レート「魔女？」
ペリーヌ「ええ、魔女」
レート「ますます訳が分からない…
　　ところで、今は４８年で戦争なんてとっくの昔に終わったよな？」
ペリーヌ「え？４８年ではなく４５年ですわよ」
レートの爆弾発言にペリーヌは驚く。
彼女は４５年以降の歴史を知らなかった。
レート「え？じゃあ何が一体どうなって…」
ペリーヌ「一応レートさんたちの世界の４５年までの歴史の大筋は知っていますけど…」
レート「とりあえず知っている限り４５年以降の歴史を話すが、いいか？」
ペリーヌ「お願いします」

そしてレートは４５年から４８年までの歴史を説明した。
終わるとペリーヌ達は驚いていた。
ペリーヌ「ナチスに虐殺されたユダヤ人が今度は聖地を乗っ取って戦争…
　連合軍は敗戦国の首脳を裁判にかけて死刑ですか…」
リーネ「ヨーロッパは東西に分断、ドイツは二つに分割ですか…」
レート「ああ、戦争が終わっても大変…戦後は続くよ何処までも、だ」
レートは自嘲気味に嘆いた。
――――――――――――――――――――
それから少しして、レートは頭に包帯を巻いてペリーヌとリーネ、アメリー、そして現地の民間人が連合軍から払い下げられたＤ７トラクターに乗ってレートの乗っていたＭＣ２０５の不時着地点に来ていた。
ペリーヌ「これを引っ張り出すんでしょ？」
レート「ああ」
機体はクレーターに頭から突っ込み逆立ち状態だった。
そこで現地住民と共に機体の尾輪と主翼の先にロープをつなげ、それをトラクターにつなげた。
レート「よし、じゃあ引っ張れ！」
レートの合図にトラクターが動き出すと機体はクレーターから引っ張り出され元の体勢に戻った。
機体はプロペラが曲がった以外は特に損傷も見られず綺麗だった。
レート「ペラが曲がった以外は綺麗だな、主脚や尾輪にも問題はないし、補助翼、フラップも問題なし。
　コックピットは、ああ窓ガラスにひびが入ってるが問題はなさそうだ。
　昇降舵動いてる？」
レートは機体をざっと点検し問題がないと確認するとコックピットの操縦桿を動かして昇降舵を確認する。

ペリーヌ「ええ、ちゃんと動いてますわ。
　意外と状態はいいようね」
アメリー「ところで、この戦闘機は何ですか？」
するとアメリーが聞いた。
それにレートが機体から滑り降りて説明する。
レート「こいつはマッキ社製マッキＭＣ２０５Ｖベルトロ、猟犬だ。
　我がイタリアが誇る最強の戦闘機だ。
　高い運動性と速度を誇り操縦の癖もない素晴らしい機だ。
　俺も休戦前から使ってるよ、こいつに乗ればもう他の戦闘機には乗れないね」
　レートが乗っていたのはマッキＭＣ２０５Ｖベルトロだった。
　この戦闘機は大戦中後期にイタリアの３つの航空機メーカーマッキ、フィアット、レッジアーネが生み出したドイツ製ＤＢ６０５エンジンを搭載した通称スペルガ５と呼ばれた戦闘機たち、フィアットＧ５５チェンタウロ、レッジアーネＲｅ２００５サッジタリオ、の一つだった。
　スペルガ５はイタリアの非常に高い航空技術とドイツの最新鋭エンジンを組み合わせることにより生まれたイタリア航空史上最強のレシプロ戦闘機たちだった。
　その性能はかのＰ―５１とも張り合える程だった。
　だが、その足を引っ張ったのが戦前イタリアの無茶苦茶な航空行政、そしてそれ以上に貧弱な工業力であった。
　この幻の名機たちは戦前イタリアの航空行政により乱立した中小航空機メーカーという存在と極めて貧弱で頼りない工業力により実戦投入は遅れに遅れ投入されたのはどの機も４３年のイタリア休戦直前だった。
　そしてイタリア休戦後これらの機体は南王国軍、イタリア社会共和国軍、そしてドイツ軍に分かれて運用された。
　その中でＭＣ２０５は休戦後生産が中止されたＲｅ２００５よりかは幸運だった。
　休戦後もこの機は生産され続け多くのエースや部隊、かの有名なア

ドリアーノ・ヴィスコンティやその指揮下にあった第Ｉ戦闘航空航空群アッソ・ディ・バストーニなどで使用され終戦までに１０１機がＡＮＲに配属されたといわれている。
戦後もこの機はＧ５５などと共に新生イタリア共和国空軍で使用され続け４８年の第1次中東戦争ではエジプトにＧ５５と共に輸出されイスラエル空軍とシナイ半島の空で死闘を繰り広げた。
アメリー「へえ、そうなんですか…」
レート「ああ、なあ、こいつはまだ飛べる、ペリーヌ、こいつのレストアできないかな?」
するとレートは機体の胴体を撫でながらペリーヌに聞いた。
ペリーヌ「レストア?ええ、部品さえあればできると思いますわ」
レート「ならやろう、この機は俺の機だ。
誰にもあげないしまだ飛べるんだ」
レートはベルトロのレストアをするつもりだった。
ペリーヌ「いいですわよ」
アメリー「あのー!写真撮りますけどいいですか?」
するとアメリーがカメラを持って聞いてきた。
それにレートとペリーヌは振り返る。
ペリーヌ「ええ、いいですわよ」
リーネ「皆さん並んでくださーい」
そして全員が並ぶとアメリーがカメラを構える。
アメリー「はい、チーズ!」
カメラの撮影音がすると撮影された人たちはバラバラになりそれぞれの仕事を始めた。
機体はマーキングを白いペンキで塗り潰すとトラクターに引っ張られてペリーヌの屋敷へと運ばれていった。

第2話：戦争の惨禍

翌日、リーネとレート、それに執事のジャン・ポールは港に来ていた。
レートはＲＥＡＦの軍服からワイシャツとサスペンダーで吊ったＲＥＡＦの軍服のズボンを着てボルサリーノの中折れ帽を被っていた。
レート「それなりに復旧はしているんだな。」
リーネ「はい、この辺りは連合軍の重要補給拠点の一つとされてかなり早い段階で復旧されたんです。」
３人はジープに牽引されたトレーラーに港湾労働者が積荷を乗せる作業を少し離れたところから見ていた。
すると遠くから物音がして振り向く。
リーネ「ん？」
レート「なんだ？」
すると通りの角から少年と数人の労働者、それにＭＰが走ってきた。
労働者Ａ「止まれクソガキ！」
労働者Ｂ「捕まえて舌引っこ抜くぞ！」
すると少年が転び何かの瓶を放り投げる。
リーネ「大変！」
レート「何かあったのか？解熱剤？」
レートは転がってきた茶色い小瓶を手に取り確認する。
少年「返せよ！俺のだ！」
レート「え？」
すると労働者とＭＰが追い付いてきた。
労働者Ｃ「よう、リネットさんじゃねえか。」
リーネ「えっと確か港湾労働者組合の…」
追いかけていたのはパ・ド・カレー港の港湾労働者組合の組員とＭＰだった。
この少年が港で薬を盗もうとして労働者組合の組員がＭＰを呼ん

で大捕り物を演じていたのだ。
追いかけていた労働者の中の小太りで一番背の低い労働者がリーネに声をかける。
するとその隣に立つ長身の男を見る。
労働者C「そっちは見ない顔だな」
レート「ユニオ・ヴァレリオ・レートだ」
労働者C「よろしく。俺達は港湾労働者組合のもんだ」
レートと労働者が握手する。
それを見て少年が驚く。
少年「え！兄ちゃんたち何もんだ!?」

少しして、少年と3人は市内の中でも治安の比較的悪い地域に来ていた。
この地域はホームレスや難民は港湾労働者や連合軍に雇用されることで殆ど消えたが未だ主に孤児が残っていた。
こういった孤児は戸籍もなければ教育も受けていないため非常に扱い難い上に犯罪組織等の温床になる可能性があることから当局も排除を検討していた。
そしてその孤児たちの家の中の一つでは小さい女児が熱で苦しんでいた。
少年「しっかりしろ、ローズ。薬持って来たぞ」
リーネは少女の額に手を当て驚いた。
リーネ「凄い熱！ジャン・ポールさん！」
ジャン・ポール「はい」
ジャン・ポールが返事をするとすぐにジープを回してきた。
ジャン・ポール「どうぞ、こちらに」
ジャン・ポールが来るとリーネは少女を抱えてジープに乗り込む。
少年「お、おい、ほんとに助けてくれるんだろうな？」
レート「ああ、私だって昨日頭の怪我を手当てしてもらったからな。」
少年の不安にレートが答える。

帽子で見えにくいが隙間からは包帯が見えていた。

その頃屋敷ではペリーヌが書類を確認していた。
ペリーヌ「エンジンはＤＢ６０３だからどうにかなりそうですけどプロペラをどうすればいいのかしら…
　プロペラを直しても内部機構が損傷しているようですし…」
ペリーヌはレートが一晩で確認した機体の損傷個所のレポートを見ていた。
なぜかペリーヌはベルトロのレストアに積極的だった。
アメリー「ペリーヌさん、熱心に読んでますね。
　どうしたんですか？」
その様子を不思議に思ったアメリーがペリーヌに聞く。
ペリーヌ「え、ええ。
　レートさんのお願いですからかなえて差し上げようと思って。
　あの人の為に何かしたいと思ったの」
アメリー「そうなんですか」
二人が喋っていると突然ドアが開きジャン・ポールと少女を抱えたリーネ、そしてレートと少年が入ってきた。
リーネ「ペリーヌさん！」
ペリーヌ「どうしました？」
リーネは駆け寄ってきたペリーヌに少女を見せる。
リーネ「この子、熱が…」
ペリーヌ「急いだほうがいいわね。
　ジャン・ポール、お医者様と客間の用意を」
ジャン・ポール「かしこまりました。」
ペリーヌ「アメリーさん、お湯を沸かして」
アメリー「分かりました」
ペリーヌはすぐにアメリーとジャン・ポールに指示を出す。
そしてすぐに二人は動き出した。

少年「なんだ?ここ」

ペリーヌ「どうですか?先生」
医者「栄養失調で衰弱したところに肺炎になりかけたようですな。
　栄養をしっかり摂ってこのまま数日安静にしていれば大丈夫です」
しばらくして、少女を診察していた医者がそう診断した。
それを聞いて険しい顔をしていた少年が笑顔になる。
リーネ「よかった…」
レート「いやあ、大事にならずに済んでよかった。」
ペリーヌ「ありがとうございます、助かりましたわ。」
ペリーヌが感謝を述べると医者は謙遜する。
医者「いえいえ、助かっているのはこちらです。
　この器具も薬もペリーヌ様から頂いたものですから」
少年「なあ、あの姉ちゃん偉いのか?」
そのやり取りを聞いて少年が聞いた。
そしてリーネが説明する。
リーネ「ペリーヌさんはここの領主さんでこの辺りの一番偉い人だよ。」
少年「え!一番!スッゲェ…」
アメリー「確か正式に連合軍からカレーのコミューンの行政司令部の民生責任者に任命されてたような…」
レート「それは初耳だな」
ペリーヌは連合軍からカレー行政司令部民生責任者に任命されていた。
　そもそも連合軍の軍行政司令部は一定レベルの行政サービスをガリア政府に代行して提供するがその一定レベルとはあくまで戸籍等の役所仕事、年金・補助金・社会保険等の給付、連合軍の輸送に関するインフラ整備のみであり生活物資等の配給に関しては民生責任者

に丸投げという形をしていた。
さらに言えば連合軍はそもそも軍であるため行政サービスを行うこと自体を嫌っていた。
そのためペリーヌはカレーの民生責任者として連合軍からの物資の払い下げと配給の管理を担っていた。
医者「では、私はこれで」
その間に医者は荷物を纏めると部屋から出て行った。
すると少年がペリーヌに言った。
少年「金なんかねえぞ」
ペリーヌ「大丈夫よ、落ち着くまで面倒見てあげますわ」
少年「ほんとか！メガネ」
ペリーヌ「ぐ…口が悪い子ね」
少年の言葉にペリーヌは顔をしかめた。

少年「ぺっ！まっず！なんだこりゃ！」
少年が飲んだハーブティーを吐き出す。
その横でレートも微妙な表情をする。
レート「あんまり美味いものでもないな…」
リーネ「カモミールティーは体にいいんだよ」
レート「私はどちらかと言えばコーヒー派かな…」
リーネの説明にレートは苦笑いする。
するとペリーヌが聞いた。
ペリーヌ「ところであなた、ご両親は？どこから来たの？」
少年「親なんていねえ、疎開先から抜け出してきたんだ」
少年たちは疎開先から抜け出してパ・ド・カレーまで来たのだ。
アメリー「ああ…」
リーネ「それで、どこに行こうとしてたの？」
少年「家に帰るんだ。
アルンヘムのホルト通り」
ペリーヌ「アルンヘム？最激戦地じゃない」

レート「今朝の新聞にもアルンヘム周辺の戦闘が書かれてたな。
　リベリオン軍第４４２歩兵師団が左翼からアルンヘムを圧迫しつつカールスラント軍第２０義勇擲弾兵師団が正面攻撃を仕掛け背後にブリタニア軍第７機甲師団が右翼より迂回して進出中だったっけ？」
　レートがアルンヘムと聞いて新聞に載っていた状況を言う。
　アルンヘムは現在ネーデルラント方面の最激戦地であった。
　アルンヘムはネーデルライン川にかかる橋のある街でありこの地域のチョークポイント、そして唯一の未だ完全に確保できていないライン川に架かる橋を有した街であった。
　前線は既に沿岸部と南部はカールスラント国境まで到達し一部は既に沿岸部から侵入していたが中央部はアルンヘムを先端とするアルンヘム～ズトフェン～バートベントハイムまでの地域が突出していた。
　そのため連合軍はこの地域を何としても奪取しなければならずその中でもアルンヘムは特に激しい戦闘が続いていた。
　少年「取りに行かなくちゃなんない大事なものがあるんだよ。
　　ローズと約束したんだ」
　ペリーヌ「はぁ…」
　少年の言葉を聞いてペリーヌはため息をついた。
　ペリーヌ「戦闘はあと2週間ほどで終わる予定ですからその後なら連れて行ってあげますわ。
　　それまでここに泊まっていいわよ」
　少年「ほんとか！嘘じゃないだろな！」
　少年が喜ぶがペリーヌは少年の言葉に顔をしかめる。
　ペリーヌ「疑い深い子ね…」
　リーネ「疎開先にはこちらから連絡しておきます」
　少年「約束だぞ！」
　すると突然少年の頭から小さな虫のようなもの、ノミが飛び出しペリーヌのティーカップを持っていた手に飛びついた。
　ペリーヌ「ひゃ！ひっ…ノミ！」

ペリーヌのティーカップを持っていた手が震え始める。
そして次の瞬間、レートが少年を掴む。
少年「おい！何すんだよ！」
レート「何ってお前を一旦清潔にするんだよ！
　病人に伝染病うつす気か!?」
レートは少年を引っ張って庭に連れ出すと庭でＤＤＴを吹き付ける。
少年「ぺ！何するんだよ！」
レート「別に嫌ならやらなくてもいいぞ。
　最悪妹さんがもっと質の悪い病気になって死ぬが」
少年「う、それは…」
少年の抵抗はレートの言った正論に黙る。
レートは少年に入念にＤＤＴを吹き付ける。
ＤＤＴは１８７３年にオーストリアの科学者が合成に成功したジクロロジフェニルトリクロロエタン（正確には4，4，―（2，2，2―トリクロロエタン―1，1―ジイル）ビス（クロロベンゼン）が科学的な正確な名前）である。
だがこの物質は殺虫効果が１９３９年にスイスのパウル・ヘルマン・ミュラー博士が発見する（この発見でミュラー博士は４８年のノーベル生理学・医学賞を受賞）まで放置され、更にこの物質が大々的に使われるようになったのも第二次世界大戦中からであった。
　というのも第二次世界大戦が始まったことにより当時最も普及していた除虫材の除虫菊の最大の輸出国の一つである日本から輸入できなくなったアメリカがこの物質に目をつけ大戦中より大量に使用され始めた。
　だが初めはこの「少量で十分な効果を発揮し人体や動物に対して影響のない」と思われていた物質もその後の研究で環境に極めて有害であることが判明、現代では多くの先進国で使用禁止にされている劇薬であった。
レート「よし、このぐらいでいいだろう。
　次はシャワーを浴びろ、正直言って臭い」

少年「ちぇ、分かったよ」
レートがＤＤＴを十分に吹き付けると少年にシャワーに行くように言う。
少年はしぶしぶレートと共にシャワーに向かう。
するとふとレートが少年に聞いた。
レート「そういえば、名前聞いてなかったな、名前は？」
ユリウス「…ユリウス」
レートにユリウスはボソッと答えた。
レート「そうか、私の父と同じ名前だな」
ユリウス「そうなのか？」
レート「ああ、私の父はジュリオ・レートだからな。
読み方は違うが綴りも由来も一緒だ」
ユリウスとレートの父親は名前が同じだった。
ドイツ語のユリウスはイタリア語のジュリオに対応する名前だった。

翌日、ネーデルラント、アルンヘムの南岸。
史実では後にマーケット・ガーデン作戦でこの街で抵抗した英空挺部隊の隊長の名前を取りジョン・フロスト橋と改名されたアルンヘムの鉄橋の南岸のたもとに第２０義勇擲弾兵師団司令部が設置されていた。
そこでは師団長フランツ・アウグスベルガー少将とアルンヘム攻略の主力部隊である第２１擲弾兵連隊連隊長となったパウル・マイトラ少佐が戦況を確認していた。
マイトラ「師団長、現在戦闘の焦点はここ、ホルト通りとソン通りです。
この通りを解放すれば何とか北へ向かう道が確保できます」
アウグスベルガー「そうか。
４年前もここに来たがその時より難しいか？
マイトラ「ええ、あの時は背後からの強襲だったので楽でしたが今

回は正面攻撃です。
援護もなければ陽動もない状況です。
我々の手持ちも少ないです、既に連隊の第Ⅰ大隊は戦力の3割が戦闘不能です。
何とか第Ⅱ、第Ⅲ大隊が支えてますがジリ貧です。
この状況では航空支援も砲撃も誤射の危険が高く不可能、重砲は瓦礫のせいで橋を渡すこともできません。
何とか北岸のここと、ここに各大隊の重迫撃砲中隊が120ミリ迫撃砲を据え付けました。」
マイトラが戦況を説明する。
状況はそれほど良くなかった。
4年に渡る荒廃により通りの大半が瓦礫で埋もれたため師団装備の重砲も対戦車砲も持ち込めず唯一何とか人力で120ミリ迫撃砲12門を持ち込んでいたがそれ以外はアルンヘム市街を戦う兵士達に火力支援を行える兵器は存在しなかった。
さらにはその迫撃砲も命中率が悪く誤射の危険も多いため信頼できるものでもなかった。
アウグスベルガー「ヘッツァーは?」
マイトラ「3回戦車猟兵大隊が投入しましたが視界が悪すぎて使い物になりません。
やはり何でもいいので戦車か突撃砲が必要です」
アウグスベルガーが師団の戦車猟兵大隊に配備されているこの師団唯一のまともな対戦車車両である1個中隊のヘッツァーの事を聞いたがヘッツァーはその視界の悪さから市街戦ではまともに使えず南岸で川岸まで出てきたネウロイを叩くか橋に展開して補給路の防衛に終始していた。
兎に角彼らは戦車が欲しかった。
戦車さえあればなんとかなりそうだった。
アウグスベルガー「はぁ、何とか司令部から1個戦車中隊と1個突撃戦車中隊をもぎ取った。
第217戦車中隊、装備はⅣ号戦車13両、そ

れと第２１９突撃戦車大隊第２中隊、装備はブルムベア１５両、今日パ・ド・カレー港に卸されて明後日追加の補給と共にナイメーヘンに向け輸送される。」

アウグスベルガーが朗報を伝える。

アウグスベルガーが何とか上層部からパ・ド・カレー港に卸されたばかりの２個中隊をもぎ取った。

この部隊はパ・ド・カレー港から港に隣接する鉄道に乗せられ現状最も前線に近い鉄道駅のナイメーヘンまで物資と共に運ばれた後アルンヘムに投入予定だった。

マイトラ「本当ですか!?ありがとうございます！」

アウグスベルガー「ああ、苦労したんだよ?大切に使えよ」

その朗報にマイトラが歓喜する。

だが同時にこの補給が厄介者も連れてきて騒動となることはまだ知る由もなかった。

第3話：ウィッチ嫌い

翌日、ペリーヌの屋敷の一角ではレートとペリーヌ、そしてユリウスがプロペラを外したベルトロのレストア中だった。
レートは脚立をベルトロのそばに立てその上に乗りながら左のエンジンカバーを開いて中のフィアットR．A．１０５０RC．５８テルシオーネエンジンを弄っていた。
レート「よし、左の点火プラグは大丈夫だ。
オイル漏れもない、エンジンオイルも入れたぞ。
とりあえず動かしてみるから離れろ！」
レートはテルシオーネエンジンの点検をすると見守っていたペリーヌとユリウスを離れさせる。
レートはカバーを閉め工具と脚立を片付けるとクランクをエンジンに突っ込み回し始めた。
レート「よーし、動けよエンジンちゃん」
咳きながら回しているとエンジンが少し咳き込むと動き始めた。
レート「よし！動いた！」
レートは動くと急いでコックピットに入り出力を調整すると暖機運転にする。
レシプロエンジンはジェットとは違い繊細で暖機運転をしなければエンジンはまともに動かず、1気筒単位で点火のタイミングを調整したりしなければならないものや高地ではエンジン出力が不安定になるエンジン（一般的に知られているのはセントーラスエンジン）まであった。
レートはしばらく暖機運転にして動かした後エンジンを切った。
レート「ふう、ペリーヌ、エンジンの損傷が点火プラグの破損だけでよかったよ。
もし壊れてたら大変だった」
コックピットから出たレートがペリーヌに話しかけた。
ペリーヌ「ええ、それ以外はどうなのですか？」
レート「操縦系統は異常なし、プロペラは可変ピッチのギアが３つ

破損して全部曲がってる。
ブレダＳＡＦＡＴは別に要らないから取り外していいだろう。
既に弾も抜いてるし。
後は主脚と灯火類のチェックだな。
多分いくつか割れてると思う」
レートがベルトロの現状を伝える。
プロペラの破損が深刻だったがそれ以外は特に問題はなかった。
せいぜい灯火類の破損程度であった。
ふとペリーヌはここであることに気が付いた。
ペリーヌ「レートさん、すごいですわね。
マニュアルも見ずに点検するなんて」
そうレートはここまで一度もマニュアルを見ていなかった。
そもそもマニュアル自体なかった。
レート「ああ、一応整備マニュアルも含めてこいつの書類は全部覚えてるからな。」
ペリーヌ「全部?!」
ユリウス「兄ちゃんスゲー!」
レートのマニュアル類全部を暗記しているという言葉にペリーヌとユリウスは驚いた。
レート「子供の頃に家庭教師から特殊な記憶法を教えられたからな。
そのおかげで士官学校とか授業と教科書とノートを丸暗記していたよ。
ん?」
レートは子供の頃に特殊な記憶法を教えられた結果天才的な記憶力を持っていた。
ふとレートは効きなれないエンジン音がするのに気が付き上を向くと飛行機雲があった。
レート「飛行機か?それにしても聞きなれないエンジン音だな」
ペリーヌ「いえ、ウィッチですわよ。

５０６部隊かしら？」

その飛行機雲はウィッチ、恐らく散々トラブルを起こしまくった上に軍政側からすれば面倒極まりなくしかも軍事的に全くもってよろしくない状況である第５０６統合戦闘航空団ノーブルウィッチーズだった。

それをペリーヌとレートは見あげていたが突如ユリウスが声を上げた。

ユリウス「この嘘つきウィッチめー！」

その声にペリーヌとレートは驚く。

ペリーヌ「ユリウス君？」

レート「どうした？」

二人は驚いてユリウスを見る。

ユリウス「あいつらが約束通り来たら、父さんは…」

するとユリウスは何が起きたかを話した。

要約するならばアルンヘムから逃げる時に父親たちが自警団として武装、抵抗したため全滅したという。

当たり前だが民間人の武装、ましてやスイスやかつての東ドイツの労働者階級戦闘団のような国民皆兵だったり民兵組織、中国やアラブの軍閥とは違い民間人が武器を持った程度の装備ではネウロイどころか史実でも蟷螂の斧だった。

ユリウスの話が終わった時、レートはどこか悲しげな表情をしていたことにペリーヌは気が付いた。

その日の夜、ペリーヌの部屋でペリーヌはリーネとアメリーに昼間の話をしていた。

リーネ「そんなことが…」

ペリーヌ「ユリウス君はウィッチが自分達を見捨てたと思ってるのよ。

アルンヘムに向かった部隊は壊滅して救出に行けなかったのよ…」

アルンヘムはライン川沿いの重要拠点だったため戦略的なチョークポイントだった。

だが当時のネーデルラント軍は弱小でありその上当時の軍上層部は揃いも揃って無能であり当時まだ影響力の少なかったボック達がネーデルラントでの堤防を決壊させて足止めさせる策とガリア北部における機動防御戦を要請したにも関わらずそれを無視した結果４０年に西部戦線が崩壊した。

ボックの策は最もでありネーデルラントとベルギカは狭いため大規模な部隊の行動はできず、その上地形も複雑で軍も弱小であるため決戦の場とするには不適切だった。

そのため彼は決戦の場をガリアの平原としベルギカ、ネーデルラント方面は側面防御と支援に徹することで敵の主力を戦車部隊でもって殲滅、そのまま一気にライン川西岸を制圧する案を立てたがこの案は当時の連合軍が「ネーデルラント・ベルギカ方面への主力部隊の投入」と「アルデンヌ地域からの兵力の抽出」、「予備装甲戦力の大半をアルザス・ロレーヌかベルギカ・ネーデルラントに投入」そして何より「ネーデルラント方面からの反攻」という無為無策を断行した結果大失敗、主力部隊が壊滅という最悪の結果を招いた。

その結果ボックの案は崩れ去り前線が崩壊した。

これ以降ボック達などは連合軍の上層部に対して幻滅し彼らの排除を開始ししたのだ。

リーネ「でもユリウス君の気持ちを考えたら仕方ないよ…」

アメリー「私達がウィッチだとは言えないですね…」

３人がウィッチだとはとても言える状況ではなかった。

するとふとペリーヌが聞いた。

ペリーヌ「レートさんは？」

アメリー「多分バルコニーだと思います」

ペリーヌ「そう、ありがとう」

アメリーが答えた後二人が出ていくとペリーヌはバルコニーに向かった。

そこではレートが手摺にもたれながら夜空を見ていた。

ペリーヌ「何か見えますの？」
レート「ペリーヌ…そうだな、デネブとアルタイルとベガの三角形とかかな？
　あんまり星座の事は詳しくないんだ」
ペリーヌに声をかけられてレートは振り向いた。
ペリーヌはレートの横に並ぶと話しかけた。
ペリーヌ「レートさん、ユリウス君の事どう思う？」
レート「どう思う？とは？」
ペリーヌ「あの時の表情、思い当たる事があるのかしら？」
ペリーヌが聞くとレートは表情を変えた。
ペリーヌ「図星のようね、あまり詮索はしないわ。
　きっとあなたもあの子のような経験をしたのね」
レート「ああしたよ。
　祖国の名誉の為に故郷の為に戦い、同じイタリア人同士でイタリアの地で殺し合い、同じイタリア人に追われ、そしてイタリアを、愛する故郷を追われた。
　全ては１９４３年９月７日に始まった。」
するとレートは祖国イタリアでの１９４３年９月７日から始まったイタリア史上最悪の殺し合いの話を始めた。
レート「その日突如、祖国が連合軍に降伏した。
　突然だ、なんの兆候もない、突然今まで敵だった奴らに武器を捨てて投降しろと言ったんだ。
　訳が分からなかった。
　その上その２か月前にはドゥーチェが逮捕されてた。
　私はその日チヴィタヴェッキアでサルデーニャ島に向かう方法を探していたんだが突然降伏しろと言ってきたんだ。
　あまりにも突然で誰も、一緒にいた陸軍将校も海軍将校もカラビニエリも誰も何も分からなかった。」
　１９４３年９月７日、突然アイゼンハワー連合軍総司令官はイタリア王国の降伏を公表した。
それは突然、特に何も聞いていない上に未だ本土に連合軍が僅かし

か上陸しておらず未だ無傷の兵士が１００万もあったイタリア軍にとっては突然すぎて理解できず各地で大混乱が発生した。

それに輪をかけたのがムッソリーニの後任の首相だったピエトロ・バドリオ元帥が出した「連合軍に降伏しろ」と「第三者の攻撃に反撃せよ」という相反した命令、想定より速いドイツ軍によるイタリア本土の占領、更にはドイツによる捕縛を避けるため王家と政府が南部に逃げた事、何より前線にいた兵士達にとっては文句があるとはいえ昨日まで味方であったドイツ軍に銃を向けることなどできず、またあまりにも早い降伏であり多くの兵士達には負けそうだからという理由での降伏に他ならなかった。

レート「そして私はやってきたドイツ軍に捕虜として連行された後、ドゥーチェが率いる新政権の軍に参加した。

それがＲｅｐｕｂｂｌｉｃａ Ｓｏｃｉａｌｅ Ｉｔａｌｉａｎａ、イタリア社会共和国だ。

そこで私は親友のアドリアーノがいた第Ｉ戦闘航空群アッソ・ディ・バストーニに参加した。」

そして降伏後、連合軍に降伏しなかった者の一部はドイツ軍に協力し始めた。

更にドイツ軍は幽閉されていたムッソリーニを救出しイタリアに新政権を作った、それがイタリア社会共和国、通称ＲＳＩだった。

そしてその軍には多くのイタリア人が馳せ参じた。

代表的なものでは〝リビアの屠殺者〟ロドルフォ・グラツィアーニ、名門貴族家出身のＲＳＩの代表的人物ユニオ・ヴァレリオ・シピオーネ・ボルゲーゼ、イタリア軍のトップエースの一人アドリアーノ・ヴィスコンティなどがいた。

彼らの合言葉は「イタリアの名誉の為に」、不名誉な降伏に対して名誉ある継戦を主張した。

一方南部に脱出した王国と連合軍に降伏したイタリア軍の一部はそこから連合軍側のイタリア軍、イタリア共同交戦軍を設立し連合軍と共に戦い始めた。

更に各地では連合軍側によってパルチザンが次々と生まれその数

は終戦時には２０万人にもなったという。
彼らＲＳＩと共同交戦軍はイタリアを舞台に激しい戦闘を繰り広げた。
そして時には同胞同士で殺しあうという悲劇を繰り広げた。
レート「そしてまた連合軍と戦い始め、一旦陸戦部隊の第１突撃大隊フォルリに移動したこともあったが終戦まで戦った。
戦争が終わった時、私達は全員パルチザンに追われた。
親友のアドリアーノは副官と共に目の前でパルチザンに殺害され、その後自分達も暴行と拷問を受け命からがら逃げだして故郷を目指したが故郷では家族全員がパルチザンに処刑されてた。
そしてまたパルチザンに捕まり暴行され、拷問され、処刑直前にたまたま通りがかった英軍に救出されて助かった。」
終戦後、ＲＳＩの将兵はパルチザンによる猛烈なファシスト狩りの嵐に巻き込まれた。
パルチザンはＲＳＩの将兵や関係者を見つけ次第処刑していった。
その数は戦中のＲＳＩ将兵の戦死者の数倍とも言われ、特にエミリア・ロマーニャ州では激しく死の三角地帯とも呼ばれた。
そしてレートの故郷はその死の三角地帯のど真ん中に存在した。
レートの家族はパルチザンによって全員処刑され、レートも更なる暴行を受け処刑される直前に偶々通りがかった英軍部隊に救出されたのだった。
ペリーヌ「そんなことが…」
レート「ああ。そのせいで腕は肩まで回らない、時々悪夢も見る。
家族も親友も祖国も故郷も失い何度飛び降りようと思ったか…」
レートはそう呟いて嘆く。
その言葉にペリーヌはただならぬ物を感じた。
するとペリーヌはレートの手を取った。
ペリーヌ「レートさん、何かあれば私を頼ってください。
力になりますわ」
レート「ありがとう、ペリーヌ」

レートはペリーヌに微笑んだ。

翌日、屋敷のそばに止められたルノーＡＨＮトラックのそばではレートとアメリーがジャガイモが詰められた木箱をＡＨＮトラックに載せていた。

アメリー「よいしょ」

レート「はいっと」

アメリー「ありがとうございます」

レート「いいよ、ベルトロのレストアもパーツがないから進められないから無駄飯食いにはなりたくないからな。」

ベルトロのレストアがパーツ不足で進められないためレートはアメリーの作業を手伝っていた。

ユリウス「なんだよこれ！」

レート「ユリウス？どうした？」

するとユリウスの声がして二人は振り向いた。

ユリウスは箱一杯に詰められたジャガイモを見ていた。

ユリウス「食い物沢山あるじゃねえか、独り占めかよあのクソメガネ！」

レート「この芋は食用じゃないぞ」

ユリウスは箱一杯のジャガイモを見て怒るがそれをレートが諫める。

ユリウス「じゃあなんだよ」

レート「種芋だよ。これからこれを農家に配るんだ。

ジャガイモは栄養の少ない土地でも育つし栄養も豊富だからな」

この芋は食用ではなく作物用の種芋だった。

するとアメリーが説明した。

アメリー「ペリーヌさんは自分で稼いだお金を全部つぎ込んでまず領民の暮らしを復旧させようとしているんです。」

ユリウス「メガネが…でも稼いでるって言ったって彼奴何やってんだよ」

アメリー「そ、それは色々です…」
ユリウス「色々？ふん」
ユリウスはアメリーの説明に不機嫌になりながら離れる。
ユリウスは離れると傍の修理中の建物の足場を蹴る。
すると物音がし始めた。
レート「ん？」
アメリー「危ない！」
突然アメリーが叫ぶとユリウスは上を見る。
ユリウス「ん？うわああ！」
すると上の足場に置かれていた煉瓦が崩れ落ちてきた。
次の瞬間、煉瓦は地面に落ちるがユリウスは無傷だった。
目を開けると犬の耳を生やしたレートがユリウスを押し倒していた。
レート「うっ…ユリウス、大丈夫か？
怪我は？」
レートはユリウスの方を見るがユリウスはレートを驚いたように見ていた。
レート「ど、どうした？ん？なんで私は無傷なんだ？」
アメリー「レートさん！」
レート「アメリー、私の身に何が…？は？これは何だ…？」
するとレートは煉瓦の真下にいたはずの自分が無傷な事に気が付いた。
レートは驚きながら駆け寄ってきたアメリーに聞いた。
そして自分の頭に生えた耳に気が付いた。
アメリー「まさか…レートさんが…」
ユリウス「ウィッチだったのか…」
二人はレートを驚いたように見る。
すると続いてペリーヌとリーネもやってきた。
ペリーヌ「何事です？え？レートさん…？」
やってきたペリーヌはレートに生えた耳に驚く。
ユリウス「お前ら…お前ら全員ウィッチだったんだなー！」

レート「待て！ユリウス！誤解だ！」
ユリウスはそう叫ぶと走ってどこかに行ってしまった。
レートはユリウスを引き留めようとするが走り去ってしまった。

それから少しして、ペリーヌの屋敷から1キロほど離れたところにパ・ド・カレーの鉄道操車場があった。
ユリウスはそこに来ていた。
鉄道職員「早く3番線に機関車を回せ！」
将校「まだかかるのか！早くしろ！今日中にアルンヘムに運ばなきゃらないんだ！」
ユリウスの傍で鉄道職員にカールスラント陸軍の軍服を着て左腕に黒と白と水色をベースに3頭のライオンが描かれたシールドをつけた将校が怒鳴る。
傍にはトラックと戦車が乗った30台近い平積み貨車とドラム缶や箱が積まれた無蓋貨車、対空機関砲が積まれた貨車、兵士たちが乗った客車が連結されていた。
ユリウス（アルンヘム！）
ユリウスは将校のアルンヘムという言葉に反応すると隙を見計らって傍にあったスチュードベーカーUS6U7トラックの荷台に潜り込んだ。
将校も鉄道職員も鉄道を守る鉄道警察もそんなことを知らず彼らは列車にガリア国鉄240P型蒸気機関車とカールスラント国鉄52型機関車を繋げるとアルンヘム手前のアイントホーフェンに出発した。

第４話：プライベート・ユリウス

ユリウスが出て行ってしばらくして。
三人は昼食を摂っていた。
だが三人とも浮かない表情をしていた。
ペリーヌ「いたずら坊主がいないと静かでいいですわね」
ペリーヌが暗い二人の表情を見て言う。
リーネ「私達がウィッチだから一緒に食べたくないのかな…」
ペリーヌ「どうせおなかがすいたら食べに来ますわよ」
レート「そうだといいが…どうも嫌な予感がするんだ。
　気のせいかもしれないが」
するとレートが嫌な予感がするという。
そしてその予感は不幸にも当たっていた。
ドアが開く音がするとローズを抱えたアメリーが入ってきて開口一番に叫んだ。
アメリー「ユリウス君がいません！」
ローズ「お兄ちゃんどこ行ったの!?」
二人の言葉に三人とも驚いた。
ペリーヌ「え？」
リーネ「いない？」
レート「近所も探したのか？」
アメリー「あちこち探したんですが…」
アメリーが近所も含めてあちこち探したが見つからなかった。
レート「そういえば、今日近くの鉄道操車場からアイントホーフェン行きの補給列車が出るよな？」
するとレートが近くの鉄道操車場からアイントホーフェン行きの補給列車が出ることを思い出した。
アイントホーフェンはアルンヘムの最寄り駅でありアイントホーフェンで降ろされた車両や物資はそこからほとんどがアルンヘム近辺で戦う部隊の補給として送られていた。
ペリーヌ「まさかその列車に！」

リーネ「家に向かったのかも！」
レート「急いで列車を…」
ペリーヌ「無理よ！」
レートは鉄道を止めようというがペリーヌが即否定する。
ペリーヌ「補給列車の運行規則で人身事故と線路の破壊、運行上のトラブル以外の理由では当該地区の鉄道責任者の許可が無いと止められないのよ！」
レート「じゃあ…」
ゲリラによる鉄道網への破壊工作に備えた結果鉄道を止めることはペリーヌの権限では不可能であった。
ペリーヌ「急いでブリュッセルとアイントホーフェンに連絡を！」
ペリーヌは急いでブリュッセルとアイントホーフェンに連絡した。
鉄道職員『はい、こちらブリュッセル中央駅』
ペリーヌ「カレー地区民生責任者のクロステルマン中尉です。
先ほどカレーを出発した補給列車の中に有効なパスを持っていない者が乗っている可能性があります。
至急調べてください」
ペリーヌはブリュッセル中央駅の鉄道職員に補給列車の調査を依頼した。
鉄道職員「はいはい、分かりましたよ、着いたら調べますから連絡を待ってください」
鉄道職員はやる気のない声でペリーヌに応対した。

その一時間半後、列車はブリュッセル中央駅に到着した。
鉄道職員「はぁ…この中に有効なパスを持っていない奴がいるだぁ？
たく、３０両以上あるのにどこを探せばいいのやら」
鉄道職員はため息をつきながら適当に車両を探し始める。
一方そのそばの貨車に乗ったトラックではユリウスが列車が止まったことに気が付いた。
ユリウス「アルンヘムに着いたのか？」

ユリウスは荷台から頭を出して外を見る。
そしてそのそばでユリウスを探していた職員と目が合った。
ユリウス「あ」
鉄道職員「あ」
一瞬互いに動きが止まると職員が叫んだ。
鉄道職員「いたぞ！不審者だ！」
ユリウス「やっべ！」
職員は応援と鉄道警察を呼び貨車に飛び乗ってユリウスを捕まえようとする。
逆にユリウスは隣の貨車へ飛び移り逃げる。
それを職員が追いかけるが身軽なユリウスをあっという間に見失ってしまった。
すると客車から例のシールドをつけた将校が降りてきて貨車で辺りを探す職員に怒鳴る。
将校「おい！不審人物が乗っているからここで止めるとはどういうつもりだ！」
鉄道職員「いえ、この列車に乗っている可能性があると…」
将校「これは軍用補給列車だ！
　軍人以外誰が乗ってるって言うんだ！」
鉄道職員「しかし…」
将校の剣幕に鉄道職員は怯える。
更に将校は大声で職員を脅す。
将校「今日中につかないならば遅延の責任は貴様にあるぞ！」
鉄道職員「わ、分かりました…
　アイントホーフェンに連絡しますからそこで再度チェックをします…」
将校の脅しに屈して職員は列車を行かせることにした。
――――――――――――――――
ペリーヌ「え!?見つけたものの見失った？
鉄道職員『は、はい…時間がなかったのと身軽だったので…」
ペリーヌ「そ、そう…」

列車が出発すると職員はペリーヌに電話して結果を伝える。
ペリーヌは電話を切ると決断した。
ペリーヌ「私達が直接向かうしかありませんわね。」
ローズ「私も行く！」
ペリーヌ「お兄ちゃんは私達が連れ戻すからいい子で待っていてね。
　アメリーさん、サン・トロンのミーナ隊長の元へ状況報告に向かって」
アメリー「はい！」
ペリーヌ「リーネさんは私と出撃準備」
ペリーヌは決断を下すとすぐにリーネとアメリーに指示する。
だがリーネが指摘する。
リーネ「でもユニットも武器も全部アイントホーフェンに送っちゃいましたよ」
レート「唯一あるのは私のウェブリーリボルバーとベルトロに積んでいたブレダＳＡＦＡＴ機関銃だけだ。」
ペリーヌ「は…そうでしたわ…」
ここには武器もユニットも殆どなかった。
唯一あったのがレートが持っていたウェブリーリボルバーとベルトロに積んでいたブレダＳＡＦＡＴ機関銃だけだった。
ウェブリーリボルバーはリボルバー拳銃、ブレダＳＡＦＡＴに至っては航空機用の機銃であり弾も一般的ではない１２．７ミリ×８１ミリＳＲ弾で弾も多くはなかった。
ジャン・ポール「お嬢様」
だが彼女達にはまだ武器はあった。
ジャン・ポールが部屋にあったある本棚を動かす、するとその後ろからブレン軽機関銃、ボーイズ対戦車ライフル、そしてＰＩＡＴが出てきた。
ジャン・ポール「いざという時の為に用意しておきました。
　手入れは十分にしてあります」
リーネ「はぁ…」

レート「初めて見たよ…」
ペリーヌ「素晴らしいわ。ジャン・ポール」
その様にリーネは驚きレートは呆れペリーヌはジャン・ポールの手腕を讃える。
すぐに準備を整えるとリーネとペリーヌは外に置かれたジープに乗り込んでアルンヘムに向かおうとするとレートが引き留めた。
レート「待ってくれ、ペリーヌ」
ペリーヌ「レートさん…大丈夫、夕飯までには戻ってきますから」
レート「そうじゃない、私も連れて行ってくれ」
ペリーヌ「え!?」
ペリーヌはレートの言葉に驚いた。
レートはまだ頭部の傷が治っていない上に武器もリボルバーしかなかった。
ペリーヌ「む、無茶ですわよ！怪我も治ってないし大体武器も…」
レート「こうなったのは私の責任だ、私が落とし前をつけなければならないんだ」
ペリーヌは何とか退かせようとするがレートは頑として譲らない。
それにペリーヌは誰かを重ねたのか溜息をつくと答えた。
ペリーヌ「はぁ、いいですわよ。
ただし、条件がありますわ」
レート「なんだ？」
ペリーヌ「〝絶対に〟死なない事。
死んだら地獄の果てまで追いかけまわしますわよ」
レート「ああ、分かった」
レートは返事をするとジープの後部座席に乗り込んだ。

アイントホーフェンはアルンヘムの手前にあるネーデルラントの都市である。
ネーデルラント第５位の大都市で史実ではオランダの有名な電機メーカーでホロコーストに立ち向かった事でも知られるフィリップ

ス社やトラックメーカーＤＡＦが創業したオランダ最大級の工業都市であった。
そのためこの街は交通網の中心でもあり激戦が続くアルンヘム周辺部隊への補給はすべて一旦この街の飛行場か鉄道駅に集められそこから各部隊にトラックで運ばれていた。
この日もまたパ・ド・カレー発ブリュッセル経由で大量の戦車とトラック、兵士を乗せた補給列車がアイントホーフェン駅に到着した。
列車が到着すると待っていた兵士や労働者が一大ずつトラックや戦車を下ろし始めた。
ユリウス「着いたのか？」
そのトラックの一台の中にユリウスが乗ったものがあった。
ユリウスが乗っていたトラックには大量の木箱が積まれその箱には「危険」や「パンツァーファウスト」、「７．９２ミリモーゼル」、「９ミリクルツ」、「．３０トカレフ」、「９ミリパラベラム」、「．５０」、「Ｍ２４」などと書かれていた。
ユリウスはトラックの幌の隙間から外を見るがそこはアルンヘムではない事だけはすぐにわかると頭をひっこめた。
運転手「じゃあこいつだな。」
兵士「ああ、積荷は弾薬だ。
気をつけろよ」
その間にトラックの前では運転手がトラックに乗り込むと発進させアルンヘムに向かった。
１時間半程してトラックはアルンヘムに到着した。
その頃にはすっかり夕方になっていた。
ユリウス「やっと着いたか！」
ユリウスは幌の隙間から外を見てそこが見慣れたアルンヘムの南岸の橋の南岸だと気が付くとトラックから周りに気が付かれないように降りた。
周りには黒と水色と白のシールドをつけた兵士達が大勢いた。
ユリウスは気づかれないように物陰に隠れながら橋へと向かう。
だが橋には大勢の兵士がいた上に橋には数両のヘッツァーと装甲

車が展開し物資や兵士を乗せたトラックが行きかっていた。
ユリウス「チェ、どうすればいいんだよ」
橋を渡らなければ家に帰ることなどできない、そのためユリウスは頭を抱える。
すると日が落ちかけていることにユリウスは気が付いた。
それからしばらくすると日が落ち、辺りは一面真っ暗となった。
その上この日は新月、外の明かりはトラックのライト程度だった。
兵士A「悲しい歌だな…捨てられた女性が捨てた男の事を忘れられないって歌だ」
兵士B「ふーん」
橋の出入り口では二人の兵士がガリア語のレコードを聞きながら話していた。
兵士A「貴方を至るところに感じる　なぜなら貴方は私の心のなかにいるのだから
貴方を至るところに感じる　なぜなら、貴方は私の幸福であるから
私の周りにあるもの全て、
人生でさえ貴方なのだから
そんな感じの歌詞だ」
兵士B「フランス語は分からんがお前の声で立って来たぜ」
二人が話してる間にユリウスはその後ろを通って橋を渡る。
ユリウスは橋の端の歩道を走って渡った。
橋の上にいた兵士達は誰一人としてユリウスには気が付かなかった。

ユリウスが橋を渡ったその頃、橋の袂のトラックやテントが並んだ陣地に一台のジープが到着した。
Ｇｅｗ９８を持った憲兵がペリーヌのジープを止める。
憲兵「止まれ！何者だ！」
ペリーヌ「カレー地区民生責任者ペリーヌ・クロステルマン中尉以下３名です。

すぐに現場の責任者を呼んでください」
ペリーヌは身分証を見せて憲兵に伝えた。
憲兵は身分証を確認するとあるテントに走っていった。
そのテントの中では師団長のアウグスベルガーとマイトラ、それに参謀将校が会議中だった。
憲兵「失礼します、師団長に会わせてほしいというウィッチの士官他三名がパ・ド・カレーから来ています。
どうしますか？」
アウグスベルガー「正規の士官なら会った方がいいな。
この会議もあと１０分ぐらいで終わる、その時に夕食を食べながらだが会おう」
憲兵は士官たちに敬礼して報告する。
するとアウグスベルガーは返礼し腕時計を確認するとペリーヌ達と会うことを伝えた。
憲兵「は、了解しました」
憲兵は敬礼してテントから出るとペリーヌ達を司令部のテントの外に案内すると黒と水色と白のシールドをつけた兵士に引き継いだ。
そこで3人は待たされしばらくするとテントの中から声がした。
アウグスベルガー「入れ」
従兵「は、どうぞお入りください」
従兵が返事をしペリーヌ達をテント内に入れた。
テントの中ではテーブルの上に食事が並べられていた。
テントに入るとすぐにペリーヌ達は敬礼する。
ペリーヌ「カレー地区民生責任者クロステルマン中尉です。」
アウグスベルガー「うむ、師団長のアウグスベルガーだ。
単刀直入に聞こう、何をしに来た？」
アウグスベルガーは返礼するとペリーヌに凄みを効かせながら聞いた。
ペリーヌは冷静に答える。
ペリーヌ「アルンヘムに私が預かっていた少年が迷い込んだ可能性があります。

彼の捜索・救助の為来ました」
マイトラ「なんだと!ここに民間人が紛れ込んだのか!?」
ペリーヌの言葉にマイトラが驚き立ち上がる。
まさかこの最前線に軍の許可なく民間人が紛れ込むことなどありえないと考えていたからだった。
ペリーヌ「はい、ですので救出に来ました」
アウグスベルガー「事情はよく分かった。
我々もここで関係のないガキに死なれたら困る、ましてやここは激戦地だ。」
アウグスベルガーはペリーヌの事情を理解した。
そして判断を下した。
アウグスベルガー「いいだろう、マイトラ君、彼女たちの任務を支援する部隊を至急集めてくれ。
人選は君とその部下に任せる」
マイトラ「は、ならば第Ⅱ大隊第3中隊ヴィーレス大尉を推薦します。
彼はソ連軍上がりですが極めて優秀です。
人望も篤く彼の部下も優秀ぞろいです」
アウグスベルガーはユリウスを救助するため部隊を動員した。
マイトラは第Ⅱ大隊第3中隊のソ連軍上がりのベテラン士官のヴィーレス大尉とその部下を推薦する。
アウグスベルガー「いいだろう、至急第3中隊を呼び戻せ」
マイトラ「は、伝令を送れ」
第3中隊は橋の反対側にいた。
そのため急いでマイトラは伝令を送った。
伝令がツェンダップKS750に跨り出発する。
アウグスベルガー「さてと、第3中隊が来るまでは時間がある。
それで一つ聞きたい、貴様は何処の誰だ?」
伝令が出発するとアウグスベルガーはレートを見ながら聞いた。
レート「ユニオ・ヴァレリオ・レート、ただのロマーニャ人です」
アウグスベルガー「嘘つけ、正直に答えた方がいいぞ?」

レートが適当に答えるがそれにアウグスベルガーはアイコンタクトでレートの後ろにＭＰ３８とＭＰ４０を持った兵士を立たせる。
それを見てレートは両手を上げる。
レート「降参です。
ＲＥＡＦ、エジプト王国空軍第２飛行隊所属、元ＲＳＩ空軍第Ｉ戦闘航空群アッソ・ディ・バストーニ所属で元ＡＮＲ大尉です」
アウグスベルガー「参謀、今のをメモして上に伝えろ。
いいだろう。
一応そのことは上に伝えておく、ヴィーレス大尉が来るまでゆっくりしたまえ」
アウグスベルガーはレートの言葉を参謀にメモさせて上に伝えるよう命じた。

第５話：１９４５ネーデルラント戦線

３０分後、オーバーコートを着た将校が入ってきてマイトラとアウグスベルガーに敬礼する。
ヴィーレス「ヴィーレス大尉です」
マイトラ「来たか、ヴィーレス」
アウグスベルガー「早速だが君に新たな命令を伝える。
君の部隊より数人抽出しアルンヘム市内に迷い込んだ少年をクロステルマン中尉他と共に探し出して救出しろ。」
ヴィーレス「は」
マイトラとアウグスベルガーはヴィーレスに命令した。
命令を受けたヴィーレスは敬礼する。
ヴィーレス「では君たち、ついて来てくれ」
ヴィーレスはペリーヌ達についてくるように言う。
ヴィーレスはペリーヌ達を連れて外に出ると聞いた。
ヴィーレス「まず、君たち武器は？」
ペリーヌ「ブレンとボーイズがあります。
それがどうかしましたか？」
ヴィーレスが武器を持っているか聞きペリーヌがさも当たり前のようにブレンとボーイズ対戦車ライフルを持って来たと答える。
だがヴィーレスは顔をしかめる。
ヴィーレス「この先は市街戦だ。
ブレンのようなデカブツを振り回す気か？」
ペリーヌ「え、ええ。ブレンは破壊力がありますから問題ないのでは？」
レート「やめておけ、ブレンは取り回しが悪い。
ＭＰ４０かトンプソンサブマシンガンならいいだろう」
ヴィーレス「そうだ、彼の言う通りブレンやボーイズのようなデカブツはここでは取り回しが悪い。
短機関銃か突撃銃が丁度いい、そこに小火器の補充のトラックが来てる、そこから適当なのを拝借してこい」

ヴィーレスはリーネとペリーヌのボーイズやブレンが市街地戦では大きすぎて取り回しが悪い事を指摘し短機関銃か突撃銃を取ってくるように言う。
３人は適当なトラックの荷台を開ける、そこにはいくつかの木箱があった。
その中の一つをリーネとペリーヌは引っ張り出す。
リーネ「多分これですよね？」
ペリーヌ「ええ」
ヴィーレス「違うぞ、だがいいものを見つけたな」
その木箱がＭＰ４０であるかペリーヌとリーネには分からなかった、だがヴィーレスにはそれがＭＰ４０でもＳｔｇ４４でもないがいいものだった。
箱にはパンツァーファウスト６０と書かれていた。
レート「パンツァーファウストだ、こいつをジープに積むぞ」
ヴィーレス「ああ、とりあえず手当たり次第にトラックの荷物を確認しろ。
パンツァーファウストと弾薬と地雷と手榴弾を乗せれるだけ乗せろ」
レートとヴィーレスはそれを見るとジープに乗せる。
ペリーヌ「え？いいですか？」
ヴィーレス「ここでは物資は早い者勝ちだ。
ぼさっと立ってないで早く弾薬と地雷と手榴弾を探せ！」
ペリーヌが困惑するがヴィーレスが怒鳴る。
その間にもレートは他のトラックの荷台を開けて物資を取り出してジープに運んでいた。
リーネ「えっと、レートさん…それいいんですか？」
レート「こういうのは兵士に持っていくと喜ぶんだよ」
するとリーネはレートの抱える物資を見て微妙な表情をする。
レートが抱えていたのはコニャックのケースだった。
レートはそれをジープに乗せるとさも当然のように答えた。

元々陸戦部隊にもいたレートは前線の兵士が何を求めるかよくわかっていた。
リーネとペリーヌも手伝いそれからしばらくするとジープ一杯に弾薬と食料と地雷、パンツァーファウスト、手榴弾が積まれた。
またペリーヌは後方警備部隊が使用していたＭＰ４１、リーネは戦場から回収されたＳｔＧ４４を調達し装備した。
ヴィーレス「このぐらいあればいいだろう。
それじゃあ行こうか」
ペリーヌ「はい」
物資が山積みにされたジープを見てヴィーレスが満足したように言うとペリーヌとリーネとレートと共にジープに乗り込むと出発した。
そしてジープは橋を渡り市街に向かう。
その途中突然ペリーヌは頭に何かをかぶせられた。
ペリーヌ「きゃ！なんですの!?」
レート「あ、すまん。ヘルメットだ。
この先は危険だ、ヘルメットを着けといた方がいい」
驚いたペリーヌが振り返るとヘルメットを被りＭＰ４０の弾薬ポーチをつけヘルメットを被ったレートがペリーヌにヘルメットを被せたのだ。
陸戦においてヘルメットは重要である。
史実でもソ連軍がヘルメット着用者と非着用者の死傷率を比べたところ明らかにヘルメット着用者の方が少ない事が統計的に明らかにされているほどである。
ペリーヌ「ありがとうございますわ、レートさん」
レート「どういたしまして」
ジープは二人が話している間に負傷者や戦死者が山積みにされたトラックや橋から市街地を睨むヘッツァーとすれ違い北岸へと向かった。
――――――――――――――――
その頃市街地では瓦礫の中をなにかが動いていた。

兵士Ａ「ん？」
兵士Ｂ「どうした？」
それに近くで当直していたライフルを持った兵士が瓦礫の向こうに何かがいることに気が付く。
兵士Ａ「何かがいるような気がする」
兵士Ｂ「気のせいじゃないか？」
兵士Ａ「かもしれんが…」
兵士Ｂ「そんな事より早く寝よう。
そろそろ当直交代だ」
だが二人は全く気が付かなかった。
ユリウス「ふぅ、危なかったぜ…」
瓦礫の反対側にはユリウスがいた。
彼はトラックに紛れ込み、さらに隠れながら市街地に入りホルト通りの家を目指していたが瓦礫で元々の街並みはぐちゃぐちゃになりその上街灯もなく、新月で明かりといえば兵士達が持っている懐中電灯や焚火、自動車やオートバイのライト程度だった。
そのため道に迷っていた。
ユリウス「たく、ここ何処だよ。
瓦礫と兵士だらけじゃねえか」
瓦礫に隠れながら悪態をつく。
すると目の隅に破壊されたが兵士達のいる気配のない建物を見つけた。
ユリウス「ラッキー！」
その建物に向かってユリウスは走り建物の中に入った。
ユリウス「誰もいないみたいだな…今日はここで寝るか」
誰もいないことを確認するとソファの残骸に寝転がり眠り始めた。

ヴィーレス「次の角を右に曲がってすぐ左の建物で止めてくれ。
そこが中隊本部だ」
リーネ「はい」
その頃、ペリーヌ達は橋を渡り北岸に到着した。

北岸に到着するとヴィーレスの指示を受けながら中隊本部に到着した。
中隊本部は元は病院らしき建物だった。
「ヴィーレス大尉」
ヴィーレス「ヨギ、今すぐタミク、カメンスキ、アントンとコスティア、ソーレスタ、セイナス、ラーディックを集めろ、新しい任務だ。
それと、お客様と物資も持って来た」
ヨギ「は」
到着するとすぐに機関銃手らしきヨギという兵士が現れヴィーレスに敬礼する。
ヴィーレスも返礼すると中隊を集めるように命令した。
ヴィーレス「さあ、ついたぞ。
司令部は中だ、男しかいないし碌に片付けもしてないがな」
ペリーヌ「お邪魔します…」
ヨギが中に戻るとヴィーレスに続いてペリーヌ達も司令部に入った。
中はある程度片付けられていたが至る所に戦争の跡が残り、窓ガラスはすべて割れ、瓦礫が転がり屋根にもいくつもの穴が開いていた。
ペリーヌ「気味が悪いですわね…」
リーネ「幽霊でも出そうですね…」
ペリーヌとリーネは慣れない最前線の空気を気味悪がっていた。
一方レートはこういうものに慣れていたため大して気味悪がらなかった。
ヴィーレス「何をしている、こっちだ」
3人は中隊本部の入り口で立ち尽くしていたため先に行っていたヴィーレスが付いてくるように求める。
3人はヴィーレスについて奥に行くとある部屋に入った。
その部屋には無線機や地図が並び武器が乱雑に壁に立てかけられ、弾薬が部屋の隅に置かれていた。
部屋の中には数人の兵士がいた。

「ヴィーレス大尉」
ヴィーレス「お前たち、新しい任務だ」
入ると一斉にヴィーレスに全員が敬礼する。
兵士達の中には双子や迷彩ヤッケをつけたものなどがいた。
タミク「新しい任務とは？」
代表して最初にヴィーレスに声をかけたＰＰＳｈ４１の弾薬ポーチをつけたタミクがヴィーレスに聞いた。
ヴィーレス「簡単だ、この街に迷い込んだユリウスとかいう少年を探し出して救出することだ」
カメンスキ「つまり迷子探しじゃねぇか」
ヴィーレス「そうだカメンスキ、要約すればこの街で迷子を捜せという事だ」
ヴィーレスの任務を聞いてＳＶＴ―４０を持った狙撃手のカメンスキが悪態をつく。
この任務はいわば迷子探しだった。
ソーレスタ「大尉、この任務は我々がすべきことではありません。なぜそこまでする必要が？」
カメンスキ「ああソーレスタ、言う通りだ！
どうでもいいガキの為に戦う気なんてあるか！」
ＳｔＧ４４を傍に置いたソーレスタがヴィーレスに意見するとカメンスキも同調する。
その態度にペリーヌが怒る。
ペリーヌ「その言い方は何ですの！」
カメンスキ「あぁん？ガキは黙ってろ！
いいか俺達は毎日この祖国とも何の関係もない場所で何の関係もない連中にために戦ってるんだぞ！
俺達の祖国はエストニアだ！
ここでちゃんと戦ってるだけでも有難いと思え！このクソメガネ！」
セイナス「カメンスキ、その言い方はやめろ」
カメンスキの言に衛生兵のセイナスが諫める。

彼らにとって祖国エストニアでも何でもない場所で何の義理もない人の為に戦う彼らに突然全く関係のない任務を与えられれば不満があるのは当然だった。
ヴィーレス「私だって不満はあるが５０１の元ウィッチの御依頼ならば引き受けないわけにはいかないだろ」
ラーディック「５０１？ですか」
メガネをかけてＰＰＳｈ４１を持ち迷彩服を着たラーディックが聞き返す。
ヴィーレス「ああ、そこにいるクロステルマン中尉とビショップ曹長は元５０１だ」
アントン「５０１って…」
コスティア「あのよくニュースに出てたエリート部隊だろ…」
ヴィーレスの言葉に双子のアントンとコスティアが反応する。
陸軍部隊の二人にも５０１の名はよく知られていた。
タミク「お前ら、知らないのか？
俺達は去年ドーバー事件に出動したんだぞ」
ソーレスタ「ああ、その時はまだ第１１３旅団第３００バルチックライフル連隊エストニア大隊だったからな。
知らないのも無理はないだろう。
アントンとコスティアはあの時にはスオムスの第３エストニア義勇擲弾兵旅団所属だったからな」
元々第２０義勇擲弾兵師団はガリア解放後第１１３旅団を解隊しその中のエストニア大隊をスオムスやバルトランド、東部戦線各地にいたエストニア人部隊と合流させて編成したエストニア人師団だった。
タミクとソーレスタ、ヴィーレスはドーバーの一件の際、第３００バルチックライフル連隊エストニア大隊所属で反乱ブリタニア軍鎮圧にも出動していた。
ヴィーレス「あの時は我々の一方的な勝ちだったが。
ところで…」
するとヴィーレスがレートに目をやり話題を変える。

ヴィーレス「ところで貴様は何処の誰だ？」
レート「ユニオ・ヴァレリオ・レート、訳あってペリーヌのところでお世話になってるロマーニャ人ですが？」
ヴィーレス「嘘を言うな」
レートが答えるとヴィーレスはレートに持っていたトカレフＴＴ―３３拳銃を向けた。
ヴィーレス「普通の奴が軍用の最新型ウェブリーリボルバーとホルスター、それにロイヤルエアフォースのブーツとズボンとベルトを持っているわけがないだろう。
それにあんたからは我々と同じ匂いがプンプンするぞ」
レート「はぁ、降参だ。」
ヴィーレスが最新型のウェブリーリボルバー（単なる戦時量産型）とホルスター、ベルト、ズボンを持っている時点で只者ではないと感じていた。
その洞察力にレートは両手を上げて降参を示した。
レート「流石前線指揮官、洞察力に優れてる。
その通り、元はＲＳＩ、イタリア社会共和国空軍所属だった元エジプト王国空軍のパイロットですよ」
ヴィーレス「そうか、イタリア人か」
レートは正直に答えた。
それに対するヴィーレスの反応は薄かった。
ヴィーレス「我々としては信用できない人間を部隊に同行させたくないからな。
それじゃあ状況を説明しよう、そこに座れ」
ヴィーレスとしてはただレートの正体が知りたいだけでそれほど興味はなかった。
するとヴィーレスは部屋に置かれたテーブルに地図を広げペリーヌ達に状況を説明し始めた。
ヴィーレス「今我々がいるのがここ、広場の少し西にある官庁街のこの建物だ。
その少年は何処にいる可能性が高いんだ？」

ペリーヌ「恐らくホルト通りです」
「ホルト通り!?」
ヴィーレス「何とも面倒な所だなぁ…」
ヴィーレスが状況を説明しペリーヌにユリウスがいる可能性のある場所を伝えたがその答えに一同が驚き、ヴィーレスは頭を抱えたようだった。
ヴィーレス「ホルト通りはここ、鉄道線路の手前にある通りに接続する通りだ。
この通りを抑えると鉄道土手を抑える事ができる。
3回前にいた大隊はこの地区を押さえようとし、3回目で前にいた大隊が壊滅した。
場所はここから約1キロだ」
ヴィーレスがホルト通りの位置と状況を説明する。
ホルト通りは市内中心部を走る鉄道路線の傍にある通りの一つでこの通りは鉄道土手の手前にある通りの接続する通りだった。
この地区を押さえると鉄道土手をメインとした防衛線を築くことが可能だった。
だがネウロイの抵抗が激しくこの前にいた大隊は3回攻撃を行うも3回目で壊滅していた。
カメンスキ「なんで俺達がガキの為に死ななきゃならねえんだよ!」
ヴィーレス「カメンスキ、文句を言うな。
それで、我々は明日の明朝出発する。
出発後は北上、ホルト通りを目指す」
カメンスキが文句をつけるがヴィーレスが諫めペリーヌに作戦を伝えた。
だが内容にペリーヌは不安を感じた。
ペリーヌ「明日の明朝?今すぐは無理なんですの?」
ヴィーレス「無理だ、兵士達は今日も一日中戦って疲れ切っているんだ。
それに闇夜に下手に動けば同士討ちの危険性も高い、明

日の朝に動くのが一番だ」
ペリーヌ「わ、分かりました…」
ヴィーレスがペリーヌに夜は動けないと伝えた。
ヴィーレス「予定は伝えたぞ。
解散、明日に備えて寝ろ」
「了解！ヴィーレス大尉！」
ヴィーレスが解散を伝えると兵士達が敬礼して返事する。
ヴィーレス「君たちも早く寝ろ、明日は激戦になるぞ」
ペリーヌ「分かりました」
レート「そういえば、コニャックを土産に持って来たが飲む奴はいるか？」
ヴィーレスがペリーヌ達に寝るのを勧める。
それと同時にレートは兵士たちにコニャックを飲むかどうか聞いた。
カメンスキ「コニャック？飲むぜ。どこにあるんだ？」
ラーディック「私も飲みます」
ソーレスタ「気が利くじゃないか、レート」
レート「落ち着け、今から持ってくるから」
それを聞いて兵士達が次々と集まった。
レートは部屋から出ていくとジープに戻りコニャックを持ってきた。
レート「はい、コニャックだ」
「うぉおお!!」
コニャックの瓶を見ると兵士達から歓声が上がった。
ソーレスタ「一人一杯だけだ、各自何でもいいからコップでも何でも持って来い」
仕切り役のソーレスタが兵士達に言うと兵士達は各自拾ったコップや支給されたコップ、中には水筒の飲み口を開けたものまで持って来た。
その光景を見てペリーヌは呆れた。
ペリーヌ「何やってるかしら、この人たちは…

たかがお酒じゃない。お酒ごときで大騒ぎするとは」
レート「いや、酒だからな。前線の兵士にとって酒と飯と睡眠は唯一の娯楽だ」
ペリーヌにレートが説明する。
前線の兵士にとってアルコールは数少ない娯楽だった。
レートはそれぞれにコニャックを注ぐとどこからか3つのワイングラスを持ってくるとその中に注ぎペリーヌとリーネに渡す。
レート「ペリーヌ、一緒に飲もう」
ペリーヌ「え、ええ。ん?どうしましたの?」
するとペリーヌはレートの手を見てあることに気がついた。
ペリーヌ「震えてますわよ。」
レート「え?ああ、何故か橋を渡ってからこうなんだ。
気のせいか?」
レートの手が激しく震えていることに気がついた。
ペリーヌはレートの手を取ると震えを抑えようとする。
ペリーヌ「大丈夫ですか?」
レート「多分、大丈夫だ」
ペリーヌ「そう…」
レートはペリーヌに答えるがペリーヌはその答えに不安を感じた。
彼らは一杯のコニャックを飲み終えると各自瓦礫の中の寝床に潜り込んだ。

第６話：バトル・オブ・アルンヘム

翌朝

ペリーヌ「ん…ん？レートさん…？」

レート「ペリーヌ、起きろ、時間だ」

ペリーヌはレートに揺さぶられ起きた。

レートはＭＰ４０を持ち手榴弾とパンツァーファウストを持ちヘルメットには偽装網が付けられていた。

起こされたペリーヌとリーネは武器を持ち装備をつけヘルメットを被ると建物の外に出た。

外では持って来た物資からパンツァーファウストと地雷、手榴弾を取り出し各自に配っていた。

ソーレスタ「これがあんたらのパンツァーファウストと手榴弾、地雷だ」

リーネとペリーヌにソーレスタがパンツァーファウストと手榴弾、地雷を配ると一行は出発した。

ユリウス「ふぁああ…」

その頃ユリウスは瓦礫の中で目を覚ました。

目をこすりながら辺りを見回すと立ち上がり家を向かった。

ユリウス「それにしてもここ何処だよ…ん？やっべ」

ホルト通りの家を目指すが周囲は瓦礫だらけでここがどこかもよくわからなかった。

するとユリウスは別の足音が近づいているのに気がつき物陰に隠れた。

物陰に隠れてやり過ごそうとするとその足音の主が近づいてきた。

ヴィーレス「ホルト通りはこの先だ、気をつけろ。

この先は危険地帯だ」

タミク「了解、コスティア弾薬は持ってきてるな？」

コスティア「はい」

アントン「ところでクロステルマン中尉、そのユリウス君っていうのは兄弟とかいるんですか？」
ペリーヌ「ええ、ローズさんっていう妹さんが一人」
アントン「そうですか、じゃあ絶対に連れて帰らないと駄目ですね。僕も兄がいますから」
ペリーヌ「ええ、絶対に何が何でも連れて帰りますわよ、あのいたずら坊主」
足音の主はペリーヌ達ヴィーレス隊だった。
ヴィーレス隊は周囲を警戒しつつ話しながら歩いていた。
その話声に気が気ではなかったのがユリウスだった。
ユリウス「なんであのクソメガネがいるんだよ…！しかもいっぱい兵士連れてるしよ！」
ペリーヌ達が兵士を連れて自分を探していることに驚く。
ユリウスはペリーヌ達をやり過ごすと僅かに残っていた裏道を使いホルト通りを目指した。

それから３０分ほどしてヴィーレス隊に先回りしてユリウスは元の自宅にたどり着いた。
ユリウス「よかった、燃えてなかった」
ユリウスは自宅が燃えていない事に安心して中に入る。
そしてドアの一つが開いたある部屋に入った。
ユリウス「よし、ここだ…」
ユリウスは部屋に入るがすぐに何かに躓いて倒れた。
ユリウス「いててて…うわ！」
ユリウスは躓いた何かを見るがそれを見て驚いた。
それは死んだ兵士の死体だった。
傍にはその兵士が使っていたと思しきＰＰＤ―４３も放置されていた。
振り返ると部屋の窓は破壊されそこには放置されたＭＧ４２やからの弾薬箱が置かれていた。
すると部屋の隅に目当てのものがあるのに気がついた。

ユリウス「あった！」
ユリウスは急いでそれを取る。
それはクマのぬいぐるみだった。
ユリウス「一人にしてごめんな、ヤン。
　迎えに来たぞ」
埃をかぶったぬいぐるみを払いながら呟く。
部屋を見回しベッドにかかっていたバッグを取りその中に入れる。
入れるとユリウスはベッドの下を覗いた。
ベッドの下には本があった。
ユリウス「あった」
ユリウスはその本に手を伸ばすが届かない。
ユリウス「んん～！よし！」
ベッドの下に半分入りながら何とか本に手が届いた、その瞬間突如壁が吹き飛んだ。
壁に開いた大穴の向こうには巨大なネウロイがいた。
ユリウス「ネ、ネウロイ…」
ネウロイはユリウスにゆっくりと近づく。
一方のユリウスは恐怖に足がすくみ動けなかった。
すると、突如ロケットの音が鳴り響くとネウロイが爆発し破片となった。
レート「ユリウス！」
ユリウス「え？」
すると突然パンツァーファウストを背負いＭＰ４０を持ったレートが駆け寄ってきた。
レート「ユリウス！大丈夫か？」
ユリウス「兄ちゃん、ああ大丈夫だよ」
ペリーヌ「立ちなさい！急ぎますわよ！」
使用済みのパンツァーファウストを投げ捨てたペリーヌがＭＰ４１を手にしながら二人に駆け寄る。
３人は建物の玄関に向かうとレートが周りを確認する。
傍には別のネウロイがいた。

レート「ペリーヌ、ユリウス、先に行け、援護する」
ペリーヌ「了解！言い、私の後ろ５０センチから絶対にはなれない事！」
ユリウス「分かった」
レート「それじゃあ、行け！行け！行け！」
ペリーヌに指示するとペリーヌとユリウスは建物から飛び出し傍の角に移動する。
その後ろをレートはＭＰ４０を構えながら手榴弾を投げ追いかける。
手榴弾はネウロイの真下に落ち爆発、ネウロイを破壊した。
レート「よし、無事だな」
ペリーヌ「ええ。ネウロイは？」
レート「気づいてないみたいだ、急いでヴィーレス大尉のところに向かうぞ」
３人は後方にいるヴィーレスたち本隊を目指して走る、だが突如二人の頭の上をネウロイの光線が掠める。
ユリウス「なんだ!?」
レート「クソ、さっき吹き飛ばしたのが不味かったみたいだ！」
ペリーヌ「追いかけてきたってことですわね！」
３人を追いかけ多数のネウロイが次々と現れ追いかけ始めた。
レートはそのうちの一体をＭＰ４０で集中攻撃し撃破するがそれでもネウロイはまだ多数来ていた。
ペリーヌ「もうすぐですわ！早くあの穴に入って！」
ペリーヌは逃げながら目の前の砲弾クレーターにヴィーレスたちがいることに気がついた。
３人は必死に走りながら穴に滑り込んだ。
ユリウス「ぺ！」
レート「この！」
ヴィーレス「タミク！やれ！」
タミク「了解！」
３人が穴に潜り込むとタミクがＭＧ４２を構え銃撃する。

それと同時に通り右手の建物からもサブマシンガンと突撃銃、ライフルの集中砲火がネウロイに浴びせられた。
ヴィーレス隊は十字砲火をネウロイに仕掛けた。
ネウロイは十字砲火の中に次々と飛び込み撃破されていく。
ヴィーレス「いいぞ、そろそろ頃合いだ、引き上げる！」
「了解」
ある程度撃破するとヴィーレスたちは撤退する。
だが撤退し始めるとまたネウロイが出てきた。
レート「またか！」
ソーレスタ「急げ！橋まで出れば他の部隊の援護も受けられるぞ！」
何人かが物陰に隠れて銃撃し時間を稼ぎながら隊は橋を目指して走る。
すると突如近くで爆発が起きカメンスキが吹き飛ばされる。
カメンスキ「ぐ…」
リーネ「カメンスキさん！」
リーネはすぐにカメンスキを近くの破壊された乗用車の陰に入れると応急手当てをする。
ペリーヌ「リーネさん！」
だが二人の傍にネウロイが近づいてきた。
ペリーヌが呼びかけるが二人は応急手当で動けない。
カメンスキ「うぅ…クソ！早く逃げろ！」
リーネ「私たちの勝手で置いていくわけにはいきません！」
カメンスキ「だがネウロイがすぐそこに！」
リーネ「私はウィッチです」
するとリーネはＳｔＧ４４を構えるとジープの陰から一番近くのネウロイを銃撃し撃破する。
更にその後ろのネウロイも連続で破壊する。
リーネ「ふぅ、大丈夫ですか？」
カメンスキ「あ、ああ」
リーネ「応急処置をしますね。

痛いと思いますけど」
リーネはカメンスキの怪我をした足を止血し添え木をする。
そしてカメンスキを背負うと本隊に合流、橋を目指す。

指揮官「なんだ?ネウロイだ!戦闘用意!戦闘用意!」
橋の傍の陣地では兵士達が街での騒ぎに気がつき確認する。
すると大量のネウロイが出てきたことに気がつき急いで戦闘態勢を取る。
猟兵A「目標距離500、ファイア!」
陣地に据え付けられたPak40がネウロイを攻撃し数体を撃破する。
だがネウロイは次々と湧いて出てくる。
指揮官「クソ!きりがないぞ!ん?」
その数に指揮官が悪態をつく。
すると近くの通りから別のものが出てくるのに気がつく。
指揮官「あれは…ヴィーレス隊だ!」
それはネウロイから逃げるヴィーレス隊だった。
指揮官「ヴィーレス隊を援護しろ!」
すぐに陣地にいた兵士達はヴィーレス隊の援護を開始する。
陣地に据え付けられた軽歩兵砲や対戦車砲の砲撃は後方のネウロイを次々と吹き飛ばしその間にヴィーレス隊は何とか陣地にたどり着いた。
ヴィーレス「はぁはぁはぁ…何とか辿り着いた…
皆、無事か?」
タミク「はい、大尉。ヨギもアントン、コスティア、ソーレスタ、セイナス、ラーディックも無事です」
ペリーヌ「レートさんもリーネさんもユリウスも無事よ」
レート「大丈夫か?衛生兵!衛生兵!今すぐこいつを野戦病院に!」
陣地に到着するとヴィーレス隊は一息つき全員の無事を確認、リーネはカメンスキを衛生兵に引き継いだ。

その間に敵の攻撃はどういうわけかやみ始めた。
ヴィーレス「終わったのか？」
指揮官「分からん、だが今までこんな激しい攻撃はなかったぞ。まだ何かがあるかもしれん。通信兵、今のうちに南から弾薬と増援を頼む。」
通信兵「了解、こちらナルヴァ、タリン、応答せよ」
ヴィーレスは陣地の遮蔽物の陰から外を確認する指揮官と通信兵と話していた。
指揮官はまだ何かがあると思い司令部に増援を要請する。
通信兵は引いてきた野戦電話を手に取り司令部に連絡する。
司令部『こちら、タリン、ナルヴァどうぞ』
通信兵「至急弾薬及び増援を要請する。敵に更なる攻撃が開始される可能性大」
司令部『了解、増援と補給を送る』
通信兵「すぐに増援と補給を送るそうです」
指揮官「分かった、そのトラックに負傷者を乗せろ」
ヴィーレス「そこに送還予定の人員も乗せて構わないか？」
指揮官「構わん」
補給がすぐに来ると知ると指揮官は負傷者とペリーヌ達を輸送してきたトラックに乗せて送り返すと決断した。
その間戦闘は一時的な小康状態になった。
ペリーヌ「また、来るのかしら？」
レート「分からん、だが可能性はある」
陣地のバリケードに隠れてながらペリーヌが隣のレートに聞くがレートも来るかどうかわからなかった。
そのそばでユリウスは二人に聞いた。
ユリウス「な、なあ、怖くないのか？」
レート「怖くない、といえば嘘になる。だが兵士である以上義務は果たすつもりだよ」
レートが答えた。
するとカメンスキを野戦病院に連れて行ったリーネが戻ってきた。

ペリーヌ「リーネさん、カメンスキさんの容体は?」
リーネ「足を負傷してるだけなので何とかなるそうです。」
ペリーヌ「そう」
レート「お、補給が来たみたいだな。」
リーネとペリーヌが話しているとレートが補給のトラックが橋を渡ってきたのに気がついた。
トラックは急いで陣地に入ると兵士達が弾薬を卸し始めた。
だが突然赤いビームが飛んでくると数台のトラックを傍にいた兵士ごと吹き飛ばした。
指揮官「なんだ!?」
ヴィーレス「まさか!?」
すぐに二人は物陰から外を見る。
そこには今まで交戦してきたものよりも巨大なネウロイがいた。
指揮官「デカい…」
ヴィーレス「不味いな…」
その巨大さにヴィーレスは咄嗟に野戦電話を掴むと叫んだ。
ヴィーレス「こちらナルヴァ!大型陸戦ネウロイ接近!
火力支援を要請する!戦車から大砲を!」
司令部『こちらタリン、火力支援不能。
視界の悪化により射撃不能』
ヴィーレスはすぐに戦車か大砲の支援を要請したが最初にネウロイが弾薬を満載していたトラックを吹き飛ばしたため視界が悪化し何も見えず橋に展開したヘッツアー隊や対岸の重歩兵砲部隊、重迫撃砲部隊は攻撃不能だった。
それを聞いてヴィーレスは電話を叩きつける。
ヴィーレス「クソ!不味いぞ!このままだと全滅だ!」
指揮官「分かってる!全部隊対岸に撤退しろ!急げ!」
指揮官は全面撤退を決定すると部隊を撤退させ始めた。
兵士達は迫りくる巨大ネウロイに銃撃しながら橋を目指して逃げ始める。
対戦車砲や動かせない装備はすべて破壊され負傷者は比較的安全

な橋の下に運ばれ始めた。
ペリーヌ「レートさん！」
レート「撤退するぞ！ペリーヌ、リーネ、ユリウス、先に行け。援護する」
リーネ「分かりました！」
ペリーヌ達も兵士達と共に橋に向かって走り始める。
だがネウロイの方が動き早く気がつけばネウロイは１００メートルほどのところまで来ていた。
するとレートは放置されたパンツァーシュレックを見つけそれを構えるとネウロイに撃ち込んだ。
レート「やった！」
ペリーヌ「何やってるんですの！早く逃げますわよ！」
レート「分かってる！」
パンツァーシュレックが命中するとネウロイはひるみ動きを止める。
その間に４人は走るがネウロイは彼らを集中攻撃し始めた。
ユリウス「うわぁ！」
リーネ「キャ！」
レート「こっちだ！」
攻撃が集中し彼らはすぐに傍に放置されたトラックの陰に逃げ込んだ。
ユリウス「どうするんだよ！このままだとみんな死んじまうぞ！」
レート「分かってる、ペリーヌ、リーネ、ユリウス、先に行け。私がここに残って奴の気を惹きつける」
レートは策を３人に伝えた。
だがその策に驚いた。
ユリウス「おい！兄ちゃんどうする気だよ！」
リーネ「レートさん死にますよ！」
ペリーヌ「正気ですか！」
レート「正気だ、このままだと全滅だ。
誰かが奴の気を惹きつけないと駄目だ。」

レートが説得する。
それに3人は頷くことしかできなかった。
ペリーヌ「分かりましたわ、ならば私も残ります。
　ウィッチ二人なら増援が来るまできっと持ちこたえられますわ」
リーネ「え!?」
ペリーヌの言葉にリーネは驚く。
ペリーヌの口調は今までよりも落ち着いた覚悟を決めた口調だった。
ペリーヌ「リーネさん、ユリウス、先に行きなさい、命令よ」
リーネ「わ、分かりました…」
ペリーヌの有無を言わせぬ雰囲気にリーネはしぶしぶ従い橋に向かってユリウスを連れた走り始めた。
残ったペリーヌとレートは銃に弾を装填しながら話す。
レート「ペリーヌ、なんで?」
ペリーヌ「レートさん、私の目の黒いうちは誰も死なせる気はないわよ。
　その誰もの中にあなたも入ってるの、いいわね?」
レート「分かった、じゃあ行くぞ!」
装填し終わると二人はトラックの陰から飛び出しネウロイを銃撃しながら動き回る。
ネウロイは二人を攻撃するが小さい的である二人に中々当たらなかった。
ある程度ネウロイを撹乱すると別の横転したトラックの陰に二人は逃げ込んだ。
レート「ペリーヌ、弾はいくら残ってる?」
ペリーヌ「あと弾倉二つ分。れーとさんは?」
レート「これで最後だ。
　ペリーヌ、そろそろころあいかな?」
弾は二人共殆ど残っていなかった。
そのため二人は橋に向かうことを決断した。

ペリーヌ「ええ、1、2の3で行きますわよ。
1、2、3！」
二人はトラックの陰から飛び出すと全速力で橋に向かって走り始めた。
二人は後ろも見ずに一心不乱に走る。
ネウロイも二人を攻撃する。
そして不幸にも一発がレートのすぐそばで炸裂しレートは吹き飛ばされた。
レート「っぐ！」
ペリーヌ「レートさん！」
吹き飛ばされたレートはそばに放置されたＢＭＷＲ７５オートバイの傍に叩きつけられた。
ペリーヌはすぐにレートに駆け寄ろうとする。
するとレートが痛みをこらえながら叫んだ。
レート「ペリーヌ！先に行け！早く！私は置いていけ！」
ペリーヌ「レートさん！そんな！」
レート「早く行け！早く！」
レートの必死の叫びにペリーヌは後ろ髪を引かれながらも走って逃げる。
ペリーヌが逃げるとレートは地面から立ち上がると傍のオートバイにもたれかかる。
レートは痛みを感じる腹部に手を当てると血が出ているのに気がついた。
レート「ふ…」
レートはそれを見て笑うとホルスターからウェブリーリボルバーを取り出し構える。
そしてネウロイを撃ち始めた。
だがネウロイに拳銃はただの蟷螂の斧であった。
一発目、命中せず。
二発目、命中するも弾かれる。
三発目、当たった瞬間、突如ネウロイが爆発した。

レート「え…？」
レートが力なく首を向けるとそこには煙の向こうからヘッツアー、Ⅳ号戦車、ブルムベアが歩兵と共にやってきた。
戦車隊指揮官「目標前方のネウロイ、ファイア！」
戦車隊の指揮の元次々と砲撃はネウロイに命中しついに撃破した。
その光景をレートは虚ろな目で見るだけだった。
するとレートに誰かが近づいてきた。
ペリーヌ「レートさん！」
レート「ペリーヌ…何が…」
ペリーヌ「援軍ですわよ。
レートさん、すぐに傷の手当てをしますわ」
ペリーヌはレートに駆け寄ると傷の手当てを始めた。
するとレートは血の気が薄くなり始めた手をペリーヌの頬に添えた。
レート「神よ、感謝します…
臨終に際し…孤独でない事…そして…このキリストの如く慈愛に満ち…サモトラケのニケのように美しい天使を遣わしてくださった事を…！」
ペリーヌ「レートさん、何を言ってますの！
しっかりしてください！」
レート「ペリーヌ…最期に…天使の口づけを…」
そう言うとレートは意識を失った。
ペリーヌ「レートさん？レートさん！レートさん！」
ペリーヌは泣きながらレートを揺さぶった。
だが反応はなかった。
ペリーヌ「レートさん！そんな…いえ、まだやれますわよ…」
するとペリーヌは何か名案を思い付いたようだった。

数日後、ペリーヌの屋敷の一室に誰かが包帯を巻かれて寝かされていた。

「ん…ここは…」
ペリーヌ「気がついたようね、レートさん」
レート「え?ペリーヌ?じゃあここは…」
ペリーヌ「パ・ド・カレー、ですわよ。
全く、あなたの固有魔法がまさかの超自己回復と治癒魔法だったからいいものを」
寝かされていたのは包帯を巻かれたレートだった。
レートは意識を失った後ペリーヌに魔力を流され無理矢理使い魔を出して肉体保護かけただけでなくそもそもの固有魔法が超自己回復と治癒魔法という珍しいものであったため何とか一命をとりとめたのだ。
レート「そうか…助かったのか…って痛てててて」
ペリーヌ「分かってます!?また怪我したのですよ!
それも今回は瀕死の!
もう無茶はしないでください!」
ペリーヌはレートの頬をつねりながら説教する。
レート「分かったよ」
ペリーヌ「分かったならいいですわよ、私はやることがありますので…」
レートが反省した態度を見せる。
すると次の瞬間、レートの口がふさがった。
ペリーヌがキスしたのだ。
ペリーヌ「早く元気になってください、〝私の騎士様〟」
ペリーヌが笑顔で言うと病室を出て行った。

第５章：Ａｆｔｅｒ　ｔｈｅ　ＷＷⅡ
第１話：アルデンヌの森

１９４５年８月２日深夜、アルデンヌ地方
この鬱蒼と針葉樹林が生い茂り、軍事行動にさえ支障をきたす程複雑で入り組んだ地形をしたこの地域の道路をカールスラント軍服を着てリベリオンやオラーシャ、オストマルク、カールスラントなどの武器を持った兵士たちが進軍していた。
「Ｔｒｅｃｅ?ｉ　ｂａｔａｌｉｏａｎｅ　ｒｏｍ▪ｎｅ，　Ｃａｒｐａ?ｉｉ
　Ｌａ　ａｒｍｅ　ｃｕ　ｆｒｕｎｚｅ　?ｉ　ｆｌｏｒｉ～♪」
彼らはこの地域に展開していた第３９義勇装甲擲弾兵師団ヴァレンシュタイン第７９義勇擲弾兵連隊第Ⅱ大隊ツェペッシュのルーマニア人大隊所属の擲弾兵中隊だった。
彼らはルーマニアの軍歌「ルーマニアの大隊よカルパチアを越えてゆけ」を歌いながらリベリオンから供与されたハーフトラックに乗り進軍していた。
彼らはこの地域に蔓延るゲリラの掃討が任務だった。
「Ｖ―ａ?ｔｅａｐｔ☒　ｉｚｂ▪ｎｄａ，　ｖ―ａ?ｔｅａｐｔ☒?ｉ　ｆｒａ?ｉｉ
　Ｃｕ　ｉｎｉｍａ　ｌａ　ｔｒｅｃ☒ｔｏｒｉ～♪」
通信兵「こちら第２中隊、異常無し。ん?
　大隊本部、応答願います。」
Ｍ３Ａ１ハーフトラックに乗ったこの部隊の通信兵が無線で司令部に連絡する。
すると突然無線が乱れ始めた。
中隊長「どうした?」
通信兵「急に無線が乱れ始めて通信できなくなりました。」
中隊長「分かった、一旦小休止を取ろう。

その間に改善できなければ一旦戻って別の中隊と合流しよう」

同じ車両に乗っていた中隊長に報告すると中隊長は無線が回復するまで一旦小休止を取ることにした。

部隊は一旦停止すると兵士たちは木陰や最寄りの車両にもたれたりしてあるものは居眠り、あるものは水を飲み、あるものはタバコを吸い始めた。

だが彼らをこの闇の深い針葉樹林の木陰の中から何者かが見張り、取り囲み始めた。

「いたぞ、油断してるぞ」

そのリーダー格らしき私服にステンガンを持った男が周りのライフルやどこからか手に入れた最新だったり旧式の軍用機関銃を持った男たちに言う。

男たちはリーダーの身振り手振りの指示に従い動き始めた。

兵士Ａ「綺麗な夜空ですね、軍曹」

兵士Ｂ「全く、こんな長閑な所だっていうのに戦争とは…」

ある兵士が隣のグリースガンを持った下士官に話しかけその下士官が口にくわえたラッキーストライクを吸おうとポッケからライターを取り出そうとする。

直後、銃声が響き二人の兵士は倒れた。

中隊長「クソ！奇襲だ！戦闘用意！援護要請！」

兵士Ｃ「了解！ぐわ！」

中隊長が指示するが直後、隣でＭ１９１９を撃っていた兵士が倒れ、さらに車内にいくつかの瓶と何かが飛んできた。

中隊長「しまった！」

次の瞬間、ハーフトラックの中で大爆発が起き火に包まれ中の兵士たちは吹き飛ばされるか炎の中でもだえ苦しむ。

小隊長「中隊長がやられたぞ！

火力支援要請！」

通信兵「だめです！無線が通じません！」

中隊長車が燃えるその後ろのハーフトラックではある小隊長が通

信兵に近くにいる重装備中隊の迫撃砲支援を要請しようとするが無線妨害により救援要請を送れなかった。
直後、小隊長は肩を撃たれ車内に倒れこむ。
小隊長「畜生！信号拳銃を打ち上げろ！」
兵士Ｄ「了解！」
倒れこんだ小隊長はそばの兵士の手当てを受けながら信号拳銃を打ち上げるよう命令する。
命令を受けた兵士は信号拳銃を手に取ると空高く赤い信号弾を発射した。

その数キロ離れたところに大隊の重装備中隊の重迫撃砲部隊がいた。
迫撃砲兵「信号弾だ！」
指揮官「なに！どこだ！」
信号弾を確認するとすぐに迫撃砲兵は陣地に据えられた１２０ミリ迫撃砲に向かい弾薬を取り出す。
迫撃砲兵「恐らくグリッドエイブル１２、ラブ１４です」
指揮官「分かった、射撃用意！距離２０００ｍ。
照明弾発射！」
指揮官はすぐに照明弾の発射を命じる。
だがこれは裏目に出た。
戦っていたルーマニア人兵士たちの真上が突如明るくなった。
小隊長「連中はバカか！なんで俺たちの真上に落とす！」
結果、彼らはただでさえ窮地にもかかわらず照明弾により敵に自らを曝け出す事態となった。
照らし出された彼らはゲリラの銃撃を受け次々と倒れる。
さらに悪いことは続き、今度は彼らの頭の上から迫撃砲弾が降り注いだ。
小隊長「迫撃砲の連中は何を見てるんだ！すぐに砲撃をやめ…」
小隊長が砲撃をやめさせようとした直後、乗っていたＭ３ハーフトラックに迫撃砲弾が直撃、中の兵士全員が戦死した。

兵士たちは敵の銃撃だけでなく味方の迫撃砲の誤射に巻き込まれ次々と倒れていった。
兵士Ｅ「このままじゃ全滅だ！通信は回復したのか！」
通信兵「まだです！こちら第３中隊！砲撃中止！砲撃中止！」
兵士たちは無線が回復するのを祈る。
すると無線から声が響いた。
迫撃砲兵『こちら第１２中隊、砲撃中止？』
通信兵「こちら第３中隊！砲撃中止！味方を撃ってる！
グリット変更！エイブル１２、マイク１４、キング１５！」
迫撃砲兵『了解！』
すると迫撃砲弾の雨はやみ砲弾はゲリラのほうに落ち始めた。
ゲリラは砲撃を受けると負傷者と戦死者を残して散り散りに逃げ始めた。

翌朝
「入れ」
小隊長Ｂ「閣下…」
第３９義勇装甲擲弾兵師団ヴァレンシュタインの師団本部にあの先頭を生き残った小隊長が呼ばれた。
あの戦闘で中隊は戦力の７割を失い壊滅、この小隊長が最先任だったが憔悴しきっていた。
その顔を見て元第１１３旅団旅団長で現在この師団の師団長であるピュックラー＝ブルクハウス少将は驚いた。
ブルクハウス「余程酷い戦闘だったようだな」
小隊長Ｂ「ええ。中隊長にほかの小隊長、私の部下も半分戦死し残りはほとんどが病院です」
その戦闘の酷さは彼自身、頭に包帯を巻き軍服は埃と煤と血で汚れていたことからも明らかだった。
ブルクハウス「そうか、単刀直入に聞く。
何が原因で被害が拡大した？

ただのゲリラ相手なら此処まで酷い事にはならんぞ」
小隊長Ｂ「…無線の…無線の不調です…無線が使用不能であったため援護要請も砲撃指示も出せませんでした」
ブルクハウスの問いに小隊長はかすれた声で答える。
被害が拡大したのは無線が原因だった。
ブルクハウス「そうか、原因はわかるか？」
小隊長Ｂ「分かりません、ゲリラが無線妨害などという高度な手段をとれるとは思いません」
ブルクハウス「分かった、君たちには一か月の休暇をやる。
その間ゆっくり休んでくれ」
ブルクハウスに小隊長は敬礼すると部屋を出て行った。
ブルクハウス「ふむ、参謀、あの時無線妨害に遭遇したのはあの中隊だけではないな？」
小隊長が出ていくとブルクハウスは情報を整理し隣の参謀に聞いた。
参謀「ええ、わが師団だけでなく周辺部隊も。
第２９義勇擲弾兵師団、第６００・６５０・７００ロシア歩兵師団、第１４義勇擲弾兵師団、第３９義勇騎兵師団、第１５コサック師団、第１６２トルキスタン歩兵師団、第１６０７アゼルバイジャン歩兵連隊、グルジア大隊集団、アルメニア大隊集団、カフカス大隊集団も」
ブルクハウス「やっぱりな。空軍部隊は？」
参謀「空軍部隊もです。アーヘンの部隊とサン・トロンの部隊も無線妨害に遭ったようです。」
この夜の無線妨害はアルデンヌ地方北部を中心にアルデンヌ地方全域で観測された。
それは彼らと同じようにゲリラ掃討に駆り出されていたロシア人義勇兵師団でブロニスラフ・カミンスキー少将指揮する第２９義勇擲弾兵師団ＲＯＮＡ、セルゲイ・ブニャチェンコ少将指揮の第６００ロシア歩兵師団、同じくロシア人義勇兵の第６５０ロシア歩兵師団、第７００ロシア歩兵師団、ウクライナ人義勇兵からなるフリッツ・フラ

イターク少将指揮の第１４義勇擲弾兵師団ガリツィア、ハンガリー人義勇兵の第３９義勇騎兵師団マリア・テレジア、東部戦線から送り返されたコサックを主体としたヘルムート・フォン・パンヴィッツ少将指揮の第１５コサック師団、トルキスタン義勇兵の第１６２トルキスタン歩兵師団、第８０８から８１９の番号を冠したアルメニア人からなる歩兵大隊で編成されたアルメニア大隊集団、第７９６から第８０２までのグルジア人で編成された歩兵大隊からなるグルジア大隊集団、カフカス系諸民族義勇兵からなる第８３５から第８４２までの歩兵大隊で編成されたカフカス大隊集団、アゼルバイジャン人からなる第１６０７アゼルバイジャン歩兵連隊も無線妨害に遭っていた。

ブルクハウス「原因は何だ?ネウロイか?」

参謀「私もそう考えています。

今、上層部に伝えて当日のこの地域でネウロイとの交戦がなかったか調べてもらっています。」

ブルクハウス「分かった、これは事の次第によっては大変なことになるぞ。」

ブルクハウスの呟きはこの一週間後現実となった。

ブルクハウス達の報告は即座に上層部、即ちランスにある連合軍総司令部参謀部とパリの連合軍ガリア軍行政司令部に伝えられた後、周辺地域の各部隊に問い合わせた。

それはサン・トロンのウィッチたちにも伝えられた。

ハインツ「はい、サン・トロン」

電話を受け取ったハインツは司令部からの問い合わせを聞かれた。

ハインツ「えっと、八月二日深夜3時頃アルデンヌ地方周辺域でネウロイと交戦したか?

ちょっとお待ちください。

シュナウファー!こっち来い!」

それを聞いたハインツは思い当たる節があった。

すぐにハインツは大声でハイデマリーを呼んだ。

ハイデマリー「なんでしょうか?」

ハインツ「お前、今日の深夜3時頃に見慣れないネウロイと交戦したよな？」
ハイデマリー「はい、しましたけど」
ハインツが深夜に交戦したネウロイの事を詳しく聞いた。
ハインツ「どこで？」
ハイデマリー「えっと…確かザンクト・フィートの北西２８キロ付近です」
ハイデマリーが答えるとハインツは電話で司令部に伝えた。
ハインツ「シュナウファー少佐がザンクト・フィートの北西２８キロ付近で交戦しました。
　はい、えっと、今交戦記録を探してます…あった、えっと、交戦したのは午前3時5分から8分です。
　はい、分かりました。では失礼します」
そう言うとハインツは電話を切った。
電話を切るとハインツが呟いた。
ハインツ「なんなんだ？急に…
　シュナウファー、どうにも嫌な予感がするな…」
ハイデマリー「気のせいではないですか？」
ハインツ「だといいがな…」

パリの連合軍ガリア軍行政司令部、このガリアを実質的に統治するこの司令部に西方総軍所属の将軍達、即ち、第２０山岳軍司令官エデュアルト・ディートル大将、第２５軍クルト・フォン・デア・シュヴァルリー大将、リベリオン第９軍司令官ジョージ・Ｓ・パットン・ジュニア大将、ネーベ、ハイドリヒ、インクヴァルト、ボック、連合軍遠征軍航空参謀本部長になったマロリー、ベーメが集まっていた。
ベーメ「ですから、前々から言っています通り、アルデンヌの地下に何かがいるんですよ！」
シュヴァルリー「だからその何かとは何なんだ！科学的な事を言えオーストリア人！」
ベーメ「ちゃんとしたベルギカ一の地質学者達がそう結論を下して

いるんです！」
シュヴァルリー「それでも非現実的すぎる！
こんなふざけたことが現実に起きるわけがないだろ！」
だがそこではベーメとシュヴァルリーが互いに罵りあう謎の状況が発生していた。
ボック「いい加減二人共落ち着き給え。
つまりは何かがいるのか？ベーメ君」
ベーメ「はい、閣下。何かが確実にいるんです。
何かが」
ボックの問いにベーメが答える。
ベーメはアルデンヌの地下に何かが潜んでいる事を確信していた。
シュヴァルリー「モグラじゃないかね？」
ベーメ「この世に全長が１００メートルのモグラがいますか？」
シュバルリーが嫌味を言うとベーメが返した。
彼らが持っていたベルギカの地質学者の報告書には「アルデンヌ地方の地下に全長が推定１００メートルかそれ以上の何かが動いている」と書かれていた。
するとやり取りを聞いていたパットンが口を開いた。
パットン「どうにも儂は奴らが何かを企んでるように感じる。
そう、まるで１９４４年１２月のあの時のようにな」
ボック「ヴァハト・アム・ラインの時のようにか？」
パットン「ああ、あの時のヒトラーの軍事的に何ら価値のない攻勢のように、儂の軍人としての勘が何かが近々起きそうな気がしてならない」
シュヴァルリー「ふん、軍人の勘だと？そんなので戦争やって勝てたら苦労せんよ」
パットンが持ち前の勘で何かが起きそうだと伝える。
パットンの軍事的な勘の強さは彼らもよく知っていたがシュヴァルリーは否定的だった。
インクヴァルト「兎に角、いるかいないかはっきり決めるためにま

ずは調査をやってください」
マロリー「それと先程、サン・トロンから未明の無線妨害が起きた時刻に起きた地域で新型のネウロイと交戦したという報告が上がった。
何かがいる可能性は完全にないとは言えない」
それにインクヴァルトとマロリーが意見する。
二人の意見も聞くとボックは考え始めた。
ボック「うーん…とりあえず調査は認めよう。
音響観測部隊を転用できるか検討してくれ、無理ならば地質学者を掻き集めろ、いいな？」
参謀「は」
ボックは結論を下し隣にいた参謀に伝えた。
伝えるとボックは立ち上がり出て行こうとした。
ディートル「閣下、どちらへ？」
ボック「出張だよ、ストックホルムだ。
共産主義者と話をつけてくる」
ディートルが聞くとボックが答えた。
すると部屋にいた軍人たちは全員立ち上がり敬礼する。
ボックは返礼し部屋を出て行った。

翌日、ストックホルム
ボック「というわけで、我々のヨーロッパとアフリカでの利益圏の確定を行いたいと思いましてね」
ニコライ「そうか、そういうわけだな」
ボック「ええ、我々がいつまでも対立したままではこの戦争はあと1年で終わりませんよ」
ボックはヴァトゥーチンと会談していた。
議題はヨーロッパにおけるオラーシャと西側諸国の利益圏の確定だった。

この会談を行ったのには理由があった、即ちいつまでもオラーシャと西側諸国が対立していては早期の戦争終結など望むべくもない事ぐらいは彼らはよく理解していた。

そして最も恐れていたのが解放したカールスラント領にオラーシャが居座る事だった。

ニコライ「いいだろう、我々の要求はバルト三国、ベラルーシ、ウクライナ、ルーマニア、チェコスロバキア、ハンガリー、それにポーランドだ」

ボック「ふざけてるのかね？我々の最も譲歩できるのはエストニア、ベラルーシ、ウクライナだけだ」

ニコライ「我々がそれで納得できると思いかね？」

だが互いの要求は全くかみ合わなかった。

ヴァトゥーチンらオラーシャは東欧の支配を望みボックら西側はオラーシャの封じ込めを狙っていた。

ボック「しかし、このままでは平行線だ。

こうするのはどうかね？緩衝地帯を設けるというのは？」

ニコライ「緩衝地帯？」

ボック「ああ、具体的にはバルト三国、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、モルドバ、ブルガリア、ユーゴスラビアを独立させ緩衝地帯化するのだよ。

これならば貴国との対立も最小に抑えられ、同時に民族主義者を黙らせられる。」

ボックは緩衝地帯として事実上のオストマルクの解体、即ち中欧諸国の独立を提案した。

ニコライ「ほぉ、なかなか面白いじゃないか」

ボック「これならば利益は少ないが対立は最小だ。

この案の見返りはヴァイクセル川以東での作戦行動の許可、どうするかね？」

ニコライ「乗ろう、勿論文章化した上で秘密協定として扱うのかね？」

ボック「勿論だ」

ヴァトゥーチンはボックの案に乗った。
こうしてオストマルクの事実上の解体、そして中欧諸国の独立が決定された。
だがそこに参謀があるニュースを持って飛び込んできた。
参謀「大変です！ヴェネチアでクーデター！
さらにロマーニャがヴェネチアの併合とロマーニャ王国の成立を宣言しました！」
ニコライ「何！」
ボック「ついに始めたか。
歴史的な日だな、今日は新たなヨーロッパの誕生の日だ」
ヴァトゥーチンは衝撃を受けるがボックは事前に知っていたかのような反応をする。
何が起きたか、それは遠く南に約１０００キロ離れたヴェネチアで始まった…

第2話：国家への一撃

事は中央ヨーロッパ夏時間１９４５年８月３日未明に遡る。
この日ヴェネチア公国の臨時首都パドヴァの臨時国会では激論が続いていた。
議員Ａ「この国難を乗り越えられるのは内務大臣のアルド・フィンツィだけだ！」
「そうだ！彼こそがこの国を救うんだ！」
「ふざけるな！奴は売国奴だ！悪魔だ！」
それはこの前日に辞職した内閣に代わる次の首相を巡り貴族院と下院、更に左派と右派で激しく対立していたのが原因だった。
右派と下院が推していたのは内務大臣のアルド・フィンツィ、一方左派と貴族院が推していたのは別の人物だった。
フィンツィに反対する勢力の大半はフィンツィが議員ではなく内務官僚である事と彼が極右政党ヴェネチア・ファシスト党の指導者でもあることに危機感を持っていた。
その上世論も貴族・上流階級はフィンツィに対して否定的な一方、大衆や労働者の大半はフィンツィ派だった。
議員Ｂ「フィンツィ大臣も何か言ったらどうなんだ！」
「そうだ！そうだ！」
左派の議員が右派の議員に囲まれて黙っていたフィンツィを名指しで攻撃する。
するとフィンツィは立ち上がると議場の演台に立った。
フィンツィ「親愛なる下院議員諸君、そして忌々しき貴族議員の諸君。
私からこの国に最後の挨拶を送ろう」
そう言うとフィンツィは胸ポケットから拳銃を取り出し上を向け突如発砲した。
それに議場は騒然となる。
議員Ｃ「フィンツィ！何をしたか分かってるのか！」
フィンツィ「合図ですよ」

驚いて腰を抜かした右派の議員がフィンツィに叫ぶとフィンツィが振り返り答えた。
すると突如議場のドアが開き完全武装のヴェネチア兵とロマーニャ兵が雪崩れ込んだ。
フリリャーニ「動くな！」
議員Ｄ「貴様らなんだ！クーデターか！」
フリリャーニ「そうだ！」
一人の議員が雪崩れ込んだ兵士達を率いていたフリリャーニを問い詰めると答える。
それを聞いて一人の議員が逃げ出そうと窓から身を乗り出した。
兵士Ａ「逃げるな！」
兵士が止めようとするが議員は窓から飛び降りて逃げようとし、銃撃を浴び穴だらけになって窓から落ちた。
それに議員たちは顔面蒼白となった。
フィンツィ「逃げるのは無駄だ。フリリャーニ大佐、パドヴァの主要施設、官庁街、要人は全て制圧したか？」
フリリャーニ「は。大公は宮殿で捕縛、官庁街、主要施設すべて制圧済み。
国会議事堂も包囲した上で制圧完了です」
フィンツィ「分かった、フリリャーニ大佐、ここは任せた」
フリリャーニ「は」
フィンツィはフリリャーニと短い会話をすると議場を出て議事堂の車止めに向かう。
車止めにはカヴァッレーロとカンピオーニがいた。
フィンツィ「カヴァッレーロ大将、状況は？」
カヴァッレーロ「大公とその家族は王宮で拘束した。
後は退位させヴェネチア大公位をロマーニャ大公に移譲、憲法の大公権限でヴェネチア公国をロマーニャ公国の保護領とする。
そうすれば実質は統一だ」
彼らの統一の方法はヴェネチア大公を退位させその位をロマー

ニャ大公に移譲、憲法に書かれている大公の非常時権限を使いヴェネチア大公領をロマーニャ公領の保護国化するという策であった。
フィンツィ「ああ、軍はどれぐらい掌握できた？」
カヴァッレーロ「陸軍の7割、掌握できてないのはフィウメ守備隊、ポーラ守備隊、ヴェネチア守備隊、近衛師団、第1師団ヴェネチア、第1高射砲旅団、第5師団フィウメ、第6師団ポーラだ。
空軍はヴェネチア防空管区以外の全部隊を掌握した」
フィンツィ「海軍は？カンピオーニ提督」
カンピオーニ「全部隊掌握した。すでに予定通り第1任務部隊がヴェネチア、第2任務部隊がフィウメ、第3任務部隊がポーラ沖に展開してる」
既に彼らは陸軍の4個師団と3つの都市の守備隊、空軍のヴェネチア周辺部隊以外すべてを掌握していた。
更に主力艦隊を3つに分けヴェネチアの主要都市の沖合に展開させていた。
フィンツィ「分かった、私は大公のところに行く。
君らは今日中にすべて叩き潰せ、どんな手を使っても構わない」
「は」
フィンツィはカヴァッレーロとカンピオーニに指示すると車に乗り込んで王宮へと向かった。
王宮には多数の兵士が展開し封鎖されていた。
王宮に入るとフィンツィは大公がいる執務室を目指した。
フィンツィ「フィンツィです、入ります」
フィンツィは執務室のドアをノックし入る。
中では大公が兵士に取り囲まれて不機嫌だった。
フィンツィ「殿下」
大公「フィンツィ君、これはどういうことかね？」
フィンツィ「イタリアの大義の為です。
陛下はこれにサインし判子を押せば貴方方一族には一

切の危害を加えないと約束しましょう」
フィンツィはそう言うと隣にいた秘書官が一枚の書類を大公の前に置いた。
その書類を大公が読むと怒りに震え始めた。
大公「これは…ふざけてるのか！何たる無礼だ！」
フィンツィ「無礼ですか、殿下はご自身の立場をご理解していないようで。
貴方がサインしなければジェームズ1世やルイ16世の後に続くだけです」
フィンツィは大公を脅す。
そして兵士達に命令する。
フィンツィ「使用人にマリア・グリセンティがいるはずだ、彼女を殺して死体を持ってこい！」
大公「なぜ彼女なんだ！」
すると何故かフィンツィは使用人の一人を射殺するよう命じた。
それに大公も驚いた。
フィンツィ「殿下、とぼけても無駄です。
殿下と彼女の関係は調べがついてます、男女の仲ですよね？」
大公「く」
射殺するよう命じた使用人は大公の不倫相手であった。
それを聞いた大公は苦虫を潰したような表情をする。
フィンツィ「サインするか、死体が一つ増えるか、どちらが望みですかな？」
大公「畜生…」
すると大公は書類にサインし椅子にもたれかかる。
大公「ふん、これでこの国は滅んだ」
フィンツィ「そして新たなイタリアが生まれた。
うむ、至急これをロマーニャ大使館に」
兵士「は」
サインした書類を受け取ったフィンツィはそれを兵士に渡しロ

マーニャ大使館に持っていくよう命じた。

その頃、ロマーニャの統合参謀本部ではバルボ、デ・ボーノ、レニャーノが集まっていた。

すると電話が鳴りそれをバルボが取る。

バルボ「バルボだ、分かった。1時間後だな。

ヘマをするなよ、少しでもミスをすれば全てが終わるぞ、いいな」

短く会話するとバルボは電話を切った。

その会話を聞いてデ・ボーノとレニャーノが聞いた。

デ・ボーノ「なんだったんだ?」

レニャーノ「何かあったのか?」

バルボ「フィンツィが退位と譲位の書類にサインさせた。

その書類はさっき輸送機に乗せてローマに輸送中だ。

1時間後にチャンピーノに到着する」

電話はパドヴァから大公の退位と譲位の書類をローマに輸送中だという話だった。

するとバルボはどこかに電話をかける。

バルボ「バルボだ、チャーノ、やったぞ」

チャーノ『バルボ大将、分かってます。

15分前にパドヴァの臨時大使館から電話が来ました、これでどうにかなります。

到着が1時間後、その後色々ありますから5時半から記者会見します、いいですか?」

バルボ「それでやってくれ」

そう言うと電話を切った。

それから数時間後の中央ヨーロッパ夏時間午前5時30分過ぎ、ローマの外務省で記者会見が開かれていた。

そこにいた記者の大半は叩き起こされたようで殆どが寝癖がついていたり欠伸をしたり中には部屋の隅でいびきをかいて居眠りをし

ている記者までいた。
そんな中、記者会見が始まった。
チャーノ「記者の皆様、そして全世界の人々に発表します。
先ほど、中央ヨーロッパ夏時間午前3時半頃、ヴェネチア大公が退位、その位をロマーニャ大公に譲位するとヴェネチア政府より通告がありました。
これを大公、及び内閣は承認、午前4時を以てロマーニャ大公はヴェネチア大公に就任、また同時に緊急時におけるヴェネチア公国の大公権限に基づきヴェネチア公国をロマーニャ公国の保護国とすると宣言、これを我が国の内閣、及びヴェネチア公国の臨時最高責任者が承諾、これにより本日午前4時30分を以て全ヴェネチア公国及びその植民地、海外領土を我が国の保護領とすることを宣言します」
記者会見を行ったチャーノのヴェネチア公国の事実上の併合宣言に記者達はどよめいた。
記者A「そ、それはつまりヴェネチア公国をロマーニャに併合するという意味ですか?」
チャーノ「統一、と言って貰いたい。
これによりロマーニャとヴェネチアは統一、よって本日を以てロマーニャ王国の成立をここに宣言する!」
高々にチャーノがロマーニャ王国の成立を宣言すると会見は終了した。
そしてこのニュースは世界中に配信されると大混乱を巻き起こした。
同時にロマーニャ軍は全軍に対してある命令を発令した。
それは…

それから約5時間後、午前10時過ぎ、ヴェネチア沖約3キロ。
ここにヴェネチア・ロマーニャ連合第1任務部隊改めロマーニャ海軍アドリア海艦隊第1任務部隊が展開していた。
ヴェネチア海軍はクーデター後即座に事前の協定に基づきロマー

ニャ海軍の指揮系統に参加した。
元々ローマーニャ海軍とヴェネチア海軍は共同作戦を行うことが多い為これに関しては何の問題もなかった。
そしてこの第1任務部隊の指揮官は旗艦インペロ改めローマに再改名された戦艦ローマ艦上のベルガミーニ提督だった。
ベルガミーニ「ヴェネチアはどうだ?」
士官「これが武装解除に関する交渉の答え、だそうです」
ベルガミーニはヴェネチア守備隊との交渉に向かわせた士官から守備隊側からの返答書類を受け取るがそこに書かれていたのはたった一言であった。
ベルガミーニ「Ｖａｆｆａｎｃｕｌｏ（クソ食らえ）、か。
ローマから命令は来てるな?」
それを読んだベルガミーニはカラチョッティに聞いた。
カラチョッティ「はい、来てますとも。
『全ローマーニャ軍に下令、直ちに〝友好的ではない〟全ヴェネチア軍を武装解除せよ。
もし攻撃を受けた場合、又は武装解除を拒否された場合は攻撃せよ。』
と」
ベルガミーニ「よろしい、全艦艇及びローマに緊急要請、ヴェネチア守備隊との交渉決裂、１２００時を以て総攻撃を開始予定、陸軍、空軍部隊の支援要請」
通信兵「は」
カラチョッティがローマからの命令を読み上げるとベルガミーニはヴェネチアへの総攻撃を決断、ローマと全艦艇に命令が伝えられた。
ローマーニャ軍はクーデターに賛同していないヴェネチア軍の武装解除を命じられていた、そしてその際に交渉が決裂した場合は一切の武器使用自由が許可されていた。

ローマ

通信兵「１ＴＦより入電、全艦艇及びローマに緊急要請、ヴェネチア守備隊との交渉決裂、１２００時を以て総攻撃を開始予定、陸軍、空軍部隊の支援要請、です」
指揮官「分かった、直ちにヴェネチア攻撃部隊を発進させろ」
士官「は」
ローマでは攻撃要請を受けると即座に攻撃部隊の発進を命じた。
この命令はこちらも事前の規定通り北ロマーニャ各地の飛行場に展開する各部隊に伝えられた。
そして１時間後には各地より戦闘機・爆撃機合計１５０機以上の第一波攻撃隊が、その３０分後にはトリエステよりロマーニャ空軍の指揮下に移ったヴェネチア空軍・ロマーニャ空軍連合の戦闘機・爆撃機１００機が離陸しヴェネチアに向かった。

その頃、混乱の渦中にあったヴェネチア市内には５人のウィッチがいた。
シャーリー「なあ、今何が起こってるんだ?」
フェル「分からないわよ!今上に聞いてるけど返答が来ないのよ!」
リアルト橋の傍の道路に置かれたトラックの傍でシャーリー、ルッキーニ、そして赤ズボン隊の３人が無線機に噛り付いていた。
それは勿論今朝から始まった大混乱に巻き込まれ情報を集めるためだった。
するとルチアナがフェルに無線が通じたと伝えた。
ルチアナ「隊長、やっと通じました」
フェル「でかしたわよ!こちらマルヴェンツイです、え?ちょっと待ってください!
それどういう…攻撃!なんで!?ちょ!」
フェルが代わるが司令部からの情報は信じられない物だった。
ルッキーニ「何かあったの?」
マルチナ「フェル隊長、どうだった?」

フェル「それが…即時ヴェネチアから退避せよって命令よ。
2時間後に攻撃が始まるわ」
ルチアナとルッキーニの質問にフェルが震えた声で答えた。
その内容は信じられなくて当然だった。
シャーリー「攻撃？」
フェル「ええ、ヴェネチアへ艦砲射撃と空襲、それに地上部隊による攻撃が行われるそうよ。」
フェルがシャーリーに答えた。
その内容はとてもじゃないが信じられないものだった。
シャーリー「なんで攻撃するんだよ！折角私達が守ったんだぞ！」
ルッキーニ「そうだよ！ヴェネチアの街並みは人類の遺産なんだよ！」
フェル「知らないわよ！ただ攻撃するから直ちに退避しろ、退避しなければ生命の保証はしないそうよ、今すぐに避難しましょう！」
ヴェネチアへの攻撃を聞いてルッキーニとシャーリーは反対というがそもそもこれは彼女らにはどうしようもできなかった。
だがその直後、突如砲声が市内に響き渡った。
シャーリー「なんだ!?」
ルチアナ「見て！艦隊が！」
すると沖合の艦隊をルチアナが指さす。
そこには艦隊の傍に多数の水柱が上がり1隻の駆逐艦が炎上していた。

ベルガミーニ「く、連中先に撃ちやがったか。
全艦、砲撃用意！撃ち返せ！
被害報告！」
その頃艦隊ではベルガミーニが驚いていた。
何故なら彼らはヴェネチア軍が先に攻撃することを予期していなかった。
この地中海最強クラスの艦隊による威圧行動によって敵は戦わずして武器を降ろすか少々の攻撃で粉砕可能と判断していた、だが実際

はヴェネチア軍は市内に多数の大砲を持ち込みその大半を艦隊に向け発砲したのだ。
通常ならばとるに足らない攻撃だが僅か3キロ沖合に停泊していたため数隻があっという間に被弾してしまった。
士官「報告！駆逐艦リベッチオ、艦首に被弾！火災発生！現在弾薬投棄作業中！
駆逐艦マエストラーレ、2番発射管大破！魚雷投棄！
コルベットヴェスパ、艦橋直撃、艦長以下艦橋要員が死傷！
水雷艇カストーレ、アルデバラン、アルテア、クリメン、駆逐艦シロッコ、ヴィンセンツォ・ジョベルディ、ヴィットリオ・アルフィエーリ、ジュニエーレ、コラッツィエーレに至近弾多数！」
士官が報告する。
敵の砲撃は沿岸に近いところに展開していたコルベットや水雷艇、駆逐艦に対して行われていた。
そしてこれら軽装甲の艦艇はヴェネチア軍の野砲程度でさえ危険であった。
史実においてもイタリア海軍の駆逐艦2隻が不用意に沿岸に近づき、沿岸に展開していた僅か8門の88ミリ高射砲の攻撃を受け撃沈されていた。
ベルガミーニ「全艦、砲撃用意！
目標、敵陣地及びヴェネチア市街！
照準完了次第各個に撃て！」
ベルガミーニが命令した。
その直後、次々と艦艇は砲撃を開始した。
ヴェネチアの戦いの火蓋は切って落とされた。

第3話：リソルジメント

シャーリー「は？嘘だろ？」
フェル「撃った…わよね？」
マルチナ「ど、どうしますかフェル隊長!?」
ヴェネチアにいたシャーリー達には沖合の艦隊が一斉に発砲した様子が見えていた。
そしてその砲弾が頭上を掠め次々市街に落下し各所で爆発が起きている様も見えていた。
だがそれに彼女たちは混乱し右往左往するばかりであった。
すると突如、彼女たちの傍にあった建物に砲弾が直撃、吹き飛ばされた。
「「キャー！」」
ウィッチ達は5人とも傍の河口に吹き飛ばされた。
吹き飛ばされたウィッチ達はすぐに水面から顔を出して状況を把握する。
ルッキーニ「ねえ！何が起きたの!?」
ルチアナ「今の、砲弾だよね？」
フェル「多分沖合の艦隊のよ。
ねえ、みんな無事？」
ずぶ濡れになったフェルが全員の安否を確認する。
マルチナ「私も無事です」
ルチアナ「僕も怪我はないよ」
ルッキーニ「シャーリーがいない！」
マルチナもルチアナもルッキーニも無事だった。
だがシャーリーがいなかった。
フェル「不味いわよ！すぐに探し…伏せて！」
フェルが号令しようとするが特徴的な風切り音が近づいてくるのを感じると伏せる。
次の瞬間、傍の岸壁に命中爆発し破片をまき散らした。
フェル「プハ！兎に角今すぐ…わ！」

シャーリー「ガハッ!ゲホッゲホッ!」
砲弾が爆発してから顔を出し探そうとするとシャーリーが突如水から出てきた。
それを見てルッキーニがシャーリーに抱き着いた。
ルッキーニ「シャーリー!大丈夫?」
シャーリー「大丈夫…痛っ…何だ…血?」
シャーリーは突如頭に痛みを感じ左手で頭を触ると手にはべったりと血がついていた。
彼女は砲弾の破片で左側頭部に大きな切り傷を負っていた。
フェル「貸して、少しくすぐったいかもしれないけど」
するとフェルはシャーリーに近寄ると魔法力を発動して傷の手当てを始めた。
そして少しして傷が塞がった。
フェル「これでたぶん大丈夫よ、急いで陸に上がりましょう」
シャーリー「ああ」
傷が塞がると5人は急いで岸壁に泳いで向かい何とか陸地に上がった。
既に砲撃は終わっていたが地上は阿鼻叫喚の渦であった。
リアルト橋は砲弾の直撃を受け崩壊し、路面には多数の砲弾のクレーターができていた。
更に建物もいくつかは完全に崩壊、半壊したものも半分近くに上り、殆どの建物の窓ガラスは破片と爆風と衝撃で割れていた。
更には吹き飛んだゴンドラ、原形を留めない程に破壊された車、そして多数の死体と吹き飛んだ人体の一部がそこら中に散らばっていた。
シャーリー「ルッキーニ、見るな!」
ルッキーニ「え?何?シャーリー?」
それを見たシャーリーは咄嗟にルッキーニの目を覆った。
無論このショッキングなシーンを見せないという配慮であった。
フェル「酷い…」
マルチナ「こんなことが…」

ルチアナ「なんでこんな事をするんだよー！」
シャーリー「これが…ハインツの言っていた戦争…嘘だろ…なんで…？」
その光景に赤ズボン隊は驚きシャーリーは放心状態だった。
目の前に広がっていたのはハインツが語っていた〝戦争〟だった。

その頃上空では南と西から１５０を超える大編隊が接近中だった。
「こちらシピオ、ダンテ、応答せよ」
『こちらダンテ、現在パドヴァ上空を通過、これよりヴェネチア管区の防空圏に入る』
その編隊の中のＳＭ７９スパヴィエロとカントＺ１００７アルシオーネの大編隊がマッキＭＣ２０５ベルトロの護衛の元ヴェネチアに向け一路北上していた。
指揮官はエットレ・ムーティ中佐、護衛は護衛部隊の第１０航空群司令フランコ・ルッキーニ大尉、ダンテ隊は第１０２急降下爆撃航空群司令ジュゼッペ・チェンニ少佐であった。
編隊はシピオ（スキピオ）のコールサイン、護衛部隊はヴィットーリア、そして先行しているフィアットＧ５５チェンタウロとレッジアーネＲｅ２００５サジッタリオの混成戦闘爆撃機隊、コールサインダンテで編成されていた。
そして編隊を編成する全機には胴体と両主翼に緑と白と赤のストライプが描かれていた。
ムーティ「了解した、先にダンテ隊がヴェネチア周辺の飛行場を攻撃、制圧。
その後我々がヴェネチアを空襲する。
全機、間違っても味方を爆撃するなよ。
攻撃開始後３０分後に今度はトリエステから第二波が来る、こっちはヴェネチア軍の機体も混ざってるから同士討ちに気をつけろ。」
チェンニ『ダンテ了解』

フランコ『ヴィットーリア了解』
ムーティが無線で全機に攻撃の手筈を伝えた。
そして編隊はヴェネチア防空圏に侵入した。

―――――――――――――――

レーダー手A「方位195から国籍不明機の編隊接近、数100以上！」
レーダー手「方位263からも国籍不明機接近！数50以上！」
その頃ヴェネチア郊外の防空司令部ではロマーニャ軍の編隊が侵入したのと同時に目標を感知した。
指揮官「クソ、全機出撃させろ！
先に南から来るのを叩け！西からのは高射砲部隊に叩かせろ！」
兵士「了解！」
指揮官は即座に全戦闘機を出撃させ迎撃に向かわせた。

―――――――――――――――

パイロットA「回せ！回せ！」
パイロットB「上げられる機は全部上げろ！」
パイロットC「どうせクーデターを支援するロマーニャ人だ！
誰があいつらについていくか！」
全機出撃という命令を受けたヴェネチア周辺の飛行場や臨時飛行場ではパイロットたちが並べられたレンドリースされたP―40やP―39、スピットファイアに駆け寄り離陸準備を始めた。
だがそのすぐそばまで既にロマーニャ軍機は近づいていた。
チェンニ「目標視認！さあ！ワルツを踊れ！小人たち！」
「アイ！」
目標を視認するとチェンニは部下たちに指示する。
そして彼は目の前の監視塔に自機の照準を向けた。
それと同時にヴェネチア軍の見張りも気がついた。
見張り「7時の方向！敵機接近！沢山来るぞ！」

見張りが叫んだ直後、見張りのいた監視塔が機銃掃射を受け穴だらけになる。
そしてその上空をロマーニャ空軍のＲｅ２００５が通過する。
更に別のＧ５５やＲｅ２００５もやってくると急降下爆撃やロケット弾を撃ち込んで格納庫や燃料タンク、兵舎、管制塔、高射砲を破壊していった。
また駐機場や地上走行中の機も次々と機銃掃射を浴び態勢を崩したり炎上、爆発した。
だがその攻撃をかいくぐり一部の戦闘機や攻撃を受けるのが遅れた一部の飛行場から戦闘機が離陸しチェンニ隊やムーティ率いる爆撃機隊に向かった。
パイロットＡ『前方11時方向敵機！数5から6！』
チェンニ「敵機も来たか、全機、対地攻撃は程々にして敵機を叩くぞ！
こちらダンテ、これよりヴェネチア軍機と交戦する、シピオ、ヴィットーリア、警戒せよ」
チェンニは無線で報告すると空戦が始まった。
迎撃に来たヴェネチア軍機はその大半がＰ―３９だったが相対するダンテ隊はそれよりも高性能なＧ５５やＲｅ２００５でありもはや一方的であった。
性能差があった上にパイロットの大半は史実で数多くの空戦に参加した元イタリア空軍パイロットかその教育を受けた実戦経験豊富で最も優秀な戦闘機パイロット達、対するヴェネチア軍パイロットは戦闘経験は少なく、ましてや対ネウロイではなく対戦闘機戦の訓練も不十分であったため対空砲の援護もむなしく次々と撃墜されていった。

―――――――――――

チェンニ『こちらダンテ、これよりヴェネチア軍機と交戦する、シピオ、ヴィットーリア、警戒せよ』

ムーティ「シピオ、了解。」
フランコ『ヴィットーリア、了解』
チェンニの無線を聞いたシピオ隊とヴィットーリア隊は警戒し始めた。
各爆撃機の機銃座に兵士達がつき防御機銃を装填、ヴィットーリア隊は上昇し編隊の上方に着いた上で太陽を背にして編隊を援護する。
そしてそれから5分ほどするとヴィットーリア隊の戦闘機の一機が眼下に何かを捉えた。
パイロットB『うん?あれは…敵機です!
斜め右下2時方向、数10以上!』
フランコ「確認した、全機、俺に続け!」
それを聞いてルッキーニが確認、彼は機体をロールさせると急降下して敵機を背後から襲い掛かった。
それに他のベルトロも続く。
ヴェネチア軍パイロットA「クソ、そろそろ敵機が見えるは…クソ!なんだ!?」
ヴェネチア軍機のパイロットが爆撃機編隊を探していると突然背中に衝撃を感じスピットファイアの右主翼の燃料タンクが燃え始めた。
その上を三色のストライプをつけたベルトロが飛び越える。
ヴェネチア軍パイロット「敵機だ!不味い!火が!火が!母さん!」
次の瞬間機体は燃料タンクが爆発し右主翼が折れ錐揉み状態になり墜落した。
奇襲を受けたヴェネチア軍機はなすすべもなく撃墜されていった。
だがこの攻撃を2機の戦闘機がかいくぐると爆撃機隊に接近した。
機銃手A「後方!敵機!」
ムーティ「了解!全機、編隊を密にせよ!繰り返す編隊を密にせよ!」
パイロットC『弾幕を張れ!近づけさせるな!』
戦闘機が近づくと爆撃機は機銃座から弾幕を張って妨害する。

ヴェネチア軍機はそれをかいくぐり編隊の左最後方にいたアルシオーネに狙いをつけると接近した。
パイロットD「後方につかれた！クソ！」
パイロットは振り払おうとするが不可能でありあっという間に銃撃を受けると木製のアルシオーネは出火、あっという間に大炎上し搭載した爆弾に引火して爆発した。
だが戦闘機の方も一機が他の爆撃機の防御機銃の火線に捉えられ被弾、撃墜された。
しかしもう一機は今度は編隊の前に回り込みヘッドオンで攻撃しようと接近する。
編隊は約３５０キロ、一方敵機は約４００キロ以上、相対速度７００キロ以上で接近する。
敵機は編隊の先頭を飛ぶムーティのスパヴィエロに銃撃を仕掛け銃弾が機体を掠め、数発は胴体を貫く。
ムーティ「この！」
ムーティは空中衝突を避けようと機体を上昇させる、だが敵機は食いついたまま離れない。
そして次の瞬間、敵機が被弾し錐揉み状態になって急降下した。
その上をルッキーニのベルトロが通過した。
ムーティ「はぁ、ルッキーニ、助かった」
フランコ『戦闘機は粗方片付けた。
そろそろヴェネチアか？』
ムーティ「どうだ？航法手」
ルッキーニに感謝を伝えるとムーティは振り向いて航法手に現在地を聞いた。
航法手「後５分です」
ムーティ「了解、残り５分だ。
全機、攻撃ポジション、同士討ちに注意！」
ムーティは全機に伝えた。
編隊は爆弾倉を開き、爆撃手は眼下の雲の間から見えるヴェネチア市街を照準する。

ヴェネチア市街に近づくと敵の高射砲弾を届き始め次々と黒い煙が編隊の周囲に発生した。
だが直後、高射砲陣地が爆発した。
それと同時に艦隊が発砲していた。
爆撃手「目標捕捉！」
ムーティ「よし、投下！投下！投下！」
ムーティの合図と共に大量の爆弾がヴェネチア市街に降り注いだ。
だが直後、突然無線が不調になり始めた。
ムーティ「ん？なんだ？こちらシピオ、応答せよ、繰り返すシピオ、聞こえるか？
故障か？」
通信手「分かりません」
副操縦士「中佐、他の機も無線が故障しているようです」
原因不明の不調は手話信号で他の機の不調も伝えられた。
すると艦隊から若干不明瞭な無線が聞こえてきた。
「「方位０８５よりネウロイ接近！全機警戒せよ！繰り返す警戒せよ！」」
ムーティ「ネウロイだ！全機、退避だ」
艦隊は航空機搭載型とはまるで違う極めて強い強度の電波を発信可能な無線機を全艦装備していた。
そのためレーダーで探知したネウロイを無線妨害を無視して警告することが出来た。
艦隊からの警告を聞くとムーティは機体の主翼を振り左旋回して離脱を開始した。
離脱を開始するとネウロイの迎撃に向かうヴィットーリア隊とダンテ隊とすれ違った。

その頃地上ではシャーリー達が砲撃で無茶苦茶になった市街地で民間人を助けていた。
フェル「怪我人はこっちに！」

ルチアナ「フェル隊長、この人を！」
マルチナ「もう大丈夫だから」
シャーリー「これで…」
フェルの治癒魔法で何とか怪我人の手当てをしていると空襲警報と共に爆発音と砲撃音が聞こえ始めた。
それを聞いて空を見上げる。
フェル「あれって…」
シャーリー「高射砲だ！早く！防空壕に！」
シャーリー達は怪我人を抱え近くの防空壕に急いだ。
防空壕に入りしばらくすると頭上にいくつもの衝撃が走り地面が揺れる。
それが治まり地上に出ると地上は完全に破壊されていた。
ルッキーニ「ヴェネチアが…」
シャーリー「酷い…」
その光景に絶句するしかなかった。
その直後、上空を真っ黒い物体が猛スピードで通過した。
シャーリー「あれって…」
フェル「ネウロイ…！」
それはネウロイだった。
するとそこに主翼と胴体に白と赤と緑のストライプをつけたロマーニャ空軍の戦闘機が殺到し攻撃を開始した。
それを見るとシャーリーはルッキーニを呼んだ。
シャーリー「ルッキーニ！」
ルッキーニ「んにゃ？」
シャーリーの目を見るとルッキーニは即座にシャーリーの次の行動を理解した。
すると二人は走り出した。
それにフェルが止めようとする。
フェル「ちょ、どこに行くのよ！」
シャーリー「ユニットのところだ！戦闘機を援護する！」
シャーリーは答えるとユニットを積んでいたトラックに向かって

走る。
そしてユニットを積んでいたトラックのところについた。
だがトラックは爆撃の直撃は受けなかったが至近弾で横転し、さらにキャブの上に瓦礫が落ちて完全に潰れていた。
シャーリー「ルッキーニ、発進台を出すぞ！」
ルッキーニ「うん！」
シャーリーとルッキーニは横転したトラックの荷台に潜り込むと発進台を出そうとする。
だが1トン近い発進台は少し動いただけだった。
シャーリー「もっとだ！もっと引っ張れ！」
荷台の奥で発進台を押しながら前で引っ張るルッキーニにシャーリーは叫ぶが少ししか動かない。
すると手がルッキーニの後ろから伸び発進台を掴んだ。
フェル「あんた達だけじゃ動かないわよ、ルチアナ、マルチナ、手伝って」
マルチナ「はい！フェル隊長」
ルチアナ「任せて～！」
それは赤ズボン隊だった。
フェルとルチアナはルッキーニの側で発進台を引っ張り、ルチアナは隙間を通ってシャーリーの側から発進台を押した。
そして何とか発進台を引っ張り出し立たせると二人はユニットを履いて武器を取った。
シャーリー「ルッキーニ！行くぞ！」
ルッキーニ「うん！」
二人は離陸、ストライカーの轟音を立てながらネウロイへと向かった。

第４話：バトル・オブ・ヴェネチア

シャーリー「ルッキーニ、通信状態が悪い、あまり離れるな」
離陸した二人はすぐに異常なほど無線の状態が悪い事に気がついた。
それは他の部隊も同様であった。
前を向くとそこにはロマーニャ空軍の戦闘機が蠅のようにたかったネウロイがいた。
ネウロイの周りではＧ５５やＲｅ２００５、ＭＣ２０５が２機編隊で一撃離脱を繰り返しながら攻撃を加えていた。
彼らは無線が殆ど使えないため手信号で合図をし攻撃していた。
シャーリー「よーし、行くぞ！」
ルッキーニ「了解！」
二人は戦闘機に交じりネウロイへ攻撃を開始した。
その頃フランコはネウロイを追いかけながら燃料と弾薬の心配をしていた。
フランコ「クソ、弾薬と燃料が足りない…
ん？なんだ？」
航続距離の短いベルトロの心配をしていると突如後ろから全く別の攻撃がネウロイを攻撃し始めた事に驚き振り返る。
するとシャーリーとルッキーニが戦闘機を追い抜いた。
フランコ「ウィッチだ、よし、全機、この気を逃すな！
総攻撃だ！」
するとフランコは主翼を振り急上昇した。
急上昇を開始するとそれに他のベルトロが続いた。
チェンニ「ルッキーニが動いたか、後れを取るな！」
それを見たチェンニも主翼を振ると急上昇、それにサジッタリオとチェンタウロが続く。
編隊はネウロイの真上につくと急降下、ネウロイに急降下して搭載されたＭＧ１５１／２０とＳＡＦＡＴを乱射し表面を削る、更にその後ろから２機編隊で連続してベルトロ、さらにダンテ隊の各機が攻撃

を繰り返す。
するとネウロイは突如変形し加速し始めた。
シャーリー「変形した!?」
フランコ「クソ！しかも速いぞ！こっちは燃料も弾薬もジリ貧だ！」
ネウロイは変形するとそれ以前よりもさらに高い機動力で戦闘機とウィッチを翻弄する。
それに元々設計上航続距離が長くないベルトロなどを操縦するパイロットは燃料の心配をし始めた。
フランコ「頼みの綱は今向かってるはずの第二波か…」
もはや頼みの綱はアドリア海を渡り向かってるはずの第二波攻撃隊だった。
この部隊はクーデター派のヴェネチア軍とロマーニャ軍バルカン派遣航空軍団の連合部隊であり対地攻撃装備が多いものの戦闘機も多数いた。

その頼みの綱である第二波攻撃隊はこの時ヴェネチアの東約３０キロの海面スレスレを飛行していた。
航法手「ヴェネチアまで残り３０キロ」
「了解、高度は今のまま、全機、警戒せよ。
第一波との通信が途絶した、何がいるか分からないぞ」
その編隊のリーダー機のヴェネチア空軍にレンドリースされていたマーチンＡ―３０ボルチモアＭｋⅣでは航法手がヴェネチアへの接近を伝えると機体を操縦する爆撃機隊のリーダー、カルロ・ブスカーリア少佐が機体を上昇させ始めた。
編隊はトリエステ及びアドリア海沿岸地域各地より離陸したヴェネチア空軍の爆撃機とロマーニャ空軍の爆撃機の混成飛行隊でありその護衛も又ヴェネチア空軍機とロマーニャ空軍機の混成だった。
ヴェネチア空軍機隊の指揮官はブスカーリア、ロマーニャ空軍機隊はカルロ・ファッジョーニ大尉が指揮していた。

彼らの任務は第二波としてヴェネチアを空襲、第三波となるロマーニャから北上中の空挺部隊、第１８３空挺師団チクローネと第１８４空挺師団ネンボゥ、第１８５空挺師団フォルゴーレの大空挺部隊の空挺降下前に第一波が撃ち漏らした敵の掃討、敵飛行場の完全破壊、完全なる敵航空戦力の撃滅が狙いであった。

そのため部隊の構成はより細かい動きが可能な軽爆撃機や攻撃機、戦闘攻撃機が中心であり全体的な機動力では上であった。

だが彼らは第一波からの無線通信が突如途絶した事と艦隊からのネウロイとの交戦開始という連絡を受け警戒していた。

更には予定よりもこの時点で遅れていた。

というのもトリエステを離陸した際に一部の機が合流に手間取ったため予定より３０分遅れていた。

ブスカーリア「こちらマメーリ、バリッラ、応答願う」

ファッジョーニ『こちらバリッラ、どうぞ』

ブスカーリア「第一波の事がある、現高度を維持して突入する」

ファッジョーニ『了解、現在１００フィート』

ブスカーリアはファッジョーニに予定とは違う低高度からの強襲を伝える。

彼らが飛んでいたのは海面から僅か１００フィート、約３０メートルであった。

そしてすぐに水平線上に多数の煙と艦影が見え始めた。

ブスカーリア「よし、全機突入！」

煙と艦影を確認するとブスカーリアはボルチモアの主翼を振り機体を高度２００フィートまで急上昇させる。

それに後続のボルチモアも続きさらに護衛の戦闘機隊は急上昇しネウロイに向かった。

見張り員『左舷より国籍不明機接近！』

ベルガミーニ「何!?レーダー！どうなってる！」

レーダー手『低空飛行だったため発見できず！

現在敵味方識別中！』

その頃艦隊では突如第二波が現れたことに混乱していた。

ベルガミーニ「定時連絡は！」

チーマ「受けていません、そもそもこの電波妨害では送られてきたところで受信不能です。」

第二波からの連絡を聞いたがそもそも酷い電波妨害であったため受信不能だった。

ベルガミーニ「何処の機か分かるか？」

見張り員『ヴェネチア軍のボルチモアです！

低空で急速接近中！』

チーマ「閣下、攻撃しましょう！

第一波の戦闘機はネウロイで手一杯です、我々の身は我々で守らなければ」

見張り員からの報告を聞くとチーマは攻撃を要請した。

戦闘機の上空援護は期待できずその上動けないため頼れるのは自らの対空火器のみであった。

ベルガミーニ「うむ…分かった、迎撃しろ！」

チーマ「了解！対空戦闘用意！」

砲術長「目標方位０４８！高度２００！

速度４００キロ！照準急げ！」

ベルガミーニの許可を得るとチーマと砲術長は対空火器を接近するボルチモアに照準、砲撃を開始した。

突如機体の前方に多数の黒煙が発生し砲弾が機体を掠め機体が激しく揺れ始めた。

前方を見ると艦隊から多数の砲弾が飛んできていた。

ブスカーリア「バカか！こっちは味方だ！ローマ！こちら第二波攻撃隊！今すぐ射撃をやめろ！」

ブスカーリアは誤射を止めようと主翼を振り、更に無線で呼びかけるが無線妨害で何も聞こえなかった。

編隊を構成したボルチモアの内の一機が被弾し煙を吐きながら海

面に激突する、更に他の機も被弾し機体に穴が開いたり燃料が漏れ白い煙を吐き始める。
それでもブスカーリアとその部下は強引に誤射を潜り抜け艦隊上空をフライパスした。

ベルガミーニ「しまった！撃ち方やめ！味方だ！撃つな！」
フライパスした時、やっとベルガミーニは撃っていたボルチモアが味方だと気がつき射撃をやめさせようと大声で叫んだが手遅れであった。
誤射を受け被弾していた一機のボルチモアがよろめきながら降下しほぼ裏返りながらヴェネチア軍の復旧中の高射砲陣地があったサン・マルコ広場に墜落、激突の衝撃で搭載されていた爆弾、更に陣地の弾薬と機体の燃料が発火、大爆発を起こし１００メートル以上の爆煙が立ち上った。

シャーリー「な、なんだ!?」
ルッキーニ「サン・マルコ広場が！」
墜落し爆煙が立ち上る様はネウロイとの交戦中だったウィッチや戦闘機パイロットからもよく見えていた。
彼らがそちらに意識を向けたその間にネウロイは彼らを振り払って逃げようと急上昇する。
だが突如ネウロイの表面で大爆発が起きた。
それは第二波の対地攻撃用のロケット弾を装備したスピットファイアであった。
第二波の護衛隊と戦闘爆撃機隊はブスカーリア隊とファッジョーニ隊と分離するとネウロイに殺到した。
彼らはスピットファイアやＰ―３９のヴェネチア軍機だけでなくＭＣ２０５やＲｅ２００５、Ｇ５５、カールスラントから供与されたＢｆ１０９やＦｗ１９０などの対地攻撃装備だった。
彼らはその本来地上の目標に対して使う兵器をネウロイ相手に使ったのだ。

威力では対空用の２１センチロケット弾よりは劣るもののそれが数十発も直撃した。
これまで以上に頑丈なネウロイと言えどこれ程の攻撃を受ければひとたまりもなく表面が半分以上破壊されコアが露出した。
シャーリー「コアだ！ルッキーニ！」
ルッキーニ「任せて！」
コアが露出したのを確認したシャーリーが叫ぶとルッキーニが銃を構え狙撃、コアを破壊した。
シャーリー「やったな！ルッキーニ！」
ルッキーニ「凄いでしょ！シャーリー！」
二人は撃破した事を喜ぶがふと周りを見ると地上で次々と爆発が起きていた。
ルッキーニ「え…」
シャーリー「そうだった…」
その光景を二人は見下ろすだけだった。
第二波は誤射を受けながらも攻撃を開始、残存ヴェネチア軍の掃討と航空戦力の完全なる殲滅を開始した。
第二波が去ると今度は別のエンジン音が南から接近し振り向くとそこには大量の輸送機とそこから降ってきた大量のパラシュートがあった。
そして二人の上空から別の輸送機がビラを撒いていた。
その一枚をルッキーニが手に取り読んだ。
ルッキーニ「〃親愛なるヴェネチアの諸君！
民族の為武器を捨てロマーニャと共に栄光へ、繁栄へ、平和へ、勝利へと進もう！
それが祖国の為、家族の為、故郷の為だ！
イタリア万歳！ローマ万歳！ガリバルディ万歳！国王万歳！〃
どういう事？シャーリー」
シャーリー「成程な…」
ルッキーニが聞くとシャーリーが呟いた。

その日の夜、ヴェネチア市内
シャーリー「酷いな…」
フェル「ええ、これが祖国の為ですって?どこがよ!?」
シャーリー達は残骸で埋め尽くされたサン・マルコ広場にいた。
広場の鐘楼にはロマーニャ国旗が掲げられヴェネチア国旗は打ち捨てられていた。
「爆弾と燃料が満載したボルチモアが墜落した割には被害は軽微そうですね」
「ええ、奇跡ですよ。
火災も宮殿にも燃え移らず、数トンの弾薬も誘爆したのに」
「全くです」
するとシャーリー達に聞き覚えのある声が聞こえ振り向いた。
シャーリー「ニコ!?」
フェル「ヴィスコンティ少佐!?」
ニコ「え?シャーリーさん?ルッキーニさんも」
ヴィスコンティ「マルヴェンツィ、君もいたのか」
そこにいたのはニコと参謀本部のヴィスコンティだった。
シャーリー「なんでいるの!?」
フェル「少佐もどうしてここに?」
二人はなぜここにニコ達がいるのか疑問であった。
ニコ「僕はロンメル閣下から連絡将校としてロマーニャ軍の作戦行動に随伴していたんです。
ヴィスコンティ少佐は僕の案内役です」
ニコはロンメルからロマーニャ軍の統一作戦に随伴してその詳細をロンメルに報告するため来ていた。
そしてヴィスコンティはその案内役だった。
シャーリー「そうだったのか…ところでニコ、どう思う?」
ニコ「どうとは?」

シャーリー「なんでこんなことをする必要が…」
ニコ「イタリアの為ですよね？」
ヴィスコンティ「ああ、祖国イタリアの為だ。
今日、我が民族は再び一つとなったんだ、誇らしい事ではないか」
シャーリーがニコに聞いたが二人の意識はシャーリーとは正反対、このことを素晴らしい事だと捉えていた。
彼らにとってはイタリアは一つの国家、一つの民族であった。
シャーリー「何処が！そのために一体何人死んだと思ってるんだ！
ニコ！見損なったぞ！」
ニコ「シャーリーさん、これが僕たちの戦争なんです。
分かってください。
それじゃあいかないと、明日の朝一でチューリッヒに行かなきゃならないんで」
ニコはそれだけを言うとヴィスコンティと共に何処かに行ってしまった。
ラジオからは誇らしくマメーリの賛歌が流れ、統一を祝っていた。

翌日、チューリッヒ郊外クローテンにあるチューリッヒ空港には多数のＢ―２９シルバープレートが並べられていた。
ニコ「マリエンフェルト大佐」
マリエンフェルト「おお、お客様の到着だ」
その中でニコはこのＢ―２９が所属する第５０９統合爆撃航空団司令マリエンフェルト大佐に声をかけて敬礼する。
マリエンフェルトはニコの肩を叩きながら親しく話していた。
マリエンフェルト「どうだ、すごいだろう？
これが明後日世界を変えるんだ」
ニコ「ええ。本来一か月前に使う予定だったものですね？」
マリエンフェルト「ああ、最高に素晴らしいものを運ぶんだ。」
二人はＢ―２９を眺めながら話していた。

二人の会話の意味はこの二日後、現実となった。

１９４５年８月６日中央ヨーロッパ夏時間午前1時頃、プラハのネウロイの巣上空を数機のＢ―２９が飛行していた。

マリエンフェルト「こちらビクター８２、目標をレーダー照準。ビクター８３、８４は０１１５に機材を投下」

ビクター８３『ビクター８２、了解』

ビクター８４『こちらビクター８４、了解』

３機のＢ―２９は編隊飛行をしながら巣の上空に達するとレーダー照準で巣を捉える。

そして２機のＢ―２９がパラシュートを投下するとマリエンフェルトが操縦する機が丸い特徴的な爆弾を投下、３機は急上昇し１８０度旋回して離脱を開始した。

直後、闇夜を閃光が切り裂き大爆発が発生しネウロイを飴のように溶かして破壊すると猛烈な爆風が機体を揺らし周囲にいたネウロイや地上の物を殆ど全て吹き飛ばした。

翌朝、偵察に来たＢ―２９に乗っていたニコはその光景に絶句していた。

ニコ「凄い…なんて破壊力だ…

まさに神の火…人類の英知だ…」

その三日後、今度はニュルンベルクも同様に吹き飛んだ。

プラハとニュルンベルクを吹き飛ばしたもの、それは人類の英知、核兵器だった。

第５話：激動の月

「しかし、本当にアレが現実にできるとは…
確かにアレは理論上可能だが…」
「アメリカンスキーが実際に作ったんだ、こっちでも作れない訳がないだろう。」
「それどころかこっちの方が簡単に使われるぞ。
何せ民間人の死傷者や捕虜の事を考慮しなくて済むからな」
核兵器投下によるニュルンベルクとプラハの巣の破壊はニュースとなって世界中を駆け巡った。
それはここ、東プロイセン国境近くのリトアニアに設営されたある飛行場で話していたウィッチ達、即ち５０２にも届いていた。
東部戦線はこの数か月で激しく動き春の雪解け前後にはオラーシャ軍がヴァルダイ突出部を殲滅、更に５月にはナルヴァ川を突破、２か月でバルト三国を横断する電撃戦を敢行し７月には前線はリトアニア・東プロシア国境にまで来ていた。
そんな中で核兵器の投下による西部戦線の実質的な南翼の破壊のニュースは衝撃だった。
特に関心を持っていたのがポーだった。
彼は大学で理論物理学を学んでいたからこそこの物理学的な成果に高い関心を持っていた。
ポーとバーテイ、パット、リョーニャ、ヤンはポーカーをしながら雑談していた。
パットの座る椅子の後ろにはひかりが立ち、ヤンの座る椅子の後ろの椅子には椅子の背に持たれたエイラがいた。
ひかり「そうですよね…」
パット「ああ、恋と戦争では何とやらだ。
戦争が早く終わると考えれば少しは気が楽になるがな…」
そう言うとパットはタバコを一口吸うと持っていた手札を置いた。
パット「ところで、俺はこの勝負降りるぞ」
バーテイ「俺もだ」

パットにバーティも同調した。
ポー「お？負けるのが怖いのか？」
リョーニャ「いやな予感がするから俺も降りる」
ポーが煽るとリョーニャも勝負を降りた。
残ったのはヤンとポーだけだった。
するとポーが手札を見せた。
ポー「3から7のストレート、どうだ？これで借りは返して貰うぞ」
ポーが笑みを浮かべながら言うとヤンは手札を見せた。
それを見てポーは絶望する。
ヤン「9のフォーカード。
　全部貰うぞ」
エイラ「流石ミラクルヤンだな」
ヤンの役の方が強かったためヤンは賭けられていた札と酒の瓶をかさっらった。
それにエイラが感心する。
ヤン「まあな」
ポー「畜生…これで25回目だ…」
ポーが恨めしそうに呟いた。

それから1週間後、アルデンヌ地方、サン・ヴィト郊外にカールスラント陸軍の部隊がいた。
砲兵A「ヴァイスハオプト大尉、本当に見つかるんですかね？」
指揮官「そんなものは知らん。命令通り何かいるかいないか調べるだけだ」
それはカールスラント陸軍の音響観測部隊だった。
彼らはボックからの命令でアルデンヌ地方で音響観測任務に就いていた。
音響観測によって地中の中に何かがいるかどうかを確認するのが任務だった。
彼らは1週間近くこの場所で観測していたが未だ何も観測できていなかった。

だがこの数日前からサン・ヴィト周辺を震源とするごく浅い震源の地震が繰り返し起きていた。
地質学者の推定ではこの近くに何かがいるのは確実だった。
砲兵Ａ「はぁ、しかしいるわけないですよ。
地下に何かがなんて。
ドラゴンでもない限り」
指揮官「そうだよな、上の連中梅毒にでも罹ってるんじゃないか？」
砲兵Ａ「フッ、そうでもない限りそんな命令しませんよ」
二人は有り得ないと言いながら機材を設置した小屋の外でタバコを吸っていた。
すると突然地面が揺れ始めた。
指揮官「うぉお、地震だ」
砲兵Ａ「ふぅ、今のは前よりも大きいですよね」
砲兵Ｂ「大尉！何かがいます！」
地震が治まると突然小屋から観測員の砲兵が飛び出してきた。
その報告を聞いて二人は小屋に戻り音響観測装置に食いついていた兵士に聞いた。
指揮官「何があった！」
砲兵Ｃ「大尉、何かがいます。
かなり近いです、距離５００メートル以内、地下推定２５から５５メートル。
サイズは不明ですが何か巨大なものが地下を動いてます」
音響観測装置に食いついていた観測員が報告する。
彼が言うには近くにとてつもなく巨大な何かがいるのだ。
指揮官「まさか本当に…大変な事だすぐに上に報告しないと…」
彼は呟くと電話を取り急いで司令部に連絡した。

シュヴァルリー「まさか本当にいるとは…」
ディートル「それにしても不味いですね…」
その数時間後、パリでは報告を受けた西部戦線の将軍たちが会議をしていた。

発見されたネウロイの対策会議だったが空気は暗かった。
パットン「確かにいる可能性は指摘したがなぜこの時期なんだ…」
ボック「ああ全くだ。
ニュルンベルクとプラハの巣を破壊したせいで西部戦線南翼が伸び切ってるんだ。
もしこの状況で攻勢を受けたらひとたまりもないぞ」
ニュルンベルクとプラハの巣を破壊した結果、西部戦線南翼の戦線が伸び切っていた。
特にアルザス・ロレーヌ以南の地域はフランクフルト~ヴェルツブルク~バイロイト~ピルゼン~レーゲンスブルク~ミュンヘン~シュタイアー~グラーツの戦線となっていたがこの地域にいたのはヘルウェティア軍(1個軍団程度)、リベリオン第1軍、第9軍、ロマーニャ陸軍第1軍、第2軍、ヘルウェティア作戦軍のみでさらにフランクフルト~バイロイト間の戦線にいたのはヘルウェティア軍と第9軍、それに第25軍が側面から支援しているのみで事実上側面を晒していた。
今のところ第9軍が電撃的な侵攻作戦により戦闘の主導権を握っているがもし北から反撃された場合寸断される可能性が高かった。
そのため現在ヒスパニアで再編されたばかりの田中静壱中将指揮の扶桑陸軍第11軍と前田利為中将指揮の第51軍を緊急輸送中だった。
そしてアルデンヌはこの急激に薄くなる戦線と通常の戦線のちょうど境目の少し北にあった。
もしここを突破されれば南翼の突出そのものが包囲殲滅される可能性が高かった。
ボック「兎に角あらゆる増援をアルデンヌに送り込め、予備兵力は？」
するとボックは参謀に予備兵力を聞いた。
参謀「予備兵力は自由ガリア第2機甲師団、ブリタニア軍第1義勇装甲師団ドンブロフスキ、第1パラシュート師団、第23歩兵師団、王立騎兵師団、扶桑軍第107歩兵師団、第51歩兵師団、第11機甲

師団、カールスラント陸軍第２００突撃師団、第１１６装甲師団、第９１歩兵師団、第３５６歩兵師団、第５義勇装甲師団ヴィーキング、第１１義勇装甲擲弾兵師団ノルトラント、第４０義勇擲弾兵師団ライヒスマルシャル、第６１装甲擲弾兵師団フェルト・ヘルン・ハレ、リベリオン陸軍第１６空挺師団、第１１１空挺師団、第８２空挺師団、第１５機甲師団、第１２機甲師団、第１６機甲師団、第１７機甲師団、第１騎兵師団、第２騎兵師団、第７７歩兵師団、第１０６歩兵師団、第９３歩兵師団です。」

西部戦線の予備兵力はガリア軍の１個師団、ブリタニア軍の４個師団、扶桑軍の３個師団、カールスラント軍の８個師団、リベリオン軍の１２個師団であった。

この兵力がガリアとヒスパニア、ベルギカ、ネーデルラント、ブリタニアに点在していた。

ボック「うむ…それなりにあるが問題は上部組織がリベリオン軍の第７軍だけという事か…

第７軍はアルデンヌの南の突出部の根元に投入するとして、残りの師団をどうするか、そしてアルデンヌへの増援をどうするかだ。

アルデンヌにいるのは？」

参謀「実戦部隊として一定以上の能力があるのはヴァレンシュタイン師団以外では５個山岳師団と１個騎兵師団のみです。」

アルデンヌはゲリラの活動が激しくその上大規模な部隊の展開には向かない土地であったため元々手薄であった。

勿論この地帯を突破された場合の計画は立てていたがそれは敵をアルデンヌで消耗させつつ突出させ撃破するという典型的な機動防御戦であった。

この場合の絶対防衛線はマース川であった。

これはあくまで現状のライン川沿いの戦線を突破された際の防衛計画であり既に背後に浸透した敵に対する防衛計画ではなかった。

そのため事実上戦線後方であるサン・ヴィト周辺にいたのは各種の義勇兵部隊で任務もゲリラの掃討でネウロイとの本格的な戦闘は考

慮されていなかった。
ボック「これは想定以上の大事だ…
至急西方総軍参謀本部に掛け合わないといかんな…」
ボックが事態の重大さを認識し呟いた。

その頃、そこから数千キロ離れたインド洋、マダガスカル沖を一つの艦隊が船団護衛をしながら航行していた。
それは扶桑海軍第３遣欧派遣艦隊第２任務部隊であり船団はエリトリアのマッサワからジブチを経由しケープタウンに向かっていたＭＤＫａ２６５３船団であった。
この船団はマッサワとジブチでエチオピアの鉱物資源及び各種食糧、負傷兵をケープタウンに輸送していた。
この前月のスーパーチャージ作戦によってアフリカ戦線は大きく動いていた。
北アフリカだけでなく東アフリカ戦線でもロマーニャ軍とブリタニア軍、それにヴェネチア東アフリカ植民地軍（ＡＯＶ）が反攻を開始し一気に北上しエジプト中部ワーディ・ゲディート県以南を制圧しナイル川沿いに一路カイロを目指していた。
また沿岸部ではスエズ湾の入り口でリゾート地のフルガダを占領しシナイ半島ではスエズ運河の手前６０キロまで進出、海上では潜水艦隊がスエズ湾の奥深くにまで侵入し来たるスエズ運河攻略作戦の為の偵察活動をしていた。
だが８月初頭に起きたヴェネチア軍のクーデターと併合、そしてヴェネチア軍の武装解除により東アフリカ戦線でも戦闘が勃発、大多数のヴェネチア軍は武装解除されたがおよそ６０００人のヴェネチア兵が武器を持って逃走、エチオピアの山岳地帯で現地の独立運動と協力して抵抗運動を始めてしまった。
そのためエチオピアやエリトリア、ソマリアではゲリラ戦が始まり現地のロマーニャ軍とブリタニア軍が掃討作戦中だった。

遣欧派遣第３艦隊第２任務部隊は空母天城を旗艦とする空母１と５隻の駆逐艦からなる艦隊でありパ・ド・カレー経由でコペンハーゲンに移動、そこで先行していた本隊と合流予定だった。
指揮官は角田覚治少将であった。
その甲板では二人の少女がいた。
宮藤「んー勉強ばかりじゃ大変だなぁ…」
「宮藤少尉！何をやっているんですか！」
それはマルス作戦後退役し二階級特進したもののすぐにヘルウェティアへの留学が決まり向かっている途中の宮藤とその随行の服部静夏士官候補生だった。
宮藤は艦内で勉強ばかりさせられていたため気分転換に甲板に上がったところを服部が咎めていた。
宮藤「静夏ちゃん、ちょっと休憩。
折角いい天気だし」
服部「休憩が終わったらすぐに戻ってください、いいですね？」
すると突如艦内にアラームが響いた。
宮藤「なに？」
服部「なんでしょうか」
「警戒態勢！方位２１５より国籍不明機接近！数一！超低空です！」
それは国籍不明機が接近してきているというアラームであった。
服部「少尉！今すぐ戻りましょう！」
宮藤「うん！」
すぐに宮藤は戻ろうと最寄りの出入り口に向かおうとした直後、上空をその国籍不明機である白い星が書かれたＦ４Ｕコルセアが通過した。
そしてその国籍章を見て宮藤は驚いた。
宮藤「あ！」
服部「少尉？どうしたんですか？」
宮藤は立ち止まると上空を通過し左舷側を飛ぶコルセアを眺める。
するとコルセアは機体を旋回させると天城の真後ろに付き主脚を

降ろして緩やかに降下し始めた。
その光景は艦橋の角田達にも見えていた。
角田「何をする気だ?」
艦長「まさか着艦するつもりでは…」
角田「今すぐ着艦体制を整えろ!急げ!」
すぐに角田は着艦用意を命じた。
その直後艦の十数メートル上を高速でコルセアが通過した。
「着艦体制!着艦体制!」
服部「え…」
着艦体制を整えるよう命じたこの命令に服部は混乱する。
その間に水兵達は急いで着艦体制を整え服部と宮藤は傍の左舷キャットウォークに潜り込んだ。
準備が終わる頃にはコルセアはもう一回りして緩やかに降下しながら着艦フックを降ろして降下し飛行甲板に激突、フックが甲板のワイヤーを掴み機体を停止させた。
全てが終わると宮藤はキャットウォークから顔を出す。
宮藤「止まった…」
様子を見ると宮藤はキャットウォークから飛び出し側面にトレインデストロイヤーIIと書かれたコルセアに向かった。
服部「少尉!危険です!戻ってください!」
宮藤「大丈夫だよ、危険じゃないから!」
服部は止めようとするが宮藤は聞く耳を持たず機体に駆け寄り未だダブルワスプエンジンが回るコルセアの左翼に上りコックピットを覗き込んだ。
「スロットルレバー、アイドル、点火プラグ、オフ、可変ピッチ、フェザーの位置、フラップ、格納、ギア、油圧ブレーキ解除、緊急時チェックリスト完了。
ん?」
宮藤「大丈夫ですか?」
「大丈夫じゃないよ!バードストライクだ、ところでこの空母は?」
宮藤が聞くとパイロットが答えた。

この頃にはコルセアのエンジンは停止していた。
宮藤「天城です」
「アマギ?日本か?」
宮藤「まあ…その…話せば長いです…
ところで、お名前は?」
フランク「俺か?フランシス・ジェイコブ・サレンバーガー海兵隊大尉、フランクでいいぞ嬢ちゃん」
そう言うとフランクは手を伸ばして宮藤と握手した。

第６話：海兵隊員

フランク「じゃ、じゃあつまりアレか？
　ここは異世界で、しかも７年も前の１９４５年の８月ってことか？」
宮藤「はい、そうです。
　信じられないでしょうけど…」
フランク「まあ信じるけどさ、だって俺の知ってるアマギって空母は全然違う船だし」
服部「少尉、この人の言っている事を信じるのですか!?」
それから数十分後、フランクと宮藤、服部は艦内の一室で話していた。
宮藤はここが異世界だという事をフランクに説明していた。
だが服部は理解できていなかった。
宮藤「うん、だって事実だからさ」
服部「何を根拠に言っているんですか！」
フランク「あー喧嘩しないでもらえるか？」
服部「部外者は黙ってください！」
服部と宮藤は口論を始めフランクが止めようとするが止まりそうになかった。
するとドアが開き海軍将校が入ってきた。
それに気がつき服部が振り向くとすぐに直立不動の姿勢を取り敬礼する。
服部「し、司令長官閣下！」
角田「何をやっていたのかね？服部士官候補生」
服部「そ、それは…」
入ってきたのは角田と参謀だった。
角田は口論をしていた服部を咎める。
フランクは角田の服装から只者ではないと判断し立ち上がり敬礼する。
角田「うむ、君よりそこの海兵隊員の方がずっと礼儀正しいぞ。」

フランク「アドミラル、自分は合衆国海兵隊第２１４戦闘飛行隊所属フランク・サレンバーガー大尉であります」
角田「うむ、キャプテンサレンバーガー。
私は扶桑海軍第３遣欧派遣艦隊第２任務部隊司令長官角田覚治少将だ。」
服部「し、司令長官！し、知っているのですか!?」
角田がフランクの申告を聞いて疑問に思わない態度に服部が驚いた。
角田「まあな、君、彼には敬意を払え。
彼は大尉だ、君よりも階級は上だ。
ましてや海兵隊員だ、これは命令だ」
服部「わ、分かりました…」
角田「まず、色々聞きたいが、おっとまず座ってくれ」
角田は服部にくぎを刺してからフランクに話しかけるがまず着席を促した。
フランクは促されて着席した。
角田「うむ、色々聞きたいが何があった？
こちらに来た者は殆ど場合何かしらの理由で死んでいる、病死意外だがな。」
フランク「はい、朝鮮半島のハムンからウォンサンに向かっていた中国兵を乗せた軍用列車をウォンサンの北１５キロ付近で攻撃中に鳥と衝突、そのままコントロールを失い地面に叩きつけられたと思ったら次の瞬間にはインド洋上空でした。」
角田「ちょっと待て、アメリカは中国と朝鮮半島で戦争しているのか？」
フランク「いえ、ノースコリアとチャイナです。
２年前の５０年の６月に突如ノースコリアがサウスコリアに侵攻、それにアメリカ以下の国連が反応し国連軍を派遣、一時はプサン周辺に追い詰められるもその後インチョンに我らが海兵隊が上陸し北朝鮮軍は瓦解、一気に今度は中国国境まで追い詰めたものの中国が義勇兵を送り込み逆に押され３８度線前後で戦闘がずるずる

と続いている状況です」
フランクが朝鮮戦争の流れをざっと話した。
その内容を参謀はメモしていた。
角田「うむ、分かった」
その後角田とフランクは朝鮮戦争の戦術や兵器について話した後立ち上がりフランクと握手し部屋から出て行こうとするが出る前に服部と宮藤の方を見た。
角田「宮藤少尉、服部士官候補生、君達を彼の世話役に任命する。命令だ」
服部「は、は？司令長官!?」
宮藤「分かりました」
そう言うと驚く服部を無視して出て行った。

服部「私は信じませんよ！」
フランク「信じないなら別に俺の世話役なんてしなくてもいいんだぞ？」
服部「でも命令ですので、何なりとお申し付けください。」
それから少しして、3人はフランクに宛がわれた部屋にいた。
服部は文句を言っていたものの命令に従って世話役をしていた。
フランク「はぁ、じゃあそこで3回回ってからワンって言って」
服部「ふざけてますか？」
フランク「ジョークだよジョーク。
士官学校で習っただろ？士官たるもの常にユーモアを忘れるべからず。
ユーモアを解せない士官は二流であるって」
フランクはジョークで服部をおちょくる。
おちょくられた服部は不満だった。
服部「そんなことは習ってません。
士官は常に士官らしく行動しろ、そうは習いました」
フランク「だからと言って愚直に命令に従い続けるのはナンセンスだ。

士官は常に高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に動かなければならない。
命令も重要だがそれ以上に刻一刻と変化する状況において部下をどう率いれば最善の結果を得れるかを考えるものだ。
柔軟性と自主性は不可欠だ、時には命令を破るぐらいの気概と判断力がいるね」
フランクと服部では士官に求める資質に違いがあった。
それはアメリカと日本の文化的な違いがあった。
日本軍は命令に対する盲目的服従があったがそれが弱点であり奇襲などの状況の変化についていけずそれ以前の策に固執し不利に陥るのに対し米軍は柔軟性と自主性を重んじ状況の変化に良く対応していた。
宮藤「あの、フランクさん、おなか減ってませんか?」
フランク「え?もうそんな…
なあ今タイムゾーンは何処だ?
腕時計をＵＴＣ＋9で設定してるから調整しないと」
宮藤が聞いてきてフランクは腕時計を見るが腕時計の時間は韓国時間に合わせてあったため全くあっていなかった。
宮藤「確かＵＴＣ＋2です」
フランク「じゃあ―7だな。
もう昼過ぎかよ」
腕時計を調整すると時間は昼過ぎであった。
宮藤「はい、おにぎり作ったんですけど食べますか?」
フランク「オニギリって確かライスボールだよな?
食うよ、中身は何だ?」
宮藤はお握りを作ってフランクに持ってきていた。
宮藤「えーと、梅干しって言う扶桑の…」
フランク「ウメボシか。
一つ貰うよ」
そう言うとフランクは一つとって食べ始めた。
それにつられて宮藤も一つとって食べ始める。

宮藤「フランクさん、おにぎりとか梅干しを知ってるんですか？」
フランク「ああ、４８年まで日本にいたからな」
服部「日本って何ですか？」
フランクは進駐軍の一員として４８年まで日本にいた。
そのため日本文化や食には慣れていた上に簡単な日本語程度なら可能だった。
だが服部は日本が何かわからず聞いた。
宮藤「フランクさんの世界の扶桑だよ」
フランク「ああ。戦争に負けて一面焼け野原、市民の生活も極貧状態で街に出れば子供が集まってきてお菓子をねだってくるような状況だったがな」
服部「え…」
宮藤が説明しフランクが戦後日本の状況を語ると服部は絶句した。
戦後日本は一面焼け野原であり経済は破綻、極貧状態であった。
フランク「まあ全部陸軍の、今は空軍のルメイが全部焼いたんだがな。
核兵器も二発広島と長崎に落として俺達が降したんだ」
宮藤「え、広島と長崎に？」
フランクが核を広島と長崎に落としたと言うと宮藤が反応した。
フランク「ああ、落としたぞ。
一撃で街が消えたらしい」
宮藤「そんな…」
フランクの言葉に宮藤は絶句した。
まさか本当に落とすとは彼女は思っていなかった。
フランク「それで日本本土で戦わなくて済んだんだ。
いい事じゃないか」
フランクはそう言うが宮藤は納得できなかった。

数日後、ケープタウン沖
角田「酷い霧だな。
各艦現在の距離を維持しろ」

艦長「は」
輸送船団と分離した艦隊は霧の中を航行中だった。
霧は非常に濃く船首さえ見えなかった。
他の船はライトをつけて何とか確認できたが距離や陣形の維持はレーダーに頼るほかなかった。
するとレーダー手が報告した。
レーダー手『報告！艦首方位３００、距離１．５カイリ付近に大型の物体を確認』
艦長「見張り員、報告しろ」
見張り員『こちら艦橋見張り、特には…』
レーダーが巨大な物体を至近距離で発見したが見張りは確認できなかった。
艦長「分かった、見えたらすぐに報告しろ」
情報がない以上そう伝えるしかなかった。

そしてそれから少しして見張りは前方、進路の僅かに左側に何かを見つけた。
見張りＡ「ん？なんだ？」
双眼鏡を覗いて確認する。
そしてすぐにそれが何かに気がつくと伝声管に叫んだ。
見張り「前方に氷山！」

見張り『前方に氷山！』
士官Ａ「了解！艦長！前方に氷山！」
見張りの叫びにすぐに艦橋要員は行動を開始した。
艦長はすぐに操舵手に叫ぶ。
艦長「面舵一杯！」
操舵手「面舵一杯！」
操舵手は操舵輪を右に全速で回す。
更に艦長はエンジンテレグラフに駆け寄ると後進一杯を指示した。
その指示を受け機関室では急いでエンジンを逆回転させ後進させ

ようともがく。
だが天城の巨体はそう簡単に止まるわけでも進路が代わるわけでもなかった。
見張り『氷山接近！あぁ！ぶつかる！』
艦長「水線下水密扉閉鎖！衝撃備えろ！」
艦長が喫水線下の水密扉閉鎖を命じ衝撃に備えるよう叫んだ直後、天城の左舷が氷山に激突、艦橋要員は全員衝撃で倒れるか傍にあったものに捕まり甲板には氷山の一部が落下、艦橋マストの一部も折れた。
衝撃が治まり、船体が安定すると艦長は立ち上がり叫ぶ。
艦長「被害報告！」
士官Ａ「報告！左舷第二水密区画及び第三缶室浸水！」
艦長「応急員は浸水を止めろ！
護衛艦に衝突したと伝えろ！」
士官Ａ「は」
被害は左舷への浸水程度だった。
艦長は護衛艦に氷山との報告を伝えさせる。
だが直後別の士官が別の重大な報告を伝えた。
士官Ｂ「報告！左舷補助発電機室で火災発生！」
艦長「何！消火急げ！何としても火災を止めろ！」
左舷の補助発電機室での火災は重大な問題であった。
角田「確か隣は…」
艦長「はい、弾薬庫と魚雷調整室です。
おい！自動消火装置はどうした！」
隣は弾薬庫と魚雷調整室だった。
この二つの部屋には多数の弾薬及び魚雷が保管されていた。
艦長は伝声管で状況を報告させる。
士官Ｄ『ダメです！衝撃で故障！補助バルブも破損してます！
通路も損傷で通れません！』
艦長「どんな手を使っても構わん！何としても火を消せ！
機関長！補助発電機室への注水は！」

氷山との衝突で区画は酷く損傷し電気系と配管に損傷が発生、消火システムが故障していた。
更に通路も損傷で通行不能だった。
艦長はキングストン弁を管理する機関長に注水可能かどうかを聞く。
機関長『無理です！キングストン弁は現在第三缶室の排水作業に使用中、終わるのに後最低でも３０分はかかります！』
艦長「ある程度排水出来たらそれでいい！
すぐに発電機室への注水に使用できるようにしろ！」
キングストン弁は排水作業に使用中でありすぐに使える状態ではなかった。
そのためある程度の排水が完了次第注水に回すよう命令した。

その頃火災が発生した補助発電機室の傍の通路では消火班の一部が衝突で封鎖された箇所で立ち往生していた。
するとそこに服部とフランクがやってきた。
服部「到着遅れました」
フランク「火災って何があった！」
士官Ｃ「見ての通りだ、何とかできないか？」
服部「了解しました」
士官は服部に目の前の封鎖された通路を見ながら言う。
服部は魔力を発動すると通路を塞ぐ外板の割れ目に沿ってこじ開けようとする。
だがある程度割れ目が開くと中から火が噴出し服部はシールドを張って下がる。
フランク「く、想像以上だな」
士官Ｄ「駄目か」
士官Ｃ「結城！無事か！」
その火炎はフランクの想像以上だった。
士官は伝声管で反対側に閉じ込められた結城兵曹長に状況を聞いた。

だが状況は悪化していた。
結城『火がそこまで迫ってます！
　今すぐ水密扉を閉じて注水してください！』
士官C「なんだと!?」
服部「え…」
結城の言葉に服部は茫然とする。
結城『お願いします！早く注水してください！』
士官C「しかし、それではお前が」
結城『このままでは弾薬庫が誘爆します！急いでください！』
結城は自らを犠牲に消火するよう懇願した。
フランク「注水するべきだ。彼の勇気ある決断を最大限尊重するべきだ」
士官C「しかし…」

そのやり取りは艦橋でも聞こえていた。
それを聞いた艦長は排水作業中の機関長に連絡する。
艦長「機関長、何時注水できる?」
機関長『待ってください！あと3分で排水ポンプだけで排水可能レベルまで行けます！
　切り替え含めてあと5分、いえ4分待ってください！』
艦長「分かった、４分後に補助機関室への注水を開始する。
　総員区画から退避だ」
艦長はキングストン弁の使用が可能になる４分後に注水の開始を命令した。

士官C「艦長より命令が出た。
　水密扉閉鎖、応急注水用意、４分後に注水開始」
艦長からの命令を受け服部達は退避と水密扉の閉鎖作業を開始した。
士官D「水密扉閉鎖」

水兵「了解」
だがそれは事実上結城を見捨てることになるため彼らは気乗りしなかった。
それでも命令であり何よりその判断は正しいため水密扉の閉鎖を開始した。
士官C「すまん、結城…」
フランク「彼の義務の範囲を超えた自己犠牲的行為に対して最大限の敬意を」
士官は帽子を深く被りフランクは閉じ始めた水密扉に向かって敬礼する。
すると突然後ろからバケツが転がる音と水がかかる音がして振り返る。
そこには水を被りパイプを持った宮藤がいた。
服部「宮藤さん！」
士官D「宮藤さん」
フランク「宮藤、何をする気だ」
宮藤「どいて」
フランク達は驚くが宮藤はフランク達を押しのけて水密扉に向かう。
すると服部が宮藤の腕を掴んで止めた。
服部「駄目です！宮藤さん、水密扉が閉じます！」
宮藤「中に人がいるんでしょ！」
服部「艦長命令です！」
宮藤「だから何なの！」
服部は止めようとするが宮藤の凄みにひるむ。
そのまま宮藤は服部達を振り切って水密扉の隙間から補助発電機室に入ってしまった。
その様子を見てフランクが呟いた。
フランク「バカだな」
服部「え、ええ…」
フランク「あいつは本物のバカだ。

だが英雄にはバカが必要だ、仲間の為に本物のバカになれる奴がな」
フランクはそう続けた。

艦長「状況は」
士官A「弾薬庫室温上昇、危険温度までおよそ三分」
艦橋では艦長が状況を聞いていた。
状況は刻一刻と悪化しつつあった。
艦長「注水準備は」
機関長「排水作業中断中。
あと2分で注水できます」
艦長「注水切り替え完了次第即座に注水開始だ。
その時補助発電機室内に誰かがいてもやれ」
キングストン弁の切り替えにはあと2分必要だった。

二分後
士官C「二分だ、注水開始」
服部「宮藤さん…」
士官が時計を確認すると僅かに開いていた水密扉が閉鎖された。
だが閉鎖直後、スプリンクラーが作動した。
水兵「水だー！」
士官D「よっしゃー！」
フランク「素晴らしい行為だ。模範的な義務の範囲を超えた英雄的行為だ」
その行為をフランクは讃えるが服部は微妙な表情をする。
しばらくして二人は無事救出された。

第７話：英雄的行為

宮藤「寒いね…アフリカってもっと暖かいと思ってた」
フランク「ああ、この辺りは吠える４０度だからな。
　それに南半球だから今冬だしな」
それから少しして、服部は天城の飛行甲板の端にいた。
その隣にコートを着た宮藤とフランクがやってきた。
だがその空気は非常に気まずい雰囲気だった。
宮藤「さっきはごめんね、怒鳴ったりして」
服部「いえ、でも宮藤さんのやった事は間違ってます」
宮藤が話しかけると服部が宮藤の例の行動を非難した。
服部「どうして命令を守らなかったんですか？」
宮藤「ごめん、でもみんな助かって良かったよね」
服部「違います！」
フランク「何が違うんだ？」
服部の言葉を遮るようにフランクが口を出した。
服部「分からないんですか！船が沈むかもしれなかったんです！
　艦長の命令は最良の物でした！」
フランク「確かにそれは認めよう、だが君は彼女の義務の範囲を超えた英雄的な行動を非難するのかね？
　君は命令を無視した上で行い成功した英雄的行為を命令違反だからという理由で認めないのかね？」
服部「宮藤さんがうまくいったのは偶々、偶然なんです！」
服部がそう言うとフランクが聞いた
フランク「じゃあ聞くがあんたは何をした？」
服部「それは…」
フランクの質問に服部は黙ってしまった。
フランク「彼女は誰もできなかった事を成し遂げた。
　そして艦とその乗組員の命を救った、なぜそれを讃えない」
服部「じゃあフランクさんは宮藤さんのやった事は正しいと思うの

ですか?」
　すると服部はフランクに聞き返した。
フランク「ああ、正しいと思う。
　彼女の行った行為は名誉勲章に推薦してもいいぐらいだ」
服部「どうしてですか?命令に従わなかったんですよ」
フランク「確かに命令にしたがなかった、だが彼女の行動は最良でありそして英雄的だからだ。」
服部「何が英雄的なんですか!命令は絶対なんですよ!」
服部がそう言うとフランクは深呼吸をすると話し始めた。
フランク「服部、俺には兄がいた。
　同じ海兵隊員で名誉勲章受勲者だ。
　４５年にオキナワで防衛を指示された陣地で日本軍から夜襲を受け次々と部下が戦死、負傷する中、兄は部下全員に退避を指示、自らは命令を拒否した3人の部下と共に陣地に残り撤退を援護、味方の支援が行われるまでの約3時間に渡り日本軍を撃退し続け最終的に3人で１２４人の日本兵を殺害した。
　陣地そのものは奪われたが3人は負傷しながらも味方陣地に辿り着いて救出され手当てを受けたが兄は手当てを受けると翌朝には無事だった部下と共に陣地の奪還に向かい前夜の戦闘で左肩を撃たれていた兄は拳銃を片手に部下に向かって叫びながら先頭に立ち突撃、陣地に辿り着くまでに3回撃たれるがその度に立ち上がると前進し続け陣地の３０ｍ手前に辿り着いたところで倒れるが最後の力を振り絞り手榴弾を投げ込み日本兵を倒すと倒れ戦死した。
　その勇敢且つ大胆で英雄的、義務の範囲を超えた英雄的行為によって兄は名誉勲章を授与された。
　彼女を英雄だと言わないのなら、君は全ての英雄と称えられるべき人々を愚弄したも同じだ」
　フランクの兄は英雄、それも合衆国の軍人として最高の名誉である名誉勲章受勲者だった。
　名誉勲章は議会の名において合衆国の全ての軍人に与えられる最高の名誉でありその受勲者の多く、特に第二次世界大戦以降は受勲さ

れる行為によって命を落としている。
その割合は大戦の功績で授与された４７１人の内２７３人、朝鮮戦争での１４５人中１０７人が殁後授与、更にベトナム戦争終結からその後２０１０年までの３７年間は殁後授与のみであった。
例えば米陸軍の軍曹、シルベスター・アントラクは１９４４年に部下を銃撃する２００ヤード先のドイツ軍の機関銃に対して銃撃しながら突撃、３度撃たれるも立ち上がり銃撃を続け機関銃を破壊し陣地を奪うがその直後、ドイツ軍の銃撃で戦死するもその行為から名誉勲章を授与。
第４４２連隊戦闘団所属だった日系人のサダオ・ムネモリ上等兵は自分のいた塹壕にドイツ軍の手榴弾が投げ込まれたのに気がつくと二人の戦友を救うため手榴弾に覆いかぶさり戦死し戦友を救った行為から授与。
アメリカ海軍の潜水艦グロウラー艦長ハワード・ウォルター・ギルモア中佐は１９４３年、グロウラーが日本海軍の特務艦早崎と衝突、早崎から銃撃や砲撃を浴びせられ彼と甲板に出ていた兵士全てが負傷、すぐに兵士達は艦内に退避し最後に彼が残ったが彼は艦内の乗組員に対して一言「潜航しろ」と叫びそれに艦内に退避した副長は従いグロウラーは急速潜航、危機を脱するもギルモア中佐は戦死、自らを犠牲に艦とその乗組員を救った事により潜水艦乗組員として初めて名誉勲章を授与。
１９４４年駆逐艦ジョンストン艦長アーネスト・Ｅ・エヴァンズ中佐はサマール沖で味方空母部隊を護衛中に日本海軍の大艦隊と遭遇、彼は味方空母を救うため命令を受ける前に空母から反転、日本艦隊に突撃、その後約3時間に渡りジョンストンとその僚艦たる弱小艦隊は世界最大の戦艦を含んだ大艦隊相手に奮戦、味方空母の損害を1隻に抑えた、だがジョンストンは撃沈されエヴァンズ中佐も戦死、彼も又その素晴らしい敢闘精神と行動により名誉勲章を授与された。
朝鮮戦争でも海兵隊員のジョゼフ・ビットリは中国軍の猛攻を受け戦友の撤退を援護するため二人の戦友と共に陣地に残り攻撃し続け更に破壊された味方陣地との間を動きながら援護し多数の中国兵を

殺傷、撃退したが最後に負傷した戦友の撤退を援護しようとした直後撃たれて戦死、その超人的な英雄的行為に対して彼は名誉勲章を殁後授与。

ベトナム戦争では中立国ラオスでの秘密任務中に負傷した戦友を救出したものの戦死したリチャード・エチバーガー空軍上級軍曹に殁後４２年経って機密解除と同時に彼に名誉勲章が授与された。

そして比較的知られている例として１９９３年モガディシュの戦闘で撃墜されたヘリの乗員を救出しようとし戦死した二人のデルタフォース隊員のゲイリー・ゴードン曹長とランディ・シュガート一等軍曹に対して授与された。

名誉勲章を授与されるという事は軍人としてだけでなく合衆国市民としても最高の名誉でありその一族の誇りでもある。

それはフランクにとっても同じであった。

フランク「これ以上言うつもりなら君を海に捨てるぞ」

そう吐き捨てるとフランクは部屋に戻っていった。

時は遡りこの二日ほど前、パリの司令部では新たな作戦書類が作成、西部戦線の各部隊の司令官に送られた。

ボック「うむ、これで叩き潰せるのか?シュムント」

シュムント「はい、これで叩き潰せなければ折角優秀な参謀を集めた甲斐がないですよ」

パリの司令部ではボックが連合軍西方総軍参謀部人事課長ルドルフ・シュムント中将と共にいた。

ボックの手にはアルデンヌ地方のネウロイに対する作戦書類が握られていた。

ボック「強力な重砲部隊を集中投入し行動を開始した直後の全火力で以て破壊、無理な場合、又は１０月までの行動を起こさなかった場合第６１０スコードロンを投入し破壊する。

まあこれだけならば素人でも思いつくだろうな」

シュムント「ええ、しかし面白いのが次ですよ」

西方総軍の対処は火力を集中し破壊するという極めてオードソックスなものだった。
だが重要なのはこの次だった。
ボック「もし行動を起こした場合、砲撃で以て破壊すると同時にトリニティ作戦を発動、攻勢地点の両翼を突破し攻撃そのものの中断を強いる。
更に敵主力を破壊し一気に戦線をエルベ川まで押し上げる。
一石二鳥を狙ってないか？」
シュムント「ええ、狙ってますよ。
欲張りですが一方向から殴るより三方向から殴った方が効率的ですよ」
ネウロイの攻勢と同時に連合軍はトリニティ作戦、即ち北からベルリンに向かうカメルレンゴ作戦、南から北上し南東部カールスラントを解放するコンコルダート作戦、そして西からエルベ川に突進するコンクラーベ作戦を同時に発動し逆に敵戦力を包囲、撃滅し西部戦線に大穴を開けるつもりだった。
欲張りにも程があった。
ボック「そうだと思ったよ。ところでサン・ヴィトの航空支援は？」
この作戦のキーとなるのはサン・ヴィトであった。
このアルデンヌの交通の要衝の周囲に砲兵陣地を設置する予定だった。
だがサン・ヴィトは比較的周囲の飛行場から離れていた上に想定される状況では最も近いアーヘンの飛行場の支援は期待できない、そうなれば次に近いのはサン・トロンだった。
シュムント「確かマロリー中将が出張って５０１をウィッチ集団〝サン・トロン〟として臨時再編するそうだ。
今頃命令が各地に届いてるはずだよ」
彼の言う通り命令は各地の元５０１に届けられ集められた。

――――――――――――

ポー「もう行くのか？」

ヤン「ああ、何せ〝大至急〟だからな。
それにここからだとオスロ経由でブリュッセルまで向かわないといけないからな」
丁度その頃、リトアニアではポー達とヤン達が荷物とユニットが二機のリスノフＬｉ―２に積み込まれているのを横目に会話していた。
ヤン達はランスからの緊急命令で大至急サン・トロンに向かう途中だった。
ポー「そういえばそうだな。
面倒だがな」
ヤン「ああ、その上オスロで機体を乗り換える予定らしいからオスロで一日かかるし色々大変なんだ」
サーシャ「そうでしたね、Ｌｉ―２だとユニット３機と３人を同時に運べませんから」
彼らはオスロ経由でしかもオスロで機材をＬｉ―２からブリタニア軍のアブロランカストリアンに乗せ換えなければならなかった。
というのもＬｉ―２の貨物積載能力は２９００キログラムだがユニット一組で約１トンあるため１機では全部積み込められないため２機に分ける必要がある上に安全のため北欧経由、更に限界まで積載したＬｉ―２の航続距離では直接サン・トロンに飛べない上に北欧の空港にはオラーシャの空軍の設備が殆どないためここで載せ替えなければならなかった。
エイラ「本当、面倒くさいよな」
ヤン「本当にそれだよな。色々あるのは分かるが」
この面倒な状況をエイラとヤンは愚痴る。
サーニャ「二人共そんなこと言わないの。
サーシャさん、皆さん、お世話になりました」
二人を諫めるとサーニャが二人に感謝の辞を述べる。
サーシャ「いえ、天候が悪くなってますから気を付けて」
ポー「てめえ行く前に俺の５０００ドル返せ！」
サーシャ「ポーさん？全部あなたが賭けて負けたものですよね？」
ポーがヤンに突っかかるとサーシャが威圧して止める。

ヤンは賭け事好きのポーからこの一か月で５０００ドルを手に入れていた。
ポー「そ、それはサーシャ…」
サーシャ「兎に角、気を付けて」
エイラ「じゃあな～」
ヤン「次来るまでにポーカーの腕上げろよな～」
３人はＬｉ―２に乗り込むと離陸しオスロ経由でサン・トロンに向かった。

それから逆に今度は１０日後、サン・トロンでは元５０１のウィッチが集められていた。
シャーリー「ハインツ～聞いてくれよ！この1か月で色々あったんだよ！」
ハインツ「知ってるよ、後で話聞くから離れてくれ。
で、閣下何の御用でございましょうか？」
サン・トロンのハインツの執務室ではシャーリーが座って電話をかけていたハインツに抱き着いて色々話していた。
リュッツオウ『ああ、ヴァレンシュタイン少佐。
５０１を最大限集めたかったが３名欠員だ。
そこでサン・トロンのシュナウファー少佐を代わりに補填する、いいね？』
ハインツ「ええ、それに関してはこちらで既に事実上傘下に置いているも同然ですので」
電話の相手はランスにいたリュッツオウ大佐であった。
二人は臨時編成ウィッチ集団〝サン・トロン〟の編成に関する話し合いをしていた。
リュッツオウ『手際がいいな。それで次だが、現地に2名ウィッチを送り込む。』
ハインツ「はい？それはどういう事でしょうか？」
するとリュッツオウはウィッチを現地、即ちサン・ヴィトに送り込む事を伝えそれにハインツは驚いた。

リュッツオウ『そのままだ。
人員は扶桑からくる宮藤少尉一行の予定だ。
彼女達は明々後日ロリアン、その後パ・ド・カレーで降りる予定だ。
彼女達に武器を支給後予定を変更しサン・ヴィトに送り込む、いいね？』
ハインツ「分かりました、では」
リュッツオウが送り込もうとした人員は宮藤と服部だった。
彼女たちをパ・ド・カレー経由でサン・ヴィトに送り込み直接航空支援に当たらせるつもりだった。
ハインツは電話を切ると溜息をついた。
ハインツ「はぁ、シャーリー、仕事が増えた。
明後日からロリアン行くからな、俺」
シャーリー「ロリアンって言ったらキブロン湾の近くだよな、いいなぁ」
ハインツがシャーリーにロリアンに行くことを伝えるとシャーリーは近くにある著名なリゾート地のキブロン湾の事を口にした。
ハインツ「シャーリー、遊びに行くんじゃないぞ。
仕事だよ、宮藤たちに色々と事情を説明しなきゃならなくなったからな」
シャーリー「事情？」
ハインツ「まずこの事実上の５０１の再編、次にあいつらをサン・ヴィトに送り込む事を説明する。
物資はパ・ド・カレーにあるらしいからそこ経由になるがな」
ハインツがシャーリーに事情を説明した。
それを聞いてシャーリーは驚いた。
シャーリー「なんで宮藤をサン・ヴィトに送り込むんだよ！」
ハインツ「知らんが恐らく無線妨害をするネウロイ対策だろうな。
アレのせいで各司令部間の連絡に専用の電話回線と通常の電話回線、それに軍用の臨時電話回線を使う手はずになってること

ぐらい知ってるだろ?

恐らく無線どころか電話回線がダウンしたときに航空支援に当たらせるつもりじゃないか?」

例のネウロイによって連合軍は連絡に無線ではなく電話回線を使うようになった。

電話回線ならば無線妨害の影響を受けずに使用可能だった。

だが電話回線は破壊工作に弱いため簡単に途絶する上にアルデンヌのゲリラはよく電話回線を攻撃していたためウィッチを直接送り込んだ方が比較的都合がよかった。

二日後、ハインツはサン・トロンからロリアンに飛んだ。

第８話：決戦への序曲

１９４５年８月末、ガリアの軍港ロリアンには扶桑海軍遣欧派遣第３艦隊第２任務部隊が停泊していた。
彼らはここで燃料補給と休息、近隣のブレストにいる第１艦隊、カンペールのカールスラント艦隊、ボルドーのロマーニャ海軍部隊と打ち合わせた後パ・ド・カレー経由でコペンハーゲンに向かう予定だった。
その旗艦天城では宮藤は自室で勉強し、フランクは服部と共に甲板にいた。
フランク「なあ、服部。
嫌なら別に一緒にいなくていいんだぞ？」
服部「いえ、世話役を任されておりますので離れるわけにはいきません」
フランク「まあ、この迷路みたいな空母の中だと迷うから一緒にいてくれて助かるんだが」
フランクはタバコを吸いながら言う。
すると二人の後ろから誰かが近づいた。
フランク「ん？誰だ？」
ハインツ「怪しいもんじゃねえぞ、ヤンキー。」
フランクが振り返るとそこにはドイツ空軍の夏季制服を着て夏季制帽を被ったハインツがいた。
フランク「誰だ？あんた？」
服部「確か、元第５０１統合戦闘航空団主席参謀ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐ですよね？」
ハインツ「まあな。
で、あんたが服部士官候補生か？」
ハインツは服部に聞いた。
服部「そうであります、ヴァレンシュタイン少佐」
ハインツ「やっぱりな、でそっちは誰だ？」
服部が返事をすると今度はフランクに話しかけた。

フランク「フランク・サレンバーガー合衆国海兵隊大尉だ。
よろしく」
ハインツ「USマリンコか」
ハインツの言葉を聞いてフランクは拳銃に手をかける。
それを見てすぐにハインツは止める。
ハインツ「おいおい、落ち着け。俺もあんたと似たような奴だ。
細かい事を聞く気はないがな。」
ハインツが説明するとフランクは拳銃から手を放す。
ハインツは拳銃から手を離したのを見て服部に聞いた。
ハインツ「服部士官候補生、宮藤は何処にいる?」
服部「…宮藤さんでしたら自室に…」
服部は宮藤の場所を聞かれ答えるが微妙な表情をする。
ハインツ「なら案内してくれ、お前と宮藤の用がある」
服部「え?私に?」
服部は自分にも用があると聞いて驚く。
ハインツ「ああ、お前にも用がある」
服部「分かりました」
ハインツが答えると服部はハインツを宮藤の元に案内した。
宮藤の部屋の前に着くとハインツは部屋をノックして入った。
ハインツ「よお、宮藤。生きてるか?」
宮藤「え!ハインツさん!?」
ノックされ振り向いた宮藤は入ってきたハインツに驚き立ち上がった。
ハインツ「ほかに言うことあるだろ。
まあ元気そうでよかった」
宮藤「ハインツさんこそお元気そうで。」
二人は他愛ない雑談をすると本題に入った。
ハインツ「一応今日来たのは雑談をするためじゃない。
上から宮藤と服部に新しい任務があるから伝えに来た」
宮藤「新しい任務?」
ハインツ「ああ、お前ら二人でサン・ヴィトに向かってそこで上空

直掩を行え、らしい。」
ハインツが本題を伝えた。
だが二人共あまり理解していなかった。
宮藤「サン・ヴィトって、何処ですか？」
服部「サン・ヴィトは確か後方ですよね？」
ハインツ「ああ、サン・ヴィトはベルギカ南部のアルデンヌ地方にある交通の要衝だ。
そして戦線後方、と言ってもゲリラの活動が激しいから相当危険だが、兎に角本来ならお前らを送り込むほどのところじゃない」
ハインツが説明したがそれは逆に二人に更なる疑問をもたらした。
服部「ならば必要ないのでは？」
ハインツ「それがな、サン・ヴィトのすぐ近くの地下にネウロイの巣が出来た。
それを破壊する部隊が今サン・ヴィトにいるんだがそれを援護しろという事らしい。」
宮藤「ネウロイの巣!?」
宮藤がネウロイの巣という単語に驚いた。
まさかまたネウロイの巣が出来ているとは思ってもいなかったのだ。
ハインツ「ああ。なんでも今回は地下だ。
今の所行動は起こしていないらしいが事実上背後に打たれた楔だ。
早急なる排除が求められている。
そこで君らをパ・ド・カレー経由で送り込む。
パ・ド・カレーで装備を受領後サン・ヴィトに向かってくれ」
宮藤「分かりました」
服部「了解！」
フランク「なあ、ドイツ人さん、俺はどうなるんだ？」
するとフランクがハインツに声をかけた。

ハインツ「知らん、付いて行きたきゃ勝手に付いて行け」
フランク「じゃ、そうさせてもらうよ」
ハインツが適当に返すとフランクは納得した。
ハインツ「一応用事はこれだけだ。
　じゃあ、幸運を」
宮藤「もう行っちゃうんですか？」
ハインツ「ああ、俺は忙しいんだ。
　まあこっちとしても元気そうな顔を見れてよかった、じゃあな」
ハインツはそう言って手を振ると帰って行った。

少し時間を遡ってこの３日前、サン・ヴィトでは各地より大量の重砲部隊などが掻き集められ兵士と物資で溢れかえっていた。
「全く賑やかな事だ。」
フライターク「そうだな、これのおかげで俺達義勇兵部隊にも最新鋭の武器が与えられてうれしい事だよ全く」
ブルクハウス「ふん、虐殺ぐらいしか能がないくせに」
サン・ヴィトに設けられた臨時司令部では臨時司令官を任されたカール・デッカー中将は第１４義勇擲弾兵師団師団長のフライタークとブルクハウスと話していた。
この戦区には元々フライタークとブルクハウスの部隊、それに両師団指揮下の義勇兵大隊の一部が配属とされていた、だがこれらの部隊の内第３８義勇装甲擲弾兵師団以外の部隊は装備的に見れば二線級又はそれ以下という場合が多く義勇兵大隊に至っては重火器は皆無、一応自動車化こそされているがリベリオンからのレンドリース品か中古品、徴用車両によるものでお寒い限りだった。
そのためネウロイの巣が発見されると連合軍は大量の武器をこれらの部隊に供与、更に重砲部隊、砲兵部隊、戦車部隊だけでなく精鋭部隊も送り込み始めていた。

その部隊はクルト・ゲールケ大佐率いる第１０４戦車旅団、ヴァルター・ヘリング少将指揮の空軍第５歩兵旅団とヨハン・クルツィヴァネク少将指揮空軍第３高射砲旅団、ゲルハルト・ヴィリング少佐指揮第５０６重戦車大隊とミハイル・ヴィットマン大尉指揮の第１０１重戦車大隊、コンスタンティン・ディオゲン・フォン・モンテトン大佐指揮の砲兵戦闘団〝モンテトン〟、ゲルハルト・ホッペ少佐指揮第２７９突撃砲旅団という大部隊であった。

デッカー「ところで、この辺りのゲリラはまだ危険だ。町の郊外に臨時飛行場を設営しようとしてるがゲリラが襲撃してきて碌に進まん。」

ブルクハウス「分かってますよ、閣下。ゲリラの一大掃討作戦をやれと?」

デッカー「その通りだ」

だがいくら増援を送り陣地設営を進めていてもゲリラはお構いなしに攻撃を繰り返し陣地構築や周辺設備の設営は遅々として進まなかった。

そのためデッカーは増援部隊と元々いた部隊の連携確保を兼ねて大規模なゲリラ掃討作戦を行おうとしていた。

ブルクハウス「作戦名は?」

デッカー「賞金付きジャガイモ狩りだ」

フライターク「いいじゃないか?で、いつ始める?」

デッカー「準備もかかるし偵察もいる、４日か５日後ぐらいを目途にしている。」

デッカーの作戦、即ち賞金付きジャガイモ狩り作戦の作戦準備に関しては相当進んでいた。

だがまだ二人の部隊への通達がまだであった。

ブルクハウス「それで、我々の仕事は?」

デッカー「君らの部隊は増援部隊と組んでの掃討などだ。何せこの地域に慣れてないものが多い、慣れさせるのが先決だ」

フライターク「成程ね。大忙しだな」

デッカー「補給路の防衛にも細切れにして参加してもらう。
戦車部隊は主に補給路の防衛に回すが一部は歩兵支援にも参加させる。
砲兵は火力支援だ」
デッカーは戦車部隊出身であったためゲリラ狩りに関しては疎かったが戦車はこのような状況では繊細な運用が必要な事は理解していた。
そのため補給路の防衛と歩兵支援という二つの役割に分担した。
また砲兵も火力支援という重要な役割を与えていた。
ブルクハウス「それがいいだろう、補給路の防衛には空軍地上部隊と義勇兵大隊を当てるべきだ。
彼らの戦闘能力には疑問がある」
デッカー「無論そのつもりだ」
ブルクハウスは義勇兵部隊、そして空軍地上部隊の戦闘能力に疑問を感じていた。
それは正しく空軍地上部隊は地上戦闘の経験に乏しく、義勇兵部隊の方は訓練こそされているが装備はそれほど良くなく、軍服は中古、装備はリベリオンからの供与品とカールスラント製の混在でありそもそも信用自体が置けず脱走率も比較的高かった。
そのためデッカーは彼らを補給路の防衛に回すつもりだった。

ハインツと宮藤たちが会った翌日、アルデンヌ地方
この鬱蒼とした針葉樹林の中には嘗ての住民たちが住んでいた家々がひっそりと残っていた。
それらの家はこの地域で活動するゲリラにとっては都合のいい隠れ家だった。
ゲリラA「なあ、最近ジャガイモ共の動きがおかしくないか？
なんでこんなところにあんな大部隊を送り込んでくるんだか」
ゲリラB「そりゃあ俺達が目障りなんだよ。

まあどんだけ送っても俺達が片っ端から倒すけどな！」
「ハハハハハ！」
ある廃屋ではカールスラント製やガリア製、ブリタニア製などの雑多な装備を持ったゲリラが雑談しながら昼食を摂っていた。
彼らはこの地域への大量の兵員投入の理由を勘違いしていたがその兵力が自分たちに向けられること自体は考えていた。
ゲリラＣ「お前ら、話しているのはいいけど襲われたらどうするんだよ」
ゲリラＤ「なーに、あの頭の固いキャベツにここが分かる訳…」
次の瞬間、突如爆発が起き銃撃が浴びせられゲリラが倒れる。
ゲリラＡ「なんだ！」
ゲリラＢ「クッソ、キャベツだ！連中なんでここが分かった！」
ゲリラＥ「知るかよ！おい！武器は！」
ゲリラたちはすぐに身をかがめ物陰に隠れ銃を取る。
外からは銃撃が浴びせられていた。
外では迷彩ヤッケや迷彩ポンチョを迷彩服のように着たカールスラント兵とそれを支援するティーガーⅠがいた。
彼らは銃撃を浴びせゲリラを拘束している間に建物に忍び寄るとドアを蹴破り中に入る。
蹴破ったドアの傍ではＭＰ４０を持った軍曹が中に入る兵士達に指示する。
兵士Ａ「Ｌｏｓ！Ｌｏｓ！Ｌｏｓ！」
中では一部屋ずつ兵士達が突入し敵兵を探し射殺していく。
そしてゲリラたちがいた部屋にもＫａｒ９８ｋやＭＰ４０を持った兵士が突入する。
ゲリラＡ「うわ！」
ゲリラＢ「クソ！」
ゲリラＣ「撃つな！」
不意を突かれたゲリラは手を挙げて降伏の意を示すが次の瞬間兵士達の銃が火を噴き部屋を赤く染める。
ゲリラが全員殺されるか捕らえられると彼らは武器と弾薬だけを

回収し建物に火をつけ立ち去った。
そして捕らえられたゲリラはサン・ヴィトに他にも捕らえられたゲリラやゲリラと思われる人物、脱走兵と共にサン・ヴィトに連行されると街の外れの森の中で殺害されるか街灯から首に縄をかけられ首から「私は義務を放棄しました」や「私は下劣な反逆者です」、「私はカールスラント兵を殺しました」と書かれた看板をつけてぶら下げられた。
また別の所ではゲリラが空軍兵士と戦車で護衛された車列を襲撃するも返り討ちに会い全滅、死体は道路に晒され、「これが反逆者の運命だ」と書かれた立て看板と共に並べられた。
賞金付きジャガイモ狩り作戦の発動であった。
ゲリラはこの今までにない程の猛攻と軍の管理下にない全ての洞窟や塹壕、防空壕、蛸壺、建物を徹底的に破壊しそしてゲリラを一人たりとも残らず捕らえるか殺す徹底した浄化作戦に直面した。

アルデンヌで賞金付きジャガイモ狩り作戦が発動された翌日、英仏海峡を東に航行する天城艦上では服部が走っていた。
するとその後ろから宮藤が近づいた。
宮藤「もうすぐパ・ド・カレーに到着だね」
だが服部は宮藤を無視して走り込みを続ける。
その後ろからはフランクが伸びをしながら歩く。
フランク「ふぁぁあ…やっとだ…やっと船から降りられる…
2か月も船に缶詰めだったんだ…陸が恋しい…後カブスどうなってるんだ？
俺の知ってる４５年のシーズンはカブスがリーグ優勝してワールドシリーズに行ったが」
フランクはこちらに来る前から空母に乗り込んでいたため2か月以上船に乗っていた。
そのため疲れ切っていた上にラジオが聞けずシカゴカブスの情報が聞けず苛立っていた。

宮藤「ん？」
フランク「んぁ？」
服部「あ？この音は…」
すると何かエンジン音が近づいてくるのに気がついた。
前を見ると二つの小さな物体が高速で艦の上を通過した。
フランク「なんだ！」
服部「ウィッチ！速い！」
それを見た服部は振り返ると感銘を受けたかのか興奮気味に語る。
服部「あのエンジン音はグリフォン６１とクワトロ１２！
　ひょっとして！」
宮藤「リーネちゃん！ペリーヌさん！」
上空を通過したのはウィッチ、リーネとペリーヌだった。
それがリーネだと気がついた宮藤は表情を明るくする。
するとさらに別のエンジン音が接近し上空を超低空で通過する。
フランク「うわ！」
服部「今のは！ロマーニャのマッキＭＣ２０５!?」
通過したのはエルロンロールをしながら飛ぶマッキＭＣ２０５ベルトロであった。
　だが塗装は銀色のポリッシュドスキンに真っ赤な赤で塗られた垂直尾翼に赤と白と緑のラインが描かれ国籍章はロマーニャ軍ではなくファスケスだった。
　ベルトロが天城から離れると機体は急上昇すると入れ替わりにリーネが飛んできた。
リーネ「芳佳ちゃーん！」
宮藤「リーネちゃーん！」
リーネは甲板上の宮藤めがけて飛び込み抱き着きその勢いで甲板上に倒れ込んだ。
リーネ「待ちきれなくて飛んできちゃった！」
宮藤「ふふ、私も早く会いたかったよ！」
二人は抱き着いて楽しそうに会話していた。
その光景にフランクは嫌悪感丸出しの表情をし服部は驚いていた。

服部「この人がリネット・ビショップ曹長!?」
フランク「サバノビッチ、このジャップマンコとヨーロッピアンビッチが。
　こいつらは神の御心に反してる」
ペリーヌ「相変わらずですわね、たった二か月会ってないだけでそれとそこのヤンキーさん?少しは大目に見てやれないかしら?
　いくら神の御心に反してもこの程度は見逃してくれないとその神様の器の大きさを疑いますわね」
するとその後ろからペリーヌが皮肉たっぷりの言葉をフランクにかけた。
服部「え!あの、貴方は!
　お会いできて光栄です!ペリーヌ・クロステルマン中尉!
　私扶桑海軍軍曹服部静夏と申します」
ペリーヌ「ふふ、聞いておりましたわ、服部軍曹。
　疲れたでしょう、宮藤さんと一緒だと。
服部「い、いえ、そんなことは…」
ペリーヌ「ふふ、ところで、そちらのアメリカ人はどなたかしら?」
するとペリーヌはフランクの事を聞いた。
フランク「ミスクロステルマン、自分は合衆国海兵隊第２１４戦闘攻撃飛行隊所属フランシス・ジェイコブ・サレンバーガー大尉であります」
ペリーヌ「よろしく、キャプテンサレンバーガー」
ペリーヌがフランクに敬礼するとフランクも返礼した。
艦隊はパ・ド・カレーに到着した。

第9話：予兆と推定

フランク「じゃ、じゃあ君は同性愛者じゃないのか？」
リーネ「はい、私にはちゃんと愛してる殿方がいらっしゃいますから」
ペリーヌ「はぁ、それにしてもあの世界の方々はどうしていつもこうどこか過激なんですの」
数時間後、フランク達は検疫と入国審査を受けるとペリーヌの持つルノーＡＨＬトラックに乗り込んでペリーヌ達と共に屋敷に向かっていた。
フランク「過激ってなぁ…同性愛は神の御心に反しているんだぞ。生まれ持った姓で異性を愛するのが自然な行為じゃないか」
ペリーヌ「はぁ、あのバカ騎士様も同じことを言ってましたわ」
ペリーヌは過去に同じような事を言っていたある人の事を思い出す。
すると前から一台のオートバイがやってきた。
ペリーヌ「噂をすれば何とやら、ですわね」
レート「おーい、ペリーヌ！」
やってきたのはオートバイに乗ったレートだった。
ペリーヌ「レートさん？確かに試験飛行は許可しましたけどアクロバット飛行は許可してませんわよ！」
レート「ついな、イタリア人っていうのは女性を喜ばせるためになんだってする生き物さ」
ペリーヌ「だからと言って私の肝を冷やすような事をしないでくださいまし！
貴方に死なれたら誰が悲しむと思ってますの！」
レート「分かったよ、次からは気を付けるからさ」
ペリーヌ「絶対ですわよ！」
レートとペリーヌはなぜか口論していた。
宮藤「ねえリーネちゃん、あの人だれ？」

リーネ「あの人はユニオ・ヴァレリオ・レートさん。
　元エジプト王国空軍で元イタリア空軍のパイロットだった人。
　今は私達の所で手伝いをしてもらってるの」
レートを知らない宮藤がリーネに聞くと説明した。
宮藤「そうなんだ」
フランク「もしかしてあのマッキを操縦してたのも…」
リーネ「はい、レートさんですよ」
フランク「あの操縦の腕は大したものだよ、うん」
話していると車列はブドウ畑に出た。
宮藤「うわぁ、ブドウだ！
　美味しそう～」
リーネ「ここのブドウはワイン用だから食べると酸っぱいよ」
ペリーヌ「どうです？美しいでしょう、ガリアは」
ペリーヌは宮藤に聞く。
宮藤「うん、すっごい綺麗だね」
リーネ「この辺り全部がペリーヌさんの領地なんだよ」
宮藤「へぇー」
ペリーヌ「みんなご苦労様」
ペリーヌは振り返りブドウ畑で作業する農民に挨拶した。
すると目の前に大きな城が見えた。
宮藤「うわぁ！お城だ！」
それに宮藤は驚く。
そして車列は城の方へと向かった。

一行は城に到着するがまだ一部は破損したままであった。
宮藤は見上げて悲しげな表情をする。
ペリーヌ「これでも解放後すぐに比べれば随分元に戻ったんですのよ。
　あ、あの車は…」
ペリーヌはふと黒のグロスブラックで塗られＷＨのナンバーをつ

けたオペルカピテーン４ドアリムジーネとダークイエローにグリーンとブラウンの３色迷彩が施されたＷＬナンバーのシュタイヤー１５００コマンドワーゲン、同じくＷＬナンバーの水色と黒で塗られたシトロエントラクシオ・アバン・１１ＣＶ、ダークイエローのビュッシングＬ４５００Ｓトラックが止まっていることに気がついた。
そしてそのカピテーンには見覚えがあり顔を暗くする。
ペリーヌはトラックの荷台を開けるとトラックから降りた。
するとそれに働いていたアメリーや職人たちが気がつき声をかける。
アメリー「おかえりなさーい！ペリーヌさん、リーネさん、レートさん！」
職人「おかえりなさい、ペリーヌお嬢さん」
するとペリーヌ達が面倒を見ている孤児たちがペリーヌに駆け寄ってきた。
孤児Ａ「ペリーヌお姉ちゃんおかえりー！」
孤児Ｂ「もうすぐ授業の時間だよ！」
ペリーヌ「はいはい、ちゃんと間に合ったでしょ」
ペリーヌは孤児たちと楽しそうに話す。
レートもバイクから降りると孤児たちと話し始めた。
レート「お前ら、いい子にしてたか？」
孤児Ｃ「うん」
宮藤「リーネちゃん、あの子たちは？」
すると宮藤はリーネに子供たちの事を聞いた。
リーネ「ネウロイとの戦いで両親を亡くした子たちなの…
ペリーヌさんが引き取って今は一緒に暮らしてるんだよ」
フランク「孤児たちか、戦災孤児はいるからな…
日本でたくさん見たよ」
リーネの話を聞いてフランクは日本でたくさん見た戦災孤児たちを思い出した。
ジャン・ポール「おかえりなさいませ、お嬢様」
ペリーヌ「留守中何もありませんでしたか？」

ペリーヌはやってきたジャン・ポールに問題がないか聞いた。
するとジャン・ポールは車の主たちの話をした。
ジャン・ポール「パ・ド・カレー地区軍政司令官のフランツ・クッチェラ少将と第２０山岳軍付空軍司令官のオットー・アバーネッティ少将、連合軍参謀部のヴィルケ中佐が先程からお待ちです。」
ペリーヌ「よりにもよってクッチェラ少将ですか…それにアバーネッティ少将とヴィルケ中佐？
何で第２０山岳軍の将軍と参謀部の人間が？」
ジャン・ポール「ただ、今すぐ例の３人と面会させるよう求めています。
クッチェラ少将も今すぐ会談しなければ実力を行使すると」
待っていたのはパ・ド・カレー地区軍政司令官で事実上のペリーヌの上司であるフランツ・クッチェラ少将、第２０山岳軍付空軍司令官のオットー・アバーネッティ少将、そしてランスの参謀部のヴィルケ中佐だった。
ペリーヌ「分かりましたわ、レートさん、リーネさん、アメリーさん子供たちの授業をお願い。」
アメリー「分かりました」
ペリーヌ「宮藤さん達は私についてきてらっしゃい。」
ペリーヌは子供達の授業をレート達に任せると宮藤達を連れてある部屋に向か

「じゃあ前線は相当危険なのか？」
「ああ、うちのボス曰く後２、３日ぐらいは安全だろうがそれ以降は保証できない、だとさ。
パリはどうなんだ？」
「パリは既に警戒態勢に入ってますがランスが問題です。完全に緩みきってます。
マロリー閣下とその他我々派閥の将校、参謀、将軍は警戒態勢を上げるよう要求してますが反応は芳しく…

クッチェラ閣下こそどうして此方に?」
クッチェラ「ああ、クロステルマン家私有地への部隊の立ち入りを要求する為だ。
いくら全面的な治安に関する権限を与えられても勝手に私有地には立ち入れん、法治主義って奴だ。
そのせいでこのザマだ。私有地が一種の治外法権になってる。」
屋敷の一室では史実を知る人間がいればSSのフィールドグレー勤務服に陸軍の階級章をつけた軍服を着たパ・ド・カレー地区軍政司令官のフランツ・クッチェラ少将、空軍のトゥーフロックを着たオットー・アバーネッティ少将、そして同じくトゥーフロックを着たヴォルフ・ディートリッヒ・ヴィルケ中佐がソファに座り話していた。
するとドアがノックされた。
ペリーヌ「クロステルマン中尉です、お待たせしました少将閣下」
クッチェラ「別に待っとらんよ。それとそちらはもう一人のお客様ですかな?」
アバーネッティ「こちらの用事だよ、宮藤少尉」
ペリーヌが入ると3人とも待ちくたびれた様子だった。
ペリーヌと宮藤たちはクッチェラ達の対面に座った。
座ると最初にクッチェラが話し始めた。
クッチェラ「早速だが本題だ、クロステルマン家の私有地に我が警察部隊の立ち入るを求める。
君の私有地には王党派他のゲリラや反社会勢力が存在する可能性がある。」
ペリーヌ「またそのお話ですか、お断りします。
私の土地にはそのような輩は存在しません、お帰りください」
ペリーヌはクッチェラの要求を即座に拒否した。
だがクッチェラは更に強権的な手段に出た。
クッチェラ「では君をこの場で王党派の同調者、スパイ、協力者として告発し全ての土地と設備を接収する。

言っておくが我々は手段は選ばない、君だって知っているだろう？

あらゆる手段で以て敵を殲滅するつもりだ。

もし無実の人に剣を下す事になろうとも一人の犯罪者の為に１０００人が死のうとも関係ない。

君の世話している孤児も処刑するぞ、なに罪などいくらでも作れる。」

ペリーヌ「く…」

服部「閣下、意見をよろしいでしょうか？」

その有無を言わせぬ強権的で暴力的な手段に服部が意を唱えようとした。

ペリーヌ「服部さん！」

クッチェラ「何かね？」

服部「は、それは国際法及び国内法に反する行為ではないでしょうか？

国際法では正当な理由なく捕虜及び民間人の殺害は禁止されています。

また法的手続きを踏まない国家による殺人など絶対に許される行為ではありません」

クッチェラ「ふ、ハハハハハ！面白いジョークだ。

だろ？」

アバーネッティ「ああ。素晴らしい、素晴らしくめでたい脳味噌だ」

ヴィルケ「所詮はイエローモンキーの雌猿ですよ、我々に対して劣ってる。」

服部の意見を聞くとクッチェラ達は大声で笑った。

彼女の意見は彼らからすれば相当おめでたく、そして現実に即していなかった。

クッチェラ「我々の敵はゲリラだよ、国際法に従わず平気でテロを起こし秩序を破壊する。

秩序の破壊者には死を与えるのは我々の仕事だ。

一人のテロリストでも１００人を殺すことはできるか

らな。

法に縛られては動けない、法を逸脱しなければ勝つことはできないのだよ」

アバーネッティ「それに誰がそれを監視しているのかね？

腐りきり碌な統治能力を持たないガリア政府かね？

それともゲリラを目の敵にし現在進行形で虐殺を行う連合軍か？

この国をパイのように分割しようと企む列強各国かね？

誰も監視などしない、全ての国はこの国の人々の運命など気にしない。

何故ならこの国はパイだ、立派に実った絶品のリンゴで作られたアップルパイだ。

我々は君には悪いが国家の命令に従いこの国を少しずつ、少しずつ切り分けて食べていく。

誰もパイの材料など興味ないのだからな」

クッチェラとアバーネッティは現状誰もガリア人の事など気にしないという現実を突きつけた。

各国にとってガリアとはただのパイであり今現在各国が切り分けている段階だった。

その話を聞いてペリーヌ達は表情を暗くする。

クッチェラ「正論ではこの国を治めることはできん。

正論で治められるなら既に戦争など終わってる。

クロステルマン中尉、立ち入りを要求する、どうする？

立ち入りを認めるか、君ら全員が死ぬかどっちがいい？」

ペリーヌ「く、分かりました…認めます…」

クッチェラ「うむ、よろしい。

これからも頼むよ、クロステルマン中尉」

ペリーヌはクッチェラの脅しに屈した。

続いて今度はアバーネッティが話し始めた。
アバーネッティ「では次だ、宮藤少尉。
君らはこの後サン・ヴィトに向かう事になってるだろ?」
宮藤「はい…」
アバーネッティ「その件だが、今現地の状況が悪化している。
急激にな」
フランク「急激に?」
アバーネッティは現地、即ちアルデンヌ地方とその前面の戦線の状況を伝えに来たのだ。
そして名目上宮藤たちは第２０山岳軍隷下の空軍航空部隊となるためアバーネッティが直属の上司となるのだ。
アバーネッティ「まず昨日からアルデンヌ地方ではゲリラ掃討作戦「賞金付きジャガイモ狩り」が発動され現在掃討作戦中だ。
これにより各地で交戦が行われている。」
宮藤「え…交戦?」
宮藤はゲリラと交戦中だと聞いて驚いた。
アバーネッティ「ああ。アルデンヌはゲリラの活動が激しいからな。
増援を得た現地部隊が一気に片をつけようとしてる。
次にここ数日航空偵察や地上偵察などから敵の状況が変わってきている。
第２０山岳軍の参謀たちの予想では1週間以内の何かしらのネウロイの行動が発生する確率が7割以上、1か月以内だと９８%だと予想している。
なので出来る限り早く向こうに行ってもらいたい。」
ヴィルケ「その際の物資、装備に関しては既に輸送済み、外のトラックに積んである。」
アバーネッティとヴィルケが状況を説明した。

この数日で状況が急激に変わっていた。
航空偵察から何かしらの行動を起こす可能性が指摘され、一部の試算では7割の確率で行動を起こすとされた。
そのため警戒レベルを急激に上げつつあった。
アバーネッティ「まあ我々の用事は以上だ、失礼するよ。
　このまますぐランスに行かなきゃならないんでね」
そう言うとアバーネッティ達は立ち上がり出て行った。

その頃、ランスの連合軍総司令部航空参謀部では部長のマロリーと部下たちが偵察機のもたらした情報を精査していた。
参謀A「この写真だと敵は西に向かおうとしてないか？」
参謀B「いや北西方面の可能性もある」
参謀C「もっと情報がいる、この写真の北側を撮影したのはどれだ！」
参謀D「これです、8月16日のE21―N3―B45―256番の写真です」
参謀たちは偵察機が撮影したネガを拡大してネウロイの動きを予想しようとしていた。
その写真にはネウロイが残したと思しき不自然な地面の亀裂や隆起、地面を掘り返した跡などが残っていた。
マロリー「我が最も優秀な空軍士官の紳士諸君、どうだ？
　何か見つかったかね？」
参謀A「閣下に敬礼！」
マロリーが声をかけると参謀たちは手を止めて敬礼する。
それに返礼すると纏め役の参謀が説明した。
参謀A「詳細は不明ですがいいものを見つけました。
　8月16日のE21―N3―B45―255と同じ日のE21―N3―B44―255、E23―N3―G58―125を持ってこい！」
すると参謀が引き伸ばした二枚の写真を持って来た。
その写真にはどちらもカールスラントの田舎の村が写っていたが

その村の周囲の地面には多数の地面を掘り返した跡が残っていた。
参謀Ａ「閣下、こちらをご覧ください。
ここに推定２００から３００以上と思われる１５メートルクラスネウロイの痕跡があります」
マロリー「うむ」
その写真には多数のネウロイの痕跡があった。
続いて参謀はその写真の東側で撮られた写真を見せる。
参謀Ａ「またこちらの写真には高さが１０メートルと推定される未確認の新型中型ネウロイを確認しました。
そしてこういった痕跡がそこから北に１２キロ離れた地点でも確認しました。
明らかな敵の攻勢の予兆と推測します。」
マロリー「分かった、書類を纏め上層部に提出してくれ」
マロリーはその情報を書類にまとめると上層部に提出した、だが
将軍「マロリー君、こんなふざけた事がありうるのかね？」
マロリー「私の世界で最も優秀な紳士諸君の結論です。
私は彼らを信頼しているのでこの情報と予測の可能性は非常に高いと推察します。」
将軍「ありえないよ、こんなゴミクズに書かれた事が実際に起こりえることなど」
上層部の反応は否定的を通り越して有り得ないと断言するほどだった。
この無能怠惰の極みともいえる連中は政治家とのつながりを利用して未だ連合軍上層部に巣食っていた。
実力により主導権を握っている北方や東部、政変と不始末により事実上追放された南方とは違い彼らはまだ生き残っていた。

第10話：英雄と愛

宮藤たちがペリーヌの屋敷について暫くして、宮藤たちとリーネ、そしてレートはキッチンにいた。

フランク「料理なぁ…ほとんど経験ないぞ…

昔ママの料理を手伝った事ぐらいしかない…」

レート「まあそんなもんだ、私だって元々は貴族だ。

戦争に負けてエジプトに移住してレストランで働くまで料理の経験なんてほとんどなかったさ」

フランク「そんなもんだよな、ところで何を作るんだ?」

5人は夕食を作っていた。

フランクは殆ど料理の経験はなかった。

だがレートはエジプトでレストランで働いた経験がありそれ以来料理が趣味であったため得意だった。

フランク「で、何を作るんだ?」

リーネ「肉じゃが、味噌スープなどですね。

レートさんお得意のイタリア料理とエジプト料理は封印ですよ」

レート「はいはい、分かってるよ」

レートはイタリア料理とエジプト料理が得意だったが今日作るのは扶桑料理だった。

リーネ「私と芳佳ちゃんが肉じゃがを作るからレートさんとフランクさん、服部さんはお味噌汁をお願いします」

フランク「了解、お味噌汁?ああ、日本料理のアレか」

リーネは仕事を割り振るとそれぞれ夕食を作り始めた。

宮藤とリーネは手際よく肉じゃがを作る一方、レートは料理初心者のフランクに料理を教えながら作っていた。

フランク「えっと、こんな感じか?」

レート「そのぐらいでいい。あんまり分厚すぎると火が通りにくいからな」

二人は野菜を切りながら話していたがその横で料理初心者だと思

われていなかった服部は緊張しながらジャガイモを剥こうとしていたが大振りに切っていた。
宮藤「静夏ちゃん、大丈夫？
服部「え、え、だ、大丈夫です！」
レート「大丈夫ならいいが、料理初心者が二人もいると手に負えないぞ」
服部は誤魔化した。
だがそのあらはそれからすぐに出た。
ある程度材料を切り出すとレートは鍋に水を入れ湯を沸かす。
レート「じゃあ次は味噌だな。
味噌、何処に置いたっけな？」
レートがキャビネットを開けて味噌を探し始めるがどこにもなかった。
レート「うーん、参ったな…どこかにあったのは覚えてるんだがな…
ちょっと他の所も探してくる」
キャビネットの中を確認してもなかったためレートはキッチンの他の棚や冷蔵庫を探したが何も見つからなかった。
レート「駄目だ、見つからん。ペリーヌに聞いてくる。
服部、フランク、鍋は頼んだぞ」
フランク「服部、すまん、ちょっとトイレ行ってくる」
服部「分かりました」
一通り探しても見つからなかったためレートは鍋を服部に頼むとペリーヌに聞きに行き、フランクも急にトイレに向かった。
そしてそれから数分後、フランクがトイレから戻ってくると服部が何やら鍋に入れていた。
フランク「服部？何やってるんだ？」
服部「えーと、レートさんが戻ってこないのでその…」
フランクはふとコンロの傍を見ると明らかに味噌汁で使わない食材が並べられ、鍋の中も明らかにおかしな色になっていた。
フランク「サバノビッチ、服部、命令だ、今すぐそのバカなおつむ

を使ってこのゴミを処分しろアホ。
　１０数えるうちに処分しなければ俺のケツ穴をなめろ」
服部「は！はい！」
服部が勝手に作りかけの味噌汁を台無しにしたと気がついたフランクは静かに怒り狂っていた。
この後レート共に作り直したがその際服部は排除された。

その日の夜、サン・トロン
ニコ「いい夜だね、サーニャ」
サーニャ「はい、ニコさん。」
ニコ「こんな平穏な夜が続けばいいのに」
サン・トロンでは元５０１のウィッチ達が集まりネウロイの攻勢に備えていた。
だが今の所は平穏そのものでありウィッチ達は思い思いに過ごしていた。
例えばニコとサーニャは久しぶりの再会を喜び二人で仲良く夜空を眺めていた。
一方、ハインツとシャーリーはというとシャーリーがルッキーニを寝かせるとハインツの部屋にいた。
シャーリー「でさあ、マルセイユがなんて言ったと思う？」
ハインツ「あのバカだ、どうせ『私が世界一だ、お前なんか大したことない』だろ？」
シャーリー「当たり！それでレースする事になって…」
二人がウィスキーを飲みながら話していると突然電話が鳴った。
ハインツ「はい、サン・トロン、ヴァレンシュタイン少佐。
　はい？閣下？本気ですか？
　分かりました、明朝０５００時を以てサン・トロンは独断による第１種警戒態勢を取ります」
そう言うとハインツは電話を切った。
ハインツ「はぁ、面倒な事になりやがって畜生」

シャーリー「何かあったのか？」
シャーリーはハインツに電話の内容を聞いた。
ハインツ「ああ、ネウロイに大規模な行動を起こす可能性あり、しかし連合軍最高司令部は反応せず、よって各部隊は独断で警戒態勢をレベル1に引き上げろ、だそうだ。」
シャーリー「え！来るのか！」
ハインツ「そういう事らしい、可能性で済めばいいがな」
ハインツは電話の内容を説明するとそう吐き捨てた。
だが残念ながら可能性で終わらなかった。

クルーゲ「さあ、諸君。我々が連中のケツを蹴り飛ばしてウンター・デン・リンデンをパレードする時が来たぞ。
準備はどうなってる？」
西方総軍の〝一部部隊の独断による〟警戒態勢引き上げを受け作戦開始が近いと踏んだ北方総軍、更に南方総軍ではトリニティ作戦の準備が着々と進みつつあった。
参謀「は、全作戦参加部隊の準備完了、砲兵部隊準備完了、物資に関しては搬入率８９％、明日午前にも９５％に達する見込み。
全物資の搬入完了予定は明後日深夜零時を予定。
各部隊は現在事前偵察を行い侵攻ルートの確認を実施中、一部で修正の必要があるもののほぼ予定通り行けます。
航空攻撃も予定通りに実施中、現在ベルリン、シュテティン方面を空爆中です。」
彼らの攻撃目標はベルリン、そしてシュテティンだった。

モーデル「作戦準備は？」
参謀「は、準備はすべて完了。
予定よりも左翼の兵力が薄いですがガリア方面部隊と挟撃するので問題ありません。」
南方総軍でも作戦準備は進んでいた。

当初の作戦予定とは全く違い左翼の兵力が薄いという事態になっていたが準備は進みつつあった。
アイケ「我々の目標は？」
モーデル「ライプツィヒとドレスデンだ。
　エルベのフィレンツェを取り返すんだよ」
南部の目標はライプツィヒとドレスデン、エルベ川まで戦線を押し上げるつもりだった。

その日の夜遅く、フランクとレートはベランダで酒を飲んでいた。
フランク「久しぶりのビールはうまい。
　流石に子供たちの前では飲めないからな」
レート「子供の前とペリーヌの前では飲めないからな。」
フランク「どうしてだ？」
レート「まだ怪我が治りかけなんだ。
　先月瀕死の重傷を負ってな、その怪我がまだ治ってない。
　あのアクロバットだってやった時は体中が悲鳴を上げていたからな。」
フランク「無茶やるねぇ。でも俺はそういう無茶できる奴の方が好きだよ」
二人は子供の前では酒は飲めず、レートも怪我が治っておらず医者から禁酒を指示されていたため隠れてビールを飲んでいた。
服部「サレンバーガー大尉…！レートさん…！」
フランク「服部？このことはこれで頼むよ」
突然、服部が現れフランクとレートがいるのに驚くがフランクは指を立てて黙るように言う。
服部「は、はい…
　ところでお二人は何を…？」
レート「見ての通り、酒を飲んでた。
　医者からは禁酒を言われてるんで黙っていてくれ。」
服部「りょ、了解…」
フランク「服部こそ何しに来た？紳士二人の酒盛りに参加しに来た

のかね？」
服部「そういうわけでは…」
フランクは飲みかけのビール瓶を持ちながら服部に聞く。
ペリーヌ「それとも、レートさんが言っていた味噌スープを台無しにした件を反省しているのかしら？
それと、私の騎士様は忠誠を誓う主人の言いつけを守れないのかしら？」
レート「ペ、ペリーヌ…！」
服部「ちゅ、中尉！」
すると突然ペリーヌが現れた。
ペリーヌは腕を組みながらレートの飲酒を咎める。
ペリーヌ「はぁ、お医者様が治るまで酒を飲むなっと言ってましたわよね？
貴方の体が大事なのですから飲まないでください。
それとも、また私を悲しませるおつもりですか？」
レート「す、すまない…」
フランク「じゃあ残りの酒は全部貰うぜ」
レートはペリーヌに平謝りする、そしてフランクはレートの酒を奪って飲み始めていた。
その横で服部はペリーヌに謝った。
服部「中尉、その、申し訳ありませんでした」
ペリーヌ「ふふ、私も昔は料理は料理人がするものだと思ってましたわ」
服部「私は代々軍人一家でして、それで私は…」
ペリーヌ「ウィッチの素質を持って生まれたあなたは軍人として期待を受けて育ち料理なんてする時間はなかった」
ペリーヌは服部の思いを代弁する。
服部「はい、元々ウィッチの家系ではなかった分父や祖父の期待もとても大きく…」
ペリーヌ「そんな環境で育ったのでは宮藤さんやフランクさんの事が気に障るのも無理ないですわね」

服部「いえ、宮藤少尉は扶桑の誇りです。
　欧州を解放した偉大なウィッチですから。」
ペリーヌ「でもとてもそんな偉大な軍人には見えませんわよね。
　軍規は守らない、命令無視の独断専行、滅茶苦茶ですわ。」
するとペリーヌは宮藤の事を語り始めた。
ペリーヌ「『私は戦争が嫌い』、宮藤さんが５０１に来て最初に言ったセリフですわ。
　故郷をネウロイに踏みにじられていた私達を前に。
　そんな子が何をしに来たの?ってすごく腹が立ちましたわ。
　だけど不思議ね、あの子が入った５０１は以前よりもっと強くなりましたわ。
　あの子がいなければガリアは解放されてなかったかも。」
服部「私は…」
ペリーヌ「分からないわよね」
フランク「何となくだが分かるぞ」
するとフランクとレートが二人の会話に割って入った。
服部「え?」
フランク「簡単な話だ、宮藤は人を愛してる、ただそれだけだ。」
服部「それとどう関係があるんですか?」
フランク「英雄はなぜ自らを犠牲にするような行動をとるか?
　それは単に愛してるからだ。」
するとフランクが宮藤に対する所見を語る。
フランク「戦友に対する愛って奴だ。
　戦友というのは同じ釜の飯を食べ、銃火の中で互いの生命を預けあう、まさに家族だ。
　信用できない人間に自分の命を預けるか?無理だ。
　時に兄弟の死をみとり、時に兄弟の為に命を落とし、兄弟と共に笑い、悲しむ。
　兄弟の死を悲しみ、新たな兄弟を迎え入れ、兄弟の門出を祝い、そして試練を乗り越える。

英雄とは家族に対する愛が深い人間の事だ。
兄貴もそんな奴だったよ。
ふう、俺は先に寝る、おやすみ」
フランクは語りながら涙目になる。
そして語り終わるとベッドに向かった。

翌朝
服部「１８００、到着予定、オーバー」
司令部『こちらサン・ヴィト、了解。
サン・カンタンの西にあるイルソンにて補給車列と合流、サン・ヴィトへ向かえ、オーバー』
服部「了解、通信終わり」
服部は屋敷の前でジープに積まれた無線機で通信を行っていた。
その隣ではペリーヌとレートとフランクが地図を広げて確認していた。
ペリーヌ「サン・カンタンは南東に１５０キロほどの街。
そこから西に進めばイルソンにつきますわ。」
服部「合流地点ですね」
レート「だが気をつけろ、シャンパーニュとアルデンヌはゲリラの巣窟だ。
今もゲリラと連合軍が殺し合ってる。」
ペリーヌ「ええ。特にアルデンヌは先月だけでも１０００人近い兵士が戦死してますわ。
ネウロイよりも危険ですわよ」
服部「了解しました」
ペリーヌとレートはランス周辺のシャンパーニュとアルデンヌの状況を伝えた。
そこから少し離れたところではリーネが宮藤に何かを渡そうとしていた。
リーネ「芳佳ちゃん、これ持って行って」
宮藤「え？何？」

リーネから渡された包みを宮藤は受け取ると中身を確認した。
中身は白衣だった。
宮藤「うわああ！白衣だ！これリーネちゃんが作ってくれたの？」
リーネ「うん、芳佳ちゃんがお医者さんになるって聞いたから。
でもその前にまた戦争に行くんだよね…」
宮藤「う、うん…
あれ？リーネちゃんその傷って…」
すると宮藤がリーネの手の怪我に気がついた。
リーネ「あの、その、ほら、まだ私、上手にお裁縫できなくて…」
ペリーヌ「一か月前からずっと作っていたんですのよ」
リーネは一か月前から慣れない裁縫で白衣を作っていたのだ。
宮藤「ありがとうリーネちゃん！私絶対立派なお医者さんになるからね！」
リーネ「うん！頑張ってね芳佳ちゃん！」
宮藤「うん！」
宮藤はリーネに感謝を伝える。
そして一行は車に乗り込む。
乗り込むとリーネとペリーヌが助手席に座る宮藤に荷物を持って来た。
リーネ「はい、お弁当。途中で食べてね」
宮藤「うん」
ペリーヌ「これはここのハーブ園で撮れたセント・ジョーンズ・ランド、傷薬ですわ。」
宮藤「ありがとう、リーネちゃん、ペリーヌさん」
すると荷台にレートが何かを積んでいた。
フランク「何やってんだ？」
レート「ペリーヌが『ここにあるお酒をすべてフランクさんにあげなさい』って言ったからな。
ワインとビールだ、もってけ泥棒」
フランク「サンキュー、有難く飲ませてもらうぜ」
レートが荷台にビールとワインを積んでいた。

フランクはさっそくビールを一本取ると飲み始めていた。
その様子に運転席に座る服部は呆れていた。
服部「で、では出発します。」
呆れながらも服部はエンジンをかけてユニットをトレーラーに乗せたジープを発進させる。
宮藤「リーネちゃーん！ペリーヌさーん！またねー！」
リーネ「芳佳ちゃーん！手紙、書くからねー！」
宮藤はジープから乗り出して手を振る。
リーネたちも又手を振り返していた。
そして一行はまずサン・ヴィトに向かう補給車列と合流するためにイルソンへと向かった。

第11話：かの世界の戦争（残虐なシーンあり）

それから数時間後、イルソンに一行は到着したが補給車列は到着しておらず一行は市内の中心にある広場に止まって昼食のサンドイッチを食べていた。

フランク「遅いなぁ、そろそろ来るはずなんだがな。

服部も食ったらどうだ？」

服部「結構です、先に道を確認してますから」

フランク「先に食っとかないと後が大変だぞ。

たく」

宮藤とフランクはサンドイッチを食べていたが服部はサンドイッチに手をつけず道路を確認していた。

するとサン・ヴィトの方から多数の車が来る音が聞こえてきた。

フランク「ん？」

宮藤「なんだろう？」

やってきたのは１０数台の兵士を満載したオペルブリッツとオートバイ、ｓｄｋｆｚ２５１／１とｓｄｋｆｚ２５１／１６、Ｔ―３４／７６であった。

その中に一台のキューベルワーゲンがジープに近づくと乗っていたＭ３６を着て規格帽を被り皮手袋をした大尉がキツイ訛りのある英語で宮藤たちに聞いた。

大尉「お客様とやらはあんたらかい？」

服部「あ、はい。

自分は扶桑海軍服部静…」

大尉「自己紹介はいい、あんたらの車に2、３人護衛を乗せる。

それと武器と弾薬も持っていけ、この先は危険だ。

自分の身は自分で守れ。ここに来るまでにも４回襲われて３人撃たれた。

今日は運よく死人は出てないが危険だってことには変わりねえ」

大尉の問いに服部が答えると大尉が手短に状況を説明すると３人

にＭＰ４１とＳＶＴ―４０ライフル、Ｋａｒ９８Ｋライフル、そしてその弾薬ポーチがジープに投げ込まれ、ジープにＰＰＳｈ―４１を持ち規格帽を被りＭ４３を着て上からスプリンターパターンの迷彩ポンチョを着た兵士とヘルメットを被りＫａｒ９８Ｋを持った兵士がジープのフェンダーの上に乗り込んだ。

服部「えーと…」

フランク「あー、ハロー?」

兵士Ａ「Ｚдравствуйте、американский.」

兵士Ｂ「Ｚдравствуйте.」

フランクが挨拶すると兵士はロシア語で返した。

よく見れば腕には二人共聖アンドレイ十字が描かれＰＯＡと書かれたシールドをつけていた。

そしてしばらくすると反対側からＯＤ色のトラックとジープの集団がやってきた。

大尉「やっと到着だ、仕事の時間だ。」

到着したトラックを見ると大尉は呟いた。

そしてロシア語で彼は兵士達に指示すると動き出し隊列を組み始めた。

大尉「あんたらは俺の車のケツにつけ。

いいな?外れたら命の保証はない」

服部「は、はい」

大尉は強い口調で服部に後ろに着くよう命令した。

服部はそれに従い隊列の真ん中あたりにキューベルワーゲンの後ろについてサン・ヴィトに向かった。

それから数十分後、一行は危険なアルデンヌの森に入った。

森林地帯は鬱蒼とした針葉樹林が生い茂り道路の両側の視界はよくなかった。

宮藤「不気味…だね…」

服部「は、はい…」

フランク「幽霊でも出るんじゃねえか」

その不気味な雰囲気に宮藤と服部は怯えていた。
するとふと服部が木に何かぶら下がってるのに気がついた。
服部「あそこに木に何かぶら下がってますよ。」
宮藤「なんだろう？」
フランク「結構大きいな」
ぶら下がっている物は1メートル以上あるようにも見えた。
そしてその正体は近づくと分かった。
それは木からぶら下げられた腐乱しかけた死体だった。
首には「私は国家に反逆した裏切り者です」と書かれたプレートが吊るされていた。
それを見て3人は顔を青ざめる。
そして周りを見渡すと似たようなものが色んな所にたくさん吊るされているのに気がついた。
フランク「な、なんだよこれ…」
宮藤「ひ、酷い…」
服部「う…」
大尉「なんだって？反逆者、テロリストの末路さ。
国家に反逆し民衆を攻撃したんだ、それにふさわしい末路さ。」
その様子に3人は驚き吐き気を催すがそれにキューベルワーゲンに乗った大尉は自慢げに語る。
大尉「こいつら全員、我々連合軍を攻撃したテロリストだ。
テロリストは国際法上交戦権を認められないし捕虜になることもできない。
全員犯罪者だ。
犯罪を犯した者、秩序を乱した者は死を以てその罪を償わねばならないのだよ」
大尉の言葉にウィッチ達は恐怖を感じた。
大尉「まあ君たちもその意味がじきに分か…」
大尉が話していた次の瞬間、左側の森の中から何かが飛んでくるとキューベルワーゲンの近くに落下し爆発、キューベルワーゲンがひっくり返った。

フランク「なんだ！」
大尉「クソ！敵だ！撃ち返せ！」
キューベルワーゲンが吹き飛ぶとすぐにフランク達はジープの陰に隠れてフランクはＳＶＴ―４０を、服部がＭＰ４１、宮藤がＫａｒ９８Ｋを構える。
キューベルワーゲンから投げ出され帽子が吹き飛び右腕を押さえながら大尉が大声で支持する。
指示を受けすぐに兵士達はトラックから飛び降り車両の陰に隠れながら森の中を銃撃する。
随伴したｓｄｋｆｚ２５１／１も銃撃し、ｓｄｋｆｚ２５１／１６は火炎放射器で森を焼き払う。
火炎放射器が火を噴き森の一部を燃やすと数人のゲリラが火だるまになって出てくるがすぐに銃弾の餌食となった。
さらにＴ―３４も発砲し木を吹き飛ばす。
銃弾が飛び交い火炎放射器の炎とＴ―３４の砲弾が一面を耕していき辺りは硝煙と煙に包まれ沈黙した。
大尉「どうだ？」
兵士Ｃ「分かりません、連中撃ってこないんで」
大尉「何人か向かわせて死体を確認させろ。」
兵士Ｃ「は」
大尉は数人の兵士を茂みに向かわせた。
他の兵士達は物陰から銃を構え様子をうかがう。
そして茂みに近づいた瞬間
兵士Ｄ「ギャ！」
兵士Ｅ「ぐふ！」
兵士Ｆ「ガハ！」
隊列の斜め前の上方からから銃撃を浴び兵士達が撃たれた。
それと同時に物陰に隠れていた兵士達が一斉に機関銃を浴び次々と倒れていきｓｄｋｆｚ２５１の車内に手榴弾が投げ込まれ爆発、中から火だるまになって兵士が飛び出してきた。
フランク達の傍にいた二人の兵士も撃たれた。

大尉「クソ！反対側にもいるぞ！」
すぐに兵士達は撃ち返すが次々と撃たれていった。
フランク「宮藤、早く反対側に！」
フランク達は反対側に動こうとするがふと宮藤は撃たれた兵士の内ライフルを持っている方の息があることに気がついた。
兵士Ｂ「マ…マ…」
宮藤「フランクさん！この人まだ生きてます！」
フランク「…分かった！援護する！物陰まで急いで運べ！」
フランクは少し迷うとすぐに判断した。
フランクはライフルを構えると３０メートル先から銃撃していた上手く隠蔽されたブレンガンが据え付けられた蛸壺の兵士に狙いを定めると撃ち、２連射で蛸壺にいた二人を射殺する。
その間に宮藤は兵士の服を掴むと引っ張ってジープの反対側に移すと治癒魔法を使い怪我の治療を始める。
服部は二人より先に反対側に移っていたが怯えて動けずにいた。
宮藤「静夏ちゃん！」
服部「は！はい！自分は扶桑海軍服部静夏少尉候補生です！」
宮藤が大声で呼びかけると支離滅裂な返事をする。
そうしていると中腰で銃撃しながらフランクが来た。
フランク「宮藤、どうだ？」
宮藤「何とか助けられそうです」
フランク「そうか、宮藤、負傷者はまだたくさんいるがどうする？」
フランクが周りを見ると射線上に放置されたまま動けなくなった負傷兵や物陰に運ばれたり自力で隠れたが手当てもされていない負傷兵が大勢いるのに気がついた。
そしてどうするか宮藤に聞いた。
宮藤は少し考えると決断した。
宮藤「フランクさん！静夏ちゃん！」
フランク「分かった」
宮藤の返事にすぐフランクは何をしたいかを理解した。
フランク「分かった、連中に教えてやるぜ、この世で一番強い武器っ

てのは海兵隊員の持つライフルだってな！
　服部お前も来い」
服部「は、はい！」
そう言うとフランクは立ち上がり服部を連れて隊列の前の方に向かった。
前方では至近距離からの襲撃で大混乱に陥っていた。
兵士Ｇ「下がれ！下がれ！早く機銃座を撃て！」
兵士Ｈ「クソッタレ！」
ＰＰＳｈを持った兵士が兵士達が乗り左側に銃撃を浴びせているＴ―３４を後進させ射線を確保して前方から撃ち込んでくる機関銃座を破壊させようとしていた。
そのすぐ傍のトラックの残骸の陰では多数の兵士がライフルを構え撃ち込んでいたが負傷兵は身動きが取れず、反対側も動けない負傷者や死体が放置されていた。
先頭の隊列は酷いもので元々２両のｓｄｋｆｚ２５１を先頭にＴ―３４、そしてトラックの隊列だったが、２両のｓｄｋｆｚ２５１と３、４台のトラックは銃撃と手榴弾を投げ込まれ、更にゲリラが使う対戦車兵器、主に鹵獲されたバズーカやパンツァーファウスト、ＰＩＡＴの攻撃を受け炎上しその残骸に向けゲリラは機銃を浴びせＴ―３４はゲリラからの肉薄攻撃を避けようとトラックの後ろに移動しようと方向転換、後進していた。
だが次の瞬間、反対側から突如ＰＩＡＴが飛んでくるとＴ―３４のエンジンデッキを直撃、数人の兵士が吹き飛ばされ地面に落下しＴ―３４は身動きが取れなくなった。
戦車長「クソ！左だ！ぐは！」
身動きが取れなくなり戦車長がＰＰＳを持って、他の兵士も左側の茂みを銃撃しようとすると左側から掃射された。
左側からの銃撃はトラックの陰にいた兵士達も銃撃、殆ど全員が撃たれ死体となったか動けなくなった。
生き残った兵士達はＴ―３４とトラックの残骸の間の僅かな空間に追い詰められた。

その様子をフランクはそこから１５ｍほど離れたトラックの陰から見ていた。
フランク「駄目だ、十字砲火を受けてる…
　服部、先に左側の機銃座を潰すぞ、人を集めてくれ。」
服部「わ、分かりました」
フランクは先に左側の機銃を潰すことに決めると服部に人を集めさせた。
この時点で少なくとも襲撃は先頭部以外はある程度片付き後方と中央部はほぼ撃退されていた。
そのためある程度人員には余裕がありしばらくすると服部が宮藤の治療を受けて回復して拳銃を右手に持ってやってきた大尉と８人の迷彩ポンチョを着たり通常の軍服だったり迷彩ヤッケを着た兵士達を連れて戻ってきた。
服部「連れてきました。」
フランク「よくやったぞ！」
大尉「状況はどうなってる！
　先頭は！」
到着した大尉はすぐにフランクに戦闘の状況を聞いていた。
フランク「戦闘で味方が十字砲火を受けて孤立してる。
　負傷者も多数いるみたいだ、だから左側の銃座を潰してから兵士達を救出、それから右側を潰す。」
大尉「分かった」
フランク「機銃座を潰すのは俺とお前と服部」
フランクは状況を説明し一緒に機銃座を潰す兵士として迷彩ポンチョを着て規格帽を被りベレッタＭ１９３８を持った兵士とＭ４０軍服を着てヘルメットを被りＭＰ２８を持った軍曹、そして服部を指名した。
フランク「残りはここで待機。
　大尉が指揮してくれ」
大尉「勿論だ。」
フランク「それじゃあ、行くぞ。

音は立てるなよ」
指示し終わるとフランクは兵士達と共に身をかがめながら茂みに入っていった。
茂みに入ると銃を構えけもの道を進む。
そしてすぐ５ｍほど先にビッカース重機関銃を据え付けた簡易的な塹壕を見つけた。
その中には機銃を使うゲリラの他にも１０人近いゲリラが銃を構え撃っていた。
中にはＰＩＡＴを持った兵士もいた。
見つけるとすぐに４人は傍の木の陰に隠れた。
フランク「あったぞ、俺と服部がここから攻撃する、お前らは背後に回り込め」
軍曹「了解」
フランクが指示すると軍曹たちはゆっくりと動き出した。
フランク「さてと、俺達もやるか」
フランクは腰に付けた銃剣をＳＶＴ―４０につけると銃を構え機銃を撃つ兵士に狙いを定めた。
そして深呼吸をすると引き金を引き、ゲリラの頭を撃ち抜いた。
ゲリラが倒れるとすぐに他のゲリラも反応してフランクと服部を見つけると持っていたステンガンやライフルを構えて撃ってきた。
銃弾は二人が隠れていた二本の木を砕き二人を掠める。
その合間を縫ってフランクはＳＶＴ―４０を構え2、３発撃ち返しステンガンを構えていたゲリラを倒す。
だがまだ数人撃ってきていた。
フランクは服部の方を見ると服部は木陰にうずくまっていた。
フランク「服部！撃て！」
服部「え！しかし…！」
フランク「撃て！死にたいのか！」
フランクが服部に怒鳴った。
怒鳴られた服部は恐る恐る銃を構えると目をつむり銃を乱射した。
すると身を乗り出してライフルを撃っていた二人のゲリラにあた

り倒した。
突然の乱射にゲリラは怯みその隙にフランクはＳＶＴ―４０を連射し二人を殺すと弾が切れ弾倉を交換すると手榴弾を手に取り投げた。
手榴弾ア爆発するとフランクが叫んだ。
フランク「突撃！突撃！突撃！」
フランクは背後に回っている二人にも聞こえるほどの大声で叫ぶと突撃した。
蛸壺のゲリラは手榴弾の爆発にひるんでいた。
その間にフランク達が突撃する。
ゲリラＡ「クソ！大丈夫か！」
ゲリラＢ「あぁあああああああ!!!!」
周りの状況を機関銃を撃っていたゲリラが聞いた直後、別のゲリラの叫び声が聞こえその方向を振り向いた。
そこにはフランクが一人のゲリラを銃剣で刺していた。
フランクは銃剣でゲリラの腹を抉ると抜き頭を撃ち抜き続いてもう一人に3発を撃ち込み射殺した。
それを見て他のゲリラは恐れをなして蛸壺から飛び出し逃げようとするが出た直後、服部と他の2人の連射に撃たれ一掃された。
服部「はぁ…はぁ…はぁ…」
振り向くと服部が息を切らしながら銃を腰だめに構えていた。
フランク「よくやった！服部！」
服部「はぁ…はぁ…あああ！」
すると服部は崩れ落ちると叫んだ。
服部「ひ、人を殺した…私が…殺した…」
人を殺したという事実に気がついた瞬間、服部の中の何かが壊れたのか泣き叫び始めた。
するとフランクは服部の背中をさすると話しかけた。
フランク「泣け、泣けるだけ幸せだ。
そして二度とこうならないように神に祈れ」
それだけ呟くと周りを確認する。

すると道路の方から大尉と数人の兵士がやってきた。
大尉「サレンバーガー大尉、助かった。
何とか兵士は救出できた、反対側のもバズーカで潰した。
今部下に残党狩りと武器の回収をさせてる。
終わり次第動けない車両を爆破してサン・ヴィトに向かう。」
フランク「分かりました」
大尉が命令を伝えるとフランクは敬礼し大尉も返礼すると戻っていった。
その後兵士達は2、3時間かけ残敵掃討を行い、敵の死体と味方の死体、そして残骸からから全ての弾薬を回収すると味方の死体をトラックに乗せ動けない車両を爆破した後サン・ヴィトに向かった。
この日確認された敵の死体は１５０を超えた、だが味方の損害は３６名戦死、５９名負傷、戦車1台、装甲車3台、トラック9台全損だった。

第12話：決戦

宮藤「静夏ちゃん、大丈夫？」
フランク「宮藤、今は一人にしてやれ」
残敵掃討が終わりサン・ヴィトに改めて出発したが服部は精神的なショックから運転できる状態ではなく代わりにフランクが運転していた。
服部は助手席に座り俯いていた。
心配して宮藤が声をかけるがフランクの言葉から何かを察した。
フランク「Ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｈａｌｌｓ　ｏｆ　Ｍｏｎｔｅｚｕｍａ～♪
　Ｔｏ　ｔｈｅ　ｓｈｏｒｅｓ　ｏｆ　Ｔｒｉｐｏｌｉ～♪」
宮藤「フランクさん、何歌ってるんですか？」
ふと宮藤はフランクが鼻歌を歌っているのに気がついた。
フランク「ああ、海兵隊賛歌。
　我らが海兵隊の神聖なる軍歌だよ」
宮藤「そうなんですか。」
宮藤はそれだけ聞くと深く追求しなかった。

それから数時間後、すっかり日が落ちた頃に一行はサン・ヴィトに到着した。
サン・ヴィトの外周には有刺鉄線が置かれそのすぐ後ろには連結された複雑な塹壕陣地があり、その合間を縫うように道路が通されていた。
塹壕地帯を抜けると今度は隠蔽された対戦車砲陣地とダックインした戦車が置かれそこを通り過ぎると今度はフェンスと有刺鉄線で囲まれた市街が見えてきた。
ゲートの手前で憲兵に誰何され大尉が答えるとゲートが開き中に

通された。
中には司令部、病院、臨時飛行場、物資集積所が設置されていた。
隊列が中に入り元は広場だったらしき教会の前で停車した。
すると教会の中から数人の将軍とその幕僚たちが出てきた。
大尉「総員整列！閣下に敬礼！」
それを見ると大尉は驚いて将兵を整列され敬礼する。
デッカー「うむ」
将軍たち、即ちデッカーとブルクハウス、フライターク、ヘリング、クルツィヴァネク、モンテトン、ゲールケ、ホッペ、ヴィットマン、ヴィリングたち指揮官たちであった。
彼らは答礼すると宮藤たちの所にやってきた。
デッカー「君らが例のウィッチか？」
フランク「多分そうだと思う。」
デッカー「ようこそ、サン・ヴィトへ。
歓迎しよう、サン・ヴィト防衛部隊指揮官デッカーだ。」
そう言うとデッカーはフランクに右手を差し出すとフランクと握手する。
続いてデッカーはフランクの左に並ぶ宮藤、服部とも握手する。
デッカー「ここまで来るのに苦労したろう？
見ればわかる」
フランク「はい、ゲリラの襲撃を…」
デッカー「そうか。
君たちはまだ子供だから、辛かっただろう、ゆっくりしたまえ」
デッカーは憔悴した様子の服部と宮藤を見るとそれだけ声をかけると立ち去った。
その後彼らは充てられた兵舎に案内された。
充てられた彼らの部屋は最低限のベッドと電話程度しかないものであった。
部屋に入り各自荷物を置くと服部がフランクに聞いた。
服部「サレンバーガー大尉、一つ聞いてもいいですか？」

フランク「なんだ?」
服部「なぜ、大尉は人を殺しても平気なんですか?」
フランクに服部が聞くとフランクは大きくため息をつき、おもむろに煙草を取り出して火をつけ一服すると答えた。
フランク「平気じゃない。
人を殺して平気な人間っていうのは異常者だ、精神異常者か殺人鬼のどちらかにすぎない。
そして俺は海兵隊員だが狂っているわけでもジャック・ザ・リッパーのような奴でもない常人、いや少なくとも躊躇なく人を殺している時点で相当狂っているんだろうがそれでも狂ってはいないよ。
言っておくが俺はあんたらよりも人を殺してるぞ?パシフィックウォーではジャップの列車をいくつも破壊した、多分その中には民間人もいただろう、コリアンウォーだとコミーの列車を潰してる。
全て戦争という名の下に行われる大量殺人でしかない。
死んだら100%地獄行きのはずなんだろうが、どうやら現世が一番の地獄ってのは正しいらしいな」
フランクは自嘲気味に語った。
フランク「服部の反応は正しい、そして正常だ。
それだけは言える。じゃあおやすみ、最前線だと寝る事と飯が一番の娯楽だ」
フランクはそれだけ言うと眠りについた。

翌朝、サン・ヴィトでは宮藤が起きると兵舎の外で伸びをしていた。
宮藤「うーん、気持ちいい…」
真夏でありながら標高が高く針葉樹林が生い茂るアルデンヌ地方は一種の避暑地であった。
そのため戦闘さえなければこの地域は非常に快適であった。

ましてや真夏の早朝の澄み切った空気は癒しであった。
すると後ろから人影が近づくのに宮藤が気がついた、振り返ると服部がいた。
宮藤「静夏ちゃん…」
服部「少尉、朝食が出来たようです」
宮藤「うん、今行くね」
服部の口調はまだ昨日の事を引きずっているのか暗かった。
宮藤はそれに気がつきながらも精一杯いつもの口調で返した。
二人は朝食を取ろうと向かうがそこにあったのは食堂ではなくフィールドキッチンが積まれたキッチンカーとパンが山積みにされたテーブルと飯盒とコップを持って列に並ぶ兵士達だった。
輜重兵A「並んで並んで！列から抜けた奴と割り込んだ奴は最後尾に行け！」
輜重兵B「全員分は多分あるから安心しろ！お代わりはないがな！」
兵士達に輜重兵たちが怒鳴る。
するとフランクが飯盒を持ってやってきた。
フランク「二人共、飯盒持って並べ。
いつ来るか分からねえんだ、早めに食おう」
宮藤「はい」
服部「…はい」
二人は返事するが服部の口調はまだ暗かった。
フランクもそれに気がつき飯盒を取りに行こうとする服部に声をかけた。
フランク「服部」
声をかけられた服部は振り返った。
フランク「ちゃんと飯は食えよ。自分を大切にしろ。
上官命令だ」
服部「はい」
フランクの意を汲んだのか服部は少し笑顔になると飯盒を取りに行った。

しばらくして二人が戻ってくると3人は朝食の列に並んだ。
列がどんどん進み自分達の番になるとコップに代用コーヒーが、飯盒にグヤーシュが、蓋の方にはえんどう豆のベーコン添えが入れられライ麦パンの塊がマーガリンが渡された。
3人は適当なところに座って朝食を食べ始めた。
服部「これ、なんでしょうか？」
すると服部が料理について聞いてきた。
フランク「多分ライ麦パンとえんどう豆とベーコンの炒め物、シチュー、これ多分代用コーヒー。」
宮藤「シチューみたいなのはグヤーシュ、カールスラントとかオストマルクで食べれてるシチューだよ」
フランクと宮藤が朝食を説明した。
3人はそれから食べ始め特に喋ることもなく朝食を終えた。
フランク「ふう、食った食った。」
宮藤「美味しかったね、静夏ちゃん」
服部「はい…」
朝食を終え、フランクが一服していると突如サイレンが鳴り響いた。
フランク「ん!?」
宮藤「まさか！」
『総員戦闘配置！グリッドジャック14、アンクル17にてネウロイを多数発見！こちらに向け接近中！
これは演習にあらず！繰り返すこれは演習にあらず！』
それはネウロイを発見したという報告であった。
それを聞いた瞬間、兵士達は持っている物を放り出すと武器と装備を取りに行った。
宮藤「静夏ちゃん！」
服部「は、はい！」
宮藤たちも立ち上がると走ってストライカーユニットの所に向かった。

デッカー「こんな朝っぱらから、なんだ?」
参謀「は、アリアンスの近くでネウロイが多数出現、観測班は現在一時退避中です。」
デッカー「ついに来たか、上に急いで報告しろ。
ＦＡＣはどうした!」
司令部ではネウロイの出現という事態に対して訓練の通り行動していた。
ネウロイが出現したのはサン・ヴィトの南、ワーテルローの戦いのナポレオンの本営にちなみアリアンスと命名された地点の近くからだった。
このアリアンスこそが地下に潜む巨大ネウロイの所在地であった。
デッカー「戦闘準備!砲兵部隊は砲撃用意!
急げ!」
参謀「ＦＡＣ、ウィッチを緊急出撃。
上空待機させろ!」
ＦＡＣ『了解、ウィッチ部隊はスクランブル。
高度1万フィートで上空待機』
デッカーは戦闘準備を命じ、そしてウィッチを離陸させた。

ＦＡＣ『ウィッチ部隊はスクランブル。
高度1万フィートで上空待機』
宮藤「了解」
服部「了解」
宮藤たちはユニットを履くと無線から聞こえるサン・ヴィトのＦＡＣ、前線航空管制官の指示を受け離陸、上昇、サン・ヴィト上空で待機した。
しばらくすると木々が揺れ鳥が飛び立ち、無機質な金属音が聞こえ始める。
そちらを見ていると二人は木々の梢を掠めるように何かが飛んでくるのが見えた。
宮藤「ネウロイ!」

それは古臭い黒色火薬時代の二連式ピストルの銃身に短い主翼をつけたようなネウロイだった。
すぐに対空砲火が始まり一部が撃墜されたり損傷を受け始めた。
それと同時に無線も不明瞭になり始めた。
宮藤「行くよ！静夏ちゃん！」
服部「は、はい！」
宮藤と服部も動き出しネウロイに向け突撃する。
本格的な戦闘、後にネウロイの最後の大博打と言われる大攻勢の始まりであった。

その頃、西部戦線最前線、コブレンツ近郊、ライン川沿岸地域。
ライン川を最前線とする西部戦線中部では縦深陣地が作られネウロイに相対していた。
その陣地の中で第２０山岳軍所属の第５２歩兵師団第１５２歩兵連隊第Ⅱ大隊第３中隊第２小隊が兵士達が双眼鏡を覗いていた。
兵士Ａ「今日も異常はないなｌ
兵士Ｂ「ああ、たく上はいったい何に怯えてるんだか？
　連中全然動かねえぞ」
兵士Ａ「だな、何が襲ってくる可能性が高いだ、動いてすらいねえよ」
兵士達は数日前から出された警戒警報をネタにしていた。
するとふと視界の片隅に何かが動いた。
兵士Ａ「なんだ？今さっき何か動いたような…」
兵士が双眼鏡を覗くとその正体が分かった。
兵士Ａ「ま、不味いぞ！こちら第３中隊第２小隊！敵ネウロイ接近！数１！いやそれ以上来る可能性あり！」
通信手『了解』
兵士達の上方は即座に師団司令部に伝えられた。
通信手「師団長、ゲオルグ１３とアドラー３５からネウロイ接近の報告あり。

その他多数の陣地よりネウロイと思しき物体の接近、又はネウロイの活動を報告して来ています。」

ギルザ「分かった、とうとう動いて来やがったか。

無線通信の状況は？」

通信参謀「は、先程より正規の周波数を中心に通信妨害が発生中です。

現在影響の少ない予備周波数に切り替え中です。」

ギルザ「各部隊間の連絡は電話線だから無線妨害とは無縁だ。

参謀、他の地域はどうなってる？」

参謀「どうも同じようなのを第５５装甲師団と第１８空挺師団が確認してます。

今、航空偵察部隊に情報を問い合わせてます」

ギルザ「大攻勢の可能性があるな。

砲兵部隊に下令、全火力で以て敵に痛撃を与えよ、前線部隊は撤退準備。

司令部に連絡、我敵の攻勢の開始を確認、これよりワーテルローを開始する。」

師団長のギルザは状況を整理すると作戦開始を命じた。

ギルザの命令により師団砲兵部隊は即座に行動を開始した。

砲兵指揮官「距離８キロ！目標方位０９５！ファイア！」

砲兵部隊はライン川の向こう岸にいるネウロイに対して砲撃を開始した。

第５２歩兵師団は本来の師団固有の砲兵連隊に更に増強として２個重砲大隊と１個独立砲兵大隊、更に２個ネーベルヴェルファー大隊を有し、その強大な砲兵火力はライン川を越えて向こう岸がから接近中のネウロイを破壊した。

ランス、連合軍総司令部では寝起きを叩き起こされたのか寝癖がついたままのマロリーが徹夜したのか疲労困憊気味の参謀たちと共に地図を眺めていた。

マロリー「連中ついに来たか」

参謀「は、既にアルデンヌ地方前面を中心に敵の攻勢を確認。
殆ど予想通りです、想定されていた敵の勢力もほぼ同じ。
むしろ想定よりは状況はマシです」
「通信回線は予想通り無線妨害で潰されたが予備回線に切り替えてる。
それもいつまでもつかは知らんが」
参謀たちに紛れて煙草を指で挟みながら西方総軍通信部長エーリッヒ・フェルギーベル通信中将が無線の状況を伝える。
フェルギーベル「それより不味いのが昨日の夜、ランスとセダンとディジョンの電話交換所を襲撃された。
セダンとディジョンは無事だったがランスがやられた、幸い軍用回線は無事だが予備の民間回線が使用不能、復旧には12時間かかる見込みだ。
上はどうだ?」
この前夜、セダンとディジョン、そしてランスの電話交換所がゲリラの襲撃を受けていた。
セダンとディジョンは損害はなかったがランスは被害を受け民間回線を破壊されていた。
マロリー「ああ、既に我々の作戦の通り動き始めてる。
サン・ヴィトは?」
参謀「サン・ヴィトからはまだ…」
参謀がサン・ヴィトの状況を説明した直後、別の参謀がメモ書きを持って来た。
参謀「これ本当か?訂正、先程サン・ヴィトから報告がありました。
敵の攻勢を確認、第一波迎撃中、現在の損害微小、弾薬消費量5%、現状で安定しつつあるも航空支援を要請、です」
マロリー「サン・トロンを出せ、サン・ヴィトに下令、3時間以内に潰せ」
参謀「は」

その頃、サン・ヴィトでは上空を二人のウィッチが援護し、地上では南から来るネウロイを迎撃していた。
その下のある塹壕ではフランクと数人の兵士達がいた。
兵士A「逃げるのはネウロイだ！逃げないのはよく訓練されたネウロイだ！
フーハハハハハ！全く戦争は地獄だぜ！」
フランク「全くそうだぜ！まあ今の所は俺達歩兵は必要ねえけどな！」
兵士B「ネウロイ相手ならゲリラとやるより楽だぜ、何せ連中おつむがねえんだからな！」
兵士C「外見ろよ！七面鳥撃ってるみたいだぜ、射撃場の的だぜ」
彼らは頭上を飛び越える砲兵の砲撃やロケット弾を後目に暢気にしていた。
というのもネウロイ相手だと歩兵よりも砲兵や戦車兵の方が出番が多く歩兵はあくまで接近したときに叩き潰すのと砲兵と戦車の援護、側面攻撃などが中心だった。
だが歩無し将棋は負け将棋というように彼らの存在無くしては勝利など得られるはずもなかった。
一方、外の森林とその合間の平野では砲兵たちの砲撃によりネウロイが次々と吹き飛ばされていた。
ネウロイは黒と赤でなおかつ直線的で大きい、そのため森林地帯でありながら非常に目立ってしまい殆ど一方的に撃たれ七面鳥撃ちの状態となっていた。
上空では宮藤と服部が地上の対空砲火の援護を受けて次々とネウロイを撃破していっていた。
サン・ヴィトに配属された対空火力は非常に強力で尚且つ新型のVT信管が大量に供与されていたため空ではマリアナ沖海戦の再来が起きていた。
総じて戦況はネウロイの負の側面が全て出てしまいよく訓練され、尚且つ偽装された連合軍になすすべなく壊滅しつつあった。
参謀A「報告！ランスより、サン・トロンを援護に向かわせる、と

のことです。」
デッカー「だろうな」
司令部の状況はやや落ち着いていた。
すると慌てた様子の参謀が報告を持って来た。
参謀Ｂ「報告！監視班より敵の本丸が動き始めました！
地中よりＵボートのようなものが現れた模様、現在小型ネウロイを放出中、だそうです。」
デッカー「何！砲兵部隊に下令！即座に全火力を本丸に移せ、敵が来る前に叩き潰すぞ！」
「は！」
サン・ヴィトの南にあった敵のネウロイが動き始めた、そして小型ネウロイを大量に放出し始めたという報告を一旦退避したものの未だ近くの森林で監視していた観測班が報告してきた。
それらが来る前に何としても叩き潰す必要が出てきた。
デッカーは砲兵部隊の全火力を以て叩き潰す事とした。
砲兵指揮官「目標変更、目標アリアンス、弾種、魔導徹甲、急げ！」
連絡を受けた砲兵部隊は急いで準備を始めた。
砲兵Ａ「アパム！早く弾持って来い！」
砲兵Ｂ「照準完了！いつでもどうぞ！」
砲兵Ｃ「装薬装填！尾栓閉鎖確認！」
砲列は突然の目標変更に大慌てであったが訓練の通り行動していた。
そして全門の砲撃準備が完了すると砲兵指揮官に準備完了が伝えられた。
砲兵Ｄ「全門砲撃準備完了」
砲兵指揮官「了解、撃て！」
指揮官の号令と共にサン・ヴィトに配備された多数の重砲の砲撃はネウロイめがけて飛んでいった。
その十数秒後、サン・ヴィトの近くの丘陵に突如現れたＵボートのようなネウロイの周辺に多数の砲弾が着弾し土煙が辺りを覆った。
観測兵「弾着、確認、修正右２度修正、手前に１００」

観測兵が着弾観測を行う。
修正指示を受けるとすぐに第二射が飛んできた。
第二射はネウロイを直撃、半壊させる。
観測兵「目標命中！効力射！効力射！」
さらに続けて数連射行われネウロイ周辺は土煙に覆われた。
そしてしばらくして煙が晴れるとそこには6割が崩壊してボロボロになったネウロイがあった。
そこへダメ押しとなる最後の砲撃が飛んできた、砲撃はネウロイを破壊、コアを破壊した。

ハイデマリー「ネウロイの消滅を確認しました。」
ハインツ「は？こっちはまだサン・ヴィトについてないぞ？」
その頃サン・ヴィトの北をハインツたち元５０１が飛んでいた。
だがすでに地上のネウロイは全て片付けられ、残っているのは上空に僅かなネウロイだけであった。
ミーナ「とりあえず宮藤さんたちと合流しましょう」
ハインツ「それがいい。行くぞ！」
ミーナ達はサン・ヴィトへと急いだ。

服部「お、終わった…」
その頃宮藤たちは突然のあっけない戦闘の終了に驚いていた。
だがまだ僅かにネウロイが残っていたがそれらも次々と対空砲火の餌食となっていった。
二人もゆっくりする暇もなく残党のネウロイを攻撃、撃破していると突然別方向から銃声が響き目の前のネウロイが破壊された。
ノヴァク「騎兵隊、只今参上、と言いたいところだがインディアンも強盗も既に9割処理済みか。」
バルクホルン「仕事がないのはいい事だ、違うか？アレックス」
ノヴァク「そうだなトゥルーデ、さっさと終わらせて結婚式の段取りを考えるか。」

親父が早くやれと五月蠅い」
宮藤「ノヴァクさん！バルクホルンさん！」
宮藤が銃声がした方を振り向くとそこにはノヴァクとバルクホルンがいた。
その後ろには元５０１のペリーヌとリーネと坂本以外の全員がいた。
ハインツ「よう、宮藤。
助けに来たぜ、と言いたかったが陸の連中が優秀すぎたな。」
ミラー「その分早く帰れますよ、少佐」
すると無線妨害が治まり無線から音声が聞こえてきた。
ＦＡＣ『こちらサン・ヴィトＦＡＣ、ライン川国境の攻勢が停止、トリニティ作戦発動。
繰り返すトリニティ作戦発動』
ハインツ「マジか、中佐…」
ミーナ「ええ…」
無線を聞くとハインツはタバコを取り出し火をつけ一服するとウィッチ達に叫んだ。
ハインツ「お前ら！エルベ川に一番乗りする心の準備はいいか？」
続いてミーナが言う。
ミーナ「新たな戦局の変化に対し、我々のなすべき事はただ一つ！
ここに５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズを再結成します！」
「「了解!!」」

その数日後の夜、ボックとマロリーは電話で会話していた。
マロリー「ボック、５０１を再結成させて良かったのか？」
ボック『５０１は必要な〝駒〟だ。
東には４つ、５０２、５０３、５０５、５０７のＪＦＷがあ

る。

だが我々の駒は3つしかない。

連中と協定を結んでも所詮は一時的な妥協に過ぎん。

裏では互いに今も動いている、連中と対等である必要があるのだよ。』

マロリー「それに、彼ら５０６だけでは西部戦線は頼りないと？」

ボック『そうだとも。君だって覚えてるだろ？

バスティーユ作戦の騒動を、あの５０６がこのガリアの内乱の起爆剤の一つだって事を。

彼らはジョーカーだ、既にあのカードはこのゲームを何回もひっくり返した。

あのカードは我々の手札でなければならない、そうならなければ、このゲームの敗者は我々だ。』

マロリー「違いない」

ボック『だからこそ、５０６はこの国に括り付けて置かないといけないのだよ。

連中がこの世から消え去るまでね』

二人の会話はこの国を舞台としたゲームにおける５０１と５０６の役割を語っていた。

ウィッチ達の価値はもはや戦闘にはなく、政治にあった。

第6章：Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈｅａｒ　ｔｈｅ　ｐｅｏｐｌｅ　ｓｉｎｇ?――法と秩序――

プロローグ：翼の折れた英雄

「シャイセ、ここはどこだ」

「知るか、ドイツ人。

戦線の後ろだけは分かるぞ」

１９４５年2月、ハンガリー平原のブダペストの西の原野の森の泥の中を二人の奇妙な兵士が歩いていた。

一人はドイツ軍の武装親衛隊の軍服を着ていたが手にはアタッシェケースを持ち、もう一人はハンガリー空軍の軍服に手にはダヌビア４３Ｍ短機関銃を持っていた。

アタッシェケースを持ったＳＳ将校は第２２ＳＳ騎兵師団第２２ＳＳ工兵大隊臨時大隊長のエーリヒ・ルドルフ・テオドール・フォン・ホスバッハＳＳ少佐（親衛隊大隊指導者）、もう一人はハンガリー王国空軍第１０２戦闘航空団所属カーロイ・ラヨシュ・ヤーノシュ大尉だった。

ホスバッハはこの数か月前から続いていたこの世の地獄とも思える戦場、即ちハンガリーの首都ブダペスト包囲戦を戦い、最後の脱出作戦でブダペストから脱出することは成功したがソ連軍の攻撃で部下と離れ離れになり一人土地勘のないブダペスト郊外を彷徨っていた所、同じくソ連軍に撃墜され彷徨っていたカーロイと出会ったのだ。

だがカーロイはドイツ人によって出世街道から外されたという経歴を持っていたためソ連ほどではないとはいえドイツ人を嫌っていた。

カーロイ「第一、お前らが俺達マジャール人を振り回さなければこんなところで戦争なんて起きなかったんだよ！」

ホスバッハ「お前はあの劣等人種の害虫どもがヨーロッパを支配し搾取しても良かったのか!?

口にするだけで口が劣等人種になるわ！」

カーロイ「そうじゃねえ！戦争やるなら負けたら意味ねえだろうが！

フランスで芸術品略奪しまくり、祖国にいたユダヤ人をどっかに送って、資源と製品だけ盗みやがって何がアーリアの優れた民族だ、アフリカの黒んぼ野郎共かアジアの猿共の方が礼儀正しいさ！

てめえぶっ殺してソ連軍に投降するぞ！」

ホスバッハ「なんだとフン族！」

カーロイ「自称優勢人種！ナチ！キャベツ食い！ジャガイモ野郎！」

二人は泥の中を歩きながら口論を始めた。

ハンガリーからすればドイツは戦争から離脱しようとするのを散々邪魔した挙句に傀儡にして自分達の国にソ連軍を招いた連中だった。

第二次世界大戦末期、ハンガリーはドイツ軍最後の攻勢として有名な春の目覚め作戦に代表されるドイツ軍最後の機甲部隊の激戦地だった。

この時期この地にはかの有名な第1ＳＳ装甲師団ライプシュタンダルテ・アドルフ・ヒトラー、第2ＳＳ装甲師団ダス・ライヒ、第3ＳＳ装甲師団トーテンコップ、第5ＳＳ装甲師団ヴィーキング、第12ＳＳ装甲師団ヒトラーユーゲント、装甲師団フェルト・ヘルン・ハレなどのドイツ軍の最後の機甲兵力が展開し、ハンガリー平原を舞台に戦車戦を演じていた。

それをハンガリー軍の残余、有名なものではセント・ラースロー歩兵師団などだった。

だが二人の喧嘩は突然二人の腹の虫が鳴ることで終わった。

カーロイ「はぁ、喧嘩はやめよう。こんなことで体力を使いたくない。

この2、3日碌な物を食ってない」

ホスバッハ「俺なんて最後にまともな食事にありつけたのは3か月

前だ」

二人はこの数日、ホスバッハに至っては包囲戦が始まって以降はまともな食事を摂っていなかった。

そのうえ二人は数日間飲まず食わずで寒く泥にまみれた戦場を昼夜連続で一睡もせずに歩いていた。

彼らがいたのはソ連軍の戦線後方、そこら中にソ連兵とパルチザン、ルーマニア軍、ブルガリア軍などの敵がいた。

民間人も敵とつながっている可能性があるかそもそも難民になって逃げたかソ連兵たちに略奪されたかのどれかだった。

二人はこれらを回避するためできる限り人のいないところを進んでいた。

すると二人は木々の隙間から家のようなものが見えるのに気がついた。

ホスバッハ「なんだ?家か?」

カーロイ「だろうな、どっかの村だろう。人の気配はないみたいだが」

ホスバッハ「とりあえず様子を見よう」

二人は家に警戒しながら近づいた。

周囲にも同じような家がいくつかあったが奇妙な事に人の気配はなく文字通り何もなかった。

どうやら住民はソ連軍が来る前に逃げたかソ連兵に捕まって殺されたかのどちらかのようだった。

ホスバッハ「誰もいなさそうだな、行くぞ」

誰もいないと確信したホスバッハはＳｔＧ４４を構えながら家に近づく。

そして家の陰から村の中を見ると村の中も人っ子一人おらず、あるのは馬の死体やそれを啄むカラス、放置されたドイツ軍の軍用車両、砲弾を受け撃破されたⅢ号突撃砲Ｇ型１９４４年１２月生産型とドイツ軍に鹵獲運用されていたＴ―３４／８５、置いてけぼりにされたような犬数匹だけだった。

ホスバッハ「誰もいないな、よし行くぞ」

ホスバッハは後ろに着いたカーロイに指示するとある家のドアをゆっくり開け中に入った。
家の中は空っぽで荒らされた様子はなかった。
ホスバッハ「何か食えるものないか？」
ホスバッハとカーロイは部屋に入ると食い物を漁り始めた。
するとキャビネットの中にリンゴがいくつかあった。
ホスバッハはリンゴをかじる。
カーロイもやってきてリンゴを夢中で食べ始めた。
だが二人はリンゴを食べるのに夢中で外に別の集団が近づいてくることに気がつかなかった。
しばらく二人は夢中でリンゴを食べていると突然、後ろのドアが開き二人は振り返った。
そこには数人のソ連兵がいた。
一瞬の静寂の後、ホスバッハは首から下げていたＳｔＧ４４をソ連兵めがけて乱射する。
すると先頭にいたＰＰＳｈ―４１を持ったソ連兵が撃たれ倒れ、ソ連兵は一旦下がった。
だが次の瞬間、部屋の中に手榴弾が投げ込まれ、爆発した。
爆発で脆い家は大きく揺れ、部屋はぐちゃぐちゃになった。
煙が晴れるとソ連兵は様子を見に部屋に入った。
だがホスバッハはまだ息があった、彼は最後の力を振り絞りアタッシェケースを開け、中に持っていたＭ２４手榴弾を入れ、紐を引いた。
そして数秒後、兵士がホスバッハを確認しようと頭を掴んだその時、手榴弾が爆発しソ連兵を全員吹き飛ばした。

―――――――――――――――

「しかし、ここだけ見るとフランスみたいだな。
フランス人にアメリカ人が二人で」
「イギリス人じゃねえのか？」
「俺は正真正銘オレゴン生まれのオレゴン育ち、血統書付きのアイリッシュアメリカンさ」

１９４５年２月、オーストリア南部、季節外れの雨のスロヴェニアとの国境付近の山岳地帯では数人のパルチザンと連合軍航空兵の捕虜の奇妙な集団が移動していた。

第二次世界大戦中、バルカン半島はその５０年後に起きた内戦を予知させるような凄惨な殺し合いが行われていた。

クロアチアでは元々クロアチア民族主義者のテロ組織でありユーゴ侵攻後に誕生したクロアチア独立国を支配するクロアチア独立国ポグラヴニク（国家元首）アンテ・パヴェリッチ率いるウスタシャがクロアチア全土で大規模なユダヤ人とセルビア人の虐殺を行っていた。

その惨さはあのドイツさえドン引きし「おいバカやめろ（意訳）」と言うほどの蛮行を行い戦後もユーゴ政府もあまりの凄惨さからこの事を封印しまともな研究が行われ始めたのもユーゴスラビアが崩壊しクロアチアが独立した後であった。

セルビアでは逆にセルビア人至上主義者たちがセルビアのセルビア人以外を虐殺していた。

枢軸側ではセルビア救国政府が各地でドイツの人種政策に基づいた人種政策を行いユダヤ人を虐殺、一方初めは連合軍に属していた元ユーゴスラビア王国軍の軍人を中心とする抵抗組織のチュトニックはセルビア人以外を虐殺した。

更にはあまり知られていないものユーゴスラビア人民解放軍及びパルチザン部隊も又小規模ながら虐殺を行ったこともあった。

この時代、バルカン半島はパルチザンやレジスタンス、ドイツ軍、イタリア軍、クロアチア独立国、セルビア救国政府、ウスタシャ、チュトニックなど大小様々な勢力が入り乱れる混沌とした状況だった。

その中でもヨシップ・プロズ・チトー率いるユーゴスラビア人民解放軍及びパルチザン部隊は最大の兵力と支援を受け最大の勢力を誇っていた。

彼らパルチザンは通常のパルチザンだけでなく戦車部隊、空挺部隊、更には航空部隊と海上部隊も有する強大な勢力となっていた。

彼らはバルカン半島で抵抗運動をするだけでなく時にはオースト

リア南部の収容所から捕虜となった連合軍兵士を救出する作戦も行っていた。
　この日も彼らパルチザンはチェコスロバキア製の軽機関銃ＺＢ―２６を持った元フランス空軍の士官でレジスタンス運動に参加しスロバキア蜂起にも参加したフランス人アラン・ジャン＝リュック・マリー・ド・メーストル大尉とユーゴスラビア製ＦＮモーゼルＭ２４ライフルと２丁のコルトＭ１９１０を持ったイタリア系アメリカ人のアントニー・カルロス・〝トニー〟・コルレオーネ少尉とその部下のスロヴェニア人数人が収容所を襲撃しアイルランド系アメリカ人で英空軍士官のジェフリー・パトリック・フィッツジェラルド・ジュニア中尉を救出し山岳地帯を進んでいた。
　ジェフ「一つ聞くが、追っかけて来てないよな？」
　トニー「さあ？ジェリー共が追っかけてきたら来たで撃退すればいい。」
　アラン「流石に来ないだろ、こんな山の中だ。
　それにこの季節外れの雨で追いかけてきてもすぐ撤けるさ」
　ジェフがドイツ兵が追いかけて来てる不安に思うがトニーもアランもこの雨ではドイツ軍は追いかけてこないと考えていた。
　この雨は襲撃時には有利な点となった、だがこの雨は逆にこの山岳地帯では危険な要素となった。
　トニー「ん？なんか変な音がしないか？」
　ジェフ「音？」
　ふとトニーが雨音の中に微かに変わった音がすることに気がついた。
　言われた彼らは耳を澄ませた。
　アラン「…確かに。」
　ジェフ「象の大群が走ってくるみたいな音だ。
　何の音だ？」
　その音はまるで象の大群が走ってくるような音だった。
　だが彼らにはその正体が分からなかった。
　すると突然一人のパルチザンが右手の山を指さして叫ぶと逃げ始

めた。
　他のパルチザンも同じように突然逃げ始めた。
　3人は意味が分からず右手の山を見る、するとそこに土砂が突っ込んできていた。
アラン「あ、あああああああ!!!!!」
ジェフ「逃げろー!!!!」
トニー「ファッキンホーリーシット!!!」
　3人は逃げようとするが土砂に追いかけられ、飲み込まれた。

　第二次世界大戦中、殆ど国では物資の不足から華やいだ暮らしはできなかった。
　一か国を除いて。
　それはすなわち米国であった。
　米国では大戦中も物資不足とは無縁の生活が続いていた。
　確かに男たちは戦場か工場へと行き、一部の物資、ガソリンや金属製品の一部、甘味料は制限を受けたがそれ以外は戦前と何も変わらない華やかな生活を送っていた。
　この時代のアメリカを象徴するものと言えば映画だろう、この時代のディズニーは白雪姫やダンボのような傑作アニメ映画が誕生していた、そのクオリティは現代でもなお色褪せていない。
「いいか、各自、2機編隊を維持しろ。
　ここで出来なきゃジャップの餌食になるだけだぞ」
「了解」
「了解です、少佐」
「分かりました、教官」
「分かったな?相手は同数のコルセア。
　ベアキャットで落とされた奴は基地を10週だ」
　その華やかなアメリカ人の暮らしが行われている西海岸最大の都市、ロサンゼルス郊外のサン・ガブリエル山脈上空では4機の米海軍

の最新鋭戦闘機グラマンＦ８Ｆ―１ベアキャットと４機のＦ４Ｕコルセア戦闘機の模擬空戦が行われいた。

Ｆ８Ｆ隊は訓練中のパイロットが操縦する訓練部隊であった。

編隊を率いるカート・ロバート・フーヴァー少佐はベテランパイロットであり総飛行時間は既に５０００時間を超え、教官としてＦ８Ｆのテスト段階から関わった軍人であった。

恐らくこの時点では彼ほどＦ８Ｆに慣れたパイロットは米海軍にはいなかったほどだ。

編隊は高度１万フィートで交差するとそれぞれ２機編隊に分かれ空戦を始めた。

コルセアはＦ８Ｆを追いかけるがベアキャットはコルセア以上に格闘戦に特化した戦闘機であった。

そのためカートは追いかけてきたコルセアに対して機首を上げ宙返りする。

コルセアもそれを追いかけて宙返りするが気がついた時には目の前にＦ８Ｆはなかった。

コルセアのパイロットが振り返った時にはＦ８Ｆは背後にいた。

彼はＦ８Ｆでひねり込みをしてコルセアの背後についたのだ。

カート「ケビン、ついて来てるか？」

ケビン『はい、少佐！』

カート「次はこちらが追いかける番だ。

距離に注意しろ！」

カートはコルセアの編隊を追尾するとまず後方のウィングマンを〝撃墜〟、続いて編隊長を追いかけるがコルセアはシザーズで振り切ろうとする。

だがＦ８Ｆはコルセアの背後にピッタリとくっついて追いかけ続けた。

しかし突然、カートの機体の左の水平尾翼からトリムタブが脱落した。

ウィングマンはそれを回避したがカートの機体は急上昇すると眼下のサン・ガブリエル山脈に急降下、墜落した。

１９４５年８月ほど歴史が動いた月というのはないだろう。
この月は初めから世界初の原子爆弾の炸裂・ソ連の参戦・日本の降伏・インドネシア、ベトナムの独立宣言・世界大戦の事実上の終結という冷戦の始まりと帝国主義の崩壊の始まりとなった月だった。
そしてこの月の初め、日本は既に風前の灯火であった。
制空権を失い、各地で空襲が続き、あらゆる航路に機雷が撒かれ、ガソリンは尽き、殆どの艦船は動けないか海の藻屑となっていた。
そんな中数機の日本機、和製フォッケウルフとも呼ばれることもある川崎五式戦闘機が日本上空を飛行していた。
だが次の瞬間、上空から米海軍のＦ６Ｆが襲い掛かり華族の次男でエースだった特別操縦見習士官上がりの大野貫二郎少尉機が被弾、出火、爆発した。
そして空中戦が始まった。

第1話：序章の始まり

「ん…ここは…」

大野貫二郎はふと窓が叩かれる音で目を覚ました。

目の前にあるのは空と煙と狭いコックピットに所狭しと並んだ計器類と操縦桿だけだ。

高度と速度を確認すると高度は３０００ｍ、速度は３５０キロと表示されていた。

貫二郎「ん…誰だ？」

ふと誰が窓を叩いているのかと思い機体の左側を振り向く。

そこには黒髪の犬の耳を生やした少女がいた。

貫二郎「え…？女の子…？」

１９４４年の秋のある日の夕方、扶桑、東京都市谷、陸軍省。

その航空総監室で貫二郎はある将軍と会っていた。

「いやぁ、貫二郎君、久しぶりじゃないか」

貫二郎「はい、アナン閣下もお元気そうで何よりです。」

「よせ、君とは親父さんが陸軍兵学校時代からの仲だ。

君の生まれた時だって一緒に飲んでたんだ、家族のようなものじゃないか。」

貫二郎「そんなこと言われましても、元陸軍大臣で現在は扶桑陸軍航空総監である阿南中将閣下にそんな口を利くわけには…」

阿南「それもそうだな、ガハハハ！」

それは史実の終戦時の陸軍大臣阿南惟幾中将であった。

彼は今は扶桑陸軍航空総監部総監となっていた。

航空総監部は扶桑陸軍の航空関連の教育を司る部門であった。

貫二郎「ところで閣下は何故自分をこちらに？

自分としましては九州に戻りたいのですが…」

貫二郎は阿南になぜ自分を呼んだか聞いた。

阿南「簡単な話だ、だがここで話すのは面倒だ。
君も九州に行きたいのかね？」
貫二郎「はい、向こうにも用事がありますので…」
阿南「なら向こうで話そう。
明日から私は宮崎に向かうが君もついてくるかね？」
阿南は荷物を纏めていた。
彼は九州出張に向かう予定だった。
貫二郎「はい、お供させてください」
阿南「いいだろう、飛行機は明日の０８００に福生から出る。
遅れるなよ？」
貫二郎「分かりました」
貫二郎は阿南に敬礼すると退室した。

翌日、二人は宮崎にいた。
早朝に一〇〇式輸送機で福生から宮崎の新田原陸軍飛行場につくとそこからトヨダＡＢＲ型に乗り宮崎の山道を走っていた。
貫二郎「閣下…その…どちらに？
新田原の熊谷陸軍飛行学校分教所じゃないんですか？」
ＡＢＲ型の後部座席に阿南と並んで座る貫二郎は阿南の九州出張が新田原にある陸軍飛行学校ではなく何故か陸軍部隊のいない宮崎の山岳地に向かっていることに戸惑っていた。
阿南「今日は違う。
ある人物に会うためだよ。」
貫二郎「だったら自分はいない方がよろしいのではないでしょうか？」
自分がいるべきではないと思いそう言うがすぐに否定された。
阿南「いや、その人物は君ともかかわりのある人間だからね。」
貫二郎「はぁ…」
阿南の答えにただ彼は首をかしげるだけだった。
すると車はある立派な屋敷の前で止まった。

阿南「どうやらついたようだ。」
執事「お待ちしておりました、阿南閣下。
　どうぞこちらへ」
停車すると運転手が座席のドアを開け執事が出迎えた。
ふと貫二郎は微かにエンジン音が聞こえることに気がつき見上げた。
貫二郎「ストライカーユニット?それにしてもエンジン音が変だけど」
阿南「貫二郎君、きたまえ」
貫二郎「は、はい」
見上げていると阿南が貫二郎を呼び貫二郎は急いで阿南に続いて屋敷に入った。
屋敷の中に入ると中では正装をした人達が多数いた。
だがその様子は庭にいる誰かを見て騒いでいる様子だった。
執事は人だかりを縫って庭で少女を介抱していた髭を生やした男に耳打ちした。
執事「名代様、阿南閣下とそのお付きの方がいらっしゃいました。」
名代「阿南閣下に〝あの話〟は無しだと伝えろ。
　こんな野蛮な奴に扶桑の代表が務まるはずがない」
阿南「それにしてもこの騒ぎは何ですかな?」
阿南と貫二郎も執事に続いてその髭の男である名代に話しかけていた。
名代「あそこの分家の娘が私の娘にあんな野蛮な行いを!
　あの話は無しだ!」
阿南「それは困りますよ、陸軍としては既にこの件で先方と話がついてるんです。
　ここで折れては我々は５０６に誰も送らないことになるんです、それは大変困る、というのが中央の見解なんです。
　陸軍は既に黒田中尉と大野少尉のセットでやるというのが規定路線なんです。」
名代と阿南は何やら話をしていた。

その様子を貫二郎は後ろから見ていた。
すると突然
「貫二郎!?なんでいるの!?」
貫二郎「え?邦佳!?なんでいるの!?」
貫二郎が振り向くとそこにあの、窓の外にいた少女がいた。
窓の外にいた少女、即ち黒田邦佳だった。
なぜか着物を着て傍にはストライカーユニットの発進台があった。
二人は酷く驚いていた。
二人共互いがここにいるとは思ってもいなかった。
邦佳「貫二郎こそなんでここにいるの!?
ここ、黒田家の本家の屋敷だよ!?」
貫二郎「僕は阿南閣下に連れられて…
まさか閣下!」
貫二郎は何かに気がついて阿南を見る。
貫二郎「閣下!謀りましたね!」
阿南「私はただ〝君にも関係のある人に用事がある〟とだけ言ったんだ。
それがここの人たちなのだよ。
彼女、黒田中尉を第５０６統合戦闘航空団に配属させるのにはまず彼女を黒田家の本家の養女にする必要があったんだ。
とは言っても恐らく本家は激しく抵抗するだろうから、私が釘を刺しに来たんだ。
それに君は両親への御挨拶がまだだろ?」
貫二郎「た、確かにご挨拶がまだですけど…」
母「邦佳、この人は…」
すると邦佳の母親が邦佳に貫二郎の事を聞いた。
邦佳「えっと…私の部下って表向きはなってるけど本当はその、か、彼氏の大野貫二郎です。」
父「彼氏!?邦佳、説明しなさい。
彼はどこの馬の骨だ?」
なぜか邦佳の周りでは突然家族会議が始まってしまっていた。

状況はまさに混沌としていた。
阿南と名代の周りでは何としても邦佳を黒田家本家の養子にするよう説得する一方、邦佳の周りでは家族に彼氏を紹介するという修羅場が発生し、周りの一族は大混乱に陥っていた。
阿南「兎に角、こちらとしてはもう引き返せないんですよ。
　毎日のようにガリアから『今すぐ人員を出せ』という督促が来てるんです」
名代「あんな野蛮な娘に扶桑の代表などさせてみろ！扶桑と我が家に泥を塗ることになるのじゃぞ！」
貫二郎「その、お義父さん、お義母さん、娘さんを僕にください！」
父「駄目だ！どこの誰かも分からない奴に邦佳を渡すなんてできない！」
母「邦佳はどう思ってるの？」
邦佳「どうって…その…ちゃ、ちゃんとしたお付き合いしてるから…
　いい人だよ、射撃がヘタクソなの以外は」
状況はカオスであった。
ふと貫二郎は邦佳、もしかしてさっきユニット履いてなかった？」
貫二郎はあることを思い出した。
邦佳「うん、履いてたよ。
　それ、今言う事？」
ついさっき聞いたユニットの事を聞いたのだ。
貫二郎「もしかして、ユニットの調子がおかしくなかった？」
邦佳「え?!うん、片方が壊れてた。」
阿南「それは本当かね？」
邦佳「えっと…誰？」
邦佳と話していると名代と会話していたはずの阿南が話に突っ込んできた。
貫二郎「誰って…扶桑陸軍航空総監阿南中将閣下。
　一応僕の父親の親友だった人。」
邦佳「じゃあ、貫二郎と同じ日本人？」

貫二郎「そう」
貫二郎は邦佳に阿南を紹介した。
阿南「お嬢さん、教えてくれないか？
どういう風に壊れていたんだい？」
邦佳「あのユニットの片方の制御が利かなかった。
何とか飛べたけど。」
阿南「ほう、これは大問題だ。
この家は扶桑陸軍の現役士官を整備不良の機材に乗せ、あまつさえ事故死させかけたのだからな。
陸軍としては誠に遺憾ながら貴家との関係の在り方に関してもう一度再考せねばならないようだ。
場合によっては、貴方方を殺人未遂の容疑で告発せねばならないかもしれない。」
黒田の話を聞くと阿南はわざとらしい口調で問題視する。
それを聞いて名代やその周りの人たちの顔が青ざめた。
名代「そ、それは…」
阿南「彼女はこの家の方々からすれば分家の娘だ、だが我が陸軍としては最も優秀なウィッチの一人であり将校である！
つまるところ陸軍の人間である以上、貴方方とは立場が違うのだ。」
「一体これはどういうことか？
儂の意思に反して謀を企んだのが己か息子よ？」
すると突然奥から小柄な老人が現れた。
それを見て黒田家の人間は土下座する。
その様子を見て貫二郎が邦佳に聞く。
貫二郎「誰？」
邦佳「私も知らないんだけど…」
名代「父上！」
阿南「これはこれは、黒田侯爵殿。
お久しぶりですな」
小柄な老人こそ当主の黒田侯爵だった。

阿南は当主と親しげに話していた。
当主「どうやら誰かが儂の意に反した危険な事をしでかしたようじゃ。
黒田家として陸軍に謝罪しよう。」
阿南「それは…
しかしながらこれで一件落着とはなりません、謝って済むのでしたら警察も憲兵も必要ないことになります。
私としては黒田中尉の本家への養子縁組を正式に行う、という形でこの事は見なかった事にしたいのですよ。」
阿南はこの「邦佳に整備不良のユニットを履かせ危うく事故を起こしかけた」という事実をダシに正式な邦佳の黒田家本家への養子縁組の話を纏めるつもりだった。
当主「いいじゃろう、だがそれでは儂や息子が納得しても他の者が納得せん。
陸軍が恫喝したも同じじゃからな」
阿南「私が関知するのはここまでです。
その先はどうぞ、貴方方が何を思おうが言おうが私の与り知らぬ事ですから。」
阿南は殆ど恫喝同然の話し合いで邦佳の件を纏めてしまった。
すると当主に執事が何故か槍を渡した。
当主「娘っ子、そういうわけじゃ。
儂と一戦交えようぞ。」
邦佳「え?なんで?」
貫二郎「え?」
当主の突然の提案に邦佳も貫二郎も驚き混乱していた。
当主「このままでも話はまとまる。じゃが、事実上陸軍から恫喝された上でのことじゃ。
今後のこのような事が続くじゃろう、じゃが儂を倒した上で儂が認めれば誰も手出しはせん。
今後の憂いを絶つためにも儂と一戦交えようぞ」
当主の狙いは他の一門を納得させるにはその実力を分かりやすい

形で見せつけた上で納得させるという方策だった。
すると執事が邦佳に刀を渡した。
執事「邦佳様、これを」
貫二郎「刀？それもそこそこ名のある刀に見える。
邦佳使えるそれ？代わりにやろうか？」
邦佳「戦いじゃ使ったことないけど多分大丈夫。
それに貫二郎が教えてくれたでしょ？居合術とか剣道」
貫二郎は剣術や居合の名手であり邦佳にもある程度教えていた。
貫二郎「まあ、確かに教えたけど…怪我しないようにね。
あと峰打ちにしといて」
邦佳「あ」
貫二郎が峰打ちにするよう注意して邦佳は刃の向きを変え峰の方を向けた。
当主「あれを履いてもよいぞ？
ハンデというやつじゃ」
すると当主が腕に覚えがあるのかハンデとして故障したユニットを履いてもよいと提案した。
それを聞くと邦佳はユニットを履いた。
邦佳「後悔しても知らないよ？」
当主「来い！娘っ子！」
そして決闘が始まった。
まず邦佳が刀を構えて突っ込んだ。
邦佳「貰った！」
当主「甘い！」
当主は刀を槍で払った。
刀に対して槍はリーチが長く、刀と槍では槍の方が有利というのはその筋の人には有名な事実である。
払われた邦佳は一瞬ひるむがその隙に当主が槍を払い邦佳の着物の袖を切り裂いた。
邦佳「お正月に買ってもらったばっかなのに！もう怒った！」
邦佳はそれにスイッチが入ったのかまた突進するが槍が届かない

ギリギリのところで上昇して躱す。
　すると邦佳は袖から刀の鞘を取り出して構えた。
邦佳「こっから本番！」
貫二郎「二天一流!?初めて見た！」
邦佳「にてん…？何それ？」
その構えを見て貫二郎は驚くが剣道の知識に疎い黒田はよくわかっていなかった。
当主「面白い！面白いぞ小娘！」
邦佳「年の割に頑張るね！」
すぐにまた二人の決闘は再開するがその勢いに周りの人間はポカンとするだけだった。
邦佳「そろそろ決着つけちゃうよ！」
当主「望むところじゃ！」
そしてとうとう決闘が終わった。
邦佳の振り下ろした刀が槍の穂先を切り落とした。
邦佳「ここまでだよ、おじいちゃん。
　養子にはなってあげる。
　他の親戚は気に食わないけどおじいちゃんは悪い人じゃないみたいだから。」
当主「いや参った！
　見事なり扶桑撫子！これで黒田の家も安泰じゃわい！」
こうして決闘が終わり正式な養子縁組が決まった。
決闘が終わると阿南が大きくため息をついた。
阿南「ふぅ、これで何とか扶桑からも代表を送れるよ…
　肩の荷が一つ降りたよ。」
貫二郎「お疲れ様です、閣下。」
貫二郎が阿南の元にやってきて声をかけた。
阿南「ああ。私は今から帰るが君は残るといい。
　君は新しい義理の両親に挨拶しないといけないからね」
貫二郎「そのつもりです閣下。
　まあ、あのお爺さんに切り殺されないか不安ですが。」

阿南「何を言う、あの真冬のシベリアで3日彷徨って無事に帰ってきた彼奴の息子だぞ。
彼奴譲りでそう簡単には死なないのだけは知っとるぞ」

その頃、ガリアでは
「では諸君！ガリア政府への正式な庶務の引き継ぎが完了したことを祝って！
プロージット！」
「プロージット!!」
パリにあるある建物では十数人のカールスラント軍高官たちがワインを手に祝っていた。
これは連合軍ガリア軍行政司令部が正式に稼働したガリア政府に庶務を引き継ぎこれ以降統治の代行機関としてではなく連合軍のガリア政府の外部諮問機関として活動に変わるという事を祝っていた。
その演台の中心では司令官のボック大将がワインを飲み干し、他の高官たちも同じようにしていた。
ボック「諸君！これで我々の仕事が一つ終わった！
だがまだ終わりではない！この国を立て直しあのクソ共を追い出す、その日までは我々の仕事は無くならない！
この国に法と秩序をもたらす！それが我々の仕事だ！」
ハイドリヒ「閣下、その通りです！
秩序無くして平和無し、平和なくして繁栄無し！」
ネーベ「秩序は厳格な法の適応によって齎される！
そのためにも我々警察の仕事は重要だ！」
ボックの演説に続いてハイドリヒ、ネーベも続いた。
「そしてその平和を侵さんとするネウロイを守る楯も必要だ！」
ボック「その通りだ！ジーゲル大佐！」
ネーベに続いてカールスラント空軍ガリア航空兵指導官ヴァルター・ジーゲル大佐が声を上げた。
更にこれに別の将軍が続いた。

「それも早急に！例えそれがガリア政府のお気に召さなくとも一日でも早い防衛体制の構築こそ急務！
我々は防衛体制の構築に全力を注ぐべきだ！」
ボック「よく言った！クライン少将！」
次に声を上げたのは西方総軍司令部航空監察官ハンス・クライン少将だった。
ボックはまた演説を続けた。
ボック「二人の言う通り我々はこの国を立て直し、平穏と繁栄を齎すだけでなく盾と矛とならねばならない！
その盾と矛は今すぐにでも必要だ！
そのためにも陸軍の者たちには防衛体制の構築と陸軍部隊の再編を、そして空軍には早急なる防衛部隊、第５０６統合戦闘航空団の編成を行わなければならない。
諸君！もう一度杯を交わして我々の健康と仕事の成就を願おうではないか！」
そして高官たちはまたグラスを掲げた。

第2話：熊猫とリベリアン

それから数か月後、年が明けて１９４５年1月。
真冬のガリア上空を一式戦闘脚Ⅲ型隼を履いた邦佳と三式戦闘脚Ⅱ型を履いた貫二郎が飛んでいた。
貫二郎は通常の軍服にオーバーを着ていた、だが邦佳はいつもの和服だった。
貫二郎「ひぃいい、寒い…
やっぱりフランスは寒いね…」
邦佳「う、うん…天気はいいのに風が…」
真冬であるため眼下のガリアの地は薄っすらと雪が積もり白みがかっていた。
空は晴れていたが雲が多かった。
貫二郎「もうちょっと防寒着持ってくれば良かったかな?
邦佳、寒くない?」
邦佳「全然平気、鍛え方がちが…ヘックシュン!」

貫二郎が聞くと邦佳がくしゃみをする。
すると貫二郎は来ていたコートを脱ぐと邦佳にかけた。
貫二郎「はい、これでどう?」
邦佳「ちょっとはマシかな。」
二人は仲良く話していた。
だがその平穏な空気は突如破られた。
突如二人の右手の雲の中から黒い物体が飛び出してきた。
貫二郎「うわ!」
邦佳「ネウロイ!?」
二人共移動の為荷物を背負い武器は貫二郎が南部十四年式拳銃と日本刀以外持っていなかったため二人共その黒い物体がネウロイだと思い混乱する。
だがすぐにそれがネウロイじゃないと気がついた。
米海軍の艶のあるネイビーブルーで塗られ主翼には白い星が描か

れコックピットの下にはパンダが描かれた見慣れない飛行機だった。
邦佳「白い星…」
貫二郎「米軍機だ！なんでここに！」
二人にはその機の所属だけはすぐに分かった。
米軍機だ。
貫二郎と邦佳はすぐにその米軍機のコックピットの中を覗いた。
中ではパイロットを目を丸くして驚き無線で呼びかけてきた。
『こちらアルバトロス１２。パンパン、パンパン、パンパン。
水平尾翼に問題が発生、緊急着陸を要請する。』
貫二郎「邦佳、どうする？」
邦佳「うーん、ディジョンまで連れて行こう！
分かった、飛行場まで誘導するね」
『助かる。水平尾翼に問題があるから緩やかな降下で進入したい。
今から２０００フィートまで降下する』
機は緊急事態信号パンパンを宣言したため邦佳は機を最寄りのディジョンに誘導することにした。
邦佳は機体の前に出ると主翼を振ってついてくるように伝えた。
それに米軍機も答え主翼を振ると少しずつ降下を開始、１５分ほどしてディジョンの飛行場が見えた。
邦佳「やっとディジョンだ！先に着陸して！」
『了解』
貫二郎「ディジョン、今から一機緊急着陸する。消防隊を要請」
米軍機は緩やかに降下しながらフラップを出し、主脚を降ろし着陸進入を開始した。

その頃地上では緊急連絡を受け消防隊が出動、臨戦態勢になっていた。
「緊急着陸なんて聞いてない」
「消防隊急いで配置につけ！」
地上ではディジョン基地のジーナ・プレディ中佐とマリアン・カーラ大尉が緊急着陸を受け入れる態勢を整えていた。

マリアン「こちらディジョン。消防隊受け入れ完了。
　緊急着陸を行う機は機種と乗員数、残燃料を答えよ。」
『感謝する、こちらアルバトロス12。
機体はグラマンF8F―1ベアキャット、乗員一名、燃料は残り…
56ガロン。
現在高度600フィート、速度180ノット、水平尾翼に問題が発
生。』
マリアン「了解、グラマン機、乗員一名、燃料残り56ガロン。
　隊長、情報です。」
ジーナ「ありがとう。グラマンF8F?知ってるか?」
情報を受け取ると機体が見慣れない機種なのに気がつきマリアン
に聞いた。
マリアン「いえ、新型機でしょうか?」
ジーナ「テスト中に問題でも起きたのだろうか。」
二人が話しているとF8Fは緩やかな降下で滑走路に着陸、滑走路
の真ん中付近で停止した。
そしてすぐに二人はその機が見慣れない国籍章をつけているの気
がついた。
一方パイロットは機体をゆっくり走らせながら格納庫まで運んだ。
運ぶとエンジンを切りコックピットから降りるとやってきたジー
ナに謝った。
「本当に申し訳ない。滑走路を借りてしまって。」
ジーナ「いや、構わない。緊急事態だったからな。
　ところで君は何処の誰かね?所属は?」
ジーナはパイロットに聞いた。
カート「自分は米海軍カート・ロバート・フーヴァー少佐です。」
ジーナ「連合軍第506統合戦闘航空団B部隊隊長ジーナ・プレ
ディ中佐だ。
　一つ聞くが、米海軍とはなんだ?どこの海軍だ?」
ジーナは米海軍とは何処の軍だと聞いてきた。
カート「何処とは?アメリカ合衆国海軍のですよ。

U・S・NAVY、聞いたことあるでしょう?」
ジーナ「U・S・NAVYはリベリオン海軍だが?」
カート「どうも認識に関して齟齬があるようだ。
一つ聞くが、ここは何処だ?今は何年の何月?」
ジーナ「ここはガリア共和国ディジョン、今は1945年の1月だ。」
カート「成程…45年7月のカリフォルニアではないか…」
ジーナ「ふむ、私の知る限りあのような機は存在しない。
それに君の所属する米海軍とやらも知らない、一体何があった?」
カート「カリフォルニアのサン・ガブリエル山脈上空で訓練中に突如コントロールを失って急上昇、気を失い気がついたら雲の中を飛んでいて雲から出たらさっきであった彼女達と出会い、ここまで誘導してもらった。」
ジーナ「彼女達?というのさっき連絡してきたウィッチ達か?」
カート「はい」
二人は見解を一致させるため話し合っていた。
すると後ろから着陸した邦佳と貫二郎がやってきた。
邦佳「大丈夫でしたか~」
カート「ええ、大丈夫です。ご協力感謝します」
ジーナ「誰だ?」
邦佳はカートに話しかける。一方ジーナは二人の事を聞いた。
邦佳「今度この基地に配属になった黒田邦佳中尉です!」
貫二郎「その部下で同じく配属となった大野貫二郎少尉です」
二人は敬礼してジーナに自己紹介する。
ジーナ「ふむ、隊員の増強があるという知らせは来てないんだが。
ま、いいか。私はジーナ・プレディ中佐、こちらがマリアン・E・カール大尉。
彼がこの機のパイロットのカート・ロバート・フーヴァー少佐だ。」
マリアン「よろしく、マリアンでいい」

カート「よろしく、黒田中尉、大野少尉」
自己紹介するとマリアンとカートと二人が握手する。
ジーナ「念のため確認してくる。それと君の事もだ。」
そう言うとジーナは頭を掻きながら上に確認に向かった。
すると入れ違いでブロンドの少女とブラウンの髪の少女がやってきた。
「あんた達がさっきの騒ぎやったのか?」
カート「まあ、すいません。飛行中に問題が起きたもので」
ジェニファー「初めまして、ジェニファー・デ・ブランク大尉です。」
カーラ「私はカーラ・Ｊ・ルクシック中尉だよ。」
カーラとジェニファーも３人に自己紹介した。

それからしばらくして。
ジーナ達とカート、邦佳、貫二郎は基地の談話室でくつろいでいた。
カート「まさか飛行中に左のトリムタブが脱落するとは。
　原因は何とも言えないが構造上の問題ならば大問題だな。」
カートは機体を点検した際に左の水平尾翼の昇降舵のトリムタブが脱落したことに気がつきその事を報告書に書いていた。
するとジーナが戻ってきた。
ジーナ「えー、君らの勘違いだ。」
「「え?」」
ジーナ「５０６ＪＦＷにはＡ部隊とＢ部隊がある。
　君らが配属されたのはＡのセダン基地、ここＢの基地、ディジョンではない。」
邦佳「そっかー」
貫二郎「まさか二つも部隊があるとは」
カーラ「同じじゃないよ。」
貫二郎たちが話しているとカーラが割り込んだ。
カーラ「Ａ部隊は威張り腐った貴族たちの集まり、Ｂ部隊は自由な奴らの溜まり場さ。」
マリアン「ふん!お偉い貴族様にはさぞ居心地が悪かっただろうな

！」
マリアンがやたら喧嘩腰の口調で言う。
すると二人は笑った。
邦佳「あはははは！まっさか～！」
貫二郎「そんなわけないない、どうせ次男坊だし僕は！
勝手気ままに生きてく次男坊、富もなければ責任もない！」
邦佳「貴族って言っても体裁を守るための名前だけ、もともと私は分家の端の端で無理矢理養女にされて送り込まれたんですよ。」
二人共貴族としては一方は名前だけ、もう一方は次男坊で責任もなければ相続権もないような人間だった。
それにマリアンは苦い表情をする。
ジェニファー「調子が狂いますね、マリアン」
マリアン「ふん！」
マリアンは不貞腐れた。
ジーナ「長旅の疲れもあるだろう、数日休んであっちに向かうといい。」
邦佳「ありがとうございます！」
貫二郎「感謝します」
ジーナが気を遣いしばらくディジョンに留まることを許可した。
ジーナ「それと、フーヴァー少佐は機体の修理が完了したら私と共にセダンに飛んでくれ。」
フーヴァー「分かりました」
ジーナはカートに一緒にセダンに飛ぶように指示した。

二日後
カート「機体よし、燃料よし、油温油圧正常。
操縦系統異常なし、こっちはいつでも飛べますよ！」
ジーナ「分かった、そろそろ行くが準備はどうだ？」
格納庫ではジーナのＰ―５１と二人のユニットが並んで発進準備をしていた。
機体の修理、特に喪失したトリムタブはＦ８Ｆ専用であるため既存

の別の機のトリムタブを改造して無理矢理取り付ける工事に丸一日かかっていた。
一方邦佳の方はカーラが彼女に抱き着いていた。
カーラ「黒田中尉と大野少尉こっちにいて欲しいよ～！
な？今からあっちは断れ！」
マリアン「ウィトゲンシュタイン大尉は難物だぞ。
あっちに行ったら覚悟するんだな。」
邦佳「うぃとげ…？」
ジェニファー「ごめんね、あんな態度だけど…」
邦佳「大丈夫、分かってるから。
ばっちゃんがいってたもん、愛想がない人ほどほんとは優しいって」
カーラ「なあなあじゃあ私はどうなるんだよ？」
邦佳「カーラはカーラ、裏表ないでしょ？」
邦佳を囲んでB部隊のウィッチ達は別れを惜しんでいた。
貫二郎「あのー、誰か僕の事も…」
貫二郎は一人蚊帳の外だった。
するとカーラがあるバッグを持って来た。
カーラ「これ、餞別な」
邦佳「コーラ、こんなに」
中身はコーラだった。
ジーナ「そろそろ出発するぞ」
カート「こっちはもう行けるよ。」
邦佳「ありがとう！じゃあ行くね！」
貫二郎「お元気で」
そう言うと二人とジーナとカートは離陸しセダンに向かった。

ホスバッハ「プハ！ここは何処だ！」
カーロイ「痛、何処だ此処」

ホスバッハとカーロイが目を覚ました時、そこは針葉樹林の中だった。
うっすらと雪が降り積もり、遠くには城のようなものがあった。
ホスバッハ「武器はある、アタッシェケースもあるな。」
カーロイ「どうなってんだ畜生」
二人は自分の体と装備を確認した。
二人共無傷であり無事だった。
カーロイ「で、何処だ此処は？」
ホスバッハ「分からん、だがあの城が気になる。
どう思う？」
ホスバッハは遠くに見える城を指さしてカーロイに聞いた。
カーロイはホスバッハから双眼鏡を奪うと城を観察した。
カーロイ「そうだな、比較的綺麗だから誰かが管理してるんだろう。
気になるのは見た感じ、アレはハンガリーの城じゃない、フランス系だ。」
ホスバッハ「フランス？」
カーロイ「ああ。ハンガリーの城はオーストリア系の派手な装飾が多いがアレはかなり古いフランス系の建築だ。
珍しいぞ。」
ホスバッハ「そうか、とりあえずあの城に向かうぞ」
カーロイ「あいよ」
二人は武器を持ち城へと向かった。

ホスバッハ達がいた所の１８０度反対側の森林ではトニーとジェフとアランが倒れていた。
アラン「ん…」
ジェフ「ここ何処だ？」
トニー「一体何が何やら」
３人は気がつくと周りを見るがそこにはスロヴェニアの急峻な山

岳地帯もパルチザンの仲間たちもいなかった。
あるのは森林だけだった。
アラン「立てるか？」
ジェフ「ああ。お仲間はどうした？」
アラン「分からん。」
アランはジェフを立たせると先に立ち上がっていたトニーがジェフにライフルを渡した。
トニー「これを持ってろ。仲間がいないとなると自分の身は自分で守れ。」
ジェフ「いいが、あんたはどうするんだ？」
トニー「大丈夫だ」
ジェフが聞くとトニーはジャケットの下につけていたショルダーホルスターから二丁のＭ１９１０を取り出した。
トニー「伊達にマーダーインクにいたわけじゃないんでね。」
ジェフ「ああ、成程ね。
フォレスト将軍の親衛隊か？」
トニー「ウィリアム・Ｓ・ハートって言ってくれ。
俺の爺さんは北軍にいたんだぞ」
アラン「軽口もいいがさっさと言った方がいいぞ。
何せドイツ人どもが追いかけてるかも知れないからな。」
アランは軽口を叩くトニーとジェフを後目にＺＢ―２６を構えて歩き始めた。
ジェフ「分かってるよ。で、何処に行くんだ？」
アラン「あの城だ。何かしらの情報があるかもしれない。」
ジェフが聞くとアランは木々の梢の合間から見える城を指さした。

その頃、セダンの５０６Ａ部隊基地では隊長のロザリー・ド・エムリコート・ド・グリュンネ少佐と戦闘隊長のハインリーケ・ツー・ザイン・ヴィトゲンシュタイン大尉がジーナと邦佳達に会っていた。

案内された隊長の執務室のテーブルの上にはお菓子が置かれ、ジーナ、カート、邦佳、貫二郎、ハインリーケの順で並んでいた。
ロザリー「初めまして、ようこそセダン基地へ、黒田さん、大野さん、フーヴァーさん。
私はロザリー・ド・エムリコート・ド・グリュンネ少佐です。
どうぞ座って楽にしてね。
よかったら食べてみて、私が作ったの。」
ロザリーに促されジーナ達はソファーに向かい合って座った。
そして邦佳は置かれたお菓子を手に取り一口食べると衝撃を受けた。
邦佳「隊長！引退して困ったらパティシエになるといいですよ！」
ハインリーケ「な！おぬし隊長の前で何を言っとるか！」
その失礼極まりない発言に立っていたハインリーケが反応して口論が始まり貫二郎が仲裁しようとした。
一方でジーナとカートはそれを後目に同じく菓子を食べていた。
カート「絶品ですね。」
ジーナ「美味しいな」
二人がそう言った直後、基地内に銃声が響き渡った。
ハインリーケ「なんだ！」
貫二郎「銃声!?」
邦佳「下の方からしたよ！」
喧嘩していた3人は驚いた。
銃声は階下から聞こえていた。
その間にも銃声は続き、連続していた。
カート「ジーナ中佐！」
ジーナ「行こう！」
ロザリー「私も行くわ！」
ジーナ達は立ち上がると部屋を飛び出して階下へと向かった。

第3話：かの世界と機密文章

５０６の基地に響き渡った銃声、その正体はホスバッハとカーロイ、そしてアラン達であった。
ホスバッハとカーロイは基地に忍び込むとキッチンで無断で食い物を漁り食べていた。
だがそこで同じく忍び込んだアラン達と出くわしてしまい戦闘となったのだ。
ホスバッハ「クソ！なんでここでパルチザンと出くわすんだ！」
カーロイ「知るか！」
二人はキッチンのテーブルの陰からＳｔＧ４４とダヌビア４３Ｍを構えてキッチンの出入り口を銃撃していた。
出入り口付近ではアランが腰だめ姿勢でＺＢ―２６で反対にホスバッハ達を銃撃していた。
アラン「メルド、向こうはサブマシンガンを二丁持ってやがる。こっちは軽機関銃一丁とライフル、拳銃だけだ」
ジェフ「逃げた方がいいんじゃねえか？」
トニー「無理だ、この騒ぎだ。外は大変なことになってるはずだ。下手に動けば捕まってまたＰＯＷに逆戻りだぞ」
ジェフ「それは困るな、あそこの飯クソ不味かったし。」
アラン「気楽に言っている場合か！このままじゃまた捕まるんだぞ！そりゃ御免だ！
それに折角フランスが解放されたのにそれを見る前に死ねるかってんだよ！」
アランは叫びながら銃撃していた。
ＺＢ―２６の銃弾は８ミリモーゼル弾、そしてそれはホスバッハ達が盾にしている台を容易に貫通できるだけの破壊力があった。
カーロイ「うわ！貫通してるぞ！」
ホスバッハ「分かってる！パンツァーファウストを使うぞ！」
ホスバッハは最後の手として唯一持っていたパンツァーファウストを取り出しパルチザンたちがいる壁に向かって構え発射、壁の手前

に置かれていた食器棚にあたり吹き飛ばし煙が周りを覆った。
その煙は銃声が響いていたキッチンに向かっていた貫二郎たちも巻き込まれた。
貫二郎「うわ！」
ロザリー「なに!?」
ジーナ「爆発か!?」
6人は爆風で身構えやむとカートと貫二郎、更にジーナも拳銃を取り出した。
カート「一体何が起きてるんだ」
貫二郎「邦佳は下がってて。」
邦佳「カートさんに当てないようにね、下手だよね射撃」
6人はカートたちを先頭にキッチンに警戒しながら向かった。
キッチンではパンツァーファウストで吹き飛ばしたホスバッハとカーロイが爆発の衝撃から正気を取り戻していた。
キッチンは発射の衝撃と爆発で無茶苦茶になり、ホスバッハの後ろに至っては火事が起きていた。
カーロイ「派手にやりすぎだ！こっちまで吹き飛ばす気か！」
ホスバッハ「やったか?」
二人は立ち上がり武器を取ると吹き飛ばした壁の方に向かい死体を確認する。
壁の反対側ではアラン達が気を失っていた。
だが食器棚に命中したためパンツァーファウストの成形炸薬の影響を受けず爆発の衝撃で気を失っただけだった。
そしてホスバッハがアランの頭の傍に来た
ホスバッハ「パルチザンが」
アラン「クソナチスが！」
その瞬間彼はホスバッハの足を掴むと引っ張り倒す、そして顔面に一撃を食らわせた。
カーロイ「おい！」
ジェフ「どりゃー！」
カーロイ「げふ！」

更に後ろにいたジェフも立ち上がると持っていたライフルを振り回してカーロイに一撃を食らわせた。
まともに頭に一撃を食らったカーロイはそのまま気を失い倒れた。
アランとホスバッハは殴り合いを続けアランがホスバッハに馬乗りになり首を絞めていた。
アラン「死ねナチス！キャベツ野郎！ジャガイモ食いのフン族！」
ホスバッハ「く…くたばれ…カエル食いの猿が…！」
アラン「どふ！」
ホスバッハはアランの股間を蹴るとアランが倒れその隙にアランに頭突きを食らわせ立ち上がるとジェフに向かって放り投げ二人そろって倒れた。
ホスバッハ「これで止めだ」
二人の息の根を止めようと拳銃に手をかけた瞬間、頭に一撃を食らい倒れた。
トニー「バーイ、クソナチス」
トニーが右手のＭ１９１０で気絶したホスバッハの後頭部に狙いを定めトリガーに指をかけたその時、廊下の奥から別の声がした。
カート「動くな！武器を捨てろ！両手は頭の後ろだ！」
それは拳銃を構えたカートと貫二郎、ジーナだった。
トニー「はいはい。じゃあお願いするよ、コロラドの軍人さん」
トニーは潔く武器を捨て両手を頭の後ろに置いた。
カートはトニーに壁の方を向かせると他に武器を持っていないか調べた。
カート「これだけか？アメリカ人か？出身は？」
トニー「その拳銃だけだ。出身はニューヨークだ、あんたはコロラドだろ？」
トニーはまるで手慣れた様子でカートと雑談していた。
カート「ああ。コロラド州デュランゴ。
田舎だがいい街だ、行ったことあるのか？」
トニー「上を飛んだことならな。
ああ、そこにいるフランス人とヤンキーかトミーか分からな

い奴は俺の仲間だから丁重に扱えよ。」
カート「そのつもりだ。
　これでよし、銃を取っても構わない。
ただしホルスターに入れろよ」
トニー「分かってますとも、ディキシーさん」
カートはトニーを解放すると彼は拳銃を回収して自分のホルスターに入れた。
一方貫二郎達は状況に混乱していた。
貫二郎「えーと、ドイツ人と多分ハンガリー人とイギリス人と、民兵？」
ロザリー「大丈夫？ダメ、意識がないわ、医務室に運ぶわよ。
　ハインリーケさんも手伝って」
ハインリーケ「分かった」
ロザリーは倒れていたカーロイとホスバッハに声をかけるが二人共気絶していたため反応はなくロザリーはカーロイ、ハインリーケはホスバッハを連れて医務室に向かった。
ジーナ「大丈夫か君達？立てるか？」
ジーナがジェフとアランに声をかける。
ジェフ「ああ、何とかな。アラン、そのカエル入りのクソを出すケツをどけろ」
アラン「分かってるよ」
声をかけられたジェフとアランは立ち上がった。
ジーナは立ち上がった彼らに状況を聞いた。
ジーナ「一体何があった？」
アラン「クソナチスと撃ちあってたらナチがロケット弾ぶっ放してこれだ。
　多分キッチン今燃えてるぞ。」
貫二郎「本当だ！すぐに誰か呼ばないと！」
貫二郎はキッチンを覗いて火事になっているのを確認した。
すると二人のウィッチがやってきた。
「何が起きてるんだ？」

「パーティーかな?君は?パーティーの主催者かい?」
やってきたのはロマーニャ空軍アドリアーナ・ヴィスコンティ大尉とベルギカ空軍イザベル・デュ・モンソオ・ド・バーガンデール少尉だった。
貫二郎「それどころじゃありません!キッチンが燃えてます!急いで人を呼んで!」
アドリアーナ「何!消火班を呼んでくる」
イザベル「僕はここにいるから」
アドリアーナは消火班を呼びに行った。
貫二郎とイザベルは先に消火しようと火事を避けながら蛇口の所に行き出されていたボウルに水を入れると火事に投げこみ始めた。
するとふと貫二郎は床に場違いなアタッシェケースがあるのに気がついた。
貫二郎「なんだこれ?」
イザベル「アタッシェケースだね、中身は?」
貫二郎はテーブルに乗せると開けた。
中身は何かの書類だったが読めなかった。
貫二郎「分かんない、書類なのは確かだけど」
イザベル「ふーん」
二人が書類を見ていると出入り口から消火器を持った整備士数人が入ってきて消火し始めた。
アラン「凄い騒ぎになってるな」
カート「火事だからな」
その騒ぎをカートたちは邪魔にならない位置で見ていた。
するとふとジェフが気がついた。
ジェフ「その声、もしかしてカートか?」
カート「ん?まさかジェフか?」
そう言うと二人は肩をたたき合いハグをする。
ジェフ「そうだよ!ジェフリー・フィッツジェラルド、いつ以来だ?42年か?」
カート「ああ。42年のビルマ以来だ、久しぶりだな」

ジーナ「知り合いか？」
カート「古い戦友だ、懐かしいな、お前どうしたんだ？
私は海軍に復帰したが海兵隊に戻らなかったのか？」
ジーナがカートに関係を聞いた。
二人はかの有名なフライングタイガースの戦友同士だった。
ジェフ「ああ。海兵隊に戻ろうと思ったんだがビルマで出会ったイギリス軍の奴にイギリスに来ないかって誘われてイギリスに行ったんだ。
それでこうして晴れて英空軍軍人さ、あんたはどうしたんだ？」
カート「海軍に戻って艦上戦闘機乗りだよ。
最新鋭機のテストとかにも参加して訓練部隊で教官だ。
戦わないがいい仕事だよ」
ジェフ「違いねえ。俺も本土で勤務したいよ」
二人は仲良く話していた。

それから1時間後、火事は鎮火しウィッチ達とアラン達はロザリーの執務室に集められていた。
ロザリー「じゃ、じゃあつまり状況を説明すると、異世界から来たってこと？」
ハインリーケ「そんな馬鹿らしい。ＳＦじゃないのじゃぞ」
貫二郎「しかしこれは事実ですし証拠も幾らでもありますよ。
多分上もこの事実を感知してます」
ハインリーケ「じゃあその証拠とやらを妾の前に持ってくるがよい。
第一、なぜそなたらはこの不届き者の肩を持つのじゃ！」
アランやカートの件を貫二郎と邦佳が説明したが既にある程度理解していたジーナは兎も角ロザリー達Ａ部隊の人間は理解できてい

なかったし信じてもいなかった。
貫二郎「いや…だって素性としては大体一緒ですし…」
邦佳「う、うん…貫二郎とだいたい一緒だよね…
　状況がちょっと違うだけで…」
ロザリー「え？」
ハインリーケ「まさかそなたも…」
貫二郎「素性としては一緒ですよ、はい。」
貫二郎がそう言うと５０６のウィッチ達もカート達も全員驚き驚愕の目で見た。
アドリアーナ「じゃああんたもこいつらと同じようなのってのか？」
貫二郎「ええ。敵か味方かの違いですが。
　何せ戦争中ですからね…」
そう言うと貫二郎は知っている限りの情報をすべて５０６のウィッチ達に語った。
語り終わるとウィッチ達は神妙な面持ちだった。
ハインリーケ「せ、世界規模の大戦争…」
ロザリー「人類同士が殺し合う歴史…」
イザベル「ウィッチもネウロイもいない…」
アドリアーナ「祖父の言っていた通りだな…」
ジーナ「それで君達も…」
アラン「まあな、あのクソナチス共から祖国を解放するため戦ったぞ。
　フランスだけじゃない、スロバキアでも、スロヴェニアでもな」
ジェフ「後ジャップともな、チャイナとビルマで戦って、その後はナチスと戦うためにイギリスだ。」
カート「私も日本人と戦って、それから本国で訓練部隊の教官だった。」
トニー「俺に関してはそもそも軍に行く前から何人も殺してムショにぶち込まれてたがな」

「「は？」」
最後にトニーが言うと全員が驚いた。
ジェフ「お前何やった？」
トニー「何って、マーダーインクの元構成員だぞ、俺。
各地で殺しをいくつもやったぜ、立件されたのは一件だけだが。」
ジェフ「おいおい、バガルターの部下かよ、怖え…」
邦佳「あのーマーダー何とかって何ですか？」
トニーがマーダーインクの構成員だったというとそれが分からない邦佳が聞いた。
ジーナ「マーダーインクはニューヨークのマフィアの殺し屋集団だ。
各地で数々の殺人を犯した殺し屋だ。」
邦佳「ころ…カッコいい！」
ジェフ「おいおい、殺し屋でしかもマフィアだぞ。
罪人どころじゃない、普通なら死刑判決食らって電気椅子に座ってるはずなんだぞ」
ジーナの説明に何故か邦佳は目を輝かせる。
それにジェフは呆れた。
マーダーインクは１９３０年代前半にこの当時のもっとも有名なマフィアの一人であるラッキー・ルチアーノが作った暗殺専門の組織だった。
ボスはユダヤ系のルイス・バガルター、副ボスに悪名高いアルバート・アナスタシアがついた組織でこの組織により２０年代とは違い３０年代は殺し合いに一定の歯止めがかかったが逆に縄張りの強奪という行為の正当化につながった反面もあった。
この組織は１９４０年に幹部のエルブ・レイズ（その後不審死を遂げマフィアによる口封じ説が濃厚）が逮捕された際に司法取引に応じてマーダーインクの大多数のメンバーが逮捕、殆どのメンバーが実刑判決を受け幹部７人が死刑となりこの一大暗殺組織は壊滅した。
トニーはその構成員だったが小物であり証拠も不十分であったた

め比較的軽い刑罰で済んでいた。
トニー「言っておくが、殺し屋と言っても殺すのは無関係な人間じゃない、マフィアの裏切り者だけだ。
後は麻薬の売人か俺を襲った奴だけだ」
トニーは自慢げに語った。
ロザリー「はぁ、大変な事になりそうね…とりあえず上に言っておくわ。」
そう言うとロザリーはため息をつきながら電話をかけた。
ロザリーが電話をかける一方、貫二郎はアタッシェケースをテーブルの上に置いた。
アドリアーナ「これは?」
貫二郎「キッチンに落ちてました。
中身はこんな書類ですね。」
貫二郎は中身の書類を取り出して見せる。
それぞれ書類を手に取り確認し始めた。
ハインリーケ「なんじゃ?何が書いてあるかさっぱりわからぬ」
アラン「これ、ハンガリー語じゃないか?」
カート「ハンガリー語アルファベットだからそうだろう。
そうなると恐らくハンガリー軍の書類だろう。」
邦佳「あー!何かいてあるかさっぱりわからないよ…うん?
これって…」
その書類を読んでも全員さっぱり理解できていなかった。
すると邦佳が何かに気がついた。
貫二郎「何?」
邦佳「見て!この絵、ネウロイみたいじゃない?」
貫二郎「え?本当だ」
読んでいた書類の一つにラフながら絵が描かれていた。
それは蜘蛛のような見た目だったが黒色で赤い線が描かれていた。
全員それに注目する。
すると今度はイザベルが声を上げた。
イザベル「あ!」

ハインリーケ「なんじゃ今度は?」
イザベル「この写真とこの写真、どう見てもネウロイだよね?
　それにこのマグショット…」
イザベルは幾つかの写真が入った書類を見せた。
その書類には飛行機の翼が写り込んだネウロイらしき飛行物体とウィッチらしき人物のマグショットがあった。
貫二郎「え?どういうこと?」
アラン「というかウィッチとかネウロイってなんだ?」
混乱する中そもそもウィッチやネウロイの説明を受けてなかったアラン達が聞いた。
それに手短に貫二郎が説明した。
アラン「成程ね、しかし謎の書類だよな。
　ハンガリーの書類でネウロイやらウィッチとかいう存在しないはずの物の写真があるなんて」
ロザリー「え!分かりました、では。
　はぁ…」
アランが話していると突然電話をかけていたロザリーが大声を上げ電話を切ると溜息をついた。
ハインリーケ「どうしたのじゃ?」
ロザリー「上に報告したら明日、ボック大将とマロリー中将が急遽来るそうよ…
　はぁ…どうしましょう…」
ロザリーは溜息をつき胃薬を取り出すと飲んだ。
ジーナ「それと、一つ悪い報告が。
　現場で回収したのこの書類が、どうも彼らの世界のネウロイとウィッチに関する書類のようです。」
ロザリー「え…」
ジーナの報告を聞いた瞬間、ロザリーは固まった。
するとそこへナースが入ってきた。
ナース「失礼します、例の患者様が目を覚ましました」
ロザリー「分かったわ、とりあえず行きましょうか」

ロザリーが言うと立ち上がり全員で医務室に向かった。

カーロイ「まさか美女に囲まれながらベッドに寝れる日が来るとはな」

ジェフ「男もいるぞハンガリー人」

医務室につきウィッチ達は目を覚ましたカーロイとホスバッハを取り囲んでいた。

カーロイは軽口を叩いていたがホスバッハは黙ったままだった。

カーロイ「男は向こうのドイツ人の方に行けよ、俺は今女としか話したくない。

だってそうだろ?こんな美男子と話したいのに男がいると邪魔ですから。

女心の分からないとは可哀想な人ですねぇ～」

イザベル「でも君は僕ほどカッコよくはないよね」

カーロイが喋っているとイザベルがジョークで返した。

カーロイ「あ?こう見えてもブダペストの１／１５の女を抱いたんだぜ。

あだ名はミュンヒハウゼン伯爵」

ハインリーケ「つまり大ほら吹き野郎ってことじゃな」

カーロイ「そうだよ、冗談の分からねえガキだな」

自分のジョークを潰されるとカーロイはハインリーケの頬を引っ張る。

ハインリーケは半分怒りながら手を払いのける。

ハインリーケ「冗談はそれまでじゃ！

そなたは何処の何者じゃ！」

カーロイ「はいはい、カーロイ・ラヨシュ・ヤーノシュ大尉。

所属はハンガリー王国空軍第１０２戦闘航空団、こう見えてもハンガリー貴族でございます。

で、向こうが何とかフォン・ホスバッハ、第二十なんとか

騎兵師団の少佐だとさ」

ロザリー「私は第５０６統合戦闘航空団隊長のロザリー・ド・エムリコート・ド・グリュンネ少佐、こちらが第５０６統合戦闘航空団Ｂ部隊隊長のジーナ・プレディ中佐、戦闘隊長のハインリーケ・ツー・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン大尉、Ａ部隊のアドリアーナ・ヴィスコンティ大尉、黒田邦佳中尉、イザベル・デュ・モンソオ・ド・バーガンデール少尉、大野貫二郎少尉、それにカート・フーヴァー少佐、アラン・ジャン＝リュック・マリー・ド・メーストル大尉、ジェフリー・パトリック・フィッツジェラルド・ジュニア中尉、アントニー・カルロス・コルレオーネ少尉よ。」

ジーナ「ではヤーノシュ大尉。」

カーロイ「カーロイだ。ハンガリー語は英語と違って姓名前の順番だ」

ジーナが例の書類の話をしようとするが名前を間違えた。

ハンガリー語の名前の順番は他のヨーロッパの言語とは逆であった。

ジーナ「すまない、ではカーロイ大尉、この書類に見覚えはあるか？」

カーロイ「何の書類だ？」

ジーナはあの書類をカーロイに渡した。

それを見た瞬間カーロイはジーナに掴みかかった。

カーロイ「おい女！これ何処で手に入れた！」

ジーナ「落ち着け、キッチンに落ちていたアタッシェケースの中に入っていた。

その書類は一体なんだ？」

ジーナが聞くがカーロイはジーナを話すと隣のベッドに寝ていたホスバッハに馬乗りになって掴みかかった。

カーロイ「おい！知恵遅れゲルマン！これ一体どういうことだ！

何でドイツ人のてめえがハンガリー軍参謀本部の最高機密文章を持ってるんだ！

それにこの内容は何だ！Ｎ計画？幽霊戦闘機？フェルニ

ゲシュ？」

ホスバッハ「知らん、俺はただ上からその書類を回収するか破棄せよ、とだけ命令された。

それだけだ」

第４話：フェルニゲシュ

幽霊戦闘機、一般的にフー・ファイターという名称で知られる未確認飛行物体というのは大戦中連合軍、枢軸軍問わず広い範囲で確認されていた。

１９４２年にはロサンゼルスでこれが出現、米陸軍が迎撃、６人の〝戦死者〟を出す事態となった。

また４５年にはタイム誌が次のような報道をした。

「もしそれがデマや目の錯覚でなければ、連合軍兵士が直面したもっとも謎めいた秘密兵器に違いない。

先週、フランスに基地をおく米軍の夜間戦闘機パイロットたちは、ドイツ上空で夜間、１ヶ月以上にわたり彼らの戦闘機の後をつける『火の玉』についての奇妙な話を語った。

誰もその火の玉（何であれ）が何を目的としているのかは分からない。

それを心理学的な新兵器だと推測するパイロットたちは、火の玉に『フー・ファイター』と名づけた。

・・・その出現の仕方に関する彼らの記述はさまざまだが、不思議なゆらめきが戦闘機のすぐそばに張り付き、速いスピードでどこまでも付いて来るように見えたという点では一致している。

あるパイロットは、翼の先端から離れたところに赤い球のような形で出現するフー・ファイターの群れがぴたりとついて来て、時速３６０マイル（時速５８０ｋｍ）に加速すると赤い球は空の中に急上昇していった、という。」

――ＮＥＷＳＷＥＥＫ　１５　Ｊａｎｕａｒｙ，１９４５

奇妙な事に、フー・ファイターの証言の多くはその数年後から始まった所謂「空飛ぶ円盤」の目撃証言とよく似ていることが多かった。

現代ではこの事例は初期のＵＦＯの目撃事例の一つとされることが多い。

ではこの〝戦闘機〟の正体は?

多くの場合戦闘時のストレスによる対空砲火や発光信号、雷などの気象現象、他機などの見間違えや球電やセントエルモの火などのあまり一般的ではない発光現象であるとされる場合が多い。

これは一般的なＵＦＯとされるものと殆ど同じと言える。

だが一方で一部の陰謀論者や人々はこれらの報告の一部、又は殆どを見間違えや自然現象ではないと主張している。

彼らが言うのは〝宇宙船〟やら〝未来人の乗り物〟といったいわゆる「オカルト」的なものである。

９割は眉唾物の主張であり信じるか信じないかは貴方次第、なものである。

カーロイ「おい!知恵遅れゲルマン!これ一体どういうことだ!

何でドイツ人のてめえがハンガリー軍参謀本部の最高機密文章を持ってるんだ!

それにこの内容は何だ!Ｎ計画?幽霊戦闘機?フェルニゲシュ?」

ホスバッハ「知らん、俺はただ上からその書類を回収するか破棄せよ、とだけ命令された。

それだけだ」

カーロイはホスバッハに馬乗りになって掴みかかり問い詰めていた。

右手には渡された書類を持ったままだった。

ロザリー「カーロイさん、やめなさい」

カーロイ「こいつは一体どういうことだ!」

カート「一体何が書かれていたんだ?」

カーロイをロザリーが止めカートが聞いた。

カーロイ「ハンガリー軍参謀本部の最高機密文章だ。

このクラスの機密文章は俺も1回しか見たことがない、だが書いている内容は理解できた。
N計画と題されたものだ。
詳細は知らんが幽霊戦闘機の一種、コードネームフェルニゲシュとかいう奴に関する内容だ。」
ロザリー「フェルニゲシュ？」
貫二郎「ハンガリーの古い伝説に出てくる黒龍です。」
カーロイ「そうだ、ちゃんと読んでみない事には分からないが何故お前が持っていた？」
ホスバッハ「だから、回収するか破棄しろと言われていたんだ！」
カーロイが再度詰め寄るがホスバッハはそうとしか答えられなかった。
カーロイ「それ以外何か言え！」
ホスバッハ「俺に命令されていたのはそれだけだ！
中身は知らん！」
カーロイ「知らねえで済むか！このクソナチス！
同盟は終わりだ！シベリアにでも送られてくたばれ！」
カーロイはそのまま殴ろうと拳を構えるがその拳をアドリアーナが掴んだ。
アドリアーナ「これ以上はやめろ、一旦冷静になれ。」
カーロイ「あ…ああ。」
カーロイは言われ冷静になりホスバッハのベッドから自分のベッドに戻った。
ロザリー「で、この書類についてハンガリー軍の機密文章ってこと以外何か分からないの？」
カーロイ「最初から読んでみない事には何とも。
参謀本部にいたことがあるがこのクラスの機密書類を扱ったのは2、3回だけだ。」
ジーナ「残りはこの中だ」
ジーナは残りの書類の入ったアタッシェケースをカーロイに渡した。

カーロイはケースを開け書類を読み始め一通り読み終わると溜息をついた。
カーロイ「はぁ、こいつは大変な代物だぞ。
俺のパイプは何処だ?」
イザベル「パイプ?」
カーロイ「パイプ煙草、俺の軍服のポッケに入ってるはずだ。」
カーロイに言われイザベルはそばのハンガーにかけられたハンガリー空軍の軍服のポッケをイザベルが探し象牙のパイプとマッチとパイプ用タバコを見つけるとカーロイに渡した。
カーロイは受け取りパイプ煙草で一服すると内容を話し始めた。
カーロイ「こいつは相当な代物だぞ。
何せ、未知の物体に関する報告書だからな」
ハインリーケ「未知の物体じゃと?」
カーロイ「ああ。最初の報告は1939年9月12日、トランシルヴァニア地方のハンガリー・ルーマニア国境沿いで国境警備隊がルーマニア側から侵入した未確認の物体を発見、止めようとしたところ赤い光を放ち傍の木を吹き飛ばした、それを受け警備隊が交戦、破壊した、とのことだ。
で、これがその隊員が上に報告したスケッチだ。」
カーロイは書類の内容を語り始めた。
内容はハンガリー軍と警察、国境警備隊が39年以降に遭遇した未確認物体に関する報告とその研究に関する物だった。
カーロイは書類についていたスケッチを見せた。
それは蜘蛛のような形をしたものだった。
ロザリー「これって…」
イザベル「ネウロイ、だよね」
カーロイ「ネウロイ?そんな単語がどっかに、あった。
1939年10月5日、ホードメーゼーヴァーシャールヘイ警察が保護した不審な少女の証言。
そこに『私たちは〝ネウロイ〟と交戦して、死んだと思ったらここにいた』って証言とネウロイに関する報告がある。

その後警察は精神異常者と判断し周辺の精神病院等から脱走した患者がいないか確認したが確認できず、陸軍に引き渡したそうだ。

陸軍で証言等を行った後研究所に送られた、と書かれてる。

ネウロイについてはあった、これだ。

『ネウロイは我々が9月以降断続的に遭遇している未確認の敵意を持った移動物体の総称と思われる。

その能力はルーマニアに相当する国を侵略するほどであり極めて危険と考えるべきである。

一方、その能力とエネルギー源に関しては驚異的な兵器となる可能性を秘め、将来的な兵器化も含めた研究を行うことを提案する。

ロージャ・ミクローシュ陸軍少将、１９３９年１０月１６日付報告書より』

『ネウロイは地上だけでなく空中にも存在し、その空気力学的特性、飛行性能は驚異的であるが一方で巨大で目立つため空中では容易に発見可能である。

その飛行能力と空気力学的特性を研究することは今後の航空機の発展、開発に対して素晴らしい見地を得る可能性が極めて高い。

よって、ネウロイの空気力学的研究は空軍と航空機開発に多大なる恩恵を与えるであろう。

空軍技術研究所ホルン・フィレンツ博士、１９４０年１２月６日、定期報告書内より』

『ネウロイに対抗できるものとされるウィッチに関しては既に数名を確保、現在その能力に関する研究を行っているがその能力はまさに超人的としか言わざるを得ない。

物理学的にあり得ない事を普通に行うことが出来、その小さな肉体には最優秀の兵士達と同等の能力を有する。

またこのウィッチに必要な素質に関しては我々の世

界には広範囲に渡って存在する可能性が極めて高い。
人工的なウィッチの開発、これが可能となれば我が国は超人的な兵士達を多数そろえ世界最強の軍を組織することが可能である。
ブダペスト大学ペティーフィ・イムレ教授、１９４３年5月6日、参謀本部によるウィッチ・フェルニゲシュ（ネウロイ）の兵器、戦力化に関する報告内より』
だ、そうだ」
カーロイは書類内にあったウィッチとネウロイに関する報告を引用した。
その内容は総じて「ネウロイは極めて危険な脅威となりうるが一方で多大なる可能性を秘めている」、「兵器化を行うことで極めて強力な兵器となりうる」、「またそれに対抗できる存在と言える〝ウィッチ〟は超人的であり超人的な兵士を組織すれば極めて有効な戦力となりうる」と書かれていた。
ロザリー「つまりこの書類は貴方方の世界のネウロイとウィッチに関する研究と報告なの？」
カーロイ「ちょっと何言ってるか分からない、世界？まさかここが異世界だっていうのかい嬢ちゃん？」
カーロイの話を聞いてロザリーは内容を要約した。
するとカーロイがロザリーの話を聞いてありえないような表情をする。
ジーナ「残念だがそうだ。君の持っている報告書のネウロイとウィッチのいる世界だ」
カーロイ「証拠は？証拠がなければどんな話も信じないぜ？
犬の耳でも出してみろ」
カーロイは信じず挑発する。
するとジーナが魔力を発動して使い魔を出した。
ジーナ「これで信じるか？」
カーロイ「あ、ああ…」
アラン「なんだ今の？」

ジェフ「カート、後で思いっきり殴ってくれ。」
トニー「ありえない…」
ホスバッハ「そんな馬鹿な…」
その光景に全員絶句していた。
カートや貫二郎は既に見た事も説明も受けているので大して気にしていなかった。
アドリアーナ「で、その書類の続きはどうなんだ?」
カーロイ「続き、ああ。
えーと、色々あって…あああった。
『１９４４年１２月８日付、参謀本部最高機密命令第１３５７８９号、２週間以内の一切のフェルニゲシュ・ウィッチ計画に関する機材、研究資料及び被験者の廃棄・破壊を実施。
書類は本書類を除き全て焼却処分、被験者は射殺後完全な焼却処分、不可能な場合地下に埋めよ、機材は全て爆破処分。
施設も同様。』
で、
『１２月２０日付報告、計画の全資料、被験者、施設、機材の破壊完了。
これを以て全計画を終了。』
だ、そうだ」
カーロイが計画の顛末を訳した。
顛末はソ連軍の接近による全資料等の破棄であった。
それは即ちウィッチ等の殺害も意味した。
ロザリー「そんな…」
カーロイ「この記録が正しければね。
恐らく正しいだろうな」
その内容にウィッチ達も含めて絶句した。
カーロイ「で、どうするんだ?
俺達は異邦人だぜ、このまま突き出すのかい?」
その静寂を破るようにカーロイが聞いた。
ロザリー「明日、上の人たちが来るから話し合って決めるわ。

大丈夫、悪いようにはしないわ」
カーロイ「ありがとう、ところで…」
するとカーロイがあることに気がつき遠慮しながら聞いた。
カーロイ「ズボン履かなくていいのか？」
ジェフ「それな」
トニー「俺も気になってた」
アラン「言われてみれば…」
ホスバッハ「確かに…」
カーロイの質問にウィッチ達は首をかしげるがジェフなどは同意し、カートは気まずそうな表情をしていた。
貫二郎「まあその…この世界では我々の言うところのパンツがズボンらしいので…
慣れてください。自分は慣れました。」
カーロイ「え？本当か？」
貫二郎「本当です、慣れです、慣れ。」
貫二郎が死んだ目をしながらカーロイ達に言う。
その気迫から全員何かを察した。
そしてこの日の一連の騒ぎは終わった。

その頃、パリのガリア軍行政司令部では動きがあった。
ボック「ハイドリヒ君、いいニュースだ。」
ハイドリヒ「閣下、丁度いいタイミングです。
こちらも報告がありましたので。」
ボックの執務室にハイドリヒが呼ばれていた。
ハイドリヒもボックに報告する内容があった。
ボック「まず君からしたまえ、いいニュースかね？」
ハイドリヒ「はい、幾つか報告があります。
まず、ガリア共産党の副書記を先程ペルピニャンで逮捕しました。
次に王党派内部に不穏な動きが。」

ボック「何？王党派？あいつらは我々の協力組織じゃないのか？」
ハイドリヒの口から王党派という単語が出るとボックは驚いた。
この時点で王党派は比較的協力的な勢力として扱われていた。
というのも彼らの反共的性格・権威主義的性格は彼らと極めてよく似ていた。
アクシオン・ガリアなどの王党派勢力は彼らの支持母体でもあった。
ハイドリヒ「そのつもりでしたが、彼らは羊の皮を被ったライオンでした。
彼らは今、ガリア政府の打倒、そして５０６の解散を狙ってます。」
ボック「ふむ、どのような？」
ハイドリヒ「詳細は不明ですが、つい先日ヒスパニアから輸送中の武器弾薬が強奪された事件が関連しているようです。
あの事件は共産党かバスク独立派によるものと考えてましたが我々のスパイが王党派の犯行という情報を入手しました。
現在検証中ですが可能性は高いです。」
この数日前、ヒスパニアからガリアに輸送中の第２５０装甲擲弾兵師団を積載した貨物列車がガリア南部で襲撃を受け積載していた数トンの可塑性爆薬と武器弾薬を強奪されていた。
強奪は極めて計画的且つ周到なもので警備部隊が襲撃に気がつき救援に向かった頃には物資を奪われていた。
この事件の犯人として疑われたのが反体制派として弾圧していたガリア共産党かバスク独立派などの各地の独立勢力と見られていたが突如王党派の犯行説を裏付ける情報が出てきた。
ボック「そうか、ならば彼らを分裂させないとな。
まずはボナパルティスト、オルレアニスト、レジティミストに３分割して一つずつ潰す。
ラヴァル君にも協力して貰わないとな」
ハイドリヒ「はい、そのつもりです。
ところで、私へのいいニュースとは何でしょうか？」

するとハイドリヒが思い出した。
ボック「ああ。君が欲しがっていた５０６への独自の情報網、そのアテが出来た。」
ハイドリヒ「できた、と言いますと？」
ボック「お仲間だよ、それもこれだけ」
ボックは両手の人差し指、中指、親指を立てた。
ハイドリヒ「最高ですね」
ボック「ああ、最高だ。」
ボックはそう言うと椅子を回して窓の外を見る。
窓の外には遠くにブルボン宮殿とエリゼ宮が見えていた。
ボック「大概外に向かって自らが権力者だという奴は権力を持っていない。
　権力を実際に持つものは権力者を自称する輩の背後にいるものだ。
　真の権力者は権力者に都合のいい情報を与え都合のいい判断をさせるか、権力者に間接的な力を見せつけて意のままに操るかのどちらかだ。」
ボックが言うとハイドリヒはにやりと笑う。
それを見てボックも邪悪な笑みを浮かべた。
ボック「言っておくが、私は将軍だよ？政治家じゃない。
　私はこの国のあるべき道筋を示唆するだけだ。
　そこから何をすべき考えるのは、分かるね？」
ハイドリヒ「勿論」
ボック「では、５０６の〝管理計画〟を立てて、実行したまえ。
　あの世間知らずの貴族と自由と権利を標榜するバカを教化し我々の駒にしろ」
　ボックは鋭い目つきで老練な老将軍の凄みを醸し出しながらハイドリヒに命じた。
それに金髪の野獣も只者ではないオーラを出して返事をする。
ハイドリヒ「は」
そう言うとハイドリヒは部屋から出る。

ドアを開けるとすぐに待っていた副官がやってきた。
ハイドリヒは廊下を歩きながら後ろを歩く副官に指示を出す。
ハイドリヒ「プレッツ、明日ボック大将と共にセダンに飛べ。
明日から君は５０６の作戦参謀だ。
クラインとジーゲルには私から今晩中に通す」
プレッツ「分かりました、閣下」
ハイドリヒ「向こうに行ったら我々の新たな仲間と協力体制を構築し中の情報を逐一こちらに流せ。
ウィッチとも協力体制を築ければなおいい」
プレッツ「了解、ハイル・ヒトラー」
ハイドリヒ「ハイル・ヒトラー」
二人は右手を伸ばしナチス式敬礼をすると別れた。

第５話：事実は小説より…

翌日、５０６に2機のC―５４と一機のアブロヨークが着陸した。
１機のC―５４には完全武装の兵士達が、残りの二機にはボックとマロリーが乗っていた。
着陸し護衛の兵士達が格納庫前で整列するとC―５４からボックとプレッツ、ヨークからマロリーが降りてきた。
それをロザリーとジーナが出迎えた。
ロザリー「ボック大将、マロリー中将」
ジーナ「お疲れ…」
ボック「めんどくさい口上はいい。彼らの元に案内したまえ。」
ロザリー「分かりました」
ロザリーとジーナが社交辞令を言おうとすると遮り案内するよう命じた。
ロザリーとジーナは言われた通りに二人を部屋に案内し。

―――――――――――――――

カーロイ「ふぁ、昨日徹夜で例の書類の英訳版作ってたから疲れたよ…」
アラン「そりゃ大変だな」
カーロイ「ああ、コーヒーくれ。
　何も入れてない奴」
その頃カーロイ、アラン、ジェフ、ホスバッハ、トニー、カートはロザリーの執務室でくつろいでいた。
カーロイは徹夜で例の書類の英訳を行っていたため疲れ切り今にも寝そうだった。
そんなカーロイにジェフがブラックコーヒーを渡した。
するとドアがあいてジーナとロザリー、ボックとマロリーとプレッツが入ってきた。
カーロイ達は立ち上がり整列、敬礼、ボックとマロリーも答礼した。
ボック「うむ、ハンガリー軍、ＳＳ、パルチザン?、それにトミー

とヤンキー二人か。」
ボックはホスバッハ達の軍服を見て識別した。
それに全員が驚いた。
ロザリー「閣下!?」
ジェフ「ど、どういうことだ?」
トニー「ＷＴＦ」
カート「失礼ですが閣下は何者ですか?」
ボック「そんなに驚く事かね?単に君らと素性が同じで立場が違うだけだ。
かの世界では〝ドイツ陸軍元帥フェードア・フォン・ボック〟と呼ばれていたただの老人、今は〝カールスラント陸軍大将フェードア・フォン・ボック〟だがね」
ボックは驚くロザリーやホスバッハ達を後目にホスバッハ達が座っていた椅子に座り陣取る。
その向かいにマロリー、そしてボックの背後にプレッツが立った。
ボック「ではグリユンネ少佐、状況は大体把握した。
大方彼らの事だろう?違うかね?」
ロザリー「は、はい」
マロリー「なら話が早い、彼らを５０６に配属させろ。
書類に関しては我々が行うから心配しなくてもいい。
それにウィッチである可能性が高いだろうからウィッチとして配属したまえ」
ロザリー「はい?ウィッチ?」
マロリーの言葉にロザリーが疑問を持った。
マロリー「ウィッチだよ、ウィッチ。
君は違和感を感じないのか?」
ロザリー「言われてみれば…何か違和感を感じます…」
マロリーの言にロザリーも同意した。
ホスバッハ達からは何か違和感のようなものをずっと感じていたのだ。
マロリー「その違和感の正体がウィッチだからだよ。

これで納得したか？」
ロザリー「はい」
ジーナ「しかし、数人はリベリオン人でも貴族でもないのですが…」
するとジーナが数人が５０６への入隊要件を満たしていないと指摘した。
マロリー「リベリオン人はアメリカ人と同じ扱いにしてあるから可能だ。
それでいいかね？」
ジーナ「しかし、ド・メーストル大尉は〝フランス人〟です。」
ジーナがフランス人のアランの事を伝える。
フランス人である以上リベリオン人の５０６に配属するのは難しく思えた。
ボック「ふむ、ド・メーストル大尉」
アラン「は」
するとボックはアランを呼び質問した。
ボック「君は何処生まれかね？」
アラン「一応ワシントンＤ．Ｃです。」
ボック「なら大丈夫だ、出生地主義だ。」
アランはワシントンＤ．Ｃ生まれだった。
そのためアメリカの国籍付与条件である米国内での生まれに合致し彼には自動的にアメリカ人としての国籍が付与されていた。
ジーナ「了解しました」
マロリー「ところで君たちは何の機の操縦経験がある？
ストライカーユニットは対応するユニットと特性がそっくりで大した訓練の必要もなく転換できる。」
するとマロリーが操縦経験を聞いた。
カート「私はＰ―４０、ＦＭ―２、Ｆ８Ｆですね」
トニー「Ｐ―３８ライトニング」
ジェフ「Ｐ―４０とモスキート」
アラン「昔ＭＳ４０６とカーチスホークを」
ホスバッハ「３８年までＢｆ１０９」

カーロイ「Ｆｗ１９０とＣＲ３２だ」
マロリー「分かった、ライトニング、モスキート、ＦＭ―２、Ｐ―５１、Ｂｆ１０９、Ｆｗ１９０を手配する。
ド・メーストル大尉には悪いが代替品としてＰ―５１になるが。
今から手配すれば夕方にはセダンの方は来るはずだ。
カールスラント製はランスのデポにいくつかあったはず」
マロリーはユニットの手配を確約した。
最も近い補給デポはランスであった。
ボック「では次だ、彼、ハンス＝アヒム・プレッツ少佐を５０６に連絡将校として配属してもらう。
彼はパリとの連絡役として定期的に伝えてもらう、いいね？」
次にボックはプレッツの事を伝えた。
ロザリー達はボックの命令に戸惑った。
ロザリー「なぜ彼をここに配属する必要があるのでしょうか？」
ボック「理由？理由なんて聞いて何になる？
これは依頼ではなく命令だよ？命令に理由を聞いても答える必要なんてあるかい？」
ロザリーの問いにボックは悪びれることなく答えた。
彼女はこれ以上の追及はあきらめた。
ロザリー「分かりました。ところで、閣下。
昨日、このような書類を回収しましたがいかがいたしましょうか？」
ロザリーは話題を変えてホスバッハが持っていた例の書類の英訳をボックに渡した。
ボック「ふむ、まさかこの研究が実際にあったとはな。
噂では聞いていたが実際に目にするのは初めてだ。」
ロザリー「知っているのですか？」
ボックの反応にロザリーは驚いた。
ボック「知っている、とは違うな。噂だ噂。

一部の軍の研究者が未知の物体に関する研究をしているという噂を数回耳にした事がある。
まあ眉唾物だと思い気にしてはいなかったが事実だったとはな。
興味深いな、グリュンネ君、この書類は我々がオリジナルと共に回収するがいいかね？」
ロザリー「ええ、構いません」
カーロイ「いくら大将閣下と言えど渡すわけにはいきません」
ボックが原本と一緒に例の書類を貰おうとするとカーロイが拒否した。
ボック「何故かね？」
カーロイ「は、その書類は我がハンガリー軍の最高機密文章であり他国軍の軍人に渡すなど言語道断、もし渡すというのであれば全て私自ら処分します。
ハンガリー軍人として私にはその書類の情報漏洩の責任と義務があります」
ボック「フハハハハハ、いいだろう。今日は諦めるよ。何せ話が急だ。
次はちゃんとした許可と命令を持ってきてやるよ。
グリュンネ君、君はいい部下を手に入れたよ。
この大将である私に面と向かって意見を口にする気骨のある男はなかなかいないよ」
カーロイの意見にボックは高笑いをした。
ボック「少し早いが帰るとするか。失礼したよグリュンネ君。
まあこっちに来て1時間も経ってないがね」
マロリー「では失礼した」
話が済むと二人は立ち上がると部屋を出て行った。
出て行くとロザリーは力なく座った。
ロザリー「はぁ…大変だわ…」
ジーナ「フーヴァー少佐たちはB部隊が引き取りますが残りはお願いします。」

ロザリー「そのつもりよ、それよりも…」
プレッツ「私の事ですかな？レディー」
ロザリーはドアの傍でボック達を見送ったプレッツを見る。
ロザリー「何でもないわよ、何でも」
プレッツ「正直に言ってくださって結構です。
　私がここでは厄介者だと分かってますので」
ジーナ「ところで、君も彼らと同じなのか？」
するとジーナがプレッツに聞いた。
それにプレッツは悪びれもせず答えた。
プレッツ「だったら何です？
　では」
そう言うとプレッツは出て行った。
アラン「気に食わねえ奴だな」
ジェフ「ああ、なめてるのか？」
トニー「だが信用には足るね。ああいう奴は上の者に対して従順で忠誠を誓うタイプだ。
　その上頭も切れる」
アランとジェフとトニーはプレッツをそう評した。
ジーナ「グリュンネ隊長、そろそろ帰ります。
　何分二日も向こうを留守にしてますので」
ロザリー「ええ、アランさんたちの事をお願いね」
ジーナ「はい」
そう言うとジーナはカート達を連れて出て行った。

それから2時間後、ディジョン
マリアン「遅いな…」
ジェニファー「向こうで色々あったそうですから…」
カーラ「あ！来たよ！」
ディジョンではマリアン達がジーナ達の帰りを待っていた。
だがまさかジーナがお客を連れ来ているとは思いもしていなかった。

そしてカーラが雲の間からジーナとカートのＦ８Ｆ、そしてその後ろからくるＣ―４７に気がついた。
ジーナ達は次々と着陸するとマリアン達はジーナに駆け寄った。
ジーナ「今帰った、何かあったか？」
マリアン「特に何もありませんでした。
　ところで、あれは？」
マリアンが報告すると一緒に来たＣ―４７の事を聞いた。
ジーナ「ああ。新しい仲間、というべきか？」
カート「私の古い戦友もいるがね」
「？」
ジーナとカートが簡単に説明するが３人は首をかしげるだけだった。
その間にＣ―４７は駐機して３人の男が降りてきた。
マリアン「その、新しい仲間っていうのは…彼らですか？」
ジーナ「そうだ。」
カーラ「なんか楽しそうじゃん」
ジェニファー「どんな人なんでしょうか？」
それに三者三様の反応を見せる。
降りた彼らも又マリアン達に近づいた。
ジェフ「カート、これがこっちのお仲間か？」
カート「ああ、紹介しよう、海兵隊のマリアン・Ｅ・カール大尉、同じく海兵隊のジェニファー・デ・ブランク大尉それに陸軍のカーラ・ルクシック中尉だ。
　で、こちらがアラン・ド・メーストル大尉、フランス人だが一応アメリカ生まれだから米国籍を持ってる、でトニー・コルレオーネ少尉とジェフリー・フィッツジェラルド・ジュニア中尉だ」
マリアン「よろしく。」
アラン「よろしく」
トニー「よろしく。」
ジェフ「ああ、よろしく。」
カートが紹介しマリアン達と握手する。

するとマリアンがジェフの軍服に気がついた。
マリアン「ブリタニア空軍なのか？」
ジェフ「いや、イギリス空軍だ。
　とはいっても俺はイギリス人じゃなくて血統書付きのアイリッシュアメリカン、一応何故かアイルランド貴族の爵位まである名門だぜ」
ジェフがマリアンに自慢するとマリアンの表情が急に厳しくなった。
ジェフ「どうした？何か不味い事でも言ったか？」
マリアン「なぜ、忌々しい貴族がいるんだ！」
ジェフ「落ち着けマリンコ、今はこの通りＲＡＦだが元は海兵隊だ。
　同じ海兵隊員同士仲良くやろうぜ」
声を荒げるマリアンの肩を叩いてジェフが諫めようとするだがマリアンは手を払いのけた。
マリアン「貴族なんかが同情するな」
ジェニファー「すいません、マリアン、駄目ですよ、そんな口聞いちゃ…」
マリアンの言にジェニファーがフォローする。
ジェフ「はぁ、君は海兵隊員か？」
マリアン「そうだ」
するとジェフが真面目な口調で聞いた。
ジェフ「なら聞くが海兵隊のモットーは？」
マリアン「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ、Ｔｈｅ　Ｆｅｗ，Ｔｈｅ　Ｐｒｏｕｄ、Ｏｎｃｅ　ａ　Ｍａｒｉｎｅ，Ａｌｗａｙｓ　ａ　Ｍａｒｉｎｅだが？」
ジェフ「ＯＫ、俺は元海兵隊員だ。
　そのモットーを胸に訓練を受け、今でもそのモットーのように海兵隊員、そして合衆国市民の模範たるべき行動を心がけてる。
　しかし、君の態度は目に余る。
　君は人種差別主義者か？それも貴族を差別するビッチか？」
マリアン「そんなわけないだろう！何がレイシストだ！」

ジェフが大っぴらに人種差別主義者と聞いてマリアンが反論するがジェフの怒りが爆発した。

ジェフ「だが君の態度はまるで貴族に対して嫌悪感を丸出しにするクソみたいなレイシストかコミュニストだ！　いいか！俺は差別が大っ嫌いだ！

そもそも海兵隊に戻らなかったのも知り合いのイギリス人に誘われたのもあるが俺の故郷の幼馴染の日本人が日本人というだけで収容されたんだ、アメリカは祖国だがそんな野蛮な行為をする連中の為に戦うぐらいなら同盟国に行って史上最悪の虐殺者相手に戦った方がマシだ！

貴様は海兵隊で何を習った！自由と権利を守るのが海兵隊員だ！

差別をするな！人種や肌の色や生まれで差別するなど言語道断！

レイシストなど海兵隊に要らん！レイシストはその名誉ある軍服を今すぐ脱いでママのエプロンに泣きついて『ママ、今日差別したら海兵隊員に次言ったら（ピー）が馬鹿になるまでファックしてからライフルで頭蓋骨をファックしてやるって言われたの』って言ってろ！」

ジェフは完全にキレていた。

彼からすればマリアンの態度はまさに差別的もしくは「自由と権利の擁護者」である海兵隊員の風上にも置けないような態度であった。

その上ジェフは日系人収容で幼馴染の日本人の家族が犯罪者扱いされたと聞いて愛していた海兵隊に戻らず英空軍に行くほど人種差別を嫌っていた。

その気迫にマリアンもジェニファーもカーラもドン引きしていた。

ジェフ「そうか、それでも脱がないのならてめえのケツ（ピー）を徹底的に再教育してやる！

ケツ（ピー）が泣いたり笑ったりできなくしてやる！

中佐、カート、このサバノビッチの再教育をする許可を」

ジェフが怒りながらカートとジーナに許可を求めた。

カート「そ、そこまでする必要はないと思うが…」
ジェフ「レイシストの血筋を根絶やしにしなければならない。
海兵隊にレイシストなど不要だ、レイシストがいるならそれを排除するのが海兵隊員だ」
カート「いや、しかし…」
ジェフ「再教育の許可を、カート。」
カート「いや、教官をやった事は…」
ジェフ「１９３９年から４０年までパリスアイランドで教官をやってた。
カート、許可を」
カートはジェフの勢いに押されていた。
カートはジーナに聞いた。
カート「中佐、どうします?
やらせます?下手にやらせると色々問題が起きそうな気がします」
ジーナ「はぁ、いいだろう。ただし１週間だけだ」
マリアン「隊長！」
ジーナの決定にマリアンが反応するがジェフは満足していた。
ジェフ「一週間あれば十分です。」
ジーナ「落ち着け、一応は二人共親睦を深めるためだ。
禍根を残すようなことはするな」
ジェフ「は」
ジーナがジェフに釘を刺した。
そして翌日以降、ジェフはマリアンに手加減無しの本物の海兵隊の訓練を行うのだった。

第６話：闇夜の戦い

その日の夜Ａ部隊の格納庫ではホスバッハ、ハインリーケ、邦佳、貫二郎がいた。

この日の昼過ぎには早くも二人用のＢｆ１０９Ｇ―１０とＦｗ１９０Ａ―８が届き訓練が行われその後ホスバッハの初の実戦飛行と邦佳達の初任務を兼ねてハインリーケと共に夜間哨戒に行く準備をしていた。

ハインリーケ「一応聞くがそなたらにナイトウィッチの適正はあるか？」

邦佳「ないです」

貫二郎「これっぽっちもないです」

ホスバッハ「夜間戦闘の経験なら豊富だが」

ハインリーケが３人に聞くとホスバッハ以外全員夜間戦闘の経験はなかった。

ハインリーケ「夜間戦闘の経験ってどんなのじゃ？」

ホスバッハ「夜襲、突破、迎撃、強襲、反撃、包囲、奇襲、急襲、防御、遭遇、空襲、色々だ。

陸戦だと夜襲は基本的な戦術だ。

それに訓練中に実戦に投入するのは経験済みだ。」

ハインリーケ「はぁ…先が思いやられる…」

ホスバッハの夜間戦闘の経験は全て陸戦であった。

それに訓練中だったが実戦に投入されるという事も経験済みだった。

というのもＳＳ騎兵師団の補充大隊時代にワルシャワ・ゲットー蜂起の鎮圧に投入され実戦を経験していた。

その経験にハインリーケは頭を抱えた。

ハインリーケ「まあよい、任務に出る、支度せい」

邦佳「はーい、お手当お手当」

貫二郎「邦佳は変わらないね」

ハインリーケ「いまいち緊張感に欠けるのう…」

ハインリーケは邦佳の呑気さに呆れていたが準備が終わると夜の闇に飛び立った。

それから暫くして４人はアルデンヌ地方南部の森を飛んでいた。
ハインリーケ「異常は？」
邦佳「ないような、そうでもないような…」
ホスバッハ「見える範囲では何もない。どうせ視覚は屁の役にもたたん。
　耳をすませた方が役に立つ」
４人の周りは暗闇であり殆ど視覚は役に立たなかった。
ホスバッハは通常の野戦用歩兵装備で双眼鏡も持っていたが全く役に立たなかった。
ハインリーケ「下は森、月は新月、当然じゃの。
　まあ妾の魔導針にも反応はない、となると現在の所はごく平和…」
貫二郎「うわ！なんか後ろ通った！」
ハインリーケが話していると突然半分寝そうになりそうでうつらうつらしていた貫二郎が驚いた。
邦佳とホスバッハはそれに反応して周囲を警戒する。
だが周りにはネウロイの影も形もなかった。
貫二郎「どこ？どこ？」
ハインリーケ「落ち着かぬか、よく見るのじゃ」
ハインリーケが３人を落ち着かせてる。
そして眼下に見つけたのは梟だった。
邦佳「ええっと…ホウッって鳴く超小型ネウロイ？」
ハインリーケ「梟じゃ、たわけ」
貫二郎が驚いたのはただの梟だった。
するとホスバッハが貫二郎の頭を殴った。
貫二郎「痛！」
ホスバッハ「たかが梟ごときに大騒ぎするな！
　ぶっ殺すぞ」

ハインリーケ「そうじゃ、ネウロイであったならばそなたらの目に映る5分も前に妾の魔導針が捉えておるわ」
貫二郎「ごもっともです…もしかして僕達役立たずですか?」
ハインリーケ「別の表現をすれば足手まといじゃ」
ハインリーケからすれば戦闘経験の乏しい3人は足手まといと言えた。
貫二郎「ハハ…そうですか…」
ハインリーケがきっぱりと言うと貫二郎が溜息をついた。
すると気晴らしに歌い始めた。
貫二郎「Tr▪um ich? Wach ich? Wein ich? Lach ich?~♪」
邦佳「Heut' wei▪ ich nicht was ich tu'.~♪」
「「Wo ich gehe, wo ich stehe, lach hen die Menschen mir zu'.~♪」」
ホスバッハ「Heut' werden alle M▪rchen wahr'.~♪
Heut wird mir eines klar:~♪」
ハインリーケ「お主ら、何をやっとるのじゃ」
歌っているとホスバッハまで乱入しハインリーケが聞いた。
貫二郎「何って、歌ってたんですよ。
Das gibt's nur einmal、聞いたことぐらいあるでしょ?」
邦佳「Das gibt's nur einmal~♪」
貫二郎「das kommt nicht wieder~♪」
ホスバッハ「das ist zu sch▪n um wahr zu sein~♪」
ハインリーケ「黙らぬか!ホスバッハ!なぜお主まで歌っとるのじゃ!」
ハインリーケが聞いても歌い続けたためハインリーケが怒った。

ホスバッハ「別に構わんだろ、姫さん。
　　こっちだって懐かしい曲なんだから」
貫二郎「やっぱり、本場のドイツ人の歌の方が発音がきれいでいいですね～」
邦佳「私達もよく歌ってるけどね…」
貫二郎「所詮外国人だからあんまり発音は良くないし」
貫二郎たちが歌っていたＤａｓ　ｇｉｂｔ，ｓ　ｎｕｒ　ｅｉｎｍａｌ／唯一度だけは戦前に流行した映画の曲でありこの時代最も流行った映画音楽であった。
ホスバッハにとってもこの曲は戦前の懐かしい流行曲だった。
ハインリーケ「真面目にやらぬか！貴様らはもっと緊張感を…！」
すると突然ハインリーケの魔導針が赤く光った。
ハインリーケ「ネウロイ!?２時方向！距離３５００！近いぞ！」
ホスバッハ「何！」
ネウロイが突然現れた。
すぐに全員武器を構えその方向を見る。
そこにはラグビーボールのような形のネウロイがあった。
邦佳「見つけた！あれですよね！」
ホスバッハ「こちらヴァンピール、ネウロイ発見…」
ハインリーケ「報告は無用！たかが１機事後報告でよい！」
ホスバッハ「事前の打ち合わせを無視するつもりか！」
ハインリーケ「楽勝じゃ！」
ホスバッハは事前の打ち合わせの通り司令部に無線連絡しようとするがハインリーケは無視してネウロイに向かって突撃した。
ホスバッハ「あのバカを援護しろ！」
邦佳「了解！」
貫二郎「了解！」
突撃するハインリーケに後ろからホスバッハと貫二郎と邦佳が追いかける。
ハインリーケはネウロイに近づき一撃を食らわせるがネウロイは急降下し回避、さらに不味い事に急降下したことで視認できなくなっ

た。
ホスバッハ「姫さん、何処行ったあのクソは」
ハインリーケ「高度を落としたようじゃ、視認できぬ」
ホスバッハ達が追い付くとネウロイが下から攻撃してきた。
ハインリーケ達は真下に撃ちまくるがほぼ見えないため当たらなかった。
貫二郎「く、当たらない！」
ホスバッハ「見えないならこうだ！」
邦佳「ああもう！当たんない！」
ハインリーケ「認めとうないがこちらもじゃ！」
撃ちまくるが何処にいるかもわからずホスバッハは真下にＭ３９手榴弾を放り投げた。
手榴弾はネウロイから外れて爆発した。
すると邦佳とハインリーケが喧嘩し始めた。
邦佳「さっき人のこと役立たずなんて言うから罰が当たったんですよ！」
ハインリーケ「それは大野が自分で言ったのであろう！」
邦佳「細かい事を！
大尉って絶対１ペニー硬貨とか瓶にため込んでるタイプだ！」
ハインリーケ「それはそなたであろうが！このシャイロック！」
貫二郎「二人共喧嘩しないで！」
ホスバッハ「お前ら真面目に戦争をやれ！死にたいのか！」
貫二郎が二人を諫めるとホスバッハが怒り怒鳴った。
彼からすれば敵の真ん前で喧嘩するなど自殺行為だった。
ホスバッハ「はぁ、司令部に連絡するぞ、こちらヴァンピール、司令部応答せよ。
ん？」
ホスバッハは無線で司令部に連絡するが無線は不快な音を立てるだけだった。
ホスバッハ「故障か？そっちはどうだ？」
貫二郎「駄目です、こっちもです。」

邦佳「私のもだ…」
ホスバッハが邦佳と貫二郎に聞いたがこちらも同じように不快な音しか出していなかった。
ハインリーケ「馬鹿者、そういうものは事前に確認して準備せぬか…」
壊れたのではない、これは…」
ホスバッハ「ジャミングか、一旦撤退だ」
ハインリーケも確認するが同じく不快な音しか聞こえなかった。
ジャミングだった。
状況が不利と即座に判断したホスバッハは撤退を決めた。
だが直後、状況が変わった。
邦佳「大尉！ホスバッハさん！あれ！」
貫二郎「え？民間機だ！」
ホスバッハ「なんでここにいるんだ！」
それは少し離れたところを飛んでいたサベナ・ベルギカ航空のＪｕ５２だった。
彼らが飛んでいた地域は丁度ブリュッセル～ベルン間の最短航空路のすぐ傍だった。
未だこの地域は危険であるためガリアのアルザス地域圏・ロレーヌ地域圏・フランシュ＝コンテ地域圏の北部などは連合軍によって民間機の飛行禁止命令が出され本来のルートならば一旦西に飛びパリ郊外を経由してフランシュ＝コンテ地域圏の南を通りヘルウェティア領に入るのだが一部のパイロットや航空会社は経費や時間のかかるこのルートを嫌いわざとショートカットとして最短ルートを通ることがあった。
そしてそれを軍も自己責任だとして半分黙認していた。
ハインリーケ「こんな時に！」
邦佳「ネウロイがいることを伝えないと！」
ホスバッハ「サベナ機！聞こえるか！」
貫二郎「ホスバッハ少佐！」
すると突如ネウロイが上昇しまた攻撃し始めた。

ハインリーケ「このタイミングで！」
ホスバッハ「クソが！」
攻撃を回避しながら銃撃していると突如ネウロイから物体が発射された。
その物体はハインリーケの傍で爆発、榴散弾のように中から小さな弾が飛び出しハインリーケに命中、撃墜した。
邦佳「大尉！」

その頃、セダン
ロザリー「ハインリーケさん達の位置は掴めてないの？」
レーダー手「連絡が途絶えたと同時にレーダー上からも姿が消えたので詳しい場所までは…」
セダンではロザリーがハインリーケ達を探していたがレーダーから消えてしまった。
するとロザリーの後ろに突然プレッツが現れた。
プレッツ「少佐、少しお話が」
ロザリー「な、何かしら？プレッツ少佐」
プレッツ「先程、近隣を飛行中のサベナ・ベルギカ５２９４便からセダンの東で未確認の戦闘を確認したそうです。」
ロザリー「え！」
プレッツが持って来たのはあのサベナ機からのセダンのロレーヌ地域圏防空司令部への報告だった。

その頃、ハインリーケ達はというと
邦佳「あいたたた…大丈夫ですか大尉？」
貫二郎「邦佳！大丈夫？」
ホスバッハ「大丈夫か姫さん？」

ハインリーケ「全く、森に突っ込んだ衝撃の方がネウロイの攻撃よりダメージが大きいわ」
ハインリーケを助けようとした邦佳がハインリーケの下敷きになりそこに貫二郎とホスバッハが周囲を警戒しながら近づいてきた。
ホスバッハ「肩の怪我は大丈夫か?」
ハインリーケ「大したことないと言っておろう…」
ホスバッハがハインリーケの怪我を心配すると彼女は強がるがホスバッハがそれを無視してハインリーケの服を脱がせて怪我を見た。
ハインリーケ「ななな何をする気じゃ!」
ホスバッハ「黙ってろ姫さん。」
驚く彼女を無視してホスバッハは傷の周りを触り骨折や脱臼が無いと確認すると水筒を取り出し怪我の周りに水をかけた。
ハインリーケ「く…」
ホスバッハ「染みるだろうが我慢してくれ。」
ホスバッハが傷を洗うと軍服のポッケから包帯の袋を取り出し包帯とガーゼを取り出し彼女の肩の傷にあてて応急処置をした。
ホスバッハ「これでいいだろう。骨も折れてないし脱臼もしてないから十分だ。
姫さん、大丈夫か?」
応急処置が終わると彼女はなぜか黙っていた。
ハインリーケ「不味いのう…魔導針がきかん…」
邦佳「ええ!」
貫二郎「そんな馬鹿な」
ホスバッハ「それって不味いのか?」
魔導針が使えない事に邦佳達は驚くがホスバッハはよく理解していなかった。
貫二郎「魔導針はレーダーのアンテナみたいなものです。
それが使えないとなると夜だと殆ど戦闘不能です」
ホスバッハ「成程」
ハインリーケ「妾の魔導針とストライカーの働きを阻害するチャフの類のようじゃが柔らかい金属出てきているようで剥がすことが出

来ぬ。
　対ナイトウィッチ通信妨害に特化したネウロイという事か？
　面白い…」
ハインリーケのユニットにはネウロイの弾の破片がついていた。
それがハインリーケのユニットと魔導針の働きを阻害していた。
ホスバッハ「なら剥がせばいいだろう？何も素手でやれとは言ってない」
邦佳「え？」
するとホスバッハがとんでもない事を言いだした。
ハインリーケ「できるのか？」
ホスバッハ「分からんが連中はこっちに気がついてないし時間はある。
　相手の手札はフルハウス、こっちの手札はツーペアだが山札の一番上がジョーカーだ、このゲーム降りる気か？」
ホスバッハの言葉を聞いて全員がにやりとした。
邦佳「やろう！まだ手札はあるんだよね？勝てるチャンスも！」
貫二郎「戦いは最後の５分にある、って誰かが言ってましたし。」
ハインリーケ「黒田、大野…」
ホスバッハ「じゃあ早速やるぞ」
早速彼らは動き始めた。

その頃、セダンではロザリーがカーロイとイザベルとアドリアーナを集めていた。
ロザリー「正式発足もまだなのに隊員４人が行方不明、もし４人に何かあったら…」
アドリアーナ「一応釘を刺しておきます。
　辞表だけは勘弁してほしい。」
ソファーに座ったアドリアーナがロザリーに釘を刺す。
だがロザリーは自信を喪失していた。

ロザリー「もう限界よ、隊長の器じゃないのよ。」
アドリアーナ「グリユンネ少佐、私はこの性格だから彼方此方で問題を起こして飛ばされてきた、でも今はここを自分の居場所だと思っている。
そう思うのは少佐、貴方がいたからだ。
部下と一緒に悩んでくれる貴方が。
お願いだ、私の居場所を奪わないでくれ」
アドリアーナが立ち上がり懇願した。
イザベル「僕だってここが気に入っているんです。」
カーロイ「少佐がいようがいまいがあんまり関係ないが、少佐みたいな善人はなかなかお目にかかれねえぞ」
ロザリー「3人とも…」
カーロイとイザベルもアドリアーナに同調した。
アドリアーナ「あんたはどうなんだ?プレッツ」
プレッツ「ボック閣下の意向では少佐には椅子に縛り付けてでも司令官に留めるように厳命しています。
506はただの部隊ではなくこのガリアにおける連合軍の政治的なバランスを保つという極めて重要な役割があるのです。
軍事的価値以上に政治的な広告塔、政治戦略上の価値が極めて大であるため早急なる編成完結が求めれています。
なので例えあなたが魔力を失おうとも実権を失おうとも貴方は我々の許可を得ない限りその椅子から動く事は絶対にできないとお考え下さい」
プレッツはロザリーに強い言葉で現状を伝えた。
アドリアーナ「それってつまり少佐には操り人形になって貰うってことか?」
プレッツ「違います、貴方方全員が我々の操り人形になるんですよ。
貴方方は現状、この国を舞台にしたチェスのクイーンだと思っておいてください。」
プレッツが506の現状を断言した。
506は連合軍にとっては大駒であり失うわけにはいかなかった。

ロザリー「でも、どうすれば…」
プレッツ「何も我々でやれとは言ってません。」
ロザリーが呟くとプレッツが断言した。
そしてプレッツは電話をかけた。
プレッツ「セダン、ロレーヌ地域圏防空司令部を頼む。
グラウェルト大将閣下、プレッツです。
至急セダン北東方面に警戒警報の発令と航空部隊の出撃をお願いします。
５０６のウィッチ４名が行方不明、ネウロイとの交戦によるものと思われます。
では」

第7話：夜明け

少しして4人はセダン北東部の空を飛んでいた。
ホスバッハ「姫さん、魔導針に異常はないか？」
ハインリーケ「ああ。問題ない。
　まさかスコップでネウロイを引き剥がすとはな」
貫二郎「強引というか無茶苦茶というか…」
邦佳「でもこれで魔導針が使えるようになったから良かったじゃないですか」
この少し前、ハインリーケのユニットに付いたネウロイをホスバッハがスコップで引き剥がしていた。
スコップをネウロイとユニットの間に突っ込みてこの原理の要領で無理矢理剥がしていた。
だがユニット自体は墜落の衝撃で内部機構が損傷し自力飛行はごく短時間しかできない状況だった。
そのためハインリーケは貫二郎に背負われて飛んでいた。
ハインリーケ「ところで大野、重くはないか？」
貫二郎「一応鍛えてるので大丈夫ですよ」
ハインリーケが重くないか聞くと貫二郎が答えるが横から邦佳が突っ込む。
邦佳「本当かな～いっつも休みの日はピアノ弾いてるかウィスキー飲んでるだけなのに？」
貫二郎「邦佳～」
邦佳「いひゃいよはんじろう（痛いよ貫二郎）」
貫二郎は邦佳の頬を引っ張った。
その光景にホスバッハもハインリーケも笑った。
ハインリーケ「全く、どうもそなたらは分からぬ。
　そなたらは妾を置いてゆくべき所で見捨てなかった。
　そうした高貴な振る舞いを見せながら自分は貴族、いや華族の器ではないと言い、ある者はこれが普通だと言いう。」
突然ハインリーケが邦佳達の行動の理由を聞いた。

それに貫二郎と邦佳はさも当然のように答えた。
貫二郎「高貴な振る舞い、ですか？別にそんなつもりはありませんよ。」
邦佳「戦友を助けるのってそんなに不思議な事ですか？」
更にホスバッハも理由を答えた。
ホスバッハ「最も最善の答えがそれだっただけだ。
言っておくが、指揮官は部下を預かる立場にある。
国家から部下を預かる以上無碍に死人を出すわけにはいかない。
例え４９人の部下を犠牲にしても５１人の部下を生き残らせるのがいい指揮官って奴だ。」
ホスバッハの判断は打算的なものだった。
地獄の東部戦線最前線とそれ以上の地獄として名高いユーゴスラビアでのパルチザン掃討戦で磨かれた計算と勘によるものだった。
ハインリーケ「妾が幼き頃の話じゃ」
するとハインリーケが昔話を始めた。
ハインリーケ「故郷の村に獣が現れ作物を荒らす事件があった。
幼い妾はたった一人でその事件を解決しようと行動した、それが高貴なる行いだと信じておったからじゃ。
だがその獣の正体はネウロイに故郷を奪われ何もかもを失い生きるために盗みを働くしかない野党たちであった。
それを知った妾は自分がいかに愚かであったか気づかされたのじゃ。
事件を解決し武勲を示すころは己の為に過ぎぬ、彼らのような弱きものを守る事こそが本当の高貴なる行い、妾達貴族が背負うべき宿命なのじゃと。」
それは子供の頃に故郷を襲った盗賊に関する話だった。
だがその話にホスバッハは否定的だった。
ホスバッハ「守る？秩序の破壊者をか？民族を内側より滅ぼさんとする卑怯者どもを？
何が高貴なる行いだ、国家への忠誠、国益、そして秩序

の方が重要だ。」
ハインリーケ「な、そなたも貴族ならばわかるじゃろう！」
ホスバッハ「分からん。なぜ秩序を破壊する蛆虫どもを擁護する。」
ホスバッハの発言にハインリーケは驚くがホスバッハはさも当然のように言うだけだった。
ホスバッハ「数か月前、俺の世界の４５年の１月だ。
俺は第２２ＳＳ騎兵師団の参謀将校としてブダペストにいた。」
すると今度はホスバッハが話し始めた。
ホスバッハ「ある日、俺の部下が前線で不審な集団を発見、捕縛した。
それはハンガリー人の一家で父親は脱走したハンガリー兵だった。
前にも言ったと思うが当時ブダペストは包囲され俺達兵士の食べるものさえ事欠く有様だ、民間人なんて殆ど食い物がなかったって言っていい。
だがそいつらは多数の食い物を持っていた、調べたらハンガリー軍とドイツ軍から盗んだものだった。
で、その一家への処置が俺に任されたんだ。
どうしたと思う？」
ホスバッハが聞いた。
ハインリーケ「見逃して無罪放免か？貴族ならそうあるべきだ」
ホスバッハ「ハハハハハ！姫さん、そんな御伽噺は現実にはないぞ。
俺は即決軍事裁判を開き、一家を破壊工作・脱走・反民族的行為・非協力の容疑で死刑とした。
死刑にするとそのまま部下が外に連れて行き父親を家族の前でロープで街頭に吊るして残りは俺が殺した。
秩序を破壊せんとしたものへの報いだ。
秩序を犯した者はその死で以て償わなければならない」
ホスバッハはその一家を処刑した。
このような行為は大戦中各地で行われ、４４年末以降は各地で屋根

や電柱や木から胸にプレートをかけられた死体が日常的な光景となっていた。
ホスバッハはそれに何ら躊躇いを見せていなかった。
その話に全員が絶句した。
ハインリーケ「な、なぜじゃ…なぜ殺す必要が…」
邦佳「そんな…酷い…」
貫二郎「そこまでやる必要は…」
ホスバッハ「お前らに分かる訳がないだろうな、あの極限の状況は。
あの状況でモラルを保つのに必要なのは恐怖だ、我々を恐れさせる恐怖だ。
我々に従わなければ殺される、そう思わせなければならないのだよ。
そうしないと我々に銃を向けられるからね」
ホスバッハの理論は恐怖という最も人間の根源的な感情に訴えかけるという戦法だった。
そしてこの慈悲のない方法はよく適応していたのだった。
ホスバッハ「ところで、お前らは奴に一泡吹かせたいと思うか?」
貫二郎「え?」
突然ホスバッハがあることを言い出した。
それはあのネウロイを撃破するという策だった。
ホスバッハ「いい案を思い付いた、だがこれには連携と信頼と協力が大事な賭けだ。
計算されたリスクを取る覚悟はできてるか?」

それから十数分後、ハインリーケは何とか這うような速度で一人で辛うじてホバリングしていた。
ハインリーケ「さあ来いネウロイよ、妾はここじゃぞ」
ハインリーケはわざとネウロイに見つかるよう飛んでいた。
ネウロイもすぐにそれに気がつき彼女に向かって突進する。
向かってくるネウロイを見ながら彼女は呟いた。

ハインリーケ「妾も焼きが回ったものじゃ…
　　あのような者たちに命を託すとはのう」
そしてネウロイが突進しぶつかる直前、ハインリーケはわざとストライカーを脱いだ。
その瞬間、ネウロイは動きを止めた。
ホスバッハ「よし！今だ！全火力を集中しろ！撃て！」
動きが止まった瞬間、ハインリーケの下にいたホスバッハと貫二郎が一斉に攻撃し始めた。
二人がネウロイに向けて乱射する間に落下したハインリーケを邦佳がキャッチ、邦佳とハインリーケも持っていたＭＧ４２とＭＧ１５１で撃ち始めた。
集中砲火を受けたネウロイは煙に包まれた。
ハインリーケ「やったか⁉」
ハインリーケが叫ぶが煙が晴れると出てきたのはコアを露出しているが未だ健在のネウロイだった。
ハインリーケ「く…此処までか…」
ホスバッハ「ハインリーケ！黒田撤退だ！援護する！」
すぐに状況が不利だと判断するとハインリーケ達に撤退を命じた。
ホスバッハはハインリーケ達に注意が向かないよう銃撃するがすぐに弾が３０発しかないＳｔＧ４４は弾切れになった。
そしてその瞬間を待っていたかのようにネウロイが攻撃しようとする。
ホスバッハ「く、クソが！これでどうだ！」
するとホスバッハは時間稼ぎに持っていたスコップを投げつけた。
するとスコップがネウロイにあたると爆発、ネウロイのコアを破壊した。
ハインリーケ「な！」
邦佳「え⁉」
貫二郎「は？」
ホスバッハ「嘘だろ？今の手榴弾じゃないぞ」
全員がそれに驚く。

当たり前だが普通のスコップは爆発しないのである。
ハインリーケ「ホスバッハ、大丈夫か？」
ホスバッハ「姫さん、もしかしたら任意の物を爆発物に変えるってのが俺の固有魔法とやらなのかもしれん」
ハインリーケ「やたら物騒な固有魔法じゃな。
何かと過激なそなたに向いておるがな」
話していると別のエンジン音が背後から近づいてきた。
「おい、あんたら５０６の連中か？」
ホスバッハ「だったら何だ？誰だ？」
ハインツ「おっと、怪しいものじゃねえぞＳＳさん。サン・トロン基地のハインツ・ヴァレンシュタイン少佐だ。
ロレーヌ地域圏防空司令部からの緊急要請であんたらを捜索してた。」
背後にいたのは元５０１のハインツだった。
だがハインツがＳＳと言ったことに気がつきホスバッハが拳銃を抜いて顔に突きつけると同じくハインツも拳銃を突きつけ、所謂メキシカン・スタンドオフの体勢になった。
ホスバッハ「あんた一体何者だ？正直に答えないとあんたの頭を吹き飛ばすぞ」
ハインツ「ドイツ空軍第２６駆逐航空団〝ホルスト・ヴェッセル〟所属だった空軍少佐さ。
あんたこそ、ＳＳのフロリアン・ガイエル師団か？」
ホスバッハの腕にはフロリアン・ガイエル師団のカフタイトルがついていた。
ホスバッハ「いや、第２２ＳＳ騎兵師団だ。」
ハインツ「ＳＳには変わらねえだろ。
言っておくが俺はあんまりＳＳは信用してないんでね、ナチスもだが。」
ハインツはホスバッハへの当てつけのように言う。
するとハインリーケがハインツに聞いてきた。
ハインリーケ「ところで、シュナウファー少佐は？」

ハインツ「シュナウファー？あいつなら元気だぞ。」
貫二郎「シュナウファー少佐？」
ハインリーケがハイデマリーの事を聞いたが貫二郎も邦佳もホスバッハも誰も知らなかった。
ハインリーケ「妾の友人じゃ、妾に友がいておかしいか？」
邦佳「うん」
邦佳が素直に答えるとハインリーケは邦佳の首を絞める。
ハインツ「ハハ、あんたの事も聞いてるよ、あんたヴィトゲンシュタイン大尉だろ？
よろしく、仲良くやろうぜ」
ハインリーケ「ああ、よろしく頼むぞ」
ハインツとハインリーケが握手する。
ハインツ「そろそろ帰りたいんだがセダンまで送らなくていいか？」
ハインリーケ「無用じゃ、シュナウファー少佐にはよろしく伝えておいてくれ」
ハインツ「ああ分かったよ姫、じゃあな」
ハインツは手を振りながら去って行った。
するとふと東の空が白み始めた。
貫二郎「夜明けですか、ふぁああ、一晩中飛んでたのか。」
ハインリーケ「長い任務じゃったな」
朝日を見ながら４人は感傷に浸っていた。
ホスバッハはタバコを取り出して吸い始めていた。
ハインリーケ「全く…こんな姿人には見せられんな…」
突然ハインリーケがそんな事を言いだした。
邦佳「私が見てますよ？」
ハインリーケ「当り前じゃ！空気を読め！馬鹿者！
はぁ…変わり者に礼を伝えるのは苦労するのぅ…
世話になった、感謝する」
ハインリーケは慣れていないのか照れながら感謝を伝えた。
ハインリーケ「さあ！急ぐぞ！」

邦佳「飛ぶのは私なんだけど」
ホスバッハ「一番遅いのは姫さんと黒田だぞ」
貫二郎「早く帰りましょうよ…もうくたくたですよ…眠らないか見張っててください」
ホスバッハ「基地に帰ったら泥のように眠るんだろうな」
全員くたくたに疲れていた。
すると無線から声が聞こえてきた
イザベル『おーい』
邦佳「あ、えっと、アイザック君!とヴィスコンティ大尉!」
前を見るとそこにはアドリアーナとイザベルが飛んでいた。
ハインリーケ「ん?むう!いかん!あやつらにこんな姿を見られては妾の威厳が…」
すると突然ハインリーケが焦って暴れ始めた。
背負っていた邦佳は振り向いて注意する。
邦佳「動かないでくださいよ!
飛べっこないじゃないですか!
大尉のストライカー完全に…
あ」
振り向いた時、邦佳はハインリーケを放してしまった。
ハインリーケはそのまま落下し始めるがすぐに止まった。
ハインリーケ「?なんじゃ?」
ホスバッハ「お前ら何をやってるんだ…」
ホスバッハがハインリーケの足首を掴んで逆さまになっていた。
ハインリーケ「ホスバッハ!助かった!」
ホスバッハ「ふぁあ、面倒だからこのまま基地に行くぞ。」
ハインリーケ「え?」
ホスバッハ「居眠りして落としたら許してくれよ」
ハインリーケ「ホスバッハ少佐!!!覚えておれえええええええ!!!」
ホスバッハはハインリーケを逆さまにしたまま基地へと連れて帰った。

その頃、ディジョンではマリアンの部屋にゴミ箱を叩きながらジェフが乱入した。
ジェフ「起きろ！起きろ！起きろ！」
マリアン「ふぇ？なんだジェフ？こんな朝早くから…」
叩き起こされたマリアンは眠気眼をこすりながらジェフを見るが帰ってきたのは罵声だった。
ジェフ「貴様それでも海兵隊員か！
いいか！今からお前の口からクソ垂れる前と後にサーとつけろ！いいな！」
マリアン「え？」
混乱するマリアンをさらに罵倒する。
ジェフ「ふざけるな！クソ垂れる前と後にサーと言ったはずだぞ！お姫様！
お前の頭の中の犬のクソで考えろ！」
マリアン「さ、サーイエッサー！」
慌てて答えるが帰ってきたのはまた罵声だった。
ジェフ「なんだその喘ぎ声は！ジジイのファックの方が気合いが入ってるぞ！」
マリアン「サーイエッサー!!」
何とかジェフを納得させる返答をして罵声は一時的にやんだ。
ジェフ「よろしい！お前は何処の（ピー）だ！」
マリアン「サー、オレゴンであります、サー！」
ジェフの質問に正直に答えるがまた罵声が飛んできた。
ジェフ「ふざけるな！オレゴンで採れるのはビーバーとゲイの木こりだけだ！
お前はどっちだ！ビーバーか？木こりか？」
マリアン「サー、どちらでもありません、サー！」
ジェフ「俺を馬鹿にする気か！オレゴンにはビーバーと木こりしかいないと思ってる哀れな（ピー）だと思ってるのか!?」

マリアンをさらに罵倒する。
マリアン「サー、ノー、サー！」
ジェフ「ならば今日からお前はランバージャックだ！
俺が直々に付けた名前だ！有難く思え！」
マリアン「サーイエッサー！」
マリアンは開始からわずか5分で徹底的に人格を否定される罵倒を受けて既に恐怖を感じていた。
ジェフ「いいかランバージャック！
俺の仕事は愛する海兵隊から貴様のようなこの地球上最も下層の生き物のクソを掻き集めたお前を海兵隊員にふさわしいこの地球上で最も強い生物に鍛えなおす事だ！
それまでお前の価値は蛆虫のクソ以下だと思え！
俺は厳しいが差別はせん！ホワイト、ニガー、ジュー、ウォップ、フロッグ、インディアン、ジャップ、フン、全て平等に、価値がない！
俺が訓練した暁にはお前は真の海兵隊員となり海兵隊の武器となり目となり耳となり体となり祖国に仇なす全ての存在を蹴り飛ばしてファックするのだ！
それまでは仲間の（ピー）をしゃぶるだけだ！」
ジェフの機関銃のような罵倒の連続にマリアンは恐怖を感じ棒立ちするだけだった。
そしてその二人をドアの陰から見ている人物がいた。
カーラ「あれ、大丈夫なの？」
カート「た、多分…」
ジーナ「不味いと思ったら私が止める。」
心配してカーラとカートとジーナが見ていた。
この訓練はそれから1週間続いたがマリアンは耐え抜きジェフによって鍛えなおされた。

第８話：嵐の前の平穏

１９４５年１月末、パリ郊外、オルリー空港ではガリア各界の要人とガリア有数の大企業の幹部や連合軍の高官が集まり式典が催されていた。

社長「本日、ここにユニオン・デュ・トランスポート・エアライン、ＵＴＡの設立と最初の路線開設を行えたことは誠に感謝の極みであり、協力してくださった皆様への感謝の念は絶えません。

この航空会社の設立の意義の一つは航空産業の活性化による復興の促進です、航空産業は将来的にこの国の手足となるものです」

それはガリアの船会社シャルジャール・レユニが連合軍と協力して設立した新興航空会社ユニオン・デュ・トランスポート・エアライン、略称ＵＴＡの初の運行を祝う式典だった。

この航空会社は連合軍が後方地域での物資輸送や連絡業務の一部を民間航空会社に委託するという方針から生まれたもので既存のエールガリアなどの航空会社は採算性を重視する上に機材を丸ごと数機借り上げて運用すると運行計画に多大な影響を与えるため都合が悪いという事情がありそのために設立したチャーター便専門航空会社だった。

このような軍のチャーター便をよく受ける航空会社というのは史実のアロー航空やカリッタエアが有名だがこの世界のＵＴＡもカリッタやアローのような会社を目指して設立された。

会社自体はシャルジャールが出資と人員集めをし設備や機材は連合軍が余剰機材を提供していた。

社長「えーというわけでして…」

ボック「中身の無い長い話を聞くのは退屈だね」

ネーベ「仕事で来れなかったハイドリヒとインクヴァルトが羨ましい」

ボック「全くだ、私も入れておくべきだったかな。」

社長のだらだらと長いスピーチをボックは隣に座るネーベに愚痴る。

ハイドリヒや法務部のインクヴァルトはこの式典には仕事で出られなかった。
社長「というわけです。」
司会者「ありがとうございました、続いて連合軍ガリア軍行政司令部司令官のフェードア・フォン・ボック大将のスピーチです。」
社長の話がやっと終わると続いてボックが登壇しようと立ち上がった、その瞬間、突如演台の背後に駐機していたＤＣ―３の右主翼が爆発した。
会場は一気に悲鳴で包まれボックは爆風で後ろに倒される。
ネーベ「閣下！大丈夫ですか！」
ボック「大丈夫だ！消火を急がせろ！全員退避だ！
行くぞ！」
ボックは指示を叫ぶと立ち上がる。
爆発後すぐにオルリー空港の消防隊やオルリー駐屯の空軍警備部隊、ボックやネーベの護衛の兵士が一斉に集まり来賓の避難や消火を開始した。
ネーベ「恐らくテロでしょう、事故なわけない。」
ボック「ああ。
これは我々連合軍への宣戦布告だ。
誰がやったかは知らんが誰であれ喧嘩を売った以上後悔させてやる」
ネーベとボックは燃えるＤＣ―３を見ながらつぶやいた。

その日の夜、司令部ではハイドリヒがボックに報告していた。
ハイドリヒ「昼のテロですが、時限爆弾で使用されたのは恐らくコンポジット爆薬ノーベル５００、およそ２．５キロと推定されます。
本来の予定ならばあの時間には機は最初のフライトとしてパリからマルセイユに飛んでいました。」
ボック「私が遅刻したのがいいように働いたか…」

爆弾は時限爆弾であり使用されたのは可塑性爆薬ノーベル５００だった。
本来ならばあの時間には機体は最初のフライトとして一部の賓客を乗せてマルセイユに飛ぶ予定だったがボックが遅刻したため式典が予定よりも1時間遅れ、その結果として地上で炸裂したのだ。
ボック「で、誰がやった?ノーベル５００は軍用だ。
ダイナマイトのように誰でもとは言わんが民間で使うような代物じゃないぞ」
ハイドリヒ「どうやら例の強奪事件で奪われたものと同じだと思われます。」
ノーベル５００は軍用爆薬である。
民間人が簡単に入手できるような代物ではないの分かっていた。
ボック「つまり強奪事件の犯人と同じという事か…誰がやったか情報はあるか?」
ハイドリヒ「現在調査中ですが有力な情報源があります」
ボック「分かった、やれ」
ハイドリヒの意を汲んだボックが許可する。

その夜の明け方パリ市南部、オルリー空港の北のある建物の前では十数人のカールスラント兵がライフルを構えていた。
士官「よし、突入!」
そしてタイミングを計ると拳銃を持った士官が兵士を連れてドアを蹴破り突入した。
士官「連合軍だ!武器を捨てろ!」
王党派「クソ!」
中にいたのは王党派の面々だった。
王党派は走って逃げだし裏口を蹴破り裏通りを走るがすぐに兵士達がやってくると発砲、足を撃ち抜かれ倒れ兵士達に確保された。

昼過ぎにハイドリヒは捕らえた王党派の情報を受け取った。
ハイドリヒ「で、吐いたか？」
将校「はい、全部吐きました。
　王党派がオルリーの整備士を抱き込んでＤＣ―３の主脚格納庫に爆弾を仕掛けたようです。
　それと…」
尋問という名の拷問を行った将校が報告書のある下りを指さした。
ハイドリヒ「ふむ、これは…」
将校「警告、しますか？」
ハイドリヒ「プレッツとホスバッハを召喚してくれ。
　大至急だ」
ハイドリヒは至急プレッツとホスバッハを連れてくるように命じた。

翌朝、セダン、５０６Ａ部隊は穏やかな朝を迎えていた。
カーロイ「静かな朝はいいねぇ」
邦佳「今日もいい天気だなぁ」
カーロイ「グッドモーニング、黒田」
外ではカーロイが一人パイプをふかしながら水彩で風景画を描き傍で邦佳が朝日を見ていた。
邦佳「おはようございます、カーロイさん。
　絵、描いてるんですか？」
カーロイ「ああ、風景画をな。
　風景画も人物画も静物画も得意だが風景画は似せなくていいから楽だよ」
カーロイと邦佳は絵を見せながら雑談しているとエンジン音が聞こえてきた。

カーロイ「ん？」
見上げるとウィッチが４人飛んでいた。
カーロイ「Ｂ部隊かな？なあ、今度絵のモデルに…
　行っちゃった」
カーロイが振り返ると邦佳はどこかに行ってしまった。
カーロイ「ま、いいや。今度イザベルにでもやってもらうか」

邦佳が向かった先は格納庫だった。
邦佳「デイジョンのプレディ中佐にマリアン大尉、それにフーヴァー少佐とフィッツジェラルド中尉！」
ジーナ「黒田中尉か」
カート「グッドモーニング、静かな朝に邪魔して悪いね」
格納庫には使い魔を出した状態のジーナ、マリアン、カート、ジェフがいた。
カートの使い魔はグリズリー、ジェフはアメリカンショートヘアだった。
邦佳に気がついたカートとジーナは挨拶する。
邦佳「おはようございます！」
ジェフ「おはよう、元気で何よりだ。
　こっちじゃ上手くやれてるかい？」
邦佳「はい！」
ジェフも邦佳に挨拶する。
邦佳は更にジェフの隣のマリアンにも挨拶する。
邦佳「マリアンさんもおはようございます！」
だがマリアンは邦佳の挨拶を無視した。
するとジェフが小声でマリアンに呟いた。
ジェフ「ランバージャック？」
マリアン「サーおはようございます！サー」
ジェフ「うむ、よろしい。もうサーは余計だがなマリアン」

小声でランバージャックと言うとマリアンはすぐに直立不動の姿勢になり敬礼して邦佳に挨拶する。
邦佳「？」
ジーナ「今日はグリュンネ隊長に急ぎの書簡を届けに来たんだが」
ジーナが黒田に用を伝えた。
ジーナ達が来たのはロザリーへの急ぎの書簡を持ってくるためだった。
邦佳「あ、はい。それならもう起きてると思いますよ」
ジーナ「それじゃ、大尉と中尉はそこで待機していてくれ」
ジェフ「了解」
マリアン「わかりました」
ジーナはカートを連れてロザリーの部屋に向かい格納庫にはマリアンとジェフと邦佳だけになった。
邦佳「あ、そうだマリアンさん、ジェフさん、何か飲みます？」
ジェフ「ならホットコーヒーを一杯、砂糖とクリームも持ってきてくれ。
勤務中だからビールはいらんぞ」
邦佳が二人に聞くとジェフが答えたがマリアンは沈黙していた。
邦佳「ホットコーヒーと砂糖とクリームですね。
あ、椅子要りませんか？座りたいですよね？」
ジェフ「結構、鍛え方が違うからこの程度問題ない」
邦佳「マリアンさんは？」
マリアンにも聞くがマリアンは黙ったままだった。
邦佳「持ってきますね」
邦佳は沈黙は肯定とみなし椅子とホットコーヒーを取りに行った。
マリアン「はぁ…」
ジェフ「ランバージャック？」
ジェフが小声で呟くとマリアンは姿勢を正す。
それと同時に邦佳が聞いてきた。
邦佳「マリアンさん！背もたれがないのでも大丈夫ですかー!?」
マリアン「私に構うな！無視しているのが分からないのか!?」

マリアンが大声で叫んだ。
邦佳「え、無視してたんですか？
　何でそんな事をするんですか？」
マリアン「貴族の世話にはならん！」
マリアンが邦佳を拒絶するがすぐに顔が青ざめ震えながら後ろを見た。
そこには腕を組んで怒っているのが目に見えているジェフがいた。
ジェフ「ランバージャック、どういうことかね？」
マリアン「ひ！」
ジェフ「反省はしているかね？」
マリアン「サーイエッサー！」
ジェフ「よし、ならば腕立て伏せ５０回！始め！その間俺の許可なくして口からクソを垂らすな！」
マリアン「サーイエッサー！」
ジェフ「バカか！俺は返事をしろと許可してない！腕立て伏せ追加２５回！」
ジェフがマリアンに腕立て伏せをさせる。
その光景に邦佳はドン引きしていた。
邦佳「えーと、フィッツジェラルドさん？」
ジェフ「黒田、一応これは訓練だから別に気にしなくてもいい。
　あと早くホットコーヒーを」
邦佳「は、はい」
心配する邦佳にジェフはコーヒーを催促する。
するとエンジン音が近づいてきた。
邦佳「あ」
ハインリーケ「ふぅ、基地に帰投した。
　異常なしじゃ」
夜間哨戒に行っていたハインリーケが帰ってきた。
邦佳は帰ってきた彼女に声をかけた。
邦佳「おかえりなさい大尉！」
ハインリーケ「なんじゃ黒田中尉か？出迎えとは珍し…

え?何が起きてるんじゃ?」
ハインリーケが返事するとすぐにその隣のカオスに気がついた。
ジェフ「グッドモーニング、プリンセスさん」
ハインリーケ「あ、ああ…」
ジェフ「この（ピー）は無視していいぞ」
ハインリーケ「いや格納庫で腕立て伏せなんてやってて無視する方が無理じゃ。
こ奴らは何をやっとるのじゃ?」
邦佳「えーと…」
ジェフ「バカの再教育だが?黒田、早くコーヒーをくれ。」
あまりのカオスっぷりにハインリーケは顔が引きつっていた。
ハインリーケ「なんでカール大尉が再教育とやらを受けとるんじゃ?」
ジェフ「人種差別主義者だったからな。
貴族嫌いとかいうが実際の所は貴族を差別してるだけのレイシストだ。
俺は人種差別が大嫌いなんだ。合衆国民的じゃない」
ハインリーケ「そ、そうなのか…」
ジェフ「まあな。ランバージャック、今何回目だ?」
ジェフがマリアンに回数を聞いた。
マリアン「サー、３５回であります、サー」
ジェフ「ふざけるな!カメの方が早いぞ!
俺が孫に囲まれて穏やかな最期を迎えるまでちんたらやってるつもりか!
もっと早くやれ!」
マリアン「サーイエッサー!」
ジェフ「もっともっとだ!音の壁破って光を追い抜くぐらい早くだ!」
マリアン「サーイエッサー!」
ジェフは更にマリアンをせかした。
すると突然邦佳が聞いた。

邦佳「あのーそういえば貴族の人とそうじゃない人でなんでＡとＢに分かれたんですか？」
ハインリーケ「はぁ？なんじゃ今更」
カーロイ「それ俺も気になってた」
邦佳「あ、カーロイさん」
話していると絵画の道具を持ったカーロイが帰ってきた。
カーロイ「よう、フィッツジェラルド中尉。」
ジェフ「グッドモーニング、カーロイ大尉」
カーロイとジェフは挨拶する。
ジェフ「なんで別れたんだっけ？ランバージャック、今何回目だ？」
マリアン「サー、６８回目であります、サー」
ジェフ「分かった、７０回までやったら終われ。」
マリアン「サーイエッサー！」
マリアンに終わるよう指示し彼女が終わるとジェフが聞いた。
ジェフ「なあマリアン、なんで５０６は二つに分かれたんだ？
サーはつけなくていいぞ」
マリアン「５０６はガリア復興のシンボル、欧州の貴族出身ウィッチで固められたのはそのためだそうだ。
私から言わせれば頭の古い考えだ。
リベリオンだってこの戦いに大勢ウィッチと莫大な物資を送り込んでるんだ、「貴族がいないから５０６参加は無し」なんて認められるか、で大揉めに揉めた結果妥協案としてＡとＢの二つの部隊が生まれた訳、だそうだ」
マリアンが５０６の結成に関する話を説明した。
極めて政治的なゴタゴタと妥協によって５０６はＡとＢの二つの部隊を持つ特殊な編成となった。
そのためこの時点でまだ編成作業の真っ最中だった。
航空部隊などは最低限の戦闘能力を有したためウィッチ部隊〝そのもの〟は既に運用が開始されているが問題はその周辺の直属の哨戒飛行隊や救難部隊、高射砲部隊、警備部隊だった。
というのも通常のＪＦＷの編成は単一拠点に主力が駐留するとい

う〝前提〟で編成されていたため〝主力が二分割されている〟という状況ではそのままの編成では明らかに戦力不足となり、かといって部隊数を増やすと今度はＪＦＷそのものの指揮・通信能力の貧弱さが問題となるという事から現状セダンの基地の警備や高射砲部隊はセダン都市司令部傘下の高射砲部隊に委託されているという現状があった。

勿論手をこまねいているわけではなく指揮・通信能力を拡充した上で一か月以内の警備部隊の配属を予定しパリ郊外の演習場で編成作業が行われていた。

邦佳「へーだからＢの人達皆リベリオン人なんだ」

ハインリーケ「リベリオン風情が出しゃばりおって、Ｂ部隊などなければこんな育ちの悪いリベリアンとも出会わずに済んだというものを。

そもそも初めて会ったときは最悪じゃった！」

マリアン「それはこっちのセリフだ！お前がコソコソＢ基地に潜り込んだからだろう!?」

ハインリーケとマリアンが口論し始めた。

だがその話しぶりからしてどうもハインリーケが何かやらかしたようだった。

邦佳「えっと…何か悪さでもしたんですか？大尉」

ハインリーケ「誰がするか！

人聞きの悪い事を言うでない。

アレは不幸な事故じゃった…」

そう言うとハインリーケは原因となった騒動を説明した。

簡潔に説明するならばＢ部隊の基地の近くで不時着し、色々あった末何故かＢの新入りと勘違いされそしてマリアンの故郷を暴露して目の敵にされ大喧嘩したという事だった。

ハインリーケ「というわけじゃや、こ奴が紛らわしいからえらい目にあったわ」

マリアン「勝手に勘違いしておきながら何をほざいてる！

あの時の決着をここでつけてもいいんだぞ？」

ハインリーケ「ほう？望むところじゃ」
マリアンとハインリーケはまた乱闘が始まりそうな空気を出した。
だがその光景を見て邦佳とジェフとカーロイが大笑いする。
邦佳「ぷ！あはははは！なんですか…それ…！
面白い！マルで扶桑の落語じゃないですか！
貫二郎に話したらきっと大笑いしますよ！」
ジェフ「ハハハハハ！酷い話だが酒場じゃ受ける話だよ！ガハハハハ！」
カーロイ「ひっひっひっひっひ…！酷い…酷い話だ…！」
ハインリーケ「ら、らくご!?」
マリアン「黒田…？ジェフ…？何を言って…」
邦佳「あっははははは！面白すぎです！お腹がよじれる…！」
ジェフ「ハハハハハ！下手なコメディアンの話より面白いよ…！」
3人とも二人を無視して笑い転げていた。
ハインリーケ「ええい！黙らんか！調子が狂うであろうが！」
邦佳「だって…！」
そのやり取りを少し離れたところから見ていた影があった。
ロザリー「ふふふっやっぱり黒田中尉って面白いわ」
カート「私たちが出て行く必要はなさそうですね。」
ジーナ「もしA部隊で馴染めていなかったらこちらで引き取るつもりでしたがその必要はなさそうですね。」
見ていたのはロザリーとジーナとカートだった。
ロザリー「私としてはA部隊内の緩衝材になってくれることを期待していたのだけどそれ以上ね。
もしかしたら、黒田中尉にはもっと大きなまとまりのないこの506の架け橋になってくれるかも」
ロザリーが邦佳を論評する。
それを聞いたジーナは少し考えるとある提案をした。
ジーナ「グリュンネ隊長、一つ提案があるのですが」

第9話：テロの魔の手

その日の夜、急遽プレッツと共にパリに出張したホスバッハ以外のウィッチが夕食を食していた。
その場でロザリーはあることを伝えた。
「B部隊との合同模擬戦？」
ロザリー「そうよ、レフェリーは私がやります。
両部隊の親睦を深めるためにも定期的に合同で訓練した方が良いと思うの」
急遽Bとの合同模擬戦をやることだった。
貫二郎「よく向こうが承知しましたね。」
ロザリー「実はジーナ隊長の提案なの」
ロザリーがそれを言うと突然空気が固まった。
ハインリーケ「罠か」
ロザリー「ハインリーケさん、何も疑ってかからないで！」
イザベル「空砲に実弾を混ぜる比率は１００発に１発ですか？それとも１０発に１発ですか？」
ロザリー「イザベルさんも混ぜない！」
イザベル「じゃあこちらだけ実弾で…」
ロザリー「イザベルさん！
ともかく！相手をへこますのは構わないけど傷つけるのは無しよ！」
ハインリーケは罠だと疑い、イザベルはジョークを言う。
とかくBへの信頼はないように見えた。
カーロイ「まあいいんじゃねえか？いざという時の連携が無いと全滅だぞ。
全滅は御免だね。」
貫二郎「確かに連携が無いとまずいですよね。」
カーロイ「まあ第一この部隊戦略上の最大の愚策を既にやってる時点で駄目だが」
戦力は集中すべし、これは戦略におけるもっとも基本的な運用セオ

リーである。
戦力の逐次投入を忌むのと同じように最も基本的な事である。
だが５０６はそれが守られていなかった。
一方邦佳は暢気に夕食を食べながら隣に座るハインリーケに聞いた。
邦佳「どうなりますかね、大尉」
ハインリーケ「フフッ、まあよい。公然と奴らを叩きのめすチャンスじゃ…」
邦佳「大尉、思惑が全部漏れてますよ…」

その頃、プレッツとホスバッハはパリの司令部の待合室にいた。
ホスバッハ「急に何だろうか?」
プレッツ「分からないが何かしらの情勢の変化があったんだろう。通常ならば私に向こうから連絡して伝える手はずなんだが。」
待合室で二人はタバコを吸いながら待っているとドアが開き見知った顔が入ってきた。
ホスバッハ「ハンス!久しぶりじゃないか!」
ディールガルテン「おお!エーリヒか!久しぶりだな!クロアチア以来か?」
ホスバッハ「ああ。」
入ってきたのは元第８ＳＳ騎兵師団作戦参謀で今はハイドリヒの幕僚長を務めているハンス・ディールガルテン中佐だった。
彼とホスバッハはフロリアン・ガイエル師団での戦友であり同僚だった。
ディールガルテン「元気そうで何よりだ。早速だが来てくれ」
久しぶりの再会を喜ぶと彼は二人を連れて自分のオフィスに連れて行った。

ディールガルテン「エーリヒ、プレッツ、楽にしてくれ。ここは私のオフィスだ。」

ホスバッハ「分かってる、客人をもてなすのに酒もコーヒーもないのかい？」

ディールガルテン「ないよ、私だってこれは残業だからな。早く帰りたいんだ。」

彼は仕事の愚痴を言いながら机からある書類をホスバッハに渡して座った。

ホスバッハ「これは？」

ディールガルテン「ハイドリヒ閣下から代わりに渡すよう言われた書類だ。中身は最高機密だがこれは５０６に関わることだ。」

ホスバッハは書類を読み始めた。

そして全部読み終わると聞いた。

ホスバッハ「これは本当か？」

ディールガルテン「情報が正しければだが。いつ、どんな方法で起きるかは不明だが何かしら近日中に起きる可能性があると考えていい。」

ホスバッハ「だが、警告されたところで我々は無力に等しい。何せ地上部隊を有していない。」

その内容は驚くべきものだった。

それは「王党派系テロ組織による５０６へのテロ計画の可能性」を示唆するものだった。

だが５０６はそれに対して無力と言って差し支えなかった。

ディールガルテン「そのぐらいわかってる。そこでセダン演習場で編成中の２個師団から一部部隊を臨時戦闘団として５０６に配備させる。

リューティガー・ピコプルン大佐の第３５装甲師団とグスタフ・フント少将の第１５２山岳猟兵師団から１個戦車中隊、１個重装備中隊、３個山岳猟兵中隊からなる戦闘団を編成して配

備する。

その指揮官はエーリヒ、君がやってくれ。」

ホスバッハ「俺が?第35装甲師団か第152山岳猟兵師団から指揮官が来ないのか?」

そこで連合軍司令部はセダン近郊で編成作業中の2個師団から抽出した大隊規模戦闘団を506に配属することにした。

泥縄式の臨時編成だが素人か戦闘能力が不十分な空軍部隊と違い陸戦の正規の訓練を受けたプロの陸軍部隊を派遣するというのは異例であった。

そしてその指揮官には第22SS工兵大隊というれっきとした戦闘部隊を指揮した経験が豊富なホスバッハが当てられて。

ディールガルテン「どちらも現在編成中でな。

それに緊急時には増援部隊を送る手はずになってる。

第35装甲師団は第35装甲擲弾兵連隊第Ⅰ大隊を中核にした戦闘団〝ロッゲ〟を、第152山岳猟兵師団は第152山岳重装備大隊を中心にした戦闘団〝ノイベアト〟を派遣する。

どちらも機械化され緊急時には1時間以内に出動する体制を整える予定だ。」

それだけでなく近隣部隊からの増援部隊も編成し備えていた。

ホスバッハ「すごいな…兵力としてはどのぐらいになるんだ?」

ディールガルテン「〝ロッゲ〟が戦車2個中隊と装甲擲弾兵3個中隊、1個装甲偵察中隊。

〝ノイベアト〟が1個戦車中隊、1個自走高射砲中隊、1個重歩兵砲大隊、2個山岳猟兵中隊だ。」

ホスバッハ「重装備過ぎないか?」

ディールガルテン「まあな。合計戦車56両、sdkfz7／2が9両、グリレ7両、sdkfz234が15両、sdkfz251が55両、トラック60台、大機械化部隊さ。」

全部隊を合わせると飛んでもない大部隊となってしまった。

装甲偵察中隊だけでも合計24両のsdkfz234とsdkf

z251からなっていた。
ホスバッハ「取り回しが悪そうだが…これ拠点防衛だぞ?」
ディールガルテン「文句は装甲部隊と歩兵師団は完全機械化だ!なんていうOKWに言ってくれ。
山岳師団はまだ自動車化だからマシだが第29波編成の歩兵師団なんてリベリオンから供与されたM3で完全機械化だぞ。」
ここまで機械化されていたのはOKW(カールスラント陸軍最高司令部)の新部隊編成の方針で44年11月編成の第29波編成歩兵師団から新たな1944年B/1945年型編成歩兵師団よりリベリオンからの供与車両による完全機械化が行われていたからだった。
そのためどうしても拠点防衛では取り回しがよくない部隊が量産されつつあった。
ホスバッハ「はぁ、まあ贅沢な事だ。
装甲車どころか満足にトラックさえなかったあの頃とは大違いだ。」
ディールガルテン「はは、確かに。もう馬に頼る時代は終わったよ。」
二人は満足に機械化どころか自動車化さえされていなかったドイツ軍を思い出していた。

翌日、ホスバッハとプレッツがロザリーとハインリーケに例の命令書を渡し確認していた。
ロザリー「テロの警戒として陸軍部隊から部隊を派遣、指揮官はホスバッハ少佐を任ずる。
また第25装甲師団と第152山岳猟兵師団より緊急時には増援部隊が送られる、これ本当?」
ホスバッハ「ええ。詳細は伏せますがテロの危険があるとのことです。」

ロザリー「信じられないわ、なんで私達が攻撃されるの？」
ハインリーケ「そうじゃ、妾達はウィッチじゃぞ？
　攻撃する理由など…」
彼女たちは書類の内容が信じられなかった。
何せ自分達が攻撃される理由など思い当たる節がなかった。
プレッツ「少佐、５０６は貴方方が思う以上に敵が多いのですよ。
　例えば共和派はこの部隊を王政復古主義者の手先と考え、レジティミストは歪められたと考えこの部隊の廃止を狙ってます。
　更にはバスク独立派や共産主義者、ブルターニュ独立派からすれば現状のガリア政府を支援する我々連合軍自体が敵ですから。
　無法ではないが秩序もないのがこの国なのですよ。」
ロザリー「でも信じられないわ…」
プレッツが彼女たちの知らない実情を教えるがロザリーには信じられなかった。
ホスバッハ「信じられなくもこれが事実だ。
　部隊の到着は明日だ。
　至急兵舎と陣地の手配を。」
ロザリー「はぁ、分かったわ。
　何とか頑張ってみるわ」
ホスバッハはロザリーに戦闘団の兵士と指揮用の設備の手配を要請した。
ロザリーは八方手を尽くし更に基地内の余っていた部屋を転用し臨時ながら戦闘団〝ホスバッハ〟の兵舎と指揮設備の構築を行った。

翌日、５０６に大量のトラックと装甲車、そして戦車がやってきた。
邦佳「すごーい！」
カーロイ「何台あるんだこりゃ…」
イザベル「僕たちより強そうな部隊だよ。」
目の前を通る車列を眺めながら邦佳達は驚いていた。
戦闘団〝ホスバッハ〟の戦力はパンター戦車１５両、ｓｄｋｆｚ１

０／４とｓｄｋｆｚ１０／５が合計１０台、更にＰａｋ４０が５門に自動車化された山岳猟兵中隊が３個中隊で山岳猟兵だけで６００人、全部隊を合わせると合計１１００人という大隊規模の大部隊だった。

ホスバッハ「各中隊は整列！指揮官は私の元に来い！」

ロザリー「ホスバッハさんは張り切ってるわね」

ハインリーケ「ああ、あともう一人もな」

この部隊を率いるホスバッハは張り切っていたがもう一人興奮している人物が別にいた。

それはこの部隊の到着と同時に新たに配属された司令部直卒の部隊、第５０６空軍音楽小隊、即ち５０６の軍楽隊だった。

軍楽隊は戦闘団〝ホスバッハ〟の到着を邪魔しないためにＵＴＡ航空機で空路セダンに到着していた。

そしてそれに大興奮していたのが貫二郎だった。

貫二郎「少佐！軍楽隊の指揮を僕にさせてください！」

ロザリー「ええ!?」

ハインリーケ「そなた、指揮とかできるのか？」

鼻息を荒くした貫二郎がロザリーに迫る。

貫二郎「元音大生ですが？音大にいる時に学徒召集で戦闘機パイロットになったんです」

ハインリーケ「ならできるのじゃな」

貫二郎「ええ、勿論」

ロザリー「なら任せるわ」

貫二郎「ありがとうございます！」

ロザリーは元音大生の貫二郎に丸投げすることにした。

それから数日間戦闘団は合同訓練等を行い連携を確認すると陣地を構築、防衛体制を整えた。

正面のゲートの傍にはチェックポイントとダックインしたパンターを配置し、ゲートに通じる道路沿いにあった農家を徴発し道路沿い左右の農地に対戦車砲４門と自走高射砲２両、山岳猟兵１個中隊を配した。

基地全体は２個山岳猟兵中隊と戦車中隊、重装備中隊の残余を直轄

防衛部隊に充てた。

数日後、セダンから離れたトロワ郊外フォレ・ドリオンにあるオーゾン・タンブル湖で合同模擬戦が開催された。

ジーナ「今日はよろしくお願いします、グリュンネ隊長」
ロザリー「こちらこそ今日はありがとう、ジーナ隊長。」
ジーナとロザリーが挨拶をして握手するがジーナは周りをちらりと見る。
本来５０６だけのイベントなのだがどういうわけかマスコミが集まっていた。
ジーナ「それにしても…どうしてマスコミがこんなに?」
ロザリー「ええっと、その件ね…」
どうしてマスコミがいるか聞くとロザリーは暢気にしていた邦佳を見て話す。
ロザリー「あれが記者に漏らしちゃった人」
邦佳「え?話しちゃいけなかったんですか?」
ホスバッハ「お前が原因か!中隊!こいつを湖に投げ捨てろ!
俺達の仕事を増やした元凶だ!」
「「了解!!」」
邦佳が記者に漏らしてしまいマスコミが集まっていたのだ。
このマスコミが集まったせいでホスバッハ率いる警備部隊の仕事が急増、全員の身元確認、荷物検査だけでなく群衆整理までする必要が出たため手が足りずトロワから増援の警察部隊を要請し何とか捌いていた。
邦佳が漏らしたことを記者から知ったホスバッハは警備の兵士を連れて邦佳を捕まえると仕事が増えて怒り狂っている警備部隊の兵士達が邦佳を担いで湖に投げ捨てようとする。
ロザリー「わざわざ念を押すまでもないと思ったから…」

ジーナ「いい方向に考えましょう。
　今回は情報管理の問題点がはっきりしたという事で」
ジーナは良い方向に考えることにした。
一方邦佳は何とか貫二郎とカートがホスバッハ達を止めて投げ捨てられるのは阻止された。
ジーナ「まあ問題はないでしょう、カーラのようなマスコミ受けのいい連中もいますしフーヴァーなら何とかしてくれますから。」
周りではカーラをマスコミがインタービューしたりカートが記者を上手い事捌いていた。
ロザリー「フーヴァー少佐を信頼しているのね。」
ジーナ「ええ」
ジーナはカートを深く信頼していた。
カートは仕事一筋ともいえる人間だが指揮官向きで広い見識と穏やかな性格、そして何より人望があった。
それから数十分後、やっと本格的に合同模擬戦が開始された。
最初はルール説明だった。
ロザリー「それではお集りの皆さん、まず今回の模擬戦のルールですが安全を考慮してペイント弾を用います。
　身体への被弾は撃墜とみなし戦闘から離脱、ストライカーユニットへの被弾は片側のみならばそちらを停止させ戦闘続行、両側ならば撃墜とみなします。」
カート「撃墜の判定に関してはこちらで行い、こちらの掲示板に出された一覧にバツ印が表示されます。
　各自頻繁に確認してください。」
ロザリーとカートがルール説明を行った。
内容は安全を考慮したものだった。
ロザリー「くれぐれも言っておきますがこの模擬戦はＡとＢ両部隊の親睦を深めるものです。
　相手を倒す事よりもお互いの能力を理解することに…」
ロザリーが話していたが周りは酷い状況だった。
ジェニファー「別にどっちがＡでどっちがＢでも…」

アラン「キャベツ野郎に実力を見せてやる」
マリアン「チーズとオリーブオイルでぶくぶく太れロマーニャ野郎！」
ジェフ「ランバージャック？トニーはイタリアンだぞ」
カーラ「こっちが勝ったら明日からＢ部隊だからな」
トニー「小便は済んだか？神様にお祈りは？
湖の隅でガタガタ震えながら命乞いをする心の準備はＯＫ？」
カーロイ「黙って聞け！」
アドリアーナ「コーラの糖分で脳に悪影響が出ているようだな」
イザベル「こっちが勝ったらもう一つ下がってＣ部隊でいいよね。
黒田さんが勝ったらどうしてほしい？」
邦佳「じゃあコーラ！１０ケース分！」
貫二郎「ジャズとシャンソンのレコード２０枚！」
ハインリーケ「そのようなもので喜ぶのはそなたらだけじゃろうが！」
ホスバッハ「黙って話を聞け！このクソガキが！」
とうとうホスバッハがキレ、ＳｔＧ４４を取り出すと空に向かって撃った。
それに驚いて記者達は下がりウィッチ達は演台に倒れた。
ハインリーケ「ひ！」
カーラ「マ、マジか…」
ホスバッハ「次はないぞ。」
腰が引けたカーラとハインリーケにホスバッハはタバコをふかし肩に銃を乗せながら言った。
一悶着あった末、やっと実際に模擬戦が開始された。

第１０話：模擬戦

説明が終わると審判役のロザリーとカート以外のウィッチ達が離陸した。

それぞれ通常の装備にペイント弾を仕込んだだけだが唯一、トニーだけ装備が違っていた。

ジェニファー「トニーさん、なんでいつもと武器が違うんですか？」

トニー「相手が人ならこっちの方が楽だ。」

持っていたのはいつも使っているコルト・モニターでもＭ１９２８でもなく何故かスコープをつけた猟銃のウィンチェスターＭ７０だった。

それだけでなくユニットにつけた専用ホルスターにはモニターとＭ１９２８が入れられ懐にはいつものように拳銃を仕込んでいた。

トニーは元マフィアで使う武器も殺し屋時代から使っていた物を好んでいた。

モニターやＭ１９２８、Ｍ１９１０、Ｍ７０は民間でも手に入れやすい武器で彼も好んでいた。

ハインリーケ「よし、全員空に上がったな！

本物の貴族の戦いぶりを見せてくれるわ！」

離陸し模擬戦開始位置に付くとハインリーケが偉そうな口調で言う。

一方のＢはジーナは黙っていたがマリアンはあからさまにイライラし、ジェフはタバコを吸い、トニーは噛み煙草を噛んで、アランは鼻歌でパルチザンの歌を歌い、カーラはハインリーケの態度に憤慨していた。

カーラ「うわっ！ムカつくー！」

ジェニファー「みなさーん、模擬戦なんだし仲良く和気藹々と…」

ジェニファーが憤慨するカーラをなだめていると突如彼女のこめかみを銃弾が掠めた。

ジェニファー「きゃあ！」

ハインリーケ「御託はそれまでじゃ、遊んでやるのでかかってくる

がよい！」
撃ったのはハインリーケだった。
だがこの命令無視の射撃は模擬戦開始の合図となってしまった。
マリアン「やりやがったな！」
ハインリーケ「黒田中尉と大野少尉は妾と共にプレディ機とコルレオーネ機を挟撃！
ホスバッハ少佐は…」
ホスバッハ「残りを拘束しろ！動きを封じて包囲して殲滅だ！
早くしろ！時間が一番の資源だ！」
ハインリーケ「行くぞ！黒田中尉！大野少尉！」
ロザリー『あの…』
カート『開始の号令はこちらでやるんですが…』
ハインリーケ「要望なら後で聞くぞ！隊長よ！」
ハインリーケはロザリーを無視し作戦を指示し模擬戦が始まった。
最初にＡはジーナとＢの他の隊員を分離しようとする。
イザベルとカーロイはマリアンとジェフを牽制、一方アドリアーナとホスバッハは残りのカーラ、ジェニファー、アランを拘束し残りのＡは離れたところにいるトニーとジーナをに向かっていた。
その様子をジーナは冷静に観察していた。
トニー「こんな連中、俺一人でも十分だがな」
ジーナ「それでは模擬戦の意味がないだろう。」
トニー「だな、遠慮する必要あります？」
ジーナ「君が本気を出したら誰も勝てないぞ」
トニー「確かに」
その様子を見ながらトニーはＭ７０を構えて冷静だった。
その頃マリアンはジーナに向かうハインリーケ達を見ていると邦佳と貫二郎が遅れているのに気がついた。
それを見たマリアンとジェフはチャンスと判断した。
マリアン「隙ありだぞ！黒田！」
ジェフ「アスタ・ラ・ビスタ・ベイベー！」
二人は邦佳達を銃撃するが二人は回避した。

邦佳「あ、マリアンさん！この間はどうも」
マリアン「緊迫感なさすぎだろ！」
邦佳は撃ってきたマリアンに挨拶するがその緊迫感のなさに呆れていた。
一方ジェフと貫二郎も同じような感じだった。
ジェフ「なあ、一回聞きたかったんだがあの女お前のアレか？」
貫二郎「多分意味するものが僕の連想するアレならが本当です」
ジェフ「ああそう、なら絶対殺さねえとな。
お前だけ女連れてんじゃねー！」
貫二郎「こっちだって！東京焼け野原にしやがって！
宮殿も焼きやがって！宮殿の敵だ！」
ジェフ「リメンバー・パールハーバー！」
二人はなぜか罵り合いながら撃ちあっていた。
だがこれはBの策から外れた行為だった。
カーラ「折角隊長が囮になってくれたのに引っかかったの姫さんだけだよ！」
ジェニファー「マリアンが動くのが早すぎたんです」
マリアンが予定よりも早く動きすぎたため囮に引っかかったのはハインリーケだけだった。
カーラ「ひゃあ！次の手は！ねえ次の手は！」
アラン「落ち着け！隊長とトニーが動くのを待て。
あの二人は強いぞ」
アラン達はホスバッハとアドリアーナの攻撃で拘束され動けなかった。
その頃ハインリーケはジーナ達に襲い掛かっていた。
しかしジーナ達は逃げるだけだった。
ハインリーケ「正々堂々勝負せぬか！」
ジーナ「あまり落胆させないでほしんだが…」
トニー「勝負に正々堂々など不要、夜討ち朝駆け上等だ」
ハインリーケ「落胆？」
ハインリーケが叫んでいると突如二人は振り返ると発砲したが弾

は明後日の方向に飛ぶだけだった。
ハインリーケ「噂程の腕ではないのう？」
トニー「誰がお前を撃つと言った？それにあんたなら拳銃一つで十分だ」
二人の撃った弾は離れたところを飛んでいたイザベルの腰と頭を直撃した。
イザベル「うわ！」
カーロイ「イザベル！」
ハインリーケ「この距離で…」
弾は寸分たがわず直撃した。
それにハインリーケは驚く。
弾を当てたのは二人の固有魔法ホークアイと元々の素質だった。
ジーナは射撃が得意、一方トニーは元殺し屋でほぼ不可能と言われている二丁拳銃の使い手。
殺しの方法として狙撃は大得意だった。
そのため癖で胴体ではなく頭を狙うことが多かった。
ハインリーケ「勝負は後回しじゃ！プレディ中佐！コルレオーネ少尉！」
ハインリーケは形勢不利だと判断するとジーナ達から離れて行った。
その頃邦佳達はマリアン達に追い回されていた。
マリアン「なかなかやるな！黒田中尉！
隊長のお陰で一人邪魔が消えてすぐ終わると思ったが見直したぞ！」
ジェフ「射撃以外は上手いな！射撃以外なら海兵隊に今すぐ入れるぞ！」
邦佳「マリアンさんに褒めてもらうのは嬉しいんだけど！
これっておやつ休憩とか入るんでしたっけ？」
「「は？」」
貫二郎「邦佳…入らないよ…おやつ休憩とか…
そもそも昼過ぎには終わる予定だし」

突然邦佳が気の抜けた事を言い一瞬全員が動きを止めた。
マリアン「ええい！お遊びならここまで…うわ!?」
マリアンが気を取り直して止めを刺そうとした瞬間、二人の間に影が割り込んだ。
ハインリーケ「そうはさせぬわ！」
邦佳「大尉！」
割り込んだのはハインリーケだった。
ハインリーケ「全く、油断じゃぞ。
あやつは口が悪くて早くて口が悪くて口が悪い、翻弄されるでない」
マリアン「口が悪いのは余計だ！」
ハインリーケ「1対2で挑むか、頭に血が上ったな」
ハインリーケの口車に乗せられマリアンはハインリーケと黒田に挑もうとしていた。
だがそこに更に割込みが入る。
ジェニファー「駄目ですよ、落ち着いて」
マリアン「ジェニファー！」
ジェニファー「隊長が一人倒して4対3、慎重に攻めてリードを守りましょう」
ジェニファーがマリアンの援護に入り2対2となった。
更にジェニファーとマリアンは二人共所属は同じ海兵隊であるため連携も取れていた。
ハインリーケ「ふむ、連携に限ればあちらが上かの、ならば！
生真面目な者にはトリッキーなプレイと相場は決まっておる！」
ハインリーケが冷静に分析すると邦佳の後ろに隠れると邦佳が足を広げた隙にジェニファーを撃った。
ジェニファー「え!?」
ハインリーケ「股抜き狙撃！」
弾はジェニファーを直撃した。
カート『えー、ブランク大尉撃墜』

ジェニファー「まさかあんなところから…」
マリアン「やるな姫さん」
ジェニファーがやられるとマリアンは不利と判断、離脱しカーラとアランに合流しようとする。
また貫二郎を追い回していたジェフも同じくジェニファーがやられたのを知ると離脱しマリアンと合流した。
同じくAもホスバッハとカーロイとアドリアーナがハインリーケ達に合流した。
邦佳「一瞬でしたね」
ホスバッハ「状況は？」
アドリアーナ「さてどうする？ヴィトゲンシュタイン大尉」
ハインリーケ「ふん、数的優位は変わらん」
合流して状況を聞いたが状況はどちらも6対6で変わらず膠着状態だった。
貫二郎「ド・メーストル大尉、カール大尉、ルクシック中尉、フィッツジェラルド中尉が向こうのはずです。」
ホスバッハ「ん？待て…伏せろ！」
貫二郎がアラン達の方を指さした時、あることに気がつきホスバッハが叫んだ。
全員驚くが言われた通りに頭を下げると弾がカーロイの帽子を掠めたがもう一人、アドリアーナを直撃した。
カート『ヴィスコンティ大尉離脱！』
カーロイ「ふう、助かった…おい！クリーニング代ぐらいは払え！」
振り返るとそこにはジーナとトニーがいた。
ホスバッハ「不味い、カーロイ、ハインリーケ、一つ策がある、どうする？」
ハインリーケ「策？」
この不味い状況にホスバッハはハインリーケにある策を伝えた。
ホスバッハ「説明したいが今はあの二人を拘束したい。
黒田、大野、今すぐあの二人を拘束しろ、撃墜はしなくていい。

動きを封じて時間を稼げ」
邦佳「は、はい！」
貫二郎「了解！」
ホスバッハはジーナとトニーを拘束するために貫二郎達を向かわせた。
ハインリーケ「で、策は？」
ホスバッハ「それはな…」
二人を向かわせると彼は策を伝えた。
それを聞いてハインリーケはニヤリと笑った。
ハインリーケ「いい策じゃな、常識外れじゃが常識外れの方がよいな」
ホスバッハ「陸戦の基本戦術さ、姫さんは時間を稼げ、カーロイと俺が動く」
ハインリーケ「分かった。」
彼の指示に従い彼女はマリアン達の方に向かった。
マリアン「４対１の子の状況でも相変わらずか、流石姫さんだ。」
ジェフ「今なら降伏で見逃してやるぞ。俺に美人の顔を汚す趣味はない。
野郎は別だが」
アラン「こっちだって早いところ終わらせたい。
それにあのフン族共は随分と薄情だな」
ハインリーケ「貴様ら相手には良いハンデじゃ」
ハインリーケが大口をたたくと空戦が始まった。
マリアン「何時までその大口を叩けるかな！」
早速空戦となるがハインリーケの後ろから全員が攻撃する。
ジェフ「貰った！」
ジェフが撃つと一発がハインリーケのストライカーを直撃した。
カート『ウィトゲンシュタイン大尉左ストライカー被弾』
マリアン「これで片足だけ！」
アラン「降参するなら今のうちだぞ！」
ハインリーケ「今のはわざと当てさせた、片肺の妾についてこられ

るかのう?」
被弾してもなおハインリーケは不敵な笑みを浮かべる。
そして急降下すると超低空まで降下、プロペラが地面の土を削るような高度で会場上空を通過する。
カート「うわ!」
ロザリー「キャ!」
その爆風で会場のあらゆる固定していないものが吹き飛んでいった。
一方空では一見してハインリーケが不利に見えたが実際は別であった。
マリアン「く、撃ちにくい!」
アラン「メルド!全く当たらん!」
低空を高速で飛ぶため射撃に集中しようにも周囲の障害物を気にする必要があり射撃に集中できていなかった。
ハインリーケはそれを見越して急旋回すると岸辺へと向かった。
マリアン「ふん!貰った!」
ギリギリまで降下できる湖面から障害物のある森へと向かいマリアン達がチャンスと考えた。
そして数秒後、ハインリーケは森の上空に差し掛かり急上昇するが直後、森の中に別のものが現れた。
ホスバッハ「撃て!」
それは森の木の陰に隠れたカーロイとホスバッハだった。
二人の策はウィッチを超低空におびき出しカーロイとホスバッハの射線上に誘導、至近距離から攻撃するというものだった。
これは地上部隊の対戦闘爆撃機戦術の一つで敵機の予想進路上に高射機関砲を隠蔽して設置、予想進路に入った敵機を至近距離から攻撃するという戦術だった。
マリアン「うわ!」
ジェフ「ファック!」
アラン「しまった罠だ!」
カーラ「うわあああああ!!」

あっという間に全員がカーロイの当時としては最速の射撃レートを誇るゲバウエルとホスバッハの突撃銃に捉えられ全員が上から下までペイント弾で染め上げられた。
マリアン「お前らなんて大っ嫌いだ！」
アラン「（ピー）」
ジェフ「ハハハハハ！嵌められた嵌められた！
愉快だよ！ハハハハハ！全く可笑しい限りだ」
すっかり策に嵌められたジェフは大笑いしていたが他のウィッチは不満そうだった。
ホスバッハ「さてと、じゃあ次はあいつらだ。」
ハインリーケ「黒田中尉と大野少尉に行かせたものの、プレディ中佐とコルレオーネ少尉相手では数分も持つまい」

その少し前、ジーナ達は邦佳達と対峙していた。
ジーナ「ここまで君たちが残るとは」
邦佳「いやーなぜか悪運だけは昔から強くて」
貫二郎「悪運も運ですから」
トニー「じゃあ最大限のおもてなしをしてやるか」
トニーがそう言うとライフルを構えて撃った。
貫二郎「うお！」
邦佳「わ！」
同時にジーナも邦佳に発砲した。
ジーナ「この間はあまり話をする機会が無くて失礼した、時間の許す限りここでゆっくりと話そう」
邦佳「この状況でお話ですか!?」
突如ジーナが邦佳に撃ちながら言う。
突然の事であり邦佳は驚きながら返事をする。
邦佳「ええっと、プレディ中佐のストライカー！
良い機体ですね！」

ジーナ「整備が超一流なものでね、おかげで私は機体の力を１２０％引き出せる」
邦佳「こっちも整備は超一流ですよ！」
ジーナ「まだ会話する余裕はあるか」
邦佳は躱しながらジーナと話していた。
一方トニーと貫二郎も同じような状況だった。
トニー「さあ踊れ踊れ、死のワルツだ」
貫二郎「僕はワルツよりポルカが好きですよ！
　トリッチ・トラッチ・ポルカとか！」
トニー「生憎クラシックはさっぱりだ、ジャズは好きだがな」
だがトニーは突然撃つのをやめた。
ウィンチェスターＭ７０の装弾数は5発であるため弾切れだった。
その隙に貫二郎がホ１０３を連射するが下手であるため弾は全く当たらなかったが形勢逆転となり一方的にトニーを追い回し始めた。
トニー「そうだ！そう来なくちゃ！やれよ！楽しませてくれ！」
貫二郎「何が楽しませてくれだ！」
追い回されているのにトニーはお気楽だった。
それどころか楽しんでいた。
ジーナ「一つ訊ねていいか？」
突如ジーナが邦佳に聞いた。
ジーナ「戦闘隊長としてウィトゲンシュタイン大尉の資質をどう見る？」
邦佳「嫌いじゃないですよ…今は！」
ジーナ「いやそう言う事を聞いているんじゃ…」
邦佳「優秀とかそうじゃないとか、どうでもいいじゃないですか。
　一番大切なのは戦友として信頼できるかどうかだし」
ジーナ「そうか、君にはそうなんだな納得した」
彼女がそう言うと突如邦佳に接近した。
邦佳「わ！近っ！」
ジーナ「唐突な急接近には流石に反応できなかったようだな」
接近し銃口を邦佳の体に突き付ける、そして次の瞬間

ジーナ「これで終わり…と言いたいところだが君の勝ちだ」
ジーナは銃口を下げて押し口を押しながら言う。
夢中になり弾が切れたのだ。
すると彼女の後ろから別の銃声がして彼女の背中がペイント弾で染め上げられた。
ホスバッハ「これで王手だ。」
撃ったのはホスバッハだった。
ホスバッハ達も邦佳と合流したのだ。
邦佳「ホスバッハ少佐！大尉！」
ホスバッハ「次はあのムカつくイタリアーノを潰すぞ」
4人は貫二郎の元に向かった。
貫二郎「クソ！当たらない！」
トニー「どうした？もっと楽しませてくれよ、どうしたさっきの威勢は？
それともジャップは銃の扱いすら満足にできないのかい？」
トニーは時々明らかに適当に撃ち返す以外ずっと貫二郎から逃げていたが貫二郎は射撃の下手が出て全く当たらなかった。
するとトニーを別方向からの銃撃が掠めた。
トニー「うお」
ホスバッハ「いいか！奴を包囲して叩き潰せ！
蠅を殺すより簡単だ！」
撃ってきたのはホスバッハ達だった。
トニー「ふ、面白くなってきたじゃねえか！」
来たのを知るとトニーは持っていたライフルを貫二郎に向けて投げた。
ライフルは貫二郎の顔面を直撃する。
貫二郎「痛！」
トニー「落とすなよ？そいつは高いんだからさ！」
そう言うと右手でモニターを取り出し銃撃する。
弾は当たらないが牽制にはなった。
トニー「来い来い、ブルックリン一の殺し屋を楽しませてみろよ」

カーロイ「クソが！」
全員が撃ちまくるが殆ど当たらない。
トニーは上手い事避けていた。
トニー「おいおい、オハイオで俺を襲った野良の自動車強盗の方が上手いぜ？
　これでも正規軍人か？」
トニーは挑発しながら射撃を回避する。
更にモニターも撃ちまくるがすぐに弾切れになった。
弾が切れると今度はＭ１９２８を取り出し乱射するがこちらもすぐに弾が切れた。
ホスバッハ「いいぞ！もうほとんど丸腰だ。」
ハインリーケ「あと一押しじゃ！押せ！」
カーロイ「今なら降伏で許してやるぞ」
トニー「いや、ここからが俺の本気だぜ、貴族様」
弾が切れトニーを全員が取り囲む。
するとトニーは懐から２丁の拳銃を取り出すと構える。
そして急上昇し宙返りする。
ハインリーケ「うわ！」
トニー「背中がお留守ですぜ、お姫様」
まずハインリーケの背中に周り頭と背中に拳銃を突きつけて発砲。
撃墜する。
カート『ウィトゲンシュタイン大尉撃墜！』
ホスバッハ「ひるむな！撃て！」
トニー「ほらよ！王子様！プレゼントだ！」
ハインリーケ「うわあああああ!!!」
ホスバッハがトニーに撃ち始めるとトニーはハインリーケを引っ張りホスバッハめがけて投げるつける。
ホスバッハの撃った弾は全部彼女に当たってしまった。
そしてハインリーケはホスバッハにぶつかり動きが止まるとそこで発砲、隙間から頭と胸に命中させる。
その隙に邦佳と貫二郎とカーロイが三方向から挟み撃ちにしよう。

トニー「ふ、アスタ・ラ・ビスタ、ベイベー」
するが真横から来た邦佳と貫二郎をそれぞれ2連射で胸と頭に弾を当てて撃墜すると最後に後ろから来たカーロイを振り返ることなく弾を当てて撃墜した。
この間僅か1分ほどだった。
そのすさまじい一連の近接戦闘術に地上も空も唖然としていた。
ハインリーケ「な、なんじゃ今のは…？」
ホスバッハ「悪魔か？」
貫二郎「強い…」
邦佳「一瞬だったね」
カーロイ「怖い…」
トニー「言っただろ？俺は元殺し屋だって」
驚く全員にトニーが言う。
こうして模擬戦はトニーの独断場となって終わった。

第10話・テロル

その日の夜、506のセダン基地に506の全員が集まっていた。
ある部屋ではホスバッハとプレッツを除いた男連中がラジオをつけながら集まって酒を飲んでいた。
ジェフ「いやあ、昼間はすっかり嵌められたよ。
ほら飲め、我がオレゴン・アイリッシュビールの西海岸一のエールだ」
カーロイ「悪いねえ、それにしてもあんた強いじゃないか」
トニー「全然、アレで8割ぐらいだね。
もうちょっと数が多くて地に足がついて実弾だったら全部出すぜ」
ジェフはカーロイに自分の会社のビールを渡して二人で飲み、その隣でトニーは自分で作ったエクストラ・ドライ・マティーニを飲んでいた。
アラン「聞いたぞ、あんた元音大生だって?」
貫二郎「ええ、東京音楽大学の作曲課程の学生でした。
それが?」
3人が座っていた部屋の真ん中のソファと机から少し離れた窓際に置かれたラジオが置かれた丸机ではアランと貫二郎が座っていた。
するとアランが貫二郎の過去の事を聞いてきた。
アラン「いやな、俺こう見えても歌うのが好きでな、子供の頃は近くの教会の聖歌隊にもいたんだ。
何か弾いてくれよ、できれば英語かフランス語のを」
貫二郎「ここにピアノはありませんよ。」
アラン「分かってるよ、ディナーの時な」
彼らはまだディナーの前だった。
貫二郎「今日のデザートは邦佳が作ってくれるらしいから楽しみですよ。」
アラン「邦佳って黒田か?お前の彼女か?」
貫二郎「ええ、結婚も真剣に考えるぐらいには」

アラン「ハハ、お熱いね。
　フランス人ってのはイギリス人とアメリカ人以上にラブロマンスが大好きな人種だよ」
　二人が話しているとラジオからアメリカ人には聞きなれた曲が流れてきた。
　ジェフ「お、ヴェラ・リンのＷｅ’ｌｌ　Ｍｅｅｔ　Ａｇａｉｎか」
『Ｗｅ☒ｌｌ　ｍｅｅｔ　ａｇａｉｎ～♪
　Ｄｏｎ☒ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｅｒｅ，ｄｏｎ☒ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｅｎ～♪
　Ｂｕｔ　Ｉ　ｋｎｏｗ　ｗｅ☒ｌｌ　ｍｅｅｔ　ａｇａｉｎ，ｓｏｍｅ　ｓｕｎｎｙ　ｄａｙ～♪』
　流れてきたの大戦中の流行歌、ヴェラ・リンのＷｅ’ｌｌ　Ｍｅｅｔ　Ａｇａｉｎだった。
　するとトニーとジェフとアランがラジオに合わせて歌い始めた。
「「Ｋｅｅｐ　ｓｍｉｌｉｎｇ　ｔｈｒｏｕｇｈ，
　Ｊｕｓｔ　ｌｉｋｅ　ｙｏｕ　ａｌｗａｙｓ　ｄｏ，
　Ｔｉｌｌ　ｔｈｅ　ｂｌｕｅ　ｓｋｉｅｓ　ｃｈａｓｅ　ｔｈｏｓｅ　ｄａｒｋ　ｃｌｏｕｄｓ，ｆａｒ　ａｗａｙ～♪」」
　アメリカ人とフランス人の大合唱を貫二郎とカーロイは酒を飲みながら静かに聞いていた。

　その頃、ロザリーの執務室ではソファにロザリー、ジーナ、カートが座り、プレッツはロザリーの後ろに立ち、ホスバッハはロザリーの机に腰かけて集まっていた。
　ロザリー「それで、何かあったの？」
　なぜ集まったか幹部を集めたカートとジーナ、そしてプレッツにロザリーが聞いた。
　ジーナ「５０６の解散を目論む動きがあるようです。」
　ロザリー「その事なら少し前にプレッツ少佐から聞いたわよ。

連合軍の上層部は何としても５０６を編成するつもりだから問題ないそうよ」

カート「それが、この件をジーナ中佐と私とで話した記者が先日行方不明になりまして、何やら黒い話がありそうで」

それは既に聞いていた５０６の解散の噂であった。

この少し前、カートとジーナはある知り合いの記者にこの件をリークしたところその記者が行方不明になったのだ。

プレッツ「それは初耳だ。我々の情報網にはそんな話は引っかかってないぞ。」

ジーナ「情報網？カールスラント軍も探っていたのか？」

プレッツ「その先は機密情報なので口外できない。」

プレッツには記者の行方不明は初耳の情報だった。

ジーナがさらに追及するがプレッツは回答を拒否した。

カート「兎に角、かなり怪しいです。

Ｂ部隊の警備を増やそうと上に問い合わせているのですがね」

ホスバッハ「その首謀者が誰であれ、どの組織であれ、連合軍はそいつらを叩き潰すのが最優先だな」

ロザリー「そう、プレッツさんは何かあったの？」

プレッツ「ええ、実は…」

そう言うとプレッツは周りを見ながらある書類を渡そうとした、だが次の瞬間――

――――――――――

「「Ｗｅ☒ｌｌ　ｍｅｅｔ　ａｇａｉｎ～♪

Ｄｏｎ☒ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｅｒｅ，ｄｏｎ☒ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｅｎ．

Ｂｕｔ　Ｉ　ｋｎｏｗ　ｗｅ☒ｌｌ　ｍｅｅｔ　ａｇａｉｎ，

ｓｏｍｅ　ｓｕｎｎｙ　ｄａｙ～♪」

ラジオから流れるＷｅ，ｌｌ　Ｍｅｅｔ　Ａｇａｉｎのサビを大

声で歌い終わった直後、突如大爆発が起きた。
ジェフ「伏せろ！」
咄嗟にジェフが叫び全員が伏せる。
直後爆風で窓ガラスが全部吹き飛んだ。
アラン「ぺ！何が起きた！」
カーロイ「爆発だ！どうする⁉」
ガラスの破片で切り傷を負ったアランが叫ぶ。
同じく傍にいた貫二郎も負傷していた。
ジェフ「大丈夫か？」
貫二郎「ええ、何とか…」
ジェフが怪我をした貫二郎に手を差し伸べる。
一方トニーは拳銃を取り出していた。
トニー「どうする！」
アラン「全員の安否と被害状況を確認しろ！
トニーが食堂、ジェフが控室、カーロイは司令部だ。
俺と大野は医務室だ」
アランは即座に指示を出した。

カート「うわ！」
ホスバッハ「爆発だ！」
プレッツ「シャイセ！先を越された！」
ジーナ「危ない！」
突然の爆発に執務室にいた全員が驚く、次の瞬間爆風で窓ガラスが全部割れるが咄嗟に伏せたためホスバッハとプレッツ、カート、ジーナに怪我はなかったがロザリーは頭部を負傷してしまった。
ジーナ「これは一体…」
カート「どう、なっているんだ？」
ホスバッハ「クソ！」
プレッツ「やられた！」

煙が晴れるとホスバッハとプレッツは立ち上がり拳銃を取り出して窓の外を見て悪態をついた。
窓の外からは格納庫が炎上している様が見えた。
ホスバッハ「最悪だ、やられた。
テロだ」
するとホスバッハはテーブルの上の電話を取り内線をかけた。
ホスバッハ「エーデルワイス！エーデルワイス！エーデルワイス！
基地の全ての門、出入り口を封鎖！
許可なく出ようとする者は捕虜としてひっ捕らえろ！
こちらの指示を無視した場合独自判断で発砲を許可！
各部隊は状況を報告！
各部隊は消防班を編成、救援に向かわせろ！
第3中隊は基地内の警備と負傷者の救出だ！」
ホスバッハは内線で警備部隊に緊急出動コード〝エーデルワイス〟を連呼する。
すぐに戦闘団は兵舎から武器を持って飛び出し各自配置についた。
戦闘団への連絡を終えると次は別の司令部に電話した。
ホスバッハ「セダン都市司令部、こちら506！
爆発が発生！テロの可能性あり！至急救援を！」
かけたのはセダン都市司令部だった。
参謀『了解した、消防警察大隊〝セダン〟を向かわせる！』
ホスバッハ「ありがとうございます！」
電話を受け取った参謀は軍の傘下にある警察消防大隊〝セダン〟の一部部隊を急行させた。
更に別の所にホスバッハは電話をかけた。
ホスバッハ「こちら506、緊急事態発生、戦闘団〝ロッゲ〟、〝ノイベアト〟の出動をお願いします。
ピコプルン大佐」
ピコプルン『分かった、すぐに向かわせる』
かけたのはセダン演習場だった。
こちらもすぐに戦闘団〝ロッゲ〟、〝ノイベアト〟が出動、一路5

０６へと向かった。
ホスバッハ「これでいい、少佐、俺は戦闘団司令部で指揮を執る。
ジーナ中佐とフーヴァー少佐はグリュンネ少佐を、プレッツ少佐が代行指揮を」
ジーナ「分かった」
プレッツ「了解した、これよりこの部隊を私が指揮する。
前線指揮はホスバッハ少佐が」
ホスバッハは指揮系統を維持する指示をすると拳銃を持って部屋を飛び出すとカーロイと入れ違いになった。
カーロイ「少佐！大丈夫ですか？」
カート「カーロイ！少佐が怪我をした、肩を貸せ！
運ぶぞ！」
カーロイとカート、そしてジーナの３人が手伝い怪我をしたロザリーを医務室へと運んだ。
一人残ったプレッツは電話を取りどこかにかけた。
プレッツ「パリ、連合軍ガリア軍行政司令部ハイドリヒ大将執務室。」
電話交換手に宛先を伝える、そして数秒後男の声が聞こえた。
ハイドリヒ『誰だ？』
プレッツ「ハイル・ヒトラー、閣下。プレッツです。」
電話の相手はハイドリヒだった。
ハイドリヒ『なんだ珍しい、何があった』
プレッツ「５０６が攻撃を受けました。爆弾テロです。
１５分ほど前です」

プレッツ『５０６が攻撃を受けました。爆弾テロです。
１５分ほど前です』
ハイドリヒ「なに？」
プレッツからの報告にハイドリヒは表情を変える。

プレッツ『本当です、現在被害状況を精査中ですが甚大です。』
ハイドリヒ「分かった、今すぐ報道管制を敷く。」
プレッツ『分かりました、切ります』
プレッツは電話を切る。
ハイドリヒは受話器を置くとある人物に電話をかけた。
ハイドリヒ「閣下、ハイドリヒです。
緊急事態です、５０６が攻撃を受けました。」
ボック『何?本当かね?』
電話をかけた相手はボックだった。

爆破から4時間ほど経った後、ロザリーは目を覚ました。
傍にはジーナ、アドリアーナ、そしてカートがいた。
ロザリー「ん…ここは…私の部屋?」
アドリアーナ「グリュンネ隊長!」
ジーナ「勝手ながら医務室が満員だったので。」
ロザリーは負傷したが医務室が満員であったため自分の部屋に運ばれて処置を受けていた。
爆破による負傷者は多数に上り医務室が足りず急遽外に臨時包帯所が設置され軽傷者はそこで応急処置を受けた後トラックに乗せられセダン市街の病院へ輸送された他、第３５装甲師団と第１５２山岳猟兵師団からも衛生部隊が派遣されていた。
ロザリー「怪我人はどうなの!?」
ロザリーが怪我人を聞いた。
するとカートが重苦しそうに言った。
カート「甚大です、軽傷者合計６９名、重傷者１４名、内一人が黒田中尉です。」
ロザリー「え…黒田さんが…」
カートが被害を伝えた。
重軽傷者の中に邦佳がいた。

ロザリー「黒田さんの容体は?」
「無事ではないですよ」
ロザリーが邦佳の容態を聞くと別の声がした。
振り向くと５０６の軍医ドーセがいた。
ロザリー「ドーセ先生」
ドーセ「やれやれ、貴方も比較的軽傷とはいえ頭を打って…」
ロザリー「そんな事より黒田さんの状態は!?」
ロザリーも軽傷を負っていたがそれよりも邦佳の容態が気になっていた。
ドーセ「面会謝絶、絶対安静、黒田中尉は今夜が峠でしょう」
ドーセが邦佳の容態を伝えた。
邦佳の容態は非常に悪かった。
ドーセ「まあ見舞うなら一人ずつ静かにという事で」
ドーセが見舞う時の注意を言う。
ロザリーはそれを聞いた後ジーナとカートとアドリアーナに付き添われ立ち上がり廊下に出た。
廊下では貫二郎とホスバッハ、そしてハインリーケと邦佳以外のウイッチがいた。
カーラ「あ、隊長」
ロザリー「みんな、大丈夫?」
カーラが気がつくと全員がロザリーを見る。
ジェニファー「はい、私たちは…」
ジェフ「黒田が重傷、アランと貫二郎がガラスの破片で切って軽傷。
　ホスバッハ少佐が臨時で今仕切ってる。」
ジェフが状況を彼女に伝えた。
周りの空気は重苦しい限りだった。
アドリアーナ「隊長から入ってください」
ロザリー「ええ…」
そして最初にロザリーが見舞うことになった。
ロザリーが部屋に入るとそこには邦佳のベッドの傍に座るハインリーケと邦佳の手を握る怪我をした貫二郎がいた。

ロザリー「ハインリーケさん、大野さん」
ロザリーは二人に声をかけると振り返った。
ハインリーケ「目を覚ましたかグリュンネ隊長、良かった…」
貫二郎「無事でよかったです、隊長」
二人共憔悴しきった様子で答えた。
ロザリー「私は大丈夫、貴方たちも無事でよかったわ」
貫二郎「無事、ですか…」
ハインリーケ「己の不甲斐無さに愛想が尽きるわ…」
二人共ショックを受けていた。
ハインリーケ「4時間前の格納庫での爆発、妾達は大食堂であんみつの給仕を行っていた。
その時、こやつは落下してきたシャンデリアから妾を守ったのじゃ。
大喰らいの上に命令も聞かず妾がどれほど怒鳴ろうと翌日にはケロッとしておる。
更には手当てが出る出ないのとつまらぬことで気にする癖に差し出がましい事をしよって、戦闘隊長である妾がこやつを庇う、それがあるべき姿であろう!?
妾はどうすればよい!?」
ハインリーケが絶叫する。
ロザリー「ハインリーケさ…」
アドリアーナ「姫様、交代だ。
ここにいてもできることはない手当てを受けて少し眠るんだ、大野もだ」
アドリアーナが気を遣い二人に言う。
ハインリーケは振り返る。
ハインリーケ「な、妾はここに…」
アドリアーナ「ネウロイが来たらどうするんだ戦闘隊長?
偶には仲間を頼れ」
アドリアーナの言葉に納得するとハインリーケはロザリーに連れられて出て行った。

だが貫二郎はまだ邦佳の手を握ったまま離れようとしなかった。
アドリアーナ「大野も少し離れたらどうだ？」
貫二郎「嫌です。目が覚めるまでここにいます。
僕には邦佳しかないんです、だから…」
アドリアーナ「そうか…」
貫二郎の固い決心を察するとアドリアーナが見舞う、少し話すと出て行き変わってカーロイが入ってきた。
カーロイはベットの傍で貫二郎がずっと邦佳の手を握っているのに気がついた。
カーロイ「貫二郎は離れる気がないみたいだな。
黒田、あんたいい男を手に入れたぞ、ここまで愚直な奴はなかなかいないぞ。」
カーロイが言う。
カーロイ「あんたが逝っちまったら多分このバカはお前の後を追うぞ？
犠牲者を増やしたくなけりゃ死ぬなよ。」
するとカーロイはタンスの上に置かれた豚の貯金箱の傍に1枚の１００ペンゲー札を置いた。
カーロイ「で、こいつは絵のモデルの先払いだ。
確か４０ペンゲーぐらいで1ドルだから2ドル５０セントぐらいしか価値はないがな。
じゃあな」
カーロイはそう言うと出て行った、変わってイザベルが入り見舞うと次に見舞ったのはアランだった。
アラン「黒田、俺はあんたの事はよく知らんがこのバカは口を開けばお前の事しか口にしないぜ。
だから死ぬなよ」
それだけ言うとトニーと入れ違いで出て行った。
トニー「誰がやったかは知らないが一つ言える、お前が死ねばこの部隊の代わりに俺が復讐してやる。
血を増やしたくなけりゃ死なない事だな」

トニーは一言だけ言うとカートと変わった。
カートは聖書を持っていた。
聖書を開くとある一説を読み始めた。
カート「ルカの福音書第２２章第５０節から。
そのうちのひとりが、祭司長の僕に切りつけ、その右の耳を切り落した。
イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。
そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。
それから、自分にむかって来る祭司長、宮守がしら、長老たちに対して言われた、「あなたがたは、強盗にむかうように剣や棒を持って出てきたのか。
毎日あなたがたと一緒に宮にいた時には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」。
次に同じくルカの福音書第７章第１２節から。
町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。
主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。
そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。
すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。
人々はみな恐れをいだき、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた。」
それはルカの福音書の一説だった。
読み終えると十字架を取り出し十字を切った。
カート「神よ、この者を死の淵より救い給え、そしてまた愛する者と語り合い笑い合う時を与え給え。
アーメン」

祈りをささげると立ち上がりカーラと交代で出て行った。
出て行くとカートはジーナに話しかけた。
カート「中佐、私が黒田中尉のようになった時、どうします?」
ジーナ「え?」
突然カートがジーナに聞いた。
カート「私は孤児院の生まれですから血のつながった家族なんていません。
養母はいますがそれだけです。
黒田中尉のように悲しんでくれる人はいませんから」
するとジーナは黙ってカートの手を握った。
ジーナ「フーヴァー少佐、そうなったら私が傍にいよう。」
そう言うと突如邦佳のいる部屋から見舞っていたマリアンが飛び出してきた。

ロザリー「黒田さん」
貫二郎「邦佳」
邦佳「隊長…?貫二郎…?」
数分後、意識が回復した邦佳の周りにウィッチが集まっていた。
邦佳の意識は未だぼんやりとしていたが声をかけてきたロザリーと貫二郎をしっかりと認識した。
ロザリー「良かった意識が戻った」
貫二郎「苦しいところはない!?」
邦佳に二人が話しかける。
邦佳「て、手当は…」
ロザリー「手当はもう終わってるわ」
邦佳「違うんです、傷病手当は出るんですか?」
「「は?」」
邦佳が傷病手当の事を聞いて全員が呆れた。
同時に安心もした。

アドリアーナ「いつもの邦佳だな…」
ジェフ「もうちょっと他に聞くことがあると思うんだが…」
二人が感想を言う。
この二人の感想がほぼ全員の感想と同じだった。
ロザリー「これでもう峠を越したのね？」
看護師「ドーセ先生の許可なく私見を述べることは…」
ロザリー「私が許可するわ、お願い」
ロザリーが看護師に邦佳の容態をお願いする。
看護師は迷いながらも伝えた。
看護師「折れた肋骨は銃器を使わない限り問題ありません。
　問題はお腹ですが…」
ロザリー「お腹？」
邦佳の私見に疑問を持つ。
肋骨の骨折は理解できるが何故腹部が出てくるか理解できない。
看護師「はい、黒田中尉は爆発直後残っていたあんみつ約４リットルを慌てて食べたようで」
ロザリー「ちょ、ちょっと待って、それじゃあ意識不明になったのって…」
看護師「消化不良による急性胃腸炎、それがドーセ先生の見立てです」
邦佳が意識不明になったのは急性胃腸炎によるものだった。
当たり前だが消化不良を原因とする胃腸炎で人は死なないのである。
それを聞いて貫二郎は糸が切れたように倒れ込んだ。
貫二郎「ははは…僕の心配は一体何だったんだろうか…」
ハインリーケ「この痴れ者が！」
ハインリーケは完全に怒っていた。
看護師「兎に角2、3日は安静、明日までは絶食、その後もしばらくはポリッジだけです。」
邦佳「えええ！ポリッジ以外の物食べさせてー！」
看護師が食事の事を伝えると邦佳が暴れる。

その光景に全員が呆れていた。
トニー「かなり元気だな」
アラン「こいつ入院させる必要ないだろ」
カーロイ「俺の１００ペンゲーと感動を返せ！」
マリアン「ジェフ、こいつを一発殴っていいか？」
ジェフ「俺の分も残してくれるならいいぞ」
マリアン「分かった、兎に角一発殴らせろ、な？」
ハインリーケ「その次は妾じゃな」
ジェフ「最後に俺だ」
カーロイ「俺も混ぜろ」
呆れを通り越して怒ったマリアン達が邦佳に迫る。
邦佳「隊長！」
ロザリー「困ったわ…止める理由が見つからない」
ロザリーは止めなかった。
次の瞬間邦佳の顔面に特大のストレートが炸裂した。
貫二郎「僕の寿命を返せ…１５年ぐらい縮んだんだぞ…」
貫二郎はベットに顔を突っ伏していた。

第11話：招かれざる客

深夜二時過ぎ、爆破による火事はようやく弱くなり始めていた。
その炎に照らされて近くに停められた第３５装甲師団所属のｓｄｋｆｚ２５１／３の傍に３人の士官の影があった。
ホスバッハ「ああ、何とか始末できそうだ。
助かった」
ノイベアト「どういたしまして」
ロッゲ「なに、この部隊は連合軍の要だ、お安い御用よ。」
ホスバッハと第１５２山岳重装備大隊大隊長のノイベアト少佐、そしてロッゲ少佐だった。
３人は燃え盛る格納庫を眺めながら話していた。
ロザリー「ホスバッハさん、状況は？」
ホスバッハ「少佐、見ての通りですよ」
ロザリーがやってくるとホスバッハは燃える格納庫を指さす。
格納庫の周りでは兵士達が消火作業と安全確認を行っていた。
ホスバッハ「無茶苦茶だ、爆発で弾薬と整備用のエンジンオイルに引火して大火災。
ガスと電気を緊急遮断して延焼は食い止めたがストライカーユニットは２機を除いて大破。
一部は全損だよ。
壊れなかったのはフーヴァー少佐のＦＭ―２と少佐のスピットファイアだけ」
ロッゲ「負傷者については移動不可能な重傷者以外はうちのトラックとか装甲車に乗せてセダン市内の病院に分けて運んだ。
外周部とセダン市内にも同じくうちの部隊が緊急展開して治安維持任務中だ。」
二人が状況を話しているとｓｄｋｆｚ２５１／３の車内の野戦電話が鳴った。
通信兵「少佐、第２中隊長から電話です」
ロッゲ「何？」

電話の主は第３５装甲擲弾兵連隊第Ｉ大隊第２中隊長だった。
第２中隊は基地の外で戦闘団〝ホスバッハ〟の第１中隊とともに警備を行っているはずだった。
ロッゲ「なんだ、何があった」
第２中隊長『はい、それがガリア軍諜報部のキーラ少佐と名乗る士官に率いられた諜報部の車列が通せと言ってきてるんです。
　そちらに連絡は来てますか？』
それは突然の来客の事だった。
ガリア軍の諜報部が突如来たことに混乱し上の判断を仰いだのだ。
ロッゲ「はあ？諜報部？そんな連絡が来るわけないだろ。
　ホスバッハ、あんたんとこにも来てるか？」
ホスバッハ「そんな連絡来てない」
ロッゲ「そんな連絡は来てない、追い返せ。
　それでも通せという気なら撃っても構わん」
第２中隊長『了解！』
ロッゲは野戦電話を切った。

外周部の警備拠点では第２中隊長が警備ポストに設置された野戦電話を切ると後ろにいる女性に話した。
第２中隊長「というわけですのでお帰りください。
　帰る邪魔はしないので」
キーラ「我々はガリア政府より正式な命令を受けている。
　追い返すとはどういうことかね？」
後ろに立っていた女性、諜報部のキーラ少佐は不満そうだった。
第２中隊長「言葉の通りですよ。
　上に連絡が来てない以上この先は通れないですよ」
キーラ「そうか、正式な連絡はまだだったか。
　では今日は帰らせてもらう。明日正式な連絡を受けてから来ますので」
不満そうだったがどうしようもないためキーラは車列に戻るとＵ

ターンして帰って行った。

翌朝、やっと鎮火し現場で作業が続いていた。
鎮火した後周囲には規制線が張られ早朝にやってきた憲兵と警察部隊が取り囲み、現場では兵士達が不発弾など危険物がないか捜索していた。
また周囲には数台のｓｄｋｆｚ１０／４が配置され上空警戒を行っていた。
本格的な捜査は現場の安全性の確認が完了次第とされた。
ホスバッハは格納庫の傍に置かれたドラム缶にもたれかかりながらコーヒーを飲んでいた。
既に戦闘団〝ロッゲ〟、〝ノイベアト〟は残地部隊として合計１個中隊程度の部隊を残して撤退した。
ホスバッハ「状況はどうだ」
兵士Ａ「今の所不発弾など危険物は見つかってません、爆発地点については恐らくあのあたりかと。」
ホスバッハ「そうか、ありがとう。
不発弾か爆薬らしきものを見つけたらすぐに連絡して退避しろ。」
兵士の報告を聞いていると後ろから車の音がし振り返ると昨夜やってきたガリア軍の車列がやってきた。
その車列の乗用車から一人の女性が降りるとホスバッハに話しかけた。
キーラ「ガリア諜報部のクリス・キーラ少佐だ、ホスバッハ少佐とお見受けする。
昨夜は失礼した」
ホスバッハ「どうもキーラ少佐、戦闘団〝ホスバッハ〟長のエーリヒ・フォン・ホスバッハだ。
ようこそセダンへ」

キーラとホスバッハは握手するがホスバッハは一切信用しようとは思わなかった。
キーラ「よろしく、今回の事件では我々ガリア軍諜報部が連合軍と協力して調査をすることになった。」
ホスバッハ「そうかい、だがあんたらの手を借りなくてもこっちでどうにかできるさ。
うちの作業の邪魔をするなよ、今危険物がないか調査中だ。
捜査はその後だ」
キーラ「分かっているとも。」
ホスバッハ「なら邪魔するな、ここじゃお前らが客人だからな。
引っ掻き回すなよ。」
ホスバッハは釘をさすと現場を別の士官に任せた。

ホスバッハ「プレッツ、どういうことだ?」
プレッツ「ガリア政府の圧力だ。
〝これはガリア国内で起きたテロ事件である以上ガリア政府も見過ごす訳にはいかない。
その捜査に我が国が介入できないのは如何なることか〟と連合軍に詰め寄ったそうだ。」
ロザリー「それって悪い事なのかしら?」
ロザリーの部屋にロザリー達５０６幹部５人が集まって協議していた。
プレッツはガリア軍諜報部の介入のあらましを伝えるがロザリーにはなぜそれが反発を生むのか理解できていなかった。
カート「大方、地位協定でしょうね。
地位協定で連合軍基地内の治安維持と捜査権は基本的に連合軍にありますから。」
プレッツ「そうだ、軍隊ってのは前例主義だ。

新しい事をあまりやりたがらない組織だが一度前例を作ってしまえばその次もその又次も介入してくるに決まってる。」

ジーナ「連合軍の独立性が損なわれる…」

プレッツ「そうだ、我々はこの国では〝表向き〟中立でなければならない。

まあ実際は全く違うがね」

ガリア軍諜報部の介入は連合軍のガリアにおける独立性が損なわれる可能性を意味した。

独立性が損なわれるとガリアにおける軍事活動に政府があれこれ口を出す可能性を生みそうなれば政治的理由という碌でもない理由で無用な軍事作戦を強いられる可能性もあった。

プレッツ「それともう一つが…」

もう一つの理由を話そうとするとプレッツは窓の外を見て、更にドアの外を確認するとカーテンを閉めた。

ロザリー「プレッツさん？」

プレッツ「これでいいだろう、これから話すのは機密情報だ。

言えば全員銃殺刑だ」

釘をさすと話した。

それを聞くと少ししてから全員が理解し頷いた。

プレッツ「ガリア政府内には我々連合軍を快く思っていない者も多い、そしてその一部はテロ組織又はテロ組織と繋がりのある人物や組織と繋がりを持っている。

実際一部の情報がテロ組織に漏れている可能性もある」

「「え！」」

プレッツの言葉に驚いた。

ロザリー「それって…」

プレッツ「諜報部のあの女には十分注意しろ。

それも含めてこの基地内にはスパイがいる可能性もある」

プレッツは釘を刺した。

プレッツ「まあ我々も手をこまねいてるわけではないのだがな。」

最後にプレッツは含みのある言葉を言った。

爆破事件から約３６時間後のガリア南部ペルピニャンの町中に一台のシムカ５が路上駐車されていた。
そのシムカに新聞を持った男が近づくと開けられた窓の中に新聞を投げ入れた。
乗っていた二人組の男は受け取ると何も言わずに窓を閉めた。
新聞を開けると中から数枚の書類とネガが出てきた。
その書類とネガはそれから何人もの人の手を介されパリへと運ばれた。

爆破事件から５日後、セダンのＡ部隊は未だ復旧作業が続いていた。
ユニットは全て修理され部隊は戦闘能力を回復、更にこの機会に戦闘団〝ホスバッハ〟は解散され代わりに第５０６／１空軍大隊と第５０６／１高射砲兵連隊が配属された。
第５０６／１空軍大隊は３個山岳猟兵中隊と１個降下猟兵中隊、そして１個戦車小隊と２個装甲車小隊の装甲偵察中隊からなる警備部隊で装備も戦車は中古のⅢ号戦車５両、装甲車小隊も中古のｓｄｋｆｚ２５１のＣ型とｓｄｋｆｚ２３２、ｓｄｋｆｚ２２２などの旧式装甲車主体の部隊だった。
装備では劣化したが部隊の兵員自体は陸軍部隊からの抽出で戦闘能力は変わらず、第５０６／１高射砲連隊は４個大隊編成で８８ミリ高射砲や１０５ミリ高射砲だけでなく陣地設営式の１２８ミリ高射砲、４０ミリ高射機関砲など合計１３２門を有する部隊で定数１４０門に対して充足率９４％、兵員定数でも１０６％という優良部隊で事実上戦闘能力を教化されていた。
さらにこの高射砲連隊の陣地設営の為急遽陸軍から建設工兵大隊

と国家労働奉仕団の人員が派遣され工事が開始され事実上防衛能力自体は飛躍的に向上した。
混乱も収まり邦佳の怪我もある程度回復しＡ部隊は日常を取り戻しつつあった。
貫二郎「ふむ、スイングジャズ…
今度レコード買おうかな」
カーロイ「何見てるんだ？」
朝食を食べながら貫二郎はレコード会社のカタログを見ていた。
見ていたのはリベリオンのスイングジャズのページだった。
貫二郎「レコードのカタログですよ。
Ｂ部隊の人が聞いていたスイングジャズのレコード買おうかと思って」
カーロイ「スイングジャズか、ルイ・プリマのシング・シング・シングとかが定番だな。
何枚かレコード持ってたよ」
貫二郎「羨ましいですね。
こっちはアメリカ文化は敵性文化だ！なんて言って英語狩りとかやってましたよ。
まあ酷いですよ、父の知り合いの軍人の殆どが戦争が始まってから英語のできる人材が足りないからもっと教育を強化してくれとかよく言ってましたよ」
貫二郎が日本での敵性語狩りの話をする。
それにカーロイはあからさまに不愉快になる。
カーロイ「そいつら馬鹿だね。文化に優劣もクソもあるかってんだ。
文化に優劣があるならとっくの昔に人類は滅んでるよ」
貫二郎「確かに」
カーロイ「ああ。親父が言ってたよ『文化とか芸術に優劣をつけたり金をつけるのはバカだ。本来は全て平等に値段など付けられる代物じゃない』って。」
貫二郎「納得ですね」

二人共芸術に対して興味を持っていた人物であるため芸術雑談に花を咲かせていた。
その斜め向かいではイザベルが何故か朝食のアスパラガスを残していた。
邦佳「あー、アイザック君駄目だよ～
アスパラガス美味しいのに」
イザベル「好き嫌いじゃないんだよ…呪いさ」
邦佳「え？」
イザベル「ご先祖様が8本足の八木に呪われて以来、代々我がバーガンデール家の女子はアスパラガスに触れるとおぞましい姿に変身してしまうんだ…
僕が男の子として育てられたのもそれが関係してね」
邦佳「ほんと!?」
イザベルが真面目な口調ででたらめを言う。
邦佳は半分信じるが突如二人共頭に一撃を食らう。
ハインリーケ「単なる好き嫌いじゃ！
いちいち本気にするな！」
ホスバッハ「生意気言わずに全部食え！」
ハインリーケとホスバッハが突っ込んだ。
イザベル「…どうして今の話、真に受けるかな、黒田さん」
邦佳「え～嘘なの…？」
邦佳の反応に呆れていた。
その一部始終を見ていた貫二郎は苦笑いしていた。
貫二郎「邦佳、すぐ信じちゃうから…」
カーロイ「本当ならアスパラガス無理矢理口に詰めたんだが」
カーロイもジョークを飛ばした。
ハインリーケ「そなたもいい加減こやつのジョークに慣れたらどうじゃ？」
邦佳「だって、アイザック君真顔なんだもん」
ハインリーケ「ならば騙されるたびに罰金じゃな。」
邦佳「それだけは！」

話していると、突如サイレンが鳴り響いた。
ハインリーケ「警報!?」
ホスバッハ「何が起きた！」
ロザリー『この基地へ低空低速の飛行物体が接近中』
未確認の航空機が接近していた。
テロ事件の直後という事もあり新たな攻撃の可能性もあった。
ホスバッハ「セダンの防空司令部に問い合わせろ、姫さんとバーガンデール、カーロイは出撃しろ！」
対応を指示するとホスバッハはセダンの防空司令部直通回線を使い問い合わせている間にハインリーケとイザベルが出撃した。
ホスバッハ「こちら５０６、セダン司令部、現在西から接近中の航空機の情報はありますか？
え…？」

ハインリーケ「見つけた、あれじゃな」
イザベル「戦闘隊長、撃墜許可を」
ハインリーケ「やめんか！あれは…」
カーロイ「複葉機？」
出撃して１５分後、ハインリーケ達は接近中の航空機を視認した。
ハインリーケ「ソードフィッシュＭｋⅡ」
接近中の機は大戦中の名艦上雷撃機にしてストリングバッグ（網袋）と言われたほど汎用性に富んでいたフェアリー・ソードフィッシュだった。
するとソードフィッシュから無線が来た。
『あーあー、聞こえるかね？
こちらブリタニア政府公用機』
イザベル「この声は…」
無線の主の声にイザベルは聞き覚えがあった。
無線の主はさらにジョークを飛ばした。

『ウィッチの皆さん近くのガソリンスタンドを知りませんかな?』
カーロイ「一つ知っているがオクタン価が６０の安物しかないね」
ハインリーケ「…所属を明らかにされよ」
ハインリーケが所属を問い合わせる。
『任務の秘匿性によりパリの司令部に確認されたい。
そしてできればセダンまでのエスコートをお願いしてもよろしいかな?』
カーロイ「残念ながら男のケツを守る趣味はないがよろしいか?」
『私だってできればそこの淑女お二人にエスコートされたいのだが』
セダンまで護衛を要求してきた、すると突如ホスバッハが無線に割り込んだ。
ホスバッハ『こちら鷲の巣、こちら鷲の巣、姫様、接近中の機はブリタニア政府の機。
飛行目的に関しては不明なれど重要人物が搭乗しているらしい』
カーロイ「了解、高官輸送機ってことか。それにしてもちゃちだが…」
カーロイはソードフィッシュを怪しみながら眺める。
そしてイザベルはものすごい嫌そうな表情をした。

第12話：親の心子知らず

「ボンジュール、メドモワゼール！」
イザベル「やっぱり」
ソードフィッシュが着陸後、降りてきた老人と少女を見てイザベルはあからさまに不機嫌になる。
その老人はイザベルを見ると反応した。
「おお～久しぶりだ、我が子よ！」
「「我が子!?」」
老人はイザベルに抱き着いた。
老人はイザベルの父親だった。
アドリアーナ「父親って言うと、伯爵？」
伯爵「伯爵か、祖国をネウロイに蹂躙されて以来その称号は封印した。
だから今はただの娘に甘々のダディだよ～」
イザベル「や・め・て」
伯爵「人前じゃ恥ずかしいのかい？」
イザベル「人前じゃなくてやめて」
伯爵はイザベルに抱き着くがイザベルは徹底的に嫌がる。
邦佳「あんなアイザック君初めて見た。」
カーロイ「ありゃ反抗期だな。」
イザベル「やっぱり撃墜するべきだった」
ハインリーケ「冗談であろうな？」
イザベルが死んだ魚の目をしながら呟く。
邦佳とカーロイは二人のやり取りを優しく見ていた。
そのやり取りをしている一方ホスバッハはもう一人の同行者に気がついた。
ホスバッハ「貴様は何者だ？」
クローディア「あたし、ル・タン紙の記者でクローディアです。
伯爵に頼んで付いて来ちゃいました」
キーラ「ほう」

もう一人はガリアの中道左派系新聞であるル・タン紙の記者のクローディアだった。
クローディア「今回は是非独占取材をお願いしたいと思いまして。」
ウィトゲンシュタイン大尉の日常を追うコラム！
その名も『今日もわがままお姫様！』
どうですか!?」
ホスバッハ「身分証は？」
クローディア「え？必要だったんですか？」
ホスバッハ「許可は？」
クローディア「ありません！」
ホスバッハ「事前連絡」
クローディア「突撃取材なのでありません！」
ホスバッハ「分かった、憲兵！こいつをスパイ容疑で拘束しろ！」
憲兵「は」
クローディア「えええっ!?」
ホスバッハは事情を聴くと憲兵を呼びクローディアは拘束され猿轡を噛まされ、目隠しをされ、ロープで巻かれた後手荒にトラックの荷台に乗せられセダンの憲兵司令部に運ばれた。
その後、数日後に保釈金が支払われ解放された。

伯爵「こちらの火事の話を聞いてね、取るものもとりあえず飛んできたのだよ」
ロザリー「よく許可が取れましたね」
少しした後、伯爵を囲んでウィッチ達は茶会を催していた。
伯爵「なあに、視察という名目でちょいとね。
まあ、後で膨大な量の報告書を提出しなければならないのだがね…」
イザベル「どうせ自分じゃやらないくせに」
伯爵は表向き視察名目で来ていた。

だがほぼ抜き打ちでありパリも行われる6時間前にブリタニア大使館から通告があったような状態だった。
ホスバッハ「せめて次からは最低24時間以内に通告してくれないと困ります。
我々としても警備の都合など色々ありますから」
伯爵「そうですな、次からは気を付け事にします、ホスバッハ少佐」
ホスバッハが事前通告の件で文句をつける。
あまりにも通告が遅く、506がこの件を正式に知ったのは伯爵が着陸後にパリに問い合わせた時だった。
伯爵「無論、心配できたわけではないよイザベル。
ベルギカの摂政からお前をぜひ副官に欲しいとお誘いがあった。
リベリオンの首都ワシントンD.Cの勤務になるから危険もない」
邦佳「えと、せっしょう?」
ハインリーケ「簡単に言えば国王に次ぐ地位ある人物じゃ」
カーロイ「一部例外もあるが。
いい話じゃないか、出世コースまっしぐらだ」
イザベルに伯爵が摂政の副官打診の件を伝えた。
摂政は基本的に国王に次ぐ地位ある人物という認識だが一部例外としてハンガリー王国の摂政ホルティ・ミクローシュ提督やスペインのフランシスコ・フランコ・バアモンテのような国王のない摂政という場合もある。
ハンガリーの場合は国王となる予定であったカーロイ4世(ハプスブルク＝ロートリンゲン家のオーストリア＝ハンガリー帝国皇帝カール1世)、更に実際にハンガリー国王として擁立されたオーストリア大公ヨーゼフ・アウグスト・フォン・エスターライヒ(ヨーゼフ・アントン大公(神聖ローマ帝国皇帝レオポルト1世の7男)の孫)をハンガリー国王として即位させることを第一次世界大戦後の戦勝国が拒否、そのため国民の人気の高かったホルティを摂政とするしかなかった事情があり、スペインの場合はフランコが47年に国号を王国

に変更、彼自身が終身摂政として終身元首としての地位を確立するという役割があった。
そして摂政の副官に就任するという事は出世コースを意味した。
伯爵「そろそろお前も軍での生活を終わりにして…
イザベル「父さんには何も見えてないの？
ネウロイとの戦いは何も終わってないんだよ？」
イザベルはそれに反発する。
伯爵「お前は知っているかな、この５０６がブリタニアで何と呼ばれているか？
タイタニック、処女航海で沈んだ船だよ。
名誉隊長であられる少佐には悪いが残っていても溺れるだけだよ。」
カーロイ「タイタニック？オリンピックの間違いじゃないか？」
カーロイがジョークを言う。
ブリタニアでは５０６の編成作業は滞り気味に見えこのまま暗礁に乗り上げると思われていた。
実際編成は五月雨式で編成率は８割、部隊の扱いも今の所は「限定的攻勢と局所的防衛にのみ使用可」という扱いを受けていた。
このような事態になった背景に連合軍とガリア政府のぎくしゃくや政治的妥協もあるが物理的な面で言えば西部戦線の再編で大規模な部隊の再編とインフラ復旧に物資と人員が割かれたため後回しになったという面もあった。
だが現在再編もひと段落しインフラ復旧をガリアの民間企業に外注することでコスト削減を行ったため５０６の編成作業はかなりの速度で進んでいた。
イザベル「僕は、僕は卑怯もになる気はないから！」
邦佳「ちょっと！アイザック君！」
カーロイ「おい！」
イザベルは立ち上がると出て行ってしまった。
伯爵「はぁ、困った子だ…」

それから少しして、イザベルは基地の一室に置かれたピアノを弾いていた。

カーロイ「イザベル、ここにいたのか」

するとカーロイがやってきた。

カーロイ「ピアノ弾けたのか？」

イザベル「まあね」

カーロイ「ちょっと貸せ、一曲弾いてやる」

カーロイはイザベルを退けるとハンガリー舞曲第５番を弾き始めた。

弾き終わるとイザベルは腕を褒めた。

イザベル「僕より上手いね」

カーロイ「それはどうも、ミスイザベル・バーガンデール。」

彼はもったいぶった口調で返すとカーロイは立ち上がり席をイザベルに譲った。

カーロイ「どうぞ、レディーファーストだ。」

イザベルが席に座ると突然聞いた。

イザベル「ねえ、僕って恵まれてると思う？」

カーロイ「心配性な親父さんに中々の資産家と見える、悪くはないと思うぞ」

彼女の問いに答える。

イザベル「小さい頃、何でも買って貰えたよ。

本もお菓子も玩具も、欲しいって言えば幾らでも。

でもそれはみんな自由とイザベルって名前を奪われた代償なんだ。

魔法力が発現してから父さんたちは僕がベルギカという小国の外交に利用されるんじゃないかと思って女の子ってことを隠してずっと屋敷から出さなかったんだ。

おかげでたくさん本は読めたけど」

イザベルは自分の過去を話した。

小さい頃は外交に利用されると思い屋敷に閉じ込められていたのだ。

カーロイ「そうなのか、じゃあ黒田とかに〝アイザック〟って言われるの嫌か？」

綽名のアイザックと呼ばれるのが嫌いかと聞いた。

だが彼女は否定した。

イザベル「ううん、〝アイザック〟ももう僕の一部だからね。

家を出たのも憧れの外の世界を見てみたかっただけ。

軍に入ったのは食べるのに困らないし、それに、怖かったから。

バーガンデール家の人間は臆病者だって後ろ指をさされるのがね。

戦いで死ぬより蔑まれることの方が怖いよ」

イザベルは哀しげに語った。

するとカーロイが頭を撫でた。

カーロイ「強いな、イザベルは」

イザベル「へ？」

カーロイ「俺は子供の頃から美術商の親父に連れられて世界中を回りそれこそ名だたる芸術家、作曲家、演奏家、作家、詩人、評論家、哲学者、学者に会ってきた。

親父は家に閉じ込められて暮らすことがこの世で最も不幸な事だと言っていた。

だから家庭教師を無視して俺を連れて世界を見せた。

トゥーランドットの初演も見に行ったし、パリではピカソのアトリエに行き作品が生まれる過程を目撃したよ。

だけど親父は俺を芸術家にも美術商にもしたがらなかった、親父は美術商は芸術を冒涜するために生まれた職業だって言って憚らなかった。

『芸術に値段をつけるとは何事か、芸術とは誰が描いたか、誰が作ったか、それを誰が幾らで買ったか、それが幾らしたかで評価されるものではない！

だが愚かにも殆どの人間は芸術を値段や描いた者でしか評価しない、そしてその芸術に優劣をつけるのだ。

あらゆる芸術とは本来その作品の芸術性でのみ評価されるべきであり、値段など付けられるものでもない。

そして人類の偉大な残すべき遺産に値段をつける美術商はこの世で最も芸術を愚弄している。』

ってな。自分の仕事を憎む変人だったよ。」

カーロイは自身の思い出を語った。

美術商の父親に連れられて世界中の名だたる芸術家に会ってきた彼だが彼の父親は自身の仕事を憎み嫌っていた。

カーロイ「だから芸術に関わる仕事を禁じられた。

それで軍人になった。

こう見えても出世欲は人一倍あるんでね、出世は男の本懐だ。

そんなわけで俺は死にたくはない。祖国の為と言われてもね。

なんせ死ねば出世できない。

変な話だがこの世に死にたい人間、死を恐れない人間なんていない。

いるとすれば自殺志願者だけだ。」

カーロイが軍人を目指したのは出世欲だった。

俗物的な理由だが派閥や人間関係が大きな影響を与える通常の官僚とは違いある意味実力主義である軍の方が実家が名門貴族だが美術商の彼に向いていた。

イザベル「…何でそんな事話したの?」

ふとイザベルが聞いた。

彼は帽子を深めに被ると答えた。

カーロイ「〃何で?〃世の中理由のないことの方が多いぜ?

強いて言えば、本質的には君と俺は同じような人間だからだ。

例えジョークと虚言で固めようとも中身を推察すること

はできる。
　その中身を侮蔑する訳ではないがね」
カーロイは鋭い言葉で切り込むと立ち去った。
その言葉にイザベルは得体のしれない恐怖を感じるのだった。

伯爵「おや、君はオストマルク軍の…」
カーロイ「伯爵、お帰りですか？」
少し後、カーロイが廊下を歩いていると伯爵とばったり出会った。
伯爵は荷物を纏めて帰ろうとしていた。
伯爵「ええ、もうロンドンに帰ろうかと思いましてね。
　あの子に嫌われてはここにいる意味もないですしな」
カーロイ「そうですか、荷物をお持ちしますよ」
伯爵「ありがとうございます」
カーロイは伯爵の荷物を持つ。
伯爵「あの子の言うことも分からなくもない、ウィッチの使命を全うするのは立派な事だ。
　ただ、私も戦争を経験してましてね、あの子には危険な目に遭ってほしくない一心でしたが…」
カーロイ「そういうものですよ、親心というのは。
　それに彼女はそういう年頃ですから。」
伯爵とカーロイは会話しながら歩いていた。
伯爵「君のご両親は軍に入ることに反対しなかったのですか？」
カーロイ「私はこう見えても空軍士官学校上がりでして、反対とは無縁でしたよ。
　今は前線部隊の士官ですが数か月前までは参謀本部の将校でした。
　危険とは無縁でしたが生き馬の目を抜く熾烈な競争社会、何人もの同僚や級友、後輩、先輩が体や心を病んで入院したりしたのを知ってます。

だからこそ彼女は中央に送るべきではないですよ。」
カーロイが自分の考えを伝えた。
伯爵「確かに」
カーロイ「ましてや彼女はまだ子供です。
多感な時期にストレスの多い場に置くべきではないでしょう。
ここも相当なものですが中央の比ではないですよ。
どうです?ディナーでも、ここのシェフの腕は素晴らしいですよ」
伯爵「ではいただきましょうか」
彼は伯爵をディナーに誘った。

翌朝、伯爵は帰ろうとしていた。
伯爵「では皆さん、お騒がせしました。
元気でな、マイハニー」
イザベル「消えて」
伯爵はイザベルに挨拶するが彼女は無視した。
ホスバッハ「カーロイ、黒田、大野は伯爵を護衛しろ。
どうにも嫌な予感がする」
カーロイ「嫌な予感?」
ホスバッハ「前線士官の勘って奴だ」
ホスバッハは黒田と貫二郎とカーロイに伯爵の護衛を命じた。
ホスバッハは長く前線士官であったため所謂勘というものがあった。
ホスバッハ「出なければそれで万々歳だ。黒田を連れて行くのはリハビリだ。」
貫二郎「出なければいいですね」
ホスバッハ「ああ、出なければ。」

伯爵『すまないね、カーロイ大尉、黒田中尉、大野少尉。
私の為にたいそうな護衛をつけてくださって』
カーロイ「命令ですからね、それに伯爵に万が一があれば彼女も悲しみますし」
離陸後、３人はソードフィッシュを護衛しながら話していた。
伯爵『うちの子に君のような戦友がいてうれしい。
どうだ?うちに婿に来ないか?』
突然カーロイに伯爵が婿に来ないかと誘ってきた。
彼はジョークだと思い返す。
カーロイ「ええ、戦争が終わって食い扶持が無けりゃお世話になりますよ」
伯爵『本気で考えているのだよ。
君のような人を誰かの婿にするのは惜しい、イザベルとも気が合うようだし駄目か?』
カーロイ「本人に聞いてくださいよ、男と女の仲ってのはこの世で…」
一番難しい事、と言いかけたその瞬間、カーロイは背後に何かの気配を感じ上を見た、そこにはクラゲとエイのようなネウロイの二体がいた。

その頃、基地ではイザベルが浮かない表情をしていた。
そしてアドリアーナが昨日伯爵と共に来た記者の事を聞いた。
アドリアーナ「ところであの記者はどうしたんだ?」
キーラ「憲兵が拘束してセダンに運んだそうだ。
今頃拘置所に放り込まれてる頃だろう。」
ホスバッハ「上は今朝早くに新聞社に抗議したそうだ。
正規の手順を踏んでなかったから当たり前だ」

記者は既に留置所に繋がれていた。
アドリアーナ「見たかったもんだな『今日もわがままお姫様！』」
イザベル「そーだね」
アドリアーナ「うわの空だな」
アドリアーナが隣に座るイザベルに話しかけるが彼女はうわの空だった。
アドリアーナ「それなら黒田たちと一緒に見送りすればよかったのに」
イザベル「どうして僕が…」
言いかけたその時、突如サイレンが鳴り響いた。
レーダー手『北北東２２０キロ付近の地点で中型ネウロイ２機とカーロイ隊が交戦中。』
ホスバッハ「出たか！」
レーダー手『ソードフィッシュも交戦域内に入る模様です』
ホスバッハ「ハインリーケ、イザベル、アドリアーナが迎撃に向かえ！
万が一があれば首が吹っ飛ぶだけじゃ済まないぞ！」

カーロイ「クソ、黒田は伯爵の援護、伯爵は左に急旋回して降下しろ！
給料分だけ働けよ！」
伯爵『うむ！』
邦佳「了解！」
カーロイ「大野、伯爵が離脱するまで食い止めるぞ！」
貫二郎「了解！」
カーロイ「パガニーニを弾くより楽だぞ！」
カーロイと貫二郎はネウロイの攻撃を防ぎながらネウロイを攻撃していた。
クラゲのようなネウロイは攻撃をする一方、エイのようなネウロイ

は全く攻撃してこないように見えた。
カーロイは先に攻撃しないエイを潰そうと近づくが突如不快な音が響いた。
カーロイ「く、ひっでえ音だ…俺がこっちをやって正解だな」
カーロイは悪態をつき同時に固有魔法の為このような攻撃を食らえば大変な事になる貫二郎を当てなくて良かったと思った。
すると攻撃の一部が邦佳の方に向かい邦佳はシールドを張る、だが跳ね返った攻撃の一部がソードフィッシュの翼の一部を破壊した。
邦佳「しまった！」
伯爵『操縦が…！』
ソードフィッシュは落下し始めた。
邦佳は咄嗟に機体の下に周り落下を止めようとする。
伯爵「黒田さん！」
邦佳「上がれえええええ！」
だが邦佳一人では機体を支えられず落下し続ける、すると別の手が翼を支え、落下が止まった。
ハインリーケ「つくづく損な役回りが得意じゃな？」
邦佳「大尉～！」
ハインリーケ「ほれ、気を抜く出ない」
ハインリーケが救援に来たのだ。
上ではカーロイと貫二郎にアドリアーナとイザベルが加勢していた。
伯爵「大尉殿！私はどうなっても構わないどうか娘を…」
ハインリーケ「案ずるな、あやつは立派なエース。
伯爵も刮目するがよい、そなたの娘の雄姿を」
心配する伯爵にハインリーケが語る。
一方上空ではイザベルがカーロイ達と合流していた。
カーロイ「イザベル、ヴィスコンティ、良かった。
俺とイザベルがエイを潰す、お前と大野の二人でクラゲを潰せ、いいな？」
カーロイは手短に指示すると上昇、エイの方に向かった。

カーロイ「イザベル、エイは近づくと不快な音を出してくる、気をつけろ。」
イザベル「了解！」
カーロイ「お前の親父さんにカッコいいところ見せるチャンスだぜ？」
二人は近づくと腹に回り込みカーロイがゲバウエル航空機関銃を乱射する。
そしてコアを見つけた。
カーロイ「あったぞ！今だ！撃て！」
イザベルはコアを狙うとボーイズを撃ち、破壊した。
同時にクラゲの方もアドリアーナと貫二郎が破壊した。
カーロイ「やったじゃねえか！」
イザベル「わ！」
戦闘が終わるとカーロイが手荒くイザベルの頭を撫でた。
カーロイ「親父さんにお前が一流のエースだって証明できただろ？違うか？」
イザベル「そうだけど…」
カーロイ「照れるなよ、褒めてるこっちが恥ずかしいじゃねえか」
べた褒めするカーロイに彼女は照れてしまった。
カーロイが褒めていると後ろから邦佳が呼びかけてきた。
邦佳「アイザックく～ん！」
振り返ると邦佳とハインリーケがソードフィッシュを支えながら飛んできた。
そして元気そうに手を振る伯爵の姿を見ると邦佳に向かって抱き着いた。
イザベル「黒田さん！ありがとう父さんを守ってくれて。
どんなに感謝してもしきれ…」
カーロイ「イザベル…放してやったらどうだ？」
イザベル「え？あ」
抱き着いて感謝していると突然カーロイに言われて気がついた。
彼女は強く抱きしめすぎて治りかけの邦佳の肋骨の事を忘れてい

た。
邦佳「ろ、肋骨が…」
イザベル「あ、ごめん」
イザベルは邦佳を離すと謝った。
伯爵「うむ、やはりカーロイ大尉はふさわしいな」
イザベル「何に？父さん」
伯爵が突然言ったことにイザベルが聞いた。
伯爵「何ってイザベルの婿にだよ。
イザベル、カーロイ大尉のような人はなかなかいない、どうだ？」
イザベル「え？えええええええ!!!!」
伯爵の言葉に彼女は生まれて初め!!!!て出すほどの大声を出した。
その後も１０日程伯爵は基地に滞在したがその度にカーロイとイザベルの縁談を纏めようとし等々二人が折れ消極的ながらも縁談の事を考えるようになった。

第13話：演劇の訳

1945年3月初頭、パリ

連合軍ガリア軍行政司令部の参謀部の一室にプレッツ、ホスバッハ、そしてガリア解放後に第501猟兵大隊を拡充した駆逐戦隊群〝ガリア〟隊長アドリアン・フォン・フェルカーザム少佐、そしてディールガルテン集まっていた。

ディールガルテン「君たちがここに集まって貰ったのは他でもない。

例の事件の犯人の逮捕の為だ。」

ホスバッハ「ハンス、その犯人の目星は付いているのか?」

集められたのは506のテロ事件の犯人の摘発の為だった。

ディールガルテン「ああ。既に完璧な物証を手に入れている、片方だけだが」

プレッツ「片方だけ?」

ディールガルテン「実行犯じゃない方だ、首謀者に繋がる人物だ。

残念ながら実行犯の目星は付いているが確定じゃない、だから先にそいつを逮捕する。

それにフェルカーザム少佐の駆逐戦隊群〝ガリア〟を投入する」

実行犯は見つかっていなかった。

だが実行犯と首謀者に繋がる人物は見つかっていたのだ。

ホスバッハは理解し隣に立つフェルカーザムを見る。

ホスバッハ「彼がフェルカーザム少佐か?」

フェルカーザム「どうも、ホスバッハ少佐」

ディールガルテン「そうだ。元ブランデンブルク部隊所属で例のドーバー事件でも活躍、我が軍最高の特殊部隊指揮官だ。」

プレッツ「ブランデンブルクですか」

彼がフェルカーザムの紹介をする。

フェルカーザムは軽く会釈した。

ホスバッハ「で、誰を捕まえるんだ?」

ディールガルテン「それなんだが…」
ディールガルテンはある書類を見せた、その書類には摘発作戦「ヴィジラント・リゾルブ」（油断なき解決）と題された作戦だった。

その1週間ほど後、セダンに何故かAとBが勢揃いしロザリーが語りかけていた。
ロザリー「わざわざB部隊の皆にも来てもらったのは他でもない、今506は危機を迎えています。
これを打開するために劇をします！」
「「はぁあああああ??」」
アラン「寝言は寝て言ってくれ」
カート「それ軍人の仕事ですか？」
トニー「劇団をやれって？御免だね」
ジェフ「流石に俺もこれは無理だ。そもそも仕事が違うだろ」
貫二郎「いや、軍楽隊なら理解できますけど劇？」
カーロイ「俺達が三文芝居して笑い者になれってか？
死んでも嫌だ」
ホスバッハ「グリユンネ少佐を精神異常としてこの場で指揮権を剥奪したいんだが」
ロザリーの発言に男衆は全員反発、全員の言い分が「それは軍人の仕事ではない」であった。
ホスバッハはロザリーを発狂したとして指揮権の剥奪を提案するほどだった。
この気が狂ったような提案が生まれた訳は3日前に遡る。

3日前、ウィッチ達がキーラとこの数日前パリに召喚されて以降何故かキーラと距離を取っていたホスバッハとプレッツに集められて

いた。
キーラ「B部隊にも声は届いているかな?」
ジーナ『問題ない』
キーラは無線を使い話がBにも聞こえるようにしていた。
Bとの通話を確認すると本題を始めた。
キーラ「さて、良いニュースと悪いニュースがある、どちらから聞きたい?」
プレッツ「どちらからでも?どうせそちらと我々の話は同一でしょうから」
キーラが聞くとプレッツがタバコをふかしながら返事をする。
キーラ「ではいいニュースからしよう。
例の格納庫の爆発の原因が判明した。
当日の午後に到着した物資の中に爆薬は仕掛けられていた。
時限装置付きの可塑性爆薬、ノーベル808だ。」
それは爆発原因の事だった。
使用されたのは連合軍でも使われている可塑性爆薬ノーベル808だった。
プレッツ「それは我々の結論と同じだ。
使用された爆薬はノーベル808約5キロを使用した爆弾。
恐らく梱包爆薬にパッケージ化された物だろう。」
ロザリー「ブリタニアのSOEが使う?」
ホスバッハ「ノーベル808はブリタニア生まれだが既に各国に供与され使用されている。
カールスラント軍もロマーニャ軍も扶桑軍もリベリオン軍もな」
マリアン『リベリオンが破壊工作なんて汚い真似をするわけないだろ!』
アラン『なぁ、俺が昔使ってた爆薬あそこ製だぞ』
カート『要らない事を言うな。面倒にしてどうする』
マリアンがリベリオンの犯行を否定するがそれにアメリカのOS

Sの協力で破壊工作をしていたアランが首を突っ込もうとするがカートが止めた。
カーロイ「で、それがあんたの言う良いニュースとやらかい？」
キーラ「悪いニュースはその物資に外部の者が接触した可能性がない事。
　つまり整備班員とA、B両部隊のウィッチの中に犯人がいるという事だ。」
キーラが犯人が彼女たちの中にいる可能性を伝えるがそれにすぐにホスバッハとプレッツが反論した。
プレッツ「いや、その可能性についてはウィッチに関しては排除できる。」
ホスバッハ「既に犯人の目星はある程度は付いている」
キーラ「ほう、それはどういうことかね？」
キーラが彼らに聞いた。
プレッツ「簡単だ、例の物を持ってきてくれ」
プレッツはある指示をするとドアが開き物証としてぐしゃぐしゃに潰れたストライカーユニットメッサーシャルフBf109G―11の点検ハッチの一部を憲兵が持って来た。
憲兵はそれを中央のテーブルに置くと退出した。
そしてそれを示しながら彼らが説明を開始した。
プレッツ「これは犯行現場で発見された残骸だ。
　爆弾が仕込まれていた物資の中で爆弾のすぐそばに置かれていたメッサーシャルフBf109の点検ハッチなのだがここを見てもらいたい。」
彼は焼け焦げた点検ハッチのある部分を示した。
ウィッチ達は近づき観察する。
邦佳「あれ？文字みたいなのが書いてある」
ホスバッハ「そうだ。モンロー効果によるものだ。」
よく見ると残骸には文字のようなへこみがあった。
邦佳はホスバッハの言ったモンロー効果という言葉に首をかしげる。

邦佳「モンロー効果？」
ホスバッハ「一般的にモンロー・ノイマン効果とも言われる現象だが爆薬にくぼみをつけ、くぼみをつけた後ろから燃焼させるとくぼみから強い衝撃波を発生させ反対側に高い穿孔力が発生する現象だ。
その現象によってこの残骸に爆薬に刻まれていた文字が転写した。」
モンロー効果を説明する。
モンロー効果は物理化学の現象でこの現象を発展させたものが成形炸薬だった。
プレッツ「そしてその文字を解析したところ、こういう文字だと判明した。」
プレッツは後ろの黒板にある文字を書き始めた。
書き終わると説明した。
プレッツ「リベリオン　フロリダ　セントピーターズバーグ
フェイス＆クベック　９／２６／１９４４
２６７８９―１００４５―６７９
これはリベリオン南部の化学工業会社ディキシーケミカルインダストリーの傘下、フロリダ州に拠点を持つフェイス＆クベック火薬製造株式会社セントピーターズバーグ工場で１９４４年９月２６日に製造されたものだと判明した。」
キーラ「つまりリベリオン製という事か」
ハインリーケ「何じゃと！」
製造された爆薬がリベリオン製だという事に全員が顔面蒼白となる。
マリアン『私たちがやったって言うのか!?』
プレッツ「これで結論ではない。」
焦るマリアンにプレッツが諫めホスバッハが説明した。
ホスバッハ「この爆薬が製造された日にこの工場で生産された爆薬は全てカールスラント陸軍に供与された。
カールスラント軍にもこの番号の爆薬を受領したという書類が残っている。」

ハインリーケ「つまりカールスラントの仕業じゃと言いたいのか!?」

ホスバッハ「違う、この爆薬はその後ヒスパニアでしばらく補給物資として保管された後供与された時の箱のまま第２５０装甲擲弾兵師団の第２５０装甲工兵大隊に補給物資として４４年１２月３１日に補給、梱包を解き工兵用の梱包爆薬としてパッケージ化した後ガリアへの移動途中の４５年１月に何者かに強奪されたことが確認されている。」

キーラ「つまり君たちはその強奪した誰かが犯人と言いたいのかね？」

この爆薬は数か月前、何者かに強奪された爆薬だった。

つまり犯人は強奪犯と同一組織であるというのだ。

プレッツ「その通りだ、強奪したのは恐らくガリア王党派だろう。数週間前、同じ爆薬が使用されＵＴＡ航空機が爆破されている。

その犯人を取り調べたところ王党派の犯行だと〝自供〟した。

また詳細は言えないが我々にはこの事件に関する情報を発生以前に関知していた」

ロザリー「じゃあ、上層部は知っていてわざと見逃したって言うの？」

ホスバッハ「少佐、上は手を打ちました。

戦闘団〝ホスバッハ〟がそれです。」

キーラ「だがそれがウィッチ達の潔白の証拠にはならないだろう。」

キーラが指摘する。

彼女の言う通りこれは〝リベリオン又はブリタニア、カールスラントなどの国家ぐるみの仕業〟ではない事の証明であった。

プレッツ「我々は既にこの部隊のウィッチ全員の身辺調査を行い、王党派との関係のある人物を洗い出した所、彼女らの親の中には王党派と関係のある人物との関係がある人物がいたものの、彼女たちによる犯行は不可能と判断した。」

ホスバッハ「それにこの中で爆弾を仕掛けることが可能なほど爆薬の知識を有した者は私を含めて数人しかいない。
　よって、ウィッチによる犯行はあり得ないが結論だ」
プレッツ「納得したかね」
キーラ「ええ。だがウィッチではないという事は分かってもこの基地内の誰かがやったかというのは事実でじゃないのかね？」
二人の弁にキーラは納得した。
だが実際に誰がやったかという結論には至っていなかった。
プレッツ「その通りだ、結局のところこの基地内の誰かがやったというのは事実だ。」
ホスバッハ「現在当時勤務していた基地内の全員の身辺調査中だ。
　まあ今月末の正式発足までにはある程度は洗い出しが終わるだろう」
ホスバッハとプレッツがそう結論した。
キーラ「そうか、だが何れにせよこの基地内に犯人がいることに変わりはない。
　犯人が見つかるそれまで皆さんが無事でいることを祈るよ」
キーラが意味深な言葉を残し部屋を出て行った。
だがこの件はウィッチ達の間に禍根を残すことになった。

翌日、ウィッチ達はネウロイの出現の為出撃していた。
ハインリーケ「目標は前方中型ネウロイ！
　再生の間を与えず一気に倒すぞ！」
カーロイ「確かこの辺りはＢとの重複地域だ。
　誤射に注意しろ」
ホスバッハ「分かってる、くれぐれも昨日のあのバカの言う戯言に惑わされるなよ」
ホスバッハとカーロイがウィッチ達に注意する。
すると前方に影が見えた。

邦佳「あ！B部隊のみんなだ！」
前方にB部隊が現れた。
すると突如ハインリーケが叫んだ。
ハインリーケ「全員止まれ！ネウロイとの位置関係を保つ！」
ホスバッハ「は!?」
ハインリーケ「妾の命に従え！さもなくば罰金じゃ！」
ハインリーケが突如止まるように指示した。
彼女の命令にホスバッハが叫んだ
ホスバッハ「ふざけるな敗北主義者！前進！突撃しろ！
後退する者、止まる者は俺が撃つ！進め！
この時刻を持って一時的にウィトゲンシュタイン大尉の指揮権を剥奪する！」
ホスバッハは強硬な策でハインリーケの指揮権を剥奪するとウィッチ達を前進させた。
A部隊はそのままB部隊と共同でネウロイと交戦し始めた。
ホスバッハ「A部隊だ、加勢するぞ！」
カート「助かる！数なら上だ囲んで叩き潰す！」
そのまま両部隊が合同で攻撃を始めたあっという間にネウロイは穴だらけとなり破壊された。
だがこのハインリーケの一時的な指揮権剥奪という事態は非常な事態だった。

さらに翌日、ロザリーはパリに呼ばれホスバッハのハインリーケの指揮権の一時的剥奪の件、更に例のテロ事件の件を咎められていた。
だが帰ってきたときにはなぜか笑顔だった。
ロザリー「ただいま」
ハインリーケ「司令部で叱責を受けたのではないかったのか？」
ロザリー「3時間半作り笑いしていたら固まったのよ」
アドリアーナ「大変でしたね」

ロザリーの話しぶりから苦労が滲み出ていた。
ロザリー「テロ事件にホスバッハ少佐の一時的な指揮権剥奪、マスコミの５０６のイメージは最悪よ…
だから至急Ｂ部隊のみんなをセダンに呼んで。
緊急合同会議よ」
これが事のあらましだった。
この１週間後児童養護施設で慰問活動として５０６で劇と５０６空軍軍楽小隊により演奏会、ラジオ放送が行われることが決定したのだ。

第１４話：故郷

こうして１週間後、演劇をすることになった５０６は早速舞台の台本を書き始めることになった。

そしてそこに集められたのが唯一芸術に関する教育を受けている貫二郎、芸術・演劇に関して幅広い知識を有するカーロイ、演劇経験はないがくじでお目付け役にされたジェフ、そして怪奇映画好きの邦佳とイザベル、唯一演技の経験があったマリアンが集められた。

イザベル「それでは今から演出・脚本の私イザベルとブダペスト１の芸術の知識を有するカーロイさん、未来の天才作曲家大野さん、怪奇映画、チャンバラ大好き黒田さん、お目付け役のフィッツジェラルドさん、そしてザ・シンデレラことマリアンによる企画会議を執り行い…」

マリアン「シンデレラって呼ぶな！」

イザベルが適当な事を言うとマリアンが怒った。

マリアン「だいたい、なんで私がＡの連中と一緒にこんなことしなきゃならないんだ！」

貫二郎「演技経験者で上手だって聞きましたので」

マリアン「だからそれは小学校の劇でやっただけだと…

それだって嫌々…」

ジェフ「誰がここに放り込まれるかを選ぶポーカーで何故かドヘタクソのカートに負けて放り込まれた俺よりはマシだな」

彼女をジェフが諫める。

ジェフは誰がお目付け役として参加するかというポーカーで大負けしたため放り込まれたのだ。

貫二郎「ところで、何処まで決まってるんです？

一応ネタが一つあるんですけど」

カーロイ「なんだ？ネタって」

貫二郎「ヴィクトル・ユゴーの小説レ・ミゼラブルのミュージカル」

邦佳「流石貫二郎！」

イザベル「すごいね、でどこまでできてるの？」

貫二郎はレ・ミゼラブルのミュージカルを提案し進捗を聞かれるが顔をそむけた。
貫二郎「ぜ、全然…」
カーロイ「一応聞くが完成にどのぐらいかかる?」
貫二郎「は、半年かな…最低で」
ジェフ「劇は来週だぞ」
貫二郎の案はあまりにも準備に時間がかかるため却下された。
イザベル「じゃあ予定通りシェイクスピアでいいよね」
カーロイ「シェイクスピアかぁ、リチャード3世か?
『馬をくれ、馬を! 馬のかわりに、わが王国をくれてやる!』てか?」
貫二郎「『今や我らが不満の冬は去り、ヨーク家の太陽によって輝かしい夏となった。
我ら一族の上に不機嫌に立ち籠めていた雲も全て大海の底深くに葬られた。
今や我らの額には月桂冠が巻かれ、我らの傷だらけの具足は記念品として壁に掛けられている。
我らの恐ろしい警鐘の音は楽しい宴の声に、我らの重苦しい行進は軽やかな舞踏に変わった。
厳しい表情の戦闘がしわくちゃ笑顔の戦線に緩んだ。
そして今や、装備した軍馬にまたがり怯えた敵の魂を驚愕させる代わりに、ご婦人の部屋で、みだらで甘いリュートの調べに合わせ兄エドワードは軽快に跳びはねている。
だが俺は、生まれながらに陽気な遊びには向いておらず、好色な姿見に気に入られるように作られてもいない。
俺は、いいかげんに型出しされたできそこないで、気取って歩く浮気な美女の前を闊歩する威厳に欠けている。
俺は、嘘つきの創造主に背丈を騙し取られ、五体の美しい均整を奪われ、歪められ、未完成のまま、半分できるやいなや、生まれるべき時が来る前にこの世に放り出されてしまった。
ひどい不具で不格好なものだから俺がびっこを引いてそ

ばを通れば、犬が吠えかかる。
　するってえと、俺は、このひ弱な泰平の世で暇つぶしをするどんな楽しみがあるんだい。
　日向で自分の影法師を見つめながら、己の無様な姿を歌にして口ずさむ以外に。
　それならば、俺は口先ばかりもてはやされるこの時世を、楽しむ恋人にはなれないのだから、俺は決めた、悪党になってやる、今日この頃のだらけた快楽を憎んでやる。
　筋書きは描いてある、その危ない序幕はな、酔っぱらいの語る予言、誹謗、夢占いで兄のクラレンスと王エドワードをお互いにひどく憎しみ合わせてやるんだ。
　そしてもし王エドワードが、狡猾で不実で二心ある俺に負けないほど真っすぐで心の正しい男であれば、今日にもクラレンスは牢に押し籠められるはずだ。
　Gが頭文字の人物がエドワードの後継者たちを殺すだろうという予言のせいで。
　考えは胸中深くしまっておけ、当のクラレンスが来やがった。』」
カーロイ「ブラボー、あの長回しのセリフをそらんじれるとはな」
ジェフ「『幼くして聡い者長生きせず、だってな。
　春が早いと夏は短い。』」
リチャード三世のセリフをそらんじるがその様子にマリアンは不満だった。
マリアン「むむ…勝手にやれ！私は知らないからな！」
邦佳「えー」
マリアンはベッドに入り込むとそのまま寝てしまった。

数時間後、マリアンは寝ていなかった。
ベッドに潜り布団で隠しながら狸寝入りをしていた。

勿論理由が脚本の様子が気になるというものだった。
イザベル「これだとストーリーに意外性がないよね」
イザベルの言葉にマリアンは疑問を持つ、だがさらに疑問を持たせる単語が飛び込んでくる。
邦佳「犯人の動機はどうしよう？」
貫二郎「これ大丈夫なんですか…」
カーロイ「関係ないだろ、こっちは演目決めるぞ」
ジェフ「スウィングジャズは絶対やれよ」
なぜか脚本を話しているのは気がついたら邦佳とイザベルだけで男衆は別の事を話しているようだった。
その上何故かジェフの声は何処か陽気な感じになっていた。
イザベル「この役はジャンプ力のある人でないと」
貫二郎「で、どうします？歓喜の歌入れます？それとも双頭の鷲の旗の元？」
カーロイ「ハンガリー舞曲入れたか？」
ジェフ「子供が寝るぞ、というかレコードで実際にどれ使うか決めるか？」
貫二郎「いいですね、とりあえずレコード取ってきます。」
ジェフ「あ、ビール忘れるなよ。アイリッシュスタウトで」
邦佳とイザベルの会話はますます謎が増え、一方で貫二郎は部屋から出るとレコードとビールを取りに行っていた。
戻ってきてグレン・ミラーのインザムードが流れ始めた。
邦佳「折角だし他の作品も混ぜてみない？」
イザベル「じゃ適当に」
貫二郎「スタウトもおいしいですね」
ジェフ「だろ？俺達アイリッシュの本場のアイリッシュスタウトだ。
紛い物とは全然違うぜ？」
邦佳とイザベルの発言にマリアンは怒りを感じ始める。
一方で男衆が気がつけば酒盛りになっていた。
イザベル「リベリオンのテイストも入れたいよね？」

邦佳「いい考え！カール大尉に聞いてみよう！」
すると邦佳がマリアンを起こした。
邦佳「ねえ、カール大尉、大尉ってば」
マリアン「んん…何だ？よく寝てたのに」
狸寝入りしていたマリアンは目が覚めたばかりのような演技をする。
寝ぼけたふりをするマリアンに邦佳が聞いた。
邦佳「リベリオンの事知りたいんだけど大尉の故郷ってどんなとこ？」
マリアン「故郷は駄目だ」
邦佳「教えてよ」
マリアン「絶対に嫌だ」
ジェフ「あ？アメリカの事聞きたいなら俺が答えてもいいぞ」
マリアンは邦佳の問いに答えることを断固拒否する。
すると酔っ払ったジェフが答えるが酔っ払いの戯言と思われ無視された。
邦佳「教えてくれたら扶桑の成田山の交通安全のお守りあげるから」
マリアン「いるか！」
邦佳「教えて教えて教えて！」
とうとう邦佳は駄々をこね始めた。
そして彼女が折れた。
マリアン「あー五月蠅い分かった！
教えるから黙れ！
ただし、ひとっ言でもバカにしたら本気で殴るからな」
邦佳「はーい」
イザベル「了解です」
イザベルと邦佳は正座してマリアンの話を聞き始めた。
男衆も気にして耳を傾けた。
マリアン「私が生まれたのはオレゴンの北西にあるハバードって町だ。

家はホップを栽培している。」
マリアンがそう言うと突如ジェフがビールを噴出した。
マリアン「おいジェフ！殴るぞ！」
ジェフ「待て待て待て！いやマリアンお前ハバード生まれだったのかよ！」
マリアン「殴るぞ！」
ジェフ「違うよ！俺セーラム生まれなんだよ！オレゴン州セーラム！
しかもハバードにはうちの醸造所と農場があるんだよ！」
マリアン「えー！」
ジェフとマリアンの故郷は直線で２０キロも離れていなかったのだ。
広大なアメリカで２０キロはまさに目と鼻の先である。
ジェフ「親父が禁酒法時代に地元のアイリッシュギャングと組んで材料のホップの産地で近くにハイウェーがあるハバードの寂れた農場を買ってそこにセーラム市内にあった醸造所の設備を移して密造してたんだ、禁酒法時代が終わるとその醸造所をそのまま復活した会社の醸造所にしたんだ。
だからハバードには会社の醸造所と農場があるんだよ。
最近は麦の栽培まで始めたらしいが」
マリアン「そう、ずっと嫌いだったけどな」
ジェフ「嫌い？あの長閑な町が？」
するとマリアンが本音を漏らした。
マリアン「ハバードの暮らしには何もなかった、夢も希望も将来も。
あの町に生まれたら大抵は親と同じように働き死んでいくだけだ。
学芸会でほんのわずかな間シンデレラになっても幕が閉じて喝采が終わった瞬間に思い知るんだよ。
自分がただの農家の娘で待っているのは家の手伝いで汚れた手に色褪せて擦り切れた服、塩辛くて油っぽいダイナーでの食事。

夢を抱けば抱くほど現実が押し寄せてくるんだ。
黒田、お前たちは貴族と私たちの間に何も違いがないって笑うけどなそう言われるたびに私みたいな人間は傷つくんだよ。」
マリアンが嫌いな理由を語る。
今でこそアメリカは各地を飛行機とハイウェー、バスで繋がり、殆どの人が州の外に行ける世の中だが当時、１９４０年代はまだ交通機関が未発達でアメリカを横断できる乗り物と言えば鉄道か飛行機、それもまだ命懸けで乗るような時代の代物のみだった。
この状況から脱却できるようになるのは５０年代以降だった。
彼女の話を聞いて全員が涙を流していた。
邦佳「ごめんなんか気持ちをわかってなかったよ」
イザベル「うん、反省」
ジェフ「マリアンも彼奴みたいに苦労したんだな、えらいえらい」
マリアン「いや別に責めた訳じゃ…放せ！
というかジェフ頭をなでるな！キスするな！赤ちゃんじゃない！
大野は土下座しなくていい！カーロイは懺悔するな！」
ジェフはマリアンに抱き着き頭を撫で、キスし貫二郎は土下座しカーロイは懺悔していた。
するとマリアンは振りほどいてテーブルの上のタイプライターを奪い取った。
マリアン「あーもう！これ以上余計な事を喋るくらいなら３人でさっさと脚本を完成させるぞ！」
貫二郎「こっちも戻りますか、とりあえずこれとこれは入れましょう。
というか今日中に決めないと練習が間に合わないんですよ」
カーロイ「ああ、そうだよな」
ジェフ「だな、クラシック中心だと子供が寝るぞ」
マリアン達は脚本を書き始め、貫二郎は曲目を検討し始めた。
その様子を聞いている人物がいた。
カート「良かった、殴り合いにはなってないみたいです」

ロザリー「良かった」
ジーナ「どうも私たちは過保護なようですね」
ロザリー「全く」
カート「その通りみたいですね」
カートとジーナとロザリーが心配で聞いていたのだ。
だが中の様子は3人の心配をよそに平穏そのものだった。

翌日、貫二郎は軍楽隊を集め曲目のリストを配っていた。
貫二郎「これが来週やる曲目のリストです。
　まず506参加国の代表的な行進曲として…」
リストは子供たちにやる曲目とその日の夜にやるラジオ放送向けの両方だった。
貫二郎「これが孤児院の子供向けで、こちらがラジオ放送向けのです。
　まずガリア国歌ラ・マルセイエーズを流した後、ドヴォルザークの交響曲第9番新世界第4楽章、ショスタコーヴィチの交響曲第7番ペテルブルク第4楽章、トリッチ・トラッチ・ポルカで…」
ラジオ向けは格調高クラシック音楽の演目だったが孤児院向けは子供にもわかりやすいクラシック音楽ばかりだった。
貫二郎「孤児院向けは相手が子供なので分かりやすく明るい曲です。
　なので兎に角明るくやってください。
　ラジオ放送は…」
貫二郎が軍楽隊を集めて説明しているその頃、同じくウィッチ達にも脚本が渡されていた。
カーラ「え、もうできたの？」
イザベル「我ながら隠れた文才にびっくり。
　きっと亡き父も称賛にむせび泣きを見せてくれることかと」

カーロイ「勝手にお前の親父を殺すな」
イザベルのジョークにカーロイが後ろから頭を叩いて突っ込む。
そして二人で全員に脚本を配った。
ジーナ「ふむ、配役も決定しているのか」
ロザリー「あの、カール大尉。私も舞台に立つの？」
ジェニファー「え、この役って？」
カーラ「なんだこのタイトル？」
アドリアーナ「分厚いなこの台本」
ハインリーケ「ほう、妾が主役か。
まあ当然じゃな」
キーラ「どうしてこの配役の欄に私の名前がある！」
その配役に全員が驚いたり感想を漏らしていた。
イザベル「では早速読み合わせを、がっつりやるからね」

その日の夜、ホスバッハは執務室である人物に電話をかけていた。
ホスバッハ「ハイル・ヒトラー。
例の女狐は来週５０６の慰問に付いて行く。
その時…は、了解しました。」
短い会話を終えると目の前に立つプレッツに話した。
ホスバッハ「あの不快な虫をこれで駆除できる。」
プレッツ「我々に喧嘩を売った報いだ。」
そう言うと二人は机の上に置かれたワイングラスを一気に飲み干した。

翌週、ウィッチ達はジープなどの車両に分乗して孤児院を目指していた。
唯一ホスバッハとプレッツは宛がわれたオペルアドミラルに、軍楽

隊は2台のオペルブリッツトラックに乗っていた。
マリアン「やっとか…長かった…」
ジェニファー「今日で終わるんですね…」
アドリアーナ「ネウロイとの戦いの方がまだ楽だったな。」
それぞれ愚痴っていると突然止まった。
前を見るとダークイエローに3色迷彩を施したトラックとキューベルワーゲンの隊列と交差するため停車したようだった。
邦佳「なんだろう?」
貫二郎「憲兵かな?」
乗っている兵士達をよく見ると憲兵のように見えた。
トラックの隊列が過ぎ、最後に憲兵将校を乗せたキューベルワーゲンが通過すると隊列が発進した。
そしてしばらくして孤児院に到着した。
孤児院には先に警備部隊から分遣された小隊が到着していた。
表では警備部隊の山岳猟兵と共に孤児院の子供が出迎えていた。

第１５話：幕は上がり、役者は揃った

到着から1時間ほどした後、控室では女衆が劇の準備をする一方、軍楽隊と貫二郎は前座として舞台に並び幕が上がるのを待っていた。

そしてブザーが鳴ると万雷の拍手と共に幕が上がった。

貫二郎「レディース&ジェントルメン、私たちのリサイタルを聞きに来てくださり誠に感謝いたします。

では、前口上はこのぐらいにしまして早速始めましょう、まず最初は我が５０６参加国の中から行進曲として陸軍分列行進曲、旧友、双頭の鷲の旗の元、星条旗よ永遠なれ、ベルサリエリ行進曲、ブリティッシュグレナディアーズです」

貫二郎はお辞儀をし前口上を述べると振り返り指揮棒を取る、同時に軍楽隊も楽器を構える。

そして振り下ろすと同時に演奏が始まった。

最初は扶桑軍の陸軍分列行進曲、それが終わると旧友、双頭の鷲の旗の元、星条旗よ永遠なれ、ベルサリエリ行進曲と続き最後にブリティッシュグレナディアーズと行進曲のメドレーが行われた。

演奏の間子供たちと来賓達は静かに聞いていたが子供たちは退屈そうだった。

演奏が終わると来賓とメディアは歓声を上げて拍手するが子供たちはやはりつまらなさそうな表情だった。

貫二郎「ありがとうございます、では続いて皆様に新世界の音楽を教えましょう。

リベリオンのジャズです、スウィングジャズ。

よく斜め音楽だとか言われますがこれが新しい音楽です。

お行儀よく聞く曲ではないのどうぞ立ち上がって踊るなり、手拍子をお願いします。

まず最初はシングシングシング！」

次に始まった曲はスウィングジャズのシングシングシングであった。

明らかにテンポが違い明るくクラシックとはかけ離れた所謂低俗

的な音楽に伝統的な価値観重視の来賓は顔をしかめるが一方で子供たちは元気になりノリノリで手拍子を叩く。
最初のシングシングシングが終わる頃には子供たちは楽しそうにしていた。
貫二郎「それじゃあ次はクラッシックのトリッチ・トラッチ・ポルカ！
クラシックだってつまらない曲ばかりじゃないぞ！」
子供たちの興奮は貫二郎にも移り大声で次の曲を開始する。
さらにトリッチ・トラッチ・ポルカが終わるとインザムード、茶色の小瓶、ペンシルベニア6―5000と代表的なジャズを続けた。
これで全演目を終わると会場は興奮のボルテージがマックスとなっていた。
演目が全て終わると万雷の拍手が鳴り響き、その音と共にゆっくりと幕が降ろされた。
幕が終わると第二部の演劇の為軍楽隊はそそくさと片づけを始める。
貫二郎「楽器は当たり前だけど壊さないようにね」
カーロイ「ブラーボブラーボ、素晴らしい演奏だった。」
舞台袖に戻ると貫二郎にカーロイがほめたたえる。
さらに他のウィッチも褒めたたえた。
ハインリーケ「良かったぞ、そなたの指揮と演奏は」
ホスバッハ「素晴らしい、あのシュゲーレ・ムジーク以外は」
ジェフ「最高だよ!あんたこのままニューヨークのナイトクラブでジャズバンドを率いれるぜ」
トニー「家のファミリーのナイトクラブに来ないか?便宜はするぞ。
年収10万ドルも夢じゃない」
アラン「カラヤンにも負けない素晴らしい指揮だった」
カート「最高でしたよ、素晴らしかったです」
貫二郎「いやあ、ありがとうございます。」
邦佳「良かったね!貫二郎!」

褒められ照れる貫二郎に邦佳がハグし頬にキスすると貫二郎が真っ赤になった。
貫二郎「く、邦佳…」
ジェフ「見せつけてくれるねぇ、後は若い二人に任せて老人たちはさっさと退散しましょうか」
貫二郎「ちょ」
カーロイ「俺はイザベルとしっぽりやってくるわ」
貫二郎と邦佳を置いて男衆は離れていった。
貫二郎が慌てるが邦佳は抱き着いたままだった。
邦佳「別にいいでしょ～この一週間ぐらい忙しくて全然だったんだからさ」
貫二郎「まあそうだけど…準備は？」
邦佳「あ、忘れてた」
邦佳は部隊の準備を忘れていた。
言われて気がつくとすぐに舞台の準備に向かった。

その約1時間半後、控室ではハインリーケとマリアンが不機嫌な表情をしていた。
だがそれ以上にジェフとホスバッハの空気が悪かった。
ハインリーケ「全く、誰かさんのお陰でとんだ醜態を晒してしまったわ」
マリアン「いいぞ、ここで二回戦を…ひ！」
ジェフ「ランバージャック！腕立て伏せ５００回！」
マリアン「サーイエッサー！」
ホスバッハ「お前ら…次やったらその頭に鉛弾ぶち込むぞ」
二人が怒り狂っていたのはこの少し前の舞台が途中から大乱闘と化してしまったのである。
その醜態にホスバッハとジェフ、そしてプレッツが怒り狂ったのだ。

その怒りはホスバッハの右手には薬室に弾が入ったワルサーを持っていることからも明らかだった。
ジェフはマリアンに腕立て伏せをさせる程怒っていた。
カーラ「あー疲れた。この劇、やる意味あったのか？」
カーロイ「ひでぇ芝居だったな。酒屋の乱闘レベルだったよ」
アラン「似たような劇を知ってるぞ、喧嘩って言う劇を」
キーラ「頭が痛い」
あまりの酷さにカーロイとアランが皮肉を言う。
それほどの酷さだった。
貫二郎「はぁ、僕の演奏は何だったんだろうか…」
貫二郎がこの一週間の苦労が何だったのか頭を抱えているとドアが開いて場違いなほど明るい声を出して邦佳が入ってきた。
邦佳「皆さん！お疲れ様です！
大成功でしたね！劇！」
ハインリーケ「はあ？何をどう考えたらそうなるのじゃ!?」
カーロイ「あれで成功ならクセルクセスはギリシャを支配してたぞ」
邦佳「うわっ!?痛たたたっ」
その場違いな言葉にハインリーケが突っかかり頬を引っ張る。
邦佳の言葉はとかく場違いだった。
邦佳「だって、子供たちすっごい楽しんでくれたじゃないですか。
あんな劇見た事ないって大はしゃぎでしたよ。
大成功じゃないんですか？」
邦佳が理由を言うとウィッチ達はポカンとする。
すると笑い声が聞こえてきた。
ハインリーケ「ククク、確かに。
子供を笑顔にさせたのなら成功じゃな」
カーラ「そういう事ならジェニファーがかんだところが最高だった」
ジェニファー「ええっ!?」
イザベル「黒田さんはアドリブ多すぎ」

それぞれに面白かったところを言い始めた。
アドリアーナ「これは…」
ロザリー「マスコミや司令部に対してのイメージアップには散々だったけど慰問に来たことは大正解ね」
アドリアーナ「隊長、最初からこれが狙いですか？
先週までいがみ合っていたのが嘘のようだ」
ロザリー「さあ、でもこの雰囲気と引き換えなら後で4、5時間上層部の嫌味を聞くくらいなんでもないわ」
その空気を見てロザリーがそう評する。
アドリアーナ「それ以上延びなければいいですね」
ロザリー「え…頑張る…」
アドリアーナの言葉に青ざめる。
二人の会話を聞いてその後ろでプレッツとホスバッハが漏らした。
ホスバッハ「どうせこんな些細な事で呼ばれることはないだろうがな」
プレッツ「既に準備はできた、ハンツマンが猟犬を解き放つだけだ」
ホスバッハ「狐の最後は猟犬に噛み殺される。
それ以上に惨い最期を遂げなければいいがな」
プレッツとホスバッハの意味深な発言の意味はまだ誰も知らなかった。
すると突如ドアがノックされ小柄な女が入ってきた。
「ほーう、酷い劇をした割に賑やかじゃねえか」
ホスバッハ「誰だ？名乗れ」
咄嗟にドアの傍にいたホスバッハが拳銃を向け誰何する。
スペード「おっと、悪かった。銃を向けないでくれ。
俺はサマンサ・スペード、ニューヨーク市警の2級刑事だ。
ジーナ・プレディはここにいるか？」
「ニューヨーク市警の刑事？」
入ってきたのはニューヨーク市警（ＮＹＰＤ）の刑事だった。
だが、自称刑事では怪しい事には変わりなくプレッツもホスバッハも警戒していた。

プレッツ「本当かね?とりあえずパリのリベリオン大使館に身分を紹介するがよろしいか?」
スペード「ああ、構わねえよ。やましい事はないんだからな」
プレッツはリベリオン大使館に身分の紹介をするため電話をかけに行った。
その後身分照会により実際に刑事であることが判明した。
カート「中佐なら医務室ですが何の御用で?」
スペード「俺は…」
プレッツが出て行くとカートが用を聞き答えようとすると突如邦佳が声を上げた。
邦佳「うわわわ…すっごい!本物!?バッジ見せて!バッジ!」
邦佳が何故かものすごい勢いで食いついた。
そのようにトニーがドン引きする。
トニー「なんでこいつこんなに食いつくんだ…」
アラン「まあ、あんたは苦手だよな…」
トニー「苦手じゃない、天敵だ。
シマウマの天敵がライオンなのと一緒だ」
トニーにとってはＮＹＰＤは天敵だった。
何せ彼は元マフィアな上にまだ法で裁かれていない殺人が数十件存在した。
もしその全てか一部が露見すれば電気椅子は免れなかった。
邦佳「よく映画で見るじゃないですか!
西部劇の保安官とメジャーリーガーに並ぶリベリアンヒーローですよ!」
カーロイ「そういや映画好きだったな」
スペード「お前、よくわかってるじゃねえか」
映画でよく見るヒーローの登場に大興奮の邦佳にスペードがバッジを自慢げに見せた。
ホスバッハ「で、その刑事さんとやらが何用で?
言っておきますがこの国はリベリオンでもニューヨークでもございませんので逮捕権があるのは連合軍とガリア政府だけ

だ」
キーラ「確か、市警からはガリア警察にも群にも正式な協力依頼は届いていない。
そもそも、本当に市警の刑事なのか？
そんなバッジなどいくらでも偽造できる。」
プレッツ「いや、そいつは本物だ。さっき大使館に問い合わせた。
実際に刑事で一昨日シェルブールから入国した」
キーラとホスバッハが問い詰めているとプレッツが戻ってきて問い合わせた結果を伝えた。
スペード「そうだ、市警の刑事だ。
捜査ってのはセダンの爆破事件のか？
あんたらは５０６の人間じゃなさそうだ」
キーラ「ご名答、私はガリア軍諜報部の者、そちらは連合軍からの連絡将校だ。
だがそこのホスバッハ少佐に関しては実際に５０６の所属で警備部隊指揮官でもある。
まず彼らか私を通してもらおうか」
キーラがスペードを威圧する。
だが彼女は屈しなかった。
スペード「俺は市警の命令で海を渡ってきたわけじゃねえ。
俺個人の調査で…」
ジーナ「遅くなりました」
話し始めると同時にジーナが入ってきた。
カート「おかえりなさい、中佐」
カートに言われ気がついたスペードは振り返ると目の前に立つジーナに聞いた。
スペード「お前がジーナ、いやＧ・Ｐか？」
ジーナ「私をそう呼ぶのは…マーフィの知り合いか？」
ジーナには彼女と面識はなかったが何かピンと来たようだった。
スペード「ようやく会えたぜ、マーフィは、俺の親友のマーフィは先日死体で発見された…

俺はその黒幕を追っている」
マリアン「マーフィ??」
カート「知り合いですか?」
スペードの話にジーナ以外付いてこれていなかった。
マリアンとカートは疑問を口にする。
するとジーナはいつもとは明らかに違う暗い口調で返事した。
ジーナ「ここでは落ち着いて話せそうにないな。
B部隊の基地に戻りながらでもいいか?」
スペード「ああ、構わないぜ」
プレッツ「この件に関して、私もご同席してよろしいかね?
この件は何かしら爆破事件に関係すると思われる」
キーラ「彼の言う通りだ。私も話を聞きたい」
するとプレッツとキーラが反応したがこれにホスバッハとプレッツは焦りを感じた。

それから数十分後、B部隊とB部隊に付いて行った邦佳とプレッツとスペード組と演奏の為ラジオ局に行った貫二郎たち軍楽隊を除いたA部隊はセダンに戻っていた。
だが先頭を走るホスバッハは珍しく殺気立ちイライラしていた。
ロザリー「ホスバッハさん、どうしたの?そんなにさっきから殺気立って」
ホスバッハ「何でもないですよ少佐」
何でもないと誤魔化すが明らかに異常に見えた。
すると突然、目の前に憲兵が検問所を作っていた。
憲兵A「止まれ!検問だ!」
憲兵に車を止められると真っ先にホスバッハが車から飛び降りた。
ホスバッハ「フェルカーザム!大変なことになったぞ!」
ロザリー「え?」
ホスバッハが大声でキューベルに乗っていた士官に話しかけた。

その言葉にロザリーが驚いた。
まるでこの憲兵部隊とホスバッハがグルのようなのだ。
フェルカーザム「なんだと!どういうことだ!」
キューベルから飛び降りた士官、即ち駆逐戦隊〝ガリア〟隊長のフェルカーザムが聞き返す。
この憲兵部隊は偽装であり実際は駆逐戦隊〝ガリア〟の兵士達だったのだ。
ホスバッハ「そのままだ!あの女狐はセダンじゃなくディジョンに行った!
今すぐ向かうぞ!すぐに司令部に連絡!急いでディジョンの部隊を動かせ!
奴がディジョンにいる間に捕まえるぞ!」
フェルカーザム「分かった、通信手!急いで司令部に目標はディジョンのB部隊にいると伝えてディジョンの部隊を向かわせるよう要請しろ!
全員移動だ!動かせない物は壊して置いて行く、5分後には出発だ!」
フェルカーザムが周りの兵士達に指示する。
ホスバッハは車に戻ると車の中に置かれたStg44を取り出す。
するとロザリーが聞いた。
ロザリー「ホスバッハさん、何が起きてるの?」
ホスバッハ「裏切り者の大捕り物だ。」
ロザリー「裏切り者?それって誰なの?」
ホスバッハ「国家機密だ。」
ロザリー「私にも言えないの?」
ロザリーがホスバッハの腕を掴んで問い詰める。
ホスバッハは一瞬戸惑うとその裏切り者の名を言う。
ロザリー「そう、やはりあの人なのね」
その名を聞いて、それだけ彼女は言った。
彼はフェルカーザムのキューベルに飛び乗りディジョンへと向かった。

参謀「閣下！大変です！目標がディジョンに！」
ハイドリヒ「慌てるな、そいつが死んだわけでも消えたわけでもない」
パリではフェルカーザムの報告に参謀が慌ててハイドリヒに報告するが彼は落ち着いていた。
ハイドリヒ「ディジョンのカールスラント軍第1騎兵軍団に下令、緊急治安維持命令アル・ファジル。」
ハイドリヒは即座にディジョンとその周辺に駐屯するヴィルヘルム・シュテンマーマン大将指揮のカールスラント軍第1騎兵軍団の5個師団、即ち第3騎兵師団、第4騎兵師団〝フェルトマルシャル・フォン・マツケンゼン〟、第8騎兵師団、第22騎兵師団〝マリア・テレジア〟、第37騎兵師団〝リュッツオウ〟を緊急治安維持目的で展開させるという命令だった。
これにより事実上、ディジョンの交通の一切と通信の全てが封鎖された。
裏切り者は袋の鼠となった。

第16話：敵とお礼参り

ホスバッハが慌てていたその頃、B部隊はディジョンに向かっていた。
その中の一台ではマリアン、ジェフ、トニー、カーラ、ジェニファーそして邦佳が乗っていた。
マリアン「いきなりやってきて何者なんだあの刑事は…」
ジェニファー「さあ、何か物騒でしたね」
運転席に座るマリアンの言葉に後部座席のジェニファーが同調する。
カーラ「面倒事じゃないといいけどなぁ」
トニー「早く帰ってくれねえかね」
マリアン「そうだな、これ以上増えるのは勘弁だ」
邦佳「え？」
そう言うとマリアンは後部座席に座る邦佳を見る。
後部座席は本来5人乗りなのになぜか6人乗ったため4人が座ってすし詰め状態だった。
邦佳「だってもっと刑事さんみたいじゃないですか！」
ジェニファー「よくグリュンネ隊長の許可が下りましたね」
マリアン「Aで厄介払いされたんだろ」
邦佳「酷い！」
カーラ「黒田、コーラ飲むか？」
マリアンは面倒そうだったがカーラは暢気にコーラを渡していた。

一方、先頭のジープにはジーナ、カート、スペード、そしてキーラとプレッツが乗り込んでいた。
キーラ「さて刑事殿、詳しく話を聞かせてもらうか？」
スペード「なんで取り調べみたいになってるんだよ」
プレッツ「その件に関しては我々の治安問題に関係する可能性もある。

まずそのマーフィとは誰かね？」
後部座席右側に座るキーラとカートを挟んで反対側に座るプレッツが助手席に座るスペードに聞いた。
プレッツはキーラを警戒し右手を拳銃のホルスターにかけていた。
するとスペードの代わりにジーナが質問に答えた。
ジーナ「彼は私と同郷のリベリオンの記者だよ。
よく仕事を頼んでいたが、少し前から消息を絶っていた。」
キーラ「ほほう、つまり中佐はその彼が消息を絶つ前に何かを依頼していたという事かな？」
スペード「俺が知りたいのは奴に何を負わせていたかだ。
教えてくれ」
ジーナは後ろのキーラとプレッツをちらりと見ると答えた。
ジーナ「まあいい、これには何の確証もないが彼に探らせていたのは５０６の解散を目論む動きだ。」
プレッツ「それは例の記者が行方不明になった件か？」
ジーナ「そうだ。
水面下で動くそれを察知した私達はリベリオン政府の動きもあると考えマーフィに探らせた。
そして何かを掴んだと連絡してきた数日後…」
カート「冷たくなって見つかった、と」
ジーナがマーフィとの関係を話した。
彼女は彼に５０６解散の動きを探らせていたのだ。
実際に連合軍が掴んでいる動きはガリア政府に限られておりリベリオンやブリタニアなど他国の動きは関知していたなかっただけにこれは盲点だった。
するとスペードがトレンチコートの中からファイルを取り出した。
スペード「ここに奴の遺産がある。」
プレッツ「レポート？」
スペード「これによればセダン基地内に内通者がいる可能性が指摘されている。
爆破事件を起こしたのもそいつかも知れいない」

プレッツ「それに関しては我々と同じ認識だ。
彼を殺した者と今回のテロに関しては同一組織による犯行という線を濃いようだね。」
スペード「そうみたいだな。
俺はマーフィを殺した奴が許せねえ、内通者を必ず見つけ出し黒幕を突き止めるつもりだ。
なあ、しばらくあんた達の基地にいてもいいか?」
スペードがジーナに聞いた。
軍の基地である以上そのトップであるジーナの許可が必要であった。
ジーナ「私としては構わないが…宜しいですね?」
ジーナが後部座席のキーラとプレッツを見る。
キーラ「私の捜査の権限はセダンに限られたものだ。
従ってその質問に意味はない」
プレッツ「身分に問題が無ければどうぞ、我々としては細かい事に干渉する趣味はない。
まあ後で詳細な身辺調査を行うがね」
キーラはそもそも関与できない、プレッツには興味のない事だった。

それから少ししてディジョンの基地に到着した。
到着しウィッチ達が降りるとジーナがマリアンとジェフに声をかけた。
ジーナ「カール大尉、フィッツジェラルド中尉」
マリアン「はい」
ジェフ「なんでしょう」
ジーナ「こちらの刑事さんが滞在することになった、カートと共にできる限りの便宜を図ってくれ」
マリアン「どうして私なんです!?」

ジーナはスペードの世話を二人に任せることにした。
それにマリアンが驚き聞き返す。
ジーナ「消去法で大尉と中尉が適任だ。」
ジェフ「まあ仕方ないだろ、殺し屋とある意味テロリストだからな。」
マリアン「はぁ…分かりました…」
マリアンは納得するが怠そうに答える。
すると暢気な声で邦佳がやってきた。
邦佳「刑事さ～ん！」
マリアン「お前は暇そうだな…お前も手伝え」
邦佳「はい？」
マリアンは手伝いに邦佳を巻き込もうとした。
そのそばでスペードがカートと共にいたジーナに最後の質問をした。
スペード「最後に一つ、マーフィはあんたにとってただの情報屋だったのか？」
聞かれたジーナが振り返る。
ジーナ「前に取材を受けた時に同郷という事が分かって意気投合したんだ。
友人、と言った方が近いだろうな」
スペード「そうか、友情に殉じるなんて古いタイプのブン屋だぜ」
ジーナ「そう言う男の事件を追って海を渡るのも古いタイプの刑事だ。」
スペード「ふ、違いない」

「「５０６を解散させる動き!?」」
少しして、基地の隅ではスペード、マリアン、邦佳、ジェフ、そしてカートがスペードから事情を聴いていた。
邦佳「一大事じゃないですか！」

ジェフ「カート、知ってたのか？」
カート「まあな、一応聞いてはいたよ。
　上が絶対に解散させない腹積もりらしいから気にしてなかったが」
彼女達には初耳となる５０６の解散の件だったがジェフはこの話を聞いていた。
ただ上には解散させる意思がなくそれどころか早急なる編成を望んでいたためあり得ないと踏んでいた。
スペード「ああ、マーフィを消した黒幕を暴くためにもまずはその内通者を炙り出す。
　地道だが聞き込んで回るしかないだろうな」
ジェフ「この広い基地をか？」
プレッツ「君らだけでやるつもりかね？」
話していると突如プレッツが現れた。
カート「プレッツ少佐」
プレッツ「君は信用できるようだ。
　どうだね？君の持っている情報と我々が持っている情報を交換するというのは？」
スペード「どの口が言うんだか」
プレッツが取引を持ち掛けるが彼女は信用していなかった。
プレッツ「一応言っておくが私は元はハイドリヒ閣下の副官だ。
　私の伝手ならばガリアの全連合軍の支援が受けられるがどうするかね？」
キーラ「そのレポートを渡して貰えれば情報部でも分析できるが？」
邦佳「キーラさん」
更にキーラがやってきて話を持ち掛けた。
だがスペードは二人の申し出をきっぱりと拒否した。
スペード「いや、これは俺の事件だからな、あんたらの手は借りない」
キーラ「孤立無援での調査で成果が上がるかな？」

邦佳「そんな事ありませんよ！
　マリアンさんやカートさん、ジェフさんが便宜を図ってくれますし私だっているし、それにキーラさんだってもう一緒に劇をやって仲間だし！」
　邦佳の言葉にキーラが珍しく驚いた。
　そしてすぐに話題を変えた。
　邦佳「それにしても何で５０６を解散させたいんでしょうね？」
　カート「無法ではないが秩序がない、それがこの国だ。
　共和派から見れば５０６はかつての絶対王政の名残を残すし王党派、権威主義者から見ればリベリオンの差し金、って感じだ。
　さらに言えばバスク独立派やブルターニュ独立派、植民地の独立主義者、アナーキスト、コミュニストから見ればそもそもそれらを弾圧するガリア政府とそれを支援する連合軍自体が敵だからな」
　ジェフ「成程ねぇ、ややこしい政治の論理だ。
　俺達市井の人間にゃ手の届かねえお上の話だよ。
　まあ、やったのは王党派でほぼ決まりって言ってたろ？」
　カートがガリアの政治状況を説明した。
　政治状況は刻一刻と変わっていた。
　相変わらず国内は数多くの勢力が入り乱れ、政治のバランスは極めて危うい状況だった。
　キーラ「どちらにせよまだ犯人は捕まっていない。
　そのマーフィのレポートにしたところでただのアルコール中毒者の妄想かもしれず証拠能力はゼロだ。」
　邦佳「う～！だんだん映画みたいになってきた～！」
　ジェフ「喜ぶなよ、面倒になってきてるってことだろ？」
　段々状況が複雑になってきていることに何故か邦佳が喜んでいた。
　するとマリアンが振り向くと手を振った。
　マリアン「おーい！ジェニファー！トニー！」
　マリアンが偶々通りかかったジェニファーとトニーに声をかけた。
　トニーは嫌そうな顔をするがジェニファーと共にマリアン達と合流した。

マリアン「ジェニファー、トニー、実はな…」
マリアンが事情を説明した。
ジェニファー「内通者…ですか？」
トニー「その裏切り者の名前のイニシャルとかなかったのか？」
事情を聞いた二人がスペードに聞くがヒントはなかった。
スペード「ああ、突き止める前に殺されたんだろうな」
トニー「もし仮に、その裏切り者がいるとしたら爆破する理由がない。
　下手に騒ぎを起こせば軍と憲兵が出張ってきて捕まるリスクが増えるだけだ。
　正攻法で考えればこうだ」
スペード「内通者がいたとしても爆弾騒ぎとは関係ない可能性もあるってことか？」
トニーが彼の経験から仮説を出す。
トニー「或いは、その内通者が別の内通者が動きやすくするために起こしたかのどちらかだ」
トニーはキーラやプレッツを睨みながら言う。
キーラ「それも一つの可能性だ。」
スペード「ふーむ、まずはセダンの捜査から始めるのが常套か。
　明日にでも向かってみるか」
スペードは立ち上がり言うとマリアンが反応した。
マリアン「え？おいまさか私にもセダンに行けって言うんじゃ？」
邦佳「みんな歓迎してくれますよ」
マリアン「な訳ないだろ！なあジェニファー頼むから変わって…あれ？いない」
マリアンが気がつくと誰もいないことに気がついた。
周りには誰もいなかった。

数時間後の日付が変わった頃、ディジョンはすっかり日が暮れてい

た。
そして自分の部屋でスペードはくつろいでいた。
そのドアを誰かがノックした。
スペード「誰だ？こんな時間に」
警戒しながらドアを少しだけ開けると意外な人物が立っていた。
スペード「驚いたな、あんたが訪ねてくるとは。
何の用だ？」
キーラ「昼間は邪険に扱って済まない。
私が彼と違って君を信頼しているように見られたくなくてね。
ぜひ君と話がしたいと」
ウィスキーの瓶と氷の入ったグラスを二つ持ったキーラが立っていた。
スペードは警戒しながらドアを開け彼女を迎え入れ二人でウィスキーを飲み始めた。
スペード「で？話って何だ？」
キーラ「君は民間人だ、つまり部外者と言ってもいい。
つまり、内通者の疑いのかからない唯一人の品滅だ。」
スペード「俺を味方につけようと？」
キーラ「ご名答。
さっきのレポートは？」
薄暗い部屋の中で二人の会話が始まった。
二人共互いの腹の内を探るかのようだった。
スペード「ここだ、常に身から離さないようにしている。」
キーラ「いい心がけだ。
それが唯一のオリジナルなのか？」
スペード「後は俺のここにあるだけだ」
キーラ「ますます結構」
キーラがニヤリと笑う。
そしてその瞬間、スペードは何かを盛られた事に気がつき床に倒れた。

キーラ「そのレポートと君が消えればもうこの件を手繰る糸はないわけだ。
　そろそろ効いてきたようだな」
スペード「てめえ…何か盛りやがったのか…？」
キーラ「君のグラスの氷に致死量のジキタリスを混ぜておいた。」
キーラはスペードのグラスの氷に猛毒のジキタリスを混ぜていたのだ。
キーラは床に落ちたスペードの帽子を手に取る。
キーラ「本来ならもうしばらく内部から揺さぶりをかけるつもりだったんだが、そのレポートの始末を優先しろと上層部からお達しがあってね。
　ニューヨークの君の職場でもそういう事はあるだろ？
　悪く思わないでくれよ」
キーラがスペードに向かってそう言った直後、窓の外から金属音が響いた。
次の瞬間、窓の外から大量の銃弾が浴びせられ部屋のあらゆるものが穴だらけとなった。
キーラは咄嗟に伏せ無事だったが銃声がやみ周りを見る。
キーラ「く、何が起きた」
窓の外の硝煙が晴れるとそこにはホスバッハと彼に率いられた兵士達がいた。
そして同時に後頭部に冷たい金属がつきつけられる感覚を感じた。
トニー「まだ生きてたか裏切り者。
　早いとこ楽になろうぜ？」
キーラ「アントニー・コルレオーネ」
振り返るとそこにはＭ１９２８を持ったトニーが彼女の背中を踏みつけて見下ろしていた。
キーラ「射撃の腕はトップクラス、どういうわけか裏社会にも通じ殺しのテクニックはトップクラス。
　だが５０６配属以前の記録が一切なし、何者だ」
トニー「何者？マーダーインクの社員ですぜ。

本日は裏切り者に死を配達に来たのさ」
ホスバッハ「クリス・キーラ、貴様を国家反逆罪、情報漏洩、不正に機密情報にアクセス、窃盗、爆破、テロ容疑で逮捕する。」
ホスバッハが罪状を読み上げる。
すると部屋にプレッツとウィッチ達が入ってきた。
キーラ「気づいていたとはね、何時からだ?」
プレッツ「我々の情報網を舐めないでほしい。
軍の情報部が王党派の強い影響力を受けている事自体とっくの昔に知っている。
そもそも君らの初動が早すぎた、それだけで疑いの目を向けるのには十分だ。
そして更なる調査を行い、貴様が偽物だと確信した。
君の逮捕はこの国から背信者共を駆逐する最初の動きなのだよ。
これから君には死よりも辛い尋問の後、全てを話してもらう。
話せなくともサインさえできればよろしい、後でどうとでもなるからね」
キーラ「成程、君ら連合軍を甘く見ていたようだ」
ジーナ「こちらからも訊かせてもらおう。
なぜ５０６を狙う?」
ジーナがキーラに聞いた。
それを聞いて彼女は不敵な笑みを浮かべる。
キーラ「ふ、全てはバランスの上に成り立っている。
私は天秤の均衡を保とうとしているのに過ぎないんだよ。
そうそう私の部下の諜報員を責めないでくれ。
彼らはただの駒、何も知らない。」
スペード「あんた何者だ?」
立ち上がりスペードが訊いた。
キーラ「そろそろ時間だ」
そう呟いた瞬間、大爆発が起きた。

大爆発の音で外では騎兵の馬が暴れ始め大騒ぎになり部屋でもトニーがよろめいた。
その瞬間キーラは転がりトニーの足を退けると足を引っかける。
トニーは倒れるがすぐにトミーガンを構え撃つ。
キーラは回し蹴りをしてトミーガンを払うと窓から逃げようとする。
邦佳「また爆発!?」
キーラ「セダンだけに打撃を与えたら不公平だろ?
さっきも言ったがバランスだよ」
ホスバッハ「クソ!逃がすな!撃て!」
マリアン「逃がすか!」
ジェフ「立ち上がれクソッタレ共!あのサバノビッチを追いかけろ!」
マリアンとジェフが立ち上がり窓から逃げようとするキーラを追いかける、だが窓の外には驚きの光景があった。
キーラ「さて、私を捕まえられるかな?」
そこには黒いユニットを履いて飛んでいるキーラの姿があった。

第17話：夜と霧

マリアン「あいつ…」
ジェフ「クソ！あの雌犬ウィッチだったか！」
トニー「裏切り者を逃がすな！」
黒いストライカーユニットを履いたキーラを見て彼女達は驚いた。
そしてすぐに行動した。
マリアン「く、私も出る！」
ジェフ「俺も行くぞ！」
トニー「俺が仕留める！」
邦佳「私も…あ！私ストライカー持ってきてない！」
マリアンとジェフ、そしてトニーが先に格納庫に向かう。
それを追い邦佳も向かおうとした。
だが彼女はストライカーを持ってきていなかった。
ジーナ「黒田中尉は私のＰ―５１Ｄを！」
邦佳「はい！」
カート「残りは消火だ！急げ！
黒田！あの愛すべきバカたちを頼む」
邦佳「うん！」
邦佳はカートの声に振り返りうなづいた。
するとスペードが彼女を止めた。
スペード「おい！私も連れてけ！」
邦佳「無理ですよ刑事さん、ウィッチじゃ…」
スペード「これでどうだ！」
渋る邦佳に彼女は1ドル札を取り出した。
邦佳は二つ返事でＯＫすると追いかけ始めた。

先にキーラを追いかけたマリアンはその最高速の速さからジェフやトニーを放置して先行していた。

そして彼女を見つけていた。
マリアン「見えた！」
キーラ「やれやれ意外と熱くなるタイプだな君は。
丸腰でどうするつもりだカール大尉？」
マリアン「丸腰はそっちも同じだろ！」
キーラを捕まえようとマリアンは手を伸ばすがキーラは彼女を簡単に躱してしまった。
キーラ「最高速に振りすぎている。
まるで猛牛だ、動きが大きすぎて話にならん」
躱してマリアンを評価する。
彼女は速度に極端に振る調整をしてたため細かい動きが大の苦手であった。
そのため低速ながら格闘戦を得意とするＦＭ―２を使うカートとは模擬戦での相性が極端に悪いのは余談だ。
そしてキーラは紐を取り出し両手で構えた。
キーラ「Ｂ部隊のウィッチは極力傷つけるなとのことだったが仕方ない。」
そう言うと彼女はマリアンの首に紐を巻き付けた。
キーラ「空中で縊り殺される最期なんて想像していなかったようだな」
マリアン「なっ…！」
キーラ「海兵隊ではこういう戦い方は教わっていないのか？」
首を絞めるキーラにマリアンは必死で抗う。
マリアン「当り前だ…ウィッチの力は…人を殺すためにあるんじゃない！」
キーラ「そうか、アデュー、マリーン」
スペード「ストップだアホ！」
ジェフ「させるか！ビッチ！」
マリアンにとどめを刺そうとした瞬間、突如後頭部と背中に衝撃と銃声が響き紐が切られた。
マリアンを追いかけていたジェフとトニーが間一髪で助けに入り

ジェフが持っていたM１９１１の銃床でキーラの頭を殴り邦佳とスペードが体当たりしトニーが紐を拳銃で撃ち抜いたのだ。
キーラ「コルレオーネ、黒田、スペードそれにフィッツジェラルド？」
マリアン「助かった…」
キーラは振り返り驚いた。
ジェフ「ランバージャック！貴様は海兵隊で何を習ったボケ！
説教は後だ！てめえをぶち殺す、我らが兄弟を殺そうとしたからだ」
スペード「ああ騎兵隊の登場だぜ！」
邦佳「第７騎兵隊登場！」
トニー「裏切り者には死の制裁を」
キーラを取り囲むように前にマリアンと邦佳達が、後ろにジェフとトニーが回り込んだ。
キーラ「時間をかけすぎたか。
振り切れないなら此処で肩をつけるしかないな」
キーラは月光を背にナイフを取り出す。
キーラ「忠告しておくがこちらは空中での各当選の訓練を積んでいる」
マリアン「あんたが軍にいたら間違いなくエースだよ」
次の瞬間、キーラはナイフを構え邦佳達に突進する。
キーラ「魔法力の発現とほぼ同時に私は親に売られた、軍のスカウトが来る前の事さ！」
邦佳「わ！」
キーラは邦佳に切りかかり間一髪髪の毛が切れただけで済んだ。
邦佳は一旦離れるとキーラに向かって語り掛けた。
邦佳「やめましょうよ！こんな事！
ウィッチ同士分かりあえるはずですって！
戻ってちゃんと話をしましょう！
きっと悪い奴に命令されてやったんですよね!?」
キーラ「ふ、君のそう言うところ嫌いじゃなかったよ。」

ジェフ「よく歌うカナリアだ！」
キーラが邦佳達に夢中の間にジェフが拳銃を発砲するが弾はシールドに止められた。
キーラ「私もグリュンネ少佐同様ウィッチとしては年齢的な限界に来ていてね。
シールドは張れるが完全に防ぎきれる自信はない。
だから撃たれると非常に不愉快なんだ！」
キーラはジェフの方に向かう。
キーラ「チェック…」
ジェフ「ふ、Ｂｇ６＃」
トニー「フールズ・メイト」
キーラ「ぐふ！」
キーラのナイフをジェフが躱すとキーラをトニーが襟首を掴み放り投げ回し蹴りを食らわせる、更にジェフがみぞおちを殴る。
その衝撃でキーラはナイフを落とした。
ジェフ「まだまだ！」
更にジェフは彼女の両肩を掴むと頭突きを食らわせ、一旦押して放し右フックを食らわせる。
トニー「ニューヨーク一の殺し屋を舐めるな」
その衝撃で彼女は右を向くとトニーがアッパー、更に股間を蹴り上げ、顔面にストレートを打ち込んだ。
そして最後にジェフがよろめくキーラの首をスリーパー・ホールドで絞める。
ジェフ「てめえは絶対許さねえ」
キーラ「ぐっ…」
ジェフ「が…」
キーラは肘鉄をジェフの体に打ち込みさらに右腕に噛みつくが彼は離さない。
キーラ「この…」
ジェフ「スタミナ勝負だ…！マリンコを舐めるな…！
フライングタイガースを舐めるな…！」

ジェフが負けずに絞め続けると段々力が弱くなりとうとう糸が切れたような状態になった。
トニー「こちらコルレオーネ、奴を捕らえた。」
スペード「そいつを渡せ」
ジェフ「ああ」
ジェフは落ちたキーラの体をやってきたスペードに渡す。
スペードはキーラの両手に手錠をかける。
ジェフ「痛ぇ、あの雌犬かむ力だけは一丁前だ。」
マリアン「大丈夫かジェフ？」
ジェフ「ああ、大丈夫だよ」
キーラの噛みつきでジェフの腕からは血が流れていた。
それをマリアン「大丈夫なわけないだろ。腕を出せ。止血してやるから」
マリアンはジェフの腕を取るとハンカチを取り出し止血した。
ジェフ「ありがとな、マリアン。
　ところで勝者へのキスはないのか？」
マリアン「は？」
ジェフ「冗談だよ冗談」
ジェフがふざけた事を言うがマリアンは冷たい表情で返す。
ジェフが取り繕うがマリアンは無視し止血をする。
マリアン「終わったぞ」
ジェフ「ありがと、マリアン」
止血が終わりジェフが感謝を伝えるとマリアンは返事の代わりにジェフの額にキスした。
ジェフ「ふぇ？」
マリアン「して欲しかったんじゃないかったのか？
　さ、さっさと帰るぞ」
マリアンは顔を真っ赤にしてそそくさと基地へと戻って行った。

翌日昼過ぎ、ディジョンのB部隊基地にはこの基地には似つかわしくない高級将校たちが集まっていた。
「まだ奴は落とせないのか」
「上からも文句が五月蠅いんだ。」
「ホスバッハ、何とかならんか?」
それは第4騎兵師団師団長ルートヴィッヒ＝フェルディナント・プリンツ・ツー・ザイン＝ヴィトゲンシュタイン＝ベアレブルク大佐と第8騎兵師団師団長ヨアヒム・ルモーア大佐、第22騎兵師団師団長アウグスト・ツェーエンダー大佐たちだった。
彼らは昼食に出されたリベリオン風のステーキを食べながら今同時並行で基地内で行われているキーラの取り調べをツェーエンダーと旧知の仲であるホスバッハに聞いていた。
ホスバッハ「残念ながら奴は黙秘を続けています。」
ホスバッハは珍しく緊張していた。
というのもこの中にいるツェーエンダーとルモーアはかつての上官であった。
二人はブダペスト包囲戦の際の第22、第8SS騎兵師団の師団長だった。
ヴィトゲンシュタイン「早くしないとガリア政府に先を越される。ガリア国内での殺人事件で先に送検されたらこっちの管轄がから離れるぞ」
ルモーア「拷問でも何でもしてくれ」
ツェーエンダー「もういいよ、適当にサインだけさせろ。調書は後で幾らでも改竄できる」
ホスバッハ「分かりました」
ツェーエンダーはしびれを切らしイライラしていた。
というのもキーラのパリへの移送が行わなければガリア軍諜報部の武装解除は出来なかった。
何せ連合軍がガリア政府の一部機関をテロ容疑で武装解除するという前代未聞の事態にボックやハイドリヒでさえ慎重にならざるを得なかった。

彼らのイラつきの原因たるキーラは別の一室でジーナとカートの取り調べを受けていた。
だが二人の取り調べに黙秘を続けていた。
すると部屋のドアがノックされトニーが入ってきた。
ジーナ「トニー」
カート「どうしました？」
トニー「ホスバッハとかはかなり焦ってる。
今すぐにでもパリに送りたいらしい」
トニーが外の状況を伝えた。
ジーナ「そうか」
トニー「中佐、俺達にやらせてくださいよ」
トニーの提案にジーナは数秒考えた後結論を出した。
ジーナ「いいだろう、行こうフーヴァー少佐」
カート「分かりました、危害は加えないように」
トニー「あいよ」
ジーナとカートはトニーに交代した。
トニーはキーラと向かい合わせに置かれた椅子に座り間に置かれたテーブルに足を組んで座った。
トニー「クリス・キーラ、何時から名乗ってる？」
キーラ「６８日だ、新任の諜報部将校を名乗っていた期間はね」
トニー「６８日、２か月と少し前か。」
トニーの質問に答えた。
そして二人の静かなやり取りが始まった。
トニー「生まれは」
キーラ「忘れた」
トニー「親は」
キーラ「覚えていない」
トニー「育ちは」

キーラ「さあ、何処だったか」
トニー「生まれはいつだ」
キーラ「レディーに歳を聞くのは失礼だと習わなかったか？」
トニー「誰に育てられた」
キーラ「色んな人だ」
トニー「誰から学んだ」
キーラ「知らない人たちだ」
トニー「何をしに来た」
キーラ「バランスを保ちに」
トニー「貴様は誰だ」
キーラ「その言葉を丸ごと君らに返そう。
　君らは何処から来たのかね、どこで生まれ、何処から来て、何処に行きたいのかね」
キーラの逆質問にトニーは笑い始めた。
トニー「ふ、フフフハハハハハ!!!
　良いジョークだ。」
キーラ「それはどうも」
次の瞬間、トニーが拳銃を構えた。
トニー「面白い奴だ、殺すのは最後にしてやる」
キーラ「まるで中盤で殺されそうだな」
トニー「君の質問について特別に答えてあげよう。
　ニューヨーク、ニューヨーク生まれのニューヨーク育ち」
キーラ「親は」
トニー「荷役業経営者」
キーラ「生まれは」
トニー「１９１５年２月１４日」
キーラ「誰に育てられた」
トニー「親と教師たち、そしてゴットファーザー」
キーラ「何をしに来た」
トニー「自由と権利を与え、悪と圧制者からの解放」
キーラ「何処から来た」

トニー「こんな世界を想像したことがあるか、ネウロイとウイッチが存在せず、アッティラや始皇帝、イワン雷帝をも凌ぐ極悪の虐殺者がヨーロッパを支配しただけの世界を」
キーラ「何とも恐ろしい世界だな。」
トニー「その世界に自由と権利を齎すべく新大陸と日の沈まぬ帝国と北の大熊が戦った世界を」
キーラ「御伽噺みたいだな」
トニー「この世界の方が御伽噺ではないか、科学では説明できないような代物が飛び交い殺し合う世界の方が」
キーラ「面白い考え方だ。気に入ったよ。」
すると突如、ドアがノックされた。
トニー「はい」
ジーナ「トニー」
入ってきたのはジーナだった。

３０分ほどした後、キーラは黒づくめの男に連れられて基地に止められたシトロエン・トラクシオン・アバンに乗り込もうとしていた。
プレッツ「連中に先を越されるとはな、どれもこれも馬鹿共がさっさとサインさせなかったのが悪い。」
ホスバッハ「ああ、諜報部が先に出てくるとはな。
どうする?監視をつけるか?」
それはパリから来た諜報部の人間がキーラの身柄を引き取りに来たのだ。
未だ送検もパリへの移送も手続きを終えていないため連合軍としては引き渡す以外に選択肢はなかった。
その事にホスバッハもプレッツもツェーエンダー、ヴィトゲンシュタイン、
邦佳「じゃあ本物のクリス・キーラさんはもう…
あのキーラさんは?」

スペード「なりすました誰かさ。
　彼奴がマーフィ殺しを突き止める唯一の手がかりだってのに！」
マリアン「諜報部も身内が殺されて躍起になってるのかもな」
スペードは悔しそうに吼えた。
キーラの身柄が離れることは真相究明がより一層困難になることを意味した。
トニー「あの連中が偽物とかないよな？」
ジーナ「書類上に不備はない」
カート「だが疑うには十分だ」
カートが不安を漏らす。
彼女と迎えがグルという可能性もありカートは信用していなかった。
ホスバッハ「ああ、その通りだ。
　だから監視をつける」
トニー「監視？」
ホスバッハ「俺の乗ったキューベルワーゲンと駆逐戦隊群〝ガリア〟の兵士達の乗ったシュタイヤー１５００を２台監視に付ける。」
ホスバッハは監視に兵士達を乗せた車両２台と自分の乗ったキューベルをつけるつもりだった。
それを聞いて珍しくジェニファーとトニーが動いた。
ジェニファー「あの、隊長、私がパリまで同行します」
トニー「ホスバッハ少佐、俺にも付いて行かせろ。」
ジェニファーはジーナに、トニーはホスバッハに志願した。
ジェニファー「諜報部もそれくらいなら拒まないと思いますから」
トニー「あんたらだけじゃ不安だ。
　お前らに俺より腕の立つ殺し屋はいるか？」
ジーナ「分かった、無理はするな」
ホスバッハ「いいだろう」
二人をジーナとホスバッハは許可した。
ジェニファーはキーラの乗ったシトロエンに、トニーはキューベル

ワーゲンの助手席に座り武器と弾薬を乗せた。
そして一行がパリへと出発した。

第18話：カーチェイス・イン・パリス

その日の7時過ぎ、日が落ちた頃にジェニファー達の車列はパリ市内に入った。

車列は先にパリの連合軍ガリア軍行政司令部に向かう予定だった。

トニー「やっとパリか」

ホスバッハ「ああ、問題も起きずこれで終わりだな」

キーラ達の乗るシトロエンの後ろを走るキューベルの助手席に座ったホスバッハと後部座席に座ったトニーはやっと仕事が終わると思い煙草を吸ったり噛んだりしていた。

それはシトロエンの前を走るシュタイヤーも同じで兵士達は緊張感から解放されていた。

車列はネオンが光り輝き活気に満ちた夜のパリの街を通り司令部の前で停車した。

司令部の前では司令部の警備部隊とハイドリヒが待っていた。

ハイドリヒ「ホスバッハ君」

ホスバッハ「閣下、例の人物を連れて来ました。」

ハイドリヒ「わか…」

返事しようとした瞬間、突如シトロエンのエンジンが吹かされると急発進した。

ホスバッハ「な！急げ！追いかけろ！」

ホスバッハは急いでキューベルに走り飛び乗るとシトロエンを追いかけ始めた。

更にそれに遅れて2台のシュタイヤーと司令部の警備部隊からトラックや車両が追いかけ始めた。

ジェニファー「うわ！」

キーラ「く」

その頃シトロエンの車内では突然の急発進にジェニファーが驚いていた。

運転手が車を急発進させ夜のパリの街を疾走する。

ジェニファー「一体何が起きたんですか!?」

男Ａ「チッ、奴ら追いかけてきやがった」
すると男はミラーを見て後ろからホスバッハ達が追いかけてきたことに気がつくと拳銃を取り出し窓を開け身を乗り出した。
キューベルではホスバッハがＳｔｇ４４を、トニーがトミーガンを取り出していた。
トニー「クソ、油断した！」
ホスバッハ「ああ！運転手！車をあの車の横につけろ！」
運転手「了解！」
ホスバッハが運転手に指示した直後、車から男が撃った。
弾はキューベルのフロントライトを破壊した。
ホスバッハ「撃ってきやがったか」
ホスバッハはＳｔｇ４４を構えて撃ち始めた。
するとシトロエンは車線変更し前を走っていたトラックの陰に隠れて躱す。
トニー「この！」
ホスバッハ達は追いかけて加速しトラックの前に出ると僅か２メートル右にシトロエンが現れた。
後部座席では男が拳銃を構え撃った、弾はキューベルの右前輪にあたりパンクさせる。
ホスバッハ「うお」
トニー「お返しだ！」
トニーはその返事にトミーガンを構え左の後部車輪を銃撃し破壊した。
その光景はジェニファーには手に取るように見えていた。
ジェニファー「やめてください！誰か死んじゃいますよ！」
だが男は無視していた。
そして次の瞬間目を疑う行動にトニーが出た。
キューベルは猛スピードでシトロエンに体当たりし車線から追い出し片側３列の車線の一番右からさらに歩道に無理やり乗り上げさせた。
ジェニファー「うわ!?うわわわわわわわ!!!!!」

シトロエンは歩道の椅子やテーブル、屋台、植え込みなど歩道にある全ての物を吹き飛ばしながら突っ走る。
その間に後部座席の男と助手席の男はキューベルに撃っていた。
弾は街路樹やそばを走る別の車、そしてキューベルに当たり跳ね飛んでいた。
一方のキューベルはジェニファーが乗っているため撃てなかった。
トニー「下手に撃つなよ、ジェニファーに当たるぞ」
ホスバッハ「分かってる、飛び乗るか？」
トニー「そのつもりだ」
するとトニーはトミーガンを降ろし右手に拳銃を持った。
ホスバッハは運転手に指示した。
ホスバッハ「もう一回体当たりするぞ！」
キューベルは猛スピードで加速すると歩道に乗り上げシトロエンにまた側面から体当たりした。
その瞬間トニーは後部座席からジャンプしシトロエンの屋根に飛び乗った。
男Ａ「クソ！上に飛び乗ったぞ！」
男Ｂ「分かった！」
すると助手席の男が天井に向かって拳銃を撃つ。
弾は天井を突き抜けてトニーの頭を掠る。
トニー「ヘタクソが」
トニーはＭ１９１０の薬室に弾を込めると助手席側の天井ルーフを掴み助手席ドアに足をかけ助手席に向かって発砲し弾は天井を警戒していた助手席の男に当たり倒れる。
ジェニファー「トニーさん！」
男Ａ「しまった！」
後部座席の男、更に運転手も撃ち始めた。
トニーは天井に戻り躱す。
ジェニファー「やめてください！」
キーラを挟んで反対側に座っていたジェニファーが男の拳銃を掴む。

その隙にトニーは拳銃をホルスターに戻し天井を転がり後部座席左側の窓から車内の男を背後から蹴り飛ばす。
トニー「どりゃ！」
男Ａ「ブハ！」
男はキーラの膝に押し倒された。
だがすぐに馬乗りになるトニーをどけると蹴り飛ばし逆に車から落とそうとする。
トニーは咄嗟にドアのフレームを左手で掴み耐えるが今にも落ちそうだった。
男は床に落ちた拳銃を拾いトニーに向け引き金を引いた。
男Ａ「クソ、弾切れだ！」
トニー「貰った！」
トニーは拳銃を取り出し構えようとする、だが撃たずに飛び上がり天井に戻った。
次の瞬間ドアが街路樹にぶつかり弾け飛ぶ。
男Ａ「何処行った！」
男は弾を再装填すると周りを見てトニーを探す。
次の瞬間、フロントガラスが大きな音を立てて割れた。
前を見るとトニーがいた。
トニー「アロー、サレンダーモンキー」
男Ａ「この！」
ジェニファー「やめてください！」
男がトニーに撃とうとした瞬間、ジェニファーが掴みかかり弾はトニーに当たらず運転手の後頭部を直撃し殺害する。
ジェニファー「キャー！」
それに気がつきジェニファーが叫び声をあげる。
運転手の死体はハンドルの上に落ち足はアクセルに置いたままだった。
そのまま車は通りを疾走しあらゆるものを弾き飛ばす。
男は運転手の死体の奥にいるトニーに向かって撃つがトニーは運転手の死体を盾にして防ぐ。

男は立ち上がると座席の間から無理矢理前方の座席に向かおうとした。
男Ａ「ぐわ！」
次の瞬間、男は蹴り飛ばされキーラの膝の上に押し倒される。
トニーは男に掴みかかると運転席に放り投げドアを開けた。
トニー「いい夢見ろよ！」
そして外に運転手の死体ごと蹴り落そうとする。
だが運転手の死体は落ちたが男は足をトニーの足に絡めて上半身だけ出した状態で耐えた。
そして腹筋を使って起き上がるとトニーを殴る。
さらに左手でハンドルを操作して車を右に左に揺らす。
そうしているうちにシトロエンは歩道から路上に飛び出し、更には対向車線にまではみ出した。
トニーは男のパンチをガードし隙を見て殴る。
そして一瞬前を見るとハンドルを掴んで左に切った。
その隙に男がナイフを取り出した。
男Ａ「これで終わりだ！」
トニー「ああそうだ！」
次の瞬間男の上半身とドアが橋の欄干に激突し吹き飛ばされた。
トニーは男の下半身を道路に捨てると運転席に座った。
トニー「ジェニファー、大丈夫か？」
キーラ「ああ、大丈夫だとも」
次の瞬間、トニーの後頭部に冷たいものがつきつけられた。
トニー「何をする気だ？」
振り返るといつの間にかキーラが手錠を外し拳銃を握っていた。
キーラ「簡単だ、車を止めて降りろ。」
トニー「そんな事をすれば俺の仲間に捕まるぞ？」
キーラ「あのカーチェイスと乱闘で見失ったか撒いてしまったようだぞ」
カーチェイスと乱闘で車はもはやどこを走っているのか分かっていなかった。

後ろを見るとどこにもキューベルやシュタイヤーは見えなかった。
トニー「このままクラッシュさせてもいいんだぞ？」
キーラ「そうすれば彼女も無事では済まないことになるぞ」
キーラはトニーを脅した。
トニーはしぶしぶ車を止め、降りた。
そしてシトロエンは夜のパリに消えて行った。
トニー「クソ！」
ホスバッハ「コルレオーネ少尉、どうした！」
数分後、ホスバッハ達がやってきたが無力だった。
既に車は消えていた。

翌日の3月19日夕方、セダンでは重苦しい空気が広がっていた。
パリから戻ってきたトニーとホスバッハはロザリー達幹部に状況を報告していた。
ロザリー「それで、状況はどうなの？」
ホスバッハ「キーラもデ・ブランク大尉もきれいさっぱり消えた。
幸い今の所死体が見つかったって報告はない。
両者ともパリ市内に未だ潜伏中というのが上の見立てだ。
だがガリア政府内に妙な動きを察知したらしい」
ジーナ「妙な動き？」
ホスバッハが中央に妙な動きがあることを伝えた。
この動きは連合軍が注意を惹く程不自然であった。
ホスバッハ「ああ。諜報部がキーラと逃亡中のデ・ブランク大尉をキーラの協力者と断定したらしい。」
ホスバッハが言った瞬間後ろのドアが開き盗み聞きしていたウィッチ達が乱入した。
マリアン「嘘をつけお前！ジェニファーが手引きしたって言うのか!?」

邦佳「そうですよ！あり得ませんったら！」
ジーナ「お前たち…」
乱入したウィッチ達は口々にその可能性は有り得ないという。
カーロイ「もうちょっとうまいジョークを言ったらどうだ？」
ジェフ「もし本当だったら俺があいつを銃殺刑に処すぞ！」
ハインリーケ「Ｂ部隊とはいえ仮にもブランク大尉は５０６の一員、あり得ぬな」
全員が強い言葉で否定する。
それほどあり得ない可能性だった。
ホスバッハ「落ち着け、こんな戯言を言ってるのは軍の諜報部だけだ。
　連合軍もリベリオンもそれどころか公安警察でさえあり得ないと断定している。」
トニー「連中の狙いは簡単だ、内部に裏切り者がいたという事実を表沙汰になる前に関係者ごと口を封じるんだよ。
　この共和制を標榜する国で今時絶対王政を主張し自由と権利を否定するような輩が政府内に巣食っているという事実はただでさえ低い現政権の支持率がさらに低くなり政権が空中分解する可能性だってある」
二人は明確にその可能性を否定した。
トニー「噂によればこの件を調べてるのは我々だけじゃない、ガリア軍諜報部も動いてる。
　発見次第射殺なんて物騒な命令も出ているらしい」
トニーの話にウィッチ達の顔が青ざめる。
そしてロザリーが立ち上がった。
ロザリー「そんな事はさせないわ！」
ジェニファーを射殺させるなど絶対にあってはならない事である。
トニー「ああ、この件で上は静観はしないつもりだそうだ。
　あらゆる手を使って二人を探し出し保護しろって命令が出た。」
ホスバッハ「それだけじゃない、５０６からも人員を抽出し探し出

せだとさ。
　タイムリミットは４日後の正式発足式典までだ」
ホスバッハが上の意向を伝えた。
それは何としても４日後に控える式典までに探し出せというものだった。
そしてその任にハインリーケが志願した。
ハインリーケ「ならばこの妾が…」
ホスバッハ「駄目だ、有名人のあんたが動けば否が応でもバレる。
　この件は水面下で行いたいんだ」
即ホスバッハが拒否する。
この連合軍の大失態を隠すためこの件は水面下で行われるためハインリーケのような有名人は目立って仕方なかった。
ホスバッハ「だからこの件は、君らに依頼できるかね？」
そう言うとホスバッハはある人物を見た。
その人物とは、邦佳、貫二郎、カーラ、アラン、トニー、そしてスペードだった。

時は少し戻り3月１９日の昼間、パリ市内は軍による検問と厳重な警備が行われあらゆるところに兵士が展開していた。
市内にあるリヨン駅そばの売店では二人のコートを着た人物がいた。
キーラ「メルシー」
キーラとジェニファーだった。
周りには兵士だけでなく怪しい動きをする人物もいた。
キーラ「諜報部はパリを封鎖する気で人員を配置しているようだがバレバレだな。
　監視に慣れていない者まで動員したのは間違いだ。
　軍に至ってはそもそも隠す気さえないようだ」
キーラはジェニファーに言う。

キーラから見れば怪しい人物、つまり諜報部の監視はお粗末極まりないものだった。
するとジェニファーが訊いた。
ジェニファー「あなたはどうして平気なんですか？
目の前で３人も…」
それは一昨日の夜のカーチェイスと乱闘だった。
あの中で彼女は僅か１、２メートル前で激しい乱闘と３人の人間が死ぬ様を見ていたのだ。
しかも一人は彼女が事実上殺したも同じだった。
キーラ「お人よしもいいところだな。
あの乱闘が無ければ君も私も口封じで何処かで殺されていたんだぞ？
あの連中は軍諜報部の中でもとりわけ過激な一派でね、我々の組織とは同盟関係にあったんだ。
まあ、あの動きからすると一方的に同盟関係は破棄されたようだが。」
ジェニファー「あなたは、いえ、貴方たちは一体？」
キーラ「我々はガリア本来の姿を守ろうとする者さ。
高貴なる王家とそれを補佐する絶対の統治、そのためならばこの手を地に染めるのも厭わない」
ジェニファーに向かいキーラが冷徹な声で言った。
そして彼女の背中に手を回し歩き始めた。
キーラ「さて、先を急ぐとしよう。
君と逃げている以上、君も共犯の扱いだ。
君には大人しく私とブリタニアのスコットランドヤードに投降してもらう。
リベリオンの介入を一番面白く思っていないのはブリタニアだからな。」
ジェニファー「結果、セダンの爆破事件はリベリオンの妨害工作と断じられリベリオンは５０６から手を引かざるを得なくなる…」
キーラ「ご名答、５０６は欧州貴族だけで結成するのが正しい姿な

のさ。
　察しのいい君にもう一つ教えておこう、この計画は君を手に入れることだったんだよ。」
キーラが衝撃的な事を言う。
それに一瞬ジェニファーは動きを止めた。
ジェニファー「なんですって…」
キーラ「いや、正確に期そう。
　上の命令はリベリオンのウィッチを一人確保すること。
　君を選んだのはまあ、私の判断だ」
ジェニファー「どうして私なんです？」
キーラ「リベリアンでありながらしかも貴族の末裔、君の存在はＡとＢの両方の絆を強めることもあれば対立を深める材料にもなりうる。
　そして、何より君は優しい、操りやすいんだよお人形さん」
キーラはジェニファーの耳元で囁いた。
キーラ「君は私の罠に嵌った。
　私はわざと君の前で怪しい振る舞いをしてみた。
聡明で責任感の強い君は私の予想通り動向を申し出た。
　唯一コルレオーネ少尉もう同行しあのような事態になるのは予想外だったがね。」
　キーラの言葉を聞いてジェニファーは自分が罠に嵌められていたことに気がつき青ざめた。
　1から１０まで彼女の策に嵌っていたのだ。
キーラ「ククッ、良い子だ。
　それでこそ君をおびき出し選んだ甲斐がある。
　最初に言った通り私に逆らわない方が良い、まだ５０６の基地内には組織の内通者が潜んでいる。
　君が抵抗しなければ５０６の他の隊員には手を出さないと約束しよう。」
　キーラの脅しにジェニファーは屈するしかなかった。
だが彼女は知らなかった、彼女と彼女の組織はかつてヨーロッパで

未曽有の大虐殺を行い、血も涙もない残虐な虎の尾を思いっきり踏み抜いてしまった事に、虎の全ての仲間に喧嘩を売り、そしてひいてはこの国で最も影響力と武力を持つ組織の全てを敵に回し虫けらの如く駆逐されようという事を。

第19話・シークレット・ミッション

翌日早朝、セダン基地の前にはジープとシムカ8が用意されジープには邦佳、カーラ、スペード、そして貫二郎が、シムカに紺のスーツを着たアランと黒のスーツを着たトニーが乗り込んでいた。

アラン「準備は出来たか？」

トニー「ああ、人数分のサプレッサー付きステン、グリースガン、ウェルロッド、拳銃は持った。

荷物と偽の身分証明書も。

これがお前の分」

トニーは運転席に座るアランに身分証明書を渡した。

そこにはアラン・ド・メーストルではなくフランコ・レスコヴァーと書かれていた。

アラン「フランコ・レスコヴァー？

俺はセルビア人か？」

トニー「セルビア系ガリア人って設定だそうだ。

お前セルビア語できるか？」

アラン「セルビア語は少しだけ、スロベニア語なら得意だが」

トニー「そ、俺なんてロマーニャ系リベリオン人のルイジ・ヴェルコッティだぞ。

肩書はウィッゾチョコレート株式会社副社長。」

トニーの持つ身分証にはルイジ・ヴェルコッティと書かれていた。

これはこの任務が連合軍の極秘であるため軍の身分証の代わりに連合軍司令部が作った偽物を用意したのだ。

更に軍服の代わりにスーツと帽子を着ていた。

アラン「じゃあ出発だ」

一行はパリを目指して出発した。

数時間後、セダンでは式典の準備が進められていた。

基地の外ではホスバッハと警備部隊の兵士達が軍楽隊と共に行進の訓練中だった。
ホスバッハ「かしらー右！敬礼！」
軍旗を先頭にホスバッハ、第1中隊長のモザンドル中尉と第1中隊、ムグラー第2中隊長と第2中隊、ファウルミュラー中尉と第3中隊、アウプケ中尉と降下猟兵中隊、最後にベゲマン中尉の戦車中隊がゆっくりと行進していた。
それを見下ろす基地内ではイザベルがピアノを弾き、それに合わせてカーロイがバイオリンを弾いていた。
そして一曲終わると手を止めた。
イザベル「黒田さんたちそろそろパリに到着したかな？」
ハインリーケ「恐らくな」
イザベルの独り言にハインリーケが答えた。
ハインリーケは備品の剣を拭いていた。
ハインリーケ「しかし、こう暇では腕が鈍るわい。
いっそ景気よく大型ネウロイでも現れて…」
アドリアーナ「ふぁぁ、不謹慎だぞ姫様」
すると彼女の向かいのソファーで寝ていたアドリアーナが起きた。
ハインリーケ「いざネウロイが出たとなれば嬉々として飛び出してゆく者のセリフとは思えぬな。」
アドリアーナ「久々にやるか？」
アドリアーナがハインリーケを挑発するとその奥で書類作業中だったロザリーが叫んだ。
ロザリー「嘘でしょ!?
3週間も前に発注したのに今更キャンセル!?
設営部品のレンタル料が7％アップ!?
というか何このガソリンの予定支出量!?
これじゃ発足式に間に合わないわ！」
業者からの突然の連絡に驚いていた。
イザベル「黒田さんたちがブランク大尉を連れ戻す以前にお披露目の場が無いかもね」

カーロイ「ああ…そうならないように祈らないと…」
ハインリーケ「まあ、そもそもあやつらが順調に捜査を進めている姿が想像できんが…な」
ロザリーを見ながら不吉な事が頭をよぎった。

その頃、パリ市内ではカーラ達がカフェでお茶している頃、そのカフェの傍ではアランとトニーが車に乗っていた。
通りには諜報部の人間らしく怪しい人物だけでなく多数の兵士もいた。
「Ｏ　ｄｕ　ｓｃｈ▪ｎｅｒ　Ｗｅｓｔｅｒｗａｌｄ～♪
▪ｂｅｒ　ｄｅｉｎｅ　Ｈ▪ｈｅｎ　ｐｆｅｉｆｔ　ｄｅｒ　Ｗｉｎｄ　ｓｏ　ｋａｌｔ～♪」
アラン「Ｊｅｄｏｃｈ　ｄｅｒ　ｋｌｅｉｎｓｔｅ　Ｓｏｎｎｅｎｓｃｈｅｉｎ～♪」
車の横をヴェスターヴァルトの歌を歌いながら行進するカールスラント兵の歌を助手席に座るアランが口ずさむ。
そして腕時計を確認した。
アラン「ここで間違いないんだな？」
トニー「ああ、ペルピニャン通り５４番地の前で停車して待っていろって指示だ。
ここに協力者が情報を持ってくるはずだ」
二人は連合軍の協力者、つまるところスパイが情報を持ってくるのを待っていた。
煙草を吸いながら腕時計を確認するが周りにはそれらしき人がいなかった。
さらに言えばこの通りは駐車禁止であるため何時警察が来るか分からなかった。
すると突然誰かが車を叩いた。
アラン「ん？誰だ！今叩いた奴は！」

男「お前ら!ここは駐車禁止だ!さっさと行け!」
アランが窓から頭を出して周りを見るとコートを着て新聞を持った５０代くらいの男がいた。
彼が車を蹴って音を出していた。
アラン「済まねえ旦那、今人を待ってるんだ」
男「人を待ってるだって!?俺の家の前で女と会うんじゃねえ!」
男はアランの傍まで来ると持っていた新聞をアランに投げつけた。
アラン「分かったよ旦那、車を移動させるよ。
　行こう」
トニー「ああ」
二人は文句を言いながら車を移動させ近くの別の通りに車を止めた。
するとアランが気がついた。
アラン「おい、この新聞の中に何か入ってるぞ」
トニー「え?」
アランが新聞を捨てようと持つと新聞の中に何かが入っていた。
急いで新聞を開けると中にはＡ４サイズの紙十数枚が入ったファイルが入っていた。
アラン「ファイルだ」
トニー「中身はなんだ?」
アランはファイルの中の書類を取り出すと確認した。
中身は王党派の主だった動きと更なる情報提供者との接触方法だった。
アラン「スパイのファイルと情報だ。
　連中、今後二日以内にパリのどこかで爆弾テロを起こす気だ。」
トニー「は?本当か?」
アラン「ああ。場所は分からんがな」
その内容はパリ市内での何かしらのテロの可能性を示唆していた。
アラン「更なる情報を得るには、今日の１４時からエポック劇場で行われる映画天井桟敷の人々のＦ列の１３番のチケットを買って入

場しろだそうだ」
もう一つは情報提供者との接触法だった。
公開されたばかりの映画の指定された席を買って入場しろというものだった。
トニー「１４時ってことは1時間半後か。
エポック劇場ってどこだ？」
腕時計を確認したトニーが場所を土地勘のあるアランに指定された場所を聞いた。
アラン「確かミミュー通り８２５番地だ。
ここからなら大体２０分か３０分ぐらいだ。」
トニー「じゃああのバカたちを呼びに行ってくる」
アラン「気をつけろよ」
トニーは車から降りると邦佳達がいるカフェに向かった。
だがカフェには彼女達はおらず周囲を探し回り少し離れた公園で3人を見つけた。
トニー「おい！お前ら！どこ行ってるんだ！」
邦佳「あ！トニーさん！」
邦佳がトニーに気がつきを手を振った。
スペード「どうした？」
トニー「情報が手に入った、移動するぞ。
１４時からエポック劇場だ。それと、彼奴」
彼女達に今後の行動を伝えるとトニーは顎で近くのベンチに座る怪しい男を示す。
トニー「銃を持ってる、所属は知らねえがな。
あんまり実名を使うな、ルイジかヴェルコッティって言え」
貫二郎「分かりました、ヴェルコッティさん」
貫二郎が返事をする。
邦佳「じゃあ私達はなんて呼べばいいの？
映画のスパイみたいにコードネーム？」
貫二郎「いや、そこは下の名前でいいのでは？」
カーラ「じゃあ私はカーラで、こっちも邦佳って呼ぶから」

スペード「俺はサムだな、親しい連中はそう呼ぶ」
カーラ「よろしく、サム」
トニー「じゃあ急ぐぞ、適当に飯を食ってから劇場だ。」
トニーは邦佳達を連れて車に戻った。

それから1時間後、ミミュー通りの映画館は大盛況だった。
封切られたばかりの映画である天井桟敷の人々が大盛況でありこの日もたくさんの人が見に来ていた。
邦佳「映画館だ！映画観ていいの!?」
貫二郎「仕事だから多分駄目だと思うけどな…それにフランス語はさっぱり」
映画が観れると思い邦佳は興奮するがフランス語がさっぱりできない貫二郎は不安だった。
アラン「席採れるか?」
トニー「さあ?」
アランがその大盛況ぶりを見て隣でサンドイッチを食べ終わったトニーに聞いた。
スペード「ここで情報提供者と会うんだろ?」
アラン「ああ。」
アランはチケットの列に並び店員に注文した。
アラン「１４時からの天井桟敷の人々のＦ列の１０から１６番ってあるか?」
店員「Ｆ列ですね。
残念ながらＦ１０とＦ１４が。
代わりにＦ９とＦ１７番があります」
アラン「分かった、それで。子供2枚と大人４枚。」
店員「かしこまりました」
アランはチケットを買うと邦佳達に渡し入場した。
劇場は暗く天井桟敷の人々は大ヒットしていることもあり多数の

人が来ていた。
その人の波に揉まれながら座席についた。
Ｆ１３とＦ１５番にはそれぞれアランとトニーが座った。
Ｆ１４番にはポップコーンを持った男が座っていた。
「あんたらがハイドリヒのパシリか？」
アラン「ああ、あんたは？」
フーゴ「俺はフーゴ・シュティグリッツ。
あんたらとは大して変わんない連中だ。
違うとすればゲシュタポ将校を１３人やってレジスタンスに協力して殺されたぐらいか？」
アラン「俺もレジスタンスだ」
アランは情報提供者のドイツ人フーゴ・シュティグリッツのポップコーンを掴んで食べる。
そうしていると映画が始まった。
フーゴ「だろうな。お前の噂を聞いたことがある。
元ヴィシー空軍のパイロットがレジスタンスをやって殺した将校を夜な夜な街灯に吊るしているって」
アラン「俺も有名になったぜ。
で、本題は？」
フーゴがアランの噂を話しアランが本題を聞いた。
周りの人々は映画に夢中で二人の会話に一切気がついていなかった。
フーゴ「王党派の連中だ、奴らの狙いはリベリオンのウィッチを一人確保してブリタニアに連れて行くことだ。
奴らのネットワークは我々が思っている以上に広大だ。
噂ではガリア海軍が喪失したとしている潜水艦や空軍が喪失したとした航空機を保有しているらしい。
他にも政府内に多数のシンパがいるとかド・ゴールの側近にもいるとか洗脳の専門家を雇ったとか孤児を駆り集めてるって噂もある。」
フーゴは王党派のいくつかの噂を伝えた。

だがそれにアランは不満だった。
彼が欲しいのは事実だけだ、不確定な憶測や眉唾物の噂など一切必要なかった。
アラン「噂はいい、欲しいのは事実だ」
フーゴ「噂は素晴らしいものだ。
物事の真実は噂の中に隠れてる、時には噂自体が本当だってある。
情報の半分は噂と憶測だ。
奇妙だが情報と映画というのはある点で似ている。
映画もフィクションだが真実で嘘を塗り固めたものだ。
嘘だがまるで真実だ。
噂だって噂と憶測で塗り固めればもっともらしい真実になる。
その真実が実際に真実として目の前に顕現するかどうかは別だがね。」
フーゴが微笑みながら言う。
その言葉にアランは目つきを鋭くしこの怪しい男の一挙手一投足を注視する。
アラン「何が言いたい？」
フーゴ「ここからが重要だ。
噂と憶測と伝聞で塗り固めた事だが連中は何かをする気だ、この街でな。
それも派手な何かを。」
王党派が何か派手な事をしようとしている、その言葉にアランの頭には最悪の可能性がよぎった。
アラン「クーデターかテロ、それも大規模なテロの可能性…」
フーゴ「ビンゴだ、中々頭が切れるじゃないか。
じゃあどこで起きるかね？ここか？フェナンビュール座のパントマイム劇か？」
アラン「人が集まるところだろうな、それも警察や軍の管理が行いにくい場所…

公共交通機関？鉄道か？」
フーゴ「エクセレント、その通りだ。
パリの中にいくつもある鉄道のターミナル駅か特に乗降客数の多い駅のどこかで…ボム！」
右手で爆発のジェスチャーをする。
アラン「どの駅だ？」
フーゴ「さあ？それは俺の知らないところだ。
ここからは自分のおつむで考えろ。」
フーゴに言われアランは映画を見ながら考えた。
アラン「ブリタニアに行くならば北のシェルブールかカレーに向かうのが一番だろうな。
勿論上もそれを理解して北を中心に警備の網を張っているだろうが。
そうなると南か？いや、北で騒ぎを起こせば南からも人が集まる…
ありがとう、フーゴ・シュティグリッツ、ナチブッチャー」
フーゴ「俺も有名になったもんだぜ。」
アラン「お前ら行くぞ」
アランは立ち上がりトニー達に小声で声をかけた。
邦佳「ちょ、ちょっと！
映画始まったばっかりなのにー！」
映画を楽しみにしていた邦佳が言う。
まだ映画が始まって２０分も経っていなかった。
そんな邦佳を引っ張り一行は外に出た。
アランはシムカのボンネットにパリの地図を広げた。
トニー「で、次は何処だ？」
カーラ「ジェニファー達は何処にいるんだよ？」
アラン「ここの可能性がある。」
アランは地図の中のある駅を指した。
「「ノール駅？」」
アラン「ああ、連中が騒ぎを起こした時、一番効果的なのがこの駅

だ。

まずここで連中は騒ぎを起こす、その騒ぎに乗じて南から脱出する。

それなら辻褄が合う。

それに南ならばヘロイン密輸ルート関連も使える、更にはヒスパニアに逃げ込まれたらこっちの管轄外だ。」

アランが推理を披露した。

アランの推理はパリ北駅で王党派が騒ぎを起こし、その混乱と警備の手薄になった隙に南に脱出、南部からブリタニアに密航するという案だった。

ガリア南部は有名なヘロインの密輸ルートで、ユニオン・コルスなどの犯罪シンジゲートにとっては二人の女性をブリタニアに密航させることなど造作もない事だ。

それにヒスパニアに逃げれば連合軍の管轄から外れヒスパニア政府とヒスパニア駐屯連合軍の管轄になる、そうなれば例え目の前にいようとも手出しは出来ない。

邦佳「それじゃあノール駅に行こう！」

トニー「ああ、急ぐぞ」

ウィッチ達は急いで車に飛び乗るとノール駅を目指した。

その頃、ノール駅は軍の警備が強化され近郊都市路線と長距離路線のホームでは身分証の確認が行われ兵士達が動き回っていた。

その近くの公衆電話ではキーラが電話を切った。

そしてすぐ傍のカフェの椅子に座った、向かいにはジェニファーがいた。

ジェニファー「逃走したことが発覚する前にパリを脱出するべきでしたね」

キーラ「我らはチェス盤上の駒、上の命令通りに動くだけさ。」

ジェニファーに座りながら言う。

彼女も組織の駒であり所詮は彼女は王党派と連合軍のチェスの盤上の駒に過ぎなかった。
ジェニファー「今の電話はその上の方ですか？」
ジェニファーが訊いた。
するとキーラは何とも思わずにティーカップの紅茶を飲む。
キーラ「１０分後、祭りを始める。」
ジェニファー「え？」
キーラ「季節外れのパリ祭さ」

トニー「兎に角、連中が騒ぎを起こす前に行けばいいんだな？」
アラン「ああ。騒ぎを起こすには爆弾か何か仕掛けなけりゃいかん。
それに逃げる群衆に紛れれば簡単に逃げられる。
騒ぎを起こされたらどこに逃げたか分からなくなる！」
アランとトニーはパリの道路をかっ飛ばしていた。
アランはタバコを吸いながら拳銃とサプレッサー付きのステンガンに弾を込める。
アラン「最悪の場合は銃撃戦だ。」
トニー「やるのか？」
アラン「文字通り最悪の場合だ。
最悪の…」
二人が話していると、突如、大きな爆発音が聞こえた。
前を見ると大きな黒い煙が立ち上っていた。
そして叫んだ。
アラン「メルド！やられた！飛ばせ！交通ルールは無視しろ！」
トニー「ＯＫ、しっかり捕まってろ！」
トニーは車のシフトを変えアクセルを最大限に踏み込んだ。
車は急加速し信号、歩行者、車を無視し、避けながらノール駅へ全速力で向かった。

第２０話：崩壊の序章

パリのノール駅の４、５番ホームはパリメトロのホームである。
パリを南北に縦断し２番目に乗降客数が多いパリメトロの４号線と５号線が走る駅で地上ホームには長距離路線と近郊都市路線などが停車するホームがあるターミナル駅の一つだ。
そのため乗降客は非常に多く、警備もそれに合わせて２００人近い兵士が動員されていた。
兵士が警備が多い以外ほとんどの人にとっては大したことのなかった昼下がりだが、突如地下鉄ホームの端で爆発が発生し人々は逃げ惑い始めた。
その様子を間近で見ていたのがキーラとジェニファーだった。
ジェニファー「なんてことなの…」
ジェニファーは駅から立ち上る煙を見ながら呆然とする。
周りでは兵士達がせわしなく動いて民間人の避難をさせていた。
折しも地下では２本の線路の両方に地下鉄が停車していたため人でごった返していた。
ジェニファー「あなたたちの仕業ですね⁉」
キーラ「私達の組織はこうした事態に備えパリ市内に色々と工作している。
派手なのは音と煙だけだ。
無辜の臣民を傷つけるのは我々の本心に反する」
キーラがジェニファーの問いに答えた。
これもキーラ達王党派の仕業、それもこれまでの政府高官や軍関係者を狙った所謂ハードターゲットタイプのテロではなく市民を狙ったソフトターゲットのテロだった。
だが彼女彼らはこのテロが事実上王党派全体がガリア国民の敵になるきっかけになるとは思っていなかった。
ジェニファー「助けに行かないと…」
キーラ「おっと、君が逃げ出せば別のスイッチが作動する。
今の爆発は人気のないホームの端だったが…次はどうかな

?」
助けに行こうとしたジェニファーをキーラが腕を掴みとめた。
ジェニファーは歯を食いしばる。
そんな彼女をキーラは肩を抱いて逃げ惑う人々と野次馬に紛れて歩いて行く。
キーラ「いい子ちゃんはいい子ちゃんの殻を破らず言いなりのお人形さんでいればいいのさ。」
ジェニファーにそんな言葉をかける。
だが突如後ろが騒がしくなり始めた。
キーラは振り返ると人ごみの中を猛スピードでシムカ8が突っ込んできた。
シムカは二人の横を通り過ぎると目の前でドリフトし車の右側を見せて止まると助手席のドアが開いた。
アラン「動くな!手を上げろ!」
トニー「ぶち殺すぞ!サバノビッチ!」
ドアが開くとステンガンを構えたアランと運転席からグリースガンを構えたトニーが現れた。
さらに二人に遅れてスペードたちが乗ったジープも到着した。
キーラ「アラン・ド・メーストルだと?」
ジェニファー「アランさん!トニーさん!黒田さん!カーラ!」
キーラはアラン達の登場に驚いた。
スペード「この爆発、お前らの仕業だな?」
キーラ「これは古き良きガリアの再生に必要な破壊だよ」
アラン「はん、なんだその時代錯誤のレジティミストの言い草は?
処刑台と間違えてきたか?それともおつむはギロチンに落とされたか?」
スペード「民主主義の時代にレトロな王政復古か?
ガリア国民はだれも支持しちゃくれないぜ?」
キーラの弁にアランとスペードが皮肉を言う。
その弁は一昔も二昔も前の絶対君主制の言い草だった。
キーラ「衆愚による統治より優れた王による独裁の方が国家により

利益をもたらし延いては国民も富と幸福を享受できる。
それがガリア人の心に中世以来刻まれている決して近代哲学では消し去れぬドグマなのだ」
キーラが自らの理論を振りかざす。
次の瞬間、キーラの帽子にいくつもの穴が開いた。
アランを見ると持っているステンガンから硝煙が出ていた。
アラン「ますますあんたが許せなくなった。
あんたの言っている事の意味が分かるか?
我々の神聖且つ不可侵の権利を剥奪しようとしているのだぞ!
自由と権利を得るために我々の先祖は戦った!
その権利を奪うというのか!
ならばこちらの答えは奪おうというのなら戦うまでだ。
我々の自由と権利を守るために、そして我らの父祖のようにな!」
キーラ「意見の相違だな。」
アラン「意見の相違?違う、あんたのやった事は我々への宣戦布告だ。
意見の相違じゃない、戦争だ。
一方は民主主義と自由と権利を標榜する国家ともう一つは独裁と束縛を是とするテロリスト、民衆はどっちを支持する?世界はどっちを支持する?」
アランは銃を構える。
だがこの二人のやり取りをカーラと邦佳は頭にはてなを浮かべながら聞いていた。
邦佳「ええっと、どぐま?」
カーラ「こっちに振るなよ」
キーラ「つまりは我々の理想とするところは貴族を中心とした編成、A部隊の設立理念と一緒なのだよ。
誰もが政治に口を出すようになればお前たちが言うような高貴なる義務など滅ぶんだ、黒田、分からないのか?」

邦佳「ん～もう少し簡単に説明して」
キーラ「高貴なる義務を果たそうとするなら衆愚が政治を左右する現状を止めなくてはならない。
古き良きガリアを護るために」
邦佳「全っっっ然簡単になってないんですけど!?」
邦佳が簡単な説明を求めるがそれでもちんぷんかんぷんだった。
アラン「細かい事はいい、唯一言えるのはこいつらは民衆の敵、国家の敵だってことだ。
あんたが望むような世界にしたけりゃ俺達国民の屍を超えていきな」
アランがステンを構え車から降りる。
キーラ「ふ、ご高説承ったよ。
しかし私にかまけていていいのかな?」
アラン「何?」
キーラ「実はこのメトロの駅にはもう一つ少しばかり強力な爆弾が仕掛けてある。
こちらは時限式でね、あと９分４０秒か。」
キーラが腕時計を見る。
キーラ「まだ駅の構内には逃げ遅れた市民が残っているだろうな。
どちらを選ぶ?市民の救助か仲間の身か」
アラン「市民は軍に任せる。
見ろ、次から次へと軍と警察と消防が来てるぜ?
爆弾のありかでも教えてくれなきゃ動きにも慣れないぜ。」
ノール駅には爆発の連絡を受けて消防や軍、警察が殺到していた。
トニー「それにこっちの命令はブランク大尉の身柄の救出だ。
市民の事など命令の範囲外だ。俺達は軍人だぞ?」
アラン「ああ。命令違反して欲しかったらもうちょっと派手なジョークが欲しいね」
アランとトニーにとってはこの程度の事は全くの無関心だった。
何せ命令の範囲外の話だからだ。
だがこの脅しは邦佳やカーラには十分だった。

邦佳「駄目だったら！爆弾が爆発したら大勢が死ぬかもしれないんだよ！」
アラン「知るか！それは憲兵と警察の仕事だ！」
カーラ「でもジェニファーが…！」
邦佳は銃を構えるアランを止める。
邦佳とカーラはジェニファーか爆弾かの板挟みになっていた。
キーラ「大サービスだ、爆弾はそこを降りてすぐの柱の所にある。急いだ方がいい」
キーラが揺さぶりをかける。
するとジェニファーが叫んだ。
ジェニファー「私はいいから！みんなを、みんなを助けて！」
アラン「く」
トニー「どうする？」
アラン「クソ！」
とうとうアランが折れた。
キーラはジェニファーを連れて人ごみへと消えて行った。
カーラ「次は、次はきっと助けるからな！」
カーラは人ごみに消えるジェニファーに涙ぐみながら叫んだ。
するとアランが肩を叩いた。
アラン「急ぐぞ！命令違反をしてるんだ！失敗したら銃殺刑ものだ」
アランはそう言うと市民の避難作業と消火作業中の憲兵たちの下に向かった。
現場の周りはいち早く規制線が張られ多数の消防車と警察、憲兵、軍が集まり規制線の外には野次馬が集まっていた。
アラン達は野次馬をかき分けながら規制線までたどり着くと野次馬を押しとどめていた若い憲兵に叫んだ。
アラン「おい！ここを通せ！」
憲兵Ａ「駄目だ！関係者以外立ち入り禁止だ！」
アラン「俺はこういう者だ。
ハイドリヒ中将の特命を受けて仲間と共に現在パリ市内で

作戦行動中だ。」
アランは止める憲兵に本物の身分証を見せる。
その階級と所属を見て憲兵は敬礼した。
アラン「命令だ、ここを通せ」
憲兵Ａ「分かりました！」
アランの強い口調でも命令に憲兵は従い規制線を開けた。
アラン「爆弾がもう一発ある、その捜索と無力化を行う。
　これから構内に入るがよろしいか？」
憲兵Ａ「分かりました、許可します」
アランは駅構内に入る許可を得ると邦佳達を率いて階段を下りて行った。
　階段の奥からは煙が立ち上り床には消防用のホースが置かれ横を民間人が消防士と警察と兵士の付き添いで避難していた。
邦佳「すごい煙…」
貫二郎「ゲホッ、ゲホッ、酷いな…」
そのすさまじさに貫二郎はむせていた。
階段を降り、ホームのある階の一つ上にある改札までたどり着いたところで一行は民間人を避難させ消防隊を構内に入れる憲兵に止められた。
憲兵Ｂ「誰だ貴様ら」
アラン「こういう者だ。もう一発爆弾があることが分かった。
　構内を捜索する」
憲兵Ｂ「分かったが何人か手を貸してくれ。
　民間人が多すぎる」
憲兵が了承するが同時に手伝いを求められた。
あまりにも人が多く避難するのに手が足りていなかった。
アラン「了解、黒田、カーラ、スペード、貫二郎は憲兵の手伝い。
　俺とトニーで探す。」
貫二郎「了解です」
アランは二組に分けるとアランとトニーは階段を降りて銃を構えながら爆弾を探し貫二郎たちは民間人の避難を手伝った。

邦佳「出口はこっちです！押さないでください！」
貫二郎「動けないけが人はいるか！」
警官「こっちに怪我をした母親がいる！」
邦佳達は民間人の避難を手伝い貫二郎は警官が運んできた重症の女性を運んだ。
一方アラン達は不審物がないか見て回っていた。
そしてホームの階段のすぐそばの柱の陰に不審な箱を見つけた。
アラン「トニー、あったぞ。」
トニー「分かった、爆弾だ！急いで避難させろ！」
爆弾を見つけるとトニーが叫んだ。
トニーの声を聞いて階上の民間人が騒ぎ始めた。
市民Ａ「爆弾だって!?」
市民Ｂ「まだあるのか!?」
憲兵Ｂ「急げ！爆弾が爆発する前に全員退避だ！」
憲兵は無理矢理民間人の避難をせかし始めた。
その間にアランは座って爆弾の蓋を開け中身を確認した。
中にはダイナマイトにコードが繋げられた時計のついた爆弾があった。
アラン「時限式爆弾か」
トニー「解体方法は分かるか？」
アランは中身を見て腕を組んで考えた。
その構造には見覚えがあった。
アラン「ああ。昔使ってたタイプの爆弾だ。
使用爆弾はダイナマイトか？」
トニー「で、どうする？」
するとアランはナイフを取り出し時計に繋がるコードに添えた。
アラン「このタイプはこの時計と爆弾のコードさえ切れば止まるか爆破不能になる。
一番楽なのが…」
するとアランは爆弾の中のダイナマイトを引っ張りそれにつながったコードを一気に全部切り落とした。

これで例えタイマーが切れても爆弾は爆発しない。
アラン「こうやって爆弾と爆破装置を切り離す方法。
次に信管を抜き取る。」
次にアランは爆弾に繋がったままの方のコードを力づくで引き抜いた。
信管を除去しこれで爆弾が爆発する可能性は皆無となった。
アラン「次にタイマーを止めるんだが、どっかに電池があるはずだ。
それと繋がっているコードを切ればいい。」
アランはタイマーの下の赤白青の三本のコードを見る。
そしてそのコードの元を一本ずつ探った。
すると真ん中の白のコードが下にあった乾電池の容器らしきものに繋がっているようなのが確認できた。
アラン「これだ。白を切る」
アランは迷いなく白を切った。
すると爆弾のタイマーが停止した。
タイマーの数字は気がつけば一分を切っていた。
トニー「はぁ…寿命が縮んだぞ…」
アラン「お前がか？嘘言うなよ。
それよりさっさと地上に上がるぞ。ここは暑くてたまらねえ」
トニー「ああ、ピザ焼き窯の中みたいだ。」
二人は立ち上がると爆弾を持って階上に上がっていった。

数時間後、一行は司令部が用意したセーフハウスにいた。
5人は地図とにらめっこしながら次にどこに行ったかという事を議論していた。
スペード「ノール駅とは反対側に向かうリヨン駅に向かったとすればリヨンに向かったに違いない。」
トニー「だがリヨンからブリタニアには行けないぞ。

なぜリヨンに向かう必要がある」
アラン「俺としては可能性が一番高いのがトゥーロン、マルセイユ、ペルピニャンの地中海側の港街だと思うんだが。
しかし情報が無いとな」
貫二郎「市内を出てすぐ北に向かったかも。
別にパリ市外で北向きの列車に乗り換えたり長距離バスに乗ったりすれば英仏海峡まで行けますよね？」
議論していると突然ドアがノックされた。
全員身構えトニーが代表して拳銃を後ろ手に持ちながらドアを少しだけ開ける。
トニー「誰だ？」
ドアの隙間から覗くとそこには少年が立っていた。
少年「シュティグリッツのおじさんからこれ」
少年はドアの隙間からメモを渡すと走り去っていった。
ドアを閉め振り返るとアランが聞いた。
アラン「何だった？」
トニー「ガキだ。シュティグリッツの遣いらしい。
これを渡してきた」
トニーはアランにメモを渡した。
メモを開くとそこにはフランス語で文が書かれていた。
邦佳「えーっと、なにこれ？」
カーラ「ガリア語か？」
アラン「ああ。フランス語だ。
〝秘密の８は正義、１１は力。〟」
アランがメモを訳する。
だがメモの文は全く理解できない内容だった。
トニー「なんだこりゃ？」
アラン「多分暗号だと思うがどういう意味だ？」
トニー達は頭を抱えた。
この文は全く意味が理解できなかった。
邦佳「８番の秘密が正義で１１番の秘密が力ってこと…？」

カーラ「こっちに振るなよ。」
貫二郎「この秘密って何の事なんでしょうね？」
アラン「ああ、秘密って言うか、何故かここだけラテン語のアルカーヌムなんだよな。
普通フランス語で秘密は別の言葉だ…
もしかして…」
するとアランはあることに気がついた。
アラン「これ、秘密じゃない、アルカナだ！」
「え!?」
邦佳「アルカナって？」
アランが叫んだが邦佳はアルカナが分からなかった。
カーラ「アルカナって言うのは占いで使うタロットカードのカードの事だよな？」
貫二郎「ええ。でも確か普通のタロットカードは８が力で１１が正義ですよね？」
アランに聞いた。
普通のタロットカードは８のカードが力を指し１１が正義を意味する、本来は逆だ。
アラン「だけどな、一つだけ８が正義、１１が力になっているカードがあるんだよ。」
スペード「一つだけ？」
アラン「マルセイユ版タロットだよ。
１６世紀から１８世紀までマルセイユで作られていたタロットカードだ。
それが８が正義、１１が力になってるんだ。」
マルセイユ版タロットというタロットカードの一種ではこの文の通りになっている。
その事を思い出したアランはこの文に合点がいった。
そしてアランはガリア全土の地図を取り出し広げた。
アラン「つまりは…ジェニファー達が向かった可能性のある街は…」

そしてアランは地図のある街を指した。
アラン「ここだ…！」
「「マルセイユ！」」
指さした先にはマルセイユと書かれていた。

第21話：汚れ仕事

アラン達がパリで活動していたその頃、セダンではカーロイとホスバッハとイザベルが犬を連れ猟銃を持って森の中を歩いていた。
カーロイ「あいつらちゃんと仕事してるんだろうか？」
ホスバッハ「してなかったから困る、失敗したら我々の面子に関わる」
イザベル「だね」
3人は暇だったためハンティングに出かけたのだ。
するとカーロイが飛んでいる鳥を見つけた。
カーロイ「見ろ、ハトだ」
彼は猟銃を構えると発砲、一撃で鳩を撃ち落とした。
カーロイ「やったぜ」
イザベル「お見事」
カーロイは犬を連れてハトが落ちたところに向かい足を掴んで拾い上げてイザベルたちに掲げる。
カーロイ「見ろよ、晩飯は鳩料理だ」
イザベル「ねえ、その鳩足に何かついてるよ？」
カーロイ「え？」
イザベルに指摘され鳩の足を見る。
すると小さな筒が付いていた。
カーロイ「伝書鳩だったのか。
誰の伝書鳩だ？」
カーロイは伝書鳩の持っていた手紙を取り出した。
イザベル「え？見るの？」
カーロイ「そりゃあねえ、間違えてお宅の伝書鳩を撃ってしまいました、心から謝罪いたしますってやらないと」
少し引いているイザベルにカーロイが言う。
カーロイは手紙を取り出し読み始めたがすぐにこの手紙がただの手紙じゃないと理解した。
カーロイ「おお…ドイツ人、俺どうやらえらいものを撃ち落とした

みたいだ」
ホスバッハ「何が書いてあったんだ？」
カーロイは無言でホスバッハにその手紙を見せた。
それを一読しこれがただの手紙ではない事を理解した。

その日の夜、基地内で動きがあった。
突如基地内の一室に銃声が響くと部屋に兵士達が雪崩れ込んだ。
部屋の中にいた人物は慌てて立ち上がり明かりをつけた、そこにはＭ１８９７トレンチガンを持ったホスバッハと彼に率いられた兵士達がいた。
その部屋の主は基地の看護師だった。
ホスバッハ「貴様が裏切り者か。」
そう言うとホスバッハはトレンチガンをリロードすると構えた。
次の瞬間部屋は朱に染まった。

翌日早朝、一行はマルセイユに到着し現地の協力者に公衆電話から電話をかけていた。
アラン「マルセイユ港湾司令部税務調整室。」
アランが交換手にかける相手を伝える。
暫くすると繋がった。
協力者『こちらマルセイユ港湾司令部財務調整室。
どちら様？』
アラン「ハイルヒトラー。」
協力者『ハイドリヒの使いか。
ミュルデ大佐から話は聞いている。』
マルセイユ港湾司令部財務調整室は税関関連部署に見せかけた連合軍のマルセイユでの秘密活動組織であった。

マルセイユ近辺はガリアにおいてはこの他に軍港のブレスト、ロリアン、トゥーロン、ボルドー、ラ・ロシェル、重要港のシェルブールとサンナゼールと同じような連合軍の重要港だったため都市の管理守備治安維持の責任は海軍にあり担当したのはカールスラント海軍のフリードリヒ・トラウゴット・シュミット少将が指揮するマルセイユ港湾部隊とエルンスト・ショイアレン中将指揮の特別海軍陸戦師団〝ショイアレン〟（4個海軍歩兵連隊及び2個沿岸砲兵連隊）、そのほかにガリア軍第1外人落下傘連隊、ガリア軍チュニジア行進連隊、ガリア軍第503戦車連隊、警察司令部〝マルセイユ〟、第18警察連隊、第13警察戦車中隊、戦闘団〝第242歩兵師団〟など雑多な部隊であった。

このほかにこの日マルセイユにはカールスラントから到着した第600歩兵師団と第14義勇装甲擲弾兵師団の2個師団が上陸作業中だった。

アラン「なら話が早い」

協力者『ここ数日王党派に不審な動きがある。

アジトの場所を教える、襲撃してそこで待ち伏せろ』

アラン「了解」

協力者はアランに王党派のアジトの場所を伝える。

そして最後に別の情報を伝えた。

協力者『王党派の一部はマルセイユのマフィアの一部と繋がりがある。

気をつけろ』

アラン「分かった」

アランは静かに電話を切った。

電話を切ると公衆電話を出て傍に駐車した車に乗った他のウィッチ達に伝えた。

アラン「キーラ達は王党派のアジトに出入りする可能性が高い」

スペード「そのアジトってどこだ?」

アラン「マルセイユの中心部から少し離れたところにある倉庫だ。

ここから北に5キロほど行ったところだ」

アランが場所を伝えた。
そして一行は車に乗り込みアジトに向かった。

３０分ほどした後、マルセイユ郊外の王党派のアジトは平穏そのものだった。
表向きは倉庫とその管理施設などだが、倉庫の出入り口にはゲートが設置され拳銃を隠し持った構成員が立ち、車が置かれ、倉庫の中には銃器や爆弾が隠されていた。
そしてその様子を近くの茂みの中からトニーとアランとスペードが見ていた。
トニー「ゲートには見張りが４人、全員が拳銃を隠し持ってるみたいだ。
倉庫の中は分からんが見た感じ周りの建物にも人がいるな。」
アラン「ああ、ざっと３０人か５０人ぐらいか。」
スペード「王党派だけじゃなくてマフィアとかの関係者もいそうだな」
３人は双眼鏡で監視していた。
相手は５０人近くいると思われ明らかにこちらが不利だった。
アラン「どうする？相手が多すぎるぞ」
トニー「ああ、だが奴さん素人かそれに毛が生えた程度だ。」
アランは隣のトニーに聞いた。
すると意外な答えが返ってきた。
アラン「え？」
トニー「正面突破としゃれこむのはどうだ？」
アラン「無茶言うなよ。相手はこっちの１０倍はいるんだぞ」
トニー「俺一人で５０人は楽だぞ？」
アラン「まあお前は楽だろうが…」
トニー「今から襲うか、２時間後の増援を待つか、どっちがいい？」

トニーが茂みに腰を下ろして聞いた。
それにアランは即答した。
アラン「今すぐ襲うか。
武器を用意しろ。」
アランは覚悟を決めると車に向かい車の周りで待っていた邦佳達に指示した。
アラン「動くぞ」
邦佳「え？」
貫二郎「もう動くんですか？」
カーラ「何やるんだ？」
突然の事にカーラと邦佳は驚いていた。
アランはシムカのトランクを開けながら答えた。
アラン「素敵なパーティーだ。
大野、こっちの車の後部座席に乗れ。
それとこれを使え。」
アランはトランクの中から分解されたＺＢ２６を取り出し貫二郎に渡した。
貫二郎「え？僕も行くんですか？」
アラン「当り前だろ？それともお前さんは最愛の彼女を人殺しにしたいのか？」
貫二郎「いや、それは…」
アラン「そうだろ、お前はそれで俺とトニーを援護しろ、いいな」
貫二郎「了解。」
アランは貫二郎に指示すると次は邦佳とカーラに指示した。
アラン「バカ二人は」
カーラ「バカって…」
アラン「文句を言うな。
お前らはここで待機だ。
逃げてきたやつに銃を突きつけろ、なに、どうせ逃げてきた奴らは撃っては来ない。
それとスペードには公衆電話で司令部に連絡してもらう。

いいな？」
カーラ「分かった」
邦佳「うん！」
二人が返事する。
二人にスペードが合流するとアラン達はシムカに乗り込んだ。
その光景を見て邦佳が漏らす。
邦佳「貫二郎、大丈夫かな？」
カーラ「え？」
邦佳「いつもの事だけど心配だからね」
カーラ「大切なんだな、あいつが」
邦佳「うん」
カーラに邦佳が返事する。
一方車に乗ったアラン達はアジトのゲートに差し掛かろうとしていた。
王党派のメンバーは車の前に立ちはだかり止める。
王党派Ａ「止まれ！」
王党派Ｂ「合言葉は」
王党派は窓から覗き込んで合言葉を聞いた。
するとアランが答えた。
アラン「合言葉？確かこれだったかな？」
するとアランはウェルロッド拳銃を取り出すと助手席の方に立っていた男を撃つ、更にトニーもウェルロッド拳銃を取り出し覗き込んでいた男を殺す。
その動きに驚いた王党派の他の男が拳銃を取り出そうとするがその前にドアを開けてアランがサプレッサー付きステンを連射し一人を射殺する。
更にトニーがドアを開けアラームを押そうとした男をウェルロッドで撃つ。
だがこの動きはすぐに他の見張りが気がつき拳銃を撃ってきた。
その銃声で更に他の王党派が動き始める。
アラン「来たか。」

トニー「ああ。」
アラン「貫二郎はここで援護しろ」
貫二郎「了解！」
貫二郎はＺＢ２６を後部座席のドアの上に乗せると正面の倉庫の出入り口めがけて連射する。
出入り口の前にいた男たちと騒ぎに気がついて出てきた男たちは皆銃撃の餌食となり倒れる。
その間にアランはＭｋ２手榴弾を取り出すとピンを抜いて３０メートル程右側の倉庫の前にいる王党派めがけて投げた。
数秒後王党派の集団の真ん中で手榴弾が爆発、数人が吹き飛ばされる。
その隙にトニーが拳銃で左側の小屋の前で撃っていた男数人をＭ３を連射して射殺する。
アラン「今だ！突撃！」
アランが叫んだ。
それと同時にアランとトニーが飛び出しそれぞれ右の倉庫と左の小屋に走り込む。
そしてドアを少し開けると中に手榴弾を投げ込みドアを閉める。
数秒後爆発が起き中から叫び声が聞こえた。
さらに右側の倉庫は中に可燃物があったようで一気に燃え始めた。
アラン「よし、次は本丸だ。」
アランとトニーは正面の倉庫に向かう。
トニーが倉庫の出入り口を押さえるとアランは裏口に向かった。
裏口では数人の王党派が逃げようとしていた。
アラン「止まれ！」
ステンガンを構えアランが叫ぶ。
だが数人がそれを無視して走って逃げようとしアランに撃ち殺される。
残りはその場で武器を捨てるか倉庫の中に逆戻りした。
一方正面ではトニーがドアを開けると中から機関銃を連射された。
ゆっくりと様子をうかがうと王党派がＭＧ３４を据え付けていた。

トニー「機関銃かよ、ついてないな」
トニーは中に手榴弾を投げ込む。
数秒後爆発すると中に突入した。
中は大量の弾薬箱や銃器が置かれ迷路のようになっていた。
出入り口の傍では数人が死んでいた。
そして入るとすぐに別の王党派が現れるが頭と胸を撃って射殺する。
更に後ろから別の男が来るがこれも射殺、それとは別に後ろからも来るがトニーは振り返らず射殺した。
その後も次々と現れるが全てあっという間にトニーに射殺されていった。
その間にアランも裏口から突入し王党派を追い詰める。
数分後には王党派は倉庫の真ん中の開けた場所に追い詰められ両手を上げて跪く。
アラン「制圧完了。」
トニー「楽勝だな」
捕まえた王党派十数人を前に呟く。
すると外から貫二郎がやってきた。
貫二郎「終わりました？」
アラン「ああ、終わったぞ。外の方はどうだ？」
貫二郎「数人捕まえました。
後増援も来ました」
アラン「早いな」
貫二郎「パトロール中に騒ぎに気付いたみたいですよ」
貫二郎が外の状況を伝える。
すると外からエンジン音が聞こえてきた。
アランが外に出るとオペルブリッツに乗ったカールスラント兵の一団がやってきた。
アラン「おおい」
下士官「あんたら何やってたんだ？」
アラン「見ての通り、王党派のアジトを襲撃しただけだ。

一応こっちも軍人でね、特別な任務中なので詳しくは言えないが。」
アランが増援の下士官に事情を説明した。
それに下士官は納得した。
下士官「成程、総員！周辺を捜索！逃げだした残党を見つけ次第ひっ捕らえろ！
何人かは情報がないか捜索だ！」
「了解!!」
下士官は兵士達を動かした。
アランは倉庫内に戻ると倉庫の中心部にあった無線機と電話が置かれた一角に置かれた椅子に座る。
その前にはトニーが捕まえた王党派を並べていた。
アラン「さてと、あんたらキーラからの連絡を待ってたのか？」
王党派C「答えたくないね」
尋問を始めるがリーダー格の男は答えるのを拒否する。
するとアランはトニーに向かって小さく首を振るとトニーは男を殴る。
男は床に倒れる。
さらにそこにトニーが腹を蹴り上げ、苦しみで悶え苦しむ。
アラン「さあ答えろ、次はどこがいい？」
トニー「もう一発食らうか？え？」
男は返事をしない。
するとトニーがもう一度蹴り上げる。
王党派C「…わ…かった…そ、そうだ…ここで連絡を待ってた…」
アラン「その連絡って言うのは？」
男は顎でテーブルの上の電話を指す、
アラン「成程な。じゃあその連絡はいつ…」
すると突如電話が鳴った。
アラン「成程ね」
アランは電話を取った。
するとキーラの声が聞こえた。

そして合言葉らしき言葉を言うが何と返せばいいか分からなかった。
アランは受話器に手を当てて男に聞いた。
アラン「おい！合言葉は！」
トニー「言え！」
トニーが蹴り上げるが男は答えない。
アラン「クソ、アーエー、アロー？」
アランは咄嗟に返すが次の瞬間電話を切られた。
アラン「クソ！切られた！」
アランは悪態をついた。

その頃、マルセイユ市中心部ではキーラが電話を切った。
電話を切ると彼女はジェニファーを連れて足早にどこかに向かう。
ジェニファー「どうしたんです？」
キーラ「合言葉が無かった、しかも出たのがド・メーストル大尉だ。敵の手に落ちたらしい」
キーラがジェニファーに事情を言う。
二人はマルセイユの通りを歩きながら話し続ける。
ジェニファー「セダンかディジョンに戻りましょう。隊長たちならきっと悪いようには…」
キーラ「隊長たちならそうだろうがホスバッハ少佐とフーヴァー少佐が出てくる。あの二人は必ず私の身柄を司令部に突き出すだろう」
ジェニファー「そこは何とか私が…」
キーラ「憲兵か司令部に突き出されればほぼ確実に私は銃殺、いや銃殺で済めば儲けものだろうな。それにまだゲームを降りるのは早過ぎる。とはいえ連合軍も諜報部の過激派も私達がマルセイユにいることは知れた。

数時間以内に今の倍の諜報部員と１０倍の兵士が集まってくるはずだ。」

キーラはジェニファーに言う。

二人はマルセイユの港湾地区へと向かっていった。

第２２話：マルセイユ港の戦い

キーラ達を逃したアラン達だったがキーラが市内にいるという事を実際に確認したマルセイユでは新たな動きに出ていた。
シュミット「これより７２時間以内にマルセイユ港を出港する全船舶を臨検する。
いいな？」
「は！」
シュミット少将はマルセイユ港を出港する全船舶の臨検を決定した。

一方、市内中心部に戻ったアラン達だったが情報が無く手詰まりに陥っていた。
既に日が落ちていた。
一行は市内のあるレストランで夕食を摂っていた。
邦佳「もう夜になっちゃったね」
アラン「軍が動いているとはいえ情報が無さすぎるからな。
王党派筋の情報網じゃ引っかからねえ」
貫二郎「一匹狼は捕まえにくいですからね…」
スペード「いよいよ手詰まりだな…そういえばトニーどうした？」
するとスペードがアランにトニーの行方を聞いた。
トニーは市内に戻ってすぐに別行動で離れていた。
アラン「ああ。なんでも〝シケたフランス料理より上手い飯が食いたい〟って言ってどっか行っちまった。
まあこのレストランにいるってことは伝えてあるからそのうち来るだろ？」
トニーは別行動をとっていた。
それにアランは特に気にしていなかった。
トニー一人でも十分身を守れるし闇社会に詳しいのでそちらの情

報を集めてる可能性もあった。
すると突然カーラが頭をテーブルに打ち付けた。
カーラ「あああもう!５０６の発足式典は明後日だっていうのに…!
どうしたらいいんだよ!?
やっぱりマリアンに任せた方がよかったのかも…
私じゃ無理だよ…ジェニファー見つけんの…」
邦佳「カーラ…」
貫二郎「カーラさん…」
カーラが弱音を吐く。
その背中をアランは優しくたたいた。
アラン「一人じゃないんだ、必ず見つかるさ」
するとドアが開いてトニーが入ってきた。
トニー「お前ら、急いだ方が良い」
アラン「え?何があった?」
入ってきたトニーは開口一番に言う。
その口調からかなり焦ってるようだった。
トニー「諜報部だ。諜報部が先にキーラ達が乗っているらしい船の情報を掴んだらしい。
港に大勢集まってるらしいぞ」
アラン「何だって!」
アランが椅子から立ち上がり驚く。
貫二郎「これを逃したら…」
トニー「これがラストチャンスかもしれない。
マルセイユ港を出るところで全ての船が臨検を受けてる。
そこで追いつくぞ」
急いで5人は走って車に戻ると港に向かって飛ばした。

カーラ「見つけた!あれだ!」
１５分か２０分後、トニー達は港に着くとハーバーの出口に繋がる水路を航行するモーターボートを見つけた。

トニー達はハーバーの出口に繋がる水路沿いの道路を突っ走る。
すると前方に怪しい集団を見つけた。
スペード「あの船を追ってるのか!?」
アラン「ってことはあの中にいる可能性が高い。
奥を見ろ！海軍だ！」
アランが前を指さす、そこには武装したトロール船がいた。
それはカールスラント海軍第１０駆潜艇隊所属の元トロール漁船で８８ミリ高射砲と２０ミリ高射機関砲で武装した特設駆潜艇ＵＪ１４０４だった。
ＵＪ１４０４が発光信号と無線でモーターボートに停船を要求し、モーターボートに横付けした。
その間にアラン達は諜報部に先回りする。
アランの乗ったシムカはカーラ達を援護するために諜報部の一団の横を通り過ぎると前に立ちはだかる。
アラン「武器を捨てて両手を上げろ」
トニー「死にたいならそのままでも構わんがね」
アランとトニーはステンガンとコルトモニターを構えて諜報部員に警告する。
二人の警告の返答はなかった。
アラン「ならいい」
次の瞬間二人は一斉に発砲、諜報部員を文字通り一掃した。
その音を後目にカーラ達は岸壁の端に辿り着いた。
スペード「よし！先回りした…」
貫二郎「邦佳!?」
辿り着いた瞬間、カーラと邦佳は海に飛び込んだ。
邦佳「ジェニファーさん！」
カーラ「必ず助け出す！」
二人は使い魔を出して停船中の２隻に向かった。

水兵Ａ「カールスラント海軍だ、この船を臨検する」
船長「へえ、構いませんが。」
海軍士官「徹底的に探せ！」
その頃、モーターボートではＵＪ１４０４の乗員がモーターボートの臨検を行っていた。
水兵Ａ「キャビン異常なし。」
水兵Ｂ「船底部異常なし。」
だが何も見つからない様子だった。
しかし、突如海軍士官があることに気がつき叫んだ。
海軍士官「おい！あいつら何をしている！」
水兵Ａ「え？」
海軍士官は岸壁を指さした。
見ると二人の少女がこちらに泳いで向かって来ていた。
海軍士官「溺者救助用意！」
だが次の瞬間、発射音が聞こえるとモーターボートが爆発し海軍兵士達と乗員は海に投げ出された。
その様子は邦佳とカーラからもよく見えていた。
発射音が聞こえた方を見るとアラン達が一掃した諜報部員とは別の一団がパンツァーシュレックを構えていた。
邦佳「パンツァーシュレック…」
カーラ「う…嘘だろ…？ジェニ…ジェニファーが…死ん…」
邦佳「カーラ？カーラ!?」
カーラはショックを受ける。
そして気を失い溺れてしまう。
急いで邦佳は海に潜るとカーラを助ける。
一方ＵＪ１４０４では攻撃を受けて混乱が発生していた。
ヴェンケ「何が起きた！」
乗員「は！な、何者かが攻撃したようです！」
一部始終を見ていた艇長のクラウス・ヴェンケは大声で叫んだ。
ヴェンケ「総員戦闘配置！司令部に打電！
こちらＵＪ１４０４！Ｓ０９地区にて何者かによるロ

ケット弾による攻撃を受け交戦中！
　　臨検班に被害！」
乗員「は！」
乗員は臨検班の救助と同時に武器を用意する。
そして射撃準備が完了するとヴェンケが叫んだ。
ヴェンケ「撃て！」
その声と共にＵＪ１４０４の２０ミリ機関砲と８８ミリ高射砲が火を噴き岸壁にいた男たちが纏めて吹き飛ばされる。
当たり前だが本来飛行機やネウロイ、船相手に使う火力を人間に向けたため岸壁にいた諜報部員たちは一撃で消え去った。
更に乗員は備え付けの救命ボートを下ろして海に投げ出された臨検班や邦佳の下に向かいボートに引き上げた。
水兵Ｃ「大丈夫か？怪我はないか？」
邦佳「は、はい、それよりもカーラが…
　　意識が無くて水飲んでる！」
水兵Ｃ「分かった、負傷者一名！急いで船に戻るぞ！」
「「アイアイサー！」」
水兵達は急いでオールを漕いで船に向かう。
邦佳はボートの上でカーラに人工呼吸をする。
邦佳「まだ何にもはっきりしてないんだから！
　　しっかりして！目を覚まして！」
カーラ「ゴホ！」
すると水を吐いてカーラは意識を取り戻した。
邦佳「カーラ！良かった！」
水兵Ｃ「大丈夫そうだが意識はまだ混濁してる。
　　急いで軍医に見せた方が良い」
カーラは意識を取り戻したがまだ不安定だった。
水兵達は急いで母艦に戻った。
カーラ「こんなのって…ないよ…ジェニ…ジェニファー…」
カーラは途切れ途切れにうわごとのように言った。

数時間後、マルセイユ港湾司令部にアラン達が来ていた。
それは勿論ＵＪ１４０４に収容された邦佳とカーラの身柄の引き取りもあったがもう一つはあのモーターボートに関する情報だった。
アラン「では、あの船に女性は乗ってなかったのですね？」
ナウ「ええ。報告ではそうです。
　乗っていたのは船長だけです」
アランの質問に第１０駆潜艇隊司令のヘルベルト・ナウ少佐が答える。
　ナウもこの件で部下数名を失っていたためなぜただのモーターボートが諜報部に攻撃されたか不思議で仕方なかった。
　この襲撃でマルセイユ港は厳戒態勢となりキーラ達ではなく諜報部の人間を徹底的に探していた。
　そしてナウの受けた報告では臨検をしていた船にキーラ達は乗っていなかった。
アラン「では船の船籍は分かりますか？」
ナウ「ええ。マルセイユのこの会社の物です」
ナウはマルセイユの会社リストからある会社を指さした。
するとそこに邦佳とカーラが水兵に連れられてやってきた。
水兵Ｄ「司令官、黒田中尉とルクシック中尉を連れてまいりました」
ナウ「ご苦労、下がってよろしい」
ナウは水兵を下がらせた。
水兵が去ると貫二郎が邦佳に抱き着く。
貫二郎「邦佳！無事でよかった！」
邦佳「うん、でも…」
邦佳は言葉を濁した。
するとアランが朗報を伝える。
アラン「お前ら、朗報だぞ。
　ジェニファーは死んでない」
「「え！」」

カーラ「じゃあまだジェニファーは無事かもしんないんだな!?」
朗報に二人は大喜びする。
アラン「ああ。二人はあの船に乗ってない。
恐らくあれは囮だ。
その囮の船を持ってた会社も突き止めた。
この会社の連中が関わってるのは確かだ」
アランが状況を説明する。
そしてテーブルの上に置かれていた電話を手に取った。
アラン「マルセイユ港湾司令部財務調整室。
私だ、今すぐ次の会社の情報をくれ。」
暫く電話で話すと彼は電話を切った。
アラン「よしお前ら、３０分後にガサ入れだ。
一緒に乗り込むぞ」

３０分後、マルセイユのある倉庫では数人のギャングがカールスラント陸海軍の兵士に囲まれていた。
倉庫の外にはトラックや乗用車だけでなくパナール１７８装甲車やシュタイヤーＡＤＧＺ装甲車まで集まっていた。
アラン「さてと、答えてもらおうかボスさんよ?」
トニー「こっちだって裏社会の人間でね。
腹を割って話そうじゃないか。
それとも?実際に腹を割って話すか?」
その兵士達を率いてアランとトニーはギャングのボスの髭面の男を尋問していた。
彼は倉庫内の椅子に座らされ周りを完全武装の兵士達に囲まれていた。
トニーはナイフを取り出して男の首に当てる。
ボス「分かったよ、話すが一つ条件を付けさせろ。
逮捕はするなよ?」

アラン「分かってる。言っておくが俺達に逮捕権はない。
だから拘束は出来ても逮捕は出来ないね」
ボス「そうかなら話そう。
あの二人はトゥールーズ経由でブレストに向かった。
そこから潜水艦に乗ってブリタニアに向かうそうだ」
ボスは条件を付けた上でキーラとの件を話した。
そして立ち上がる。
アラン「そうか、メルシー、旦那さん。
少尉！」
少尉「は」
アラン「こいつらは頼んだ」
アランは軍部隊を率いていた警察上がりらしい少尉にギャングの一団の事を頼んだ。
少尉「は。
貴様らを密輸、密航、違法な武器売買、窃盗、恐喝、脱税、反政府勢力への協力の容疑で逮捕する」
ボス「お、おい！逮捕はしない約束じゃなかったのか！」
アラン「大変済まないね。俺達とそこの兵士達は所属が違うもんでね。
あくまで俺達が逮捕できないだけで彼らは逮捕できるのだよ、悪く思わないでくれ。
ではアデュー」
アランは凶悪な笑みを浮かべてボスに話す。
そしてボスに手を振って出て行った。

キーラ達の情報を知ったパリでは大騒ぎになっていた。
ボック「潜水艦だと！一大事だ！」
ハイドリヒ「地上で捕まえますか？」
ボックとハイドリヒはこの計画が彼らの安全保障体制への影響を

警戒していた。
何せ彼らが受け持っていると言ってもいいガリア領海にボック「バカ言うな、地上で捕まえても逃げられる可能性が高い。確実に逮捕しろ」
ハイドリヒ「では洋上でですか？」
ボック「ああ。アルノー提督に連絡。至急ブレスト周辺部の対潜警戒を厳とし国籍不明の潜水艦を発見次第報告せよ」
ボックは連合軍海軍西ガリア艦隊司令長官ロタール・フォン・アルノー・ド・ラ・ペリエール提督に至急の命令を出した。

連合軍海軍西ガリア艦隊司令部はブレストのブレスト城にあった。
ブレスト艦隊はUボートや沿岸警備隊、各種雑多な艦艇の他に数十隻の駆逐艦やフリゲートを有する艦隊でありブレスト以外にもシェルブールやサンナゼール、ロリアンなどに各国の艦艇などが集まり合計数百隻の艦艇を有する艦隊だった。
その司令官たるアルノーはかつては第一次世界大戦で多数の輸送船を撃沈合計１９４隻、４５３７１６トンのスコアを上げ史上最大の戦果を挙げた潜水艦艦長という輝かしい記録を持った男だった。
アルノー「成程な。国籍不明の潜水艦か」
参謀「どうしますか？警戒を上げましょうか？」
参謀が意見具申する。
だが彼はゆったりと椅子に腰かけながら少し考える。
アルノー「上げるのは明日の日没後からだ。まだパーティには少し早い。いいかね？狐狩りをするにはまず狐がいるのだよ」
参謀「は」
アルノーは冷静に策を廻らせる。

王党派がブレストからブリタニアを目指しているという情報は５０６にも届いた。
ホスバッハ「ブリタニアか…」
ロザリー「どうしてブリタニアなのかしら?」
ブリタニアに向かう情報にロザリーは疑問を持っていた。
プレッツ「大方ブリタニアに介入させて混乱させるか再編成を強いるかのどちらかでしょう。
残念ながらブリタニアの王立海軍は我々の指揮下にある。
ブリタニア領海に侵入すればその時点でＲＮは撃沈するという判断を下したそうだ。」
ロザリー「撃沈!?」
ロザリーが驚く。
撃沈という最悪の事態は絶対に避けなければならない。
ロザリー「何としても撃沈される前に助けるのよ!
急いでル・アーブルにユニットを送って!」
ホスバッハ「了解、整備班は緊急でル・アーブル分遣隊を緊急編成。
輸送機中隊は緊急出動態勢。
ル・アーブル空港に連絡、明日の朝一で輸送機を出す。
受け入れ態勢を整えさせろ!」
ホスバッハは即座に指示を出す。
翌朝、セダンとディジョンから５機のＣ―４７が飛び立ちル・アーブルに向かった。
折しもアラン達もマルセイユからパリを経由しル・アーブルに飛行機を乗り継ぎ向かった。

第２３話：Ｕボートを追え

翌日昼前、ロマーニャのローマの空軍参謀本部の一室ではロマーニャ軍の幹部が集まっていた。
バルボ「例の作戦が実行されるのは確か今日だったね」
デ・ボーノ「ああ。グラディオ作戦の実行は今日の１１００、後３０分後だね。」
レニャーノ「しかし、イタリアの統一という大義の為に自国民に犠牲を強いるのはどうかと思うが。」
レニャーノがある作戦の内容に疑問を感じていた。
それはグラディオ作戦、この３０分程後に開始される作戦だ。
デ・ボーノ「犠牲なくして統一無し。
　リソルジメントという正義の為だ。」
レニャーノの意見に作戦の立案・実行を指示していたデ・ボーノは無視する。
なぜレニャーノがこの作戦に反対するか、それは３０分後に分かった。

ミラノはロマーニャ北部にある工業・金融の中心都市である。
ロマーニャ最大の金融街などがある文字通りの経済の中心地だ。
毎日数万リラや数億リラという巨額の金が飛び交うこの街の中心部にあるミラノ中央駅の待合室には今日も多くの人でごった返していた。
だが待合室の片隅にあるスーツケースに気がつくものはいなかった。
数分後、そのスーツケースが大爆発を起こし、待合室は丸ごと吹き飛んだ。

そのほぼ同時刻、ミラノの代表的建築物と言えるヴィットーリオ・エマヌエーレ2世のガッレリア、更にそのすぐ傍のドゥオーモ広場でそれぞれスーツケースとトラックが大爆発を起こした。

その衝撃でヴィットーリオ・エマヌエーレ2世のガッレリアではランドマークの天井のガラスが全て砕け散り地上を歩いていた数百人に降り注いだ。

のちにミラノ同時爆破テロと呼ばれるこの事件で合計１３９人が死亡、５００人以上が負傷する大惨事となった。

数日後ロマーニャ政府はガリア・ロマーニャ国境付近で不審な車両を発見、財務警察が調べようとして銃撃戦となり乗っていた全員を射殺、その車両内からテロで使用されたのと同じスーツケース、爆薬、そしてガリア語で書かれた指示書などを発見。

ロマーニャ政府はこの事件をロマーニャ国内にいるガリア系テロ集団による犯行と断定、これを支援しているとしてガリア政府を非難した。

そしてこの事件を機にロマーニャとガリアの外交関係は急激に悪化、３週間後にロマーニャによるニッツァ・サヴォイア・コルシカ併合に繋がるとはこの時はまだ知る由もなかった。

ミラノで大惨事が起きて半日ほど経った後の午後９時３０分ごろ。

ブレストの南西４７キロ付近上空を一機のブリタニア空軍のショートサンダーランドが北に向かって飛行していた。

通信手「こちらドッグオーバーキング、ブレスト。

現在グリッドＨＳ２４、レーダー及び磁気探知機に感無し。」

副操縦士「准将閣下、本当に連中いるんですかね？」

「さあ、だが見つからないと困る。」

このサンダーランドの機長は只者ではなかった。

それは空軍准将ケント公爵ジョージであった。

彼はブレストのコースタルコマンド部隊の司令で本来出撃する必要などなかったがノブレス・オブリージュと空軍での定期的な飛行能力維持のための飛行の為出撃していた。
コールサインも専用のデューク・オブ・ケントの略称を使用していた。

ジョージ「早く帰りたいよ」
副操縦士「そうですね閣下。」
二人は愚痴を言いながら目の前の漆黒の大西洋と夜の空を見る。
機内はまさに平穏と言える程静かだった。
突如レーダー手が叫ぶまでは。
レーダー手Ａ「！機長！ハフダフに感あり！」
ジョージ「なんだと！」
副操縦士「方位と距離は！」
レーダー手が短波方向探知機ハフダフに反応があったと叫んだ。
ケント公と副操縦士は驚き振り返る。
レーダー手Ａ「方位０８５、距離不明。
ＡＳＶの方は！」
レーダー手Ｂ「ビンゴだ！ＡＳＶにも感あり！
方位０８５！距離２０カイリ！
ＩＦＦに反応なし！国籍不明艦と識別！」
更に別のレーダー手が搭載されている対艦レーダーにも反応があったと告げる。
副操縦士「どうしますか？」
ジョージ「了解、司令部に打電。
ブレスト沖１０キロ付近にて国籍不明の艦をレーダーで探知、これより調査に向かう。
右旋回０８５」
サンダーランドは右に旋回しレーダーの探知した場所に向かった。

そのレーダーが探知した場所、そこには一隻のUボートⅦ型と漁船が漂泊していた。
漁船にはキーラとジェニファーが乗っていた。
二人はUボートに乗り込むと船長らしき男と会話する。
キーラ「ガリア我が喜び」
船長「ガリア我が喜び」
二人は合言葉を言う。
そして聞いた。
船長「それが船荷か？」
キーラ「ああ」
船長「我がUボートにようこそ」
船長はジェニファーに挨拶する。
だがその落ち着いた空気は次の瞬間、突如エンジン音が聞こえると変わった。
キーラ「！エンジン音だと！」
船長「まさか！」
エンジン音がする方を甲板に出ていた乗組員が見る。
すると頭上を超低空で巨大な飛行艇が通過した。
キーラ「サンダーランド！」
船長「ブリタニア空軍機だと!?」

副操縦士「いたぞ！至急司令部に打電！
国籍不明の潜水艦を発見！
至急増援を要請！」
通信手「了解！こちらドッグオーバーキング、グリッドヴィクターマイクチャーリー１３４にて国籍不明の潜水艦を発見！
至急支援要請！」
サンダーランドの機内では乗員が慌ただしく動いていた。
通信手は司令部に報告する。
ジョージ「上空を通過してから左旋回、艦尾から突っ込む」

副操縦士「了解、爆撃手！警告用爆雷投下用意！」
爆撃手「了解！爆雷安全装置解除！」
ケント公が作戦を伝える。
機体は超低空で潜水艦を飛び越える。
さらに発光信号の用意も叫ぶ。
ジョージ「通信手、発光信号で警告！」
通信手「了解！文面は？」
ジョージ「こちらブリタニア空軍機、ブレスト沖にて漂白中の国籍不明の潜水艦に問う
　貴艦の所属と艦名を答えよ、答えない場合貴艦を海賊として攻撃する」
通信手「了解」
通信手は席を立ちあがると斜めに傾いた機内を歩いて窓から発光信号を送る。

乗員Ａ「ブリタニア空軍機より発光信号。
　コチラブリタニアクウグンキ
　ブレストオキニテヒョウハクチュウノコクセキフメイノセンスイカンニトウ
　キカンノショゾクトカンメイヲコタエヨ
　コタエナイバアイキカンヲカイゾクトシテコウゲキスル」
乗員がサンダーランドの発光信号を読み上げる。
その内容は所属と艦名を明かさなければ撃沈するという警告だった。
船長「どういうことだ！最大戦速！
　急速潜航！ダウントリム最大！深度１５０急げ！」
船長は驚きながら急速潜航を命ずる。
艦内からサイレンが鳴り響き潜水艦のディーゼルエンジン音、艦首を目指す乗組員の足音などが聞こえ甲板にいたキーラ達も慌ただし

く艦内に滑り込んだ。

―――――――――――

副操縦士「閣下！潜水艦が潜航を開始！」
ジョージ「了解、警告用爆雷投下！」
爆撃手「投下！」

潜航しようとするUボートに艦尾からサンダーランドが追いすがる。
そして艦橋の半分まで潜航した状態のUボート上空にまで到達すると一気に警告用の爆雷6発を投下、6本の大きな水柱が立つ。
Uボートはその中で木の葉の様に揺れる。

―――――――――――

その頃潜水艦の艦内は激しく揺れていた。
船長「く！」
ジェニファー「キャアアアア！」
ジェニファーは泣き叫ぶ。
更に艦内では衝撃で艦内配管の一部が破損、海水が噴き出し電球が割れる。
船長「く、被害は？」
揺れが収まると船長が乗員に聞く。
乗員B「艦内配管一部破損、電球3個破損、一部燃料配管破損です。」
損害は想像以上に微小と言えた、だが次の報告で状況が変わった。
機関長『こちら機関室！蓄電池が一部破損！
持続潜航時間推定13時間！』
船長「何！」
問題は蓄電池の破損だった。
蓄電池が破損し潜航時間が限られてしまった。

この時代の潜水艦はせいぜい可潜艦程度の能力しかない、更に潜航中はシュノーケル装置を使わない限りディーゼルエンジンを使用できない。
潜航できる時間はこの蓄電池が持つ時間に限られた。

ジョージ「逃げられたか…」
副操縦士「後は水上艦が見つけてくれることを祈りましょう」

サンダーランドの乗員は自分達の警告爆雷が重大な損害を与えた事も知らず上空を旋回していた。
だがこのサンダーランドの報告は周囲の大艦隊を動かした。
すぐに多数の駆逐艦、フリゲート、コルベット、スループ、海防艦、駆潜艇、水雷艇、掃海艇、武装トロール、巡洋艦、航空機が夜の街灯に集まる蠅のように集まってきた。

その中で最も早く現場に到着したのが扶桑海軍の鵜来型海防艦屋久と丙型海防艦第1号、第9号海防艦の3隻だった。
この部隊は伊集院松治少将指揮の扶桑海軍遣欧派遣艦隊第2護衛戦隊群指揮下の艦艇だった。
これらの艦はリベリオン製又はブリタニア製の高性能ソナーとレーダーを装備、熟練の水測員を乗せていた。
その中の一隻、第1号の水測員がサンダーランドが接触した地点から3カイリ西に1時間後辿り着いた時、何かの音に気がついた。
水測員『こちら水測！何かいます！』
「何？どこだ？」
水測員からの報告を受けた艦橋で艦長の有馬國夫少佐が反応する。
3隻は斜めに並びながら対潜警戒を行って航行していた。

その中で第1号は最も右側の先頭に立っていた。
水測員『距離深度不明、方位１７４』
有馬「了解、発光信号、ワレ敵船ラシキモノヲ発見ス。
　右転舵１７４、総員戦闘配置、対潜戦闘用意、爆雷投下用意」
有馬は独断で艦を向かわせる。

その音はUボートからも聞こえていた。
ソナー員「船長、前方より船舶接近中」
船長「何？」
ソナー員「二軸艦３隻、方位３５６。
　速力１３のっと。」
船長「タイプは？」
ソナー員「恐らくフリゲートかコルベット。
　スループの可能性も」
船長「分かった」
ソナー員の報告に船長とソナー員は二人で小声で話していた。
一方自分に宛がわれた部屋に座っていたジェニファーは最初の爆雷、更に艦内気圧と相まって気分が悪くなっていた。
その様子にキーラは気がついていた。
キーラ「どうした？」
ジェニファー「少し、息苦しくて…
　一体さっきから何が…」
ジェニファーが状況を聞く。
この一連の動きにジェニファーは理解できていなかった。
キーラ「ブリタニア空軍機が来て爆雷を投下した。
　それで潜航を余儀なくされた、それだけだ。」
ジェニファー「それって…」
キーラ「恐らく数時間以内にこの艦の周りには数十隻の連合軍艦艇が集まってくる。

ブリタニアに辿り着くどころか最悪もう二度と水面には上がれない」

知る限りの情報を伝える。

状況は最悪だった。

そして次の瞬間、艦内に大きな反響音が響いた。

ジェニファー「わ！」

キーラ「シッ！音を立てるな」

驚いたジェニファーが大きな声を出す。

咄嗟にキーラはジェニファーの口に手を当て注意する。

ソナー員「く、敵艦接近。距離２５００、３５５、速力１０ノット」

船長「大丈夫だ、こちらには船荷がある。

これがある限り撃沈はされない」

水測員『かかりました！敵船方位１７５、深度９０、速力５ノット、距離２５００！』

有馬「かかったなアホが！警告用爆雷投下用意！深度調停１２０と５０！」

大きな反響音は第１号が出したピンガーだった。

ピンガーの反響音で正確な潜水艦の位置を確認した。

位置を把握した３隻の海防艦はＵボートの位置に向かい真上に到達する、そして一気に３隻から２０発の爆雷が発射、大量の水柱が起きる。

そしてこれがその後１２時間に渡って続くことになる大捕り物の号令となった。

接触、そして攻撃の連絡はすぐにブレストの司令部に届いた。

作戦室の大きな地図を見ていたアルノーに将校が報告する。

将校「提督、先程扶桑海軍の海防艦３隻が潜水艦を捕捉、攻撃したと連絡が入りました。」

アルノー「狐は網にかかったか。
全艦艇、航空機を向かわせろ。
絶対に逃すな、そして沈めるな。」
将校「は！」
アルノーは指示を出すと地図の傍に置いていたコーヒーカップを取り一口飲む。
アルノー「さて、根競べといこう。
気が狂わないようにせいぜい神に祈るがいい。」
アルノーの言葉の真意は潜水艦乗りにしか分からないだろう。

キーラ「く！」
ジェニファー「キャ！」
数時間後、Uボートは水中で木の葉の様に揺れていた。
周囲にはたくさんの水泡が浮かびドラム缶のようなものが沈んでくると爆発する。
それを繰り返しながら追い詰められていた。
閉鎖された空間で終わることのない爆雷の爆発と衝撃にジェニファーは憔悴していた。
ジェニファー「なんで…なんで…こんな目に遭うんですか…
殺すなら早く殺してくださいよ…」
もはやジェニファーは限界が近づいていた。
だが終わることはなかった。
それからさらに数時間、夜が明けてもなお続くことをまだ知らなかった。

第２４話：信頼

翌日早朝、セダンには多くの賓客が集まり多数の兵士が警備に就いていた。
カーロイ「あと１５分で開始か…
　隊の結成宣言と宣誓は最後だからタイムリミットは昼前か」
カーロイが腕時計を見ながら呟く。
傍にはイザベルもいた。
イザベル「黒田さんたちはもうル・アーブルに着いたかな？」
カーロイ「昨日の夕方には着いてるそうだ。
　ジェニファー達が乗った潜水艦も今海軍が総動員で追いかけてる。」
カーロイは伝え聞いた情報を言う。
ジェニファー達の事を気にしていたのは彼らだけではなかった。
ボック「海軍の方はどうなってるんだ？」
ハイドリヒ「情報では現在も捕捉中、現在地はシェルブールの北東１２０キロだそうです。」
ボック「分かった、ペリエール提督に１１００までに投降しない又はどこかの国の領海を侵犯した時点で撃沈しろと伝えろ。」
ボックは決断した、最悪の場合の撃沈を許可した。
その命令はペリエールを通じてシェルブール沖で追跡中の艦艇に伝えられた。

水兵「司令官、電文です」
伊集院「ありがとう」
電文は対戦掃討を指揮していた海防艦八十島（元中華民国海軍軽巡洋艦ピンハイ（平海）に座上する伊集院提督の下に届けられた。
電文を一読すると彼は双眼鏡で前方でブリタニア海軍の駆逐艦

ヴァンパイアが爆雷を投下する様子を覗く。
伊集院「全艦にあの電文と同じ内容の命令を出せ。」
水兵「は」
伊集院「そろそろ例のウィッチ達が来るはずだ。
　電探に出てるか？」
伊集院は来ているはずのウィッチ達の事を聞いた。

アラン「さてと、総仕上げだ。
　お前ら！ヘマするなよ！」
トニー「で、お前らそんなの持ってどうするんだ？」
その頃、ル・アーブル空港ではアラン達が出撃準備を終えていた。
だがトニーは邦佳と貫二郎の二人の持ち物が気になっていた。
アラン「ジャパニーズサムライとカタナか？
　日本人は近代戦でもカタナを振り回すってのは本当だったんだな」
邦佳「いいのいいの」
貫二郎「違いますよ、キーラは接近戦が得意ですからだったらこっちもそれに備えればいいんですよ」
二人が気になっていたのは邦佳が背負う槍と貫二郎の持つ日本刀だった。
そして一行は離陸する。
既に潜水艦の位置は連絡を受けて分かっていた。
ふとアランは腕時計を見る。
アラン「もう式典が始まったころだな」
カーラ「なぁ」
するとカーラがいつもとは違う弱気な声でアランに聞いた。
カーラ「もし私達がミスって遅れたりしたら…もう…
　私のせいで５０６が結成できなかったら…」
邦佳「大丈夫だって！船が爆発したときに比べれば希望が持てるよ

！

らしくないねえ」

カーラを邦佳が励ますが逆効果だった。

カーラは泣き始めた。

カーラ「らしいって何だよ？

ほんとの私は前向きでも陽気でもない！

嫌われるのが怖いからそう見せてるだけだ！

小っちゃい頃から転校ばっかで周りの顔色伺う事が得意になっただけなんだ…」

するとアランが肩を組んだ。

アラン「大丈夫だ、上手くいくさ。

俺達の仕事は海中深くに建てられたお城に閉じ込められたお姫様を悪ーい魔女にキャリバー５０の正義の鉄槌を浴びせて救い出すことだ。

なんだ簡単な事だ。

それにお前はムードメーカーだ、君からは散々元気をもらったよ。

さっさと終わらせて上手いフランス料理でも食いに行こう」

アランがカーラを励ました。

カーラは涙をぬぐう。

カーラ「ありがとうアラン！」

アラン「さあ行くぞ！ここからは時間との勝負だ！

一分一秒たりとも無駄にできないぞ！」

トニー「望むところだ」

アランが号令をかける。

眼下には多数の軍艦が現れていた。

アラン「さあ行くぞ！」

だがその直後、艦隊内部で爆発が起き一隻の軍艦から煙が上がる。

邦佳「ねえ！アレ！」

アラン「何が起きた！」

数分前、潜航中のUボートは追い詰められつつあった。
船長「く、バッテリーはあと何分持つ？」
乗員Ａ「恐らく３０分…脱出は無理です。浮上、投降しましょう」
もはやバッテリーは残り僅か、残された選択肢は浮上して突破するかこのまま海面下に永遠に押し下げられるか、浮上して投降するかの３つに一つだった。
船長「いや、まだ手はある。
魚雷戦用意、潜望鏡深度まで浮上」
乗員Ａ「え？」
船長「敵艦を雷撃しその混乱をついて脱出する！」
キーラ「それでは撃沈させる口実を作るだけでは？」
船長「このまま袋の鼠にされるよりも袋のどこかに穴をあけ脱出を図る方が理にかなっている」
キーラや乗員の意見を無視し船長は潜望鏡深度まで浮上させると魚雷を装填させる。
潜望鏡から周りを見ると多数の軍艦が取り囲んでいた。
船長「どこかに獲物は…いた、方位０５０、速力２０ノット、扶桑海軍フブキクラス駆逐艦。
腹を見せてる。やるぞ、魚雷用意、深度調停３メートル」
水雷長「魚雷装填、装填１、２番」
水雷員たちは急いで魚雷を装填する。

その音は水上艦からも聞こえていた。
最も近くにいた駆逐艦コサックの水測員がソナーの音を報告する。
水測員「敵艦、注水中、魚雷です…！」
士官「分かった、艦長！敵艦魚雷装填中！」
士官は伝声管に向かって叫んだ。

数秒後、水測員が叫んだ。
水測員「敵艦より突発音！数２！魚雷です！」
士官「方位は！」
水測員「恐らく方位０４５に向かって発射！」
士官「不味い！そっちにはアケボノがいる！
　艦長！敵艦アケボノに向かって魚雷発射！」
艦長『何！』

見張り員「左舷より魚雷接近！数２！」
艦長「取り舵一杯！最大戦速！」
操舵手「取り舵一杯！」
魚雷が向かってくる扶桑海軍特型駆逐艦曙では急いで回避行動を取っていた。
そして一発が艦首を掠める。
見張り員「魚雷一本回避！うわ！」
見張り員が叫んだ直後、艦を衝撃が襲う。
艦長「く！食らった！被害報告！」
水兵『魚雷艦尾直撃！２番砲塔以降の艦尾切断！火災発生！』
副長「急いで浸水と火災を止めろ！
　負傷者を運び出せ！」
艦長「支援要請を出せ！
　クソ！やりやがった！」
曙の損害は甚大だった。
艦尾を喪失し大破、火災と浸水が発生していた。

水兵「司令官！曙被雷！大破！」
伊集院「何！やるしかない、コサックに下令、ヘッジホッグ用意！」
攻撃を受けた事で伊集院は撃沈の判断を下した。

だがすぐに別の報告が入った。
水兵「コサックより発光信号！敵艦から排水音！急速浮上中！」
伊集院「分かった！全艦対水上戦闘用意！
　主砲砲撃戦用意！」
潜水艦が浮上中という連絡に水上戦闘の用意を命ずる。
数十秒後、Ｕボートが艦隊のど真ん中に浮上した。

――――――――――

なぜ急浮上したか、それは数分前に遡る。
水雷長「命中まで２０秒…１５…１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１…」
艦内で水雷長が時計を見ながら呟く。
そして数秒後艦の外から大きな爆発音が聞こえた。
乗員Ａ「やった！命中だ！」
船長「静かにしろ」
爆発音を聞いて乗員が喜ぶがそれを船長がたしなめる。
一方ジェニファーはますます状況が悪くなっていることに気がついていた。
終わることのない爆雷攻撃、魚雷の発射、そして命中、確実に撃沈される要素が揃っていた。
そして行動を起こした。
乗員Ｂ「艦内で火災発生！緊急浮上の許可を！」
船長「な！
　く、仕方ない…アップトリム最大、バラストブロー、最大戦速、水上戦闘用意」
　突如艦内に火災警報が鳴った。
それにキーラには思い当たる節があったようで艦橋から傾いた艦内を走ってジェニファーの下に向かった。
ジェニファーの部屋に行くとジェニファーが何か細工をしていた。
キーラ「やはりお前かジェニファー」

ジェニファー「ベッドのスプリングと照明のソケットをお借りしました。
　　このままじゃ永遠に海上に出られそうになかったので」
ジェニファーが配線を弄って偽の火災警報を鳴らしたのだ。
キーラ「自分も焼け死ぬ可能性も…」
ジェニファー「まだ海の底深くに押しやられるよりマシです、それに私は５０６のみんなを信じてますから。
　　私には絶対に信じられる仲間がいるんです！」
その間に艦は急速浮上し海面に出て水平になった。
すると部屋の外から声が聞こえた。
乗員Ｃ「上空にウィッチ発見！数２！」
キーラ「まさか！」
ジェニファー「黒田さんたちが来たんですね。
　　貴方には私のような絶対に信じられる仲間がいない、可哀想な人です。」
ジェニファーがキーラに言う。
するとキーラは自嘲気味に零した。
キーラ「ふ、今更生き方を変えられる程器用じゃない…来い！」
するとキーラはジェニファーを無理やり連れて行く。

その頃セダンでは式典が始まり最初にホスバッハ率いる地上部隊の閲兵式が行われていた。
軍楽隊が行進曲ケーニヒスグレッツ行進曲とカドリーユの主題による速歩行進曲を奏でながら兵士達と戦車部隊が行進する。
戦闘ではホスバッハとその後ろに軍旗を持った兵士がガチョウ足行進をする。
ホスバッハ「敬礼！」
演台の前を通ると立てていた軍旗を前に倒し兵士達は左手の演台

に向かって銃を持った兵士は顔を向け、将校は敬礼する。
それにボックやド・ゴール、ハイドリヒ、マロリーなどの将軍たちも敬礼する。
すると一人の将校が将軍たちの合間を縫ってボックに耳打ちした。
将校「閣下、例の潜水艦が扶桑海軍の駆逐艦を雷撃、大破させたようです」
ボック「そうか、ペリエール提督に早く片をつけろと伝えろ」
将校「は」
ボックは一切動揺せず淡々としていた。

貫二郎「邦佳、分かってるね？」
邦佳「うん」
水面に潜水艦が浮上したのを確認した貫二郎と邦佳は準備する。
一方何故かアラン達はいなかった。
数秒後、突然潜水艦から何かが射出された。
それはユニットを履いたキーラとジェニファーだった。
二人は貫二郎たちの前に立ちふさがる。
邦佳「ジェニファーさん！」
ジェニファー「黒田さん！大野さん！」
すると邦佳は銃を捨てた。
キーラ「？人には決して銃口を向けない…か？
　相変わらずの甘ちゃんだ。」
貫二郎「もういいだろう、ジェニファーを返してください」
キーラに向かって貫二郎が言う。
するとキーラは薄気味悪い笑みを浮かべると返事をした。
キーラ「いいだろう、来い！」
邦佳「返してくれるの!?」
キーラは急上昇する。
そしてジェニファーを掴んでいた手を離した。

キーラ「受け取れ」
邦佳「ジェニファーさん！」
驚いた邦佳は咄嗟に急降下してジェニファーを捕まえようとする。
邦佳「手を伸ばして…！もう少し…！間に合っ…」
ジェニファーの手を邦佳が掴んだ瞬間、邦佳が何かに気がついた。
突如、背中に鋭い痛みを感じる。
そして金属同士がぶつかり合う音も。
キーラ「な！」
貫二郎「間に合った！」
キーラが邦佳を刺そうとした、だがその直前に貫二郎が割って入って刀でナイフを吹き飛ばしたのだ。
貫二郎は綺麗にナイフだけを吹き飛ばし邦佳の怪我はナイフで肩を切りつけられただけだった。
ナイフを吹き飛ばされたキーラはもう一本のナイフを持って日本刀を構える貫二郎と相対する。
キーラ「大野貫二郎…貴様…」
貫二郎「どうしますか？正々堂々、武士らしくやり合います？
それとも…少しは眼下の事を気にしてはいかがでしょうか？」
キーラ「眼下の事…？」
貫二郎に言われ下を見る、眼下では一隻の駆逐艦がUボートに強行接舷しあたかもトラファルガーやアルマダのような切り込み攻撃が発生していた。
キーラ「そうだな、だが、君も彼女の事を気にしてはどうかね？」
貫二郎「え？」
キーラに言われ貫二郎は邦佳の方を見る。
邦佳は肩を深く切りつけられていた。
そのためジェニファーを片手で掴むのが難しく苦しそうだった。
貫二郎「邦佳！」
キーラ「貰った！」
次の瞬間、キーラが貫二郎に突っ込む。

咄嗟に刀でナイフを受ける。
キーラ「戦いの最中によそ見はいけないよ」
貫二郎「く…リーチの短いナイフでここまでやり合えるとは…」
キーラ「私を舐めないでくれるかな?」
キーラと貫二郎は鼻と鼻が当たりそうなほどの距離で睨み動けない。
ジェニファー「出血が…手を放して私を…」
邦佳を心配するジェニファーが叫ぶ。
邦佳は苦しそうに返事をする。
邦佳「私を信じてくれる?」
ジェニファー「はい」
ジェニファーが返事をすると手を離した。
キーラ「やはり貴様もわが身がかわいいか!?
仲間を見捨てても自分は助かりたい!それが人間だ!」
キーラが嘲笑う。
だが二人は笑みを浮かべるだけだった。
貫二郎「違う」
邦佳「仲間を信じてるから!」
二人が言う。
数秒後、雲の中からカーラが飛び出しジェニファーをキャッチする。
カーラ「邦佳!キャッチしたぞ!」
キーラ「ルクシック中尉!?最初から雲の中に隠れていたのか!?」
キーラが驚く。
突如雲の中から前触れもなく現れたのだ。
邦佳「カーラ!ル・アーブル空港に先に戻ってて!」
カーラ「え!?けど…」
貫二郎「大丈夫、僕達で足止めしますから」
先にカーラ達を帰らせる。
カーラ「そいつの相手は適当にして追いつけよ」
キーラ「させるか!」

邦佳「行かせない！」
キーラが追いかけようとするがその前に邦佳が立ちはだかる。
更に後ろに貫二郎が立ちはだかる。
キーラ「目の前のバカ二人を仕留めてから追いかければいいか。
　お互い時間がない、お前は出血が止まってないし私はあの二人に追いつかなければならない」
邦佳「そうだね」
すると邦佳は背中に背負ったものを取り出した。
キーラ「槍？」
邦佳「大尉が言ってたけど槍は騎士の魂が宿るって、だからジェニファーさんを助けたいってみんなの思いをこの扶桑号に乗せて戦う！」
槍を構え邦佳が叫ぶ。
キーラ「ふ、笑わせる。
　私は古き良きガリアを再興するため厳しい訓練に耐え己を制し人さえ殺め人生を捧げた！
　信念の無いお前に私が負けるはずない！」
アラン「バカだなお前ら。」
トニー「全くだ、今は２０世紀だ、それももうすぐ半分も経つぐらいのな」
キーラがナイフを構え邦佳に突進した瞬間、２発の銃声が響いた。
音の方向を見るとそこには双眼鏡を持ったアランとウィンチェスターＭ７０を構えたトニーがいた。
そして二発の銃弾はキーラのユニットを貫いた。
アラン「命中だ。後の始末は…」
トニー「ああ、俺達の仕事だ」
二人は急いで邦佳の下に向かう。
一方彼女は咄嗟にキーラを掴む。
キーラ「一体何が…
　…トニー・コルレオーネか…」
何が起きたかキーラは分からなかった、だがライフルを持ったト

ニーを見て納得した。
トニー「黒田、こいつは借りるぞ。」
邦佳「え？」
アラン「お前は今すぐ空港に戻れ、貫二郎、黒田を助けろ。」
貫二郎「了解」
邦佳「でも…」
アラン「この先は俺達が始末する」
トニーは邦佳からキーラを奪い、アランが空港に戻らせた。
そして数分後、邦佳達の下に追いついた。
そこにはキーラはいなかった。
邦佳「キーラさんは？」
トニー「放してやった」
邦佳の問いにトニーは一言答えただけだった。

第２５話：始まりの終わり、そして…

将校「閣下、先程確保したようです」
ボック「分かった」
ハイドリヒ「想定よりも少し遅いですね」
ボック「演説だが、プランＢで行く。
　用意したまえ」
将校「は」
将校から終わったことを耳打ちされたボックはこのすぐ後に行われる演説の話をする。
するとアナウンスがなった。
アナウンサー「続きまして、連合軍ガリア軍行政司令部司令官フェードア・フォン・ボック大将による訓示であります」
アナウンサーに呼ばれボックは座席から立ち上がると演台に演説の原稿を持って向かった。
そして演台に上がりマイクの前に立った。
ボック「ご来賓の皆様、親愛なるガリア国民、そして５０６と全ての将兵たち、今日という日を迎えられたことを連合軍を代表して祝いの言葉を述べよう。
　５０６はこの西部戦線の要ともいうべき部隊である。
この部隊無くして西部戦線の守り、そしてカールスラントの奪還などありえないと断言しよう」
ボックは演説を始める。
最初に所謂典型的な祝辞を述べる。
ボック「連合軍とは文字通り国家の連合による軍隊だ、それも自由と権利という二つの決して奪われてはいけない物を守るという事を標榜した軍隊である。
　そしてこの部隊も同様だ、ガリアにおける自由と権利を守るため世界中各国から集められた人々からなっている。
　カールスラント、ベルギカ、ロマーニャ、扶桑、そしてリベリオン。

人類の協調を表す構成だ。
そして半分は貴族だ。
私も貴族だが、貴族の責務、ひいては持っている者の責務とは持たざる者への奉仕だ。
彼ら彼女らは持っている者だ、彼らは持たざる者たるガリア国民の為、そして世界の自由と権利と平和の為にその身と血を捧げるのだ。
この英雄たちに私は最大限の賛辞を贈ろう。」
ボックは更に５０６のメンバーを称賛する。
ボック「私は連合軍を指揮する者としてここに宣言しよう。
もしも、彼ら彼女らを攻撃せんとする者が現れるのなら、それは我々連合軍、ガリア、そしてこの国の全ての人の自由と権利への宣戦布告だという事を。
もしそのような者がいるのならこの場で神の名の下に宣言しよう、我々は決して降伏しない、引かない、そして負けないと。
我々の神聖なる権利を奪い古の制度に戻らんとする者共に向かって伝えよう、攻撃は貴様らの負けだと。」
ボックは更に王党派を念頭に置いた文を続ける。
ボック「そして、この場で全世界に悲しいお知らせをしなければならない。
それは、我々の神聖なる権利を奪い古の制度に戻らんとする者共が彼ら彼女らを攻撃してしまったという事を。」
そしてボックが爆弾発言を落とした。
その言葉に会場がざわつく。
ロザリー「え!?」
ハインリーケ「正気か!?」
ジーナ「まさか…」
カート「あの事を…」
そして５０６のメンバーは絶句した。
この後の話などすぐ理解できた。
ボック「数か月前、この部隊の格納庫の爆発を覚えている者は多い

だろう。
そしてそれはテロだった、実行したのは王党派と呼ばれる組織だ。
彼らの目的は何か?この国を混乱に陥らせあわよくば政治の実権を握り、王政を復古させ、国民の神聖なる権利と自由を奪い、富を搾取し、弾圧し、奴隷にせんとするつもりなのだ。
そして連中の攻撃は軍だけではない!数日前、パリ北駅を連中が爆破した。
これは連合軍への攻撃ではない!ガリア国民への攻撃なのだ!
我々にできることは何だ!」
ボックが叫ぶ。
すると聴衆から声が聞こえ始める。
「我々の権利と自由を守れ!」
「そうだ!そうだ!」
「祖先が戦って手に入れた権利と自由を守るんだ!」
「彼らは血を流して手に入れたんだ!守るために血を流してなんだ!」
「連中を再びギロチンにかけろ!」
「武器を取れ!奴らと戦うんだ!」
ボック「そうだ!戦うのだ!
Ａｕｘ ａｒｍｅｓ，ｃｉｔｏｙｅｎｓ!
Ｆｏｒｍｅｚ ｖｏｓ ｂａｔａｉｌｌｏｎｓ!」
ボックが絶叫する。
すると誰ともなしに歌い始めた。
「Ａｌｌｏｎｓ ｅｎｆａｎｔｓ ｄｅ ｌａ Ｐａｔｒｉｅ，
Ｌｅ ｊｏｕｒ ｄｅ ｇｌｏｉｒｅ ｅｓｔ ａｒｒｉｖ▪
!」
それはガリア国歌ラ・マルセイエーズだった。
気がつけばウィッチ以外のほぼ全員が起立し大声で大合唱していた。

「Contre nous de la tyrannie,
L'▪tendard sanglant est lev▪,
L'▪tendard sanglant est lev▪,」
更に軍楽隊も合唱に合わせて演奏を始める。
「Entendez—vous dans les campagnes
Mugir ces f▪roces soldats ?
Ils viennent jusque dans vos bras
▪gorger vos fils, vos compagnes !」
「Aux armes, citoyens,
Formez vos bataillons,
Marchons, marchons !
Qu'un sang impur
Abreuve nos sillons ! 」
ボック「そうだ諸君！奴らに向かって高らかに宣言しよう！
我々が国民だ！我々が国家だ！我々がこの国の王だという事を！」
「ガリア万歳！自由万歳！」
「我々が国民だ！我々が国家だ！我々が王だ！」
ボック「奴らに見せつけるのだ！ガリア国民は決して悪逆非道のテロなどに屈しないと！」
ボックの演説に会場のボルテージはマックスとなった。
ボック「諸君！かの革命のときのように武器を取れ！
軍を組織せよ！」
会場は拍手喝采とガリア国歌を歌う声に包まれた。
その様子はまさにかの史上最悪の独裁者の演説のようだった。
そしてこの演説の影響は５０６の結成式典のロザリーの訓示を曇らせ、感動ではなく怒りと義憤を齎した。

「「我々が国民だ！」」
「「民衆の声が聞こえるか！」」
「「自由万歳！権利万歳！民主主義万歳！」」
数日後、パリのレピュブリックの広場には2万人は軽く超えるであろう人々が集まり国旗を振り大声で叫んでいた。
王党派の攻撃という事実は結成式典の翌日、ガリアの全主要新聞の一面を飾りボックの演説の全文が掲載された。
「「自由と権利を守れ！」」
「「我々が権利だ！」」
「「我々が自由だ！」」
国民の多くはこのニュースに衝撃を受けていた。
彼らの多くにとって共和主義、民主主義、自由、権利は不可侵でありこの国のアイデンティティたるものだと考えていた。
それを真っ向から否定する勢力が突如現れ、そして実際に攻撃したのだ。
彼らの怒りと義憤は最高に達した。
そして彼らは〝民主主義的な〟行動を起こした。
のちに共和国の行進とガリア史上最大のデモ行進と呼ばれることになるデモであった。
デモ隊は警察と軍の警備と統制を受け平和的に行進していた。
「「我々が国民だ！」」
「「我々が王だ！」」
このようなデモは同じ日に、ガリアのほぼ全ての都市で行われた。
「「我々はテロに屈しない!!」」
「「自由と権利と民主主義を守れ！」」
モットーはただ一つ「自由と権利と民主主義を守れ」
ボック「素晴らしい、全くもって素晴らしい。
我々の思惑通りになった」
ハイドリヒ「ええ。ガリア国民にとって王党派は自国のアイデン

ティティを踏みにじる存在ですから。
　連中の存在を訴え、そしてアイデンティティを踏みにじる存在だとアピールすることで全ガリア国民に義憤を促す。」
ネーベ「所詮、王党派と言えど国民の支持無くして勝てるわけがないだろう。」
そのデモの声を聞きながら3人は自らの策が全て上手く行ったと感じていた。
このデモも何もかもが彼らの策だった。
ボック「王党派という存在を利用し、民衆を扇動し、敵を作る。
　そして混乱に陥れ、この国を切り刻む。」
そう言うとボックは壁にかけられたガリアの地図に向けテーブルの上に置かれたダーツを投げる。
ボック「まずはニッツァ、サヴォイア、そしてコルシカ。」
最初に投げたダーツ3つはガリアの地図のニース、サヴォア、コルスと書かれた文字の上に刺さる。
ボック「次はエルザス・ロートリンゲン、そして植民地だ」
そしてアルザス、ロレーヌにも刺さる。
ボック「全ては祖国の為に」

――――――――――

「イタリア万歳」
「イタリア万歳」
そこから数千キロ離れたヴェネチアの最高級レストランでは二人の男がワインの入ったグラスを掲げる。
「ロベルト・デッラ・カルヴィ、カポディストリア侯爵、ヴィッラフランカ・パドヴァーナ伯爵、ノヴァ・ゴリツィア男爵。
まさに貴族というべき経歴、そして…」
片方の男の名はヴェネチア空軍大尉カポディストリア侯爵、ヴィッラフランカ・パドヴァーナ伯爵、ノヴァ・ゴリツィア男爵ロベルト・アンミトレ・ヴィットーリオ・デッラ・カルヴィ、そして片方はヴェ

ネチア政府内務次官のアルド・フィンツィだった。
カルヴィ「パルチザン」
フィンツィ「ふ、Una mattina mi son svegliata, o bella, ciao! bella, ciao! bella, ciao, ciao! 」
カルヴィ「Una mattina mi son svegliata, e ho trovato l, invasor. 」
フィンツィがある歌の一節を口ずさむ、するとカルヴィも続けた。
カルヴィ「O partigiano,」
フィンツィ「portami via, o bella, ciao! bella, ciao! bella, ciao, ciao! O partigiano,」
「portami via, ch▪ mi sento di morir. 」
二人は歌いながら席から立ち上がる。
「E se io muoio da partigiano, o bella, ciao! bella, ciao! bella, ciao, ciao, ciao!
E se io muoio da partigiano, tumi devi seppellir. 」
そしてもうグラスを掲げる。
「E seppellire lass▪ in montagna, o bella, ciao! bella, ciao! bella, ciao, ciao, ciao!
E seppellire lass▪ in montagna, sotto l, ombra di un bel fior. 」
二人は両手を広げ大声で歌う。
「E le genti che passeranno, o bella, ciao! bella, ciao! bella, ciao, ciao, ciao!

Ｅ ｌｅ ｇｅｎｔｉ ｃｈｅ ｐａｓｓｅｒａｎｎｏ，Ｍｉｄｉｒａｎｎｏ Ｃｈｅ ｂｅｌ ｆｉｏｒ！」

「▪ ｑｕｅｓｔｏ ｉｌ ｆｉｏｒｅ ｄｅｌ ｐａｒｔｉｇｉａｎｏ，ｏ ｂｅｌｌａ，ｃｉａｏ！ ｂｅｌｌａ，ｃｉａｏ！ ｂｅｌｌａ，ｃｉａｏ，ｃｉａｏ，ｃｉａｏ！

▪ ｑｕｅｓｔｏ ｉｌ ｆｉｏｒｅ ｄｅｌ ｐａｒｔｉｇｉａｎｏ，ｍｏｒｔｏ ｐｅｒ ｌａ ｌｉｂｅｒｔ▪！」

更にフィンツィが歩いてカルヴィの下に向かうと握手する。

「▪ ｑｕｅｓｔｏ ｉｌ ｆｉｏｒｅ ｄｅｌ ｐａｒｔｉｇｉａｎｏ，ｍｏｒｔｏ ｐｅｒ ｌａ ｌｉｂｅｒｔ▪！」

フィンツィ「カルヴィ、命令だ、５０６に所属し、ガリア政府内部の情報を探れ。

内部の動きを探り、ニッツァ、サヴォイア、そしてコルシカを切り取る手伝いをしろ。」

カルヴィ「分かってます、イタリアの為に」

フィンツィ「イタリアの為に」

そう言うと二人はワインを飲み干した。

ロザリー「ホスバッハさん」

ホスバッハ「なんでしょうか少佐？」

結成式典から一週間後、ロザリーは書類を確認するとホスバッハを呼んだ。

ロザリー「上層部から５０６のＡ部隊にウィッチを増員する連絡が来たわ。」

ホスバッハ「増員ですか？」

ロザリー「ええ」

それは５０６の増員に関する書類の事だった。

そこには増員されるウィッチの書類があった。

ロザリー「一人はヴェネチア公国からカポディストリア侯爵ロベル

ト・デッラ・カルヴィ大尉だそうよ。」
ホスバッハ「イタリア人か、役に立てばいいが」
ロザリー「そんなこと言わないの」
ホスバッハが漏らす。
彼はイタリア軍の能力を疑っていた。

「全く、今度は何をするつもりだ」
一人の女が二人のカールスラント軍人に連れられて薄暗い廊下を歩く。
両手には手錠がかけられ一緒にいる二人の兵士は銃を持っていた。
そしてある部屋に連れてこられた。
「ふ、ハイドリヒ中将ともあろう方が何用ですかな?」
連れてこられた部屋、そこは廊下とは違い日光が入り窓の外にはパリの街並みが見えていた。
その窓の前でハイドリヒが椅子に座って両手をテーブルに置いていた。
ハイドリヒ「君の能力を見越してだね、諜報員にならないかね?」
「気でも違ったかね?
私はあんた達と敵対していたはずでは?」
ハイドリヒ「そうだ、だが優秀な者は敵であろうとリクルートしたいのだよ。
既に君は死んだことになっている、クリス・キーラ」
キーラ「つまり今の私は幽霊という事かね?」
ハイドリヒの前に置かれた椅子にキーラが座った。
キーラは生きていた。
ハイドリヒ「そうだ。君はあの日、コルレオーネ少尉とド・メーストル大尉によって撃墜され死亡、数日後にシェルブールにそれらしき遺体が漂着するも腐敗が激しく即日火葬、遺灰は大西洋にまかれたことになっている。」

キーラ「それで」
ハイドリヒ「あのUボートの乗員は既に全員裁判にかけられている。
Uボート自体カールスラント海軍に引き渡され修理中だ。
君の戻るところはないぞ」
キーラ「それで私を諜報員にか？」
ハイドリヒ「ああ。給料は君が王党派にいた時の最低2倍は出そう。
独自の裁量権も与える、どうするかね？」
ハイドリヒが問いかける。
返事はその数週間後、明らかになる。

第２６話：新たなる陰謀の始まり

ガリア・ロマーニャ国境上空高度３２００メートル

眼下ではガリアとロマーニャが一触即発の状態地域をそんなことを気にせず飛んでいるのはヴェネチア空軍から払い下げられヴェネチア国籍の民間機となったフィアットＢＲ２０チコーニャ爆撃機だった。

その機内の一人のヴェネチア空軍将校は周りの慌ただしく動いている民間人を後目に新聞を読みながらこれからどうしようかなどと考えていた。

すると彼に一人の民間人が耳打ちした。

「そろそろガリアか、準備は？」

「ええ、できてます。」

新聞を閉じると訊ねる。

そして一言予定通りにやれと言うと機長からの報告が飛んだ。

機長「大尉、前方にウィッチ３名確認、５０６Ａと思われます」

「迎えだろうな。ウィッチにバレないようにやれ。

ネガは帰りにトリノでロマーニャ軍に引き渡しておいてくれ。」

そう指示するとまた新聞を読み始めた。

新聞の一面には『ロマーニャ政府、ガリア政府を非難！ミラノのテロはガリア政府の支援を受けたガリア人テロリストによるもの！』と書かれていた。

それから数十分、フランスアルプス上空を何事もなく飛行した彼らだが、セダン基地への着陸直前に無線連絡を受けた。

機長「何!?了解した」

「どうした？」

大声で驚く機長にコックピットに将校が入って尋ねる。

機長「はい、セダンの北方からネウロイが接近しているようです。

護衛のウィッチも迎撃に向かわせるそうです。」

副操縦士「ウィッチ、離れていきます！」

通信士「早く基地に着陸しますか？」

コックピットの窓からはウィッチが旋回して離れていく様子が見える。
「そうか、旋回して戦闘を観測できる位置に移動できるか？」
機長「はい!?無理です。こいつは非武装ですよ!?」
「分かった。基地へ直行だ。」
機体はセダン基地へと直行した。
一方で迎撃に向かったウィッチの間で騒動が起きているとは彼らは着陸して暫くするまで露程も知らなかった。

数時間後、基地の食堂では着任した新任のウィッチと元々のウィッチたちが交流していた。
ホスバッハ「というわけだ、この度着任した」
カルヴィ「ヴェネツィア空軍所属、カルヴィ大尉です。よろしく。」
ホスバッハ「原隊は空軍参謀本部と聞くが事実か？」
カルヴィ「ええ。空軍次官の副官を」
カルヴィが原隊の話をする。
彼は以前はヴェネツィア空軍の参謀本部で空軍次官の副官をしていた。
しかし、彼がトラヤヌス作戦反対派に属していたことから５０６に左遷も同然に流されてきた。
すると邦佳が質問してきた。
邦佳「あの！今日乗ってきた爆撃機って…」
カルヴィ「私の私物だが？フィアットに発注した」
邦佳「私物!?今幾らぐらい持ってるんですか!?」
驚きのあまり立ち上がって聞いてくる。
明らかに目の色を変えていた。
貫二郎「邦佳！それは失礼だよ！」
邦佳「あっ！すいません…つい気になって」
カーロイ「ハハ、金の事になると目の色が変わるのは変わらんな」

カルヴィ「ハハハ、気にしてないのでお構いなく。
まあ、銀行を所有しているぐらいには。」
邦佳「えっ!?銀行!?」
カルヴィ「ええ。銀行と言ってもヴェネツィアを中心に支店が２０個程の銀行ですよ。
それに後は真空管製造会社、銃器メーカー、繊維会社に植民地での製塩事業と石油事業ぐらいですかな、最近は。」
カルヴィはこの世界でも銀行家として名を馳せていた。
彼は資産家としてローマの銀行を所有し、その他に真空管製造会社、銃器メーカー、繊維会社を所有して戦時経済に乗っていた他、ソマリアの塩田とリビアでの石油探査に出資していた。
だが、明らかに戦時だけでなく戦後経済も見据えた投資を行っていた。
何せ、真空管産業は史実では戦後、やがて世界経済を支配する半導体製造業に変化し、繊維会社はイタリア経済を支え、リビアからは巨大な油田が発見される。
邦佳「カルヴィさん!養女にしてください!養ってください!」
思わず養女入りを志願する邦佳。
カルヴィ「ハハ、面白い子だな。妻なら少しは考えてもいいぞ」
貫二郎「それは困ります。」
カルヴィ「成程、フィアンセがいるとは。では養女だな」
即座に反応した貫二郎を笑うカルヴィ。
そこへ医務室に行っていたハインリーケが戻って来た。
邦佳「大尉!」
ハインリーケ「中尉…起きたのか?」
ハインリーケはわざと窓の方を見ながら訪ねる。
それに元気よく答える邦佳。
邦佳「はい、もう大丈夫ですよ!次は失敗しないできちんと稼ぎますね!
それよりも!カルヴィさん凄いんですよ!銀行持ってて!飛行機も!」

いつものように元気な邦佳を見てさっきまでの心配が無駄だったかのように感じる。
昼間、カルヴィの護衛中に現れたネウロイを基地から別途迎撃に向かった邦佳は、突如魔法力が消失するトラブルを起こしていた。
幸い貫二郎やカーロイらが何とかして邦佳を助けて撃墜したお陰で死傷者は出なかったが今後について心配になる出来事だった。
その原因は心的な物というのが軍医の見立てだ。
だが、当の本人がケロリとして、元気そうなのを見れば…
ハインリーケ「馬鹿らしい心配事じゃな」
コーヒーを取ると彼女は出て行った。
邦佳「大尉？」
カーロイ「あいつもアイツなりにお前さんが心配だったんだな」
イザベルの残した野菜をまるで嫌いな物を代わりに食べてあげる父親のように食べるカーロイが呟いた。
アドリアーナ「黒田」
邦佳「はい？」
アドリアーナ「次は姫様を見返してやれよ」
邦佳「うん、頑張る！」
アドリアーナの応援に食事の手を止めてVサインで答える。
だが症状がこれからどんどんと悪化していくことを彼女は知らない。

その頃、トリノではヴェネツィアに戻る途中のカルヴィの機が着陸して撮影したネガをロマーニャ軍の情報部に渡していた。
その中にはニースとサヴォイア地方のガリアの重要施設、駅やダム、トンネル、都市、基地、港、国道、交差点などの情報が含まれていた。

「射撃開始！」

翌朝、銃声と共に射撃場に並べられた的が次々と倒れていく。
基地の外れにある小さな射撃場では第５０６統合戦闘航空団の警備部隊の兵士達が射撃訓練を行っていた。
何度もテロや誘拐といった事件に巻き込まれてきた関係から、他の統合戦闘航空団よりも警備を重視して訓練は積極的に行われていた。
カルヴィ「噂にたがわぬ重武装ぶりだな」
ロザリー「ロマーニャにまで噂が？」
その様子を見学していたカルヴィの感想にロザリーが聞き返す。
カルヴィの感想も最もであった。
なにせ警備部隊の編成が相も変わらず戦車一個中隊を含んだ５個中隊に高射砲兵一個大隊、１２０トンの補給段列、戦闘機１個中隊等々である。
その５個中隊の警備部隊も３個山岳猟兵と１個降下猟兵だからだ。
ホスバッハ「この周辺は山岳地も多い。
緊急時には山岳地帯での抵抗を想定して山岳猟兵が多めだ」
カルヴィ「その割に各中隊長は騎士鉄十字賞受勲者ばかりだ。
警備部隊の人選にはかなり拘ったのだろう。」
カルヴィの予想は当たっている。
本格的な警備部隊編成の際には人選にかなり拘って編成した結果、全ての中隊長が騎士鉄十字賞受勲者となった。
部下の兵士もベテランが多く、彼らの戦闘力はかなり高い。
ロザリー「まあ、でも、そのせいで忙しそうなのよね…」
その戦闘力の高さと装備の質はセダン都市司令部から羨ましがられていた。
そして何より王党派追討の大号令がかかっている現在、警察部隊や再編中、編成中、信頼できないガリア軍と比較すれば規模は小さくとも優秀な指揮官と装備を有した独立部隊である彼らは度々追討任務に駆り出されていた。
そのため、補給部隊とその他部隊から警戒戦闘団〝ホスバッハ〟を編成しなければならない程だった。

数日後、彼らが別の理由で大忙しになるとは誰も思っていなかった。

――――――――

「ですので、我がリベリオンの優秀な国力をこのクソったれた国の国民共に披露すべきなのです」

ボック「言いたいことは理解できますが…閣下、我々も暇じゃないんですよ」

同じ頃、ガリア軍行政司令部ではボックが頭を抱えながら客の応対をしていた。

ボックが慣れない英語を使っている事から相手はリベリオン大使だと分かる。

なぜ彼がここに来ているかはボックが見せられたガリアの新聞にあった。

リベリオン大使「我が国が欧州にどれだけの国力とボーイズの血を流しているが彼らは全く理解していない！

だからこそ我が国を裏工作に励む薄汚い連中だと言い張るのだ！」

ボック「そのパフォーマンスに協力しろと？」

大使の言いたいことを何となく理解したボックは心の中でため息を吐く。

ボック「全くヤンキーはいつもこれだ」（ドイツ語）

リベリオン大使「何かね!?軍は私に不満でもあるのか!?」

ボック「リベリオンの支援に我々は頭が上がらないのは事実です。

我が国もそのおこぼれを頂戴して大量の物資、兵器、食料、船舶の供与を受けています。

おかげで兵士達も窮乏とは無縁で喜んでいる。

その点では感謝してもしきれるものでありません。」

史実での圧倒的な物量を思い出しながら彼らの莫大な支援に感謝の気持ちを述べる。

明らかにはぐらかそうとする会話だが内心ではボックはこの大使

の傲慢さに辟易していた。
彼もまた欧州の事は欧州で決めたいというスタンスであり、それ故に軍事行動や政治活動を行っている。
大使「では少しぐらいその感謝の意の代わりに協力するのはいかがかね？」
最新鋭のウィッチとその装備のデモンストレーションだ。
これでナイトウィッチの不足も少しは補えると思うのだが？」
大使は今回見せつけたい装備の概要に関する書類を見せながらボックに言う。
が、ボックは陸軍軍人であり、ウィッチについても門外漢である。
ボック「まあ、この書類の言う事をそのまま鵜呑みにすれば確かに便利そうではありますが…」
大使「それに、５０６健在のアピールにもなる。
それは君達にもメリットだろ？」
ボック「ええ。これでは我々に拒否権がない。」
大使「初めからあったとでも？」
ボック「はあ、まあ、微塵も思ってはいなかったが。」
ボックは完全に折れた。
数十分後満足そうな顔で帰っていくリベリオン大使を窓から見下ろしながらボックは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
ボック「クソ、従兵！玄関に塩でも撒いとけ！
二度と来るな！」
彼は荒っぽく机に書類を叩きつけた。
ボック「はぁ、このデリケートな時期に…」
彼が叩きつけた書類の表紙には『アッティラ作戦要綱　ニース・サヴォイア併合に関するガリア駐在連合軍の行動に関する事項』と書かれていた。

数日後、ニース地方。

この地域に駐屯するガリア軍兵舎に大量のトラックと満載された〝民兵〟が接近していた。
民兵「動くな！武器を捨てろ！」
ガリア兵「なんだ!?」
突然の事にベッドから寝間着姿で起きた兵士達は呆気に取られてそのまま武装解除された。
そのようなことがニースとサヴォイア地方各地で起きた。
更に、それらは各地の役所、駅、港、発電所、ダム、その他重要施設でも発生した。
ガリア兵「くっ、貴様らは一体何なんだ」
両手を頭の後ろに回して跪いたガリア兵たちが問いかける。
視線の先には最新鋭のロマーニャ軍装備を持った民兵たちがいた。
この日、ロマーニャ系住人の保護を大義名分としてロマーニャがニースとサヴォイアに侵攻し、併合した。
ガリア政府は何もできず、連合軍は事実上黙認した。
ロマーニャはさらに大規模な民兵や陸軍、空軍をこの地域に駐屯、ガリアに対抗した。
この事件の影響はすぐに出た。
まず、この地域からネウロイが副次効果で一掃された。
何せ、重砲など多数を装備したロマーニャ軍の攻撃に殆どが成すすべなく叩き潰された。
次に難民の発生、大量の難民が北ロマーニャと南ガリアに流入した。
再び発生した難民にガリアは頭を抱えた。
そして何より、ガリア政府内部の派閥抗争の激化だった。
それは共和派の中でもガリア中心主義的なド・ゴール派に共和派が統合されることとロマーニャへの対抗として海軍力とカールスラント、延いては連合軍の支援を得ようというガリア海軍のダルラン提督・ラヴァル派に分裂した。

ダルラン「我々もド・ゴールに対抗せねばならない。」
数日後、ダルランはパリ中心部のホテルで行われたパーティでガリア軍行政司令部の面々に直接メッセージを伝えていた。
反ブリタニア感情が極めて強く、史実の自沈したフランス艦隊を戦力とした戦艦５隻、巡洋艦７隻などからなる南ガリア艦隊を指揮しているダルランは陸軍を指揮するド・ゴールと並んだ最もガリアで軍事力を持った男だった。
この南ガリア艦隊は事実上西地中海の王であり、ロマーニャ海軍も警戒していた。
だが、ダルランはド・ゴールに対抗するためにニースとサヴォイア地方を引き換えにロマーニャとカールスラントの支援を得ていた。
ボック「ああ。そのためにも５０６は重要だと思うが」
ダルラン「それには同意する。ド・ゴールに彼女達を渡してはならない。
リベリオンにもだ」
ホスバッハ「それでこの訓練を？」
パーティに唯一５０６から招かれたホスバッハは内密に耳打ちされた合同訓練について口にする。
それは５０６の両部隊による夜間演習だった。
ボック「元を辿れば大使が反リベリオン感情に怒って最新鋭ストライカーユニットの供与と引き換えにＢ部隊の方が優れているというイメージを作りたくてやりたがっている演習だ。
先方がそうならこちらも利用できるだけ利用させていただく算段だ。」
ダルラン「Ａ部隊とＢ部隊の協同をアピールできるのならばそれはそれでよく、この計画を我々の派閥である君が主導できるなら５０６を取り込んだ実績となる。
実際警備部隊は我々の勢力だろう？」
ホスバッハ「ええ。」
ボック「カルヴィもヴェネツィア空軍の我々の勢力だからな。」

B部隊の預かり知らぬところで陰謀が進んでいた。

第27話：新機材

ジーナ・プレデイ中佐の私室を自由に出入りできる人間は二人いる。

一人は彼女の身辺の手伝いもしている世話役ともいえる人物であるクハネック曹長。

もう一人はやや年を取っているが穏やかで教養に溢れ、与えられた仕事はテキパキとこなす、礼儀正しさと紳士的な態度から僅かな間に彼女の信頼を得たカート・フーヴァー少佐である。

彼とジーナは固有魔法が立体空間把握とホークアイという面でも相性は良かった。

ノーブルウィッチーズ編成後、カートのB部隊での立ち位置はB部隊の作戦参謀であった。

ジーナ「それで、またか？」

カート「またです。相変わらず、警備を増やしてもそれを掻い潜ってパパラッチが近づいてきます。

持っているのがライカならいいですが、これがルガーなら中佐は場合によっては死んでいます。」

ジーナ「気を付けて置く」

夕食後、深夜の当直に交代する頃、カートはジーナに先程クハネックと二人で捕獲したどこぞの新聞社に写真を売りつけようとした不逞の輩を報告していた。

この手の輩はカートが警備強化を命じても何処からかすり抜けて来ているためカートの密かな頭痛の種であった。

カート「中佐は自分自身の価値をもう少し再確認すべきでは？」

ジーナ「フーヴァー少佐、それは余計なお世話というべきものだ。

私の価値は君よりも理解しているつもりだよ。」

カート「そうですか、では服を着ることをお勧めします。

まだ夜は冷えますし、ここは赤道直下の護衛空母の艦内ではありませんので。」

ジーナは裸にシャツを羽織っただけというラフな姿だ。

それに顔色一つ変えずにいつもの調子で応対するのがカートだ。
絶世の美女で完璧なプロポーションの彼女の裸体に近い姿を見ても何一つ反応を変えない姿は、同性のウィッチの反応よりも奇妙に思えた。
ジーナ「検討しておく」
カート「了解しました。では、私はこれで。
早朝の当直がありますので。」
カートは敬礼すると出て行こうとする。
それをジーナは引き留めた。
ジーナ「待て。君に新型ユニットが与えられる話は聞いているか？」
カート「それは初耳ですね」
ジーナの突然の話題転換に驚くカート。
新型ユニットの話は知らなかった。
ジーナ「今度新型ユニットが種送られる。
そのうちの一つを君に任せたい」
カート「了解しました。」
カートは敬礼すると再度出て行った。
興奮するわけでもなく冷静なカートの態度にジーナは不思議な感覚を覚えた。
ジーナ「ふむ、本当に不思議な男だ」
ジーナはシャツのボタンを外しながら呟いた。

――――――――――

ジーナ「――ということだ。」
翌朝、Ｂ部隊の休憩室で夜間演習に関する説明をジーナが行っていた。
カート「何か質問は？」
ジェニファー「あ、あの…」
質問してきたのはジェニファーだった。

ジェニファー「どうして私なんですか?パットさんがいるじゃないですか」
ナイトウィッチ用機材を扱うウィッチとして白羽の矢が立ったわけを聞きたいジェニファー。
既にナイトウィッチとしてはパットがいたがそれとは別にジェニファーをナイトウィッチにするわけを知りたがった。
カート「ナイトウィッチが二人になればシフト制を敷ける」
パット「それと、あくまで俺のは限定的だからだろ?
探知範囲４５%ぐらいらしいからな」
ジーナ「それに、こうした最新の機器に習熟するのは君が一番早いというのが上層部の見立てのようだ。
我々の抗議や一存では覆りそうにないな。」
カート曰く二人の方がいい、ナイトウィッチであるパット曰くそもそも能力的には一段劣っている、そしてジーナ曰く上からのお達しだという。
ジーナ「それともう一機別の新型ストライカーが到着した」
マリアン「どんなストライカーだ?」
話題を昨晩カートに話したストライカーに変えるジーナ。
その話題に食いついたのがメカニックとしての才も実はあるマリアンだった。
ジーナ「名前だけで多分分かるだろう。ＸＦ８Ｆ―１」
その名前に全員が驚いてジーナの顔を見た。
それはリベリオンによってリバースエンジニアリングされた後、修理されて基地の格納庫から離れた倉庫で管理されているカートの愛機Ｆ８Ｆ―１を基にしたストライカーであることを指していた。
マリアン「それってつまり、アレを基にストライカーにしたってことか?」
ジーナ「正確には参考にした、らしい。
性能だが、Ｐ―５１に匹敵するかそれ以上、とのことだ」
Ｆ８Ｆ自体レシプロ戦闘機としては究極の機体だが、それを参考としたストライカーもまた究極のストライカーに仕上がってしまった。

ＦＳＦは拡張性に難があったが高い運動性、速度性能を持ち、エアレースでも使用されるなど優れた機体だ。
それをベースにしたＸＦＳＦ―１も高性能を発揮していた。
ジーナ「この機体についてだが、これはカートに任せたい」
カート「了解しました。」
ジーナのカートに任せるという判断には誰も異論を唱えない。
元々がカートの機体をベースにしているのだから文句を唱える理由がなかった。
一方置いてきぼりにされていたジェニファーはグロッキー状態だった。
トニー「大丈夫か?」
パット「水持ってこようか?」
トニーとパットが背中をさすりながらみるみる顔色が悪くなる彼女を心配する。
ジェニファー「少し、医務室まで行ってきます。」
トニー「ちょっと付き合ってきます」
ジーナ「ああ」
トニーを連れて幽霊のような足取りで医務室へと向かう。
それを見てジーナは首をかしげる。
ジーナ「伝え方を間違えたかな?」
そのままジェニファーは夕食の時間を過ぎても自室に引きこもり続けた。
それにトニーは丁寧に付き合い続けた。

翌朝、食堂に現れたジェニファーに全員がぎょっとした。
何せ機能よりもやせこけ、更に顔色も悪く、目は虚ろで隈が出来ていた。
トニー「その様子だと昨日寝なかったな?寝ないとお肌に悪いんだぞ。」
パット「記者が来るなら見た目もちゃんとしてないとな。」

コーヒー（リベリオンらしく南リベリオン産の本物の豆である。戦場で代用品をチマチマ飲んだりするカールスラントの陸軍兵や紅茶で代用するブリタニア軍とは大違いである。）を飲んでいる男二人がからかい気味に言う。

アラン「レディーにそういうことを言うのはあまりいただけないな。」

ジェニファー「そうですよ、それにちょっとは寝ましたよ」

マリアン「目に隈が出来てるが？」

マリアンがジェニファーを指さすと顔を逸らしてジュースを注ごうとする。

もう振る舞いからして幽霊のように力なく滅茶苦茶だった。

それはコップがさかさまであることに気が付かないほどには。

アラン「おい！コップ！」

ジェニファー「…え？はい？」

アラン「逆！逆！」

アランが叫んで食べていたスクランブルエッグとソーセージの乗った自分の皿とコーヒーカップを持って立つ。

カーラが慌てて紙ナプキンで堤防を作ろうと投げつける。

ジェニファー「きゃあああああ!!」

自分の手元がジュース塗れになってやっと事の次第を理解するジェニファー。

ジュースは零れてジェニファーの軍服も汚していた。

カーラ「ったく、何やってんだよ。」

ジェニファー「ご、ごめんなさい」

マリアン「ここはいいから着替えてこい」

マリアンが慰めるように言うと彼女は自室に戻る。

ジェニファーがいなくなると残った朝食を食べながらアランが言う。

アラン「だいぶ重症だな」

マリアン「だな」

パット「奥ゆかしい性格は悪い事ではないが、あそこまであがり症

になるか？」
カート「彼女はそういう性格なんだ。悪く言うな。」
いつの間にか食堂に来ていたカートが言う。
振り返るとリンゴを齧っていた。
カート「だが、不安なのは事実だ。今日にもそのユニットが届くのに。
私のもだが」
マリアン「早いな！」
驚くマリアン。
カート「元々小改造を施したユニットと先行量産型だからな。
輸送機ですぐ運ばれるよ。」

その日の午後の格納庫。
昼前に到着したC―54から降ろされた二機のユニットが並んで格納庫に置かれていた。
一つは大型で黒色で明らかに夜間戦闘を意図したユニット、もう一つはマリアンが使っているF6Fよりもさらに一回り小さくずんぐりむっくりしたデザインのユニットだった。
だが、小さいが洗練されたデザインでもあった。
マリアン「これがXF8F―1…！」
カートより先に来ていたマリアンは目を輝かせてXF8F―1を見つめる。
ジーナ「ああ。XF8F―1、最高速度372ノット、上昇力は2万フィートまで約5分、実用上昇限度34500フィート。
あらゆる面でF6Fよりも優れたユニットだ。」
カート「これは先行量産型でシリアルナンバー22だそうだ。」
ジーナが一緒に送られた性能要目と前任機F6Fとの比較をしながら紹介する。
目の前のユニットはテストのための先行量産型であり、22番目に

製造されたことからヴィクターと呼称されていた。
そんなユニットに突然現れたカーラが提案する。
カーラ「名前つけちゃおうよ！」
カート「いいな。どんなのがいい？」
それに真面目で物静かなカートが珍しく同調した。
カーラ「そうだなぁ、コーラ号とか？」
カート「もう少しカッコいいのがいい。
クリッパー、何とかとかがいいなぁ」
カーラ「クリッパー？」
突然クリッパーというカートに首をかしげる。
クリッパーとは帆船の一種の事だが、ここで言うクリッパーは別の物だった。
カート「昔見た映画に出てた旅客飛行艇がクリッパー何とかって名前だったのを思い出したよ。
クリッパー…クリッパー・ストーム」
カートが戦前に見た旅客機映画で登場した飛行艇の名前を模してつけたがった。
それは史実ではその後、民間航空の分野を切り開き、自ら切り開いた民間航空の進化によって破滅したパンアメリカン航空の飛行艇の事である。
パンアメリカン航空はその破滅まで自社の機体にクリッパーから始まる愛称をつけていた、有名な物ではボーイング７４７量産初号機「クリッパー・アメリカ（後にクリッパー・ファン・Ｔ・トリップ」号、７４７初の事故を起こした3号機「クリッパー・ストーム・キング」号、初の営業運航を行った「クリッパー・ヴィクター」号、パンナム１０３便爆破事件の機体である「クリッパー・メイド・オブ・ザ・シー」号などである。
カーラ「ストーム・バード！」
カート「クリッパー・ストーム・バード、いいねぇ。」
カートはユニットにクリッパー・ストーム・バードと名付けた。
一方、隣に置かれたＦ７Ｆ―Ｎはピカピカに磨き上げられ、準備万

端というべき状態だった。
整備班長「こいつはいつでも飛ばせますよ。ねじの一本に至るまで全部の点検が終わったところですから。」
整備班長が自信満々で話す。
機体は合衆国海軍機特有の艶のあるグロッシーブルーに塗られて光っている。
カート「一回テスト飛行と行きたいが、大丈夫かね？」
カートはさっきまでの会話を格納庫の隅で虚ろな目で見ていたジェニファーに尋ねる。
彼女は無言でユニットを眺めるだけだった。
トニー「ジェニファー？」
ジェニファー「あっ、はい!?お願いします！」
トニーに肩を叩かれてやっと気が付いたジェニファー。
ジェニファーは慌ててユニットを履いて使い魔の耳と尻尾を出す。
だがどちらも心なしか元気がなさそうだった。
ジェニファーはゆっくりと発進して滑走路を駆ける。
だが一向に上昇しない。
カート「大丈夫か？」
トニー「上がれ、上がれ、上がれ」
双眼鏡で離陸滑走をするジェニファーを見ているトニーとカート。
だが全くその気配なく機体は滑走路の末端から草地へ飛び出して横転した。
トニー「…ちょっと回収してくる」
トニーはそういうと格納庫に置かれていたジープに乗りジェニファーの元に向かった。
ジーナ「前途多難だな」
カート「ですね。」
ジーナの呟きに相槌を打つカート。

模擬夜間演習に向けてＢ部隊では着々と準備が進んでる一方でＡ

部隊は別の意味で大変なことになっていた。
それはニースとサヴォイア地方の併合に対して一応の対抗策として連合軍がガリアの後方部隊全部隊に対して警戒作戦命令を発出したからであった。
ホスバッハ「警戒部隊ホスバッハ、本日も異常なし」
ロザリー「お疲れ様、毎日大変ね」
ホスバッハは５０６の警備部隊と後方部隊からなる警戒部隊を指揮してセダン周辺での警戒任務に当たっていた。
ロザリー「この警戒任務も大変ね。」
ハインリーケ「ああ。警戒命令『グリーンダンサー』、警戒作戦『ムムターズ・マハル』と色んな事をやっておるの」
ハインリーケは警戒命令の書かれた命令書を読みながら紅茶を啜る。
ホスバッハ「それだけじゃない、ガリア海軍は早速ツーロン沖で演習だ。
ボナパルティスト作戦と題して派手にやってるようだ。」
ロマーニャに強力に対抗できるガリア海軍は早速ツーロン沖で大規模な軍事演習を実施してロマーニャを牽制していた。
彼女らは知らないが高速艦艇によるジェノヴァ周辺の領海侵入など挑発行為を繰り返すなどかなり問題のある演習であった。
ホスバッハ「ところで少佐のユニットがピンクに塗られたという噂は事実で？」
突然ホスバッハが切り出した。
その事に頭痛を感じるロザリー。
ロザリー「それをどこで聞いたの？」
ホスバッハ「うちの部下たちがピンク色のスピットファイアを見たと噂しています。」
ロザリー「ええ事実よ。整備班の人が勝手に塗ったのよ」
ホスバッハ「そうですか、一度履いて飛んでいる姿を見せてもらいたいな。

兵達も喜ぶでしょう」

ロザリー「いやよ。暇があればすぐに塗りなおしなさいと命じたところよ。」

整備班の人達が「目立つように」と赤に近いピンク色にされたスピットファイアだが既に塗り直すように命じてあった。

さらに言えば、恐らくその色を見てホスバッハはいいなと言った感想ではなく錆止めみたいな色だという印象を持つだろうし、昼間は目立っても赤は夜はあまり目立たない色だという事を整備班は忘れていた。

ロザリーは生来の優しさからか「手が空いたら」という条件を付与して再塗装を命じたがその条件が満たされることは終ぞなかった。

第２８話：ジェニファー・デ・ブランク

ジェニファー・デ・ブランク大尉についてあるイタリア系の男は次のように表現した。

人畜無害だがそれを由としない、がそれについて悩んでいる女

実際彼女について、人畜無害で優しく、気弱気味な性格、圧や勢いの強い人の多い５０６の中でも物静かさではカートに類する。

しかし、彼女自身がそれを由としていたかは別だった。

Ｆ７Ｆ―Ｎのテスト飛行を派手な離陸失敗で終わらせ泥まみれとなったジェニファーはトニーに回収されると、自室に放り込まれた。

自室のシャワー室でシャワーを浴びながら自嘲するジェニファー。

ジェニファー「こんなの…私じゃない…」

自分の殻を破りたくて海兵隊に入ったのに全く変わっていない自分自身の本質に悩む。

シャワーを止めるとそのままベッドに潜り込んだ。

―――――――――――――――

少しして、基地のブリーフィングルームではジェニファーの現状をどうすべきか緊急の話し合いが始まっていた。

眉をひそめてこめかみを押さえたジーナが集まった面々に聞く。

ジーナ「…で？」

トニー「末期的だな」

パット「あのままだと墜落して死んでしまうかもしれない」

カーラ「信じられないぐらいガチガチだよね」

あまりの惨状にトニー、パット、カーラが三者三様に表現する。

アラン「前回の模擬戦はそれほどでもなかった気がするが。」

ジーナ「そうだ。だから単刀直入に今回、こうなっている理由を聞きたい」

ジーナが単刀直入に聞いた。

それにジェニファーはゆっくりと半泣きになりながら言った。

ジェニファー「…から。

私には無理なんです、新型機でたくさんの来賓の前を飛ぶなんて！

きっとミス　します！

そうしたら、隊のみんなに迷惑がかかります！」

必死で訴える。

カーラ「そっか！要するに注目されるのが苦手なんだ！」

ジェニファー「いけない!?」

カーラ「いけなく、ありません…」

指を鳴らして気が付いたカーラを威圧して縮こまらせる。

ジーナとカートは理由が分かると説得に移った。

カート「ジェニファー、もし模擬戦で何かやったとして、それを私たちが責めると思いますか？」

ジーナ「例え失敗して君を責めると思うか？」

ジェニファー「それは…思いません」

カート「だから、上手くやろうと考えなくてもいい。

今までやってきたことをやるだけで十分だ。」

ジーナ「何かあればしっかりフォローするつもりだ。」

トニー「その辺りは俺達の仕事でもあるな、な？」

アラン「そうだな」

パット「何かあれば俺がいるから気楽にやればいいさ」

カーラ「そっちは任せなって！」

口々に言っているとジェニファーは叫んだ。

ジェニファー「それよりも代わってください!!」

机を叩いてブリーフィングルームから逃げ出した。

カーラ「あっ！逃げた！」

トニー「どうする？捕まえるか？」

呆気に取られる皆。

それに眉を上げてどこか嬉しそうなジーナとカート。

カート「いい傾向ですね。前よりはいい」

ジーナ「ふむ、その通りだな。」

マリアン「あれがいい傾向なんですか？」

マリアンが尋ねる。
どう見てもいい傾向とは思えないからだ。
カート「以前ならばきっと負の感情を貯めこんでいた。
こうやって外に出して爆発させるのは前進したというべきだろうな。」
ジーナ「概ね、少佐と同意見だ。
結果的にはこの任務は彼女の成長にとって良い物になるだろうな。」
マリアン「二人共、案外楽天的なんですね？」
カート「そうでもない。ジーナ中佐の頭の中を覗き込めるぐらいには観察してきたつもりだ」
ジーナ「君はまだ、私のほんの一部しか知らないんだよ。
殆ど全部を知っているのは曹長と少佐ぐらいだ。」
ジーナはいつものポーカーフェイスで答えた。

暫くして、ついに夜間演習の日が訪れた。
併合事件から暫く経っていたがそれでも警備は厳重に行われていた。
演習場にはＶＩＰなども多数訪れていた。
その席の中には夜間演習の立役者のリベリオン大使が真ん中に陣取り、その周囲には彼に付き合わされているボックやその他将校や政治家や外交官がいた。
更にその近くには記者席や放送席もあり、邦佳を解説役に欧州全土に生中継の予定だった。
ボック「やはり、フソウはそのように？」
「ええ。大本営は陸軍部隊の投入を渋っています。
我々第１１軍もヒスパニアでの待機が続いています。」
ボックは演習に招待した扶桑陸軍軍人、田中誠壱大将と話していた。

彼はヒスパニアに在する第１１軍の総司令官であり、ボックとしては扶桑軍、その中でもレンドリースされたリベリオン製戦車やその他装備で武装した精鋭の第１１軍は戦力としてほしかった。

田中「命令一つあればいつでも馳せ参じる所存ですが、阿南曰く、如何せんガリア情勢に巻き込まれることを憂慮しているようです。」

ボック「我々としてはアルザス・ロレーヌ方面の疲弊したカールスラント軍と交代で配備したいところなんだがな」

扶桑軍の重い腰にボックは悩んでいたするとそこへもう一人、葉巻をふかしながらアジア人がやってきた。

「おや、ボック閣下が扶桑人と一緒とは珍しい」

流暢なイギリス英語から彼が高度な英会話の教育を受けた人物だと分かる。

その上スーツの仕立ても明らかにブリタニア趣味であった。

ブリタニア趣味で高度な英会話のスキルを持ったアジア人は一人しかいなかった。

ボック「特命大使の吉田閣下、お久しぶりです。」

吉田「そんな気を使わないでください。

特命大使と言っても所詮は素浪人のようなものです。」

ボック「噂では次の外相候補と目されていると聞いているのですがな。」

吉田「ハハ。どこから出た噂やら。」

それは特命大使の吉田茂氏だった。

彼が外交面では高く評価され、次の外相候補となっている、というのは本国中枢の噂である。

扶桑の陸軍装備などの面でのリベリオンのレンドリース法適用範囲内への参加や、欧州への扶桑軍の派遣など欧州とリベリオンで高い実績を上げており、現在リベリオンとブリタニア主導で計画されている「大西洋国際新秩序」に扶桑が一枚噛むという実績も挙げていた。

さて、水面下の政治闘争が行われる中、ウィッチのアクロバット飛行とお披露目飛行の後、黒く塗った風船を撃ち落として行くという夜間演習が開始された。

AとBそれぞれがナイトウィッチのハインリーケとパットとジェニファーの誘導を受けながら破壊していく。
Bにはナイトウィッチ二人、Aは一人と対等ではないように見えるがナイトウィッチとしては最上級のハインリーケと素人程度のジェニファーの違い、更にはパットはあくまで限定的なので能力的な差があるためこれで対等と見做された。
そしてそれは正しかった。
いざ演習が始まれば、ベテランのハインリーケは的確に発見し、仲間に伝えて誘導、撃破していた。
一方でパットは能力的な問題から探知範囲が狭く、一定の範囲内に目標がいる事だけ伝えて仲間の誘導はそこからカートが選択したウィッチに任せるという二重の手間になっていた。
ジェニファーの方はそれ以前に流入してくる情報を整理するのに圧倒されていた。
ハインリーケ「少佐、　10時　方向、距離200！
カーロイ、3時から4時の方向、距離350に5つ！
ヴィスコンティ大尉、1時方向、距離150！
貫二郎、12時方向目の前じゃ！」
ハインリーケの的確な指示に次々と的を撃破していく。
A部隊の装備はB部隊に負ければ末代までの恥とばかりに用意できるもの全てを用意し、徹底的な整備を行って準備してきた。
そのため装備面でもBに圧倒していた。
一方B部隊では。
パット「2時方向から3つ、少し上に二つと下、アランできるか？」
アラン「何とか」
パット「次、正面12時方向距離500、数不明、フーヴァー少佐お願いします」
カート「承知した」
パット「11時の方向、姫様の捕捉しているターゲット4つ、距離は1500、誤射に注意。
トニーと隊長お願いします」

的確な指示を出してはいるが範囲が狭かったり妙な物をターゲッティングしていた。
そしてジェニファーは必死で実地で飛びながら慣れようとしていた。
ジェニファー「慣れなきゃ…この模擬戦が終わるまでに…
ええと、マリアン、2時方向に標的、ええと距離は120！」
カーラ『ジェニファー！こっちは！』
ジェニファー「待って！えっと、5時、距離300！」
カーラに指示を出して慌てふためくジェニファー。
何とか処理して飛んでいるパットや優雅にこなしているハインリーケを見て思わず口を滑らせる。
ジェニファー「あんな風には…」
ハインリーケ『無理とは軽々しく口にすべきではないぞ？』
無線に突如ハインリーケが割り込んだ。
ハインリーケ『味方が不安になるからの』
ジェニファー「ヴィトゲンシュタイン大尉!?』
本来別の周波数を使っているはずのAとBだが、ハインリーケはそれを破って秘密裏にジェニファーに接触してきた。
ハインリーケ『そなたの不調は聞き及んでおるし、先程のアクロバット飛行からも一目瞭然じゃ』
ジェニファー「ごめんなさい」
アクロバット飛行ではマリアン達にフォローされていたがそれでもハインリーケから見れば不調は一目瞭然。
そこで驚きの提案をする。
ハインリーケ『本来なら模擬戦では敵同士じゃが、援護する』
ジェニファー「え？」
ジェニファーは口をぽかんと開いて答える。
ハインリーケ『勘違いするでない。
同じ506の一員として、マスコミの前で醜態を晒すのを見逃せぬ。

それに、戦場では助け合う。
そういうものじゃ』
ハインリーケの言葉に憑き物が落ちたような顔をするジェニファー。
ハインリーケは彼女の頭の中に入ろうとする。
ハインリーケ『デ・ブランク大尉には、周りがどのように見えておる？』
ジェニファー「それ　が…入っ　てくる情報が多すぎて」
『わらわの動きを見て学べ。
焦る必要はない。
それに…初めてであまりうまく飛ばれては、わらわの立場がなかろう』
「……　はい！」
暗がりの中、ハインリーケの動きを観察する。
すると、目標一つを捕捉指示を出す時には既に次の目標を把握している。
それを繰り返している。
それに味方の位置を立体的に把握しているようだった。
それを見ていると頭の中から焦りや来賓の事が消えうせた。
すると的確に指示を出せるようになっていた。
ジェニファー「マリアン！１１時方向、やや下方、距離１８０！」
マリアン『了解！』
ジェニファー「カーラ、１時、距離１４０！」
カーラ『任せて！』
ジェニファー「隊長、２時、距離２８０、３時、距離２５０！お願いします」
ジーナ『了解した』
的確に指示を出せるようになりその様子は相手から、そして同僚のパット達からもよく見えていた。
パット「元気そうになって良かったな」
トニー『ああ。心配して損した気分だ。これでネウロイが来ず勝っ

たら最高の気分だから誘導頼むぜ？』
パット「了解、距離３００、１時３０分、楽勝だろ？」
トニー『そうだな』
そういうとトニーは遠く離れた目標を撃ち抜く。
そして皮肉なことに、トニーの願いは届かなかった。
管制『隊長！北北東８０キロにネウロイ発見！例によってパリに向かっています！』
ネウロイの出現であった。
５０６は演習を中断、迎撃へと向かった。

数日後、新聞を見てリベリオン大使は微妙な顔をしていた。
大使「うむ…」
武官「今日でしたか、記事が載るのは」
遠目に訝しげに言う武官に書記官が答える。
書記官「ですが、書き方はどれも５０６が夜間模擬戦中にネウロイを撃墜ですからね」
一人だけ大損していた。
何せ書き方は微妙であり、リベリオンの国力を見せつける！という目的の演習と公開だったのに現実に記事になったのは５０６の団結だった。
まさに一人だけ大損だ。
一方ほくほく顔なのがボック達だった。
ボック「いやぁ、やはりウィッチはいい物だね」
ハイドリヒ「閣下、気色が悪いです」
記事を読みながら笑顔のボックに鋭く突っ込むハイドリヒ。
ボック「すまないね。孫娘ぐらいの歳で強くて色々と役立つとなるとどうにもこうなってしまうもんだよ。
君もウィッチに手を出してるだろ？」
無言は時に雄弁である。
このブロンドの女好きの悪癖の噂はこの世界でも残っていた。

そしてその相手も。
ボック「まあいいさ。相手は例のアレだろ？」
ハイドリヒ「その例のアレからの情報です」
ボック「何かね？不快な情報かね？」
ハイドリヒ「使い道次第です」
ボックはそれを聞くと新聞を閉じて煙草に取り出した。
ボック「ほう、それはどんな情報かね？」

第２９話：護衛任務

明け方、Ａ部隊の射撃場では銃声が響いていた。
普段はＭＧ４２などの銃声が響く場だが、今日のは朝早く、そしてもっと軽い銃声だった。
それはルガーＰ０８の射撃を練習する邦佳の物だった。
邦佳「拳銃はあんまり使ったことないんだけれど…」
ハインリーケのお古の拳銃を構える。
拳銃用のターゲット（どういうわけか敵兵のイラストである）に狙いを定めて撃つ。
マガジン二つ分を撃ち尽くして的は穴だらけである。
アドリアーナ「見事だな」
拍手が聞こえて振り返る。
するとアドリアーナとイザベルと貫二郎、そしてカーロイがいた。
カーロイ「殊勝に練習するタイプには見えないんだがな」
イザベル「うん」
カーロイとイザベルが感心してるのかしてないのか皮肉なのか分からない感想を述べると照れ隠しに笑う邦佳。
邦佳「あははは」
貫二郎「まあ僕よりは上手いでしょ」
カーロイ「お前は酷すぎる。この距離で拳銃使ってみろ」
カーロイがリンゴを齧りながら煽る。
するとそれを真に受けた。
貫二郎「邦佳、それ貸して」
邦佳「はい！大尉から借りてるのですから壊さないようにしてください」
そういうと貫二郎は邦佳の拳銃を借りて隣の的めがけて撃ってみるが一発が端に当たっただけで残り全部を綺麗に外した。
カーロイは予想通りの結果に大笑いしている。
カーロイ「がハハハハハ!!」
大笑いしていると邦佳がお願いしてきた。

邦佳「ところで、私が練習してるなんてウィトゲンシュタイン大尉には秘密にしてくださいね？」
アドリアーナ「うるさいもんな、アイツは」
腕を組んだアドリアーナが頷く。
邦佳「そうそう」
イザベル「でもここのところいつもこれでしょ？
　秘密も何もないと思うけど」
イザベルが指摘する。
だが案外バレていない。
何しろ、ここが通常の陸戦部隊向け射撃場であったため、陸戦部隊の将校か機関銃手か何かが朝から熱心に訓練に精を出しているのだろう、最近は情勢が不穏だからな、と思われている。
貫二郎「邦佳、練習もほどほどに朝食に行こうか。」
貫二郎が練習を切り上げるように促す。
それに素直に従うのが邦佳だ。

それから数十分して、朝食後の事。
アドリアーナ「実はさ、」
ロザリーとホスバッハとカルヴィ以外のウィッチが格納庫の待機室で寛いでいるとアドリアーナが切り出した。
アドリアーナ「黒田達に手伝いを頼みたくて。」
貫二郎「達って、邦佳以外にも？」
アドリアーナ「貫二郎とカルヴィにも手伝って欲しい事だ。
　言っておくが手当は多分出ないぞ」
先にアドリアーナは邦佳がお手当大好きマンという事で釘をさす。
それに異論を唱えなかった。
邦佳「戦闘禁止の今の私は隊のお荷物ですから。
　文句は言いませんってば」
そういうと溜息をつく邦佳。
アドリアーナ「姫様も知ってるだろ？ロマーニャからの補給の件」
説明する前にハインリーケに話題を振る。

ハインリーケ「ああ、あれか。
　妾も個人的に発注した荷があるからのう」
カーロイ「今度来る奴か。画商に幾つか絵画を見繕って貰ったんだよな」
　ハインリーケは新聞から顔を上げて気のない声で答え、チェスの対決をしていたカーロイと貫二郎も割り込んできた。
貫二郎「良いですね。今度飾りましょう」
カーロイ「そうだな。って中々面倒な手を使ってくるな」
すぐにチェスに集中するカーロイ。
邦佳「ところで、ロマーニャからも補給を受けていたんですか？」
イザベル「ああ。一部の規格とかはロマーニャからしか手に入らないとかもあるからね。
　それにロマーニャだけじゃない、欧州全土から物資を掻き集めて、やっと足りてる備品や銃弾も多いんだよ。
　外にある戦車だって、元は訓練部隊のお古らしいからね」
イザベルがピアノの鍵盤をたたきながら答える。
イザベルの言う通り、物資の中にはロマーニャからしかない物や、欧州中から集めている物も多かった。
　警備部隊の車両や戦車も中古品が比較的多く、その大半が訓練部隊で使用されていたり、再編成の際に余った装備を転用したものである。
邦佳「で、その補給がどうしたんですか？」
アドリアーナ「いつも使っている滑走路がこの紛争で使えなくなってな。
　仕方なくジェノヴァの民間空港を使うことになったんだ。」
アドリアーナが説明する。
ガリアとロマーニャは現在危機的な状態である。
おいそれとは近づけず、現在では陸路では途中で何度も検問を受け、ちゃんと通れるかどうかその日にならないと分からない程になっていた。

幸い、連合軍と事を構えることを恐れるロマーニャ政府のお陰で連合軍関係の人員や物資の輸送はフリーハンドとなっていた。
しかし民間向けは断続的で船便や航空便への切り替えから地中海周辺の傭船料はうなぎのぼり、船舶が足りず、旧式貨物船でも相場の3倍になっていた。
航空路はマルセイユ～コルシカ又はサルデーニャ島～ロマーニャ路線に切り替えられていた。
その影響から、軍用空港はまず使えず、仕方なく民間空港を使うことになった。
ハインリーケ「つまり、よりカールスラントに近いルートを通り、且つロマーニャ軍やガリア軍の影響を受けやすいってことじゃな」
アドリアーナ「で、ロマーニャの地勢に詳しくていざという時はロマーニャ軍人の肩書が効くだろうってことで私に護衛任務の白羽の矢が立ったんだ。
故郷の様子も知りたかったから渡りに船なんだが、黒田に同行して欲しいんだ。
飛ぶだけなら飛べるんだから、護衛任務には就けるだろ？」
ハインリーケ「それで黒田か。」
カーロイ「イザベル連れて行ったらこっちが手薄になるもんな」
カーロイとハインリーケは納得の顔になる。
するとハインリーケが思い出した。
ハインリーケ「それにしてもカルヴィはミラノか」
邦佳「何しに行ってるんですか？」
ハインリーケ「ビジネス、とやらじゃ」
カルヴィは基地に不在だった。
一応名目上は休暇扱いだが、ミラノに出張に行っているとのことだった。
ハインリーケ「まあ、いい。戻ってきてから黒田を持っていくがよい」
邦佳「持っていくって…私はお荷物ですか？」

ハインリーケ「お荷物以下じゃ。
　　基地に置いておっても、抜いてしまったワインの栓より役に立たぬのだからな」
邦佳「あううう」
邦佳に反論の余地はなかった。

ところ代わって、イタリア半島最大の経済都市、ミラノ。
数か月前のテロのショックから立ち直らんとしていた都市だったが、トラヤヌス作戦による難民など経済的混乱から街の空気はあまりよくなかった。
ロマーニャ情勢はトラヤヌス作戦以降、ロマーニャ国家連合という政党が中心となって動いていた。
この政党はヴェネチアとも連携してイタリア統一のアイデンティティを醸し出していた。
実際、この戦争が続く中でイタリア統一、チロルアルプスからリビアまで、ニッツァ・サヴォイアからアドリア海までを支配する古代ローマ帝国の後継たるイタリア国家を意識する人々が急激に増えた。
そして実際にニッツァ・サヴォイアの併合事件によってこの風潮は最高潮に達した。
街には新たに運動で使われていたイタリア統一旗（例によって史実イタリア国旗）が増えていた。
そしてこれはガリアに対して激しい対立軸となった。
そのためロマーニャ陸軍は事実上二正面作戦となっていた。
その両極に軍隊を送る中継地点がミラノであった。
このミラノから西に行けば国境線に送られ、ガリア軍と対峙し、東に行けばネウロイをポー平原で要撃し逆襲を仕掛ける機動軍団となった。
そのミラノ中央駅に近いオフィスで眼下の鉄道網をカルヴィは眺めながら仕事をしていた。
とある、元ロマーニャ軍人だという男がロードス島総督の紹介状を手に彼の銀行のミラノ支店を訪れていた。

男「ですので、支援してほしいのです。」
重役「しかし、南部の貧しい連中にこいつを買うほどの金など。
ましてや南部人がこんなものを貰ったところで…」
重役らしい男はロマーニャ南部への偏見剥き出しの意見を述べる。
このミラノ生まれミラノ育ちの男はこれっぽっちも南部に対して知識を有していない。
カルヴィ「南部人とは酷い言い草だね。
確かに、現在南ロマーニャの小作農の大半は貧しい。
そして農業効率も悪い、それは事実だ。
だが彼らを古い悪弊に染まった連中だと見下すのは間違いだよ。
マフィアは別だが」
そういってコーヒーを口にする。
カルヴィ「だが、現状リベリオンも含めて世界中から集まった物資の中には既に旧式で今すぐ放出されてもおかしくない物も多くない。
中には民需に回した方がいい物も多い。トラクターなどね。」
男「それはつまり…！」
カルヴィ「少額だが支援しよう！君の事業には将来性がある。
将来性のある事業こそが銀行の未来を分ける。
この事業が成功すればきっと、ロマーニャ、そしてヴェネツィアの農業効率と輸送効率は向上するだろう。
現状この二つの効率を突き詰めることでより安価により大規模に大量流通が可能となる。
それを目指すためにも貴方に投資したい。」
カルヴィと男は握手した。
後にこの男はロマーニャ有数の大手自動車メーカーを興すことになるのは十数年先の話である。

カルヴィが戻ったのはその日の夕刻であった。
即座に翌日から護衛任務に駆り出されることになった。
アドリアーナを指揮官にカルヴィ、貫二郎、邦佳の４人でロッテ編隊を組んでロマーニャへ向かった。
セダンを飛び立ち、フランスアルプスを避けてマルセイユまで来ると東に旋回、連合軍関係は通行が自由なニースとサヴォイア地方の上空を目指す。
途中、ガリア・ロマーニャ国境近くになると地上から無線で呼びかけられる。
ロマーニャ軍『こちらニッツァ、カンヌ上空を東に飛行中の機体応答せよ』
カルヴィ「こちらノーブル０１、所属は第５０６統合戦闘航空団。目的地はジェノヴァ、現在高度と方位を維持」
ロマーニャ軍『了解した。サヴォーナに向かえ』
カルヴィ「ノーブル０１、了解サヴォーナに向かいます」
カルヴィが応答し、飛行ルートを支持される。
カンヌからニース経由でサヴォーナに向かう海岸沿いのルートを取った。
アドリアーナ「面倒くさくなったな」
カルヴィ「仕方ない」
面倒な連絡が増え、自由に飛びにくくなったことにアドリアーナが愚痴る。彼女の手には紐が握られその先には邦佳がいた。
邦佳「あのー、今更なんですが、これなんですか？」
アドリアーナ「エンスト起こして墜落しそうになっても、これなら大丈夫だろ？」
こんなものを提案したのはイザベルとカーロイである。
もしエンストが起きたら首吊り状態になるがそれはそれだった。
邦佳「なんだか犬みたいですね」
貫二郎「使い魔犬だから元々では」
邦佳「酷ーい！」
そういうと笑う邦佳。

全員が一通り笑うとアドリアーナが尋ねた。
アドリアーナ「なあ、ちょっと寄り道していいか？」
邦佳「良いですよ」
貫二郎「右に同じ」
カルヴィ「構わないだろう。どうせ時間はいっぱいある」
全員から同意を取れるとアドリアーナたちは進路を逸れてピサへと向かった。

ピサはロマーニャ中部、トスカーナ地方の地方都市である。
かつてはピサ共和国としてイタリアの都市国家群の一つとして地中海の覇権を争い、その栄華はピサの斜塔に代表される建築物に残されている。
文化的にもかつてガリレオやフィボナッチなどを輩出し、名門ピサ大学で知られる。
現在ではトスカーナ地方の鉄道ハブとして北に送られるロマーニャ軍や南へ向かう難民などが行きかっていた。
カルヴィ「成程、ピサか」
ピサの市街地が見えるとカルヴィが呟いた。
アドリアーナ「ああ。来たことは？」
カルヴィ「仕事で数回ね。父親はピサ大学の出身だが」
カルヴィは仕事でしか来た事はないが、彼の父はピサの大学出身だった。
そんなピサ郊外の中に一軒の大邸宅を見つけるとアドリアーナは高度を下げ始める。
アドリアーナ「あそこだ」
彼女が指さす先にはまさにイタリア貴族の大邸宅というべきものがあった。
屋敷は庭園に囲まれて、小さな町は丸ごとすっぽり入りそうなほどだった。

一行は正面の門の前に着陸する。
貫二郎「ここは？」
アドリアーナ「ヴィスコンティ家の元邸宅」
邦佳「元？」
この大邸宅はヴィスコンティ家の元邸宅だった。
だが、屋敷は酷く痛んでおり、手入れも不十分だった。
豪勢な邸宅には全く似つかわしくない姿だ。
カルヴィにはその理由がすぐに合点が行った。
カルヴィ「維持できなくなったのか？これだけの大邸宅だ。
維持するだけで相応に資金が必要だ」
アドリアーナ「その通りだ。
私が小さかった頃に家族はこの屋敷を維持できなくなった」
このような大邸宅を維持するためには相応の資金力が必要である。
それを持ち続けられなかったという事だ。
邦佳「維持…できない？」
邦佳は不思議そうな顔をする。
カルヴィ「こういう大邸宅はただ管理するだけでも専門のスタッフが多数必要なんだ。
貴族ってのは権威だ。権威は何もしなくても来るものじゃない。
権威を維持するためには貴族らしい生活をする、なんて方法がある。
その一つがこんな大邸宅を構えて何十人ものスタッフと一緒に暮らすのがある。」
アドリアーナ「が、当然その生活を維持するためにはお金がかかる。
私の家族は安く暮らせるあちこちの都市に住んで、好き勝手やってるよ。
我がヴィスコンティ家は。お前はどうなんだカルヴィ家は」
アドリアーナが肩をすくめ、カルヴィに話題を振る。

カルヴィ「まあ、名門貴族で銀行家だからな。
一種の大富豪状態さ。こういう屋敷をあっちこっちで買っては別荘に使って遊んで暮らしていると言えばわかるかな？」
アドリアーナ「景気のいい話だ」
カルヴィ「ハハ、半分は借金の抵当で分捕ったような屋敷だけどな。」
カルヴィの場合、裕福な貴族家であったため、むしろ大邸宅をあっちこっちで買い増ししていた。
そしてその買い増した屋敷を別荘にして余暇を楽しんだり、パーティを開くなど享楽的に暮らしていた。
そんな一行に突如声をかけられる。
「お嬢様！」
振り向くと12、3ぐらいの田舎娘らしい少女がバスケットを抱えていた。
アドリアーナ「久しぶりだな、ミミ」
アドリアーナはミミと呼んだ少女を抱きしめて頬にキスする。
アドリアーナ「お父上は息災か？」
アドリアーナが聞くと眉間にしわを寄せる。
ミミ「それが、ぎっくり腰がまた悪化して。お嬢様に会いたがっていたのに」
アドリアーナ「あはは、今度見舞いを送るよ」
普段とは違うリラックスした表情のアドリアーナに彼女との関係は非常に親密で、家族に近い間柄なのだろうと邦佳たちは推測した。
アドリアーナ「黒田中尉、カルヴィ大尉、大野少尉、こちらはミミ。屋敷の管理を任せてる一家の娘さんだ。
ミミ、こちらが黒田中尉、カルヴィ大尉、大野少尉だ。」
邦佳「よろしく」
貫二郎「よろしくね」
カルヴィ「よろしく」
3人が手を出しだすと小さな手で一人ずつ握り返した。
ミミ「お噂は伺っています。」

邦佳「…どんな？」
普通ならあいさつ程度の発言に不安になる邦佳。
ミミ「それは…言えません」
目を逸らした。
邦佳はアドリアーナに振り返る。
邦佳「ヴィスコンティ大尉～」
アドリアーナ「事実に反したことは言ってないぞ～」
口笛を吹いて頭の後ろに腕を組んで開き直る。
明らかにあれやこれやを伝えていたのだろう。
中々見られない態度だ。
ミミ「それで、今日はこちらにお泊りになるのですか？」
ミミが尋ねる。
アドリアーナ「いや、任務のついでに少し寄っただけだ。
３０分ほどストライカーユニットを預かっていてくれ。」
アドリアーナが答えた。
ミミ「はい。軽食は足りないと思いますが。」
貫二郎「大丈夫だと思います。」
カルヴィ「その辺りはわきまえておりますので」
ミミは鍵と軽食の入ったバスケットを渡した。
アドリアーナ「それじゃあ、行くか。」
アドリアーナはそれらを持って屋敷へと入って行った。

第３０話：還るべき場所

「おい、あのバカ共はいつ来るんだ？」
「知りませんよ、少佐」
ジェノヴァ空港、空港の端で何処からかせしめて来たであろうカールスラント空軍ナンバーに書き直された中古のフィアット５０８ＣＭコロニアーレに乗った二人のカールスラント空軍らしき軍人が苛ついていた。
片方は空軍の夏季用白色チュニックに熱帯地域用長ズボンに白い夏季用制帽を被った空軍少佐。
もう一人は熱帯地域用熱帯服と熱帯シャツに長ズボンにカーキの熱帯地域用規格帽を被った少尉だった。
そんな彼らにウィッチが近づいてくる。
「おい、伯爵様、アイツらまだ来ないのか？こっちは忙しいんだ」
「あの能天気バカ二人に任せるとトラブルを起こしかねないって言って志願したのは少佐ですよね？」
伯爵様と呼ばれたウィッチに文句をぶつける。
「まあそう苛つくな。事故の元だ。
落ち着いてのんびり待てばいい。どうせ物資チェックは多いからな」
「ああ、そうするよ。ローゼン伯爵様」
少佐はポケットから煙草を取り出してふかし始めた。
カルラ「ここは空港だぞ。火の取り扱いには気を付けてもらわないと困る。」
「こっちだって前線航空士官だ。そのぐらい心得てる。」
カルラ「本当かね？ミラー少尉、ヴァレンシュタイン少佐の言ってることは」
ミラー「まあ概ね事実ですね。」
ローゼンに答えるミラー。

その頃、一行は屋敷に入っていた。
カルヴィ「あの年でこの屋敷を管理するとはすごいお嬢さんだ」
アドリアーナの横を歩きながらカルヴィが呟いた。
アドリアーナ「勘違いしてないか?ミミは私より年上だぞ?
　　確か三十路を二つほど超えているはずだ」
カルヴィ「…あれも一種の魔女だな」
カルヴィは思わず絶句した。
玄関に到着した一行は鍵を開けて広間に入る。
内装は比較的綺麗で外よりかは手入れがされていた。
床は白と青のモザイク、階段は大理石、大きな窓の向こうには大きな噴水もある。
貫二郎「すごい邸宅だ。映画でしか見たことないな」
邦佳「こうしてると、ヒッパルディのクラシック音楽が聞こえてきそうですねえ。
　　チャンチャンララチャンチャンチャンチャチャ～ってやつ」
シャンデリアを見上げて那佳は素直な感想を口にする。
カルヴィ「ヴィヴァルディか?」
邦佳「そうそれ。貫二郎がよく弾いてくれた。」
貫二郎「ヴィヴァルディはバロック音楽でクラシックじゃないんだけどなぁ」
アドリアーナ「もうちょっとちゃんと音楽教育してくれ、少尉」
貫二郎「気をつけます」
アドリアーナとカルヴィは少し傷ついたような表情をする。
2階に上がる階段をのぼりながらアドリアーナとカルヴィはぶつぶつ呟きながら上がっていく。
後ろの貫二郎と邦佳はまさにお上りさんのようにあっちこっちぐるぐる見回していた。
そしてずらりと飾られた絵画の一枚を指さした。
邦佳「あっ!これ大尉ですよね!?」
アドリアーナに似た女性の描かれた肖像画を指さして邦佳が言う。

アドリアーナ「ああ、違うよ。
　それは曾祖母を描いたものだって前に聞いた。」
カルヴィ「こうしてみると、君は曾祖母似だね」
アドリアーナ「褒めてるのか？」
突然褒めたカルヴィに驚いて聞き返す。
カルヴィ「勿論。これ程の美しい少女ならば、社交界の中心にいただろう」
アドリアーナ「その通り。社交界の華、麗しき毎夜の舞踏会の中心、それが曾祖母だって」
何となくいい感じになっている二人の空気をバッサリ切り裂いて邦佳が聞いてくる。
邦佳「あの、ところでこの絵いくらするんですか？」
アドリアーナ「そ、それは考えた事もないな」
考えた事もなかったな、というような顔をするアドリアーナ。
カルヴィ「カーロイに怒られそうな発言だな。
　君も華族なんだからこの手の芸術品の幾つかぐらいは家にあるだろ？」
邦佳「うん、本家の方にはね」
本家に行った際にあれやこれやと美術品を自慢されたが、その大半を忘れ去っていた。
邦佳「美術品なんて、値段は覚えられても題名なんて覚えられませんよね？」
貫二郎「普通逆だと思う」
カルヴィ「ああ。値段を見て芸術品買うよりも作品名見て買う方が多いからな」
美術商の息子のカーロイが聞けば窓から投げ捨てられそうな発言をする邦佳。
一行はある部屋の前で止まる。
一瞬間を開けてドアを開くと広い部屋が現れた。
豪勢な部屋で、天井には１８世紀のピクニックを描いた絵、ベッドは何処からかハインリーケが調達していたのと同じような天蓋付き、

ソファーも刺繍が施され、暖炉には銀の燭台、マホガニーのテーブルには地球儀、ロココ様式のテーブルとイスまである。
カルヴィ「豪華な部屋だな。まるで姫様の部屋だな」
アドリアーナ「6歳まではここで育ったんだ」
アドリアーナは部屋をゆっくりと歩いて回る。
ベッドの傍にかつてのおもちゃ箱を見つけ開ける。
アドリアーナ「…まだ残ってたんだな。この複葉機のおもちゃ」
それはブリキ製でぜんまいを巻くとプロペラが回る複葉機のおもちゃだった。
アドリアーナ「4歳の時に祖母に貰った物だけど、出て行くときに無くしたと思ってた。
持って帰って整備班の誰かに直してもらおうかな」
邦佳「それって、貝の化石ですか？」
突然邦佳がおもちゃ箱の中に貝のようなものを見つけた。
アドリアーナ「ああ。
アンモナイトだ。
古生代から中生代にかけて生きてた頭足類で、大きいものは2メートルを超える、というのは祖父の受け売りだ」
化石をブリキのおもちゃと並べて膝の上に置く。
アドリアーナ「祖父はこうも言っていた。貴族はこいつと同じ、滅びゆく存在だとね」
邦佳「お爺さんやお婆さんと仲がよかったんですね？うちと同じだ」
笑顔になる邦佳。
アドリアーナ「祖父は話してくれたよ。もう亡くなったが。」
目を細めて思い出すアドリアーナ。
邦佳「すいません」
貫二郎「いいお爺さんだったんですね。聞いてると分かります」
アドリアーナはウインクして自分の隣に座るよう促す。
アドリアーナ「祖父はうちの家系の中でも変わった人でね。
あれはジャン・ガレアッツォ似だからって皆から煙た

がられてた。」
邦佳「ジャン・ガレアッツォ？」
邦佳が隣に座りカルヴィがそれを見守るようにベッドにもたれかかる。
カルヴィ「初代ミラノ公ジャン・ガレアッツォ・ヴィスコンティ。野心家で知られ、ドゥオーモの建築や軍事的な拡大で知られる男だ。」
カルヴィが変わって説明する。
初代ミラノ公ジャン・ガレアッツォ・ヴィスコンティ、ヴィスコンティ家の専制君主の中でも特に知られた人物である。
軍事的に拡大し、ミラノだけでなくロンバルディア地方全体を支配しようとフィレンツェと争った事や、彼が傭兵を軸とした軍事政策を取った事、将来的にはイタリア王を目指していたことなどが知られている。
そんな彼に似た野心家だと祖父は思われていたのだ。
アドリアーナ「祖父によると、人類にとってネウロイの出現は天佑だそうだ。
人間にとって最も恐ろしい敵は人間。
ネウロイが存在しなければ、人間同士が殺し合っていただろうってね。
そしてそれは事実だったからな。」
アドリアーナはカーロイ他の話した第二次世界大戦耶蘇の世界の歴史、更には今起きているロマーニャとガリアの激しい対立を見て祖父のあの言葉は事実だと確信していた。
カルヴィ「全くの事実だな。同じ国の連中でも殺し合う物だ。」
アドリアーナにカルヴィが同意する。
アドリアーナ「なぜ、知っているんだ？」
カルヴィ「なぜ？大体御同輩だからかな」
カルヴィの軽い告白に驚く邦佳とアドリアーナ。
貫二郎「所属は？」
カルヴィ「イタリア共同交戦空軍。まあ、合流できなくてパルチザ

ンだが。」
カルヴィは元イタリア空軍士官であり、イタリア共同交戦空軍の士官、パルチザンだった。
カルヴィ「降伏までの間ロシアと本土防空戦に従事して、その後脱走。
脱走後はローマ周辺で占領したドイツ軍相手にパルチザンを率いて破壊工作を実施した。
タバコ、いいかな？」
アドリアーナ「駄目だ」
カルヴィ「そうかい。
で、ドイツ人を殺していたら、バレて捕まり、処刑されて、こっちに来て、今ではヴェネチア空軍士官さ」
軽い口調で話すカルヴィ。
それに何も言い返さないアドリアーナ。
暫くしてから、邦佳が聞いた。
邦佳「どうしてここに？」
アドリアーナ「言ったろ？輸送任務にかこつけての里帰りさ」
そう答えてから少し考えて、首を少し傾けて眉を顰めた。
アドリアーナ「…本当は、考えたんだ。
自分が黒田みたいに戦えなくなったらどうするか、潔く軍から身を引くかって。」
邦佳「今の私、無駄飯食いですからねえ」
邦佳は溜息を吐く。
アドリアーナ「でも、軍を辞めた後にどうするかまで考えたら、急に自分に居場所がない事に気が付いたんだ。」
ブリキの飛行機のおもちゃを手に取り続ける。
アドリアーナ「小さい頃は、社交界の付き合いにどっぷり浸かった親にくっついて、ウィッチになってからは軍の任務で各地を転々としていた。
だから、ここが私の居場所だって思える場所がなかった。

たった一つ、自分の場所があるとしたら。小さい頃に育ったこの屋敷だけだったんだ。」

カルヴィ「大尉？」

アドリアーナ「情けないよなぁ。

ネウロイ相手に命のやり取りは平気でしてるくせに、そんなことが不安で堪らなくなったんだ。」

おもちゃと化石を元の場所に戻すアドリアーナ。

そんな彼女にある提案をした。

カルヴィ「なら、この屋敷を修理でもするか。」

アドリアーナ「え？」

立ち上がり腰を伸ばしてカルヴィが言う。

カルヴィ「広いが、俺の伝手なら修理できる職人も金も資材も幾らでも用意できるさ。

どうせ戦争が終わったら、俺も銀行業に専念できる。

その時、生きてたらロンバルディア労働信用金庫に連絡してくれ。俺の銀行だ」

邦佳「良いですね！もう一度大尉の家族がみんな集まって住めるようにしましょう！」

アドリアーナ「それは難しいだろうな。両親も姉妹も散り散りだし」

全く予想していなかった展開に戸惑いの色を浮かべている。

邦佳「今はバラバラでもみんなまた集まりたいって思ってるはずですよ！

だからここを管理人さんに任せて残してあるんでしょ？」

邦佳は根拠ゼロの確信と共に人差し指をアドリアーナの鼻先に突き付ける。

邦佳「ここは大尉の家族が還ってくる場所なんですよ！きっと！」

アドリアーナ「還る場所、か」

カルヴィ「大事だぞ。還る場所があるのは」

アドリアーナ「そういうカルヴィはどうなんだ？」

カルヴィ「俺にとってはイタリアだ。

イタリアという国が還るべき場所だ。
もう一度、それを作りたい、そしてそこに貢献したい。」
アドリアーナ「案外ロマンチストなんだな」
カルヴィ「ロマンチストじゃない、愛国者って言ってほしいね」
カルヴィが笑ってごまかす。

それから数十分して、一行はやっとジェノバに辿り着いた。
邦佳「ええっと、輸送機ってどれですか？」
着陸して諸々の手続きを終えた邦佳たちは空港で護衛予定の輸送機を探してうろうろしていた。
すると彼らを後ろから誰かが怒鳴りつけた。
「遅いぞ!!こっちをなんだと思ってるんだ」
振り返ると過去に見覚えのある、カールスラント空軍少佐がいた。
邦佳「あ！ヴァレンシュタイン少佐！」
それは第５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ作戦参謀ハインツ・ヴァレンシュタイン少佐と部下のミラー少尉だった。
二人の後ろには国籍マークの無い銀色のＤＣ―３がいた。
ＤＣ―３とよく見慣れたオリーブドラブのＣ―４７は軍用か否かが違う程度で殆ど同一機種であり、そのため同じように機体後部には荷物用の大きな扉があった。
その扉が開くと誰かが飛び降りて邦佳たちの方に向かってきた。
それは髪の短いくっきりとした顔立ちの小柄な女性だ。どうやら北欧系らしい。
「黒田中尉だな、輸送機のオーナー兼パイロット、カルラ・Ｇ・Ｅ・フォン・ローゼンだ」
彼女は伯爵という称号を抜きに名乗った。
名前の通り、カールスラント系の貴族らしい。
そしてその苗字にカルヴィは聞き覚えがあった。
カルヴィ「ほう、ローゼン家の人間とは」

カルラ「ローゼン家をご存じか？」
カルヴィ「北欧の名家でその当主は中々腕利きで破天荒なパイロットだとは」
カルラ「ハハ。君まで噂を知っているとは。
有名になった物だ」
カルラは笑う。
カルヴィの脳内にはカルラ・フォン・ローゼンともう一人、元居た世界にいたカール・フォン・ローゼンの事を思い出していた。
飛行家として著名であり、輸送機と戦闘機を購入してフィンランドに寄付したエピソードなどで知られるその男はヘルマン・ゲーリングの親類としても知られている。
戦後には国連事務総長である同郷のダグ・ハマーショルドの専属パイロットとしてコンゴ動乱の調停に飛び回ったが、病気療養中に彼は北ローデシアのンドラ空港に着陸する際にパイロットがミスをしたかあるいはカタンガの戦闘機部隊によって撃墜された。
その後もアフリカなどを飛び、ビアフラ紛争時にはビアフラへの人道物資輸送を妨害された腹いせにフランスと協力してナイジェリア軍を強襲し航空戦力を破壊するなど活躍。
最後もオガデン紛争直前の難民救援中に地上で殺害された。
彼の事を思い出していた。
カルヴィ「それにしても、５０６が雇った腕利きパイロットというのが君だというのはとても意外だ」
カルラ「輸送担当なんていうから、いかつい図体を期待したかい？」
カルヴィ「まさか、輸送機は女でも飛ばせるように作るって聞いたからな」
カルラとカルヴィは初対面だが気が合ったようだ。
アドリアーナ「伯爵に飛ばせない機体はないさ。
複葉機でアクロバット飛行をして欧州中を飛び回ってたことだってあるんだ」
アドリアーナが軽くカルラを抱きしめると気まずそうにする。
カルラ「昔の話だ。で、次回のリストは？」

アドリアーナ「そうそう、これだ」
カルラが話題を変えるとアドリアーナが数十枚に及ぶ書類を渡す。
それをクリップボードに留めて一枚一枚めくりながら中身を確認する。
カルラ「…また一段と姫様の私物が多いな」
ハインツ「おい、俺達は毎日酷い飯を食わされて戦ってるのにお前らは毎晩ダンスパーティーでもやってるのか？」
書類を横から覗き見したハインツがあまりの豪華さに文句を言う。
それに肩をすくめるアドリアーナ。
アドリアーナ「戦時下だろうが何だろうが、生活の質は落とさないんだと。
　落としたら、ネウロイに屈したことになるそうで」
ハインツ「すげえ理屈だな。半分分捕れねえかね」
ミラー「物騒なこと言わないでください少佐。」
あまりの豪華さに文句を言う。
どさくさに紛れて本当に略奪しそうでミラーは止めようとする。
前線ではどんな物資も早い者勝ちだからだ。
アドリアーナ「こちらは至急という事だった。
　ストックがあと数回出撃すればなくなるらしい」
アドリアーナはリストのトップに書き込まれた項目を指した。
ハインツ「おい、これ幾らすると思ってるんだ？うちでも補充大変だぞ」
カルラ「あっちこっちに頭を下げて物資を集めるこっちの身にもなってくれ」
アドリアーナ「すまないね」
アドリアーナは目頭を押さえるふりをする。
ハインツ「済まなそうに一切聞こえないな。」
カルラ「まあいいさ。これも仕事だからな。
　ともかく、ハインリーケ似は釘を刺しておいてくれよ」
アドリアーナ「聞く耳、持つお思うかい？」
カルラ「だったな」

ハインツ「代わりに行こうか?」
ミラー「少佐が行ったら確実に拗らせそうなのでやめてください」
共通の悩みを持つ同志らしい二人に横から首を突っ込むハインツ。
嫌な予感を感じたミラーは必死で止めた。